

ゼロライブ！ サンシャ
イン！！

がじゃまる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ウルトラマンジードがいた宇宙で起きたクライシスインプクトとは別宇宙で起きたクライシスインプクト。通称アナザークライシス。その中心となった星、地球で、少年と少女の新たな挑戦が始まった。

その一方で、全宇宙を揺るがしかねない陰謀が動き出そうとしていて——
地球にやって来たウルトラマンゼロも巻き込み、物語は紡がれていく。

青春を精一杯に過ごした少年少女と、ウルトラマンの物語。

【完結しました】

目次

プロローグ 災厄の咆哮

崩壊の地球 | 1

第一部 新たなる出逢い

一話 アイドルをやろう | 11

二話 光の巨人 | 26

三話 陸とゼロ | 42

四話 ストリートファイターゼロ

54

五話 ハグと謝罪と再会と | 74

六話 海の歌 | 87

七話 目覚めの光 | 98

八話 リトルスター | 109

九話 友達だから | 126

十話 ナツクル・リベンジ | 140

十一話 守り抜く力 | 154

十二話 転校生は捕まえた | 172

十三話 シヤイニーとダイヤモンド

190

十四話 グループの名は? | 206

十五話 First live | 232

十六話 新たな火種(文字通り)

249

十七話 策謀の十字架 | 268

十八話 前に進む力 | 292

十九話 墮天降臨 | 318

| | | | | | |
|------|----------|-----|------|-----------|-----|
| 二十話 | ヨハネであるワケ | 342 | 三十三話 | 閉ざされた過去 | 579 |
| 二十一話 | 自分を貫く力 | 359 | 三十四話 | 気持ち裏腹 | 598 |
| 二十二話 | 廃校と迷走 | 383 | 三十五話 | 明かされた想い | 619 |
| 二十三話 | 夢で照らす夜空 | 400 | 三十六話 | 光る未来 繋がる絆 | |
| 二十四話 | 光の印 | 418 | 641 | | |
| 二十五話 | 厄災の魔王獣 | 436 | 三十七話 | もう一つの陰謀 | 666 |
| 二十六話 | 慈愛の光 | 458 | 三十八話 | 異次元からの使者 | 683 |
| 二十七話 | 忍び寄る影 | 477 | 三十九話 | 悪魔との契約 | 703 |
| 二十八話 | 紅眼の五将 | 493 | 四十話 | 正義無き力 | 730 |
| 二十九話 | 刻む怒り | 508 | 四十一話 | 銀河の風来坊 | 748 |
| 三十話 | 重なる不安 | 521 | 四十二話 | 運命への反逆者 | 768 |
| 三十一話 | 高すぎた壁 | 545 | 四十三話 | 戦慄の前奏曲 | 786 |
| 三十二話 | 共にいる資格 | 563 | 四十四話 | 正義と言う名の脅威 | |

| | | | | | |
|------|-----------|------|-------|---------------|------|
| 四十五話 | 失った友 | 828 | 五十七話 | 想いを一つに | 1077 |
| 四十六話 | 仲間とは | 845 | 五十八話 | 墮天使の遊戯 | 1096 |
| 四十七話 | 限界を超えてゆけ | 861 | 五十九話 | 自分でいられる強さ | 1114 |
| 四十八話 | 桜色の悩み | 899 | 六十話 | Looking for a | 1132 |
| 四十九話 | 真夏の色 | 916 | shine | | 1148 |
| 五十話 | さかなかなんだか? | 935 | 六十一話 | 栄光の背中 | 1173 |
| 五十一話 | 海に還るもの | 952 | 六十二話 | 自分達の道 | 1181 |
| 五十二話 | 複雑な心境 | 979 | 六十三話 | 夏の終わりの帰路の刻 | 1199 |
| 五十三話 | 闇への誘い | 1000 | 六十四話 | 君に会えたから | 1215 |
| 五十四話 | 邪悪なる気配 | 1020 | 六十五話 | 小さな恋のうた | 1232 |
| 五十五話 | 黒き王の喝采 | 1039 | 六十六話 | 五将が動く時 | 1248 |
| 五十六話 | 君のいる場所 | 1055 | | | |

| | | |
|------|--------------|------|
| 六十七話 | スライの目論見 | 1267 |
| 六十八話 | 切り開く運命 | 1283 |
| 六十九話 | 輝きのゼロ | 1301 |
| 第二部 | 輝きのAqours 前編 | |
| 七十話 | Next Stage | |
| 1325 | | |
| 七十一話 | 挑む覚悟 | 1343 |
| 七十二話 | 次なる試練 | 1370 |
| 七十三話 | それぞれの個性 | 1386 |
| 七十四話 | 九人九色 | 1403 |
| 七十五話 | 迫る選択 | 1430 |
| 七十六話 | 目指すものは | 1445 |
| 七十七話 | 何気ない付き合い | 1465 |

| | | |
|------|-----------------|------|
| 七十八話 | 互いのキモチ | 1485 |
| 七十九話 | 海の化身 | 1501 |
| 八十話 | 硬さに秘めた憧れ | 1522 |
| 八十一話 | Round in circle | 1538 |
| 八十二話 | ダイヤらしいダイヤ | 1557 |
| 八十三話 | 硬度十の誇り | 1572 |
| 八十四話 | 刻印の出会い | 1592 |
| 八十五話 | トリコリコPlease | 1611 |
| 八十六話 | 惜別と襲撃 | 1629 |
| 八十七話 | 箱の中の凶獣 | 1648 |

| | | |
|------------|----------|------|
| 八十八話 | 出逢いの意味 | 1667 |
| 八十九話 | 見えない力 | 1684 |
| 九十話 | 超えるべき壁 | 1699 |
| 九十一話 | もつと上へ | 1715 |
| ME HIGH ER | | |
| 九十二話 | 奇跡の波 | 1732 |
| 九十三話 | 月面の邂逅 | 1752 |
| 九十四話 | 二つの戦い | 1769 |
| 九十五話 | 足掻いた末 | 1785 |
| 九十六話 | 潰えた祈り | 1805 |
| 九十七話 | 繋げる形 | 1819 |
| 九十八話 | 未来への翼 | 1835 |
| 九十九話 | 衝撃は笑顔と共に | 1858 |
| TA KE | | |

| | | |
|-----------|----------------|------|
| 百話 | 大変！ 厄介が来た！ | 1871 |
| 百一話 | 夜鳴きのオビコ | 1887 |
| 百二話 | 変わりゆくもの | 1902 |
| 百三話 | 追憶の星空 | 1917 |
| 百四話 | White of Enc o | 1931 |
| u n t e r | | |
| 百五話 | 聖なる雪 | 1945 |
| 百六話 | 二つの姉妹 | 1959 |
| 百七話 | 傍にいる存在 | 1976 |
| 百八話 | ちんちくりん決起会 | 1994 |
| 百九話 | 秘めたる力 | 2009 |
| 百十話 | その背中を押す者は | 2025 |
| 百十一話 | Un it e | 2039 |

| | | |
|-------|-----------|------|
| 百十二話 | 燃える銀氷 | 2189 |
| 百十三話 | 凍える闘志 | 2171 |
| 百十四話 | 氷炎乱舞 | 2150 |
| 百十五話 | 目覚める力 | 2117 |
| 百十六話 | あと何回 | 2099 |
| 百十七話 | 星を探して | 2083 |
| 百十八話 | 覚醒の兆し | 2060 |
| 百十九話 | 地獄惑星からの挑戦 | |
| 2209 | | |
| 百二十話 | 拭えない憂い | 2285 |
| 百二十一話 | 帝王の鼓動 | 2266 |
| 百二十二話 | 友愛ヨーソロー | 2244 |
| 百二十三話 | 温かさの先に | 2225 |

| | | |
|-----------------|------------|------|
| 第三部 輝きのAqours後編 | | |
| 百二十四話 | 決壊 | 2382 |
| 百二十五話 | 月の導き | 2323 |
| 百二十六話 | 最後の刺客 | 2223 |
| 百二十七話 | 無自覚センセーション | 2301 |
| 2353 | | |
| 百二十八話 | 暴君の鉄槌 | 2367 |
| 百二十九話 | 芽生えた恐怖 | 2382 |
| 百三十話 | また、一人 | 2395 |
| 百三十一話 | 歯車が欠け始める | 2406 |
| 百三十二話 | 仮面の予定調和 | 2418 |
| 百三十三話 | 再来の悪魔 | 2442 |

- | | | | | |
|------|-------|-------------|---|------|
| 2459 | 百三十四話 | 衝撃は終わらない | — | 2599 |
| 2471 | 百三十五話 | その力は何がため | — | |
| | 百三十六話 | 約束の勇炎 | — | 2480 |
| 2500 | 百三十七話 | 魔獣に雪を添えて | — | |
| | 百三十八話 | 届く呼び声 | — | 2514 |
| | 百三十九話 | 幻影の輪花 | — | 2537 |
| | 百四十話 | 見抜け真実 | — | 2553 |
| | 百四十一話 | 者達の導 | — | 2571 |
| 2582 | 百四十二話 | フラグメントメモリー | — | |
| | 百四十三話 | 覚悟の宿命 | — | |
| | 百四十四話 | 糸繰上のレゾナンス | — | 2614 |
| | 百四十五話 | 呼び起こす者 | — | 2625 |
| | 百四十六話 | 心からの願い | — | 2641 |
| 2659 | 百四十七話 | その身命を賭して | — | |
| | 百四十八話 | 想いの行く末 | — | 2674 |
| | 百四十九話 | 反撃の光 | — | 2688 |
| 2704 | 百五十話 | 俺が俺らしくいるために | — | |
| | 百五十一話 | その場所へ | — | 2719 |
| | 百五十二話 | 叶えた景色 | — | 2737 |

百五十三話 オワリノハジマリ

2755

百五十四話 終焉に沈む

百五十五話 最後の灯火

百五十六話 ゼロからイチへ

百五十七話 みんなで叶えた物語

2827

百五十八話 幕が下りる

最終部 虹の先へ

百五十九話 新たな予感

百六十話 六人

百六十一話 踏み出すために

百六十二話 今できること

百六十三話 陰謀の片鱗

百六十四話 集う勇者

百六十五話 求める答え

百六十六話 旋律はまた歩み出す

2965

百六十七話 かけがえのないもの

2980

百六十八話 取り零した夢

百六十九話 スノードームメモリー

3009

百七十話 新しい羽ばたき

百七十一話 次の輝きへ

エピローグ 輝けるものたち

2915

2928

2998

3027

3044

2900

2869

2857

2844

2812

2796

2773

最終話　そして、明日へ
—

3058

プロローグ 災厄の咆哮 崩壊の地球

町が燃えていた。

その中で人が逃げ惑う。ある者は泣き、ある者は慟哭を上げ、こんなにも脆く、世界は崩れ去るものなのかと絶望する者もいた。

絶望と狂気が支配する混沌の世界の中、人々の視線は二人の巨人に向けられていた。人知を遥かに超越した。青と黒の、二人の巨人に。

「アエエエエヤアアアア!!」

「アアアアアアアアアア!!」

二人がその拳をぶつける度に光が煌き、闇が迸る。

方や、光と正義をその身に宿す光の戦士。

方や、闇と邪悪をその身に宿す闇の帝王。

崩れ行く世界の中、因縁深き二人の巨人が衝突する。

その頭上には、二人の身長を遥かに凌駕する巨大な物体が。

「ベリアル！ あれは一体何なんだ！」

青き戦士が、腕に装着された鈍色の剣、ウルティメイトゼロソードを振るい、闇の巨人へと向かって行く。

「……今から死ぬ貴様には関係のない事だ。ゼロ」

それに対し黒き巨人が自身の身の丈ほどある長い槍、ギガバトルナイザーを振るい、その剣を受け止める。

「何が目的だ！」

「ぐおっ……」

青い巨人が突き出した拳が黒き巨人の腹部を捉え、たまらず黒き巨人が悶える。

「デェヤア！」

その隙を見逃さずに、青い巨人が剣を振るう。

そしてそれを遠くから見ていた人間が、眩きを漏らす。

「……………何なんだよこれ」

「何が何なの……………」

「………終わりだ……」

突如出現した黒き巨人によって町は破壊され、平和だった町を火が包んだ。

その後、黒き巨人を追うようにあの青い巨人が現れた。すぐに彼は味方だと分かったが、その時にはもう、何もかもが時間遅れだった。

生き残った人々が見つめる先で、二人の巨人の争いは更に過激さを増していく。

「ベエエエリイアアルウウウウツ!!」

青い巨人の剣線が煌き、遂にその剣は黒き巨人の胸を貫く。

「ツ!?!」

が、その事に驚いているのは青い巨人であった。

「デメエ……、本当にベリアルか……?」

戦いの中、彼は思っていたのだ。

奴にしては、あまりに手ごたえがないと。

そしてその違和感が今確信に変わる。

「クツ……クツ……」

黒き巨人が、小さく呻きだす。

だがそれは苦し気なものではなく、勝利への確信を含む笑いだった。

「フツ……、私の仕事はこれまでの様だな……。ウルトラマンゼロ。一応ありがとう

と言っておこう……。まんまと罠に引っかけられてえっ!」

「何っ!?!」

「アア……はっはっはっはっ……。」

黒き巨人が哄笑すると共に、その身がみるみるうちに変化していく。

槍は消え去り、ハッキリと人型をしていたその巨人は、やがて元の形を留めなくなつた。

一応は人型をしているのだが、肩と思しき部位がない。

禍々しく歪んでいた目は影も形もない黒い点となり、大きく裂かれていた口も今はずの中に並ぶように三角形の襞が五つ付いているだけの小さな口に。

鈍色に光る頭部と、それに似つかわぬ茶色の胴体。

青い戦士——、ウルトラマンゼロと呼ばれたその巨人は、その姿に見

覚えがあつた。

「……ザラブ星人か……。」

「(名答)」

短くそう答えたザラブ星人は、やがて小刻みにその身を震わせ出す。

もうその命が長くないのは、傍から見ても明らかである。

「先ほども言った通り、私がこの星に来たのはただの陽動だ……。今頃ベリアル様は別

宇宙で目的を達成している頃だろうか……」

ザラブ星人が、最後の力と言わんばかりに咆哮を上げ、口から砲弾を放つ。

その光弾は頭上の物体に吸収された。その途端、着火剤が点いたようにタービンが回転を始め、凄まじい光が解き放たれる。

「……この星もろとも滅ぶがいい……」。ウルトラマンゼロオオオオオオオオオ

!!」

「ぐっ……」

断末魔の叫びを上げたザラブ星人が爆散し、火花を上げて回転する物体――

――

――超時空消滅爆弾が、遂に地上に降り立つ。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

身にまとった鎧の装着を解除したゼロが、右手を腰に当て、左手を横に大きく伸ばす。

ゼロの右手には、どこからともなく現れた光の粒子が集約していく。

やがてその光が集まり、溢れんばかりの輝きを右手に宿したゼロが、腕をL字に組んだ。

「ワイドゼロショットオ!!」

ゼロの腕から放たれた光線が超時空消滅爆弾を貫かんと衝突するが、全く効果を示さ

ない。

「なっ……」

ゼロが悔しそうに呻くと、光を抑えられなくなった超時空消滅爆弾が膨張を始め出した。

それは爆発が近い事を如実に物語っている。

ゼロは感覚的に、もう止めるのは不可能だと悟ってしまった。

「……くっ……」

今まで、課された任務先の星の命を守れない事は何度もあった。

だがやはり、この瞬間はいつまでたつてもなれる気がしない。いや、慣れてはいけな
いの事なのだろう。

「クソツたれがアアアアアアッ!!」

叫びを上げたゼロが再び煌く鎧をその身に宿すと、空に穴をあけてその中に飛んでい
く。

（……すまねえ……）

ゼロが突入してその穴が閉じると、超時空消滅爆弾が起爆するのは、同時だった。

地球を中心に生じた次元の断層はやがて宇宙全体に広がり、星々は消滅した。

——かに思われた。

これがウルトラマンジードがいる宇宙とは別の宇宙で起きたクライシスインプクト。後に、アナザークライシスと呼ばれる現象である。

それから時は流れ、内浦。

『グインガアアアアヴウウウウ!!』

あの時と同じ燃える町の中で、咆哮が轟く。

空は炎で深紅に染まり、町中に響く人々の悲鳴が幼き少女の恐怖感を煽る。

「曜ちやアアアアアんツ！ 果南ちやアアアアアんツ！」

奴は突如現れた。全身から禍々しさが漂う、赤い、怪獣。

何の前触れもなく出現し、その巨大な図体を行進させながら次々と町を破壊していった。

駆け付けた自衛隊も奴の赤い角から放たれた雷で瞬時に壊滅させられ、余計に人々の不安を煽る結果になった。

「陸ちやアアアアアアんツ！」

喉が張り裂けそうになるほどの大声で幼馴染達の名前を呼ぶが、返事は帰ってこない。

「どいお・・・」

自分の家で遊ぶ約束をしていた幼馴染を待つていたら、突如としてあの怪獣が現れた。

心配で、居ても立っても居られなくなって、思わず家を飛び出してきてしまったが、当然子供の自分にできることは何もなくて。

いくら涙を流そうと、助けてくれる者は誰一人としていない。

「千歌ー！」

突然名前を呼ばれた気がしてその方向を見ると、探していた幼馴染達の姿が目に入った。

「みんなっ……」

喜んだのもつかの間、目に入った幼馴染三人の内一人の姿に、思わず血が凍る。

「よお……ちゃん……?」

その存在が誰か認識するや否や、足が痛い事も忘れて駆け寄る。

「曜ちゃん……? 曜ちゃん!」

頭から血を流したその少女は、いくら揺さぶつても目を瞑ったままピクリとも動かない。

「……」

例えようなない絶望感と嫌悪感に押しつぶされ、その場にくずおれる千歌を更なる絶望が襲った。

『ヴウウウウウウ……』

怪獣が突如進行を止め、その双眸に彼女たちを捉えたのだ。

「ッ! 逃げるよ!」

一つ年上の幼馴染に手を引かれて走り出す。が、

その怪獣がまた一步踏み出して生じた強烈な地響きによって地面が裂け、アスファルトの道路が反り返り、その衝撃に抗う術もなく吹き飛ばされて地面を転がる。

「果南ちゃん!」

「果南姉ちゃん！」

また一人気を失い、自分自身の視界もぐにやりと歪む。

「千歌あつ！」

「陸……ちゃん……」

すぐそこで叫んでいるはずの少年の声すらも遠くに感じ、もう諦めて朦朧とする意識を手放そうとしたその刹那、

『ウウウウウウウ……』

突如怪獣の身体が光包まれ、霧散するように消えていく。

千歌の意識は、そこで途絶えた。

——さらに時は流れて六年後。静岡県、内浦。

「スクールアイドル部です！」

桜舞う季節に、二人の少女の声が響いた。

第一部 新たなる出逢い

一話 アイドルをやろう

天の川銀河第三惑星地球。かつて起こったもう一つのクライシスインプクト、アナザークライシスの爆心星。

その傍らの空間で、闇が蠢いている。

『……着きましたか……』

闇の中から声が発せられた。氷を思わせるほどの冷静な声音が、闇の中で反響する。

『ぬぐう……、おのれウルトラマンジード……。父親であるあのお方に歯向かうなど……。あのストルム星人も使えない……』

それに答える響きがまた闇の中で反響する。

それも一つではない。その声五つ。

怪しく光る赤い瞳が、幾つも闇の中で煌く。

『落ち着け。何のために吾輩たちがこの宇宙にもカレラン分子を散布したとってい

季節は春。

桜の花は咲き乱れ、草木の芽は徐々に芽吹きだす。

別れの季節でもあると同時に、新たな出会いの季節でもあるその月。

日本の静岡。その海沿いに位置する田舎町、内浦。

今日もまた、出会いの季節に新しい事を始めようとし――

敢無く挫折した少女二人の姿がそこにはあった。

少女二人は防波堤に腰かけ、力なく「人」の字でも作るかのように互いに寄りかかり合っている。

「……おい。大丈夫か、お前ら」

なんだか見てていたたまれなくなった少年、仙道陸がたまらず声を掛けると、少女のうち一人、ミカン色の髪を揺らした少女が口を開いた。

「あ――、前途多難すぎるよー!」

彼女の名は高海千歌。

その隣でぐったりとしている銀髪の少女が渡辺曜である。

この三人は幼馴染の関係にあり、千歌はこの春、学校にスクールアイドル部なるもの

を設立しようとしたらしいのだが、訳あってうまくいってないらしい。

「……まさか生徒会長にあんなこと言われるなんて……」

なんでも今日、校門前で行われていた他の部活の新入部員勧誘に便乗して自分らも部員を募集しようとしていた所、運悪く規律に厳しい生徒会長に見つかり、こつぴどく怒られたらしい。

「……生徒会長、この辺の元網元の家の人らしくてさ。アイドルみたいなチャラチャラしたものの嫌いなんじゃないかな。前にスクールアイドル部を作りたいって言った子がいるらしいんだけど、それも断固拒否されたらしくて」

「え〜。曜ちゃん知ってたの〜？ もー言つてよー」

千歌が不満げに口を尖らせる。

「ごめんごめん。いうタイミング無くてさー……」

曜が両手を合わせて千歌に頭を下げる。

「まあ、いいけど……でもどおしよ……」

千歌がスクールアイドルを始めたいと陸に打ち明けたのは、今朝の話だった。

スクールアイドルと言うのは、言葉通り学校でアイドル活動のする者たちの事を指し、「ラブライブ」と言う大会を目指して輝くものと、千歌は言っていたが……。

千歌がスクールアイドルを始めたいと思つたきっかけは、そのスクールアイドルの伝

説的存在であるグループ♫s。

彼女たちのライブを見て、ピーンと来たからだとかそんな。

初めはまたミーハー心を煽られて始めたものかと思っただが、今回の千歌は今までは違った。

どうせまたすぐ辞めんだろと言った陸に対して千歌が返した返答がこれだ。

『違うもん！ 今回ばかりは！・・・そりや、最初は千歌も無理だつて思つたよ。でもさ、それつてただやる前から諦めてただけだった。アイドルになるなんて、こんな田舎に住んでる私達には、どうせあり得ない遠い世界だつて。けど、私もあんな風になりたい。♫sの皆みたいにかキラキラ輝きたいつて、心から思つた。あの時に私みたいに、今この瞬間を誰かが見てくれてるつて信じて、輝きたい！』

との事。

非理論的でお子様的で、根拠なんてどこにもないのに、そう語つた千歌の目には今まで見たことが無い程の熱意が宿っていたから。

そんな千歌の熱意に感化され、陸は今こうやつて千歌の背中を押してやろうと思つたばかりだったのだが・・・、一体どうしたものか。

「じゃあ千歌ちゃん、辞める？」

ひよこつと千歌の眼前に顔を出し、悪戯に笑いながら曜が千歌に聞く。

そんな曜に対し千歌は、

「辞めない！」

力強く宣言した。

「だってまだ、何も見えてないじゃん。きつとこのまま諦めたらいつまでたつても何も見えないよ」

と、千歌にしては珍しく理論的な事を言ったと思えば、いきなり沈んだ顔になる。

「あと、四人があ……」

千歌が握っているのは、部活申請に必要なだという書類。

部活動と書かれた欄に記入されているのは、スクールアイドル部の文字。

部員と書かれた五つの欄に記入されているのは、高海千歌の名前ただ一つ。

「あー、もう！ ホントに前途多難すぎるよお！」

唐突に子供っぽく喚きだした千歌に、曜が苦笑いする。

そういうえば曜は水泳部に入っているに、自ら率先して手伝う事を名乗り出たらしい。全くこの幼馴染は、優しすぎて涙が出てくる。

結局そのあと何か決まったわけでもなく、陸達はそのまま別れたのだが、その翌日。

「今日もう一回ダイヤさんの所行ってくる！」

「はっ！」

バス停まで曜を自転車で送ってきた陸に、千歌が再びそんな事を言ったのだ。

昨日断られたばかりだというのに、こいつは一体何を言っているのだろうと陸と曜が眉を寄せる。

「諦めちゃだめなんだよ。あの人たちも歌ってた。その日は絶対来るって」

「ふふっ……、本気なんだね……」

そう笑った後、曜は何を思ったのか唐突に海を指さし、

「あー！ 空飛ぶミカン！」

「え!? どこどこ?」

「そりゃー!」

千歌がそれに反応してきよろきよろと周囲を見渡した隙に、曜が千歌の手に握られていた申請書を奪い取った。

「あ、ちよつと!」

千歌がそれを奪い返そうと手を伸ばすより早く、曜が千歌に背中合わせになる形で寄りかかる。

「……私ね。小学校の時からずっと思ってたんだ。千歌ちゃんと一緒に夢中で、何かやりたくなって」

「曜ちゃん……?」

「だから、水泳部と掛け持ち、だけどつ」

曜が素早く鞆からペンを取り出し、申請書に何かを書き始めた。

「はいっ！」

笑顔で曜が千歌に返した申請書の指名記入欄には、渡辺曜の名前が。

「……よおちゃん……」

それを見た千歌の目からウルウルと涙が溢れさせながら、その紙を受け取った。

「……よおちゃん！」

感極まったらしく、勢いのままに曜に抱き付く。

（……いいなあ、女子同士って）

「うわっ！ ちよ、千歌ちゃん……、苦し……」

「よおちゃん……よおちゃん……」

おっと、そんなこと言ってる場合ではない様だ。

（すっ）

「痛いっ！」

「辞めんかバカチカ。早速部員減らす気か」

見かねた陸が曜の顔が青くなるほどに力強く抱き付いた千歌の頭に鉄拳を落とす、無理矢理引き剥がす。

「これで後三人か、アテはあんのか？」

「うーん……。陸ちゃん入れて三人だから……………」

「……………おい千歌、俺男」

陸は自分がアイドルみたいな服を着て踊る姿を想像し、そつと思考を止める。考えるだけでもおぞましい。

「マネージャーならいいんじゃない？」

「お？ 何？ 陸もスクールアイドル部入るの？」

曜も陸に詰め寄ってくる。

「落ち着けお前ら！ ……つーか俺、浦女じゃないし」

千歌と曜の通う浦の星女学院は、その名の通りの女子校。当然陸が通えるような場所ではない。中学までは同じ学校だったのだが、この辺の高校は男子高か女子校しかないのだ。

よつて今は、別々の高校に通っている訳で。

「あ……………、そつかあ……………」

陸がスクールアイドル部に加入するのが無理だと分かると、残念そうに肩を落とす。そんな千歌を見ると、なんだか後ろ髪を引かれるような思いになって。

「……………まあ、出来る範囲でいいなら協力してやるよ……………」

ついつい、こんな感じで甘やかしてしまうのだ。

「……陸ちゃん……」

千歌が再び目を潤ませた。泣いたり笑ったり忙しい。

あと自分には抱き付いてこなかった事に少し残念感を覚え、別に抱き付かれたかったから協力しようと思ったわけではないと自分に言い聞かせる。

「……よおーし。絶対凄いスクールアイドルになろうね！」

千歌が申請書を放り投げて、右手を天にかざした。

「うん！」

曜も力強く返事をする。

そんな二人の前を、ひらひらと申請書が通り過ぎ、

ぼちやあ……

偶然そこにあつた水溜まりに落ちた。

「「……」」

しばらくの沈黙の後、

「「ああああああああああ——つ！」」

静かな海辺に、三人の絶叫が木霊した。

その日の放課後。

陸は浦女へと続く坂道を、自転車に跨り浦女とは逆方面に進んでいた。

今朝校門前で待っていると言われ、言われた通りに浦女の校門前で二十分ほど待っていたのだが、曜は部活、千歌は曜の部活が終わるまで学校に残ると言うので、陸が二十分間待っていた意味が無くなってしまった。

しかも部活が終わる頃にまた迎えに来いとこの事。幼馴染の扱いが雑過ぎる。

「・・・大変そうだな、あいつ等」

千歌は曜が部活をしている間、残っている生徒にスクールアイドルに興味のある人がいないか探すとの事。

今朝渡辺曜と言う部員を確保出来たはいい浦の星女学院スクールアイドル部(仮)は、早くも新たな壁にぶつかっていた。

スクールアイドルに興味を持ってくれる人があまりにもいないのだ。昨日今日と勧誘を続けているらしいが、興味を持ってくれたのはたった二人だけだとの事。

今朝は「絶対ダイヤさんを納得させてやる」と息巻いていたのだが、さつき一旦校舎から出てきた千歌の顔が死んでいたのを見れば、結果は聞くまでもなく分かる。

ちなみに申請書を濡らした事は滅茶苦茶怒られたらしい。

そういうえば待っている間に聞こえてきたあの『ブツブツですわ!』とかいう声は一体何だったのだろうか。

「……ですわって、どこのお嬢様だよ」

女子高の浦女だし、一人くらいそんなのがいても不思議では……、いや不思議だ。このご時世じゃどこにいても不思議だし不自然だ。

まあ謎の声はさておき、曜の部活が終わるまでどこで時間潰すかと陸は思考を巡らせる。流石に家帰ってからもう一度ここ来る気にはなれない。

別に律儀に迎えに行く必要はないのだが、行かなかつたら二人に何を言われるか分かったもんじやない。

それに陸も実はまんざらじゃ無かつたりする。高校から学校が分かれた幼馴染との貴重な繋がりだから。

まあそんな事、本人たちの前じゃ口が裂けても言えないのだが。

そんなこんなしている内に坂道を下り終わり、目の前に海が広がる場所に出た。

暖かな春の陽光を受けて輝く内浦の海を眺めていたら、ふと、とある光景が脳裏に

過った。

(……あれから、六年か)

瞼を閉じれば、今でもはつきりと映る。

絶望と狂気に彩られた、厄災の色。

弱さ故に何もできなかった、破滅の記憶。

燃える町の中、泣き続ける幼馴染。怪獣に蹂躪される内浦の全て。もう既に過去の事だ。

ぐるりと周囲を見渡して目に映るのは、美しい緑と静かな町。

とても六年前に怪獣災害があつた場所とは思えない。

六年前、日本中で起きた怪獣災害。

出現したのはどれも同じ怪獣で、同時刻に出現していない事から同一個体とされている。

出現した場所は函館、仙台、秋葉原、神戸、博多、そして内浦の六ヶ所。

いずれの場所でもその怪獣は突然現れ、突然消えたという。

あの怪獣の目的は何だったのか。

急に現れ、中途半端に街を壊してはまた別の町へと消えていく。何がしたかったのか皆目見当もつかない。

消えてくれたおかげで助かったわけだし、別にその事に文句を言う訳ではないのだが、やはり疑問には思う。

答えを求めて空を仰ぐが、当然帰ってくるはずもない。

その代わりに――、

「ん……?」

きらりと、空で何かが光った。

もしや流れ星、とも一瞬思ったが、ざわざわとする胸の感覚がそうではないと告げる。

そしてその光は、何と落下してきているではないか。

隕石か、はたまた落下してきた人工衛星が何かか。

『グゴオオオオオオ』

落下してくるそれからまるで生き物の鳴き声の様な音がしたと思つた次の瞬間、何もない空間から突然雷が発生し、その物体を打ち砕く。

そこから現れたものは――、

「えっ……」

思わず、絶句する。

落下したそれが海に落ちて派手な水飛沫を上げた刹那、

『ヴァアヴァウウウウウウウウウウ!』

そいつは、天に向かって咆哮を上げた。

二話 光の巨人

数分前——

突如何もない宇宙空間に空いた穴から、五人の人影が現れた。

『ツ………、バカなっ………』

『クソツ……、どこ行きやがったデザストロのヤロオ……』

悔し気にその中の一人、グレンファイヤーが呻く。

『全く……。あなたが無暗に炎を浴びせるから………』

その隣でミラーナイトが愚痴を漏らす。

『俺のせいだよ！ お前だつてなんかよく分かんない光線バンバン撃つてただろ！ な

あ焼き鳥？』

『誰が焼き鳥だ！ ジャンボットと呼べといつも言っているだろう』

とても超空大凶獣の名を冠する怪獣を追って来たとは思えないやり取り。だがこれ
がいつもの彼ら、ウルティメイトフォースゼロである。

『ジャンナイン。お前は どう見る………ジャンナイン？』

ジャンボットが弟分であるジャンナインに意見を求めるが、ジャンナインは会話の輪から外れ、離れた場所で佇んでいる青年に視線を向けている。

『……兄さん。ゼロは一体何をしているんだ？』

ジャンナインの問いに対し、ジャンボットの代わりにミラーナイトが答えた。

『……ここはアナザークライシスが起きた宇宙ですから。ゼロにも何か思う事があるのでしよう。……しかし、全く破壊の後が見当たらないのは一体……』

その場の全員がゼロに視線を移す。

『……』

全員の視線が自分に向いている事にも気付かずに、ゼロは目の前の星、地球を見つめ続けていた。

かつて自分が力不足ばかりに、消滅させてしまった星を。

『……あれから、随分と経ったもんだな……』

ゼロがそう嘆息するのを、他の四人は聞き逃さなかった。

四人が困ったように顔を見合わせ、どう言葉を掛けたらいいのか、誰がさつさとデザストロを迫うぞと言うのかを視線で擦り付け合う。

(グレン。君が言ったらどうだ？ 空気を読まない発言は得意だろうか?)

(おまつ……、相変わらず生意気な後輩だなテメー……。おい焼き鳥、お前も

兄貴として何か言つてやれよ)

(だからジャンボットだと言つてゐる! . . . 今回はジャンナインの意見に賛成だな。こういう軽率な発言に最も適しているのはグレンだ)

(言いたい放題言いやがつてテメー等 テメー等もロボットなんだし心の籠つてない発言位お安い御用だろ)

(私は心優しきエメラナ姫の配慮によつて心が備わつてゐる。私をコピーして作られたジャンナインとてそれは変わらない)

(兄さんの言う通りだ。一番精神年齢の低いグレンが行け)

(喧嘩売つてんのか——)

(ハイハイ私が行きますよ)

三人の不毛な言い争いを見かねたミラーナイトがわざとらしく肩を竦めた。

『ゼロ』

普段と何ら変わらない声音でゼロに声を掛けると、優しくその肩に手を置く。

『あの地球が気になるのでしょうか? デザストロは私達で追いますから、少し地球を見に来たらどうですか?』

ミラーナイトの提案に、便乗した三人も首を縦に振る。

『しかし』

『鏡にはあなたの迷いが映っていますよ。なに、普段助けられている礼です。遠慮せず行きなさい』

渋るゼロに、ミラーナイトがポンと背中を押した。

『……、そこまで言うなら仕方ないな。何かあつたらすぐに知らせろよ』

『はい。ゼロもお気を付けて』

『……俺の心配なんざ二万年早いぜ?』

お決まりのセリフを残した後、ゼロが地球に向かって飛び立っていった。

『全く、素直じゃない……』

ミラーナイトの眩きを背に、ゼロは地球との距離を詰めていく。

(……この星、確かにあの時……)

ウルティメイトフォースゼロの四人が気を利かせてくれたのは、正直に言って嬉しかった。あのままデザストロを追っても、地球が気になって任務に集中できなかっただろう。

かつて崩壊したその星は、全くその跡を見せない程に青く輝いている。

(……一体、あの後に何が……)

畏怖や疑問を胸に、ゼロは更にその速度を上げた。

——舞台は戻って内浦

大地が揺れ、大海はその衝撃に激しく波立つ。

『ヴァアヴウウウウウウ……』

空間をも揺らす咆哮を轟かせ、そいつは沖に出ていた漁船を蹂躪しながら進行して行く。

全身を覆うゴツゴツとした黒い皮膚。一撃で船体を破壊する太く力強い腕。頭部から背中を通って背後まで並んでいる、サンゴの様な赤いトゲ。

まるで怪獣映画にでも出てくるようなその巨大な怪物に、内浦の人間は震撼した。

陸としてその例外ではない。かつて見た破滅の光景が脳裏を過り、思わず身震いする。今目の前にあるのは、かつて自分たちを襲った絶望と同じもの。

襲い来る怪物こそ違えど、奴がこの内浦に再び破壊をもたらすことは考えるまでもなく分かる。

六年前に起こった怪獣災害が、再び起ころうとしている。

(そうだった！ 千歌達がまだ！)

幼馴染達がまだ学校に残っていることを思い出し、陸は慌ててハンドルを切って浦女への道を引き返し出した。

「クソツ．．．、何で今日に限ってあいつ等．．．」

愚痴を零しながら、今来た坂道を自転車で駆け上る。

陸の脳裏に浮かぶは、厄災の中で血を流す幼き少女たちの姿。

もうあんな思いを彼女たちにさせたくない。その思いで勾配のきつい坂道を猛スピードで登っていく。

『ツ——！！』

ただ空気が抜けた様な掠れた咆哮が聞こえたと思つたら、途端に逃げ惑っていた人達が立ち止まって騒めき出した。

何かと思ひ振り向いた先の怪獣は、大きく顎を開いていた。

吠えるでもなく暴れるでもなく、ただその場に立ち尽くし、じつと開閉したまま動かない。

そしてその口内には、ミサイルの様な物が見える。

まさか発射しようというのか、あれを。

嫌な予感がして怪獣の視線の先を確認すると、最悪な事にそこには浦の星女学院、まだ千歌達が残っている学校が。

あそこはこの地域の避難所に指定されているため、逃げてきた人が大勢いるはずだ。まさか浦女に人が密集しているという事を分かっているというのだろうか。

もしあれが浦女に着弾しようものなら——、

(ダメだ……。そんなの絶対ダメだ！)

最悪の結末を想像してしまった陸は、更に自転車漕ぐその足に力を込めた。

逃げることで出て来たはずだ。

でも陸は聞いてしまった、あの時の彼女たちの悲鳴を。陸は見てしまった、あの時の彼女たちの恐怖に染まった表情を。

あの日から、自分は彼女たちを守ると決めた。特別な力も、特別な才能もなくていい。それでも守りたいと願った。

だから感覚的に間に合わないかと悟りつつも、こうして坂を駆け上がっているのだろう。

まるで発射のカウントダウンをするかのように人々の騒めきが大きくなっていくと共に、陸の焦燥も勢いを増してゆく。

——そして誰かが「打ちやがった！」と言うのを、陸は聞き逃さなかった。

「つ……………」

怪獣の口から放たれたミサイルと思しき物体は、浦女に向かって一直線に向かつてい

く。

その光景に陸は遂に足を止め、同時に様々な感情が押し寄せてくるのを感じた。

幼馴染を失う絶望、守れなかった自分への嫌悪、守ってあげられなかった彼女たちへの罪悪感、現実への憤り。

力も無しに彼女たちを守ろうとするのはただの甘えだったのか。

結局力がなければ何も救えないのか、何も守れないのか。

力無き自分は、理不尽な現実が突き付けるこの光景をただ指を啜えて見ていることしかできないのか。

(千歌………、曜………)

何もできない自分を咎める陸の眼前で、遂にミサイルは浦女に到達しようとする。

もはや奇跡を信じるしかない、陸が目を瞑ったその瞬間、

奇跡は起こった。

『ゲエエエヤアアア!!』

謎の声と共に光が一閃したと思ったら、突如としてミサイルが空中で爆散したのだ。

そして、

『ツ——…』

海の方で怪獣の悲鳴と、倒れこんだのか派手に水飛沫を上げた音がした。

それを聞いた全員が怪獣へと視線を移し、何があつたのかと目を凝らす。

人々の視線が集まる中で派手に上がった飛沫が収まると、そこにはもう一つの巨大な影。

『シエアア!!』

掛け声と共に怪獣と戦う、巨人の姿があつた。

その場にいた誰もが、神か何かと錯覚した。

『ベロクロン………。何でこんな所にいやがる』

頭部に装着された二つの刃物。胸から肩に装着された銀色のプロテクター。青と赤のツートンカラーの中に銀色のラインが走る肉体に、胸に輝く青いランプ。

そしておおよそ神とは思えない悪い目つき。おまけに喋る言語はまさかの日本語。

『まあいい。まずはぶっ飛ばす！ 話はその後だ！』

ぶっ飛ばしたら何も話せないかと言う周囲の無言のツツコミをよそに、巨人は怪獣に向かってその拳を突き出す。

『ラアアアアアアアア！』

一発、十発、百発と、目にも止まらぬ速さで巨人が怪獣の腹部に拳を叩き込み、怪獣が苦しそうに呻く。

『ヴァアアアアアア!!』

『うおっ……と、あつぶねー』

負けじと怪獣も剛腕を振るうが、巨人は身軽な動きでそれをかわす。

「……何だこれ……、夢でも見てるのか……？」

そしてその光景をただ茫然を見つめる陸。

陸だけではない、一体この場にこの状況を飲み込んでいる人間がいるだろうか。

巨大な二体の生物が、自分たちの目の前で戦っている。

そんな作り話の様な光景が、今まさに目の前に広がっているのだ。

「……ウルトラマン……」

喧騒の中でその小さな眩きは、やけに強く陸の鼓膜を打つ。

ウルトラマン。あの巨人の名前だろうか。

声の主を探して周囲を見渡すが、陸のいる坂道には他に人影は見当たらない。

「……？」

訝しく思う陸をよそに、巨人と怪獣の戦いはさらに激化していく。

『ゴガアアアアアア!!』

『ッ!?!』

咆哮を上げた怪獣に巨人が反応して飛びのいた瞬間、怪獣の無数の棘から何かが発射される。

どうやらまたミサイルらしい。全身からミサイル打ち放題とはなんともまあ滅茶苦茶な。

さつきと違う点は大きさが三回りほど小さい事と——
圧倒的に数が多い事。

そしてそのミサイルは巨人を無視し、陸達のいる方へと飛んできていた。

『ゼアア!』

巨人が頭部についた二つの刃物を投擲し、次々とミサイルを海に叩き落していく。

しかしそれをかいくぐったミサイルが地上に着弾、容易く地面を抉っていく。

そしてその一つが、陸の近くに向かつて来ていた。

「ずらっ!?!」

「ピギユツ!?!」

その先には何と二人の少女が。

「っ! あぶねえ!」

言うよりも早く陸が飛び出し、彼女達の方へと走って行く。

自分でも信じられない速度で走り、やがて彼女達を突き飛ばした陸を爆風が襲った。

「ツ——」

まるで紙の様に陸の体は吹き飛ばされ、固い何かにぶつかった衝撃と共に陸の意識は

闇の底へと消えた。

「うゆ……、え……？」

「……つ、大丈夫ずらつ？」

陸に突き飛ばされたおかげで事なきを得た少女達が、慌てて陸に駆け寄る。

が、徐々に地面に広がっていく紅が、自分たちを助けた彼がどんな状態であるかを残酷に告げる。

「ツ——！！」

『ツ!? まさか……』

少女達の悲鳴が耳に入った巨人——、ウルトラマンゼロが悲鳴のする方向を向くと、身を震わせる少女二人と、頭部から流した血で血だまりを作っている一人の少年が。その近くでもうもうと煙が上がっているのを見ると、恐らくミサイルに吹き飛ばされたのであろう。

『あのヤロオ……、何て無茶しやがる……』

だがゼロ自身にも非が無いわけではない。自分がベロクロンのミサイル攻撃を失念していた事で起きた事故でもあるのだ。

だが後悔している時間はない。一刻も早くベロクロンを倒さなくては。

『ワイドゼロ——』

振り向きざまに光線を叩き込もうと構えたゼロの目に入ったのは、さつきまでとはかけ離れた姿のベロクロンだった。

全体的なビジュアルが変わったわけではないのだが、腹部が裂けてそこから巨大な大筒が姿を現したのだ。

そしてその大筒に集約していく赤と黒の光を見て、ゼロが驚嘆の声を上げる。

まさか、あれは……。

『……レゾリウム光線だと……』

単純な破壊力もさることながら、その光線はもう一つ、ゼロにとっては恐ろしい効果を持っている。

それは、純粋なウルトラマンの体を分解するという効果。

本来はエンペラ星人のみが持つその力を、何故一超獣に過ぎないベロクロンが撃てるのか。

(まさか……裏で何者かが糸を引いてやがるのか……)

ゼロが思考を巡らせた刹那、発射の時を知らせる様にベロクロンの腹部の光が禍々しさを増す。

『ぐっ……』

咄嗟に回避行動に移ろうとするが、ゼロの背後、つまり光線の矛先にはまだ多くの人間がいる。

レゾリウム光線は威力も洒落にならない。もしゼロが回避しようものならその場にいた人間はおろか、恐らくここ一帯の地形が変わる。

『ギャゴガアアアアアアアアアア!!』

ベロクロンの咆哮と共に、漆黒の極光と化したレゾリウム光線がゼロに向かって解き放たれる。

『ちいっ……。ウルティメイトイージス!!』

ゼロの叫びに呼応したウルティメイトブレスレットが盾状に変形し、放たれたレゾリウム光線を受け止めた。絶対の矛と絶対の盾が衝突し、その矛盾を示すかのように白と黒の光が爆ぜては消える。

人々は、それを見て初めて巨人が味方であることを悟った。

『ぐっ……お……』

身体が押し返される。デザストロを追う過程で何度も時空移動を繰り返して疲労しているゼロにこの衝撃は辛いものがあつた。思うように身体に力が入らない。

『だあああ!!』

だがそこは戦士の意地。またはゼロの性格故か、気合と根性で押し戻す。

同時にウルティメイトイージスもブレスレットに戻る。ブレスレットはひび割れ、しばらくの間紫電を迸らせた後、埋め込まれたクリスタルが輝きを失ってしまった。

いくらウルティメイトイージスとは言え、レゾリウム光線ともなると全ては防ぎ切れないらしい。

その証拠にゼロの体から少しずつ光が漏れ出ていく。

『……悪いな……こう何度も壊しちまって……』

肩で息をするゼロがブレスに向かって何か呟くと、右手で光の吸収を始めた。

『ここらが潮時だぜ……、ワイドゼロショットツ!!』

L字に組んだゼロの腕から放たれた光線がベロクロンを貫く。

ベロクロンが断末魔を上げた後爆散し、それを見た人々が歓声を挙げる。

だが倒したゼロの表情に余裕はなく、苦しげにいつの間にか赤く点滅を始めていた胸のランプに手を当てている。

『う……、ぐ……あ……』

しかし人々がそれを訝しく思ったのもつかの間、次の瞬間、ゼロの体は光の粒子と
なつて虚空に霧散していった。

三話 陸とゼロ

『おい、お前』

声がする。

『聞いてんのか？ おい』

自分を呼ぶ声が。

陸がその声に反応し目を開けると、何も無い闇の空間の中にいた。

上も下も分からない闇の中を、陸はフワフワと漂っている。

終わりがまるで見えない、底なしの闇。

死の淵を連想させるその空間の中、陸は目の前に現れた人影に気が付いた。

『見てたぞ。お前は少女達を助けようとしたな。度胸あんじゃねーか』

いきなり現れたそいつは、先程見た巨人の様に見えた。

(・・・はは・・・、こんなのが見えるとか、俺もう死ぬのかね・・・)

そいつが自分に向かって倒れこんでくるのを見て、陸は目を瞑った。

光が目に入った。

「つ……」

その光に導かれるように目を開いた陸の目に移ったのは、白い天井。どうやら横になっっているらしい。

(あれ……、どこだ……)

気を失う前の記憶を辿ろうとするが、激しい頭痛に遮られて思い出せない。

「……つと、ご家族には連絡したの？」

「それがまだ……、彼の両親海外にいるらしくて……」

「早くしなさいよ！」

近くで人が言い争っているのが聞こえる。

声のする方に視線を移すと、ナース服を着た二人の女性が見えた。

(病……院……?)

それを見てようやく思い出した。六年前の様にまた怪獣が現れた事。それに続く形で謎の巨人が出現した事。その後は……、

その後が思い出せないが、代わりに幼馴染と交わした約束を思い出した。

(そうだ千歌達は……)

壁に掛けてあつた時計に目を移すと五時半。そろそろ曜の部活も終わる時間だ。

「っ！ ヤベエツ！」

錯乱している陸は、自分が恐らく大怪我を負っているだろうという事も失念して飛び起きた。口や腕についていたマスクや点滴の針を体から外し、寝転がっていたベッドから降りる。

だがそんな陸を見て悲鳴が上がった。

「ええっ!？」

「何でっ!？」

先ほどまで言い争っていた女性二人が、急に起き上がった陸を見て騒ぎ出したのだ。だが陸は今錯乱中である。全くその事に気付くこともないまま走り出した。

「はあああ………」

陸が色々と大事な事を忘れながら病院を飛び出そうとして一時間。

当然看護師の人に止められ、体の検査と飛び出そうとした事への説教を終えた陸がとぼとぼと病院から出てきた。

柱に寄りかかって溜息をつく陸に、声が掛かった。

〈何でしょげてんだ？〉

「看護師の人にな」

〈うん．．．〉

「怒られた．．．」

素直に答えた陸だが、直後に周囲に誰もいない事に気付いた。

「え？！」

〈え？〉

再びきよろきよると辺りを見渡すが、やはり誰もいない。

「ん．．．？ は．．．？！」

一体誰が話しかけているのだろうかとうと錯乱する陸に、再び声が掛かる。

〈あー、ワリイ。自己紹介が遅れたな。俺はゼロだ〉

「え？ なんだこの声？ え？！」

〈いきなりで悪いが、命を助けるにはこれしかなかった。俺とお前の体を一体化させて

傷を癒している」

「……え？ 耳塞いでも聞こえる！」

〈そーだよ〉

「何コレ怖っ！」

へいや怖いって……、何か前にもあったなこのやり取り……。まあいい。この一体化には俺にも利点がある。さっきのベロクロンとの戦いで結構なダメージを負っちゃまってな。お前の体に入らないと、今の俺はこの惑星で長時間の活動が出来ないんだ。あ……、だからそうつまり……、ウインウインの関係だな」

ヘドバンの様に頭を振ったり頭を掻きむしったりしながらまだなお混乱する陸に、謎の声が全く状況を読まずに謎の説明をする。

多分混乱していなくても理解出来ないだろうその説明に陸は、

「は？ 何言つてのこいつ？」

当然、こんな事しか言えない。

「っ！ そうだ。こんなことしてる場合じゃねえ！」

〈こんな事ってお前……〉

いまいち、と言うか全く状況は飲み込めないが、早く浦女に行かなければ。

あの後あの怪獣はどうなったのか、千歌達は、町の人々は無事なのか。

避難所である浦女に行けばきつと何かが分かるだろう。

「おい、悪いけど話は後だ。今は行かなくちやいけない所がある」

「……こつちの話も結構重要な事なんだけどな……。まあいい。用が済んだら話を聞いてくれるんだな？」

「ああ」

「だつたらいい。さつさと済ませて来い」

まだ状況を理解していないという事もあるが、驚異の順応力で謎の声と話をつけた陸は浦女に向かって走り出した。

しばらく走った辺りで、三度謎の声が話しかけてきた。

「おいお前。急いでるんなら力を貸してやろうか？」

「は？ 何言つてのお前？」

「いいからいいから。そんじや行くぜ！」

謎の声がそう言った途端、陸の走る速度が異常なまでに上がった。それだけじゃない。全身から力が溢れてくる様である。

「おお？ なんだこれ？ 早ええ！」

「な？ 俺との一体化も悪くないだろ？」

「よく分かんねえ……。何なんだこいつ……」

色々と疑問はあるが、今はありがたくこの力を使わせてもらおうと決めた陸はそのまま浦の星女学院に向かって更にその速度を上げた。

「陸ちゃん遅い！」

「そーだよ。今の今までどこ行つてたの！」

浦女についた陸は、病院と同じように説教を受けていた。

さつきと変わった点を挙げるならお医者様が幼馴染に変わった事と、その幼馴染がポカボカと陸を殴りながら今にも泣きそうな目で睨みつけてきているという事。

「・・・心配したんだよ？」

「また六年前みたいになつたら・・・」

陸を殴るその手が止まり、二人そろって俯いてしまう。

「えつとだな・・・、その・・・ゴメン・・・」

途端に申し訳なさが込み上げてきた陸は事の詳細を説明しようとしたが、そういえば

自分自身の身に何が起こったのかまだ把握していなかったことを思い出した。

（おい、ゼロって言ったか、一体あの後何があったんだ？　つかあの巨人は何なんだよ）
千歌達の話によると怪獣はあの巨人によって倒されたらしいが、陸はその前からの記憶がない。

ゼロとか言う謎の声は何か知っていそうな口ぶりだった。そこで何か得られる情報はないかと脳内で問いかける。自分と一体化したと言っていたし、そもそもさつき陸の脳内に直接話しかけてきたし、多分これでも会話できるだろう。

そして陸の予想通り、ゼロから返答が返ってきた。

〈あー、その巨人が俺だ〉

「はあっ!？」

「うわっ!」

「陸？　どうかしたの?」

衝撃の事実陸が思わず大声を上げる。

「え？　何？　お前がああのか?」

〈ああ、つかさつきも言ったろ。俺はゼロ。ウルトラマンゼロだ。M78星雲、光の国から来た〉

「ウルトラマン……?」

そういえば怪獣騒ぎの時にあの巨人をウルトラマンと呼んでいる人がいた気がする。まさかこの声がそのウルトラマンだったとは。

「陸ちゃん？ どうしたの急に独り言言い出して？」

心配そうに俺の顔を覗く千歌と曜。

当たり前と言えば当たり前だが、この声は陸にしか聞こえていないらしい。

「どうしたの陸、ウルトラマンって何？」

「ああ、えーつと、その……」

（おいゼロ！ 何とかしろ！）

〈何で俺のせいみたいになってんだ……？ 勝手に大声上げたのはお前だろうが〉

（うっ……、まあそこはいいや。そもそもなんでお前俺の中に入ってるんだ？ 傷を癒したとか言ったよな。一体俺の体に何があった？ なんか気付いたら病院にいたし）

〈ん？ いや、だってお前一回死んだし〉

「はああああああああああつ!!」

「うわっ！」

「またっ!!」

〈おい、声〉

そんなこと言われても、これを驚かすしてどうしろと言うのだ。

陸は一回死んだ。確かにゼロはそう言った。

(は？ え？ え？ 死んだ？ 死んだって何？)

へそりやーお前、人間があんなもん受けて無事な訳ねーだろ

あつけらかんとゼロに告げられ、そういえばと陸は意識が無くなる直前にミサイルで吹き飛ばされた事を思い出した。

言われてみれば確かにそうだ。地面を抉るような威力を持っているミサイルを喰らって無事で済むはずがない。

へまー正確には死ぬ一歩手前だったんだよ。俺達ウルトラマンは一体化することで相手の傷を癒すことが出来る。それで瀕死の重傷を負ったお前をこの俺ゼロ様が助けてやった訳だ

(はあ・・・)

そうは言われても実感が無い、と言うのが本音だろうか。

身体はどこも痛む場所はないし、問題なく動く。

とてもついさつきまで瀕死の重傷を負っていたとは思えない。仮にそうだったとして、それほどの傷をこの短時間で治すとは、一体化によるウルトラマンの治癒能力はどれだけ凄いのだろうか。

しかしそれなら陸が起き上がった時に看護師の人が悲鳴を上げたのも納得がいく。

瀕死の重傷を負っていた少年の傷がいきなり消えて起き上がったらそりや驚くだろう。

それに検査を終えた後のお医者様の顔と言ったら……。

（じゃあ何？ よく分かんないけどゼロが助けてくれたって事？）

〈ああ、そういう解釈でいい。感謝しろよお前〜〜〉

恩着せがましいウルトラマンな事で。

〈まあとにかく。俺の傷はしばらく治りそうにもないしな。当分このままだ……えつと、お前、名前なんて言うんだ？〉

（今更かよ。千歌達の会話聞いてなかったのか？）

〈俺ぁ興味のない話は聞かない主義だからな〉

（随分とアバウトな自分ルールなこつて……。あー、陸だ。仙道陸）

〈何っ!? リクだとっ!〉

（うわびつくりした……。なんだ急に……。）

〈ああいや、スマンスマン。ちよつと前にもそんな名前の奴がいてな……。まあ、気にしなくていい。これからよろしくな！ 陸！〉

（マジで何なんだこいつ……。）

マイペースと言うか自分勝手と言うか、お気楽な奴と一体化してしまったようだ。

独り言や唐突に叫んだ事で、千歌と曜には完全に頭がおかしくなったと思われてしまったようだし。

これからの生活に、不安を感じざるを得ない陸だった。

四話 ストリートファイターゼロ

〈ふう．．．あれが噂に聞いていた高校という奴か。中々に賑やかな場所だった〉
内浦にベロクロンが出現した翌日。

復旧作業が進む沿道を自転車が進む陸に、ゼロが唐突にそんな事を言い出した。
「お前のいた場所には学校なかったのか？」

〈あるにはあったが．．．．．、ほとんど戦闘訓練みたいなもんだったからな〉
光の国とは戦闘民族の集まりなのだろうか。

「なるほど、だからお前そんなに礼儀がなっちゃいけないのか。納得したわ」

〈はあ？ 言つとくけど俺のが全然お前より年上だからな〉

「何歳なんだお前？」

〈大体五千九百歳くらいだ〉

「何？ おじいちゃんだったの？」

〈馬鹿言うな。地球人の年齢で換算したら大体お前くらいだよ〉

約六千歳で大体高校生位とは、ウルトラマンと言うのはどれだけ長生きする存在なのだろう。

へしかし、この星も破壊の後が見当たらないな……

ゼロの眩きを陸が訝しく思う。

「は？　昨日の跡まだ全然残ってるぞ？」

辺りを見渡せば昨日のペロクロンが放ったミサイルによって破壊された町が、幸いミサイルが着弾したのは道路や砂浜ばかりだったので死人は出ていない。それは不幸中の幸いだっただろう。

へいや、そうじゃなくてだな。アナザークライシスの跡だよ

「アナザークライシス？」

聞いたこともない単語だ。

へああわり、クライシスインパクトって言った方が分かりやすいか

「………スマン。そっちも知らん」

ゼロが改めて言った単語もやはり聞き覚えがない。

へ何……？　こっちの宇宙では記録が残っていないのか。道理でお前らがウルトラマンを知らない訳だ

ウルトラマンの事は知っていて当たり前、みたいな口調で話すゼロ。それほどまでに名が知れた存在なのだろうか、ウルトラマンと言うものは。

へそれに突然修復されていた事と言い、一体全体この宇宙で何が……

「……何言ってるのお前？」

「どうやらこのウルトラマンは人に話を理解させない事が得意らしい。」

「あー、えつとだな……、どの辺から説明した方がいいのやら……」

ゼロはしばらく唸った後、

「よし、まずはウルトラマンベリアルって奴の話からするか」

「何だそのいかにも悪そうな名前は……」

「まあ、実際悪い奴なんだがな。そいつは光の国唯一の悪のウルトラマンなんだ。あいつのやった事と言ったらそれはもう……」

ゼロはウルトラマンベリアルのこと、ベリアルと自身の関係を陸に話してくれた。

ベリアルは光の国の禁忌、プラズマスパークに手を出した結果光の国を追放されたウルトラマンだという事。後に変わり果てた姿で光の国に降臨し、ベリアルは乱と呼ばれる大反乱を起こした事。その後封印されたのにも拘らず数万年後に復活して再び光の国に進行してきた事。その際にプラズマスパークを奪い去って光の国を凍らせてしまった事。それを同じくプラズマスパークに手を出して追放されていたゼロがベリアルを倒すことで解決し、ゼロが晴れて光の国に戻れた事。

その後何度も生き返ったベリアルと別宇宙で大戦争を起こしたり、体に乗っ取られたりと色々あったらしい。

「……結構ハードな人生送ってきたんだなお前」

下手なSFよりよっぽどハードな内容に陸はもうお腹一杯だった。

「だが、ベリアルが悪事はこれだけじゃ終わらなかつた」

「まだあんのかよ……」

陸がもうやめてくれと言った雰囲気醸し出すが、ゼロはそんなこと一切気にせず話を続ける。

「……数十年前、ベリアルがオメガ・アーマゲドンつつー戦争を起こしてだな」

ゼロの話によると、そのオメガ・アーマゲドンと言うのはゼロが所属している宇宙警備隊と、ベリアル率いるテラー・ザ・ベリアルと言う軍団の全面戦争の事を言うらしい。何でもその戦争は複数の宇宙を跨いで行われたとか。

「ここでベリアルがまた大それたことをやりやがってだな。超時空消滅爆弾を使つてとある宇宙を消し飛ばそうとしたんだ。……ベリアルはその計画は成功。地球で俺達宇宙警備隊と戦いながら発動させた超時空消滅爆弾で地球を崩壊させた。それがクライシスインプクトだ。そこで起こった時空の歪みでその宇宙は危機的な状況になったんだが、ウルトラマンキングつつー最強のお爺ちゃんがその宇宙と一体化することで崩壊は免れた」

宇宙とも一体化できるのかウルトラマンは。何でもありな存在過ぎて頭が痛くなつ

てくる。

「……それが、この宇宙って事か？」

気付いたらゼロの話を聞き入っていた陸がゼロに問う。

「いんや、こつちで起きたクライシスインプクトはそれとはまた別個だ」

なんとそのクライシスインプクトと言うのは二回起こったという。

「ベリアルがその宇宙でクライシスインプクトを引き起こす少し前、俺はこの地球に来ていた」

ゼロが衝撃の事実を口にする。ゼロは前にもこの地球に来た事があるという。

「え？ 何で……」

「ベリアルを追っていたんだ」

「はあ？ でもベリアルは……」

「ああ、別宇宙にいた。俺が追って来ていたのはベリアルに化けていた宇宙人だったんだ」

「あ、宇宙人ってホントにいるのか……」

「さりととんでもないカミングアウトである。」

「そもそも俺が宇宙人だろうが」

「言われてみれば。」

〈それでこっちの地球でも超時空消滅爆弾が起動した。奴らどうやら俺をこの地球ごと消し飛ばしたかったらしい〉

「それで……………どうなったんだ?」

〈……………当然、俺一人でそんなモン止められるはずもない。俺は時空を移動して事なきを得たが、超時空消滅爆弾はそのままドンだ〉

ゼロの声音が重苦しくなる。

つまり、この地球は消滅したという事。

〈悪いな。お前らが生まれる前とは言え、地球ぶっ壊しちまつて……………〉

そう言ったゼロは、酷く責任を感じているようだった。

そんな奴を責め立てるほど陸は落ちぶれてはいない。

「別に、お前も必死にやった上での結果だったんだろ? 流石にそれを責める気にはなれねえよ」

〈陸……………〉

「それに今この地球があるって事は、そのウルトラマンキング? がやったみたいに誰かが直してくれたんだろ?」

〈それが……………分からねえんだ〉

「は?」

〈確かに俺は超時空消滅爆弾が爆発するのを見た。だが、数日前にこの宇宙に戻ってきたら何事もなかったように全部修復されていたんだ〉

「それって……」

〈ああ、キングの爺さんとは別の誰かがこの宇宙を修復したという事になる。しかもこの宇宙にはその記録が残っていないときた。何か人為的な側面を感じるな……。それに昨日のペロクロンは改造されてやがった。確実に何者かが一枚噛んでやがると見て間違いない〉

何者かによって修復され、また別の誰かによってこの地球は怪獣が差し向けられたと言おう。

そういえば、六年前のあの怪獣災害。

あの怪獣も、何者かが差し向けたものなのだろうか。

「なあ、ゼロ。六年前に日本で起きた怪獣災害の事。何か分かるか？」

〈は？ 怪獣災害？ ここでそんなこと起きてたのか？〉

ゼロなら何か知っているのかと思っただが、情報は得られなかった。

〈詳しく聞かせてくれ〉

ゼロにそう言われ、陸は十年前に起きた怪獣災害の事を自分の知りうる限りすべて話した。

〈なるほど……、そんな事が……悪いが心当たりはないな……〉
 しかしゼロの返答は変わらなかった。

〈アナザークライシス以来、この宇宙は消滅したものと思われていたからな。その怪獣災害が観測されなかったのも、この宇宙に監視の目が届いていなかったからだ〉

「そつか……」

落胆する陸に、ゼロが続ける。

〈だが、これで地球は狙われている事が明らかになった。まだ何者かは分からないが、警戒するに越したことはないな〉

ゼロが告げ、陸は初めて今地球と人類に迫っている危機を実感した。

つまりは、昨日のベロクロンの様な事がまた起きる可能性があるという事だ。

〈陸〉

敵かなゼロの声音。

〈今の俺はレゾリウム光線のせいで後天的に得た力をほとんど失っている。その上体のダメージも酷い。お前の体を介して変身しないと戦えないんだ。お前を巻き込むことは本当にすまないと思っっているが、それでも俺に力を貸してくれないか?〉

ゼロと共に戦うという事は、陸自身も戦いの渦中に身を投じるという事。当然危険は付きまとうし、もしかしたら千歌や曜にも迷惑が掛かってしまうかもしれない。

「……なあ、ゼロ」

それでも――

〈ん？〉

「お前つてき、その、強いのか？」

陸の問いに、ゼロがフンツと鼻を鳴らした。

〈あつたり前だろ。今は力を失っちゃいるが、俺の強さはいつでもビツクバンだぜ！〉
ちよつと何言ってるか分からないが、とにかくゼロは強いらしい。

そうだ、強ければ。

六年前や、昨日のベロクロンの時の様な思いをしなくて済む。

千歌達を、守れる。

「……まあ、その時が来たら協力してやる。一応命助けてもらったしな」

〈陸……、いいのか？〉

「先に頼んできたのはお前だろうが。それに」

〈それに？〉

「お前と一緒に戦ってるうちに六年前の事。何か分かるかもしれないだろ。それさえあれば理由は十分だ」

〈はっ……、おもしれーなお前。気に入ったぜ。これからよろしく頼む〉

「おうよ」

ゼロにはそんな事を言ったが、正直恐怖が無いわけじゃない。いきなり命が危機にさらされるような戦いに身を投じることになって不安がない奴なんていないだろう。

でもそれ以上に、このまま無力なままでいるのが嫌だ。

陸だって、大事なものは全部守れるくらい強くなりたいのだ。

地球が狙われているかもしれないのだ。これ以上このままではいられない。

〈ところでよ、陸〉

一人決意を固めた陸の耳朶にゼロの声が触れる。

「どうした？」

〈何か聞こえる。怯えてる声だな。近いぞ〉

「何っ？ いきなりか？」

まさかもう地球を狙う者が現れたというのか。しかもゼロのセリフから察するに、既に人を襲っている感じだ。

「どの辺からだ。詳しい場所が分かるなら案内してくれ」

気を引き締めて、自転車のハンドルを改めて握った。

〈そんなまどろっこしい真似しなくてもいい。陸、体借りるぞ〉

「は？ お前何……」

陸がそこまで言った辺りで、急に体が動かなくなつた。いや、正確には自分の意志で動かせなくなつたと叫ぶ方がいだろう。

何故なら、今陸の体は陸の意志に反し、猛スピードで自転車を漕いでいるからだ。

(おいゼロ? 一体俺の体に何しやがった?)

『ああわり。体借りたわ』

声も出せない陸に、恐らくゼロの声だと思われるそれがあっけらかんと答えた。

(お前・・・体も乗っ取れるのかよ。ずりーぞ)

『だから悪いって言ってるだろ。ウルティメイトブレスレットが壊れてなければ体と意識を切り離れた一体化も可能だったんだがな。さっきも言った通り壊れちゃったから』

(ふざけんな! 体返せ!)

『用が済んだら元に戻すからよ。今は我慢してくれ』

(何でもありませんだろ・・・・・・ウルトラマン)

その内もつとヤバい事も明らかにになるんじゃないかと思い、想像するだけで頭が痛い陸だった。

『いたぞ。つて、なんだ人間同士か・・・』

ゼロが自転車を止めて視線を映した先にいたのは、一人の少女と、それを取り囲む三人の男だった。二人が少女の腕を掴んで逃げられ無くし、あと一人が少女の正面に立っている。

「・・・な、何ですか・・・」

陸の耳に届くは少女の怯えた声。腕を掴んでいる男のせいで顔がよく見えないが、その表情を見て男達が楽しんでいるのはよく分かる。

『何だあれ。平和的な雰囲気じゃなさそうだが』

(ああ、ナンパだよナンパ。あんな感じで声かけて女の子と遊ぼうとしてんだよ。一応警察呼んどくから体返せ)

『おいお前ら!』

(何やってんのお前っ!?)

陸の体を使ってゼロが発した声に、男三人が反応した。

「何だお前?」

少女の前で仁王立ちしていた恐らくリーダー格の男が陸、およびゼロを睨む。

デカイ。縦ではなく横に。漫画とかでよく見るガキ大将みたいな体型だ。他の二人

はメガネをかけた中肉中背の男と、いかにもリーダー格の男に胡麻を擦っていきそうな小さな男。

恐らくこれが陸なら「ご、ご、ごめんなさいっ」とか言って逃げ出していただろうが、ゼロは男の視線に怯むことなく傲然と言いつつ。

『そいつを放しな。なんかナンパとか言うらしいが見てて胸くそワリイ。力づくでやって何が楽しいんだ。自分の魅力で勝負しやがれ!』

陸の体で恥ずかしい事を堂々と言うゼロ。そういえば、陸の体で喋っているのに声がゼロなのはどういう事なのだろう。

そんな陸 in ゼロを見て、男達が笑いだす。

「ははっ、何言ってるんだこいつ」

「正義の味方か? かっこいいねー」

「わー、こわーい」

『うるせえブサイク共』

「んだとゴラァ!!」

ゼロがそう言った瞬間、リーダー格の男が憤慨して殴りかかってきた。初対面の人間にいきなりブサイクと言われたらそりゃ怒るだろう。

『おっと』

しかしゼロはそれを軽々と回避し、逆にその男の腹に拳を叩き込む。

「(あつ……)」

肺から空気が全て抜けた様な呻き声の後、男はその場に倒れ伏してしまった。そしてそれを見た二人が少女を放してゼロに向かつてくる。

『ふっ！ おらあつ！』

ゼロがメガネの顎を強烈に蹴り飛ばし、振り返りざまの裏拳でチビの方も殴り飛ばす。

ものの数秒で少女に絡んでいた男達を倒したゼロは、最後にリーダー格の男の腕を踏みつける。

「いだだだだだだっ!!」

悲鳴を上げる男に対し、ゼロは勝ち誇った笑みを浮かべ、

『俺に喧嘩売るのはなあ、二万年早いぜ!』

裏ピースを決めてそう言った。

(……喧嘩売ったのお前じゃねえの?)

『まあどつちでもいい。終わったし体返すぜ』

(え? ちょ、おい! この状況で戻されても)「困るんだが!」

ゼロへのツツコミの最中で主導権が陸に戻り、傍から見たらいきなり困り出した人に

なつてしまった。

まあ実際困っている陸は、とりあえず絡まれていた少女に声を掛けようと少女の方に寄る。

「ひいひい……」

「ごめんなきさいつ」

すると地を舐めていた男達に謝られてしまった。やったのは陸ではなくゼロだと言うのに。

その光景にぼかんとしている陸をよそに、男たちは走り去って行った。

「あー……、えっと、その、大丈夫だったか？」

男達が逃げていったので、今度こそ陸は少女に話しかける。

「……は、はい」

少女は陸に頭を下げてくる。だからやったのは陸ではなくゼロだと言うのに。

再び彼女が顔を上げ、陸は初めて彼女の顔を見る。

その少女は、一言で言ううと美人だった。まあ、美人じゃなきやあの不良達も声を掛けていないだろうが。

千歌や曜とは違ったイメージを抱かせる美人。活発な千歌と曜に対して、こちらはおしとやかで誠実そうな雰囲気、釣り目気味の黄色い瞳が更にその雰囲気を増長させて

いる。

彼女はそんな瞳を揺らしながら、その場にへたり込んでしまった。

「お、おい。ホントに大丈夫か？」

不安げに少女の顔を覗く陸に、彼女は弱々しい笑みを浮かべた。

「はは．．．．．、安心したら腰抜かしちゃったみたいで．．．」

何だ。怪我とかしてないようで安心した。

「どうするか．．．．．、このままってのもな．．．」

〈お前が家まで送って行ってやったらどうだ？〉

「まあ、それが一番か。初めてまともな事言ったなお前」

〈．．．．．お前喧嘩売ってんのか？ 俺に喧嘩売るのは――〉

「二万年早いんだろ？」

〈ぐ．．．〉

セリフを予測して先に言っちゃったらゼロが悔しそうに呻いた。

「あの．．．誰と話してるんですか？」

事情を知らない人間から見たらぶつぶつと独り言を言っている様にしか見えない陸に、彼女が不思議そうに視線を向ける。

「どうやらまた声に出していたらしい。」

「ああいや、何でもない。それより君家どこ？ 送ってくよ」

「ええ？ いいですよ。そんなに助けてもらう訳には・・・」

「じゃあこのままでいる気か？」

「それは・・・、その・・・」

「・・・。ほら、行くぞ」

多少強引な気もするが、このままここで渋られ続けるよりマシだ。

陸が手を伸ばすと、彼女は渋々その手を取った。その手がやたらと熱いのは緊張しているからなのだろうか。

陸は彼女を立ち上がらせると、とりあえず自転車の所まで連れて行こうと自分の背中に背負った。ゼロが力を貸してくれているのか、人を背負っているとは思えないくらいに軽い。

いや、それよりも・・・。

(背中に妙な感触が・・・)

〈煩惱だぞ。振り払え〉

彼女を自転車のサドルに座らせ、家までの道を教えてもらおうと、そこに向かって足を進めた。

二十分ほど歩いた辺りで、彼女がもう大丈夫だと言つて自転車のサドルから腰を下ろした。

もう彼女の家も近いのでここらで別れることになったが、二人はその前に少し会話に花を咲かせていた。

彼女は今高校二年生で、ここ最近内浦に引越して来たらしく、さつきも転校先の学校から帰宅していたらあの不良達に絡まれてしまったらしい。

千歌達と同じ制服を着ているので、学校は浦の星女学院で間違いないだろう。

「……………引越してきたばっかで災難続きだったな……………」

ただでさえ新しい生活で不安が多いだろうに、その上怪獣騒ぎとナンパだ。立て続けにこんな事が起こったら彼女も気が滅入るだろう。ちよつとナンパの小物感がすごいが。

「引越してきたって、前はどこに住んでいたの？」

「東京です。東京の秋葉原」

「秋葉原……」

あらゆるニーズに答える。オタクやマニアの聖地。普通はそういうイメージだろうが、六年前にあの事を体験している陸には、まず先に怪獣災害の事が思いつく。

「……どうかしました？」

急に険しい表情になった陸の顔を彼女が覗き込んでくる。

長く伸びた紫檀色の髪が揺れて、女の子特有の甘い香りが陸の鼻腔を擦った。

「ああ、ごめんごめん。なあ、今更だけど、同じ年なんだし敬語は辞めない？　なんかムズムズするんだけど」

「え……。同じ年だったの？」

彼女にそう言われ、そういえばこっちはまだ何の情報も明かしていなかった事を思い出した。

「そういう言ってなかったな。俺は陸。仙道陸。君と同じ高二で、浦女からもうちよつと行った方にある高校に通ってる」

彼女の明かしてくれた情報に対してこっちの情報が少ない気がする気がないでもないが、特にこれ以上明かす情報がないのも事実だ。

「そういえば私も、名前教えてなかったね」

陸のお願い通り敬語ではなく、ちゃんと友達口調になった彼女は朗らかに笑った。

それは普段幼馴染位としか女子と関りがない陸には新鮮なもので、思わずドキツとしてしまう。

「私は梨子。桜内梨子です」

五話 ハグと謝罪と再会と

地球近くの宇宙空間。

空間の歪みに覆われてカモフラージュされた宇宙船の中、五人の声が反響している。

『ぬぐう．．．まさかウルトラマンがこの地球に現れるとは．．．．．』

『ほーんと。しかもよりによってゼロっていうな』

『オオオオオオオオオ』

『．．．ゼロめ。我をブサイクと呼んだ恨み、忘れはせんぞ．．．．．』

『落ち着きなさい。奴が現れても我々が計画を実行するという事は変わりませんよ』

『しかしゼロは吾輩たちの計画にとつて障害となる存在だぞ』

『安心なさい．．．』

光る眼が映す先には、レゾリウム光線を喰らった後のゼロの映像が映し出されている。

『念の為ベロクロンにレゾリウム砲を積んでおいて正解でした。ゼロは今レゾリウム光線を喰らって体を維持できない状態です。恐らく適当な地球人と一体化している

のでしょう』

『つまりそいつを見つけ出そうと』

『そういう事です。再び怪獣が現れれば、ゼロは変身して戦うでしょう。その時に一体化した地球人を割り出して』

『始末しようという事か』

『ええ、次はもう少し強力な怪獣を送り出しましょうか』

しばらくの沈黙の後、

『……いや、あのベロクロンも十分ヤバくなかったか？ レゾリユーム光線で……』

『ウウウウウウウウ』

そのツツコミに返ってきたのは、喋れない奴の唸り声だけだった。

〈おい陸。起きろ〉

「ん……あ……」

数日経って日曜日の朝。

学校も休みなので昼間まで惰眠を貪っていようとしていた陸だが、唐突にゼロによって起こされた。

〈携帯鳴ってるぞ〉

「え……マジ……?」

ゼロに言われて体を起こしてスマホを見ると、確かにバイブレーションで小刻みに揺れていた。

画面には渡辺曜の名前が。

「……もしもし……?」

寝ぼけ半分で電話に出ると、慣れ親しんだ快活な声が聞こえた。

『ああ陸? おはよー。ひよつとして寝てた?』

「ひよつとしなくても寝てたわ。何だ日曜の朝から……。俺もうちよつと寝てた
いんだけど」

『もう十一時だよ? いい加減起きなあって』

「俺の勝手だろ……。で、何の用だ?」

起こされてちよつとイライラしている陸はそれを隠しもしない。

だが幼馴染である曜はこれがいっもの事だと知っているので気にせず話を続けた。

『いやー、さつき千歌ちゃんに果南ちゃんの所のダイビングショップに来てって言われてキーン』

「……果南姉ちゃんの所か？ 何でまた？」

『さー？ 私もよく分かんない。けど陸も誘って来てって言われたから』

「……お前、千歌の言う事に無条件で乗るの辞めようぜ？」

『いいじゃん別に。じゃあ私そっち行くから、それまでに準備していてねー』

曜はそう言うのと通話を切ってしまった。

「なあぜ口。無視して寝てもいいかな？」

〈ダメに決まってるんだろ。いつ怪獣が出るかも分かんねえのに〉

「ですよね……。まあ、無視したら殴られそうだしさっさと着替えるか……」

陸は渋谷ベッドから降りてクローゼットを物色した後適当な服に着替え、リビングに

降りると食パンを齧って軽い朝食を済ませた。

〈別にそこまで急ぐ事無いんじゃないやねえの？〉

「アイツ家隣なんだよ……」

隣に住んでる起きた直後の幼馴染に、家に着くまでに準備を終えろとは中々に鬼畜な

注文な事で。

〈ところで陸。お前姉がいるのか？〉

「あ？ どした急に。この前も説明したけど俺一人っ子だぞ」

「さっき姉ちゃんかどうのこうのとか言っただけでなかったか？」

「ああ、果南姉ちゃんの事？ その人は一つ年上の幼馴染だよ」

「姉ちゃんって呼んでるのかお前。可愛いな」

「ホントに姉みたいなのだから。それに先輩とか言うて怒るし」

〈大変だな〉

同情された。そう言えばゼロにも兄弟とかいるのだろうか。

〈いけないぞ〉

「心を読むな」

やはり考えている事が筒抜けと言うのは気持ちのいいものではない。

「陸ー。おっはヨースローー！」

家を出ると既に曜がいた。ビシツと敬礼を決める彼女のポーズも、小さい頃から随分と見たものだ。白い歯を見せて笑う曜の笑顔を見ていると、やはり美人だなと思ってしまう。

まあ、安眠を妨害された陸にとってはその笑顔も殴りたい対象でしかないのだが。

「ん、おはよ」

陸はそれに素っ気なく返すと、止めてあった自転車に跨った。曜もそれに続いて荷台

に腰かける。

「全速前進！ ヨーソロー！」

曜の本日二回目のヨーソローを聞いて、陸は重いペダルを踏んで自転車を漕ぎ始めた。

淡島にあるダイビングショップに着くと、件の「果南姉ちゃん」が待っていた。

この人が松浦果南。陸、千歌、曜の幼馴染兼お姉さんの存在である。

「陸ー、曜ー、久しぶりだね」

「ホントに。果南姉ちゃんも元気にしてた？」

「まあね。そつちも元気そうで何よりだよ。……で、曜に何があったの？」

ポニーテールに束ねた青い髪と青紫色の瞳を揺らしながら、果南が涙目で震える曜に視線を向ける。

「陸があ……、陸があ……」

今朝の事でちよつとイライラしていた陸は、少し曜に痛い目を見せてやろうとゼロの力を借り、とんでもない速度で自転車を漕いだりウィリー走行をしたりと散々やったのだが……。

少しやり過ぎたらしく、泣かしてしまふ結果になってしまった。ゼロと一体化している陸はともかく、一般人の曜には辛いものがあるだろう。

「へー、そんな事が……」

恐怖で軽く幼児退行を起こしている曜の代わりに陸が果南に事の詳細を伝えると、果南は穏やかな眼差しを曜に向け、逆に陸の頭に手刀を入れた。

「今回は陸が悪い」

そうきつぱり告げて、今度は陸と曜の二人を自分の胸に抱き寄せた。

むにゅつとした触感が陸の顔を包む。

（やつぱとんでもないむん……、戦闘力だなこの人）

〈煩惱〉

ゼロはそんなこと言ってくるが、考えるなっつて方が無理がある。「だから陸が謝ってそれで終わり。ね？」

果南は抱き寄せた二人の頭を撫でると、慰めてるようにも咎めているようにも聞こえる声でそう言った。

果南は昔から陸達が喧嘩するところしてなだめてくれる。

単純な手法ながらもその効果は絶大で、小さい頃から何度もやられているにも関わらず陸は未だにこのハグには抗えない。

「……………ゴメン……………」

「……………ん……………」

「よろしい♪」

陸が謝り、曜がそれを許したのを見ると、果南は二人から体を離れた。

「変わらないねー、二人共。今でもこんなに仲良しでさ。たまにはここに遊びに来てくれると嬉しいんだけど。陸なんて学校すぐそこじゃん」

「クラスの連中に何言われるか分かったもんじゃないしね」

果南は今、怪我をしている父親の代わりに家業であるダイビングショップの仕事を手伝っている。

その影響で今は休学中であり、ここ最近はあまり会っていなかった。そのせい或少し寂しそうである。

新学期になつても休学したままとは、父親の怪我はそこまで酷いもののだろうか。

「親父さんの怪我はどうなの？」

「まあ、順調に治ってきてるよ。この分なら夏あたりには学校戻れるかなー」

「それでも夏までかかるのか……」

ますます果南の父親の怪我が心配になる陸。ふとここである事を思い出す。

(なあぜ口。お前が一体化して親父さんの怪我直す事とか出来ないのか?)

へやつてもいいが……、今俺が出て行ったらお前死ぬぞ)

(スマン。聞かなかったことにしてくれ)

あくまでも傷が塞がっているのはゼロが体内にいるかららしい。

「ところで、今日は何の用で来たの? なんか千歌はダイビングさせてとしか言つてなかつたし」

「そもそも俺等はダイビングする事自体初耳なんだけど……」

「千歌ちゃん。その辺は何も言つてこなかつたよ?」

「なんか友達連れてくるとは言つてたよ? 千歌」

一体何が目的で皆を呼び出したのやら。千歌の突拍子のない行動はいつもの事だが、今回は色々謎だ。まずダイビングをすることに何の意味があるのか。

「おーい! 陸ちゃん、曜ちゃん、果南ちゃん」

噂をすれば何とやら。高海千歌の登場である。

丁度いい。本人に聞けば分かるだろう。

「おー千歌。呼び出した本人が一番遅いつてどう言う事だつて……、ん?」

文句を言いながら千歌の方を向いた陸。だが千歌と一緒にいる少女の姿を見て目を細める。

何故ならそこにいたのは。

「あれ、桜内？」

「え……、仙道君……？」

長い紫檀色の髪と、釣り目気味の黄色い瞳。間違いない数日前に陸、ではなくゼロが助けた桜内梨子だった。この前着ていた制服から浦女だという事は知っていたが、まさか千歌の知り合いだったとは。

向こうも陸の存在に気が付いたらしい。

そんな陸と梨子の様子を見て千歌が首を傾げる。

「二人共、知り合いだったの？」

「ああうん。ちよつと前に不良に絡まれてたところを助けてもらって」

「へー、陸ちゃんやるじゃん」

「ふっ、まあな」

〈俺の力だろ〉

「なあ千歌。何でまた今日はダイビングしたいだなんて言い出したんだ？」

ゼロのツツコミは無視して、今回のダイビングを計画したという千歌に気になってい

た事を問いかける。

「それがね、桜内さんが海の音が聴きたいって」

「海の音？」

海の音と言うと、水に潜った時に耳がごぼごぼ言うあれだろうか。

「桜内さん、小さい頃からずっとピアノやってるらしいんだけど、今スランプ中で弾けなくなってるらしいんだ。それで海の音が聴けたら何か変わるんじゃないかなって」

「……………それでウチで潜ろうって事になったの？」

「そう。前に潜ろうとしていた時は私が止めちゃってさー」

何か今聞き捨てならないセリフが聞こえた気がする。

「おい千歌。潜ろうとしてたってどういうことだオイ」

陸のツツコミに梨子が一瞬体を強張らせるが、千歌はそんなこと気にせず何があつたかを説明してくれた。

「私が初めて桜内さんに会った時なんだけどね。桜内さん。海に飛び込もうとして……………」

「おいマジか……………」

陸が梨子に視線を移すと、梨子は恥ずかしそうに俯いてしまった。

もう四月だし、とか思っている人もいるだろうが、内浦、と言うか海全体を通してそ

うだが、春先の海水温は世間の人々が思っている以上に低い。きちんとした装備で潜らないと低体温症になる事もあると言うのに。

おしとやかそうに見える梨子がそんなクレイジーな行動に走っていたとは。

でもまあ、また飛び込もうとする前に千歌がダイビングに誘ったのは賢明な判断だろう。

「ところで桜内さん。もし海の音が聞こえたらスクールアイドルに……」

「ならないわよ」

きつぱりと梨子が拒否の意思を伝え、千歌ががくりと項垂れる。どうやら千歌は梨子にもスクールアイドルの勧誘をしていたらしい。

「千歌ちゃん。ああやってずっと桜内さんの事誘ってるんだよね」

「迷惑な奴だな。でもなんで？」

「ほら、さつきピアノがどうか言ってたでしょ？ スクールアイドルって曲も自分達で作らないといけないから、作曲できる人がどうしても必要で」

「ああ、そういう事」

確かに、音楽の事を全く知らない千歌達が一から作曲を学ぼうとしたらやっつてるうちに高校生活が終わってしまう。

だから作曲の出来る梨子は千歌にとっても確保しておきたい貴重な人材なのだろう。

梨子の態度を見る限りでは、入ってくれそうもないが。

(ん・・・?)

ふと果南の顔を見た陸は、果南の表情が険しくなっていることに気が付く。

が、そう思ったのもつかの間、果南はすぐに柔和な笑みを浮かべて千歌達に声を掛けた。

「じゃあ全員揃ったし行こうか。皆は船の中で着替えて」

「「はーん」」

六話 海の歌

千歌、曜、梨子、果南を乗せた船が沖に出ていくのを見届けると、お留守番の陸はテラスにある椅子に腰かけた。

「なあ陸。千歌とかいう奴が言ってたスクールアイドル、だったか？ それって一体なんだ？」

「・・・そういやお前には言っていなかったな。えーと、まず普通のアイドルは分かるか？」
「一応。別の宇宙でレイトって奴と一体化してた時に、地球の文化に触れる機会があったからな」

ゼロは別宇宙で人間と一体化した経験があるらしい。どおりで高校などの地球文化を知っていた訳だ。

「そっちの世界にスクールアイドルは無かったのか？」

「俺が見落としていただけかも知れないが、そもそも普通にアイドルやるのと何が違うんだそれ」

「・・・俺もよく分からん。千歌は何か自分たちと同じような普通の女子高生が歌って

踊ってるのを見て感動したとか言ってたな」

「へつまり何だ。学校でやるアイドルって事か？」

「まあそういう事だな」

「へいいなそういうの。枠に捕らわれない考え方は好きだぜ」

「お前はもうちよつと常識を覚えた方がいいと思うけどな」

陸のツツコミと同時に海辺特有の風が吹き、爽快な空気が辺りに舞い込む。

「ところでよ陸。なんでお前はダイビングに行かなかったんだ？」

「ふっ……、愚問だな、ゼロ」

ゼロの問いに、陸は短く鼻を鳴らす。答えは単純明快。真実はいつだって一つなのだ。

「俺、船ダメなんだわ」

「どう？ 聴こえた？」

海の声を聴きに海に潜った千歌達は、一旦果南の待つ船の上へと戻ってきていた。

そして果南の問いに、梨子が首を横に振る。まだ聴こえていないのだ。

「まあ、この天気じゃね……」

曜が天を仰いで呟いた。

曜の言う通り、今日の天気は生憎の曇りだ。時々雲の間に間に光が漏れ出でるだけで、海の中は基本的に暗く、お世辞にも綺麗とは言える状態ではない。

一応千歌と曜も海中で海の音のイメージはしてみたのだが、聞いたこともないような音を音楽には疎い二人が想像できるはずもなく。

「もう一回！ もう一回挑戦してみよう！」

その場に漂っていた諦めムードを払拭するように、千歌が声を上げて再び潜る事を提案する。

そんな根拠どこにもないというのに、何故か聴こえるんじゃないかと言う期待を孕ませる千歌の声音に、梨子も曜も首肯した。

「行こう！」

千歌が再び飛び込むと、それに続いて二人も飛び込む。

「………頑張るなあ……」

それを見守っていた果南の呟きは、どこか寂し気に静かな海上で霧散していった。

千歌の提案に乗って三人は再び潜っては見たものの、やはり海の中は暗いままだつた。

仄暗いモノクロームの様な世界の中で、梨子はその瞳を失意に陰らせていた。

自身へのやるせない気持ち、ここまで付き合ってくれた千歌や曜、果南や陸への申し訳なき。燻ったままのピアノへの情熱。

これらの気持ちを蔑ろにしていい訳がないのだが、それに答える唯一の術である海の音はまだ聞こえないままだ。

何もできない自分が嫌になり、俯いたその瞬間、梨子の肩に優しく手が添えられた。手を添えていたのは千歌だった。

千歌は目を輝かせながらある方向を指さしている。

千歌が指さす先は、雲から漏れ出た光が差し込む場所。恐らく千歌はあそこに行こうと言っているのだろう。

確かにあの場所は違う。キラキラと輝いていて、闇さえも明るく照らすようにで。

梨子が導かれるようにその場所へと泳いでいき、千歌と曜もそれに続く。

そして光の差す場所で止まり、三人を光が包んだその瞬間、

遂にその時は訪れた。

「つ………！」

荒れ狂う大海の様に力強いリズムと、母なる海を連想させる優しくゆつたりとしたテンポ。

その二つはやがて合わさり、旋律を奏でながら歌となっていく。

海の音。いや、

———海の歌。

「聴こえた！ 聴こえたよ桜内さん！」

「私も！」

海の歌の余韻に浸りながら浮上した梨子を待っていたのは、キラキラと目を輝かせた

千歌と曜だった。

二人共今まで聞いたこともないような音に興奮を覚え、梨子が勝手に作っていた見えない心の壁を突き破って熱い抱擁をしてきた。

不思議と梨子も嫌には感じず、自身も二人と感動を噛み締め合うように手を取って笑い合った。

一人ではきつと成し得なかつたであろう事を、共に挑戦した友として。

天から差し込む祝福の調、それに耳を傾けるように笑い合う三人。

「やった！ やったね！ 桜内さん！」

「うん！ 二人共ありがとう・・・」

「あはは、桜内さんの手凄い熱いよ？ そんなに嬉しかったの？」

手を取り合つて笑う三人を、果南も優しく微笑むが、

その時間は長くは続かない。

『ピイイウイイイイイイ!!』

白き悪魔の咆哮によつて、穏やかな時は終わりを迎えた。

「えっ・・・？」

「何・・・？」

曜と梨子が周囲を見渡すが、辺りには何も見当たらない。

「あつ！ あれつ！！」

声を上げた千歌が指さす先には、雲の裂け目から落下してくる卵の様な物体が。海中に光が差したのはあの物体の影響らしい。

「皆！ 速く船に上がって！」

果南もそれに気が付き、三人に注意を促す。

それに従った三人が船に上がると同時に、その物体は派手に飛沫を上げて海に着水した。

「きやああああああつ！！」

「くっ……」

それによって生じた高波が船を襲い、船体が大きく揺れる。

果南が必死に舵を切って持ちこたえるが、これもいつまで続くか。

一際大きい高波の後、

『ピイイウイウイイイイイイイ！！』

内浦の海に、再び怪獣の咆哮が響いた。

へッ！ あれは！

出現した怪獣が咆哮を上げると共に、ゼロも声を上げる。

「おいゼロ！ お前が今朝変なこと言うからホントに怪獣出てきちまったじゃねーか
！」

へああ？ 俺は事実を言ったまでだ

しかもよりによつて海に。あそこには千歌と曜と梨子と果南の四人の乗った船がある。

速く何とかしなければ四人にも危険が。

「ゼロ。あの怪獣は何だ？」

牛を連想させる白地に黒い斑点模様の体色。目がなく、代わりに生えているのは絶えず回転を続けるアンテナの様な角。

何よりも目を引くのは、背丈の数倍はあるであろう長い尻尾。

前に出てきたベロクロンと対比しての迫力不足は否めないが、それでも危険な存在だ
という事はひしひしと感じる。

〈あれはエレキング。宇宙怪獣エレキングだ〉

「エレキング・・・？」

〈ああ、電撃攻撃を得意とするちつと厄介な怪獣だな。海上に出現したとなると……、ちよつとヤバイな〉

「電撃つ!? 嘘だろ!?!」

エレキングは今海の中にいる。

海は何の集まりだ？ 海水だ。海水は水、水は何を良く通す？ 電気だ。そして今四人はどこにいる？

・・・もし今エレキングが放電しようものなら。

〈陸！ 早く何とかしないとヤバイ。出撃だ!〉

「ああ。・・・でもどうやって・・・？」

ゼロはこの前力を貸してくれとか言っていたが、それって具体的にどうすればいいのだろうか。

〈これだ。これを使い！〉

ゼロがそう言った瞬間、陸の目の前で光が集約していく。

やがてその光は、とある物体に変化した。

眼鏡のようだが少し違う。ツルに相当する部位がない上にレンズも黄色く、どちらか

と言えばサングラスのようだ。

カラーリングはあの時見たゼロの様に赤、青、銀の三色で、額部分には緑色のランプがある。

「そいつはウルトラゼロアイ。そいつをつけて俺に成れ!!」

「お前になるって、俺ゼロになるの?」

「ああ。変身さえしてくれれば後は俺が戦う。お前は俺の死角に目を配って周りに危険がないかを教えてくれ」

「・・・分かった。とにかくつけなければいいんだな?」

「おう。行くぞ陸!」

「ああ」

陸は空中に浮遊していたそれを手に取ると、腕を伸ばしてエレキングの方にかざした。グラス越しに映るエレキングは、狙っているかのように件の船へと向かっていく。

「今行くぜ・・・。。。。デヤア!」

一瞬だけ、荒波に翻弄された四人が乗っている船に目を移した後、陸はウルトラゼロアイを装着した。

その瞬間、陸は変わる。

光に包まれた陸の体を赤と青の閃光が頭部から照射していくと共に、その部位から陸

の体はゼロに変わっていく。

やがて全身がゼロに変わり、人間大での変身が完了した。

渦巻く光に包まれ、飛翔しながら巨大化したウルトラマンゼロ。目指す標的はエレキング。

『覚悟はいいか陸』

(勿論)

———
行くぜ！　ウルトラマンゼロ！

『『シエア！！』』

七話 目覚めの光

「曜ちゃん！ 大丈夫?!」

荒れ狂う波に船体が大きく揺れる。

海の音が聞こえ、喜んだのもつかの間。突如天から現れたあの怪獣によりその雰囲気は壊された。

「うん……、平気、転んだだけだから……。でも……」

千歌に支えられて起き上がった曜が、海上に出現した白い怪獣へと視線を移す。

「また、怪獣が現れるなんて……」

六年前以来、一度も出現していなかった怪獣が、一週間の内に二回も出現している。しかも出現場所はどちらも内浦。

一体何が起きているというのだろうか。

「っ！ あれっ！」

曜と同じく怪獣の方を見ていた梨子が声を上げた。

その視線の先には、数日前の怪獣騒ぎの際に現れた青い巨人が。

「味方なのかな……あの巨人……」

未知の存在に畏怖を感じる梨子に、千歌が確信を含む声音で断言した。

「味方だよ！ だってこの前も怪獣を倒してくれたじゃん！ きつと味方だよ！」

千歌が頑張れと叫ぶのと、巨人の蹴りが怪獣にヒットするのは同時だった。

『オオオウラアアアアアアアアアア!!』

裂帛の気合と共に、炎をまとったゼロの必殺キック、ウルトラゼロキックがエレキングに炸裂する。

『——ッ!!』

エレキングが倒れこむと、ゼロはすかさず長い尻尾を掴み持ち上げ、ぶんぶんとエレキングを振り回す。バリバリとエレキングの体が帯電してきたのを見たゼロがその手を離すと、エレキングは勢いよく天へと昇って行った。

『アエヤアツ!』

天高くエレキングを放り投げた後、ゼロ自身も飛び上がってエレキングの遙か上空で制止する。

「すげえ……、ホントに戦ってるよ……」

初めてウルトラマンに変身し、戦っていることも忘れて軽い感動と高揚感を覚える陸。

町も人も、全てが小さい。しかも空を飛んでいるという事が更に陸を興奮させる。

『驚くのはこれからだぜ? ゼロツインソード!!』

ゼロの頭に装着された二つの刃、ゼロスラッガーが二つ合わさって変形し、一本の弓の様な大剣が生まれた。

『ちよつと早すぎる気もするが……、決めるぜつ!!』

その大剣、ゼロツインソードを構えたゼロはエレキング目掛けて急降下を開始した。それと同時にゼロツインソードが光を纏う。

『ピイイイイイイ!!』

『セヤアツ、デエエリヤツ!!』

エレキングが口から放った三日月形の光弾を打ち砕きながら、ゼロはエレキングへと肉薄していった。

『喰らいやがれッ！ プラズマスパークスラッシュッ!!』
文字通り一刀両断。

ゼロがエレキングと交錯した刹那、胴を切り裂かれたエレキングの体が真っ二つになった。

『フイニッシュッ!!』

ゼロがポーズを決めると共に、空中でエレキングが爆散した。

エレキングを瞬殺したゼロに、小さな歓声上がる。

下を見れば千歌がびよんびよんと跳ねながらありがとーと言っているのが見えた。

『へっ・・・』

ゼロが千歌に裏ピースで返した。ウルトラマンでも感謝されると嬉しいらしい。

「しかし、騒ぎ立てた割には随分とあっさり終わったな。ホントに弱体化してんのかお前」

『まあ、元が強すぎるからな。今でもあの程度余裕よ!』

「調子乗んな」

『へーへー。じゃ、戻るとしま——』

「わああああああ!!」

エレキングも倒した事だし変身を解除しようとしたゼロと陸の耳朵に、更なる悲鳴が

響いた。

見ればなんと長すぎるが故に爆散しきらなかったエレキングの尻尾が、四人の乗る船に向かって落下して行っているではないか。

『なあっ!?!』

光線で撃墜しようにも、尻尾があそこで爆発したら確実に船を巻き込むことになる。念力で止めようにも大きすぎる。通常形態のゼロの念力では無理だ。

「おい! どうすんだこれ!」

『クソツ．．．、ルナミラクルの力が使えれば．．．．．』

ゼロは今レゾリユーム光線を喰らった影響により、本来の力が発揮できない。

使う事の出来ないものに縋っても仕方ない。苦し紛れにゼロスラツガーを投擲するが、もはや間に合うはずもない。

船は諦め、せめて海に落ちた四人だけでも救おうとゼロが再び降下を始めたその時、
『ツ?! 何?!』

突如船の中が青色に光ったのだ。

そう思ったらエレキングの尻尾が軌道を変え、僅かに船を逸れて着水していった。

船はその波に飲み込まれかけたが、何とか踏ん張って目立った損傷もないまま海上に浮かんでいる。

それ見た陸が、ホッと安堵の息をついた。

「つたく、ゼロ！ 気を付けてくれよ……、ゼロ？」

ゼロからの返答がない。何か信じられないものを見たように船に視線を注いでいる。

『まさか……、あれはっ……』

「もーダメじゃないかゼロくん。ちゃんと周りを見てなきやー」

内浦の傍ら、両手から大量のアニメグッズが入った紙袋を下げながらゼロとエレキングの戦いを観戦していた者がいた。

「でもまさかこの地球にもゼロ君が現れるとは思わなかったよ。どうやらボクと君は運命の赤い糸で結ばれているらしいね。……って、ボク達男同士じゃないか、参ったな……」
ケタケタと笑いながら、その男は謎の光が発生した船へと目を移す。

その者の視線は光の発生源ではなく、ゼロを応援していた少女に注がれていた。

「……あの子、もしかして……」

男はより一層笑みを深めた後、闇へと溶け込んでいった。

謎の減少によって事なきを得た四人の乗る船。

その中では、エレキングの尻尾が船体に当たらなかつた事を喜んでいるという雰囲気はなく、皆一様に言葉を失い、一人の少女に視線を向けていた。

「桜内……さん……？」

千歌がようやく絞り出した声で、静かな船内に響く。

怪獣の尻尾が眼前に迫つたその瞬間、梨子の胸から青色の光が発生し、波動の様な物が怪獣の尻尾を押し戻したのだ。

千歌、曜、果南の三人も驚きでそれ以上の事が言えないが、一番驚いているのは梨子だった。

「え……？ 何……、これ……？」

まだ光つたままの自分の胸を見て、梨子がか細く震える。

一体自分の体に何が起こつたのか、あの力は一体何なのか。考えるだけで身震いが止

まらない。

「と、とりあえず戻ろ？ 陸も心配してる事だろうし・・・」

まだ混乱したままの果南の提案に千歌と曜も賛同し、船は陸の待つ淡島へと戻って行った。

『おいつ！ 見たぞあの光、一体誰が!?!』

船が戻って来るや否や、陸の体に乗っ取ったゼロが四人に詰め寄る。

「陸ちゃん落ち着いて・・・桜内さん、自分でもよく分からないみたいで・・・」
陸、ではなくゼロを諫めた千歌が視線を映した先には、青い顔で震える梨子の姿が。
「どうやらあの光の発生源は梨子らしい。」

よほどショックが大きかったのか、曜に支えられながら船から降りてくる。

『つ・・・、スマン、冷静じゃなかった・・・』

「でも一体何があつたんだ？」

ゼロから体の主導権を取り戻した陸が千歌に問う。

「・・・怪獣の尻尾が船に向かって飛んできた時に、急に桜内さんの胸が光つたと

思ったら、波？ みたいなものが怪獣の尻尾を押し戻して……」

「とりあえず今は安静にしてあげよ？ 陸、自転車で桜内さんの事バス停まで送って上げて？」

「ああうん。分かった……」

果南に言われた通り、陸は梨子を自転車に座らせてバス停まで送った。

付き添いの千歌と曜と共にバスに乗って走り去って行った後、再びゼロが口を開いた。

へ何故、この世界にリトルスターが……」

『あれはっ……』

謎の五人が潜む宇宙船。

ゼロとエレキングの戦いをモニタリングしていた五人のうち一人が、梨子の胸から発せられた青い光を見て声を上げる。

『くつく……、遂にこの地球でもリトルスターが発現しましたか……』

そのツツコミには、唸り声すら返ってこなかった。

八話 リトルスター

仙道陸は今訳あつて光の国の戦士、ウルトラマンゼロと一体化している。

それ以前は何の力も持たないただの平凡な高校生であつた。

そんな彼に今、忍び寄る影が一つ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その影は息を殺し、眠っている陸へと近づいていく。

悪戯に目を光らせ、ワキワキと指を動かすその姿は、まるでこの状況を楽しんでいるようである。

そしてその影が遂に横たわる陸の隣に立ち、愉快そうに笑みを深めたその瞬間であつた。

『誰だっ!』

「ふえっ?」

眠っていた陸が突如目を開け、人間離れた速度でその影の背後を取ると、一瞬でその影を押さえつけてしまった。

当然、こんな事陸にできるはずもない。やったのは陸と一体化しているウルトラマン

ゼロだ。陸と肉体を共有しているゼロは、自由に陸と人格の入れ替えが出来る。

接近するその気配に気付いたゼロが体の主導権を奪い、瞬時に対応したのである。

「いだけだだだだだっ！」

腕を捻られ背後に回されたその影は、たまらず悲鳴を上げる。

ゼロはその声に聞き覚えがあった。確か陸の幼馴染の……。

『……渡辺曜、だったか。何故陸の家に……』

「ちよつと陸！ 痛い！ 痛いってば！」

『ツ……！ と、スマン……』

ゼロが慌てて手を離すと、その少女、渡辺曜は目尻に涙を溜めながら起き上がった。

「もー、いきなり何するのさー」

『スマンスマン……、てか、お前もここで何やってんだ？』

ゼロが聞き返すと、曜は「何言ってるんだこいつ？」とでも言いたげな顔で首を傾げた。

「何でって……、いつも通り起こしに来ただけだよ？」

『え？』

「え？」

『ツ！ ああ、そうだったな。ワリイワリイ寝ぼけて……』

へこいついつも起こしてもらってやがったのか……

「? どうしたの陸? 何かいつもと声も雰囲気も違うような……」

『とにかく! 着替えるから部屋の外で待っていてくれ。な?』

「変な陸?」

ゼロは曜を部屋の外へ追い出すと、全力でウルトラ念力を掛けて陸を叩き起こした。

(……なあゼロ。何か曜が俺の事避けてる気がするんだが、お前一体何やった?)
〈何も知らん〉

陸がゼロに叩き起こされてから数十分。いつも通り曜を千歌の家の近くのバス停まで送ってきたのだが……先程から曜の態度がどこかよそよそしい。

へつかお前、その年になってまだ起こしてもらってんのか。いい加減自分の力で起きられるようになれよ〈

(なっ……、何故それを……)

〈今朝曜が起こしに来てな。敵かと思つてうっかり関節技決めた時にポロリと〉
(やっぱ原因お前か)

陸は絶望的に朝が弱いので、自力で八時前に起きるのは基本的に不可能である。

ゼロと一体化してからは怪獣騒動で学校が休校になったり、曜が部活の朝練があったりとで起こしに来ていなかった為ゼロには知られていなかったのだが……、遂にバレてしまった。

〈そもそも何であいつお前ん家普通に入つてこれるんだよ。鍵かけてねえのか?〉

(うちの両親が俺の面倒見と言う名目で曜にウチの合鍵渡してやがるんだよ)
〈ごんだけ親に信用されてねーんだお前〉

陸の親は共に漁船に乗つて世界を飛び回つているので基本的には家にはいない。なので陸の面倒見兼お目付け役として曜が抜擢された訳だ。

両親の曜、というか渡辺家への信頼が絶大過ぎて陸も少し困っている。小さい時からずっとこんな感じなので、陸は自分の両親より曜の両親と一緒にいた時間の方が長い。
〈お互い大変だな。変な親を持つと……〉

ゼロに同情された。

(ゼロの親つてどんな人なんだ?)

〈ウルトラセブンつー宇宙警備隊の……、役職言つても分かんねーか。まあ、結構な

お偉いさんだよ。ま、プラズマスパーク騒動まで親だつて事知らなかったんだけどな
(うちより数倍複雑じゃねえか)

これ以上自分達の複雑な家庭環境を話し合つても頭が痛くなるだけなので、この話は早く切り上げることしよう。

「桜内さん、大丈夫かな……」

「うん……、昨日のあの様子じゃあね……」

千歌達の会話に聞き耳を立てると、話題は桜内梨子の事だった。

昨日彼女の胸から発生した光。まるで波動の様なものでエレキングの尻尾を動かした謎の力。

船から降りてきた彼女の表情を見れば、誰だつて心配になる。

「そーいや昨日お前らが送つて行つた後どうなったんだ?」

「……家まで送つていくつて言つたのに、大丈夫だつて言つて一人で帰つちやつて……」

「いや食い下がれよ。一人にするなよ」

「私たちにケガさせない様にして……」

「……それは、まあ……」

確かにそれを言われたら何も返せまい。

「まあ、学校でも様子見てみるよ」

「おう。頼むわ・・・」

バスが来たので千歌達が乗り込んでいった。ちなみに曜は陸が会話に入ってから一言も言葉を発していない。本当にゼロは余計な事をしてくれた。

〈陸。桜内梨子の事なんだが・・・、少し見張っておいた方がいいかもしれないな・・・〉
千歌達を乗せたバスが走り去って行ったのを見て、何かを警戒するような声音のゼロが呟いた。

（お前も心配なのか？）

〈それも無きにしても非ずだが・・・、昨日の彼女の光、リトルスターと見て間違いないな〉
（何だ？ そのリトルスターってのは・・・？）

放課後、陸達は千歌の部屋に来ていた。

スクールアイドル活動の事で話したいことがあると言っていた。何でも曜の衣装案

を披露するとか。

「それで曜ちゃん。衣装の件は……」

「描いてきたよ！」

描かれてなかったらここに来た意味がないので、描いてもらっていないと困る。

「最初はこれ！」

曜は制服とか衣装とかその辺の類が好きなので、いつもに比べてちよつとテンションが高い。今朝陸に見せていたよそよそしい態度などどこへやらで自身が書いた衣装のイラストを見せてきた。

そのイラストは車掌だった。千歌だと思われる少女が車掌服を着て敬礼をしている。

「……衣装と言うより制服だね」

「恋の特急列車、出発進行ー♪とか言ってるそうだな」

「そう言われると思って女性バージョンも描いて来ました！」

曜の言う通り、次に見せてきたイラストは女性警察官だったが……、

「スカートになっただけ……」

「応援しないと逮捕しちゃうぞ☆ってか。つか制服から離れるアホ」

「ならばこれはどうだ！」

三度目。果たして正直となるか。

「武器持ちちゃったよ・・・」

ならなかった。今度は迷彩柄の衣装に身を包んだ千歌が銃を構えているイラスト。さながらサバゲーや特殊部隊のようである。

「あなたのハートを狙い撃ち♡とか言うの？」

〈お前さつきからキモいぞ。何でいちいち声を裏返す〉

(気分だ)

〈あつそ・・・〉

「もつとこう、スクールアイドルっぽいのではないの？」

「あるよー」

四度目。いい加減疲れてきた。

「おぉー・・・」

今度は今までと違った。ホントにアイドルが着ているような華やかな衣装。これならスクールアイドルだと言われても違和感ない。しかし着ているのはまたもや千歌。

(千歌ばつかだなこいつのイラスト・・・)

〈ああ、闇を感じるぜ・・・〉

「凄い！ キラキラしてる！」

「何でハナからこれを出さなかった・・・」

「よし。これで決定！」

「無視すんなー」

ぱたんと曜がスケッチブックを閉じ、千歌が勢いよく立ち上がった。

「後は作曲さえできれば、ダイヤさんもきつと認めてくれるよ！」

「いや、それはどうだろう……」

盛り上がる千歌に、曜が冷静にツッコむ。

「そういう桜内はどうだったんだ？」

作曲という単語で、陸は千歌が梨子をスクールアイドルに誘っていた事を思い出した。

千歌は今朝梨子の様子を見てみると言っていたが、どうだったのだろうか。

「……」

陸がその質問を口にした瞬間、千歌と曜の表情が重苦しくなる。まるで梨子の話題をあえて遠ざけていたような感じだ。

「それが……、桜内さん。今日学校に来なかったんだよね……」

「は……?」

「休む理由も言っていないらしいし、やっぱり昨日の事が……」

へまあ、いきなりウルトラマンの力を得たんだ。無理もない。中には力をひけらかす奴

もいるが・・・、彼女の反応が普通だ

(リトルスター・・・)

今朝のゼロの話によると、梨子の体にはリトルスターという物質が生成されているらしい。

そのリトルスターというのは宿主に何かしらの特殊な能力を授ける効果があり、昨日のあの現象もリトルスターによるものとの事。

判別する方法としては昨日の様に胸が発光したり、手が異様に熱かったりするらしい。思えば始めて梨子と会った時に握った梨子の手が熱かった。もしかしたらあの時から発現の予兆があつたのかもしれない。

ゼロは様々な宇宙人がこのリトルスターを狙っていて、梨子にも何かしらの危険が及ぶ可能性を示唆していた。

〈恐らく力が発動して周りの人間に危害が及ぶことを避けたんだろうが・・・、今学校を休ませるのはかえって危険かもしれないな。周りに人が少なければ宇宙人はより大胆に動く。それに・・・〉

(それに?)

〈リトルスターはカレラン分子という物質が宇宙を循環している幼年期放射を蓄積させて出来る物質なんだが・・・、カレラン分子は本来この宇宙には存在しないものなんだ〉

(は?)

〈別の宇宙で発生したりトルスターは、人為的に散布されたカレラン分子が原因で引き起こされている。それと同じ事が起きてるとしたら——〉

(……この地球にも、誰かが意図的に散布したって事か?)

〈ああ、そういう事になる。事実として桜内梨子はリトルスターを発現させた。もう既に狙われていることは確かだろうよ〉

(仮に……、桜内がリトルスターを狙ってる宇宙人に捕まったらどうなる?)

〈ハッキリとどうなるか断言はできないが……、少なくとも命の保証はないな……〉
(っ……)

ただか数日前、偶然不良から(ゼロが)助けた少女だ。自分とは何の関係もない。

そのはずなのに、何故梨子の命が危険にさらされるのがこんなにも辛く感じるのか。

陸自身にも分からない。が、リトルスターが発現し、何が何なのかもわからず怯える彼女の顔を見てしまったら。

(放っておけるはずないよな……)

〈その通りだ。陸。桜内梨子の家はどこか分かるか?〉

(知らん。最近知り合ったばっかだし、多分千歌達も知らないと思う)

一応微かな希望に望みをかけて聞いては見たが、千歌も曜も梨子の家がどこかは知ら

なかった。

へまずいな。こうしてる間にも桜内——↓

「きやあつ!!」

ゼロが何かを言いかけた瞬間、どこかで聞き覚えのある悲鳴が聞こえた。

(フラグ回収早いな!?)

へいや、まだ桜内梨子だと決まった訳では……、とにかく行くぞ

声が出したのは千歌の部屋を出て右に曲がった方向。恐らくは隣の住民の悲鳴だろう。

悲鳴を聞いた陸が飛び出すと、それに続いて千歌と曜も部屋を飛び出す。

そこで陸達の目に映った者は——

「やっぱ桜内じゃねーか!!」

へなん……だと……

「桜内さん?」

「嘘!? お隣さんだったの?」

確かに千歌の家のお隣さんだったことも驚きだが、もっと驚くべきことが他にある。

注目すべきは梨子のいる部屋の中。

「あ……あ……あ……」

「ダア……ダア……」

怯える梨子の視線の先、黒いニット帽に黒いマスクといかにも怪しい男が梨子に向けて銃を構えていたのだ。

(おいゼロ。あれも宇宙人なのか?)

〈多分な。変身能力を持つている宇宙人も多い〉

「ちよつと、あれヤバいんじゃない?」

「桜内さん!」

三人がこんなことしている間にも、男は一步、また一步と梨子に近づいていく。

「っ! 来ないで!」

「うおっ!」

叫んだ梨子が両手を突き出すと胸が光り出し、波動の様な物が男を吹き飛ばした。

「あれが……」

〈ああ、間違いねえ、リトルスターだ!〉

「ぐ、おお……」

吹き飛ばされた男は壁に激突し、更にその衝撃で柵の上から落ちてきた辞書で頭を強打してその場に倒れ伏してしまった。

〈あの力、サイコキネシスか?〉

『何て力……、これがリトルスターか……』

起き上がった男はもう人間の姿をしていなかった。

バランスの悪そうな大きい釣鐘状の頭、幅の広い唇、大きい頭とは不釣り合いな縞模様
の細い体。

一言でいうと気持ち悪い。夢に出てきそうさ。

「あれはダダ。三面怪人ダダだ」

「うわっ、顔三つある。気持ち悪っ！」

「言ってる場合か！ あいつは前に人間を捕らえて標本を作ろうとしたことがある宇宙
人だぞ」

「何？ そんなヤバイ奴だったのか？」

『その力は厄介だな。少し眠っててもらおうか』

ダダはそう言うのと銃口を梨子に向け、青白い光弾を放った。

「きゃあっつ！ ……うう…。」

「桜内さん！」

光弾を受けた梨子が気を失うとダダは別の銃を取り出し、青白い光を照射した。する
と今度は梨子が小さくなり、そのままカプセルに閉じ込められてしまった。

『待ちやがれっ！』

『ッ！』

陸の体に乗っ取ったゼロがベランダを飛び越えて梨子の部屋へと侵入する。

それを見たダダは慌てて逃げだし、壁をすり抜けて走り去って行ってしまった。

「陸ちゃん！」

「陸！」

『お前らはそこにいろ！』

心配する二人にゼロは強く言い放った後、ダダの後を追うために梨子の部屋を飛び出した。

ゼロが階段を降りると、梨子に似た女性が倒れていた。恐らく梨子の母親で、ダダのあの光弾を食らったのだらう。

『クソツ、どこ行きやがった』

玄関を飛び出し、辺りを見渡すがダダはどこにもいない。

『そういえばアイツ透明化能力もあつたな……』

（はあ？ そんな奴どうやって探すんだよ？）

『ちよつと待て……』

ゼロはウルトラ念力の応用で周辺を探知し、カプセルの様な物を抱えて走っている人影を見つけた。

『あつちだ。行くぞ！』

『おっと、させるか』

『ッ!? シェア!』

謎の声と共に飛んできた光弾をゼロが身軽にかわす。

振り向きざまに声の主をゼロが一蹴すると、そいつも大きく飛びのいてそれをかわした。

一応人型をしているが人間ではない。黒い頭部に赤い目。肩から胸にかけてふさふさとした体毛が生え、白い体の中に赤い斑点がいくつもある。

陸には宇宙人だという事しか分からないが、ゼロには見覚えがあるようだ。

『ナツクル星人……、まためんどくせーのが……』

『奴を追いたくばまず俺を倒すことだな』

『ああつたくもうめんどくせー……。セリフが安っぽいんだよ!』

ゼロとナツクル星人が戦い始めた一方、高海家。陸にそこにいると言われた千歌達だ

が・・・、

「曜ちゃん・・・、どうしよう、桜内さんが・・・。」

「あれって、間違いなく宇宙人だよね・・・、陸も大丈夫かな・・・？」

二人はしばらくの間不安げに互いの顔を見合わせた後、

「行こう！ 桜内さんを助けなきゃ！」

「うん！」

陸及びゼロに待っていると言われたにも関わらず、ダダの後を追うために部屋を飛び出した。

九話 友達だから

『デエヤア!!』

「ぐおうつ・・・」

ゼロの拳がナツクル星人の肝にヒットし、そのままナツクル星人がくず折れた。

『つたく、時間かけさせやがって・・・』

ナツクル星人を倒したゼロは文句と共に再びウルトラ念力で周囲を探索するが、何も怪しい影は探知できない。

『クソツ・・・、奴はもう探知範囲内にいないって事か・・・』

(どうすんだゼロ。桜内が・・・)

『ああわかつてる。こうなりや町中虱潰しにするぞ』

一体何時間かかるか分かったものではないが、実際これしか方法が無いのも事実。早くしなければ梨子がどんな目に遭うか・・・。

『それといくつかマズイ事があるな・・・』

(何がだ?)

『さっきのダダと、今のナツクル星人。本来この二種族に関わりはないはずだ。それが今こうして手を組んでいるとなると、この計画自体がどつかのどつかのかい組織ぐるみで動いている可能性が高い。それにナツクル星人は陸を見て一瞬で俺だと分かっていた。恐らく俺達が一体化していることはもうバレてるんだらうよ』

(つ……………)

陸がゼロだとバレる事。

それは陸だけでなく、陸と関わる周囲の人間にも危害が及ぶ事。

それではゼロと一体化した意味が無くなる。

『とにかく急ぐぞ。奴らが動くのは恐らく夜だ。夜なら多少デカイ宇宙船が飛来しても気付く奴は少ないだろうしな。そうなたら俺達の負けだ』

現在時刻は四時。

時期的に日没は六時頃から、完全に暗くなるのはおよそ七時だ。

タイムリミットは三時間。この間に何としても梨子を見つけなくては。

何も無い内浦だが、想像以上に広い。この中を風潰しに思うと気が遠くなりそうだが、それでもやらない訳にはいかないのだ。

『行くぞ』

(おう)

そうして探し回る事約一時間。いくらゼロの力を使っているとはとは言え、流石に疲れが見え始めた陸の携帯に着信が掛かった。

見てみれば渡辺曜。

「……もしもし?」

『あつ陸? 見つけたよ。桜内さんのいる場所。あの変な宇宙人? も一緒にいる』

ゼロから主導権が切り替わった陸の耳朶に触れた曜のセリフに、凍てつく氷を当てられたような戦慄を覚える。

何と曜はダダの居場所を見つけ出したと言うのだ。

「お前ら……、千歌の家に行っちゃっただろ!」

『ほっとけないよ! それに陸だって勝手に飛び出して言っちゃたでしょ?』

「アホか! 何のために……」

家にいると言ったのはゼロだが、それは陸の本音でもあった。

ダダを追う事で、二人にどんな危険が及ぶか分からない。だから残っていると云ったのに。

「……言い争っても仕方ないか。今どこだ? 千歌も一緒か?」

『うん。場所はちよつと前に潰れた工場の跡——うあつ!』

『曜ちゃん!』

「曜!? 曜!!」

必死に曜の名前を呼ぶが、聞えるのは通話切れのツーツと言っただけ。一体何が……、曜もダダのあの銃に打たれてしまったのか……。

〈行くぞ! 二人があぶねえ! 場所は分かるか?〉

「ああ、大体ここから二十分くらいだ。ゼロ。力を貸してくれ!」

〈あたぼうよ!〉

ゼロの力が宿り、人間の限界を超えた速度で走り出す陸。

「頼む……、間に合ってくれ!」

翳みがかった空の下、陸の切実な呻きが霧散した。

町の外れにある、工場の跡地。

解体工事の最中であるそこは中まで日が差さず、薄闇が支配していた。

千歌と曜は躊躇い気味に足を踏み入れ、先程陸が飛び出していった原因である宇宙人。そしてその宇宙人に捉えられた桜内梨子を見つけ出し、陸に連絡を取ったまでは良かったのだが……。

「曜ちゃん！ 曜ちゃん！」

『まさか見つかるとはな……』

通話の最中で宇宙人に見つかり、曜が青白い光弾を受けて気を失ってしまった。千歌が体を揺さぶるが、目を覚ます気配はない。

『まあいい。丁度人間標本を作ろうと思ってたのだ。あの方がこの星を滅ぼす前に、な……』

宇宙人——、ダダはそう言うのと別の銃を構え、曜にその銃口を向けた。

千歌はその銃に見覚えがある、確か先程梨子を小さくして閉じ込めてしまった銃だ。

「やめろー！」

そう気づくや否や、千歌は恐怖を押し殺してダダに突進した。千歌の体当たりを食らったダダはバランスを崩し、縮小光線は曜を逸れて詰まっていた廃材に当たった。廃材は縮小され、梨子がそうなったように銃に装填されたカプセルの中に吸い込まれていく。

『クソツ、こんなモンコレクションにしても悲しいだけだろー！』

ダダは縮小された廃材が入ったカプセルを開け、廃材を外に放り出した。カプセルから排出された廃材は元のサイズに戻り、ずしんと重い響きで床に落ちる。

(カプセルから出せば元に……、そうだ！ 桜内さんは……)

千歌が捕まった梨子を探そうと辺りを見渡すと、積み上げられた廃材の上に置かれたカプセルを見つけた。

その中には梨子が。

「桜内さん！」

「っ!?! 高海さん!?!」

千歌が名前を呼ぶと、すでに意識を取り戻していた梨子が反応した。ひとまず梨子が無事だった事に安堵しつつ、千歌はカプセルに向かって走り出した。

「待ってて！ 今助けるから！」

『させるか！ スライ様の命令だ！』

駆け出した千歌の肩をダダが掴み、乱暴に投げ飛ばす。

「うあっ！」

「高海さん！」

ずしやあと派手に音を立てながら千歌が転がり、見ていた梨子が悲鳴を上げる。

だが起き上がった千歌は今度はダダへと向かって行った。

『うおっ！ ちよ、辞め、放せ！』

「がうー！」

『痛い痛い嘸むな！ このクソガキ！』

「ぎやうっ……」

千歌は再び投げ飛ばされて地面を転がるが、起き上がるとまたダダに向かつていく。

『おらっ！』

「ああっ！」

『このっ！』

「でっ……」

『おうらっ！』

「う……」

『……』

「くっ！」

『ええい！ しつけえっ！』

「う……あ……」

何度も何度も起き上がったては突進してくる千歌にダダが痺れを切らし、遂に千歌の腹部を蹴り飛ばす。

『全く……、コレクシヨンに傷がついたら困るから少し手加減してやってたら調子に乗りやがって……』

ダダが銃を拾い上げて再び構える。が、千歌はまだ起き上がり、ふらふらになりながらもしつかりと双眸にはダダを捉えている。

「桜内さんを……返せえ……」

「高海さんもうやめて！ 私はいいから逃げて！」

「やだ！」

梨子の言葉を強く否定し、もう何度目かもわからない突進をするが、結果は変わらず地面を転がる事になる。

『娘！ なぜそこまでする！ 何故他人の為に自分を犠牲に出来る？』

あきらめない千歌に徐々に恐怖を覚えてきたダダが千歌に問うと、千歌は屈託なく答えた。

「だって、友達だもん！」

「ツ……」

『友達……、そんな事の為に……、くだらん』

「くだらなくはない!!」

よろよろと傷だらけの足で立ち上がり、千歌らしからぬ鋭い眼光でダダを睨みつけ

た。

「友達なんでもん！ 力になりたいとか、助けたいとか、そう思つて当然だよ！」

「高海さん……」

「だから助けるんだ！ 誰がどう言おうが、絶対絶対助けるんだ！ 桜内さんを……、梨子ちゃんを返せええええ!!」

もう既に満身創痍の体で、なおも力強く吠える。だが叫びに反して限界を迎えている体は言う事を聞かない。何とか前へとは進むが、その足取りは普段の歩行速度よりも遅い。

『だからつて、はいそうですかと返す訳にはいかないんだよ！ 喰らえ!!』

「ああっ！ くあ……」

「ッ！ たかつ……、千歌ちゃん!!」

それを見逃さないダダは千歌に光弾を放ち、それを受けた千歌の体には電撃が走つて気を失つてしまった。

『つたく……、さつさと捕まっておけばいいものを……』

「辞めて！ 二人だけは！」

『黙っている』

「あああ!! う……」

カプセル内に迸った電撃が再び梨子の意識を奪い、静けさがこの場を支配した。

『……人間というのは何故どうもこいつもこいつもさう連中ばかりなのだ……』

ダダはぶつくさ文句を言いながら気を失った千歌に縮小光線を放ち、梨子と同じくカプセルに閉じ込めた。それと同じように曜も捕まってしまう。

『多少計算が狂ったが……、いい標本が二体も手に入った事だ。嬉しい誤算だったな……』

千歌と曜が入ったカプセルを見ながら、表情は一切変えずに愉快そうに笑うダダ。そもそも奴に表情があるかが謎だが。

やがてダダはカプセルやら銃やらの荷物をまとめ始めた。

そんなダダに近づく一つの影が、

『ウルトラマンゼロに居場所はバレているようだし、早めに場所を移すとするか……』

「おっと、それは困るなあ……」

『っ？ 誰だ？』

その影が声を放つと、それに反応したダダが声のする方を振り向く。そこには一人の男がいた。

見た目は普通の地球人と変わりないが、ダダが思わずたじろぐ程の異質さを秘めていた。

「良いねー君……。まさか友達の為にそこまで必死になれるなんて……。ボクは感動したよ。漫画とかアニメでもよくあるけど、やっぱり友情って美しいねー」

その男はかなり軽い口調で話しながらダダの方へと歩み寄っていく。腰から下げたキーホルダー等で力チャカチャと音を鳴らすその姿には全く緊張感がない。

『貴様……。地球人ではないな？ 何者だ？』

その男とは真逆に、警戒心を深めるダダ。それに対し男は、

「お、せーかい。やっぱわかっちゃうかなー？ ボクってそんなに有名人？」

全く緊張感のない声音で答えた。

『ふざけるな！ お前など知らん。この状況でへらへらしている奴が地球人な訳ないだろうー！』

「つまらないなー。もうちよつとノリが良くてもいいと思うよ？」

『うるさい！ 貴様もこの娘たちが目的か？ それともゼロの仲間か？』

「うーん……。どっちでもないけど……。今その子、高海千歌ちゃんだっけ？」

まあ、とにかくその子を手を連れていかれると困っちゃうんだよね。何かゼロ君と関りのある子みたいだし。それにせつかく面白いものが見れそうなんだ」

『やはりゼロの仲間か！ 死ねえ！』

「まあまあ落ち着いて、ボク達会話が出来るんだから。平和的に解決しようよ」

ダダが銃を構えたのにも関わらず、男は一切表情を変えずに歩き続ける。悠々と歩くその姿は、まるで撃たれても問題がないと言っているようだった。

『ぐ………』

ダダの警戒心がますます強くなる。もしかして自分は何かともんでもない奴を相手取っているのではないかという恐怖感がダダを襲う。

『ッ………』

その瞬間、ダダの脳裏に浮かんだのはとある人影だった。

今回自分を地球にけしかけた者が使える邪悪の象徴にして、かつて全宇宙を己が手中に収めようとした帝王。

アレに比べれば、こんなスカした優男などへでもない。

『喰らえっ！』

覚悟を決めて、ダダは男に向けた銃を構えなおし、トリガーを引いた。

その刹那銃口から電撃弾が放たれた。その電撃弾は真っ直ぐと男に向かっていく。

「ふっ………」

だがダダの不安が的中するように、男は得意げな顔をしてそれをかわそうともしない。
い。

それを見たダダが諦めて銃を下げるのと同時に、電撃弾は男に着弾し——、

「ぎゃああああああああああ!!」

バリバリと男の体に電撃が迸り、千歌達よりも派手に悲鳴を上げた。

そして――、

「おっふ．．．．．」

男はビクビク体を痙攣させた後、情けない声を漏らしてその場に倒れ伏した。

『．．．．．はっ?』

失われていたはずの静寂が再び訪れ、ダダはしばらく何が起こったのか分からずに呆然と目の前の光景を眺める。

その後目の前で起こった事を認識し、銃を構えたまま硬直して脂汗を垂らした。

目の前には自信ありげに登場しておいて結局電撃弾一発でやられ、無様に地を舐めている謎の男の姿が。

『え．．．．．? あれ? 何? この状況．．．．．』

これで正しかったのか分からなくなり答えを求めて周囲を見渡すが、いるのは先ほど捕らえた三人の娘。全員気を失っているので当然答えなんか返ってこない。

「アハハ．．．．．、結構やるねえ．．．君．．．」

ようやく電撃のダメージから回復したらしい男が起き上がろうとして．．．、結局起き上がれずに再び倒れる。気を失っていない所を見ると、やはり地球人ではない様だ。

『え．．．、ちよ、どうしたらいいのコレ．．．?』

もはや誰が一番可哀想なのか分からなくなっているこの状況。だがその空気を打ち破る者がいた。

その者は、

『お前等！ 無事か!?!』

ようやく廃工場にたどり着いた、仙道陸とウルトラマンゼロだった。

十話 ナックル・リベンジ

『……なんだ、この状況……』

薄暗い廃工場の中、ようやくたどり着いた陸とゼロの眼前には、困っているダダと身体から煙を上げながら倒れている謎の男がいた。

ダダはともかく、倒れている方は一体……。見た感じ陸と年齢は同じくらいだろうか、容姿もこれといった特徴はなく、どこにでもいそうな男である。

そんな謎の存在がボロボロになって倒れ、その真前でダダがオロオロとしている。状況が全く飲み込めない二人の目に映ったのは、ダダが抱えている三つのカプセル。

その中には先ほど捕まった梨子だけでなく、千歌と曜までいた。しかも三人とも気を失っている。

「千歌達に何しやがった!」

明らかかな敵意を滲ませた陸がダダに向かって吠えるが、ダダは全く意に介す様子もなく、構えた銃と倒れた男を交互に見返している。そもそも陸の事に気付いていない様だ。

「やーやー久々じゃないか、ゼロくん。あと、仙道陸君だっけ」

先に陸の存在に気付いたのは倒れている謎の男だった。しかもその男、陸の名前を呼んだだけでなく、何と陸に向かってゼロ君と言って来た。

なんとこの男、ゼロが陸と一体化していることを知っているようだった。

「久々に会っておいて悪いんだけど、助けてくれない？ ボク見ての通りこんなだからさー」

『誰と話して．．．、あつ、ウルトラマンゼロ!!』

男のおかげでようやく陸の存在に気付いたダダが陸に向かって銃口を向けてくる。普通に陸をウルトラマンゼロと言ってくるあたり、もう既に敵さんには陸とゼロの事はバレているのだろう。となると、陸とゼロの事を知っていたこの男もダダの仲間なのだろうか。とてもそんな雰囲気には見えないが。

『喰らえッ!』

『おっと』

ダダが光弾を放つが、瞬時に陸と人格を入れ替えたゼロがそれを片手で防ぐ。どうやら入れかわると耐久力も変わるらしい。もし陸のままあんなもの受けたら一発で気失うだろう。

『俺に勝とうだなんて．．．、二万年早いぜ!!』

一瞬でゼロがダダとの距離を詰め、ダダの大きい顔面に掌底を叩き込んだ。

『ぐおっ……』

『まだまだあ!』

右ストレート、踵落とし、左フック、頭突き、回し蹴り、右ストレート(二回目)、飛び蹴りと、流れるように攻撃を繰り返すゼロに、ダダはなす術もない。

『アエエエエエヤアアアアア!!』

『ガビツ……!』

ダダの三つの顔を蹴り飛ばした後、トドメにゼロが放った右ストレート(三回目)がダダの鳩尾を捉え、派手にダダが吹っ飛んでいく。

吹っ飛んだ先に積まれてあった廃材に突っ込み、その下敷きになったダダはがくりと地面に頭を落とした。

(え……? こんなんで終わったの?)

『ああ、ダダは武器がなければ最弱の部類だからな。やろうと思えば地球人でも勝てる。さて、あとは……』

ダダを倒したゼロは三人が閉じ込められたカプセルを回収することなく、黒焦げになって地を舐めている男の頭を掴んだ。

『おいお前。一体何モンだ。何で俺と陸の事を知っている? さっきの奴の仲間って訳

じやなさそうだが・・・、正体教えてもらおうか』

ドスを利かせた声で男を睨みつけるゼロの姿は不良そのもので、ホントにこいつは正義の味方なのだろうかと疑ってしまう。

しかし男は全く怯む様子もなく、むしろ笑顔でゼロと顔を突き合わせている。

「やあゼロ君。さつきも言ったけど久しぶりだね?」

どうやらこの男、陸というよりはゼロに面識があるようだ。

『・・・・・・・・誰だお前・・・・・・・・』

しかしゼロには覚えがないようだ。

「えー! 酷いじゃないかゼロ君。親友の顔を忘れるなんてー!」

『俺に親友がいるかどうかは置いておいて・・・・・・・・、その顔はマジで見覚えがねえな』

「ん? あ、ごめんごめん。人間態の姿じゃ見覚え無くて当然か。こつちに戻らないと

ね」

そう言うと男は青い魔人のような姿に変化した。どことなくウルトラマンを思わせるヒロイックな外見で、つり上がった赤い目が特徴だ。ウルトラマンで言うカラータイマーにあたる部分の切られたような傷がある。

その姿にはゼロも見覚えがあったようだ。

『オウガか・・・・・・・・』

『せーかい！ さっすがボクの親友！』

『いや、別にお前と親友になった覚えはない……』

喜んだと思つたら今度はわざとらしくがびんと声に出して落ち込んだ。何なんだこいつは。

(おいゼロ……。お前の知り合いなのか?)

状況についていけない陸が少しでも情報を得ようとゼロに問いかける。

『……あー、えーつと、俺のストーカーみたいなものだ。行く先々に現れやがるゴキブリみてーな奴』

(ウルトラマンにもストーカーってつくのか……)

『ちよつと、ゴキブリなんて酷いじゃないか？ ボクら友達だろ?』

(つて言ってるけど?)

『仮にこんなのが友達なら死んでもいい……』

えらく疲弊した声音のゼロ。過去に一体何があつたのやら。

「とにかく、君が来て彼女たちも助かつたみたいだし、そろそろおさらばしようかな。時間稼いだんだから感謝してくれよ?」

オウガと呼ばれたそいつは再び人間の姿に戻ると、影に溶け込むようにして消えていった。

(なんだったんだアイツ)

『オウガつつー、知り合いというか顔見知りというか……、二百年位前に会った時からずっと俺に絡んでくるよく分かんねー奴でよ。まあ、悪い奴ではないんだが……とにかくめんどくさいんだわ』

そりゃ、二百年も付きまとわれたら誰だつて気が滅入るだろう。

『前クライシスインプアクトが起きた宇宙に行った時から付き纏われなくなつたんだが、まさかこの宇宙にいたとはな。一体何が目的で……』

ゼロは気付いていない様だが、陸は見てしまった。オウガの両手から下げてあつた紙袋に入った、大量のアニメグッズを。

恐らくだが、あれが目的でこの地球に来ていたのだろう。

(別の星から見た地球つてどうなつてんだ……)

『あ? どうかしたか?』

(いや、何でもない。さつさと行くぞ)

ゼロから主導権を奪い返した陸は、三人の入つたカプセルを拾い上げた。三人とも氣を失つたままなので、先程の陸達の会話は聞かれていないだろう。

「しかし体を小さくするつて、宇宙人の科学技術はどうなつてんだよ……」

〈別に普通だろ。細胞を縮小すりゃあいだけだしな。俺だつてできるぞ〉

「チート野郎のウルトラマンには聞いてない。それよりこれ元に戻るんだろうな」
へ安心しろ。カプセルから出せば元のサイズに戻る。ここで解放すると運ぶのが大変だから一度千歌の家に戻ってそこで出してやろう」

「だな——」

ゼロの提案に乗って高海家に戻ろうとすると、地震のような地響きが陸達を襲った。半端に解体工事の進んだこの建物は大きく揺れ、今にも崩れてしまいそうである。

『どこだあ！ ウルトラマンゼロオオオオオオオ！』

怒号と共に、再度地面が大きく揺れる。

外に出て確認してみると、さっきゼロが倒したナックル星人が巨大化して地団駄を踏んでいた。

へあの野郎。もう復活しやがったのか？」

「おいどうすんだ。アイツ如何にも怒り心頭って感じだけど。行かねーと何しだすか分かんねーそ」

へつーかやられて逆切れするって子供かあのヤロー。とりあえず、一旦こいつらを安全な場所に——」

ゼロがそう提案した瞬間、ナックル星人が近くにあった民家を蹴り飛ばした。

『出て来いウルトラマンゼロ！ 早く来ないと分かつているな！』

幸いあの民家は空き家になっていた為怪我人はいないだろうが、その内ナツクル星人が人のいる建物を蹴り飛ばすのも時間の問題だろう。

「そんな時間ないみたいだな」

脂汗を垂らしながら陸が呟くと、目の前にウルトラゼロアイが出現した。

「……仕方ねえ、行くぞ」

「ああ、でもちよつと待つてくれ……」

ウルトラゼロアイを手にとると陸は一旦それをポケットにしまい、抱えていたカプセルから三人を解放した。

曜と梨子に目立った怪我はないようだが、千歌は制服も汚れ、膝も傷だらけだった。

「……何があつたんだか」

「気になるけどが全部後だ。さっさとアイツをぶつ飛ばすぞ」

「当然」

近くの木陰に三人を寝かせると、陸はウルトラゼロアイを装着した。

「ゲエヤア!!」

『ウルトラゼロキック!!』

『あがつ!!』

変身と共にナックル星人に炎を纏った剛脚をかましたゼロ。立て続けに拳にも炎を纏い、ナックル星人の首にチョップを叩き込む。

『ビックバンゼロ!!』

『がはッ! 熱っ、熱ッ!』

胸部の毛に炎が燃え移り、必死にそれを消そうとするナックル星人を今度は回し蹴りで吹っ飛ばす。

『ツ……、やりたい放題やりやがって……、おいゼロ。貴様俺の仲間、バンデロの事は覚えているか?』

よろよろと起き上がり、ようやく胸の炎の消火を終えたいらしいナックル星人がゼロを指さした。

『バンデロ? ああ、あの戦争商人か。テメエ、バンデロの仲間なのか?』

ゼロの問いに、ナックル星人はこくりと首肯した。

『俺はアイツと商人タツグを組んでいる最中に奴を失った、聞いてみればお前がやったらしいじゃないか』

『けっ、仲間の仇討ちってか……、元戦争商人と聞いたら見逃す訳にはいかなかったな』

『ほざけ、消えるのは貴様だウルトラマンゼロ』

そう言ったナツクル星人は、胸元から何かを取り出した。

『それはっ……』

人間の手のひらサイズの、小さな怪獣の人形。あれで一体何をしようというのだろうか。

『はっ！』

ナツクル星人がその人形を宙に放り投げ、いつの間にか手に持っていた銃でそれを撃った。銃からは黒い稲妻のような光が発射され、その人形に吸収されていく。

『何でテメエがダークサンダーエナジーを……、どこで手に入れた！』

『バンデロがやられた後、貴様への復讐に使えないかとわざわざ時空移動して入手してきたのだよ。X i o はブラックサンダーエナジーのサンプルを持っていたからな。』

『い、このスパークドールズもな』

『エックスと大地のヤロオ……、ちゃんと管理しておけよ！』

(何言ってるんだこいつ等……)

完全に陸が蚊帳の外になっている中、ダークサンダーエナジーとやらを浴びたその人形が光を放ち始めた。

『さあ現れよ。ブラックキング!!』

ナックル星人が声を張り上げると共に光が止み、先程までいなかった怪獣がゼロの目に現れた。

『グルガウウウウウ!』

全身が黒く、鋭い金色の牙と爪、頭部にある同じく金色の角が特徴で、何とか怪獣らしい怪獣だった。

『ゼロ。貴様には覚えがあるはずだ。かつてバンデロと共に貴様、そしてウルトラマンエックスと戦ったこいつがなあ!』

『っ! あの時と同じ個体か……。そういやエックスは怪獣をスパークドールズに封印する力があるんだっただな……。だがグリーザを倒す時にこいつはエックスと大地に力を貸した。今更テメエなんかに——』

『馬鹿め! 何のためにダークサンダーエナジーを浴びせたと思ってる? 凶暴化させるために決まっているだろう! さあ行けブラックキング! バンデロの敵討ちだ!』

『グルガウウウウウウウウウウ!!』

ナツクル星人の指示で、ブラックキングが咆哮をまき散らしながらゼロに向かって突進を始めた。

『凶暴化してもそつちの言う事は聞くのな……。デエヤア!』

ゼロはファイティングポーズを取った後、ブラックキングにもウルトラゼロキックで突っ込む、が、

『ガアアアアアッ!』

『ッ! うおっ』

ブラックキングの強靱な腕に阻まれ、逆に吹き飛ばされてしまう。

『がはッ!』

吹き飛ばされて地面を転がるゼロに、今度はブラックキングが吐いた炎が襲いかかる。

「あっちっ! ゼロ、大丈夫か?」

『まだこの程度問題じゃねえ……、行くぞ!』

ゼロインソードを構え、ゼロがブラックキングの懐まで肉薄する。その勢いのままブラックキングの腹部を切りかかるが、大した効果は見られない。

『クソッ、かてえ……』

「来るぞー」

振るわれた剛腕をかわし、今度は足元に切りかかると、ようやくブラックキングがフランスを崩して転倒した。

ブラックキングの巨体に掴みかかり、力任せに遠くへと投げ飛ばす。

『決めるぜ!! ワイドゼロ——』

『誰か忘れていないかな?』

ナックル星人が光線を打ち込もうとしたゼロの横腹を、さっきのお返しだと言わんばかりに蹴り飛ばす。

『ごあつ……』

ブラックキングに意識が向いていたゼロはまともに受け身も取れずに吹き飛ばされる。起き上がろうとすると、ブラックキングの吐いた追撃の業火がゼロの背中を燃やした。

『があああああああ!!』

「ぐ……、あ……。背中が焼ける……」

ゼロが受けたダメージは一体化している陸にも伝わる。ゼロ程酷いダメージは受けないが、あんな炎を喰らえば火傷ぐらいするのだ。

『こいつあ……、ちよつとやべえかもな……』

柄にもなく弱気な事を吐くゼロ。まだゼロと共に戦うのは二回目の陸でも、この状況が劣勢なのはわかる。

『ああクソッ、何で弱体化しちまったんだ俺はああああ!!』

言ったところで解決するはずもない文句をぼやきながら、ゼロは二体の敵に突っ込んでいった。

十一話 守り抜く力

「ん．．．．．」

周囲に響く地響きの音で、梨子は目を覚ました。

顔を上げて地響きの震源を探ると、二人の巨人と黒い怪獣が戦っていた。内一体は、前に怪獣を倒してくれたあの青い巨人だ。

（あれ．．．？ 私．．．）

確か自分は突然現れた宇宙人に捕まって、それで．．．．．。

「二人は．．．？」

気を失うまでに何があつたかを思い出し、助けに来てくれた二人の姿を探す。

二人は梨子のすぐ近くにいた。二人共気を失っているし、千歌に関しては体も服もボロボロだが、二人共無事なようだ。

「ほんと．．．．．、変な人．．．」

眠っている千歌を見つめ、彼女の三つ編みを優しく撫でる。

触れた梨子の手に少し反応した彼女は、梨子の言葉の通り本当に変な人だ。

でも悪い意味じゃない。それだけは胸を張って言える。

『グルガウウウウウウウウウウウウウウウウウ!!』

「ッ！」

怪物が轟かせた咆哮を聞いて、この場所も安全ではない事を悟った梨子は慌てて二人を起こす。

「二人共！ 起きて！」

「ん．．．．．あれ．．．？」

「．．．．．ああ」

身体を揺さぶると曜はすぐ起きたが、千歌はまだ瞼を閉じたままだ。まるで休日の父親の様子にも見える。

「んにや．．．、おはよ．．．、梨子ちゃん．．．」

陸や曜から寝坊助とは聞いていたが、こんな時にもそれは健在だなんて。

「早く起きないと大変よ．．．？．．．．．千歌ちゃん」

どこか安心感を覚えながら、梨子は彼女の名前を呼んだ。

『がつ、はっ……』

ナツクル星人の額から出た光弾、ブラックキングの吐いた炎と双方を連続で喰らったゼロがその場で膝を折る。

「くそ……、二対一とか卑怯だろ……」

『それがナツクル星人の戦い方だ。文句言っても仕方ねーよ……。まずはナツクル星人の方から何とかするぞ』

ゼロが地面に拳を叩きつけてナツクル星人に向かっていくが、その間意識していないブラックキングの尾によって体を打ち付けられる。

かといってブラックキングを狙えば、今度はナツクル星人の攻撃が飛んでくる。

ハッキリ言って状況は最悪と言ってよかった。

『はあっ!!』

『グルガウウウウウウウウウウウウウウ!!』

『ぐああああああああ!!』

二体の合体光線を受けたゼロが吹き飛ばされ、同時に胸のカラータイマーが赤く点滅を始めた。

『が………、あ………』

『なんだこれ………、苦し………』

力が入らなくなり、よろよろと立ち上がるゼロをナツクル星人が蹴り飛ばす。

『ははっ、いい気味だな。ウルトラマンゼロ』

倒れ伏すゼロをナツクル星人が嘲笑い、追い打ちと言わんばかりに背中を踏みつける。

『ごあつ………』

『ブラックキング!』

ぱちんと指を鳴らして指示を出すと、後方でブラックキングが唸りだした。

その口には焰が溢れ、ナツクル星人がゼロに止めを刺そうとしている事がひしひしと伝わる。

だが、

「おいゼロ、あれ!」

『っ………』

陸はブラックキングの視線がゼロに向いていない事に気が付いた。

その視線はゼロの後方。戦うゼロ達から遠ざかる様にして走る三人の少女が。それを見て、陸は今朝ゼロが言っていた事を思い出した。

リトルスターは、怪獣を呼び寄せる性質がある。

まさか狙いは梨子か？

『ふっ、丁度いい。ダダが失敗した際はリトルスター発現者の抹殺という命だったからな。先にあの娘を消し飛ばしてくれ。ははは……』

ナツクル星人もそれに気付いたらしく。意地悪く哄笑を始めた。

『待て！ 辞めろ！』

『だったら止めてみるんだな。さあやれ、ブラックキングウウウウウ!!』

「そういえば、私達捕まってたんだよね？ 誰が助けてくれたんだろ？」

戦うウルトラマンゼロ、ナツクル星人、ブラックキングを背に、なるべく遠くへと行くために三人は走る。

そんな中曜が口にした疑問に、梨子が首を傾げる。

「私も気づいたらあそこに倒れてたんだよね」

走りながら梨子が答えた。

梨子も気になっていたので。一発で人を気絶させてしまうような銃を使うあの宇宙人を、一体誰が倒して梨子たちを助けてくれたのか。

「陸ちゃんだよ」

首を傾げる二人に、千歌が答えた。

「ほら。これ」

そうやって千歌が見せてきたのは、手帳だった。シンプルなデザインのもの、生徒手帳。「これ、陸ちゃんのですよ？ しつかり仙道陸って書いてあるし。そもそもこんな時に助けてくれる人なんて陸ちゃんぐらいしかいないよー」

恐らく陸が落としていった物であろうそれを見て、曜も納得したように頷いた。

「そういえば私陸に電話したっけ、途中で気絶しちゃったけど……、でも来てく

れたんだ」

「そっか、仙道君が……」

仙道陸。

数日前に初めて会って、その時に不良に絡まれていた梨子を助けてくれた人。

たまに人が変わったように目の色が変わるけど、基本的には優しい男の子で、千歌の様に不思議な人。

「そういえば陸は？ 何で一緒じゃないんだろう？」

「そうだ陸ちゃん……陸ちゃん！ どこー？」

助けてくれたはずの陸がいない事に気付き、千歌が今逃げてきた方向に向かって走り出した。

「千歌ちゃん待って！ そっちは！」

「でも陸ちゃんが……」

曜が千歌の手を掴んで引き留めるが、千歌はそれを振り払ってでも陸を探しに行こうとする。

すぐ目の前で戦っている巨人が、陸だとも知らずに。

「陸なら大丈夫だよ。きつと助けを呼びに行ってるんだって……」

曜の表情はとてもそんな事思っている様なものではなかったが、千歌もそれを見て冷

静さを取り戻す。

「そうだよね……。きつと……。」

曜の言葉で、千歌も今戻ったところで何も出来ない事が分かったのだろう。

先程まで三人が倒れていた場所は既にブラックキングに踏みつぶされている。仮に陸があつて近くにいたとしてももう――、

「とにかく行くかう？ 仙道君だつてきつと……。」

一瞬でも陸の死を想像してしまつた梨子は、ぶんぶんと頭を振つて縁起でもない想像を振り払つてまた走り出そうとするが……、

自分たちの終末を告げる様な光景が、目に移つてしまつた。

「梨子ちゃん？ どうかしたの？」

梨子の様子がおかしい事に気付いた千歌が、梨子の見つめる先を自らも見て、同じように固まつてしまう。

「うそ……、え、こつち……？」

曜も気付いたらしく、震えながらその場で足を止めてしまう。

三人の視線の先には、自分達を見つめながら口に炎を溜めているブラックキングの姿が。

その巨大な凶体もこちらを向いているので、狙いが自分達である事は明らかだろう。

「と、とにかく逃げ……」

『グルガアアアアアアアアアアアア!』

千歌が二人の手を取って走り出そうとした瞬間、ブラツクキングが放った火球が三人を照らした。

「あ……」

じわじわと襲い来る熱量が強くなっていくことを感じながら、梨子は諦めを含んだ声を漏らした。

自分が捕まったから千歌と曜は自分を助けに来て、そのせいで二人が……。

「ごめんね……」

声に出していたかも分からない謝罪のあと、梨子はそつと目を閉じた。

きつと恨まれているだろうな、そんな事を考えながら、業火に焼かれるその時を待つが、一向にその瞬間は訪れなかった。

「……?」

訝しく思つて恐る恐る目を開くと、そこには千歌も曜もちやんと生きて立っていた。

ただ二人共、呆然と何かを見ているだけで……。

梨子も二人のようにそちらを見るとそこには——、

『が……あ……』

自分達を庇うように腕を広げ、肩で息をしている青い巨人の姿が。

巨人の背中から焦げた煙が上がっているのを見るあたり、あの炎から自分たちを守ってくれたのはあの巨人らしい。

青かった胸のランプはいつの間には赤く点滅を始め、巨人自身も苦しそう見える。

『ははははははははっ！』

『ゴアアアアア！』

『ぐおっ………っ………』

続けて飛んでくる火球や光弾を巨人はかわそうともせず、全てをその背中で受け止めていた。一瞬よろめいて倒れかかったが、またすぐに三人を庇うように体勢を立て直す。

『おいお前等………、ぼさっとしてねえでさっさと逃げろ………』

巨人が呻くように吐き出したその声は、どうやら三人に対するものらしい。

『が………』

隣で、千歌が口を開いた。

「頑張つて!!」

千歌は声を張り上げ、自分達を庇う巨人の応援を始めたのだ。

『何やってんだ………、早く逃げろっ！』

巨人が説得しようとするが千歌は応援を辞めない。

「そうだよ。がんばれー!!」

そして曜も、千歌に続くように巨人の応援を始めたのだ。

『お前等……』

『ふっ……、応援などくだらん』

千歌達に見せつけるように、ナツクル星人が巨人の背中を蹴り上げた。

『ごあつ……』

『貴様らウルトラ戦士は皆そうだな。そうやって小さい命すらも見逃せず、身を挺してまで助けてしまう。そこが貴様らの弱点だ。何故人間の味方をする？ 何故そんなつまらない生き物を守る』

『うるせえ!』

巨人が庇った三人を、いや、人間そのものを心底蔑むナツクル星人をその巨人が一括した。

『……つまるもつまらないもねえ……、そこに救える命があるから救う。……そんな事当たり前だ。……命の価値に、大きいも小さいもねえんだよ!! 何で……そんな事も分かんねえんだ!!』

巨人がそう言い放った後、梨子が目を見開いた。

自分は、この巨人の事を少し誤解していたのかもしれない。

六年前だ。梨子の住んでいる秋葉原に、巨大な怪獣が現れたのは。

大切なものを全て奪っていくように町を蹂躪しながら行進するその怪獣を見て、幼かった梨子はずっと震えていた。

命なんて、まるで元々無かったかのように容易く消えていって。

あの事があったから、梨子は味方であるはずのこの巨人もいまいち信用できないのだ。

その内、その強大な力が自分達に向けられるのではないかと。

……なんて浅はかな、失礼な考えだったのだろうか。

あの巨人は命の尊さを知っている。その考えを蔑まれてもなお、意思を曲げずに自分たちを守ってくれている。

だから二人も、逃げずに巨人を応援しているのだろう。

「が……れ……れ……」

こんな応援が巨人の力になるかなんて分からない。

でも、

負けて欲しくない。自分の身を投げ打つてでも自分達を救おうとするこの巨人が、やられていいはずがない。

「がんば．．．れ．．．」

いや、力なんて届かなくなっちゃっていい。

元々届けられる力なんてない。仮にあつたところで、そんなものこの巨人にとつては小さなものだ。

でも、それでも。

この想いくらいは、届いて欲しい。

心優しく、力強く、——ちよつと前に別の出会い方をしたような気がするあの巨人に。

だから、

(届いて．．．．．)

「頑張つてええっ!」

初めて声にして、張り上げた。梨子の巨人への願い。

その願いに呼応するように、梨子の胸が光り出した。

『．．．．．リトルスターが．．．』

『何っ!?!』

「梨子ちゃん．．．?」

「その光．．．、前の．．．」

光は梨子の胸を離れ、その想いを乗せるようにゼロの元へと飛んでいく。

『ツ！』

その光、リトルスターが巨人の胸のランプに吸い込まれたその瞬間。

巨人の体が、青く輝き出した。

『これは……』

「ゼロ……？ 一体何が起こってんだ？ リトルスターが……」

梨子のリトルスターがゼロのカラータイマーから吸収された瞬間、ゼロの身体が光り出した。

青く、包み込むような優しい光。

ナツクル星人とブラックキングも、攻撃する事を忘れてその光を眺めている。

——仲間を支え、守り抜く力……ルナミラクル。

頭の中に、そんな声が響いた。

『この感じ……サイコキネシス……超能力……？ ツ！ まさか！』

何かに気付いたようにゼロが立ち上がる。

『守り抜く力……、デエヤア!!』

ゼロが叫ぶと光がゼロを包み、その姿が変わっていく。

ハープの様な音の後光が弾け、姿を現したゼロの姿は青かった。

元の赤と青のツートンカラーではない、赤かった部分も青く染まっている。青色の濃淡が下半身と上半身で微妙に違う肉体に、銀色のラインが走ったその姿。

ゼロと一体化している陸の頭に、その姿の情報が流れ込んでくる。

ウルトラマンダイナミラクルタイプと、ウルトラマンコスモスルナモードの力を得、

超能力や素早さの上がる、ゼロの強化形態。その名も、

『ルナミラクルゼロッ!』

『な……、何だと……』

ナツクル星人が一步退いた刹那、ゼロが一瞬でブラックキングに肉薄し、連続で張り手を叩き込む。

威力こそ大したことはないが、前のゼロとは比べ物にならない速度で叩き込まれる張

り手にブラックキングは翻弄される。

やがてゼロは高速でブラックキングの周りを旋回し、ついで来ようとしたブラックキングが目を回した瞬間に右手を突き出した。

『フルムーンウェーブ』

普段よりも落ち着きのある声でゼロが放ったその光は、泡の様にブラックキングを包み込んでいく。

全ての泡が無くなり、現れたブラックキングの姿は始め見た小さな人形に戻っていた、ダークサンダーエナジーとやらは消えたらしい。

『な．．．、な．．．』

ブラックキングが消え、形勢が一気にひっくり返ったナツクル星人は途端に狼狽えだし、尻尾を巻いてゼロから逃げ出していく。先程までの余裕は一体どこへ行ったのやら。

『逃がさん』

またもや一瞬でナツクル星人の懐に潜り込んだゼロは、ナツクル星人の腹にそつと右掌を当てた。

『レボリウムスマッシュ』

『ツ．．．、あああああああつ！』

ゼロの右掌から放たれた衝撃波でナツクル星人が天高く吹き飛んでいく。

『ナツクル星人。お前は言ったな？ 何故人間の味方をするよ』

『……ああつ、何故つ？ 貴様らは人間に寄り添う……？ 人間などと言うつまらない生き物をつ……何故、守る……？』

衝撃波に苦しむナツクル星人が絞り出した声に、淡白にゼロが答える。

『別に理由なんてねえよ』

ゼロは青く染まったゼロスラッガーを光で無数に生成し始めた。

『………、なんだと……？』

『俺よりずっと前、親父の頃も、その前も、ずっと昔からそうやって来た』

無数のゼロスラッガーがゼロの周りで渦を巻いて回転を始める。

『俺達と人間は共に生きる。ただ、それだけの事だつ！』

解き放たれた無数のゼロスラッガー、ミラクルゼロスラッガーがナツクル星人の全身を切り裂いていく。迸る紅に夕日が差し、ゼロの体が再び光る。

『がああ……、おのれウルトラマンゼロオオオオオオオ！』

『ふんっ！』

ゼロが通常形態に戻り、今度はゼロツインソードを構え、ナツクル星人へと向かって地面を蹴り、猛スピードで懐まで突っ込んでいく。

『テメエが人間の価値を語るなんざ．．．．、二万年早いぜっ!!』
『ぐあああああああああつ!!』

プラズマスパークスラッシュを喰らったナツクル星人が爆散し、見ていた三人の少女が歓声を上げた。

『．．．．．まさか俺の力がリトルスターで復活するとは．．．．．』

ありがとうと叫ぶ三人の少女を見つめながら、ゼロは夕日に溶け込んでいった。

十二話 転校生は捕まえた

『ダダは失敗してしまいましたか……』

ダダの梨子誘拐作戦が失敗したという報告を聞いたその影が小さく息を漏らした。

『つか誰だよナツクルちゃん向かわせた奴。完全に私怨に走ってたじゃねーか』

『ブツラクサンダーエナジーを所持していたから使えると思っただが……』

『お前か』

『ウウウウウウウ』

『タツグとは吾輩たちのような物を言うのだ。あんな紛い物をタツグとは言わん。……』

それよりどうする？ ゼロの能力も一つとは言え復活してしまった。またリトルス

ターがゼロの手に渡るなら、奴がどのようになるのか予想もつかんぞ』

『ストロングコロナ……、ストロングコロナの復活だけは……』

『あー、そーいやお前俺らの中で一人だけゼロにやられてるもんな』

『ウウウウウウウ』

ここに集うのは、形は違えど皆ゼロに恨みを持つ者。

一人はゼロに倒され、残りはゼロに自分達の道を潰された者。

『それは言うなど言っただろう！ ていうか何で誰も助けてくれなかった！』

『いやー、一人でいけるって言っただの、お前じゃん』

『ウウウウウウウ』

『吾輩ならばあの様な失敗はしなかったぞ』

『お前はただ暴れるだけだろ脳筋が！』

『まー、確かにあの作戦はちよつとあれだったよな』

『お前もか！ 黙ってるこのチンピラ！』

『ウウウウウウウ』

『お前に至ってはなんて言ってるのか分からん！』

四人が口論を始めたのを見て、一人が額に手を当てた。

『全くまとまりがない・・・、陛下が見たらなんと仰るか・・・、ダメだ期待できない』

結局苦勞するのはいつも自分だと悟った彼は、目の前でモニターを展開した。

『さて、どうしましょうか・・・』

モニターに映るのは、自分達の所持している怪獣の力が秘められたカプセルが幾つも

映っている。

『我々が求めるリトルスターが発現するまで気長に待ちましょう……。それ以外は……。今度こそ始末という事で……。』

四人が言い争う中、その声はやたら邪悪に響いた。

「え？ 嘘？ マジ……………？」

「うん！」

「ホントに？」

「やった！」

翌日。

いつもの様にバスに來た陸と曜に告げられたのは、梨子が作曲をやってくれるというものだった。スクールアイドルはやってくれないにしろ、作曲をしてくれるだけで千歌達には大助かりだろう。少なくともこれで卒業まで作曲の勉強をするという事は無くなった。

「え？ 桜内？ 一体どういう風の吹き回しだ？ 千歌に弱みでも握られたか？」

「どーいうことさ！」

千歌がぼしんと陸の背中を叩き、陸が悶え始める。

「お……お……」

「あ……背中火傷してるんだね……、ゴメン助けてくれたのに」

「いや、気にせんでいい……」

昨日三人の元に戻った陸を待っていたのは泣きじやくる幼馴染の抱擁と、背後に回された手もたらす激痛だった。

昨日の戦闘で散々背中に光弾やら焰やらを喰らったせいで、今陸の背中は広範囲にわたって火傷を追っているのだ。ダメージのほとんどはゼロが受けてくれているとはいえ、多少は陸にもダメージは来る、むしろあんだだけやられて火傷だけで済んでいる方がすごい。

だが千歌達はその背中への火傷をダダとの戦闘で負ったものだと思っっているらしく、陸

が助けてくれたと思っっていることもあって昨日から若干過保護気味である。

確かに助けたのは陸だが、その正体は陸の体に乗っ取ったゼロだし、そもそもゼロが強すぎて開幕ノーダメージの終始ワンサイドゲームだったのでその時に怪我なんて追っていない。

へしかし凄かったな昨日のこいつ等。目真っ赤に腫らしてよ。大事にされてんだなお前

(らしいな。今度から心配かけねえように変身しないと)

へほぼ無理と断言できるが……、まあ頑張れ……

痛む背中を抑えながら陸は起き上がると、再び梨子の方を見た。

ゼロが言うには梨子の体からリトルスターは消え、もう怪獣に狙われる心配はないとの事。

どういう原理かは分からないが、梨子のリトルスターが受け渡されて、ゼロの失われた能力が復活したらしい。

まだ誰にリトルスターが眠っているか分からないからこの先も警戒が必要との事だが、梨子に関しては本人も気にしていない様だし、これで一件落着か。

「で？ 冗談はさておき真相は？」

「まあ、ちよつと、ね？ 千歌ちゃん」

梨子は少し頬を赤らめて千歌の方を見た。それに対して千歌も笑い返す。

そういうえば互いに名前で呼び合ってるし、陸が見ていない内に何があったのやら。曜もそれを見て微笑んでいる。

事の真相が分からないのは、陸だけらしい。

「とにかくこれで曲が作れるよ。いい曲作ってねー梨子ちゃん」

「早速他人任せかお前」

「まあ、いいけど」

「いいんかい」

「じゃあ、早速詞を頂戴？」

しばらくの沈黙の後、

「詞？」

それでその日の放課後。

曲作りに必要な詞を千歌達が作っていなかったもので、陸達は急遽十千万に集まり、四人で作詞をすることになった。

「え？　ここ旅館じゃ・・・」

「そーだよ。ウチ旅館やつてるんだー」

「ここなら時間を気にしないで作詞に集中できるよ。千歌ちゃんは自分の家だし、梨子ちゃんはお隣さんだし、私は陸に送っててもらえばいいしね」

「人を勝手に送迎車代わりに使おうとすんの辞めて頂けませんかね？」

「さ、いーいーいー」

陸のツツコミを無視して曜は旅館の中に入って行つた。そう言えば曜も梨子の呼び方が変わっている。本当に何があつただか。

三人に続いて陸も中に入ると、そこには千歌の姉である志満がいた。

「いらつしやーい。あら曜ちゃん、相変わらず可愛いわねー」

「えへへ・・・」

曜にそんな事を言っている志満も結構な美人だ。流石千歌の姉と言ったところ・・・、いや逆か？

「それと陸ちゃんも。いらっしやい」
「うす」

陸に向かって微笑んでくる志満に対し、陸もぺこりと頭を下げた。

「そつちの子が、今朝千歌ちゃんが言っていた子？ この子も美人さんねー」

「でしよでしよ？ 桜内梨子ちゃんって言うんだけど、東京から来たって感じするよね？」

「．．．．．別に東京関係なくね？」

陸が隣に視線を移すと、噂の梨子は千歌達の方を見ず、旅館の外にいるあるものを見つめていた。

その視線の先には、高海家の愛犬、しいたけが。

「．．．．．」

しいたけを見る梨子の表情からして、恐らく彼女は犬が苦手なのだろう。

千歌達が千歌の部屋の方に上がって行ったので陸もついて行こうとしたが、どうしたことか体が動かない。

こんな事する奴一人しかいない。

（おいゼロ．．．、何だいきなり．．．）

『あの犬．．．．．』

陸の体の主導権を奪ったゼロは、じつとしいたけを見つめていた。

(しいたけがどうかしたか?)

ゼロの声音から、まさかしいたけの体内にもリトルスターがあつたり、もしかしたらしいたけはただの犬ではないのだろうかと思ってしまう。

『可愛いな』

(あつそ．．．．．、いいから行くぞ)

変に考えた自分が馬鹿だった。

「もく．．．、何で勝手に食べちゃうかなー．．．．．」

陸が千歌の部屋に入ると、不機嫌そうに文句を垂れる千歌がいた。

「何があつたんだ？」

「それが……」

「志満姉が東京で買って来たプリン勝手に食べられちゃったんだよー」

「子供か」

〈子供だな〉

志満はそんな事する様な人じゃないし、そもそも志満が千歌に買って来たものを自分で食べてしまうとは考えにくい。

となると……、

「それより早く作詞……」

「いつまでもとつとく方が悪いんですー」

梨子の言葉を遮つてその後ろの襖を開けて現れたのは、千歌のもう一人の姉である美渡だった。

「べー、と舌を出すその姿は、

「子供かよ」

〈子供だな〉

「美渡姉……、うるさい！」

頭に來たらしい千歌が美渡に海老のぬいぐるみを投げつけた。が、途中で失速して梨

子の顔面に当たる。

「ヒイ!？」

「甘いわっ!」

梨子を見た曜が悲鳴を上げ、まだ気づいていない美渡が千歌に浮き輪を投げ返す。だがこれも梨子の頭に被さり、中々にシユールなオブジェクトが誕生してしまった。

「うわっ……」

「やっぱっ……」

「ッ!」

梨子が勢いよく立ち上がり、美渡が開けた襖を閉めた。多分だが怒っている。

「さあ、始めるわよ……」

「曜ちゃん、スマホ変えた?」

「うん! 進級祝い!」

「いいな」

怒った梨子から目を逸らす様に千歌と曜が別の話題で盛り上がり始める。それで完全に大事な何かが切れたらしい梨子が、ズドンと音を鳴らして床を踏みつけた。

「はあじいめえるうわあよお……?」

「は……、はい……」

梨子が二人に顔を近づけるとポロリと海老のぬいぐるみが落ち、普段の梨子からは想像できない声音でそう言った。

ちなみにその時の表情は、

〈怖っ………。リトルスターいらないだらアイツ……。〉

と、あのゼロですら恐怖を覚えるものだったという。

「あああああ………」

ようやく作詞が始まって約一時間。何も浮かばない千歌が机に突っ伏して唸りだした。

それでも状況は良くなった方なのだ。最初二十分は梨子の見せた表情で千歌と曜がずっと青い顔で震えていて話どころじゃなかったから。

陸も力にはなりたかったが、生憎音楽の成績が万年1なので口を出すと言われてしまった。

何でも千歌はラブソングが作りたいらしい。

「やっぱり、恋の歌は無理なんじゃ……」

「いやーだー。μsのスノハレみたいな作るんだ!」

「つつてもお前恋愛経験ないだろ……。そんなんでどう作るってんだ……」

「何で決めつけるの!」

「ないだろ?」

「ない……。けど……」

「無いんじゃないか……。その辺は曜と桜内の方が経験ありそうだけだな。曜。お前中学の時結構告白とかされてたよな? そういうの無いのか?」

「馬鹿っ!」

「ぐおふっ!」

曜に殴られた。流水水泳部、日頃から運動してるだけあって千歌のポカポカパンチとは威力が違う。昨日のナツクル星人のパンチ並みに利く。

〈何で殴られたんだお前?〉

(曜が恋愛沙汰の話が苦手なの忘れてた……)

人が話す分には大丈夫らしいのだが、いざその矛先が自分に向くと人が変わったように暴力的になる。ちなみに被害者は大体陸だったりする。中学の時曜に告白した男子たちが同じように殴られていないか心配だ。

「梨子ちゃんは？ 梨子ちゃんは無いの？」

「私っ？ 無いに決まってるじゃない！」

「えー、東京にいたんだし彼氏の一人や二人位……」

「いません！ そもそも音ノ木も女子校だよ？」

音ノ木と言うのは前に梨子を通っていた音ノ木坂学院の略称で、千歌が憧れているμSの母校。この事を初めて知った時、千歌はさぞかし興奮していたそうなの。

「じゃー陸ちゃんは？」

「っ……」

今度は陸に矛先が向き、何故か周囲から刺されるような視線を感じた。

「ないけど……」

その妙な緊張感にに気圧されながら陸が答えると、その謎の感覚は消えた。一体何なんだ。

（ゼロはないのか？）

へない。人間の女子に惚れられたことはあるが

（あるのか。何モンだその女子）

（まあ、超絶強くてカッコイイ俺に惚れる気持ちも分からなくもないけどな）

（聞いたいてなんだが黙れナルシスト）

ゼロらしいと言ったらゼロらしいが。

「スノハレみたいな歌詞が書けたって事は、sの誰かがその時恋愛してたって事かな？」

「知るか」

「ちよつと調べてみる！」

そう言つてパソコンを叩き出す千歌。そんな情報がネットに乗っている訳なからうに。

「仕方ないなこいつ……」

「……：千歌ちゃん、スクールアイドルに恋してるから……」

「まあ、ね……、ん？」

陸と曜と梨子が顔を見合わせ、その後三人そろつて千歌を見る。

「ん？ どうかした？」

「千歌ちゃん。人じゃなくてもいいんだよ。千歌ちゃんのスクールアイドルに対する気持ちを書けば」

「ツ！ 書ける！ それならいくらでも書けるよ！」

曜の言葉で千歌が覚醒し、さつきまでとは打って変わって猛スピードで筆を進めていく。

「できたっ！」

「はやっ……」

千歌から紙を受け取って見てみると、初心者とは思えないほど立派な歌詞が書かれていた。

「おお……」

こいつそんな才能あったのか、と陸が感動していると。

「まあ、それμsの曲なんだけどね。私そんな曲作りたいなーって」

「なんだよ……」

落胆した陸が落としたその紙を、梨子が拾い上げて見つめる。

「ユメノ……トビラ？」

「うん！ 私その曲聞いてスクールアイドルになろうって思ったんだよ。μsみた
いになりたいって！」

「μs、みたいに？」

「そう！ 前梨子ちゃんには言ったけど、頑張って仲間と一緒に力を合わせて、そして奇

跡を起こせば、私も変われる。普通星人から何かに変われるって！」

「普通……、星人？」

曜がポロリと謎の単語を零す。

「うん。普通星に生まれた、普通星人。何回変身しても普通なままの普通怪獣ちかちー」

千歌が自虐気味に笑う。

〈普通ってそんなに嫌かね……〉

（まあ、こいつの場合色々思う事があるんだよ。昔からちよつと、な）

普通と言う単語は、昔から千歌が自虐の時に使っているものだ。

幼い頃から優秀な高跳び選手である曜や、家業を手伝ってそれをちゃんと自身のやりたいことにしている果南と違い、千歌は昔から何をするにも普通だった。将来やりたいことなども特に決まってなく、その事もあつて普通に対するコンプレックスが人一倍強い。

「スはさ、私達と同じ普通の女の子なんだよ。なのに、あんなにキラキラ輝いてた。だから思ったんだ。何の才能もない私でも、これなら変われる。輝けるんじゃないかって！」

不意に明かされた千歌の思いに、陸と曜は一瞬呆気にとられる。

前はピーンときた。としか言っていなかったが、まさかこんな理由だったとは。

「大好きなんだね？」

「・・・？ うん！」

千歌が明るく笑い、それを見て梨子も笑う。

「それじゃあ、この想い。書き上げるとしましようか！」

千歌が腕をまくって先程と遜色ない速度でアイデアを書き始めた。

何事にも起爆剤さえ与えれば千歌はとにかく早い。次々と筆が進み、机の周辺には紙が積み上がっていく。

この分なら大丈夫だろうと、陸は千歌の部屋を後にした。

十三話 シャイニーとダイヤモンド

次の日の放課後

「ワンツ、スリーフォー、ワンツ、スリーフォー」

静かな砂浜に響く、三人の少女の声。

今朝、梨子が何と作詞だけでなく、スクールアイドルもやってくれと言ってくれたのだ。

千歌は何か事の真相を知っていそうな顔をしていたが、何も教えてくれなかった。

でもこれで三人。徐々に部員は集まりつつあった。

〈頑張ってるなあいつ等〉

（ホントに。つか何で桜内はいきなりスクールアイドルまで引き受けてくれたんだ？

あいつピアノもあるっつーのに）

へさあな。大方昨日千歌が説得したんだろ。なんちゃらかんちゃらって歌に梨子は興味

を示していたからな〉

(うん。お前が話を聞いてないのは分かった)

出来る限り協力すると言ってしまつた手前、一応顔は出しに来たのだが、結局何もすることが見つからなかつた陸は体育座りしながらその光景を眺めていた。

ちなみに学校じゃなくてここの砂浜でやっている理由は、生徒会長にバレると怒られるかららしい。

〈頑張つてはいるが、その生徒会長に認められないと部活として成り立たないんだろ?〉

(ああ、あいつらどうするつもりなんだか……え?)

陸が空を仰いだその時、あるものが視界に入った。

それはやたらと低空飛行をするヘリコプターが。

〈何だあれ?〉

(ヘリコプターだ。ありや小原家だな)

〈オハラケ? なんだそりや?〉

(ほら、あれ)

陸が指さす先は淡島。そこに立っている豪華な建物。

(あのホテルを経営してる家だよ。何でもすげー金持ちらしいぞ)

〈ふーん……。で、そのお金持ち様が千歌達に何の用だ?〉

(は? 何言つてんだ?)

〈見てみる〉

ゼロに言われて再びヘリコプターに視線を移すと、さつきよりも低く飛んでいた。

〈あれ、こつちに近づいて来てないか?〉

(いやいや、まさかこんな砂浜に……)

だが陸の言葉に反するようにヘリコプターはその高度を下げてくる。

そしてゼロが体に乗っ取り、

『お前等、伏せろ!』

「えっ?」

「うわっ、何? どうなってるの?」

陸の声質が変わった事にも驚いたようだが、すぐに高度を下げるヘリコプターに気付いた千歌達が身を屈める。

その直後にヘリが千歌達の頭上を通過し、少し離れた場所に着地した。

「お前等! 怪我はないか?」

「大丈夫大丈夫……、ちよつとびつくりしただけ……」

駆け寄ってきた陸に、千歌が笑い返した。曜も梨子も舞い上がった砂を被って酷い事になっているが、怪我がないようで安心した。

「何だっつてんだいきなり……」

へ気をつける陸。もしかしたら新手の刺客かもしれないねえ。身構える陸の前でヘリコプターのスライドドアが開き、その中から一人の少女が現れた。

外国人でも滅多にないような派手な金髪。どこか日本人離れた顔立ち。果南のそれよりも大きいアレ。

彼女は、動きやすいようにと練習着に身を包んだ千歌達を見て眩しい笑みを作った。

「チャオー！」

「「新理事長？」」

「イエース！ でも気にせずに。気軽にマリーって呼んで欲しいの！」

場所が変わって浦の星女学院。その理事長室。

その机の側に立つ、小原鞠莉と名乗るその少女はとても理事長の口調とは思えない軽い口調と共に笑った。

本当に理事長なのだろうか・・・、いや、それよりも先に気にすべきことがある。

「あの・・・、理事長さん？」

「マリーだよ！」

「いや・・・、でも・・・」

「マリーだよお！」

なんだこの有無を言わせない威圧感は。

「ま、マリー？ 聞きたいことは山々何すけど・・・、まず俺ここに入っても良かったんすかね？」

砂浜で鞠莉に会った後、言われるがままに陸も浦女に連れてこられてしまったが、浦女は女子校。本来男子の陸が入っていい場所ではない。

「ノープロブレムデエース。私の権限で、しょ——にんっ！」

「うわっ！」

鞠莉は巨大なハンコを取り出すと、そのまま陸の額にそれを押し付けた。判を押された陸の額には、承認と言う赤い文字が。

(消えんのかなこれ・・・)

〈後で俺の力で消してやるから今は我慢しろ〉

(心強いな・・・)

本当に万能すぎる。

「そ、それで理事長・・・」

「マ♡リ♡イ♡」

千歌に鞠莉がずっと顔を寄せる。理事長と呼ばれたことが不服らしい。

「ま、まりい・・・、その制服は・・・？」

今鞠莉が着ているのは千歌達と同じ浦女の制服だ。リボンが緑色なのは千歌達と学年が違うからだろうが、いやそもそも何故理事長が学校の制服を。

「変かな？　ちゃんと三年生のリボンも用意したのに」

ピンと胸につけられたリボンを引っ張る鞠莉。緑色のリボンは三年生の物らしい。でもツツコみたいなのはそこじゃない。

「あの・・・理事長、ですよね？」

「しかあし！　この学校の三年生！　生徒兼理事長！　カレー牛丼みたいなものね」

「「「例えがよく分らない・・・」」」

〈ああ、そういう事〉

何故最も地球文化に疎いはずのゼロが理解できて地球人四人が理解できないのだから

う。

「分からないのお？」

「分かるか！」

「分かりませんよ！」

「分かりませんって！」

「分かる訳ないじゃないですか！」

「分からないに決まっています！」

マイペースな鞠莉に五人が突っ込んだ。……五人？

「うわっ、生徒会長!?!」

驚きの声を上げた千歌の目の前にいたのは、長い黒髪の少女だった。一言で言うとう美しい。可愛いより美しいの方が表現として合っている。

彼女は最近どこかで見たような翡翠色の瞳で鞠莉を睨みつけていた。千歌の言葉からして、彼女が浦女の生徒会長、黒澤ダイヤなのだろうか。

鞠莉はその少女を見るといきなり抱き付いて胸を揉みだした。

「わあお！ ダイヤ久しぶりー！ 大きくなつて——！」

「触らないで頂けます？」

「胸は相変わらずねえ……」

「やかましいですわっ!」

「イツツジヨーク!」

鞠莉のセリフからして、彼女は黒澤ダイヤで間違いないらしい。なるほど、想像していた通り頭の固そうな少女だ。

「? 何故殿方がこの校舎にいますの?」

「ヒイイ!」

〈うわっ・・・〉

突如としてダイヤの鋭い眼光に射貫かれ、二、三步後退する陸。本能がこの少女に逆らってはいけなさと訴えている気がした。

「マリーが連れてきたのデエース!」

「貴方は・・・、大丈夫なのでしょうねこの方は・・・」

ダイヤはそう言うのと、額に承認のハンコを押された間抜け面の男を凝視する。やがて額の承認の二文字が目に入ったダイヤは、

「ぶふっ・・・」

と、吹き出した。

（おいゼロ、今すぐこれ消してくれ）

〈流星に今消えたら不自然だろ。我慢しろ〉

「オーウ、ダイヤが吹き出すとは珍しいデエース」

「だまらつしゃい。それで、一年の時にいなくなつたと思えばこんな時に戻つてくるなんて・・・、一体どういふつもりですか?」

「シャイニーイイ!」

ダイヤの問いを無視して意味不明な行動を続ける鞠莉を見て、ダイヤの眉がひくついた。

〈話を聞く機能死んでんのか?〉

興味のない話は聞かない主義のゼロにすらこう言われる始末だ。

ダイヤの言葉から察するに、この鞠莉と言う少女、過去に浦女に通つていた事があるらしい。鞠莉の見た目からの勝手な推測だが、留学でもしていたのだろうか。

「とにかく、高校三年生が理事長だなんて冗談にも程がありますわ」

「そつちはジョークじゃないけどね」

「「「え?」」」

陸を除く浦女の生徒四人が声を上げた。

そんな三人に鞠莉が一枚の書類を突き出した。委任状と書かれたその紙には、確かに鞠莉を浦女の理事長として任命すると言つたような内容が記載されていた。

それを見て四人が愕然とする。

「私のホーム。小原家のこの学校への寄付は相当な額なんだから」
「うそっ!!」

〈どういう事だ?〉

(世の中金が全てだっけ事だ。よく覚えとけ)

話をまとめると、鞠莉はこの学校の理事長に任命されたという事だ。金の力で。

「そんな・・・、なんで?」

「実はこの学校にスクールアイドルが誕生したと聞いてね。どうせダイヤに邪魔されているだろうからとマリー直々に応援に来たのデエース」

「ホントですかっ!!」

鞠莉の言葉を聞いて、千歌がびよんびよんと跳ね上がった。

「イエース。このマリーが来たからにはもう心配はナツシングデス。デビューライブにはアキバドームを用意してみたわ!」

鞠莉はそう言っただけで立ち上げたパソコンの画面を見せてきた。確かにアキバドームが映っているが。

「ええ?」

「いきなり?」

「す、すごーい!」

「冗談に決まってるんだろアホ」

「イエース。イツツジョーク！」

「……ジョークの為にわざわざそんなもの用意しないでください」

上がったテンションを一気に落とされた千歌が恨めし気に呟いた。

「そつちのボーイは中々に頭が切れるみたいね。面白い！ 気に入ったわ！ どう？

いつそ浦女に転校してこない？」

「どうせそれも——」

「こつちは本気デエース」

「……そこはジョークと言って欲しかったな。つか俺男だぞ」

「そうですねよ鞠莉さん。いくら理事長でもそんな事が許される訳……」

陸とダイヤは批判的な態度を見せるが、それ以外は割とまんざらでもないようだ。

「えー！ 陸ちゃん浦女に来るの？ 一緒にスクールアイドル出来る？」

「万が一に転校したとしてもそれは絶対やんねえ！」

「陸……」

「仙道君……」

「お前らは何でちよつと期待しながらこつち見てんだ！ 生徒会長！ 何か言っ

てくださいー！」

「ピギユツ!? ええと、その・・・」

「途端に狼狽えだすな!」

「ビィィィ、クワイエツト! 静かにしてください。話が先に進みませーん」

「誰のせいだと思ってるんだ!」

多方にツツコミを続けてもう疲れてきたのもう何もツツコまない事にしよう。

「ファーストライブの件ですが、実際は・・・」

続いて陸達が無言で連れてこられたのは体育館だった。女子校とは言え結構な広さだ。

「へここに来るまでにお前めっちゃ注目浴びてたな。以外にモテるんじゃないの?」

（女子校の中に男子がいたら誰だって気になるだろ。あと視線のほとんどは俺の額に向いてたからな）

おかげですっかり有名人になりました。かなり不名誉な形で。

「ここを満員にできたら部として承認して上げます」

「本当っ?」

「イエース」

「でもできなかったら?」

「その時は……、解散してもらえないです」

「ええっ!? そんな……」

「嫌なら断つてもいいですよ?」

まさに一か八かの大勝負。満員にできればダイヤの言うように五人集めなくとも部として承認される。部として承認されれば練習場所だって確保できるし、部費だつて出る。ただし出来なければ解散。初めてだという事を考えると、今は避けておいた方がいい気がする。

それに……。

〈……コイツ……〉

ゼロも気付いたようだ。

「どうしまーすか?」

「どうするって……、ここ結構広いよね……」

「じゃあ辞める?」

「辞めない! やるしかないよ。他に方法があるわけじゃないし」

いつもの様に曜が着火剤をつけ、千歌が燃え上がる。梨子もそれを見て笑った。

どうやらこの三人。まだ鞠莉が張った罫に気付いていないようだ。

「OK。という事でいいですね?」

そう言うと鞠莉が体育館から去っていき、それに続いて不安げに千歌達を見るダイヤも体育館から去っていた。

その一方で千歌達はやる気を募らせていた。

「絶対成功させよう。μsみたいに輝くために!」

陸はそれを見て溜息をつくど、

「お前等、馬鹿だろ……。どうして自分達から首絞めに行っちゃうかな……」

「どういう事?」

まだ分かっていない三人に。

「あのなあ、浦女の生徒人数、全部で何人だ?」

「ええと……大体……」

「数えなくてもいい。で? 仮にその生徒が全員集まったところでこのだだっ広い体育

館は満員になりますか?」

陸がそこまで教えてやると、三人の表情が一気に陰った。

そう例えこの学校の生徒が全員集まったところで、ここは満員にならない。鞠莉はそれが分かった上でここを満員にすることを条件にしたのだ。

「そんな・・・、まさか理事長・・・」

陸達しかいない体育館に、千歌の震える声が木霊した。

へいけ好かねえな。あの鞠莉って奴。認める気ねえだろ、嫌がらせか？

帰り道、何故か鞠莉の態度に一番腹を立てているのはゼロだった。最近ゼロの性格が分かってきたのだが、恐らくねじ曲がった事が嫌いなのだろう。

へ素直に認めませんの一言でいいじゃねえか。何でわざわざ貶める様な事をする

「でも、確かに理事長さんの言ってる事も分からなくもないな。こんな人のいない場所

でスクールアイドルを始めるとして事は、あの程度の会場くらい満員にできないとやっていけないんだよ。多分」

〈けっ……。おい陸。こうなりや意地でも満員にするぞ〉

「意地でもって……。お前一体どうするつもりだ？」

〈俺にはウルティメイトフォースゼロって言う四人の仲間がいる。そいつらを連れてくればあんな会場一瞬で埋まるぜ〉

「うん。ライブどころじゃなくなるから辞めようか」

ゼロが奇行に走る前に、自分が何とかしなければ。

十四話 グループの名は？

「それが衣装か？」

「うん。後で細かい調整とかしないといけないから、早めに作らないとね」

現在高海家。どうやって人を集めるかのアイデアが全く浮かんでこない為、息抜きも兼ねてライブの準備をしている最中だった。

と言ってもやはり陸に出来ることは何もなく、ただそれを見つめている事しかできないのだが。

トイレに行っている梨子も今さっきまでライブの曲の制作に追われているみたいだった。

（仕方ない。何もすることがないから俺達でどうやって人を集めるか考えよう）

〈単純にお前らの知り合いを呼ぶってのじゃダメなのか？〉

（それじゃ全然人数が足りん。もつと、知り合い以外の人を集める方法・・・）

〈やっぱウルティメイトフォースゼロを呼ぶしか・・・〉

（それは辞めろと言っただろ）

頑なに自分の仲間を押しつけてくるゼロ。そもそも来てくれるのだろうか。まあ、来られても困るのだが。

「だつたら何か多くの人に知ってもらえるような広告活動をしたらどうだ？　張り紙とかビラ配りとか」

「ビラ配りか……、悪くないな。ここはともかく、沼津の方に行けばある程度の人はいらるだろうし。……でも何でそんな事知ってるんだ？」

「前にサラリーマンと一体化してたからな。ビジネスとやらは任せろ」

「お、おう……」

興味のない話は聞かないとか言っていたのはどこに行ったのやら。

「……おかし……、完璧な作戦だったのに……」

一人消えていた千歌が返ってきた。心なしか不機嫌である。先程姉である美渡の会社の人をライブに誘えないかの交渉をしに行ったらしいのだが、顔を見るにダメだったらしい。

「おまけに千歌には無理だーとか言われるし……、おでこにこんな書かれるし……」

前髪を上げた千歌の額には、バカチカと黒ペンで書かれていた。

「まあ、ダメもとで行ったんだし文句言うな。ホレ、ウエットティッシュ」

「ありがと……」

ふてくされ気味に陸からウエットティッシュを受け取る千歌。ここである事に気が付いたらしい。

「あれ？　そういえば梨子ちゃんば？」

「さつきトイレに旅立って行った」

「そういえば遅いね。何かあつたのかな？」

「あ、いた」

探しに行こうとした千歌が襖を開けると、襖に足、手すりに手をかけてアーチみたい
な恰好をしている梨子がいた。その下にはしいたけもいる。

プルプル震えているのは体勢がきついからかしいたけが怖いからかは分からないが、
多分どつちもだろう。

「何やってんの？　新種の遊び？」

「そういう訳じゃ……、なあ!？」

ついに力尽きたらしい梨子がしいたけの上に落下した。しいたけは特に騒ぐ様子も
ないが、梨子は青い顔になって瞬時に陸の背中に隠れた。

「おい。大丈夫か桜内？」

「な、何とか……」

犬が苦手なのは知っていたが、これは相当なものらしい。

「そうだ。ライブの集客の話だけど、沼津の方でピラ配りなんかどうだ？ あそこなら人も多いだろうし」

「そっか、その手があつたね！ 陸天才！」

「ふっ……、まあな」

〈お前いちいち俺の手柄奪うの辞めろよ〉

そんなこと言われてもウルトラマンゼロが提案してくれましたという訳にもいかな
いし、仕方あるまい。

「それじゃ早速チラシ作り始めますか！ 衣装の方も一区切りついたしね！」

「おー！」

陸は掛け声にもなら絶対に入ってくる奴がいない事に気付いた。

「千歌？ どうかしたか？」

不思議に思った陸が千歌の顔を覗くと、千歌は額に手を当てながら悲し気に俯いた。

「これ、油性だった……」

そんなこんなで翌日。陸達四人はチラシ配りの為に沼津に来ていた。ここなら駅前でも多いし、学校帰りの学生もいる。チラシ配りには最適という訳だ。

「東京ほどじゃないけど、やっぱり都会ねー」

「そろそろ部活終わりの人たちが来るよ！」

「よし、気合入れよー」

千歌が先陣を切って通りかかった女子高生二人に近寄っていく。

「あの！ お願いしまーす！」

元気な声で呼びかけた方がいいが、二人は聞く耳を持たずに通り過ぎてしまった。

「・・・意外と・・・、難しい？」

「砂漠かよ。いつからここは東京になったんだ？」

「・・・東京もそこまでじゃないよ？ 多少は興味持ってくれるよ？」

「こういうのは気持ちとタイミングだよ！ 見てて！」

そう言った曜は手頃な相手を見つけたのか、パタパタと目標に駆け寄っていく。曜が目を付けたのは、千歌の相手と同じような女子高生二人だった。

「ライブのお知らせです！ よろしくお願いしまーす！」

「ライブ？」

「ライブって、あなたが歌うの？」

「そうであります！ ぜひ来てください！」

「日曜日かー……、行ってみる？」

「良いんじゃない？」

「よろしくお願いしまーす！」

流れる様な動きで、あつという間にお客を確保してしまった。妙にこなれているが、経験があつたりするのだろうか。

「すごい……」

「ああ、何だあの恐ろしいまでにスムーズな流れは。さつき後千歌のくだりが嘘みてーだ」

「よーし、私も！」

そう言った千歌が今度は壁ドンをしてチラシを配りだしたことは見なかったことにして、今度は梨子の番だ。

「よ……、よーし」

意気込んで飛び出した梨子の目の前。梨子にぶつかりかけて身構えた、マスクにサングラスにコートと言う、先日のダダより怪しい人物。

「えつと……、その……」

「な……、何よ……」

（女子？）

〈安心しろ、怪しい気配は感じないから地球人で間違いない〉

怪しすぎて咄嗟に身構えてしまったが、彼女は地球人らしい。

「あの、よろしくお願いします！」

「……」

しばらくの沈黙の後、その少女は梨子からチラシをふんどくつて走り去って行った。

「やった……」

「おう、お疲れさん」

梨子は今ので自信がついたらしい。

受け取ってもらえないのは千歌だけで、曜と梨子はその後もスムーズにチラシを配っていた。

〈そういえばお前は配らないのか？〉

(浦女は女子校だぞ。男の俺が配ったら不審者扱い間違いなしだわ)

〈お前何の役にも立ってねえじゃん〉

(学校の連中に声かけます)

〈来る保証ねえだろ〉

(甘いなゼロ。ウチは男子校だぞ？ 常々女に飢えてるあいつ等が女子校でのライブと

言う女子と関わるまたとなないチャンネル見逃す訳ないだろ)

〈お前・・・、たまに黒くなるよな・・・〉

千歌達の為にやった事なのに、黒いとは心外な。

「あれっ？ 花丸ちゃーん！ ルビィちゃーん！」

しばらくたった後、ようやくチラシが減り始めた千歌が通りかかった少女二人に近づ

いていった。

「ずらっ！」

「ピギュっ！」

(ん・・・・・・?)

なんとなくその声に聞き覚えがあり、千歌の方に行って話かけている少女二人の顔を見る。

その人物は、

「ああっ!!」

「ずらあつ!」

「ピギイツ!」

陸は二人の、二人は陸の顔を見て、共に声を上げた。

陸は思わぬ再開に目を見開き、二人は信じられないものを見るようにして陸を見ている。

「何々? これはまた陸ちゃん知り合いパターンなの?」

首を傾げる千歌に。

「知り合いと言うかなんというか……」

「よかった。無事だったんですね……」

「うゆ、うゆ……」

方や燃える様な赤髪をツインテールに束ね、驚きに翡翠色の瞳を見開く少女、もう一方は肩辺りまで伸ばした栗色の髪と琥珀色の瞳が揺れる少女。

この少女二人、前のベロクロン騒動の時に陸が身を挺して助けた少女達で、その事が陸が命を失うきっかけと、ゼロと出会うきっかけになった。

訳の分からなそうにぼかんと陸を見る千歌と、駆け寄ってきた曜と梨子にこの二人との出会いの日に何があったかを教えた。

すると、

「ええええええええええつ!? 陸ちゃんあの時そんな事になつてたのっ!」

「病院に搬送つて……、何で言つてくれなかつたのっ!!」

案の定千歌と曜は顔を真つ青にしながら陸の胸倉を掴んできた。あまりにも大声で騒ぐもんだから、周りの注目も浴びている。

「だつて言つたらお前等……、ゴメン」

言い返そうとしたが、ベロクロン騒動の日の様に二人の瞳が潤んでいるのを見て、流石に罪悪感を感じざるを得なかつた。

素直に謝つて、次の言葉を紡ぐ。

「心配かけたくなかつたんだよ……」

「言わなきや余計に心配するよっ!!」

陸の言葉を跳ね除けて声を荒げる二人に、今度こそ何も言えなくなつてしまふ陸。静寂が場を支配して、空気が重苦しくなる。

「あ……、あの……」

それを切り裂いたのは、か細く震える小さな声だつた。声の主は確か千歌にルビイちゃんとか言われていた子だ。

「その人は……、その……、ルビイと花丸ちゃんの事を助けてくれたんです……」。

だから・・・、あんまり責めないで上げて欲しいです・・・」

必死に千歌と曜をなだめようとするルビィに、花丸も首振って同調した。

「まるもルビィちゃんも、その人が助けてくれなかったら今ここにいませんし、許してあげてください。心配させたくなかったって事で」

優しく微笑む花丸と、何故か瞳を潤ませるルビィを見て、千歌と曜も陸の胸倉から手を離した。

「・・・・・・・・いいの？」

「・・・・・・・・ルビィちゃん達の事、助けてくれてたみたいだしね・・・・・・・・」

「でも、今度また何か隠し事したら許さないからね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ホントにゴメン」

実際まだゼロと言う爆弾を抱えているが、こればかりは二人の為に言わない方がいい。知る事で、二人にどんな危険が降りかかるか分からないから。

〈悪いな、陸・・・〉

(気にすんな。ゼロがいなきや俺も死んでた)

もちろん隠すことに罪悪感はあるし、打ち明けることで陸も少しは楽になれるのかも
しれない。

けど、

そんなもの、自分が守りたいと願ったものに比べれば小さな事だ。

自分のエゴで、大事なものでまで危険に晒す訳にはいかない。

これは、自分とゼロの戦いなんだ。

「お願いしまーす！」

三十分後。

曜と千歌がビラ配りを手伝えば許してくれるとの事だったので、恥と外聞をかなぐり捨てた陸は元氣澆刺でビラを配っていた。なお心は死んでいる模様。

案の定周囲からは何で女子校のライブ宣伝を男子がやっているんだという目で見られたが、気にしたら負けだ。

へしかし、よく許してもらえたな

(ホントに、二人にや感謝しないとな)

ちなみにルビイは先日会ったダイヤの妹らしい。通りでダイヤの目を見た時に既視感があった訳だ。

花丸とルビイはあの後帰ってしまったが、千歌がビラを配り終わるまで帰らないと言うので陸達は引き続きビラ配り実行中だ。

ふと、ここで肩を叩かれた気がした。

振り向いてみると、

「うわっ！」

「やーやー陸君とゼロ君。こないだはどうも」

そこにいたのは先日ダダにやられていたオウガとかいう男だった。

相も変わらずキーホルダーを腰から下げ、軽い口調で笑いかけてくる。

『どうもこうもねえよ。何しに来やがった』

できれば関わりたくない陸が自主的に引っ込み、代わりにゼロが不機嫌気味に返す。

「いやー、ついさつき可愛い女の子がこの辺でビラ配りしてるって聞いてねー。ついつい来ちゃった♡」

『来ちゃった♡ じゃねーよ。そもそも何でテーマが地球にいんだ』

「おろ？ 気付いてなかったのかい？ まーそうか、君戦い以外にはとことん疎いから

ねー。陸君は分かっているんだろ？」

(げ……)

陸に話題が降られた。仕方なくゼロと人格を入れ替える。

「……アニメとか漫画とか、いわゆるオタク文化が目的だろ……」

「せーかい。ほらー、地球の娯楽は宇宙でも随一のクオリティの高さを誇っているじゃないか。それで正しい興味がわいてね」

「宇宙人で、そんな理由で不法入国してくんのか……?」

「侵略目的で飛来されるよりはよっぽどマシだろ?　むしろ母星が宇宙に誇れるものを持つている事に誇りを持ちたまえ。それより、可愛い女の子たちが配っているというピラ、否聖骸布はどこに」

「ん」

陸はオウガにピラを差し出した。

「え?　女の子だったのかい?　お世辞にも可愛いとは言えないな」

「すー」

「……痛いじゃないか」

「殴ったからな」

ちよつとイラついたので一発かましてやった。宇宙人に掛ける慈悲などない。

オウガは差し出されたビラを陸に持たせたまま見始める。

「ほうほうスクールアイドル……。今巷で人気の奴か……。」

「どうやらオウガはスクールアイドルの事を知っているらしい。地球文化が目的で来てるんだし、知ってておかしくはないが。」

「で、君が踊るのかい？」

「もう一発行くか？」

「冗談さ。だからその拳を収めよう？ 何でも暴力で解決するのは良くないよ？ ゼロ

君みたいになつちやうよ？」

『何だとゴラ』

「ゼロ君も落ち着いて、仮にもウルトラ戦士が私怨で暴力振るうのはどうかと思うよ？」
(疲れる奴だな……。)

流星、ゼロに面倒な奴と言わしめるだけの事はある。

「それで、このイラストの女の子達はどこだい？」

「あつち」

陸は沼津駅のホームの方を指さした。そこにはビラを配る三人の少女が。

「あれ？ この前の子達じゃないか。となると、差し詰め君はマネージャーってところかな？」

「よく分かったな」

「まあ、アイドル育成系のゲームじゃお約束だからね。その内マネージャーとの間に芽生える禁断の関係……あ、これR18のやつだ。とにかく、陸君。今後の彼女達との発展に期待してるよ」

なんて言ってるサムズアップするオウガ。

「ゼロ。こいつ何言ってるの？」

〈知らん〉

何を言っているかは分からないが、オウガが地球文化にどっぷりはまってるって事は分かった。

「ところでこのビラ。グループ名が書いてないけど、これは当日に大発表！　みたいなサプライズがあるって事かい？」

「……グループ、名？」

「え……、まさか考えてなかったなんて言うんじゃないだろうね？　グループ名はまず最初のアタックなんだよ？　いくら顔や曲がよかろうと、グループ名が駄ネーミングだったらまず見向きもしてくれないんだよ？　なのにまだ決めてなかったって言うのかい？　それでもラブライブを目指すスクールアイドルなのかい？」

「顔が近い！　離れろ！」

途端に目の色を変えて弁舌を振るうオウガに若干引きつつ押しつける。と言うかこいつスクールアイドルに詳しくすぎる。

「とにかく。名前はさっさと決めておいた方がいいよ？ 中には名前だけで判断する人もいるんだから」

「肝に銘じておく……」

もはやこいつがマネージャーやった方がいいんじゃないだろうか。

「まあ、ライブ自体は行くよ。皆可愛いしね。それじゃあね陸君。ゼロ君」

「おい、ビラ受け取り忘れてるぞ」

再び陸が差し出したビラを、オウガは受け取らずに制した。二、三步駅のホームに向かって歩いた後、再び陸を見て。

「ボク、可愛い女の子からそれもらいたいから、あっち行ってくるね」

ビラ配りをする千歌達を指さし、そう言った。

〈ん・・・？〉

(どうしたゼロ？)

〈いや、向こうに何か人の気配が・・・、気のせいかな？〉

(海だし、一人くらい人がいても不思議じゃないだろ。それよりも、だ)

陸は練習着に着替えた三人に目を向けた。

「緊急事態です。グループ名が決まっていけないという事が判明してしまいました」

「まさかまだ決めていなかったなんて・・・」

「梨子ちゃんだつて忘れてたじゃーん」

駅前にてビラを配り、オウガにグループ名を指摘された日の夕方。

練習がてら陸達は、オウガの質問だったグループ名について話し合う事になった。

(てか、何で忘れてたんだらう俺。一番暇だったくせに)

〈自覚が足りないな〉

(面目ない・・・)

ゼロにも言われてぐうの音も出ない。

「とにかく早く決めないとね？」

「だな、当日グループ名はありませーんとか言う訳にもいかんし」

「だよねー……。どうせなら学校の名前とか入ってる方がいいんじゃない？ 浦の星ス

クールガールズとか」

「まんまじゃない！」

「じゃー梨子ちゃん決めてよ」

「そうだよ！ 東京での最先端の言葉を！」

「ひでえ。丸投げかよ」

「後で陸ちゃんにも聞くからね」

「えー……」

「ええ……と、じゃあ、三人とも海で知り合っただし、スリーマーメイドとか……

あはは」

「「いっちにーさんし、いっちにーさんし」」

「ちよつと！」

〈悪魔かこいつ等〉

梨子のネーミングが不満だったのか、いいね！ とも、駄目！ とも言わずに千歌も

曜も準備体操を始めてしまった。

「曜ちゃんは何かない？」

「んー。そーだなー・・・」

曜はランニングしながら少し考えて、

「制服少女隊！ どう？」

「無いね」

「無いわね」

「無いな」

〈無いな〉

「ええっ!? ……あとなんか三人以外の誰かにも否定された気がする・・・」

鋭いなこいつ。

「陸ちゃんはー？」

（ゼロ。なんかない？）

〈いきなり俺か・・・、そうだな。やっぱウル——〉

（ウルテイメイトフォースゼロ以外で頼む）

〈・・・そんなにダメか？ これ〉

（スクールアイドルにそんな厳つそうな名前つけるな）

仲間思いなのはいい事だが、だからと言って何でもなんでもウルテイメイトフォース

ゼロにするのは辞めて欲しい。

〈他だと・・・、宇宙警備隊〉

（だから敵ついでだよ）

〈地球防衛軍〉

（まずその辺から離れようか）

〈テラー・ザ・ベリアル〉

（だからと言ってテロリストになるんじゃないやねえ！）

宇宙破壊系スクールアイドル、爆☆誕☆！　なんて千歌達にやらせる訳にはいかない。ゼロには頼らず自分で考えようと決めた陸だった。

だがそうは言ってもすぐに浮かぶはずもなく。

「海・・・、浦の星・・・、三人・・・。オーシャンスタートライ？」

「「ダサツ」」

「Oh・・・。超ストレート・・・」

バツサリと切り捨てられた陸が砂浜を見ると、

「・・・アクア・・・？」

「ん？　今なんて？」

「いや、それ・・・」

陸が指をさすと、三人ともその方を見た。

そこには、砂浜に書かれた「A q u o u r s」と言う文字が。

「あきゆあ？」

「いや、アクアだろ……」

「アクア……水？」

「水ね」

水……響きとしては悪くないが、一体誰がこんなもの。さつきゼロが感じた気配の持ち主が書いたのだろうか。

「水かあ……、なんかよくない？ グループ名に！」

「でも誰が書いたか分からないのに……」

「だからいいんだよ！ 名前を決めてる時にこの名前に出会った。それってすごく大事な事なんじゃないかな！」

「そうだね！」

「まあ、このままじゃいつまでたっても決まりそうにないし……」

先程までクダクダだった話が締結し始めた。誰だか知らないが書いてくれた人本当にありがとう。

「ま、お前らがいいならそれでいいけど。俺達が考えるよりは遥かにマシだろうからな」

「じゃあ決定！ この出会いに感謝して、今から私たちは……」

『浦の星女学院スクールアイドル！ A q o u r s です！』

翌日。

町内放送にて、内浦の町に三人の元気な声が響いた。

なおこの後、公認か非公認かの口論で放送時間の大半を使ってしまったのはまた別の話。

怒涛の準備期間が過ぎて行き、気付けばライブ前日。

陸達は時間の許す限り、ライブでのパフォーマンスをより良い物にするべく、試行錯誤を重ねていたが……。

「うわっ！ もう九時？」

時計が告げる現実によつて、その時間も終わりを迎えた。

「もうこんな時間なのね……」

「流石にもう帰らないとまずいだろ……。曜、帰るぞ」

「了解であります！」

まだもう少し残るといふ梨子を千歌の部屋に残し、陸と曜は十千万を後にした。

冷たい夜風を切り裂きながら、陸と曜は帰路を進んでいた。

「しっかし、ついに明日か……。別に俺が歌う訳でもねーのに緊張してきたわ」

「陸がそんなんじやこの先持たないよ？」

「お、もう明日のライブが成功した気でいやがるか」

「まあ、ね。明日成功しなきゃ、何も始まらないし……」

「……千歌の為にな」

「おっと、それは違うぞ陸君」

曜が腰に手を回してきた。いつもより体が密着して、急激に顔が火照る陸。

「私も梨子ちゃんも、別に千歌ちゃんの為にスクールアイドルをやってる訳じゃない。

形は違っても、皆自分なりの理由があつてスクールアイドルをやつてる。だから、今の陸の発言は間違つてるよ」

「そっか……、ワリ、訂正する」

ここで何で曜がスクールアイドルを始めたのかなどと言う野暮な質問はしない。曜にも曜なりの理由があつて今こうして頑張っているのだから。

想いの形は人それぞれだ。それにいちいち口出しする権利は陸にない。

それにその想いが、スクールアイドルを通じてどのような形に変わっていくのを見たい。だからこそ、明日のライブは絶対に成功させなければならぬ。

陸の家につき、先にお隣である曜を見送つてから家に帰ろうと曜の家の前まで行く。

「じゃあね陸。おやすみ」

「ん。おやすみ」

別に今更交わすような言葉もない、そう思つていたのだが。

「陸」

扉が閉まる寸前で止まり、僅かに開いた隙間から曜が顔を覗かせた。

「明日。絶対成功させようね」

「……分かつてるよ」

曜が扉を閉めたのを確認すると、陸は一人夜空に手をかざし、

「皆の為に・・・、な」

十五話 Firstlive

『・・・仙道陸が最近何かやっているようですね』

暗い宇宙船の中、床に投影された映像を見つめる五人。

『何でも取り巻きの女子達がライブ？ とかいうのをやるらしいぞ』

陸達の身辺調査に向かわせた諜報員からの情報を五人で共有している最中だ。もつともそれは今、全く別の話題に切り替わろうとしているが。

『ライブ・・・、と言うと、歌って踊るあれか』

『詳しいなお前』

『グウウウウウウウ』

『吾輩の星でもそんな事をやっている輩がいたのだな』

『ケケケ・・・、両腕ハサミの奴が歌って踊ってたのか。それ見て悲しくならねえ？』

『お前も両腕刃だろうが』

『あの・・・、グロツケン？ ヴィラニアス？』

『・・・聞いていないな』

『グオオオオオオ．．．．．』

『で、どんなの何だ、それは？』

『何か輝くステージの上で踊っていたぞ』

『ふーん．．．．．』

二人を置いて、二人で話を進めていく。

『なあスライ。確かシャプレーメタルを使ったバッジがあつたよな。周りから見える姿を変えられるやつ』

『ええ、ありますが．．．．．』

『それ貸してくれ』

『ああ、吾輩にも頼む』

『いいですが．．．．．、二人共何をするつもりですか？』

バッジを受け取った二人は、部屋の出口に向かって歩き出していた。

『ちよつとライブ見てくる』

『．．．．．好きにしなさい。もう私は何も言いません』

「これは……」

「ああ、想像していたより……」

ライブ当日。

ステージ裏で最後の準備をしている三人に声を掛けた後、自分もステージで踊る彼女たちを見るために体育館の客席となっている場所に来たのだが。

陸とゼロは、あまりの人の少なさに呆然とすることになった。

いるのはルビィと花丸。先日の怪しい少女。浦女の生徒が数人。その他だと、何やらワクワクとしながらライブの時を待ち続けている男性二人と、

「まあ、今日は雨だからねー。そう簡単に人は集まらないでしょー」

オウガだけだった。何でこいつは雨の日にこんなにテンションが高いのだろうか。

会場にいるのは僅かに十数人。満員には程遠い。

オウガの言う通り、今日は生憎の雨だ。ビラ配りの時に来てくれると言っていた人達も、これでは来る気が失せてしまうだろう。

陸が呼んでおいた学友も今だに姿を現さない。話をしたときは鼻息を荒げて絶対に
行くと息巻いていたのに。

〈やっぱウルティメイトフォース、ゼロを呼んだ方が良かったんじゃないのか?〉
(その冗談。マジで言ってたのか・・・)

陸はもうすぐ千歌達が現れるステージに視線を移した。

あの暗幕が上がってこの光景を見た時、彼女たちはどんな顔をするだろうか。

それは正直、考えたくない。

〈大丈夫だ。陸〉

(ゼロ・・・?)

〈信じろ。あいつ等を〉

幕の向こうで「A q o u r s ! サンシャイン!」と、三人の掛け声が聞こえ、会場

中の意識が暗幕に向いた。

(だよな。あんだけ頑張ったんだもんな)

だから今は信じよう。彼女達の力を、輝きを。

誰か一人の為じゃない。ここにいる皆の為に。

どういう訳か人がほとんどいない内浦の町の中。釣鐘状の頭をしたそいつは、雨に打たれながらぶつぶつと恨みを呟いていた。

「おのれウルトラマンゼロ……俺の出世街道を……」

三面怪人ダダ。先日ゼロによって梨子の誘拐計画を失敗に終わらされた宇宙人である。

電柱にもたれ掛かり、腕にはあるものを握っていた。

「あまり目立つ様な真似はしたくないのだが……こうなってしまつては仕方ない……」
ダダはそう言うのとコードらしきものを電線につなぎ、電線から奪った電力を手に持ったそれに注ぎ始めた。

「ウルトラマンゼロ……、目には物を見せてやる。この、レギオノイドダダカスタムで！」

幕が上がり、それぞれ三色の衣装に身を包んだ三人の少女が証明に照らされる。

そこで見えた彼女たちの表情は、やはり陸が予想していたものと同じだった。

戸惑いを隠せない梨子。不安げに千歌を見る曜。俯いてしまった千歌。

居た堪れなくて、陸も思わず目を逸らす。

ぱちぱちとまばらな拍手が体育館に反響し、寂寥感を余計に煽ぐ。

やっぱり、こんな田舎でスクールアイドルなど、ただの夢物語だったのだろうか。

〈陸。言つたらろ〉

(あ?)

〈信じろつて……、あいつ等を!〉

(何を——)

「私達は、スクールアイドル、セーのっ！」

ゼロに言われて顔を上げた陸の目に飛び込んだのは、

「「A q o u r s だす!!」」

精一杯に声を出す、千歌達の姿だった。

〈な？ 少なくとも千歌はあれくらいでへこたれるタマじゃねえ。お前もよく知ってるだろ〉

「.....」

そうだ、何を弱気になっていたんだ。

昨日曜と約束したばかりじゃないか。皆の為に成功させると。

別に会場を満員にすることが、千歌達の言う成功じゃない。

観客が少なくても、応援が弱々しくても。その見てくれて、応援してくれた人の心に

輝きを灯す。それが彼女達が憧れ、目指したもの。

だから、これくらいのも事で陸がへこたれてはいけない。

(悪いゼロ。俺としたことが)

〈なに、俺はマネージャーだからな〉

(よく言うぜ)

とにかく今は見守ろう。彼女達の思いの形を。

「私たちはその輝きと！」

「諦めない気持ちと！」

「信じる力に憧れて、スクールアイドルを始めました！」

三人が前に一歩踏み出し、精一杯に、伝えられる思いを全てぶつける千歌達。

「目標は——」

「スクールアイドル、μ~~×~~sです！」

そして今、

「聞いてください！」

輝きに魅せられた彼女達の、

「「ダイスキだったらダイジョウブ！」」

Aqoursの、ファーストライブが始まった。

——ダイスキだったらダイジョウブ

「おお．．．．．」

Aqoursのライブパフォーマンス。それを見た陸の口から、感嘆の声が漏れる。

陸だけではない。会場の全員が、A q o u r s の輝きに魅せつけられていた。

「ほお……。これは予想以上だったね……」

オウガにも好感触のようだ。

会場が満員にならなかつたら解散。その事が今となつては惜しい。

もう少し、この先もう少し、この姿が見れたらなど。そう思ってしまう程に魅力的だ。

そして千歌のソロパートが終わり、いよいよクライマックス。その輝きも頂点に達するサビに入ろうとしたその時——、

——バチンッ！

「うわっ！」

〈何だ？ 何が起こった？〉

突然の暗転。流れていた曲も止まり、観客から戸惑いの声が漏れる。

先ほどまでの輝きが嘘の様に、会場を暗闇が閉ざしてしまった。

「よりよつてサビ直前だなんて……。ついてないね……」

陽気なオウガすら落胆するこの現象。何が起こったかは明確だ。

「停電……」

オウガの言葉を借りるが、よりよつてこのタイミング。神に見放されたとしか言いようがない。

「何？ なんなの？」

「ピギイ……」

「ルビイちゃん。落ち着くずら……。停電しただけずら」

「闇……。墮天の漆黒……。これぞ失樂園！」

戸惑いは徐々に人々に伝染していき、やがて会場そのものを包み込んだ。一部何を言っているか分からない者もいるが、戸惑いの声は徐々に増えていく。

「おい、今の……」

その最中、周囲の動揺には見向きもせず、目を細める二つの影が。

「あの声。間違いねえな」

「ああ、行くぞ」

突然の停電に気を取られ、周囲の人々はその影が一瞬で消えた事に気が付かなかった。

一方その頃。停電の原因となったダダは。

『エネルギー充填完了……。ふふ……。見ていろゼロ……。』

縮小カプセルの中に入ったレギオノイドを満足気にながめ、復習する己の姿を想像して身震いするダダ。

『ハハハッ、レギオノイドダダカスタムよ。出し——』

「やっぱテメーか……。」

『誰だ！』

レギオノイドをカプセルから出して巨大化させようとしたダダを、怒気を含む声音が制止した。

ダダが声のする方を見ると、そこには二人の地球人。

ギラリと光る眼光でダダを睨むチンピラと、髭を蓄えた中年の男。

『貴様ら……。俺の邪魔をする気か？ 怪我をしたくなかつたらさっさと失せろ』

「……。失せろダア……。？」

「笑止。それはこちらのセリフだぞ。ダダ」

『ッ!? 貴様ら何者だ!』

ダダが銃から光弾を放つが、二人はいともたやすくそれを払い除ける。

「つたく・・・、任務は失敗するわ。ライブの邪魔はするわ。挙句の果てに飼い主に噛みつくわ。とことん救いようのない奴だなお前・・・」

「全くだ。こんな奴を人攫いに任命したスライの気が知れん・・・」

『ぐッ・・・言いたい放題言いやがつて・・・』

再び銃を構えたダダだが、二人が胸に付けていたブローチを外した瞬間にかしやりと銃を落としてしまった。

『あ・・・・・・あ・・・・・・』

傲然とした態度から一変。信じられないものを見たように体を震わせ、一目散に逃げだそうと踵を返すが、

『待てよ・・・』

『ひ、ヒイイ・・・』

冷たい何かに張り付けられた足は地面から離れず、ただ身が果てるその時を待つだけになってしまった。

目の前には両腕の鋭利な刃に冷気を纏わせたグロッケンと、同じく巨大な両腕のハサミに膨大な熱を籠らせたヴィラニアスが。

浦の星女学院の体育館は、より一層その喧騒が増していた。

突如として訪れた暗闇。途切れたライブ。どよめきを生むには十分すぎる。

千歌達のライブの際に向けられていた時のそれより大きくなつたどよめきが、ステージ上で俯く千歌達を襲った。

彼女達の輝きは、所詮は闇に埋もれる運命だったのか。

「……………こんなのって……………」

喧騒の中、千歌の小さな呟きがやけに強く陸の鼓膜を打つ。

ここまできると、陸もゼロも諦めるほかなかつた。

震える千歌の頬を光る何かが伝つたその時、

その場に舞い戻つたのは、先刻失われた光だった。

「バカチカア！」

それと同時に、ステージ上の千歌を呼ぶ声が会場全体に響いた。

見てみれば千歌の姉美渡と、その背後には。

「……………」

この体育館に入り切るかも分からない程の、大勢の人々が。

「……………、一体……………」

「……………なんだ、そういう事かよ……………、くつ……………、ははは……………」

驚くゼロをよそに、一人突然笑い始める陸。

〈おい・・・、どうした〉

「今にわかる。おい千歌あ!!」

戸惑う千歌に、陸は大声で今何をすべきか教えてやる。

「もう一回だ。もう一回歌え!」

「え・・・、でも・・・」

陸に続き、今度は美渡が、

「アンタ開始時間間違えたでしょー!」

そう。全員開始時間を間違えていたのだ。

正確な開始時間を知らないのは、直接ライブの話聞いた浦の星の生徒。

そして人の話を全く聞いていないオウガのみ。

それ以外は皆ビラを見たり放送を聞いたりして集まってくれた人達。

つまり千歌達が緊張のあまり時間を間違えたせいで、ライブ開始時間そのものが早く

なってしまったのだ。笑うしかない。

「やっぱ私・・・、バカチカだ・・・」

千歌が涙を拭った後、会場を再び輝きが包み込んだ。

「『ダイスキがあればダイジヨウブさ——っ！』」

曲が止み、最後のポーズを決めた千歌達に、惜しみのない拍手喝采が送られた。大成
功だ。理事長にも文句は言わせない。

「良いじゃないか彼女達。君もマネージャー頑張つてね。チャオ」

オウガが人目を盗んで消えていった辺りで、千歌達による最後の言葉、ライブの締め
くくりが。

「彼女たちは言いました！」

「スクールアイドルはこれからも広がっていく！ どこまでだつて行ける！ どんな夢
だつて叶えられると！」

先日千歌から聞いた、μ'sの言葉。三人は最後にこれが伝えたかったのだ。

感動ムードの漂う会場の中、一人ずかずかと千歌達に歩み寄っていく人物が。

生徒会長、黒澤ダイヤである。

ダイヤはステージ前で堂々と仁王立ちをすると、

「これは今までのスクールアイドルの努力と！ 地域の皆様の善意があつての成功ですわ！ 勘違いしない様に！」

「分かつてます！」

「ッ!？」

傲然と言い放つダイヤに、千歌は真正面から言い返した。

「でも、でもただ見てるだけじゃ始まらないって！ うまくは言えないけど！」

「こんなセリフ事前に用意していなかった。つまり千歌のアドリブ。千歌が思っていることそのままの言葉。」

「今しか無いこの瞬間だから！」

千歌は曜と梨子の手を取り、二人も察したように次の言葉を紡いだ。

「「輝きたいっ！」」

十六話 新たな火種（文字通り）

「しよ——にんっ！」

再び鞠莉に承認のハンコを押され、陸は浦の星女学院の中を歩いていた。

（額に押すの辞めてくれないかな……）

〈でも消したら不法侵入扱いになんדר？〉

（他に方法ないのかよあの人……、つか千歌も何の用で呼んだんだ全く）

大成功に終わったファーストライブから数日が経った。

会場を満員にするという鞠莉との約束を果たし、晴れてスクールアイドル部が承認されたらしい。

何でも部室を陸に見せたいとの事だったが……、絶対裏がある。

〈にしても、あんなだけ厳しい条件出して嫌がらせしたと思ったら、割とあっさり承認した

よな、鞠莉の奴〉

（……まだ何か企んだりして……）

〈ない……、とは言い切れないな〉

まだ油断せずにいた方がよさそうだ。

陸を学校に入れる事に何の抵抗もないようだし、まさか浦女に転校させるとか言う話
は本気で言っていたのだろうか。

（まあそれはいいや。部室、体育館って鞠莉さん言ってたよな）

〈ああ、広くていい所デエース、とも言ってたな〉

ゼロの全く似てない物真似はさておき、体育館なら何回か言ったことがあるので迷う
心配はないだろう。

「ん？」

「あら……」

見覚えのある顔が目に入り立ち止まる陸を、その人物、黒澤ダイヤも気付いたように
見返してきた。

「えっ……と、確か仙道陸さん、でしたっけ？」

「ああはい。そうですが……えっと、黒澤さん……？」

「ダイヤでいいですわ。妹もいますしね」

陸の存在を確認したダイヤが陸に近寄ってくる。

本来女子校にいないはずの陸を見ても彼女が騒ぎ立てないのは、恐らく額にある承認
の文字の力だろう。

もつともこの承認の文字が通用するのはあの時理事長室にいた数名だけだが。

「今日はどのような用件で？」

「あー、何か千歌達が部室が出来たから見に来いと」

「・・・そんな理由で・・・、入校を認めてしまう鞠莉さんも鞠莉さんですわ」

それに関しては陸も全くの同意見である。

「まずいならもう帰りますよ？ 周りの視線も痛いし・・・。やっぱり男は異質な存在か・・・」

「それは恐らく額の間抜けなものが原因かと」

びしっと陸の額を指さすダイヤ。

「・・・ついて来なさい。ちゃんとした入校証を差し上げますわ」

「いいんすか？」

「・・・貴方は鞠莉さんに気に入られているようですし・・・、それに周りに比べて常識的ですので、スクールアイドル部や鞠莉さんのストッパーになれるかと」

「・・・ウチの馬鹿どもが申し訳ございません」

ダイヤの表情を見れば、今まで千歌達や鞠莉にどんな苦勞をさせられてきたか分かって頭が下がる。

「こちらをどうぞ。今後はこれをわたくし鞠莉さんに見せれば入校を許可致しますの

で」

「どうも……」

生徒会室にて入校許可証を受け取った陸が、ダイヤに頭を下げる。

〈陸。携帯鳴ってるぞ〉

「え？ あ、マジだ」

画面を見ると千歌だった。ダイヤがいるのでここは切らせてもらおうと思ったが、ダイヤがどうぞ、とジェスチャーをしているのでお言葉に甘えて出ることにする。

「もしもし……?」

『陸ちゃん遅い！ 今どこ?』

「生徒会室」

『ええっ!? じゃあダイヤさんも……』

「いますわよ」

陸から携帯をふんだくったダイヤが千歌との通話を始めた。心なしに怒っている様に見えるのは、普段千歌から聞かされる話が全て怒られたという話だからだろうか。

「高海さん……。わたくしに断りもせず殿方を学校に呼ぶとはどういうつもりです

の……?」

『ヒイイ……』

訂正、お怒りでいらっしやった。

『い、一応鞠莉さんに許可は……』

「問答無用。今すぐ生徒会室にいらっしやい」

『そんなあゝゝゝ、陸ちゃん助け——』

一歩的に会話を進めたダイヤはそこで通話を切ってしまった。陸に携帯を返却すると、今度は穏やかに微笑み、

「と、いう訳で、お手数ですが高海さんをここに連れてきていただけませんか？ 恐らく逃走を図っていると思われるので」

「………了解です」

ダイヤの威圧感たつぷりの笑みを見て、従わなければ殺られる気がした陸は、曜の様に敬礼をすると一目散に生徒会室から出ていった。

「おいーつす。つて、何だこれ。荷物ばつかじやねーか」

鞠莉の言うスクールアイドル部の部室に入った陸の目に飛び込んだのは、山積みになった段ボール軍団だった。

鞠莉の言葉から想像していた部屋とはあまりにも違うその光景に、顔が引きつる。

（もしかして鞠莉さん。ここの片付けさせたかっただけじゃ・・・）

へあり得るな。アイツならやりかねん

陸とゼロの鞠莉への印象がどんどん悪くなる一方で、せっせと段ボールの山と奮闘する少女が二人。

「あ、陸。やっと来た」

「さつきダイヤさんと一緒にいるって聞いたけど、よく追いつけなかつたね」

曜と梨子だった。軍手をつけて腕まくりをするその姿は、引越し業者に見えなくもない。

「あれ？ 千歌は？」

「さつきダイヤさんに呼び出されていったけど・・・」

「何だ。素直に従ったのか」

まあ、あの人に逆らう勇氣は陸もない。

「で、一体何の用で呼び出されたんだ俺は？」

「あーそうだった。ハイこれ」

そう言った曜が差し出してきたのは、何の変哲もない白い軍手。

「手伝って」

「・・・相変わらず俺の扱い雑だなお前等」

こんな理由で呼び出されたのかと思うと涙が出てきそうさ。

「ここ前に何に使われてたんだ？」

何だかんだ言つて結局片付けを手伝い始めて数分。とあるものを見つけた陸が二人に問いかけた。

「さー？ 鞠莉さんその辺何も言つてなかったけど・・・、何で？」

「いやほら、これ・・・」

陸がひっそりと佇んでいたホワイトボードを指さすと、曜も梨子も作業の手を止めてそちらに視線を移した。

ホワイトボードには、掠れた文字で何か書いてある。

「歌詞、に見えなくもないんだが・・・、桜内は何か分かんない？」

「断片的過ぎてちよつと・・・」

これが置いてあるという事は、以前この部屋を使っていた人がいたという事か、はた

またただの物置になっていただけか。

この部屋自体に妙な使用感があるので、恐らく前者だろうが、真相は闇の中である。

「………ん？」

「？ 陸、今度は何？」

「いや……、何か今誰かいた気がしたんだが……、気のせいかな？」

「ピッ……」

可愛らしい声が聞こえたと思ったら、とたとたと駆けていく音が徐々に遠くなっている。どうやら誰かがいたという事は間違いないらしい。

（てか……、今の声って黒き……じゃなかった。ルビィちゃんだよな……。顔出てきやいいのに）

そう思ったが、自分がいたことで遠慮した可能性があるもので、声には出さない陸だった。

「こんにちわー!!」

「ずらっ?」

「ピギユ……」

ダイヤのお説教を終えて帰ってきた千歌を加え、何故か部室に積み上げてあった本の所在を確認するために図書室にやってきた陸達を出迎えたのは、どこかで聞いた悲鳴だった。

「あー、花丸ちゃんに……、ルビイちゃん!」

「ピギイツ!」

何故か扇風機の後ろに隠れたルビイを千歌が指さすと、ビクンと肩を震わせるルビイ。

「こ……、こんにちは……」

「ルビイちゃんの言う通りだ……でも何で仙道さんが……」

ルビイが千歌に挨拶を返し、花丸が本来この学校にいないはずの陸を見て首を傾げる。セリフからして陸が浦女にいることは知っていたらしい。となると、やはり先程の気配はルビイか。

「あー、何か部室の片付け手伝って言われて……、一応入校許可はもらったから安心してくれ」

陸が先程ダイヤからもらった許可証を見せると、花丸は納得したように首を振った。「で、部室掃除したら何冊か本が見つかったんだけど……、これって図書室の本でいいの？」

陸抱えていた本を花丸の目の前に置き、花丸が確認しようと本を調べ始める。やがて所在が分かったのか顔を上げ、

「多分、図書室の本だと思います。持ってきてくれてありが——」
「スクールアイドル部によろこそー！」

花丸が何か言うのを遮った千歌の声。

見ればいつの間にかルビイと花丸の腕を握っていた

陸も曜の梨子も、そんな千歌にジト目を向ける。

突然の事に戸惑う二人を一切意に介す様子もなく、さらに二人の手を強く握った千歌が続けた。

「ちゃんと部活として成立したし、悪いようにはしないから、二人共可愛いし、歌ったら絶対キラキラするよ。ていうか、ルビイちゃんの手やけに熱くない？」
〈何っ……？〉

「ピ、ピギ……」

「お、おら……」

「おら？」

「ああいえ！ まるそういうの苦手って言うか……、あはは……」

「る、ルビイも……」

（ん……？）

陸はルビイの返事がどこか煮え切らないのと、花丸がそんなルビイに少し悲し気な視線を向けている事に気が付いた。

まるでルビイが何か無理をして、花丸がそれに気付いて心配しているような。

「くにき……」

声を掛けようと思ったが、突然体が動かなくなる。そう思った次の瞬間。

『おいお前、ちよつと手を見せろ！』

無理矢理体の主導権を奪ったゼロが、ルビイの手を握ろうと腕を伸ばしたのだ。その場にいた全員いきなり陸の声音が変わった事に驚いていたが、やがてそれは陸の行動への驚きへと変換される。

「陸ちゃんダメッ！」

「ピッ……」

青ざめた顔の千歌が制止するのも聞かず、ゼロがルビイの腕を取ったその瞬間、ルビイの顔がどんどん青く染まってゆき、

『ツ！・・・この温度、やはりリトルス——』

「ピギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

次の瞬間ゼロを襲ったのは、ルビイの上げた超高音の悲鳴と、

『だあああああつっ!!』

超高温の——炎だった。

ルビイの胸の光から放たれた炎の渦が、ゼロを飲み込んだのだ。

「うわっ!」

「ええええええツ!」

「嘘っ!」

「ルビイちゃんっ!」

『あぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ!!』

ゼロが悲鳴を上げながら服に燃え移った火を消そうと床をゴロゴロと転がる中、他の四人の視線はルビイに注がれていた。

その内三人は、赤く光るルビイの胸を見て愕然としている。

そうこの光、前に梨子が発言したものと同じ。リトルスターなのだから。

「陸ちゃん……、あれは無いんじゃない？」

「ホント、常識にも程があるよ……」

「……ゴメンナサイ……」

練習中。突然ルビイの手を握った陸に説教をする千歌と曜と、府に落ちない表情で謝る陸。そしてそれを見て苦笑いを浮かべる梨子。

「ルビイちゃん。極度の人見知りで慣れない人に触れるとああなつちやうんだから」

「いや、でも俺それ知らな——」

「だとしても非常識な行動だつて事に変わりはないからね」

「はい……、申し訳ございません……」

(ゼロ……)

へスマン……。まさかこうなるとは……………」

やったのは陸ではなくゼロだが、ゼロの存在をあの五人に明かす訳にもいかず、仕方なく陸が長々と二人の説教を受けているのだ。

ルビイがあの後すぐに許してくれたのと、この事が姉であるダイヤに知られなかったのは幸いだった。

こんな事が知れたら陸が浦女を出禁にされかねないし、何よりも——、

「それにしても、ルビイちゃんのあの光つて……………」

「うん……。梨子ちゃんと同じ……………」

ルビイから発生したあの光、やはりリトルスターと見て間違いない。

花丸とルビイには陸の手品つて事で無理矢理誤魔化したが、前にリトルスターの発現を見ている三人の目は誤魔化せなかつたようで。

へまさかこんなにも早く次の発症者が現れるとはな……。しかも梨子の時と違って今回は発火能力。発動したらかなり目立つぞ」

ルビイの炎は相当な熱量だった。現に陸の制服は所々焦げ落ちていているし、軽い火傷もしている。あんなもの町中で解き放つわけにもいくまい。

（あの時千歌が言つた手が熱いつてのは、リトルスター発現の前兆だったって訳か……）
へああ、近いうちに黒澤ルビイを狙って連中が動き出すだろうよ」

（学校内での発現だったし、まだ見つかってないんじゃないかねえのか？）

へいや・・・、リトルスター発現者は特殊な波動を放出する。もうとつくに黒澤ルビイがリトルスターを発現させたところはバレてるだろうよ

（・・・・・・つまり監視が必要って事ですね）

へああ、今度は梨子の様にするわけにはいかねえ

監視するにしても陸はさっきの一件でしっかり警戒されてしまった様だし、夜間の監視までは流石に出来ないし、どうしたものか・・・。

へまあ、方法が無いわけじゃないんだけどな・・・・・・

「つか・・・れた・・・」

「流石に・・・、きついね・・・」

「でも……、μ□sも……階段ダツシュ……、してたつて……」

「何でもかんでもμ□sの真似をしようとするんじゃないねえ」

体力作りの為に走ろうと千歌が提案し、淡島神社の階段をランニングし始めた千歌達。

実はこの淡島神社の階段。鬼の様に長い事で地域住民には有名で、近くに上り下りできる階段がここぐらいしかないから仕方なくここで始めたものの、あまりの長さに三人娘は途中で膝を折ってしまった。

「ていうか……、何で陸は……、平気なの……?」

「さあ? 毎日毎日どっかの誰かさん乗せて自転車漕いでるからじゃねえの?」

なんて皮肉を言ってみたが、実際はゼロとの一体化による身体強化がもたらした莫大なスタミナのおかげである。

（それでゼロ。さっき言ってた方法ってなんだ?）

〈ああ、俺が黒澤ルビィに憑依する〉

（は? 俺の体もう大丈夫なのか?）

確かゼロの話では、まだ傷が癒えていない為、ゼロが出ていったらまた傷口が開いて死ぬとの事だった。

〈ああ違う違う。一体化じゃなくて憑依だ。俺の精神だけあいつの体に移させるん

だよ」

（お前……。そんな事もできるのかよ。つか、それで一体何になるんだ？）

〈危険な奴が近づいてきたら俺があいつの体に乗っ取って戦う〉

（……わーたのもしー）

へただその間陸は俺に変身が出来ない。仮にそのタイミングを見測られて怪獣を送り出されたらどうしようもないからな……。これを決行に移すかは他の方法が思いつかなかったらだ。もう数日は奴らも行動を起こさないとしようし、じっくり考えよう（そんな気長に捉えてていいのかねー）

エレキング出現の時と言い、ダダによる梨子誘拐事件の時と言い。尽くゼロの発言がフラグとなっているので、今回も覚悟はしておいた方がよさそうだ。

「あれ？ 千歌？」

そんな陸の耳朶に聞き覚えのある声が触れた。

声の主は果南だった。千歌達と同じように動きやすそうな格好でへたり込む千歌達の目線の上、淡島神社の階段を駆け下りてきている。

「もしかして上まで走って行ってたの？」

「まあ、日課だから」

「日課？ こんなのが？ 嘘っ？」

あっけらかんと返した果南に、千歌達が信じられないと言った顔になる。

「千歌達こそ、何でこんな所に？」

「ほら、スクールアイドルの為の体力作りで」

「ああ、そっか。まあ頑張りなよ！　じゃあ私店開けないといけないから！」

そう言うとき果南は再び駆け出し、階段を下って行った。どうしてか全く息が上がっていないその姿に戦慄を覚えるAquours三人。

「果南ちゃん……。体力どうなってるの？」

「体力お化けだとは思ってたけど……。まさかこれ程とは……」

「ありえない……」

まだ登り切ってすらいない三人がこんな調子なのを見れば、果南がいかに凄いかが分かる。

（もしかして果南姉ちゃんもウルトラマンと一体化してたりすんのかな……。？）
（それは無いと思うが……。、確かにあの肉体は素晴らしいな）

（何か変な意味で聞こえるから辞めてくれ……。）

ゼロと陸がルビイを守る方法を画策している一方。

『貴方にこの怪獣を託します。ダダの時とは違い、今度こそリトルスター発現者をここに連れてきて下さいね……』

『はっ！』

闇の中、次なる刺客が差し向けられようとしていた。

十七話 策謀の十字架

早朝の内浦に響く、戦うゼロの声。

『アエヤア!』

その日は早朝から怪獣が出現し、いつも静かなはずの内浦の朝は脅かされた。

「つたく、朝っぱらから何だっつてんだ」

『へっ、おかげで早起き出来たじゃねーか。良かったな』

「正確にはお前に叩き起こされたんだけどな」

『怪獣の鳴き声や地響きが聞こえても起きないお前が悪い。オオオウラアツ!!』

ゼロがその怪獣、剛力怪獣アロンをフルパワーで投げ飛ばし、海に叩き込まれたアロンが派手に水飛沫を上げる。

『こいつ地味に力強えな……。エメリウムスラッシュ!!』

ゼロの額のビームランブから放たれた光線がアロンの首元から縦一直線に焼き切る。

『ツ!!』

アロンが爆散し、再び静寂が舞い戻った町を見て、ゼロは消えていった。
『ふっ……、それがあなたの今の力ですか。ウルトラマンゼロ……』

アロンを差し向けた宇宙人が、今の戦いを分析していた事も知らずに。

「体験入部？」

「うん！ 二人ともどうかなく？」

場所は移り浦の星女学院。

登校した千歌達が真っ先にやって来たのは、花丸とルビイがいる一年生の教室だった。
た。

「いきなり入部ってのもどうかと思ったからさ、体験入部でスクールアイドルの事知っ

てもらって、その後に入部してもらおうかと」

「いや千歌ちゃん、もうそれ入部決定しちゃってるじゃん。体験入部する意味ないじゃん」

「まあ、とにかく！ 如何かなお二人さん！」

ずいっと顔を近づけた千歌に花丸は若干引き気味になり、ルビイに至っては錯乱してしまっている。

「い、一応考えておきます・・・」

ルビイの代わりに花丸が答えると、「じゃあよろしくねー」と言つて千歌達は教室から出て行った。

「どうするの？ ルビイちゃん・・・？ スクールアイドル。ホントはやりたいんでしょ？」

「うゆ・・・、でもお姉ちゃんが・・・」

とあることから姉であるダイヤを気遣い、素直になれないでいるルビイに花丸は仕方ないと息をつき、

「まるは・・・、ちよつとやってみたいかなあ・・・」

「ええっ?!」

花丸が口にした言葉に、ルビイが目を剥いて驚く。花丸は昨日千歌にやってみたいか

と言われた時、自分には無理だと言っていたのに、それが一体何があつてスクールアイドルをやりたいと言ひ出したのか。その事を不思議に思つたルビィは首を傾げる。

「何でいきなり?」

「あの時ライブを見て・・・、ああ、いいなあつて・・・。変?」

「変じゃない! 全然変じゃない! むしろ花丸ちゃんがスクールアイドルに興味を持つてくれてルビィ嬉しいよ!」

(いきなり元氣になつたずら・・・)

一瞬だけ苦笑いを浮かべた花丸は、今度はルビィの手を握つた。ルビィの手は興奮しているのかとても熱い。

「でも、まる一人じゃ不安だから、ルビィちゃんも一緒にやつてくれないかな? やつてみたいんでしょ?」

「・・・・・・そうだけど・・・、お姉ちゃん嫌がると思うし・・・」
「だから先輩達も体験入部つて事にしてくれたんだよ。だから、ね?」

ルビィはしばらく考え込んで、スクールアイドル部に体験入部したことを姉に知られて怒られる恐怖と、ずっと憧れてたスクールアイドルの体験が出来る高揚感を秤にかけた。

その結果。

「……花丸ちゃんと一緒になら……」

後者が勝り、ルビィが首を縦に振る。

それを見て花丸はにっこり笑うと、

「じゃあ、放課後先輩達の所いこっか」

「うん！」

「ホントツ!?!」

「はい！ よろしくお願いします！」

放課後、すっかり片付いたスクールアイドル部部室。

花丸とルビィが今朝提案した体験入部をしてみたいと、部室にやって来たのだ。

「やった……、うう……やった！」

喜びをかみしめた千歌が飛び上がり、ぴよんぴよんと部室中を駆け回る。

「これでラブライブ優勝だよ！ レジエンドだよ！」

「待って千歌ちゃん。今朝も行ったけど体験だから」

「いいんだよー。ここで興味をもってもらえれば！」

二人を、正確にはルビィを体験入部に勧誘した本来の理由も忘れてらしい千歌の興奮はまだ冷めやらぬようで。

「どうせならもうこのまま入部してくれてもいいんだよー？」

「こんな事すら言う始末である。」

「それは……、じっくり考えてから……」

「何でー？」

呆れ気味に、曜は千歌にも説明するようにルビィに言った。

「生徒会長……、ダイヤさんの事でしょ？」

曜の問いにルビィは頷き、

「はい……、だからここに来たことはお姉ちゃんには内緒で……。え？」

ルビィの言っている事を全く聞いていなかった千歌は、既にAqoursのポスターに花丸とルビィの名前を付け足していた。

「できたっ！」

「千歌ちゃん。人の話はちゃんと聞こうね？」

千歌が呆れ気味の梨子に突っ込まれるのを見て、このままじゃ埒が明かかないと思った曜は、こっそり陸の携帯番号をコールした。

「い、いつもこの階段を上ってるんですか・・・？」

「ル、ルビイ死んじゃうかも・・・。無理だよお・・・。」

「大丈夫だよー。途中休憩も挟むからー」

学校で一通りの練習メニューをこなした五人は、仕上げの階段ダッシュの為、淡島神

社に来ていた。

現在淡島神社の階段のあまりの長さに、花丸とルビイが絶望しているところである。

「・・・で、何で二人を体験入部に誘ったんだ？」

曜に呼び出された陸が、花丸とルビイに聞こえない様に曜に耳打ちする。

「ほら、昨日ルビイちゃんが火を噴き出したのって、前の梨子ちゃんと同じでしょ？」

梨子ちゃんって、アレが原因で宇宙人に狙われてたと思うんだ」

「ほお・・・」

まさかそれがウルトラマンの力を宿したりトルスターで、それを所持していると怪獣を呼び寄せたりするという事には気づいていないだろうが。

「で、それが何で二人を部活に勧誘する事に繋がるんだ？」

「いやほら、単純に大勢でいれば宇宙人も簡単に手出しできないかなーって・・・、千歌

ちゃんが・・・」

曜はそう言った後、花丸とルビイに淡島神社の階段ダツシユの辛さを語る千歌を一瞥した。

「でも、多分千歌ちゃんはその事忘れてると思う」

「ハナから期待してないから安心しろ」

大人数で行動することで宇宙人に襲われる可能性を低くする。きつと千歌達なりに

後輩を氣遣つて考えた策なのだろうが、陸とゼロには都合が悪いし、逆にリトルスター目当ての宇宙人には好都合だ。

大人数と言えど、所詮は女子五人。優れた科学技術や特殊能力を持っている宇宙人からしたら脅威でも何でもない。

仮に五人とも捕まり、人質にでも利用されたらもう手の打ちようがない。

へとりあえず、今この場はお前も練習に参加しろ。全員から目を離すなよ（ちやつかりとんでもない注文してくるが・・・、実際それしかないよな）

尋常ではない長さの階段を駆け上ると言つても、ゼロと一体化している陸にとっては全く苦じやない。

曜と共に談笑していた四人の元に駆け寄ると、六人で目の前にある長い階段を見据えた。

既に震えだしている花丸とルビィは、後で自分が補助してあげよう。そう決心しながら、

「じゃあ、μs目指してー、よーい・・・、ドンッ！」

千歌の合図で、六人一齐にスタートした。

(おお・・・、ルビィちゃん頑張るな・・・)

階段を上り始めて数分。

陸はルビィの想像以上の粘りに感心していた。ゼロの力を借りてほぼ疲れ知らずに陸にすっかりついてこれているのは、一概にスクールアイドルへの思いだけではなく、負けず嫌いなところがあつたりするからなのだろうか。

それに対してもう一方。

陸は最後尾を走っている栗色の髪の少女の隣に付いた。

「・・・・・・・・国木田・・・、大丈夫か？」

「・・・・・・・・ら・・・、らいじょうぶじゅら・・・・・・・・」

なんて言っているが全く持つて大丈夫そうに見えない花丸。

恐らく地である方言を隠す余裕もなく、倒れそうで倒れないその姿はとても心臓に悪

い。

「……ま、まるの事はもういいから……、仙道さんは先に……。ルビイちゃんに……。ついて行ってあげてください……」

戦争で瀕死の重傷を負った兵士の様な面構えで懇願してくる花丸。当然だがそんな状態の人間を置いていける訳がない。

何よりここで一人にするのは花丸が危険だ。いつ宇宙人がルビイを狙ってくるかも分からないのに。ルビイと最も親しい花丸は、人質として最も狙われやすいと言っても過言ではない。

「……置いていけるわけないだろ。学校は違うけど、君が後輩だって事に変わりはないんだから」

「でも……。ルビイちゃんは……」

「ちよつとは先輩風吹かせろよ。……。セクハラ扱いたくないでね？」

陸はそう言うのと花丸の背後に回り、その背中を押しながら走り始めた。

「先輩に……。悪いから……。まるはいいから……」

「だいじょーぶ。俺体力はスゲーあるから。いいから前見ろ。四人に置いて行かれるぞ」

頑として譲らない陸を見て、花丸は諦めたように前を向いた。

「おい陸。もつと強く背中を押せ。先頭のあいつ等にもいつ刺客が差し向けられるか分からないんだぞ」

（ああつ、馬鹿！ お前のそういう発言は……）

「ピギヤアアアアアア!!」

前方から、恐らくルビイのものとと思われる悲鳴が聞こえた。

（ほら言わんこつちやない!）

やはりゼロはフラグを建てる才能があるらしい。建設して速攻回収するというおまけ付きで。

「何つ……。とにかく行くぞ!」

「仙道さん……。ルビイちゃんが……」

「ああ、ちよつと行つてくる!!」

駆け出して行つた陸を見て花丸はその手に携帯電話を握り、とある人物に電話を掛けた後、陸の後を追わずに階段を下り始めた。

「…………おらの仕事はここまでです。後はルビイちゃん次第だよ……」

今ルビイの身に何が起ころうとしているかも知らずに、花丸はその場から立ち去った。

『オオウラア!!』

身体の主導権を切り替えたゼロが、ルビイに迫る宇宙人の頭部を一蹴した。

『ぐおッ!』

今まさにルビイに触れようとしていたその宇宙人は、蹴り飛ばされて地面を転がっていく。

「陸ちゃん!」

『お前等は下がってろ!』

ゼロが強めに一喝すると、四人とも身をビクンと震わせて後退した。

『いてて・・・、やってくれましたね・・・』

頭部をさすりながら起き上がったその宇宙人は、鳥の様な外見をしていた。

オウムの様な頭部に、鳥のそれを思わせる嘴と両腕の鉤爪。ミカンのヘタの様な模様

をした目。

『ガッツ星人か・・・』

(強いのか?)

『前に親父が世話になつたらしい。何でもセブン暗殺計画とか謳いながら親父に直接対決を申し込んだ面白い奴だつてよ』

(そりや面白いな。で? 結果は?)

『親父が負けた』

(強いんじゃないか!)

『如何にも、未だかつて如何なる戦いにも負けたことのない、無敵のガッツ星人です』

(あ、自分で無敵とか言っちゃうんだ)

恐らくだがこいつもアホ系の宇宙人だと察した陸だった。

『はっ・・・、テメエなんかが無敵を名乗るのはなあ・・・、二万年早いぜつ!!』

弾丸が如し速度でゼロがガッツ星人に肉薄し、鳩尾に掌底を叩き込んだ。屈んだところを畳みかける様に頭部に回し蹴りを入れ、ガッツ星人を思いきり吹き飛ばす。

『がっ・・・、あつ・・・』

『お前等はさっさと逃げろ! こいつは俺がやる』

「陸は?」

『俺はいいからさっさと行け！ 後輩守るのも先輩の仕事だろ!!』

ゼロの説得を聞き入れて階段を下っていく四人。それを見届けると、ゼロは再びフアイティングポーズを取った。

『っあ！ 逃がすか!』

『させるかよ!』

四人の後を追おうとしたガッツ星人にゼロが掴みかかり、その珍妙な目玉に膝蹴りを入れた。

『いだっ！ 目え、目え!』

目を押さえて蹲っている隙だらけの姿をゼロは見逃さず、止めの踵落としを叩き込むとガッツ星人は力尽きたように光の粒子となって消えていった。

(消えた・・・?)

『恐らく、証拠を残さない為に自ら体を消滅させたんだろ。侵略目的の宇宙人がよくやる手だ』

ゼロは四人の降りて行った階段の方を向くと、陸に主導権を戻した。

へとりあえず四人の後を追うぞ。もしかしたら別の刺客がいるかもしれないねえ

「だからそれがフラグに——」

陸がそう言った刹那、

『グウインガアアアヴウウウウツ!!』

「またかつ……、つて、この声……、え……?」

〈陸、どうした陸? 怪獣だぞ!〉

怪獣の咆哮を聞いて動かなくなってしまった陸に、ゼロが慌て気味に声を掛ける。

「ツ! ……スマン……」

〈どうしたんだ急に?〉

「いや……、あの鳴き声、六年前の怪獣の声に似てたからよ……」

六年前の光景がどうしても脳裏に浮かんでしまう陸は、頬を叩いて自分に喝を入れた。

「よし、行くぞ!」

〈おうよ!〉

現れた怪獣が六年前のそいつではないと確認してから、ウルトラゼロアイを装着した。

『レッドキングか……俺に差し向けるにはちよつと力不足だな』

変身を終えたゼロが目の前にいる緑色の怪獣、レッドキングを見るとそんな挑発的な事を口にした。

どことなく先日のブラックキングに似ており、全身を覆う鎧の様な鱗や、太い腕と尻尾を見る限り全く弱そうには見えないが……、ゼロにとっては余裕の相手らしい。

「つ……、ゼロ、あれ」

『ああん?』

陸が指摘した先にゼロが視線を移すと、花丸の名前を呼ぶ千歌達四人の姿が。

「国木田……。いなくなっちゃったのか?」

『帰ったか、または……。と、これ以上は言わない方がいいな』

「気付いてくれてありがとうが……、そこまで言ったらもうアウトだ」

『そーかよ。まあいい。さつさとぶつ飛ばせばいいだけの話だ。ハアッ!』

ゼロがレッドキング向かっていくと同時にカラータイマーが青く煌き、ゼロがルナミ

ラクルゼロにタイプチェンジをした。

『レボリウムスマッシュッ!』

突き出したゼロの掌から衝撃波が放たれ、レッドキングが凄いい勢いで吹き飛んでいく。

『大したことないとは言え、あいつの怪力は凄まじい。接近戦は不利だ』

そう言うゼロはゼロスラッガーを分身させ、自身の周りで回転を始めさせた。それと同時に吹き飛ばされたレッドキングが起き上がった。

『ミラクルゼロスラッガー!』

『グインガアアアアアウウウウウウ!』

それと同時に光の軌跡を描く無数のゼロスラッガーがレッドキングに襲いかかり、レッドキングが溜まらず悲鳴を上げる。

『フンッ! ハア!』

その後もしばらくの間ミラクルゼロスラッガーによってレッドキングを翻弄し続け、レッドキングに疲れが見えてきた辺りでゼロが基本形態に戻った。

『ワイドゼロ——』

『ちよつと待ちなさい……』

『ッ!? 何……?』

レッドキングに止めを刺そうとしたゼロを、聞き覚えのある声が制す。

その声は周囲を反響しており、どこから発せられた声なのかが分からない。

ただこの声は――、

『ガッツ星人……。生きてやがったのか……。』

『当然。私があのような単調な作戦に出るとでも？ あなたが相手をしていたのは私の分身です』

分身。どおりで倒した後すぐに消えてしまった訳だ。

『テメエ！ 一体どこにいやがる！ 隠れてねえで出て来やがれっ！』

ゼロが怒りを露わに吠えるが、ガッツ星人はそれに全く怯む様子もなく続ける。

『まあまあ、落ち着きなさいウルトラマンゼロ。お楽しみはこれからですよ？』

ぱちんと指を鳴らしたような音の後、ゼロとレッドキングの間にあるものが出現した。

そこで陸とゼロの目に移ったのは――、

『なっ……。』

「……。国木田……。」

透明な十字架に拘束された、国木田花丸の姿だった。

気を失っているのか目を瞑り、首はがくりと項垂れている。

「花丸ちゃんっ!？」

それを見てしまったらしいルビイの悲鳴が聞こえる。それと同時に聞こえるのは、ガッツ星人の高笑い。

『ふっふ・・・、ははははははははははははっ！　これこそが侵略と言うもの！　こうして小さき命を捕えていれば、貴様も人間共も手が出せなくなる。簡単な事だ』

花丸を拘束した十字架が移動していき、淡島神社の本殿。階段の頂上に突き刺さった。

『そしてこうしておけば、リトルスター保持者は自らそこにやつてくる』

『クソツ・・・、汚ねーぞテメエ!!』

『何とも言う方がいい。最終的に勝てばいいのだ』

ガッツ星人の言う通り、四人は花丸を助け出すためにまた階段を上りだしてしまっている。これでは奴の思う壺だ。

「ゼロ。先に国木田を！」

『分かつてるよっ!!』

『おっと、あなたの相手はレッドキングですよ?』

突如花丸の隣に現れたガッツ星人が腕から赤黒い光線を放った。それはゼロを通じて過ぎてレッドキングに命中し、その瞬間レッドキングが咆哮を轟かせる。

『グインガアアアアウウウウウウツ!!』

光線を浴びたレッドキングの身体が変化していったのだ。

マグマを連想させるような赤と黒の体色、ただでさえ太かった剛腕は更に肥大化し、指一本一本がこん棒の様になっていた。

『貴様が今パワー戦術を使えない事は今朝のアロンを使った調査で分かってる。このEXレッドキングの前にひれ伏すがいい!!』

『グウインガアアアアウウウウウウツ!!』

『ぐ・・・、今朝のあれが先兵だったのか・・・』

だが今は過去を悔やんでいる場合ではない、一刻も早くEXレッドキングを倒して花丸を救出し、あの卑怯者を叩きのめさなくては。

『ゼロ。行くぞ!』

『言われなくてもやってやる!! おい鳥ヤロー、せいぜいそこで謝罪の言葉でも考えておくんだな!』

『ええ、その時を楽しみにしていきましょう。・・・今のあなたに出来るのならね』

『ほぎきやがれ。行くぜエ!』

先手必勝。そう言わんばかりにゼロが拳をEXレッドキングの腹部に叩き込むが、

『あっぢっ!!』

「何だこれ．．．、ブラックキングの時の数倍熱いぞ．．．」

熱した鉄にでも触った様な高熱が腕を焼き、思わず腕を抑えるゼロと陸。

その瞬間にEXレッドキングの殴打がクリーンヒットし、派手に吹き飛ばされてしま
う。

鈍器の様に太いその腕で殴られた衝撃は想像していたよりも大きく、視界が朦朧とし
てうまく立ち上がれない。

『陸．．．．．、大丈夫か．．．？』

「ああ．．．、何とか．．．」

ゼロが再びルナミラクルにタイプチェンジをし、ミラクルゼロスラッガーで反撃をす
るが、強化されたEXレッドキングには全く歯が立たない。

「装甲が厚過ぎる．．．．．」

ガッツ星人の言う通り、今のゼロでは圧倒的にパワーが足りない。

『グインガアアアアウウウウウウツ!!』

陸がぼやいたその時、EXレッドキングが両腕を地面に叩きつけた。するとその部分
からゼロに向かって大地が裂けて行き、裂けた大地から炎が噴出してゼロに襲いかか
る。

フレイムロードと呼ばれるEXレッドキングの必殺技だ。

『がっ・・・・・・・・、あああああああつ!!』

業火に焼かれたゼロがその場で膝を折り、あまりのダメージに通常形態に戻ってしま
う。

「・・・・・・・・つ・・・・、つ・・・・、どんな力してたらそんな攻撃が出来るんだよ・・・・、
クソツ・・・・、滅茶苦茶熱い・・・・」

フレイルムロードで噴き出た炎の熱量は、EXレッドキングの体温の比ではなかった。

まるでマグマに包み込まれたかの様な圧倒的豪熱。次にあれを喰らって無事である
保証はない。

『このEXレッドキング、以前戦った個体とは格が違う・・・・。力も熱量も、前とは比べ
物にならないぞ・・・・』

今EXレッドキングを倒すために必要とされているのは、あの鈍器のような剛腕に対
抗できるパワー。つまりは筋力。

ルナミラクルはスピードや超能力が強化される代わりにパワーが落ちる。通常形態
のゼロでも、これに対抗できるほどのパワーはない。

「・・・・・・・・どうしたらいいんだよ・・・・」

『ああ、こりやちよつとヤバいな・・・・』

対抗手段もなければ、花丸が捕らえられている為撤退もできない。

ただのアホだと思っていたガッツ星人に、ここまでやられるとは。

『グインガアアアアアウウウウウウウツ!!』

絶望的状况に追いやられた二人の前で、EXレッドキングは更に強く雄叫びを上げた。

十八話 前に進む力

「花丸ちゃん！ 花丸ちゃあん!!」

「ルビイちゃん待って！」

花丸が囚われている事を知ったルビイは、疲れも忘れて必死の形相で階段を駆け上がっている。

花丸への強い思い故か、千歌達はその背中を捉えることが精一杯で全く追いつくことが出来ない。

その速度は、先程練習で階段を登っていた時よりも遥かに速い。

(花丸ちゃん……)

ルビイは今なんとなく、花丸がスクールアイドル部の体験をやりたいたった理由が分かった。

ずっとそうだった。中学の時に会って以来、ずっと。

優しく、周囲に気を配る気遣いが出て、自分の事なんていつも後回しにして。

今日のスクールアイドル体験入部の事だって、姉に気を遣ってスクールアイドルに、

自分の気持ちに素直になれない自分の背中を押そうとしてやってくれた事だ。

自分がウジウジしていたから、花丸はルビイと一緒に体験入部をしようと言ってくれた。

運動が得意じゃないのに、階段を登っていた時だつて、あんなに苦しそうだったのに。それでも、ルビイの力になってくれようとしてくれた。

(何で……、優しすぎよ花丸ちゃん……)

昨日突然陸を襲った炎。千歌達は陸の手品だと言っていたが、今となってはそれは嘘だと断言できる。

あの時現れた宇宙人は、ルビイの光の力が目当てだと言っていた。だからきつとあの炎はルビイが出したものだ。

何がどうなっているかは分からないけど、一つ確かな事がある。

それはルビイのせいで花丸は宇宙人に捕まってしまったという事。

自分に協力してくれたばかりに。

助けられてばかりだった。寄り添ってもらってばかりだった。

だから今度は、ルビイが助けてあげる番だ。

決意を胸にルビイがその速度を上げると、ルビイの胸が赤く煌くのは同時だった。

『ラアアアアアアアアアッ!!』

EXレッドキングの懐に肉薄したゼロが、ガトリング砲が如し速度で連続して拳を突き出していた。叩きつける拳は焼け、今にも爛れ落ちそうな程に痛む。それはゼロと共に戦う陸も同じだ。

けど今この拳を止める訳にはいかない。

今はまだEXレッドキングは感知していない様だが、ルビイにはリトルスターが宿っている。

次に力強くそれが発現した時、EXレッドキングは間違いなくルビイに向かっていくだろう。

焼け石に水だろうが何でもいい。少しでも多くゼロに意識を向けさせ、遠ざけなければ

ば。

『シエヤアツ!!』

ルナミラクルにタイプチェンジし、レボリウムスマッシュで吹き飛ばそうとしたが、強化され重量を増したその肉体は先程の様には吹き飛んでいかない。

二、三歩後退させた程度で、当のEXレッドキングはケロツとしている。

『フルムーン——』

『グインガアアアアアウウウウウツ!!』

『があっ!!』

その巨体の周りを旋回し始めたゼロを横一線、燃える炎の拳が捉えた。

吹き飛ばされたゼロは淡島神社の階段のすぐ横に叩きつけられ、階段を登っていた千歌達の悲鳴が響く。

「……っ……、っ……、っ……、ゼロ……、大丈夫か……?」

『……お前こそ……、息っ……、上がってんぞ……』

力を入れると全身に痛みが走るが、それでも体に鞭を打って立ち上がったゼロと陸の双眸に映ったのは、再びフレイムロードを繰り出したEXレッドキングの姿だった。

「また……」

次あれを喰らったらどうなるか分かったものではない。だが今かわせばフレイム

ロードは確実に千歌達と共に淡島神社を吹き飛ばすだろう。

『ゼロツインシユートツ!!』

二本のゼロスラツガーをカラータイマーの左右に装着したゼロの胸部から、光の粒子が放たれる。

『ぬっ……、ああああああああああああああアッ!!』

『ガアアアアアアアアア……』

フレイムロードを押し返したゼロツインシユートがEXレッドキングにヒットする。

ようやく悲鳴らしい悲鳴を上げたEXレッドキングだが、フレイムロードを押し返したゼロツインシユートは威力が落ちており、致命傷とまではいかなかったようだ。

『ぐっ……、うう……』

「ヤバイ……、力が……」

殆ど全力で光線を放ち、激しくエネルギーを消費したゼロのカラータイマーが点滅を開始し、膝をついたゼロが肩を大きく揺らして息を荒げる。

『グルルルルル……』

だがEXレッドキングの双眸はゼロを捉えていなかった。

まるで引き寄せられる様にEXレッドキングが見つめるその先には頂上に辿り着き、ガッツ星人と対峙するルビイがいた。

「う……。うゆ……。」

『フツ……、思ったより早かったですね。やはり人間の友情と言うものは実に利用しやすい』

花丸を助ける事だけを考え、頂上に辿り着いたはいい。

だがそこにいた。恐らく花丸を捕らえた犯人であろう宇宙人と対峙すると、途端に体が動かなくなってしまうのだ。

怖い。

生まれたての小鹿の様に膝は激しく揺れるのに、足は張り付いてしまったかのように地面から離れようとしてくれない。

「は………、花丸ちゃんを………」

『ん〜?』

「花丸ちゃんを………、返してください………」

それでも何とか声を絞り出すが、小さすぎるその声はルビイの口から出た瞬間に霧散していく。

『聞えませんが〜………、ハア!』

「ピギヤアツ!!」

意地悪そうにほくそ笑むガッツ星人が放った光弾がルビイの足元に着弾し、ルビイが悲鳴を上げて蹲ってしまった。

怖い。

怖い怖い怖い怖い。

今すぐ立ち上がって花丸を助けだしに行きたいのに、体は全くいう事を聞いてくれない。

情けない。こんな時に、友達一人助けにいけないなんて。

徐々に深くなっていくルビイの絶望に呼応する様に、胸に宿った光が小さくなっていく。

『おや、リトルスターが小さくなって行きますね……。宿主が絶望すると消滅するとい

う話は本当でしたか』

そう言ううとガッツ星人は、再びルビイに向かって右手をかざす。

『生きて捕らえよとの命令でしたが．．．．、リトルスターが消えるなら利用価値はないので仕方ありませんね。恨むなら自分の運命を呪いなさい』

バリバリと帯電するガッツ星人の腕がルビイに照準を定め、ちつともそう思つてなさそうに笑つた。

『．．．．．では、さようなら』

『調子乗つてんじゃねーぞコノヤロオオオオオオツ!!』

『ツ！ フツ！』

ガッツ星人が飛びのくと、今の今までガッツ星人の身体があつた場所を銀色の刃が駆け抜けていった。

『ウルトラマンゼロ．．．．、まだそんな余裕があるとは．．．』

『．．．．．?』

ガッツ星人の声音に戸惑いが混ざつた事に違和感を覚えたルビイが顔を上げると、最近話題になつている青い巨人がルビイを見ていた。

「おい、その赤いの。ルビイとか言つたか」

先程とは違う、ついさつきどこかで聞いたような声で、その巨人。ウルトラマンゼロ

とか言われたそいつは、なんとルビイの名前を呼んだのだ。

「助けてやりてえとこだが、生憎俺ああいつの相手て手一杯だ。捕まってるチビはお前が助ける。助けたいんだろ？」

ゼロは太い剛腕を振るう怪物を指さした後、ルビイにそう言つて来た。何とルビイに花丸を救出しろと言うのだ。

「うゆ……、ルビイには……、無理、です……」

か細くそう答えると、ルビイは再び俯いてしまった。翡翠色の瞳は潤み、零れた涙が頬を伝つて地面に落ちる。

「ルビイには無理です………。体も小さいし、怖がりだし………。皆と違つて、一人じゃ何もできないんです。お姉ちゃんや花丸ちゃんがいないと、何もできないルビイには……」

「何言つてんだお前？」

言い募るルビイの言葉を、ゼロは一言で一蹴した。

「俺は出来るか出来ないかの話はしてねえ！ そいつを助けたいか、助けたくないかの話をしてんだよ！」

大剣を手に怪物と戦いながら、強い声音で言い放つ。

「助けてい！ 助けていけど………。ルビイにはそんな事……、何もできないの

に……」

「じゃあ何でさつき長い階段を登ろうと思った!? やる前にお前は無理だと言ったよな!? それでもお前は登った。それは何でだ!？」

「そ……、それは……」

「スクールアイドルが好きだったからだろっ!!」

怪獣の殴打を喰らいながらも、決してルビィから目をそらさずにゼロは言葉が続ける。

「今だってそうだ! 最初泣きそうになって登った階段を、お前今度は休みもせず駆け登ってきたよな!? それは何でだ? そいつを、国木田を助けたかったからだろっ!!」

「つ……」

とても怪獣に一歩的にボコボコにされている奴の言葉ではないそれに、ルビィは呆氣にとられるが、確かにそうなのだ。

辛い、無理だ。そう言った気持ちは確かにあった。

でも、それでも頑張って階段を登れたのは、スクールアイドルが好きだという気持ちが強かったから。

疲れているのにまたあの階段を登れたのは、花丸を助けたいという気持ちが強かった

から。

「はな・・・まるちゃん・・・」

震える膝を抑えて立ち上がり、捕まった親友の顔を一瞥すると、狼狽えるガッツ星人に一步、また一步と近づいていく。

「花丸ちゃんを返してください！」

今度はちゃんと力強く声にした。もう聞こえないなんて言わせない。

小さくなっていた胸の光は再び煌々と力強く輝き、それを目にしたガッツ星人の焦燥は大きくなっていく。

所詮相手は脆弱な人間の子供。慌てる相手ではない。それにゼロもEXレッドキングにやられっぱなしだ。全く焦る状況じゃない筈なのに。

なのに何故、もう追い詰められているかの様な感覚に襲われているのか、ガッツ星人には分からなかった。

『うっ・・・、うるさいんですよっ!!』

そしてここで焦って光弾を放ったのがガッツ星人の失敗だった。

「ツ」

叫んだルビイの決意が具現化したように、胸の光から炎が放たれたのだ。

『がああああああああつ!!』

その炎は昨日ゼロに放った物よりも遙かに強く、光弾を焼き尽くしてガッツ星人を飲み込むようにして襲いかかった。

悲鳴を上げたガッツ星人がくず折れると、花丸を拘束していた十字架が消えていく。

「花丸ちゃんー!」

横たわる花丸を抱き上げるルビイ。

まだ意識は戻っていないが、目立った怪我がないようで安心した。

助けることが出来たのだ。助けられてばかりだった自分が。

勇気づけてくれた巨人——、ウルトラマンゼロを見上げる。

ゼロはまだ怪獣にやられっぱなしでいる。彼は自分の力になってくれた。だから今度は、ルビイがそれを返す番だ。

自分には声援を届けるぐらいしかできないから、今はそれを精一杯にやろう。

「がんばれえええっ!!」

ルビイが心の底からゼロの勝利を願った瞬間、光はルビイの胸を離れてゼロに向かって行った。

『……リトルスターが……』

「ルビイちゃんの……炎……」

ルビイから分離したリトルスターが、梨子の時の様にゼロのカラータイマーから吸収された。

ルビイの髪の毛の様に赤く、燃え滾る様な光。

——友を想い、前に進む力……ストロングコロナ。

頭に声が響く。これも前と同じだ。
と、いう事は。

『へっ………、本番はこれからって事か……』

ゼロが両腕の拳を突き合わせ、EXレッドキングと向き合った。

『前に進む力………、デエヤア！』

ゼロのカラータイマーが赤く煌き、全身が灼熱の炎に包まれた。

燃える炎の間に間に垣間見える肉体は、赤。

赤い上半身と、銀色の下半身。

身体に走るラインの色も銀から金に変わり、力強さが強調された肉体。

全身が燃えている様に熱いが、むしろこの熱さが自信を焚きつける。

ウルトラマンダイナストロングタイプと、ウルトラマンコスモスコロナモードの力を

併せ持った超。パワー戦士。その名も、

『ストロングコロナ！ ゼロツ!!』

全身に纏っていた炎を吹き飛ばし、ゼロが大地を蹴った。

EXレッドキングの腹部を捉えた拳がズドンと気持ちのいい音を鳴らす。

今度のゼロが繰り出した攻撃は、威力が違った。

『グウインガアアアアア!!』

ゼロツインシユート以外でロクなダメージを受けなかったEXレッドキングが、パンチ一つで悲鳴を上げたのだ。

『オオウラァ!!』

炎を纏ったパンチとキツクの連続コンボがEXレッドキングを捉え、ミラクルゼロスラッガーでも傷がつかなかった装甲がどんどん剥がれていく。

「おお・・・、殴つても全然熱くねー」

拳自体の温度がEXレッドキングの体温を上回っている為、熱いという事は全くない。むしろ熱がっているのは向こうの方だ。

形勢が逆転したのは、素人目から見ても明らかだった。

『おのれ・・・、こうなればああああああ!!』

怒号と共に巨大化したガッツ星人がゼロに殴りかかるが、ゼロはノールックでその拳を受け止め、EXレッドキングに向かって投げつけた。

『あつちつ!!』

EXレッドキングと衝突し、背中が焼けたらしいガッツ星人がゴロゴロと地面を転がる。

『デリャァ!!』

『ツ——!』

さっきのお返しだと言わんばかりにゼロがEXレッドキングの頭部を横殴りにし、よろめいたところを背後からがっちりホールドした。

『ウルトラハリケーンッ!!』

回転を加えて放り投げられたEXレッドキングが、竜巻の様な風を巻き起こしながら天高く昇っていく。

そしてゼロの右手が高熱の光を帯びた刹那、

『ガルネイトオ……バスタアアアアアア!!』

ゼロが拳を突き上げ、放たれた高熱のエネルギー弾が空中で身動きが取れないEXレッドキングを木端微塵に消し飛ばした。

『ぐ……どこで作戦を見誤った……完璧な作戦だったはず……』

『そんなん決まってるんだろ?』

ゼロは転がるガッツ星人を起き上がらせると右腕で顔を強烈に殴り飛ばし、続けて首元に燃えるラリアットを叩き込んだ。

立て続けに殴られて頭上にガッツ星人によく似た鳥を出しながらフラフラになっっているガッツ星人をホールドすると、再びウルトラハリケーンで天高く放り投げる。

『ダメエが人間の力を侮っていた。それ以上でもそれ以下でもねえ!!』

『ガアアアアアアアア!!』

断末魔を上げながら、ガッツ星人はガルネイトバスターを喰らって爆死した。

パラパラと灰燼に帰したガッツ星人の肉体が降り注ぐ中、ゼロを呼ぶ可愛らしい声が一つ。

「巨人さーん。ありがとうー！」

花丸を抱きかかえながら、ゼロに向かって腕を振るルビイ。

『巨人さんじゃなくてゼロだ。ウルトラマンゼロ。よく覚えとけ』

ゼロはそれだけ言うのと、空に浮かぶ雲の向こうへと飛び去って行った。

「ちよつと貴方達、今の騒ぎは何ですか？」

陸がゼロへの変身を解除し、頂上にいるルビイ達を迎えに行こうと階段を登っていた

最中。何故か途中のロククテラスで佇んでいたダイヤに捕まり、現在頂上にいた五人と共に怪獣騒ぎの事情聴衆を受けているところである。

大方の説明は陸がしたのだが、ご満足頂けなかったらしく、こうして五人も巻き込んでしまった。なお別に強制された訳ではないが、皆正座中である。

「そもそも、どうしてルビイがスクールアイドル部の方々と一緒にいますの？」

ルビイの格好を見て、スクールアイドル活動をしていた事が分かったのだろう。眼光を鋭くするダイヤに、その場にいた全員が首元に鋭利な刃でも押し付けられたかのような戦慄を覚える。

へライブの時もそうだったが、何でこいつはそこまでスクールアイドル部を目の敵にしてるんだ？

(分かんねえよ……けど——)

——彼女、別にスクールアイドルが嫌いな訳じゃないよ？

陸はAoursのファーストライブの時、電気が復旧した直後にオウガにこんな事を言われたのだ。

何でも電気を復旧するために、ダイヤは雨の中予備電源の機器を取りにいてくれていたらしい。

確かにあの時、千歌達の前に立ったダイヤの肩は濡れていた。

本当にスクールアイドルを嫌っているなら、わざわざこんな敵に塩を送る様な真似はしないだろう。

それにオウガは、それを何か確信付かせる根拠を持つているように見えたのだ。

ダイヤの過去に何かあった。それは間違いないだろう。

・・・最も、それを聞く勇氣は陸にはないのだが。

陸だけでなく他の面々もダイヤの氣迫に押され、一言も物を言えない状態にいる。

ただ一人を除いては。

「あ・・・。あの！」

張りつめた緊張を、その声は打ち破った。

声の主は花丸。何か強い信念のもとにダイヤと向き合っている。

「ルビィちゃんの話を・・・、ルビィちゃんの気持ちを聞いてあげてください!!」

「ルビィの？」

「はい！」

それだけ言うと、花丸はその場から走り去って行った。

「花丸——」

「待って」

陸は花丸を呼び止めようとするルビィの肩を掴んで制止した。陸はルビィがダイヤ

に気を遣って、スクールアイドルに素直になれないでいることは薄々勘づいていた。花丸だつてきつとそれが分かつての行動なんだ。

「国木田がせつかくダイヤさんと話す機会を作ってくれたんだ。それを無駄にするな。国木田は俺が追うか——」

「ピギヤアアアアアアアアアアアアアア!!」

花丸の後を追おうとした陸の鼓膜を、高い周波数の音の塊が襲った。

「で、これはどういうことですか?」

「あの・・・、これは・・・その・・・」

陸がダウンした一方、ダイヤは落ち着きを取り戻したルビィに何故スクールアイドル活動をしていたかを問い詰めていた。

〈お前さつきはルビィにかっこいいこと言ったのに、しまらねえな〉

(うるさい・・・)

ルビイの悲鳴は何か特殊な効果でもあるのか、EXレッドキングと戦って出来た傷が叫ばれる前よりも痛む。

そうだ、ルビイだ。

本音をぶつけられればそこで解決なのだが、いざ姉の前となるとルビイも何も言えなくなってしまう。

「違うんですダイヤさん。元はと言えば——」

「千歌さん！」

代わりに理由を説明しようとした千歌をルビイが制止した。そして覚悟を決めたように、ダイヤの前に立ち、真つ直ぐな視線を向けた。

「お姉ちゃん！ ルビイ！、ルビイね！」

その日、黒澤ルビイは花丸やゼロにもらった勇気を振り絞り、ダイヤに本当の気持ち打ち明けた。

そんなルビイを照らす夕日は、彼女の胸に宿っていた光の様に赤かったという。

次の日。

ダイヤからの許しを得たルビイは、スクールアイドル部への入部届を提出した。

「よろしくお願いします!!」

千歌がそれを受け取ったのを見ると、ルビイは深々と頭を下げた。

「よろしくね!」

「はい! 頑張ります!」

千歌が笑い返すと、それに満面の笑みでルビイが返した。愛嬌溢れるその姿に、部室内に和やかな癒しムードが蔓延する。

「そういえば花丸ちゃんは? あの後どうしてたの?」

ルビイがダイヤに本音を打ち明けた後、皆で花丸を探したのだが、結局見つかる事はなかった。ルビイの携帯に、一言帰るといふ花丸からのメールが送られてきてその日は解散となったのだが、ルビイはその事にすっきりしていない。

「ちよつと……。図書室に行つてきます!」

「ちよ……、ルビイちゃん?」

図書室。

静寂と本の髪の毛の匂いが支配するその世界に、物憂げな顔をした少女が一人。

その少女、国木田花丸の視線は手元のアイドル雑誌に注がれていた。

「まるには……、遠い世界だったずら……」

開かれたページにはμsの星空凜の姿が。

親友のルビイの背中を押して、自分の仕事は終わった。

だからもう、スクールアイドルとはお別れ。

「……バイバイ……」

花丸の中にも確かに存在していた、スクールアイドルへの思いを封じ込める様に本を

閉じようとしたその時、

「花丸ちゃん！」

「ずらっ!?!」

がらりと勢いよく図書室のドアが開き、ルビイが飛び込んできたのだ。

走ってきたのか、肩を大きく揺らしながら息をしている。

「ルビイね！ 分かってた！ 花丸ちゃんがルビイに気を遣ってスクールアイドルを

やってくれてたって！ きつとルビイの為に無理してるんだって、心配だったから！」
それでも物凄い勢いで花丸に詰めよると、花丸への思いを訴え出した。

「でも練習してる時も、屋上にいる時も、皆で話してる時も、花丸ちゃん楽しそうだった！・・・それ見て思った！」

真つ直ぐに花丸の目を見つめるルビイの顔は、いつになく真剣で。

「花丸ちゃん好きなんだって、ルビイと同じくらい、スクールアイドルが好きなんだって！」

「ま、まるが・・・」

「ルビイね！ 花丸ちゃんと一緒にスクールアイドルができたらって、ずっと思ってた。一緒に頑張りたいって思ってた！」

「・・・それでもおらには無理ずら・・・。体力無いし、向いてないよ・・・。それに、昨日みたいに、迷惑かけちゃうずら・・・」

昨日自分があの宇宙人に捕まってなければ、ルビイはもつとスクールアイドルを楽しめていた。危険な目に合わずに済んだ。

だから自分がルビイと一緒にいたら、きつとルビイの邪魔になってしまう。

手元にある雑誌に写っている彼女には、微かな憧れがあった。

やれることならばやってみたい、けど、それで親友に迷惑が掛かるなら・・・。

「……その雑誌に写ってる凛ちゃんもね、自分はスクールアイドルに向いてないって、ずっと思ってたんだよ」

「っ……」

「でも好きだった。やってみたいと思った。最初はそれでいいと思うけど？ それに……」

ルビイが花丸ちゃんの手を握った。昨日の様に熱くはない。けど、温かい。

「花丸ちゃんがいたから、あの時ルビイは勇気がもらえたんだよ？」

「ルビイ……、ちゃん……？」

「ルビイ！ スクールアイドルがやりたい！ 花丸ちゃんと!!」

「まるに……出来るかな……？」

花丸がそう言った時、話を聞いていたらしい千歌達も図書室に入ってきた。

「大切なのは——」

「気持ちだって、やりたいって気持ちが一番大事だって。ゼロさんが言ってた!」

「セリフ取られた……、てかゼロって誰……？ ……でもまあそういう事。大切なのは出来るかどうかじゃない。やりたいかどうかだよ!」

ルビイ、そして千歌の言葉を受けた花丸が、その手を握り返した。その手に二年生三人の手も重なる。

そう、出来るかどうかなど問題でもない。

大切なのは自分がどう思っているか、前に進めるかだ。
花丸を加え、この日 A q o u r s は五人となった。

十九話 墮天降臨

闇の中、蠟燭の炎が妖しく揺れる。

「感じます。聖霊結界の損壊により、魔力高層が変化していくのが世界の趨勢が、天界議決によって決して行くのが……」

その蠟燭の前に、全身を黒い衣装で包み羽を生やした少女が、右目に手をかざしながら何か語っている。

彼女の眼前。起動しているパソコンの画面には自分の姿が映り、カワエエ、また会いに来ます、楽しかったなどの言葉が流れていく。

「かの約束の地に降臨した。墮天使ヨハネの魔眼が、その全てを見通すのです！」

扇風機の風にたなびく羽と衣装。そして長く伸ばした艶のある黒髪。

「全てのリトルデーモンに授ける！ 墮天の力を！」

彼女は目を見開き、眼前の蠟燭を吹き消した。それと同時にパソコンに表示される、放送終了の文字。

「ふふ……」

消えた蠟燭の煙が立ちあがる中、彼女は愉快そうに笑った。

そして――、

「やってしまったあああつ！」

勢いよくカーテンと窓を開き、その年相応の可愛らしい声で叫びを上げた。

「何よ！ 墮天使つて！ ヨハネつて何？ リトルデーモン？ サタン？ いるわけないでしょう？ そんなモー！」

早朝、マンシヨンのペランダからそんな事を叫んだ彼女は、部屋の中に戻ると立て掛けてあつた鏡に自分の姿を映した。

黒いゴスロリに、背中に生やした模造の黒い羽。頭上には黒い輪つかの様な物がびよこびよこ揺れている。

「もう！ 高校生でしよ津島善子！ いい加減卒業するの！」

鏡に映つた自分を説得するように、自分自身を戒める様に鏡に向かって語り続ける。「そう！ この世はもつとリアル！ リアルこそが正義！」

彼女はくるりと鏡に背を向けるとガッツポーズをとった。

「リア充に……、私はなる！」

そう宣言した彼女の脳裏に浮かぶのは、ある意味鮮烈なデビューを飾った高校の入学

式の記憶。

——墮天使ヨハネと契約して、あなたも私のリトルデーモンに……、なつてみない？

教室の前に出て、変なポーズをとりながらそんな恥ずかしい事をのたまう自分。そしてそんな自分に向けられた、ぽかんとしたクラスメイトの表情。

「うあああああん！ 何であんなこと言ったのよ！ 学校いけないじゃない！！」

ゴロゴロと床を転げ回り、こつんと蠟燭を立ててあつた台に頭をぶつけた後。彼女、津島善子は頭を抱えて悲痛な叫びを上げた。

そして偶然、通学中善子の住むマンションの前を通りかかっていた陸とゼロは、

「……………ホントに何だよ。ヨハネって……………」

〈さあ？ 知らん〉

放課後、浦の星女学院スクールアイドル部部室。

「うーむ・・・」

パソコンとにらめっこしている千歌が唸った。

「今日も上がってない・・・」

「昨日が4856位で、今日が4768位」

「まー、落ちてはないけど・・・」

「一日で一気に上がるって方が無理だろ。下がってないだけ幸せと思え」

部室にいるのはスクールアイドル部部員である五人と、もはや普通に浦女に入れるようになった陸。そろそろ鞠莉が何かを仕掛けてきそう怖い。

現在この六人で、今A q o u r s が全国のスクールアイドルの中でどのくらいの順位にいるのか調べていたところである。

全国のスクールアイドルがどの程度いるかは知らないが、4768位となると、まだまだ下の方だろう。

「ライブの歌は評判いいんですけど・・・」

「それに新加入の二人も可愛いって」

「そうなんですかつ!？」

「特に、花丸ちゃんの人気が凄いなよね」

「花丸ちゃん応援してます……、花丸ちゃんの歌っている所が早くみたいですよ？　ね？　ね？　大人気でしょ？」

陸がその中の一文を読み上げると、何故か千歌が胸を張る。そんな中花丸がフラフラとパソコンの前に移動してきて、

「これが……、パソコン……？」

「そこっ!？」

曜が立ちあがってツツコむ。

「もしかして……、これが知識の海に繋がっているという……、インターネットト……？」

「まあ、そうだな。……知識の海に繋がっているかは置いておいて……」

「おおお……」

キラキラと目を輝かせ、目の前のパソコンをまじまじと見つめる花丸。

そんな彼女を見た千歌が、ルビィに耳打ちをする。

「花丸ちゃん。パソコン使った事無いの……？」

「実は実家が古いお寺で、電化製品がほとんどないらしくて……」

「そうなんだ」

「この前沼津行つた時も……」

ルビイの話曰く、花丸は自動センサーの蛇口や、ハンドドライヤーを見たり使つただけで大興奮していたそう。しかもハンドドライヤーに至つてはそれで髪を乾かそうとしていたらしい。よもやここまで文明に置いて行かれた女子高生がいろいろとは。

「よし、今日からクニキダ原人つて呼ぶか」

「流石に失礼すぎるでしょ……」

「さ、触つてもいいですか？」

陸の失礼な発言など微塵も聞いていなかったらしい花丸が、興奮気味に千歌にパソコンを触る許可を求めた。

「もちろん！」

「わあああ……」

千歌が快く承諾すると、花丸はパソコンに手を伸ばしていった。

「……ん？」

やがて花丸の目に留まつたのは、キーボード右上にある光るボタン。

「ずらっ」

花丸がそのボタンを押すと、パソコンの画面がブラックアウトした。

「何押したのっ!? いきなり……?」

「え……、あ、えへ……? 一つだけ、光るボタンがあるなーって……」

花丸が言い終わる前に、風の様な速度でパソコンの前に移動した曜と梨子。

「大丈夫!」

「衣装のデータ、保存してたかな……?」

慌てだす二人を見て、花丸が泣きそうな顔で周りに意見を求めた。

「ま、まる何かいけないことしました……?」

「アハハ……、大丈夫大丈夫……」

「ううう……」

苦笑いしながら慰める千歌を見て、花丸は余計に泣きそうな顔になった。

ちなみに衣装のデータは何か無事だったらしい。

「おおー……。こんなに弦法法師、空海の情報が？」

「うん。ここで画面切り替わるからね」

「未来ずらー……。」

屋上。

練習しに来たはずなのに、何故か曜が花丸にパソコンの使い方をレクチャーしている。

「もうっ！ これから練習なのに」

「少しぐらいいいんじゃない？」

「それよりランキング何とかしなきゃだよねー……。」

「毎年スクールアイドル、増えていますからね」

「そうなのか？」

「はい。年を重ねるにつれて人気も増えますから……。」

ただでさえ多いのにこれ以上増えるとなると、ますますAqoursが人気になれる可能性が薄くなるだろう。千歌の言葉を借りると、前途多難すぎる。

「しかもこんな何もな場所の地味&地味&地味! . . . なスクールアイドルだし」

「全内浦民に謝れこのヤロー」

「やっぱり目立たなきや駄目なの?」

「人気は大事だよ」

「何か. . .、ないかなあ. . .」

「そうね. . .、名前をもっと奇抜なやつに変えるとか?」

「奇抜って. . .、スリー. . .、マーメイド?」

「っ!」

「あ、今ならファイブか」

「それは忘れてって言ったでしよ〜」

「ファイブマーメイド. . .。こんな感じか?」

梨子が千歌の胸倉に掴みかかっている中、ゼロがファイブマーメイドのイメージを陸に見せてくる。

人魚の格好をしたAqours五人が並んでいて、千歌、曜、梨子、ルビイの四人がそれぞれポーリングを披露する中、花丸は一人だけパソコンを弄っていた。

「ファイブ、マーメイド. . .」

ゼロの想像のせいで陸は完全に引き気味だが、ルビイはお気に召したらしい。

「何で蒸し返すのよ……」

「つて、その足じゃ踊れない！」

「じゃあ、皆の応援があれば足が生えるとか？」

「でも代わりに……、声が無くなるという……」

「ダメじゃねえか」

「だからその話は忘れてつて言ってるでしょ……」

「悲しい話だよねー。人魚姫」

「……ん？」

五人で梨子の黒歴史を蒸し返す中、ずっと会話に参加せずに一人でパソコンを弄っていた花丸が何かに気付いたように視線を映した。

陸もそれに気が付き花丸が向いた方を見るとそこには、身を隠してこちらの様子をうかがっている、最近どこかで見たような少女の姿が。

へっ……、あいつ……

(ゼロ。知ってるのか?)

へお前も見ただろ。ビラ配りの時に怪しいカツコで梨子からビラをふんだくって行った奴だよ

ゼロに言われて陸はその時の光景を思い浮かべた。確かにどことなく似ているが、す

ぐにイコールで結べるかと言われればそうではない。

なにせ雰囲気が違い過ぎるのだ。ビラ配りの時の少女は怪しきマックスの不審者だったが、あの少女はそんな雰囲気纏ってはいない。むしろ華やかさすらあった。

赤い瞳に白い肌。長く伸ばした艶のある黒髪を向かって左側の側頭部をお団子にまとめている。一言で言ううと美少女。

「善子ちゃん……?」

「ずら丸つ!?!」

花丸に見つかると、その子は咄嗟に逃げて行つた。

花丸はそれを見るとパソコンを弄るのを辞めて陸の手を取つた。

「仙道先輩。ちよつと付き合つて欲しいずら」

「え? ちよ、おい……」

へついでけ。俺も気になる」

千歌達が不思議そうにこちらを見る中、陸は花丸に手を引かれていった。

「いきなり屋上から墮天してしまった……」

廊下を立て付けられた戸棚の中で、善子は膝を組んで隠れていた。

ちよつと学校に行く練習をしてみようと思ひ、放課後の屋上ならば誰もいないだろうといざ行つてみたら人がいた上に、幼馴染の花丸。あと何故か男がいた。

(ずら丸はまだ分かるとして……、何で男がここに居るのよ……)

もしかして自分が不登校をやっている間に共学に――、

「学校来たずらか」

「ひよええええつ！」

いきなり戸棚の戸を開けられ、馴染みのある顔が中を覗いてきた。その隣には件の男もいる。

「ききき来たつて言うか、たまたま近くを通りかかったから寄つてみたつて言うか……」

善子は勢いよく戸棚から飛び出ると、そのままバランスを崩して転んだ。

「そつ……、それより！ クラスの皆様……、何て言つてる!？」

「ずらっ？」

凄い剣幕で詰め寄る善子に花丸がたじろぐ。

「私の事よ！ 変な子だねーとか、ヨハネって何？ とか、リトルデーモンだって、ぷっ、とかあー！」

「はあ・・・」

（ヨハネって・・・、この娘もしかして今朝の・・・）

〈声質も一致するし、間違いないだろうな〉

花丸の反応を見た善子は頭を抱え出した。

「そのリアクション！ やっぱり噂になってるのね！ そうよねえ・・・、あんな変なこと言ったんだもん。終わった！ ラグナロクよ！」

そして再び戸棚の中へと帰っていく。

「まさに、デッドオアアライブ！」

「それ、生きるか死ぬかって意味だと思わずら」

善子の入った戸棚に寄りかかり、花丸が優しく語り掛ける。

「誰も気にしてないよ」

「でしよ・・・、って、え？」

「それより、皆どうして来ないんだろう、とか、悪いことしちゃったかなーって心配して

るすら」

「本当・・・？」

「うん」

「本当ね？ 天界墮天条令に誓って嘘じゃないわね？」

「うん！」

完全に蚊帳の外な陸。

〈天界墮天条令ってなんだよ〉

（知る訳ねえだろ）

天界墮天条令とやらが何かは知らないが、陸は一つだけ確信付いて言えることがあった。

この善子とか言う少女。中二病を患っている。

花丸の話だと入学式の自己紹介での失敗が原因だと言っていたが、恐らくそのヨハネとか言うキャラで登場してしまったのだろう。

善子には悪いが痛い。高校生にもなつて痛すぎる。

「行ける！ まだやり直せる！ 今から普通の生徒でいければ！」

陸が失礼な事を考えているとは露知らず、花丸の返事を聞いた善子は勢いよく戸棚から出てきてガッツポーズをした。

「ずら丸っ！」

「な、なんぞら・・・？」

驚いて尻餅を付く花丸に善子がずいっと顔を近づけた。

「ヨハネたつての頼みがあるの」

多分普通の生徒に戻る為の手伝いをしてほしいとかそんな感じだろうが、自分で自分の事ヨハネとか言ってる時点でアウトな気がする。

まあ、それは置いといて、だ。

（俺、来た意味あったか・・・？）

〈知らね〉

翌日。

〈何で俺がこんな事を……〉

文句を垂れるゼロが憑依している身体は、陸の身体ではなかった。

登校中の女子高生の視線を集める、清楚でおとなしそうな少女。胸の黄色いリボンと長い黒髪を揺らし、悠々と歩くその姿は、昨日墮天使がどうのこうのとか言っていた少女と同一人物だとは思えない。

そう、津島善子である。

どうしてゼロが善子に憑依しているかの経緯は、昨日に遡る。

昨日善子は、花丸に気が緩んだ時にどうしても墮天使が顔を出すから、監視をしてほしいと頼んでいた。

しかし高校生にもなって中二病を引きずっている奴が監視程度でそれを克服できると陸は思わなかったらしく、危なくなったらお前が体を支配して止める。と言われたのだ。

何というか、人道的にセーフなのだろうかこの方法。

へつかコイツえらく雰囲気変わったな。天界墮天条令とか言ってた奴はどこ行った……

周りの生徒は不登校だった善子が登校している事か、はたまた入学式の日と全く違うその雰囲気にか、まあどちらにしろ注目を浴びている。

(ふふ……。見てる見てる……。花丸の言った通り、皆前の事は覚えてないようね)
へいや……。そんな訳ないだろ……。)

ちなみに善子の考えている事はゼロに筒抜けである。

そう思った善子は、背後で善子を見ていた三人の少女の方を向いた。

「おはよう」

「「お、おはよう……。」「」

そして教室。

不登校明けの善子の周りには、当然人だかりが出来ていた。

「雰囲気変わったから、びっくりしちやった」

「皆で話してたんだよ。どうして休んでるんだらうって」

皆一様に、善子の変わりようや不登校の理由などへの疑問を口に出している。

「ふふ……、ゴメンね。でも今日からちゃんと来るから。よろしく」

へキヤラ変わりすぎだろコイツ……。あとちよつとあざといな……。<

本当に昨日の痛いキヤラはどこに行つたのやら。

「こちらこそー。津島さんって……、名前、何だっけ……」

「えっ……?」

「酷いなー、あれだよ。あれ……」

「確か……、よ……、ヨハ……」

「っ!」

クラスメイトが件の名前を言いかけた瞬間に善子が勢いよく立ち上がった。

「善子! 私ほ、津島善子だよ」

善子が名前を教えると、そうだよねと納得してくれた。それを見て善子も安心したように笑う。

へこの分なら大丈夫なんじゃねーの?<

どうやら自分の出る幕はなさそうだ。ゼロがそう思った時だった。

「津島さんって、趣味とか無いの?」

「しゅ……、趣味?」

善子の周りに集まっていた少女の一人が、そんな質問を口にしたのは。

まあ、こういう時の質問としては定番中の定番なのだろうが、今の善子にとっては埋め込まれた地雷を爆発させかねない質問だ。

〈耐えろ津島善子……。ここであれを出したら全てが終わるぞ〉

ゼロとしてはあまり体を支配して善子を止める様な事はしたくなかった。善子が自分の意志で克服しなければ、これは解決しない問題だと思ったからだ。

そんなゼロの思いが通じたのか。

「と……。特に何も……。」

善子は耐えた。と、思われた。

この直後だったのだ、善子の脳裏にとある考えが浮かんだのは。

（いやこれは……。クラスに溶け込むチャンス? ここで上手く好感度を上げて……）

〈え、ちよ、お前……〉

「う……。占いをちよつと……。」

占いと言う、実にこの年の女子が引き付けられる趣味。

当然浦の星女学院と言う田舎の高校もそれは例外ではない訳で。

「え？ ほんと？ 私を占ってくれる？」

「私も私も」

善子の周りで生まれた喧騒がどんどん大きくなっていく。

それを受けて善子は調子に乗ったのか、

「いいよ。あ．．．、えっと、今、占ってあげるね」

善子を囲っていた女子からやったあと歓声が上がリ、近くで見ていた花丸が「もうダメだこいつ」的な視線を向けた。

そして善子がバッグを開け、ゼロの目に飛び込んだのは――、
大量の、何とというかそれっぽいグッズだった。

〈お前．．．、流石にこれはマズいだろ！〉

やむなくゼロが善子の身体から支配権を奪い取る。

〈っ!〉

だが善子の動きを止めることが出来たのは一瞬だけだった。

善子の胸が薄く紫に光り出したその瞬間、強烈な浮遊感がゼロを襲い、支配権が善子に戻る。

〈まさかっ．．．〉

次の瞬間。ゼロの魂は善子の身体から切り離されてしまった。

「どーして止めてくれなかったのよお!! せつかくうまく行つてたのに〜!!」
「まさかあんなもの持つてきてるとは思わなかったぞら……」

放課後。

何故かスクールアイドル部の部室に来た善子が、ど真ん中に設置された机の下で蹲っている。

花丸から聞いた話だと、クラスメイトに占いをしてくれと頼まれ、勢いのままに墮天使キヤラを開放してしまったらしい。

それを横目に見ていた陸が、頭の中で役に立たないウルトラマンに気持ちジト目を向ける。

(おい。どうしてこうなった)

「いや……、その……、スマン……」

確か一時間目が始まった直後だったろうか、ゼロが陸の元に戻ってきたのは。

やけに疲弊した様子だったので一応何があつたか聞いてみたところ、何と身体から追
い出されたと言うのだ。

何でも善子の胸が光を帯びて、その瞬間に身体から切り離されたとか。

「つーか……、それって……」

「ああ、多分だがリトルスターだ」

「またかよ。最近そればっかだな」

ルビィがリトルスターを発症して、まだ一週間も経っていない言うのに。

「へつっても俺が感じたのは発現の兆し。まだ完全に発現したわけじゃねえ」

「つーこた、まだ連中にや津島のリトルスターはバレてないって事か？」

「多分、な。あの程度じゃ感知できないだろ」

「という事は、まだそこまで警戒しないといけないという事だろう。」

「ひとまず安心した陸は、善子を中心に行われている会話を聞き耳を立てる事にした。」

「……分かつてるの。自分が墮天使のはずないって。そもそも、そんなものいな
いんだし」

「やつと机の下から出てきた善子が、いきなり墮天使を否定していた。」

「だったら、どうしてあんなもの学校に持ってきたの？」

机に広げられた数々の墮天使グッズを目に質問をする梨子に、善子は少しぐぐもりながら答えた。

「それは、まあ、ヨハネのアイデンティティみたいなもので……。あれが無かったら、私が私でいられないって言うか……。はっ！」

「何か……。心が複雑な状態にあると言う事は、よく分かった気がする……。」「ですね。実際今でもネットで占いやってますし……。」「

そう言つてルビイがパソコンで開いたサイトには、墮天使っぽいコスプレをした善子がそれっぽいポーズをとつて映つていた。

『また、ヨハネと墮天しましよ……。』

「わあっ！ 辞めて！」

それを見た千歌を除く四人がジト目を向け、善子が慌ててパソコンを閉じる。

「とにかく私は普通の高校生になりたいの！ 何とかしてえくくく」

涙目で懇願する善子をよそに、千歌がぽつりと呟いた。

「可愛い……………」

〈「……………」〉

合計六人＋ゼロの、豪華な「へ？」の後。

「これだ！ これだよ！」

何を思ったのか、先程のサイトを再び開いてその場の全員に見せつける。

「津島善子ちゃん！ いや、堕天使ヨハネちゃん！ スクールアイドル、やりませんか？」

机に身を乗り出し、善子に顔を近づけてそんな事を言う千歌に、善子は目を細めて、
「何・・・？」

二十話 ヨハネであるワケ

後日。十千万。

千歌が墮天使アイドルをやってみるとか訳の分からない事を言い出し、今日はその衣装合わせらしい。

障子一枚隔てたその先は美少女六人の着替え中と言うエデンの園があるのだが、男の陸が入った瞬間エデンからヘルに変わるので仕方なく廊下で待機中である。

(ところで、津島のリトルスターってどんな能力なんだ?)

先日のゼロの話によれば、リトルスターにも個性と言うかそれぞれ違いがあるらしい。

実際梨子はサイコキネシス、ルビイは発火能力と全く異なるものだった。

善子のリトルスターの能力によって陸達の対策も変わるので、一応知っておいた方がいいだろう。

〈残念ながら現時点じゃ判断できない。何の能力なのかは直接この目で見ないとな〉
(でもそれじゃ敵さんにバレるじゃねーか)

能力を知るためにリトルスターを発動させて、それで善子のリトルスターが連中にバシたら本末転倒だ。

「ああ、だからこそ今回は対策が難しい。まあ、あまり人と接触させない方がいい事に変わりはないがな」

（ちなみにお前が追い出された時はどんな感じだったんだ？）

「墮天使キャラを開放した時だな。リトルスターは宿主の感情に呼応して発動するから、津島善子の場合は墮天使に関係する能力なのかもな」

（何だよその能力……）

「まず墮天使がどんなものなのか分からないのに、それに関連した能力なんか分かる訳がない。」

「また苦勞させられそうな気がして陸がため息をついた時、閉じられていた襖が開いた。」

「じゃじゃーん！」

「元気に飛び出してきた千歌が着ていたのは、配信動画で善子が来ていたようなゴスロリだった。」

「千歌だけじゃない。Aqours全員が黒を基調としたゴスロリに身を包んでいる。」

「この前より短い……。これでダンスしたら流石に見えるわ」

「だいじよぶー！」

「そういう事しないの！」

何の恥じらいもなくスカートを捲り上げて下に履いてあるジャージを披露する千歌。それを見た梨子が慌ててスカートを抑える。確かに女子として如何なるものかと思う。

「はあ・・・、いいのかなあ・・・、ホントに・・・」

「調べてみたら堕天使アイドルっていなくて、結構インパクトあると思うんだよね」

「まず堕天使アイドルってなんだよ」

それをアイドルとしてカテゴライズしていいものか。

「確かに昨日までこうだったのが・・・」

曜はファーストライブの衣装と今皆が着ている衣装を見比べ、

「こう変わる」

「な、何か恥ずかしい・・・」

「落ち着かないずら・・・」

皆が恥ずかしがるのも無理はない。まずゴスロリを着慣れていない事と、普段よりも丈の短いスカート。もうちよつとで見えそうだ。

「ねえ？ 本当に大丈夫なの？ こんな衣装で歌って」

特に梨子は抵抗が大きいようだ。

「かわいいねー！」

「そういう問題じゃない」

「そうよ。本当にいいの？」

真剣な表情で千歌に問う善子だが、如何せん格好が格好なのでふざけているようにしか見えない。

「これでいいんだよ！ ステージ上で堕天使の魅力をみんなで思いつきり振りまくの！」

「堕天使の……魅力……。はっ！ ダメダメ！ そんなのドン引かれるに決まってるでしょー！」

「大丈夫だよ！ きつとー！」

千歌の一言で妄想の世界に突入した善子が、膝を抱えながら不気味に笑う。どんな想像をしているかは想像に難くないのが悲しい。

「くつくつ……。大人気……」

「えっと……。協力してくれるみたいですよ」

「チョ口過ぎるだろ。堕天使キャラを卒業したいとか言つてた奴どこ行った」
〈全くだ〉

「しょうがないわね……」

そう言つて梨子は部屋を出て行つた。

その数秒後。

「いいいいいいいいやあああああ!!」

「コラ! しいたけ!」

唐突に耳をつんざく悲鳴が響き、全員で廊下に視線を移すと天敵のしいたけに襲われる梨子の姿があつた。

毎度毎度逃げる梨子も大概だが、なぜしいたけも梨子を追いかけるのか。

「桜内?」

「辞めて! 来ないでええええええ!」

「大丈夫? しいたけはおとなし——うあつ?」

『シエヤア!』

本来横にスライドするはずの襖が前に倒れてきた。瞬時にゼロに人格を入れ替えた陸は無事だが、千歌はその下敷きになる。

「梨子ちゃん!」

「とおおおりやあああああ!」

襖と千歌を踏み倒した梨子は、驚異のジャンプ力を披露して隣にある自宅ベランダに飛び移つた。

「「「へおお．．．、飛んだ．．．」」」」

「飛翔する．．．．．墮天使．．．」

皆が思い思いの感想を零した後、梨子は尻から着地した。
痛みで涙目になる梨子に、全員称賛の拍手を送る。

「つ．．．．．、ちよつ——」

「お．．．、お帰り．．．」

伝説の目撃者はもう一人、梨子の部屋を掃除していた梨子の母親も、その光景を目の当たりにすることになったのだった。

「たっ．．．．．、ただいま．．．」

梨子はその場にへたり込んでしまった。

『はあい、伊豆のビーチから登場した待望のニューカメラ、ヨハネよ！ みんなで一緒に、墮天しない？』

『『『『しない？』』』』』

そこで動画は終わった。

「何コレ」

「 うむ 」

翌日の放課後。

帰宅途中にAqoursの新PVが公開されていたので見てみたところ、全員が昨日のゴスロリ衣装で善子直伝の墮天ポーズをとってセリフを決めていた。

「何か方向性見失ってね？」

「努力は評価してやりたいが 」

努力が明後日の方向に全力過ぎて評価のしようがない。とりあえず梨子の心から輝きが失われてそうなので後で励ましてあげよう。

一応これを見た他の人々はどう思っているのだろうと、隣のコメント欄に視線を移す。

「すげえな。効果覲面じゃねーか 」

コメント欄を見た陸が驚きと感嘆の声を漏らす。

コメントは多いし、何故か順位も900位台にまで上がっている。偶然ここまで上がるなんてこと無いだろうし、きつとこの動画の影響だろう。

「……陸。俺はだんだん人間と言うものが分からなくなってきたぞ……」
「安心しろ。俺もだ」

これの何がここまで受けているのか、陸とゼロには皆目見当もつかなかった。

しかしこの順位の鰻登り、そして爆発的なコメント量。確かに凄いとさえいえば凄いな
が……

「コメント……、ルビィに関するもんばつかじゃねーか」

そう。コメントの大半をルビィに対するものが占めていたのである。

「ルビィちゃんと一緒に墮天する」「ルビィちゃん最高!」「ルビィちゃんのミニスカートがとて素晴らしいです」など、基本ルビィコメばかりだ。

「変なファンがつかないといいけど……」

頼むから宇宙人以外で戦う敵を増やさないでほしい。

「おお……。思い切ったことしたね彼女達……」

「ホントに……、って、うわっ!」

突然隣に現れた人影に陸が驚き、危うく自転車から落ちかける。

音もなく陸の隣に現れたのは、ピラ配りやファーストライブ。A q o u r s に関する場所にはどこにでも現れる変態、謎の宇宙人オウガだった。

「急に出てくるな……。心臓に悪い……」

「あはは。ごめんよ陸君。つついっ脅かしたくなつてね。それより墮天使だなんて……ホントに面白いね千歌ちゃんは」

オウガは陸からスマホをふんだくると、再び動画の再生を始めた。

『ヨハネ様のリトルデーモン四号……。く、黒澤ルビイです……。一番小さい悪魔。かわいいがつてね』

やがてルビイの自己紹介、陸がルビイの将来が不安になりまくったところに突入した。

「おお……。何だこのルビイちゃんとか言う墮天使は……。ロリ＋ゴスロリ＋上目遣い＋舌足らずな喋り方＋恥じらいの混じるその視線＋もじもじとしたポーズ……。何だ？ 彼女は人をキョン死させるために生まれたのか……？ ……」

ボクも一緒に墮天したい……」

どうやらオウガもあっち側の人間らしい。顔を紅潮させて息を荒げている姿とかキモすぎて見ていられない。お巡りさんこいつです。

「……アホっ子墮天使。元氣っ子墮天使。清楚系墮天使。ロリ墮天使。方言っ子

墮天使。モロ墮天使……。一人を除いて皆墮天使と相反するものがある。だがそれがいい！ 逆にモロ墮天使の子がこの場じゃある意味異物感を醸し出しているが、ノープロブレム！ それにまた味がある……。ふふ……。最高じゃないか……」

「ゴメン。お前が何言ってるのか全然分かんない」

鼻を抑える手を深紅に染めながら、オウガがスマホを返却してきた。スマホに血がついていたらいつどうしてやろうかと思つたが、どこも汚れていないので一安心。

「それに衣装。ミニスカートの見えるか見えないかの瀬戸際もそそられて実によろしい」

「あ、それは同意見だわ」

〈お前らな……〉

とその時、手に持った携帯から着信音が鳴った。

画面を見ればなんと、黒澤ダイヤ。

「おー。女の子からの着信だなんて羨ましいじゃないか陸君。全国の非リア男子の夢だよ。」

「……安心しろオウガ。この人はそんな夢躊躇わずぶち壊してくる人だから……」

そう。全国の男子諸君は女子と言うものにあらぬ理想を抱いているようだが、そんなのは本当にただの理想なのだ。

現に最近。関わっている女子にまともな奴が一人もない陸はそう断言できる。だからまずはその幻想を、ぶち壊す。

そう決めた陸は通話をスピーカー設定にしてから、ダイヤからの着信に出た。そこで聞こえてきたのは、怒気を含むダイヤの声。

『………仙道さん？ 今すぐ浦女に来ていただけますか………？』

携帯越しなのに、まるで飢えたライオンと対峙しているかのような威圧感。そんなダイヤにオウガは、

「うん。ここのうのもいい」

と、右手でサムズアップを決めてそう言った。

やっぱりこいつは理解できないと、改めて感じた陸だった。

「こういうものは破廉恥と言うのですわ!」

陸が浦女に到着すると、ダイヤ様はやはりお怒りでいらつしやり、生徒会室には既にごさん言われたらしいAqoursの屍が転がっていた。

恐らくついさつきアップされた動画を見たのだろう。オウガには好感触だったが、やはりお堅いダイヤには通用しないらしい。

「全く……。貴方と言う人がついていながら……。どうしてこうなったんですの?」
「落ち着いてくださいダイヤさん。そもそも俺はこの動画の制作に一切関わっていません」

「だまらつしやい! 監督不行き届きですわ」

「そうだよ陸ちゃん。一人だけ言い逃れしようだなんて許さないよ」

「貴方は黙ってなさい!」

「ひいひい……」

「いや……。そいつらそういうキャラでやってみようって事になって、それで……。そもそも! わたくしがルビィにスクールアイドル活動を許可したのは、節度をもって自分の意志でやりたいと言ったからです! こんな格好をさせて注目を浴びようなど……」

「……ごめんなさい……。お姉ちゃん……」

憤慨するダイヤを見て、ルビイが申し訳なさに頭を下げた。

「・・・とにかく、キャラが立っていないとか、個性がないとか人気が出ないとか、そういう狙いでこんな事をするのは頂けませんわ!」

「でも一応順位は上がったし・・・」

「そんなもの一瞬に決まっているでしょう? 試しに今ランキングを見てみるといいですわ!」

ダイヤがパソコンを回転させながら机の上を滑らせてこちらにパスし、曜がそれを受け取った。

そしてパソコンを開いた曜たちの目に映ったのは、既に1500台にまで下がったA
oursの順位だった。

「ああ・・・」

「本気で目指すならどういう事か、もう一度考える事ですね!」

「は、はい・・・」

お説教を終え、そろそろと生徒会室から出て行く陸達。

その中で一番暗い顔をしていたのは、津島善子だった。

夕空の下、Aqoursは防波堤の上で膝を抱えていた。

「失敗したなあ……」。確かにダイヤさんの言う通りだよね……」
千歌がぼつりと呟く。

「こんな事でμsになろうだなんて、失礼だよね……」

「千歌さんが悪い訳じゃないです」

「そうよ」

最も辛そうに俯いていた善子の言葉に、皆善子の方を振り向いた。

「いけなかったのは……、堕天使……」

「え……?」

「やっぱり、高校生にもなって通じないよ」

「それは……」

言い返そうとするが、それ以上の言葉が出てこない。ここにいる全員そうだ。

そしてそれは、善子の言葉を肯定している事になる。

それを見て善子は儂げに笑う。

「何かすつきりした。明日から、今度こそ普通の高校生になれそう」

「じゃあ・・・、スクールアイドルは・・・？」

ルビイの問いかけに善子は少し考えるような素振りをし、くるりと背を向けた。

「やめとく。迷惑かけそうだし・・・。。。それじゃ・・・」

軽く手を振り、哀愁漂う背中を向けながら歩き出す。数歩歩くと立ち止まり、再びこっちを向いた。

「少しの間だけど、堕天使に付き合ってくれてありがとね。楽しかったよ」

そう言った彼女の笑みは、痛い程悲し気に見えた。

かける言葉が見つからず、ただ茫然とその背中を見つめる事しかできない。

夕日に照らされる善子の胸は、確かに光っていた。

けれども、引き留める気には、なれなかった。

「どうして……、墮天使だったんだろう」

善子がいなくなつた後、不意に梨子が呟いた。

「まる。分かる気がします……」

それに答える一つの声。幼馴染として、小さい頃から善子を知っている花丸。

「ずっと、普通だったと思うんです。まる達と同じで、あまり目立たなくて……」
ピクリと、その場にいる何人かの肩が揺れる。

「そういう時思いませんか？　これが本当の自分なのかなって、元々は天使みたいにキラキラしてて、何かの弾みでこうなっちゃってるんじゃないかって」

花丸の言葉は、皆の心を切実に揺らした。

「……そっか」

「確かにそういう気持ち、あつた気がする」

「……」

そんな気持ちは、陸にも確かにあつた。

陸がゼロと共に戦う事を決めたのは、非力な自分が嫌だつたから。

六年前の様に、大事な人達が目の前で傷つくのを見たくなかつたから。

……失いたくなかつたから。

これは誰にも、一体化しているゼロにすら教えていない事。

今はゼロと共に戦っているので忘れがちだが、陸も前までただの高校生だったのだ。だからこそ力に焦がれた。変わりたいと願った。

善子だって形は違えど、それはきつと同じなはず。

普通な自分が嫌だった。

最初はきつとそこだったのだ。

千歌がスクールアイドルを始めたいと願ったのが、そうだったように。

善子のリトルスターは、その気持ちの現れなのだ。

今の善子の中では、あの堕天使ヨハネが本当の自分で、それを貫き通そうと、ヨハネでありたいと願った時に、リトルスターは発現していた。

本当の自分を、見失わない為に。

「幼稚園の頃の善子ちゃん。いつも言ってたんです。私、本当は天使なの、いつか羽が生えて、天に還るんだって……」

花丸のその話を、千歌達はずっと黙って聞いていた。

二十一話 自分を貫く力

『ああああああああ!!』

『……ルナミラクルに続き、ストロングコロナまで復活してしまいましたか……』
ゼロを目の敵にする五人。

その中の一人が、顎に手を当てながら唸った。

『送り出す輩がヘマを踏んでばかりなのだ。さっさとその場で始末すればいいものを』
『確かにそうすればいいのですが、リトルスターを人為的に分離する方法が見つければ我々にも都合です。その実験台は多く確保しておきたいのでね』

『ああああああ!!』

『今のごとこ仙道陸と関わりのある人間しか発現してないしな。ホントどうなってんだ』
『よ』

『ウウウウウウ……』

『あああああああああああああつ!!』

『ああ! うっせーよジャータル! ちよつと落ち着け!!』

発狂する者、それに怒号を浴びせる者。非常に騒々しい。

『うるさい！　これが慌てずにいられるか！　これ以上ゼロの能力が蘇ったら……』
かつて自分を宇宙の塵にしたストロングコロナゼロを見て落ち着きを失っていた。

『ジャタールの言う通りです。これ以上ゼロにリトルスターを受け渡す訳にはいきませんね。昨日新たなリトルスターの発現が確認されましたが……、光が小さすぎて個人の特定までに至っていません。それで誰かを調査に向かわせたいのですが……』

『……その仕事、私に任せて頂けませんか？』

そう提案したのは、頭から珍妙な突起物の生えた一つ目の宇宙人だった。

『ついでに、ウルトラマンゼロも倒してくるといっておまけ付きで……』

翌日。

善子の家のマンションのゴミ捨て場。

墮天使グッズの全てをダンボールに入れた善子が、物憂げな顔でそこにいた。

「これで……、よし」

墮天使は卒業すると決めた。今日からは普通の高校生に戻る。

やはりまだ墮天使でいたいと思う気持ちだが腕を止めるが、心残りはない。そう自分に言い聞かせてダンボールをゴミ捨て場に置いた。

「墮天使ヨハネちゃん！」

ダンボールを置き、ゴミ捨て場から出てきた善子に声が掛かった。

見ればそこには、墮天使ゴスロリを着たA q o u r s 五人の姿が。

「「「スクールアイドルに入りませんか?」」」

「……はあ……?」

「ううん! 入ってください! A q o u r s に! 墮天使ヨハネとして!」

善子は五人が何でこんな事を言うのか理解できなかつた。

昨日は自分のせいで、ダイヤに怒られたというのに。

「何言ってるの? 昨日話したでしょ? ……もう」

「いいんだよ! 墮天使で! 自分か好きならそれでいいんだよ!」

後退する善子に、千歌が言い募って訴える。

「……だめよ」

そう言つて逃げ出す善子を、全員で追いかける。

「あつ！ 待つて！」

「生徒会長にも怒られたでしょ〜〜！」

「うん！ それは私達が悪かつたんだよ！ 善子ちゃんはいいいんだよ！ そのまんまで！」

「どういう意味—!？」

言い合いをしながら街中で追いかけてつこをする善子とAqours。

あちらに曲がりこちらに曲がり、それでも五人は善子についてくる。

「しつこ————いつ—!!」

「私ね！ μsがどうして伝説を作れたのか！ どうしてスクールアイドルがそこまで繋がってきたのか！ 考えてみて分かつたんだよ！」

「もういい加減にして—!!」

長い事街中を駆け回り、遂に善子はその足を止めた。

その背後でAqours五人も息を切らし、肩を大きく上下させている。

「ステージ上で、自分の好きを迷わず見せる事なんだよ！」

なおも善子を説得しようとする千歌を、善子は立ち止まって見つめた。

「お客さんにどう思われるとか、人氣がどうかじゃない！ 自分が一番好きな姿を、輝いてる姿を見せる事なんだよ！ だから善子ちゃんは捨てちゃだめなんだよ！ 自分が墮天使を好きな限り!!」

千歌はそこまで言うのと、屈託のない笑みを浮かべた。後ろにいる四人も、同じように笑っている。

「・・・いいの？ 変なこと言うわよ」

「いいよ」

「時々、儀式とかするかも！」

「それくらい我慢するわ」

「リトルデーモンになれって言うかも!!」

「それは・・・でも、嫌だったら嫌だって言う！」

「ツ・・・」

千歌はそう言うのと、昨日善子が風に飛ばした黒い羽根を差し出した。

これを手を取れば了承。そう言う事なのだろう。

それを見た善子の胸に、ちよつとした期待が生まれた。

ここなら、自分は自分のままいられる。ヨハネのままの自分を受け入れてくれる仲間

がいる。

自分の求めたりア充生活は、ここにあるのかもしれない。そう思わせてくれる。
..... だったら、答えは決まっているだろう。

「.....」

善子は無言でその手に触れる。

だから自分に素直でいよう。

自分を理解、とまではいかずとも、受け入れてくれる仲間がいるなら。

善子がそう思った時だった。

「熱っ!?!」

「.....っ.....?」

善子の胸が紫色に発光を始めたのは。

「.....これって.....」

前に同じようなものを見たことのある千歌達五人が眉を寄せる。

昨日の陸の予想通り、善子のリトルスターは墮天使でいたいと思う気持ちの現れ。

それが仲間を受け入れられた今、それが強く発現したのだ。

だがそれがリトルスターだという事に気付く者はいない。

近くで六人のやり取りを見ていた、ただ一人を除いては。

『……見つけたぞ。リトルスター保持者』

声と共に放たれたビームが、善子と千歌の足元で跳弾する。

「わあっ!?!」

「ピギイッ!」

「……誰よアンタ……」

善子が警戒心を露わに、目の前にいる黒いマントを羽織った人物に問いかける。

その人物が顔を覆っていたマスクを外すと。

「っ……」

頭から珍妙な突起物を生やし、目は一つしかない。全身が黒く武骨な腕には、鋭い爪を光らせていた。

少なくとも、この星の住人でない事は確かだ。

「何よアンタ……。何する気!?!」

善子とその宇宙人——ゼットン星人を睨みつけると同時に、善子の胸の光が強くな

り、善子の腕に四色に光る光の剣が生成される。

『ッ！ させるか！』

ゼットン星人を黒い霧の様な物が包み、ゼットン星人自身も霧へと変貌していく。

「はっ………が………」

善子が体をびくりと震わせ、黒い霧が善子を包み込んでいった。

『くっ………、はっはっはっ………』

やがて光剣は消えて霧が晴れ、善子の身体を支配したゼットン星人が愉快そうに笑った。善子の身体なのに、善子の声をしていない。そんな善子に異様なものを感じ取った五人が怯えた視線を向ける。

『これならばゼロも手が出せまい………。何より………』

恍惚とした表情で、ゼットン星人は光る胸の光を見つめていた。

「善子ちゃん!!」

花丸が善子の名を呼んだ刹那、

『はあっ!』

「ずらっ!?!」

ゼットン星人が光剣を振ると、三日月形の炎が花丸の顔の横を駆け抜けていった。

『これがリトルスターの力か………。素晴らしい………』

ゼットン星人は善子の顔で歪んだ笑みを浮かべ、愉快そうに A q o u r s 五人を見る。

剣呑に光るその目は、次はどいつを攻撃しようかと言っているようだった。

『もう少し貴様らでこの力を試したかったところだが……、そろそろゼロを呼ばねばなるまい』

そう言つて指を鳴らした瞬間、立つていられないほどの地響きが発生した。

人々がよろめき、不安の声を上げる中、固いアスファルトで舗装された道路に亀裂が走る。

『ゼエツ……トオン……』

そんな機械染みた鳴き声の後、大地を裂いて黒い怪獣が現れた。

黒と白のカラーリング、どこことなくカミキリムシを彷彿とさせる全身。

目、鼻、口のない無機質な顔面。橙色に光る胸。

そんな生物らしさを感じさせないその怪獣は、突如火球を放つて市街地を蹂躪し始めた。

「善子ちゃん！」

『来るな！』

近づく千歌にゼットン星人は光剣を向けた。すると今度は突風が発生して千歌を吹

き飛ばしてしまおう。

『悪いがこの娘は人質に使わせてもらう。なに、事が済んだら返すさ。いつになるか、そして生きているかは保証はせんがな』

再び身体を黒い霧に変えたゼットン星人が怪獣の中に入って行く。

『ゼエツ……トオン……』

『ふふ……、ゼロ。早く出て来い……。さもなくば!』

次の瞬間、怪獣は千歌達の方を振り向き、灼熱の火球を千歌達に向けて放った。

「ひっ……!」

迫る火球に戦慄する少女達を眺めながら、ゼットン星人はある事を確信付いていた。

『さあ来いゼロ。光の国の戦士ならば、ここで現れるはずだろう……。』

そしてゼットン星人の目論見通り、

『デエエエヤアアア!!』

火球を薙ぎ払い、少女達の盾になる様に青い巨人——ウルトラマンゼロが現れたのだった。

「ゼロさん！」

火球から自分達を守ったゼロを見て、ルビイが喜びの声を上げる。

『へへっ……、待たせちまったなあ……』

ゼロはルビイに向けてお決まりのポーズを取った後、火球を放った怪獣と向き合った。

『ゼットンか……。朝っぱらからやり合うような相手じゃねーぞ……。』

「……あいつ等も朝っぱらからなんつー格好してんだよ」

陸の視線の先には、昨日の墮天使ゴスロリを纏ったA q u r s五人。朝練で早起きしていたとしても、あの格好に着替える必要があっただろうか。

『おい陸。今は戦いに集中しろ』

「分かってるよ」

『行くぜエ！』

ゼロはファイティングポーズを取った後、いきなりストロングコロナにタイプチェンジしてゼットンに殴りかかった。

燃える炎の拳がゼットンの顔面を捉えるその寸前、突如展開されたバリアによつて攻撃は防がれてしまう。

『オラオラオラオラオラオラアアア!!』

それでも攻撃の手を緩めずに連続して拳を繰り出すゼロだが、尽くバリアによつて防がれる。

『ゼエツ……トオン……』

逆に隙を突いてゼットンが繰り出した蹴りをモロに喰らい、建物を巻き込みながら吹き飛ばされるゼロ。

「パワーで駄目なら……ゼロー」

『おうよー!』

陸の意見に乗ってルナミラクルに変わり、今度はミラクルゼロスラッガーでの攻撃を開始する。

だがゼットンのバリアは全方位に展開され、刃がその体に届かない。

『ゼエツ……トオン……』

『レボリウムスマッシュ!!』

衝撃波で跳ね返した火球さえもバリアに防がれ、飛散した火球が周囲の建物を襲う。
『クソツ、これじゃ街に被害が出るだけだ』

ゼロはそう言うのとストロングゴロナに戻り、ありつたけの力を込めてバリアを殴りつけた。

強固なバリアはそれすらも防ぐ。が、

『ガルネイトバスターアアアアアア!!』

ゼロ距離からのガルネイトバスターまでは流石に耐えられず、バリアを突き破った高熱のエネルギー弾がゼットンに直撃する。

よろめいたところに必殺の殴る蹴るの連続コンボを叩き込み、ふらふらになったゼットンを背後からホールドした。

『ウルトラハリケーン!!』

激しい回転を加えて天高く放り投げたゼットンに狙いを定め、構えたゼロの右手が再び高熱を帯びる。

『こいつで終いだ! ガルネイト——』

『ゼロさん待って!』

『っ!!』

ゼットンを粉碎しようとしたゼロを制止したのは、ゼットンでもゼットン星人でもな

くルビイだった。

「中に善子ちゃんがいるんです！」

『何っ!?』

ゼロが構えた右手を下げた刹那、上空から雨のように火球が降り注いできた。

『ぐあああああああつ!!』

「があああ．．．！」

火球は反応が遅れたゼロを直撃し、洒落にならない熱量の炎がゼロを飲み込んでいく。

『ゼエツ．．．トオン．．．』

『がはっ．．．！』

立て続けにヒットする火球にゼロが倒れ伏した後、ゼットンの全体重が乗ったプレスを喰らい、陸は一瞬だが意識を手放しかける。

重力による加速も加わったその一撃、重くないはずがない。

「．．．．．どうすんだ．．．津島がいるんじゃないや攻撃できねえぞ．．．」

『．．．．．大方身体を乗っ取られたとかそんな感じだろ。とりあえず、今は時間を稼ぐ事に集中だ』

「．．．．．お前何言って．．．」

『いいから。俺を信じろ』

戦いを長引かせたら不利になるのはこっちだというのに、ゼロの声音は絶対的な自信を含んでいた。

「・・・・・・・・信じていいんだな？」

『ああ、任せろ』

返事と共にゼロはルナミラクルにタイプチェンジし、今までとは全く違う立ち回りを始めた。

『これは・・・・・・・・』

善子の身体を乗っ取り、体内でゼットン操るゼットン星人は今までとはまるで違うゼロの戦い方に違和感を覚える。

やたらと距離をとり、ゼットンの火球を相殺したりその攻撃から建物や人を守ったりしてばかりで一向に攻撃をしてこないのだ。

『ふっ……、遂に攻撃する事を諦めたか。ウルトラマンゼロ』

更に追い詰めてやろうと連続で火球を放つが、ゼロはその火球をレボリウムスマッシュで相殺したりミラクルゼロスラッガーでかき消したりとなんなく処理する。

どうやら守りに徹したことにより多少行動に余裕が生まれたいらしい。

『ぐっ……、ならば』

「ちよつと 안타！ 私の体で何やってんのよ！」

『っ!! なんだとっ!!』

完全に食い潰したはずの善子の意識が戻った事に驚愕するゼットン星人。

「ゼットンだかパットンだか知らないけど、これ私の身体よ!! さっさと返しなさいよ！」

『……まさか自我を保っているとは驚いた……、これもリトルスターの影響なのか……?』

多少の計算違いは起こったが、まだ軌道修正できる範囲内だ。

そう思ったゼットン星人は、ゼロとゼットンの戦いを見ている五人の少女に照準を定めた。

『反抗する気力すら失くしてやる』

「ちよつと！ アンタ何しようとしてるのよ！」

『仲間が貴様の精神力の糧となつてゐるならば、そいつらを消してしまえばいいだけだ』
「やめっ……」

善子が抵抗しようとしたが体は奪い返せず、無情にもゼットンは無情にもゼットンは千歌達に向かつて火球を放った。

『シエヤア！』

当然ゼロがそれを防ぐが、ゼットンは構わず火球を放ち続ける。

『サア！ デエエリヤ！ セヤア！』

絶え間なく放たれ続ける火球をゼロはゼロスラツガーで切り裂きながら千歌達を守るが、やがてカラータイマーが点滅を始める。

徐々に苦しうになつてきているゼロを見て、勝利を確信したゼットン星人が高笑いをし始めた。

『ははははははははははははははははつ！ これぞ……これぞ完全勝利！ ゼロを始末したら次は貴様らも小娘ども！ 全員灰燼と化すがいい——』

———ここでゼットン星人は、思わず硬直してしまう程の戦慄を覚えた。

「何言つてんのよアンタ……」

『っ!? つ!?』

「……………私のリトルデーモン達に、何しようとしてんのよ——っ!!」

『ぐ……………お……………』

強烈な浮遊感がゼットン星人を襲い、善子の身体から切り離されそうになる。

『馬鹿な……………津島……………善子……………。こんな人間如きに……………』

「私のリア充生活の邪魔しようとしてんじゃないわよっ!!」

『ぬ……………ああ……………』

「あと善子じゃない! 墮天使ヨハネエエエエエエエエエエツ!!」

怒号と共に善子のリトルスターが煌き、発生した光の波に飲み込まれたゼットン星人が体外に排出される。

光の奔流はやがて剣の様な形に変わった。光の剣はゼットンの固い皮膚までも突き破り、外に放り出されたゼットン星人が落下していく。

『クソがああああああつ!!』

落下するゼットン星人は黒い霧と化し、霧散するように消えていった。

ゼットンの動きがおかしくなるのは、そのすぐ直後だった。

「あれはっ……」

『ッ……!』

ゼットンの火球を防ぎ続けてた陸とゼロの目に映ったのは、ゼットンの身体から追い出されて消えていくゼットン星人と、動きのおかしくなったゼットンだった。

狂ったかのように誰もいない場所に火球を放出したり、無意味にバリアを展開したりしている。

『ははっ、やりやがったな善子の奴!』

「え……? あれ津島がやったの?」

『ああ、正確には善子が身体からゼットン星人を追い出したんだよ。そこで操っていた奴がいなくなった事でゼットンの動きがおかしくなった』

計算どおり、とでも言いたげなゼロ。

「……お前、まさかそれが目的で時間稼ぎしてたのか? 津島が身体からゼット

ン星人を追いだせるって信じて……」

『忘れたか陸。俺がこの前アイツの身体から追い出された事を。この俺ですら追い出すような奴だ。ゼットン星人如きに負けるはずがねえんだよ!』

ゼロはそう言うのと、ルナミラクルにタイプチェンジし、火球を放ち続けるゼットンに向かつて肉薄していく。

「けどどーすんだ。ゼットン星人がいなくなっても津島がゼットンの中にいるって事は変わらないんだぞ」

『ゼットン星人がいなくなれば十分だ。……パーティクルナミラクル!』

ゼロは身体を光の粒子に変えると、空いた穴からゼットンの体内に侵入して善子を救出した。

「ツ……?」

人間大になったゼロに抱えられ、何が起こっているのかよく分かっていない顔をする善子。

そんな善子を地上に下して安全を確保し、再び巨大化するとゼロツインソードを構えてゼットンの頭上を取った。

『プラズマスパークスラッシュ!!』

光を纏った大剣に両断され、真っ二つになった宇宙恐竜は爆散する。

「善子ちゃん！」

ゼットンが倒されてひとまず安心した千歌達は、一斉に善子の元に駆け寄った。

「大丈夫？」

「怪我とかないずら？」

「う…、うん…。」

善子はいまいち自分の身に何が起きていたのか分かっておらず、飛びついてきた花丸や千歌を少し照れながら引き離している。

「ゼロさん！　ありがとうー！」

『へへっ…、ウイ！』

ぴよとぴよこと飛び跳ねながらお礼を言うルビィに、ゼロはサムズアップで返した。

「ゼロ…。」

「うん！　ウルトラマンゼロさん！」

「…ウルトラマンゼロ…。」

ルビィからゼロの名前を聞いた善子が、墮天している時の表情でゼロを見た。そしてピシッとゼロを指さす。

「ありがとうね！　リトルデーモン！」

『え…？　俺…？』

いきなりリトルデーモン認定されたゼロのカラータイマーに、善子の胸から分離されたリトルスターが吸い寄せられていく。

——仲間と手を取り合い、自分を貫く力——ウルトラマンオーブ。

陸の頭が響いた次の瞬間、その光は陸の周りを漂っていたひび割れたカプセルに吸収された。

『デユワー！』

するとカプセルのひび割れが治り、ぼんやりと何かが映っていたカプセルにハッキリとウルトラマンらしきものが映し出された。

「これは……?」

そのカプセルを掴んで凝視する陸に、ゼロが説明を入れる。

『そいつはウルトラカプセル。戦況を覆しうる究極の力、無限の可能性を秘めたアイテムだ。オメガ・アーマゲドンの際に光の国で開発されたもので、その中にウルトラマンの力が宿っている。そこでそのウルトラマンの名前はオーブ。ウルトラマンオーブだ』

「オーブ……」。ある意味自分の魂である堕天使を貫こうとした善子らしいかもしれない。

「リトルスターが、このカプセルを起動させたって事か?」

『まあ、そういう事例もあるが……。今回は壊れたオーブカプセルをリトルスターの力で修復したって感じだろ。ちなみに、まだカプセルはある』

ゼロに言われて周囲を見ると、確かにいくつかのひび割れたカプセルと、そうでないただの真っ白なカプセルが漂っていた。

ひび割れたカプセルには、うっすらと何かが描かれているようにも見える。

『ウルトラマンヒカリに言われて一応持ってきていたが……、こんな所で役に立つとはな』

「ひび割れてるのは何なん？」

『それは元々起動してた奴だ。つつても、レゾリウム光線の影響で壊れちゃったけどな。ま、その内直るだろ』

「お気楽だな」

『前向きと言え。さてと……、そろそろ戻るとしますかね。シユワツ！』

ゼロは空に飛び立っていった。

その日それから数時間後、浦の星女学院。

「鞠莉さん！」

「どうしたのデースか？」

「あのメールは何ですの!？」

勢いよく理事長室の扉を開けたダイヤが、机を叩いて鞠莉に詰め寄る。

「何って……、書いてあったとおりデース」

ティーカップ片手にそう答えた鞠莉に、ダイヤが肩を震わせ出す。

「そんな……、ウソでしょう……」

そんなダイヤを見て、鞠莉も笑顔を陰らせた。

二十二話 廃校と迷走

『またリトルスターがゼロの手に……』

『あのゼットン星人、大口を叩いた割には大したことなかったではないか』

『どーすんだ？ まだ例のリトルスターも見つかってねーし』

『ウウウウウウ……』

『見つかるまでは気長に待てばいい。それ以外は私が出向いてブロンズ像にしまえばいいだけの話ではないか』

『まだ我々が出向くには時期早々ですよ。ここは一旦彼に戻ってきてもらおうとしますか』

「えっと．．．．．、どういう状況．．．？」

浦の星女学院スクールアイドル部部室にやってきた陸の目に映ったのは、善子を抱えて社交ダンスの様なポーズをとる千歌の姿だった。

〈新しいフォーメーションか？〉

（だとしたらどんな．．．．．、駄目だ否定しきれねえ．．．）

「あつ！ 陸ちゃん！ 聞いてよ聞いて！ これで舞台が整ったよ！ 私達が学校を救うんだよ！ そして輝くの！ あのμsのよ——むぐつ．．．．．」

「誰か、説明よろしく」

興奮した様子で言い寄ってくる千歌の口を塞いだ後、妙に暗い顔をしたAqoursの面々に問いかける。

すると曜が答えた。

「それがね．．．．．」

* * *

「はあ．．．、統廃合．．．．．」

陸が曜から聞かされた話は、浦の星女学院は沼津の高校と合併して統廃合になるかも、と言うものだった。

「で？ 何で千歌はこんな事になってんの？」

ぴよんぴよんと跳ねたり、校内を駆け回っている千歌はショックで壊れたとしか思えない。

「だって！ 廃校だよ！ 音ノ木坂と、一緒だよ〜！」

遂にここまで馬鹿が進行してしまつたかと額を抑える陸。

「……………つか、浦女はまだその話持ちあがつてなかつたのな」

「あー……………、そういえば陸の学校はもうとつくに廃校決まつてたんだけ」

陸が今通っている学校は元々田舎な上に少子化による生徒不足が重なり、新学期早々に沼津の高校との統廃合が決定したばかりだ。

恐らく浦女も同じ理由なのだろう。

「一応、来年の入学希望者数の数を見て、どうするか決めるらしいんですけど……………」

「それならまだ幸せな方だろ。うちなんか問答無用で統廃合だぞ」

「まあ、この辺女の子の方が多いしね」

「だから！ その廃校を私達で止めるんだよ！」

「簡単に言うけどな……………、お前それがどんだけ大変か分かつてんのか？」

「……………」

アホ面のまま首を傾げる千歌を見て、偏頭痛を感じる陸だった。

「花丸ちゃんはどう思う……?」

「……と、統廃合……!!」

「こつちもか……」

先程からやけに静かだった花丸も、千歌と同じぐらいに目を輝かせていた。最も、花丸の場合は千歌とは別の理由だろうが。

「合併という事は、沼津の高校になるぞらね! あの街に通えるぞらね!」

「お……おう。そうだな……」

「うわあああ……」

クニキダ原人が反応したのは、やはり沼津と言う都会だった。そこに通える事に歓喜を覚えているらしい。

この文明に置いて行かれた少女が、その生活に適應できるかは置いておいてだが。

「相変わらずね、ずら丸。昔からこんな感じだったし」

「そうなの?」

「ええ、幼稚園の頃、人が近づくと反応して点灯するライトを見た時も、未来じゆら……って、興奮してたしね」

当時から既に花丸は時代に置いて行かれていたらしい。

「……津島はどうなん? お前一応沼津の方から通ってんだろ?」

「そりや統廃合した方がいいに決まってるわ！ 私みたいに流行に敏感な生徒も集まってるだろうし！」

「良かったぞらね。中学の頃のお友達に会えるぞら」

「統廃合絶対反対！」

見事なまでの手の平返しだった。

きつと善子は、中学の頃の黒歴史を無かった事にするために浦女に來たのだろう。

陸がそう思ったその時、ぼしんと机を叩く音が部室に響いた。

自然と皆が音のした方を向くと、そこにはやる気に満ちた千歌の顔があった。

「とにかく！ 廃校の危機が学校に迫っていると分かっていた以上、A q o u r s は学校を救うため、行動します！」

千歌のその言葉に、皆口角を上げる。気持ちは一つだ。

「ヨーソロー♪ スクールアイドルだもんね！」

「で？ 具体的にはどうするつもりなの？」

笑顔で問いかけた梨子に対し、

「……え？」

チーンと言う音が、聞えた気がした。

「内浦のいい所を？」

「そう。東京と違って、外の人はこの町の事知らないでしょ？ だからまずはこの町のいい所を伝えなきゃって」

「それでPVを？」

「うん！ μ☒sもやってみたいだし、これを公開してみんなに知ってもらおう！」

「知識の海ずら〜」

練習後、廃校を阻止するためにμ☒sがやった事を再確認した結果、μ☒sはスクールアイドルのランキングに登録をして、ラブライブに出て有名になって生徒を集めただけだった。

当然それだけでは田舎の内浦に人は集まらない。

そこでこの町の事を良く知ってもらおうとPVを作る事になったのだ。

「というわけで、一つよろしく」

千歌の指示で、曜がビデオカメラを花丸に向けた。

「あつ！ いやつ、まるにはむりずr．．．いや、無理．．．」

花丸が逃げたので、今度はルビイにカメラを向ける曜。

「．．．．．ピギイツ！」

するとルビイの姿が一瞬で消えた。

「あれ．．．．．」

へ馬鹿なつ！ テレポートだどつ!? ルビイの奴、また新しいリトルスターを？！

(普通に逃げただけだと思っぞ)

とは言っても、ルビイの姿は周囲に見当たらない。

まさかゼロの言う通り本当に新しいリトルスターが、と思ったその時、善子が近くの木を指さした。

「見えるわ！ あそこよ！」

「違います！ ピィ〜！」

すると反対側に会った看板からルビイが姿を現した。曜が再びカメラを向けると、慌てて逃げていく。

「おお！ なんだかレベルアップしてる！」

「言ってる場合じゃねーからな」

そんなこんなでようやく撮影が始まった。

T A K E 1

花丸のカットの後、千歌が富士山を背後にひよこりと姿を見せる。

「どうですか？ この雄大な富士山！」

T A K E 2

今度は梨子がカットを切り、内浦の海を背に再び千歌が現れる。

「それとこの綺麗な海！」

T A K E 3

ルビイがカットと同時に逃げ、大量のミカンの入った段ボールを抱えた千歌が現れる。

「更に、ミカンがどっさり！」

T A K K E 4

今度は町を背に、

「そして町には……特に何もありません！」

千歌のサムズアップと共に撮影が止まり、陸の手刀が千歌にヒットする。

「それ言っちゃ駄目だろっ！」

「痛い！」

T A K K E 5

千歌の代わりに今度は曜が、今度は沼津。何もいらないだなんて言わせない。

「バスでちよつと行けば、そこは大都会。お店もたくさんあるよ！」

大都会かはちよつと怪しいが、まあ良しとしよう。

T A K K E 6

千歌と梨子の番で、事件は起きた。

「そして……ちよつと……」

「自転車で……坂を超えると……そこには……伊豆長岡の商店街が……」

どう見てもちよつとじゃない長さの坂を自転車で登った二人の息はすっかり上がっていた。カメラを見る余裕すらなく、セリフも途切れ途切れである。

「全然……ちよつとじゃない……」

「つ……、つ……、沼津に行くのだから……、バスで五百円以上かかるし……」

「……ちよつと……いい加減にしてよ……」

「……だめだこりゃ……」

ゼロのおかげで息切れすらしていない陸は、その凄惨な光景に目を覆った。

T A K E 7

墮天使コスプレをした善子が、意味ありげなポーズを取っている。

「ふふ……、リトルデーモンの貴方！ 墮天使ヨハネです。今日はこのヨハネが墜ちてきた地上を紹介してあげましょう。まずこれが……、土!!」

土の山を指さすと、高笑いを始める善子。

「やっぱり善子ちゃんはこうでない」と

上機嫌なのは花丸だけだった。

一通り撮影を終えた陸達七人は、松月と言う喫茶店に来ていた。

「はーい。お待ちどおさまー。こんな大人数だなんて珍しいわねー。ごゆっくりー」
「で? どうして喫茶店なわけ?」

注文の品が到着した後、善子が怪訝に眉を寄せた。

「もしかして……、この前騒いで家族の人に怒られたり……」

「ううん違うの。梨子ちゃんがしいたけいるなら来ないって」

「別に行かないとは言ってないでしょ? 繋いでおいてって言うてるだけ!」

「ここら辺じゃ放し飼いにしてる人の方が多いかも」

「そんなあ……」

田舎の常識に都会っ子の梨子が落胆する。

「ワン!」

「またまた……」

「ワン!」

「え．．．？」

梨子が油の切れたロボットの様な動きで声のする方を向くと、そこには小さな黒い子犬が。

「ひいひいひいひい！」

がたんと椅子を揺らしてその子犬と距離を取ろうとする梨子。

「こんな小さいのに!？」

「大きさは関係ないの! その牙! そんなのに噛まれたら．．．．．死!」

流石に極端すぎると思う。

「噛まないよー。ねーわたちゃん」

「ワン!」

その子犬、わたちゃんを抱き上げた千歌を見て、梨子の警戒心が更に強くなる。

「あ．．．、危ないわよ! そんなに顔を近づけたら．．．」

「そうだ! わたちゃんですし慣れるといいよ!」

「ひっ．．．」

千歌がわたちゃんを梨子の顔に近づけると梨子の表情が恐怖のあまり引きつり、軽い顔芸を披露してくれた。

そしてわたちゃんがその顔を舐めた瞬間、

「ああああああああ！」

爆ぜる様に飛び出した梨子がトイレの中へと非難してしまった。

「おーい。桜内ー?」

「話は聞いてるから早く進めて!」

梨子が子犬に敗北した瞬間だった。全員がトイレに向けてジト目を向ける。

「しようがないなあ……、出来た?」

千歌がパソコンで撮影した映像を編集していた善子の顔を見る。

「簡単に編集してみたけど……、お世辞にも魅力的とは言えないわね……」

やれやれと言った表情で善子が肩を上げた。

「やつぱりここだけじゃ難しいんですかね……?」

「うーん、だったら沼津の賑やかな映像を混ぜて——」

「そんなの詐欺でしょ!」

トイレの中から梨子がツツコミを入れる。

「何で分かったのっ?」

「だんだん行動パターンが分かってきたのかもな……、って……」

そこまで言った陸の目に映ったのは、一日数本しかないバスがバス停に止まる光景だった。

「津島、終バス来てるぞ」

「うそっ!？」

善子が青ざめた表情で荷物をまとめ始める。ここから善子の家までは歩くと結構かかるので、このバスを逃したら悲惨なことになるのは確実だ。

「ふふ、ではまた」

最後だけ余裕を見せると、善子はバスに乗り込んでいった。

「曜ちゃんはいいの？」

「陸と言うタクシーがあるので!」

「置いて行ってもいいんだからな」

「またまた〜♪」

そう言う曜の表情はそんな事するはずないと確信しているようだった。まあ、実際やったら殴られるのでやらないのだが。

だがまだ曜は知らない、この後陸による地獄のウィリー走行祭りが待っている事を。

「なあああああああ!!」

涙目になる曜の姿を想像して陸がほくそ笑むと、今度はルビイが奇声を発しながら立ち上がった。

「こんな時間! 失礼します! ほら花丸ちゃん、口にあんこついてるよ!」

「んふ〜んふ〜んふ〜」

まだスイーツを堪能している花丸を引きずってルビイが退場していった。
残されたのは二年生四人。

「・・・意外と難しいんだなー・・・、いい所を伝えるって・・・」

「住めば都、住んでみないと分からない良さもたくさんあるだろうし」

「PVじゃそれは通用しないけどな・・・」

「まあでも、梨子ちゃんという事も一理あると思うよ」

「うん・・・」

わたちゃんを抱き上げると、千歌はその頭を優しく撫でた。くうーんと言うわたちゃんの声が、静かな店内に溶け込んでいく。

「でも学校が無くなったら、こういう毎日も無くなっちゃうんだよね」

「そうね・・・」

「スクールアイドル、頑張らなくちゃ!!」

千歌がわたちゃんを放すと、わたちゃんは店の奥に駆け込んでいった。それを見計らって梨子もトイレから出てくる。

「今更か？」

「だよね・・・。でも、今気づいた。無くなっちゃ駄目だって」

「……………」

三人の沈黙が重なる。

しばらくして、千歌は持ち前の明るい笑みを作り、

「私、この学校大好きなんだ！」

「……………うん！」

「ヨースロー♪」

「……………おやあ……………」

日が傾き、薄闇が支配し出した淡島神社の階段中腹。

その男は自分を取り囲む数人の気配に気が付き、緊張感無く口角を吊り上げた。

「ボクのファンかな？ 見た感じ皆男みたいだけど、囲まれるなら女の子が良いなー？」

この状況にも関わらずヘラヘラと笑うその男に、取り囲む者の一人、マグマ星人が前に出た。

『ふざけるのも大概にしてもらおうか』

首筋に鋭利なサーベルを当てつけられ、笑顔は崩さないまま男はホールドアップする。

「で？ 実際何の用だい？ 生憎ボクを攫っても誰も身代金は出してくれないよ？」

『……ダークネスファイブ。理由はこれだけで十分だろう。さあ、我々と共に来い』

「……」

マグマ星人がその名を口にした瞬間、男の表情が変わる。

「いいよ。連れてってよ」

二十三話 夢で照らす夜空

『以上！ がんばルビィ！ こと、黒澤ルビィがお伝えしました！』

翌日、浦の星女学院理事長室。

千歌達に手渡された動画を、鞠莉はこくりこくりと首肯しながら細目で眺めていた。

「……………」

動画が終わった後、鞠莉から一向に反応がなく、理事長室はしばらくの間静寂に支配された。

「……………どうでした……………」

静寂に耐えたねた千歌が、緊張気味に鞠莉の顔を覗く。

だが鞠莉から返事はない。赤べこのように首肯を続けるだけ。

そして一際大きく彼女の頭が揺れた後、

「……………オウツ！」

だらしなく弛緩した顔をする鞠莉が、眠そうに眼を開いた。

どうやら眠りの世界にいたらしい。

それを見て A q o u r s 全員がよろける。よろけなかったのは理事長室の隅で腕を組んでそれを見ていた陸だけだ。

「もう！ 本気なのに！ ちゃんと見てください！」

たまらずツッコんだ千歌に、鞠莉が眉を寄せた。

「本気で・・・？」

「はい！」

千歌の返事を聞いた鞠莉はパソコンを閉じると、寄せた眉を軽く釣り上げた。

「それがこのテイタラアクですか？」

「て・・・？ 体たらく・・・？」

〈発音おかしいだろ〉

(ツッコむな)

「それは流石に酷いんじゃない？」

「そうです。これを作るのにどれだけ大変だったと思ってる・・・」

梨子がそこまで言った辺りで鞠莉が机を叩き、陸以外の六人が身を震わせる。

「努力の量と結果は比例しません！ 大切なのはこのタウンやスクールの魅力を、

ちゃあーんと理解してるかどうかデエース！」

「それってつまり……」

「まる達が理解してないって事ですか……?」

「じゃあ、理事長は魅力が分かってるって事?」

善子がそう聞くと、鞠莉はその表情を保ったまま六人を眺め入った。

「少なくとも、あなた達よりは……聞きたいですか?」

PVは作り直すことにし、七人は帰ろうと昇降口に来ていた。

「どうして聞かなかったの?」

結局鞠莉からアドバイスを聞かなかった事を、梨子が尋ねた。

「なんか、聞いちやダメな気がしたから」

「何意地張ってんのよ」

「意地じゃないよ。．．．それって大事な事だもん。敵を知るにはまず己から、だよ」
「うん。ちよつと違うな」

だが言っている事は間違っていない。人にものを教える時は、自分はその三倍理解していないといけないとも言う。

だからまず、自分達がこの町の事をもつとよく知らないといけない。

千歌はそう言いたいのだろう。

「自分で気づけなきやP.V作る資格ないよ」

「．．．．．そうかもね」

「ヨースロー♪ じゃあ今日は千歌ちゃん家で作戦会議だ！」

その言葉で梨子が体を強張らせたのを見て、曜が意地悪くにやにやと笑う。

「喫茶店だつてタダじゃないんだから、梨子ちゃんもかんばルビイして！」

「はあ．．．．．」

そのやり取りを見ていた千歌の表情が緩んでいき、やがて笑い始めた。

「ふふっ．．．．．、ふふふふ．．．．．、あははははっ！」

その笑い声は全員に伝染していき、やがて全員の頬が緩む。

「えへへ．．．．．、よーし！」

千歌はそう言うのと右手を上げ、

「……あ、忘れ物した」

ズコツ、と全員がよろめく。締まらない事この上ない。
「ちよつと部屋見てくるー」

やけに嬉しそうな表情で千歌が走り去って行った。

〈………凄いな。あいつは〉

そんな千歌を見て、ゼロがポロつと所感を零した。

〈あいつには不思議と人を引き寄せる力がある。輝きなんつゝ曖昧で形のないモンを追いかけて、何を始めるにも躊躇わずに突き進める。あいつは自分の事を普通だなんて自嘲しちやいるが、それは簡単にできるもんじゃない〉

（………ああ、わかってるよ）

陸は千歌が走り去って行った後の廊下を一瞥し、千歌を待つ五人を見据えた。

（そんな千歌だから、皆こうして集まったんだ）

「で、遅いなあいつ等……」

忘れ物を取りに言った千歌はおろか、その後を追った五人もまだ帰ってこない。

〈宇宙人でも出たか？〉

（だからその発言はフラグになりかねないから辞めろ）

ゼロの縁起でもない発言は大体その通りになってしまふのが怖い所だ。

学校内だし、そう簡単には宇宙人も入っては来れないだろうが、元リトルスター所持者が三人もいることを考えるとあり得ないとも言切れない。

そう思い、一応念の為に自分も体育館に向かう事にした陸。

最近浦女の生徒が陸を見て何も反応しなくなってきたのは、皆徐々にこの光景に慣れてきているのだろう。

まさかこれも鞠莉の計画の一つなのだろうか。こうして浦女の生徒に陸への抵抗を失くして一気に引きずり込もうとしているのか。

（まさかな……、流石に冗談だろ……）

そう思いながら角を曲がり、体育館へと続く通路に出た陸の目に映ったのは、ダイヤと鞠莉の姿だった。

「ダイヤ。逃げていても、何も変わりはないよ……？　進むしかない。そう思わない？」

通路を進むダイヤを鞠莉が呼び止め、ダイヤの考えてる事はお見通しだよ、と余裕気な表情を見せる。

「逃げてる訳じゃありませんわ……。わたくしも、果南さんも。あの時だって……」
「ダイヤ……？」

そう言い残して再び歩き出すダイヤに、鞠莉が怪訝そうに表情を崩す。

柱の陰に隠れ、その会話に聞き耳を立てていた陸は。

(何でここで果南姉ちゃんの名前が……)

同級生なんだし知り合いでもおかしくはないが、このような雰囲気でも名前が出てくるような間柄なのだろうか。

〈なんか裏がありそうだな〉

別にスクールアイドルが嫌いな訳じゃないのに、それを拒み続けたダイヤ。

Aqoursに辛辣な発言を続ける鞠莉。

そして今の会話と、不意に名前が出てきた果南。

そう言えば果南は、前に千歌がスクールアイドルの話題を出した時に少し様子がおかしかった気が。

(・・・・・・・・・・)

何か引つかかる。

どうもこの三人。スクールアイドルに対する反応が普通じゃない。

「あつ、陸ちゃん」

顎に手を当てこの違和感の正体を探る陸に、ようやく体育館から出てきた千歌が駆け寄ってきた、後ろには五人もいた。

「遅かったな。何かあったのか？」

ゼロの発言がフラグにならなかった事はひとまず安心だが、それでもやたらと長かった事に変わりはない。

「それが・・・・・・・・、ステージでダイヤさんが躍っててさ」

「・・・・・・・・・・？ どういう事だ？ あのスクールアイドルが・・・・・・・・」

「前は・・・・・・・・・・、ルビィより好きでした・・・・・・・・」

ルビィのその言葉で、陸の中である仮説が立てられた。

(・・・・・・・・・・ひよつとして・・・・・・・・)

翌日の午前四時。

曜の目覚ましナツクルによって早朝から文字通り叩き起こされた陸は、陸の首根つこを掴んだ曜に引きずられながら千歌の家の近くの砂浜に来ていた。

今日は海開きの日。

毎年恒例の行事として、海開きの日は住民で砂浜の掃除をするという伝統があるのだ。

既に砂浜には十千万の提灯を持った人々が大勢おり、どうして皆朝からこんなに元気なんだろうと思う。

ちらほらと知っている顔も見受けられ、いつの間にか陸の傍からいなくなっていた曜は千歌と梨子と一緒にいる。他だと一年生ズの花丸ルビイ善子。三年生だとダイヤ鞠莉、そして果南と一緒に行動していた。あの三人。やはり何かしら関りがあるらしい。

〈起きてるか？ 陸〉

さつきからゴミも拾わずにただボーっとしている陸に、ゼロが起きているかの確認を

取った。

(眠い………。何故沼津寄りの俺まで参加せにやいかんのだ)

「毎年やってんだろ？ 今更文句言うな。だがしかし……、この町、こんなに人間がいたんだな……。」

(まあ、何だかんだでデカいイベントだからな。町中の人がある……。ねみい……)

「あの一！ 皆さん！」

陸がゼロのウルトラ念力によって覚醒させられるのと同時に、千歌が砂浜に集まっていた人々に呼びかけた。

「私達！ 浦の星女学院でスクールアイドルをしている！ A q o u r s です！」

人々の視線が集まる中、千歌は更に声を張り上げた。

「私達は、学校を残すために！ ここにたくさん生徒を集めるために！ 皆さんに協力して欲しい事があります！」

千歌は最後にすうー、と息を吸い込み、

「皆の気持ちを形にするために!!」

「おし。もういいぞー！」

浦の星女学院屋上。

いくつかのポイントにカメラを設置し終えた陸が、赤と青、そして紫のドレスの様な衣装に身を包んだ六人にサインを出す。

少しその三色に既視感を覚えながらも、陸はカメラに写らない場所まで移動した。そこでサインをすると六人が立ち位置に着き、それぞれでポーズを取る。

「さくやー！」

合図と共にカメラは回り、作曲したての音楽が流れだす。

———
夢で夜空を照らしたい

ゆったりとしたテンポの曲に合わせ、手の動きに重きを置いたダンスを披露して
く。

〈あいつも思い切った行動に出たもんだな〉

（ああ、まさか町中の人間に協力を仰ぐとは……）

あの時、千歌が集まった人々に頼んだ事。それはスカイランタンの制作を手伝って欲
しいというものだった。

この数日間。時間があればランタンを製作し、今や数多くのランタンがスタンバイ済
みだ。

〈タイミング、うまくいくかね〉

（安心しろ。サイン出すのは俺だから）

〈余計不安だわ〉

（どういう意味だつて……、今だ！）

曲の盛り上がりがピークに達するタイミングを見計らい、陸はスタンバイして頂いて
いる皆様にサインを出した。

それと同時にスカイランタンが空に放たれ、バックに富士山を構える空と町を赤く照
らす。

曲の情緒も相まって、PVと呼ぶにふさわしき光景が目の前に広がる。

空に浮かび上がる優しく温かい光の中で歌う彼女達は、内浦の町皆の想いに包まれたスクールアイドル。A q o u r s 。

気持ちは形になった。

千歌の想いが伝わって、町の人皆の夢がこの空を照らしたのだ。

『守らないとな。この夢を！』

「……………ああ！」

撮影が終わった後、千歌は駿河湾に沈む夕日を眺めていた。

「陸ちゃん……………」

「あ？」

「私、心の中でずっと叫んでた。助けてって、ここには何もなくて……………でも、違っ

たんだ」

背後の五人に笑いかけた後、千歌は赤く染まった街並みを見下ろした。

「追いかけてみせるよ。ずっと、ずっと！ この場所から始めよう！」

今日、改めて分かった事がある。

内浦の本当の魅力、それは人の心にあつた。

見栄えのある景色や、便利な都会などが町の魅力の全てじゃない。

内浦もそうだ。美しい自然。雄大な富士山。どこまでも広がる海。確かに魅力的だが、これが内浦の全てじゃないんだと。

人と人が寄り添い、支え合い、共に紡ぎあげていく温かさ。

A q o u r s だって、決して今の六人だけで成り立つてきた訳じゃない。

この町の、いろんな人の温かさに包まれ、今のA q o u r s がある。

その事を胸に、千歌は、A q o u r s は新たに決意する。

「できるんだ!!」

一方、複数の宇宙人に連れていかれた男は、暗い空間の中で五体の巨大な影に囲まれていた。

「で？ 何の用だいスライ。こんな手荒にボクを呼び戻したって事は、それなりに重大な案件だつて事だろ？」

自分よりも遥かに巨大な存在達が自分を見下ろしているにも関わらず、男は陽気な声と共にその内の一人を見上げる。

『まあ、そう判断してくれて構いません』

軽快な男の口調とは正反対に、スライは淡々と答えた。

『それで、どうでした？ 例の彼は』

「リククンの事かー！ って、なんてね。まあ、ボク個人としては結構好ましく思ってるよ。彼は面白い。出来れば別の出会い方をしたかった。運命って残酷だよね」

『お前個人の感想は聞いていないぞ』

「まあまあ、そうかつかするなよジャタール。人を好ましく思う事は悪い事じゃないだろ？」

『ふつ、変な情などが移らなければよいがな。仙道陸は元より死ぬ運命。それは貴様も

重々承知の上で奴と接触したのだろうか?』

「ヴィラニアス。君はもう少し仲間つてもものに情を持った方がいいと思うよ? それに決められた運命の中でどう生きるかは彼の勝手さ。そこはボク等が口出しする事じゃない」

『ウウウウウウウウウウ』

「君は相変わらず何を言っているのか分からないね。デスローグ」

『俺達の、と言うか、陛下の障害になる可能性はあるかつてよ』

「通訳ありがとグロツケン。そうだなあ、そもそもゼロ君と一体化してるんだし、ほぼ確実に邪魔してくるでしょ。陸君も幼馴染の女の子に危害が及ぶなら、迷わず戦いを選ぶと思うよ。それが陸君の戦う理由っぽいからね。と言うか、彼が戦い続けた方が君等にも都合がいいんだろ? 何企んでるかは知らないけど」

『そうですか……』

男から得た情報を咀嚼し、スライが思考を巡らせる。

『では、まずはその少女達から始末するとしますか。そうすれば仙道陸も戦う気力を失うでしょう。それに例の力も——』

「あー、それはちよつと待った方がいいと思うよ」

早速その少女達を始末すべく刺客を差し向けようとしたスライを、男が制する。

『どうした。まさか本当に情が移ったとしても言うのではあるまいな』

「まさか。情ならとつくに移ってるよ。でなきやダダから彼女を助けようとするわけがない。まあ、これにはちゃんとした理由があるんだけどね」

『？ ダダの作戦邪魔したのお前だったのか？ 何で？』

「別に、ボクとしてはリトルスター所持者の子はいつでも良かったんだけどね。ダダがあの子まで連れて行くこうとしてたから」

『貴様、それだけの為にみすみすリトルスター所持者を見逃したというのか！』

「だから落ち着けてジャタール。理由があるって言ったろ？」

男はそう言う指を鳴らし、自らの足元にミカン色の少女の姿を映し出した。

「ボクの勝手な推測だけど、多分この子が君等の探している物を持っていると思うよ」

全員が映し出されたその少女を凝視する。

『では。この少女があの光を宿している。そう貴方は言いたいのですね？』

「まあそうかな。ボクとしてもその子を始末されちゃうと悲しいかも」

『貴様、その為に話をでっち上げたのではあるまいな』

「まさか。これが嘘を言っているような目に見えるかい？ ほら見て、まるで生まれたての純真無垢な子供の様に澄み切ったこの目を！」

『澄み切っているかどうかはさておき、まあ、貴方がそこまで言うのならもう少し様子を

見ましよう』

「そうしてもらえると助かるよ」

『ですが、与えられた仕事はしつかりこなしてもらいますよ』

「……ふっ、分かってるって」

赤く光る五人の双眸に照らされ、男——、オウガは心底愉快そうに笑った。

二十四話 光の印

「これは……?」

内浦の一角。

古くからある寺にして、国木田花丸の実家でもあるそこ。

母に言われて蔵の掃除をしていた花丸は、とある物が目に映った。

所々痛んでいる古そうな箱から少しだけその姿を見せる、筒状の物体。

「……巻物……?」

不思議に思った花丸が手に取ると、やはりそれは巻物だった。

「……」

身体が疼くのを感ずる花丸。

花丸は本が好きだ。千歌達とスクールアイドルをやる前は、基本的にずっと図書室に籠っているような本の虫だった。まあ、それは今も変わっていないのだが。

巻物と言うと、昔の物語だったり、古来からの言い伝えが記されている物だ。

現代と昔では文章の表現方法も大きく違うので、普段呼んでいる文学作品とはまた

違った楽しみが味わえる。

要約すると、すつごく読みたい。

しかしこんな古びた箱に入っている物、もしかしたら家宝だったりするのかもしれない。ちよつと先が破れているのを見る限り、かなり劣化が進んでいる可能性もある。

だからここはぐつと我慢の子……。

「……、ちよつとだけ見て、そつと戻せば問題ないすら……」

しかし湧き上がる興味には勝てなかった。

そそくさと蔵の物陰に隠れ、その巻物を開く。

「……、随分と古い文字だなあ……」

そこに記されていたのは現代人ならまず読めないであろう古典文字と、黒い炎の中で三日月形の角を生やした怪物が、銀色の巨人と戦っている描写を切り取ったような絵だった。

「……、流石に読めないすら……」

文学少女の花丸でも流石に解説不可能で、諦めた様に花丸は巻物——太平風土記を元に戻した。

「終わつたよ……」

淡島神社。参拝者を殺したいのかと思つてしまうほど長い階段を往復し終えたAq
oursの面々は、力なく地面にへたり込んでいた。

日々のトレーニングでそれなりに体力は付いたものかと思つていたが、個々の階段は
別格らしい。

決して体力が無いわけではない彼女達ですらこの有り様なのだ。以前平然とこの階
段を往復していた果南の体力は計り知れない。

「……いつも思うんだけど……陸ちゃんそんなに体力あつたっけ……？」
途中で花丸が力尽きた時の為に一緒に走っていた陸。予想通り下りは花丸を背負つ
て走ってきたというのに、六人と違つて息すら上がっていない。それを訝しく思つたら
しい千歌が眉を寄せる。

「毎朝あれを乗せて自転車漕いでますからね」

「私そこまで重くないでしょ!」

そうやって曜を指さすと、膨れた曜にポカポカと殴られた。

まあ実際曜は重くないし、そもそもゼロと一体化しているおかげなのだが。

〈今度試しに力貸すの辞めてみるか?〉

(俺もああなるから辞めて)

恐らくだがゼロが抜けたらこの中で一番体力無い自信が・・・、花丸がいるから二番目か。

「・・・ん?」

六人の内、一人が離れた場所にいる事に気付く陸。

皆がへばっている中、一人陸に背負われていたおかげで回復が早かった花丸が険しい顔で唸っている。

花丸の両手には、巻物と古典文字が羅列している本が。

「・・・何見てんの?」

「ずらっ!」

よほど集中していたのか。近づいていた陸にも気が付かなかったようだ。驚きのあまり持っていた巻物を放り投げてしまっている。

「ほっ」

それをキャッチした陸の目に入ったのは、何と書いてあるのか全く分からない文章だった。

「何？ まさかこれ読んでたのか？」

陸が巻物を返しながら問いかけると、花丸はこくりと首肯した。

「昨日まるの家の蔵から出てきて……、ちよつと気になったから、お母さんに古典文字の解説所を貸してもらって読んでみようと思ったんだ」

「……マジかよ……」

古文はテスト等で出てきた時には頭がショートしてしまうレベルで苦手だ。謎だ。宇宙語だ。それをわざわざ解読しようなんて思わない。

「先輩……、全部口に出てるずら……」

「苦手なもんは仕方ない。で？ なんて書いてあるの？」

さつきちらつと見えたのは頭が痛くなる古典文字だけではなく、怪獣と巨人が戦っているような絵もあった。

巨人はどこことなくゼロと似ているような感じがするので、結構気になる。

そして何より、

「おい陸！ 今の巻物は何だ？ 見せろ！ 今すぐ見せろ！」

巻物を見てからと言うものゼロがうるさい。

「どうやら巻物に書いてあつた絵が気になるらしい。」

「まだ断片的にしか解説できてないけど……、それでもいいはず？」

「全然いいよ。それよりよく解説しようと思つたな。俺だったら見ようと思わん」

「先輩は本読むの嫌いな？」

「小説はそれなりに読むぞ？　けど古文は見ただけで頭痛くなつてくるから……」

「一体何度テスト中に頭を抱えた事か。」

「慣れれば面白いよ？　古文には古文の味があるし」

「……俺はその域に達しなくていいかな」

「わからず屋」

「俺の事はもういいだろ！　それより、なんて書いてあつた？」

「人に頼む態度じゃないぞら……。えつと……」

そう言つて花丸は、分かりやすくするようにメモに取つたものを見せてくれた。その隣に現代語訳があるのが陸的にはありがたい。

『地泣きて零れし時、眠りたるものけ、禍古獣目覚めん。

禍古獣。三日月の角で天ヲ穿ち、地ヲ裂き、山ヲ崩さん。

天より出でし鈍色の巨人。此れを封印す』

『大地が躍動して崩れる時、眠りについてた獣、禍古獣が目覚める。

禍古獣。三日月形の角で天を穿ち、大地を裂き、山を崩す。

天空より現れた銀色の巨人が、これを封印する』

「……………は？」

読み終えた陸が素つ頓狂な声を上げる。

「まるの字、汚かつたずら……………」

「ああいや！ そうじゃなくて。何言ってるのかきっぱりわからなくて……………」

花丸には咄嗟に胡麻化したのが、陸にはなんとなく心当たりがあった。

この文章に出てきた、もののけと戦う鈍色の巨人と言うもの。

これはもしかしてウルトラマンではないだろうか。

(ゼロ……………これって……………)

〈……………陸。ちよつと体借りるぞ〉

そう言われ、素直にゼロと人格を入れ替える。

『花丸。見つかったのはこれだけか？』

「う、うん……………探したら他もあるかもしれないけど……………。なんでいきなり下の名前ずら？」

詰め寄るゼロに気押されながらも花丸が答える。

『……この世界の太平風土記も過去の出来事を記録し、それが未来に起こりうる可能性を暗示しているとしたら……』

ゼロがしばらくぶつぶつと独り言を言った後、

「太平風土記……？　これ、太平風土記っていうの!？」

今度は花丸が興奮気味に詰め寄ってきた。

太平風土記。聞いたこともない名前だ。

きつと花丸はそれを聞いて読書家の血が騒いでいるのだろう。

『……ああ。歴史書、見たいなもんだ。幾多の怪現象や、それに纏わる怪獣たちの存在が記されている』

「……怪獣って……、作り話って事ずら？」

『いや。物によって記されている内容も違う。伝説の言い伝えだったり、伝承として過去の出来事を後世に伝えるための物だったりもしているが……、この場合は過去の預言者が記した予言の書かもしれないねえ……』

「予言書……。てことは、これに書かれている事が本当に起こる可能性があるって事ずら?!？」

いつになく息を荒げながら身を乗り出す花丸に、ゼロが反射的にのけ反る。

『まあ、そう言う事だが……。随分とあつさり信じるんだなお前……』

「予言書と言う響きがたまらなくいいすら！ この際それが事実がどうかは二の次ずら！」

『お、おう……、そうか……』

目を輝かせながら太平風土記を見つめるその姿は、新しい玩具を与えられて喜ぶ子供の様で。普段はおとなしい花丸が見せる無邪気な一面なのかもしれない。

「にしても、先輩詳しいね。ひよつとしてこういうの好きなの？」
『……』

返答に困ったらしいゼロが、何も言わずに主導権を返してきた。

こいつどうしてやろうかと思いつつも、陸はどう返答しようかと思いを巡らせる。

「ま、まあな。本訳された文献とか読むのは好きだぞ」

「ふうん……」

思ってもいない事を口にした陸を、花丸は興味深そうに見据えた。

「先輩。今日の練習が終わった後時間あるずら？」

「ん？ まあ、大丈夫と言えば大丈夫だが……」

家に両親がいないので、仙道家には門限と言うものが存在しない。そうは言っても常識くらいはわきまえているので、遅くまで出歩くなどという事はないが。

それにまだ太陽はそれなりに高い位置にあるので、練習が終わっても花丸に付き合う時間は全然あるだろう。

陸の答えを聞いた花丸は、悪戯っぽく笑ってから言った。

「じゃあ、ちよつとまるの家に来て欲しいすら」

「……え？」

「お待ちせずら……」

練習後。国木田家。

花丸の部屋に案内された陸が、幼馴染以外だと初めて入る女の子の部屋にそわそわしている、あるものを取りに行っていたらしい花丸が帰ってきた。

ダダの時に一応梨子の部屋には侵入したが、体を動かしていたのはゼロだし、状況が

状況だったのでノーカウントだ。

「わざわざごめんね。時間大丈夫だったずら？」

「ああ、そこは気にしなくていいよ」

練習終わりに花丸の家に行くと言ったら、曜に冷たい視線を向けられたが気にしない。

「で？ 一体全体何の用だ？」

これは純粹な疑問だ。

もう既に日は沈みかけていて、この部屋にも夕日が差し込んでいる。何とというか、こんな時間に女の子の部屋で二人きりと言うのは精神衛生上あまりよろしくない。

「変な期待はしない方がいいよ。まるにその気はないずら」

「安心しろ。俺もお前に限ってそう言う事はないって確信してるから」

「実際その通りだけど・・・、言い切られると何か悲しいものがあるずら・・・」

そう言うと花丸は抱えていた何冊かの本を下した。

どうやら取りに行っていたのはこの本らしい。どれも凶鑑の様に大きくて厚く、所々痛んでいるのを見るとそれなりに古い物のようだ。

「それは・・・」

「まるの家にあるふるーい本ずら。昔日本で起きた怪現象とか伝説が、全部ではないけ

どいつばい載つてるぞら」

「で？ それをどうするわけ？」

陸が聞くと、花丸は練習の時に見ていた巻物、太平風土記を鞆から取り出した。

「まる達で、この巻物に書いてある伝説を紐解くぞら！」

「紐解くつて……、具体的にどうするんだよ」

「何のためにこの本と先輩がいるぞら。この巻物の内容と似ている出来事と照らし合わせて、この予言が何を示しているのかを説明するぞら！」

なるほど。それでこの本か。

「それに先輩の話もちよつと興味あるんだ。これ以外の太平風土記に何が書かれていたかの話を聞きたいぞら！……だめかな？」

正直古文関連の調べ物など目眩がするほどにやりたくないが、後輩に頼まれては断る訳にも行くまい。まあ、学校は違うが。

「ま、いよいよ」

「やった！」

あどけない見た目に反して落ち着きのある花丸が見せる、年相応の無邪気な笑み。

この顔が見れたなら、陸がここに来た意味もあつたのかもしれない。

(じゃ、ゼロ。よろしく)

〈お前な．．．．．〉

「さて．．．．．。ここかな？」

既に日も沈み、闇に塗り潰された森の中。

人間ならばロクに回りを確認することもできない闇の中でその男、オウガは相変わらずケタケタと笑っていた。

これから起こる事が楽しみでたまらない。まるでそう思っているかのように。

オウガはスライに指示されたポイントでしやがみ込むと、そのまま地面に手を当て、辺りを支配する漆黒よりも暗い闇を注ぎ始めた。途端に大地が躍動を始め、鼓動の様に規則性のある揺れが辺りに響く。

「ボクがこんなことしてゐるだなんて知れたら、きっとゼロ君怒るよな．．．．．。殺さ

れない様にしないと」

オウガは立ち上がると、そのまま闇へと消えていった。

「君の成長。期待してるよ。陸君」

大地が裂けたのは、この直後だった。

「申し訳ないずら．．．．．まさかこんな時間まで．．．．．」

辺りはどつぷり暗くなり、陸の目に映るのは国木田家の灯りと、申し訳なさそうに頭を下げる花丸の姿。

「いや．．．、いいよ。こっちもすつかり話し込んだじゃつてたし．．．．．はは．．．」

その後、太平風土記の伝承についての話を始めた陸（ゼロ）と花丸の盛り上がりは止

まる事を知らず、気付いたらこんな時間になってしまつていた。

流石にこんな時間まで後輩の家に居座る訳にも行かないので早く帰るとしよう。

「太平風土記の事、解説進んだら何か教えてよ」

「先輩も、もつと他の太平風土記の話も聞かせてほしいぞら！ ぎるばりすと赤き鋼の話、とつても面白かつたぞら！」

「ん。じゃな」

花丸にひらひらと手を振ると、陸は自転車を漕いで国木田家を後にした。

「いやー。可愛い後輩を持つと苦労するぜ」

「別にお前の後輩じゃないけどな。まあでもしかし、あんなに興奮した国木田は見たことなかつたな」

「それだけ俺様の話が面白かつたって事だろ」

「へーへー凄いい凄いい」

調子に乗つたゼロはウザいので、早々に話題を切り替える。

「それで、ゼロ的には何か収穫あつたのか？ 国木田が持つた太平風土記についての」

「詳しい事はまだよく分からないが……、あの禍古獣とか言うの、もしかしたら魔王獣かもしれないな」

「魔王獣……？ なんだそりゃ」

〈世界を滅ぼそうとする怪獣の事だ。昔別宇宙でせいづらを封印するためにウルトラ戦士との間で壮絶な戦いがあった〉

そんなヤバいのがこの地球にもいると言うのだろうか。

「ん？ 待て。てことはお前より前にもこの地球に来たウルトラマンがいるって事か？」

〈そう言う事になるな。だが光の国のウルトラマンでこの地球に来たのは俺が初めてだから、恐らくそれ以外のウルトラマンだろ。しかし、まさかこの宇宙にもマガオロチの子供が産みつけられていたとはな〉

「どういう事だ？」

〈魔王獣の大元は大魔王獣マガオロチ。そいつのエネルギーが地球のエレメントと結びついて魔王獣は誕生した。だから魔王獣はある意味歪められた地球の分身とも言える〉

「……それ国木田に話してやったら良かったんじゃないの？」

〈話してたら、きつとまだあの中にいただろうがな〉

「はっ、ちげえねえ」

「うわああああああつ!!」

地響きと共に、逃げ惑う人々の悲鳴が暗闇に反響する。

悲鳴が聞こえた方を見てみれば巨大な影があり、それから遠ざかる様に人々が逃げているのが見えた。

『キシヤアアアアイヴウヴウウウウウウウウウツ!!』

闇夜に響く咆哮と共に、人々の悲鳴が大きくなる。

悲鳴は上げなかったが、陸もその声を聞き、身体が固まる。

〈陸。陸っ？ オイ！ またかお前！〉

「つ……!! つと、ワリイ……」

まただ。

また、六年前の怪獣と似たような書き声だった。

戸惑う陸の目の前に、ウルトラゼロアイが出現する。

へとにかく行くぞ。こんな暗闇じゃ町の人間も避難が出来ない〈

「ああ、そうだな・・・」

陸は今来た道を振り返る。

少し戻れば、そこは花丸の家だ。

「行かせねえよ。シエア！」

ウルトラゼロアイを装着し、陸はゼロへの変身を遂げた。

二十五話 厄災の魔王獣

『キシヤアアアイヴウウウウウウツ!!』

何かに苦しみ、抵抗しているかのように腕を振り回し、辺りにある建物を蹂躪する獣。

『シエヤア!』

暗い夜空を赤と青の閃光が照らし、それと同時に現れたゼロが怪獣の角を掴んで抑えこむ。

『キシヤアアアアア!!』

だが怪獣は軽々と頭部でゼロを持ち上げ、そのまま空へと放り投げる。

ゼロは空中でバク中をして体勢を整えて着地し、ファイティングポーズを取ってその怪獣と向き合った。

『ツ……? ゴモラ……、なのか?』

全身を覆う鎧の様な黒い鱗。長く太い尻尾に、鋭利な鉤爪を備えた腕。頭部にある三日月形の角と、クリスタルの様に輝く一本角。闇夜でも煌々と輝く紅い目。

そして全身に纏った黒いオーラ。

「……ゼロ。この怪獣は？」

『ゴモラ……の様にも思えるが……、所々違う。俺もこんな奴は始めて見る』

初めて見るその存在を警戒し、一定の距離感を保つゼロにその怪獣は悠然と歩み寄ってくる。

『……まあ、あいつが何者かはいい……。とにかく、ここから先には行かせねえ！』

ゼロが突き出した拳を、怪獣は涼しい顔で受け止める。そのままゼロの腕を振り払うと、その勢いを利用して回し蹴りを繰り返すが、それも固い鱗に覆われた腕に阻まれてしまう。

『かてえな……。だつたらー！』

ストロングコロナにタイプチェンジして炎を纏った拳で殴りかかるも、今度は俊敏な動きでそれをかわされ、逆にゼロを切り裂こうと剛腕を振りかざしてきた。

『ぐつ……。おお……。』

ゼロは鋭利な爪が身体に到達する前にその腕を受け止め、無防備になった腹部に向かってキックを繰り返す。

『キシアアアアイヴウヴウウウウ!!』

だが頭部のクリスタルが煌くと同時に腹部から波動の様なものが放たれ、キックが到達する前に衝撃波がゼロを襲った。

『があああッ！』

防ぐ術もなく吹き飛ばされ、地面を転がるゼロ。それを見た怪獣は前転をしてその強靱な尻尾でゼロの腹部を叩きつけた。ハンマーで殴られたような重い衝撃が腹部に走る。

『ガルネイトバスタアアアッ！！』

『キシヤアアアイヴウヴウウウウ！！』

距離を取ったゼロのガルネイトバスターと、怪獣がクリスタルの角から放った超振動波が衝突し、赤い閃光をまき散らす。

押し負けたのは、ゼロだった。

『ぐあああああああ！！』

超振動波がゼロを捉え、火花を散らしながら吹き飛んで行った。

「うーん。やっぱりあれにはゼロ君でも苦戦しちゃうか。さつすが魔王獣」

暗闇の中、あいも変わらず気味の悪い笑みを浮かべるオウガが見据える先には、オウガが呼び覚ました魔王獣と戦うゼロの姿が。

『ごんのっ……』

ゼロは魔王獣にヘッドロックを極め、魔王獣の心臓とも言えるクリスタルに攻撃を続けている。

ストロングコロナで戦うゼロの判断は正しい。それ以外なら圧倒的なパワー不足で一瞬のうちに叩き潰されているだろう。

「もうクリスタルに目をつけるのは流石だけど……、力だけじゃそいつはどうにもならないよ。ゼロ君」

『……陸……。恐らくだが、こいつが花丸の持っていた太平風土記に載っていた魔王獣だ……。』

「ちっ……、やっぱあのやり取りフラグだったか……」

陸は件の太平風土記についての花丸とゼロの会話を思い出して悪態づく。

魔王獣。世界を滅ぼさんとする怪獣なだけあって流石に強い。

先程からそれなりには戦えているが、やはり圧されている事は否めない。一発一発が重く、喰らった身体は少しでも動くとは激痛に襲われる。その上暴れ方が滅茶苦茶な為、行動が読めないのだ。

既にカラータイマーも鳴っており、状況は絶望的と言つていいだろう。

『陸……。一旦引くぞ。このままじゃ負ける。態勢を立て直すぞ……。』

「ああ？ あいつどうすんだよ？」

『別に放っておくわけじゃねえ……。次戦うまで抑えこんでおくだけだ』

怪獣の腹部を蹴り飛ばし、ふらついたところを力任せに海へと放り込む。

続けてストロングゴロナお得意のパンチキックの連続コンボを決め、怪獣を陸地から

遠ざけていく。

この調子ならいけるんじゃないかと思えるが、この怪獣、決め手である光線技が鱗のせいで通用しないのだ。

殴打で撲殺するにもタフ過ぎる。だからこそ今は態勢を立て直す必要があるのだろう。

『うおオオオオオオオオオオツ!!』

通常形態に戻ったゼロの両腕からオーロラのような光が発生し、怪獣を包んでいった。

『キシヤアアアアイヴウヴウウウウウ!!』

『がああああああつ……!!』

だがタダでは譲ってくれず、負けじと輝く角をゼロのカラータイマーに突き立て、直接超振動波を喰らわせてくる。

皮膚が裂ける様な痛みが走るが、ゼロはその手を下げない。

やがて光はバリアの様な物へと変わっていき、暴れる怪獣を閉じ込めてしまった。

『へっ……、ウルトラゼロディフェンサーの応用だ……、そう簡単には壊れねえぞ……』

最後にゼロはバリアごと沖へと投げ飛ばし、怪獣は深い海へと沈んでいった。

『ちよつとそこでおとなしくしてろ……、うっ……ぐあ……』

そこまで言った辺りでカラータイマーの点滅が止まり、幽霊のようにぼやけたゼロの身体は消えた。

「そんな……、ゼロさん……」

家を飛び出した花丸の目に映ったのは、倒れる様に消えていったゼロの姿だった。

二、三か月前前に突如現れ、怪獣から自分達を守ってくれていた青色の巨人。

最初は目つきが悪くて少し怖かったけど、何度か直接ゼロに助けられた事からその印象は変わり、今では本当にカッコイイと思っていた。

そんな彼が苦しみながら消えていくのは、ものすごく心が痛い。

「つ……」

そうだ。何の為に自分は家を飛び出してきたのだ。

陸を、先程自分の家から帰って行った先輩を探しに来たんだ。

怪獣が出たのは、丁度陸が帰って行った方向。

もしかしたら何か大変な事になっているかもしれない。携帯も繋がらないしなおさらだ。

花丸には陸の安否を確認する責任がある。だってこんな時間まで陸を引き留めてしまったのは自分だから。

「せんぱーい!!」

少し行くと、陸が乗っていた自転車が倒れているのを見つけた、しかし周囲に陸の姿はない。

「仙道せんぱーいっ!! どござらーっ!!」

ゼロと怪獣の戦闘で崩れた道を、つまづかない様に注意して進みながら陸の名前を呼ぶ。

道の一部では崩落も起こっており、これに陸が巻き込まれていたらと思うとぞつとする。

「……………ッ!先輩っ!!」

煤と土で真っ黒になって倒れている陸を見つけ、よろめきながらも花丸は陸の元へと駆け寄った。

駆け寄った陸の身体には所々痛々しい傷が見え、意識を失っている。何があったかは分からないが、相当激しい衝撃を受けたのは見て分かった。抱き寄せた体もすぐく熱い。

「仙道先輩っ!!」

暗闇の中に、花丸の悲痛な叫びが木霊した。

「あっ……、ぐう……」

全身の痛みで目が覚め、ゆっくりと瞼を開くと、そこに映ったのは知らない天井だった。

激痛に顔をしかめながらも体を起こすと、ぽすんと陸にかけてあった布団にタオルが墜ちる。

確か怪獣を海に放り投げた後、ゼロへの変身が解けて……、
「いつつ……。ゼロ、無事か……？」

「ああ……、何とかな……。悪い、エネルギー切れは反動も大きくてな……」
とりあえずゼロが無事な事に一安心した陸は、膝に何かが乗っかっている様な重みがある事に気が付いた。

目をやると、栗色の髪をした少女が陸の膝に頭を乗せて静かに寝息を立てていた。

「国木田……？」

その少女が花丸である事を認識すると、周囲に目をやる。今陸は畳の上に敷かれた布団に寝かされていたらしい。部屋の光景にも見覚えがあり、ここが花丸の部屋である事が分かった。

となると、ここは花丸の家か。

「ん……？ 先輩……？」

陸が動いたことで目が覚めたのか、花丸が体を起こして陸の顔を覗き込んでくる。
「ああわり……、起こしちまったか……」

改めて陸が起きている事が分かったらしい花丸は、安心したようにほう、と息をついた。

「よかった……。一時はどうなる事かと思っただけ……」

そう言った花丸の目尻は、ほのかに赤く腫れていた。

その事を不思議に思った陸の目に飛び込んだのは花丸の部屋にあった時計。時刻は既に夜十時を回っていた。

「っ……、悪い。こんな時間まで、さっさと帰——っ！」

「ああ！ ダメだよまだ寝てないと」

布団から出ようとする陸を、花丸が慌てて押しとどめた。服越しだが手の温かさが伝わる。

今気づいたが、陸の頭や腕には包帯が巻いてあり、部屋の中には消毒液の匂いが充満している。

「どうやら花丸が手当てをしてくれたらしい。」

「けど……、手当てまでしてもらってそこまで世話になる訳には……」

「怪我人はおとなしく言う事聞かないとダメぞら」

花丸が陸の肩を掴んで布団の中に押し戻そうとしてくる。普段は苦もなく抵抗できるのだが、痛みで体に力が入らない。

「……迷惑だろ、こんな時間までいたら」

「おばあちゃんも、今日はここで寝かせてあげてって言ってたから問題ないよ。それに……」

陸の額に新しいタオルが置かれ、微妙にぬるい感覚が額に広がる。

「……先輩がこんな事になっちゃたのは、まるが遅くまで引き留めちゃったからずら。だからこれくらいさせてよ……」

「それは……」

陸はそれに反論しようとし、ぐつと出しかけた言葉を飲みこんだ。

なぜなら陸を見る花丸の瞳に、今にも零れ落ちそうな程に涙が溜まっていたから。もう既に散々泣いたのであろう彼女の顔が再び涙で濡れるのは、陸も見たくない。

「……分かった。おとなしくしてるから、泣くのは辞めてくれ……」

言われた通り陸が布団戻ると、花丸は涙を拭いた。それを見て陸も安堵の息をつく。

「……俺どんな感じで倒れてた？」

再び部屋を支配した静寂が気まずく、陸は天井を見つめたまま花丸に問いかけた。

「……傷はいつぱいあるし、熱も高いし。ホントに死んじやうかと思つたずら。近くにいた人たちにここまで運んでもらつて、まるが手当てしたんだ」

「そつか……。ありがとな……。そつちは怪我とかないか？」

「先輩は自分の心配だけしてればいいずら」

花丸の表情から伺うに、陸の傷はかなり酷いものなのだろう。そんな怪我を負つてもまだ生きているのは、ゼロと一体化している影響なのだろうか。

「先輩、ホントに酷い怪我だったけど、あの時何があつたの?」

「……覚えてねえ。気付いたらここにいた」

ゼロに変身して戦つてたとは流石に言えないので、適当に嘘をでっち上げる。

ここで嘘をつく事は本当に申し訳なく思うが、これも花丸の為だ。

「こんなところでごめんね。病院、もう人でいっぱいだったから……」

「いや全然……。看病してくれてただけでもありがたいよ……」

「?先輩?」

ふと花丸が気付けば、静かな寝息が聞こえてきた。陸の意識は再び落ちたらしい。

「……マネージャーがまるの事心配させてどうするずら……」

ずれたタオルの位置を戻した花丸は、こんな時でも人の心配をするおかしな先輩について、ぼんやりと思いを馳せた。

陸が再び目を覚ますと、既に日は沈みかけていた。

意識が途切れる前に見た時計は十時。それを考えるとかなり眠っていたのだろう。

〈お？ 起きたか？ 陸〉

まだ軽く胡乱の中にあつた意識を、ゼロの言葉が完全に呼び起こした。

〈もうちつと休ませてやりたいとこだが……、生憎もうウルトラゼロデیفエンスーの効力が切れる。そろそろあの魔王獣が戻ってくるぞ〉

「はは……、きつついなあ……」

ちよつと泣きそうになりながら、陸は体を起こして布団から出た。

まだ傷はかなり痛むが、動けないわけではない。起き上がるだけで精一杯だった昨夜に比べれば随分と回復した。流星はウルトラマンの回復力と言ったところか。

「……何抜け出そうとしてるずら……?」

こつそり花丸の部屋を出ようとドアを開けると、そこにはジト目を向ける花丸が立っていた。何というタイミンクの悪さだ。

「……もう大丈夫だよ」

そう言って花丸の前でぴよんぴよんとジャンプする。実際は涙が出そうになるくら

痛い、決してそれを表情に出さない。

「……………安心しろ。帰ってもおとなしくしてるから。流石にそろそろ帰らんとマズイ」

「……………分かったよ」

ホールドアップしながら訴えると、花丸は了承してくれた。

「ただしまるもついてくずら。もし途中で先輩が倒れたら誰が助けるずら？」

「不吉な事言わんでくれ……………」

実際にそうなりそうな気がしないでもない陸だった。

「マガゴモラ？」

夕日で赤く照らされた道を、自転車を押しながら二人並んで歩く。

「うん。禍古獣の読み方。先輩が寝てる間に太平風土記を調べてたら分かったんだ。それで、昨日出たあの怪獣。多分このマガゴモラだと思うぞら。この絵と似てるし……」

花丸もその結論にたどり着いていたらしい。

「でもそれ以上は破れてて分からなかったぞら」

「それだけ分かっただけでも十分だろ。お疲れ」

へマガゴモラ……なるほど、通りでゴモラに似ていた訳だ……

陸は昨日見た怪獣、マガゴモラの姿を思い出す。

元のゴモラがどのような怪獣なのかは分からないが、頭にマガが付いている割にはさして禍々しくもなかった気がしないでもない。

いや、それよりも……

「似てたよね……、六年前の怪獣と……」

陸が思っていた事と同じ事を、花丸がぼつりと口にした。

数週間前のレッドキング。昨日のマガゴモラ。

これら二体の怪獣は共通して六年前に出現した怪獣と似ているのだ。

突如現れて内浦の町を蹂躪していったあの巨体。思い出すだけでも憎悪が湧き上がってくる。

太く湾曲した赤い角。凶悪に歪んだ顔。禍々しい胸の紋様。

これらを除けば、まるでレッドキングとマガゴモラの特徴を組み合わせたような姿をしていた。

（……なあ、レッドキングとゴモラの特徴を組み合わせたような怪獣っているのか？）
 （……いるも何も、そいつあ——、ちっ……）
 （ゼ……ろおっ!?!）

セリフの途中でゼロが舌打ちをしたのと同時に、主導権がゼロに切り替わる。

『……… 困まれてやがる……。誰だ！ 出て来い!』

「え……?」

道沿いの林に向かって怒鳴り声を上げた陸に花丸が驚いた次の瞬間、そこから一つの影が飛び出し、花丸目掛けて銃弾を放った。

『ツー!』

「ずらあっ!?!」

ゼロが反射的に跳躍し、花丸を底う形で抱きかかえた。その後大地を蹴って銃弾を回避すると、銃弾を放ったそいつに強烈な蹴りをお見舞いした。

『(ああっ!』

顔面にゼロの蹴りを浴びたそいつは悲鳴と共に派手に吹き飛んで行く。

『マグマ星人……何の用だ』

顔を覆う白いマスク、黒い胴体に、右手に付いたりチのあるサーベル。

ゼロに蹴飛ばされたマグマ星人は、痛みに悶えながらも答えた。

『……貴様に用はない。そこの娘を渡せ』

『ああ？』

マグマ星人が要求してきたのは、何と花丸だった。

『花丸に何の用だテメエ』

『貴様を知る必要はない。さあやれ！』

合図をするように手を上げると、周囲から一斉に異形の者達が襲いかかってきた。その数、十数人はいるだろう。

『ちい……、一体何なんだ！』

花丸を抱えたまま、ゼロは宇宙人達との戦闘に突入した。

『がはあっ!』

ゼロが最後に残ったマグマ星人の鳩尾を思いきり踏みつける。

花丸を抱きかかえていたというのに、ゼロはそんなこと負担でもない様に連中を蹴散らしてしまった。花丸は腕の中で目をぱちくりさせている。

『どうせ答えねえだろうからもう理由は聞かねえよ。さつさと失せろ』

『ぐう……、行くぞ!』

起き上がったマグマ星人が走り去って行くと、他の宇宙人も四散五裂になって逃げだしていった。

ゼロは奴らがいなくなった事を確認して花丸を下し、主導権を陸に戻した。

「ツ……!」

それと同時に陸が膝を折る。

「先輩っ!?!」

陸の腕を掴んだ花丸の手に、べたりとした何かが触れた。

見てみると包帯から血が滲んでいる。恐らく今の戦闘で傷が開いてしまったのだろ

う。

「誰か人を——」

「待て……」

近隣の住民に助けを求めようと駆けだした花丸の肩を、陸が掴む。

血の気が引いているその顔からは生氣を感じない。

「さっきの宇宙人の話聞いてなかったのか……？ 今一人で行動すんのは危ない……」

「でもそれじゃ……」

「俺はいいから……、今は自分の心配しろ……」

この状況でなおも花丸の事を優先しようとする陸。

ふらふらと立ち上がり、おぼつかない足取りで自転車の方へと向かっていく。

「……先輩こそ自分の心配するすら……。何でそうやって自分の事後回しにするの……」

伸ばされた花丸の手が、ふらつく陸の腕を強く掴む。

「またまるのせいでごんな事になっちゃったすら……」

「国木田……?」

「放っておけるわけないすら!」

花丸が感情を露わにした、その瞬間だった。

突然、花丸の胸が眩い光を発したのは。

「な——ッ!」

〈コイツあ……〉

「ずら……?」

突如煌いた光に呆気にとられる陸、ゼロ、そして花丸の三人。

その黄色い光は花丸の手を伝って陸の身体に注がれていき、やがて陸の身体も輝き出す。

否、正確には陸の身体にある傷が胸の光と同じように黄色く輝き出したのだ。それと同時に全身に熱が漲り、徐々に傷口の痛みが引いていくのが分かる。

「これって……」

〈リトルスターツ? そうか……、だから奴らは花丸を……〉

傷口から光の粒子が漏れ出て行き、踊る様に周囲を漂っている。

そして光が収まったその時、陸の傷は、元々怪我なんか負ってなかったかのように無くなっていた。

「つ……」

試しに腕を振り回したり、ちよつと走ってみたりと色々やってみたが、痛みは一切感じない。

「これ……は？」

呆然と光の取まった自分の胸を見つめている花丸に気が付き、こうしている場合ではない事を思い出す。

もうそろそろマガゴモラも戻ってくる頃だろう。迎え撃たなくてはならないのだが、リトルスターが発生してしまつた以上、花丸を一人にする訳にもいかない。

まずは彼女を家に戻そう。

「国木田。いつ連中が襲ってくるか分かんねえから、今は家に戻ろう。送ってく」

そう決めると、陸は花丸の手を取って自転車を置いてきた方へと歩き出した。

「先輩……。これってルビィちゃんと善子ちゃんのやつと同じ……」

「ああ、多分な。だから宇宙人が狙つて来たんだろ」

余計な情報は漏らさずに陸は花丸を荷台に座らせ、そのまま花丸の家を目指してペダルを踏んだ。

二十六話 慈愛の光

「……さて、そろそろかな？」

淡島神社の階段中腹にあるロツクテラス。

マガゴモラを呼び覚ました張本人であるオウガは、薄気味悪い笑みを作つてマガゴモラが放り込まれた海を眺めていた。

「昨日のあの分だと、陸君の怪我也酷そうだしなあ……。もしかして今日は出てこなかったりして……。あ、でもゼロ君の事だし何が何でも出てきそうだな」

だがそうでなくては面白くない。そんなゼロを見るのが楽しいからオウガはここまでゼロのストーカーを続けてきたのだ。

まあ、理由はそれ以外にもあるのだが。

「はは……。期待してるよ。ゼロ君。陸君……」

オウガが闇に消えるのと同時に、マガゴモラは再び内浦にその巨大な凶体を出現させた。

『キシヤアアアイヴウウウウウツ!!』

「ずらっ・・・」

昨夜と同じ咆哮と共に地面が揺れ、バランスを崩した花丸が尻餅を付く。

今花丸がいるのは太平風土記を見つけた家の蔵。

陸には極力外に出るなど言われたが、戸締りを頼まれてしまったので仕方ない。

それにしても・・・、

花丸は自分の胸に目をやった。

実に不思議な事が起こったものだ。

自分の胸が黄色く光ったと思ったら、あんなに酷かった陸の怪我が一瞬で治ってしまった。

あの光は、前にルビイや善子が発現していたものと同じなのだろう。これを宿していると、不思議な力を欲しがる宇宙人に狙われる。

だから陸はなるべく家の中にいろと言ったのだろう。

「さっさと終わらせて家の中に戻るすら」

もう散々自分のせいで陸を危険な目に合わせているのだ。余計な心配はかけられない。

『デエヤア!』

『キシヤアアア!!』

「うわわっ!」

再び地響きが起き、危うくまた転びかける花丸。

マガゴモラの声と共に聞こえたもう一つの声、あれはゼロのものだ。

ゼロが無事だった事にほっと安堵しつつ、花丸は頼まれた蔵の戸締りを終えた。後は外に出て扉を閉じるだけだ。

「あっ……」

ふとここで、山積みになっていた箱が散乱している事に気が付いた。恐らくさっきの揺れで崩れてしまったのだろう。

流石に見てしまっただけは片付けない訳にはいかない。仕方なく花丸は崩れた箱の山に手を掛ける。

「っ……」

箱の山を処理している最中、花丸の意識は手に触れたある者に集中した。

——破れたような跡がある、唐草模様の古びた紙。

まさかと思つて裏返してみると、そこには掠れた古典文字と巨人の光に包まれる怪獣の姿が描かれていた。

「……………これって……………」

そう。これこそ無くなつていた巻物の切れ端。

予言の顛末が記された、太平風土記のラストページだった。

『キシヤアアアイヴウウウウウウ!!』

『デエエヤアツ!!』

マガゴモラを追うように内浦に現れたゼロは、やはり劣勢を強いられていた。

太い角で突き上げられたゼロが宙を舞い、背中から地面に落下する。

踏みつけようとしてきた太い脚を転がって回避すると、右手を軸にブレイクダンスの様な回転をして膝裏を蹴り飛ばす。するとバランスを崩したマガゴモラはその場で転倒した。

『ぐ………おおお……』

太い尾を掴み上げ、ぶんぶんとジャイアントスイングをした後、投げ飛ばす様にしてその巨体を山に叩きつける。

ストロングコロナにタイプチェンジし、仰向けになったマガゴモラにマウントポジションを取って押さえつけ、クリスタルでできた一本角に攻撃を集中する。

『キシヤアアアイヴウウウウ!!』

『がああッ!』

だが背後から鋭い尻尾を突きさされ、攻撃の手が止まったところを角から放たれた超振動波で吹っ飛ばされてしまった。

ゴロゴロと勢いよく転がるゼロに、マガゴモラは間髪入れずに圧縮した振動波の塊を放ってくる。

『ガルネイトバスタアアアアッ!!』

起き上がったゼロのガルネイトバスターが振動砲を押し返し、マガゴモラの首に直撃した。

衝撃で黒煙が舞い上がり、視界が悪くなる。

そんな黒煙の世界に穴をあける様に飛び出してきたのは、マガゴモラの巨体だった。

『ごあつ……!』

唐突に出現したそれをゼロは防ぐことが出来ず、モロにその体当たりを喰らってしまった。

身体のウェイト差がありすぎるといふ事もあるのだが、防御できなかった事も相まってその一撃はとて重く感じた。

思わずもうないはずの傷口を押しさえる陸。

「前に来たウルトラマンはどうやってこいつ封印したんだよ……」

『さあな。太平風土記が完全だったら分かったんだろうが、無いものに頼っても仕方ねえ!!』

猛スピードで肉薄したゼロが炎のアップパーを装甲の薄い顎下に炸裂させ、マガゴモラの体勢が大きくのけ反った。

『オラアツ!!』

無防備に晒した胸部をドロップキックで蹴飛ばし、転倒したマガゴモラの本角をへ

し折ろうとフルパワーで両腕を振り下ろすがすんでのところで回避され、逆に腹部に強襲してきた蹴りで同じように転倒するゼロ。

それでも奴より一瞬早く立ち上がり、今度は至近距離で一本角にガルネイトバスターを叩き込んでやろうと右手を構えた刹那、

「ゼロさーんっ!!」

聞き覚えのある声が、ゼロと陸の耳朵に触れた。

そのせいでガルネイトバスターの軌道が逸れ、角を僅かに外れて頬に直撃した。起き上がりかけただったマガゴモラはその衝撃に再び転倒する。

『ッ!』

ゼロは声の主である少女とマガゴモラの間に入ると、勢いよく振り返って少女——国木田花丸を怒鳴りつけた。

『おいお前っ! 何用でここに来たのかは知らねえけど危険だから早く家に戻れ! 前の場合は特に!』

ゼロが訴えるも花丸は聞き入れず、手に破れた唐草模様の髪を握って再びゼロに叫びかけてきた。

「マガゴモラを倒しちや駄目ずらっ!」

『ッ!?! 何だと……?』

「マガゴモラは悪い怪獣じゃないぞら！ 世の中を滅ぼそうとする悪い意志に憑りつかれてるだけぞら！」

そう言うのと花丸は、手に持った紙の裏側をゼロに向けてかざしてきた。花丸の配慮か、きちんと一般人にも読める様に書き直したものを隣に添えて。

ゼロとの一体化によって視力が異常強化された陸にはそれが見える。

『禍古獣。元は其の地ヲ守護せしものけなり。』

太平を滅ぼさんとす邪なる意思。禍古獣を包まん。

鈍色の巨人。此れを払ひて禍古獣を沈めたり』

『禍古獣は、元々その土地を守る守護獣だった。』

太平の世を滅ぼそうとする邪な意思が禍古獣を包んだ。

鈍色の巨人はその邪気を払い、禍古獣を沈めた』

邪な意思がマガゴモラを包んだ・・・、元々土地を守る聖獣・・・。

そして殺意と言うよりは、苦しんでいる様にも見える滅茶苦茶な暴れ方。

すくとんと、蟠っていた何かが腑に落ちた。

「っ……！ そつか……。そう言う事か」

『何か分かったのか？』

「ゼロ……。ひよつとしてアイツ。無理矢理起こされたんじゃないか？」

『何？』

「考えてみる。町を破壊してる時はただ腕をぶん回したり、出鱈目に超振動波を撃っているだけ。それで俺達に攻撃を始めたのも、俺達が攻撃を加えてからだ」

『………どういう事だ？』

「つまりな。あいつは今、邪悪な何かに憑りつかれているだけなんだと思う。現にアイツ、苦しんでる様に見えるだろ？ それに国木田が見せてくれた太平風土記にも同じような事が書いてあった」

『っ………』

ゼロがマガゴモラの方へ向き直る。

よろよろと起き上がったマガゴモラは、確かに傷は全くついていないのに苦しそうに見える。

『………試す価値はありそうだな……。』

「アイツに憑りついてる邪気が被えるか？」

『任せろ！』

そう言うが否や、ゼロはマガゴモラに掴みかかった。

鉤爪や尻尾に気を配りながら背後に回り、刺されない様に尻尾を踏みつけるとがっちりホールドした。

普段ならここでガルネイドバスターへの繋ぎとしてウルトラハリケーンを繰り出し、対象を天高く放り投げるところだが、今回ゼロはそうせず、それどころか通常形態に戻った。

刹那ゼロの全身が輝き出す。

『ウルトラゼロレクターツ!!』

その光はマガゴモラを包み込み、やがて直視できない程に眩しく光り輝く。

「っ……………」

あまりの眩しさに目を瞑っていた花丸が再び目を開くと、既に光は収まり、体を覆っていた黒い邪気が取り払われたマガゴモラの姿があった。

赤かった双眸は黒曜石の様な深い黒になり、落ち着きを取り戻した事が伺える。

『へへっ……………、浄化成功……………』

「……………代わりにこっちがヤバい事になってるけどな……………」

ふらつくゼロのカラータイマーは、既に激しく点滅していた。

ほんの数秒前までは青く輝いていた事を考えると、この技はかなりエネルギーを消耗

する技らしい。

『おら、もう大丈夫だろ？ おとなしく自分のいたところに帰れ』

『グウウウウ・・・』

マガゴモラがゼロの言葉を理解したように領き、光の粒子となって地面の中に溶け込んでいく。

『陸。今回は助かった。サンキユな』

「お礼なら俺じゃなくて国木田に言え、あいつが教えてくれなきやきつとまだ戦ってたぞ」

『多分な。・・・しかし、まさか魔王獣が守護獣になっていようとはな・・・』

そう言つて花丸の方を振り向こうとしたゼロに近づくと光の球が一つ。

玉から尾の様に伸びていた軌跡を辿っていくと、ゼロに向かって笑いかける花丸の姿が。

——万物を思いやり、全てを包む慈愛の力——ウルトラマンコスモス。

ゼロのカラータイマーから光が吸収され、今回も陸の頭に声が響く。

『ハアツ！』

光はカプセルの中に入り込み、起動したカプセルに青と銀のウルトラマンが映し出された。

『おっ……、今度はコスモスか。慈愛の勇者……。花丸にぴったりだな』

「今回は割と穩便に済んだな」

『宇宙人に襲われたのにか？』

「むしろそれだけで済んで良かったなって話だよ」

『死にかけてた奴がよく言うぜ』

「誰ががはっちゃけてくれたおかげでな」

『ワリイワリイ……。』

一瞬だがペコペコと頭を下げる青い巨人が見えた。恐らくゼロが陸に見せてきたイメージであろう。

『さてと……。時間もヤバいしそろそろおさらばしますかね。おいお前！ サンキユな！』

「うん！」

花丸の声を背に、ゼロは夜空へと飛び立っていった。

ゼロとマガゴモラの戦いで少し崩れた道を、花丸は注意深く進んでいた。

謎の光はゼロの手に渡ったのでもう宇宙人に狙われる心配はないだろうが、遅い時間だという事に変わりはない。

(それにしても……)

花丸は手に持っている太平風土記に目をやる。

(先輩の言った通り、ホントに予言書だったずら……)

出現した怪獣の特徴、それにより発生した被害、事態の収束方法。

多少の差異はあったが、大筋はこの通りに事が進んでいった。

いっどこで誰が書き記したものは分からないが、筆者には感謝せねばなるまい。

これのおかげで花丸はゼロの力になる事が出来たのだから。

(ウルトラマンゼロさん……か……)

花丸は数週間前にルビィに名前を教えてもらった巨人の姿を思い浮かべる。

(何か……、どことなく先輩に似てる気がするずら……)

見た目的な特徴ではなく、雰囲気。根拠はないけれど、つい頼りたくなってしまうような、そんな感じ。

特に自分より他人の事を優先するところは、まさしくヒーローみたいでちよつとカッコよかつたりもする。

聞けば陸もゼロと同じくらいに、A q o u r s の皆を助けているらしい。

「まさかあんなに喧嘩強いとは思わなかった——ずらっ!?!」

考え事に浸ってよく足元を注意していなかったが故、瓦礫に躓き、花丸は大きくを前につんのめってしまう。

「わわ………」

しばらくの間片足立ちでグラグラと転ばないようにバランスを取るが、やがて重力に従って前に倒れ込み始める花丸。

「っ………」

多少の痛みを覚悟して目を瞑った瞬間、花丸の身体は止まり、何者かに抱き寄せられた。

「………家にいろつて言いませんでしたっけ？ 俺」

そこには花丸にジト目を向ける、仙道陸の姿が。

「全く……。もう少し自分の安全も考えて欲しかったな」

「そこに関しては先輩に言われたくないから」

また花丸がコケないか注意を払いながら、二人並んでとつぷりと暗くなった道を歩く。

あんな危なっかしいものを見てしまったては、家まで送って行かないわけにはいくまい。

「にしても先輩。何でここにいるはずら？」

「つ……。！　……。えー、いやー、そのー、たまたま通りかかったというか……」

「まさか……。、ストーカーずら？」

「それは断じて違う」

實際ゼロとの変身を解除しとある場所に寄った後、もう夜も遅いので念の為花丸の後をつけると言うストーカー紛いな行動をしていたのだが。

「……これ渡そうと思つてな。お前ん家向かつてる途中だったんだよ」

そう言うのと陸は自転車のカゴに入れたあつたレジ袋を花丸に手渡した。

その中には大量ののっぽパンが。ちなみにのっぽパンと言うのはこの辺のメーカーが製造している、いわゆるご当地パンの事を言う。

「どうしたのコレ……?」

「看病と、傷治してもらつたお礼。そういやまだしてなかつたなーと」

花丸はそつとその袋を返却してきた。

「もらえないぞ。元はと言えばまるが悪いんだし……」

「いいから受け取れ。俺の怪我の原因がどうであれ、お前が看病してくれた上に怪我直してくれた事には変わりないんだから」

袋を再び押し付け、今度は返されない様にと距離を取る陸。

「それにさつき思い出したんだが……、あの時俺、逃げるの忘れてずつとあの戦い見ててだな……、それで、崩落に巻き込まれまして……」

「嘘ぞらね」

「せつかく人が気使つてんのに、一瞬でそれぶち壊すの辞めて頂けませんかね?」

口を尖らせる陸を見て花丸は呆れたように溜息をつくど、袋を返そうと伸ばしていた手を下げてくれた。

「まあ、そこまで言うならもらっておくぞら……」

ちよつとうれしそうに袋の中ののつぽパンを見つめる花丸。前にルビイから好物だと聞いていた通りお気に召してもらえたらしい。

花丸はのつぽパンで機嫌が取れる。心のメモ帳に書き留めておこう。

「ていうか、陸先輩また怪我してるぞら。今度は一体何やらかしたぞら?」

「何でやらかした前提で話が進んでんだ……。これはだな……。つて、お前今俺の事なんて呼んだ?」

聞き返した陸に、花丸は露骨に顔を顰める。

「まさか、自分はまるの事名前前で呼んでおいて、まるには呼ばせないっていう訳じゃないよね?」

ちよつと嗜虐的とも取れる花丸の笑みを見て、陸はこの前ゼロが表に出てきた時、花丸の事を名字ではなく名前前で呼んでいた事を思い出した。

別にゼロが誰をどう呼ぼうが結構だが、少しはそれによつて生じる矛盾も考慮して欲しいものだ。

「……お前はそれでいいの?」

「ずら。考えてみたら、まるとマネージャーの先輩が名字で呼び合うって言うのも、変な事だと思ってたずら」

言われてみればそんな気がしないでもない。だがそうになると、梨子や善子の事も名前と呼ばなくてはいけない事になるのだが。

正直ここ最近まで幼馴染以外の女子とほとんど関りが無かった陸は、千歌曜果南の三人を除く女子を名前で呼ぶことに抵抗があるのだ。

ちなみに黒澤家は例外。二人いるので紛らわしいし、ダイヤに向かつてうっかり黒澤、などと呼び捨てにってしまった日には何をされるか分かったものではない。

「だめずら……?」

小動物の様な眼差しを向けてくる花丸。

流石にそんな目で見られたら断れるわけがない。

「わーたよ。……花丸」

これはマガゴモラとの戦いで力になってくれたお礼。そう言う事にしておこう。

「じゅら〜．．．．．り．．．．陸先輩．．．．．」

「今日は助けねえぞ。自力で頑張れ花丸」

翌日。

淡島神社にていつも通りに階段ダツシユ。

互いに呼び方が変わった事を何か問われると思つたが、特にそんな事はなく、いつもと変わらない光景が流れていく。

もつとも、皆階段ダツシユで疲れて質問を口にする余裕がないだけだろうが。

だから変わった事と言えば、花丸の陸への遠慮のなさに拍車がかかったぐらい。

〈どんどん年上の尊厳無くなつていくなお前〉

（まあいいんじゃないの。そういうのも）

何だかんだ言つて悪い気がしない陸であつた。

二十七話 忍び寄る影

「この前のPVが五万回再生？」

季節は夏。

ただでさえ暑いというのに、そこら中で騒音を奏でるセミの鳴き声が暑さを増長させる中、うちわを仰いでいた千歌が後ろを向いて反応する。

「ホントに？」

「ランタンが綺麗だって、評判になったみたい」

そしていつも通りパソコンの前に集まるAqours六人。

いつもと違ったのは、現時点での自分たちの順位を知った彼女達の反応だった。

「きゅ……九十九位っ!？」

「ずらっ!？」

今まで四桁台を低迷していたAqoursが、一気に二桁台ときた。

「……きた。きたきたあく! 五千以上いるスクールアイドルの中で百位以内って事で

しよー！」

皆のテンションが上がる中、最も興奮している千歌が歓喜の声を上げる。

「一時的な盛り上がりつつも事もあるかもだけど、それでも凄いわね！」

「ランキング上昇率では一位！」

「凄いですら！」

「なんかさ、このまま行ったらラブライブ優勝できちゃうかも！」

「優勝？」

「そんな簡単じゃないでしょ？」

「分かっているけど、でも可能性はゼロじゃないって事だよ！」

浮足立った雰囲気、パソコンが鳴らしたピロンと言う音が水を差した。

「・・・ん？」

「メール・・・、みたいですね」

ルビイの言う通り、開かれていたパソコンに赤いアイコンが表示されていた。

カーソルを合わせてクリックし、開かれたもの、それは――、

「A q o u r s の皆さん。東京スクールアイドルワールド運営委員会」

「東京？」

「つて、書いてありますね・・・」

田舎者には馴染みの薄い単語に、梨子を除く五人がきよとんとパソコンを見つめる。

「東京って言うと、あの東にある京？」

「何の説明にもなつてないけど・・・」

「日本の首都すら」

「知ってるわよ」

いまいち今日の前で起きている事が理解できていない六人が、数秒間中身のないやり取りを続けた後、

「」「」「東京だあっ !!」「」「」

「うおっ!？」

散々鞠莉に絡まれ、ようやく部室に入ってきた陸をビビらせる程に大声でハモった。

「……………ねえ陸……………」

「……………ん？」

東京遠征、当日。

一応沼津駅まで見送りに来た陸は、曜と共にある人物にジト目を向けていた。

「ふふふつ……………、天津雲井の彼方から、墮天使たるこの私が、摩天にて、数多のリトルデーモンを召喚しましょう……………」

視線の先には墮天使モードに入った津島善子。

お得意の墮天使ファッションだけでは今回は済まず、装着したであろう長い爪と、もはや何キャラなのかすらも分からない程に真っ白な顔。

当然そんな奇抜な格好をしている人間がいれば人だかりもできる。善子は自身の周りに集まった人々を恍惚とした表情で眺めていた。

「……………私は……………、あれを見てどんな顔をすればいいの？」

「……………俺に聞かなくてくれ……………」

「……………酷くなってるってないか？ あいつ……………」

あれと同列に捉えられるのが嫌だったので、陸は曜と共に少し離れた場所で他の四人の到着を待っている。

「……………、遅いね千歌ちゃん達……………」

「多分これが原因だ」

そう言つて陸は曜にスマホの画面を見せた。

そこには地方感丸出しのド派手ファッションをした千歌とルビイ。そして東京を切り立つた断崖とでも勘違いしているのか、ヘルメットにライト、つるはしを装備し、探検家の様な軍服を着た花丸の写真が。

「うわっ………、何コレ……」

「美渡さんから送られてきた。大方変な事吹き込まれたんだろ」

「………面白いな……」

梨子が指摘して普通の格好になっている事を願う。

「くつくつく………」

善子に向かってフラツシユを焚き始める人間が出てきた頃に、善子のファッションを笑う三人の少女が現れた。

「善子ちゃんも……」

「やつてしまいましたねえ……」

「善子ちゃんもすっかり墮天使ずら〜」

自分達と同類を見つけて喜ぶような視線を善子に向ける、千歌、ルビイ、花丸の三人。美渡から送られてきた写真とは違い、普通の服装だった。

「遅いよ皆―」

「ゴメンナサイ……。三人の服装を正してたらこんな時間に」

「やっぱりか。ありがとな桜内」

写真の様な格好で向かっていたら、笑いや間違いなしだったろう。

「……善子じゃなくてえ……。ヨハネ!!」

善子が両腕を広げて叫び、見物していた野次馬達が逃げ去っていく。

「せつかくのステージ！溜まりに溜まった堕天使キャラを開放しまくるの！」

「いいから着替えて来い」

最後まで善子を見ていた幼気な少女が、アレに影響されない事を願わずにはいられない

陸だった。

「千歌——！」

「あつ！ むっちゃーん！」

善子の着替えも終わり、いざ出発しようとしていた千歌達に近寄る三人の少女。その手には何かがパンパンに詰まった袋を抱えていた。

〈誰だ？〉

（前に見たことある気がする。確か千歌達のクラスメイトだよ）

見送りに来てくれるとは、よほどA q o u r sは学校に愛されているらしい。

「イベント、頑張ってきてね！」

「これ、クラス皆から」

そう言って差し出された袋から、ポロリとのつぽパンが顔を覗かせていた。

「わぁ……、ありがとう！」

「それ食べて、浦の星の凄い所見せてやって！」

「……うんっ！ 頑張る！」

よほど嬉しかったのか、三人に向けて満面の笑みを向けた後、千歌達六人は電車に乗り込んで行った。

「じゃあ、行ってきま——すっ!!」

「お前は行かなくてよかったのか？」

「俺は明日行く。ライブ自体は明日だからな」

千歌達が電車に乗り込んだのを見届けた後、ふらふらと沼津の町を歩き回る陸。やはり内浦とは違って賑わっている。来年の春からこの辺の高校に通わなくてはいけないので、下見がてら散歩中なのだ。

「へん？　じゃあ何であいつ等今日行っただけ？」

「なんか東京を観光したいんだとき。それで前日から東京行きて訳。……つかこの話千歌達としてたよな。聞いてなかったのか？」

「興味のない話は聞かない主義だからな」

「あつたな……、そんな設定……」

この頃やたら食い気味に話しかけてくるのですっかり忘れていた。

〈だつたらお前も東京観光すればよかつたんじゃないのか？〉

「流石に向こうで一泊する程の余裕はないね」

千歌達は多少親御さんの協力を得ているらしいが、生憎陸の両親は今太平洋でマグロと奮闘中。そんな人に小遣いをもらおうなど無理な話だ。

「・・・・・・・・ホントに今回東京行つて良かったのかね・・・・」

〈俺らが見てねー間に事件に巻き込まれないといいけどな〉

「だからフラグになるから辞めろつて・・・・・・・・」

陸が心配していたのはそこではなかったが、いい加減学習して欲しい陸だった。

そして陸はまだ知らない。

この東京遠征が、今後の陸とゼロ、そしてA q o u r s の運命を大きく揺るがすことになろうとは。

「もう〜！ 時間無くなっちゃったよ！ せつかくじつくり見ようと思ったのにー」

千歌達が東京に着いてから数時間。

それぞれが思い思いに単独行動をしたこともあつて、既に日は傾いていた。

「なによ！ だから言ってるでしょ？ これは、ライブの為の道具なの！」

善子の手からは、魔術専門店とやらで買った怪しいものが入っている袋がぶら下がっていた。

「……そんな格好して……」

千歌の視線の先には、上機嫌で巫女服に身を包んだ曜が。制服専門店を見つけて目の色を変えたと思っていたが、まさかこんなものを購入していたとは。

「だって、神社に行くって言ってたから！ 似合いますでしょか!？」

「敬礼は違うと思う……」

千歌達は今、明日のイベントでのライブの成功を祈願する為にとある神社に向かっていた。

予定で言えばもう少し早く来るつもりだったのだが、見ての通り単独行動が過ぎても

うこんな時間である。

かく言う千歌も最初は興奮して片っ端からスクールアイドルの店に入っていたので他人の事は言えない。

ルビィと花丸は迷子、梨子も途中トイレに行くと言ってからしばらく帰ってこなかった。

ここに来てストッパーの陸がない事が悔やまれる。

「……………ここだ……………」

しばらく歩き、千歌達六人は目的地の神社へとたどり着いた。

目の前には高く傾斜のある階段。

千歌の憧れ、μsが練習に使っていたという階段である。

「ここが、μsがいつも練習していたって言う階段!」

μsファンの千歌とルビィが同時に目を輝かせ出す。二人だけではない。数多くのスクールアイドルにとって、この場所は聖地なのだ。

「ねえ! 登ってみない?」

「そうね」

「よし! 皆行くよ!」

千歌が一番乗りで駆け上がり始め、それに五人も続く。

(μ☒sが登ってたんだ……。ここを……。！)

先頭を走る千歌の頭に浮かぶのは、自分にこの道を進ませるきつかけとなった九人の少女の姿。

あのμ☒sがいた場所。ある一点を目指して、日々登り続けた階段。

そこを今自分が駆け上がっていると言うだけで、あのμ☒sに一歩近づいた気がする。(ライブライブを、目指して！)

喜びを体現するように千歌が最後の段でジャンプをし、聖地を踏みしめる様にしっかりと両足で着地した。

「~~~~~♪」

階段を登り切った千歌の耳朶に、澄んだ歌声が触れた。

歌声が重なっている様に響いている事から、恐らく歌っているのは一人ではない。

声質が似ている事もあるのか、互いに互いの邪魔をせず、心地の良いハーモニーを奏でているようにも聞こえた。

その歌声の存在感を示すかのように、強い突風が吹く。

「……………」

本殿前に、二人の女子高生が佇んでいた。一人は紫色の髪をツインテールに、もう一人はそれよりも暗い紫色の髪をサイドテールに束ねている。

歌い終わつた彼女達は、背後で歌声に聞き入つていた千歌に気付くと振り向き、微笑んだ。

「こんにちわ」

「……、こんにちは……」

サイドテールの方の少女が挨拶をしてきて、戸惑いながらも千歌がそれに返す。

「千歌ちゃん？」

遅れてきた五人が、見知らぬ少女二人と千歌が向き合つているといふ構図に首を傾げる。その内ルビィだけが、その二人の少女に見覚えがあるかの様に目を細めた。

「まさか……、天界勅使……？」

石造の裏に隠れて訳の分からない事を言つた善子を見無視し、その少女は六人を見回す。

そして何かに気付いた様に、再び口を開いた。

「あら……もしかしてA q o u r sの皆さん？」

「嘘……、どうして……？」

いきなりそんな事を言われ、動揺を隠せない千歌。

「この子……、脳内に直接……」

善子は今度は花丸の背後に隠れて妄言を吐く。しかし少女はまたもや善子を見無視し、

言葉を続けた。

「PV見ました。素晴らしかったです！」

「あ、ありがとうございます・・・」

どうやら以前公開したPVを視聴してくれたらしい。ならばAqoursを知っている事も頷ける。

「もしかして・・・、明日のイベントでいらしたんですか？」

「・・・はい」

千歌の返答を聞き、サイドテールの少女が笑みを深くする。

「そうですか・・・、楽しみにしています」

それだけ言うと、サイドテールの少女は千歌の真横を通って歩き出した。

サイドテールの少女が歩きさっていく中、もう一人の釣り目とツインテールが特徴的な少女が六人に頭を下げる。

そう思った次の瞬間、彼女は千歌達に向かって走り始めたのだ。

戸惑う千歌達の眼前でその少女は地面に手を突き、側転、バク転と繋げ、千歌の頭上を通ると、微かな笑みを向けて着地した。

「では」

去っていく二人の背中を、六人は啞然としたまま眺めていた。

少し間が開いた後、喋れることを思い出したように花丸が口を開く。

「東京の女子高生って、皆こんなに凄いずらっ？」

「あつたり前でしょ？ 東京よ、東京！」

「いや・・・全員が全員そうって訳じゃ・・・」

「梨子ちゃんは出来るの？」

「無理無理無理無理！」

五人が思ひ思ひに感想を述べる中、千歌は一人だけ二人が去った後の階段を見据えていた。

「歌・・・、綺麗だったな・・・」

『・・・・・・・・Aqoursだな・・・？』

神社での祈願を終え、予約している旅館に向かおうとしたAquors六人に、一人の男が声を掛けた。全身黒づくめと言うだけで怪しさの塊なのに、その男が纏う雰囲気は、最近やたらと危険な目に遭う事が多い彼女達を警戒させるには十分すぎる。

「な．．．．、何ですか．．．？」

どこかで聞き覚えのあるおどろおどろしい声音に、千歌が一步後退しながら答えた。

『．．．．．私と一緒に来てもらおうか』

その男はおもむろに手をかざす。その手は黒く武骨で、地球人でない事は一目瞭然だ。

そして男が被っていたフードを脱いだ瞬間、六人は戦慄を覚える事になる。

「アンタはっ．．．！」

特に善子が強く反応したその男、ゼットン星人は六人に向けてぱちんと指を鳴らす。

六人の意識は、そこで途絶えた。

二十八話 紅眼の五将

「じゃーね陸。今日はありがとう」

「ん。いいよ別に、暇だったただけだし」

夕方。

あの後あまりに暇だったので、たまには親孝行ならぬ姉孝行しようと思い立ち、果南のダイビングショップを手伝っていた。

まあ、実際に姉ではないのだが。

たまにはこうして手伝いをするのも悪くはない。もうそろそろ果南の父親の怪我も治るだろうし、こうすることも無くなるだろうが、機会があつたらまた手伝いに来よう。
〈もう着いたかねあいつ等〉

「流石に着いてるだろ……。今頃散々東京観光してるんだろな」

思えばこうして一人で帰るのは久しぶりだ。

春まではこうして一人で帰っていたはずなのに、最近はずっかり誰かと一緒にいる事に慣れてきている自分がある。

「ほーほー、それでちよつと寂しいって訳かい」

「……まーそう言う——つて、うわっ！」

突如話しかけてきたその存在に、ナチュラルにビビる陸。

ついつい普通に返してしまつたが、こいつは本来ここにいないはずだ。

「出やがつたなド変態」

「おいおい。せつかく名前があるんだから名前前で呼んでくれよ。そんな不名誉なあだ名が定着した日にはボク恥ずかしくて外も歩けないじゃないか」

「現に今歩いてんだろうが」

相変わらず気持ち悪い程にニコニコ笑いながら、ド変態——オウガはそこにいた。

最近見ないと思つたらひよつこりと現れる。本当にゴキブリの様な奴だ。

「A q o u r s の皆が東京行つちやつてるんだろ？ 背中から哀愁が溢れ出てたよ陸

君」

「うるせ。で？ 一体何の用だよ。また見かけたから話しかけた感じか？」

陸の問いを、オウガは首振つて否定する。

「いいや。今回は君に用があつたのさ。教えておくべき事と言うかなんというか、まあ、とにかくこれを見なよ」

そう言つてオウガは掌を上にして腕を突き出してきた。

掌の上には黒いオーラが集約していき、やがてソフトボールよりちよつと大きい位の球体になった。

そこに映し出されたものは――、

「なっ……!」

〈ゼットン星人ッ!? 生きてやがったのか?〉

前に現れたゼットン星人と対峙する、A q o u r s 六人の姿。

ゼットン星人が指を鳴らすと、六人は糸が切れた様にぱたりと倒れてしまう。

倒れた六人をゼットン星人が出した黒い霧が包み、霧が晴れると六人の姿は跡形もなく消えていた。

そこまで映して、黒い球体は消滅する。

「お前……、何しやがったっ!!」

怒りを露わに自分の胸に掴みかかってきた陸に対し、オウガはホールドアップの姿勢を取った。

「落ち着けよ。何も君とやり合うつもりでこれを見せた訳じゃない。純粹なる親切心だよ」

「どういう事だ……?」

〈陸。変われ〉

陸と後退したゼロが、オウガの胸倉を掴んだその手を離す。

『とりあえず。お前の知ってる事を洗い浚い全部吐き出してもらおうか。返答次第ではぶん殴る』

ゼロが射殺す様に睨みつけても、オウガは変わらずへらへらと笑い続けている。軽く狂気すらも感じるその笑みは、陸とゼロを警戒させるには十分だった。

「そうだなあ……、じゃあまず一つ。この前のマガゴモラを目覚めさせたのはボクだ」
『ツー』

返答もせずにゼロはオウガの顔面を殴りつけた。

殴られたオウガは地面と平行に吹き飛んで行き、その先にあつた街灯に衝突しぐにやりと変形させる。

「つつつ……、利くねー……、ゼロ君のパンチ……」

『茶化してんじゃねえ!! テメー何モンだ!!』

ゼロがひしゃげた街灯の根元に寄りかかったオウガの胸倉を掴み上げ、再び街頭に叩きつけた。ゼロの力に耐えられなかった街灯が折れ、重い音を立てて倒れる。

「つ……、だから落ち着けて、話を聞かないのは君の悪い癖だよ」

『いいから答えろ!!』

ゼロの声音は怒りに震えている。普通の宇宙人ならこれだけで身構えるのだが、オウ

ガは笑ったままの表情を崩そうとしない。

よほど肝が据わっているのか、はたまたゼロが本気を出しても勝てる自信があるのか。

「はいはい。まあ、ハッキリ言っちゃうとね、ボクは君達とは敵対関係にある訳さ。リトルスターを狙っているんな宇宙人を送り出してくる連中がいるだろ？　ボクはそれの仲間」

『何・・・？』

「でも安心して。ボクは上からの命令が出ない限り自分から行動を起こす事はない。むしろ千歌ちゃん達には手を出さなつて忠告してたぐらいだ。前にダダから千歌ちゃん達を助けたのもそういう理由さ」

『じゃあ何故今こうなっている!!』

「だからこうして教えに来てあげたんだろ？　ボクだつてこんなに早く手を出すとは思つてなかつたんだよ。全く、約束ぐらい守つてほしいもんだね。・・・とりあえず、苦しいからこの腕どけてくれない？　答えられるものも答えられないよ」

『つ・・・、ちつ・・・』

ゼロが手を離すと、オウガはけけけほと咳払いをしてゼロから一步下がった。

『離れたし答えてもらうぞ。あいつ等はどこにいる』

「んー、それはねー」

オウガが赤く染まった空を指さし、ゼロもつられて空を見上げる。

「宇宙さ」

『……なんだと……』

「大気圏を出て少しの所さ。そこに宇宙船がある。千歌ちゃん達はその中に連れていかれたって事。ハイこれ」

オウガから手渡された黒い球体からは、天に向けて一筋の黒い光が昇っていた。

「それを辿って行けばその宇宙船に行ける。じゃあ頼んだよゼロ君、陸君。ボクがしつこく言つてあるからそう簡単には殺さないと思うけど、何人か歯止めが聞かないのがあるからね。急いだほうがいい」

そう言うとおウガは体を闇に変換し、みるみるうちに消えていく。

『おい待てっ!!』

一瞬遅れてゼロがオウガを掴もうと手を伸ばすが、既にその身体は消え、陸の手はオウガがいた場所の空を切った。

『クソッ……』

だがまだこの場に張り詰めた警戒が解かれた訳ではない。ゼロは球体から昇る光の先を見つめる。

『信じていいのか……?』

(やるしか無えよ。こうしてる間にも千歌達がどんな目に遭ってるか分かんねえんだぞ)

『……………』

ゼロは少しの間無言で考えた後、強く頷いた。

へああ、そうだな。陸、行くぞ！

「言われなくてもやってやる」

人格が戻ってきた後、ゼロが出現させたウルトラゼロアイを、陸はいつになく険しい表情で装着した。

「デヤア!!」

「んん．．．．．」

目を覚ました千歌の視界に真っ先に映ったのは、何も見えない暗闇だった。

どっちが上でどっちが下なのか、この空間がどこまで続いているのか、そもそもここは空間なのか、それすらも分からない程の暗闇。

「っ．．．！ 皆っ!?!」

意識を失う前に何が起こったかを思い出し、暗闇に向かって名前を呼びかける。

「．．．そんな大声で叫ばなくても起きてるわよ．．．」

すると答えが返ってきた。この声は善子だ。

「千歌ちゃん。やっと起きた?」

「相変わらずお寝坊ね．．．」

「まる達全員いるよ」

「．．．．．でも．．．、(んんん)．．．?」

それに続いて全員の声が聞こえた。

携帯のライトで声のした方を照らし、Aqours全員がいる事を確認してひとまず安心する千歌。

だがそれは逆に、Aqours全員が捕まってしまったという事だ。

周囲をライトで照らすと、今千歌達は透明な球体の様なものに閉じ込められている事が分かった。

『お目覚めのようですね．．．．．』

「誰っ!?!」

闇から飛んできた冷徹な声に、全員が身構える。

見上げてみると、幾つもの赤い双眸が自分達を見ている事が分かった。

「ピギヤアアアアアアツ!!」

「おうっ．．．」

「耳が．．．」

「ルビイちゃん。落ち着くずら」

『そうです。慌てる事はありません。何も取って食おうという訳ではありませんから．．．』

パツと明かりがつき、自分達を囲っている五体の人影が映った。

どの影も巨大で、一目では全身を黙視することが出来ない。

『初めましてA q o u r sの皆さん。我々の母船へようこそ』

その中の一人、白と青の鎧を着こみ、耳のどがった悪魔の様な顔をした宇宙人が千歌達に向かって頭を下げた。

「……私達に何の用……ですか……?」

千歌は怯えながらも、その巨大な宇宙人に質問を投げかける。するとご丁寧にその宇宙人は答えてくれた。

『……大した理由ではありません。貴方達に興味があつたのと、ちよつとした忠告をね……』

「忠……告……?」

『ええ。貴方達のマネージャーに、仙道陸と言う人間がいますね?』

「います……、けど……」

「ここで陸の名前が出てきた事に驚きながらも、千歌は首肯する。

「陸ちゃんが何か……」

しばらくの間の後、宇宙人は表情を一切変えずに答えた。

『忠告は一つです。彼と、仙道陸と関わるのを辞めなさい』

「え……」

宇宙人から放たれた言葉に、六人は耳を疑った。

ここで陸の名前が出てきただけでも衝撃的なのに、その上陸と関わるのを辞めろと言う。

当然ここにいる全員、動揺しない訳が無いのだ。

「・・・え？・・・何で・・・？」

『理由は聞かない方がいい。貴方達の為です・・・』

氣遣っている様な口調だが、その声音には明らかな悪意が滲んでいた。

どうしたらいいのか分からず、皆その場で顔を見合わせる。

「ちよ・・・、理由もなしにそんなこと言われて納得できるはずないでしょ！　そもそも

誰なのよアンタ達!!」

訳の分からない忠告に対し善子が声を張り上げた。

『貴方は・・・、確か津島善子さん・・・でしたか。第三のリトルスター発現者・・・。』

その節はウチの馬鹿が失礼しました』

「ヨハネよ!!」

『ふっふっ・・・、そうですか・・・。ではヨハネさん。申し遅れました。私はメ

フィラス星人。魔導のスライと申します』

スライが隣にいる宇宙人に身体を向け、皆の視線も自然とそちらに移る。

そこにいたのは独特の意匠と形状の頭部と、鋏状の両腕、マントの様に背中から生え

た金色の触手を持つ青色の宇宙人。

『吾輩はテンペラー星人。極悪のヴィラニアス』

ヴィラニアスは名乗った後、腕を組んで千歌、曜、梨子の三人を見据えた。

『ライブとやら。中々に面白かったぞ。最後まで見れなかった事が悔やまれる』

「えっ……？ あ……、どうも……」

突然緊張感もなくライブの評価を下され、拍子抜けする千歌。

『おっ、それ。俺も見に行つたぜえ……』

横から割つて入つた声の持ち主は、氷の塊とも全身刃ともとれる鋭利な体と、ランタン・シールドの様な両腕が特徴の宇宙人だつた。

『ヒエヒエヒエ……、グローザ星系人、氷結のグロッケンだ。よろしく……』

『グオオオオオオオオオオオオオ！』

「ピギイツ!!」

グロッケンの隣にいた宇宙人が発した唸り声に、ルビイが悲鳴を上げる。

骨と肉が逆転したような外見と、扇状の左手が如何にも禍々しい宇宙人だ。悲鳴を上げるのも無理はない。

『グウウウウウウウウウウ』

しかし何を言っているのか分からない。

『デスレ星雲人、炎上のデスローグだつてよ……』

『グオオオオオオオオオオオオオ！』

グロッケンが通訳をすると、デスローグは再び唸り声を上げた。

自然と、まだ名乗っていない最後の一人にその場の全員の視線が移る。

『ヒヨホホホ……。ようやく私の番か……。』

ノズル上の口を弄びながら、ヒューマノイド的かつエイリアン然とした外見の宇宙人は笑った。

頭頂部の三本の触覚と胸にある赤い発光体。三本の尻尾。赤と青を基調とした体。

その凶悪な体を見せつける様にポーズを取ると、御多分に漏れず名乗り始めた。

自分の足元が、熱せられたように赤くなっているとも知らず。

『ギョポツ……。我が名はヒツポリト星人、地獄の——あじゃばあああっ!?!』

『ツ!? 何!?!』

名乗っている途中でいきなり宇宙船の床がせり上がり、吹き飛ばされたヒツポリト星人が天井に激突する。

『何奴!?!』

濛々と煙が上がる中、ヴィラニアスがうつつすらと煙の中に見える人影に向けて鉢を掲げた。

『エメリウムスラッシュュツ!!』

『ぐおっ……。』

返答の代わりに飛んできた緑色の光線を両腕の鉢で受け止めるヴィラニアス。

『オウラッ!!』

『がああつ・・・!!』

いきなり宇宙船に侵入してきたその巨人、ウルトラマンゼロは、猛スピードで煙の中から飛び出してくると、ヴィラニアスの腹を豪快に蹴り飛ばした。

『ゼロッ!!?』

「「「「ゼロ(さん)!!」」」」

絶望に染まった表情から一転、ゼロの登場により、Aqoursの表情に明るさが戻る。

そんなAqoursの見つめる先、登場と同時に二体の宇宙人を蹴散らしたゼロは、目の前で佇む赤目の宇宙人を見て驚嘆の声を上げた。

『ダークネスファイブツ・・・! 生きてやがったのか・・・!!?』

『ケケケ・・・、そう簡単に殺されてたまるかよ・・・。俺の目標はあの不死身のグローザム先輩だぜエ・・・?』

『グオオオオオオオオオオオオ!!』

両腕に冷気を纏ったグロツケンと、扇状の腕に火球を生成したデスローグが、ゼロと対峙し戦闘態勢に入る。

それに続き、

『ギョホホ……、飛んで火にいる夏の虫とはまさにこの事……』

『不意打ちとは小癩な……、ウルトラマンゼロ！ 貴様何故この場所が分かった!?!』

早くもダウン復帰したヴィラニアスとヒツポルト星人までもが加わり、四人はゼロを囲む形で陣を取る。

『へっ……、上等だ……。テメエ等もベリアルのところ叩き込んでやらあ!!』

ゼロがファイティングポーズを取り、今まさに死闘が始まろうとしたその瞬間。

『ハイハイ。そこまですてくださいね』

深く落ち着いた声と共に、パンパンと手を打つ乾いた音が鳴り響いた。

二十九話 刻む怒り

『ハイハイ。そこまでにしてくださいね』

スライがパンパンと手を叩き、今まさに戦いの火蓋を切つて落とそうとしていた五人を制する。

『私はゼロと争うために彼女達をここに連れてこさせたわけではありません。単純なる興味、ただそれだけです。さあ、五人ともその拳を収めなさい』

『ケツ・・・』

『ウウウウウウ・・・』

『だがスライ。こやつは吾輩達の宇宙船に乗り込んできたのだぞ。ここまでされて見逃す訳には・・・』

『そうだ！ 私の自己紹介の邪魔をしよつて・・・』

スライの言葉に、グロツケンとデスローグは言われた通りに引き下がったが、先程ゼ口に手痛いのを喰らったヴィラニアスとヒツポルト星人、地獄のジャタールは怒りが収

まらない様子だ。

『それに如何にゼロと言えどこの人数ならば負ける事はない!』

『勝ち負けではないのです。ヴィラニアス。今我々がいる場所を考えてみなさい』

スライは一瞬でジャタールとヴィラニアスに肉薄すると、右腕に装着された剣をヴィラニアス。左腕の鎧の鋭利な部分をジャタールに押し当てる。

『ここは宇宙船です。多少は丈夫な造りをしているとはいえ、流石にあなた方の戦いの衝撃に耐えられる程頑丈ではないです。確かにこの人数差ならゼロに勝てるやもしれませんが、その後はこの宇宙船が壊れてしまつては元も子もないでしょう?』

『ぐっ………』

『ぬう……』

ジャタールとヴィラニアスが両腕を下げ、スライの後ろに下がった。

『と、いう訳ですゼロ。ここであなたとやり合うつもりはありません』

そう言うスライは、再程ゼロがブチ抜いた宇宙船の穴に手を向けた。あそこからお帰り下さいという事らしい。

『それを聞いてのこのこ帰ると思つてんのか? むしろこの宇宙船がぶつ壊れた方が俺

にとつては都合だ』

『おや……? いいのですか?』

ゼロがゼロツインソードを突き付けるが、スライはその切っ先にすら目を向けない。そんなスライが手招きするように腕を動かすと、A q o u r s 六人が閉じ込められた球体がその掌に乗った。

『この宇宙船が崩れれば、彼女達も無事で済む保証はありませんよ？ いくらあなたでも、彼女達を庇いながら我々五人と戦う事は不可能です。それに．．．』

スライが指を鳴らす。

するとゼロとスライの間に空間ウィンドウが出現し、街中に出現した巨人の様な者の映像を映し出した。

その場所は、先程まで千歌達がいた東京の街だった。

「なっ．．．．．、コイツいつの間に．．．」

『．．．早く行かなければ、街が焼け野原となってしまうですよ．．．．？』

『っ．．．．．、卑怯だぞコノヤロー!!』

『卑怯もラツキヨウもありませんよ．．．．。それでどうしますか？ このままおとなしく彼女達を連れて引き下がるか、ここで我らと戦い街の人々と彼女達を死の危険に晒すか、どちらでも好きな方を選びなさい』

『テメエ．．．．．』

「ゼロ。落ち着け」

噴火寸前の活火山と言った様子のゼロを宥める。この卑怯者を殴り飛ばしたいのは陸も同じだったが、ここで戦ってしまつては何も守る事が出来ない。失うだけだ。

それは陸が最も恐れている事だから。

『・・・・・・・・分かつてるよ・・・・・・・・』

ゼロはスライから六人の閉じ込められた球体を受け取ると、自分が開けた穴に向かって歩き出した。

『賢明な判断です。まあ、送り込んだのは大したことのない機体なので安心なさい』

『つたく・・・・。あつ、おい。ちよつと聞きてえ事がある』

『どうぞ。なんなりと・・・・』

スライの返答を受けると、ゼロはバリアで千歌達が入った球体を包んだ。音声を遮断する効果のある光の幕に包まれ、先程まで聞こえていた千歌達の声が聞こえなくなつた。

『この星で言う六年前、日本中にスカルゴモラを差し向けたのはお前等か？』

「え・・・・・・・・」

ゼロから突いて出た言葉に、陸が固まる。

それと同時に脳裏を過る、紅の中で吠える絶望の巨影。

狼狽える陸に構わず、ゼロは淡々と続けた。

『・・・考えてみれば共通点が多すぎた。クライシスインプクト、修復された宇宙、六年前の怪獣災害、リトルスター、そしてテメー等ベリアルの配下。・・・ジードのいた地球と状況が酷似している。・・・アナザークライシスを引き起こし、何らかの作
用で修復したこの地球にカレラン分子を散布、別宇宙と同時期にこちらもスカルゴモラ
で都市を破壊し、一か所に集まった人々の中からリトルスター保持者を捜索。だが向こ
う同様こちらにも発現者なし。それで少し時間を空け、向こうでの作戦が失敗した今、再
びこの地球でリトルスターを探している。・・・筋書きはこんなもんだろ』
これが真実だと言わんばかりに言葉を紡ぐゼロに、陸はただ茫然とすることしかでき
ない。

そしてスライが感心した様に喉を鳴らした。

『その慧眼・・・・・・・・、流石はゼロと言ったところでしょうか・・・・・・・・』
そして肯定するように頷く。

『つーこたあ・・・・・・・・』

『ええ、六年前、日本で怪獣災害を引き起こしたのは我々です。まあ、正確には我々の仲間、ですがね。私達はそれを見ていただけ』

何の躊躇いもなくスライから告げられた真実に、陸の思考が一時的に止まった。

それと同時にくつきりと筋が浮かび上がる程に強く拳を握りしめ、スライを睨みつけ

る。

その理由すらも考えられないままに、陸の口は勝手に言葉を吐き出していた。

「……………何で」

『……………ん?』

「何で……………、内浦を襲った……………」

陸が口にしていたのは、六年前からずっと不思議に思っていた疑問だった。

ゼロの言うスカルゴモラが出現したのは、函館、仙台、秋葉原、神戸、博多、そして内浦の六ヶ所。

内浦を除く五ヶ所は、どこも人々が多く住まい、発展している都市だ。

そんな中、そこまで何故人もいなければ、特に発展している訳でもない内浦が標的となったのか。それも、一番最初に。

その事を、無意識のうちに質問として紡ぎあげていた。

『何故……………、ですか……………、難しい質問をしますね……………』

「……………どういう事だ……………」

飄々とした態度を崩さないスライに、形になり切っていなかった怒りがじわじわと込み上げてくる。

『どうもこうも、あそこを襲ったことに理由などありません、ただの気まぐれです』

「ふざけんなっ!!」

いよいよそれを抑えられなくなり、スライに向かって声を張り上げた。

「………気まぐれ……? ざけんじゃねえ!! 何人死んだと思ってるんだっ!!」

だがスライは陸の怒号に怯む様子もなく、むしろそれを楽しむようにして憎たらしく笑う。

『別に死人が出たのは内浦だけではないでしょう? 自分達だけが被害者だと思うのは辞めなさい』

「何でテメエが偉そうに………」

陸がどんだんスライへの嫌悪感を募らせていく中、まるで陸のその様子が見えているかのようにスライが肩を震わせ出した。

『ふふ………、はははっ………』

「………何が可笑しい………」

『いえ………、ちよつとね………』

笑うスライが手を翳すと、空間ウィンドウに映った映像が切り替わった。

「あ………」

燃える町の中、咆哮を轟かせる赤い獣。

それは六年前に内浦に現れ、理不尽に命を奪っていったスカルゴモラの映像だった。

『これが……』

初見のゼロがその凄惨さに絶句し、陸がその身に刻まれたトラウマに身震いする。

『フフフ……』

「っ……」

その映像の中、スカルゴモラの見つめる先に四人の子供がいた。

意識を失って倒れた少女三人の中に、怯えた視線をスカルゴモラに向ける少年が一人。

それは紛れもなく、あの日の陸だった。

『あの時の虚弱な少年が、随分ともを言うようになったと思うと……、面白くて——ツ!?!』

スライの頬を、光の線が翳めた。駆け抜けた光線は宇宙船の壁と衝突すると共に爆ぜ、爆風の衝撃が六体の身体を貫く。

『……いい加減にしろ。次は当てるぞ……』

予備動作も無しにゼロが放った光線にスライが初めて狼狽え、他のダークネスファイブが身構える。

『……ええ……、少々戯れが過ぎた事を謝罪します……』

「ツ……! それで引き下がると——」

『戻るぞ、陸』

憤慨する陸をよそに、ゼロは再び出口へと足を進めた。

「ゼロッ!!」

『落ち着けっ!!』

先程とは逆に、ゼロが陸を宥める。そして千歌達が入った球体を掲げた。

『……今はこいつらの安全が最優先だ。それに街の方も何とかしないとイケねえ……』

一時の感情に任せて大義を見失うな』

そう言ったゼロの声音は、酷く震えていた。

「っ……、分かったよ……」

陸は悟った。

ゼロだってマグマの様に煮えたぎった感情を抑えこんでいる事を。

自分の失敗のせいで監視対象から外れ、この事件に気付くことも出来ずに幾つもの命を散らせてしまったゼロが、一番悔しいはずだという事を。

そんなゼロが堪えているのを見てしまっただけは、陸も感情に流される訳にはいかなかった。

『……邪魔したな……』

それでも消え切らない感情の爆発を無理矢理抑え、陸とゼロは地球へと急いだ。

「……ゼロ……？」

『ダークロプスゼロ。俺を横して造られたロボットだ……。あいつ等らしいな……。』
地球に降り立ち、球体から千歌達を開放したゼロは、街を蹂躪していた巨人と対峙した。

その巨人のシルエットは、まさしくゼロだった。

ゼロと異なる点を上げるとすれば、カラーリングが赤と青ではなく金と銀だという事、目は赤いゴージャルの中心にある単眼だということぐらい。

逃げ惑っていた東京の人々は、初めて内浦以外に姿を現したゼロに興奮したり、ダークロプスゼロと似ている事に畏怖を覚えたりと反応は様々だ。

だが最近内浦で怪獣を倒している事もあり、不安の声よりは歓声の方が大きい。

もつともそんなもの、今のゼロと陸には届いていないのだが。

『シエヤアツ!!』

『シエヤアア!!』

張りつめた緊張を打ち破り、二体の巨人が交錯した。

『ゼヤアア! シエアツ!』

『ダアア! ゼヤアツ!』

ゼロはゼロスラッガー、ダークロプスゼロはダークロプスゼロスラッガーをクナイの様に構え、互いの身体を切り裂かんとそれを振るう。

ダークロプスゼロの声や掛け声はゼロと同様の物だったが、金属的なエコーが掛かっていた。

刃と刃が衝突する度に金属音が鳴り、火花が散る。

このロボット、見た目のみならず戦い方までゼロに酷似している。宇宙拳法交じりのその戦闘スタイルは、完全にゼロをコピーしていると言っているといいだろう。

だが所詮は動きと能力をコピーしただけの模造品、オリジナルに敵う訳がない。

『リアアアアアツ!!』

ダークロプスゼロの右腕を蹴り上げたゼロが、ガードが薄くなった脇腹目掛けて力任せにゼロスラッガーを振り抜いた。

脇腹を盛大に搔つ捌かれたダークロプスゼロが、ぴしぴしとまさしく機械が壊れた時に鳴るような音を立てて動きが鈍くなる。

これならもう光線を打ち込めば終わり。東京の人々は生でゼロの必殺光線が炸裂することに期待するが、ゼロの斬撃が止むことはなかった。

『アエエエアアアアツ!!』

自分への苛立ちを全てその金属の身体にぶつける様に、頭部、両腕、胸、背中、腰、両足にと、目にも止まらぬ速さでゼロスラッガーが剣線を描いていく。

嵐の様な斬撃が止み、ゼロに蹴り飛ばされたダークロプスゼロの姿は、見ていた人々が敵にも拘らず同情してしまう程に無惨だった。

右腕は切り落とされ、原形が覚束なくなる程に歪んだボディ、バチバチと火花を散らす全身の斬撃の跡。砕かれたダークロプスゼロスラッガー。

もう既に目も当てられない程の凄惨な状態だというのに、ゼロはゼロスラッガーをゼロツインソードに変形させると、残った左腕も切り飛ばしてしまった。

「……………今日のゼロさん……………、怖い……………」

少し離れた場所でゼロの戦いを見ていたルビイが、震える声を漏らした。

ルビイだけではない、先程ゼロに救出されたA q o u r s全員が、普段と全く違う様子のゼロに怯えた視線を向けていた。

目の前で執拗に黒い巨人の身体を切り刻んでいく青い巨人は、何度も自分達を救ってくれた優しいゼロとはまるで違った。

全身から殺気を放ち、怒りのままにただただ相手を破壊する獣。

感情のままに繰り出される荒々しい斬撃が、それを物語っていた。

『シャアツ!!』

『ギ………、ガガ………』

ゼロは両腕を失ったダークロプスゼロの胸部を蹴ると、宙返りをしながらダークロプスゼロとの距離を取った。

ゼロの右腕には、光の粒子が集約していく。

『ワイドゼロシヨットツ!!』

怒気を滲ませた光の奔流が胴を貫き、全身の切傷から光を漏らしながら、ダークロプスゼロの身体は爆発四散した。

どっと歓声上がるが、中には今のゼロの戦い方に疑問を持つ者も確かにいた。過剰なまでに相手を破壊したあの巨人は、本当に信用における存在なのかと。

『シエヤア!』

感謝、歓喜、疑問、畏怖、非難、様々な視線を浴びながら、ゼロは空へと飛び立つていった。

三十話 重なる不安

ゼロがダークロプスゼロを破壊し、まだ焦げ臭い匂いが残る東京の街の中。太陽は沈み、千歌達はようやく今日宿泊する旅館へと辿り着いていた。

「落ち着くずらくらく．．．」

「気に入ってくれたみたいで、嬉しいわ」

花丸に、梨子がどこか陰った笑顔で返す。

「なんか、修学旅行みたいで楽しーね」

「曜ちゃんは．．．、一体何着買ったの？」

巫女服からコスチュームチェンジし、今度はCAの様な格好をして、一人コスプレ大会を開催する曜。巫女服にしろその服にしろ、それなりに値が張る事は確かだ。

「堕天使ヨハネ、降臨！」

訂正、参加者はもう一人いた。

黒いマントを翻し、お馴染みの堕天使コスプレをした善子が机に飛び乗る。

「ヤバイ．．．、カッコイイ．．．」

「ご満悦ずら」

「アンタだつて東京のお菓子でご満悦なくせに!!」

なんだかんだ皆東京を満喫しているようである。

無理に明るく振舞っている感は、どうしても否めないが。

ツッコんだ後、謎の儀式を再開した善子を尻目に、花丸はバッグの中を漁りだす。

「ふふ．．．、まるレベルになると、お土産以外に夜食用のお饅頭も買って．．．あ
れ?」

「ん! 美味しいこれ」

「本当」

夜食用の饅頭が行方不明になつてゐる事に気付き、そつと視線を上げた花丸の目に映つたのは曜と梨子に食された饅頭の姿だつた。

「ああー! まるのバックトウザびよこ万十——ツ!!」

「むぐつ．．．．．」

「りよ、旅館のじゃなかつたの?」

突然叫んだ花丸に驚き、曜が青い顔で饅頭を喉に詰まらせる。

「それより．．．、そろそろ布団引かなきゃ．．．」

梨子が涙目の花丸に頭を下げている一方、ルビイは押し入れから布団を抱え、よろよ

ろとそれを運び出す。

「おっとつと……」

だがルビイに支えられる重量ではない。バランスを崩し、四人のいるテーブルの方へと倒れこんできた。

「……うわあっ?!」「……」

曜が埋もれ、梨子は吹き飛び、一年生はテーブルに突っ伏し、バツクトウザびよこ万十が辺りに錯乱する。

「ねえ……って、あれ?」

それとほぼ同時に、少し思いつめた表情で部屋に入ってきた千歌が、部屋の惨状を見て素っ頓狂な声を上げた。

ダークロプスゼロを倒した後、陸とゼロは夜だというのに明るい秋葉原の街を当てもなく歩き回っていた。

普段の陸ならこの沼津の比にもならない大都会に興奮していたのだろうが、不思議とそんな気分にはなれなかった。

「……………らしくなかったな。さっきのお前」

「……………まあ、ちよつとイライラしててな……………自分に……………」

先程入った家電量販店のテレビには、東京に現れたゼロの事が報道されていた。

執拗にダークロプスゼロを破壊したゼロに、反感を持つ者もそれなりにいるらしい。

「……………それにしても、まさかダークネスファイブが生きていたとはな……………」

メガ・アーマゲドンで死んだとばかり……………」

ダークネスファイブ。

宇宙船にいた五体の宇宙人の事を指し、奴らはウルトラマンベリアル直属の精鋭部隊なのだそうだ。

その内の一人、メフィラス星人魔導のスライが口にした事が、陸はずつと心に引っかかっていた。

「……………ゼロ」

「……………ん？」

「……………スライって奴が言ってたスカルゴモラって、何だ？」

千歌達の救出の為、宇宙船に乗り込んだ際にゼロがスライに向かって突き出した言

葉。

ゼロは、陸よりも早く六年前の怪獣災害の真相に気付いていたらしい。

「……………悪い。言おうと思っただが……………あの時は邪魔が入ってな」

「……………そこはもういいよ。とにかく、知ってる事全部教えてくれ」

「それはボクからするよ」

「……………?」

後ろから肩と掴まれ、陸は足を止めた。

「やあ陸君。無事に千歌ちゃん達を助けられたみたいだね。良かった良かった」

背後から聞こえる軽快な口調。肩に乗せられた腕を振り払いながら振り返ると、今の

陸には憎たらしく思える笑みを作った男がいた。

「……………オウガ……………」

「ありがとうございませう」

街中でオウガに声を掛けられた陸は、何故か秋葉原の外れにある和菓子屋でオウガと共に饅頭を購入していた。

「ここ、人によつては聖地みたいなものだから、千歌ちゃん達にも教えてあげなよ」

美人の若い女店員から饅頭を受け取り、オウガは満足気である。穂むらと書かれた看板を指さし、そんな事を言つて来る。

「ここのお饅頭は美味しいよ？ そんなむすつとした顔してないで食べてみろつて」

「……………」

仏頂面を崩さない陸に、オウガがやれやれと肩を竦めた。

「ハイハイ分かつたよ。スカルゴモラの話をすればいいんでしょ」

袋の中から饅頭を一つ口に放り込むと、ベンチにどざりと腰かけた。

「その様子だと、もう六年前に日本中を襲つたのがスカルゴモラだつて事は知ってるんだろ？」

オウガの問いに、陸が首肯する。

「……………答える。何でスカルゴモラは内浦を襲つた」

スライは気まぐれだとか言つていたが、怪獣を送り込んで自分は高みの見物を決め込

むような奴がそんな無駄な事をするなど陸は到底思えなかった。

「……まあそうだね。実験だよ」

「………実験……？」

「そう。ちゃんとスカルゴモラに変身……、いや、フュージョンライズできるか」

「………どういう事だ」

「んんんんんんんんんん。そーだなー……。まずはスカルゴモラについて説明した方が良かったかな？」

もう一つ饅頭を口に含むと、もちもちと咀嚼を始めるオウガ。

緊張を幾ばくか解すため、陸も購入した饅頭を口に放り込む。作ってくれた人には悪いが、今の陸には殆ど味は感じられなかった。

やがてオウガは饅頭を飲み込むと口を開いた。

「スカルゴモラはね、変身して初めて出現する怪獣なんだよ。そう例えば、君がゼロ君に変身するみたいだね」

「何……？」

オウガが吐いた言葉に、陸が硬直する。

オウガの言葉を信じるならば、スカルゴモラは送り出された怪獣ではなく、何者かが変身した怪獣だという。

「スカルゴモラはレッドキングとゴモラ。この二体の怪獣の力と、ウルトラマンベリアルの力が融合して誕生したベリアル融合獣の事を言うのさ」

「ベリアル……融合獣……」

「そ。……これをを使う事でフュージョンライズできる」

そう言ったオウガが胸元から取り出したのは、ベースの赤の中に黒と銀のラインが走り、中央に二重螺旋のような形をしたシリンドラーが埋め込まれた物体と、レッドキングとゴモラの姿の絵が描かれた二つの黒いカプセル。

『ッ!!』

オウガがそれを見せつけてきた瞬間、ゼロが無理矢理人格を入れ替え、奴の胸倉を掴み上げた。

『……何でテメエがライザーを持っている……。六年前に現れたスカルゴモラはお前かっ!?!』

「……いいや、六年前のスカルゴモラに変身してたのは伏井出ケイだよ。このライザーは彼の物をスライから譲り受けたのさ」

オウガは胸倉を掴まれたまま、ライザーを胸の前で構える。

「フュージョンライズ! つてね。こんな感じで。六年前、伏井出ケイはリトルスターの発現状況の調査と、繰り返しフュージョンライズすることで自身がそれに適応できる

ようにしていたって訳。ほら、サイドアーズでもスカルゴモラが出現したのは六年前だろ？」

『……なら何故こっちの地球では六回も出現した？』

「向こうでフュージョンライズし続けるのは伏井出ケイにとつても都合が悪かったんだよ。ウルトラマンキングと融合した宇宙だぜ？ そんなところで何回もベリアル融合獣になってたら、流星に宇宙警備隊に感づかれるさ。それでこっちの地球で実験をしていたって訳。幸い、こっちの地球にはアナザークライシス以降、宇宙警備隊の監視の目が届いてなかったからね。まあ、鳥羽ライハみたいなりトルスター発症者は見つからなかったらしいけど」

『ぐっ……』

アナザークライシスを止められなかった事に責任を感じていたゼロが、憤怒と自身の不甲斐無さをない交ぜに歯齧みをする。

(ゼロ、悪いけど変わってくれ)

陸は再び前に出ると、極力平静を装ってオウガの胸倉から手を離れた。

「……まだ答えてないだろ。スカルゴモラが内浦を襲った理由。偶然じゃないんだろ」

「……『ディザスト・スマッシュ』』

意味不明のオウガの返しに、陸の肩が吊り上がる。

「真面目に——ッ！」

「……今はこれしか言えないかな。と言うか、ボクもこれしか知らないんだけどね」
再び掴みかかった陸の手を払い除けると、オウガは身体を霧に変え、夜の帳が包み込んだ街の闇に消えていった。

ぼすりと、先程までオウガが持っていた和菓子の袋がアスファルトを叩く。いつの間にか全部食い切ってやがった。

へ………俺の……、せいだつてのかよ………

自責の念で塗りつぶされたゼロの呻きは、音として陸の耳に届く事はなかったが、陸の頭の中だけは、いつまでも、切実に反響していた。

「音ノ木坂って、μ☒sの?」

布団とバツクトウザびよこ万十で散らかった部屋を片付け、浴衣に着替えた千歌達は六人でテーブルを囲って座っていた。

「うん、この近くなんだって。．．．梨子ちゃん」

「ん?」

「今からさ、行ってみない? 皆で」

どことなく沈んだ空気を振り払おうと、千歌が憧れでもあるμ☒sの母校、音ノ木坂学院に行くことを提案した。

その提案に、梨子の表情の陰りが、微かにだが増す。

「私、一回行ってみたいと思ってたんだ。μ☒sが頑張って守った高校、μ☒sが練習していた学校」

「ル、ルビイも行ってみたい!」

「私も賛成——!」

「東京の夜は物騒じゃないはずら?」

「なっ、なにっ? 怖いのか?」

「善子ちゃん震えてるすら」

「ヨハネよ!」

少し皆に明るさが戻ってきたのを見て、千歌はこの提案をしたのは正解だったと思つた。

ただ一人、余計に明るさを失った者がいるのには気づかなかつたが。

「ゴメン。私はいい」

音ノ木坂の出身であるはずの梨子が、この中で唯一不参加の意志を表明した。

全員が以外そうな顔で梨子を見る。

何か思い詰めていそうな梨子の顔を見てしまつては、誰も音ノ木坂に行こうとは言えなかつた。

「……そうだよね。やつぱりこんな時間に私達だけで行くのは危ないよね……」

苦笑を浮かべながら曜が言った言葉に、一年生三人が空気を読むように首肯した。

「……うん。守ってくれる陸ちゃんもいないし……、っ……」

千歌は今この場に置いての禁句である陸の名前を出してしまつていた事に気付き、はつと口を噤む。

「……陸先輩、まる達の知らない所で何かやつてるのかな……」

「……関わるなって、言つてましたよね」

千歌が名前を出してしまったことにより、皆心の内にため込んでいた疑問や不安を零し始める。

「……もう寝よっか」

これ以上空気が重くなるのをさせるために曜が切り出し、皆それに賛同して立ち上がっていく。

「ですね……、明日ライブですし」

こうして東京の夜は、交錯する不安に彩られながら更けていった。

摩天楼の様に聳え立つ建物の前で、そこに設置された巨大なモニターを眺めている陸。

あの後、一睡もせず夜に秋葉原を当てもなく散策していた。

ゼロと一体化しているので睡眠をとらなくとも問題は無いのだが、精神の疲弊はまた

別物だ。

「……………」

一晩中焦燥と煩悶に身と心を焦がしながら、陸はある事に延々と思考を巡らせていた。

どうしてダークネスファイブは千歌達を攫ったのか。

奴らが狙っているリトルスタアを発症した者は、今のAqoursにはいないはずだ。

いくら過去に発症した人間が四人もいるとは言え、今更それを連れ去ったところで何になるというのだろうか。

悶々とそれを考え続け、疲れ果てた陸の頭が出した答えがこれだ。

(……………俺と、一緒にいるから……………)

考えるまでもなかった。

ベリアル直属の部下であるダークネスファイブと、ベリアルを倒したゼロの因縁が深くない訳がない。

つまりは、そんなゼロと一体化している陸と一緒にいるからこそ、Aqoursは狙われたのだ。

……………陸とゼロが六人から離れた、このタイミングを見計らって。

奴らが千歌達を攫ってどうしようとしていたかは分からない。

人質に取るつもりだったのかもしれないし、何か他の理由。

見せしめにあの中での誰かを殺す事だって十分にありえた。

「……………」

果たして自分は、このまま彼女達と共にいていいのだろうか。

陸がゼロと共に戦っているのは、自分の意思に沿ってそうしたいと決めたからだ。

でも千歌達は？

戦いの渦中に身を置いた陸と共にいる彼女達は、果たしてこの戦いに巻き込まれる事を望んでいただろうか。

……………答えはNOだ。

彼女達はただ純粹に輝きに魅せられ、それを目指しがむしやらに走っているだけ。

リトルスター関連の場合は明確にリトルスターと言う目的があったが、今回ダークネスファイブがAqoursを攫って行った事はリトルスターとは関係がない。それはついに矛先が六人に向いたという事を如実に物語っている。

それは恐らく、陸が彼女達と共に居続ける限り終わる事はないだろう。

「……………俺が、Aqoursから離れるべき……………」

「……………陸ちゃん……………」

天を仰ぎながら陸がそう眩くと、真横から慣れ親しんだ声が聞こえた。

その声に反応して身体を向きなおすと、最近はもう見慣れた練習着に身を包んだ千歌がいた。

夜間に電車を乗り継いで向かうと言っていた為、別にこの時間に陸がここにいても何ら不思議ではないはずなのに。

千歌は、いつになく不安そうに陸を見ていた。

「……なんだ……、もう来てたんだ……」

態度もどこかぎこちない。

「……まあな。居ても立っても居られなくてよ……」

嘘は言っていない。

実際彼女達が心配で、前日から東京に留まっていたのは事実だ。

「……お前は……、練習か？」

当たり障りのない質問を投げかける。

「……うん。まあ、そんな感じ……」

声にいつもの張りがない。

普段の千歌ではない事は、幼馴染の陸でなくともわかるだろう。

「………そ」

なんとなく目を合わせているのが辛くなり、そっと目を逸らす。

都会特有の強いビル風が吹き、少しジメジメしていた辺りの空気を吹き飛ばし、ボソツと呟いた陸の返答も風に乗って流されていく。

だが次に千歌が零した言葉までは、風は乗せていつてはくれなかった。

「・・・・・・・・陸ちゃんさ・・・・、何か隠してる・・・・？」

「っ・・・・・・・・!!？」

心臓が飛び出して行っただかと思っただ。

どうしてこのタイミングでそんな事を聞いてくるのか、思い当たる節を頭の中で探りまわる。

結果一人の宇宙人の名前が出てきた。

（・・・・・・・・スライ・・・・）

千歌達はスライに何か言われたのだろうか。

「・・・・・・・・どうした、急に？」

努めて平静に普段と何一つ変わらない態度を心掛け、焦る内心を露呈させない様に振舞う。

「・・・・・・・・何か、陸ちゃんが遠くに行っちゃうような気がして・・・・・・・・」

「っ・・・・・・・・!!」

隠すことが出来なかった。

今の内心を見透かされたような千歌の言葉に対する動揺を。

「……ねえ、陸ちゃん。私達に隠れて、何か危ない事とかやってないよね……？」

……もう打ち明けるべきなのだろうか。

自分が、ウルトラマンゼロだという事を。

そしてそれが故に、千歌達はダークネスファイブに狙われている事を。

「……なあ、千歌……」

だからもう、陸とは関わらない方がいいという事を。

……伝えなくちゃ、いけないんだ。

「……実は……、俺な……」

陸がまだ残っていた躊躇いを振り払い、千歌に真実を伝えようとするのと、何も映っていないかったモニターから映像と音楽が流れるのは同時だった。

弾かれた様に、陸も千歌もそちらに視線を移す。

そこに書かれていたのは、ラブライブと言う文字だった。

「ラブ……ライブ……」

「今年のラブライブ。遂に発表されたね！」

背後から快活な声がし、二人同時に振り向くと、残りのA q o u r sのメンバーが練習着に身を包んで並んでいた。

陸を見る目が、ちよつとばかり憂わし気に染まっているのが気になるが。

「……どうするの?」

だが皆、陸と千歌がどんな話をしていたかは聞かなかった。

こんなところでそんな質問をするのは、野暮だと分かっているのだろう。だからこそ何も聞かない。

その代わりに、別の問いを投げかけて。

「勿論出るよ! ム☒sがそうだったように、さあ行こう! 今、全力で輝こう!!」

ラブライブの開催に奮起されたのか、先程陸に見せた悲し気な表情など微塵も感じさせず、五人に向かって手の甲を差し出す。

それに従い、その上に五人の掌が重なった。

「陸ちゃんは?」

「……いや、俺はいいや……」

本当の事を千歌に打ち明けて、今の関係が壊れなかった事に安堵している自分がある事に気付いた陸。

もう既に巻き込んでおきながら、それでもまだこの関係に甘えようとしている。

傲慢もいい所だろう。

そんな陸は、この輪の中に入る資格はないから。

「「「A q o u r s ! サーン・・・シャイ——ンッ!!」」」

「ランキング?」

「ええ。会場のお客さんの投票で、出場するスクールアイドルのランキングを決める事になったの!」

会場入りしたA q o u r s は、スタッフの人にイベントについての説明を受けている最中だった。

(ランキング・・・)

人間は何かと競争したがる生き物だ。少女達の純粋な思いがぶつかるこのスクール

アイドルは、まさにピッタリの競技と言える。

「Aqoursの出番は二番目！ 元気にはっちゃけちゃってねー！」

やたらとテンションの高い女性スタッフが去っていき、千歌達は顔を見合わせた。

「二番目？」

「前座って事ね……」

「仕方ないですよ。周りは全部ラブライブの決勝に出た事のあるグループばかりなんですから」

「でも、チャンスなんだ。頑張らないと」

力のあるグループばかりがそろっているこの大会に呼ばれたという事は、Aqoursもそれなりに世間の認知度が上がり、スクールアイドルとして認められてきたという事だろう。

そんな大会で上位にランクインした時に得られる人気は計り知れない。発足して間もないAqoursが更にはばたく、またとないチャンスだ。

「……ま、気張らず行ってこい。いつも通りのお前等だな」

「うんー！」

陸のエールを胸に、千歌達は控室へと向かって行った。

客席へと移動した陸は、会場のあまりの熱気に圧倒されていた。

さながら、それこそテレビに出ているようなアイドルを待ち望むような佇まいの人々。

スクールアイドルが如何に人気を博しているのか、改めて実感させられる。

へ・・・・・・・・・・陸・・・・・・・・

(・・・・・・・・・・どうした・・・・?)

へ・・・・・・・・・・大丈夫なのか?>

(・・・・・・・・・・どうだか。あいつ等、こんな大勢の前で歌うの初めてだしな・・・・)

へ・・・・・・・・いや、確かにそれも心配だが・・・・、お前は――>

『ではーっ! トップバッターはこのグループッ! Saint Snow!』

ゼロが何か言いかけたところで司会者の声が会場に響き渡り、沸き上がった観客の熱気が音の塊と化し、ビリビリと陸の身体を貫く。

「.....Saint Snow.....」

緊張した面持ちで、陸はステージ上に現れた二人の少女を見据えた。

— SELF CONTROL !!

パフォーマンスを終え、照明に照らされた彼女達の姿は、今までAqoursしか見てこなかった陸の目には全く別物の様に映った。

派手に欠ける二人と言う人数を、まるで感じさせない圧倒感。

雰囲気と言うか、覚悟が違う。そう感じざるを得ない様なライブ。

Aqoursのパフォーマンスはまだだというのに、もう、打ちのめされた気がしてならない。

へ.....すげえ.....

ライブ中一言も声を発さなかったゼロが、喋り方を思い出したように感嘆の声を漏らす。

それが飾り気などない、純粋にSaint Snowのライブへの感想だと察するのに、そう時間はかからなかった。

『続いてー！ 人気急上昇中のフレッシュなスクールアイドル！ Aqoursの皆さ

んです!』

「……………」

「……………」

もはや何も言うまい。

今のSaint Snowのライブに圧巻されたのは、ステージの袖でそれを見ていた六人も同じだろうから。

今はただ、彼女達を信じるだけだ。

三十一話 高すぎた壁

ライブも終わり、陸も加えて、Aqoursは再び東京観光をしていた。

「……………この街、1300万人も人が住んでるのよ……………」

「そうなんだ……………」

街を一望できる場所へと登り、梨子と曜は目の前に広がる東京の街へと目を向けていく。

もつとも、その目には何か映しているようには見えないが。

「……………って、言われても、全然想像できないけどね……………」

「……………やっぱ、違うのかな。そう言う所で暮らしていると」

結論から言うと、Aqoursは入賞できなかった。

やはりああいう場所に来る人々は、スクールアイドルに疎い内浦の人々と違って目が肥えている。

よって最も的確で、手厳しい答えが返ってくるのだ。ネットの様に簡単に賞賛の声が

もらえる訳ではない。

所詮、内浦と言う小さな地域で満足していたAqoursは、まだまだ井の中の蛙でしかなかったという事。

それが分かってしまったからこそ、今のAqoursには活気がない。

「どこまで行ってもビルずら」

「あれが富士山かな？」

「ずら」

望遠鏡越しに遠くの景色を望む花丸とルビィ。出発前の元気など微塵も感じさせなかった。

「ふふふ……、最終呪詛プロジェクト……、ルシファーを召喚！ 魔力一千万のリトルデーモンを召喚！ ……カッコイイ！」

その中でやたらと元気、に見える様に振る舞う善子。

いつもの様に、純粹に墮天使を楽しんでいるようには思えない。

それを少し離れた所で見守る陸。

(なあぜロ……)

〈……ん？〉

(俺は……、何て声を掛けてやったらいいんだ……？)

嫌なところで、予感が的中してしまった。

東京の評価が今までとは比べ物にならないくらい厳しい事は分かっていた。

それでも送り出したのは陸だ。だからこそ、陸は彼女達に何か声を掛けなければいけない義務があるのに。

何も、掛ける言葉が見つからないのだ。

へ・・・さあな。こういう事は俺にはサツパリだ。励ますべきなのかもしれないし、そっとしておくべきなのかもしれない

何でもできるウルトラマンでも、こういう時にどうすべきかは分からないらしい。

(・・・・・・情けねえよな。マネージャーが聞いて呆れる)

自虐を漏らす陸の視界に、ミカン髪の少女が映り込んだ。

その少女、千歌は人数分のアイスを持ったまま、他のAgoursメンバーへと身体を向けていた。

陸には背を向けている為、どんな表情でいるかは確認できないが、想像には難くない。「お待たせー！ うわっ！ 何コレすっごくキラキラしてるー！」

「千歌ちゃん・・・」

「それにこれもすっごく美味しいよ！ 食べる？」

何か言おうとする曜に、笑顔でアイスを勧める千歌。
そう、笑顔で。

〈……辛そうだな。千歌〉

（……やっぱり、お前でも分かるか……）

その笑顔が取り繕ったものであるのは、幼馴染の陸と曜でなくとも分かった。

千歌は嘘が下手だ。

それはいつでもも思っている事を、正直に言葉や態度に出せるのが千歌だからこそだ。
だから、分かるんだ。

瞳、表情、声音、全てに落胆の色が滲んでいる事が。

いつもの様に、笑顔が眩しくない事が。

……無理に、明るく振舞っている事が。

「はい！ ルビィちゃんも」

「あ、ありがと……」

全員が心配そうに見つめられながら、千歌はアイスを配っていく。

悲しみに揺れる内心を、皆に曝け出さない様に。

自分が弱っている時に正直になれないのが千歌の悪い所だ。

「……全力で頑張ったんだよ。私ね、今日のライブ、今まで歌ってきた中で、出来は一

番よかったって思った。声も出てたし、ミスも一番少なかったし・・・」

やがて全員にアイスを配り終わると、誰も聞いていないのに一人で語り始めた。

「でも・・・」

「・・・それに、周りは皆ラブライブ本戦に出場しているような人たちでしょ。・・・入賞できなくて当たり前だよ。・・・」

自分自身を納得させている様に語る千歌。

もう言うまでもなく、彼女は今日の事を引きずっている。

「だけど、ラブライブの決勝に出ようと思ったら、今日出ていた人達ぐらい、うまくないといけないって事でしょ?」

「それはそうだけど・・・」

「私ね、Saint Snow見た時に思ったの。これがトップレベルのスクールアイドルなんだって、このぐらいできなきゃダメなんだって、なのに・・・入賞すらしてなかった。あの人たちのレベルでも無理なんだって」

トップバッターでパフォーマンスをし、会場を熱狂の渦に包み込んだSaint Snowの二人。

ハッキリ言ってレベルは千歌達より遥かに上だった。それこそ、追いつけるかどうかも怪しい程に。

「……………それでも彼女達は、入賞できなかったのだ。」

「それはルビイもちよつと思つた……」

「まるも……………」

「なつ……………、何言つてるのよ？ あれはたまたまでしょ？ 天界が放つた魔力によつ

て……………」

全く慰めになつていない慰めをする善子を、花丸とルビイが双眼鏡越しに覗く。

「何がたまたまなの？」

「何が魔力ずら……………」

「え!? いや……………それは……………」

二人の容赦のないマジレスに、善子が狼狽える。

「慰めるの下手過ぎずら……………」

「な、何よ！ 人が気を利かせてあげたのに！」

「そうだよ。今はこんな事考えてても仕方ないよ。それよりさ、せつかくの東京だし、皆で楽しもうよ」

辛辣な現実を突き付けてくる梨子と曜、その意見に頷く花丸とルビイ、気を遣つてくれる善子。

真摯にそれぞれの反応を咀嚼していた千歌がそう言った瞬間、唐突に彼女の携帯が

鳴った。

「……………」

突然の事に驚きながらも、千歌はその電話に出た。

「……………高海です。え？ ……はい、まだ近くにいますけど……………」

会場に戻った千歌達に渡されたのは、今回のイベントの投票集計結果が書かれた紙が中に入れられた封筒だった。

「……………見る？」

「うん」

千歌がゆつくりと封筒の中から紙を取り出し、皆がその紙に視線を移した。

ただ一人、陸を除いて。

(「……………」『ちよつと迷つた』……………?)

封筒を渡してきたのは、司会を務めていたあのテンションの高い女性だった。

口調や振る舞いこそイベント中と変わらなかつたが、千歌に封筒を手渡す時に、一瞬だが表情が陰つた気がした。

そして彼女が言つた、「ちよつと迷つた」と言うセリフ。

陸がその違和感の正体に辿り着く前に、千歌達は紙に目を通し始めていた。

「あつ……、上位入賞したグループだけじゃなくて、出場グループ全部の得票数が書いてある」

「A q o u r s はどござら……………」

「え……………と、あ、S a i n t S n o w だ」

「九位か、もう少しで入賞だったのにね……………」

結局一枚目にA q o u r s の名前は見つからず、半分以下の順位のグループが乗つた二枚目の紙へと目を移す。

「あつ……………」

遂にA q o u r s の名前を見つけた千歌が、声にならない音を漏らした。

「三十位……………」

「三十人中……………、三十位……………」

「ビリつて事……?」

「わざわざ言わなくていいから!」

「得票数は……? どれくらい?」

「えつと……」

梨子が問いかけ、すぐさま得票数の記された横の欄へと目をやる千歌。

そして、動きを止めた。

今まで必死に取り繕っていた笑みも消え、ただ茫然と目の前の紙を眺めている。

事を察し、駆け寄ってその紙を見た陸の目に飛び込んできたのは、

……無情にも、0と言う文字だった。

「……0……?」

「そんな……」

「私達に入れた人、誰もいないって事……?」

千歌を除く五人が、同時に陸を見た。

当然だが、公平を期すために陸は投票していない。

そのグループに思い入れのあるマネージャーが投票に参加するのは、参加していたグループの皆様にも失礼だし、そんな事で得票数を得たら彼女達も喜ばないだろうと思ったからだ。

「お疲れさまでした」

落胆する A q u o u r s に、声を掛ける少女が一人。

「S a i n t S n o w さん」

「っ」

振り返れば、S a i n t S n o w の二人がそこにはいた。

その内の一人、サイドテールの少女が前に出てくる。

「素敵な歌で、とつても良かったと思います」

てつきり何か手厳しい事を言われるのかと思えば、最下位のグループに掛けるとは思えない様な称賛の言葉。

「ただ、もし μ s の様にラブライブを目指しているのだとしたら」

だが次に彼女が続けた言葉は、称賛とは程遠いものだった。

「諦めた方がいいかもしれません」

「 っ 」

重く冷たいその言葉が、ほとんど折れかけていた千歌達の心に残酷に突き刺さった。

実力のある彼女に言われたからこそ、その言葉が紛れもなく真実だという事が分かる。

続いてツインテールの少女が、目尻に涙を溜めて、睨みつけてきた。

「馬鹿にしないで……。ラブライブは……。遊びじゃない！」
『んだとっ……。』

(ゼロツ!!)

『っ……。!』

あまりにも身勝手な物言いに憤慨したゼロだが、陸に制された後は何も言わなかった。

陸達はまだいい。全力を尽くしてこの結果で、拳句の果てにあんなことを言われたA
oursの心は、これ以上何か言われようものなら本当に折れてしまいそうだったか
ら。

「では……。」

Saint Snowだって悪気があってあんな事を言った訳じゃない。

彼女達も本気だったのだ。

だからこそ、悔しかった。そりや何かに当たりたくなるだろう。

昨日苛立ちを八つ当たりの様にダークロプスゼロにぶつけた陸とゼロは、ここでは何
も言う資格はない。

ただ、去ってゆく二人の背中を眺める事しか出来ないのだ。

沈む夕日で赤く染まる海を、ただただ無心で眺める帰りの電車。

陸達しかいない車内を支配していたのは、息苦しくなる程の重々しい空気だった。

「あんなこと言われちゃったけど、・・・私は良かったと思うな」

そんな中、千歌が口を開く。

この雰囲気の中、辛うじて晴れやかな表情を保ちながら、皆に笑いかける。

「精一杯やったんだもん。努力して頑張つて、東京に呼ばれたんだよ？ それだけで凄

い事だと思う！・・・でしょ・・・？」

「それは・・・」

「だから、胸張つていいと思う。今の私達の精一杯が出来たんだから」

リーダーとして、皆を励まそうとしているのか、それとも自分自身を鼓舞しているの

か。

どちらにしろ、千歌が本心でそれを言っているとは到底思えない。

そんな千歌の心情を知ってか知らずか、笑って見せる千歌とは対照的に、仄暗い表情をした曜が口を開いた。

「千歌ちゃん……」

「ん？」

「千歌ちゃんはさ、悔しくないの？」

その言葉に、俯いていた他のメンバーもはっと顔を上げる。

皆思っではいたが、口には出せなかった事。とても言い出せるような雰囲気ではなかったから。

それを打ち破り、最も気が知れた幼馴染である曜が、皆の気持ちを代弁して言い放ったのだ。

流石に、千歌も笑顔を崩して表情を引きつらせる。

「そ、そりゃあちよつとは……でも満足だよ！ 皆とあそこに立てて！ ……私は、嬉しかった」

「そっか……」

そう思っている事は間違いないのに、千歌は頑なに「悔しい」と口にしようとしない。

何が千歌をそうさせるのか、どうして無理に感情を抑えこむのか。陸のみならず、他のAqoursメンバーも理解が出来なかった。差し込む夕日は車内を照らすが、それが心にまで届く事はない。その後は余計に重くなった空気の中、会話もなく七人は電車に揺られ続けていた。

「ふえく……、やつと戻ってきたく……」

「やつとずらつて言えるずらく」

「ずつと言つてたじやない！」

「ずらく……」

やつとの思いで辿り着いた沼津駅。

故郷に戻り多少心に余裕が生まれたのか、一年生三人はさつそくコントをかましている。

千歌達二年生も、少しは表情が緩んでいた。

そこへ、

「「おーっ」」

千歌達を呼ぶ声が、集団でこちらに駆け寄ってきているのが分かった。

見ればそれは浦の星女学院生徒数十名。

どうやら、お見送りのみならず、お迎えにも参上してくれたらしい。

それを見て陸は千歌達から離れた。

「皆……」

「どうだった？ 東京は！」

興奮気味にAqoursに詰め寄る浦の星女学院一同。

彼女達にとつて、千歌達は名もない場所から青焦がれの場所であった東京へと向かった。言ってみれば英雄の様な物なのだろう。

だから純粹に応援し、今もこうして質問を浴びせているのだ。

「あー、うん！ 凄かったよ！ なんか、ステージもキラキラしてて……」

その気持だが、今の千歌達には辛い。

「今までで一番のパフォーマンスだったよねって……」

「なーんだー……、心配して損した〜」

「じゃあじゃあ、本気でラブライブ決勝狙えちゃうって事？」

「えっ……」

後頭部に手を回し、たははと笑っていた千歌の動きが止まった。

千歌だけではない。Aqours全員が、その言葉に動きを止める。

きつと皆の頭を駆け巡っているのは、全参加チームの内最下位だった事実と、得票数

0の文字。

そして、

—— 諦めた方がいいかもしれません。

—— ラブライブは……、遊びじゃない！

Saint Snowに告げられた、目を背けたくなるような言葉だろう。

千歌達の沈黙を肯定ととったのか、浦の星女学院一同はその盛り上がりを増してい

く。

「そうだよね！ だって東京に呼ばれるくらいだもんね！」

「うんうん」

「あ〜……。そうだね……。そうだと……。いいけど……」

事実を知らない彼女達の純粋な期待が、千歌達に重くのしかかる。

だが陸には助け舟は出せない。仮に何かを言ったところで、それが助けになる保証などどこにもない。

もはやAqoursに期待する浦の星女学院一同の話し声さえも、耳障りな雑音へと変わっていく。

その時だった、

「お帰りなさい」

不意に耳朶に触れた透き通った柔らかな声音に、自然と身体が反応するのは。

「お姉ちゃん……」

姉を見て、弱々しく目尻に涙を溜めていくルビィ。

「よく、頑張りましたね……」

優しく微笑みかけるダイヤに、もうルビィは破裂しかけていた感情の爆弾を抑えこむことは出来なかった。

「……うつ……つ……うう……、っ……ああああ……つ

!!」

ダイヤの胸に飛び込み、ルビィは盛大にそのか弱い鳴き声を周囲に響かせ、他のAqoursメンバーも見えない様に下を向く。

た。そんな彼女達を見て、この場にいる全員。向こうで何があったのかを悟ってしまっ

三十二話 共にいる資格

「得票数……、0ですか……」

「……はい」

場所は移って、沼津駅近くの河川敷。

千歌達は、ダイヤに東京であった事を全て話した。

「やはりそう言う事になってしまふのですね。今のスクールアイドルの中では……」

ダイヤは泣き疲れて眠つたルビィに膝枕をし、微笑みながらその頭を撫でている。

「先に言っておきますと、貴方達は決して駄目だった訳ではないのです」

事の詳細を聞いても、ダイヤが冷静さを欠くことはなかった。

むしろ初めからそうなると分かっていたかの様に、淡々と言葉を紡いでいく。

「スクールアイドルとして十分経験を積み、見てくれる人を楽しませるに足りるパフォーマンスもしている。でも……、それだけではだめなのです。もう……それだ

けでは……」

「どういふことですか？」

問いかけた曜に、

「7236。何の数字だか分かりますか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ラブライブにエントリーしたスクールアイドルの数ですか？」

「ええ・・・・。去年、最終的に登録された人たちの数ですわ。その数は、第一大会の十倍以上・・・・・・・・」

「そんなに・・・・・・・・」

そのあまりの多さに、千歌が小さく呟く。

第一大会でおよそ七百ものスクールアイドルがエントリーしている時点で、既にスクールアイドルの人気は高かったことが伺える。

そしてある時、その人気は爆発的に高まった。

その火付け役が、 μXS 。そしてA-RISE。

かつて絶大な人気を博したこの二グループの台頭により、ただでさえ高かったスクールアイドルの人気は天井知らずになり、今日のドーム大会が開催されるまでに至ったのだ。

数が増えれば、その分実力のあるグループも増える。

実力のあるグループが増えれば、スクールアイドル全体のレベルの高さも向上する。

レベルが向上すれば、当然そのレベルに満たないグループは淘汰される。つまりは、

Aquorsが、今のスクールアイドルのレベルについていけないのだ。

「・・・貴方達が誰にも支持されなかったのも、わたくし達が歌えなかったのも、仕方のない事なのです・・・」

「歌えなかった・・・?」

「どういう事・・・?」

立ち上がった善子に、ダイヤは儂く笑いかけると、

「二年前、既に浦の星には統合になるかもと言う噂がありましたね・・・」

その後にはダイヤは、驚くべき事実を語った。

何とダイヤは二年前、スクールアイドルをやっていたというのだ。

そのメンバーはダイヤの他に鞠莉、そして果南。

三人は学校存続の為に立ちあがり、練習を重ね、人気も得た。

そしてとある日、今の千歌達同様、東京のイベントに呼ばれたとの事。

「・・・でも、歌えなかったのですわ」

ここからが千歌達とは違った点。

ダイヤ達三人は、他のグループのパフォーマンス、そして味わったことのない大きな

会場で歌う事のプレッシャー。

その結果、歌う事すらままならなかったという。

その後は鞠莉の留学によりグループは解散。スクールアイドル、ひいてはラブライブへの道を閉ざすことになった。

衝撃の告白に、Aqoursは全員戸惑いを隠せていないが、陸だけは一人腑に落ちたような表情でダイヤの話に耳を傾けていた。

——逃げてても何も変わらないよ・・・？

——逃げている訳ではありませんわ。わたくしも、果南さんも。

——前は、ルビィよりも大好きでした。

そして果南のスクールアイドルに対しての反応。

何本もの伏線が、今ここで一つに収束した。

「貴方達は歌えただけ立派ですわ」

「じゃあ・・・、反対してたのは・・・」

「いつかこうなると、思っていたから」

認めていなかった訳ではないのだ。

逆だった。認めてくれていたのだ。千歌達の努力も、想いも、実力も。

それだからこそ、自分達と同じような道を辿ってほしくないと、あえて辛辣に接し、的

確に改善点を指摘してくれた。

——これは今までのスクールアイドルの努力と！ 地域の皆様の善意があつての成功ですわ！ 勘違いしない様に！

今になって、あの日にダイヤが千歌達に伝えようとした本当の意味が、痛いほど理解できた。

A q o u r s は、ずっと地域の人々。そして歴代のスクールアイドルが積み上げてきた人氣に支えられ、今までの成功があつたのだ。

ましてや今のA q o u r s には妹のルビイがいる。

妹が、かつての自分と程度は違えど同じ挫折を味わってしまった。

ずっとルビイを見守り続けていたダイヤの心境たるや、想像するに余りある。

「……………」

未熟だった。何もかもが。

周りの気持ちなど理解もせず、ただ目の前の事だけに一直線になった結果がこれだ。それを気付かせる事が、陸には出来たはずなのに。

(……………ホントに、何で俺ここにいるんだろうな…………)

〈……………陸…………〉

自転車を漕ぎ、風を感じながら夜の街を進んでも、気分が晴れる事はなかった。陸も、ゼロも。

先程から、陸の背中に埋めた顔を上げる気配のない曜も。

「………何で、あんな事言っちゃったかな……」

弱々しく吐き出した曜の息遣いを背中で感じる。

——千歌ちゃん。辞める？

黙りこくる千歌に対し、

——辞める？ スクールアイドル？

曜がかけた言葉がこれだ。

曜にとっては、いつも通りの流れで、沈んだ千歌の気持ちを焚きつけようとしていたのだろうか。

正直、今回ばかりは掛ける言葉を間違えたとしか陸も言いようがない。

挫折を知った。

気付かなかった、ダイヤや鞠莉の思いを知った。

自分の未熟さを嫌になるほどに痛感した。

そんな千歌に、辞めるか辞めないかの問いは、あまりに二者択一過ぎたのだ。

幼馴染の陸と曜だからこそ知っている。

千歌は小さい頃からずっと、何かに一心不乱に打ち込んだことがない。

だからこそ千歌は、今回の様に敗北をする事、それから立ち直る事。ましてや勝つ事にも慣れていないのだ。

曜があの場合で今後の決断を迫ったのは、ある意味千歌の心からただでさえなかつた余裕を奪い去る事だったのかもしれない。

「……………酷いなあ……………私……………」

率直に言ってしまったえば、曜は千歌から答えをもらう事に焦り過ぎた。

だが……………

「……………悪くねえよ。お前は……………」

普段の千歌なら、少なくとも返答をしない、なんて事はありえない。

空元気で無理にポジティブに振舞うのも、いつもの千歌らしからぬ行動だ。

けど、付き合い始めてせいぜいが数か月程度の他のAqoursメンバーが、そこま

で千歌の心の機微に敏感な訳がない。

それに気付くことが出来、なおかつあの状態の千歌の心に踏み込むことが出来るのは、陸と曜だけだった。

本来ならばA q u o r sメンバーである曜ではなく、一応はマネージャーという立場にいる陸が、言い方は悪いがその憎まれ役を買って出るべきだったのに。

この期に及んでまだ、陸はこの関係が崩れる事を恐れている。

だから曜にこんな重荷を背負わせてしまったのは、陸の責任だ。

「……………俺なんか、何にもできなかつたんだからよ……………」
「……………陸……………」

曜が不安そうに埋めていた顔を上げ、陸の顔を覗き込もうとしてくる。

今の自分の心情を悟られない様にと、陸はペダルを漕ぐ足に更に力を籠めた。

すでに夜は更けているが、曇っているので空模様は暗い。

帰った後も眠ることが出来ず、ふらふらと海沿いの道を歩く陸。

無意識のうちに、千歌の家の前で足を止めていた。

「……………」

鮮明に、昨日の千歌の顔が頭に浮かび上がる。

あんなに辛そうな千歌の顔を、未だかつて見たことがあつただろうか。

励ますべきだった。何か声を掛けるべきだった。

最悪嫌われてでも前を向かせるべきだった。

だつてもう、関わらないつもりだったから、A q o u r s とは。

自分と一緒にいない事が、彼女達にとっての幸せだつたはずだから。

なのに、何故。

陸は今ここで、未練がましく足を止めているのだ。

〈……………陸…………〉

ゼロの声が、海の波の音と共に耳朶に触れる。

〈…………少し休め。気負い過ぎだ。もう二日も寝てねーんだぞお前〉

ゼロに言われ、思えばこの二日間、不眠不休で何かしらに思考を巡らせていた事に気

付いた陸。

「……大丈夫だよ。お前のおかげで寝ないどころか、飲まず食わずでも生きていけるんだから」

〈そう言う話をしてるんじゃないやねえっ!!〉

初めて陸に対し声を荒げたゼロに、驚く陸。

〈どうして全てを一人で抱え込もうとする? どうして全ての責任が自分にある様に考える? ……何故…、俺を責めない…〉

「………ゼロ……?」

〈………関係のないお前を戦いに巻き込んだのは俺だ。お前は自分といるから A q o u r s の連中が危険な目に遭っていると思っっているようだが、元はと言えば俺が原因だ。俺がお前と一体化していなければ、こんな事にはなっていなかったはずだ〉

「………」

〈それだけじゃねえ。俺がアナザークライシスを防げていれば。俺が六年前の怪獣災害に気付けていれば。俺がダークネスファイブの消息を掴めていれば。今こうしてリトルスター騒動が巻き起こる事も、千歌達に危険が及ぶ事をなかつたはずなんだ……〉

怒涛の勢いで言い募るゼロ。

確かに、それらのどれか一つでも叶っていたのなら、今こうして戦う事もなかったのかもしれない。

けど、

「……今更たればを言っても仕方ないだろ」

過ぎた事をいくら悔やんでも、今この瞬間がどうにかなる訳ではない。

「お前こそ一人で抱え込もうとするなよ。アナザークライシスも怪獣災害もダークネスファイブも、全部が全部お前の責任って訳じゃないだろ」

〈それは……、そうだが……〉

「変わるべきは俺だ」

だからこそ、今この瞬間に変えられることをやるべきなんだ。

「まずは、俺がA q o u r sから離れ——」

〈でもな陸〉

それを実行に移す覚悟を固めようとしたところで、それを制するようにゼロが言葉を発する。

〈だからといって、A q o u r sから離れていい訳じゃねえ。まだ守れるんだ。お前は〉
「何言って……?」

ゼロの言葉の意味を理解できないでいると、ふと海岸の方に、二人の少女の姿が見えた。

それは千歌と梨子だった。

千歌は海に浸かり、梨子は砂浜に立ち、何やら千歌と会話をしている。

「それで？ 何か見えたの？」

「ううん……、何も」

「何も？」

「うん……」。何も見えなかった」

「そっか……」

ゼロとの一体化で強化された陸の聴覚に、二人の声が滑り込む。

「でもね、だから思った。続けなきゃって。私、まだ何も見えてないんだって。先にあるものが何なのか、このまま続けても……0になるのか、それとも1になるのか、10になるのか……」

千歌のすくった海水が、その手から零れ落ちていく。

「ここで辞めたら、全部分からないままだって」

千歌は、笑っていた。いつもの様に。

「千歌ちゃん……」

「だから私は続けるよ、スクールアイドル。だってまだ0だもん！」

だが徐々に、表情が暗いものに変わっていく。

「0だもん。……0なんだよ。あれだけ皆で練習して、歌を作って、衣装も作っ

てPVも作って、頑張って頑張って……！ 皆にいい歌聞いて欲しいって……！
スクールアイドルとして輝きたいって……」

千歌が、抑えきれなくなつた感情と共に海底を踏みつけた。目を伏せ、頭に腕を寄せ、
何度も何度も海底を蹴る。

「っ……！！……なのに0だったんだよ!? 悔しいじゃん!!」

悔しい。

千歌は曜にそれを聞かれた際、悔しいとは口にしなかつたが、そう思っていた事は分
かつていた。

「差がすごいあるとか！ 昔とは違うとかそんなのどうでもいい!! ……悔しい……
やっぱり悔しいんだよ……」

けど、何故それを今になって吐露しただしたかは、陸には分からない。

ずっと思つた事は正直に表現する奴、そう思つてたから。
だからこそ、今は千歌の事が分からない。

「よかつた……。やつと……、素直になつたね……」

「だって私が泣いたら、皆落ち込むでしょ……？ せつかく皆スクールアイドルやつて
くれたのに……」

海に入った梨子に背後から抱きしめられ、隠すことなく本音を曝け出す千歌。

きつと過去に挫折を味わっている梨子にだからこそ、千歌は今こうして素直になっ
ているのだろう。

あの場で千歌が悔しいと口にしなかったのは、自分がそれを言う事で、リーダーが
弱々しい事を言う事で、これ以上の険悪ムードになるのを防ごうとしたから。

・・・そんな事にも気が付かなかった。

「馬鹿ね。皆千歌ちゃんの為にスクールアイドルやってるんじゃないの。自分でそうす
るって決めたんだから」

「えっ・・・？」

「私も、曜ちゃんもルビィちゃんも花丸ちゃんも、勿論、善子ちゃんも」

梨子が視線を向ける先、そこには、

「おーいー！」

いつの間にか集合していた、Aqoursのメンバーが。

「でもっ・・・」

「だからいいの。千歌ちゃんは、感じた事を素直にぶつけて、声に出して？」

皆が千歌の元に駆け寄り、梨子の言葉に同調するように笑いかける。

「千歌ちゃん！」

昨晩はあれほど沈んでいた、曜すらも笑顔だった。

「皆で一緒に歩こう。一緒に……………」

「うっ……………！ あああ……………！ ああああああんっ！！」

遂に千歌は、大声を上げて泣き始めた。

「今から、0を100にするのは無理だと思う。でも、もしかしたら1にする事は出来るかも。私も知りたいの、それが出来るか」

「……………！ うんっ！」

雲の切れ間から顔を覗かせた太陽が、新たなスタートを切ったAqoursを祝福するように照らす。

「……………」

Aqoursは、自分達で立ち直った。進むべき道を見つけた。

仲間に気を遣い、一人ひそかに悩んでいた千歌を支え、ため込んでいた感情を吐き出させる程、温かく寄り添った。

千歌だって、初めて味わった大きな挫折を、Aqoursのリーダーとして乗り切った。

……………じゃあ、陸は何をした？

「……………なんだ」

戦いに巻き込み、危険な目に遭わせただけ。

ただ、それだけだ。

未だかつて、何か直接 A q o u r s の役に立ったことは、一度もない。

「……………いらねえじゃん……………、俺……………」

あまりの眩しさに見えていられなくなり、陸は六人に背を向ける。

だから、気付かなかった。

太陽に照らされた千歌の胸が、微かに光を帯びた事に。

三十三話 閉ざされた過去

『そうか……、ご苦労だった』

M78星雲。光の国。

デザストロの討伐を終えたグレンファイヤー等ウルティメイトフォースゼロは、その報告に光の国にある宇宙警備隊本部へと飛来していた。

ウルティメイトフォースゼロの周りでは、先程からひっきりなしに大勢のウルトラマンが往来している。

『やけに忙しそうですね……』

『皆ギルバリスの残存部隊への対処で忙しいのだよ。ギンガやオーブにも手を貸してもらっているぐらいだ』

ギルバリスの残存部隊の兵力は、今も正義を暴走させ続けているらしい。

『……それで……、ゼロの方はどうなのですか……？』

『丁度今ゼロからのウルトラサインが届いたところだ』

宇宙警備隊長であるゾフィーはミラーナイトの問いに対して、空に光る文字を指さした。

グレンファイヤーはそれを見て首を傾げている。

『ああん？　なんて書いてあるんだよ？』

『地球にて……、ダークネスファイブと接触したとの事だ』

『なっ……』

厳かにゾフィーが告げ、驚きを隠せないウルティメイトフォースゼロの四人。

『……アナザークライシスが起こり、リトルスターの発現も観測された。そしてダークネスファイブ……奴の息がかかっている事は間違いないだろう』

『まさか……』

『おいおい……、嘘だろ？　だってあいつはジークが……』

『グレン。ジードだ。ウルトラマンジード』

『ああそうそうジード。あいつはジードが倒したんじゃないのかよ!?!』

『……奴の事だ。復活してようと何の不思議もない』

『そうだけど……よお……』

ジャンナインの言葉に、グレンが押し黙る。

グレンだけではない。かつて復活したその存在に惨殺されたミラーナイト、ジャン

ボット、言葉を発したジャンナインまでもが、思わず身震いをしていた。
『……ああ、恐らくだがあの地球には——』

かつてとある事件が起こったプラスマスパークタワーを見据えながら、ゾフィーは重々しく口を開いた。

『——ベリアルがいる』

「オオウラアツ!!」

この日も、早朝からゼロと怪獣の戦闘が繰り広げられていた。

『○△□——!』

否、今日の相手は怪獣ではなくロボットだ。

宇宙ロボットキングジョー。ペダン星人が開発したスーパーロボットだとゼロは言っていた。

「ぐ…………お…………」

『○△□……………』

ゼロとキングジョーは、互いに両腕を掴みあつたまま硬直状態になっている。純粹な力比べ。スーパーロボットと言うだけあつて流石に力は強い。

「オウラア！」

ゼロが掴みあつたまま無防備な胸部を足の裏で蹴り飛ばし、同時に腕にもめいっばいの力を込めてキングジョーを押し返す。

後退したところを、更にパンチで畳みかけるが、

「っ!? 何っ!?」

その攻撃は空を切った。先程までキングジョーの胴があつた場所には、もう何者もない。

『キングジョーは身体を分離して宇宙船になれる。気を付けろ! 分離は攻撃の合図だ!』

ゼロの周囲に、頭、胸、腹、足の四つに分裂したキングジョーが浮遊している。さながらUFOのようである。

『○△□———ッ!』

頭部の目の様な部分から放たれた光線、デスト・レイがゼロ目掛けて放たれた。

「ハアッ！」

ゼロは跳躍してそれをかわし、頭部目掛けてゼロスラッガーを投げつけるが、頭部を守る様に移動してきた足のパーツに阻まれてしまう。

『ッ！ 後ろだ！』

「がああああッ！！」

がら空きになった背中に胸部の体当たりがクリーンヒットし、ゼロが海へと叩き込まれる。

キングジョーは合体して元に戻ると、再びデスト・レイを発射してきた。

「うおおおおおっ!?!」

次々と殺到する破壊光線を、ゼロは右に左に転がり、時にジャンプし、時にのけ反りながら器用に回避していく。

「だらあッ！！」

『ッ！』

隙を見てキングジョーの足元に接近し、膝裏を蹴飛ばして転倒させる。

続いてゼロはキングジョーに対してマウントポジションを取ると、そのボディにゼロスラッガーで切りかかるが、あまりの装甲の固さに刃が通らない。

『○○△□——ッ！』

「あつ……！……！……！……！……！……！……！……！……！……！」

至近距離でデスト・レイが直撃し、そのままゼロを空中に押し上げる。

さらにキングジョーは分裂してフォーメーションを取り、ゼロを囲むと電撃のネットでゼロを拘束した。

「ぐう……！……！……！」

痺れながら船の停泊所に落下すると、今度は先程とは逆にキングジョーがゼロにマウントポジションを取り、停まっていた漁船を振り回して攻撃してくる。

「いい加減に……！……！……！……！……！……！」

刹那ゼロのカラータイマーが碧く煌き、発生した衝撃波がキングジョーを吹き飛ばした。

「ハア！！」

高速で繰り出されたゼロの張り手は、惜しくもキングジョーが分裂したことによってヒットすることはなかったが、そんなキングジョーのパーツを取り囲む無数の光の刃が。

「ミラクルゼロスラッガー」

光の刃は四基のUFOの周りを三百六十度回転し、軌跡によって生まれた球状の光がキングジョーを閉じ込めた。

光の球体は徐々に縮小してゆき、四基のUFOが咄嗟に後ろに下がる。

下がった先で他のUFOと衝突し、硬質なボディ同士がぶつかった事で各機ともベコリと大きな陥没が出来上がる。

そんな状態で合体したキンググジョーは、手足をピタリと身体につけた状態で硬直し、地に降りると仰向けに倒れて火花を散らし出した。

恐らく身体がひしゃげた事で、その部位にあった精密機械がショートを起こしたのだろう。

「ワイドゼロショットツ！」

そんなキンググジョーをワイドゼロショットが貫き、早朝の内浦に派手な爆発音を轟かせた。

オウガは笑っていた。

「ふふっ……」

ゼロが消えた後、爆散したキングジョーの破片から出た光が、オウガの持つ黒いカプセルに吸い込まれていく。

光の吸収が終わると、そのカプセルにはキングジョーの絵が映し出された。キングジョーカプセルの完成である。

「……………これで……………」

オウガは、懐からもう一つのカプセルを取り出す。

そのカプセルには、以前ゼロに倒されたゼットン姿が描かれていた。

「……………お楽しみはこれからさ。陸君、ゼロ君。君たちにはもつと強くなってもらわないと困るんだ」

「いてて……………」

ゼロへの変身を解除した陸は、家でいつもよりも痛む傷口に包帯を巻いていた。

へしっかし……、なんでお前いきなり自分で戦いたいなんて……」

今日戦っていたのはゼロではなく、ゼロの身体で人格を表に出した陸だ。

多少はゼロの見様見真似と条件反射で対処できるが、それ以外はゼロとの経験の差がハッキリ出てしまっていた。

「……、なんかずつとお前に戦ってもらうのもどうかと思つてさ」

へ……別に前が気にする事じゃねーだろ。あんな危なっかしい戦い方こつちがひやひやするんだよ。前が表に出てる俺が戦つてる時よりダメージが大きいんだぞ？」

「あはは……、やつぱり……？」

通りでいつもより痛むはずだと、陸は傷口を押さえる。

「やつぱ向いてないのかね……、こういうの……」

へな訳あるか。初陣でキングジョーを破る奴なんかそうはいねえ。誇つていい」

「ははっ……、どうも……」

陸が今回戦おうと思つた本当の理由から考えれば、こんな事で誇つていられないのだが。

間違はなく、ダークネスファイブは、キングジョーよりも遥かに強い。

いざ戦う時に表に出るのはゼロだろうが、陸だって何もしい訳にはいかなかった。いざとなつたら、自分も戦えるように。

これが千歌達を巻き込んだ自分が、やるべきことだと思うから。

「もう千歌の家に行かないとマズいんじゃないのか？ 今日もあんだろ？ 練習」

「だな。そろそろ曜も来るだろうし……」

傷口の痛みを無視し、陸は少し重く感じる腰を上げた。

千歌達はあの後も、前と変わらず練習を続けている。むしろ前よりもやる気に満ちていると言つていいくらいだ。

「なあ、ゼロ……」

「ん？」

「一緒にいいいなだよな。俺……」

少しの沈黙の後、

「当たり前だろ。あいつ等を守つてやれるのは俺達だけなんだからな」

「……だよな」

その事にどこかほつとしている自分がある。陸がそれに気付くのと同時に、チャイムが鳴った。恐らく曜だ。

「珍しいな。アイツいつもは留守かどうかも関係無しに鍵開けて上がり込んでくるのに」

「……」

ちよつと違和感を覚えつつも玄関のドアを開けると、やはりそこには曜がいた。陸が出てきたのを見ると、安堵したように息をつく。

「……どした？」

「ううん。何でもない。さつ、早く千歌ちゃん家行こ！」

すぐにいつも様な明るい笑みに戻ると、陸の代わりに自転車を出してくる曜。

「……?」

それを見て、陸の違和感は更に強くなった。

十千万のロビーにて。

「夏祭り！」

「屋台も出るぞら？」

「これは……痕跡? 微かに残っている……、気配」

夏祭りと言う単語にはしゃぐルビイ。

のっぽパンを口にくわえながらしゃべる花丸。

椅子に頬擦りし、墮天モード全開中の善子。

そんな善子に、ルビイの眉が下がる。

「どうしよう……。東京に行つてからすつかり元に戻っちゃつて」

「ほつとくずら……。」

「それよりしいたけちゃん。本当に散歩でいないわよね……。」

ついさつきまで怪獣が出ていたというのに、梨子にとっては怪獣よりしいたけの方が恐ろしいらしい。

「千歌ちゃんは夏祭りどうするの?」

受付で突つ伏す千歌に、曜が問いかける。

実は、東京に行つてからと言うものAqoursは地元ではちよつとした有名人になり、今度行われる花火大会から出演のオファーが来ているのだ。

「そーだね……。決めないとねえ……。」

「沼津の花火大会つて言つたら、ここら辺じゃ一番のイベントだよ。そこからオファーが来てるんでしょ?」

沼津の花火大会はかなり規模の大きいイベントなので、県外からの来場者も多く、テ

レビ中継も入る。

よつて、A q o u r s の名前を広めるチャンスではあるのだが……。

如何せん、今からではライブの練習時間がない。

「私は……、今は練習を優先した方がいいと思うけど」

「陸はどう思う？」

「……俺が決める事じゃねーし」

「ていうか陸先輩。その包帯は何ずら？ また何かやんちやしたずらか？」

「いい加減慣れる花丸。俺が怪我してるのはいつもの事だろうが」

「堂々と開き直ったわねこの男」

善子にはジト目を向けられたが、バレる訳にもいかないので開き直らせてもらう。

「千歌ちゃんは？」

「うんっ！ 私は出たいかな！」

柱から半分顔を出し、六人に笑いかける千歌。

「今の私達の全力を見てもらう。それで駄目だったら、また頑張る！ それを繰り返す

しかないんじゃないかな？」

「ヨーソロー♪ 賛成であります！」

「ギラン！」

賛成の意志を表明するA q o u r s 一同。

「変わったよね。千歌ちゃん」

「……うん」

「……んあ？」

陸は千歌が皆に背を向け、柱に寄りかかっている事に気が付いた。

「どした？」

「……いや、果南ちゃん、どうしてスクールアイドル辞めちやっただろう」

話題は、ダイヤとの話の中に出てきた果南についてだった。

「生徒会長が言ってたでしょ？ 東京のイベントで歌えなかったからだって」

「でも、それで辞めちゃう性格じゃないと思う」

「確かに、果南姉ちゃんに限ってな……」

果南は一度や二度の失敗で諦める様な人ではない。それは小さい頃から一緒にいる千歌や曜、そして陸は断言できる。

前にダイヤが鞠莉に言っていた事も気になる。

——逃げてる訳ではありませんわ。わたくしも、果南さんも。

逃げている訳ではない。

この言葉を聞く限り、果南がスクールアイドルを辞めたのは、単純にイベントでの失

敗だけが原因ではなさそうだ。

「……ん？」

ふとここで、一年生三名から不思議な視線を向けられている事に気付いた陸。

「……どうした？」

「果南……姉ちゃん……？」

首を傾げたルビイを見て、陸はそういえば一年生ズには果南を姉ちゃんと呼んでいる事を話していなかった事を思い出す。

「先輩……、意外と……」

「ふっ……、可愛い所あるじゃないの」

「……勝手にしろ。反論すんの怠い」

この後しばらく馬鹿にされた。

「……………つて」

「そんな事が……………」

海を眺めながら、千歌は昔ここであつた事を梨子たちに話した。

まだ自分達が小さい時。……………スカルゴモラが内浦に現れるよりも前の話だ。

当時の千歌には高かつたであろう桟橋から、果南は平気な顔をして海に飛び込んだ。

それを見て更に怯えた千歌を、果南は辞めたら後悔する、絶対できるから当の言葉で

励まし続け、千歌はようやく桟橋から海にダイブすることが出来た。

そんな果南が、果たして東京のイベントで歌えなかつたぐらいでへこたれるだろうか。

辞めたら後悔すると思わなかつたのか、次は絶対成功すると思わなかつたのか。

どうにも、果南らしくない。

「とてもそんな風には見えませんか……………あ、すみません」

「まさか、天界の眷属が憑依!?!」

善子の妄言は無視し、千歌、曜、陸の幼馴染三人は顔を見合わせる。

「……………もう少し、スクールアイドルをやっていた頃の事が分かればいいんだけどな」

「聞くまで全然知らなかつたもんね」

きつと聞いても答えてくれなかつただろうが。

小さい頃からずっと陸達を見守ってくれていた果南の事だ。恐らくいらん心配を掛けない様にと黙っていたのだろう。

「まあ、果南姉ちゃんとスクールアイドルやってた人の妹なら、そこにいるけどな………」

陸がそう言うと、全員が一斉にルビイの方を見た。

「ピギイツ!？」

「ルビイちゃん。ダイヤさんから何か聞いてない?」

「小耳にはさんだとか?」

「ずっと一緒に家にいるのよね。何かあるはずよ」

「……う……、うゆ………」

矛先が自分に向いたルビイが、踵を返して砂浜を蹴る。

「あつ! 逃げた」

「善子ちゃん!」

「墮天使奥義……、墮天流鳳凰縛!!」

「ピギヤアアアア!!」

陸の指示で出陣した善子が、墮天流鳳凰縛と言う名のコブラツイストをルビイに極

め、ルビイの捕獲が完了した。後はじっくりことごと問い質すだけだ。

「本当に？」

場所は変わってスクールアイドル部部室。

「…………ルビイが聞いたのは、東京のライブがうまくいかなかったって話ぐらいです。それからスクールアイドルの話はほとんどしなくなっちゃったので…………」

ルビイから得られた情報も、ダイヤの話と同じだった。流石ダイヤだ。確信的な根拠に繋がるような情報は一切漏らしていないらしい。

「ただ…………。逃げた訳じゃないって」

「逃げた訳じゃない……………」

あの時ダイヤと鞠莉の会話に聞き耳を立てていた陸以外は、その言葉を聞くのは初めてらしい。

新たな情報はなし。今分かるのは、果南やダイヤがスクールアイドルを辞めたのは東京のイベントで歌えなかったのだけが原因ではない事。

そして、鞠莉がまだスクールアイドルに執着している事だけ。

三人がスクールアイドルの道を閉ざすことになった真の理由が分からない限り、何かこう、具体的な行動に移すことが出来ない。

(さて……………、どうしたものかね……………)

三十四話 気持ち裏腹

「・・・・・・・・全員で来る必要あったか？」

「だって・・・・・・・・皆つ・・・・・・・・、来たいつて言うし・・・・・・・・」

早朝。

千歌の提案で、この日は日課のランニングをしている果南を尾行することになった。

目の前には、気持ちよさそうに走る果南の姿が。

「ま、まるつ・・・・・・・・、もうダメずら・・・・・・・・」

「ル・・・・・・・・、ルビイも・・・・・・・・」

「ヨハネ・・・・・・・・、昇天・・・・・・・・」

「つ・・・・・・・・、つ・・・・・・・・、つ・・・・・・・・」

死にかけている花丸、ルビイ、善子、梨子とは大違いだ。全員顔から血の気が引いており、梨子に至ってはしゃべる余裕すらもない様だ。

「・・・・・・・・こいつ等連れてきたの失敗だったな・・・・・・・・」

ゼロと一体化して体力のパラメータがカンストしている陸、この場だと陸に次いで体

力のある曜。そして言い出しつぺの千歌がいるのは分かるが、さして体力もない上に果南とそれほど関わりのないこの四人が何故ついてきたのか。

正直言つて完全に足手まといである。

「陸先輩くくくくく」

「却下だ」

懇願する花丸を突き放し、陸は少し離れた所で走る果南に再び目を向けた。

もう既にかなりの距離を走っているが、息切れしている様子は全く見受けられない。

「相変わらず化け物みてーな体力してるな、それにめっちゃはえーし」

「陸が言う……?」

「……でも、何か気持ちよさそうだね……」

「……まあ、な」

千歌の言う通り、走る果南の顔はとても輝いて見える。

小さい頃からずっと、果南が陸達に向ける顔はずっとあんな感じの曇り一つない笑顔だった。

(……姉ちゃん)

ダイヤの話によれば、鞠莉にグループの解散を提案したのは果南なのだそうだ。

留学を控えていた鞠莉がそう言うのなら分かるが、鞠莉はむしろまだスクールアイドル

ルでいようとしていたらしい。

その反対を果南は押し切り、スクールアイドルの道から離れたという。

何故果南が。理由として考えられるのはやはり東京のイベントで歌えなかった事だが、前に千歌言っていた様にそんな事で辞めてしまう果南ではない。

果南は裏表のない人だと思っていたし、陸が最も信頼を置いている人物の一人なのでこうして疑うのは心苦しいのだが、今回ばかりは疑いの目で見ざるを得ない。

「……………逃げた訳じゃない……………か」

「で？ いきなり呼び戻して何の用だい？」

「ダークネスファイブが潜む宇宙船。」

「……………あなたの方だった通り、高海千歌から例の光が観測されました」

ゼロに破壊された船体を修復し終わった宇宙船の中で、オウガは自分呼び戻したス

ライの顔を見上げた。

「やつぱり？ さつすがボク。……って事は、そろそろ作戦を実行に移すって事かい？」

『もうしばらくは様子を見ますがね。高海千歌の監視をしろと、地球に滞在しているマグマ星人に伝えておいてください』

「はいはい。……はあ、そんな理由で呼び出されたと思うと悲しいね」

『まあまあ、偉大なる陛下が御復活になられるのです。その礎になれると思えば光栄でしょう？』

「……まあ、どっちかと言えば楽しみかな？ ボクは彼に会った事はないから。……」

「それで、ボクにその作戦の概要を教えてくださいませんか？」

『物事には役割分担と言うものがあります。あなたは与えられた仕事だけこなしていなさい』

「……」

オウガが少しだけ不愉快そうに眉を顰める。

ダークネスファイブの陣営に就いてからそれなりに経つ。スライに言われた仕事も、自分なりにには忠実にこなしているつもりだ。

だが、スライに限らずダークネスファイブの面々が作戦の詳しい概要をオウガに教え

てくれることはなかった。

仕方なくやっている任務とは言え、ちよつとは楽しめる要素が欲しいものだ。

(「……肝心なところはいつもお茶を濁されちゃうんだよなー。面白くないい) なんて文句をスライに聞かれる訳にもいかないのです、心の内に留めながらオウガは部屋を出る。

そして懐からライザーと、二つの黒いカプセルを取り出した。

「……こんなものもらっちゃったからには、もうしばらくは従ってないとね。あいつ等にペコペコするのはちよつと癪に障るけど」

正直、スライの言う陛下とやらの復活はオウガにとって問題ではない。彼が宇宙を支配しても、誰かに倒されても、どっちになろうがオウガにとっては都合だから。

「……その復活作戦の全貌を教えてもらえないのは、少し不都合だが。」

その陛下が復活すれば、オウガがダークネスファイブに仕える理由もなくなる。そうならさつさとトンズラをこくつもりだ。

彼なら、協力者の自分を殺す事にも躊躇はないだろう。

それではここまで使えてきた意味が無くなる。

「……生きる為にわざわざこんな事しないといけないなんてね。ホント、ウルトラマンジードが羨ましいよ」

オウガはライザーとカプセルを懐にしまうと、誰にも見せた事のない悲し気な表情で呟いた。

「ベリアルの子なのにな、正義の味方として生まれてこれてさ……」

果南を追いかけ続けた陸達は、最終的に弁天島にまで来ていた。

果南の圧倒的な体力を前に、A q o u r s は一人残らず撃沈。果南にバレない様にと隠れた茂みの中で全員へたり込んでしまっている。

「えっ……?」

そんな六人を一瞥し、果南の方を向いた陸は、思わず目を見開く。

「~~~~♪」

果南は、踊っていた。

陸達には一度も見せた事のない華麗なダンスを、本当にいい笑顔で踊っている。

「綺麗………」

千歌もそれに気付いたらしく、何の飾り気もない素直な感想を紡いでいた。

陸の感想も綺麗の一言だ。果南の踊るバレエの様な舞は、シンプルながらも精錬された美しさを感じる。

とても、失敗が原因でスクールアイドルを辞めた人間の踊りとは思えない。

その割には、鍛錬されすぎているのだ。

「ふふ………」

そんな果南に、微笑みと共に拍手を送る人影が一つ。

「復学届、提出したのね」

それは浦の星女学院理事長兼生徒の、小原鞠莉だった。

どうやら鞠莉も、陸達同様果南を尾行、と言うよりは、待ち伏せしていたらしい。

鞠莉が姿を見せた瞬間、果南は踊るのを辞めて露骨に眉を寄せた。

「まあね」

「やっつと逃げるのを辞めた？」

「勘違いしないで、休んでたのは父さんの怪我が元で、それに復学してもスクールアイドルはやらない」

険悪な雰囲気か漂う中で、鞠莉はなおも余裕の表情を保っている。

「私の知ってる果南は、どんな失敗をしても、笑顔で次に向かつて走り出していた。成功するまで諦めなかった」

立ち去ろうとする果南を引き留める様に、鞠莉は言葉を連ねていく。

そんな鞠莉に対して、果南は足を止めて振り返った。

「卒業まで、あと一年もないんだよ？」

「一年あれば十分。それに、今は後輩たちもいる」

鞠莉の言葉に、隠れていた陸とAqours一行がビクンと肩を震わせる。

(………隠れてるのバレてる……?)

へいや。二人もこっちに一度も視線を向けていない。単純に果南をスクールアイドルに勧誘するための売り文句だろ。Aqoursには千歌も曜もいるしな

とりあえず尾行がバレなかった事に安堵し、ほうつと安堵の息をつく陸。

「だったら、千歌達に任せればいい」

「果南……」

頑なに再びスクールアイドルを始める事を拒む果南。何故だかは分からないが、鞠莉に対する果南の態度は、陸が今までに見たことがない程に辛辣だ。

「どうして戻ってきたの？ 私は………戻ってきてほしくなかった……」

「っ……！！」

あまりの物言いに、流石の鞠莉も引きつる。それでも何とか表情を保ち、再度果南に笑いかけた。

「相変わらず、果南は頑固……」

「もうやめて」

鞠莉の言葉を、果南が途中で遮る。

「もう見たくないの。……あなた顔」

「っ……！！」

へなっ……！！

果南が果南とは思えない程に冷たい声音で吐き捨てた。

ゼロが驚きに声を上げ、陸が思わず前へ身を乗り出す。

果南にその言葉を吐かれた鞠莉の表情が、苦しそうに崩れたからではない。

陸とゼロの視線の先は、果南の胸。

自分で鞠莉を突き放しておいて少し悲しそうな顔をする果南の胸は、強く光り輝いていた。

そしてその刹那だった。

『ハアアアアアッ！！』

突如現れた右手に巨大なサーベルを装備した黒い影が、果南目掛けてそのサーベルを振り下ろしたのは。

「えっ……?」

『ぐっ……!』

咄嗟に人格を入れ替えたゼロが迎撃をしようと飛び出るが、間に合わない。

「果南ッ!!」

そしてそのサーベルが果南を貫こうとした瞬間、

『がはあっ!!』

果南とは別方向で何かが煌いた後、X字の炎がその影、マグマ星人を直撃したのだ。

炎に包み込まれたマグマ星人は、かつてゼロがやったように地面を転がって火を消化しようとしている。

『ッ!? 何?!』

炎が飛んできた方に目をやると、果南同様に胸を光らせた鞠莉が。

『ぐ……、貴様もか……』

マグマ星人は身体に纏わりついた炎を振り払い、今度はそのサーベルを鞠莉に向けて地面を蹴った。

『ならば貴様から——』

『オオウラア!!』

『がびっ………!!』

ゼロが弾丸の如し速度で繰り出した蹴りが、マグマ星人の顔面を捉える。

「陸っ!？」

突然の陸の登場に驚く果南の前でゼロは足を振り抜く。

するとマグマ星人は砕けた鉄のマスクを辺りに撒き散らしながら吹き飛び、派手な音を立てて大木に激突した。

鉄が砕けるほどの衝撃、マスクがなければ顔面がどんな悲惨な状態になっていただろうか。

『っ………、クソッ……!』

よほど素顔を見られたくないのか、マグマ星人はサーベルのない方の手で顔面を覆いながら森の中に消えていった。

『つたく……。またあいつかよ……』

マグマ星人が消えていった方に唾を吐き捨てると、果南と鞠莉の方を向いて陸に人格を戻す。

鞠莉は今も光っている胸に目もくれる事もなく、心配そうに果南の元へと駆け寄っていた。

「果南っ……………」

「っ……………、来ないで！」

だが果南は鞠莉の腕を振り払うと、そのまま走り去って行ってしまった。

ひどく歪む鞠莉の顔は、あまりにも不憫で見えられない。

「……………陸。ありがとね」

それだけ言い残した果南の胸の光は、一層輝きを増していた。

そのお礼が、果南を助けた事に対するものではない事を、陸はまだ知らない。

果南が立ち去り、鞠莉ももう行っていいよとの事だったので、陸達は弁天島を後にした。

よもやあんな光景を目撃してしまうとは。

「ひどい……」

「可哀想すら……」

——もう見たくないの。あなたの顔。

そう言い放った後、果南はどうして陸がここにいたのかも聞かずに立ち去ってしまった。

鞠莉と一緒にいるのを避ける様に。

A q o u r s の話題はそれで持ち切りだ。

「……何であんなところに宇宙人がいたんだろう」

そう言って曜は、電柱に凭れ掛かって考え込む陸に視線を向けた。

A q o u r s 六人はゼロが飛び出す直前に後ろに下げたので、果南と鞠莉のリトルスターの事は知らない。

それでも二人の会話は聞こえていたらしい。

(……何であんなに早く宇宙人が出てきたんだ……?)

〈分前から。前々から果南のリトルスターに感じていたか、あるいはたまたまあそこ
にいたか……〉

(どっちにしろ、対策しないといけないよな。……二人分)

今回は一人じゃない。果南と鞠莉、この二人が同時にリトルスターを発現している。

〈まあ、果南が復学するのは幸いだったな。学校にいる間は俺が監視できる〉
(ああ、頼む)

学校にいる間に連中が襲いかかってきた事はないので、そこまでの心配はしなくていいだろうが念の為だ。

それにしても……、

(……なあぜロ。リトルスターは、宿主の感情に呼応するんだよな？ 守りたい、自分自身のままでいたいとか)

〈……そうだが……、今更どうした？〉

(……そうなら、姉ちゃんのリトルスターは何で発現したのかと思つてな)

梨子はピアノ。ルビィはスクールアイドル。善子は墮天使ヨハネ。花丸は無尽蔵の優しき。鞠莉のリトルスターも、果南を思いやる気持ち故だったのだろう。

各人とも、それぞれの思いが形になって発現していた。

だったら、果南のリトルスターは何なのか。

〈単純に、鞠莉と関わりたくないからじゃないのか？〉

(そうは……、思えないんだよな……)

鞠莉に向かって顔を見たくないといった時の果南の表情は、そう言われた鞠莉と同じくらいに悲しげだった。

とてもそれが本心からの言葉だったとは思えない。

(……姉ちゃん。昔から滅茶苦茶優しくてさ。人が傷つく様な事は絶対に言わない人だったから)

果たしてそんな果南が、顔も見たくなくなる程に友人を嫌うだろうか。仮にそうだったとしてもそれをわざわざ口にするだろうか。

それにダイヤの鞠莉へ対する態度も気になる。

果南ほど辛辣な態度はとっていないなかったものの、他の人に比べると厳しく接している事には変わりはない。

へ……っ……つ……こた。歌えなかったこと以外にも理由があるのは間違いなさそうだな

「果南ちゃんか？」

「うん。今日から、学校に来るって」

「それで、鞠莉さんは？」

「まだ……、分からないけど……」

教室のベランダで話していた千歌、曜、梨子の二年生三人が、不安げな表情で一つ上の階にある三年生の教室の方を見上げた。

果南は今日から復学するとの話だ。鞠莉と果南のあんな会話を聞いてしまった手前、どうしても不安になってしまう三人。

へまた喧嘩してんのかね……。流石に学校来てまで言い争う程子供じゃないとは思うが……。<

今日は梨子に憑依したゼロも、それは同じだった。

本当なら三年生の誰かに憑依できれば良かったのだが、前回善子のリトルスターに身体から追い出された事もあるので、今回は少し距離を置いての監視だ。

この状態でも上の階の会話ぐらいは聞こえる。何かあったなら、上にいる誰かに乗り移って戦うつもりだ。

へ……。って、それはウルトラマンとして如何なるものなんだ……。<

これではやっている事が悪質な宇宙人と大差ないじゃないかと、ゼロが葛藤に苛まれたその瞬間、

「……ん？」

上の階から、舞うように一枚の布が落ちてきた。

「くんくん………」

何を思ったか、曜がひくひくと鼻を動かしながら前へのめり出していき、

「制服う!!」

「だめえっ!」

『ツ! オイツ!!』

あろうことかその布をキャッチすべくベランダからダイブしようとしたのだ。

ゼロはもう四の五の言ってられないと梨子の身体の主導権を握り、落下するギリギリのところまで曜を抱える事に成功した。もう少し遅ければ地面に向かって真つ逆さまだったろう。

こんな事で曜に怪我をされては、陸に何を言われるか分かったものではない。

『あつぶね……』

曜をベランダに戻すと、梨子の身体のまま男らしく額の汗を拭う。普段はおしとやかな梨子がやっている思うとギャップがすごい。

「……梨子ちゃん……、そんな低い声出るんだ……」

曜の奇行と梨子の豹変で混乱している千歌を一瞥し、梨子に支配権を戻す。

「・・・わ、分かんない・・・、身体が勝手に・・・」

千歌同様混乱する梨子。そんな二人を尻目に、曜は掴み取った布をまじまじと見つめていた。

「これって・・・、スクールアイドルの・・・」

曜がキヤツチしたのは、スクールアイドルの衣装らしきものだった。

これが一体何なのか、持ち主は誰なのか、そもそも上で何が起こっているのか、それを確かめるべく三年生の階に上がった千歌達の目に映ったのは、教室の出入り口付近に群がる大勢の生徒。

その中には本来このフロアにはいないルビイ達一年生の姿もある。

「放して！ 放せて言ってるの！」

「いいと言うまで放さない！」

そして教室の中から聞こえる言い争いの声。

人混みを掻き分けて進むと、鞠莉が果南にしがみつき、果南がそれを引き剥がそうと
しているという子供の喧嘩の様な光景があった。

〈案の定かよ……〉

高校生にもなつて掴み合いの喧嘩をする姉の姿を見たら、陸はどんな顔をするだろう
か。

「強情も大概にしておきなさい！ たった一度失敗したくらいでいつまでもネガティブ
に！」

「うるさい！ いつまでもはどつち！ もう二年前の話だよ！ 大体今更スクールアイ
ドルなんて！ 私達もう三年生なんだよ!？」

呆然するギャラリーの視線を浴びながら、果南が荒げた声を教室に響かせる。状況が
昨日よりも悪化しているのは言うまでもない。

「二人ともおやめなさい！ 皆見てますわよ！」

そんな二人を諫めるダイヤ。

「ダイヤもそう思うでしょ？」

「お辞めなさい！ いくら粘つても果南さんが再びスクールアイドルを始める事はあり
ません！」

「どうやらダイヤは果南の味方らしい。

「どうして！ あの時の失敗をそんなに引きずる事!? ちかつち達だつて再スタートを切ろうとしてるのに何で!？」

「千歌達とは違うの!」

「あーあー……。リトルスターが……」

掴みあう果南と鞠莉の胸は、弁天島の時よりも強く輝いていた。今は白熱する口論に皆の注意が向いているので気付かれてはいないが、それも時間の問題だろう。

「仕方ない……。やっぱり俺が……」

ゼロが再び梨子の身体を借りて二人に説教でもかまそうとしたその時、不意に千歌が教室の中に入って行つた。

「千歌……?」

果南達の前に立つた千歌に、自然とギャラリーの視線も集まる。

「千歌……?」

果南、鞠莉、ダイヤの三人に対し。千歌は強く床を踏んで息を吸い込む。

「いい加減に……」

次の瞬間、廊下の窓がガタガタと音を立てて揺れる程の音量で三人を怒鳴りつけた。

「もう！ なんかよく分かんない事をいつまでもずーつと。ずーつと。ずーつと！ 隠

してないでちゃんと話しなさい!!」

「・・・・・・・・千歌には関係——」

「あるよ!!」

「いや・・・・・・・・、ですが・・・」

「ダイヤさんも、鞠莉さんも、果南ちゃんも、三人そろって放課後、部室に来てください」

「いや・・・・・・・・でも・・・」

「いいですね!!」

「は・・・・・・・・、はい・・・・・・・・」

千歌が強引に押し切った後、三人のせいで失われていた静寂がこの場を支配した。

「千歌ちゃん・・・・・・・・、凄い。三年生相手に・・・・・・・・」

「・・・・・・・・あ」

三十五話 明かされた想ひ

『では、この娘を捕らえて来いと』

『ええ』

暗闇の中向き合う、メフィラス星人魔導のスライと、ゼットン星人。

二人の間には、豪華な金髪の少女の姿が映し出されている。

『余計な情報は与えません。貴方は以前、リトルスターを自分のものにした前科がありますからね』

『はっ……』

ゼットン星人が消えていったのを見て、スライは短く息をついた。

『もう一人の方は……、マグマ星人に任せるとしますか。ゼットン星人には任せられません』

「だから！ 東京のイベントで歌えなくって！」

「その話はダイヤさんから聞いた」

放課後。

千歌により強制的に揺れてこられた三年生三人は、長机を隔てて鞠莉陣営と果南陣営に分かれていた。

果南陣営には果南とダイヤ。鞠莉陣営には鞠莉と千歌。

そしてそれを緊張した面持ちで見つめるその他の五人と陸。

「けど、それで諦める果南ちゃんじゃないでしょ？」

「そうそう！ ちかっちの言う通りよ！ だから何度も言ってるのに！」

話し合うという名目で三人を連れてきたはずなのに、実際は三人の口論に千歌が加わっただけだった。

へさつきからずつとこんな調子だ。一向に話が進まん

（全員子供か。この人達高校生だよな？）

同じ質問と同じ回答が寄せては返すだけ。かつてこれほどまでに無駄な時間があつ

ただらうか。

「何か事情があるんだよね？」

千歌の言う通り、歌えなかつた事以外にも理由がある事はもはや明白になっているのに、果南は一向に口を割ろうとしない。

「……………ね？」

「……………そんなもの無いよ。さつきも言った通り、私が歌えなかつただけ」

これの一点張りだ。

腹に一物抱えているとわかっている分、余計にもどかしいのだろう。千歌は頭を抱えて歯齧みをする。

「ああ——！ イライラする——っ!!」

「その気持ち、よおーく分かるよ！ ほんつと腹立つよね！ コイツ！」

鞠莉に至つては果南をコイツ呼ばわりする始末である。

「勝手に鞠莉がイライラしてるだけでしょ？」

自分を指さす鞠莉に噛みつき返す果南。ダイヤも果南の肩をもつてばかりでこちらに有益な情報を一切開示しようとしなない。

異様な強情っぷりを見せつける果南。脳内硬度10のダイヤ。

正直言つてこの二大巨頭を攻め落とせる気がしない。

「でも、この前弁天島で踊ってた様な……」

「っ……」

「ピギイツ！」

その指摘が恥ずかしかったのか、果南が顔を真っ赤に染めて声の主であるルビィを睨んだ。何気に初ダメメージだ。

「おおー、赤くなってるー♪」

「うるさい！」

「やっぱり未練あるんでしょー?」

目ざとく鞠莉が追撃を入れると、果南は勢いよく立ち上がり、今度は鞠莉を睨みつけた。

「うるさい。未練なんてない！ とにかく私は、もう嫌になったの！ スクールアイドルは……、絶対にやらない！」

「おい……、姉ちゃん！」

そう言い残した後部室を出て行った果南を陸が追いかけていき、部室に静寂が訪れる。

A q o u r s が少し不安気に陸が去って行った出入口を見つめた後、全員の一齐に視線がダイヤに向いた。

「ダイヤさん。何か知ってますよね」

「い、いえ……、私は何も……」

明らかに狼狽えたダイヤに、問うた梨子の視線が鋭くなる。

「じゃあどうしてさつき、果南さんの肩を持ったんですか？」

「そ……、それは……。ッ!!」

「あ、逃げた！」

「善子ちゃん！」

「ギラン！」

逃げ出すダイヤに、善子が襲いかかる。

「だから……」

「ぴぎやあああああつ！」

「ヨハネだつてばあつ！」

先日ルビイにも決まった墮天流鳳凰縛が炸裂し、ダイヤは妹と全く同じ悲鳴を上げた。

「果南姉ちゃん!!」

部室を飛び出て、むすつとした顔のまま帰路を進む果南の背中を追いかける。

「ちよつと話を聞いてくれ!」

「.....」

だが果南が振り返る事はない。

それどころか追いかけてきたのが陸だと認識すると走り出してしまった。

「ああもう!」

陸もそれを追って走り出す。

ゼロを八人の所に置いてきたので一体化による身体強化は解除されている。モンスタ―級のスタミナを誇る果南相手にいつまで持つか分からないが、それでもこの足を止める訳には行かない。

果南にはリトルスターが宿っているのだ。今彼女を一人にする事は出来ない。

果南は千歌にとつても曜にとつても、勿論陸にとつても大切な姉なのだ。そんな彼女が傷つく事など、誰も望んでいない。

——そんな決意の元、走る事三十分。

「っ……っ……っ……っ……っ……っ……っ……っ……」

止まる事なく走り続けた二人は、淡島にある果南の家のダイビングショップ付近まで来てしまった。

血の気の引いた顔で息を荒げる陸に対し、果南はまだまだケロッとしている。

(……マジで体力どうなってるんだあの人……)

ゼロがいなければ一介の高校生にすぎない陸だ。当然もう体力なんて底を尽きた。それでも気力と根性で足を動かし続ける。

ここまで陸にさせるのは、偏に果南を思う気持ち故だ。

そんな陸の気持ちが通じたのか信号が赤になり、果南が足を止めた。

「っ……っ……っ……今だっ……」

乳酸の溜まり過ぎで疲れたんだか痛いんだかよく分からない足に力を籠め、信号が青に切り替わる前に果南に追い付こうと速度を上げる。

だが無情にも信号は青に切り替わり、果南の肩に届こうとしていた陸の手は空を切った。

「うっ……、おおおおおおおおっ!!」

火事場の馬鹿力とでも言おうか。余力を全て二の脚に叩き込んで果南に追い付くと、その肩を掴むことに成功した。

「……………頼むからっ……………」

「うるさい！ スクールアイドルはやらない！ 放してっ！」

どうやら陸がスクールアイドルの勧誘をしに来たと思っっているらしい。

勘違いのまま手を払った刹那、リトルスターと同時に果南の身体が七色に光り輝く。

「おおっ!!」

これが果南のリトルスターの能力なのか、発生した衝撃波が陸を軽々と吹き飛ばした。

五メートル程宙を舞った後落下し、それでも勢いを殺しきれずに地面を転がる。

「ちよっ……………！ 陸！ 大丈夫!？」

迷わず陸に駆け寄り果南。自分の身に起きた事は二の次らしい。

倒れる陸を抱き起すと、不安気に顔を覗き込んでくる。

「ああ……………、一応……………、って……………」

顔を上げた陸の目に、前回同様果南に向かってサーベルを振り下ろそうとするマグマ星人の姿が映り込んだ。

睨んだ通り、やはり監視されていたらしい。

「姉ちゃんっ!」

「え?」

疲れも忘れて瞬時に起き上がり、果南を突き飛ばしてサーベルの軌道から逸らす。

が、

「ぎっ……!」

サーベルは陸の右腕を翳め、僅かながらも鮮血が迸った。

「陸っ!」

「チツ……、また貴様か……」

傷を抑えて地を舐める陸を見降ろすマグマ星人。ちやつかりマスクは修復されている。

「……ゼロはいない様だな……。丁度いい。死ね!」

「ダメッ!」

振り下ろされたサーベルの切っ先から庇うように、果南が陸を抱き上げた。

瞬間、再びリトルスターが煌き、七色の光がマグマ星人を直撃する。

「ぐおっ……!」

きりもみ回転をしながら海に落下したマグマ星人が派手に水飛沫を上げ、付近にいた

人々が何か何かとそちらに視線を移す。

『っ……、このっ……』

「おいっ……、何だあれ！」

『ぬう……、ちっ……!!』

視線が集まり始めた事に気が付き、森の中へと駆け込んでいくマグマ星人を野次馬達
が追っていった。

「陸！ 大丈夫!!」

マグマ星人が消えたのを確認すると、青ざめた顔で血が滲む右腕に触れる果南。

「とりあえず手当……。ウチに来て！」

「ちよっ……、姉ちゃん……」

よほど心配なのか、強引に手を取る果南にされるがまま、陸は果南の家へと引きずら
れていった。

陸と果南が飛び出して行つた後、八人は黒澤家へと話し合いの場所を移していた。

「わぎこと!!」

善子の墮天流鳳凰縛が効いたのか、ダイヤはようやく口を割ってくれたのだ。

そんなダイヤの口から告げられた事実。

それは、東京のイベントで果南は歌えなかつたのではなく、わざと歌わなかつたと言
うものだった。

「どうして……」

「まさか……、闇の魔術——わっ……!」

ふざけて水を差す善子を、お前は場違いだと言わんばかりに花丸が一瞬で拘束する。

「……貴方の為ですわ」

「私の……?」

「……覚えていませんか? あの日……、鞠莉さんは怪我をしていたでしょう

?」

へ……なるほど……

再び梨子の身体に憑依したゼロが、納得したように気持ち頷く。

「……そんな……、私は、そんなことして欲しいなんて一言も……」

「あのまま進めていたら、どうなっていたと思うんですの？ 怪我だけでなく、事故になってもおかしくなかった」

咎める様に言葉を連ねるダイヤ。

「……でも……」

「だから……、逃げた訳じゃないって……」

「でも……、その後は？」

「そうだよ。怪我が治ったら、続けてもよかったのに」

「そうよ……」

震える拳を窓に添え、誰の顔も見ずに鞠莉が呟く。

「花火大会に向けて、新しい曲作って……、ダンスも衣装も完ぺきにして……、
なのに……」

どうやら当時の三人にも、A q o u r sと同じように花火大会のオフアールが来ていたらしい。果南とダイヤがどうだったかは知らないが、鞠莉は今の様子からして相当気合を入れていたように見える。

「……心配していたのですわ。貴方、留学や転校の話がある度に、全部断つていたでしょう？」

「そんなの当り前でしょ!!」

突如声を荒げた鞠莉の叫びが、雨の音をかき消して部屋の中に響き渡る。

A q o u r s がそれにビックつく中、ただ一人ダイヤだけが落ち着き払っていた。

「果南さんは、思っていたのですわ。自分達のせいで、鞠莉さんから未来のいろんな可能性が奪われてしまうのではないかと。．．．．．そんな時」

そんな時、鞠莉に再び留学の話が持ち込まれたそうさ。

鞠莉の両親も、先方も、是非彼女を留学させてほしいと言っていたらしい。

もし向こうで卒業できれば、大学の推薦もとれたそうさ。

その誘いを、鞠莉はスクールアイドルを始めたという理由で一蹴した。

偶然それを知ってしまった果南は、密かにダイヤと共にスクールアイドルを辞める決心をしたとの事。

全ては、鞠莉の為に。

——— 姉ちゃん。昔から滅茶苦茶優しくてさ。

∧．．．．．そう言う事か．．．∨

あの時の陸の睨みは間違っていなかった。

鞠莉の事だ。正面から留学の為にスクールアイドルを辞めろと言っても、頑として譲らなかつただろう。

だからこそその氣遣い。

例え嫌われても、決別してしまっても、果南は親友の未来を作ろうとしていたのだ。

〈・・・・・・・・・・ホントに、優しいんだな・・・・・・・・〉

「まさか・・・・・・・・、それで・・・・・・・・。っ・・・・・・・・！」

「どこへ行くんですの！」

部屋を離れようとした鞠莉を、鋭いダイヤの声が制した。

鞠莉は拳を構える。

「ぶん殴る！ そんな事・・・・・・・・、一言も相談せずに・・・・・・・・！」

「お辞めなさい。果南さんは、ずっと貴方の事を見てきたのですよ。・・・・・・・・貴方の

立場も、貴方の気持ちも。・・・・・・・・そして、貴方の将来も。・・・・・・・・誰よりも考えて

いる」

「・・・・・・・・そんなの分からないよ・・・・・・・・。どうして言ってくれなかったの・・・・・・・・？」

「ちゃんと伝えてましたわよ。貴方が気付かなかっただけ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・。ツ・・・・・・・・！」

「鞠莉さっ・・・・・・・・!!」

駆け出した鞠莉を止めようとしたダイヤの動きが、突如止まる。

〈もういいだろ。行かせてやれ〉

「……………え?」

ゼロがダイヤの身体に乗り移り、その動きを止めたのだ。それと同時に論す様にダイヤに語り掛ける。

「……………これ以上。あの二人をすれ違わせちゃ駄目だ。……………そんなの残酷すぎるだろ」

「……………これは……………」

突然の事に困惑するダイヤをよそに、鞠莉は雨の中黒澤家を飛び出して行った。

「ただいま」

「うおおっ!!」

果南の家にて傷の治療を受けていた陸が、突然のゼロの帰還に驚き跳ね上がった。

「ちよつと！ おとなしくして！」

果南が怒り気味に陸を押さえつける。

「深くはないけど、悪化したら大変でしょ。千歌達の事心配させたいの？」

「……ゴメンナサイ」

釈然としないまま謝り、意識をゼロへと向けた。

（いきなり戻つてくんな。心臓に悪い……）

〈ワリイワリイ……。つかその怪我どうした？〉

（……またマグマ星人に襲われてよ。何とか姉ちゃんを守れたけど、ちよつとサーベルが掠つてな）

〈何？ やつぱり監視されてやがったか……〉

（……そっちはどうだった？ なんか収穫あつたか？）

ゼロを八人の元に残した理由は二つ。

一つは八人の安全の為。

もう一つは陸がいない間に何か事実が判明するかもしれないので、その諜報員として。

今ゼロが八人の元を離れたのはいささか不安ではあるが、学校にいる事を考えればそこまで危険はないだろう。

へ……果南がスクールアイドルを辞めた理由が、ようやく判明したへ
 (マジか。俺のいない間に何があった)

へ色々あつてダイヤがようやく口を割つてな。それで——

ゼロによつて過去にあつた本当の事を伝えられた後、陸は消毒を終えた傷口に包帯を巻いてくれている果南を、悲し気に見つめた。

(……そんな事が……)

果南が本当は鞠莉を嫌つていなかった事に安堵しつつも、同時に今まで果南が背負つてきたものの重さに言葉を失う。

へ……お前の信じた姉は、やっぱり優しい奴だったよへ

(……うん……)

「はい、これでよしつ、と」

最後に解けない様に包帯をきつめに絞めると、果南は小さい頃からずっと慣れ親しんできた笑顔を浮かばせて陸の腕から手を離れた。

とてもその笑顔の裏に、ゼロの言つたような過去が隠されていたとは思えない。

親友の未来の為にわざわざ憎まれ役を買つて出る様な果南だ。きつと陸達には悟られまいとしていたのだろう。

そこまで他人に配慮できるところには感服するが、逆に自分の事はどうでもいいよう

な彼女に少し腹も立った。

「……………どしたの？」

「……………いや……………、何でもない……………」

そんな陸の視線に気付いた果南が首を傾げたその時、果南の携帯が鳴った。ピロリと画面に映し出されたのは、小原鞠莉の名前。

「……………鞠莉……………」

果南は少し訝し気に、机に置いたまま画面をタップして届いたメールを開く。

そのメールには、短く『スクールアイドル部の部室に来て』とだけ書かれていた。

「……………どうすんの？」

陸が問うと、果南は部室で見せたようなしなめつ面に戻る。

「……………行かない。どうせまたスクールアイドルになれって——」

「違うと思う」

言葉を途中で遮り、陸は真っ直ぐ果南の目を見据えた。

「……………多分鞠莉さんは、いい加減このすれ違いに終止符を打ちにきたんだよ」

「何言って……………」

「……………姉ちゃん。実は俺、二年前に姉ちゃん達の間で何が起こったか全部知ってる」

陸がそう言うのと、果南は信じられないといった様に眼を見開いた。当然だろう。この

事を知っている者は、本来ならば果南とダイヤだけ。

先程部室を飛び出て言ってしまった果南は、ダイヤがA q o u r sと鞠莉にその事を打ち明けた事を知らない。

ましてや、ゼロを通じてその事を陸が知った事を。

「……………どうやって……………」

「……………その事を詳しくは言えない。でももう皆知ってる。千歌も、曜も、他のA q o u r sの連中も……………勿論鞠莉さんも」

陸も先程知ったばかりの事実を伝えると、果南の瞳に戸惑いの色が滲んだのがハッキリと見えた。

だがそれも束の間。果南はすぐにしかめっ面に戻り、腕組みをして鋭い視線を陸に突き付ける。

「……………陸だって分かるでしょ。これが鞠莉の未来の為だったんだよ。私達が勝手に引き込んだスクールアイドルの為に、鞠莉の将来が奪われるなんて……………、いい訳がない」

果南の言う事は間違っつてはいない。確かに留学や転校を蹴る度に、鞠莉の将来の可能性が狭められていた事は言うまでもないから。

「……………でも姉ちゃんはそれを鞠莉さんは伝えなかった」

「当り前でしょ！　だつて言つたら鞠莉……、絶対留学しないつて……」

「それは俺だつて分かつてるよ。けど鞠莉さんにそう言わせるのは、果南姉ちゃん達が無理矢理スクールアイドルに引き込んだからじゃない。鞠莉さんも姉ちゃん達とスクールアイドルをやるのが楽しかったからだ」

「でも鞠莉はそんな事一言も言つてなかつた！」

「それは姉ちゃんも一緒だろ」

「え……？」

「……姉ちゃん達がハッキリそう言わなかつたから、鞠莉さんは姉ちゃんが東京で歌えなかつた事をずっと引きずつていると思つてた。だから自分が支えてあげる。自分だけは前を向いてスクールアイドルを続けることが姉ちゃんとダイヤさんの為になるつて、そう思つてたんだぞ。……そして鞠莉さんもそれを口にはしなかつた」

果南も鞠莉も、互いに親友の事を思つての行動だつた。

その形が果南は鞠莉の将来の為にスクールアイドルを辞める決断をする事で、逆に鞠莉は果南の為にスクールアイドルを続ける決意をする事だつた。

「……あのな、姉ちゃん」

でも互いにそれを口にする事はなかつた。果南は鞠莉は留学すべきだと、鞠莉は思つ

ている事は口にしなくても伝わるって、本気でそう思っていたから。だからこそ、今回のすれ違いが発生してしまったのだ。

「いくら幼い頃からの付き合いだからって、どんだけ長く一緒にいたって……」
「ちゃんと言葉にしないと、伝わらない事だつてあるんだぜ」

そう言つて陸は自虐気味に微笑んだ。

千歌達には、伝えるべきなのに自分がウルトラマンゼロである事を伝えていない。

これこそ本当に、口にしないと、実際に行動に移さないと伝わらないはずなのに。

……何を自分が偉そうに説教を垂れているのだろうか。

「……っ！」

果南は立ち上がると、何も言わずに部屋を飛び出して行く。先程まで蟠っていた気持ちを振り払うように、胸のリトルスターは強く光り輝いていた。

「姉ちゃん！」

「追え陸！ 今果南を一人にする訳には行かねえ！ つか考えてみたら鞠莉も今一人じゃねーか！」

「はあっ!! 何で早く言わないんだよー！」

果南同様勢いよく立ち上がると、その後を追うようにして陸も部屋を飛び出した。

外に出ると、既に果南の背中では遠くを進んでいた。まるで二人が和解することを拒む

ように強く打ち付ける雨をもともせず、強く、早く、その足を動かしている。かなり距離は開いているが、ゼロが戻ってきた今ならばすぐに追いつける。そう思い果南を追おうとした陸を、突如発生した地響きが襲う。

『ツ!!』

咆哮と共にその体軀を現す巨大な影。

紛れもなく、果南と鞠莉のリトルスターを狙って連中が繰り出した怪獣だろう。現に、その双眸はハッキリと果南を捉えている。

「・・・ゼロ・・・」

〈ああ、さっさと決めるぞ!〉

誰も見ていない事を確認してから、陸は出現したウルトラゼロアイを装着した。
「ヘデエヤア!」

三十六話 光る未来 繋がる絆

数分前。

「……鞠莉ちゃんが一人になったか。てことはそろそろゼットンの奴も動き出すかな？

あいつに情報ちゃんと伝わってるといいけど」

降りしきる雨に打たれながら、オウガは常人には見えない距離から浦の星女学院スクールアイドル部部室を見つめていた。

部室の中には、先程黒澤家を飛び出して来た鞠莉が一人。

「ダメだよゼロ君。リトルスター保持者をあんなところで一人にしちゃ。早く助けに行かないと、ゼットン星人はもうそっちに向かつてるよ？　．．．．．と言つても、ボク今から足止めするんだけどね」

そう言うのと、懐から何本かの黒いカプセルを取り出す。

怪獣カプセル。

かつて伏井出ケイとベリアルがウルトラカプセルを元にして作り上げた、怪獣の力が秘められた代物。

「……………どれにしようかな。なんてたつて初召喚だから、迫力のある奴がいいよね……………よし！ 君に決めた！」

やがてオウガは一つのカプセルに目を付け、そのスイッチを入れた。

二つ穴の開いた黒いナツクルにそれを装填し、ライザーでそれをスキャンする。

「ザイゴーク」

「エンドマークを打つてこい……………なんてね」

ライザーを空に掲げると、怪しく光るシリンドー部分から闇が放たれていった。

『レボリウムスマッシュ！』

『グウウウウイイツ！！』

ルナミラクルゼロの掌から放たれた衝撃波が、浦の星女学院に向けてその巨体を進めていた怪獣を押し戻した。

『ハアツ!!』

重ねてタイプチェンジ。ストロングコロナゼロの炎が、雨などもろともせず怪獣に襲いかかった。立て続けに繰り出される拳が胴を捉える。

だがその皮膚は、殴打の衝撃をもつともしない程の頑丈さを誇っていた。

『グウウウウイイガアアア!! ガハハハ……』

『っ……!』

怪獣の胸部から放たれた火炎弾が直撃し、悶えたゼロの腹部を頭突き衝撃が貫く。

『……閻魔獣サイゴグ……。戦うのは初めてだな……』

「……随分と仰々しい名前だな。強いのか?」

『めっちゃ強い』

割と重要な事をあつさり言つた後、距離を取つたゼロは、目の前で猛るサイゴグを見据えた。

数え切れない程多く剣山状の背びれが生えた赤と青の毒々しい体躯。前に向かって湾曲した刃状の二本角。三対の複眼に加えてその後ろにも点々と並ぶ無数の目を備えた頭部。鬼の棍棒の様な形をした右腕。

金切り声と、閻魔大王の高笑いにも聞こえる音が混じつた鳴き声。

その地獄を体現した様な禍々しい風貌は、まさしく閻魔獣の名を冠するにふさわしい

と言つていいだろう。

『ガアアアア!!』

『フツ!』

迫りくる剛腕を。パワフルな回し蹴りで弾き、晒された胸部に照準を定めた。ゼロの右手の温度が上がる。

『ガルネイトバスターアアアアア!!』

『グウウウウイイガアアア!! ガハハハ・・・』

ガルネイトバスターと同時にザイゴークが口から放った真赤な光線、ヘルズレリーブが衝突し、血の様な赤黒い閃光を散らす。

双方の力は拮抗していると思われた。が、

『フ!!』

二つの光線がぶつかり合う一点、そこから濛々と煙が上がっている。

『まさか・・・』

これは熱量が原因で発生した煙ではない。

ヘルズレリーブが、ガルネイトバスターを腐食させているのだ。

『「があっ・・・、あああああああつ!!」』

それを察するが時すでに遅し。爆熱の奔流を貫いた深紅の破壊光線が、焼け爛れる様

な痛みと共にゼロを吹き飛ばした。

「あつっ……」

『……エックスもジードも、よくこんな奴とやり合ったもんだぜ……。だが！』
通常形態に戻ると同時に、ゼロツインソードを構える。

『アイツ等に出て、この俺に出来ねーはずがねーんだよ!!』

次々と放たれる火炎弾を切り裂きながら、ゼロは咆哮を上げる閻魔獣へと突撃していった。

浦の星女学院。スクールアイドル部部室。

鞠莉はその中でホワイトボードに頭を打ち付け、ここに来るまでにずぶ濡れになった身体から水滴を垂らしていた。

無言で見つめる先には、

『いつもそばにいても 伝えきれない思い出

心迷子になる 涙 忘れてしまおう

歌ってみよう 一緒にね』

以前陸が発見した、部屋のホワイトボードに書かれた掠れた文字。

—— ちゃんと伝えてましたわよ。貴方が気付かなかっただけ……。

ダイヤの言葉が、頭の中で反芻する。

それに続き、

—— 離ればなれになってもさ、私は鞠莉の事、忘れないから。

二年前、別れる前に果南が掛けてきた言葉。

そしてホワイトボードに綴られた文。

…… 本当に自分が気付いていないだけだった。果南はちゃんと伝えていた。自

分が勝手に果南の気持ちを分かり切ったつもりになっていただけだったのだ。

「馬鹿……」

果南に、そして自分にも向けた愚痴を漏らす。

(…… 何で、こんな方法で……)

きっと果南も、考えていた事は鞠莉と同じだったのだろう。

言葉なんかなくなっちゃって、わざわざ口にしなくなっちゃって、お互いの気持ちは伝わり合うっ

て。

そう思い続けた結果、二年もの月日が流れてしまった。

あの時ちゃんと思っている事を伝えていけば、今もまだ二人と一緒に歌っていられたのだろうか。

後悔は尽きない。

だがいくら過去を悔やんだところで後の祭りだ。だから今思っている事を伝える。隠すことなく、全部。

その為に果南を呼び出したのだ。

(いい加減。話をつけないとね．．．)

ピチャリと、入り口付近で水に浸った様な音がした。

ようやく来たかと、その方を向いた鞠莉の目に飛び込んだのは、

果南では、無かった。

『ふふ．．．．．。一人にいるとは愚かな．．．．．』

墨の様に真っ黒な細い全身に、気味の悪い一つ目の宇宙人。

以前、リトルスターを狙って善子の身体を乗っ取ったゼットン星人がそこにはいたのだ。

『これでリトルスターが手に入る．．．．．。くははっ．．．』

そして不幸にも、鞠莉の胸に輝くのはまごうことなきリトルスターの輝きだった。乾いた笑い声の後、ゼットン星人の身体を黒い霧が包んだ。

危機感を感じた鞠莉が逃げようとするが、それよりも早くゼットン星人は全身を霧へと変え、リトルスターごとその身体を飲み込まんと襲いかかってくる。

「鞠莉！」

そこに割って入る影が一つ。

青紫色の瞳に、ポニーテールに束ねた青い髪。

「果南?！」

その影は、黒い霧に抱かれていった。

『らあああああつ!!』

裂帛の気合と共に振り抜いた太刀がザイゴークの背中を切り裂き、長く伸びた棘が幾

つも周囲に飛び散る。

反撃の裏拳を屈んでかわすと、懐にもう一太刀。

『グアアアア!!』

武器を持ったのは正解だった。

ストロングコロナの鉄拳をもともしないこの皮膚でも斬撃は通る。

袈裟懸けに振り下ろしたゼロツインソードが更に懐を刻み、激しく火花を上げた。

『シヤオラア!!』

『グウウウウ……!!』

くぐもった悲鳴を上げるザイゴークの側頭部に、ウルトラゼロキックが炸裂。ザイゴークは体勢を崩して地面に倒れ伏す。

そんな隙を見逃すゼロではない。

『ウルトラハリケーン!!』

ストロングコロナに変わると素早く掴み上げ、竜巻に乗せてその巨体を天高く放り投げた。

『ガルネイト——』

『グウウウウイイガアア!! ガハハハ……!!』

しかしゼロがガルネイトバスターを叩き込むより早く、ザイゴークはヘルズレリーフ

を解き放った。

『ちっ……』

ガルネイトバスターでは押し負ける事は既に分かっている。ゼロは手を止め、地面を転がってヘルズレリーフの軌道から外れる。

までは良かった。

『グウウウウイイガアアア!! ガハハハ……』

『っ!! 何だっ!!』

突如ザイゴグの胸部が蕾が開くようにX字に展開される。もう一つの口の様にも見えるそこから伸ばされた触手が、拘束するようにゼロの身体を絡めとった。

そして、

『「がああああっ……、ああああああっ!!」』

強烈な脱力感と共にエネルギーを吸われ、ゼロはがくりと膝を折る。

ピコン、ピコンと、赤く点滅するカラータイマーが残り時間のカウントを始めた。早

く

脱出しなければエネルギーを吸いつくされてしまう。

「ぐ……、うう……、……っ!! 姉ちゃん!!」

『何っ!!』

ふと視界に入った浦の星女学院スクールアイドル部部室。
丁度それは、果南を包んだ黒い霧が消えた瞬間だった。

『……チツ……』

果南の身体を乗っ取ったゼットン星人が舌打ちを鳴らした。

それは大雨の音に掻き消されることもなく、不気味な響きで部室の中に溶け込んでいく。

「……か、果南……？」

鞠莉は果南であつて果南でないその存在に歩み寄ろうとするが、彼女ならば絶対に放たないような異質な気配を感じ、その足を止める。

そんな鞠莉を見たゼットン星人は、邪悪に笑みを零した。

『……思わぬ邪魔が入ったが……この娘の身体ならば追い出されることもあ

るまい。ゼロの始末を優先するか……』

首だけ動かし、ザイゴークとの戦闘中であるゼロを見据える。

『……ザイゴークの触手に捕まった時点でほとんど結果は見えているが……、あのゼロだ。念には念を押そう』

「待って！」

部屋に背を向け。果南を人質としてゼロに見せつけようとしたゼットン星人を、固まっていた鞠莉が呼び止める。

「アンタが誰だか知らないけど……、果南の身体を返して！」

声音と、禍々しい表情からそいつが果南ではない事を見破ったのだ。

『ハアツ!!』

「きゃあう……！」

片腕が振るわれた空間から黒い波動が発生し、鞠莉は長机を巻き込みながら吹き飛んでいく。

『そこで寝ている。ゼロを始末し次第この娘は開放する……まあ、それでも貴様は逃がしはせんがな。せいぜい最後に友人の顔でも眺めておけ』

果南の顔で酷く歪んだ笑みを鞠莉に見せつけると、ゼットン星人は踵を返して再び部屋の外へと向かおうとする。

「・・・・・・・・・・まだ・・・・、伝えてない・・・・・・・・」
 が、腰に回された手がそれを敵わせない。

「・・・・・・・・言いたかった事・・・・、思ってた事・・・・、まだ何も果南に伝えてない・・・・・・・・」
 『この・・・・・・・・』

引き剥がそうと殴ったり蹴ったりしているが、その手を離そうとする気配はない。その身体をずると引きずったまま部室の外へと出た。

「か・・・・・・・・なん・・・・・・・・」

鞠莉にこうもさせるのは、一途に果南を思うが故なのだろう。

一方ゼットン星人は、諦めない鞠莉と計画が思い通りに進まない事に苛立ちを覚え始め、徐々に冷静さを欠いていく。

『放せ！』

「あうっ・・・・・・・・！」

腹部を蹴り飛ばすが、それでも鞠莉は腕に力を籠め、眉を鋭く釣り上げた。

「つ・・・・・・・・・・、果南を返してっ！！」

鞠莉の叫びと共に輝きを増したリトルスターの光がゼットン星人を襲い、一瞬だが以前善子の身体から追い出された時のような感覚を覚える。果南の意識を閉ざしておいたのは幸いだった。

『ぐっ……何故だ……何故いつも……』

『へっ……分からねえのか……?』

背後から掛けられた声に反応してゼットン星人が振り返ると、肩で息をするウルトラマンゼロの姿があった。

『……お前は、人と人との結束の強さを舐め過ぎなんだよ!』

今なおエネルギーを吸われ続け、もがき苦しむ奴の言葉になど、本来ならば耳を貸す道理もないはずなのに、何故か追い詰められたような気がして狼狽えるゼットン星人。

ゼロの言う、人と人との結束。

ウルトラ戦士が人間を信頼する理由でもあり、光を嫌う者が最も恐れるもの。

時にこれはとてつもない力を発揮し、如何なる逆境をも覆してきた。

かつて宇宙を混沌に陥れたエンペラ星人やダークルギエルすらも、この力の前に敗れ去ったのだ。

現にゼットン星人も、一度この力の前に敗北を喫している。

「アンタもいつまでも寝てねーでさっさと起きろ!!」

先程とは違う声がゼロから発せられた。

そしてそれがゼットン星人ではなく、その身体の持ち主、果南に向けられたものである事にそう時間はかからなかった。

「アンタはずっとその人の事を思ってきたんだろ！ 決別してまでもその人の未来を願
い続けてきたんだろ！ その未来が今まさしく奪われようとしてるんだぞ！ そんな
時にアンタがいつまでも寝てんじやねーよ！ 姉ちゃ、．．．．．じゃねーや、松浦果南
!!」

ザイゴグの触手を振り払うと共にゼロ、否陸が叫び、空気が震える。

そしてその声は、眠っていた果南の意識に届いた。

「．．．．．陸．．．？」

『っ!! 何っ!!』

抑えこんでいた果南の意識が戻り、弱々しくはあるが、確かにその声は耳に滑り込ん
できた。

「果南．．．？」

『伝えろ!』

戸惑う鞠莉に、今度はゼロが言葉を重ねる。

『今まで伝えられなかった想いを！ すれ違った時間の中で募った感情を！ 今なおお
前の中で燻っている願いを！ 全部言葉にしてそいつにぶつけてやれ!! それがそい
つを救う力になる！ 今それが出来るのは世界中でただ一人、小原鞠莉しかいねーだろ
うが!!』

「っ………!」

救う……。

自分が、果南を。

鞠莉の脳裏に過るのは、幼き日の記憶。

内浦にやってきたばかりだった鞠莉に、真っ先に声を掛けてきたのは誰だった？

何もかも不慣れだった鞠莉と迷わず友達になつてくれたのは誰だった？

あの時の鞠莉を救ってくれたのは、誰だった？

ダイヤと……、果南ではないか。

だから今度は、鞠莉の番だ。

方法は簡単。ただ自分が果南に対して思っている事を伝えればいい。

いつの間にか忘れてしまつていけど、それは、

かつて自分が、最も得意としていた事のはずだから。

「………ダイヤから聞いた。あの時果南が思っていた事……、ずっと私の事、思つていてくれてたんだよね? ……でも」

決して離そうとしなかった手をようやく解き、ゆつくりと立ち上がる。

「どうして言ってくれなかったの……？ 思ってる事ちゃんと話して、果南が私の事考えている様に、私も果南の事考えてるんだから……」

少し離れた所から聞こえる、ゼロとザイゴークが衝突する音。でも今はそんな事気にもならない。

「将来なんか今はどうでもいい！ 留学？ 全く興味なかった！ 当り前じゃない！」

だって……、果南が歌えなかったんだよ？ ……放っておけるはずない！！」

これが鞠莉の思い。

そう言い放った後、何を思ったか鞠莉は、

「っ！！」

突如響いた乾いた音。

何と鞠莉は邪悪な悪意の支配する果南の頬に平手打ちをしたのだ。

「私が果南を思う気持ちを、甘く見ないで！！」

これが、鞠莉の怒り。

ずっと考え続けてきた果南への、純粹な感情。

『……、この……っ？』

突然のビンタに憤慨し、手を上げたゼットン星人の動きが突如止まる。

そして口が言う事を聞かずに勝手に動き始めた。

「………だったたら………、だったたらそう素直に言つてよ！ リベンジだとか負けられないとかじゃなくて、ちゃんと言つてよ！」

紛れもなく、松浦果南自身の言葉だったのだ。

そしてそれは、闇による支配が弱まったという事。

『馬鹿な………、何故対抗できる………、っ!!』

自分を追い出そうとする力に抗うゼットン星人の目に映つたのは、鞠莉のリトルスターに負けない程に輝く、果南の胸の光だった。

『ッ………!! リトルスターッ!!』

鞠莉のリトルスターを奪う事に必死になり過ぎて、スライの話をほとんど聞いていなかったゼットン星人は知らない。

実は鞠莉よりも早く、果南がリトルスターを発現していた事に。

『クソッ………!! クソッ………!! 覚えていろっ………!!』

血眼で呪詛を振り撒きながらゼットン星人の身体は七色の光に飲み込まれ、霧は霧散していった。

「だよね………、だから………」

叩いてくれと言うように、鞠莉は果南に自分の頬を差し出した。

気持ち伝えなかったのは果南だけではない。鞠莉も一緒だ。

だから果南にも鞠莉を殴る権利はある。そう思っているのは、言葉にしなくてもハッキリと伝わる。

「……………」

完全にゼットン星人の支配から脱した果南は手を掲げ、痛みを堪える準備をするように鞠莉が目を瞑る。

だが果南は、一向にその手を振り下ろすことはなかった。

「……………?」

それに気付いた鞠莉が目を開いた時には果南は既に両腕を広げていて、目尻に涙を浮かべながら、優しく笑いかけた。

「ハグ……………、しよ?」

『へっ……、ちゃんと言えたじゃねーか……』

すれ違い続けた二人の少女が抱擁を交わすのを見て、ゼロは安堵したように息をついた。

そしてそれは陸も同じ。

「……良かったな。……姉ちゃん」

『やっぱ嬉しいのか?』

「まあ、そりゃあな」

『グウウウウイイガアア!! ガハハハ……』

その咆哮に視線と意識を戻せば、ザイゴークは再び触手を解き放っていた。あれだけエネルギーを吸い取ってもまだ足りないとは。

『さっさと終わらせるぞ。怪獣が出てたんじゃ雰囲気は台無しだ』

「おう」

刹那剣閃が煌き、殺到する二本の触手を断ち切った。悲鳴を上げるザイゴークに一瞬で肉薄すると、ゼロツインソードが眩い光を纏う。

ザイゴークの皮膚は固い。

斬撃も通るとはいえ、致命傷になるまでには至らないのだ。

ただ一カ所を除いては。

触手を繰り出す際に、ザイゴークは胸部を開く。流石に身体の内部までは体表の様に頑丈ではあるまい。

だったら、その一点に攻撃をブチ込んでやればいい。

『プラズマスパークスラッシュ!!』

開かれた胸部が閉じるよりも一瞬早く、弧を描くゼロツインソードが到達。深々と斬撃を刻み込んだ。

『ギヤアアアアア．．．!!』

『オオオオオオ!!』

ストロングコロナに変わり、剃刀の様に鋭く、地面を翳めるまでに深く踏み込んだアッパーをたつた今刻んだ斬痕へと叩き込む。

『ガルネイドバスタアアアアアアアアアアアアア!!』

爆熱の炎を放出すると同時に拳を振り上げ、ザイゴークの身体はロケット弾が如し速度で天へと昇っていく。

やがて分厚い黒雲を穿った獄炎はザイゴークを貫き、空一面が雲一つない青空になってしまいう程の大爆発を起こした。

内浦全体に差し込んだ陽光が、雨に濡れたゼロの身体を照らす。

そして導かれるようにゼロの元へと飛来した二つの光の球が、カラータイマーに吸い寄せられる。

果南のリトルスター。

『シヨウリアア!』

——可能性を信じ、未来を切り開く力——ウルトラマンギンガ。

鞠莉のリトルスター。

『イイイツサ!』

——光を結び、絆で繋がる力——ウルトラマンエックス。

同時に二つのウルトラカプセルが修復される。

リトルスターを受け渡した二人の少女は、いつの間にか手を繋ぎ、ゼロを眺めていた。

もうリトルスターはないというのに、二人は眩しい程に輝いて見えた。

『やっぱ、こんな日には晴れ空が一番だよな……』

「ダイヤさんつて、本当に二人が好きなんですわね♪」

夕空の下、校門の戸締りをするダイヤに、いつの間にかそこにいた千歌が笑いかけた。
「……………それより、これから二人を頼みましたわよ? ああ見えて二人共繊細ですから」

「じゃあダイヤさんもいてくれないと」

あの後果南と鞠莉の二人は、正式にAqoursへ加入をしたのだ。
だから千歌がここにいるのには訳がある。

それでは、一人足りないから。

まだ一人、二年間の空白を埋めていない人がいる。

「ええ? わたくしは生徒会長ですわよ? とてもそんな時間は……………」
「それなら大丈夫です」

ひよこりと、隠れていたAqoursメンバーが顔を出した。そこには果南と鞠莉もいる。

「鞠莉さんと果南ちゃん……………それに皆もいるので!」

そこからルビィが一人出てきて、ダイヤに衣装を差し出した。

「親愛なるお姉ちゃん！ ようこそ、A q u o r s へ！」

満面の笑みを浮かべる妹に対し、ダイヤは、

その衣装を受け取る事で、答えを出した。

未熟D R E M E R。

そして迎えた夏祭り。

花火に彩られた夜空の下で歌う彼女達は、九人となっていた。

果南の想い、ダイヤの想い、鞠莉の想い。

どうしていいか分からず気持ち迷子になり、言葉だけでは足りず、分かって欲しかったが故に傷つけ、すれ違い続けた三人の想いは重なり、一つとなった。

止まっていた三年生の時が動き出し、一年生、二年生の時と重なり合い、九人の時間となつたのだ。

「……分かり合っているからこそ伝えられない、か……。確かに、そう言う想いもあるんだな」

ステージ上で歌う九人の少女達は、内に秘めた想いを伝えあつたからこそ繋がり合えた。だからこそ輝いて見える。

何もかも自分で抱え込んでしまう陸とは違う。

「……眩し……」

少しだけ、心の闇が深くなつた気がした。

三十七話 もう一つの陰謀

とある小惑星。

『オオオオオオオツ、シヤツ!!』

硬質な衝突音が響く。

暗く、月面の様に荒涼とした世界の中で大剣を振るう巨人が一体と、それを取り囲むように白いロボットが十数機。

このロボット、シビルジャツチメンターギャラクトロン。

かつて惑星クシアを滅ぼした巨大人工知能ギルバリスによって生み出された破壊兵器。

ギルバリス自体は既に滅んだが、数万年前から数多の宇宙に拡散されたギャラクトロンはまだまだ相当数が健在であり、今もその歪んだ正義を暴走させ続けている。

『ダアアアア!!』

巨人が剣を地面に突き立てると、地を這いながら円を描く様な動きで二発の光線が放たれ、それを喰らったギャラクトロンが爆散される。

『ッ!!』

巨人はここで気付いた。

ギヤラクトロンの軍団の中で、自分の本来の標的、最もヤバい奴の姿が見当たらない事を。

『一体どこへ……』

周囲を見渡すと、空に浮かぶ魔法陣の様なものに吸い込まれていくギヤラクトロンのK3の姿があつた。

『待て!!』

だが巨人の行く手を阻むように他の機体が立ちふさがり、足止めをくらってしまふ。もう一機を一太刀の元に切り捨てるが、数があまりに多い。

一瞬の隙を突くように、懐へと腕に装着されたギヤラクトロンプレードが迫る。

『ぐっ……』

剣の腹でそれを受け止めようとした瞬間、上空から放たれた白熱の光線がギヤラクトロンを貫き、爆風が吹きすさぶ。

それに続くようにして降りかかる二筋の光線が、更にもう二機を粉碎。

巨人が光線の飛んできた方を向くと、銀色の巨人が二体と、真紅の巨人が一体。

『っ……、ウルトラマンさん……、セブンさん……、ジャックさんまで……』

『ここは我々が引き受ける』

ウルトラマンは地上に降り立つと同時にギャラクトロンに掴みかかり、戦闘を開始した。

怪獣退治の専門家と言われる彼の動きには無駄がない。

『君はあのギャラクトロンを追うんだ』

ウルトラセブンが頭部に装着されたアイスラッガーを構え、間違つた正義を正す様に剣閃を描く。

『なに、レイバトスの件で助けられたお礼だ。気にする事はない』

十字に組んだウルトラマンジャックの腕から放たれたスペシウム光線が、ギャラクトロンをもう一機破壊する。

『行くんだ。銀河の風来坊』

栄光の初代ウルトラマンに言われてしまつては、NOという訳にもいくまい。

『……………、はいっ!』

諸先輩方の激励を背に巨人、ウルトラマンオーブは、虚空に浮かぶ魔法陣へと飛び込んでいった。

それに続く、一体の魔人と共に。

夏祭りのライブから数日。

そろそろ九人で練習している姿にも見慣れてきた今日この頃。

陸は部室の片隅で、青い顔で震えるAqours一、二年生の姿を眺めていた。

この世の終わりが来たかのような顔をする少女達が見つめる先。そこにはやけに満足気な表情をしたダイヤと、モザイクをかけたくなるレベルでおぞましい本日の練習メニュー。

ダイヤがAqoursに加入して以降、練習メニューが鬼の様にきつくなったのだ。

しかも自分で立てておいてダイヤ自身もついていけないらしく、練習後毎回死にかけるといってお間拔けな展開が続いている。

そのキツさをサッカー部で例えるならば、合宿でやるようなハードメニューを毎日の放課後練習でやるようなもの。まともにこなせるのは果南のみ。

誰も喜ばない練習を続ける事早一週間、ノリノリの三年生を除く一年生と二年生は、

体力的にも精神的にも限界を迎えていた。

「あ、あの……、ダイヤさん？ 心なしか昨日よりも練習量が増えているような気が……」
 「当たり前ですわ！ 練習量！ それを失くして勝利！ すなわちビクトリーはなくなつてよー！」

完全に妄想の中にいるダイヤを前に、千歌が撃沈する。

A q o u r s に加入してからと言うもの、ダイヤはキャラ崩壊の一途を辿っていた。
 今の彼女に初対面の頃に見せた凛々しさと鉄面皮は影も形もなく、代わりに誕生したのはスクールアイドルへの愛と熱意の塊と化した生徒会長。もはや何キャラなのかすらも分からない。

正直ここ数日のダイヤの暴走は目に余るし、辛そうな一、二年生を見ているも本当に心が痛むのだが、今の陸とゼロにはダイヤは止められない。

こうなつたら理屈で止まる人ではないし、何よりも……、

「さあ！ 本日も行きますわよー！」

意気揚々と部室を飛び出して行ったダイヤの胸は、輝く光の球が宿っていた。

(……またかよ……)

へああ、最近俺もウンザリしてきた……

黒澤ダイヤ、リトルスター絶賛発症中。

黄昏時、淡島神社前にて。

「・・・・・・・・超ハード・・・・・・・・」

「ルビィ・・・・・・・・、ちゃんと生きてお家に帰れるかな・・・・・・・・?」

「このメニュー・・・・・・・・、考えた人鬼かな?」

「外道だよ」

「悪魔ね」

「オニババーデース」

「全部聞こえていますわよ?」

もう既に散々キツイ練習メニューをこなしたAqoursの面々。

聳え立つ地獄の階段を前にして遂に不満が爆発したらしく、本人がいる前で堂々とダ

イヤをデイスリ出す始末である。

「まあ、ぶつぶつ言つても何も始まらないでしょ。私先行つてるね」

ただ一人ケロツとしている果南が階段を駆け上がり始め、それに連鎖するような形で他のメンバーも走り出した。

「………陸先輩、途中でこっそりおぶつて欲しいすら」

「却下」

縋つてくる花丸を突き放す。懐いてくれるのは年上冥利に尽きるが、そう何度も甘やかす訳にもいくまい。

とはいえ、若干後ろ髪を引かれる様な気分になつているのも事実。

「………マジでヤバそうなら助けてやつから、とりあえず自分一人で頑張れ」

「………半端に優しくないすら……」

これでも十分譲歩したつもりだったのだが。

陸に背中を押され、ぶつくさと文句を零して花丸は階段に立ち向かつていった。それを追つて陸も駆け出す。

「へっ………？」

軽快に四肢を動かしながら早くも花丸の背中を押している最中、ゼロと共に妙に嫌な気配を感じてその方向へと視線を移す。

そこには、へらへらと笑いながら手招きする男の姿があった。
どうやらこつちに来いと言っているらしい。

「花丸。やっぱ自力で頑張れ」

「ずらあっ!!」

絶望混じりの声を上げる花丸を尻目に、陸は猛スピードで階段を駆け下りて行った。

「オオウラツ!」

「ちよつと待つて!! いきなり飛び蹴りは酷くない!!」

開幕ノータイムで陸が繰り出した鋭い蹴りを、オウガは慌てながら身を翻してかわした。

「……何の用だ?」

警戒心を解かずに、目の前にいる怪しさ全開の男を睨みつける。

自分の意志で事を起こすつもりはないと言っていたが、コイツが敵だという事に変わりはない。

「・・・そういつも警戒されちゃうとボクも悲しいんだけど・・・、今回はその反応が正解かな？」

「・・・どういう事だ」

おもむろに、オウガは懐からライザーを取り出した。

「・・・今回は君と戦いに来たのさ。と言っても、スライに言われたんだけどね。ダイヤちゃんを連れて来いってさ」

やはりダイヤのリトルスターは既にダークネスファイブには知られていたらしい。

「あつ、言っておくけど君に拒否権はないよ。断ったら・・・、分かってるよね？」

オウガが指さす先は淡島神社。

あそこには、練習中のA q o u r sのメンバーがいる。

「お前・・・」

咄嗟に身構えるが、オウガは相も変わらず笑っている。

「怒るなよ。君が戦いの申し出を受けさえすればそれでいいんだから。ボクだってホントはこんな事したくないんだよ？」

「何がしたいんだ……」
〈陸。ちよつと変わるぞ〉

陸と交代し、ゼロがオウガとの距離を少しだけ詰めた。

『答える。お前はダークネスファイブと組んで何をしようとしている。お前の目的は何だ？』

「……ダークネスファイブが関わってる時点でなんとなく分かってるんだろ？」
糸屋の娘は目で殺すとしても言おうか。だが殺気すらも感じる視線を浴びても、オウガは平然としている。

「……ベリアル。それがボクの目的さ」

その単語がオウガの口から紡がれた瞬間、ゼロの表情が幾ばくか青ざめた。
ベリアル。

ウルトラマンベリアル。

光の国で唯一悪に落ちたウルトラマンで、ゼロの宿敵。

過去二度光の国へ侵攻し、一度は光の国を壊滅寸前に追い込んだ悪の化身。

オメガ・アーマゲドンの際、二つの宇宙でクライシスインパクトを引き起こし、一度はこの星をも消滅させかけた張本人。

そんな悪魔を、オウガ達は復活させようと言うのだ。

『お前……、ベリアルを復活させて何しようってんだ!』

「……ボクと言う存在を認めてもらうためさ」

そう言ったオウガの表情は、未だかつて見た事が無い程に悲しげだった。

『……どういう事だ……?』

「そうさなあ……、ゼロ君。ウルトラマンジードは知ってるだろ?」

『知ってるも何もない。ジードがどうかしたのか?』

「彼は宿主がウルトラマンに祈らないと分離されないリトルスターを回収する為に伏井

出ケイが生み出した、言っちゃ悪いけど人造ウルトラマンだろ?」

『それが何だ……』

「……実はね、それより前に『ディザスト・スマッシュ』って言う実験が行われ

てたんだよ。東京で教えたる?」

そこでオウガは話した。

伏井出ケイがウルトラマンジードを生み出すよりも前、ベリアルとダークネスファイ

ブはとある計画を実行していた。

結果から言うとその計画は失敗し、その結果を踏まえて伏井出ケイはジードを作り出

す事に成功したらしい。

その計画は、ウルトラ戦士とは別の生命体にベリアルの遺伝子を与え、強大な力を

持った兵隊を生み出そうというもの。

しかしほとんどの生命体はベリアルが強大な力に耐えられず、数秒と持たずに絶命した。

ただ一人を除いては。

「……それが、ボクって事さ」

ジードの誕生に成功してからもその計画は引き続き実行され、わりかし最近まで行われていたそうさ。

失敗だと思われたその計画が長く続いたのは、唯一成功したオウガの件があったから。

「……ボクの種族。カドー星人は大した戦闘能力もないくせに身体だけはウルトラ戦士並みに丈夫でね。それでボクだけはベリアルの力に耐えられたって訳」

肩を竦め、天を仰ぐ。

「最初はボクもベリアルやダークネスファイブに従うつもりはなかった。でもね、ある日気づいちゃったんだよ。ベリアルの力は、全宇宙どこに行っても嫌われるってね。酷いもんさ。ボクは何か事を起こそうとしていた訳じゃないのに」

ぐにやりとオウガの輪郭が歪み、陸にとつては初対面の時以来となる魔人態へと変貌を遂げた。

確かに釣り上がった赤い目は、以前ゼロに見せてもらったことのあるベリアル姿を彷彿とさせる。

『そこで考えた。ずつとずつと。どうしたらボクはベリアルの遺伝子を受け継ぎながらも、ボクがベリアルの兵隊じゃなくてボク自身だつて事を認めてもらえるか。そんな中、ベリアルの息子であるジードがベリアルを倒して一人のウルトラマンとして認められた。．．．．．そこで思つた訳さ』

手のひらの中で黒いカプセルをコロコロと転がし、やがてそれを握つた。

『．．．．．ベリアルを復活させようつて』

『．．．．．どうしてそうなる』

『．．．．．ベリアルが復活すれば、ボクには二つ存在を証明する方法が出来る』

『何．．．．．?』

魔人態になられると陸には表情が見えない。

だが、ピースをするように二本の指を立てるオウガの顔は、悪寒を感じるほどに笑つているように思えた。

『．．．．．一つは単純。ベリアルに全宇宙を支配してもらつて、ボクみたいなベリアル力を持つている者を認めざるを得なくなる世界を作ってもらう』

ゆつくりと、指を一本折りたたむ。

『もう一つは、復活したベリアルを君の様な光の戦士と共に倒す。そうすればジードミ
たいに宇宙全体に自分の存在を証明することが出来——』

『ッ!!』

一瞬で胸元に伸びたゼロの腕が、オウガのセリフを途中で途切れさせる。

直接首を掴み上げ、乱暴に手元に引き寄せた。

『そんな自分勝手な理由であんなろくでもない奴を復活させようつてのか!! 自分を変
える努力もしてねー奴が、被害者ヅラしてゴタゴタ言つてんじやねえ!!』

激昂するゼロに対し、オウガは少しだけ苦しそうに呻くが、笑みを作ったかのような
雰囲気を作ると額と額が触れあう程にその顔を近づけてくる。

『……誰もかれもが想い一つで光になれるつて訳じゃない。変えられない運命だつ
てあるのさ。……それに、君はベリアルの事を言えた立場じゃないだろう?』

『何だと……』

『……分からないのかい? ベリアルも君も、一度は光の国最大の禁忌を犯している。
決定的に違つたのは止めてくれる人がいたかどうかだ。そのおかげで君は闇に落ちず
に済んだ』

オウガがしているのは、ゼロやベリアルが力を求めてプラズマスパークに手を出そう
とした時の話だ。

ゼロはプラズマスパークに手を触れる寸前で父親であるウルトラセブンが止めた事で事なきを得たが、ベリアルはプラズマスパークの強大な力に耐えきれず失敗、挙句の果てに光の国を追放。

力を渴望した結果周囲からの孤立を招き、悪の道へと落ちて行ったベリアル。

ベリアルと同じく力を求めて一度は道を踏み外しかけるが、仲間を支えられ、正義の道を踏み止まったゼロ。

この二人の姿は対照的なものだ。

そしてそれはつまり、

『……ベリアルは、あの時の君のもう一つの可能性なんだよ。』

あの時ウルトラセブンが止めてくれていなければ、ゼロもベリアル同様悪の道を行っていたのかもしれない。

『っ……』

その言葉には強い説得力があり、ゼロは何も言い返せずに押し黙ってしまった。

それを見てオウガはため息をつく。

『ちよつと長話が過ぎたね。そろそろ始めようか』

握っていた二つのカプセルのスイッチを入れると、黒い二つの穴が開いたアイテムに装填し、ライザーでスキャンをする。

「フュージョンライズ！」

するとライザーのシリンダー部分から禍々しく青と緑の光が放たれた。

『ボクとしてはベリアルを倒してもらった方がありがたいんだ。彼なら協力者のボクを殺す事にも迷いはないだろうからね。だからこそ、君には強くなってもらわないと困る』

憎たらしい口調と共に、ライザーのトリガーを弾く。それと同時にシリンダー部分が回転を始め、紫色の光が渦を巻き始める。

そしてそれを、胸元に掲げた。

「キングジョー！ ゼットン！ ウルトラマンベリアル！」

『エンドマークを打つのは君か、ベリアルか。楽しみだよ』

そう言ったオウガの身体を闇と、以前ゼロが倒した二体の怪獣の力が包んでいき、

「ペダニウムゼットン！」

巨大な怪獣へと、その姿を変貌させていった。

出現したペダニウムゼットンは、何か行動を起こすでもなく、陸の事を見下ろしている。

ゼロに変身するのを待っているらしい。

「ゼロ。行くぞ」

〈陸……?〉

「お前の過去がどうであれ、今のお前が沢山の命を救ってきたって事には変わりないだろう?」

ゼロが陸と出会う前がどうだったかは知らないが、少なくともこの地球に来てからは、ゼロは何度も多くの命を救ってきた。

町の人々、A q u o u r s の皆。そして陸の事も。

「……お前はウルトラマンゼロだ。ベリアルとは違う。お前には自分の事を案じてくれる仲間がいた。それだけでいいじゃん」

〈……〉

返答の代わりに、目の前に出現するウルトラゼロアイ。そう来なくてはゼロではない。

〈陸〉

「あ?」

ウルトラゼロアイを手にとった陸の耳朶にゼロの声が触れる。

〈……ありがとう〉

「……おうよ」

装着と共に閃光に包まれた陸の身体は、ウルトラマンゼロへと変身を遂げた。

三十八話 異次元からの使者

『フツ………』

土煙を上げながらゼロが降臨する。

視線の先には、オウガがフュージョンライズした怪獣、否、ベリアル融合獣ペダニウムゼットン。

ゼットンがキングジョーを身に纏ったかのような姿をしており、サイボーグの様にも見える。

特徴的なのは頭部や肩から生えた赤い角と、スカルゴモラと似ている胸部の禍々しい意匠。恐らくあれは全てのベリアル融合獣に共通するものだろう。

『行くぜエ!!』

瞬時に殴りかかったゼロの拳は、展開されたバリアによって阻まれた。

逆に頭部の角から放たれた赤い電撃が身体を打ち付ける。

『「がっ……」』

たまらず距離を取る。

バリアはゼットン、電撃はキングジョー。

まさしく二大怪獣の力を有していると言っているだろう。

『来なよ、ゼロ君』

『言われなくてもやってやらあ!』

ルナミラクルにタイプチェンジし、光の刃を生み出す。

『ミラクルゼロスラッガー!』

多方から同時に襲いかかるゼロスラッガーも、全方位に張られたバリアは防いでしま
う。

刃を全て弾き飛ばすとバリアを解除し、赤いレーザー光線を解き放ってきた。どこと
なくキングジョーのデスト・レイに似ており、喰らったらヤバイのはひしひしと伝わっ
てくる。

だがここまでは想定内だ。

『パーテイクルナミラクル』

『っ!! 消えた・・・?』

突如ゼロが消え、ペダニウムゼットンは周囲を見渡す。

ゼロは、その背後に回っていた。

『レボリウムスマッシュ！』

『ぐっ……おお……』

掌から放たれた衝撃波が直撃し、弾かれた様に飛んでいくペダニウムゼットン。

パーティクルナミラクルは怪獣の体内に侵入するだけではない、瞬間移動の能力もあるのだ。

バリアを解除した隙に死角に入れば、流石に攻撃は防がれない。

『オオウラア!!』

大地を蹴り、ストロングコロナゼロは炎を纏って拳を振るう。だがジェットエンジンの様に炎が尾を引くその拳は、空を切った。

『っ!!』

顔を上げたゼロの鳩尾を、いつの間にか背後に回っていたペダニウムゼットンの回し蹴りが捉えた。

『あがつ……!』

重い衝撃が腹部を貫く。

これはゼットンの瞬間移動能力か。先程こちらがやった手をそのまま返された。
が、

『ははっ……、捕まえたぜえ……』

ゼロは蹴り飛ばされることなく、その足をガツチリとホールドしていた。

『オラオラオラオラオラオラオラオラアアアアアア!』

背中を蹴る。頭を殴る。胸部を頭突く。

逃げられないペダニウムゼットンを、殺人的なまでの連続コンボが襲う。一度こうなってしまうえばストロングコロナは無敵だ。相手がボロボロになるまでこの猛攻が止むことはない。

『ダアアアア!』

金色のゼロスラッガーがうなじを切り裂く、殴打の次は斬撃だ。以前ダークロプスゼ口に繰り出したものよりも強力かつ無慈悲な、反撃の隙すら与えない太刀筋の嵐が吹き荒れる。

剣閃が煌く、炎が吹き上がる、紅が散華する。

『プラスマスパークスラッシュ!!』

『ぐああああああああ!』

ゼロツインソードを横一線に振り抜き、発生した風圧が遥か彼方にあつた雲を両断した。

風圧ですらこの威力、これが直撃した者のダメージは計り知れない。

『ふふ………アハハハ……』

あれほどの衝撃を喰らいながらもペダニウムゼットン、いやオウガはいつもの通りに笑っていた。

「……何が可笑しい」

『……いやね、まさかこうしてゼロ君と戦う日が来るなんて、ストーカーを始めた時には思いもしなかったなーって』

問いかける陸に対し、オウガはよろめきながらも答えた。

『今は純粹に君と戦っているこの状況が楽しいよ。ベリアルの復活とか、そんなもの関係なしにね。ダークネスファイブに仕えた意味もあったよ』

突き出した両腕に、ゼットンのものより遥かに大きく、膨大な熱量を誇る火球が生成されていく。

『力比べと行こうじゃないか』

『はっ……、上等だ！』

カラータイマーの左右に装着した二本のゼロスラッガーに光が集約していく。

しばらくの間、平穩の様な静寂が舞い降りる。

だがその場を支配する緊張感はずいぶん程遠く、それに地球が呼応するかのようには大地は震え、大海は波立っている。

そしてその緊張感が打ち破られる瞬間は、唐突に訪れた。

『ゼロツインシュートツ!!』

『ペダニウム・メテオツ!!』

放たれた光線と獄炎が、両者の間で衝突する。

光線干渉により生じた光はみるみる内に膨れ上がり、やがて大爆発を起こした。

「ゼロツ! まだ皆が!」

すぐそばの淡島神社には、まだAqoursのメンバーが残っている。もしそこへの爆発が襲いかかろうと言うものなら……。

『ハアア!』

ゼロが瞬時にウルトラゼロディフェンサーを展開。淡島神社の盾になる様に立ちふさがり、Aqoursを守る。

視界を覆いつくした黒煙が晴れ、姿を現したペダニウムゼットンはまだなお健在だった。

向こうもバリアで爆発から身を守ったらしい。

『いいねえ……。中々に燃えるじゃないか……。』

実力は互角。

先程からずっと互いの技の押収。正直言って決着が付く気がしない。

ベリアル融合獣がどうかは知らないが、ゼロには制限時間と言うものがある。

時間が経てば経つほど、不利になっていくのはこちらだ。

「……………どうするよ」

「……………どうもこうも。何か手があるならとつくに打ってるってんだ！」

ヤケクソ気味にゼロツインソードを構え直したゼロは押し寄せる火球の雨を薙ぎ払い、ペダニウムゼットンへと接近していく。

「ぐう……………おお……………」

剣で受け止めているとはいえ、火球は一発一発が隕石の様に重い。その衝撃が身体を打つが、それを堪えて一気に駆け抜ける。

『プラズマスパーク——』

やがて奴の真正面に立ち、ゼロツインソードを思いきり振り下ろそうとした瞬間、

——— 終わりは、唐突に訪れた。

『がふっ……………!!』

突如として謎の衝撃がゼロを強襲したのだ。

不意を突かれた上に、ゼロツインソードを振りかぶっていた。当然そんなもの防げるわけがない。派手に火花を散らしながらゼロは吹き飛んで行く。

『っ!!』

一体何をしたのかと起き上がり顔を上げると、ペダニウムゼットンの腹部から純白の

刀身が伸びていた。

——まるで腹を貫くかのように。

『が……あ……?』

オウガ自身も何が起こったか分かっていないらしい。

恐る恐る振り向いた背後。そこには。

『ラ~~~~~』

歌のような音を鳴らす、一体の白いロボットが佇んでいた。

外見は二足歩行のドラゴンを思わせ、所々に装着された金色の装飾。胸部に浮かび上がる黒い炎の様なエンブレムと、その中心にある赤いコアの様なパーツが特徴。

背中には巨大な斧。頭部と思われる部分には黒いマスクが装着されており、神秘的かつ禍々しい雰囲気醸し出ている。

『コイツ……は……?』

掠れたオウガの声が聞こえたその時にはロボットは刀身を振り下ろし、ペダニウムゼットンに爆散していった。

『……ギャラクトロン……? いや、少し違うな……。MK2みてーに強化改造された個体って事か……?』

「味方……、なのか……?」

『……だつたら良かったんだが……、生憎敵だ』

ファイティングポーズの後、その純白のボディ目掛けてゼロツインソードを振り抜く。

ガキイ、と、硬質な衝突音が周囲に響くが、奴はその攻撃をもろともしていないかのように一ミリも動くことはなかった。

『……』

今の攻撃でようやく存在を認知したように、ギャラクトロンが首だけを動かしてゼロを見やる。

スキャンでもしているような視線を数秒間浴びせた後、マスクに覆われた目が赤く煌いた。

『っ!!』

それと同時に胸元に迫る文字通りの白刃。

反射的に飛び退き、何とか回避に成功したところに、間髪入れずに次の斬撃が襲いかかってくる。

速い。それも尋常ではなく。

ゼロツインソードを盾にしてその攻撃を防ごうとするが、ギャラクトロンの剛腕はそのガードをあつさり打ち破り、白剣の切っ先がゼロを直撃した。

『がふっ……っ!!』

体勢を崩したゼロを、追撃のレーザー光線が襲う。

イナバウアーの様にのけ反って何とかそれをかわすと、ギヤラクトロンが背中に装着された金色の斧を手に持ち、こちらに猛然と突っ込んでくるのが見えた。

先程の斬撃でなんとなく察していたが、ギヤラクトロンはその重厚な見た目からは想像がつかない程に素早い。

『フ~~~~』

低めのコーラスの様な鳴き声と共に難いできた戦斧をゼロツインソードで受け止め、それでも大きく後ろに弾き飛ばされる。

速さだけでなく、パワーもとんでもない強さだ。

『っ……っ……!』

何とか体勢は崩さずに踏みとどまったが、反撃の間もなく第二撃が既に迫っていた。

頭を勝ち割らんばかりの勢いで振り下ろされた一撃を紙一重で回避し、斧での攻撃が届きにくい懐へと肉薄する。

が、ギヤラクトロンはそれをも許さない。

反撃など喰らうまいと乱暴にその巨体をぶつけてきた。

ゼロとギヤラクトロンの体格差では流石に踏ん張ることは出来ず、なんなく跳ね飛ば

されて地面を転がる。

刹那奴の胸部の赤いパーツに光が吸い寄せされていき、巨大な魔法陣が展開された。

『ラ〜〜〜』

渦巻くエネルギーが収束した途端、歌声を上げて光の奔流が迸った。

『ぐあああああああああ!!』

起き上がったところで光の柱に飲み込まれ、それに乗って遙か遠くに運ばれたゼロは、そのまま水飛沫を上げて海に落下した。

「ゼロが………!!」

ペダニウムゼットン、ギャラクトロンと立て続けに現れる怪獣から逃げていた千歌が、海に叩き込まれたゼロを見て瞳を揺らす。

そんな中、梨子が一人足りない事に気付く。

「そう言えば仙道君は？ さつきまで一緒にいたよね？」

「さつき急にどこか行っちゃったずら……」

「ええ？ こんな時に……」

果南が立ち止まって周囲を見渡すが、幼馴染の少年の姿はどこにも見当たらない。

「果南、今は逃げないと……」

鞠莉がその手を掴み、出来るだけギャラクトロンから遠ざかるべく奴とは真逆の咆哮へと引く。

「でも……」

「……大丈夫よ、りくつちなら。あんなにBerrystrongなんだから……」

「っ……」

鞠莉の言う通り、ここは陸の無事を信じるしかない。

今自分達がいるこの場所も、いつまでも安全である保証はない。

本当は今すぐ探しに行きたいが、果南が行けばきつと千歌と曜も来てしまうだろう。

今はここに在る皆の安全が優先だ。

「ピギアアア！」

そう思い再び足を踏み出した瞬間、ルビイの悲鳴が耳を劈いた。

何かと思いその方向を見やれば、何とゼロとギヤラクトロンの戦場で粉碎された瓦礫がルビイ目掛けて飛んできているではないか。

「ルビイ!!」

凜々しい声の後何かが煌き、V字の光がルビイに迫る瓦礫を打ち砕いた。

粉塵が周囲を舞うが、ルビイに怪我はない。

だが全員その事にほつとすることはなく、今も輝いている光の源、黒澤ダイヤの胸へと視線を集中させていた。

もはや見慣れたものであるリトルスターの輝き。それを理解するのにそう時間は駆らなかつた。

それと同時に、ギヤラクトロンがその光に反応したことに。

『ラ〜〜〜』

低い声で歌いながら、こちら、正確にはダイヤに向けてその巨大な体躯を進行させてくる。

「逃げなきや!!」

「ダイヤさん早く!」

「え．．．、ええ．．．」

A q o u r s の中でただ一人だけリトルスターを目の当たりにした事がないダイヤ

は知らないのだ。

この光を宿していると、宇宙人や怪獣に狙われるという事を。

咄嗟の判断でダイヤを先頭に全員で走り出そうとするが、その時には既に黒い触手の様な物がダイヤの身体に巻き付いていた、

「きゃああああつ!!」

「ダイヤ!!」

ふわりと浮き上がるダイヤの身体。それを掴もうと鞠莉と果南が腕を伸ばすが、無情にもその腕は空を切ってしまう。

「お姉ちゃああああああんっ!!」

ルビイの悲痛な叫びの後。

ダイヤの身体は、ギャラクトロンへと取り込まれていった。

『だあああああつ！』

先程大海原に放り込まれたゼロが、勢いよく水中から飛び出してくる。

「……ま、まさかこの目で深海を拝む日が来るとは……。全然見えんかったけど」

『……。ああ。えらく深いところまで沈んだもんだ。体痛てー』

呑気に身体をポキポキと鳴らすゼロだが、ギャラクトロンが自分に背を向けているのを見てそんな事をしている場合ではないと悟る。

『行かせねえよ』

弾かれた様に素早く、何故か動きを止めているギャラクトロンへと迫る。

そしてその身体を押しえつけようとした瞬間、

『分析完了』

『つっ』

突然の喋り声と、ふわりと身体が浮かび上がったかのような感覚。そして天地が逆転する。

『「ごあああつ！』』

背中に入った衝撃で、ようやく投げ飛ばされたのだと理解した。

続けて腹部を蹴り飛ばされ、ゴロゴロと大地を転がる。

『この有機生命体から膨大なエネルギー量を感じ。危険と判断。よって……』
両腕を掲げ、高らかに宣言をする。

『この星の人間を、リセットする』

落ち着きのある声が、人々が逃げ惑う内浦の街に響いた。

『つ……！この声……』

「……ダイヤさん……？」

説教と言う形で嫌になるほど耳に染み付いたこの声。もしやと思い、悪寒が背中を伝う。

『まさか……』

ゼロの両目から放たれた光がギャラクトロンの身体を照らす。

すると、赤いコアの部分の奥に小さな人影を発見した。

この光は透視光線だ。よって中の様子もはっきり見える。

無数のコードに巻き付かれ、光のない虚ろな目をした黒髪の少女。

間違いなく、黒澤ダイヤはそこにいるのだ。

『取り込まれて……』

「……でも何でダイヤさんはあんなこと言ってんだ？」

『……恐らく、情報伝達の媒介手段として操られてやがる……。もしくは人質か……』

「そんな……」

どちらにしろダイヤがいるのでは迂闊に攻撃が出来ない。

『まずはあいつの救出が最優先だ！ 行くぞ！』

「言われなくても！」

勢いよく立ち向かっていくが、既にカラータイマーは点滅を始めている。ペダニウムゼットン戦で消費したエネルギーを考えると、猶予はそこまで残されていないだろう。

よって今は一秒一秒が惜しい。一刻も早くダイヤを救い出さなくては。

『アエヤア！』

攻撃してもダイヤに危害が及ばない様に、右腕へと鋭い突きを繰り出す。

いち早く感じたらしいギャラクトロンはそれをかわし、戦斧を手に取り振り向きざまに一閃。ゼロがそれを受け止め、鏢迫り合いの形になる。

『おいお前！ 大方ギルバリスの兵器だろうが、人質なんて姑息な真似しやがって。さっさとそいつを開放しろ！』

機械ならではの恐ろしいパワーに押されつつも、何とか踏ん張って声を張り上げる。

『私は、私に与えられたコマンドを実行しているに過ぎない。君はこの星とは無関係な

存在だ。邪魔をするな』

『んだと……』

『邪魔立てしようと言うのなら……、容赦はしない』

『ほぎきやがれ!』

根性で押し返し、右腕を蹴り上げて体を捻る。

『終いだ!! プラズマスパークスラッシュ!!』

煌くゼロツインソードが、無防備な右脇を切り裂かんと剣線を描く。

完全に決まったと思った。それなのに。

『なん……だと……』

その剣はまるで見えない何かに阻まれた様に、炸裂する直前に弾かれてしまった。

「はあっ!!」

『コイツ……。まさか光の攻撃が効かないのか……。?』

光の攻撃が通用しない。

それは光の戦士であるゼロにとって、有効な攻撃が無い事を意味していた。

刹那無数の魔法陣が浮かび上がり、それぞれが意思を持っているかのようにゼロを囲

んだ。

そして、

『ぐあああああああああ!!』

全方向から放たれる破壊光線。

防ぐ手段もなければかわすことも出来ない。吹き飛びもせず、ただただその光線を浴び続けるだけ。

『理解した。君は争いを生む敵だ』

『う……ぐう……!』

魔法陣を消し、ゼロの首を掴んでそのまま軽々と持ち上げる。カラータイマーの点滅はその速度を上げ、もう本当に時間がない事を残酷に告げる。

『よってりセツトする』

『があああああ……!! ああ……!! ああああああ!!』

腕からの放電と共に繰り出される無機質な無数の斬撃。執拗なまでに過剰な正義がゼロを襲う。切り刻まれた傷からは血ではなく、光の粒子が漏れ出ていく。

それを遠目で見ていたAoursメンバーは、そのあまりにも凄惨な光景に口元を手で覆っていた。

ギヤラクトロンが腕を離すと、ゼロは力無くその場に膝を折——らずに踏ん張り、大きく振りかぶって拳を突き出す。

『なろっ……!』

だが拳がギヤラクトロンへ届く前にカラータイマーが止まり、霧散するようにゼロの身体は掻き消えて行った。

三十九話 悪魔との契約

「嘘……、ゼロが……」

目の前でゼロが敗北し、表情を一気に絶望に染め上げるAqours。

そんな一同の眼前には、たった今ゼロを葬ったロボット。ギヤラクトロンMK3が佇んでいる。

今までどんな敵だって打ち破ってきたゼロを、何もさせずに圧倒する程の力を秘めた恐ろしい敵。

今はもうそれを止める者がいない事を悟った瞬間、千歌の身体は震えあがった。

ゼロが敗北する程の強敵だ。人間の力が通用するとは到底思えない。

きつと数時間後には、内浦は火の海になっているだろう。

そんな千歌の予想を肯定するかのようにギヤラクトロンMK3は市街地へと体を向け、

そこで停止した。

「え……?」

どういう訳か、ギヤラクトロンMK3は止まったのだ。何の前触れもなく。石造の様にピクリとも動かず、機能が停止したかのように思える。

「どうなってるの……?」

隣で曜が声を漏らす。

もしかしたらゼロの攻撃が効いていたのかもしれない。でなければ説明がつかないだろう。

「ダイヤツッ!」

「お姉ちゃんっ!!」

ひとまずほつと息をつく千歌の隣を風の様に走り抜けていく三体の影。果南と鞠莉とルビィ。

それを見て千歌も走り出す。安堵している暇などないからだ。

あの中にはダイヤが捕まっているのだ。いくらギヤラクトロンMK3自体が止まったとはいえ、中のダイヤがいつまでも無事である保証はない。

ただただ彼女の無事を祈って、八人はギヤラクトロンMK3へと向けて四肢を動かした。

やがてその元にたどり着いたAqoursの目に映ったのは、辺り一面の焼け野原と、倒れ伏す一人の少年の姿だった。

「っ!! 陸ちゃん!!」

「陸!!」

その少年の正体が分かるや否や、千歌と曜が慌てて駆け寄る。

「陸ちゃん! 陸ちゃん!!」

「……………酷い怪我……………」

煤まみれになっている陸の怪我は、思わず目を覆ってしまふ程に酷い。

もはや怪我をしていない部分を探す方が難しい程に全身を占拠する切り傷と火傷。青く染まった打撲の跡も垣間見え、早くしなければ命に関わる事は目に見える。

「ねえ陸ちゃん! 起きてよ! ねえつてば!」

いくら身体を揺さぶっても、いくら呼びかけても、陸が目覚ますことはなかった。必死に叫ぶ千歌の目から零れた涙が陸の頬を叩く。

「早く病院に……………」

「でも…………、お姉ちゃんが……………」

慌てる花丸とルビィ。梨子と善子に至つては声すら出せないでいる。

何をすべきなのか分からない。そんな空気が蔓延する中、手を叩く乾いた音が響いた。

「ひとまず。役割を分担しよう」

そう言ったのは果南だった。

それに鞠莉が続ける。

「りくつちの怪我也酷いけど、ダイヤを放っておくことも出来ない。だから二チームに分かれるの。ちかつち、曜、梨子、花丸はりくつちを病院に連れて行ってあげて。私と果南。ルビィと善子はダイヤを何とか助けられないか方法を考える。それでいい？」

最年長の三年生二人が混乱する六人に提案し、六人も納得したように首を振る。

「行こう。千歌ちゃん」

「うん！」

曜と共に意識のない陸を担ぎ、千歌は最寄りの病院に向けて全力で足を前に進ませた。

ふと目が覚めた。

一体どれぐらい眠っていたのか。

頭に響く爆発音と、脳裏に浮かぶ白いロボットの姿。

いったいこれは何なのか。

記憶の泥濘から探り、その正体を引きずり上げた時には、反射的に陸の身体は起き上がっていた。

「っ!!」

そこで映った景色が見覚えのない場所だと理解し、きよろきよろと周囲を見渡す。周りにはベッドが置いてあり、自分もまたそこに寝かされている事に気付く。

白一色の壁や天井から察するに、どうやらここは病院らしい。

〈起きたか陸。怪我の感じはどうだ?〉

耳を撫でるゼロの声。試しに片腕を上げてみると、

「.....めっちゃ痛い.....」

どれだけの衝撃を受けたのか。マガゴモラの時とは比較にならない程傷は痛む。

でもまあそれはそうだろう。なにしろ今回は手も足も出ずに完全に敗北したのだから。

へ良かったな。痛みがあるのは生きてる証拠だ。ほら、だったらそいつ等を早く起こし

てやれ」

「あ……？」

ゼロに言われて今更腿に重さと温かさを感じ、視線を落とす。

そこで眠っていたのは陸が最も慣れ親しんだ少女二人。千歌と曜だった。

「そいつ等、頑なにここから離れようとしなくてな。余程心配だったんだらうよ。早く

無事だつて事を教えてやれ」

「……………」

寝息を立てる幼馴染の顔を見据える。

ぐっすり眠っているところを起こすのは申し訳ないが、ゼロの言う通り早く起こして

安心させてあげるとしよう。

「おい。起きろお前等。重い」

雑に二人の身体を揺さぶると、先に曜が目覚めた。

「ん……………」

曜は顔を上げると、寝ぼけまなこを開く。

少しの間ぼけーっと虚空を眺めた後、陸の顔が目に入る。すると陸が何か言うより早

く飛びついてきた。

「陸——っ！！」

「うおっ!!」

果南の様にハグをしてくる曜。普段はこういう事をするタイプではないので妙に気恥しい。

「うあ……? どしたの曜ちゃん、大声出して……?」

今のでお寝ぼけ大魔王の千歌も目を覚ました。曜の事を確認しようとしたその赤い瞳に陸が映り込む。

そして曜と同じ結果になった。

「陸ちゃ——んっ!!」

「あだだだだっ!!」

千歌も曜も全力で抱き付いてくるので尋常じゃなく傷や火傷が痛む。だが二人ともそんな事お構いなしに回した腕に力を込めてくる。

ゼロの言う通り本当に心配してくれたらしい。

嬉しさ半面申し訳なさもあり、どうしようか迷ったが、やっぱり痛いので二人を引き離す。

「……………良かった、生きてて…………」

目尻に涙を浮かべてそう呟く曜。

陸も二人が無事だった事にひとまず安堵する。

二人が無事だったという事は、他のA q o u r sのメンバーも無事だろう。そう思った時、あるとんでもない事実を思い出す。

「そうだギヤラクトロン！ いやダイヤさんはっ?!」

血相を変えて千歌と曜に顔を寄せる。

陸とゼロが敗北したあのギヤラクトロン。あいつの中には、ダイヤが囚われていたはずだ。

時計を見れば、あれから既に二十四時間以上経ってしまっている。中にいたダイヤは、そもそもギヤラクトロンは今どうなっているのか。

陸の問いに、千歌と曜は首を横に振って答えた。

「まだあの怪獣の中……」

苦渋に滲んだ声音が、残酷な響きで耳朵を打つ。

「ッ！」

「ちよつと！ その怪我じゃまだ動いちや駄目だよ!!」

矢も楯もたまらず飛び出そうとする陸を千歌が慌てて取り押さえる。

「放せ！ 早く助けに……」

陸の怪我こそ酷いが、二十四時間も眠っていればゼロの方は流石に回復しているだろう。

〈落ち着け〉

千歌に続いて陸を制したのは、何とゼロだった。

〈ギヤラクトロンは今活動を停止している。恐らくこの地球上をスキャンしてるんだろうよ。俺との戦闘で少しはエネルギーを消費したはずだから、もうしばらくは焦る必要はない〉

それを聞いて冷静になった陸はおとなしくベッドに戻る。

確かに今ギヤラクトロンが動きを止めているのなら、こちらは行動を起こさない方がいいだろう。

下手打って早々にギヤラクトロンが動き出せば、こつちには打つ手がない。

だからある意味動きを止めてくれるのは不幸中の幸いだ。その間に何か策を練れる。

だが神は簡単に思考を巡らせてはくれなかった。

「……ねえ陸。何であんなところにいたの？」

陸の顔と真正面から向き合う曜。あろうことか最も返答に困る質問の内一つを投げかけてきたのだ。

その瞳は、憂わし気に揺れているようにも見える。

「花丸ちゃんに聞いたけど。前もこんな感じで倒れてたことあったんでしょ？」

「……まあ、そうだが……」

「……それにダイヤさんが捕まってる事も知ってるし」

「……捕まるのが見えたんだよ。それで心配になって——」

「嘘だ」

筋が通っている様にも思える陸の説明を、千歌は一言で切り捨てた。

「陸ちゃん。何か隠してる時の顔してる」

「……」

予想外の反応に戸惑う陸。困って曜の方に視線を流すと、曜も同じような顔で陸を見ていた。

流石は幼馴染とでも言おうか。表情の差異で陸の嘘に気付いたらしい。

「……最近、ずっとそんな顔してるよ」

「なんか変だよ陸。東京行つてからあんまり笑わなくなつたし。悩んでるみたいなの……まさかそこまで看破されていたとは。」

いや、なんとなく陸も察していたはずだ。彼女達の変化に。

ここ最近、A q u o r s の陸への態度がどこか変わった気がする。

後から入った三年生を覗き、何故か全員、時折心配するかのような視線を陸に向けるのだ。

特に千歌と曜は、陸に対して寂しげな表情を浮かべる事が多くなっていた。全ては東京、いや、ダークネスファイブに連れ去られてから。

「……お前等も東京行つてからなんか変だぞ。宇宙人に誘拐されたとか言つてたけど、なんかあつたのか？」

連れ去られた翌日、千歌が陸に向けた言葉の真意も気になる。

ほぼ確実に、千歌達はダークネスファイブに何かされたか、もしくは何か言われている。今まで漠然と陸の中で立てられていた仮説が今、確信へと変わる。

陸の問いかけに、千歌と曜は少し困り顔を見合わせ、やがて決意したように頷いた。

「……陸ちゃんに関わるなつて言われた……」

「っ……!」

怒りにも、寂しさにも似た感情が湧き上がる。

そんなこと言う奴一人しかいない。

メフィラス星人魔導のスライ。聞けばA q o u r sの誘拐を提案したのも奴だったという。

「……陸？」

途端に顔を歪ませて拳を握る陸の顔を、曜が覗き込む。そこで色々と察したのか、見透かすような視線を向けてくる。

「……やっぱり何か隠してるでしょ」

答えることなく、陸は俯いたままでいる。

千歌と曜の言っている事は正しい。何一つ間違つてはいない。

だからこそ真実を告げるべきなのか迷う。

いいや違う。伝えるべきなんだ。伝えなくちゃいけないんだ。既に彼女達を危険に

晒した陸にはその責任がある。

それでも怖い。真実を告げる事で、今のこの関係が崩れる事が。

「……………陸ちゃん」

千歌が陸の手を握り、じつと視線を重ねてくる。逸らしたくても逸らせない。

だから陸もまたじつと見つめた。千歌の顔を、そして曜の顔を。

すると今までの葛藤が嘘の様にあっさりと答えが出たのだ。

何故なら分かってしまったから。いや、正確には分かっていたけれどもどこかで納得

できなかった答えに、納得しざるを得なくなったから。

当然だ。自分のワガママと彼女達の安全。そんなもの秤にかけるまでもない。

「……………千歌、曜」

「……………」

目の色が変わった事で、二人共緊張した面持ちで陸を見る。

「……俺は——」

「先輩！」

意を決した陸が言の葉を紡ごうとした刹那、見覚えのある顔が聞き覚えのある声と共に駆け込んでくるのが見えた。

「仙道君……。良かった。目が覚めたんだ……」

さらにもう一人、病室へと入ってくる見知った顔。

桜内梨子に、国木田花丸。

付きっきりの千歌と曜に何か差し入れでも持ってきたのか、片手にはビニール袋をぶら下げている。

千歌と曜は二人が入ってきたのを見ると、真剣味を帯びた表情で二人と向き合う。

「……ダイヤさんは……?」

「……」

梨子は何も言わなかったが、代わりに首を横に振って答えた。

「そっか……」

「ゼロもないんじゃない……、どうしよう……」

「まるで出来る事、なんにもないすら……」

その声音には明らかな絶望が滲んでいた。

陸は大怪我を負い、ダイヤはギャラクトロンに捕まり、頼みのゼロはいない。彼女達はそう思っているのだろう。

「鞠莉さんはこんな状況だけど、皆学校には行くようになって……」
「……そっか」

「まあ、確かにここは任せるところに任せただ方がいいのかな……」
任せると言っても、異次元の科学技術の結晶であるギャラクトロンに、それより遙かに劣った地球人の科学力がどこまで通用するのか。

皆それは分かっているが口には出さない。口にしたら終わりの事も分かっているから。

「とりあえず仙道君も気が付いたし、今日はもう遅いから帰ろう？ 親御さんたちも心配するよ？」

「……うん」

「そうだね……」

「じゃあ先輩。お大事にずら」

「お、おう……」

重苦しい表情のまま、四人が病室から出て行った。

そしてそれは陸も同じ事。

ダイヤの安否が心配という事もある。そしてもう一つ。

「……………また……………」

梨子と花丸の登場によって、前と同じように伝える事が出来なかった。

真実を告げるのが今の陸の責任。そのはずなのに。

でも、心のどこかでその事にほつとしている自分もいて、腹が立ってくる。

「……………やっぱダメだな……………俺……………」

更に闇が深くなるのを感じながら、陸は再びベッドへと潜りこんでいった。

その頃、サイドアース。

東京、梶尾地区。かつてウルトラマンベリアルが降臨した地。

『ハアアアアア!!』

つり上がった青い目をした巨人が、別宇宙でゼロを倒したのと別型のギヤラクトロンの掴みかかっていた。

『何でコイツが……、倒したはずじゃ……』

『特徴が一致。間違いなくギヤラクترونMK2です』

『てことはギルバリスの兵器って事？ ギルバリスは倒したはずじゃ……』

『ギルバリスは数万年前から各宇宙に大量のギヤラクترونを放出しています。大元のギルバリスを打ち取ったとはいえ、まだまだ多数が健在。恐らくはそのうちの一体かと』

『ギヤラクترونってそんなにいるんだ……。デヤア!』

回し蹴りがヒットするが、重く固いその体躯にダメージを与える事は出来なかった。

逆に振り上げられた大剣が胸を突き上げ、跳ね飛ばされてしまう。

『が……あ……』

痛みに悶え、地面を転がりながらも、巨人は両腕をクロスさせた。すると巨人の目が更に青く光り輝き、両腕に赤と黒の雷が集中していく。

後転の勢いを利用して起き上がった巨人が腕を掲げ、そのまま十字に組んだ。

『レッキングバーストオオオオオオ!!』

放出されたエネルギーは光線となり、ギャラクトロンMK2の赤いコアパーツに直撃する。

激しく赤と黒の閃光が迸った後に姿を現したギャラクトロンMK2は、全くの無傷。バリアを張って光線を防いだらしい。

だが戦況が有利であったのにも拘らず、自身の頭上に巨大な魔法陣を出現させ、吸い込まれるようにその中へと消えていく。

『待てっ!!』

それを追うように巨人、ウルトラマンジードは地面を蹴り、自らもその魔法陣へと突入していった。

「ふう……」

陸が焦燥と落胆を含むため息を漏らす。

あれから眠らずにずっと思考を巡らせているが、この状況を打破できる策は何も浮かばない。

千歌達に真実を告げる勇気もなければ、ダイヤを救うことも出来ない。情けなさすぎて笑えてくる。

「やつほー陸君。怪我の調子はどうだい？」

病室の入り口から声がする。

恐らく自分の見舞いに来た者だろうが、気分は穏やかではない。

何故なら……、

「随分とこっぴどくやられたみたいじゃないか」

振り向いた場所にいた声の主はオウガ。

来てくれたことに素直に、と言うか全く喜べる相手ではない。

「………笑いに来たのか？」

「まさか。ボクだつて瞬殺されてるんだから人の事言えるわけないだろ？」

そう言えばと、オウガが変身していたペダニウムゼットンもやられていた事を思い出す陸。

あんな爆発の仕方しておいてケロツとしているのを見るあたり、カドー星人の身体が

丈夫だというのは本当らしい。

「純粹にお見舞いだよ」

そう言つてレジ袋を投げつけてくる。

中にはアニメキャラがプリントされたウエハースの袋が入っていた。見舞い品のつもりだろうが、普通に要らなかった。

「……………ホントにそれだけか？」

陸が怪訝に眉を寄せると、オウガは意味深な笑みを浮かべる。

「……………へえ、周りの女の子の気持ちには疎いのに、そう言うのには鋭いんだね」

「やっぱなんか企んでやがったか」

身を乗り出す陸を、オウガは両手で制する。

「落ち着けよ。ダークネスファイブからの指示がない限りは動く気はないって言つたら？　ちよつと提案を持ち込みに来たのさ」

「……………提案？」

「そ」

今度は両腕を腰の後ろに回し、ずいっと顔を寄せてきた。

「陸君。ボクと手を組まないかい？」

「……………は？」

一拍の後、陸はようやくオウガが何を言っているのか理解した。

「何のつもりだ？　ダークネスファイブと組んでベリアルを復活させるとか言う話はどこ行った？」

「ああ違う違う。そうじゃなくてだね。あのギヤラクトロンを倒すまで一時的につて事
ゃ」

くるりとターンして陸から距離を取ると、腕から黒いオーラを漏らし始める。

「ボクは君に力を与える。君はあのギヤラクトロンを倒す。簡単な話だろ？」

そのオーラは見ているだけでも気分が悪くなる程にドス黒く、例えようのない瘴気を感ずる。

「…………お前にそれをする何のメリットがある？」

「それはね」

遂には声音にもドス黒さが滲む。

「アイツはボクとゼロ君の勝負の邪魔をした。それ以外に理由はいらないだろ？」

「……………」

思わず背筋が凍り付く様な感覚に襲われる。

オウガは笑っている。いつもと同じように笑っている。

だけれども、その目は全く笑っていないかった。

始めて見るオウガのそんな表情に、本能的に恐怖を覚えたのだ。

「今のボクの数少ない楽しみだつてのに、酷いもんだよね……。それに、ボクの力を得る事は君たちにも好都合だ」

「何……？」

「助けたいんだろ？　ダイヤちゃんを」

焦っていた陸の心境を見透かすような視線を向けるオウガ。

「アイツに光の力は通用しない。だからこそ闇の力が必要なんじゃないのかい？」

オウガの言う闇の力と言うのは、今のオウガを作るきつかけとなった者、ベリアル力の事だろう。

光の者であるゼロとは、まるで正反対の力。

まさに悪魔との契約と言ったところか。

「……どうする？」

正直どうすべきか分からない。

今の陸とゼロでは、ギャラクトロンに勝てないのは事実。それは悩みに悩んだ末に出した答えだ。

だがその事でベリアル力の力に縋ってしまったては、それこそ本当にベリアルと同じなってしまうのではないだろうか。

けれども、ダイヤの事は救いたい。

押し寄せる葛藤の波に陸が苛まれていると、遠くの方から巨大な何かが動いたような重い音がした。

「っ……」

窓からその方向を見てみれば、ギヤラクトロンが再び動き出し、市街地に向けて歩を進めていた。

そしてゼロとの一体化で強化された陸の目には見えてしまったのだ。

ギヤラクトロンの足元にいる、八人の少女の姿が。

「……時間はないみたいだけど……?」

いつの間にかこちらに向けていたオウガの腕に向けて、陸は自然の内に手を伸ばしていた。

〈陸……〉

(……ここまで来たら光も闇も関係無え。今必要なのはあいつを倒す力だ)

そうして陸は差し出された悪魔の腕を――

――掴んでしまった。

『この世界の解析は完了した。人類のみならず、この星の生物は絶えず争い、他者の命を奪って自らの命を繋いでいる』

ダイヤのものであってダイヤではない声が、人々が逃げ惑う町の中を反響する。

『宇宙に有り余るエネルギーを利用せず、他者から奪う食物連鎖と言う間違ったシステムを生み出した生態系を私は正す』

A q o u r s が足元で眺める中、ギャラクトロンMK3は両腕を掲げ、多くの人々が逃げ込んでいる避難所へと照準を定めた。

『この世界を、リセットする』

「お姉ちゃん!!」

『……?』

ルビイが涙ながらに声を張り上げる。

その声に向けられたのはギャラクトロンMK3ではない、その中に囚われているダイヤだ。

「ダイヤツ!!」

果南がそれに続くが、ダイヤからの返事が返ってくることはない。

その代わりに、ギャラクトロンMK3は無機質な動きでギャラクトロンベイルを手取る。

『感情は生命には不要なものだ。それが故に人々は憎しみ合い、貶め合い、争い合う。感情が完全なる世界の邪魔をする。我が正義は感情を必要としない』

「何が完全なる世界よ!!」

理不尽な正義を突き付けるギャラクトロンMK3に、鞠莉が噛みつく。

「女の子人質に取っついておいて、正義がどうか語らないで!!」

『……リセットする』

だが皮肉にもダイヤの声で一蹴され、耳を塞ぐようにギャラクトロンMK3は金色に戦斧を振りかざす。

「っ……」

思わず目を瞑るAqours一同。

その刹那に聞こえた大地を裂かんばかりの地鳴り。だがその中に自分達の悲鳴は聞

こえない。

気付けば浮遊感に包まれていた。

恐る恐る目を開くと、自分達が蒼い光の中にいるのが分かった。

「ゼロ……?」

『……』

巨人の顔が見えた。

掌に自分達を乗せ、ギャラクトロンMK3から距離を取る様に飛び去るウルトラマンゼロの姿が。

「……?」

自分達、そしてゼロが無事だった事を喜ぶ前に、普段と違うゼロの雰囲気違和感を覚えるAqours。

やがてゼロはAqoursの安全を確保し、ギャラクトロンMK3と対峙した。

『……しづとこ……』

極太の光が一閃。

奴の胸部から放たれた光線が、空気を焦がしながらゼロへと迫っているのだ。だがその光は、

．．．．．黒い、何かによって掻き消された。

「え．．．．．？」

その声は誰のものだったのか。

今の光景を見た、全員のものだったのかもしれない。

「何．．．．．あれ．．．．．」

「ゼロ．．．．．、なの．．．．．？」

人々の視線が集まる中、そこに立っていたゼロの姿は——黒かった。

漆黒に染まった頭部と肩のプロテクター。銀色のラインは存在せず、代わりに血の様な赤の中に黒の模様が走る禍々しい肉体。

全身から溢れ出る闇。ゼロでありながらゼロでない存在がそこにはいるのだ。

闇の権化と呼ぶにふさわしい、禁断の姿。

仲間と言う支えが無かったら誕生していたかも知れない、ゼロのもう一つの可能性。

—
ゼロ
ダ
ー
ク
ネ
ス。
—

四十話 正義無き力

人々の視線が集まる中、黒い巨人と白いロボットが静寂を保ったまま睨み合っている。

方やゼロダークネス。残忍かつ無慈悲な暗黒の戦士。

方やギヤラクトロンMK3。過剰なる正義の執行者。

相反する様で、どこか似偏ったものもある両者が、今衝突する。

『アアアアアアアア!!』

先に仕掛けたのはゼロだった。

今までのゼロとはまるで違う。黒い何かを纏った拳が炸裂し、発生した闇が霧散していく。

派手に転倒したギヤラクトロンMK3の頭部パーツを豪快に蹴り飛ばす。

起き上がったギヤラクトロンMK3に突進し、今度は左腕を蹴る。負けじと振るわれ

た右腕を屈んで回避し、背中に一撃。

続いて胸部に連続ラツシュ。前回全く歯が立っていないなかったのが嘘の様に、今はゼロが圧倒していた。

袈裟懸けに切り下ろされたギャラクトロンベイルを後方に飛びのいてかわすと、人間でいえば鳩尾にあたる部分に飛び膝蹴りを叩き込む。

『ヴオオオオオオ!!』

威嚇でもするかのように低い唸り声を上げるゼロに飛んできた金色の戦斧をあつさりを受け止め、それを闇で包み込んでいく。

『シヤア!!』

すつかり黒くなった後に投げ返された斧が、ギャラクトロンMK3の右腕を抉る。

『ツ——』

ゼロは背後に回ると、頭部のマスクに手を掛けた。

背中に足の裏をあてがうと、力任せにそれを挽ぎ取る。ギャラクトロンMK3は火花を上げて再び倒れ伏す。

そしてゼロがそのマスクを踏みつけている時だった。

「え……?」

そんな声が、遠巻きからそれを見守っていたAquoursの鼓膜に触れたのは。

「えっ? えっ? っ(っ)ど(っ)ですの?!!」

先程までの無機質な声音ではない。

きちんと戸惑いと言う感情が混ざった、人間の声。それがギャラクトロンMK3の拡声器に乗って聞こえてきたという事は。

「お姉ちゃん!!」

ルビイが歓喜の声を上げる。

ルビイだけでなく、他のAqoursメンバーも安堵するようにほっと息をついた。今のゼロの攻撃で、ダイヤの洗脳が解けたのだ。

姿が変わっても、ゼロはゼロのまま。ダイヤを助けようとしてくれていた。Aqoursがそう思った時だった。

——— 本当の悪夢が始まったのは。

『……………』

ダイヤの意識が正常に戻った後、ゼロはおもむろにギャラクトロンMK3へと近づいていき、掌を翳す。

『ハアア!!』

ダイヤのいる胸部に、漆黒の光線、デスシウムショットを叩き込んだのだ。

「え……………」

ルビイの口から掠れた声が漏れる。

『アア・・・』

今の一撃で地面を転がり、マスクも挽ぎ取られたギャラクトロンMK3の頭を掴むと、それを地面に叩きつける。

「きやああああああああ!!」

聞こえるダイヤの悲鳴。だがゼロの攻撃は止まらない。

『アアアアアアアア!!』

マウントポジションを取り、黒く染まったゼロスラッガーで白いボディを何度も何度も切り刻んでいく。

時に踏みつけ、時に拳を振り下ろし、その度にギャラクトロンMK3の機体から火花とダイヤの悲鳴が上がる。

「え・・・・・・・・、嘘・・・・・・・・」

突然の事にしばらく呆然としていたAqoursだが、ここでようやく目の前で何が起こっているかを理解することになる。

ゼロは攻撃を続けているのだ。ダイヤの無事が確認できてからも、執拗に、過激に、まるで中にいる少女の事などどうでもいいように、ただただ目の前の怪獣を破壊している。

暴走している。それは素人目から見ても明らかだった。

あれは守る為の戦いではない。殺す為の戦いだ。

「辞めてええええええええ——っ!!」

ルビイの叫びも、ダイヤの悲鳴も、そんなもの一切意に介す様子もなくゼロは猛攻を続けていく。

「ねえゼロ!! 辞めてよ!! ねえつてば!! ダイヤさんがいるんだよ!!」

千歌も必死に訴えるが、やはりゼロは耳を貸そうとしない。

いつの間にか奪い取っていたギヤラクトロンベイルを振り回し、殴打を繰り返す。

『ヴァアアアアアアアアアアアアアアア!!』

紅い稲妻がギヤラクトロンMK3を打ち、一際大きい悲鳴と爆発音が響き渡った。

「……流石にこれは想定外だったなあ……。まさしく、帰ってくれウルトラマンって感じかな? はは……」

遠方から暴走するゼロダークネスを眺めながら、やはりオウガは笑っていた。内心、冷や汗を掻きながら。

「……陸君なら制御できると思ってたんだけど、まだつて事か……、参ったな……」
このままではマズイ。陸は言うまでもなく、ゼロも意外と繊細な部分がある。

自分自身で守るべきものの命を奪ったとなれば、彼らは戦う事を放棄するかもしれない。それだけは何としても防がなければいけないのだ。

陸にベリアルを植え付けるのはスライの計画の一端だったが、時期を早まったかもしれない。ここでゼロと陸に戦意喪失してもらっては、オウガの計画がすべて潰れてしまう。

復活したベリアルを相手取るのは、彼らしかないからだ。

「……ん……?」

ふと仰いだ空に、光が一閃。

人間ならば決して見る事は出来ないが、人間ではないオウガには目視可能だ。それを見て、オウガは再びいつもの笑みと平静を取り戻す。

「……ここに来てくれるなんて、やっぱりウルトラマンは救いのヒーローだね」

呆然と、その光景を眺める事しか出来なかつた。

『ダアアアアアアアアアア!!』

内浦に響く、殺戮の咆哮。

何も出来ず、ただ涙を流し、黒い巨人が暴れ狂う様を。

友人の命が、零れゆく様を。

ただただ残酷に、時だけが過ぎてゆく。

「.....」

周りの被害を一切顧みず、満身創痕の怪獣にも一切容赦せず、相手の息の根が止まるまで攻撃を辞めない暴虐舞人な姿。

もはやそこに、人々の心に希望を灯したウルトラマンはいない。

悪意などないはずなのに止まらない。力のままに相手を破壊する、もう一体の怪獣。

A q o u r s がゼロに向ける感情はただ一つ、恐怖だけだ。

『ダアアアアア!!』

故障部位から噴出したオイルで純白のボディを黒く染め上げたギャラクトロンMK3を、ゼロは乱暴に投げ飛ばす。

転がるギャラクトロンMK3から漏れる悲鳴など、今のゼロには聞こえていない。それを示す様に、ゼロは黒いゼロスラッガーをカラータイマーの左右に装着した。

黒い光が収束していくのを見て、人々はゼロが何をしようとしているのかを悟った。あの怪獣に、止めを刺そうとしているのだと。

ギャラクトロンMK3の中にダイヤが囚われている事を知らない人々は早くも歓声を上げるが、Aqoursは必死にゼロを止めようと声を張り上げる。

「ゼロさん辞めて!! お姉ちゃんが……お姉ちゃんが死んじゃう!!」

「お願い!! いつもものゼロに戻ってよ!!」

『ヴ……、グウ……』

Aqoursの悲痛な叫びに、ゼロはようやく我に返ったように動きを止めた。

必死に何かに耐え、悶えながらもゼロスラッガーに掛けたその腕を下そうとするが、

『ギギ……、ガ……』

ただではやられないと言わんばかりにギャラクトロンMK3が放った光線がゼロを直撃してしまう。

その抵抗が、ゼロの戻りかけていた理性を吹き飛ばしてしまった。

『ディイイヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

消えかけていた黒い光は再び邪悪に煌き、破壊本能の塊と化して放出された。

「いやああああああああああ!!」

「ダイヤアアアアアアアアアア!!」

鞠莉と果南の絶叫も、もはや何の意味も持たない。

進むダークゼロツインシュートが、この世の理不尽を体現するかの如くギャラクトロ

ンMK3に直撃——、

その寸前、光が駆け抜けた。

『アユウウウウウツ!!』

ギャラクトロンMK3を、中にいるダイヤを庇うように、虹色の光線がダークゼロツ

インシュートと衝突。やがてその光線は漆黒の殺意を押し返し、ゼロを直撃した。

『「があああああ……!!」』

虹色の光線がゼロを飲み込んだ後、小規模な爆発と共に闇が弾け飛ぶ。爆炎が収まった後に現したゼロの姿は元に戻っていた。

禍々しい邪気はもうない。暴走が止まった事にひとまず安心するAquours。

『っ……!!』

理性を取り戻したのか、自身のやっていた事に気が付くとせわしなく周囲を見渡し、ある一点で固定された。

自然と、A q o u r s の視線もその方、七色の光線の発生源へと流れる。

『フウウ……』

そこには、一体の巨人が立っていた。

スラつとした肉体。黒と銀の中に、赤色のラインが走るシンプルな体色。

頭部に走る四本の意匠と、白く、形のいい双眸。胸に輝くOの字のランプ。

何よりも特徴的なのは、右腕に持った赤い大剣。

その巨人が、ゼロと同じ者だと理解するのに時間はかからなかった。

「ウルトラマン……?」

千歌が呟く中で、その巨人は膝を折るゼロに手を伸ばした。

『大丈夫ですか? ゼロさん』

『……オーブ……。ああ、大丈夫だ……』

その手を取り、ゼロが立ち上がる。

『闇の力を使っていたって事は、もうアイツに光の技が通用しない事は分かっているみたいですね』

ゼロと並び立つとその巨人、ウルトラマンオーブはギャラクトロンMK3へと大剣を

構え直した。

『待て……、あの中には人がいる……』

『なるほど、ギヤラクトロンらしい……。ゼロさん。まだ動けますか？』

『え？ あ……。ああ、行ける』

ゼロの返答を聞くと、オーブは首を縦に振った。

『なら……。協力してください!!』

刹那、オーブのカラータイマーから光が溢れる。

『ゾフィーさん！ ベリアルさん！ 光と闇の力、お借りします!!』

「フュージョンアップ！ ウルトラマンオーブ。サンダーブレスター！」

『へアアアアアアアア!!』

再び登場したオーブの姿は、先程までとは打って変わっていた。

体色は変わらず、赤、黒、白の三色だが、体格が元のオーブからは考えられない程に膨れ上がり、マツシヴなものとなっている。

両肩に施された意匠、鋭い爪の様な黒い指先。

ベリアルを彷彿とさせる、赤くつり上がった目。

ゼロダークネスと同様に禍々しい雰囲気だが、その意思が邪気に満ちていないのは感じ取れる。

『闇を抱いて、光となる!!』

ファイティングポーズを取ると、地響きを轟かせながらオーブを分析していたギヤラクトロンMK3へと突進していく。

『ダアアアア!!』

掴みかかると即座に胸部の赤いコアパーツに手を掛け、強引にそれを引き千切る。空いた穴からはダイヤの姿が確認できた。

『ゼロさん、今です!!』

『ッ!!』

一瞬遅れてゼロが飛び出し、ルナミラクルへとタイプチェンジ。以前善子を救出した時の様に身体を光の粒子へと変え、ギヤラクトロンMK3の体内へと侵入する。

一拍置いて青い光が飛び出してきたのを確認すると、オーブの周囲のエネルギー量が爆発的に上がり始める。

『オオオオオオオオオオオ!!』

右腕に闇、左腕に光、反発し合う二つの力がO状の輪を作り、互いのエネルギーを高め合っていく。

そして腕を叩きつける様に十字にクロスし、放たれた光と闇が輪を貫く。

螺旋状の闇を纏った光の線はギヤラクトロンMK3の土手っ腹を穿ち、盛大に大穴を

開けた。

『ツ————ツ!!』

サンダーブレスター最強技、ゼットシウム光線によって、行き過ぎた正義の執行者は爆散していった。

同時に八人の元へと降り立つ青い光。

ようやくギャラクトロンMK3から解放され、そつと地面に下されるダイヤ。

「『ツ————!!』」

そんなダイヤに何か言うよりも早く、ルビイ、果南、鞠莉の三人が約二日ぶりに見るその少女に抱き付いた。

「お姉ちゃん……ひぐつ……お姉ちゃん……よがったああああ!!」

ルビイは東京帰りのあの日以上に盛大に泣き続ける。

果南と鞠莉は何も言わないが、顔を埋めて嗚咽を漏らしているのは確認できた。

抱き付かれたダイヤは照れ、他の五人も涙を浮かべながらその光景を見守る。

今まで張りつめていた緊張や不安から解放され、やつと笑えるようになった。

A q o u r s を見下ろしている、ただ一人を除いては。

『………』

無言でゼロがA q o u r s に背を向ける。

『……オーブ。助かった』

声音はいつになく重々しく、その中にどれだけの自責の念や罪悪感が込められているかは伺い知れない。

『……すまなかつた』

短くそう言うのと、ゼロはオーブを残し、九人の少女から逃げる様に空へと飛び立つていった。

数時間後。

「とにかく、無事でほっとしたよー」

Aqoursは検査を終え、一時的に入院したダイヤを見舞うために病院の一室を訪れていた。

「ええ、心配かけましたわ……」

布団に突っ伏して眠るルビィの頭を撫でながら、ダイヤは千歌達に微笑みかけた。

ダイヤは多少衰弱していたものの目立った外傷はなく、翌日には退院できるらしい。

その事は千歌達、そしてゼロには何よりも救いだっただろう。

ここで話がゼロに切り替わる。

「……皆はどう思う？ ゼロの事……」

その話題を切り出したのは千歌だった。

ギヤラクトロンMK3の中にダイヤがいた事を知っていたのは千歌達A q o u r s と陸。そしてゼロだ。

知っていたのに、ゼロはダイヤの救出よりもギヤラクトロンMK3の殲滅を優先した。

「私は……、許せないかな……」

果南がそれに答える。

「どういう事情があったのか知らないけど、ダイヤの事殺そうとしてたんだよ？ あのウルトラマンが来てくれなかったら今頃どうなってたか……」

果南の意見はもつともだ。それは到底看過できるものではない。

「……でもゼロさんは優しい人すら。何回もまる達の事助けてくれたし……」

花丸が苦悶の表情でそれに言い返す。

花丸の言っている事も正しい。A q o u r sの中に、ゼロに命を救われた事が無い者はいない。

だからこそ、今こうして目の前に突き付けられた現実をどう対処したらいいのか分からないのだろう。

それは千歌も同じ。だから皆に意見を求めたのだ。

「……ダイヤはどう思う？」

鞠莉の問いに、全員がダイヤの返答を待つ。

ダイヤがゼロを許すか許さないかで自分達の意見が決定される訳ではないが、それでも彼女の意見は聞いておきたい。

「……分かりますわ」

複雑な表情を浮かべるダイヤ。

「……ゼロさんが何を考えてあなつたかは分かりませんわ。わたくしを救おうとした結果なのかもしれませんし、そもそも助ける気なんか無かつたのかもしれないし……」

「……けど……」

「……あんな悲し気に『すまなかつた』と言われてしまつては、とても責める気

にはなれませんか……」

誰もそれに言い返そうとはしなかった。

恐らくゼロも、あの力を使う事の危険性を理解していたのだろう。

苦渋の決断であの力を行使し、結果暴走に至った。

それがダイヤを助けようとした故なら、一概に悪者とは言えない。

「……陸ちゃんは どう思……陸ちゃん……?」

部屋にはもう一つベッドがあるが、そちらは空だ。

ダイヤと同室であつたはずの陸が、何故かいなかった。

「……陸ちゃんは……?」

「……数時間前に出て行つてから帰つてこないよ、看護師の方が言っていましたわ」

「え……? あの体で一体どこ行っちゃったの……?」

千歌と曜が探しに行こうとすると病室のドアが開き、ふらふらと陸が入つて来る。

「もう! どこ行つてた……」

叱ろうとした曜だが、陸の顔を見た瞬間、その言葉は声にはならなくなった。

その顔には魂が抜けてしまったかのように生気が無く、瞳からも光が失われている。

千歌も曜も、こんな陸は始めて見る。

「陸ちゃん……?」

ただならぬものを感じた千歌がその肩に触れようとするが、陸は千歌を一切見ずにその横を通り過ぎた。

そしてダイヤの傍らに立つ。

「……………仙道さん……………」

ダイヤも陸の様子が普通ではない事を感じたのか、不安気にその顔を覗く。

「……………すみませんでした……………」

消え入りそうな声でそれだけ言い残し、幽霊の様に再び病室から出て行こうとする。

「陸ちゃんー！」

千歌の呼び止めにも応じず、陸はその場から消えた。

不穏な気に押され、誰もその後を追おうとしない。

それ以降、陸がAqoursの前に姿を現すことは無かった。

四十一話 銀河の風来坊

とある休日。

「……陸、今日も来なかったね……」

ダイヤの退院後、いつもの様に練習を再開したAqours。

ただし、そこにずっとAqoursを見守ってきた顔がない。

ゼロが暴走した日、病室で何故かダイヤに謝ったあの日以降、陸はAqoursの練習に顔を出さなくなった。

唯一顔を見ているのは、自由に陸の家を出入りできる曜のみ。

「それで？ 陸はどんな感じなの？」

果南の問いかけに、曜は悲し気に表情を曇らせる。

「……見る度にやつれていつてる気がする。何があつたのか聞いても答えてくれないし……」

「……よしよし」

涙ぐむ曜を、果南が優しくハグして頭を撫でる。

「・・・仕方ないよ。陸、昔からそう言う子じゃん」

「そう言う果南の表情も、やはり仄暗い。」

「そんなんずら?」

「・・・うん。悩み事とか、全部一人で抱え込んじゃう子なんだよね・・・」

「でも、あんな陸見た事ない・・・」

あの日から、Aqoursの雰囲気も少し重苦しいのだ。

別に普段陸がムードメーカーをやっている訳ではないのだが、見慣れた顔が無いのはやはり調子が狂う。

「よしー」

不意に鞠莉が手を叩き、自然とそちらに視線が移る。

ちなみに本来浦女にはいないはずの陸がスクールアイドル部に入り浸っている事に誰もツッコまないのは、ほとんどこの人の影響である。

「練習が終わったら、皆でりくつちのハウスに押しかけに行きましょう!」

「いや、流石にそれは・・・」

「あいつ変わらず頭固いわねダイヤは。こういうのは強引さが大事なのよ」

「ですが・・・、モラルと言うものが・・・」

「行こう」

「千歌さん？」

今まで黙っていた千歌が賛成の意を表明する。それに続き、曜、果南の幼馴染二人も首を縦に振った。

「鞠莉さんの言う通りだよ。ちゃんと陸ちゃんの口から何があったのか言ってもらおう。力になれるかどうかは分からないけど、そっちの方がいいに決まってるよ」

「……うん」

「そうずらね」

「うゆ！」

「それに、リトルデーモンの家も少し気になるしね……」

一、二年生全員がそれに賛同し、残るはお堅い生徒会長のダイヤのみ。

ダイヤは自分以外の全員が陸の家に向かおうとしているのを理解すると、仕方なく白旗を上げた。

「……しやうがないですわね……。ただし、常識と言うものはわきまえて頂きますわよ。くれぐれも仙道さんの迷惑になるような事はしない様に！」

「そもそも、全員で押しかける時点で迷惑極まりないけどね」

「でもあの陸ちゃんだもん。このぐらいしないと答えてくれないよ」

皆が陸の事を心配してしてくれた事は素直に嬉しい千歌だが、それとは別の場所で何

かが心に引つかかっていた。

頭が弱いのでうまく言葉では言えないが、なんかこう、胸がざわつく。

(・・・・・・・・大丈夫だよね・・・・、陸ちゃん・・・・・・・・)

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

陸は家から少し離れた銭湯にいた。

この頃やたらと曜が家に訪ねてくる。恐らくは練習終わりも顔を出しに来そうだったので、こうして銭湯に避難しに来た訳だ。

きつと陸を心配しての行動なのだろうが、正直に言つて今は一人にして欲しかった。

一人で、己が犯した罪と向き合わせて欲しかった。

ちやぷりと、陸以外誰もいない浴槽の中に顔半分を沈める。

ちなみにゼロは今あのオーブに話があるとの事で分離中だ。

「……………」

そう、オーブだ。ウルトラマンオーブ。

あの時彼が止めてくれていなければ、きっと陸とゼロはダイヤを殺していただろう。ダイヤを救うために手を出した力に吞まれ、助けるべきダイヤを危うく殺しかけてしまうとは、情けなさすぎて笑えてくる。

「……………いやいや……………、笑えねえから……………」

今回は巻き込むどころの話ではない。

命を奪いかけたのだ。自分自身の手で。

ベリアル之力。陸のみならず、あのゼロですら暴走させる程の強大な力。

力が、これほどまでに恐ろしいものだとは思わなかった。

……………いや、力を理由にするな。全ては自分の未熟さ故。

ゼロはベリアル之力を使う事に乗り気ではなかった。陸が強引に押し切ったのだ。

だからベリアル之力に手を出したのは他の誰でもない。陸自身。

ダイヤを殺しかけたのは、陸だ。

「……………何がしてえんだよ……………。俺……………」

彼女達を守るつもりで戦ってきた。

それが戦う理由だった。六年前のスカルゴモラの様な脅威から、彼女達を守るつもり

だった。

だが蓋を開けてみれば、今まで陸がA q o u r sにしてきた事は何だ？

リトルスターを狙う宇宙人から守ってきた。だがその事で陸とA q o u r sの関係が奴らに浮き彫りになり、彼女達が狙われる結果になった。

拳句の果てに、自分自身で守るべきものを傷つけた。

自分こそが諸悪の根源。それはもう言うまでもない。

「………やっぱりだめだな………」

ゼロにはまだ守れると言われたが、もうダメだ。自分にはもう、彼女達と共にいる資格はない。

本当に彼女達が大事なら、今すぐ関わるのを辞めるべきだろう。

ある意味スライは正しい事を言っていた。

陸と関わるのを辞める。遂には自分自身でその結論に至ることになるうとは。なんともまあ皮肉な話だ。

「~~~~~♪」

自身への絶望のどん底にいる陸の耳朶に、お気楽な鼻歌が触れる。

どこかで聞いたような気がする歌声に顔を上げれば、がらりと戸を開けて脱衣所からこちらに入って来る青年が一人。

見た目は二十代くらいだろうか。精悍な顔つきで、体格もいい。

その青年は陸が浴槽に浸かっているのを見ると、残念そうに額に手を当てた。

「……先客……」

よほど一番風呂呂に入りたかったのか、そのままそこで固まってしまった。

陸は大した用もなくここにいたので、少し申し訳ない気もする。

「おし、切り替えよう。そう何度も贅沢できると思うな。俺」

唐突に割り切ると青年は身体を洗い、駆け湯をした後、何故か陸の隣に陣取ってきた。

「……一番風呂呂は地球で一番の贅沢だよな……。お前もそう思うだろ？」

「え？……は、はい……」

突然話しかけられ、困惑する陸。

「ああく……、染みる……」

肩まで湯船につき、至福の極みとでも言いたげな表情をする青年。見た目は若々しいのに、何故かとつてもじむさかった。

「……」

一人で考え事をしたくてここに来たのに、話しかけられてしまったては意味がない。

陸がそう思い湯船から出ようとした時、再び青年が口を開く。

「……なんか悩みでもあんのか？ 少年。いや……、ウルトラマン」

「ツ!!」

反射的にその青年から距離を取る陸。だが青年は更に笑みを深める。

「まあまあ、そう警戒すんなって。俺は敵じゃない」

「何で俺の事……」

警戒心を露わにする陸に、青年はその瞳を向ける。とても澄んだ瞳で、邪なものは一切感じられなかった。

「……………俺もウルトラマンだからな」

「え……………?」

そう言う青年の顔に、あるウルトラマンの姿が重なる。

「俺はガイ。クレナイガイ。ウルトラマンオーブだ」

「……ダメだ、いない……」

練習後、全員で仙道家に押しかけたAqoursだが、陸はいなかった。家にもいなければ、携帯も繋がらない。

まるでAqoursから逃げているかのように、陸の消息が全く掴めないのだ。「どこにいるんだろう……」

千歌が焦燥に駆られ始める。

「……宇宙人に何かされてたり……」

「え？」

「ピギイツー！」

ルビイの小さな呟きに果南が反応する。

「いやいや、まさかそんな……」

三年生は冗談だと思って一旦は笑い飛ばすが、一、二年生の表情を見てルビイが冗談でそれを言ったのではない事を悟る。

「……どうしたの皆……、そんな顔して……」

徐々に顔色を不安に染め上げていく果南。三年生を除く六人は顔を見合わせる。そう言えば三年生は東京遠征の際に何があったのかを知らない。

数秒の沈黙の後、千歌が切り出した。

「・・・それが、なんか陸ちゃん、宇宙人に目え付けられてるみたいなんだよね・・・」
「What!! りくつち一体何したの?」

「・・・ていうか、そんな事いっどこで言われたんですの・・・?」
首を傾げるダイヤに、千歌は視線を逸らしながら答えた。

「・・・東京行つて・・・、宇宙人に誘拐された時・・・」

「はああああ!! ちよ、どういう事ですの!!」

「お姉ちゃん落ち着いて!」

案の定千歌の胸倉を掴んで揺さぶるダイヤをルビイが宥める。

「そんな大冒険してたの?」

「言ってる場合ですか!! 大丈夫だったんですの?」

「・・・うん。その時はゼロが助けてくれて・・・」

思えば、陸の様子がおかしくなったのはその頃からだ。

今は分らないことだらけだが、陸とあの宇宙人たちに何らかの関係があるのだけは
確実だろう。

「じゃあ何? 陸は今宇宙人に何かされてるかもしれないって事?」

考えたくはないが、必然的にそう言う結論に至ってしまう。

(陸ちゃん・・・)

ここ最近、幼馴染であるはずの彼をとても遠い存在に感じるようになった。すぐ近くにいるはずなのに、手を伸ばそうとすればする程遠くに行ってしまうような感覚。

陸の事をこんな風に感じ出したのは、いつ頃からだったのだろうか。

「探しに行こう」

「千歌ちゃん？」

何故かは分からない。けど、このままでは本当に陸がいなくなってしまうような予感がする。根拠なんかないが、そんな気がしてならない。

「探すって……、一体どこをよ」

「とりあえず、陸ちゃんが行きそうな所全部」

「仮に見つけてどうするつもりですか？ もし本当に宇宙人が関わっているなら、わたし達が口出ししてどうこうなる問題ではありませんのよ」

「そうだけど！ 放っておけないよ……」

言いたいことがハッキリと表現できないもどかしさに口籠もる千歌。

それでも何とか言葉をひり出そうと天を仰いだその瞬間、千歌の視界にあるものが映り込む。

「え……」

それは空に浮かぶ、巨大な魔法陣だった。

「なるほど、それでベリアルさんの力を……」

風呂から上がり、陸はラムネの瓶を傾けているクレナイガイにベリアルの力を使う事になった経緯を説明した。

彼こそが、暴走する陸とゼロを止めてダイヤを救った張本人、ウルトラマンオーブ。名乗られた時は多少疑ったが、戻ってきたゼロの話を聞いて納得するに至った訳だ。

「……それで、暴走しちまったって訳か」

「……はい」

ラムネを飲み干し、ガイは俯く陸の頭に手を乗せる。

「まあ、大切なモンを傷つくのは、確かに怖いよな。それを自分でやっちゃまったんなら尚更だ」

そう、優しく言葉を投げかけてくる。

失敗をした子供を慰める様に頭を撫でられ、少し照れくさくなるのと同時に疑問も感じた。

「……………あの……………」

「……………ん？」

「……………咎めたりしないんですか？ ベリアルを力を使った事……………」

陸が問うと、ガイは腰から下げているホルダーから一枚のカードを取り出した。

そのカードに描かれていた者は、

「つ……………」

つり上がった赤い目に、紫に光るカラータイマー。そして、他のウルトラマンとは明らかに違う黒い体。

紛れもなく、ウルトラマンベリアル姿だった。

「俺だって、ベリアルさんの力を借りて戦っている。それに……………」

ガイの表情が、少し悲し気になる。

「……………俺も、お前と同じ過ちを犯した……………」

そこでガイは語った。

過去に自分が犯した、陸と同じ過ちを。

ガイも一度ベリアルルの力で暴走し、周囲の被害を顧みずに怪獣を殲滅したことがあるらしい。

危うく二人の人の命を奪いかけ、その事で一度は人類からの信頼を失ったという。

それでも、その信頼を取り戻せた分凄いなと思うが。

「……………だから俺にお前を責める資格はない」

そんな事を言われてしまつては何も言い返せないが、陸としてはハッキリ言つて欲しかった。

お前に仲間と一緒にいる資格はない、と。

いつそそう言つてもらえた方が、よっぽど気が楽だった。

「とはいえ、いくら悔やんでも過去は変えられないからな。だから今出来る事をやればいい」

「出来る事……………?」

「ああ」

ガイは立ち上がると、テンガロンハットを頭に被る。もう夏場だというのに革のジャケットを着こむその姿は、どこか風来坊然としていた。

「ウルトラマンだって、完璧じゃない。間違い、罪を犯す事も時にはある。大事なのは罪から目を背けない事、逃げ出さない事、受け止める事だ」

ガイの言葉は、痛い程に胸に刺さった。

戦いに巻き込んだのも、暴走して傷つけてしまったのも、全ては陸の罪だ。

だからこそ彼女達から離れようと思った。これ以上巻き込まない様に、これ以上傷つけない様に。

でもそれは彼女達から逃げ、罪を犯す痛みから目を逸らしていただけ。

「……どうしたらいいんでしょうね、俺」

自分でもどうしたらいいのか分からなくなり、ガイに答えを求める。

「……さあな」

だがガイは正解を示してはくれなかった。

「……それはお前自身が決める事だ。お前がこの先仲間とどう歩んでいくかは、お前しか決められない。……これは、お前の人生なんだ」

「……そう……、ですか……」

言われてみればそうだ。自分の道は自分で決める。

これはA q o u r sと関わっている内に自然と学んだことのはずなのに。そんな事も忘れていたなんて。

「まあ、頑張れよ。後輩」

最後にもう一度陸の肩を叩くと、ガイは懐からハーモニカの様な形状をした楽器、オーブニカを取り出す。

「~~~~~♪」

鼻歌でも歌っていた、どこか物悲しい独特なメロディを奏でながらガイは歩き去っていく。その向かう先では既に日が沈みかけていた。

「.....」

ガイの言っていたベリアル力の力による暴走。

きつとそれは、ギヤラクトロンMK3との戦闘で見せた姿、サンダーブレスターの事を言っているのだろう。

でもあの時ガイは、オーブは闇を克服し、ベリアル力を制御できていた。

どうしてそれが出来たかは分からない。でも確かに言えるのは、あの人にはそれが出来る強さがあつた。

実力とかそう言うのではなく、心の。その強さは陸にはない。

だからこそ、今夕日に向かって歩くあの人の背中はとても大きく見える。

「.....陸」

唐突に鼓膜を打つ、ゼロの声。

「……………何?」

「……………あいつ等から、A q o u r s から離れるとか言うなよ……………」

何も返せなかった。

ガイの言葉に納得はしたが、正直まだA q o u r s と関わるのを恐れている自分がい
るのも事実。

今日この日ほど、自分の弱さを痛感した日は無い。

オーブニカの奏でるメロディを背に、自分ももう帰ろうと歩みを進めたその瞬間、突
如別の音楽が周囲に流れる。

「ッ!! なんだ!!」

「つ……………!」

驚き、顔を上げた先にあつたのは夕空に浮かぶ巨大な魔法陣。

そして光のベールを纏いながら、魔法陣の中から何かが現れる。

「なっ……………」

魔法陣より出現したそいつは、轟音と共に内浦後に降り立つ。

それは先日倒したギヤラクトロンMK3に酷似していた。違う点を上げるのならば
エンブレムが無く、マスクが金色な事だろう。何故か所々に傷があるような気もする

が、それは今どうでもいい。

「何だアイツ……」

「ギヤラクトロンMK2だ。まさかまだ別の個体がいたとはな」

「ガイさんっ!!」

ガイはいつの間にか陸の隣に戻ってきていた。それなりに距離はあつたというのに、流石はウルトラマンと言ったところか。

「行くぞ！ 陸！」

ギヤラクトロンMK2を向かい打つべく、ガイはオーブのカラータイマーと同じ様な形状をしたアイテム、オーブリングを構える。

そしてカードホルダーから一枚のカードを取り出し、オーブリングにリードさせる。

「ウルトラマンさん！」

「ウルトラマン」

『シエアア！』

リードされたカードは光の粒子となり、ガイの右隣にウルトラマンが出現する。

「テイガさん！」

「ウルトラマンテイガ」

『チャア！』

続いてリードしたもう一枚のカードも同じ様に光の粒子となり、左隣にウルトラマンティガが出現。

「光の力………、お借りします!!」

「フュージョンアップ!」

天に掲げたオーブリングの左右が展開され、同時に光が溢れ出す。

光はガイの身体を包み、それに続いてウルトラマンとティガがガイの姿と重なっていく。

「ウルトラマンオーブ! スペシウムゼペリオン!!」

『シユワツ!!』

そして次の瞬間、土煙を巻き上げながら一体の巨人が出現した。

それがオーブだという事は分かったが、オーブオリジンともサンダープレスターとも違うその姿。

オーブオリジンより多少派手な外見をしており、肩にかかるプロテクターは変身の際に一瞬見えたウルトラマンティガの物と同じ配色だ。

あれがウルトラマンオーブ、スペシウムゼペリオン。ウルトラマンとウルトラマンティガの力を併せ持った形態。

〈おい陸! 俺達も行くぞ!〉

「っ……!! おう」

遅れて陸もウルトラゼロアイを装着し、ゼロへの変身と遂げた。

四十二話 運命への反逆者

『俺の名はオーブ！ 闇を照らして……悪を討つ！』

夕焼け空の下。

内浦の町に、いつもとは違う巨人の音が響く。

巨人の名はウルトラマンオーブ。

『オーブ。さっさと決めるぞ』

そして内浦の人間にとっては毎度お馴染みウルトラマンゼロ。

二体の巨人はファイティングポーズを取ると、同時に鋭いストレートキックを繰り出す。

『シエヤア！』

『ダアラア！』

続いて身を翻し、拳を突き出す。二大戦士のパンチを喰らったギャラクトロンMK2は後ろに後退する。

その隙を突き、ゼロとオーブのエネルギーが高まっていく。

『スペリオン光線!!』

『ワイドゼロショット!!』

オーブは十字、ゼロは両腕をし字に組み、解放された二本の光線がギャラクトロンMK2に殺到するが、奴の両肩から発生したバリアにより防がれてしまう。

そして逆に、

『『グアアアア!!』』

舞い上がった黒煙の向こうから飛んできたビームがゼロとオーブを直撃。勢いを殺しきれずに地面を転がる。

『スペリオン光輪!!』

素早く起き上がったオーブが縦に振り下ろした手刀から高速回転する光輪が放たれ、肩のバリア発生装置を跳ね飛ばさんと迫る。

『シユワ!!』

惜しくもそれはギリギリのところであわされてしまったが、驚くべきなのはこの後。

身体の一部が紫に発光したと思った次の瞬間、オーブは高速移動で光輪を追いかけてそれを掴み、もう一度それを投げ返してギャラクトロンMK2の背中に命中させたのだ。

『オオウラー!』

オーブが中々の荒業を披露した後、ゼロはよろめいたギャラクトロンMK2にドロップキックを叩き込み、転倒させる。

今度はオーブがそれを掴み、身体の赤い部分を発光させながらその巨体を持ち上げ、建物の少ない空き地の方へと投げ飛ばした。

『がぁ……!』

『うおお……!』

追撃をすべく接近した二人を、奴の指先から発射されたマシンガンの弾幕、ギャラクトロンゲベールが襲う。

更に、

『何っ!』

神出鬼没に出現した小型の魔法陣から拘束光線が射出され、ゼロとオーブを捕らえてしまう。

そして眼前では、起き上がったギャラクトロンMK2が右腕にギャラクトロンベイル、左腕に近接格闘用ブレード、ギャラクトロンクリンガーを構えて悠然とこちらに歩み寄ってくる。

『マズイ……!』

直接喰らった事のあるゼロと陸はギャラクトロンベイルの恐ろしさを知っている。まともに防御も出来ない今の状況で受けたら、致命傷になるのは確実だろう。

『エメリウムスラッシュ!!』

牽制に放ったエメリウムスラッシュもバリアにより防がれ、遂にギャラクトロンMK2はゼロに向けて金色の戦斧を振りかぶる。

『ぐっ……』

その時、

『レッキングリッパー!!』

突如上空の魔法陣から飛び出してきた赤い波状光線がギャラクトロンMK2を直撃した。

それと同時に現れる、一体の赤い影。

『ハアアアア!!』

その影は地上に降り立つと、たじろぐギャラクトロンMK2に野性的な動きでジャンプニーキックを決めた。

銀色の身体に赤と黒のラインがアクセントとして挿入されたカラーリング。両腕に着いたヒレ状の突起物。

そして、つり上がった青い目。

ゼロやオーブと差異はあるものの、それは確かにウルトラマンだった。

『っ……!! ジード!!』

「……これが……、ベリアル……」

『ゼロ!! ガイさんまで……』

それはかつてゼロと共に地球を守った若き光の戦士にして、ウルトラマンベリアルの息子、ウルトラマンジードだったのだ。

ジードはゼロとオーブがここにいる事に驚いたようだが、二人の状況を見てひとまず拘束光線からの解放を優先する。

『大丈夫?』

『ああ……、助かった……』

『ありがとな。ジード』

『……二人共、どうしてここに?』

『話は後だ。さっさとアイツを片付けるぞ』

自由になったゼロと共に、オーブとジードも構え直す。

『『ハアア』』

ゼロはゼロツインソード、ジードは二又状の鉤爪型の武器ジードクロウを手に持ち、オーブはサンダープレスターへと変わり、それぞれギャラクトロンMK2へと突撃していく。

ゼロツインソードとジードクロウが描く剣閃が奴の防御を解き、その間を縫うようにサンダープレスターの強烈な一撃が叩き込まれる。

更にゼロが放った鋭い突きが決まり、ギャラクトロンMK2の態勢が崩れる。

『今だー！』

『ハイ！』

三色のエネルギーが二体のウルトラマンへと集約していく。オーブは黒と白、ジードは赤と黒の雷を両腕に纏い、十字に組んだ。

『レッキングバーストオオオオオオオオ！！』

『ゼットシウム光線！！』

ゼロが軌道から外れると同時に、凄まじい光と闇のエネルギーがギャラクトロンMK2に炸裂。

するす前にバリアを展開され、生じた爆発で再び黒煙が辺りを包む。

その中から三体の赤い巨人が飛び出し、爆炎が吹き荒れる。

『ガルネイトバスターアアアア！！』

ウルトラマンゼロ、ストロングコロナゼロ。

『ストビュームバーストオオオオオ!!』

ウルトラマンオーブ、バーンマイト。

『ストライクブーストオオオオ!!』

ウルトラマンジード、ソリッドバーニング。

不意に三方向から襲いかかる光線までは流石に対応できず、直撃したギャラクトロンMK2は吹き飛んで行く。

『紅にー!』

『燃えるぜ!!』

だが三大戦士の必殺光線を受けても、ギャラクトロンMK2はまだまだ健在のようだった。

それを見て三人も畳みかけに行く。

『デエエエリヤ!!』

ゼロとオーブの燃える拳は軽々と受け止められてしまったが、本命の攻撃はこれではない。

『ブーストスラッガー………、キック!!』

足にジードスラッガーを装着したジードの回し蹴りが煌く。

ゼロとオーブが壁となり、攻撃が迫る直前までジードの存在を感知できなくするといふ目論見は成功。モロにそれを受けて大地を転がる。

だが即座に起き上がり、指先から厚い弾幕をばら撒いてくる。その刹那、三人の身体が蒼く輝く。

一瞬でその場から消えて銃弾を回避すると、ギャラクトロンMK2の上を取った。

『見せるぜ！』

『衝撃！！』

素早い動きで天を駆け、敵を翻弄する三体の青い巨人。

『レボリウムスマッシュ！』

隙を突いて懐に潜り込んだルナミラクルゼロが掌をあてがい、衝撃波を放つ。

『トライデントスラッシュ！！』

のけ反ったところで急降下してきたオーブ、ハリケーンスラッシュが三又の槍オーブスラッガーランスを振り回し、目にも止まらぬ速さで斬撃を繰り返す。

「シフトイントウマキシマム！」

『ディフュージョンシャワー！！』

泣きつ面に蜂と言わんばかりにジード、アクロスマッシュヤーがジードクロウを展開し、上空から無数の光の槍が降り注ぐ。

しかしそれはバリアによって防がれてしまう。

『……やっぱあのバリアは厄介だな』

『まずはあれから破壊しましょう！ ハアア!!』

オーブのカラータイマーから光が溢れる。

『ゼブンさん！ ゼロさん！ 親子の力……お借りします!!』

「フュージョンアップ！ ウルトラマンオーブ、エメリウムスラッガー!!」

『シユワアア!!』

赤と青の閃光と共に別の姿になったオーブが姿を現す。

一言で言うところだ。ゼロのような外見。

頭部に三本の刃が装着されており、もう一つ違う点を上げるとしたら肩のプロテクターが盛り上がっている事だろうか。

そしてなにより、サンダーブレスター同様目つきが悪い。これはゼロの影響か。

『智勇双全……、光となりて!!』

台詞を決めると共に、頭部の刃を手にとってギヤラクトロンMK2へと走り出す。

『オーブスラッガーショット!』

ゼロに勝るとも劣らない速さと精度で切り下ろされるアイスラッガーと、念動力で操る二本のオーブスラッガーによる斬撃で滅多切りしていく。

『ゼロさん!』

『了解! ミラクルゼロスラッガー!』

ゼロも光で無数のゼロスラッガーを生成し、ギヤラクトロンMK2に向けて一斉に発射した。

初めはギヤラクトロンペイルやギヤラクトロンクリンガーを駆使して刃を弾いていたが、流石にさばき切れなかったゼロスラッガーが右肩、オーブスラッガーが左肩のバリア発生装置を破壊する。

『ジード!!』

『守るぜ! 希望!! ハアアアアア!』

「ウルトラの父。ウルトラマンゼロ。ウルトラマンジード! マグニフィセント!」
ゼロの掛け声で飛び出したジードも別の姿に変わり、ギヤラクトロンMK2に肉薄していく。

甲冑の様なものを着込み、頭部の巨大な角が特徴的な姿、マグニフィセント。

『メガニストラトス!!』

ジード、マグニフィセントは肩と肘の間に光の回転ノコギリを生成し、胸部を盛大に掻つ捌いた。ギヤラクトロンMK2は火花を散らしながら後退する。

既にその機体はボロボロであり、勝負はあつたと言つていいだろう。

三人のウルトラマンの見事なコンビネーションに、内浦の人間は歓声を上げる。

『ギャゴガアアアアア』

そんな歓声をかき消す様に、ギャラクトロンMK2が今までは全く違う咆哮を上げた。

見れば胸部のコアパーツに赤い光が吸い込まれていつていた。

止める手段は無く、コアパーツの前に巨大な魔法陣が出現すると共にそこから破壊光線が放たれた。

が、既に機体がボロボロのせいもあつてか、軌道は三人を大きく外れ、別の方向へと光の線が突き進んでいく。

『なっ……！』

ほっと安心したのも束の間。

破壊光線が向かう先は陸の家周辺。そしてそこには何故かAqours全員が揃っているのだ。

「何であいつ等あそこに！」

『ヤベエぞ！！』

オーブとジードの前でゼロは飛び出し、Aqoursを庇うようにその光線を背中で全て受け止めた。

『があああああああ!!』

『ゼロ（さん）!!』

『っ……、俺はいいからさっさとそいつをやれ!!』

カラータイマーが点滅を始めてもそこをどかないゼロを見て、オーブとジードが首肯し、両腕に光を纏う。

『ワイドスラッグーションョット!!』

『ビッグバスタウエイ!!』

隙だらけのところを二本の光線が貫き、幾つも魔法陣を浮かび上がらせながらギヤラクトロンMK2は爆散した。

『う……あ……あ……』

光線が止むと、ゼロはA q o u r sがいる方とは逆方向に倒れ込みながら消えていった。

「……ん……ん……？」

目が覚めると、見慣れた天井が映り込んできた。

そこが自分の家だと理解するのに二秒、どうしてこうなっているのか思い出すまでに五秒、自分以外にも人の気配がする事に気付くのに三秒。計十秒かけ、陸は隣で呑気にどら焼きにかぶりついている青年を見やった。

「……ガイさん……？」

「……おお、起きたか」

ガイはまるで自分の家にいるかのような雰囲気醸し出しながら大量のどら焼きが入った袋を抱えていた。ちなみに食べているのは松月のミカンどら焼き。一体いつ買ってきたのやら。

「悪いな。氣い失つてたから家まで運ばせてもらったぞ」

「ああいえそんな。ありがとうございま……ん……ん……？」

ここでもう一つ人の気配がする事に気付く陸。

恐る恐る見てみれば、ガイ同様の家の家だというのに勝手にテレビをつけ、そこに映る特撮ヒーローに目を輝かせる青年が一人。

「おいリク」

「はい？」

ガイの呼びかけに、何故か向こうの青年も反応する。青年は陸が起きているのに気が付くと、爽やかに笑いながらこちらに歩み寄ってきた。

「大丈夫？ 気分とか悪くない？」

「……は、はい……。えつと……。ガイさん、こちらは？」

ここにいるという事は恐らく陸がガイの知り合いだろうが、陸の記憶にこんな爽やかイケメンはインプットされていない。という事は十中八九ガイの知り合いと見ていいだろう。

「ん？ さつき見ただろ？ ウルトラマンジードだよ」

「ええ!!」

ガイの言葉に衝撃を受け、思わず青年の顔を見回してしまう。

ジードというと、あのジードだ。ウルトラマンベリアルの子息の。

見た目はほとんど陸と同年代だし、接していて全く嫌な印象を受けない爽やかさ。正直、あのベリアルの息子とは到底思えない程の好青年だ。

「えつと……。名乗っていいかな……？」

「ああはい。すみませんじろじろ見て……。どうぞ」

首を縦に振って了承の意を示すと、青年はコホンと咳をついてから再び陸の顔を見据

えた。

「僕は朝倉リク。よろしくね」

何と名前が一緒だった。

なるほど、だからガイが「リク」と呼んだ時に向こうも反応したという事か。そもそもあれは陸ではなくリクに向けた呼びかけであって……ややこしい事この上ない。

前にゼロが言っていた陸と同じ名前の知り合いと言うのはこのウルトラマンジード、もとい朝倉リクの事だったらしい。

「……仙道陸です」

差し出されたその手を握り、同時にリクが首を傾げる。

「……なんか君、父さんと同じ感じがする」

「え……?」

唐突にそんな事を言われて動揺する陸。リクの父親、つまりはベリアルと同じ感じがするとは一体……。

「そいつはちよつと前にベリアルさんの力を使ってるからな、多分その影響だろ」

そんな陸を見て、ガイが指に着いたミカンあんこを舐めながら理由を教えてくれた。ちなみにあれだけあったどら焼きは既にもうなくなっている。この短い間にどうやっ

て完食したのやら。

「ああ、そういう事なんだ。．．．．．よくゼロが許したね」

「まあ．．．、結果大暴走しちゃったんですけどね．．．．．。ん？　そう言えばゼロは？」

脳内で呼びかけてみるが、返答はない。

「ゼロさんならさつきあくあ？　の様子を見てくるとか言って出て行ったぞ。ついでにバリスレイダーが出現していないか調べてくるらしい」

「．．．．．バリス．．．レイダー．．．？」

「えっ！！」

陸には聞き覚えのない名前だが、もう一人のリクはその名前に覚えがあるらしい。

「それって、ギルバリスの兵士の事ですよ？　ギルバリスを倒したからもういないはずじゃ．．．．．」

問いかけるリクに、ガイは少し重苦しい表情になる。

「．．．．．実は、最近各宇宙でバリスレイダーやギャラクトロンが相次いで出現しているな。俺は宇宙警備隊の皆さんと一緒にその調査をしていた。その最中に遭遇して、この地球まで追ってきたのが、陸。お前とゼロさんが戦った新型のギャラクトロンMK3だ」

「……ギヤラクトロンってまだ別機種がいたんだ……、え？ 新型？」

「ああ、息を吹き返した様に暴れ舞わるギルバリス軍、そして新型のギヤラクトロン……宇宙警備隊は、ギルバリスが復活した可能性も視野に入れているらしい」

「そんな……。あの時ちゃんと破壊出来てなかったって事？」

「……いや。ヒカリさんの推測によると、自身のバックアップデータを取っていた、と見るのが妥当らしい」

「じゃあ、僕達の所に現れたギヤラクトロンMK2も、その影響って事ですか？ でもどうしてこっちの地球に……」

「……どうやらギヤラクトロンMK3は別宇宙にいるギヤラクトロンを呼び寄せる機能があるらしい。もしかしたらアレにギルバリスが乗り移ってたのかもな」

「え？ ちょ……、待ってください」

少し蚊帳の外だった陸がここで話に口を挟む。

「……ギヤラクトロンMK2は、MK3が倒されてからこっちの地球に来ましたよね？ てことは、まだ他のギヤラクトロンがこっちに向かって来てる可能性もあるって事ですか？」

「十分考えられる。ただ大群で押し寄せてくるとなると、バリスレイダーも一緒に出現するからな。MK3やMK2がそのギルバリス軍の先兵なら、もう既に出現しているも

おかしくない。ゼロさんはそれを調べに行ってる」

「.....」

ダークネスファイブや、自身の事でいっぱいだったというのに、また新たな敵がこの地球に魔の手を伸ばしてきているという。

「どうやら神は、陸に自分と、今抱えている問題と向き合う時間も与えてくれないらしい。」

四十三話 戦慄の前奏曲

『フフフ……、ハハハハハ……』

ダークネスファイブが拠点としている宇宙船の中で、スライは実に愉快そうに肩を震わせていた。

「………。珍しいね、君がそんなに笑うなんて」

それに対しオウガは首を傾げる。

『ええ、貴方のおかげで当初の予定よりも早く計画が進みそうですからね。オーブと陛下の御息が現れたのは少し予想外でしたが、そこまでの問題ではありません』

スライの足元に投影されているのは、先日内浦に降臨したゼロダークネスの姿。

『高海千歌が例の光を発現し、ゼロと一体化している仙道陸に陛下の力を植え付けることも出来た。後は陛下の魂さえそろえば……。ふふ……。陛下御復活の時は近いですよ』

スライはIQが一万もあると言われるメフィラス星人だ。かつてウルトラ一族と

戦ったメファイラス星人も、一部の残念な例を除いて知能的な戦略を駆使してウルトラ一族を苦しめてきたらしい。

『彼女の光がどの程度発現しているのか確かめる必要がありますね。一度マグマ星人に彼女を連れてきてもらいますか』

い。だから彼の考えるベリアル復活計画がどのようなものかは、オウガには分からない。

(・・・ゼロ君。いくらベリアルを宿したからって、陸君を見捨てる様な真似はしないでくれよ?)

だがそんな事を口にする訳にもいかなないので、やはりそつと心の内に留めておくオウガだった。

『デエヤア!!』

『ハアアアアア!!』

先日ガイが示唆した可能性を裏付ける様に出現したギャラクトロンと戦うゼロとジード。

MK2やMK3と大きく異なるのは両腕に鉤爪や大剣が装着されている点と、後頭部から伸びるシャフトのような物があるという点。

あの二機に比べるとこちらの方が迫力があるような気がするが、戦闘能力ではこちらの方が劣るらしい。

それでも十分強敵という事には変わりはないのだが。

『ぐ……お……お……』

ギャラクトロンの胸から放たれた光線をゼロがウルトラゼロディフェンサーで防いでいる間に、ジードが側頭部に回し蹴りを入れる。

『アリアア!!』

牽制に投擲したゼロスラッガーが奴の眼前で煌き、それに反応してのけ反ったところにジードがもう一発回し蹴りを叩き込む。

続いてブーメランの様に戻ってきた二本の刃を融合させ、ゼロツインソードを構えたゼロが勢い良く踏み出し——膝を折る。

『ぐう……』

ここ数日、立て続けにギャラクトロンの強化個体と戦い、その攻撃を受け続けたダ

メージがまだ抜けきっていないのだ。

『ゼロ。無茶しないで！』

『平気だ！ この程度！』

身を案じるジードの言葉を一蹴すると、ギャラクトロンへと肉薄してゼロツインソードを横薙ぎに一閃。右腕を切り飛ばす。

更に身を翻しながら屈み、渾身の力で右膝の関節を切り裂く。

『ワイドゼロショット!!』

『レッキングバーストオオオオ!!』

転倒したギャラクトロンに光線が炸裂し、全身から機械音を上げながら爆散していった。

そしてそれを見て、気味の悪い笑みを零す男が一人。

「・・・ふっ・・・」

その男の足元には、切り捨てられた大量のバリスレイダーの残骸が転がっていた。

「……さつきゾフィーさんからウルトラサインが送られてきたんだが、ギルバリスはやはり完全に滅ぼされていたそうだ」

ギヤラクトロンとの戦闘を終え、戻ってきた陸とリクに完全に居候と化したガイが伝えてきたのはその知らせだった。

ひとまずとんでもない敵が生き残っていないなかった事にほっとしつつも、疑問は覚える。

「……じゃあ何でこんなにギヤラクトロンが送り込まれてるんですか？」

「睨んだ通り、MK3がこの地球にギヤラクトロンやバリスレイダーを呼び寄せていた。どうやらギルバリス亡き今、MK3が代わりに統率を取っていたらしい」

「となると……」

「ああ、近いうちに統率を失ったギヤラクトロン軍団がここに現れるのは間違いないな」「っ……」

一体だけでもあれほど強力なギヤラクトロンが、今度は大群で押し寄せてくる。しかも内浦に。例え様のない恐怖と重圧がのしかかってくるのを感じる。

ガイの話によれば、ギヤラクトロンMK3が破壊された内浦で奴の信号は途絶えたた

め、必然的に皆ここに集まってくるそうだな。

「それって、大体いつ頃になるんですか？」

「さあな。今日かもしれないし、明日かもしれない。とにかく警戒するに越したことはないって事だ」

ガイはそう言うと言とジャケットを羽織って立ち上がった。

「とりあえずバリスレイダーが現れていないか見回りだ。戦闘力はギヤラクトロンと比べるまでもないが、奴らも破壊活動は行う」

確かにそうなつては町の人々が危ないだろう。

ガイがお前等も来いと視線で訴えているので、陸も腰を上げようとするが、とあることを思い出して動きを止めた。

今日は休日だ。見回りという事は町全体を徘徊するという事だし、もしかしたら練習中のA q o u r s とぼつたり鉢合わせしてしまうかもしれない。

もう曜を除くA q o u r s のメンバーと顔を合わせないまま一週間が経っている。もしそうなつたらその事について問いただされるのは間違いないだろう。数日前に彼女達が陸の家の前にいたのも、恐らくはその為。

そうなつてしまえば、今の不安定な精神状態がそうなつてしまうか分からない。

そして何よりも、自分のせいで大いに巻き込み、傷付けた九人の少女と顔を合わせる

のが怖い。

ガイに罪との向き合い方は教えてもらったはずなのに、それでも気持ちは逃げる方へと先行してしまう。

「……陸君？　どうかした？」

「……ああ、いや……」。何でもありません

それでも無理矢理その気持ちを抑えこみ、陸は重い腰を上げた。

「はあ……。はあ……。」

淡島神社。

いつも通り階段ダッシュを終えたA q o u r sの面々は、地面にへたり込んで脱力しきっていた。平然としているのは果南のみ。

いつもならもう一人、平然とした顔で花丸を背負う少年がいるはずなのだが。もうその彼が姿を見せなくなつて、一週間が経過していた。

「それで曜。最近陸はどんな感じ？　ちよつとは元氣になつてた？」

果南が汗を拭きながら、唯一陸と会つている曜を見やる。

曜はその問いに対して首を横に振つた。

「……………顔は見せてくれるけど、なんか家に入れてくれない」

「……………露骨に怪しいね」

新たに二体のウルトラマンが内浦に現れて以降、陸は曜を家に入れてくれなくなつた。

合鍵を持たせている曜を家に入れないとすると、もう何か隠している事は確實だろう。

「……………なんか陸以外にも人の気配がするんだよね……………」

「ええ？　怖い事言わないでよ……………」

「いや……………怖い……………？」

「でも、どういう事なんでしょうね？」

ルビイが疑問を口にしたのを皮切りに、全員首を傾げる。

「まさか天界の使者が憑依……………」

善子のセリフはいつもの事だと軽くスルーし、ここ最近の陸の不可思議な行動に頭を悩ませる。

「・・・女性を連れ込んでたり・・・」

ぽつりとそんな事を口にしたダイヤに、鞠莉がニヤニヤしながら近づいていく。

「真つ先にそれが思いつくなんて、ダイヤは意外とおませさんだねー」

「なっ・・・！ 何を言いますの！ わたくしはただ可能性の一つとして・・・」

「そんな訳ない」

黙っていた千歌が、少し強めの声で言い放つ。

「・・・病院で見たでしょ？ あんな辛そうな顔した陸ちゃん見た事ないもん。善子ちゃんもダイヤさんも、真面目に考えてよ」

「(ぎ)・・・、ごめんなさい・・・」

明らかにいつもの彼女のそれではない声音に、思わず謝ってしまう善子とダイヤ。

「・・・千歌、いくら何でも・・・」

「っ・・・」

態度の辛辣さを指摘され、千歌も口を噤む。

ここ数日ずっとこんな感じだ。陸の事が話題に出ると、こうして雰囲気が悪くなってしまう。

特に千歌は、陸の事になると落ち着きを失うようになってきた。

「……とりあえず、学校戻ろつか。最後にフォーメーション確認しないと」

「……うん」

「そうすらね……」

状況を見かねた曜が切り出し、それに梨子と花丸が賛同する。

それにつられて腰を下ろしていた面々も立ち上がり、そろそろと学校へと続く道を進み始める。

(……陸ちゃん……)

小さい頃に出会って以降、ほとんど毎日顔を合わせてきた。

一週間会わないというだけで、自分の中で歯車がどんどん狂っていくような感覚に苛まれる千歌。

「うあつ……」

ロクに前も見ずに、その理由を模索しながら歩いていると何かにつかちつて尻餅を付いてしまった。何か固いものに触れたような感触ではなかったもので、恐らく通行人か何かとぶつかってしまったのだろう。

「ごめんなご——……え？」

千歌は謝ろうと顔を上げ、そこで固まる。

そこにいたのは、白いマスクと巨大なサーベルを装着した人型のなにか。

つまりは、マグマ星人だったのだ。

「っ……!」

皆咄嗟にリトルスターを宿しているダイヤを庇うように前に立つが、マグマ星人は千歌の前から動かない。

「千歌ちゃん!!」

思わず固まってしまったが、曜の声ではっと我に返って逃げようと立ち上がるが、

『行かせるか……』

その行く手を阻むように二体の宇宙人が現れたのだ。一体はハッキリと人型をしているが、もう一体はもはや何の生物に例えたらいいのか分からない宇宙人。

「アンタは——うっ!」

千歌に駆け寄ろうとした果南の首元に、マグマ星人がサーベルの切っ先をあてがう。

『久しいな。悪いが今回用があるのはこっちの娘だ。手は出さなくてもらおうか』

「なんで千歌を……」

詰め寄ろうとする果南だが、少しでも動けばマグマ星人は迷いなく彼女の首を貫いてくるだろう。今は睨みつける事しか出来ない。

『メトロン。ババルウ』

「ひっ……」

マグマ星人の指示でババルウ星人が千歌を拘束し、メトロン星人がA q o u r sに向けてチューリップのような両腕を向ける。

A q o u r sがその異形の姿に慄く一方、ババルウ星人は羽交い絞めにした千歌を乱暴に引きずっていく。

千歌も必死に抵抗はするが、所詮はか弱い地球人の少女、鍛えられた宇宙人に抗えるはずもなく、どんどん皆との距離を離されていく。

『我らが母船まで来てもらおうぞ』

やがてババルウ星人は立ち止まり、懐から取り出した装置のスイッチを入れた。

すると足元に円状の光が発生する。ババルウ星人の言葉からして、これはその宇宙船とやりにワープするための手段なのだろう。

「放して……！！」

『っ……、この……、おとなしくしろっ……』

滅茶苦茶に暴れて抵抗する千歌をおとなしくさせようと、ババルウ星人が拳を振り上げる。

「っ……！！」

思わず間を瞑る千歌。

『ぐっ……、うう……』

だが悶え出したのはババルウ星人の方だった。

ババルウだけではない、マグマ星人も、メトロン星人も、何故か苦しそうに頭を押し
えている。

そんな千歌の耳朵に触れる、ハーモニカの音のような音楽。

音色のする方へ目をやると、テンガロンハットを被った青年が一人、不思議な形状
した楽器を演奏しながらこちらに悠然と歩み寄ってきていた。

『この音色……、まさかウルトラマ——ぐはあっ!!』

何か言いかけたババルウ星人が吹き飛んで行くのと同時に、ごつごつとした固い何か
が触れる。

見上げれば、そこには。

「陸……ちゃん……?」

実に一週間ぶりにA q o u r sの前に姿を現す、仙道陸の姿がそこにはあった。

『貴様——ぶはあっ!!』

陸に向かってサーベルを突き出したマグマ星人も、テンガロンハットの青年に殴りつ
けられて地面を転がる。

メトロン星人もいつの間にか現れていた三人目の青年によって倒されていた。

『ぐう……引くぞ!』

マグマ星人の指示で。ババルウとメトロンも尻尾を巻いて逃げていく。

そんなものには目もくれず、千歌は一週間ぶりに幼馴染の少年の顔を見つめていた。そして気付く、

「ツー」

どうやら今陸に抱きかかえられているらしい。

ほっと安堵すると同時に、嬉しいような気恥ずかしいような感覚が湧き上がってくる。

「……怪我無いか?」

「う……、うん。ありがとう……」

陸はそれ以上何も言わず、千歌を下すと呆然とそれを眺めていたAqoursを一瞥した後、この場を去っていきこうとする。

「待って!」

千歌は咄嗟にその手を掴み、陸を引き留める。

そして何故か溢れてくる不可思議な感情を抑え、極力平静を装い、こう言った。

「……あの……さ、私達、この後フォーメーションの練習するんだけど……、見てくれない……かな?」

「……嬉しそうね、千歌ちゃん」

「……うん……」

浦の星女学院へと続く道。

曜は梨子の隣で、並んで歩く二人の少年少女の姿を眺めていた。

梨子の言う通り、嬉しそうな笑みを浮かべて陸にくつつく千歌と、それを割とまんざらでもなさそうに引き剥がす陸。

千歌も陸も、あんな表情は久しぶりに見た気がする。

(……陸……)

彼が久々にA q o u r sの練習に顔を出してくれるのは本当に嬉しい。嬉しい事は嬉しいのだが。

曜の心には、何かもやもやとしたものが蟠っていた。

曜も、何度か陸に皆心配しているから A q o u r s の練習に顔を出してくれと伝えていた。けれども陸が練習に現れる事は無かった。

それなのに、千歌が誘ったら渋りながらもついて来てくれたのだ。

一体曜と彼女で、何が違うのか。

「それでね、最近練習終わりに皆でウチの温泉入っててね——」

「……離れろ……」

余程嬉しかったのか。千歌は先程から陸が顔を出していなかった間に起きた事をくつつきながら語っている。

曜では決して取り戻せなかったであろう、眩しい笑みで。

一体曜と彼で、何が違うのか。

共に過ごしてきた時は、変わらないはずなのに。

「……」

何故その事で、これ程までに心が穏やかではなくなるのか。

「……曜ちゃん？ どうかした……？」

「……う、ううん。何でもない」

不安気に顔を覗いてくる梨子に、曜は誤魔化す様に笑って見せた。

「ワンツースリースリーフォー、ワンツースリースリーフォー」

浦女の屋上で、久しぶりに A q o u r s の練習風景を眺める陸。

その少し離れた所で、ガイとリクはその光景を見守っていた。

本当は顔を出すつもりは無かったのだが、あの二人が行けと無言のプレッシャーをかけてきたので仕方なくここに来た。

銭湯で心境を吐露したガイはともかく、何故リクまで……もしかしてアイドルに興味があつたりするのだろうか。

少し恨めし気に二人を見た後、再び目の前でステップを取る九人の少女を見据える。

ほんの一週間見なかつただけなのに、その姿がやけに懐かしく感じられる。

そして実感する。やはり自分はここにはいけないと。

ただ純粹に輝きを追い求める彼女達にとって、戦いに巻き込み、拳句の果てに自らの

手で傷つけた陸は邪魔でしかない。

陸がその事を再認識すると同時に、九人のステップが止まる。

「どうだった？ 陸ちゃん！」

その中の一人、千歌が真っ先に飛び出して感想を求めてきた。

何故か、彼女がいつもよりも積極的に陸に話しかけてきている気がする。

「……いいんじゃないの？」

いつも通りに返すと、千歌は不満げに頬を膨らませた。

「もー！ 陸ちゃんいつつもそれしか言わないじゃん！ たまにはちゃんとした感想聞かせてよ！」

そんな千歌の背後に忍び寄る、豪奢な金髪。

「ひゃうっ！！」

「それだけじゃないんですよ？ ちかちかがりくつちに聞きたいこと」

鞠莉は音もなく千歌の背後に立つと、尻を掴み上げ、肩に顎を乗せるといふ彼女じゃなかったら犯罪扱いされそうな行動と共に千歌に囁く。

「……闇の仕草……、ジャグラー以外にあれを使いこなす奴が……」

「あぁ……、レイトさんがやられてたやつか……」

何故かそれを見て驚愕の表情を浮かべるガイと、引きつり気味に笑うリク。

それはさておき、千歌が陸に問いたい事とは何なのだろうか。

薄々察しつつも陸が視線を戻すと、千歌は今までとは打って変わって新鮮な眼差しを向けてくる。

「・・・ねえ、陸ちゃん。この一週間、一体何してたの・・・？」

そして予想通り、陸のこの一週間の動向に探りを入れてきた。

目を逸らそうとするが、何故か視線が彼女の目に固定されてしまつて動かない。

そんな陸の肩に、何者かが優しく手を乗せる。

てつきりガイドだと思つた次の瞬間、尻を掴み上げられ、反対の肩に顎が乗つかつてくる。

「お取込み中失礼」

「ういっ!!」

突然のセクハラに驚き、いつの間にか現れていた謎の人物から距離を取る。

「どーも♪」

そこには黒いスーツに身を包む、紳士然とした男が佇んでいた。だが、その瞳には伺い知れない程の狂気が秘められているようにも見える。

「ジャグラー（さん）!!」

どう見ても不審者としか思えないその男に陸が身構えると、ガイとリクが駆け寄つて

くる。

どうやら二人の知り合いらしい。

「あの……、ガイさん？ この人は……」

今の事ですつかり警戒モードに入った陸が恐る恐るガイに問いかけると、代わりにその男が身を乗り出してきた。

顔の輪郭が覚束なくなり、やがて魔人のような顔へと変貌する。

『私ですか？ 私はこういう者で——』

「ッ!!」

その寸前にガイが取り押さえ、男の顔は元の人間のものへと戻った。

「こいつはジャグラス・ジャグラー。仲間って訳じゃないが……、まあ、切つても切れない腐れ縁って感じだ」

やれやれと言った表情をするガイが、取り押さえたその男、ジャグラーを睨みつけた。「お前……！ バリスレイダーが出現してないかの見回りはどうした？」

どうやらガイはジャグラーにも町の見回りを頼んでいたらしい。それならガイとリクの二人がここに来ている事も納得できる。

だが何故見回りをしていたはずのジャグラーがここにいるのか。それでは今町は無防備な状態になってしまう。

「おいおい。俺がわざわざお前の言う事聞くとと思うか？ いい加減俺のキャラクター理解しろ」

独特な喋り方で開き直るジャグラーに、ガイがこめかみを抑える。

「まあ、ここに来た事には意味があるんだがな」

「何……？」

「見てろ。そろそろだ」

狂気染みだ笑顔から一変し、酷薄に目を薄めるジャグラー。

その瞳が映す先には、いつも通りの内浦の空。何か特別変わった事は見受けられない。

だがいきなり何を言い出すんだと思った次の瞬間、

「「へなっ……！！」」

陸、ガイ、リク、ゼロが同時に己の目を疑う。

「な……何あれ……」

Aqoursも、驚きに目を剥いている。

「あれは……」

突然空に浮かび上がったのは、無数の巨大な魔法陣。

そしてそこから降臨してきたのは――

——
ゆうに三十体を超える、大量のギャラクトロンの姿だった。

四十四話 正義と言う名の脅威

「ッ！」

内浦の至るところで響く、人々の悲鳴。

唐突に現れたギヤラクトロン軍団は、出現と同時に一斉に町を蹂躪し始めた。

争いをなくすために生まれ、どこかで歪んでしまった正義が、人々を絶望のどん底へと叩き落した。

「私達も早く逃げなきゃ！」

千歌の一言で、突然の事に立ち尽くしていたA q o u r sの全員がはつと我に返り、素早く非難を開始しようとする。

その一方で、一人だけ逆方向に走って行く青年が一人。

「リクさん!!」

「僕があいつ等を食い止める！ その間に陸君とガイさんは皆を避難させて！」

走るリクは、懐から何とオウガが持っていた物と同じライザーを取り出した。そして腰のホルダーから白いカプセルを一つ取り出す。あれはウルトラカプセルだ。

「ジーっとしてても、ドーにもならねえ!!」

リクはそう叫ぶと、そのカプセルのスイッチを入れる。

「融合!」

『シエア!』

カプセルの先端が青く光ると、リクの右隣にウルトラマンが現れ、右腕を高く掲げた。

「アイ、ゴー!」

『へアアア!!』

ウルトラマンカプセルをナツクルに装填した後、もう一つカプセルを取り出してスイッチを入れる。すると今度は紫色に光り、左隣にウルトラマンベリアルが現れ、ウルトラマン同様右腕を掲げる。

ベリアルカプセルもナツクルに装填し、ライザーを構えた。

「ヒアウィーゴー!」

カプセルをライザーでスキャンすると、シリンダー部分が青と紫に光る。

「フュージョンライズ!」

「決めるぜ! 覚悟! ハアアアア!」

ライザーを天に向かって掲げた後、

「ハッ!!」

胸の前でトリガーを弾き、シリンダー部分を赤く光らせて回転させ始める。

「ジイイイ——ドツ!!」

「ウルトラマン！ ウルトラマンベリアル！」

赤い光がリクを包んだ後、ウルトラマンとベリアルの姿がリクに重なっていく。

「ウルトラマンジード！ プリミティブ!!」

『シユア!!』

リクを包んだ赤い光が天高く昇り、弾けた。

そしてそこから、つり上がった青い目をした巨人が現れる。

『来い！ 僕が相手だ!!』

着地の衝撃で土煙を舞い上げながら、ウルトラマンジードはギャラクトロン軍団へと突撃していった。

「え………?」

そしてそれを見てしまった。千歌達Aqours。

「………人間が………、ウルトラマンに………」

逃げる事も忘れ、呆然とギャラクトロンに掴みかかるジードを見つめている。

視線を集めるジードは、獣のような動きでマウントポジションを取った後、至近距離で光線を放とうとするが、

『ウアアアア!!』

いくら何でも一人で相手取るには数が多すぎる。

もう一体のギャラクトロンが放った光線がジードを捉え、吹き飛ばされたジードが建物を巻き込みながら地面を転がっていく。

「一人じゃ無理だ!」

状況を見かねたガイが駆け出し、オーブリングとフュージョンカードを構えた。

「ギンガさん! エックスさん! シビれるやつ……、頼みます!!」

「フュージョンアップ!」

ガイの左右にウルトラマンギンガとウルトラマンエックスが現れ、光に包まれたガイの姿と重なる。

「ウルトラマンオーブ! ライトニングアタッカー!!」

『アタッカーギンガエックス!!』

登場と同時に空を舞うオーブの全身から電撃を纏ったX字の炎が放たれ、ジードに大剣を突き刺そうとしていたギャラクトロンを破壊した。

『大丈夫か?』

『ガイさん……。ありがとうございます』

差し出されたオーブの手を取り、ジードが立ち上がる。

『気にすんな！ 行くぞ!!』

『はい!』

二人同時に跳躍し、ギャラクトロン軍団の中へと身を投じていくオーブとジード。

リクに続きガイまでもがウルトラマンに変身したのを見て少女達が愕然としている中、陸は複雑な心境でそれを眺めていた。

「てめえは行かないのか?」

ジャグラーが九人には聞こえないような声音で囁きかけてくるが、陸は首を縦にも横にも振れなかった。

オーブが加わったところで、数で圧倒的に押されているという事は変わらない。本当は今すぐ変身して加勢に行きたいのだが、まだ千歌達に本当の事がバレる事を恐れている自分があるのも事実。

「はっ…、ウルトラマンゼロと一体化しているからどんな奴かと思ってみれば…、とんだ意気地なしか」

挑発的な言葉を吐かれても、紛れもない事実なので何も言い返せない。ただ黙って、目の前で戦う二体の巨人を見つめる事しか出来なかった。

「……いくらオーブとジードでも、あの数のギャラクトロンを相手取るのは厳しいんじゃないかなー？」

人々が避難を終え、閑散とした町の中。

オウガはそこらかしこで暴れるギャラクトロンに目もくれず、息の合った連携で一体確実に処理しているオーブとジードの戦いを観賞していた。

今倒したので五体目。だが残りはその五倍以上いる。

すべて倒しきる前に二人のエネルギーが切れるのは目に見えていた。

「こんな時に現れないなんて、一体ゼロ君と陸君は何をしてるのやら……っ」と地球人には目視出来ない距離から、オウガは浦の星女学院の屋上にいる少女態の姿と、その近くにいる一人の少年を見据える。

「なるほど、Aqoursの皆と一緒になのか。確かにそれじゃ変身できないよね」

納得したように頷いた後、

「——でも」

表情を変えて魔人態となり、懐から黒い怪獣カプセルを取り出した。それに描かれていた怪獣は、ゴモラ。

『ゴモラ』

『キシヤアアアイヴウウウウウ!!』

スイッチを入れ、腰元のナツクルに装填。続いてレッドキングが描かれた怪獣カプセルのスイッチを入れる。

『レッドキング』

『グウインガアアアヴウウウウ!!』

レッドキングカプセルもナツクルに装填するとライザーを起動し、二つのカプセルをスキャンした。

「フュージョンライズ！」

『君がそこで踏みとどまるなら、ボクが更なる試練を与えるよ。頑張つて乗り越えてくれよ？ でないとボクの計画が台無しになる』

胸の前でライザーのトリガーを弾き、途端に禍々しい光が溢れ出す。

「ゴモラ！ レッドキング！ ウルトラマンベリアル！」

二体の怪獣の力と闇がオウガを包み込んでゆき、やがて巨大な怪獣へと姿を変えてい

く。

『………楽しませてくれよ？　これがエンドマークにならないようにね。陸君』
絶望の巨影が、六年ぶりにその姿を現す。

「——スカルゴモラ！」

『グウインガアアアアアヴヴウウウウウウ!!』

そいつは突然現れた。

何の前触れもなく唐突に現れ、人々から大切なものを奪っていった。

恐怖を植え付け、トラウマを刻み、圧倒的な理不尽を人類に叩きつけた。

大地に響き、大気を震わせ、大海を揺らす咆哮。全て、六年前のあの時と同じだ。

へ………アイツは……

全身から生える、赤く湾曲した太い角。胸に浮かんだ不気味な意匠。見る者全てを震撼させる禍々しいその姿。間違いない。

脳内を巡る、炎の中で震え続けた破滅の記憶。

アイツこそ六年前に日本中で猛威を振るい、暴虐の限りを尽くした悪魔。この世界で初めて確認され、怪獣と認定された超巨大生物——スカルゴモラ。

『ツッ!! スカルゴモラ!! 何でここに!!』

ギヤラクトロンと交戦中だったジードが、突如出現したスカルゴモラを見て驚愕の声を上げる。

スカルゴモラは彼のいたサイドアースでも出現しているので、ジードが奴の事を知つていても何の違和感もない。

何故奴がこのタイミングで再び現れたのかは分からない。一つだけはつきり言える事は。

(.....オウガッ.....)

ライザーを持ち、なおかつベリアル力の力を宿しているアイツしかありえない。

陸がいままでどんな者にも向けた事のない程の鋭い眼光でスカルゴモラを睨む一方、傍らで少女達の様子がおかしくなる。

「え.....」

「あ………、ああ………」

「おねっ………お姉ちゃん………」

酷く怯える。千歌、曜、ルビイの三人。元々怖がりなルビイはさることながら、六年前にスカルゴモラに間近で襲われ、心身ともに傷を負った二人の怯え方は尋常ではない。

滅多なことでは動じない果南でさえも、今は震えている。彼女もまた千歌達と共にスカルゴモラに直接襲われた者の一人だから。

怖くないはずが無いのだ。

内浦や沼津出身の八人のみならず、前に梨子が住んでいた東京の街にも、スカルゴモラは出現している。

つまりこの場に、スカルゴモラにトラウマを植え付けられていない者はいないのだ。

『キシヤアアアイヴウウウウウ!!』

「きやああああああ!!」

咆哮が轟き、あの時の光景がハッキリとフラッシュバックしてしまった千歌と曜が同時に悲鳴を響かせる。どうやらすっかりパニックになってしまったらしい。

今の咆哮で全員腰が抜けてしまったのか、立ち竦んで動けなくなってしまうAquou

rs。

そんな状況でもギヤラクトロンは町の破壊を続け、スカルゴモラは悠然とこちらに向かつて悠然と歩み寄ってくる。

それを見て更に震える彼女達の表情は蒼白に染まり、今にも散つてしまいそうなくらいに弱々しくて。

陸の中で停滞していた迷いを消し飛ばすには、十分すぎた。

もうあんな顔を見たくなかったから、自分は戦おうと決めたんじゃないか。迷うな。進め。

「……………」

ジャグラーの事も、Aqoursの事も一切見ずに、陸はスカルゴモラの方へと歩き出した。

「……………陸ちゃん……………」

陸を引き留める様に、普段の元気など微塵も感じさせない千歌の声音が耳を撫でる。

「……………陸……………」

続いて曜の声。

僅かに残っていた迷いによって振り向くと、俯いて蹲っていたはずの二人が顔を上げ、一人スカルゴモラに向かつていく陸を見ていた。

「…………そっち、怪物がいるんだよ……………」

「……………何する気……………？ 陸……………」

きつと今から陸がする事を見られたら、もう今のような関係ではいられなくなるだろう。

だからこれまで共にいた時間を噛み締めるように、自分の中で最も大切な二人の顔を、静かに見つめる。

そして、間近に迫るスカルゴモラを背に、笑う。

「……………じゃあな」

それ以上は何も言わずに、陸はスカルゴモラに向かって全力で走り出した。

「ゼロ……………行くぞ」

「……………お前……………分かったよ！」

身体が、ここで止まりたいと訴えてくる。

それでも走った。前だけを見て。大切なものを守る為に。

「ゼロオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

弱音も、感情も、全て抑え込むようにウルトラゼロアイを装着し、

陸は、九人の前でウルトラマンゼロへと姿を変えていった。

『アエエエヤアアア!!』

浦女の屋上から飛び立ち、巨大化したゼロがウルトラゼロキックをスカルゴモラに炸裂させた。

『行かせねえよ！ 陸の覚悟を無駄にはしねえ！』

ファイティングポーズを取り、今のキックでたじろいだスカルゴモラに突進を仕掛ける。

「……嘘……」

スカルゴモラと複数体のギャラクトロンを同時に相手取るゼロ。それを見て、千歌が声にならない声を漏らす。

彼女のみならず、九人の少女全員が信じられないものを見た様に硬直している。

「……陸ちゃん……?」

『ダアアアアア!!』

炎を噴き上げながら、ストロングコロナゼロが豪快に拳を振るう。三体のギャラクト

ロンを同時に殴り飛ばしたところで、オーブとジードがその傍に寄ってくる。

『ゼロさん!』

『ゼロ……、良かったの?』

『……陸の意思だ』

背中合わせになる三人を取り囲むように、ギャラクトロン軍団がじりじりとその距離を詰めてくる。

スカルゴモラは少し離れた場所でそれを眺めていた。

『さっさと片付けるぞ!』

『はい!』

ゼロが飛び出した後、身体を輝かせた二体の巨人が同時に地面を蹴る。

『オーブカリバー!』

『変えるぜ! 運命!』

オーブオリジン、そしてロイヤルメガマスターとなったオーブとジードが構えた大剣を下から上へ、居合い抜きのように奔らせ、二体のギャラクトロンの胴を切断した。

『オオオウラ!!』

その一方。殺到するギャラクトロン達を薙ぎ払いながら、ゼロは猛スピードでスカルゴモラへと突進していく。

『ハハハハハ！ 待ってたよ陸君！ 君が来るのを！』

「うるせえ！ 何がしたいんだお前は！」

『言つただろ？ 君の成長、それがボクの望みさ！』

突き付けられた太い角を紙一重で躲し、腕を首の後ろに回してヘッドロックを掛け、燃える拳を何発も叩き込む。

『ここで戦つてると、千歌ちゃん達が危ないよ？ ハアア！』

『ぐっ………！』

スカルゴモラが勢いよく首を振り上げ、ゼロを空中へと放り投げる。パワーが特徴の怪獣の力を宿しているだけあつて、その怪力はストロングコロナと同等と言ってもいい。

だが、

『シエヤア！』

宙返りを決めたゼロの身体が蒼く煌き、スカルゴモラの頭を蹴って跳躍した。

向かう先は、浦の星女学院の屋上。そこからゼロの戦いを眺めている九人の少女とプ
ラスα。

ルナミラクルへのタイプチェンジを終え、身体を光の粒子へと変換する。

『パーティクルナミラクル』

光の粒子は音速で空中を駆け、A q o u r s とジャグラーを掻つ攫うと、戦場から離れた場所にある海辺に十人を下す。

『・・・・・・・・』

「待つて！」

千歌達の安全を確保し、無言で戦場に舞い戻ろうとするゼロを二人の少女の声が制する。

「陸ちゃんなんでしょ!!」

「ねえ！　なんか言つてよ！」

振り向かずとも分かる。千歌と曜だ。

「・・・・・・・・早く逃げろ」

陸が一言返すと、ゼロは天高く飛翔していった。

『ミラクルゼロスラッガー！』

生成した無数の光の刃を、スカルゴモラに向けて一斉に解き放つ。

『甘い甘い！』

だがミラクルゼロスラッガーは全て、奴が角から放出した赤い雷によつて打ち消されてしまった。

「陸ちゃ——」

『オーブフレイムカリバー!!』

『スウィングスパークル!!』

背後で必死に訴える幼馴染の声も、オーブとジードの攻撃を喰らったギヤラクトロンが立てた爆音によって掻き消される。

だから聞こえなかった。そう自分に言い聞かせて、陸は眼前で猛るスカルゴモラを見据えた。

『キシヤアアアイヴウウウウウ!!』

『がはっ……!!』

着地と同時に打ち付けられる極太の尻尾。

ルナミラクルのパワーでは当然抗うことも出来ず派手吹き飛び、千歌達の頭上を越えて海に叩き込まれてしまう。

「陸!!」

ゼロに向けられるのは、陸を呼ぶ囁の声と、

『ラ〜〜〜』

いつの間にか空中に浮かび上がっていた、ギヤラクトロンの双眸だった。

不気味な程に美しい音色をたてる奴が天に掲げたギヤラクトロンシャフトには幾つもの魔法陣が形成され、無数の火柱がチャージされていく。

その姿はまるで太陽の様に美しく、雄々しく、恐ろしい。
あれはヤバイ。本能がそう訴えてくる。

『レボリウム——』

神速ともいえる速度で肉薄したゼロの掌がギャラクトロンに触れるよりも早く、

『ラ〜〜〜』

『がああああああああああ!!』

ギャラクトロンシヤフトの先端から光の柱が迸り、それに飲み込まれたゼロと共に海上に着弾した。

——その次の瞬間。

『パーティクルナミラクル!!』

地平線を覆う程の超巨大な魔法陣が浮かび上がり、爆風で海底が露わになってしまう程の大規模な爆発を起こした。

瞬間移動で間一髪難を逃れた陸とゼロだが、敵に立ち向かう事もなく、ただ立ち尽くして今の爆発の跡を呆然と眺めている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あまりの事に、声が出ない。

目の前には、何もない焦土が広がっている。

多くの水を湛えた内浦の海も、美しい砂浜も。．．．．．そして、

「．．．．．千歌．．．．．曜．．．．．果南姉ちゃん．．．」

その中にいた、Aqours九人とジャグラも。

まるでその部分だけ切り取られてしまったかのように、無くなってしまったのだ。

「つ．．．．．！」

無くなって、しまったのだ。

『．．．．．嘘だろ．．．』

陸も、ゼロも、オーブも、ジードも、あまつさえはスカルゴモラすらも、唐突に襲いかかった理不尽な正義の前に言葉を失っている。

蒸発してしまった内浦の海は、押し寄せてくる波によって元に戻る。

だが彼女達は？

たった今、ギャラクトロンスパークによって消し飛ばされてしまった彼女達は？

「つ．．．．．つ．．．！」

戻っては、来ない。

走馬燈の様に、モノクロームで映る九人の少女の姿が脳裏を駆け抜けて、全てが音を立って崩れていく。

瞬間、陸の中で何かが弾けた。

「ああああああああああああああああああ!!」

それと同時に、陸の身体から膨大な闇が溢れ出す。

次第に闇は全てを黒く塗りつぶしていく。内浦の景観も、そこにいるオーブやジードも、陸自身の思考も一切適切。

夜の帳が舞い降りた様に何も見えず、何も聞えない。五感が本当に機能しているのかすらも怪しくなってくる。

—— フフフハハハハハハハハハハ!!

分かるのは、身体の奥底でつり上がった赤い目をした黒い巨人が高笑いをあげているという事だけ。

『なっ——!』

それはゼロの意識をも飲み込んでゆき、

『ヴァ、アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

ゼロダークネスは、再び内浦の地に降臨した。

四十五話 失った友

『ヴア ヴァアアアアアアアアア!!』

雄叫びを上げたゼロダークネスが大地を蹴り、魔法陣と共に宙に浮かぶギヤラクトロンへと飛翔する。

『ダオラア!!』

ムーンサルトを決め、歪んだ正義の執行者を地面に蹴り落とす。その動きにゼロの面影は無く、さながら怒り狂う獣の様にも見える。

『フツ!!』

掌から放たれたデスシウムショットが雨の様に降り注ぎ、撃墜されたギヤラクトロンの機体をズスタズタに切り裂いてゆく。右腕、ギヤラクトロンシャフト、そして心臓部にあたるコアパーツを撃ち抜かれ、そこで爆散。

『ヴウウウウウウウウウウ……』

『……父さん……?』

爆散しなかったギヤラクトロンシャフトを踏みにじるゼロダークネスに、父ベリアル

の姿を重ねたジードが言葉を零す。

それもそのはず。

このゼロダークネス。本来はベリアルがゼロの身体を乗っ取った事で誕生した闇の戦士なのだから。

『ゼロさ——がああつ!!』

ゼロダークネスに駆け寄ろうとしたオーブを、残存していた他のギャラクトロンが襲う。ジードも別の残存兵を処理するのに手一杯だ。

その間に、ゼロダークネスはスカルゴモラと対峙していた。

『ははははははははははっ! いい! いいよ陸君! その闇の力!!』

両角に赤雷を纏わせながら、スカルゴモラはその巨体で突進を仕掛けてくる。

『その力がベリアルを——』

『デエエエヤアアア!』

その横を、闇が駆け抜けた。

スカルゴモラの背後には、黒いゼロスラッガーを逆手に持ったゼロダークネス。

そして、

『あえ………?』

切り落とされた、スカルゴモラの両角があった。

腑抜けたオウガの声など全く意に介さず、ゼロダークネスはカラータイマーの左右にゼロスラツガーを装着、途端に黒い光が集約していく。

『ダアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

『ぐああああああああ!!』

迸るダークゼロツインシユートがスカルゴモラを直撃し、食い込むような音と共に肉片が飛び散る。

『……は……は……は……まきかこれ程とはね……』

光線が止み、胸部の意匠が完全に吹き飛んだスカルゴモラはゆっくりと真後ろに倒れ、

『……流石は、——だ……』

奴を見て蘇った内浦の人々のトラウマと共に、爆散していった。

『これが……、ゼロダークネス……』

ジードが啞然として呟くのと、ゼロダークネスが残存しているギャラクトロンへと襲いかかるのは同時だった。

「……………んん……………」

千歌は爆音で目が覚めた。

その音が近い事を理解すると、身体は反射的に起き上がった。

「……………皆……………?」

周囲を見渡してみれば、千歌と同じように起き上がったばかりの A q o u r s のメンバーが。

まだ明瞭にならない思考で、何があったのかを記憶の泥濘から探る。

『オオオオオオ……………シヤツ!!』

「わあっ!!」

少し離れた場所でオーブがオーブカリバーを手にギャラクトロンと戦っているのを見て、意識を失う直前に何があったかを思い出した。

確か自分達は、爆発に巻き込まれたはずでは……………。

『……………っ……………っ……………』

すぐ近くで荒い息の音が聞こえた。

振り向くとそこには、

『つたく．．．．．、まーたやっちゃまった．．．．．』

仰向けになって地面に転がる一体の魔人が。

「つ．．．．．！」

千歌達が咄嗟に身構えたのを見ると、魔人は上半身だけ起き上がり、やれやれと肩を竦めて見せた。

『おいおい。命の恩人にその態度はないだろ？．．．全く、ナターシャの時と言いなオ

ミの時と言いい、何で俺はこんな奴等助けちゃうのかね』

暗いトーンの色調に、細く光る鋭い目。武器に見える胴体に、兜、腕当て、膝当てのようなパーツ。そしてそれらを止める縄のようなモールドがあり、鎧を着こんでいるようにも見える。

魔人は立ち上がると闇に包まれ、ある意味魔人よりも怪しいかもしれない男の姿になった。

「ジャグラー．．．．．さん．．．？」

その顔に心辺りがあった千歌が名前を口にすると、男、ジャグラーはぬるつとした動きで千歌に歩み寄り、鼻先が触れ合ってしまう程に顔を近づけてきた。

そして気味悪く笑う。

「一つ貸しだぞ。ゼロと一体化してるあのガキに伝えといてくれよな」
「っ！ そうだ陸ちゃ——」

『ダアアアアアア』

千歌の声をかき消す様に猛々しい咆哮が響く。

「え………」

それが何なのか理解するのに、時間がかからなかった。

ほとんどトラウマと言ってもいい記憶が脳裏を過る。

何故なら、この声の主は、

「………ゼロ………」

一週間前のあの日の様に、黒く染まったウルトラマンゼロの姿だった。

あの日同様。理性など吹き飛んだように暴れ続け、引き千切ったギヤラクトロンシヤ

フトで敵を横殴りにしている。

「……また………」

ゼロの正体が陸だと理解はしつつも、心に刻み込まれたトラウマはやはり恐怖心を優

先させてしまう。

「………悲しんでる……？」

「……え？」

そんな中、陸とは一番付き合いの長い曜が前回とは違う点に気付く。

曜の言う通り、暴走しているというよりは、怒りと悲しみに任せて敵を破壊しているようにも見える。

「ギャラクトロンがお前ら事を吹き飛ばした途端にああなった。多分お前等が殺されたと思つて怒り狂つてるんだらうよ」

何故か恍惚とした表情で、ジャグラーがゼロダークネスを見やる。

その瞳には底知れぬ狂気が宿っていたが、今A q o u r sにジャグラーに意識を向けている者は誰もいない。

「陸ちゃああああ——んっ!!」

声を張り上げ、千歌が幼馴染の少年の名前を呼ぶ。

「陸————ッ!!」

それに続いて曜。

自分達が死んでしまったと思つて怒り狂っているのなら、無事だと分かればきつといつものゼロに、陸に戻つてくれると信じて。

『ツ……ッ!!』

その想いが通じたのか、ゼロダークネスは動きを止めた。

ゆつくりと、殊更にゆつくりと、スローモーションで再生しているかの様な動きで首

だけを千歌達の方へと向ける。

「・・・・・・・・千歌・・・・？ 曜・・・・・・・・？」

そしてゼロダークネスから発せられた陸の声を、九人は聞き逃さなかった。

両腕に纏っていた赤黒いオーラは消え、棒立ちをして A q o u r s 九人を見下ろしている。

正気を取り戻したようなその姿に、心弛びした雰囲気は A q o u r s の間に舞い降りる。

だがそれを打ち壊す者がいた。

『ガアアアアア』

立ち尽くすゼロの胸部を打ち抜く光が一閃。

「つ・・・・・・・・・・・・・・・・」

思わず口元を手で覆う千歌。

何故なら、その光はウルトラマンの命とも言える器官。カラータイマーを打ち抜いていたのだから。

『ヴウ・・・・・・・・、アッ・・・・・・・・』

目から光りを失い、力なく転倒したゼロはピクリとも動かなくなった。

『ゼロさん!!』

『こん……のおおおおお!!』

ゼロを倒された事が二人の導火線に触れたのか、オーブとジードは相手取っていたギヤラクトロンを破壊すると、間髪入れずにゼロを倒した機体に向けて大剣を構える。

『オーブスプリーム……カアアリバアアアアアアアア!!』

『ロイヤルエエエンド!!』

二大戦士が放った怒気の奔流はギヤラクトロンの硬質なボディをいとも簡単に穿ち、三十体以上いたギヤラクトロン軍団最後の一機は跡形もなく粉碎された。

それと同時にオーブとジードは消え、九人は倒れ伏すゼロへと向けて地面を蹴った。

「ゼロさん!」

「ゼロ!」

千歌達がゼロの元に辿り着くと、既にガイとリクはその傍らにいた。

ゼロはカラータイマーこそ点滅はしているものの、まるで死んでしまったかのように瞳にはいつもの輝きはない。

やがてその胸の輝きすらも失われ、

「あ………」

ぼやけ始めたゼロの身体は、徐々に光の粒子となって消えていく。

その光はとある一点に収束していき、やがて一人の少年の姿になった。

「陸ちゃん！」

「陸！」

たまらず駆け出す千歌と曜、そして果南。

陸は気を失っていた。全身に伺える傷や火傷の跡。その姿に、千歌は既視感を覚える。

これは、前に怪獣の足元に倒れていた時と同じ。

つまりはあの時も、こうやって怪獣と戦って傷ついていたという事。

「陸ちゃん！　ねえ陸ちゃん！　しつかりしてよ！」

顔を涙で濡らし、必死に陸の身体を揺さぶるが、あの日同様返事は帰ってこない。

代わりに、

「いぼっ………」

陸が咳き込むと共に血が吐き出され、頬を伝って地面に滴り落ちていく。

「ピギイツ!!」

「っ! 陸!」

今の事を受けて、ガイが慌てて駆け寄って陸を担ぐ。

「ゼロさんと一体化しているから命には関わらないだろうが……、安静にした方がいい事に変わりはない。一番近い病院まで案内してくれ」

「はい!」

『陸』

意識の隅をつつくように、戦友の声が闇の中で響く。

目を開けば、何もない真っ暗な空間の中にいた。上も下も分からない底なしの闇。

その中に一人、赤と青の、目つきの悪い戦士が佇んでいる。

「……ゼロ……?」

『よう、陸。こんな感じで会うのは初めて会った時以来だな』

ゼロに言われ、そう言えばと思い出す。

陸にとっては全てが始まった日。ゼロと出会い、一体化したあの時も、こんな空間の中にいた。

「……で、何でいきなりこんなところに……」

戸惑う陸に、ゼロは背を向けた。

『お別れだ』

「……は?」

言葉の意味を理解できずに、思わず間拔けた声を上げてしまう。

『陸』

それを無視し、ゼロは言葉を重ねる。

『すまなかつた』

「え?」

『俺のせいで、本来戦う必要もないお前を戦いに巻き込んでしまった』

ゼロがどんな顔をしてその言葉を紡いでいるのかは分からない。

だがその背中からは、隠しきれていない程の自責の念を感じる。

『……じゃあな……』

振り返る事は無く、ゼロは底のない闇の向こうへと歩き出していった。

「おいっ！　ゼロ!!」

必死に四肢を動かし、必死にその肩を掴もうと手を伸ばすが、歩いているはずのゼロには全く追いつくことが出来ない。

「ゼロ！　ゼロオツ!!」

ゼロとの距離がどんどん離れていく一方、陸のいる闇の空間には光が満ちてゆく。

あまりに眩しく、思わず目を瞑る。

「待ってくれよ——」

——「ゼロツ!!」

再び目を開くと、そこにもうゼロの姿は無かった。

それどころか闇もなく、目の前には前にも訪れた病室の光景が広がっている。

陸はそのベッドの上で、手を伸ばしながら上半身のみを起き上げていた。何故だか身

体が重い。

そしてそんな陸を見つめる。九人の少女と二人の青年。

「……………陸。大丈夫……………?」

一番近くにいた果南が、憂いに滲んだ声音でそう問いかけてくる。

「ああ……………、大じよ——」

下げた手の指先が、固い何かに触れた。

どうしてか手に馴染むその感触に、引き寄せられる様に視線を落とすと、そこには。

「……………っ!」

——色を失い、石のようになってしまった、ウルトラゼロアイがあった。

「……………大事そうに握ってたから……………、一応そこに置いておいたけど……………」

果南の言葉も、今は耳に入っていない。

陸は両手でウルトラゼロアイを掴み、全ての意識をそれへと向けていた。

「おい!! ゼロ!! ゼロツ!!」

悲痛に叫ぶ陸の声が、病室の中で反響する。

脳内でも呼びかけを続けるが、答えが返ってくることは無かった。

「……………返事しろよ……………、ゼロオ……………」

遂には俯いてしまった陸。

「……………元々怪我してボロボロだった体に、父さ……………、ベリアル力が侵食して……………、それで……………」

重々しくリクが発した声が、今度はしつかり耳朶を打つ。

そこから先は言われなくとも理解できた。

つまりゼロは、……………、死んだという事。

「……………そんな」

A qoursの皆も、気まずそうに視線を落とす。

千歌と曜の、二人を除いて。

「……………いつから、戦ってたの……………」

しばらくは戸惑いながら二人の顔を見つめていたが、やがて言葉の意味を理解する。

そうだ。自分は変身したんだ。彼女達の前で、ゼロに。

「ねえ！ 答えてよ！」

ものすごい剣幕で詰め寄ってくる千歌に気圧され、言葉に詰まる。

「……………話してやれ。お前の言葉でな」

少し離れた場所で腕を組むガイが、一人だけ落ち着いた口調で諭してくる。

「……………ダイビングに行った日から。ゼロと一体化したのは、花丸達を庇って死んだ時だ」

ハッキリと自分の口で、過去に一度死んだことを伝える。
そして全て話した。

死んだ自分を、ゼロが一体化して命を共有することで救ってくれた事を。それから今まで、ゼロと共に戦ってきた事を。

そしてそのせいで、陸と一緒にいるA q o u r sが宇宙人に狙われているという事。だから皆から離れようとした事。

「……何で、そうやって一人で抱え込んだじゃうの!!」

全て吐き出して下を向いた陸に、曜も声を荒げて詰め寄ってくる。それに陸は俯いたまま答える。

「……当たり前だろ。巻き込める訳——」

ぱあん、と乾いた音が響いた。二つ重なって。

それと同時に頬に走る痛み。どうやら引っ叩かれたらしい。

「いっ………何——」

陸は非難めいた目で二人を見て、言葉を失う。

「だからって陸ちゃんが傷ついていい訳じゃない!!」

気付けば、千歌と曜はいつの間にか目元に涙を浮かべて泣いていた。

「馬鹿っ!!」

曜がそう吐き捨てると共に、二人そろって荒々しく病室を出て行く。

後に残ったのは圧倒的な沈黙と気まずさ。そんな病室の中、陸はウルトラゼロアイを見つめた。

今まで散々戦って、これよりも遥かに強い力で殴られたりしてきたはずなのに。今のピンタは、これまでの人生で一番痛かった気がする。

「・・・なあゼロ。・・・俺はどうすりや良かったんだよ・・・」
それでもやはり、ゼロからの答えが返ってくることは無かった。

四十六話 仲間とは

一時的な入院を終え、重い足取りで病院から出た陸は出入り口付近にある柱に寄りかかる。

——何でしょげてんだ？

だが、あの日の様に声が聞こえる事は無かった。

この病院は、陸とゼロが初めて出会った場所だ。

ここから全てが始まった。

この平和の裏で密かに暗躍していた陰謀を知り、その戦いの渦中に身を投じた。そうしていなければ知り合う事もなかったであろう少女達と出会った。

「……ゼロ……」

色を失ったウルトラゼロアイを装着するが、当然変身などできない。

リクは言っていた。弱っていた身体にベリアル力が侵食した事で、ゼロは消滅してしまっただ。

あの時感情に身を任せてベリアル力を開放したのは陸だ。

皆が殺されたと勘違いして、ただギャラクトロンを破壊する事しか考えられなくなつて、ゼロが弱っている事にも気付かずに闇を開放した。

つまりゼロを殺したのは、陸だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そもそもベリアルの力を使う事になるきっかけは、ギャラクトロンMK3に捕らわれたダイヤを救出する為だった。

でもその強大な力に飲み込まれ、暴走し、危うくダイヤを殺しかけた。

大切なものを守る為に力を出した結果がこのザマだ。

「・・・・・・・・・・俺といたから・・・・・・・・」

「世界の終わりみてーなひつでえ面だな」

不意に声が掛かり、陸は顔を上げる。

見ればそこには、棒アイスを齧るテンガロンハットの青年がいた。

「・・・・・・・・・・ガイさん・・・・・・・・」

「ちよつと付き合え。陸」

「……何で俺達は風呂に入ってるんですか？」

「嫌なことがあつたら風呂に入って体の汚れごと洗い流しちゃおう。それがこの世の摂理ってもんだろ」

そんな摂理聞いたこともなかった。

病院前でガイに捕まった陸が連れてこられたのは、露天風呂だった。しかもよりにもよって十千万の。

「前に行った銭湯の親父から、ここの風呂も中々だつて聞いてな。……知ってるか、幼馴染の家だもんな」

腕を組みながら湯船に浸かったガイは、前に銭湯で出会った時の様に至福の表情を浮かべている。

「僕はこういう大きい風呂に来た事なかったからなあ……。星雲荘はシャワーしかないし、レムも湯船付けてくれたらしいのに。ペガに頼もうかな？」

そしてそれは、ガイの隣にいる朝倉リクも同じだった。

ちなみにこつちの方のリックはガイがここに来る際、仙道家にて特撮ドラマを見ていたところを連れ去ってきたのだ。

「……二人共、ゼロがいなくなつたつてのに呑気なもんですね……」

それが理解できずに、つつい皮肉めいた事を口にしてしまう。

「……信じてるからな。ゼロさんの事」

「え？」

ガイは肩まで湯船の中に沈み、確信しているような瞳で空を仰いだ。

「本当に、ゼロが死んだと思ってる？」

「いや……、そもそもそれを言つたのはリックさんじゃ……」

「別に僕、ゼロが死んだとは言つてないよ？」

確かにリックはハッキリとゼロが死んだとは言つてなかつたが、今のこの状況では生きているとは到底思えない。

「俺達ウルトラマンは、信じる心、守りたい思いがあれば、何回だつて立ちあがれたし、前を向くことが出来た。これまでも、勿論これからもな」

「だけど本物のウルトラマンの二人の言葉には、妙な説得力がある。

「陸君は、どうして皆を守りたいと思つたの？」

「どうして守りたいと思つたか。」

別に忘れていた訳ではないはずだ。いつの間にか、それが別のものに変わっていただけ。

「……最初は、千歌や曜、果南姉ちゃんを守ればそれでいいって思っていました」
六年前、スカルゴモラが内浦を襲ったあの日。

燃える町の中、非力故にただ怯える事しか出来なかった破滅の記憶。彼女達を失う事が何よりも怖かった。

だからゼロと共に戦おうと思ったのだ。

「……そんな時、桜内に出会ったんです」

梨子と初めて会ったのは、ゼロと出会って数日たった時だった。

思えばここからだろう。幼馴染の三人さえ守ればいいと思っていた陸の心境に変化が訪れたのは。

「その後も、花丸、ルビィちゃん、鞠莉さん、ダイヤさん、津島。千歌がスクールアイドルを始めてから色んな出会いがあつて」

先程のガイ同様天を仰ぐ。今日の空は、目に痛い程青かった。

「……そんでいつの間にか、そっちも守りたいって思うようになってました」
初めは取りこぼすのが怖くて、これ以上は抱え込まないようにしていた。

でも彼女達がリトルスターを発症した時、陸は迷わず守る事を選んでいたので。

それは千歌や曜の知り合いだったからとかそういう訳ではなく、彼女達と関わっていく内に自然と思うようになっていた事。

そこまで二人に話し、目を瞑る。

「…その結果がこれです。戦いに巻き込んで、拳句の果てに俺自身で傷付けた。欲張って抱え込むもの増やしたら、元々守りたかつたもんまで全部零れていった……」
目尻に何かが滲んでくるような感じがしたので、誤魔化す様に湯を顔にかける。視界が揺らいで見えるのは湯のせいなのか、込み上げてきた何かのせいなのか。

「光と闇は表裏一体。だからこそ誰の中にもある、埋まらない心の穴だ」
突如ガイでもリクでもない声が耳朶に触れる。

声のした方を向くと、浴槽の隅に一人の男が気味悪く笑いながら佇んでいた。

「ジャグラー……、いたのか」

いつの間にか同じ風呂に入っていたジャグラーは、陸と目が合うと酷薄にその目を細め、ぬるぬるとした動きで顔を寄せてくる。

陸が軽い緊張を覚えていると、その口が開かれる。

「だが、お前の闇は見ていて気味が悪い」

「……」

「光を捨てきれないお前に、闇の事で悩む資格はない。……闇に向いてねーんだよ。お

前

何故か最後、自分を皮肉る様に笑うと、ジャグラーは脱衣所へと向かつて行った。

「・・・慰めるの下手だなアイツ」

その事に首を傾げていると、苦笑気味にガイが呟いた。

「陸。アイツの言う通り、闇は誰の心にもある。いくら拒絶したって、それから逃げ切れはしない。だからこそ、闇を光で抱きしめなきゃいけない」

太陽を背に立ち上がり、真っ直ぐな視線を陸へと向ける。

「己を信じる心、それが力になる。お前なら、それが出来るはずだ」

最後にポンポンと陸の頭を叩くと、ジャグラーの後を追ってこの場から立ち去って行った。

「・・・・・・・・どうすりゃいいんでしょうね？ 俺・・・・・・・・」

「自分の道は自分で決めなきゃならない」

「・・・・・・・・でも」

その方法が分からないから、答えを求めているというのに。

「道に迷ったら、仲間の事を思い出すんだよ。過ごした時間を、夢を、自分が何故、ここにいるのかを」

「・・・・・・・・仲間・・・・・・・・」

そんな陸の心境を見透かすように諭される。

少し子供っぽいと思っていた彼の紡いだ言葉。それを少し意外に思っていると、リクは後頭部に手を回しながら笑った。

「つて、これゼロに言われた事なんだけどね」

「・・・ゼロが・・・」

「うん。言われた時は僕もよく意味が分からなかったけど、今なら分かるよ」

リクは懐かしむように目を瞑ると、ガイやジャグラーと同じように立ちあがった。

「・・・あとは君次第だよ。ガイさんも言ってたけど、陸君ならきつとできるよ」

そう言つて突き出してきた握り拳に、そつと陸も拳を当てようとすると、

「痛っ!!」

想像以上に強くグータッチをされる。何となくこれもゼロにされた事なのだなと察しつつ、ガイ達を追って行ったリクの背中を眺めた。

「・・・仲間、か・・・」

再度空を仰いで、儂げに呟く。

仕切りの扉を隔てた先、女子風呂で、今の会話を A q o u r s の皆が聞いていたとも知らず。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

浦の星女学院。

陸と、その幼馴染三人がいないスクールアイドル部部室の中、六人は顔を見合わせていた。

「ちかっち達は？」

「・・・・・・・・ちよつと気持ちの整理がしたいって」

「・・・・・・・・仕方ないなら。あんな事を聞いちやったら・・・・・・・・」

陸がウルトラマンゼロだった事が判明してから既に数日が経過しているが、まだその衝撃は抜けきっていない。

それに加えて、昨日偶然にも聞いてしまった陸の思い。

どんな思いで、今まで自分達を守ってくれていたのかを知った。

ずっと戦っていたのだ。誰にも気付かれる事なく、最も目立つ方法で。

その事で一人悩み、苦しみ、自分達を危険な事に巻き込み、ダイヤを傷付けた。でもそうなるまでに陸を追い詰めてしまっていたのは、紛れもないここにいる六人なのだ。

「このままでいいのかな．．．．．？」

不意に梨子が眩き、皆視線を落とす。

そう思っているのは A q o u r s 全員一緒なのだ。今ここにいない三人も含めて。言いわけが無いのだ。今までの事を考えれば、こんな時に何もしてあげられないなんて。

だがどうしたらいいのか分からない。皆それがもどかしくて堪らないのだ。

ただ一人を除いては、

「貴方達。今までの事を忘れましたの？」

凜とした声が、静寂が支配していた部室の中に溶け込んでいく。

その声を発したのは、何とダイヤだった。

「確かにあの方は、貴方達を危険な事に巻き込み、わたくしも死の危険に晒されましたわ。けど、それ以上に守られてきたのでしょうか？ だったらまず伝えるべきなのではないですか？ ありがとうございます」

その言葉に、全員はつと顔を上げる。

「・・・そうずらね」

領いた花丸に同調し、他のメンバーも次々と首を縦に振る。

「怪獣から守ってくれた」

梨子も。

「前に進む勇気をくれた」

ルビイも。

「くつく・・・、リトルデーモンに労いを・・・」

善子も。

「忘れていた事を、思い出させてくれた」

鞠莉も。

陸と、あの青い巨人に守られてきたという事は、変わらないはずだから。

「行こっか」

誰かがそういうまでもなく、皆部室の外へと足を向けていた。

そして理解する。知らぬ間に自分達が何者かに囲まれていた事を。

「ピギイツ」

悲鳴を上げるルビイの視線の先、そこでは、

赤い一つ目の白いアンドロイドが二十体以上並び、こちらに武器を向けていたのだ。

「宇宙人!!」

「何でここに………」

一瞬遅れて、その理由を悟る。

この頃衝撃的な事が多すぎて失念していたが、一人宇宙人に狙われるものを持っている少女がいるではないか。

大量のアンドロイド、バリスレイダーがその単眼に捉えているのは、ダイヤ。

今彼女は、リトルスターを発症している。

「にげ——」

鞠莉がダイヤの手を引くより早く、バリスレイダーは彼女に向けて短剣を振りかざし

、
何者かによって胴を一刀両断された。

「え……?」

ダイヤが声を漏らしたのを皮切りに、バリスレイダーは次々と切り捨てられていく。

そして最後の一体が倒れ、その後ろに立っていた者の姿が露わになる。

人間ではないその存在に一瞬身構えたものの、すぐにそのヒロイックな魔人が誰なのかを理解する。

「……ジャグラー……さん……?」

『ふ……ふ……』

突然の事に呆然とする六人の前で人間態に戻ったジャグラーは、初対面のあの日の様に不気味な笑みを作った。

「ついて来い。面白いもんが見られるぜ？」

——ピンポーン。

時が止まったかのように静かだった家の中に、唐突にインターホンの音が響く。

「……？」

一瞬誰かと思ったが、大方先程外出していったガイカリクのどつちかが帰ってきたのだらうと思い、ロクに確認もせず、玄関のドアを開ける。

「え……」

だがそこにいたのは居候の青年のどちらでもなく、青いロングヘアをポニーテールに束ねた少女だった。

「……果南……姉ちゃん？」

「……やっぱりにここにいたか……」

呆れ顔でそこに立っていた果南は、陸が何か言うよりも早く腕をつかみ取る。

「ちよ……、姉ちゃん？ 何を……」

突然の事に困惑しつつも問いかけるが果南からの返答はない。

されるがまま、陸は家の外へと連れ出されていった。

A q o u r s の練習を休んだ千歌は、曜と共に防波堤に座り込みながら目の前に広がる海を眺めていた。

内浦の海は毎日見てきたはずなのに、何故かいつもとは全く違う海に見える。

「……曜ちゃん」

「・・・何？」

陸が今までウルトラマンとして戦っていた事を知った。

そんな中自分達を巻き込んでいる事に密かに悩み、A q o u r s から離れようとしていた事を知った。

まるで自分の事はどうでもいいような陸に腹が立ち、ついつい手が出てしまった。

だけれど昨日、偶然にも陸が先輩ウルトラマンに思いを吐露したのを聞いてしまった。

だからこそ今、どうしたらいいのか分からない。

「・・・私、どんな顔して陸ちゃんに会えばいいんだろ。・・・なんて言ったらいいんだろ」

「・・・分かんない」

陸がゼロに変身したのを見たあの時から、薄々気付いてはいたのだ。

彼が今まで病院送りになるような怪我を負うまでに戦っていたのは、自分達を守る為だったのではないかと。

そしてそれは当たっていた。つまり、

陸にあそこまでさせてしまったのは、自分達だという事。

「いつも通りの顔で、思ってる事正直に言っただけじゃねーのか？」

「・・・・・・・・？」

聞きなれない声が耳を撫でる。

しかし体は自然と反応し、声にした方を向いていた。

「こういう時こそジードだよ。ジーンとしてても、ドーにもならない」

そこにいたのは、少し前に突如内浦に現れたウルトラマン二人。

クレナイガイと、朝倉リクだった。

四十七話 限界を超えてゆけ

「……なるほどな」

もう夏だというのにジャケツトを羽織ったガイが、防波堤に寄りかかりながら二人の少女の顔を見据えた。その隣にはリクもいる。

二人のウルトラマンに思っている事を打ち明けた千歌と曜は、ガイに差し出されたラムネの瓶を弱々しく握る。

二人に対して緊張している訳ではない。自分達の身勝手さを自覚したから。

「……それで、つつい手が出ちまったと」

「……はい……」

あの時手が出たのは陸に腹が立ったから、だけではない。

どこか悔しかったのだ。自分達の知らない陸がいた事が。その事で苦しんでいた事を自分達に相談してくれなかった事が。

その事を二人には話した。

波の音が、妙に物悲しく聞こえる。

「……仕方ねえよ。ヒーローなんてそんなモンだ」

「……え？」

「太陽は沈んだら見えなくなる。でもな、見えないだけで、地平線の向こうではずっと輝いてるんだよ。見えないところで輝いてる光もある。ヒーローなんてのはそんなモンなんだよ」

ラムネの瓶を傾けながら、ガイは内浦の海に視線を移した。

「お前等の目に戦ってるゼロさんは……、陸はどう映った？ 隠れて戦ってた事に対する文句は抜きで、純粹に自分達を守ってくれていた事をどう思った？」

戦う陸を、ウルトラマンゼロをどう思っていたか。

腹が立った？ いや、守ってもらっておいて何様のつもりだ。

悔しかった？ まず何がだ。嫉妬する様な対象ではない。

悲しかった？ それも違う。ゼロに守られてきた自分達は、いつでも笑顔だったじゃないか。

なら、それは……、

「……嬉しかったです」

「……だろ？」

その返答を聞くや否や、ガイはラムネを飲み干し、二人の頭にポンと手を置く。

「だったらそれを伝えてやれ。お前等自身の言葉で。……小さい頃からずっと一

緒にいたお前等なら、それが出来るはずだ」

その言葉に、千歌と曜ははつと互いの顔を見合わせた。

ガイの言う通りだ。陸はずつと見えないところで自分達を守るために戦ってくれていた。

自分の身を顧みずに戦う彼に腹が立つたし、自分達の知らない陸がいる事に悔しさも覚えた。

けどその前に、真つ先に彼に伝えなければいけない事があつたじゃないか。

「どんなに強いヒーローでも、一人じゃ戦えない。支えてくれる仲間が必要なんだ」
今度はリクが、自身の胸に握り拳を当てながら言葉を並べる。

「それは僕達も一緒だよ。ウルトラマンだって、時には誰かの助けを必要とする時がある。だからその時は、君達が陸君を支えてあげて」

リクは爽やかに笑うと、最後にこう言った。

「僕等は皆で、ウルトラマンなんだ」

千歌と曜は立ち上がると、真つ直ぐ二人の青年の視線に自分達の視線を重ねる。

「ありがとうございます！」

いつも通りに元気よく感謝を伝えると、二人は踵を返して走り出した。

感謝を伝えなければいけない相手が、もう一人いるから。

一方、そんな二人の背中を微笑みながら見守るガイとリク。

「言うようになったじゃねーか。リク」

「ガイさんにゼロ。それに皆のおかげです。支えてくれる仲間がいたから、僕は戦ってこれたから」

「……そうだな」

二人は一人で突っ走っていた過去の自分を笑い飛ばすと、目の色を変えて空を見上げた。

「行くぞ。リク」

「はい！」

ガイはオーブリング。リクはジードライザーを取り出し、空に浮かぶ先日と同じ赤い魔法陣を視界に定める。

「ジーツとしてても……」

「ドーにもならねえ！」

「……陸といると、皆不幸になる……ね」

「……うん……」

潮の香りが漂う、ダイビングショップのテラス。

—— 己を信じる心、それが力になる。

—— 道に迷ったら、仲間の事を思い出すんだよ。過ごした時間を、夢を、自分が何故、ここににいるのかを。

ガイとリクに言われた言葉。

言われた事の意味は分かる。だが、具体的にどうしたらいいのかは分からなかった。

だから話した。思っていた事を、余すところ無く全部。

「何でそう思ったの？」

「……姉ちゃんも見たる？ 俺はダイヤさんを殺しかけた。そんな事許される訳ない」

「……そこを許した覚えはないよ？」

陸の正面に座る果南に肯定されて思わず口を噤む。

分かつてはいた。そう思われている事くらい。

だけれどもこうしてハッキリと口にされるのは、やはりちよつと辛いものがあつた。

「……………でも、それ以上に自分が許せない」

「……………へ？」

拍子抜けして思わず顔を果南に向ける。

そこで見た彼女の顔は、鞠莉とすれ違つていたあの時よりも悲し気で。

「ねえ陸。なんで陸に私の事姉ちゃんつて呼ばせてる理由、分かる？」

唐突に質問を投げかけられ、過去の記憶に探りを入れる。確か十一年くらい前だつただろうか。

「……………急に弟が欲しくなつたとかそんな——」

「ああ、それ嘘」

あつけらかんとそう口にする果南は陸の隣に腰かけると、そつと寄りかかつて身を預けてきた。

彼女の身体の重みと温かさが直に伝わる。

「……………陸は昔から人を頼るのが下手で、いつも一人で抱え込んでたでしょ？」

そんな幼い頃からの自覚は無かつたが、言われてみれば確かにずつとそうだつた。

今回の事も、全てを一人で抱え込んでしまった事が原因だから。

「・・・まさか、それで・・・?」

「うん。お姉ちゃんになれば、少しは頼ってくれるようになるかなって・・・」

千歌と曜には呼ばせていないと思っていたが、まさかそんな理由だったとは。

なんとも彼女らしいが、逆にその当時から陸は果南に心配を掛けさせていたという事。

その事を心苦しく思っていると、果南は寄りかかりながら陸の顔を見上げてくる。

「昔は私の方が背は高かったのに、いつの間にかこんなに大きくなったんだか・・・知らなかったなあ・・・」

過去を懐かしむように目を瞑る。その表情にはほんの少しの後悔が滲んでいるようにも見えた。

「ホント、前に陸が言ってた事と同じだね」

「え・・・?」

「いくら幼い頃からの付き合いだからって、どれだけ長く一緒にいたって、ちゃんと言葉にしたいと伝わらない事もあるって。ホントにその通りだったよ」

それは思い込み故に鞠莉とすれ違っていた果南。そして伝えるべき事を皆に伝えない陸自身にも向けていた言葉。

「ずっと陸の事は分かっているつもりだった。守ってあげようって思ってた。けど、全然

分かつてあげられなかった上に、ずっと守ってもらつてたなんてね……」

果南は陸の手に巻かれた包帯を擦り、やはり悲し気に笑う。

そして、

「……ゴメンね。こんなになるまで気付いてあげられなくて……」

陸の後頭部に手を回すと、そつと自分の胸元に抱き寄せた。幼い頃からずつと慣れ親しんできた温かさと柔らかさを顔全体で感じる。

「……何で……、姉ちゃんが謝るんだよ……」

陸の言葉には答えず、果南は回した腕に更に力を込めた。

「ありがとう」

か弱く震える涙声。

それを聞いた瞬間、ずつと堪えていた何かが入み上がってくるような感覚になつて。

「陸は確かに、皆の事を危険な目に遭わせたり、ダイヤを傷付けた。……でも、それ以上に皆の事を守ってきたんだよ。……その事は、忘れないで……」

「……でもっ……」

陸の目尻に滲んできた何かを、果南は優しく拭つた。

「……そう思つてるのは私だけじゃないよ。他の皆だつてそう。ダイヤだつて、……それに」

果南は陸の顔を自身の胸から解放すると、陸の背後に視線を向けた。そこには、肩で息をしながらみかん髪と銀髪を揺らす、二人の少女が。

「・・・千歌・・・曜・・・」

「あの二人もね」

ポンと背中を押すと、果南はそれ以上何も言わずに陸から離れた。

あの二人と、ちゃんと話して来いという事らしい。

「・・・」

二人の前に立ち、黙ってその顔を見据える。

千歌と曜には、真っ先に言わなければいけない事がある。

彼女達は、A q o u r sの中で最も陸の事を心配してくれていた二人だから。

それでも一人で突っ走ったのは陸だから。

まずは・・・、

「ゴメン！」

陸が何か言うよりも早く、二人の幼馴染は深々と頭を下げてきた。

自分がやろうとしていた事を先にやられて戸惑っていると、曜が顔を上げてこちらを見つめてくる。

「・・・あの時ついカツとなって、一番最初に言わなきゃいけない事忘れてた」

続いて千歌も顔を上げ、曜と同じように陸と視線を合わせる。

「・・・確かに、陸ちゃんが黙って戦ってた事にはむかーつとしたよ？ 私達の知らない陸ちゃんがいるのもなんか悔しかったし・・・でも・・・」

千歌は固くなっていた表情を解し、いつものような朗らかな柔らかい笑みを作る。

「・・・・・・・・それでも、嬉しかったんだよ」

「・・・・・・・・嬉しかった・・・？」

「うん」

それが何一つ曇りのない正直な言葉だというのは、幼馴染の陸ならばすぐに分かった。

「・・・だから、私達は陸に伝えたいことがあります」

曜もまたいつもの眩しい笑みを陸に向けてくる。

そして二人は一度お互いの顔を見合わせて頷くと、びしっと背筋を伸ばした。

「陸ちゃん・・・」

「陸・・・」

「ずっと私達を守ってくれて、ありがとう——ッ！」

「っ……！！」

溢れ出そうになったものを全力で堪える。

まだだ。

まだ抑えろ。

自分が言わなければいけない事を、こっちはまだ言っていない。

「……っちこそゴメ——」

「……ありがと——ッ！……」

だがその声は、別方向から飛んできたもつと大勢の声によつて遮られた。

声が出したのは千歌と曜の背後。

いつの間にかそこにいた、残りのAQUORSMENメンバーだったのだ。その近くにはジャグラーもいる。どうやら彼が連れてきたらしい。

それを見たらもう、せり上がってくる何かを堪える事などもうできなくて。

気付いたら、頬を一筋の光が伝っていた。

「もー。何陸ちゃん泣いてんのさー」

「男でしょー♪」

「……うるさい……」

涙を拭くと、遠くから機械音と巨大な地響きが聞こえた。

『シユワ!!』

『ハアアアアア!!』

見なくても分かる。ギャラクトロンを増援隊とオーブ、そしてジードが戦闘を始めたのだ。

「・・・逃げなくていいのか？ 下手すりゃ死んじゃまうぞ？」

ジャグラーが全く緊張感無しに避難を促しても、誰一人逃げようとはしなかった。

「大丈夫ですわ。わたくし達にはウルトラマンがいますから」

「ザッツライツ！」

「うゆ！」

「信じてるよ。仙道君」

「さあ、行つてきなさい！ リトルデーモン!!」

「先輩！」

完全に陸、そしてゼロの事を信頼しきっている顔だ。

それは幼馴染三人も一緒な様で、

「私は止めないよ？ 弟が決めた事ならね」

「全速前進！ ヨーソロー！」

「・・・陸ちゃんは、この力で何がしたいの？」

千歌は陸がポケットに忍ばせておいたウルトラゼロアイを取り出すと、両手で持つてそれを差し出してきた。

「……つたく。どいつもこいつも好き放題言いやがつて。……
ありがとな」

ふんだくる様にそれを受け取ると、素直に言葉を零す。

ガイとリクが言っていた事は、こういう事か。

「……なあゼロ。散々皆を巻き込んだし、傷付けたけどさ。……それで
もやっぱ守りたいんだよ、皆の事」

陸は九人に背を向けると、色を失ったウルトラゼロアイに視線を落とした。

リク、ジードの言葉を信じるならば、ゼロは死んではない。

そしてガイ、オーブは言った。信じる心があれば、ウルトラマンは何度だって立ちあがれると。

だったら陸が、ゼロの事を思いつきり信じてやればいい。
これまで共に戦った、友として。

「……俺には、二万年早いかな？」

そしてきつと彼なら、こう返してくるだろう。

へ………へっ……、アホ。言い出すのが二万年遅いんだよ

「っ………!!」

予想していたものとはちよつと違う返答と共に、ウルトラゼロアイに三色の色が走り、中央のランプが輝き出す。

へ………仲間の意味、ようやく分かったみたいだな

「ゼロ………ッ」

ウルトラゼロアイを握る腕に思わず力が籠る。

へんな情けねえ面してねえでさっさと行くぞ。守りたいんだろ?」

「お——うっ!!」

オーブとジードに加勢するべくウルトラゼロアイを装着しようとしたその瞬間、背中に何かが突撃して来た。

「………どうした?」

それが何か、誰なのかは振り向くまでもなく分かる。

「約束」

「あ?」

「……私達はラブライブで優勝する。だから陸ちゃんも生きて帰って私達の事見守つてよ。……苦しくなったらいつでも頼つて、一人で戦うなんて言わないで。……私達

は、皆でウルトラマンなんだよ……」

「……………ん」

腰に回されたその手をしっかりと握って答えると、彼女は背中を押す様に手を離してくれた。

「さあ！ 行こうぜ！」

「……………だな」

「へシエア！！」

『オオウラア！！』

ジードと取っ組み合いになっていたギャラクトロンを踏みつけ、反動で宙返りしてから連中に背を向けて地面に着地する。

振り返ると、ギャラクトロン軍団に向かって名乗った。

『俺はゼロ………。ウルトラマンゼロだ！』

『ゼロ！』

『ゼロさん！』

オーブとジードがその傍らに寄ってくる。

『遅いよ』

『待ちくたびれましたよ。ゼロさん』

無事でよかった、などの言葉はない。

二人とも本当に、ゼロの事を信頼していたのだ。

『へっ……。よく言うだろ？ 主役は遅れて来るつてな。……行くぞ！』

『はい！』

三人同時にファイティングポーズを取ると、町を蹂躪するギャラク tron 軍団の中へと突撃していった。

『そーそー。復活してくれなきや君じゃないよ。ゼロ君』

ギヤラクトロンにウルトラゼロキックを炸裂させたゼロを見て、オウガは二つのカプセルのスイッチを入れた。

『……でも、ボクが見たいのはその姿じゃない』

「フュージョンライズ！」

二つのカプセルをナツクルに装填し、ライザーを起動させる。

『君達に求めているのは闇の力だよ。でないとベリアルは倒せないからね』

カプセルをスキャンして光を放つライザーを、胸元に掲げる。

「キングジョー！ ギヤラクトロン！ ウルトラマンベリアル！」

『だからボクが切っ掛けを与えてあげるよ』

「キングギヤラクトロン！」

『「あつ……!」』

怪しい光と共に出現した怪獣にゼロが吹き飛ばされ、真上からマンションに落下する。

『来なよ。ゼロ君、陸君』

『「……キングギャラクトロンか……」』

パラパラと瓦礫を落しながらゼロは立ち上がり、キングギャラクトロンへと意識を向けた。

頭部と左半身はギャラクトロン、胸部と右半身はキングジョーのパーツで構成されており、互いにパーツの換装を行ったようにも見える。

右腕に装着された銃口をくいくいと上下させているのは、かかって来いという事らしい。

『上等だオラア!!』

吠えると共に掴みかかったゼロだが、

『フーン!』

『おぐわっ……!!』

奴の左腕に出現した魔法陣から無数の鉄拳が放たれ、ガードできずに地面を転がることになる。

『勝ちたいならゼロダークネスになりなよ。今の君が勝つにはそれしかない』
『……なんだと——があっ！』

追撃の光弾が胸に直撃し、巻き上がった黒煙が辺りを包む。

その衝撃に悶えながら、ゼロは何かを考え、そして言った。

『……陸。やるぞ』

「………ゼロ……？」

黒が支配する世界の中、ゼロは自らゼロダークネスになる事を提案してきた。

『俺達が闇を乗り越えない限り、更なる成長は無い』

「………分かった」

正直に言つて怖い。

闇が、強大な力が。

それで大切なものを傷つける事が。

けれどもゼロの言う通り、それを乗り越えない限りは皆を守り抜く事など出来ない。

これはやらなくてはならない事なんだ。

『行くぞ陸！』

「やってやるー！」

『「ジーっとしても、ドーにもならねえ!!」』

立ち込める黒煙の中から飛び出してくる漆黒の影。

「だああああああらあああ!!」

『がふっ………!!』

ゼロダークネスが繰り出したヤクザキックがキングギヤラクトロンの鳩尾を捉え、闇を放出すると共に勢いよく吹き飛んで行く。

「っ………!!っ………!!」

〈陸。大丈夫か?〉

「………何とか……」

三度目ともなると、流石に身体がベリアルの力に適應してくる。

頭に内側から針で刺されているような痛みが響くが、大丈夫だ。前の様に意識は飲まれている。

〈悪いがこの状態じゃ俺は手を出せない。お前が戦うんだ〉

『っ………、っ………、了解……』

頭のみならず全身に走る痛みを振り払い、陸はゼロの身体を借りてキングギヤラクトロンに向けて掌を構えた。

「デスシウムショット！」

解き放った漆黒の波状光線と共に大地を蹴る。

デスシウムショットはバリアとして展開された魔法陣に防がれるが、突き出した拳は奴の側頭部に炸裂し、闇が迸る。

「ハアアア！！」

間髪入れずに上段回し蹴りを叩き込み、すかさず次の攻撃気へと移行。

今までゼロと共に戦ってきた記憶から、今最も最善の行動と思われるものを探り当て、それを実行。そして唯一自身が戦ったキングジョー戦での経験。今はそれが頼りだ。

『いいねいいね！ たった三回でベリアルの方に適応するなんて！』

「うるせえ！」

これだけゼロダークネスの攻撃が決まっても、キングギヤラクトロンはまだまだ余裕を保っていた。

いかに強大な力を得たとはいえ、陸は戦いに関してはまだ素人。

これは以前も感じたが、やはりゼロに比べると威力や精度で劣るのは否めない。

徐々に焦りが身を焦がす。

「う……………、ぐうう……………」

それと同時に身体を蝕むベリアル之力。

一瞬でも気を抜いたら意識を持つていかれそうだ。

それでも拳を振るつた、地面を蹴つた。大切なものを守るために。

「つ……………！　がああああああああ！！」

〈陸！！〉

それは唐突に訪れた。

不意にぶつりと、自分の中で何か切れたような感覚があつた。

(……………くそつ……………)

もうダメだ。そう思った時には既に身体は言う事を聞いていなかった。

『ゼアアアアアア！！』

理由などない。ただただ闇に染まった殺意が身体を支配する。

〈おい！　陸！　陸！！〉

ゼロの声も耳にこそ届いてはいるが、それでも身体は止まらない。

気付けば、キングギヤラクトロンの脚を掴んでぶん回しているゼロダークネスがいた。

『ダラア!!』

『がっ………!!』

凄まじい力で地面に叩きつけられ、キングギヤラクトロンからオウガの掠れた声が漏れる。

ゼロダークネスはその上でマウントポジションを取ると、赤雷を纏った両腕でその身体を破壊し始める。

『いいねえ……、その暴れっぷり、惚れ惚れするよ………けど』

『グアアアア』

「わっ!!」

左腕の銃口から放たれた光線の衝撃がゼロダークネスの腹部を貫き、千歌達Aqourメンバーのいるすぐ近くまで吹っ飛ばされてしまう。

『やられっぱなしつてのも、気分のいいもんじゃないよね。それにさ、闇に飲まれている君じゃダメなんだよ』

そう言つてキングギヤラクトロンは光弾を乱発し、無差別な空爆の様にゼロダークネスの周辺で爆発が起こる。

『ッ!』

そしてその光弾の一つが、Aqourメンバーのいる場所に向かっているのを、ゼ

ロダークネスは見逃さなかった。

(ッ・・・・・・・・・・・・・・・・)

「っ・・・・・・・・・・！」

キングギャラクトロンの放った光弾が迫ってくるのを見て思わず目を瞑った千歌だが、一向に爆発の時間が訪れない。

いや、正確には爆発音は聞こえた。それでも何故か自分は吹き飛ばされずにここに立っている。

そういえば前にもこんな事があつた事を思い出し、恐る恐る目を開くと、そこには、『フウウウ・・・・・・・・・・』

光弾から自分達を守る様に両手を広げてしやがみ込む、ゼロダークネスの姿があつた。

「陸ちゃん！」

千歌が名前を呼ぶと、ゼロは頼もしく首を縦に振った。

漆黒の巨人はゆっくりと立ち上がると、眼前の敵に向けてファイティングポーズを取り直す。

『フフフ……、アハハハハハハハッ！ 遂に！ 遂に制御したねえ陸君!!』

それを見て高笑いをあげるキングギヤラクトロンの中のオウガ。

『やっぱり君はボクと同———』

だがどうした事か、突然言葉を吐き出すのを辞めてしまった。

『……あれは……、ダイヤちゃんの……』

キングギヤラクトロンの見つめる先では、丁度ゼロのカラータイマーに光の球が吸収されていた。

その瞬間、ゼロの身体が輝き出す。

『チエアツ!』

—— 思いを受け継ぎ、勝利へと導く力—— ウルトラマンビクトリー。

ダイヤの胸から分離したリトルスターが、ひび割れていた最後のウルトラカプセルを修復する。

〈機は熟したって事か……〉

「は?」

〈陸。その光に手を突っ込め!〉

ゼロに言われ、目の前で集約していた光の中へと腕を突っ込む。

そこから出てきたものは……、

「ライザー? 装填ナツクルまで……」

〈これが使えるのは、ジードやオウガだけじゃないって事だ! 行くぜエ!〉

ゼロの考えている事が頭に流れ込んでくる。

装填ナツクルを腰に装着すると、目の前で浮遊していた四つのカプセルの中からギンガカプセルを手に取り、スイッチを入れた。

『ギンガ!』

『シヨウラア!』

リックがジードに変身した時と同じように、ウルトラマンギンガが出現して左腕を掲げる。

『オーブ！』

『デュワ！』

ギンガカプセルをナツクルに装填。続いてオーブカプセルのスイッチを入れると、ウルトラマンオーブ、オーブオリジンが現れて左腕を掲げる。

オーブカプセルもナツクルに装填すると、ライザーでそれをスキャンし、トリガーを弾く。

「ウルトラマンギンガ！ ウルトラマンオーブ、オーブオリジン！ ニュージエネレーションカプセル、α！」

シリンダー部分から放たれた光は楕円形を取り、ギンガとオーブが向かい合うようになり、映る新たなウルトラカプセルとなる。

『ビクトリー！』

『ハッ！』

ビクトリーカプセルを起動、ウルトラマンビクトリーが現れて左腕を掲げる。

『エックス！』

『イイイツサア！』

ビクトリーカプセル装填後、最後に残ったエックスカプセルも起動してウルトラマンエックスを出現させる。

エックスカプセルも装填すると同様にライザーでスキャンし、トリガーを弾くとまた新たなカプセルが誕生。

「ウルトラマンビクトリー！　ウルトラマンエックス！　ニュージエネレーションカプセル、β！」

いつの間にか手に取っていたウルトラゼロアイをライザーに装着し、ニュージエネレーションカプセルαを手取る。

『ギンガ！　オーブ！』

『デュワ！』『ショウラア！』

続いてβ。

『ビクトリー！　エックス！』

『イイツサア！』『ハツ！』

両脇に四体のウルトラマンが並び立つと、二つのカプセルをライザーでスキャン。するとウルトラゼロアイの中央のランプが光る。

「ネオ、フュージョンライズ！」

『行くぜ陸！』

「おうー！」

『「俺に限界はねえ!!」』

最後にライザーを目元に掲げてトリガーを弾く。

「ニューージェネレーションカップセル！ α ！ β ！」

赤と青の閃光がゼロを通常形態に戻し、更に四人のウルトラマンの姿が重なっていく。

そして、陸とゼロの感覚も。

「ウルトラマン、ゼロビヨンド！」

『「デエエヤ!!」』

身体を包んでいた光が弾け、新たなゼロが姿を現す。

その姿に、見た者全員が息を飲む。

銀と紫のカラーリング。ゼロスラッガーは倍の四本となり、額のビームランプも大型化して三つに増えている。

肩から胸部にかかるプロテクターは無くなっており、代わりに両肩から槍の様に尖ったアーマーが伸びている。

「おお……、何だこのかっちょいい姿は……」

『だろ？ 最高にイケてるだろ？』

ゼロは鷹揚に胸を張った後、キングギャラクトロンのに向けて勇ましく構えた。

『俺はゼロ………。ウルトラマンゼロビヨンド!!』

『なっ……』

突然の事にたじろぐキングギャラクトロンのゼロは見逃さず、爆ぜる様に動いた。

『ハアア!!』

一瞬でゼロとキングギャラクトロンの距離が詰まる。放たれた鋭い左ジャブが顔面を小突き、刹那に右ストレートが一閃。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

腕が何本もあるような錯覚を覚えるほどの神速で百裂パンチが繰り出され、キングギャラクトロンの身体が徐々に宙に浮いてゆく。

『オオウラ!!』

薄紫のオーラを纏った右腕で強烈なアッパーを放ち、奴を天高く殴り飛ばす。さらにゼロも飛翔してその上を取り、ドロップキックで地面に蹴り落とす。

『クアトロゼロスラッガー!!』

空中で四本のゼロスラッガーを投擲し、オーブ、そしてジードと交戦していたギャラ

クトロンに二本ずつ命中させ、バランスを崩させた。

当然、そんな隙を見逃す二人ではない。

『三つの光の力！ お借りします！ オーブトリニティ!!』

ギンガ、ビクトリー、エックス、三体のウルトラマンの力でフュージョンアップしたオーブトリニティが、専用武器のオーブスラッシュヤーを縦に一回、斜めに二回振り抜く。

『トリニティウムブレエエエイクツ!!』

全身をバラバラに切断され、轟音と共にギヤラクトロンは爆散。

さらにその一方で、ジードも輝く。

『ウルティメイトファイナル！ 繋ぐぜ！ 願い！ ジイイイイドツ!!』

幾何学的な模様を全身に浮かべたジードウルティメイトファイナルが、同じように専用武器、ギガファイナライザーを腹部に突き立てる。

『ギガスラストオオオオツ!!』

圧倒的な破壊力を前にこちらのギヤラクトロンも爆散。

これだけでは収まらず、最強形態となった二人の巨人は次々にギヤラクトロンを撃破していく。

キングギヤラクトロンが起き上がった時には、その数は三分の一以下にまで減っていた。

『っ……っ……』

弾かれた様に別のギヤラクトロンを粉砕するゼロへと意識を向ける。

全てはゼロがゼロビヨンドと言う最強形態を取り戻してから。

陸とゼロの光が繋がり、他の二人にもそれが伝播したのだ。

『違う……、違うよ陸君……。ボクが君に求めたのは、その力じゃない!!』

焦りに突き動かされ、キングギヤラクترون及びオウガは無謀とも言える突進をゼロビヨンドに仕掛けた。

大振りな攻撃とは言え喰らったらひとたまりもない事は確かだ。

『もう止められないぜ』

それでもゼロはそれをかわそうとせず、額にエネルギー集中させていく。

『エメリウムスラッシュ!』

普段の何倍も強化された光線がキングギヤラクترونへと迫る。が、

エメリウムスラッシュは見えない何かに阻まれ、奴に到達する前に二手に割れた。

『無駄だよ。このキングギヤラクترونにはギヤラクترونMK3の力も込められているんだ。光は通用しない!』

左右の足元に直撃したエメリウムスラッシュが起こした爆炎には目もくれずに、キングギヤラクترونはその巨体をゼロへと突撃させることを辞めない。

『だから早く闇を——』

『ジード』

『ハアアアアアア!!』

ゼロが冷静に呟いた瞬間、爆炎の中から飛び出してくる巨人が一体。

ジードの武器、ギガファイナライザーは人の想いの強さを「物理的破壊エネルギー」に変換する力がある。

光でも闇でもない、純粹なる力。MK3の機能では防ぐことは出来ない。

『クレセントファイナルジードオオオオオオオオオ!!』

『ぐあああああああ!!』

膨大な物理的破壊エネルギーを纏ったギガファイナライザーは、奴の光を退けるバリア発生装置を、左腕ごと消し飛ばした。

『トリニティウム光輪!!』

バリア発生装置が無くなれば奴はもう光の攻撃を防ぐことが出来ない。追撃にオーブが放った巨大な光輪が、残った右腕も跳ね飛ばす。

『「シヤア！」』

ゼロは満身創痍のキングギヤラクトロンを蹴り飛ばすと、自身のエネルギーを爆発的に高めていく。

『バルキーコーラス』

周囲の中空に発生した八つの光球。

その光球から一斉に放たれた破壊光線がキングギャラクトロンの身体を貫く。

『俺達に勝とうなんざ……』

ゼロは全身に八つの風穴を開けられて真後ろに倒れるキングギャラクトロンの背を向け、ギャラクトロン軍団の掃討を終えたオーブとジードに目配せをする。

『『二万年早いぜ』』

あちこちで地響きを轟かせる大爆発の中で、三人の巨人は同時に裏ピース決めた。

『……それじゃゼロ。僕達はここで行くよ』

『宇宙警備隊に、今回の事を報告しに行かないといけないので』

『おう。今回は世話になったな』

静けさを取り戻した町の中、三人の巨人が穏やかな雰囲気でも向き合っている。

この地球に向かっていた残りのギャラクトロンは宇宙警備隊が処理してくれたらしく、もうここにギャラクトロン軍団が現れる心配はしなくていいらしい。

今からこの地球を去る、ゼロの後輩にて陸の先輩ウルトラマンは、柔らかな視線を陸に向ける。

『陸。ウルトラマンも人間も、完璧じゃない。失敗や過ちを犯すことも時にはある。だが、その苦しみを乗り越えるからこそ成長し、強くなり、その先にある愛を知ることが出来る。この先も壁にぶつかることがあるだろうが・・・、これだけは忘れないでいてくれ』

「はい！」

『果てしない運命を超えて未来はある。辛い事があっても、立ち上がり、抗う。そういう力が、僕達にはあるんだ。合言葉は・・・。ジーっとしても！』

全員同時に、拳を突き出す。

「『『ドーにもならねえ！』』』

歪んだ正義による脅威も去り、オーブ、ジード、そしてジャグラが各々自分の世界に帰って行った後、スクールアイドル部室にて。

「今まで黙っててすみませんでした」

陸はAqoursの前で、盛大な土下座を敢行していた。

恥も外聞もなく地面に頭を擦り付ける正義のヒーローを見て、九人は軽く引き気味である。

「……………何もそこまでしなくても……………」

「俺なりのケジメだ」

〈可哀想な奴だなお前……………〉

Aqoursにもゼロにもすっぴん呆れられてしまったが、土下座程度で今までの事が精算できるのなら安いものだろう。

「ところでりくつち。ゼロは今何をしてるのデースか？」

「ああ、ゼロは——」

『お？ 俺に用か？』

鞠莉に問われた瞬間、ゼロが身体を乗っ取り即座に立ちあがる。

『この俺が超絶強くてカッコイイ。ウルトラマンゼロ様だ!!』

もうバレてしまったので、ゼロは堂々と人格を表に出して胸を張っていた。

そんなゼロを、ぼかんとした顔で眺めるAqoursの九人。

ゼロがそれをどう解釈しなのかは知らないが、いつも以上に調子に乗りながら更に胸を張る。

『フツ……、俺に惚れると、火傷するぜ?』

その一言で皆一斉に冷めた視線をゼロに向け、花丸が口を開く。

「……想像してたよりずっと残念な人だったすら……」

『なんだと?!』

「自分でカッコイイって……」

「自信過剰ですわ」

「あと顔がうるさい」

『俺の顔そんなに賑やかか……?』

酷い言われようだった。

皆それなりにゼロと関わってきた事もあつて、態度に遠慮がない。

ひとしきり皆でゼロの事をボロクソに言った後、千歌がゼロに微笑みかける。

「まあ、これからもよろしくね。陸ちゃん、ゼロちゃん」

『ゼロ……ちゃん……?』

くすくすと、部室内に笑い声が溶け込んでいく。

そんな中、一人わなわなと震えるゼロ。

『おい待て！ お前等それでいいのか!! もう尊厳も何もないんだが!! 陸！ お前もなんか言ってやれ!』

身体の主導権が戻ってきたので、とりあえずゼロの事はガン無視して千歌と顔を合わせる。

「ま、今後ともよろしく」

〈陸————っ!!〉

以前の騒がしさを取り戻した部室の中で、ゼロは新たにゼロちゃんの称号を手に入れた。

四十八話 桜色の悩み

『………情けない』

一度ダークネスファイブが拠点としている宇宙船に戻ったオウガに、ヴィラニアスが真つ先に放った言葉はこれだった。

だが、今のオウガの耳にその言葉は全く届いてはいない。

『まあまあ、今回の事は流石に私も予想外でした』

スライがヴィラニアスを諫めても、オウガは俯いたまま顔を上げようとしなない。

(………陸君の本質は、闇じゃなかった……?)

あの時、陸とゼロが見せた光。

あれは、オウガが陸に求めたものとは真逆な物。

おかしい。彼は闇の者で間違いなかったはずなのに。

だからこそスライは陸にベリアルを植え付ける事でそれを開放し、計画の邪魔となるゼロと引き離そうとした。

スライと目的の違いはあれど、オウガにとつても陸にベリアルを植え付ける事は

計画の一端だったはずだ。

根本的に見誤っていたのは、とある事だけで陸の本質は闇だと決めつけていた事。

(……だつたらボクも……。いやいや、それはありえないか……)

一瞬間に浮かんだ自分も光になれるのではないのかと言う益体の無い妄想を振り払う。

陸もそういう運命だった。今回の事はそういう事に他ならない。

『まあ、オーブとジードがこの地球に来ちまうなんてのは、流星に予想もつかねーわな』

『ウウウウウウ……』

『ギヤラクトロンの方は光の国の連中が掃討したようだが……。どうする、スライ』

『……少し、作戦を練り直す必要がありますね。オウガ。貴方は引き続き地球で彼等の

動向を監視しててください』

「……分かったよ」

オウガに指示を出した後、スライはふと宇宙船の外に視線を向けた。

『……はて？ あの宇宙船は一体……?』

——歌詞は？

梨子はSNSのツールを使って、千歌に作詞の新着状況を尋ねた。

すると千歌から泣いている犬のスタンプが送られてきた。スタンプにはゴメンとも書かれている。

それにつき、

——明日には必ず……。

「……はあ……。」

ベッドに寝そべりながら、梨子はため息をつく。

スクールアイドルを始めて、もう何度このやり取りを交わしただろうか。そしてこのスタンプも何回見ただろうか。

——そのスタンプ見飽きた。

少し嫌味交じりに返信すると、千歌から別パターンのゴメンスタンプが帰ってきた。

「……。」

——そんなもの用意する暇があるなら早く書いて。

更に怒っている幽霊のスタンプを送り付け、早くしろと千歌に催促をする。

千歌が歌詞を書いてくれないければ梨子も曲が作れないし、皆も衣装や振り付けを決める事が出来ない。

ダイヤにも早くしろと急かされているので、梨子からもしつこく言っておかなければ。

しばらく待っても返信が帰って来なくなったので、作詞に取りかかったのだろう。

そう思い携帯の電源を落とそうとすると、着信音が鳴る。

「つ……………」

届いたメールを確認してみると、それはピアノコンクールの出場登録期限が迫っているという知らせだった。

「……………」

しばらく携帯の画面を見つめたまま考え込んだ後、梨子は電源を落とした。

「あゝつゝいゝゝゝ」

「ずゝらゝゝゝ」

「……天の業火に闇の翼が……」

「その黒いの脱ぎやいいだろが」

夏真つ盛り。

太陽がじりじりと身体を照りつけ、耳障りな程に蝉が喧しく鳴き続ける。屋上には口々に日影が無いのでこれから逃れることは不可能だ。しかも熱せられたコンクリートが発する熱が体感温度を余計に上げる。

そんな地獄の様相を呈してきた世界の中、Aqoursは全員集合していた。

「どうしたんですか？ 全員集めて」

早くも暑さにやられた三人を一瞥した後、曜が全員に召集を掛けたダイヤに動向の理由を尋ねる。

するとダイヤは悪役っぽい笑い方をした後、カツと目を見開く。隣では鞠莉も同じような笑い方をしていた。

「さて、今日から夏休み！」

「Summer vacationと言えー？」

「はい貴方！」

「うえ!!」

無駄に息ピッタリのノリを披露した後、ダイヤが千歌に答えを要求する。

「ええ……と……。夏休みと言えば……。、やっぱり……。、海だよね？」

「夏休みは、パパが帰ってくるんだ！」

自信なさげな千歌とは対照的に、曜は聞いてもいないのに心底嬉しそうに答えた。

〈やけに上機嫌だな。曜の奴〉

(……アイツ生粋のパパっ子だからな……)

中一まで父親と一緒に風呂に入ろうとしていた事は、曜の名誉のために言わない様にしておこう。

「まるはおばあちゃん家に……」

「夏コミー！」

それに花丸と善子が続く。

各々の回答を聞いた後、ダイヤはプルプルと身体を震わせ始める。

「ブツブツ！ ですわ！」

「おお、久々に聞いた」

〈黒澤姉妹って独自言語多いよな〉

呑気にその光景を眺める陸とゼロを一切気にする様子もなく、ダイヤは千歌に詰め寄って行く。

「貴方達、それでもスクールアイドルなのですか?! 片腹痛い! 片腹痛いですわ!」
ダイヤの剣幕を目の当たりにし、もう既に色々と察しているらしい鞠莉とルビィを除いた全員がゴクリと喉を鳴らした。

屋上は暑かったので部室に移動。何故初めからここにしなかったのだろうか。

「いいですか皆さん。夏と言えば……、はい、ルビィ!」

「ん……。多分、ラブライブ!」

「さすが我が妹……。可愛いでちゅね、よくできまちたね」

「頑張ルビィ!」

へ………何故俺達は姉妹コントを見せられている

(知らん)

ダイヤのシスコンつぷりに若干引き気味になりつつも、陸は最近出番が増えているホワイトボードに意識を向けた。

そこには、全員に冷ややかな視線を注がれる黒澤姉妹がせつせと張り付けていた、恐らくどこかのグループの練習メニューであると思われる資料。

「夏と言えばラブライブ！ その大会が開かれる季節なのです！」

ダイヤの言う通り、夏にはラブライブ。その予選が開催される。

それに加え背後の資料。

そして夏休み前にダイヤが組んだ地獄の練習メニュー。

きつと嫌な予感がしているのは陸だけではないだろう。

「ラブライブの予選突破を目指して、A q o u r sはこの特訓を行います！ これはわたくしが独自のルートで手に入れたμsの練習メニューですわ！」

「凄い！ お姉ちゃん！」

ノリノリなのは黒澤姉妹だけ。陸と果南は苦笑いでそれを見守り、あとの六人は青ざめた顔でダイヤの言うμsの特訓メニューとやたらに視線を固定していた。

へなあ陸。ダイヤの言うμsってなんだ？

(「……………伝説のスクールアイドルらしいぞ。自信無くなってきたけど……………」)

あの練習メニューを見ただけではボディビルダーの集団かと勘違いしてしまう。あんなメニューこなしてたら全身の筋肉がとんでもない事になってしまいそうだが。

「ランニング……………、十五キロ?」

「腕立てに……………、腹筋二十セット……………」

「遠泳……………、十キロ……………」

ちよつと情報の出所を調べた方がいいかもしれない。

最近ポンコツ化してきたダイヤならば、どつかの怪しいサイトから引つ張つてきていても何の違和感もない。ホントに初対面の時のお堅い生徒会長キヤラはどこに消えたのだろうか。

仮にこの練習メニューを実行したら、間違いなく果南以外は遠泳の途中で海の底に沈むことになるだろう。

「熱いハートがあれば何とかかりますわ!」

「ふんばルビィ!」

さりげなくルビィが○○ルビィ系統の新技を披露した後、曜が顔を顰める。

「前も思ってたけど……………、何でこんなにやる気なの……………」

恐らく全員が思っているだろう事を曜は口にした。

そんな曜に、先程までダイヤ側だった鞠莉が苦笑いをしながら近寄っていく。

「ずっと我慢してただけに、今までの思いがShinyしたのかも」

「何をゴチャゴチャと！ さあ外にいったら始めますわよ！」

「うゆ！」

『おい待て。そのポンコツ姉妹』

ノリノリで部屋から出て行くこうとするダイヤとルビィをゼロが制止する。

正体がバレて以降、ゼロは開き直って堂々と人格を表に出すようになった。

「何ですのゼロさん。と言うか、ポンコツ姉妹とは聞き捨てなりませんわね」

ダイヤに鋭い眼光を向けられてもゼロは一切意に介さず、ビシツと黒澤姉妹考案の練

習メニューを指さした。

「・・・ゼロちゃん・・・！」

きっとその練習はキツ過ぎると言ってくれるのだろう、誰もがそう思った時だった。

『メニュー、それじゃ足りなくないか？』

「「「「え？」」」」

ゼロに期待していた全員が間抜けな声を上げる。

『お前等の目指してるラブライブってのがどんなものかは知らないが・・・、そんな甘つちよろい練習で突破できるもんなのかよ』

(おい……お前な……)

思わず陸も自分の耳を疑った。いきなり何を言い出すのだろうかこのバトルサイボーグは。頭の中まで筋肉でできているのだろうか。

が、ダイヤは何故か意味深に笑みを深める。

「ふ……流石ですわねゼロさん。実はわたくしも物足りないと思っていたので

「そう言えば千歌ちゃん！ 海の家の手伝いがあるとか言つてなかつた!」

ダイヤとゼロがただでさえ無茶のある練習メニューを更に強化しようといふ会合を始める前に、曜が大慌てでそれを遮る。

「ああ！ そうだ！ そうだよ！ 自治会で出してる海の家を手伝うように言われてるのです!」

言い訳と共に、千歌と曜の幼馴染コンビがビシツと敬礼を決めた。

今この場においては白々しく聞こえなくもないが……

「あ、私もだ」

「……そーいや、俺等毎年海の家手伝わされてたな。すっかり忘れてたわ」

直接自治会に言われているのは千歌と果南だけなのだが、幼い頃からの付き合いという事で陸と曜も毎年付き合わされているのだ。

「そんなあく……。特訓はどうするんですの!？」

「残念ながら……、そのスケジュールでは……。」

「勿論サボりたい訳ではなく……。」

サボりたがっているのは目に見えていた。

「んふ……。」

「「ヒイ……。」」

二人の意図を看破したらしいダイヤが気味の悪い黒い笑みを浮かべ、ビビった二人が同時に身を震わせる。

「じゃあ、昼は全員で海の家手伝って、涼しいモーニングアンドイブニングに練習って事にすればいいんじゃない?」

「それ賛成ずら!」

「ヨハネの名に誓って!」

鞠莉の提案に、千歌達と同じく練習をサボりたいらしい花丸と善子が便乗する。

「ですが……、それでは練習時間が……。」

海の家を手伝っていたら時間が少なくなるのはもちろんの事、Aqoursはそれぞれ住んでいる場所が違うので集合にも時間がかかる。

ちなみに一番家が遠いのはさりげなく陸と曜だったりする。

「じゃあ、家で合宿って事にしない？」

唐突な千歌の提案に、皆口をそろえて「合宿？」と聞き返す。

「ほら、家旅館でしょ？ 頼んで一部屋借りれば皆泊まれるし」

「そっか！ 千歌ちゃん家なら、目の前海だもんね」

「移動ない分、早朝と夕方、時間取って練習できるもんね」

千歌にしては珍しく理にかなった事を言った気がする。それならば練習の鬼のダイヤも納得してくれるだろう。

「でも、急に皆で泊まりに行つて大丈夫ずらか？」

「何とかなるよ！ じゃあ決まり！ 陸ちゃんも参加してね！」

「えく……………」

合宿という事は、必然的に早朝から練習するという事だろう。

何故せつかくの休みに朝も早くから起きて自分が躍る訳でもない練習に参加しなければいけないのだろうか。

「……………逃げちゃ駄目だよ？」

「……………」

果南に釘を刺されて渋々承諾する。

恐らく、これはもうなし崩しの夏休み中毎日朝から叩き起こされるパターンだろ

う。

「それでは明日の朝四時、海の家に集合という事で！」

「「「「「お．．．、おー．．．」」」」」

合宿のあれこれも決まったので、今日はもう解散という事になった。

「ん．．．．．？」

〈お．．．？〉

皆がぞろぞろと帰っていく中、梨子だけがただ一人何か考え込んでいる様に立ち止まっている事に千歌とゼロが気付く。

「梨子ちゃん。どうかした？」

「え？ ああ、うん。何でもない」

千歌が声を掛けると、梨子はいつもの様に笑って返した。

〈．．．．．陸。ちよつと行ってくるわ〉

「はっ。」

「……………」

帰宅して自室に戻った梨子は、物憂げな表情でピアノに置いた紙を見つめていた。それは、ここ内浦に来る前には無かったもの。

「……………」梨子。なんだそれ？」

「ふえっ!!」

自分以外誰もいないはずの部屋の中で声を掛けられ、思わず驚いた梨子だが、すぐにその声の正体を理解する。

「……………」なんだゼロちゃんか……………」もう。脅かさないですよ」

「ゼロちゃ……………」まあいい。何なんだそれ」

「見て分からない？ 楽譜よ」

梨子は楽譜を手にとってひらひらと揺らして見せる。

「楽譜……………」、楽器の歌詞みたいなもんか？」

「……まあ、そんな感じかな。それよりどうしたの？　いきなり私の所に来て」

「……いや、何か悩んでるように見えたからよ。ちよつと気になつてな。なんかあつたのか？」

ゼロの問いに梨子は少し迷つたような仕草を見せた後、

「……ゼロちゃんになら話してもいいかな。……皆には内緒ね？」

梨子は薄暗い部屋の中ベッドに腰かけると、同じ部屋に置いてあるピアノに視線を移した。

「……私が内浦に来る前に、ピアノをやつたのはゼロちゃんも知つてるよね？」
「ああ。確か海の音だったか？　それを聞こうと思つたのもピアノの為だったんだろ？」

「うん。……で、これはその時の海の音をイメージして作つた曲」

「ふーん……で、それがどうかしたのか？」

「これ見て」

形態の電源を入れ、液晶画面に羅列された文字をゼロに見せてくる。

「……スマン。俺地球の文字は読めん」

地球に滞在するウルトラマンは任務の前に地球の文字やら文化やらを勉強するのが宇宙警備隊では一般的なのだが、ゼロはいつも行き当たりばつたりで地球に滞在してい

るのでそのような教養を積んでいない。

「……ピアノコンクールの出場登録の申込期限が近いんだって。それで、ちょっとね……」

「……出りやいいじゃねーか。せっかく曲もあるんだし。詳しくは知らねーけどスクールアイドル始めたのもピアノの為なんだろ？」

「……そうなんだけど……この日、ラブライブの予選の日だからさ」

「……なるほど」

確かにそれは悩ましい所だろう。

「……ま、じっくり考えて決めろや。それじゃな」

「うん。また明日」

携帯の画面を見つめたまま返す。

「……はあ……」

ゼロが去って行った部屋の中で、梨子は深くため息をついた。

四十九話 真夏の色

「ヤッホ——ウツ！」

「まっぶし——っ！」

合宿当日。

A q o u r s の誇るみかん髪と銀髪の元気つ子二人が、勢いよく海に突撃していく。

「……元気だな、アイツ等」

「……特訓どこ行ったんだよ」

朝四時に集合して練習を始めるとかいう話はどこに消えたのやら。

と云うかちやんと朝四時に集合したのは花丸だけだったのだ。ゼロに叩き起こされて朝五時半に来たら花丸が涙目になっていて対応に困った。

「つか、言った本人が遅刻するってどういう事なんすかね？ ダイヤさん」

「そ、それはそれとして……、海の家と言うのは一体……」

「あれです」

陸がダイヤの探す海の家を指さしたのだが、何故かダイヤはまだ周囲をきよろきよると見回している。

「はて？ そのお店はどこですか？」

「……現実を見るすら」

現実逃避に走るダイヤに花丸が的確なツツコミを入れる。

まあでも、ダイヤがああなるのも無理はない。

A q o u r s が手伝う海の家は、ハツキリ言ってしまうとオンボロだ。所々劣化も進んでいるし、今にも崩れてしまいそうにも見える。

こんな所に好んで入って行く人はそうそういないだろう。

「……それに比べて……」

壊れたダイヤを一瞥すると、陸は隣にある別の建物に視線を移す。

一応あつちも海の家なのだが、まず造りがこつちと根本的に違う。

全体的にオープンな造りになっており、飾りつけも華やか。そして既に客も大勢入っている。

「……駄目ですわ……」

遂に現実を受け入れたらしいダイヤがガックシと肩を落とす。

もう勝ち目のない無理ゲーな事を察し、皆苦笑いを浮かべる。

ただ一人を覗いて。

「都会の軍門に下るのデースか？」

不意に鞠莉が腕組みをしながら言葉を発し、皆の視線が集中する。

「私達はラブライブの決勝を目指しているのでしょうか？ あんなチャラチャラした店に負ける訳には行かないわ！」

「関係なくね？」

へ一番チャラついた見た目してる奴が何言ってるんだか

陸とゼロは冷めた視線を鞠莉に向けるが、ダイヤは今の言葉に感銘を受けた様にプルプルと震えていた。

「鞠莉さん！ 貴方の言う通りですわ!!」

ポンコツ生徒会長がやる気を出したことにより、全員、嫌な予感を察するのだった。

「・・・で、何それ？」

「なんかダイヤさんに着せられた・・・」

あの後ダイヤは何を考えたのか、宣伝役に抜擢された千歌と梨子に海の家と書かれた四角い箱を身に付けさせていた。

二人がこんな有様なのに対し、もう一人宣伝役に抜擢された果南は水着姿でチラシ配り。

ダイヤ曰く、他の砂利共では大人の魅力に欠けるかららしい。おっさんかあの人は。

「仙道さん！」

「はい！！」

A q o u r s 全員に指示を飛ばし終えたダイヤは、最後に陸を指さした。

「貴方は曜さん、善子さん、鞠莉さんと共に料理を担当して頂きますわ！ 曜さんからある程度料理は出来ると聞きましたので」

「・・・まあ、一応独り暮らしなんで・・・」

両親が中々帰って来ないが故に身についた悲しき料理スキルだ。特別上手いという訳でもないが、まあ人並みには出来る。ちなみに少し前まで仙道家に居候していたガイとリクには割と好評だった。

「あの三人はそれぞれオリジナルの料理を作りますので、貴方は元々海の家にある料理

を担当してください」

「ちよつと待つてくださいい!! メニューどんだけあると思つてんすか!!」

ラーメン、焼きそば、フランクフルト、etc・・・。

ざつと三十種類以上ある。

「何をごちやごちやと! 男でしようが!」

〈そうだ陸! 根性見せろ!〉

「ああもう・・・、何でコイツ等は頭の中が昭和のスポ魂漫画なんだよ・・・」

反論するだけ面倒くさそうなので、陸が洩々厨房へ向かおうとした時、

——ゴオオオオオオオ・・・。

「へ・・・ん?」

空から音がする。

怪獣の鳴き声の様にも聞こえるが、それとはまた違う。

「・・・なんですの? この音は?」

陸とゼロだけでなく、この音はダイヤにも聞こえたらしい。

海の家の外に目を向けると、皆空を指さして何やら騒いでいた。

「・・・・・・・・何だあれ？」

陸も外に出て空を見上げると、赤い光の尾を引きながら落下している黒い物体が。

「・・・・・・・・隕石か？」

「・・・・・・・・おい。何かあれこつちに来てね？」

「・・・・・・・・来てるな・・・・・・・・」

その落下物は徐々に大きくなっているような気もする。

つまり、こつちに向けて落下してきているのだ。

「・・・・・・・・あれもダークネスファイブの仕業か？」

「知らん。けどこのままじゃいけねえ。迎撃するぞ！」

「おう！」

出現したウルトラゼロアイを手に取り、海の家の中に駆け込む。

「ダイヤさん、ちよつと仕事外れますよ」

海の家の中にA q o u r s 以外誰もいなかったのは幸いだらう。ここならば変身するところを見られて問題になる者はいない。

「へシエア！」

「……………ウニ……………」

『……………めっちゃ刺々しいな……………。ホントに隕石かよこれ……………』

内浦に向けて落下している謎の物体は、近くで見るとまるでウニのような刺々しい見た目をしていた。

「……………どーすんだこれ。受け止められねえぞ……………」

こんなもの受け止めたら全身に穴が開く。何がどうしたらこんなキュピズムチックな隕石が誕生するのだろうか。

『押し返すより吹っ飛ばした方がよさそうだな……………。フツ!』

そう言ったゼロの身体が煌き、全身が蒼く染まる。

『レボリウムスマッシュ!』

ルナミラクルゼロの掌から放たれた衝撃波が隕石の軌道を変え、その進行方向は大海原へと向けられた。

恐らく内浦の上空で爆砕したらその破片が町に降り注ぐ、それを回避するために海の

上へと移動させたのだろう。

『やるぞ、陸』

「了解」

「俺に限界はねえ！」

『ワイドビヨンドショット!!』

ゼロビヨンドとなり、ワイドゼロショットの上位互換、ワイドビヨンドショットが隕石を貫かんと迫る。

が、

『なッ………!!』

何と強化されたその光線が直撃しても、隕石は傷一ついていなかったのだ。

「何だよあれ!!」

『マズイ! もう海に落ちるぞ!』

あの隕石は、大体ゼロと同じくらいの大きさをしている。

あんなサイズの物体が海に落ちれば、かなり大きい波が立ってしまうのは確かだろう。

『ちい．．．．．、こうなったら』

ゼロは猛スピードで隕石の真下に飛んでいくと、両腕に紫色のオーラを纏う。

『覚悟はいいか？ 結構な衝撃だぜ．．．？』

「．．．上等だ．．．」

『ビヨンドデیفエンサー！』

小型の球体バリアが生成され、隕石を包み込む。

棘はバリアに包まれたので、この状態ならば受け止めることが出来る。

「ぐツ．．．．．おお．．．．．」

だが流石は宇宙空間から降ってきた隕石。衝撃が怪獣の攻撃の比ではない。さながら交通事故にでもあったかのような威力だ。

「『ウオラア！！』』

受け止め切るのは不可能と判断し、押さえるのを辞めてオーバーヘッドキックで更に沖へと蹴り飛ばす。

『エメリウムスラッシュ！！』

三つのビームランプから放たれた極太の光線が隕石を飲み込み、更に沖へと吹き飛ばしていく。

『あそこまで吹っ飛ばせば問題ないだろ．．．．．』

「……ああ……、身体痛え……」

一応隕石を海に叩き込んだことで発生した波をビヨンドデイフエンサーで抑えこんだ後、変身を解除してAqoursの所へと戻った。

『ふふ……』

この時はまだ想像もしていなかった。

この隕石が、後々更なる騒ぎを引き起こす事になろうとは。

「……こんなに余ったのかよ……」

「申し訳ない(デース)！」

その日の夜。

昼間の営業で余った食材は自分達で処理することになり、練習終わりの A q o u r s は再び海の家に集合していた。

そんな中鞠莉と善子が頭を下げているのには訳がある。

厨房を見れば、大量に在庫を残す結果となった鞠莉の作ったシャイ煮。そして善子の作った墮天使の涙が。ネーミングでここまで食欲を沸かせない食べ物もそうないだろう。

ちなみに曜の作ったヨキソバとやらは完売だったらしい。

「それって、どんな味がするんですか？」

「ちよつと気になるね」

陸は隕石を処理した後、反動で爆睡したのであの料理がどんなものなのかは知らない。多少は興味もある。食いたいとは全く思わないが。

「まるも食べてみたいぞらー！」

今の花丸の一声が決定打となり、鞠莉と善子は「いいですわ！」と言ってそれらを温め直し始めた。

「さあ！ 召し上がれ！」

数分後、温め直された未知の料理に、鞠莉と善子を除く八人は好奇と畏怖が混じった視線を向ける。

「……じゃあ、まずシヤイ煮から……」

善子の墮天使の涙は見た目からして明らかにヤバそうなので、まずは鞠莉のシヤイ煮から手を付け始める。

「んっ!」

真っ先に手を付けた千歌が目を見開く。予想外に美味しかったのか、はたまたあんなってしまふ程マズかったのか。

「シヤイ煮美味しい!」

良かった。前者だった。

他のメンバーもその意外なお味に驚いているようだ。花丸に至っては必死にシヤイ煮を口の中にかっ込んでいる。

「……で、鞠莉さん。これ一杯いくらするんですか?」

「さあ? 十万円くらい?」

「じゅっ……!」

普段食べている料理と桁が三つくらい違っていて流石に吹き出す陸。なるほど、何故この味で売れていないのかと思ったら、値段か。

「高すぎるよ!」

「ええ? そうかなあ?」

「・・・・・・・・・・これだから金持ちは・・・・」

いくら何でも金銭感覚が壊れ過ぎではないだろうか。

「あはは・・・・・・・・・・、次は、墮天使の涙を・・・・・・・・・・」

苦笑を浮かべながら、ルビイが墮天使の涙を一つ爪楊枝で刺す。墮天使の涙は、一言で表すならば黒いたこ焼きだ。ネーミングも相まって本当に食べる気が起こらない。

が、鞠莉のシャイ煮が美味しかったという前例があるので、ルビイも少しは期待しているのだろう。

皆の視線が集まる中、ルビイは爪楊枝に刺さったダークマターを口にいれ、固まる。

「・・・・・・・・・・ルビイ・・・・？」

怪訝そうにダイヤが顔を覗くと、ルビイはプルプルと震え始め、顔面も真っ赤に染まっていく。

そこで色々と察し、陸、そして花丸は耳を塞いで防御態勢に移る。

「ピギユアアアアアアアアアアアア!! 辛い辛い辛い辛い辛い辛い!!」

烈火の如し速度でルビイは外に飛び出して行き、ゴロゴロと砂浜を転げ回っている。ルビイは風呂呂に入り直しか。

「ちよつと! 貴方一体何を入れたんですの?!」

「タコの代わりに、大量のタバスコで味付けを・・・・・・・・・・。これぞ墮天使の涙!」

激昂するダイヤをよそに、善子は何食わぬ顔で自身も墮天使の涙を口に運ぶ。今さっきのルビイの件が嘘のように、善子は平然としている。

だがそれは善子が異常なだけ、他の皆は一切手を出そうとしない。

値段を除けば大好評だった鞠莉のシャイ煮に比べると、えらい違いだろう。それを受けて善子の表情が少し陰る。

「……………決めるぜ。覚悟」

「ちよー！ 陸?!!」

ジードからセリフを拝借して墮天使の涙に手を伸ばす陸を見て果南が声を上げた。

「……………食ってやらねえと津島に失礼だろ。こんな有様だけど、一応は頑張つて作つてたんだからよ」

「リトルデーモン……………」

「……………先輩。カツコイイずら……………」

少し陸の株が上がる中、墮天使の涙を口に放り込み、やはりそのあまりの威力に悶絶する事となった。

へ……………五感切り離しておいて助かったぜ……………

「そう言えば歌詞は？」

「うん．．．ん。中々ね．．．」

「難産みたいだね。作曲は？」

陸が墮天使の涙によって悶えている一方、少し離れた場所で二年生三人は歌詞についての話し合いをしていた。

「色々考えてはいるけど、やっぱり歌詞のイメージもあるから」

「いい曲にしないとね」

「．．．．．うん」

「びい．．．．．」

夕食後。梨子が外に出ると水の入ったカップを両手で持ってまだ辛そうに舌を外気

に晒しているルビイの姿があった。

そんなルビイを微笑ましく見た後、携帯を起動して先日届いたコンクールの招待メールを開く。

〈いいのか？ それで〉

メッセージを消去しようとした瞬間、不意に脳内に声が響く。

正体を問うまでもない、ゼロだ。

「……………いいの。今はラブライブの方が大事だから」

〈……………別に、悩んだ末にその結論が出たんなら俺は止めねえけどよ。……………ただ〉

「ただ？」

〈……………その理由を聞く限りだと、今のお前のそれは、ピアノからの逃げじゃないのか？〉

「っ……………！」

ゼロのその言葉で、過去の記憶がフラッシュバックする。

大きな会場。そこに集まった大勢の人々。そして、その中で曲を演奏できずにそつとピアノの鍵盤を閉じる自分の姿。

「ううん！ そんな事ないよ。本当にラブライブで優勝して、学校を救う方が大事だっ
て思っただけ！」

トラウマの記憶とゼロの言葉を振り払うように、梨子はピアノ協会からのメッセージを消去した。

(・・・。。。。。。ゼロの奴どこ行つた・・・?)

放浪癖にでも目覚めたのか、最近やたらと陸の身体から出てはどこかに行っている。

「千歌ちゃーん。ソース切れちゃつた」

「分かつたー。家からとつてくるね。陸ちゃん。一緒に来てー」

「一人で行けるだろ・・・。。。。。。まあ、いいか」

渋々腰を上げて千歌の共に十千万へと向かう。

「・・・ねえ、陸ちゃん」

「あ？」

海の家から少し離れた場所に来ると、唐突に千歌の声が耳朶に触れた。

「どした？　なんかあったのか？」

「いや、私じゃないんだけどね。．．．．．なんか、ちよつと梨子ちゃんが変だなーつて」

「変？」

別に陸の見た感じだと、特に変わった様子は見受けられなかったが、同じ女の子の千歌だからこそ何か感じ取るものがあるのかもしれない。

「うん。時折何か考え込んでるみたいな．．．．．。なんか悩みでもあるのかな？」

「別に俺はいつも通りの桜内だと思つたが．．．．．」

「まあ、陸ちゃんニブちんだからね」

そう言つて何故か頬を膨らませてくる千歌。一体何が何なんだか。

「つかなんだ。わざわざそれ聞くために俺の事連れてきたのか？」

「まーね。あの中だと皆も聞いてるし」

もし千歌の言う通り梨子が無かで悩んでいるならば、あまりそれは人に知らせるべきではないという千歌なりの思いやりだろう。

そんなこんなしている内に十千万に辿り着き、志満か美渡からソースをもらおうと暖簾に手を駆けると、玄関先で志満と話をしてる梨子の母の姿があった。

「———それであの子、出るとも出ないともし言つてなくて．．．」

「いえ……、千歌からは何も……」

どうやら梨子はピアノコンクールの誘いが来ているらしいのだが、まだ出るか出ないかハッキリしていないらしい。

「……」

千歌の睨みが正しかったことが証明され、二人は顔を見合わせた。

五十話 さかなかなんだか？

「リーくちゃん」

「……ん……、ああ……」

合宿初日の夜。

月明りだけがぼんやりと差し込む薄暗い部屋の中で、何者かによつて頬を引つ張られる。

流星に女子と同じ部屋という訳にも行かなかつたので陸は一人部屋だ。

よつて誰かが寝返りでもうつて陸に触れてくるという事はないはずなのだが……。

「……千歌……？」

陸の頬を引つ張つて遊んでいるみかん色の少女が目に入ると、ゆっくり身体を起き上がらせる。

「……なんだ……、こんな時間に……」

「これ見て」

千歌が見せつけてきたスマホの画面に意識を向ける。

やがて寝ぼけまなこも明瞭になっていき、ハッキリとそこに表示された文字が見えた。

何かのサイトが開かれており、その中で最も目を引く単語を音読する。

「・・・ピアノコンクール？」

「うん。梨子ちゃんの所に連絡がきたやつって、多分これだと思うんだ」

「・・・それが何か？」

「・・・この日って・・・」

千歌の言葉で、そのコンクールの日程に目を移す。

そこには、

「つ・・・、ラブライブ予選と同じ日・・・」

「うん・・・、梨子ちゃん、もしかしたらこの事が出るか出ないか決めかねてるのかなーって思っって・・・」

「・・・なるほど」

前に梨子が海の音を聞こうとしていたのは、ピアノのスランプから抜け出したかったから。

その為に四月の海に飛び込もうとする彼女だ。ピアノに対する情熱は相当なものだろう。

今梨子がそのスランプを克服したかは知らないが、チャンスがあるなら出るべきだろう。それは梨子もそう思っているはずだ。

だがすぐに出るといえないのは、きっとこの事が関係しているのだろう。

ピアノか、ラブライブか。

「・・・陸ちゃん。行くよ」

「は？」

「梨子ちゃんの性格からして絶対こういう事は自分から言わないと思うから、私達から聞きに行つて相談に乗つてあげよう」

そもそも知られたくないから隠していたという可能性もあるが・・・、まあ、たまには千歌のような強引さも必要なだろう。

確かに、この問題は梨子一人では決めかねてしまう。

陸がその案に乗ると、千歌はゆっくり静かに元いた部屋に戻り、寝ている梨子の傍らにしゃがみ込む。

「りーこちゃん」

そして先程陸にやったように、その頬をぐにぐにし始めた。普通に人の事起こせないのだろうかアイツは。

まあ、きっと周りで寝ている皆を起こさない様にと気を遣っているのだろうが、鞠莉

にびったりと貼り付かれて苦しそうにしている果南は起こしてあげるべきだと思う。

「……………んん……………」

しばらくぐぐにしている梨子が目を覚ます。そして自らの頬で遊んでいるのが千歌だと分かるや否や、不機嫌そうに目を細めた。

そんな梨子に、千歌は朗らかに笑いかけ、

「ちよつと話があるの」

「バレちゃつてたか……………」

千歌からピアノコンクールの事を問われた梨子は、詮索をされた事に起こるでも悲しむでもなく溜息に近い息を漏らす。

「……………ゼロちゃん。話しちゃった?」

『な訳あるか。こいつ等が自分で気が付いたんだよ』

「? ゼロちゃんには話してたの?」

「まあ、色々あつてね」

最近やたらとどこかに行っていると思つたらこういう事だつたらしい。これほどまでに相談相手に向いていない奴がいるとは思えないが。

まあでも、唯一人間ではないゼロにだからこそ話せたのかもしれない。なんだかんだで約束は守る奴だし。

「.....」

「安心して。ちゃんとラブライブに出るから」

「え?」

どうするかの答えを求める様な千歌の視線を察したのか、聞かれる前に梨子はそう答えた。

「.....いいのか?」

ラブライブに出る。

それはつまり、ピアノコンクールの方は棄権するという事だ。

勿論Aqoursのマネージャー(仮)としては嬉しい限りだが、友人としての心境からすると複雑なところだ。

「最初はずごく迷ったよ? チャンスがあるならもう一度つて気持ちもあつた

し。……でも合宿が始まって、皆と過ごして、ここに越してきてから、この学校や、皆や、スクールアイドルが自分の中でどんどん大きくなって。皆とのAqoursの活動が楽しくて。……皆とのこの出会いも」

海辺特有の風が、？偽りのない梨子の本心を耳元まで運んでくる。

今この言葉はどう捉えるか難しい所だろう。善く言えば梨子はスクールアイドルのおかげで吹つ切れることが出来た。悪く言えば、Aqoursの活動がピアノを諦めさせる原因を作ってしまったという事だ。

「……それで自分に聞いたの。どっちが大事なのか……。すぐに答えは出た。……今の私の居場所は、ここなんだって」

「……そっか……」

その気持ちを決定に導いたのが前者であれ後者であれ、本人が悩んだ末に出した答えならば自分達にそれをとやかく言う権利はない。

千歌もそれが分かってからこそ、今のような曖昧な返事しか返せないのだろう。

「今の私の目標は、これまでで一番の曲を作って、それを突破する事。それだけ！」

腕を後ろで組むとくるりとターンし、迷いのない笑みを向けてくる。……少しだけ、それが取り繕ったものであるような気もしないでもないが。

「……うん。分かった」

「だから早く歌詞ください♪」

「もー！ 今それ言う！！」

梨子のこのタイミングでの催促に、千歌が触れ腐れた様に頬を膨らませてそつぽを向いてしまった。

梨子はそれを見て悪戯つぽく微笑むと、その隣を歩き去っていく。

「さ、風邪引くといけないし、帰ろ？」

「………うん」

それによくように。千歌と陸も十千万に向けて歩き出す。

前を歩く梨子の背中を見てしまうと、やはりこれでよかったのかと思ってしまう。

（………ゼロはどう思う？）

〈………俺の勝手な解釈でいいなら聞かせてやる〉

（なんだよ？ 聞かせてくれ）

一拍置いて、ゼロは答えた。

〈アイツはまだピアノをする事に恐怖を覚えている。だからこそ、それから逃げる口実にスクールアイドルを使っている。………本当にそうなのは分からねえが、俺には、そう思えてならねえ〉

「………ピアノから逃げてるねえ……」

「? 陸ちゃん。それどういう事?」

うっかり口に出してしまっていたらしく、千歌が不思議そうにこちらを見てくる。

「・・・いや、何でもない。・・・それより早く戻ろうぜ。どつかのお堅い生徒会長にバレたらお説教間違いなしだからな」

誤魔化す様にちよつと強めに千歌の背中を叩くと、梨子の背中を追って砂浜を蹴る。

「・・・そうだね」

少しだけ痛そうに背中を擦ると、千歌もその跡を追って走り出した。

なお、結局ダイヤにはバレて翌朝みつちりお説教された。

二日目。

「・・・やっぱ俺だけ仕事量がおかしいだろ・・・」

火を使っているせいでサウナ染みた蒸し暑さが籠る厨房の中で、陸はカレーの鍋の様子

を見つつフランクフルトを焼き、更にポテトを揚げるとか言う、ブラック企業も真っ青なハードワークをこなしていた。

何だろう、ダイヤは陸に恨みでもあるのだろうか。思い当たる節は……、うん。とんでもない爆弾があつた。

「へい！ ヨキソバー！」

焼きそばはヨキソバついでに曜が担ってくれているが、鞠莉と善子がシャイ煮と墮天使の涙しか作ろうとしないので仕事が減らない。

そして厨房内の熱気が気力を奪っていく。ゼロがいればこの程度の熱さどうという事は無いのだが、先程ダンスの相談をしに行つた千歌、梨子、果南の三人について行ってしまった為いない。いじめだろうか。

「花丸！ フランクフルトもってけー」

それでもなんだかんだ言つてやつてしまうのが陸の良くも悪くもお人好しなところだろう。きつと会社に入つたら真っ先に社畜化するタイプだ。

千歌と梨子の謎の宣伝か、もしくは果南のグラマラス水着大作戦のどっちが功を期したのかは知らないが、客足は昨日に比べるとそれなりに伸びており、花丸、ルビィ、ダ

イヤの三人では手が足りなくなることも少したが増えた。

「ずらあ!!」

「ピギイ!!」

ガシャーーン! と言う音と共に聞こえた花丸とルビイの声。

「あちやー……」

見てみれば二人はコケて盛大にお盆にのせていた料理をぶちまけていた。

そして巻き添えを喰らったのか、転んだ二人の目の前には頭からお椀とシャイ煮を被る男性の姿が。

「申し訳ございません! お怪我はございませんか?」

ダイヤがものすごい速度でフォローに入り、男性の頭からお椀を撤去し付近でシャイ煮を拭い始める。

普通の人間なら不快な気分になる事間違いないのだが、その男性は何故かサムズアップを決めて晴れやかに笑った。

「いいのいいの! ボク等の業界じゃむしろご褒美だから!」

「は、はあ……」

じゆ。

陸はガスコンロに火をつけるとそれでフライパンを炙り始める。

「そ、それよりいくら払えばもう一回やってくれるんだい!!」
じゆう。

陸は熱せられたフライパンの底を、気持ちの悪い顔でダイヤに詰め寄るその男性の顔面に押し付けた。

「熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い!!」

「ちよっ………、仙道さん!!」

「ダイヤさん。下がっててください」

陸はフライパンを剣の様に構えると、顔面を抑えながら床を転がる変態紳士、オウガを睨みつけた。

「おいゴラア。テメエ何しに来やがった」

ドスを利かせた声を陸が吐き出すと、オウガはホルドアップの姿勢を取った。ここでやり合う気はないらしい。

「あちち………。あのさー陸君。警戒するのは分かるけど、流石にそんな焼き炙みたいなことされるとボクでも傷つくよ?」

「うるせえド変態。幼気な少女に何やらそうとしてんだ。つかマジで何しに来た」

「いやー。スクールアイドルが海の家をやってるって聞いちゃってさ、そんな夢のような尊い店があったのかと思ったたら居ても立ってもいられなくて。まあ、騒ぎを起こすつ

もりはないから安心したまえ」

悪びれもせずオウガは再び席に座ると、ちよつと引き気味のダイヤにヨキソバとシャイ煮と墮天使の涙を注文していた。ちよつかり女子作のメニユーしか注文していないのが腹立つ。

「つたく．．．．．」

「ああ。ちよつと待つて陸君」

とりあえず次なんか変なこと言ったらアイツを料理してやろう。その決意を胸に陸が厨房に戻ろうとすると、注文を終えたオウガが肩を掴んで引き留めてくる。

「なんだよ」

「いや、ちよつと気になってさ。随分とユニークな人がいるけど。あれも店員さんなのかい？」

「は？」

疑問形に疑問形で返しながらオウガの指さす方に視線を流す。

「．．．．．え？」

そこで思わず言葉を失う。

そこにいたのは、確かに人なのだ。人の形はしているのだ。．．．．．首から下だけ。

スタイルもいいし、着用しているビキニの魅力を最大限に引き出していると言っていないだろう。・・・首から下だけなら。

「ぴぎやアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

そこに佇んでいた者を見て、黒澤姉妹が同時に悲鳴を上げる。

まあ、無理はない。何故ならそこにいるのは、身体は水着姿の女性なのに、頭部は魚のそれなのだから。一言で言うのならば、逆人魚。

えらがひくひく動いていたり、鯉のように口をパクパクさせている頭部は作り物とは思えない。という事はつまり、

「宇宙人!!」

厨房から出てきた曜が声を上げると共に、オウガを除くお客は皆悲鳴を上げて逃げいく。

『なツ・・・馬鹿な。バレただと!! 完璧に溶け込んでいると思っていたのに・・・』

「そのナリで何言って——」

ついついついもの癖で陸が入れたツツコミは、外から聞こえてきた悲鳴によつて掻き

消される事となる。

悲鳴を上げたのは今さっき店内から逃げていったお客さん達。その眼前には。

「うわっ!! 何だあれ気持ち悪っ!!」

続々と海から行進してくる、大量の逆人魚の姿があった。

「おいオウガ、あれお前の仲間か?」

「いやいや、あんなサイケデリックな連中知らないよ。純粹に侵略目的の宇宙人じゃないかな?」

純粹に侵略しに来たという表現が既にもう嫌だが、今は気にしている場合ではない。

Aqoursの皆をバックヤードに下げると、フライパンを構えなおして店内にいる

逆人魚を睨む。

「おいテメエ等。一体何モンだ」

ゼロが普段宇宙人にやる様に問いかける。

『はっ………。虚弱貧弱無知無能の地球人に名乗る名前など……。』

「あ☒あん?」

ベリアルの力を開放し、全力で逆人魚をねめつける。

すると圧倒的な闇の力の前に本能的な恐怖を感じたのか、ほんの数秒前まで馬鹿にしていた地球人の陸から数歩遠ざかってから口を開いた。

『……い、インスマス星人……』

「……へー、闇を打ち消してた訳じゃないのか……」

何故か隣でオウガが意味深に笑っているが、気にせずそのインスマス星人とやりに詰め寄っていく。

「単刀直入に聞く。何しに来やがった」

アツアツに熱せられたフライパンを奴の眼前に掲げ、答えなかつたら分かつてるよな？　と言った雰囲気を全身から出しながら細目を向ける。最近ゼロっぽくなっている気がしてならない。

『……ふふ……ははは！　いいだろう、何だかんだと聞かれたら答えてあげるが世の情けと言うからな！』

インスマス星人は余裕たっぷりに胸を張ったが、その死んだ魚のような双眸はしつかりとフライパンを捉えていた。

『我々がこの星に来た理由はただ一つ！　地球は貫つた——』

「オオウラア！」

『ぐは熱ッ！』
身体を捻り、野球のバットで素振りをするようにフライパンを振るう。それはインスマス星人の顔面を捉え、奴は顔を抑えながら地面を転がる。

『ぐっ……』。何故だ。何故我々を前にそんなに冷静でいられる!!』

「何でだろうねー」

『あぢぢぢぢぢぢぢッ!』

しやがみ込んで奴の背中にフライパンの底をあてがう。

インスマス星人の言う通り春前の陸だったら、あのお客様同様逃げただろうが。ゼロに出会ってから今日に至るまで散々宇宙人やら怪獣やらと戦ってきた陸にはもはやこんな珍妙な宇宙人へでもない。

精神が徐々に非日常に侵されつつあつて悲しい。

『うわぁ……』

『ち、地球人怖ッ……』

海から上陸してきた他のインスマス星人もこの光景を見て完全にドン引きだった。

『狼狽えるな!』

そんな中陸に虐められている最も可哀想なインスマス星人が声を張り上げる。

『何のために我々がアレに登場してきたと思ってる!』

「あれ?」

『はは……。さあ、見せてやれお前達!』

地を舐めながら恐らくリーダー格だと思われるインスマス星人が指示を出すのと同

時に、他のインスマス星人が一斉に海へと戻っていく。

そして次の瞬間、大きな水飛沫と共に海中から巨大な物体が現れる。

「なっ……昨日の隕石?! 宇宙船だったのか?!」

だが少し納得は行くような気もする。確かに隕石があんなウニのような形状になるとは思えない。まあ、あの形の宇宙船も十二分におかしいと思うが。

陸がそう思った時、その宇宙船が生き物のような唸り声を発し、生きているかのように海岸に向けて進行を始めたのだ。

「怪獣?!」

流石にそれは予想しておらず、思わず驚きの声を上げる陸。

陸がようやく狼狽えたのを見て、インスマス星人は再び余裕たつぷりに声を上げた。

『はははは! この力の前にひれ伏すがいい! さあやれ、棘皮怪獣ウニ
ラアアアアアアアアアア!!』

「ネーミングがまんま過ぎるだろおおお!!」

陸渾身のツツコミの後、棘皮怪獣ウニは気持ちの悪い唸り声を響かせた。

五十一話 海に還るもの

棘皮怪獣ウニラが出現するほんの少し前。

「大切なもの？」

「それが歌詞のテーマ？」

「うん。まだちよつとしか書いてないんだけど……」

「……」

（どしたのゼロちゃん？）

「いや、何かお前の身体落ち着かねーなって……」

千歌、梨子、果南。そして勝手に千歌の身体に憑依したゼロは、梨子の部屋にてダンスの相談。の前に千歌の作った歌詞についての話題に触れていた。

「……大切な、もの……」

千歌から手渡された歌詞に目を通した後、不意に梨子の視線が机の上に移る。千歌とゼロがそれを追うとそこには束ねられた数枚の紙があった。

「あれは……」

ゼロにはそれに見覚えがあった。

海の音を元にして作ったピアノの曲。合宿前日にここを訪ねた際に彼女に教えた貰ったものだ。

（・・・ねえゼロちゃん。もしかしてあれって・・・）

〈もしかしなくてもピアノの譜面だ。海の音を元にして作ったんだってよ〉

（・・・てことは、本当はあの曲でピアノコンクールに出たかつたって事かな？）

〈ビーだか・・・〉

ラブライブを理由にピアノコンクールを蹴った時、梨子はそれを口実にピアノから逃げていたようにも感じられた。

彼女の過去に何があったかは陸や千歌を通じて知った。

つまりまだ、梨子は人前でピアノを弾く事に恐怖を抱いている可能性があるのだ。

「———歌」

〈・・・逃げてちやなんも変わらないと思うけどな・・・〉

（？　ゼロちゃん。何か言った？）

〈いや。何でもない〉

「千歌！」

「うえ!!　何?　果南ちゃん」

ピアノの譜面とゼロとの会話に意識を向けていた千歌は、果南の声に反応するのが遅

れる。

「話聞いてた?」

「う・・・、うん。勿論聞いてた——」

「わあああああああああつ!!」

苦し紛れにいい訳を返そうとした瞬間、海の方から何人もの人間の悲鳴が聞こえた。

「え・・・? 何・・・?」

ただ事ではない事を察した果南が窓を開けると、海上に巨大な黒い物体が出現していた。

『昨日の隕石!! 何であんなトコに?!』

「・・・ゼロちゃん、居たんだ・・・」

『ちよつと行つてくる! お前等は他の連中が無事か確認してこい!』

そう言うときゼロは千歌の身体を抜け、一体化している少年の元へと向かって行つた。

〈陸！〉

「つ！ ゼロか・・・」

〈何だこの騒ぎは。つか何であの隕石が上陸してやがんだ！〉

「・・・怪獣だったんだとよ。その宇宙人が連れてきたな」

いまいち状況が飲み込めていないゼロが理解できるように、足元で転がっている逆人魚を指さした。

〈つ！ インスマス星人・・・。つーこた侵略目的か・・・。〉

それなりに名が知れた宇宙人なのか、奴らの事はゼロにも知られていた。という事は、過去に何度かこうして他の星を侵略した事があるという事だ。

「・・・なら、あのウニみてーな怪獣の事も分かるか？ ウニラっつーらしいんだが」

〈インスマス星人は侵略の際に使役する怪獣のレパートリーが豊富でな、宇宙警備隊でも全部は把握できてねーんだ〉

「つまり知らねーって事ね・・・」

〈まあ、俺達の敵じゃねえよ。さっさと片付けようぜ〉

「だな。こんなんじや客もこねーし。また売れ残った墮天使の涙を食うのは嫌だ」

怪獣を使役する宇宙人があまりにも珍妙な見た目をしているからか、いつに無い程落ち着き払いながら陸はウルトラゼロアイを装着した。

「『ごあつ………!!』」

登場と共に猛スピードでウニラに突っ込んだゼロだが、奴の全身からミサイルの様に放たれた棘が直撃して海中に墜落する。

「あの棘発射でできるのかよ!!」

『みてーだな……。迂闊に近寄れねーぞ……。』

光線技が効かなかった事から予想はしていたが、やはりウニラの棘もかなりの硬度を誇っていた。その一撃はやはり重い。

『フハハハハハ！ どうだウルトラマンゼロ！ 我がインスマス星が誇る最強怪獣、ウニラの力は！』

ゼロが奴等を知っていたように、奴等もゼロの事を知っていた。どうやら自称宇宙警備隊のスーパーエリートと言うのはあながち間違いでなかったらしい。

「っ！ おいゼロ前！」

『ぐおあっ………！』

よそ見をしていたところに更に三本の棘が襲いかかり、吹き飛ばされて海沿いの町中をゼロが転がる。

『っ………』

起き上がると、ウニラはその形状が変化していた。

あのウニのような外装はやはり殻だったらしく、今はそれを展開して内部に海水を補給している様に見えた。

ただ、今の姿はどう見てもウニではない。

殻を三つに分けて展開した事で露出したウニラの内部は、眼球。眼球そのもの。

どうやらあの眼球が本体らしい。

「気持ちワリイ………」

『……？ 身体を冷やしてるのか……？ ……っ！』

何かに気付いた様にゼロは空の太陽を見上げる。

『……なるほどな』

声音に勝利への確信を含ませた後、ゼロは身体を赤く煌かせた。

『ふはっ……あのウルトラマンゼロですら手に余るとは傑作だ』

がらりと人がいなくなったビーチの中。先程から馬鹿の一つ覚えの様にウニラへと炎を浴びせ続けるゼロを見て、インスマス星人はあざ笑うように目を細めた。

そして目の前に広がる内浦の海に視線を移す。

『もうすぐだ。もうすぐこの美しい海が我らの物に……』

インスマス星人は水が無いと生きる事が出来ない種族だ。

だがインスマス星の海は、過度な環境汚染によって生物が住めない程に汚れてしまった。ウニラは、汚れた海とインスマス星固有の生物が化学反応を起こして生まれた生物だ。他の生物兵器もほとんどはその結果誕生している。

奴ら生物兵器は汚れた海の環境に適応できたからいい。だが星の支配者であるインスマ星人は今の海の環境に適応出来ず、このままでは絶滅してしまう。

だから元のインスマ星のような清らかな水を湛えた星を見つけなければならぬのだ。

地球は、まさしく打って付けの環境と言えよう。

しかしこの星に住まう人類はかつてのインスマ星人の様に海の環境を汚し続けている。それではここを新たな生活の場所とした意味がない。

だから、地球人は支配、ないしは滅ぼさなければならぬのだ。

『つ．．．．．？！』

勝利を確信し、ゼロを倒した後地球で過ごす華やかな日々を思いを馳せていたインスマ星人だが、ここでウニラの様子がおかしくなっている事に気が付く。

『まさかっ．．．．．！』

その理由に気が付いたが、時すでに遅し。

ウニラはだらしなく殻を展開すると、派手な音を立ててその場に倒れてしまった。

「え……？ どうなってんの……？」

固い殻のせいで攻撃が通用しない事からウニラ優勢と思われていたのにも関わらず、突如としてウニラは露出させた眼球から湯気を立ち昇らせて伸びきってしまった。

ゼロがやっていた事と言えば、ただガルネイトバスターをぶっ放し続けていただけ。

『覚えてないか？ 陸。アイツはさつき殻の中に籠った熱を冷ますために殻を開いて中身を海水で浸しただろ？』

「……それがどうかしたのか？」

『つまりな。いくら頑丈で攻撃を防ぐことは出来ても、熱までは防げないってこった』

ゼロのその説明でようやく納得する。

言われてみればそうだ。あんな密閉空間に炎の攻撃を喰らえば、そりや中の温度も上がるだろう。

地球の太陽光だけで給水しなければいけない程の熱が籠るのだ。太陽光の何百倍も熱いガルネイトバスターを喰らい続けければ、中の温度は耐えきれない程の高温になっていたはずだ。

『ば、馬鹿な．．．、我ら最強の兵器が．．．．．』

愕然とするインスマス星人を尻目に、ゼロは再び右腕の温度を上昇させていく。

『死にたくねえ奴はさっさと失せな．．．．．。ハイ3、2、1．．．．．』

『『ヒイヒイヒイ．．．．．!』』

おおよそ正義の味方のそれとは思えないゼロの言葉を聞いたらしいインスマス星人達が一斉にウニラの中から飛び出してくる。

ゼロが奴等のデスカウントを刻んでいる事もあつて、皆我先にと逃げる事に必死だった。

『0．．．．．。ガルネイトオ．．．．．バースタアアアアアアアアア!!』

一応全員が脱出するのを見届けてから、ゼロは爆熱の奔流をだらしなく全身を投げ出しているウニラに叩き込んだ。

柔らかい本体の部分に光線を直撃させられ、全身炎に包まれながら棘皮怪獣ウニラは爆発を起こした。

『あ．．．．．、ああ．．．．．』

目の前で最強と謳っていたウニラを破壊され、茫然自失とするインスマス星人達。

『．．．．．お前等焼いたら美味そうだな．．．．．、ちよつと焼いてみつか』

『ヒイヒイヒイヒイ!!』

しゃがみ込んだゼロが右腕に炎を宿すと、インスマス星人達は大慌てで海の中へと駆け込んでいく。

そして脱出用にでも持ってきていたのか、ウニラとは別の怪獣に乗り込むと、ゼロから逃げる様に大空へと飛び立っていった。

「お前別にもの食わないじゃん」

『冗談だよ。じよーだん』

「お前のナリで言われると冗談に聞こえないんだよな……………」

見た目って結構大事だと思つた瞬間だった。

「はああああああ……………」

「今日も……………売れなかつたんだね……………」

本日も大量に余つたシャイ煮と堕天使の涙を前に、鞠莉と善子が肩を落とす。

どちらとも昨日に比べれば少しは売れたのだが、ウニラの出現以降全く客が入らなくなり、今日も大量の在庫を出す結果となってしまう。

ちなみにヨキソバの方は今日も完売だったらしい。神は曜に何物を与えたら気が済むのだろうか、

「出来た！ カレーにしてみました！」

そんな完璧超人よーそろーが本日の夕飯として作ったのは、シャイ煮と墮天使の涙が投入されたカレーだった。

「船乗りカレー・with・シャイ煮と愉快的な墮天使の涙達」

「死人出す気かお前」

曜の料理の腕は理解しているし、実際美味しい事も重々承知しているのだが、これだけは度し難かった。

カレーと魚を混ぜるとんでもない事になるといふ暗黙の了解をぶち破った上に、それだけで核爆弾となりかねない墮天使の涙がゴロゴロ。

正直こんな殺人カレーをすき好んで口に入れる奴がいるとは思えない。

「じゃあ梨子ちゃんから召し上がれ」

最初の犠牲者選ばれた哀れな子羊は梨子だった。

プルプルと震えながら、その船乗りカレー・with・愉快的な墮天使の涙達を口に運

び……………、

「……………美味しい。凄い！ こんな特技あつたんだ！」

予想外の感想を紡ぎあげた。

すると落ち込んでいた鞠莉が凄い速度で船乗りカレー（以下略）を手に取り、それを口にする。

「ん……………、delicious！」

どうやらお気に召したらしい。

「パパから教わった船乗りカレーは、何にでも合うんだ！」

「ふ……………、これなら明日は完売ですわ……………」

「お姉ちゃん……………」

「……………」

皆がワイワイやっている中、ただ一人千歌だけが浮かない表情をしている事に気がつく陸。

「どうした？ 食わないのか？」

「……………ああ、うん。ちよつとね……………」

声を掛けたのが陸だと分かると、千歌は視線だけで訴えてきた。

視線の先には梨子。それだけでなんとなく言いたいことは分かる。

「……コンクールの事か？」

「……うん。やつぱりまだ悩んでるみたいで……」

皆に聞こえない様に、互いに小さな声で言葉を交わす。

「わっ！ 二人共どうしたの？」

そんな陸と千歌に気が付いたのか、曜がいつもの笑みを浮かべて駆け寄ってくる。

「……ううん。何でもないよ……」

「……ううん。気にしないでいいぞ。ホントに何でもないから……」

気にしてないと言いつつ、梨子の方に視線を戻す。

「っ……」

陸と千歌としては、話してしまうのは梨子に悪いし、曜にも変に考えさせないためにした行為だった。

だが二人は知らない。見え透いた嘘をついたことで、曜が何かを察したように目を見開いた事。そして、

曜の身体に、黒い影のようなものが入り込んだ事に。

「あんぎやあああああああつ!!」

『つ!! 何だ!! 何事だ!!』

突如響いた悲鳴を聞き付け、ゼロが陸の身体を乗っ取り、大慌てで千歌の部屋に駆け込む。

するとそこには声の主と思われるダイヤが床に倒れていた。

『おい! 一体何があつた!!』

「あはは………」

苦笑いでルビイが指さす先には、片目にシールを張り付けながら寝ている鞠莉が。傍らには剥がれたらしいシールの片割れが落ちていた。

「……お姉ちゃん、それ見て鞠莉さんの目が落ちたと勘違いしたらしくて………」

『……つんだよ……、驚かせるな全く……』

「きよ、今日は遅いからもう早く寝よ!」

ゼロが脱力して座り込むと同時に、千歌が妙に早口でそう皆に呼びかけてきた。

「? どうした千歌。お前昨日はこの時間散々喋り倒し——」

普段なら率先して夜更かしを進めてくるような千歌の妙な提案を不思議に思い、その事を問おうとした陸だが、すぐにその理由を理解することになる。

千歌が皆を説得しながら時折ちらちらと視線を配る方向。そこには少し開いた襖の間からこちらを覗いてくる目が一つ。どうやらダイヤの悲鳴を聞き付けたいらしい。

旅館の神様、高海美渡の降臨である。

ちなみに登場と同時に相手の尻子玉をひっこ抜くという恐ろしいスキルを持っているという。

「・・・確かに引き上げた方がいいかもな・・・」

陸の言葉を皮切りに皆（主に千歌）は尋常じゃない速度で布団を敷き、眠りについていった。

「リーくちゃん」

慣れ親しんだ声が、閉ざされていた意識を急速に呼び起こしていく。こんな事昨日にもあった気がする。

目を開けば、やはりそこには千歌がいた。

「・・・今日は何だ・・・？」

「ちよつとついて来て」

千歌にそう言われ、今日は監視役として同じ部屋に配置された曜を起こさない様にそつと布団、そして部屋から出る。

部屋の外には既に千歌によつて起こされたらしい梨子があり、眠そうに欠伸をしていた。

「・・・仙道君・・・？」

「・・・お前もか」

ここにいる面子的に千歌が何をしたいのかはなんとなく分かる。十中八九梨子のピアノコンクールについてだろう。

「ゼロちゃんゼロちゃん」

『ああ？』

必要な人間が揃うと、千歌は陸の中にいるゼロに耳打ちをした。耳に触れる彼女の息遣いが妙にくすぐつたい。

(は………? お前何言つて……)

『……今日だけ特別だからな』

「……うん。ありがとう」

(おい待てお前——)

『シエヤア!』

ゼロは初めて陸の了承を得ずに変身すると、人間大のまま千歌と梨子を抱えて開いた窓から飛び立っていった。

「……なら、思いつきり弾けるでしょ?」

千歌がゼロに頼んで連れてきてもらったのは、深夜の浦ノ星女学院の音楽室だった。

「梨子ちゃんが自分で考えて、悩んで、一生懸命気持ち込めて作った曲でしょ？ だから、聞いてみたくて」

千歌は音楽室に鎮座していたピアノに歩み寄ると、いつの間にか手に持っていた楽譜らしきものを梨子に差し出した。

「……でも……」

「おねがい、少しだけでいいから……」

せがむ千歌の視線から逃れる様に陸の方を見てくる。きつと何とかしてくれと訴えているのだろう。

だが、

「……俺からも頼む」

『無論、俺もな』

陸とゼロは千歌の意見に乗った。

梨子が千歌の頼みにはい、ともいいえ、とも言わないのは弾きたい気持ちはあるのだけれど、まだどこかで迷いがある証拠だ。

「……そんなに、いい曲じゃないよ？」

梨子は少し考える素振りを見せた後、自信なさげにそう言った。

三人の頼みを聞き入れると、梨子は蓋を開けて椅子に座り、覚悟でも決める様に息をついた。

そして鍵盤に手を伸ばし、一瞬ピクリと拒絶するかのように手を止める。

「へやっぱりまだ抵抗があつたか……」

千歌の話の聞く限りだと梨子一人の時に弾く分には普通に弾けていたらしいのだが、人前となるとまた違うらしい。

これもコンクールの際、大勢の前でピアノを弾けなかつた事が影響しているのか。

しばらく間を置いた後、梨子は意を決して鍵盤に触れた。

「へ……」

そこからは無言の時間が続く。

深夜の音楽室に溶け込んでいくのは、梨子の奏でるピアノの音色。

陸もゼロも、魂が抜き取られたかの様にその音色に耳を傾けていた。

ふと、隣の千歌に視線を移す。

千歌もまた無言で、目を輝かせながらピアノを演奏する梨子を見つめていた。

しばらくの間、心地の良い感覚を現出した後、梨子はピアノを弾く手を止めた。

「いい曲だね．．．」

朝日が昇りつつある駿河湾を眺めながら、千歌は正直な感想を紡いだ。

「すっごくいい曲だよ。梨子ちゃんがいつぱい詰まった」

梨子が内浦に越してきてからの日々が詰まっっている様に思えた。そう思わせてくれる程、梨子にとってここでの日々やA q o u r sの皆が意味のあるものになっていったという事だ。

「梨子ちゃん」

少し離れた場所で二人を見守る陸の前で、千歌は梨子の名を呼ぶ。

「ピアノコンクール出て欲しい．．．．．」

「っ．．．！」

千歌の唐突な申し出に目を見開いたのは梨子だけだった。陸とゼロは、なんとなく千歌がやりたかったことを察していたからだ。でなければこんな時間に梨子を呼び出してピアノを弾かせる訳がない。

「こんな事言ううの変だよ。滅茶苦茶だよ。．．スクールアイドルに誘ったのは私なのに．．．、梨子ちゃん、A q o u r sの方が大事って言ってくれたのに。でも、でもね——」

「私と一緒にじゃ、嫌……?」

「違うよ! 一緒がいいに決まってるよ!」

悲し気に梨子が口にした言葉を、千歌は強く否定した。

「……思い出したの。最初に梨子ちゃん誘った時の事。……あの時私、思ってた。スクールアイドルを続けて、梨子ちゃんの中で何かが変わって、またピアノに前向きに取り組めたら素敵だなんて。そう思ってたって……」

「……でも」

梨子は口籠る。恐らくまだ気持ちが揺らいでいるのだろう。そんな彼女に、千歌は静かに手を差し出した。

「この町や学校、皆が大切なのは分かるよ? 私も同じだもん。でもね、梨子ちゃんにとってピアノは、同じくらい大切なものだったんじゃないの?」

ハッと目を見開く梨子。

「……その気持ちに、答えを出してあげて?」

千歌だって、梨子がピアノよりもスクールアイドルを優先してくれたことは嬉しいに決まっている。

だがそれではダメなのだ。梨子がここでピアノコンクールを蹴るのは、スクールアイドルを通じて彼女を前向きにピアノに取り組ませたいという千歌の当初の理念に反す

る。

だからこそ、もう分かっている梨子の真意を、彼女の口から聞こうとしているのだらう。

『梨子』

そしてゼロもそれに続く。彼もまた梨子に対して思う所があったからだ。

『今のお前がピアノじゃなくてラブライブを選ぶのは、ピアノからの逃げ以外の何でもない。お前はその口実にラブライブを使ってるんだよ』

ゼロはあえて厳しい言葉を梨子にぶつける。

『そんなのひたむきにラブライブと向き合ってるAquoursの連中への侮辱。……』

そんで今までピアノを頑張ってきたお前自身を否定する事だ』

ここまですると少し偏見も混ざってくるが、誇張気味とはいえ大筋は間違っていない。

『本気でピアノもスクールアイドルも愛してるんだったら、どっちも成功させるくらいの気概でやれ!!』

ゼロはずかずかと梨子に歩み寄ると、限界まで顔を寄せてそう強く言い放った。

梨子の表情にはまだ戸惑いの色が滲んでいる。それはまだ、ピアノに対しての恐れがあるから。

だったら、ここはマネージャーとして背中を押してやるべきだろう。

「・・・桜内。お前がA q o u r sの皆を大切に思うのは自由だけど、自分のやりたい事まで皆に委ねちゃ駄目だ。自分の道は自分で決めなきゃならない」

かつて自分が、先輩ウルトラマンに背中を押された様に。

「道に迷ったら、仲間の事を思い出せ。過ぎた時間を、夢を、・・・自分が何故、ここにいるのかを」

ゼロからジード、ジードから陸に受け継がれてきた言葉を。

「お前も、俺達も一人じゃない。・・・それを俺に教えてくれたのは、お前等だけ？」

そしてA q o u r sの皆に教えてもらった事を、改めて伝え返す。

「私待ってるから！ どこにも行かないって、ここで皆と待ってるって約束するから・・・、だから！」

「っ！」

千歌が言い終わるよりも早く、梨子はその言葉を遮って抱き付いてくる。

千歌、陸、そしてゼロに。

「・・・ホント、変な人達・・・」

突然の事に戸惑いながらも、涙ぐむ梨子を見て千歌も陸も笑う。

「大好きだよ……」

道なんてのは、どれが正しいなんて誰にも分からない。

進んだ後に後悔を呼ぶ道、これでよかったと思える道、それはそれぞれ違うだろう。だつたら今は、自分の心に正直に進めばいい。

未来が平等に約束されたものでないのなら、自分の気持ちに素直になつた方がいいに決まつている。

光の差す方へ。

その一方。

(……陸……、千歌ちゃん……)

渡辺曜は、十千万の一室から朝焼けの海辺を見つめていた。

そこにいるのは三人の少年少女。幼馴染である仙道陸と高海千歌。．．．．．そして桜内梨子。

「．．．．．」

海の家でのやり取りの際、二人は何でもないと言いながらも気に掛ける様な視線を梨子に向けていた。

合宿が始まってから、陸も千歌も梨子を気に掛けているような仕草をする事が多くなつた。

きっと梨子には何か悩みがあつて、その事を二人は案じているのだろう。それは友達思いの千歌、何だかんだで困っている人を放っておけない陸だからこそだろう。

でもなぜか、その事。二人が自分以上に梨子と仲良くなつていくのが快く思えない。

——憎いか？

「．．．．．え．．．？」

ふと脳裏に声が響く。

部屋には曜以外誰もいないので空耳と思ひ流すことにした。が、

不快にも、その声はいつまでも頭の中で反芻していた。

五十二話 複雑な心境

「え——っ!! またおままごと——!!」

まだ小さかった頃。私はしょっちゅう同年代の子達と遊んでいた。

こちら辺は女の子が多くて、遊ぶ時はいつもおままごとや花いちもんめみたいな遊びばかりで、身体を動かすのが好きな私にとっては正直言っつたらなかった。

本当は鬼ごっことか駆けっつことか何か球技とかで遊びたかったのに、いつも多数決でできなくて。

「むー……」

「仕方ないよ曜。皆おままごとやりたいって言うんだから」

「ほらー、よーちゃん」

千歌ちゃんは当時は今に比べて大人しくて、果南ちゃんも年長者として私より小さい子のやりたいことを優先していた。

だから渋谷おままごとに参加していたんだけど。ある日。

「ねーちゃん。俺曜と一緒に向こうで遊んでいい?」

同じく一緒に遊んでいた陸がそんな提案をした。

陸は独りぼっちじゃ可哀想っていう理由で毎回果南ちゃんが連れてきてたんだけど、大勢でなにかするのが好きじゃない上に男の子の陸は、私以上におままごとで嫌そうな顔をしていた。果南ちゃんもそれが分かっていたからすんなりとOKをだした。

「曜、なんかやりたいことある？」

「うん！」

この日から私と陸はよく二人で遊ぶようになった。

今となっては考えて見れば、女の子だらけのおままごとに参加させられるのが嫌で私に付き合ってくれていたんだらう。

でも、その当時の私にはそれがとても嬉しくて。

彼の事を意識し始めたのは、確かその頃からだった。

「しつかりね」

「お互いに」

沼津駅構内。

他のA q o u r sメンバーが見守る中、千歌は改札口前で今から東京に向かう梨子と向き合っていた。

「梨子ちゃん、がんばルビィ！」

「東京に負けては駄目ですわよ！」

「そろそろ時間だよ！」

「チャオ、梨子」

「気を付けて」

「フアイトずら！」

「くつくつく……、東京の闇に飲まれ……」

『ブラックホールを吹き荒らして来い！』

他のメンバーも思い思いのメールを送る。陸のみゼロに身体を奪われて伝えられなかった。

それを背に、梨子は改札の中へと進んでいく。そしてその姿が人混みの中に消えよう

とした時だった。

「梨子ちゃん！」

「……?」

千歌が呼び止めをかけ、梨子が立ち止まって振り返る。

「次は……、次のステージは、絶対九人で歌おうね！」

「……もちろん！」

梨子は最後に不敵な笑みを見せ、今度こそ人の波に飛び込んで行った。

ちなみに梨子がないので、ラブライブの予選は必然的に八人で歌う事になる。

フオーメーションなども練り直す必要があるもので、早急に練習に移らなければならぬ。
い。

「さあ！ 速く戻って練習としますわよ！」

陸が言うまでもなくダイヤが口にし、皆そろそろと駅を後にする。

「……これで予選敗退とかだったら桜内に示しつかねえよな……」

「そうならない為にも、張り切って練習と行きましょーウ！」

「あれ……? 千歌ちゃん……?」

ただ一人、千歌だけが改札前に残っている事に気が付く曜。

呼びかけようとしたが、彼女の背中から感じ取れる様々な感情を前に思わず躊躇って

しまう。

「……………千歌ちゃん……………」

『……………順調にやっているようだな……………』

駅構内の群衆に混じり、Aqoursを監視していた影が、曜を見て興味深そうに眉をひそめた。

『だがしかし、奴がまだ生き残っているとは……………。だが、使える者は全て利用しないとな……………』

Aqours、そしてウルトラマンゼロには、尽く自分の目論見を潰された恨みがある。

だからこそ、Aqoursのメンバーを使って復習を果たしてやろうとしていた矢先に相応しい人材が見つかった。

黒き王を復活させる媒介となり得る者を。

『……………楽しみにしておけ、仙道陸、Aqours……………ウルトラマンゼロ……………』

一瞬だけ目を血走らせた後、その影——ゼットン星人は雑踏の中へと消えていった。

「特訓ですわ!」

「……また?」

「……本当に好きずら……」

大きく「特訓」の二文字が書かれたホワイトボードの前で、ダイヤは合宿前にも見た仁王立ちをしながら威勢よく言った。

口を開けば「特訓」が飛び出してくるダイヤに、もはや皆呆れている。

「ああ!」

そんな中、燃える姉には一瞥もくれずにパソコンを弄っていたルビィが声を張り上げ

る。

何だと思いパソコンの画面を見ると、輝くステージの中で歌う二人の少女が映し出されていた。

「Saint Snowさん！」

陸がその二人の正体を思い出すよりも早く、千歌が答えを言ってしまった。

彼女達はSaint Snow。まだ六人だった頃のAoursが東京のイベントに赴いた際に出会った姉妹スクールアイドル。

「先に行われた北海道予選をトップで通過したって！」

「へえ……。これが千歌達が会ったって言う……」

「頑張ってるんだ……」

「へっ……。あの生意気な小娘どもか……」

（おい。セリフが悪役になってんぞ）

あの二人がAoursに対して吐いた言葉の事もあり、ゼロは彼女達の事を快く思っていない様だった。

かくゆう陸も、Saint Snowに対する印象はあまり良くない。

自身等も入賞出来なかった悔しさもあつたのだろうが、ただでさえ落ち込んでいたAoursをどん底に叩き落すような事を言つた彼女達を、好ましく思えと言う方が無

理がある。

へほんつと礼儀に欠くよなアイツ等！ ちよつとばかし歌がうまいからつて上から目線になりやがつて！〜

(落ち着け)

普通に「すげえ……」とか言つてた奴が何を言っているのだろうか。

へ俺の中じやアイツ等メビウスに聞いた蛭川つて奴と同列だぞ〜

(その蛭川つてのがどんなのかは知らんが……、とりあえず落ち着け……、
て、あれ?)

気付けば部室の中に A q o u r s の姿はなく、陸がただ一人残されていた。

どうやらゼロの愚痴を聞いている間に置いて行かれたらしい。

「……………せめて声掛けてつてくれよな……」

一応この後何をするかは分かつていたので、陸は文句を垂れながら部室から出る。

ちなみにこの後ゼロから件の蛭川の話聞いたのだが、流石にそんな屑と同列に捉えるのは偏見が過ぎると思つた。

「……なんだこれ」

陸が特訓場所と聞いていた浦女のプールにたどり着くと、特訓どころか練習のれの字もない光景があった。

何故か皆ジャージ姿でプールの清掃をしており、千歌をはじめとする何人かは不満げに口を尖らせている。

「え………つと……ダイヤさん。これが特訓だというのなら、その意義を俺に教えてくれませんかね？」

プールサイドに立つダイヤに尋ねると、代わりに笑いながらこちらに寄ってくる金色の影が一つ。

「ダイヤがプール掃除の手配を忘れてただけね」

「忘れていたのは鞠莉さんの方でしょう？」

言い争いを始めた理事長と生徒会長は無視し、陸はただ一人ジャージを着ていない瞳に目を向ける。

「で？ 何でまたお前はそんなカッコしてんの？」

今曜が着ているのは、白を基調とした船員のコスプレ衣装。そんなものを持ってきていたとは。

曜のコスプレ好きは知っていたが、部活とプライベートは切り離してほしいものだ。「デツキブラシと言えば甲板磨き！ となればこれです！とうわあ！！」

元氣よく敬礼した曜だが、思いつきり足を滑らせて尻餅を付くことになる。

「曜ちゃん。だいじようおわっ！！」

曜に駆け寄った千歌も足を滑らせ、同様の結果になる。そんな二人を見て鞠莉との口論を終えたらしいダイヤの雷が落ちる。

「貴方その恰好は何ですの?! 遊んでいる場合ではないのですよ! 全く、一体いつになつたら終わるのやら」

「あはは」

ダイヤの小言交じりのお説教を互いに顔を見合わせて聞き流す千歌と曜。

曜の纏う雰囲気はどこかいつもと違う事には、鈍感な事で宇宙人にも定評がある陸は当然の様に気付いていなかった。

「きれいになったね」

「びかびかずら」

「ほら見なさい。やってやれない事はございませんわ!」

『やったのほとんど俺だけだな』

一時グダグダになりつつも、ゼロの介入により何とかプール掃除は終わらせることが出来た。

人知を超えた存在の力添えは凄まじく、プールは未使用状態かのようにキラキラと輝いて見える。

「そうだ! ここで皆でダンス練習してみない?」

「Oh! Funny! 面白そう!」

「転んで怪我しないでよ?」

『ちゃんと掃除したし平気じゃねーの?』

(おい馬鹿辞めろフラグを立てるな!)

大事な予選前に怪我をするとか本当に洒落にならないので辞めて欲しい。天性のフラグ回収能力を持つゼロには不用意な発言を避けて頂きたい。

とは言えもう練習する流れらしく、八人は既にフォーメーションを取って目を閉じていた。

「……あれ？」

念の為身構えていた陸は、そのスターティングポジションに妙な違和感を感じる。

「あつ……！！」

千歌達も気付いた様で、皆揃ってほかりと空いた空間を見やる。

そこは本来ならば梨子がいた場所だ。

「そーいやアイツいないんだったな……」

「そうなる……、このままでは少し見栄えがよろしくないかもしれませんわね……」

「……変えるんすか？ フォーメーション」

「それとも……。梨子ちゃんの代わりに誰か入るか……」

「……代役ねえ……」

今回のフォーメーションが千歌と梨子のダブルセンターだったので、代役の者もセンターを務める事になる。

となると千歌との息が合い、尚且つ互いを良く知っている事が条件になってくる

が・・・、

「代役見つけ」

ふと視界に入った曜を見て、陸は反射的にそう呟いていた。

「・・・・・・・・ん？　へ？　え？」

陸の一言で徐々に視線が集中していき、曜が戸惑った様子で全員を見やる。

「私!!」

『・・・・・・・・何の用だ・・・・？』

離れた場所でA q o u r sを監視するゼットン星人に近づく影が一つ。

「クビにされたんだって？　ダークネスファイブ特戦隊」

嫌味つたらしく笑いながら、オウガはゼットン星人と対峙する。

『はっ・・・・、知っているなら貴様も私に関わる理由がないだろう。もう奴等とは何の繋

「がりもない。分かったらさっさと失せろ」

「まあそう冷たい事言うなよ。一緒にスライからの任務を遂行した仲じゃないか」
オウガがそう口にする、ゼットン星人は明らかに不機嫌になる。

その任務での失敗が決定打となり、彼はダークネスファイブ特戦隊から除名されてしまったのだから。

「……………曜ちゃんを使って何か企んでるんだろ？ 協力してやるよ」

『何……………?』

意外な申し出にゼットン星人は顔を顰める。

『……………貴様に私の協力をして何のメリットがある』

「別に。君のやろうとしてしている事が、ボクのやろうとしてしている事に利用できそうだなって思っただけだよ。別に君の計画自体は邪魔する気はないから安心していい」

不意に辺りに舞い降りた悪意を吹き飛ばそうとしているかのように風が吹く。

揺れる木々が奏でるざわめきの中で、邪悪なる二つの意思は微笑みと共に手を結んだ。

「……意外と、うまくいかないもんだな……」

空いてしまった梨子のポジションに曜が入ることが決まった事はいいのだが、とあるポイントで中々タイミングが合わない。

A q o u r s の中では最も千歌のとの付き合いが長い曜ならば出来ると思っていたのだが……。

「私が悪いの。同じところで遅れちゃって……」

「ああ違うよ！ 私が歩幅、曜ちゃんに合わせられなくて」

互いが互いに慣れない事をさせている自覚があるのか、先程からこうして気を遣ってばかりである。

「まあ、身体で覚えるしかないよ。もう少し頑張ってみよう」

なんとも体育会系らしい果南の意見と共に、二人共初期位置につく。

「ワンツースリーフォー、ファイブシックスセブンエイト」

果南の声と手拍子に合わせて二人とも踊る。流星は幼馴染な事だけあって、ここまで

は息ピッタリなのだが……。

「ああ！ ゴメン！」

互いが背中を向け合って踊るパートに入る際に、どうしても肩がぶつかってしまった。

「ううん。私が、早く出すぎて……。ゴメンね。千歌ちゃん……。」

「……。」

「？ 鞠莉さん。どうかしました？」

陸は鞠莉が二人、と言うよりは曜に向けている視線がいつもの彼女のそれではない事に気が付き、気になって声を掛ける。

「……。なんか、似てるなーって……。ちよつと前の私と……。」

「……。」

言い終わった後いつもの眩しい笑みに戻った彼女の言葉の意味を、陸はまだ理解できないでいた。

「うまくいかないな……」

〈こんだけやってるのにな……〉

学校での練習が終わった後も、千歌と曜は変わらずダンスの練習を続けている。

「あつ……、ゴメン……」

「ううん、私がいけないの。どうしても梨子ちゃんと練習してた歩幅で動いちゃって」

このやり取りも変わる様子はなく、ずっとこの調子だ。

同じ動作とは言え、実行する人間が変われば変わるものも多い。加えて人間は一度動作を覚えてしまうとその改変は難しくなる。千歌は今まで梨子と練習していた事もあつて、それが抜けないのだろう。

ただでさえ一人少ないという不安を抱えているのに、その上肝心のダンスがこの調子では……、当日が思いやられる。

「千歌ちゃん。もう一度、梨子ちゃんと練習してた通りにやってみて」

「えっ……、でも……」

「いいから！ 陸、お願い」

「お、おう……」

「せーの………」

陸がリズムを刻むと共に、二人は再び練習に戻る。

「へっ………」

すると今度はピタリとタイミングが合い、互いにぶつかってしまったという事態は起きなかった。

「………」

「……自分のスタイルを殺したか………」

今の動きは、前に千歌と梨子が練習していた時のものと同じ。

つまり曜が梨子と同じステップを取ることで千歌に合わせたのだ。

「これなら大丈夫でしょ？」

「う、うん……。凄いね曜ちゃん」

「……おい、よ——」

陸が曜に声を掛けようとした瞬間、千歌の携帯が鳴る。

千歌は画面を確認するや否や、嬉しそうにそれを耳元にあてた。

「もしもし梨子ちゃん？ 東京着いた!!」

電話の相手は梨子らしい。恐らく東京に着いた事を知らせてくれたのだろう。

「あ、ちよつと待ってて、皆に変わるね！ えーつと……、じゃあ花丸ちゃん！」

「ずらっ!!」

千歌は陸と同じく近くで二人の練習を見ていた一年生ズの一人、花丸に携帯を向ける。

「えつと……、もすもす?」

「もすもすつ!!」

『もしもし? 花丸ちゃん?』

携帯から梨子の声が聞こえた瞬間、花丸は大きくのけ反って尻餅を付く。

「み……、未来ずらー……」

「何驚いてんのよ? 流石にスマホぐらい知って——」

『あれ? 善子ちゃん?』

自分に声向けられた瞬間、何故かビクついたような素振りを見せる善子。

「ふっふっふ……、このヨハネは墮天で忙しいの……。別のリトルデーモンに変わります!」

なんだかんだ言つて善子も緊張しているらしく、ルビイを差し出して自分はその陰に隠れる。

『……もしもし?』

「……、……ギイイイイイ!」

ルビイに至っては猛ダツシユで近くの木の裏まで逃げて行つてしまった。

「どうしてそんなに緊張してるの？ 梨子ちゃんだよ!!」

「東京からだど緊張するぞら……」

「関係あるか……?」

一度行つた事があるにも拘わらずこの有り様である。一体彼女達にとつて東京とは何なのだろうか。

「陸ちゃんとゼロちゃんは？ 何かある?」

「別に」

『俺も特にないな』

どうせ今話しても「コンクール頑張れ」くらいしか言う事はないだろうし。

「つれないなあ……」。じゃあ曜ちゃん!」

「え……?」

携帯が自分に向けられ、気まずそうにその画面を見つめたまま曜は動かなくなつてしまつた。

「あ、ゴメン電池切れそう……」

特に会話もないまま、携帯の電気切れが近いと言う事で幕切れする。

一応最後に梨子と話す千歌を一瞥し、曜はレジ袋からみかん味の吸引タイプアイス

手に取った。

そしてそれを二つに割ると、どこか悲し気に見つめだす。

「よかつたあ………。喜んでるみたいで。じゃあ曜ちゃん！」

「ふえり！」

「私達ももうちよつとだけ、頑張ろうか！」

「………うん。そうだね………」

曜はちよつと迷うような素振りを見せた後、

「陸！ ハイこれ！」

千歌との練習に戻る前に、曜はみかんアイスの片割れを陸に投げつけてきた。

きつともうしばらくここで練習するつもりなのだろう。だったら終わるまで見届け

るのがマネージャーとしての筋と言うものだ。

アイスでも食べながら眺めているとしよう。

そう思いチューブ口から中身を吸引する。

「………ぬつる……。溶けてんじやねーか………」

五十三話 闇への誘い

コンビニ前での延長練習も終わり、陸と曜は二人並んで赤く染まった帰路を進んでいた。

「……………お前さあ……………あれでよかったのか？ ダンス」

「…………？」

そんな中、陸は気になっていた事を自転車のハンドルに顎を寄せながら問いかける。

「……………さっきの振り付け、桜内のやつだよな」

何十回も二人が失敗する様子を見てきた陸には分かる。

初めて成功した時の曜の振り付け、歩幅、リズム。それらは全て本来そのポジション

ンだった梨子のものだ。

別に成功するならそれに越したことは無いのだが、陸の中でその事がどこか引つ掛

かっているのだ。

「……………いいんだよ」

諦めにも聞こえる、溜息混じりの声音。

「もともと千歌ちゃんと梨子ちゃんで作ったダンスだもん。．．．私はそれに合わせないと．．．．．」

そして自分自身も納得させるように、曜は儂げに笑った。

まあ、筋は通っているだろう。

曜の言う通り、あの振り付けは千歌と梨子が作ったものだ。それを今更曜と合わせるとなると時間がかかるのは否めないし、他の事にもやることは色々あるのであまりそれほどばかりに時間は割けない。

よって彼女の判断は妥当ともとれる。

が、

「．．．それってさ、お前じゃないじゃん」

「え．．．？」

曜が自分のスタイル、輝きを捨ててまで尽力することは、Aqoursにとつてはい事だろう。

だがそれはAqoursの発起人、千歌の理念に反するものだ。

「．．．．．お前自身はどうなるんだよ。今のままじゃ、お前は渡辺曜じゃなくて桜内梨子の代わりの人間、なんだぞ」

「．．．．．」

曜はその言葉を肯定するでも否定するでもなく、黙って下を向いてしまった。

きつとそれは曜も分かっていた事なのだろう。だからこそ返答に困っている。陸にはそう見えた。

「……いいんだよ。私はこれで——」

「うりやつ！」

「っ!!」

何か言いかけた曜の胸の膨らみを鷲掴みにする影が現れる。

「オーウ！ これは果南にも劣らな——」

「とおおおりやああ!!」

「い……?」

「え……?」

陸がその正体に気付いた時には、既にその影は宙を舞っていた。そしてその金色の髪を持つ少女は、何と陸に向かって飛んできているではないか。

「ぐえっ……!!」

「アウチツ！」

かわして怪我をさせる訳にもいかないので、仕方なく受け止めようと、結局転倒した陸を重い衝突の衝撃が襲う。

「・・・・・・・・え？ ま・・・、鞠莉ちゃん!!」

「・・・・・・・・何やってんだよアンタ・・・」

「えへへ・・・・・・・・。つつい・・・・・・・・」

突然曜にセクハラを仕掛けた犯人——小原鞠莉は、陸を下敷きにしたまま苦笑いを浮かべた。

「千歌ちゃんど？」

鞠莉と曜は場所を変え、駿河湾に沈む夕日を眺めながら話し合っていた。

ちなみに陸は鞠莉がガールズトークがしたいとの事で追っ払ってしまった。

「ハイ。上手くいってなかったでしよ」

「あ・・・ああ・・・・・・・・、それなら大丈夫！ あの後二人で練習してうまくいったから」

陸と似たような事を言われて一瞬戸惑ったが、すぐに曖昧な笑みを浮かべてそう言い返す。

しかし鞠莉はその答えに対して首を横に振る。

「いーえ。ダンスの事じゃなく・・・」

「えっ・・・?」

「ちかつちやりくつちを梨子に取られて、ちよつぴり嫉妬ふあいやあ~~~~♪が、燃え上がってたんじゃないの?」

「嫉妬!! いや・・・、まさかそんな・・・」

合宿以来ずっと静かに、されど確かに燻っていた感情を抑え込みながら、曜は取り繕って答えた。

すると鞠莉は曜の頬を抓って引つ張り出す。

「ひゃあううう~~~~!」

「ぶつちやけトーク♪ する場ですよ? ここは」

解放された頬に手を当てながら彼女を見つめる曜に優しく微笑みかけると、近くの椅子に座る。

「話して。こんなのあの二人にも、梨子にも話せないでしょ? ほくら〜」

ポンポンと自分の隣の席を叩く鞠莉に、曜は観念したように隣に座った。

「……私ね。昔から千歌ちゃんと一緒に何かやりたいなあって、ずっと思ってたんだけど……」。その内中学生になって……」

曜は水泳部に入り、その時に千歌もどうかと誘ったのだ。けれども千歌の答えはNOだった。

その後も何度か誘う機会があつたのだが、その度に尽く断られてきたのだ。

「……ちなみにりくつちは？」

「陸は……、そもそも集団行動が好きじゃなかったから……」

「……りくつちらしいわね……」

「……だから、千歌ちゃんが私や陸を誘つて、一緒にスクールアイドルやりたいって言ってくれた時は、凄く嬉しくて、これでようやく一緒に出来るって……」

だがそのすぐ直後に梨子が入り、気付いた時には皆が集まって九人になっていた。

始めた当初は自分達二人だけだったから付き合ってくれていると思つていた陸も、何だかんだで今もAqoursに寄り添つてくれている。

もともと大勢で行動するのが好きではない陸をそうさせるのは、Aqoursの皆が陸を変えたから。

「もしかしたら千歌ちゃん……私と二人は、嫌だったのかなって……」。陸も、他の皆という時の方が楽しそうだし……」

前に梨子が皆千歌の為にスクールアイドルをやっている訳ではないと言っていたが、曜はスクールアイドルをやる理由をある程度あの二人に依存している。

だからこそ、千歌と陸に必要とされていないかもと言うこの状況が不安で堪らないのだ。

周りからは容量がいいと思われがちだが、実は全然そんな事はなく、むしろこういう事になると誰よりも、そしてどこまでも不器用なのだ。そういう自分とはやりにくいかなど、そう思う事も時折ある。

「とりゃ」

「いたっ!!」

そこまで言い募った辺りで、頭に鞠莉からの手刀が落ちる。

「何一人で勝手に決めつけてるんですかっ!!」

「……だって……」

「えい!」

「ふやあうううう……」

鞠莉は再度曜の頬を弄んだ後、立ちあがって彼女に背を向けた。

「曜は、二人の事が大好きなんでしょう?」

「ええつと……、そのつ……」

頬を赤く染めて慌てる曜に、鞠莉は振り返らずに言った。

「いいよ素直に言つて。何のためにりくつちを追つ払つたと思つてるの？」

夕日を背にサムズアップを決める鞠莉。どうやら初めからそれを聞き出すことが目的だつたらしい。

「……………うん……………」

「……………だつたら、本音でぶつかつた方がいいよ」

耳まで真つ赤に染め上げる曜を彼女は冷やかすでも馬鹿にするでもなく、そう優しく言葉を投げかけた。

「大好きな友達に本音を言わずに、二年も無駄にしてしまった私が言うんだから、間違いありません！」

少しばかり自虐が混じるその声は、どこか物悲しい感覚で胸に染みた。

「……………本音、ねえ……………」

曜は自室のベッドに寝そべると、鞠莉に言われた言葉を思い出しながら呟いた。陸と千歌に対して本音、つまり自分の気持ちを伝えろという事は……………、告白しろという事だろうか。

「……………いやいや。無理だって……………」

考えただけでも身体が火照ってくる。告白って一体なんの罰ゲームなのだろうか。

「……………けど……………」

千歌にその心配はないだろうが、陸の方は少し怪しいかもしれない。

鞠莉との話題に出てきた梨子はもちろんの事、この頃千歌の陸に対する視線も少し変。何というか、女の子のそれだ。他だと花丸も、妙に陸に懐いているし。いつ誰が何かの弾みでそういう関係になってもおかしくないのは確かだ。

「……………でもどうせ私が……………その……………あれしたって……………」

陸がダイヤを殺しかけたショックで、しばらくA q o u r sを遠ざけていた時。

曜が何度練習に顔を出してくれと訴えても来てくれなかったのに、千歌が頼んだら一発で聞き入れてくれた。

千歌も久々に陸と顔を合わせてからは、失っていた笑みを取り戻していた。

二人が曜よりも互いを特別視してるのは確かだ。

それに二人共梨子と一緒にいる時の方が、自分という時より楽しそうに見える。きつと二人の中では自分は……、

『ただ近くにいるだけの存在。その程度の認識だろうか』

「え……?」

深層意識の底を打つように、何者かの声が不快な響きで脳裏に響く。

『いい加減受け入れろ。自分は誰から必要とされていない事を』

「……誰……?」

『お前をこんな状況にしたのは誰だ? 分かるだろうか?』

合宿の時にも聞こえたこの声。

聞いていると気がおかしくなってしまうそうだと思う耳を塞ぐが、その声は変わらず語り掛けてくる。

『恨め。憎め。お前から大切なものを奪っていく者を……』

「……なんなの……」

不覚にも頭に浮かんでしまったある少女の顔を振り払うと、曜はその声から逃げる様に布団の中に潜り込んだ。

「これでよしと……」

梨子は東京の街を散策し、そこで購入した物を A q o u r s の皆に送った。

自分を笑顔で送り出してくれた皆への、自分なりのサプライズだ。

「……ちよつと練習しておこうかな……」

せっかく部屋にピアノを置いてもらっているのだ。これで練習しないのは少しもつたない気がする。

何より皆が背中を押してくれたのだ。自分に出来る限りの最大の演奏をするために、出来るだけピアノに触れていたい。

『ククク……』

「っ!!」

突然耳朵を打つ邪悪な笑い声に反応し、咄嗟にその方を向く。

「えっ……」

そこで見た見覚えのある顔に、梨子は思わず硬直してしまう。顔も姿も変わらないはずなのに、身に纏っている雰囲気がるつきり違う。

『……次はお前だ』

「きゃあああつ!!」

その影が振るつた腕から闇が放たれ、梨子を飲み込んでいく。

「くうつ……!! あ……、ああ……!!」

闇に蝕まれ、床を転がりながら苦しむ梨子を見下ろしながら、その影は嗜虐的に笑みを深める。

『……後は……』

気を失った梨子が力なく四肢を投げ出すと同時に、その影は闇となって消えていった。

翌日。

「——おい！ 曜！」

「ふえっ！！」

心をどこかに置いてきたかのように上の空だった曜が、陸の呼びかけでようやく意識を目の前に引き戻す。

今はラブライブに向けての練習の為、学校へと向かっている最中だった。

だったのだが、昨日部屋の中で聞こえた声をどうしても払拭することが出来ず、ずっとその事について頭を悩ませていたのだ。

「………大丈夫かお前。今日ずっとそんな感じじゃんか」

「……う、うん。大丈夫大丈夫………」

誤魔化すように笑うが、そんな上辺だけの笑いは幼馴染には通用するはずがなく。余計に陸の疑いを深める事になった。

「体調悪いんなら今日は休んどけよ。千歌達には俺から言っておくから」

「ホントに！ ホントに大丈夫だから！」

別に体調に問題がない事を訴えるためにぴよんぴよんと跳ね、それでもまだ眉を寄せ陸の背中を押す。

「ほらほら。早くしないとダイヤさんに怒られちゃうよ」

「……まあ、別に大丈夫ならいいんだけどよ……」

誤魔化し方が露骨なので余計に怪しまれただろうが、多少強引にやらないと陸は聞き入れてくれないので仕方ない。

「……それよりさ……」

「んあ？」

陸の背中当たてた手を握ると、上目遣いで彼の顔を覗く。

昨日鞠莉にあんな事を言われた後だと、互いに顔を見つめているこの状況が妙に恥ずかしく思えてくる。

目つきは悪いし格好はだらしないし寝癖を直そうともしないし、本当にどうしてこの少年だったのか。

「……何？」

「ええつとね……、その……」

状況を作ったはいいものの、何を言ったらいいのか分からなくなる。

そもそも自分は、この気持ちを伝えてどうしたいのだろうか。

別に何か特別な関係になりたいとかそういう訳ではない。今の様にただ一緒にいらればそれでいい。そしてそれは千歌とも同じ。

幼い頃からずっとそうで、これからもずっとそのまま。そう思っていたのだが。

—— お前は誰からも必要とされていない。

幻聴のように頭に響いたこの声が、素直にそう思わせてくれない。

だからせめて、陸と千歌の二人にどう思われているのくらいは知っておきたいのだ。そうすればこんな声に惑わされることも無くなる。

「……あのさ。陸って、私の事どう思ってる?」

こんな事告白してるのとほぼほぼ同義だが、彼ならば問題ない。超鈍感の陸だからこそ使える荒業だ。

「……あ? どうした急に?」

「いいから! ……答えてよ……」

陸なら勘付かれる事はないと分かっている、やはりこういう質問はしていて恥ずかしい。

「……急に言われてもな……」

赤くなる顔を見られない為に曜が俯くと、陸は頭を掻いて考える様な素振りを見せる。

「……まー、そうだな……」

「……」

やがて答えが見つかったのか、後頭部に手を回すと曜の顔を見据えた。

「俺は——」

ヴー、ヴー、ヴー。

だが携帯のバイブレーションが陸の答えを遮る。鳴ったのも彼の携帯だ。

「……桜内……?」

「え……」

胸がざわつく様な感覚に襲われる。

まるで邪魔でもしているかのようなタイミングだ。そしてよりにもよって梨子。

『良かったじゃないか。答えを聞かずに済んで』

「っ……」

そしてまた謎の声が囁き掛けてくる。

『答えなど決まっている。お前など必要ないと言われるだけだ』

「……そ、そんな事……」

自分が抱いていた不安をピンポイントで突いてくる気味の悪い声音。聞きたくない。聞きたくないのに、どうしてもこの声が耳に潜り込んでくる。

『いや、必要ないどころか——』

「曜。ちよつと行つてくる!」

「えっ?!」

陸の声で我に返る。

謎の声が邪魔をして陸と梨子の会話を聞き取ることが出来ず、気付けば二人の通話は終了していた。しかも陸は慌てているように見える。

「ちよ……！！ 陸！」

「シエア！」

そしてその理由を聞けることのないまま陸はゼロへと変身し、一瞬で見えなくなる程遠くへ飛んで行ってしまった。

「……ほーん……。彼は人を追い詰めるのが上手いなー」

ぼつんと一人残された曜を陰から眺め、オウガは感心したように息をつく。

曜はしばらく呆然とゼロが飛び去って行った方向を見つめていたが、やがて浦女に向けて足を進め出した。

「どれ、じゃあそろそろボクも協力してあげるとしますかねー」

オウガは最後に曜の背中を一瞥し、森の影の中に消えていった。

結局、陸は自分の事をどう思っていたのか。

答えをもらえなかった事で、本来は耳を貸す義理もないあの声が徐々に自分の中で大きくなっていく。

今となつては答えをもらえなかった事に軽く安心し出してもいい。

「……………必要ない……………。ううん！」

頭をブンブンと振るい、益体のない想像を振り払う。

こうなつたら陸は後回しだ、先に千歌にあたろう。

そう思い、勢いよく部室のドアを開く。

「おはよ——！」

「あつ！ 曜ちゃん！」

曜が部室に入った途端、幼馴染の少女が元気よく駆け寄ってくるのが見えた。心なしか機嫌がよさそうである。

「それより見て見て！ これ！ ほらあ！」

千歌は興奮気味に自分の右手首に着けたシユシユを見せてきた。彼女の髪と同じみかん色で、とてもよく似合っている。

「わはあ！ 可愛い！ どうしたのコレ?!」

「皆にお礼だつて送つてくれたの！ 梨子ちゃんが！」

彼女の名前が出てきた瞬間、今の今まで笑顔だった曜の表情が硬くなる。

部室を見渡してみれば善子、花丸、ルビイの一年生もそれぞれ異なった色のシユシユを付けており、三人とも元気よくそれを掲げた。

「いいでしょう……。梨子ちゃんもこれ付けて演奏するって！ 曜ちゃんのもあるよ、はい！」

「あ……。ありがとう……」

千歌に手渡された水色のシユシユを受け取ると、体育館側の扉が開かれた。そこから顔を出してきたのはダイヤ。

「特訓、始めますわよー！」

「「はーい！」」

「曜ちゃん着替え急いでね！」

「千歌ちゃん！」

渡されたシユシユに視線を落としていた曜は、ダイヤの呼びかけに応ずる千歌を呼び止めた。

「ん？」

呼び止めたはいいが、先程と同じ状況が発生する。

いざ顔を見てしまうと、なんて言ったらいいのか分からないのだ。千歌も鈍感とは言え流石に陸ほどではないので、あの質問をするのはマズいだろうし……。

「………がんばろうね」

「うん！」

結局それしか言えず、曜は自身の不甲斐なさに肩を落とすのだった。

『必要とされていないお前が何を言ったところで無駄だ。その証拠に、直に皆お前の事など忘れる』

今なお語り掛けてくる。謎の声に苛まれながら。

五十四話 邪悪なる気配

『デエエエヤアアアア!』

東京の街で暴れていた怪獣に、急降下と共に繰り出したウルトラゼロキックが炸裂する。

『ツ——!』

『うおおおッ!』

だが奴は炎を纏った飛び蹴りをもともせず、逆に跳ね飛ばされてしまう。更に合わせた両腕から青白い光弾が放たれ、転倒したゼロに迫る。

『ちい………』

ウルトラゼロデイフエンサーで光弾を防ぐと素早く立ち上がり、一度後方に飛びのいて距離を取る。

『………なんだこいつは………』

「……お前でも知らないのか……」

ゼロでも知らないという、謎の怪獣。梨子から怪獣が出たと連絡を受けて飛んで来たら、こんな得体の知れない奴がいるとは。

二足歩行になったサソリのような外見をしており、見るからに頑丈そうな青い外骨格と、長い尾が特徴的だ。

何というか、これまでに見てきた怪獣とは何かが違う。

「グランテラ。スペースビーストだよ」

「『?』」

不意に聞き覚えのある声が耳朶を打ち、自然とその方に視線が引き寄せられる。

すると人々が避難して閑散としたビル街の中、ただ一人逃げずにゼロを見上げる、紫檀色の長髪が特徴的な少女が。

「……桜内……?」

『……だが……。なんだ、この気配は……』

それは紛れもない桜内梨子のだが、普段の彼女とは明らかに何かが違う。

不穏な、人間が放つ様なものではない謎の気配。そして普段は黄色い彼女の瞳は、紅く煌いている。

「……ありがとう。仙道君、ゼロちゃん。助けに来てくれて」

梨子は怪獣、グランテラには目もくれずに、悠然とゼロに向かって歩み寄ってくる。

思わず背筋に悪寒が伝う程にその姿は不気味に映り、戦慄を禁じ得ない。

「……それじゃ、……死んで♡」

梨子は恐ろしくも穏やかに微笑んだ後、漆黒の光に包まれていった。

「ふっふっふーん♪」

練習終わり。

東京に怪獣が出現した事を知らない千歌は、呑気に鼻歌を歌いながら帰路を進んでいた。

今日は予定がある人が多かったので午前中で解散したが、午後も曜とダンスの練習がある。

「……そう言えば、何で陸ちゃん来なかったんだろ」

誰に問いかけた訳でもない、純然たる疑問。

「知りたいかい？」

「え？」

不意に声が掛かり、千歌は足を止めて背後に立っている人影を見やった。

そこにいたのはいたって普通の青年で、爽やかに笑いながら彼もまた千歌の事を見ていた。

「えつと……、陸ちゃんの知り合いの人……？」

「……まあ、そんな感じかな？　こうやって顔を合わせるのは初めてだよ。高海千歌ちゃん」

特徴と言うか、掴みどころのない彼は、笑みを保ったまま千歌に歩み寄ってくる。自分の名前を知っていたという事はA q o u r s のファンなのだろうか。

「陸君なら今東京に行ってるよ。そこでゼロ君と一緒に怪獣と戦ってる」

「へー……、居ないと思ったら……。……。……っ!!」

危うく納得しかけたが、そうではないだろう。

なぜ彼は、陸がウルトラマンゼロである事を知っているのか。

咄嗟に距離を取って、警戒しながら男の顔を見据えた。

「何でその事……、あなた誰……？」

千歌の反応を見ると、男は更に笑みを深くする。その笑みに爽やかさはなく、逆に立

ちすくんでしまう程の狂気が秘められていた。

「・・・教えてもいいけど、無駄だと思ふよ？ だって・・・」

男を闇が包み、全身の輪郭が覚束なくなっていく。

『どうせ、すぐ忘れちゃうんだから・・・』

「っ———！」

魔人のような姿になった男を見て、千歌が悲鳴を上げるより早く、

『ほい、パチン』

「っ・・・。・・・。・・・。」

男が指を鳴らすと千歌の瞳からハイライトが消え、力なく男の方に倒れ込んでくる。

『じゃ、このままお持ち帰り・・・。っ、って訳にも行かないんだよねえ・・・。残念』

残念』

光を失った千歌の双眸の前で手を翳し、更に暗示を掛ける。

『ベリアル力の力つて割と応用効くよね。流石、腐つてもウルトラマンつて事か』

上手い事力を調整しながら、千歌の一部の記憶に蓋をしていく。いくら彼女が例の光を宿しているとはいえ、今の発現状態ならば暗示が解ける心配はないだろう。

『可愛い女の子にこんな事をするのは本当に心が痛むんだけど、これも全部君の光をもっと強くするためなんだ』

転移装置で千歌の部屋まで瞬間移動すると、そつと彼女をベッドに寝かせた。

『だから少しの間忘れてもらおうね。．．．．．うーやーの事．．．』

男—— オウガは愉快そうに笑いながら、闇となつて消えていった。

「『がぁあ!!』」

突如迸つた闇の柱が身体のだ真ん中に直撃し、複数のビルを巻き添えにして吹き飛ばされるゼロ。

『．．．．．なんだ．．．．．、アイツは．．．．．』

「．．．．．黒い．．．．．、ウルトラマン．．．？」

収束した闇は人型を形作つていき、やがてウルトラマンに酷似した巨人の姿になった。

赤と黒のツートンカラーで、頭部からは二本の角のような突起物が伸びている。

双眸とカラータイマーに相当する部分には黒い光が宿っており、少なくともゼロのような光の巨人ではない事が伺える。

「・・・桜内・・・・・・・・、なんだよな・・・」

『のはずなんだが・・・・・・・・、おいテメエ！ 梨子に何しやがった！』

起き上がったゼロが黒い巨人に向かって吠える。

『・・・・・・・・ダークファウスト・・・・・・・・』

それに返す声が、どこからともなく発せられる。だがそれは梨子の声ではなく、地獄の底から這いあがってきたかのようなおどろおどろしい響きだった。

『・・・・・・・・そいつはウルトラマンの影。無限に広がる、闇の権化・・・・。光を飲み込む、無限の影』

『誰だテメエは！ 出て来い！』

『・・・・・・・・だったらそいつを倒せ。俺の操り人形をな』

『つ！！』

その言葉が途切れるや否や、巨人、ダークファウストは一瞬でゼロに肉薄し、鋭い回し蹴りを繰り出した。

咄嗟に両腕を組んでガードを取るが、いきなりの事で体勢が不安定故に受け止めきれ

ず、敢無く吹き飛ばされてしまう。

「おい桜内！ 目を覚ませ！」

「クフフ……♪ 仙道君♡ なんか今、すつごく身体が熱いんだあ……♪」

陸が訴えかけても正気と思える返答は帰って来なかった。

『無駄だ。完全に操られてやがる』

「じゃあどうすんだよ!!」

『元に戻すしかないだろ!』

駆けだすと同時に身体が蒼く煌き、ルナミラクルゼロが右腕に柔らかな光を宿す。

『フルムーン——』

『ギユウイイイイイ!』

「あつ……がつ……!!」

ダークファウストを浄化すべくその周りを旋回するが、その間意識していないグランテラが発射した炎が連続してヒットしてしまう。

『ハアアアアアア!!』

「ぐああああああ!!」

追撃にダークファウストが放った漆黒の光線——ダークレイ・ジャビロームが襲いかかり、吹っ飛ばされた勢いでビル街に突っ込んで瓦礫の山を作り上げる。

「前にマガゴモラにやったやつじゃダメなのか？ あれならしがみつけるし……」
『ウルトラゼロレクターの事か？ あれは消費するエネルギーが大きい。それじゃグラ
ンテラを相手取れない』

「……そこも織り込み済みって訳か……」

目の前にいる黒い巨人に、梨子の面影はない。

どこの誰が梨子をこうしたのは知らないが、おいそれと黙っていられる訳がない。
自然と拳に力が入る。

「……汚ねえ真似しやがって……」

普段は冷静なルナミラクルゼロですらも怒りに拳を握っていた。

『ハアア！』

『っ！！ 何！！』

ダークファウストが腕を掲げると、空に黒い光が伸びてゆく。

それはドーム状に広がっていき、ゼロ、ダークファウスト、グランテラのいる空間を
包み込んでいく。

閉じ込められた闇のドームの中は、先程までいた東京の街ではなく、岩と土だけが存
在する荒涼とした世界だった。

『何だこの空間は……』

『ギユウイイイイイ！』

グランテラの咆哮で目の前の事に意識を戻す。

ここがどこなのかは後だ。まずは一刻も早くグランテラを殲滅し、ダークファウストから梨子を救い出さなければ。

殺到する火球を前に、陸はライザーとニュージエネレーションカプセルを構える。

『俺に限界はねえ!!』

ライザーから光が迸り、四人のウルトラマンの力が秘められた光がゼロを包む。
が、

『がはあつ………!!』

ゼロの姿が変わることはなく光は霧散し、火球が鳩尾を捉える。

『どうなつてんだよ!!』

『タイプチェンジ出来ない………? この空間の影響か——ぐつ………!!』

ダークファウストは戸惑うゼロの首を掴み、そのまま空中に放り投げた。

『ギユウイイイイイ！』

『ザアア!』

宙を舞うゼロに向かって放たれる波状光線と火球。何とか体勢を立て直すと、それらを回避しつつグランテラに狙いを定めた。

ダークファウストの浄化を奴が阻んでくるのなら、奴を先に倒すしかない。

『ミラクルゼロスラッガー!』

無数の光の刃が火球を切り裂きながらグランテラに殺到する。更にゼロ自身はダークファウストに肉薄し、掌をあてがう。

そして衝撃波を放とうとした瞬間、重い衝撃が全身を貫いた。

「『があああああ……!』」

青白い光弾が二つ同時に命中し、勢いでゴロゴロと地面を転がる。

すぐさま顔を上げれば、ミラクルゼロスラッガーで攻撃したはずのグランテラが合わせた両腕から煙を上げているのが見えた。

『どうなってるんだ……?』

再度ミラクルゼロスラッガーで攻撃するが、光の刃は全て奴の固い外骨格に弾かれてしまう。一つ前の攻撃が効かなかったのもそういう事らしい。

『ジャアアア!』

『ぐう……』

ダークファウストが突き出した拳を受け止めるが、パワーが落ちるルナミラクルゼロ

ではどうしても純粋な力比べでは劣ってしまう。

『ギユウイイイイイイ！』

「がはっ……！」

背中に着弾した火球が火花を散らし、ゼロに身体にダメージを蓄積させる。

証拠にカラータイマーは点滅を始め、徐々に腕にも力が入らなくなってきた。

「苦しいし力が入らないでしょ？　だってこのダークフィールドは、ゼロちゃんみたいな光の戦士から力を奪うんだもん」

『何……？』

拳の力でゼロを圧倒しながら、操られている梨子が笑いながらそう言うってくる。

光の者から力を奪う。先程タイプチェンジが出来なかったのはそう言う事か。

『サアア！』

『ぎっ……！！』

強引に取っ組み合った腕を解かれ、ガードが開いた腹部にヤクザキックが叩き込まれる。

『フッ！』

『くうっ……！！』

顔面を殴りつけられ、青い巨体が弧を描いて地面に落下する。衝撃で土煙が巻き上げ

るが、ダークファウストはそれには目もくれずにゼロの脇腹を踏みつけた。

『がぁっ………』

「アハッ♪ 痛い？ 痛いよね？ だつてそこ、さつきグランテラの火球が当たった場所だもんねえ？」

それと同時に漏れ出る実に愉快そうな梨子の声。相当思考が闇に犯されているのか、普段の彼女ならば絶対にありえない事で快感を覚え、ありえない口調でそれを吐露している。

『ぐっ………あ……あ……』

「ほら、ほらっ。もつと苦しそうにもがいてよ。もつとそのゾクゾクする声を聞かせて？」

足を振り上げ、もう一度踏みつけてやろうと黒き巨人の悪意が迫る。

しかし、

『………？』

『調子乗ってんじゃねーぞゴラァ………』

ゼロはそれを片手で受け止めていた。

『やりたい放題やってくれやがって……、梨子の声で……、それ以上くだらねえこと言つてんじゃねえ!!』

ルナミラクルゼロのそれにしてもあまりに荒々しい言葉。

その声音には明らかな怒りが滲んでいる。

ここまで好き放題にやられていた事に対するものもあるが、それ以上に。

『いい加減！ 梨子を返しやがれ！』

『グアアア!!』

足の裏を掴んだ掌から衝撃波が放たれ、ダークファウストを空中に浮かび上がらせた。

『フーン!』

奴の腕を取ると、そのまま背負い投げの要領で地面に叩きつける。ルナミラクルらしからぬ泥臭い戦法だが、込み上がる怒りがゼロにそうさせているのだ。

『ギユウイイイイイイ!』

『デメエもだ!』

押し寄せる火球の波を回避すると、パーテイクルナミラクルで身体を光の粒子に変えてグランテラの体内に侵入。そして、

『ハアアアアアア!』

『ッ———!』

その中で実体化する事で奴を体内から破壊し、グランテラを爆散させた。

グランテラがいなくなれば、後は邪魔する者はいない。

『アエエエヤアアア!』

大地を蹴つてダークファウストの眼前に迫ると、軽快な動きで鳩尾に張り手を叩きこむ。

『グウウウウ……』

『ハッ! フッ! セヤア!』

ストレートパンチ、回し蹴り、水平チョップ。素早く、正確に流れる様に攻撃を繰り出して奴を翻弄する。

そしてダークファウストがグロッキーになったところで、ゼロは再び飛び上がった。

『フルムーンウェーブ』

周囲を旋回するゼロの腕から光が放出され、球体を形どってダークファウストを包み込んでいく。

『ふ……』

ゼロが指を鳴らすと光が弾け、闇の支配から解放された梨子の姿が露わになる。

それと同時に闇の空間も消滅し、次の瞬間には元の東京の街に立っていた。

『ぐっ……、うう……』

安堵の息をついた後、ゼロは膝を折り、その身体は光の粒子となって消えていった。

「……出ないなあ……」

曜は陸への発信履歴で埋め尽くされた携帯の画面を眺めながら、練習の為に千歌の家へと向かっていた。

何度掛けても陸は電話に出ない。かなり慌てた様子で梨子の元に向かった感じだったので、やはり心配だ。

「……まあ、ゼロもいるし……」

もう千歌の家は目の前だ。あまり千歌に心配させるようなことはさせたくないし、後でまた掛け直すとしてしよう。

携帯をしまい、顔を上げる。

そこには既に練習着に着替え、準備体操をしている千歌の姿があった。

「おーい！ 千歌ちゃんー！」

もう外に出ているという事は、自分の事を待っていてくれたのだろう。その事が妙に嬉しくて、いつもより元気を込めて彼女の名前を呼ぶ。

「？」

千歌は首だけ動かして曜を見やるが、何故か返事をしてくれない。

「……？ 千歌ちゃん？ どうかしたの？」

駆け寄つてもう一度名前を呼んでも、彼女はきよとんと首を傾げるだけだ。

そしてようやく千歌が口にした言葉は、曜を心肝から凍てつかせた。

「だあれ？」

「つ……！！」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。

千歌は自分に対して、「誰？」と言ってきたのだ。

からかっているのかとも思ったが、彼女はそんな悪質な嫌がらせをしてくるような少女ではない。そして何よりも、その瞳には純粋な疑問が映っている。

「……誰って……、え？ 千歌ちゃん……？」

とてつもない不安が胸に込み上がってきた。

——どうせお前の事など、直に皆忘れる。

今朝謎の声に投げかけられた言葉が、今までに無い程強く脳裏を駆け巡る。不安が身を焦がし、冗談なのではないかと言う可能性すらも捨ててしまう。

「私だよ！ 幼馴染の渡辺曜！ さつき一緒に練習しようって言ったじゃん！」
思わず顔を引きつらせながら、千歌に詰め寄る。

だが千歌は、それでも曜の名前を呼んでくれることはなくて。

「……私の幼馴染は……陸ちゃんと果南ちゃんだけ……。それに私、今から一人で練習しようって……、そもそも何でその事知ってるの？」

「っ……！」

今度は理解するのに時間はかからなかった。

彼女は本当に、自分の事を忘れてしまっているのだ。

「……そんな……、何で……、千歌ちゃん……」

じわりと、目尻に何かが滲んでくる。

「ああ！ もしかしてAqoursのファン?！」

普段は見るだけで嬉しい気持ちになる彼女の笑顔も、今はとても悲しいものに見えてくる。

「今度ライブの予選で歌うからさ！ 良かったら見に来て——」

「もういいっ!!」

爆発しかけていた感情をもう抑えることが出来ず、思わず千歌を突き飛ばしてしま
う。

「いたっ……」

尻餅を付いた千歌は、疑問と非難が混じった瞳で目の前の少女を見上げるが、そこで
固まってしまう。

彼女は、とても悲しそうな表情で泣いていた。

「え……、あの……」

「っ!!」

何故か胸が痛くなり、千歌は何か声を掛けようとするが、そうするより前に曜はその
場から駆け出し行ってしまった。

五十五話 黒き王の喝采

「——う君！ 仙道君！」

必死に自分を呼ぶ声が、暗闇の底から意識を引きずり上げていく。

目を開けると、心配そうに陸の顔を覗く少女の姿があった。

「……桜内……、よかった、無事だったか……」

ダークファウストと化していた際の洗脳は解けたらしく、瞳の色も元に戻っている。

「……ゴメンね。私のせいだ……」

どうやら操られていた際の記憶は残ってしまっているようだ。罪悪感からか、梨子は申し訳なさそうに目を伏せた。

「……気にすんな。それより、お前をこんな事にしやがった犯人の事。分かるか？」

梨子の事を操り人形呼ばわりした謎の声。

奴が梨子をダークファウストへと変え、東京にグランテラを召喚した張本人だ。

ふつつつと湧き上がるこの怒りは、その腐れ外道の顔面を一発殴り飛ばしてやらない

と収まりそうもない。

「……………その事、なんだけどね……………」

陸が問うと、何故か梨子は気まずそうに視線をずらす。

「別に覚えてないならそれでいいぞ？」

「ううん。顔は見たよ！ 気を失う前に顔は見たんだけど……………、その……………」

「？」

いまいち煮え切らない梨子に、陸は首を傾げる。一体何があったのだろうか。

やがて梨子は決心したように息つき、陸の目を真っ直ぐに見据えた。

「……………その時に見た顔なんだけど……………」

次の瞬間、陸は自分の耳を疑う事になる。

「……………曜ちゃん、だったんだ……………」

『言つただろう？ どうせすぐお前の事など忘れると』

今来た道を、曜は全力で四肢を動かしながら駆ける。

『お前は誰からも必要とされていない。その証拠にお前の親友はお前の事を忘れていた
だろう？』

千歌の元から飛び出して以降、謎の声は途切れる事を知らずにと曜に囁き掛けてくる。

『所詮お前はその程度の存在だったという事だ。存在価値のない、偽りの自分を演じる
事しか出来ない哀れな道化だ』

いくら走つても、いくら頭を振つても、この声から逃げる事は出来なかつた。

まるで曜自身が自分にそう訴えているかのように、意識の奥隅から這い上がってくる。

『さあ、受け入れろ。お前の心の中でのたうち回る、強大な闇を……』

「……いやあ……あつ——！」

謎の声を否定した際に足がもつれ、勢いよく転倒してしまふ。

「え……？」

顔を上げた時にはもう、そこは自分の知る内浦の町ではなかった。

空も、海も、全てが赤黒く染まっている。

『……あなたは何を望んでるの?』

そしてその中に立つ人影が一つ。

「……だ……、だれ……」

『私は……、あなた自身だよ……』

その影が顔を上げ、曜の目に映ったのは、その言葉の通り紛れもない渡辺曜の顔だった。

「私自身って……、どういう……」

『言葉の通りだよ』

曜と向き合うもう一人の曜は、不気味に笑いながら赤く染まった瞳を向けてくる。

『もう気付いてるんでしょ? 誰にも求められてないって』

その声音は、先日からずっと自分に語り掛けてくる声と全く同じものだった。だが徐々にそれは曜の声が変わっていき、更に言葉を連ねてくる。

『だってさ、ずっと私が親友だって思ってた千歌ちゃんに、忘れられちゃったんだよ?』

きつと私、千歌ちゃんにとってその程度の存在だったんだよ』

「……違うよ。……千歌ちゃんはそんな……」

『それが何で分かる?』

「・・・え?」

そう言えば何でなのだろうか。

どうして千歌は、幼い頃からずっと一緒にいた自分の事を忘れてしまったのか。

スクールアイドルになつてからも、衣装を作つたり、ダンスについて相談したりと色々やつてきている。

少なくとも役に立っていないかつた訳ではないのに。

『だって、役に立たないじゃん。私』

「つ・・・?」

考えていた事と全く逆の事を言われて困惑する曜。

『例えばさ、梨子ちゃんがいないとA q o u r sの活動は続けられないでしょ? 作曲

できるのは梨子ちゃんしかいないんだから。他の子も皆それぞれ個性があつて、すつごく輝いてるよね?・・・でもさ』

もう一人の曜は、普段から自分の得意とする人懐っこい笑みを作り、

『私って、なんにもないよね』

まるでそれが真実であると決めつける様に言い放つてきたのだ。

「・・・そ、そんな事ない! だって私、ライブの衣装作つてるし。それに海の家でも料

理作って——」

『それってさ、私である必要なくない?』

「っ……!」

自身の言葉に割り込んできたその声に、思わず押し黙ってしまった。

『確かに私は、衣装を作れるし、歌もそれなりに歌えるし、料理も出来るよ? でもそ

れってさ、他の人よりは出来るっただけでしょ? 私が普段やっていることは、他の皆

だっって少しやればできる様になる事なんだよ』

「……それはっ……」

否定したいのに、全く言葉が出てこない。

でも確かにそうなのだ。千歌や梨子が担当している作詞や作曲はある程度元の感性が必要となってくる。

だが曜が担当している衣装作りの裁縫は、ある程度努力すれば誰だっってできる様になる事なのだ。

衣装デザインは皆で話し合っって決めているので、曜の力ではない。

だから目の前にいる自分が言っっている事は、紛れもない事実。

曜じゃなくなっったっていい。曜がいなくてもA q o u r s は活動が出来るのだ。

『千歌ちゃんが私の事忘れちゃっったのも、きつともう必要ないっって思われちゃっったから

だよ』

もう反論する気力も失われていた。自身の不安を的確に突いてくるその言葉。そして語り掛けてくるのが自分自身という事もあり、もう何を言われてもすんなりと受け止めてしまうようになってしまっているのだ。

そんな状態になってしまった曜を見て、もう一人の曜は優しく言葉を投げかけてきた。

『……いっばい苦しんだよね？ もう疲れたでしょ？ 楽になりなよ……』

果南のように大きく腕を広げる目の前の自分の輪郭が歪んでいく。声音もずっと自分に囁いて来ていた時のものに戻っていた。

『さあ、身を委ねろ。俺はお前を一人にしない。お前を必要としている……』

その時にはもう目の前の少女は渡辺曜の姿ではなく、赤い目の黒い巨人の姿に変貌していた。

ドクンと心臓が跳ね上がった様な感覚の後、曜の瞳から光が消え、巨人に向かって倒れ込む。

『ククク……、フフフハハハハハハハハハハハハ!!』

曜を抱き留めた黒い巨人は、瞳を一層赤く煌かせながらけたましい高笑いをあげた。

「なんで．．．．．、何で曜がつ！」

〈急げ！ もしかしたら他の A q o u r s の連中にも危険が及んでるかもしれないねえ！〉

沼津駅から飛び出した陸が、すっかり暗くなつた町の中を疾走する。

ダークファウストやグランテラとの戦いで負つたダメージは大きく、すぐにはゼロに再変身が出来ずに電車で戻ってくる羽目になつてしまった。

梨子の言葉を信じるのなら、曜も何者かに操られているか、憑りつかれている可能性が高い。

現に梨子を襲つた際の曜の目は赤かつたという。

〈思えば、この数日様子がおかしかつたからな．．．．．〉

「クソツ．．．．．、何で気づかなかつた．．．！」

もしかしたらあの時から曜は苦しんでいたのかもしれない。

だとしたら、それに気付いてあげる事が出来なかった自分は大馬鹿だ。

・・・後悔するのは後だ。まずは曜を見つける事を優先しなければ。移動中に何度も電話を掛けても曜が出る事は無かったので、何かに巻き込まれている事は間違いないだろう。

「・・・・・・・・そうだ」

そうなると他のA q o u r s メンバーの安否も気になる。

無事なら無事で家から出ない事を促すことが出来るので一石二鳥だ。

そう思い、まずは千歌との通話を試みる。内浦に残っていた中では、最も曜と親しい彼女に。

『・・・・・・・・もしもし？ 陸ちゃん？』

まずは彼女が電話に出た事にほっとしつつ、次の確認作業へと移る。

「なあ、今日曜に何かおかしなところなかったか？」

梨子が襲われたというのが昨日の夜。

そうなると今朝陸と話していた曜と、A q o u r s の練習に顔を出した曜はその時には何らかの異変が起きていたはずなのだ。

誠に不甲斐無いながらも陸は全く気が付くことが出来なかったので、彼女達A q o u

rsの面々に聞いてみることにする。

『………。曜……ちゃん？ ああ、さつき練習中に会った子か………』

「……？ で、何かいつもと違うなと思うところなかったか？」

何故か他人行儀な彼女に疑問を覚えつつも質問を投げかける。様子が変だった等の返答は覚悟していたのだが、それ以上に大きな衝撃を持った言葉が電波に乗って陸の耳に届く。

『………いつも何も……、私その曜ちゃんって子と、今日初めて会ったよ？』

「は………？」

思わず、曜の家へと向けていた足を止めてしまう。

『なんか私の事は知ってる感じだったけど………。陸ちゃんのお友達？』

「………何言ってるんだお前………。曜だよ！ 俺等の幼馴染の渡辺曜！」

「………陸ちゃんこそ………、何言ってるの………？」

「つ………！！」

ふざけたりしている訳ではないのはすぐに分かった。本当に、千歌の記憶から渡辺曜と言う少女の事が消えている。

へ………こりやあ………、かなりヤバイ事になってるかもな………

(これも桜内を襲った奴の仕業なのか?)

「間違いないな。恐らく梨子をダークファウストにしたのは陽動。俺等がない間にまんまとやられた訳だ」

（・・・狙いは曜か・・・）

A q o u r s ではなく、曜個人を狙ったという事は、彼女に狙われる理由があるという事。

「クツソ・・・・・・・・。誰か覚えてる奴いねーのかよ！」

千歌との通話を終了させると、今度は果南の携帯に電話を入れる。

何でもいい、何か手がかりが欲しい。

『・・・陸？　どうかしたの？』

「姉ちゃん！　今日曜を最後に見たのっていつ?!」

『・・・曜?』

疑問形で返ってきた果南の声を聞いて、聞く順番を間違った事を悟る。

曜に関する記憶工作が、彼女にまで及んでいる可能性があるのに。

『・・・最後に見たのは・・・、今日練習が終わった時だけど・・・・・・・・』

「っ!!」

本来はこちらの返答が正しいはずなのに何故か驚いてしまう陸。

「・・・・・・・・姉ちゃんは・・・・・・・・、覚えてるのか?　曜の事」

『? 何言つてんのさ陸。曜も千歌も妹みたいなもんだからね。忘れるわけないよ』

果南が曜の事を覚えていた事にほっと安堵するのと同時に、疑問も覚える。

『……なんか焦つてるみたいだけど……、曜に何かあつたの?』

「……いいや、何でもない」

下手に今起こっている事を教えて果南まで巻き込むの訳には行かない。友達思いの彼女なら尚更だ。

陸は通信を切り、再び曜の家へと向けて足を進め始めた。

「……何で姉ちゃんの記事はいじらなかつたんだ……」

〈逆に千歌の記憶だけに細工を仕掛けたと考えるのが妥当だろうな。恐らく、曜を追い詰めるために〉

「何のためにそんな事……」

〈分からねえ。でもだからこそ急がねえといけないだろ〉

「言われるまでもねえ」

ふつふつと怒りが込み上がってくるのが分かる。

千歌と曜の絆は、繋がりには、二人が小さい頃から築き上げてきたものだ。

何の理由でこんな事をしたのかは知らないが、それらを奪う事は絶対に許される事ではない。

「へっ……！！」

曜の家の前に辿り着いた瞬間に、辺りに黒い瘴気が立ち込めます。

「いつは……！」

「……梨子を操つてたのと同じものだな……。ビンゴか——っ！」

何かの気配を察したのか、瞬時に身体の主導権がゼロに切り替わる。

『そこにいる奴！ 隠れてねえで出て来やがれ！！』

ゼロは激昂と共に、渡辺家の屋根の上を指さした。

怪しく、妖艶に光を発する月の下。そこには一つの人影が。

「……曜……」

『……まんまと時間稼ぎに掛かってくれたようだな……。』

曜の姿をしたそいつは、彼女のものではない低い響きで声を発する。

その目は赤く、彼女の身体を支配しているのが曜でない事はすぐに分かった。

『……誰だテメエは……。』

身構えながらゼロが投げかけた問いには答えず、そいつは屋根から飛び降りて悠然と

こちらに歩み寄ってくる。

そして次の瞬間。

『フッ！』

『「っ!!」』

奴は地面を蹴り、曜の身体で攻撃を仕掛けてきた。

研ぎ澄まされた殺意の籠った回し蹴りを屈んで回避し、立ち上がりざまにゼロはアツパーを繰り出そうとするが、

(待てゼロ! 曜が!)

『ぐおっ………』

陸がベリアル力の力を開放し、無理矢理主導権を奪い返した事でその拳は奴に到達する前に停止させられた。

『ッ!』

「がっ………!!」

その隙を突いた右ストレートが鳩尾をクリーンヒットし、尋常ならざる力で吹き飛ばされて陸は家の扉に叩きつけられる。

『……攻撃されているのに手を止めるとはな。そんなにこの娘が大事か』

「っ………、当たり前だろうが!!」

よろよると起き上がり、曜の身体を支配する者に明確な敵意を向ける。

だが奴はそんな陸を嘲る様に鼻を鳴らした。

『はっ……、こんな簡単に壊れてしまうような弱い娘が大切な者か。つくづく人間とは』

愚かな生き物——』

「そんな事あどうでもいいんだよ!!」

『何・・・?』

吠えかかってくる陸を見て、奴は眉を寄せる。

「そいつがどんなに弱くても、俺の大事な人間だつて事は変わらねえ! サツ

サと 曜を返せよ!!」

痛む身体に鞭を打ち、陸は全身で掴みかかろうと突進を仕掛ける。

『くだらん』

だが言葉も陸自身も文字通り一蹴され、重い衝撃と共に地面を転がる事に。流石に人間の身体能力のままでは抗いようがない。

それでも顔を上げた陸に、奴は曜ならば絶対に浮かべる事のない歪んだ笑みを向ける。

『お前の大切な者も、その内に眠る光や闇も、全ては 俺が元の姿を取り戻すための——— 道具だ!』

「 なんだと 」

『さあ! 復活の時だアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

野獣のように両腕を広げて叫びを上げると、周囲に漂っていた瘴気が奴に集約し、膨

れ上がった絶大な量の闇が夜の内浦を黒く照らす。

「なっ………!!」

漆黒の光が空に向かって柱を伸ばし、その中から黒い巨人が姿を現す。

全身黒色の禍々しき姿の巨人で、ウルトラマンに酷似したその肉体には漆黒と深紅のラインが走っている。

何より目を引くのは闇夜でも煌々と赤く光り輝く双眸と、胸に光るY字型の発光体。

『ヴァアアアアアアアアアアアアアアア!!』

邪悪なる暗黒破壊神———ダークザギは、夜の帳が舞い降りた内浦に咆哮を轟かせた。

五十六話 君のいる場所

「………出ないなあ……、陸ちゃん……」

高海家。

千歌は強制的に通話を終了させられた後、何度も陸に対して通話を試みていた。彼に対して聞きたいことがあるからだ。

「………」

千歌は今日ある原因で擦りむいた掌の傷に視線を落とす。

昼間訳の分からない事を言ったと思ったら自分を突き飛ばし、泣きながら走り去って行った渡辺曜と言う少女。

理由は分からないが、先程からこの少女の事が気掛かりで仕方が無いのだ。

そんな矢先、陸は彼女の事を自分達の「幼馴染」だと言った。

自分がおかしいのか、陸がおかしいのかは分からない。けれども、

………そんな……、何で………、千歌ちゃん……。

あの時彼女が自分に見せたあの泣き顔。

あの悲しそうな表情を思い出す度に、何故だか物凄く胸が痛むのだ。

少しでも、今何が起こっているのか知りたい。けれども何回電話を掛けても一向に陸が出る気配はない。

「……こうなつたら果南ちゃ——」

『ヴァアアアアアア!!』

『ぐおっ……!!』

「わあっ!!」

獣のような叫び声の後に地響きが生じ、バランスを崩して尻餅を付いてしまう。

「……何……?」

不思議に思つて窓から外を見やれば、幼馴染の少年が変身するウルトラマンゼロと取っ組み合っている黒い巨人が。

「……ウルトラマン……、なの……?」

ゼロとは正反対の禍々しさを感じる謎の巨人。しかしそれと同時にどこか見覚えのあるような気もする。

「……とにかく避難しないと……、美渡姉えー! 志満——」

『又ウアアアアアアア!!』

「うわわ．．．．．」

再び地面が揺れ、千歌は窓枠に掴まって何とか転ばないように堪える。だが机や棚に置いてあったものは音を立てて床に落下していく。

「っ．．．．．！」

その中の一つに、千歌の意識は全て向けられた。

「．．．．．これって．．．．．」

揺れがおさまった後床に落ちた写真立てを手に取り、しげしげと見つめる。

落下の衝撃でフレームが外れた事により、表の写真に裏にあったもう一枚の写真が露出している。

そこに写っていたのは幼き日の千歌、陸、果南。そして．．．．．、

「．．．．．さっきの．．．．．」

千歌とくつつ付きながら満面の笑みで笑う、銀髪の少女の姿だった。

「っ！」

何故だかともんでもない事をしてしまったような気がして、気付いた時には部屋を飛び出していた。

「ぐっ……！！」

一方的、そうとしか言いようがなかった。

このダークザギと言う闇の巨人、昼間に戦ったダークファウストとは比べものにならない程に強い。

ストロングコロナより力強く、ルナミラクルよりも素早い。

ダークファウスト戦で負ったダメージが無かったとしても、善戦できるかどうかだ。そんな桁違いの強さを誇った化け物が、今日の前にいるのだ。

「……その程度か？ 光の者よ……」

「チツ……、陸。こつちも本気で行くぞ」

「……ああ」

ダークザギと向き合い直したゼロに、四人のウルトラマンの姿が重なっていく。

「俺に限界はねえ！！」

ウルトラマンゼロビヨンドが大地を蹴り、薄紫のオーラを拳に纏う。

『ハアアアア!』

音速に近い速度で繰り出した拳は受け止められてしまったが、そのまま腕を取って顔を突き合わせる。

「おい曜! 返事しろ!!」

頭突きと共に張り上げた声に曜からの答えはない。代わりにダークザギが声を発する。

『無駄だ小僧。既にこの娘の意識は俺の支配下にある』

『・・・梨子の時と言い汚い真似ばかりやがって・・・、そもそも何故お前がこの時空にいる!』

ダークザギは別宇宙で生まれた存在。本来この世界にはいないはずなのだ。

時空を超える能力を持っているという噂も確かに存在するが、それでも何故この宇宙に飛来したのか。

『俺は奴を追ってきただけだ。他の誰でもない、俺自身の復讐の為にな』

『なんだと・・・?』

『だが肉体を失い、実体化もままならない状態だった。・・・そんな時、この娘を利用し

てみたらどうかと言ってくる奴がいてな』

『何………？ そいつは誰だ?!』

『……別次元の者の事などいちいち覚えてはいないが………、確かゼットン星人とか言っていたか』

「っ………! あの野郎が……!」

これまで何度も *Aquours* を襲い、時に善子や果南の身体を乗っ取ってまでリトルスターを奪おうとしてきた宇宙人。

奴が今回の事を仕向け、梨子を、そして曜をこんな目に遭わせていたという事。

『奴の言った通りだったな。この娘の妬み、嫉み、そしてダークフィールドを介して貴様から奪った光は俺の身体を蘇らせるには十分だった!』

『その為に梨子と曜を利用したってのか!』

『言っただろう? 全ては俺が元の姿を取り戻す為の………、道具だと!』

『っ!』

ゆらりと倒れ込んできたかと思うと次の瞬間、一瞬で距離を詰めてきたダークザギは、暗黒の炎を纏った拳を叩き込んでくる。

咄嗟に腕をクロスして打撃は防いだが、拳から噴き出したとんでもない熱量の炎の柱がゼロを吹き飛ばした。

『ぐっ……』

「あちい……、ゼットン並みだな……」

宙返りを決めて体勢は立て直したが、ダークザギは間髪入れずに次の行動に移っていた。

唸り声をあげながら、両腕に黒雷を集中させている。

『オオオオオオオ……！』

いち早く奴のやろうとしている事を察し、こちらでもエネルギーを高める。

『又ウウアアアアアアア！！』

『ワイドビヨンドショット！！』

奴が叩きつける様にして十字に組んだ腕から赤黒い光線——ライトニング・ザギが放たれ、それと同時にゼロも光線を放つが、

『ぐああああああ！！』

数秒と持たずに押し返され、疾走する闇の奔流が胸部を直撃してしまう。

『がっ……はっ……！』

『くそっ……』

曜があるので全力を出せないとはいえ、ゼロビヨンドすらも通用しない圧倒的なまでの力の差。

正直このまま戦っても、勝てる確率は限りなくゼロと言っていていいだろう。

『ぐ……おとおお……』

だがそれを口にしてしまったら終わりの事は、陸もゼロも分かっている。それでは囁を救い出すことが出来ない。

『うおおおとおおとおおお!!』

二の脚に限界まで力を籠め、二人は裂帛の気合と共にダークザギへと突進を仕掛けに行った。

「っ………!!っ………!!」

荒い呼吸で肩を大きく上下させながら、千歌はダークザギと戦う陸とゼロの元を目指して駆けていた。

その手には、先程自室で見つけた四人の少年少女が映る一枚の写真が握られている。きつと自分は知っている。この写真に写る、見ず知らずの少女の事を。

ずっと自分の近くにいて、いつも隣に寄り添ってくれて、陸とはまた違う温かい感情を抱かせてくれた、大切な親友。

それなのに、彼女に関する記憶のみに霧が掛かったように思い出すことが出来ない。それがたまらなく苦しくて辛い。

『ヴァアアアアアアアアアアアアアアア!!』

『がああああああつ・・・!』

「あうっ・・・!」

二体の巨人の戦闘に呼応するかの如く大地が響きをあげ、千歌の身体をいともたやすく転倒させてしまう。

「いたっ・・・!」

盛大に膝を擦り?き、その痛みに顔を顰める。

それと同時に昼間に負った掌の傷、そして心も痛んだ。

きつと彼女の心は、これよりももっと痛かったはずだ。親友に忘れられて、深く傷付いたはずなんだ。

だから自分がこんな痛みに負けてどうする。

「んん・・・!」

千歌は痛みを堪えて立ちあがった後、でもやはり次の地響きによって再び転倒させら

れてしまうのだった。

そんな彼女を、森の木陰から窺う者が一人。

「……………」

千歌の記憶を弄った張本人であるオウガは、何やらもやもやしたものが蟠った心境で千歌の事を見つめていた。

いくら千歌が曜の事を思い出そうとしても、か弱い地球人の力ではベリアル力の力によつて閉ざされた記憶の蓋をこじ開ける事は不可能だ。

(……見ただけで面影を見出すつてだけでも凄い事だよ千歌ちゃん。流星は光の継承者つて感じかな……)

千歌が曜の事を思い出すには、彼女の中に秘められたとある光を呼び覚まさなければ無理だ。

今回オウガがゼットン星人やダークザギに手を貸したのも、全ては彼女の光を目覚めさせるため。

あの光は、絆を糧に輝きを増していくものだから。

だから千歌の記憶に細工をした……。そのはずなのに。

(…………クソツ……。どうしてこんな事を考える…………)

今大切な親友の事を思い出せずに苦しむ千歌の姿を見てみると、たまらなく胸が痛む。

彼女が光の継承者だと分かっただけから、オウガはずっと彼女の事を見てきた。

だからこそなのだろうか。心のどこかで、彼女の苦しむ姿を見たくないと思っている自分がある。

(おい待て？ 辞めろ？ 何を考えてるんだボクは…………?)

ここで千歌の記憶を元に戻すという事は、計画の頓挫を意味する事だ。

彼女が光を発現しなければ、計画は何も進まないというのに。

そうしなければ、自分が真の意味で生きる事は出来ないというのに。

どうせ千歌は後に死ぬことになる。

それはベリアルが全宇宙を支配しようが、ゼロに倒されようが変わらない。ベリアルが復活した時点で、彼女だけは死ぬことが決まっている。

だからそんな彼女に同情、感化されて、計画を頓挫に追い込む義理なんてないというのに。

まるで光の者のように痛むこの心が、せめてこの一時でもと訴えかけてくる。

でもそれはベリアル復活計画自体を破壊に追い込みかねない行動であつて――、

「なんでつ……、なんで思い出せないの?!」

「……………」

それを認知した時には、ほとんど無意識に手を動かしていた。彼女の記憶の蓋を、密閉状態ではなく少し隙間を作つたのだ。

でもそんな事、彼女にとっては蓋を全開にする事に等しい。

「っ!」

その証拠に、彼女は先ほどまでとは全く違う表情で再び走り出して行つてしまった。

「……………何がしたいんだらうね……、ボク……………」

その眩きに微かに陽の気が混じっている事に気付くと、オウガは逃げる様に闇となつて姿を消していった。

『・・・解せんな。なぜそこまでしてこの娘を救おうとする』

ポキポキと首の関節を鳴らしながら、ダークザギは地を舐めるゼロと陸を見降ろす。その赤い双眸には蔑みと言うよりは純粋な疑問が秘められており、攻撃の手を止めて答えを待っていた。

「・・・さつきも言つたろ・・・、そいつが・・・、俺にとって大切な奴だからだ・・・」
『・・・・・・・・・・・・・・・・』

ゼロツインソードを杖代わりにして立ち上がり、ふらつきながらダークザギと対峙する。

「曜を・・・・・・・・、返せ!!」

『そいつは出来ない相談だな。肉体は取り戻したとはいえ、まだ完全復活には至っていない。もうしばらくこの娘は利用させてもらおうぞ』

『そんな身勝手な理由が通用すると思ってるのか?!』
『ならば俺を倒してみろ。それ以外に道はない』

話は終わりだと言わんばかりにダークザギが目の前まで肉薄し、風を切るような音と共に鋭い上段回し蹴りを繰り出す。

それは上体をのけ反らせて回避するが、続く右ストレートが下腹部を捉え、重い衝撃

が全身を貫いた。

——ほつといてよ！

「え………？」

聞き馴染みのある声が脳裏に響き、思わず動きを止める。

——どうせ私の事なんて……、誰も必要としてないんだから！

『……これは………』

——私に居場所なんてないんだよ！

「………曜……？」

ダークザギの攻撃が到達する度に、曜の声が頭に響く。奴の拳に乗って彼女の心が伝わってくる。

『……自我を保っているのか……？』

ダークザギの闇と同調しているのか、それに抗っているのかは分からない。確実に言えるのは、まだ奴の中で曜の意識は残っているという事。

——私のやってる事なんて皆すぐにできるようになる事なんだ！ 私の代

わりなんて誰でもできるんだよ！

「・・・アイツ・・・、こんな事思ってたのか・・・」

誰一人として感付かれる事なく、一人で悩み続けてきた彼女の叫び。

いつの間にかこんなになるまで追い詰められていた、渡辺曜自身の心。

—— どうせ皆すぐに私の事なんかいらないうって ——

「『馬鹿言ってるんじゃないやねえええええええ!!』」

ダークザギの拳を、曜の言葉を全身全霊で受け止め、その上で殴り返して全てを否定する。

『何一人で何もかも決めつけてんだ!! この前この馬鹿に一人で抱え込むなって言ったのはどこのどいつだ!!』

『ぐおっ・・・』

肘打ちが鳩尾を捉え、黒い巨人が苦しそうな呻き声を漏らす。

『居場所なんていつでも見つけられる・・・、いくらでもあるだろうがアアアアア!!』

身を翻して今度は裏拳を叩き込む。

「確かにお前がいつもしてる事は、練習すりゃあ誰でもできる事かも知れねえ! けどお前言ってたよな!! それが楽しいんだって!」

懐に潜り込んで、百裂ラツシユを繰り出す。

「大体何で今いる場所に、自分がいる意味とか資格を求める必要があるんだよ!!」
 ありったけの力と、ありったけの想いを込めて、まるで子供同士の喧嘩のように、顔
 面へと拳を突き出す。

「ここにいたいから居る! それで十分だよ!!」

『があああああ!!』

ゼロの腕から光の奔流が放出され、ダークザギは地面を抉りながら吹き飛んで行く。

「……それに、お前にしかできない事あるだよ……」

初めて地面を転がった黒い巨人を見据えると、その中の少女に向かって言葉を投げか
 ける。

「……朝っぱらから俺を叩き起こせる人間は……、お前だけだ……」

「……り……く……」

よろよろと起き上がるダークザギから漏れる、明らかに奴の者ではないか細い声。

「曜……!」

今度は幻聴のように脳に響いた不明瞭なものではない。弱々しいながらも、ハッキリ
 と曜が口にした言葉。

思いが通じ、ほっと心弛びする陸とゼロ。弛緩した空気が舞い降りかけ、

それを、邪悪なる暗黒破壊神は許さなかった。

『アアアアアアアアアアア!!』

「『あがあああああああ!』」

油断した一瞬の隙にライトニング・ザギを放たれ、防御も間に合わず直撃してしまう。

『ぐ………あ………』

膝をつくゼロに、ダークザギはゆつくりと歩み寄ってくる。

『……まさか意識を保っていたとは驚いた……。だが、だからと言ってこの俺が倒せるわけではない』

手を翳すと、そこに禍々しい暗黒のオーラが集約していく。

『………終わりだ』

そしてそれが放たれる寸前だった。

「曜ちやあああああ——んっ!!」

突然張り上げられたあどけなさを残す叫び声。

親しみを覚えるその響きに引き付けられ、事前と声のした方へ流した視線の先には。

「千歌!!」 記憶が戻ったのか?!

『……だが………、何だあの光は………』

「ゴメン……。ゴメンね曜ちゃん!!」 千歌……、大切な友達の事……」

ダークザギに取り込まれた曜に謝り、涙を流す千歌の身体からは、眩い光が溢れ出し

ていた。

「曜ちゃん……、曜ちゃんなんですよ!?!」

リトルスターとは違う。温かくて力強い。まるで千歌の存在そのものを現しているような輝き。

そしてそれを視界に定めた瞬間、ダークザギの様子が一変する。

『貴様……、その光はアアアアアア!?!』

奴は憎しみや怒りを全身から放つと同時に、ゼロに向けていた腕を千歌へと向けた。

「だっ……めえ……!」

奴の中で曜が必死に抵抗するが、所詮はか弱い地球人の子供。ウルトラマンをも凌駕する闇の巨人に抗える訳がない。

非情にも、千歌目掛けて漆黒の光弾が放たれてしまう。

『千歌アア!!』

そこからはスローモーションのように時間が流れていた気がする。

千歌に死の危険が迫っているのを悟った陸とゼロは、無理矢理四肢を動かして光弾と千歌の間に割って入り、そして。

『あ……がああ……』

自身が盾となって光弾を受け止めたゼロがそのまま地面に倒れ伏し、遂にその瞳から

輝きが消える。

「陸ちゃん！ ゼロちゃん!!」

千歌の呼びかけにもゼロから返答が帰ってくることはなく、死んでしまったかのよう
にピクリとも動かない。

『愚かな……』

今度は明確な蔑みを滲ませた声音をゼロに吐き掛けるダークザギ。

『……そんなに死にたいのなら……、お望み通り先に死なせてやる』

「だめええ!!」

叫ぶ千歌には目もくれず、暗黒の光は徐々に膨れ上がっていく。

「つ……!!」

もうダメだ。遠巻きから戦いを見ていた人間達も思わず目を瞑ったその刹那――

『グアアアアアアアアアアアア!!』

突然空に昇った光の柱に、ダークザギが吹き飛ばされた。

燦然と煌く銀色の光が花開く蕾のように広がり、内浦に舞い降りた夜の帳を切り裂い

ていく。

そしてそこから現れた、銀色の巨人。

『つ……！ 貴様はアアアアアア！』

愕然としつつも、ダークザギは確かな殺意をもってその巨人を睨みつけた。

『シユアー！』

『グ……、ヌウウアアアアアアアア！！』

銀と黒の巨人は同時に駆け出し、光と闇を衝突させる。

『ハアアアー！』

銀色の巨人は軽快なフットワークでダークザギの猛攻を回避し、うまく懐に潜り込もうとするが奴にも隙が無い。

『ヴアアアアアアアアー！』

『アア！！』

ようやく一発叩き込んだものの大した効果は見受けられず、逆にカウンターを喰らって悶えてしまう。

『フハハ！ どうやらまだ不完全な状態らしいな……。丁度いい、今この場で貴様の光を喰らいつくして完全に復活を遂げてくれる！』

『シユアアアアアアアアアア！！』

ダークザギが巨人の胸に手を当てると、途端に巨人はもがき苦しみます。見れば奴の腕から光が吸収されているのだ。

『グウ………、ンンン………、シエアアアア！』

『ヴヴ！！』

巨人の胸にあるY字の発光器官が強く光り輝き、腕を払うと同時にダークザギを三、四歩後退させる。

『シヤアアア！』

『グウウ！！』

巨人の腕から光の帯が伸び、しなりを利かせながらダークザギの胸部へと突き刺さった。

それを鞭のように引き戻すと光が収縮し、ダークザギの体内から救出した曜が巨人の掌に乗る。

『シユアアアア………』

気を失っている曜を地面に降ろすと、自分の役目は終わったといった瞳をゼロに向け、自らに残ったエネルギーをゼロに譲渡していく。

『うう………』

ゼロの双眸とカラータイマーに再び光が宿り、身体がぼやけ始めた銀色の巨人を視界

に映す。

「・・・・・・・・何だあれ・・・・？」

『つ・・・・・・・・！ ウルトラマンネクサス・・・・・・・・！』

『フウウウ・・・・・・・・』

ゼロに対し巨人——ウルトラマンネクサスは後を託すとも言うように頷くと、光の粒子となつて大気に溶け込んでいった。

「・・・・・・・・え・・・・？」

消えていくネクサスにぼんやりと親近感を抱いたのは、陸だけだった。

五十七話 想いを一つに

「曜ちゃん！ 曜ちゃん!!」

「ふう……ん？ 千歌ちゃん……?」

呼び声に反応して瞼を開くと、両目に大量の涙を溜めて自分の顔を覗く幼馴染の女の子の顔があつた。

「つ……!」

曜が目を覚ました事に気が付くと、何か言うよりも早く千歌は抱き付いてきた。

「ゴメン……、ゴメンね……」

曜の胸に顔を埋めて嗚咽を漏らす彼女を見れば、如何に自分の事を心配してくれていたのか分かる。

千歌が自分の事を忘れていたのは、きつと第三者による介入があつたから。今になつてそう気付く、自然の内に自らの目元にも涙が込み上がってくる。

陸も千歌も、本当に自分の事を大事に思ってくれていた。

目先の事で冷静さを欠き、まんまとダークザギの思惑通りに自分を追い詰め、誰から

も必要とされていないと勝手に思い込んでいたのは曜自身だった。

(・・・私馬鹿だ・・・、バカ曜だ・・・)

曜も千歌の背後に手を回し、幼い頃からずっと触れてきた親友の温かさを改めて全身で感じる。

夜空の下で、二人の少女が子供の様に泣き声を響かせる中、

「『がはっ・・・!!』」

ダークザギと戦っていたゼロが吹き飛ばされ、轟音と共に大地を揺らした。

カラータイマーは再び点滅を始め、ネクサスから受け渡されたエネルギーも残り少ない事を如実に物語っている。

決してゼロが弱い訳ではない。それほどまでにダークザギが強いのだ。

「陸ちゃん！ ゼロちゃん！」

『お前等・・・、ここは危険だ、さっさと逃げろ!!』

千歌と曜を庇うようにダークザギの前に立ちふさがると、自分達の逃げる時間を稼ぐための足止めなのか、掴みかかってそのまま硬直状態に入る。

「陸！」

「いいから逃げろ!! いつまで持つか分かんねえぞ!!」

「でもっ・・・!!」

ゼロが死ねば、当然一体化している少年も……。

「そんな……、やだよ……、陸……」

『あつ……、があ……』

「……ぐう……」

もはや立ち上がるエネルギーも残っていないのか、肩で息をしたままゼロは動けないでいる。

それでもダークザギが止まることはなく、遂に両腕を十字に組もうと振りかぶってしまつた。

「陸——ツ!!」

ほとんど悲鳴に近い声をあげた。

もうあの攻撃を防ぐのが不可能なことぐらい分かっている。

それでも諦めたくなかった。希望を捨てたくなかった。

大好きな彼を、失うだなんて思いたくなかった。

そんな曜の想いに答える様に、

「つ……!」

「曜……ちゃん……?」

胸が光を発する。

同時に身体が熱くなるのを感じ、思わず目を見開いた。

『っ………!!』

胸から溢れる青い光のエネルギーを感じたのか、二体の巨人はそろって光の発生源である曜に視線を流す。

『……あれは……』

「………リトルスター……」

突然の事に呆気にとられる陸、ゼロ、ダークザギの前でリトルスターは曜の胸から分離し、

『っー!』

赤く点滅を続けるゼロのカラータイマーへと、吸い寄せられていった。

『デュワ!』

——希望を捨てず、想いを繋ぐ力——ウルトラマンダイナ。曜のリトルスターが入り込み、白地だったカプセルにウルトラマンダイナの姿が映し出される。

だが今回は以前とは少し違った。

リトルスターが入り込んだ後もダイナカプセルは発光を続け、更には以前花丸のリトルスターで起動したコスモスカプセルまでもが光を放つ。

『これは……！！ 陸！ 今すぐネオ・フュージョンライズだ！ コスモスカプセルとダイナカプセルを使い！』

「ああ、分かった！」

目の前で浮遊する二つのカプセルを手に取り、同時にスイッチを入れる。

『ダイナ！ コスモス！』

『デュワー！ ハアア！』

両脇に現れたウルトラマンダイナとウルトラマンコスモスが左腕を掲げる。

二つのカプセルをナツクルに装填し、ゼロビヨンドになる変身する時と同じようにゼロアイをライザーに装着し、カプセルをリード。

「ネオ・フュージョンライズ！ エフェクトサーガ！」

ザギをいともたやすく吹き飛ばす。

「……何……、あれ……」

「……ゼロちゃんなの……?」

収束した光の根元からその姿を現した巨人に、見た者全員が息を飲んだという。

ゼロ、オーブ、ジード、ネクサス。これまでに出現したウルトラマンとはまるで違う光の巨人。

光そのものを擬人化したかの如き神々しさと、結晶体の様な肉体の内部からは、神秘的な光が溢れ出ている。

「……なんだこれ……、力が……!」

『奇跡の結晶ってやつだ。……本当に、人間の力は予想もつかないな……』

ゼロ、ダイナ、コスモスの三人のウルトラマンの力と、ネクサスの光。そして希望を捨てない人間の想いが掛け合わさり、一つになった奇跡の巨人。ウルトラマンサーガ。

『ハアア!!』

サーガが駆け出したと思った次の瞬間、その姿は既に視認できなくなっていた。

そして、

『サアアアアアガッ!!』

一瞬でダークザギの背後に回り込んだサーガが、左腕のサーガブレスから発生させた

光の刃を縦一直線に振り下ろす。

『ゴアアアアアアア!!』

猛々しい悲鳴を上げたダークザギが反撃に裏拳を繰り出す。サーガの姿はまたもや消えていた。

『ダエエエヤツ!!』

『アアアアアアアアアアアアアアアア!!』

拳が、蹴りが、斬撃が。

死角から繰り出される攻撃に、暗黒破壊神はただただ翻弄されている。

反撃をしようにもサーガは瞬間移動に近しい速度で動くため、全く攻撃が命中しない。

そしてサーガの攻撃は、どれも協力無比だ。

先程ゼロに見せた優勢が嘘のように、ダークザギは圧倒的に押されていた。

サーガエフェクトという、サーガのみに秘められた力が、これを可能としているのだ。

『又ウウアアアアアアアアアア!!』

『オオオオオオオオ!!』

少し離れた場所に出現した巨人目掛けてライトニング・ザギを放出するが、サーガは胸に発生した光の球を両腕で押し出して放ち、漆黒の光線を全て消滅させたうえでダーク

クザギの胸部を直撃させる。

『サアアアガ!!』

吹っ飛んだところに、追撃の光輪を三つ同時に解き放つ。光輪はそれぞれ別方向から殺到していくが、

『グウウウウウウ……、ハアア!!』

体勢を立て直したダークザギはそれを両腕で薙ぎ払い、星々が照らす夜空にその漆黒の身体を飛び上がらせた。

『フツ!!』

サーガもそれを追って飛翔する。

『サアアアアアガ!!』

『ヌオアアアアア!!』

空中で二体の巨人が激突する度に光が煌き、闇が迸る。

音速で空を疾走する光と闇の巨人の戦闘により、夜空の至るところで花火のような爆発音が轟き、その度に大地は震えた。

『ハアア!!』

『ダアア!!』

サーガが攻撃を繰り返せばダークザギがそれを相殺し、逆にダークザギが攻撃をすれ

ばサーガがそれを打ち消す。

『オオオオオオ！』

『又アアアア！！』

しばらくは終わりの見えない泥沼の様相を呈した空中戦が繰り広げられたが、サーガの放ったムーンサルトキックがダークザギを地面に叩き落した事で幕を閉じた。

『フウウウウウウウウ！！』

『グオオオオオオオオ！！』

なおもサーガの猛攻は止まらず、起き上がったダークザギの懐に一瞬で肉薄すると、右足を渾身の力で振り上げて漆黒の身体を再び上空へと蹴り飛ばす。

『サアアガ！』

自身も飛び上がってその後を追うと、連続ラッシュを絶え間なく叩き込んで更に、更に上空へと昇っていく。

アクロバティックな動きで、足技を主体とした攻撃を流れるように繰り出す。

やがて二体の巨人は大気圏を超え、宇宙空間に到達した。

『アアアアア！！』

ダークザギは強引に絶え間のない連続攻撃を振り払うと、サーガの胸部を蹴飛ばし、その勢いを利用して大きく距離を取る。

エナジーコアを粉碎され、理性のない獣のような断末魔をあげながら、邪悪なる暗黒破壊神は大爆発を起こした。

「やったああああああ!!」

遙か上空でダークザギの断末魔と共に轟いた大爆発を見上げ、千歌は喜びの声をあげた。

「曜ちゃん！ 陸ちゃん達勝ったんだよ！」

ぴよこぴよこと跳ね、興奮気味に曜に駆け寄るが、彼女の表情は浮かないままだった。
「……………その……………、ゴメンね……………、陸にも。千歌ちゃんにも心配かけて……………」

「……………何言ってるの」

千歌はそんな曜に優しく微笑みかけると、先程のように優しく抱きしめる。

「……………私も陸ちゃんも、曜ちゃんがあんなになっちゃうまで気付いてあげられな

「かつたんだから……。曜ちゃんだけが悪い訳じゃないよ」
「……………うん……………」

曜もまた、改めて親友の身体を抱きしめた。

そしてそれを陰から覗く黒い影。

「……………ぐう……………まさかダークザギを破るとは……………」

「またもや計画を予想外の人間の力に叩き潰され、ゼットン星人は血眼で抱き合う二人の少女を睨みつけていた。」

「こうなれば……………！ ゼロへの見せしめにあの二人を——」

銃を構えたその刹那から、言葉が続かなかった。

「あ……………？」

掠れて音にならない声と、胸に走った激痛。

視線を落とせば、自分の胸を闇を纏った腕が貫いていた。

「……………！ 貴様は……………」

言い終わる前にゼットン星人は力尽き、その身体はドロドロに溶けて地面に浸透して

いく。

「.....」

紅く光る眼が、暗闇の中で瞬いていた。

今更だけど、やっと分かった。

ずっと一人なんかじゃなかった。素振りに何か見せなくても、私の事を思ってくれている人はちゃんといた。

二人は似ている。

一度決めた事にはどこまでも真っ直ぐで、友達想いで、不思議と人を引き寄せる力がある。

二人は言ってくれた。

自分達の隣が、私の居場所なんだって。

そうか、そうだった。

二人のこういうところを、私は好きになったんだ。

—— 想いよひとつになれ

ステージ上で踊る八人の少女。

その中の二人、千歌と曜の踊りは、曜が千歌に合わせるものではなくなっていた。

へ………しつかし、アイツ等もぶっ飛んだ行動に出たもんだな………

(……ああ……。まさか一から振り付けを作りなおすとはな………)

千歌が曜にした提案は、二人の振り付けは以前千歌と梨子がやってたものではなく、新たに千歌と曜の振り付けを作り直そうと言うものだった。

(まあでも、アイツらしいよな………)

千歌がそう提案したのは訳がある。

彼女がスクールアイドルを始めたのは、皆で一緒に輝く為。千歌にとって輝く事とは

自分一人じゃなくて、誰かと手を取り合い、皆で一緒に輝く事。

千歌や曜に始まるA q o u r sの皆。普通の人たちが集まって、一人ではとても作れない、大きな輝きを作る。

その輝きが、ステージ上で歌う彼女達を通して聴いている皆に広がっていく。

それが千歌がやりたかった事。

スクールアイドルの中に見つけた、彼女なりの輝き。

〈梨子もそろそろかね?〉

(多分な。向こうでスケジュール表チラ見したけど、こつちとほぼ同時だったし)

離れていても想いは伝わる。

それを表現するのは曲の歌詞だけでなく、それを歌う彼女達の右腕につけられたシユシユ。これは梨子が東京から送ってきたものだという。

きっと梨子も同じものを付けてピアノを演奏しているのだろう。

「.....」

ふと陸は、左腕についているシユシユではないものに視線を落とした。

光沢を放つ銀色のブレスレットと、その中にはめ込まれた青色のクリスタル。

サーガへの変身が解除された後、気付いたら腕に装着されていたのだ。

これはウルティメイトブレスレットと言う代物で、先日現れたウルトラマンネクサス

の本来の姿、ウルトラマンノアから授かった物らしい。

レゾリウム光線を受け止めた影響で長らく壊れていたが、サーガエフェクトの力で修復されたとかそんな。その代わりにサーガエフェクトは消失し、単体でサーガには変身できなくなったが。

へしかし……、何故ネクサスがこの世界に……

曜を救出し、ゼロに光を分け与えたウルトラマンネクサス。

彼もダークザギ同様。本来この宇宙とは関わりのない存在らしいのだが。それがどうして突然自分達の前に現れたのか。

(お前なんか知らねーの？ ネクサスについて)

へネクサスは他のウルトラマンとの関りが薄くてな……、俺も詳しくは知らねーんだわ(そうか……)

以前花丸に見せてもらった太平風土記。

アレに記されていた銀色の巨人がネクサスと言う可能性もあるし、実は全く関係なく。今回たまたまこの宇宙に来ていただけと言う可能性もある。

へあーもう！ 考えたら頭痛くなってきた！ この事は後だ後！

(だな)

考察するにも今は情報が少ない。

答えの出せない問題で悩むよりは、今は目の前で歌う少女達の輝きを目に焼き付けておくでしょう。

五十八話 墮天使の遊戯

東京某所。

夜による暗闇に包まれ、閑散とした街の中、二人の男女が向き合っていた。

「じゃあね」

「ああ、おやすみ」

別れの挨拶を済まして去ろうとする男だが、女が服の袖を掴んで離そうとしない。

「何だよ？」

女は答えなかったが、代わりに目を瞑って背伸びをし、男に唇を向けてきた。

言うまでもないが、この二人は恋人同士である。

「.....」

男は照れくさそうに頬を掻きながらも、自らも女へ唇を近づけていく。

静けさの中に街灯の灯りが溶け込み、二人の時間を祝福するような幻想的な情景を生み出す。

そして二つの唇が重なるうとした時、

「きやあああああああああ!!」

悲鳴と共に、女の姿が消えた。

「え・・・?」

男は一瞬反応が遅れたが、すぐに何が起きたかを理解する。

「オイ! 手を伸ばせ!」

女は、突然彼女の真下に発生した巨大な蟻地獄に吸い込まれていた。

男は必死に自分の彼女へと手を伸ばすが、もはや手の届かない程深くまで女は飲み込まれてしまっていた。

「~~~~~」

女が完全に飲み込まれると共に蟻地獄は消滅し、何事もなかったかのような静寂が舞い降りる。

「うわああ~~~~~ツ!」

その静寂を切り裂く慟哭が響くが、彼女が戻ってくることはなかったという。

「起きろ——ッ!!」

「ぐふっ……!!」

突然腹部に走った激痛によって意識が急激に覚醒し、陸は悶えながらベッドから転げ落ちた。

「にひひー♪ おっはヨーソロー! 陸——」

仰向けに倒れた陸の視界に、憎たらしく笑う曜の顔が映り込む。

「お前……、もうちつと優しく起こせんのか……」

ダークザギとの一軒以降、「俺を叩き起こせるのはお前だけだ」とか言ったせいで曜は調子に乗り、夏休み中の今でも練習がある日はこうして起こしに来るようになった。

彼女がああいつてもらえて嬉しかったのは分かるが、陸としてはいい迷惑である。

(……殴るはないだろ殴るは。ゼロも止めてくれよ)

〈早朝寝起きドツキリ大成功——♪ だとよ〉

(グルかテメエ)

ゼロは元々お調子者なところがある為、A q o u r s の皆と仲良くなった今、こうし

て悪乗りする事も多くなってきた。

「……………ん？」

ふと窓の外に視線を流すが、異様に暗い。

疑問に思つて時計を確認すると何と三時半。いつもならまだ夢の中である。

それに今日は練習も休み。時間の事も相まって、曜が起こしに来るはずは無いのだが……………。

「おいよ……………」

ここで更に違和感を覚える陸。

陸と曜以外にも人の気配がする。

だが別段怪しい訳ではなく、むしろ親しみすら覚える感覚。

「……………何やってんだお前……………」

気配の正体は、長く艶のあるダークブルーの髪と、それをまとめたシニヨンが特徴の少女。

つまりは、津島善子だった。

「お目覚めのようね」

「なんか善子ちゃん。陸に用があるって言つてたけど」

「……………何の用だ」

今気づいたが、善子は東京遠征の時と同じ服装だった。しかもやけに大荷物である。「クック……、決戦の時は来たわよりトルデーモン。今こそ混沌渦巻く魔都に降り立ち、私の欲するグリモワールをこの手に掴む時！ つまり!!」

朝っぱら、しかも人の家だというのに、善子は大声を張り上げて陸を指さした。

「夏」
「!!」

「……つ……、かれた……」

すし詰め状態だった満員電車からよろめきながら脱出し、陸は盛大にため息をつく。

「この程度で音を上げてるんじゃないやまだまだねりトルデーモン。本当に辛いのはここからよ。」

善子は毎回来ているらしいので慣れたものだが、田舎の内浦故にガラガラの電車しか

知らなかった陸は既に心身ともに大疲弊していた。

「……相変わらず満員電車は凄まじいな……、やはり精神の修行にはもつてこいだ」

ゼロですらこれである。やはり都会は恐ろしい。

だが善子の言葉通り真に辛いのはここからであつた。川の急流のような人の波に流されるようにして改札を抜け、陽炎に揺れる逆三角推の建物を眼前に臨む行列の中へと突入した。

「……で、よう津島。何故に俺はここに召喚されたんだ」

どうしてその手の物に興味が薄く、何か食いつくようなネタもない陸が連れてこられたのか。

「決まつてるでしょ？ 荷物持ちよ」

「は？」

「今回は欲しい本が多いのよ。私一人じゃ持てないからアンタを呼んだって訳。ウルトラマンなら造作もない事でしょう？ まあ、一応それ以外にも理由はあるけど」

どうしてこう、自分の身の周りにいる女子は皆陸の扱いが雑なのだろうか。

来てしまった以上帰ると言い出すつもりはないが、だとしても少し考えて欲しいものだ。

「はあ……」

今一度大きく溜息をついてから、目の前に広がる地獄絵図を見据えた。

狩獵者のように目を光らせる者、コスプレイヤーを発見しては恍惚とした表情を浮かべる者、あまりの暑さに膝を折る者、トイレが間に合わなくなり大惨事を起こしてしまつた者。色々いる。

ここに集結した者は皆何かを掴むために戦う覚悟を胸に秘めた者達。

気力の尽きた者や準備を怠つた者は淘汰され、光を拝むことのないまま力尽きる。

この困難を乗り越えた強者のみが、その先に広がる世界へと足を踏み入れる事が許されるのだ。

強い一つの信念のもとに戦いに身を投じるこの者達は、大切なものを守るためにウルトラマンとして戦う陸とも通ずるものがある。

「さあ！ ラグナロクの開戦よ！！」

善子の声の後に会場のゲートが解放され、

「「「うおおおおおおおッ！！！！」」」

戦士たちは、一齐にその中へと飛び込んで行った。

「・・・エツ・・・ロ・・・」

善子が弾丸のように雑踏の中に突撃していつてしまった為、彼女の買物物が終わるまでちよつとその辺の本にでも目を通そうと手に取ったはよかつたのだが。

予想を遥かに超えるその過激な内容に、陸は軽い戦慄を覚えることになった。

〈度し難い異物だな・・・〉

ゼロも首を捻っていた。

こんな本が、学校の体育館の何倍もの面積を誇るだだっ広い空間に所狭しと並べられた長机の上に陳列している。

いずれも陸がこれまでの人生で目にした事も無い体裁の薄い本であった。そして表紙は過激の一言である。

〈ダイヤの反応が見てみたいもんだ。アイツぜってー顔真っ赤にすんぞ〉

きつと彼女がここにいれば、「こっ・・・、こんな破廉恥な・・・！ ブツブツですわ!!」という事間違いなしだろう。

かくいう陸も思春期真つ盛りだ。こういうエロティックな創作物に興味がないと言つたら嘘になるが、ゼロに何を言われるか分かつたものではないので平静を保つことにする。

「・・・ん？」

オタクの群れの中に、陸は見知つた顔を発見する。

砂漠に咲いた一輪の花。とても言おうか。

周囲の人々とは明らかに違つた華やかな雰囲気を纏い、所作一つ一つが様になつていく長髪の少女。

紫檀色の髪とつり上がった黄色い目が何よりの特徴だ。

「・・・梨子じゃねーか。何でこんな所にいんだ？」

「知らね。本人に聞きやわかるんじゃないの？ おい桜う——」

梨子に声を掛けようとした陸だが、彼女が満足気に抱えていた代物を見て思わず硬直する。

彼女に腕の中には本がある。当たり前だろう。同人誌即売会なのだから。

問題はその表紙だ。

それは俗に言う壁ドンと顎クイが組み合わさつたものであつた。まあ梨子も女子だし、そういうものに憧れがあつても何ら不思議ではないのだが・・・。

その組み合わせが、女の子と女の子なのでだ。

意地悪く笑う少女が、気弱そうな少女に壁ドンをしながら顎クイを執行していると言
うもの。

いわゆる百合本と言うやつである。

「ふっふっふん♪」

梨子はご機嫌そうに鼻歌を歌いながら、その本を手に持っていた紙袋に入れた。

その中にも、同じような本が大量に入っていて――

………何も………見なかったZ E。

善子がお目当ての代物を買い揃えた後、二人は昼食にハンバーガーのチェーン店に入っていた。

そこで善子から、何か不穏な噂があるとの話が。

「巨大蟻地獄？」

「そうよ。最近人が突然その蟻地獄に飲み込まれて帰って来なくなるって事件が連発してるらしいの」

「……なんだそれ。都市伝説じゃないよな」

「ちゃんとニュースにもなってるわよ。防犯カメラにその瞬間が映ったんだって」

そう言つて善子は自身のスマホの画面を見せつけてきた。

そこには確かに突然足元に出現した蟻地獄に飲み込まれる女性と、その彼氏らしき男性が慌てている映像が映っていた。

被害者は何故か血液型がO型の女性に集中しているそうだ。

「ゼロは何か心当たりないの？ ウルトラマンなんでしょ？」

『これは……』

「何か知ってるのか」

ウルティメイトブレスレットが修復された事で、ゼロはそれを媒介に会話する事が可能になり、いちいち陸の身体を借りて話すというまどろっこしい真似はしなくて済むようになった。

まあ、だからと言ってこういう人の目がある場所でやたらめつたら声を出すのは辞め

て欲しいが。

『……似たような話を聞いたことはあるが、流石にヤプールが関わつてるとは思えないしな……』

「やぶ……、なによそれ？」

『異次元人ヤプール。詳しい説明は省くが……、まあろくでもない奴だとだけ言つておく』

それだけ言われても全く分からないのだが、いつもの事なのでスルーしておく。

「……お前、まさかこのために俺の事連れてきたのか？」

「仕方ないでしょ。私O型なんだから」

「ああ、そゆこと……」

言われてようやく納得する。単に荷物持ちだけだったら、彼女と親しい花丸達でも良かっただろう。それでも陸を連れてきたのは方が一の事があつてはいけないから。

正直善子はA q o u r s の中で最も関りが薄く、陸が本来あの部活にいない男子いう事もあつてあまり快く思われていないものかと思つていたが、多少は頼りにされているらしい。

「……それならさつさと帰ろうぜ。面倒事は御免だ」

「正義のヒーローのセリフじゃないわね……」

『クク．．．．．見つけたぞウルトラマンゼロ．．．』

禍々しいまだら模様が果てしなく続く、異次元空間の中に響く不気味な声音。

『キュキュリユリイイイイイ!!』

『こいつも十分に成長した。今こそ憎きウルトラマンへの復讐を果たす時。貴様はその最初の犠牲者だ』

異次元空間を別の空間と結合させたことで巨大な揺れが発生する。

そんな中脳裏に浮かぶのは、自身の主である者の姿。

『もうじきマイナスエネルギーも集まり、貴方は御復活なされるでしょう。その時は必ずや私がウルトラマンゼロの首を差し出すと誓います——』

徐々に、次なる犠牲者たちはこの場所に危険が潜んでいるとも知らずに向かってきている。

『——我が偉大なる主．．．．．、ヤプール様』

「クック・・・、実に充実した一日だったわ。褒めて使わす！」

「そりやどーも」

善子の購入した大量の本やよく分からない装飾品の入った袋を両腕から下げ、陸は地下鉄に揺られていた。

帰りは行きと違って空いており、車両の中を見渡せる程度には余裕が出来ていた。

「・・・本は分かるとして・・・、お前このコスプレアイテム何に使うんだよ」
「決まってるでしょ？ 生放送よ」

「・・・ああ、それまだやってたのかお前・・・」

もう堕天使を卒業したがついていた過去の善子はいなくなってしまったらしい。

「それにしてもアンタ。せっかく東京来たのに何も買わないってどういう事よ」

「・・・まあ、今回はお前の付き添いだったからな」

實際は善子の話を聞いて以降、いつ出現するかも分からない蟻地獄に対し常に警戒の糸を張っていた為、そんな余裕はなかったというのが事実だ。

まあ陸自身何か欲しいものがあつたり、A q o u r s の連中にお土産を買つたりしてやる義理はないので別にいいのだが。

「リトルデーモンの集いはいいわよ。アンタも一度見て見たらいいわ」

生放送の醍醐味とか言う全く理解できない事を延々と語る善子は無視し、窓の外へと視線を移す。

当然地下鉄なので映るのはコンクリートの壁ばかり。ただただ黒だけの光景が横へ横へと流れていく。

とは言え地元で地下鉄が走っていない陸にとっては結構珍しいものであり、それを眺めているだけで暇は潰せるものだ。

だがそんな景色が唐突に一変する。

「え．．．．．？」

黒一色だった窓枠の外は、赤や緑が混ざり合うようにして不気味な配色を彩っている空間へと変わる。

〈何だこれは．．．？〉

刹那、車体が大きく揺れた。

「わあああああああッ!!」

車内に響く乗客の悲鳴。陸はバランスをよろめいた善子を抱き寄せると、瞬時に車両の隅へと移つて揺れを堪える体勢に入る。

「大丈夫か? 津島」

「・・・う、うん。ありが——とお!!」

さらに車体が大きく揺れたと思つた次の瞬間、轟音と共に陸達の乗っている車両の方の車両が巨大な何かによつて叩き潰されるのが連結地点の通路から見えた。

それに対して乗客が更なる悲鳴を上げる中、連結部の穴から中を覗いてくる巨大な目一つ。

「怪獣!!」

「ちい・・・、よりにもよつてこんな時に・・・」

車内は人目が多い為、ここではゼロに変身することは出来ない。目の前に怪獣がいるというのに、何というもどかしさだ。

陸がその事に対し歯噛みをすると同時に、怪獣は鋭い牙のついた口を向けてきた。

そしてそこから霧状の白い液体が噴出される。

『くっ・・・、ウルトラゼロデیفエンダー!!』

咄嗟にゼロが主導権を奪い取り、左腕のウルティメイトブレスレットに触れる。

すると光がゼロの右腕に集約していき、盾の形となった。

『善子！ 動くなよ！』

自身と善子を盾の裏に隠し、謎の液体の襲撃を防ぐ。車両の隅に居座っていた事は不幸中の幸いだった。これならば盾と壁で全方位をカバーすることが出来る。

ズドン。と、巨大な揺れを最後に乗客の悲鳴と霧が収まり、主導権が戻ってきた陸は顔を上げ、何か考えるよりも早く善子の両目を覆った。

「ちよ!! 何よいきなり!!」

「………いいから。絶対目え開けるなよ………」

今の車内を支配した光景は、彼女にはショッキング過ぎる。見てしまったら彼女の精神がどうなってしまうか分からない。

「とにかく外に出るぞ。津島、しっかり俺に掴まってる。目は絶対に開けるな」

「……う、うん……」

善子が首肯してのを見て、陸は足を車両の外へと進める。

二人の足元に転がるのは、骨。

今の霧の影響で、陸と善子を覗く乗客全員は白骨のみを残して消滅してしまっただ。だ。

へ………まさか……

そんな地獄絵図の中を注意しながら進み、二人は車両の外へと脱出した。

五十九話 自分でいられる強さ

「なんだ・・・？ こん・・・」

謎の怪物によって破壊された電車から脱出した陸と善子は、地下空間に広がる謎の空洞に辿り着いた。

この場所のみをくり抜いたようなドーム状になっており、かなり広い。

『気を付けろよ二人共。なにか禍々しい気配を感じる』

「っ・・・」

ぶるりと善子の身体が震えるのが分かった。

最近この手の事に慣れてきた陸とは違い、善子は一介の女子高生だ。

突然怪物に襲われ、その上そんな事を言われたら怯えるのは当たり前だ。

「大丈夫か？」

「え？ ええ。・・・まさかこの墮天使ヨハネがこの程度の事で恐れ戦くなど・・・」

いつものポーズを決めて強がる善子だが、彼女の膝はしっかりと笑っていた。

「無理すんな。．．．．．まだ続いてるな．．．」

空洞はまだまだ続いているようで、奥にはまだ道がある。

もしかしたら外へ出られるかも知れないが、先程の怪獣が潜んでいる可能性も否めない。

「．．．．．どうする津島。行くか？ なんなら俺一人で見てくるが．．．」

聞いかけると、善子はきゅつと陸の服の裾を握った。

「．．．．．今一人にされたら死ぬわ」

「ウサギかよ。つかやっぱ怖いんじゃないか」

地下空間はいくら進めど、代り映えのしない光景が続いていた。

奇妙なのは、これだけ奥に進んできても一向に暗くなる気配がないという事。

やはり何かがおかしい。

「．．．．．そーいやお前はさ、俺がA q o u r sのマネージャーやってる事どう思っ

てる?。」

「・・・どうしたのよ。藪から棒に」

先程から会話もなく気まずい空気が続いていたので、陸は思い切つて気になつていた事を問うてみることにした。

「・・・いいから、正直に」

初めから陸をスクールアイドル活動に引きずり込む気満々だった千歌と曜。妙に信頼を置いてくる梨子と花丸。陸と言うよりはゼロに懐いてるルビィ。ちよろいダイヤ。何も考えてなさそうな果南。もはや何を考えているのか分からない鞠莉。

人それぞれ理由の違いはあれど、A q o u r s の皆はマネージャーとして他校の陸を受け入れてくれている。

本来なら異様なこの状態を、善子はどう思っているのだろうか。考えてみたら彼女は始め陸を警戒しているような素振りも見せていたし。

善子は顎に手を当ててしばらく考えた後。

「そうね・・・。言うなれば光、かしら」

「はっ。」

訳の分からない返しに思わず顔を見返してしまう。だが善子は気にせず続けた。

「・・・皆の心を照らして、背中を押して、おまけに守ってくれている。少なくともA q

oursの皆は、アンタや千歌と出会って変わった者ばかり。皆それぞれ抱えてた想いに、アンタ達のおかげで正直になれたのよ」

「……?」

首を傾げる陸に。

「まあ、アンタがいないとAqoursは成り立たないわよ。これまでも、これからもね」

「……そ」

聞いててこっちが恥ずかしくなってきた。

鞠莉に次いで考えている事が分かりにくい善子だが、まさかこんな風に思ってくれていたとは。

正直求めていた類の返答とは違うが、お褒めの言葉としてありがたく受け取っておこう。

「……ん? ちょっと待て。別に俺はお前に対して何か特別な事はやってないよな?」
 思えば善子がAqoursに加入する直接的な切っ掛けとなつたのは、千歌をはじめとする当時のAqoursメンバーが彼女のありのままを受け止めたから。

陸のした事と言えば、その後に見れたゼットンをゼロと共に倒したことぐらい。

「ふっ……! 堕天使であるこの私が下賤の人間の力を借りるなど、有り得ぬ!」

「どうやら下賤の人間扱いされていたらしい。その分だと千歌達A q o u r s メンバーは陸よりもグレードが上なのだろうか。」

「……ひよつとしてそれ、俺の事一回も本名で呼んでこねーのと同様してるか？」

「……どういう事？」

「いやさ、お前俺の事アంత、か、リトルデーモン、としか呼んでこねーじゃん」

「厨二癖の事もあるのだろうが、それでも善子はA q o u r s メンバーに対しては基本的に本名で呼んでいる。」

「一度たりとも本名で呼ばれていないのは陸だけだ。」

「……お前ひよつとして俺の事嫌いか？」

「……そ、そうじゃなくて……」

「陸が小首をかしげると、善子は頬を少し朱に染めてもじもじし出す。」

「……今まで、男子と関わってきた事がほとんどなかったから……、その……、どうしたらいいのか……」

「口籠りながら視線を逸らす彼女の姿を見れば、その言葉が嘘ではない事は十分に伝わってくる。」

「その答えを聞いて陸は、」

「……ふっ……！……くく……、ははは……！」

「ちよつと！ 何も笑う事ないじゃない！」

膨れてそつぽを向く善子に対し、

「いや・・・、わりわり。可愛いところあるなって思つてよ。お前も普通の女の子で安心したわ」

「・・・・・・・・アンタ今まで私の事どう見えてたの・・・・・・・・でもまあ、そうかもね」

てつきりいつもの墮天使キャラが炸裂するのかと思いきや、今回はそんな雰囲気ではなかった。

「・・・・・・・・今度は私から聞くわよ。アンタ、墮天使ヨハネをどう思う？」

「・・・・・・・・どう、とは？」

「思つたままによ」

善子はそれ以上は言葉が発さずに、早く答えをよこせと視線で訴えてきた。恥ずかしい事言わせた仕返しだろうか。

まあ別に誤魔化す必要もないし、正直に言つてやるとしよう。

「変だと思つた」

「容赦ないわねアンタ。もうちよつとオブラートに包めないの？」

「思つたままにと言つたのはどこのどいつだ」

「むー……」

ご不満だったのか、頬を膨らませてこちらを睨みつけてくる。その瞳にはほんの少し哀情が滲んでいて、彼女が今の言葉で少し傷付いたことが伺えた。

だが善子は何か勘違いしている。陸の答えは、まだ終わってはいない。

「……でもそれと同じくらいすげえとも思った」

「え？」

「思い描いた自分を貫くつてのはそう簡単にできるもんじゃないだろ？ それでもお前は自分の信じる墮天使ヨハネを貫いてる。そんなすげえ事してる奴を馬鹿みたいだとは思わねーよ」

思うはずがない。だってそれは、善子が本当の自分を求め続けた結果に得た彼女自身の境地だから。

「お前は自分自身を病気扱いしても、花丸にぞんざいな扱いを受けても、それ以外の連中にスルーされても、その墮天使ヨハネを曲げなかつたろ？ それつてきつと強さだからさ。自分ない強さを持つてる奴の事をとにかく言う気はないね」

間違つていても幼くても墮天していても、それでも自分を貫けるならそれはきつと正しいし、誇つていい事だ。

「……誰かに何か言われたぐらいで折れちまうなら、そんなモン自分でも何でもない。」

お前が自分自身についてどう思ってるかは知らねーけど、別に変わらなくていいと思うぞ」

突然の事に照れたのか、顔を赤くして俯く善子の頭にポンと手を置く。

「・・・お前が、墮天使ヨハネを信じる限りな」

触り心地の良い艶のある髪を少し乱暴に撫で、彼女より前に踏み出た。

奥に先程のような広い空間が見え、そこから明らかに地球上の生物のものではない唸り声が聞こえる。

「さっさとアイツぶっ倒して外に出ようぜ？　ヨハネ様よ」

「善子でいいわよ」

「は？」

意外な言葉が意外な人物の声音に乗って耳朶に触れ、思わず振り向いて声の主の顔を凝視してしまう。

「・・・お前。いつも善子って呼ばれると怒ってるよな？　どうした急に」

陸が問うと、善子は頬に差した赤みを振り払っていつもの不敵な笑みを浮かべた。

「貴方を墮天使ヨハネ名において、上級リトルデーモンに認定してあげるわ！　その暁に、貴方だけはこの仮初の器に刻まれた名前でヨハネを呼ぶことを許可してあげましょう！　それにアンタずら丸の事は呼び捨てじゃない！」

びしっと指を突き付け、新しい玩具を見つけた子供のような目をする。

これはあれだ。以前花丸が陸の事を「陸先輩」と呼び始めた時と同じ目だ。流石は幼馴染。

根競べをしたら負ける事は分かっているし、そもそも拒む理由もないし別にいいのだが。

「……他の連中が見たらなんと言うか……」

（なんか言ったか？）

「別に何でもない。さ、早くアイツぶっ飛ばそうぜ？」

ウルティメイトブレスレットから出現したゼロアイを掴んだ後、反対の手で善子の手を取る。

「放すなよ？ 善子」

「へシエア！」

『デエエエヤアアア!!』

『キユキユリユリイイイイイイイイ!!』

爆炎と共に、異形の怪物が地中から空に向かって突き上がっていく。そしてそれを追う形で同じく地中から飛び出してくる赤い巨人。

ストロングコロナゼロは地上に降り立つと、掌から一人の少女を地面に下した。

『脱出成功つと。善子。ちよつと離れてな』

「ええ。絶対勝ちなさいよ！ 陸！ ゼロ！」

「『ガッテンテン』」

善子が駆け出すと同時に、先程天高く吹き飛ばした怪獣が地表に落下し、巨大な地響きを起こす。

何ものにも形容しがたい外見をしているが、唯一近いものをあげるとしたら蟻だろうか。巨大かつカラフルな蟻と言ったイメージ。背中から二本の突起物が生えており、更に羽のような膜もある。

『・・・アリブンタ・・・。どうして超獣がここにいる』

『知りたいか？』

『っ！ 誰だ!!』

起き上がったアリブントアの隣の空間が歪み、そこから頭部に赤い蠶のような装飾がある人型をした怪物が現れた。

『ギロン人だと……？ 何故こうもヤプールの使いが……、まさかヤプールの野郎がいるとか言うんじゃないだろうな』

『半分正解で半分間違いだ』

身構えるゼロに対し、ギロン人は鷹揚に胸を張って答えた。

『既に大量のマイナスエネルギーを集めることに成功した。もうじきヤプール様も御復活なされるだろう。ウルトラマンゼロ。貴様の首はその際にヤプール様に差し出す』

『ハッ……！ ヤプールの復活と聞いちゃあ黙ってる訳にも行かなくなつたな』

唇のあたりを親指で拭い、そのままギロン人とアリブントアに人差し指を向ける。

『その野望、俺が叩き潰す！』

アリブントアが牽制に両腕から火炎を放出すると同時にゼロがブレスレットを叩き、次の瞬間には焰は掻き消えていた。

ゼロの右手には、ブレスから出現した細長い槍が握られている。

『デエエエヤツ!!』

地面を蹴り飛ばした勢いのままに槍——ウルトラゼロランスをぶん回し、まずはギロン人に攻撃を仕掛けた。

ギロン人は間一髪身を翻してかわしたようだが、ストロングコロナの怪力と共に振り下ろされたランスは地面に見事なクレーターを生成していた。

『アリブンター！』

『キュキュリユリイイイイイ！』

すぐさまアリブンターとゼロにぶつけ、ギロン人は離れた場所で隙を伺う。どうやら今の一発で接近戦は不利だと察したらしい。

『フツ！ ハアア！』

『キュイイイ！』

ゼロが見事なランス捌きで繰り出す攻撃を、アリブンターは身体で受け止めていた。ダメージが通っていない訳ではないのだが、それも微々たるものだろう。

この超獣。かなり防御力があるらしい。

『どうだアリブンターの力は。蟻地獄の中でたつぷりO型血液を与えた賜物よ！』

戦いをアリブンターに任せておきながら、ギロン人が自信たつぷりに声を張り上げる。蟻地獄、O型。先程善子に聞いた話と一致する。という事は。

『件の蟻地獄はやっぱテメエの仕業か！』

『アリブンターはO型の血液が好物だな。おかげで逞しい超獣に成長してくれた。東京は餌が多い。絶好の飼育場だ！』

カプトムシは幼虫時代に質の高い餌を与えれば与える程立派な成虫になる様に、アリブンタも大量のO型血液を摂取する事で強靱な肉体を獲ることが出来たという訳だ。

まあ奴の成長の経緯は置いておいて、とにかく生半可な攻撃は通用しない。ギロン人が自信たっぷりなのも頷ける。

『ここが貴様の墓場だ！ ウルトラマンゼロ!!』

まだ背後で避難している人々がいるので回避できないのいいことに、アリブンタは火球、ギロン人は光弾を放ち、双方ともにゼロに殺到してきた。

『チツ………』

ゼロの舌打ちをかき消すように爆音が轟き、避難していた人々の表情に恐怖が滲む。

確かにさしものゼロとて、あんな攻撃が直撃したらただでは済まないだろう。

いつものゼロならば、の話だが。

『何………?』

爆炎が晴れ、白銀の鎧を纏ったゼロが姿を現す。

『ウルティメイト……ゼロ!』

純白の羽をそのまま身に着けたかの如し美しきで、ゼロそのものに変化こそないものの、その姿は神々しい。

人々の光の結晶が結集し、その光をウルトラマンノアに授けられたという神器と呼ん

でも過言ではないアイテム、ウルティメイトイージス。

そしてそれを装着した姿こそが、このウルティメイトゼロなのだ。

『ブラックホールが吹き荒れるぜええええッ!!』

爆ぜる様にゼロが飛び出し、右腕に装着された鈍色の剣を真一文字に薙ぎ払う。

『キュキュリユリイイイイイ!!』

盛大に火花と悲鳴が上がり、今の斬撃がアリブンタに相当なダメージを負わせたことが伺えた。

『アエエエヤアアア!!』

尋常ではない速度で繰り出されるゼロの剣撃が大蟻超獣の身体を刻んでいき、その度に光が迸る。

『キュリイイ!!』

攻撃を受けることに限界が来たらしいアリブンタが攻勢に出で、ゼロを振り払うように腕を振るう。

だが、ゼロの方が一步早かった。

軽やかなステップでそれをかわし、アリブンタが振るった腕を戻すよりも早く剣が光を帯びる。

『ウルティメイトオ．．．．、ゼロソード!』

袈裟懸けに切り下ろした剣から光の刃が放たれ、アリブントアの胴を貫いた。

『キキ……、キュイ……』

掠れた呻き声を漏らしてアリブントアは真後ろに倒れ、やがて大爆発を起こした。

『デメエもだ!』

刺突が煌き、手塩にかけて育てたアリブントアを倒された事に呆然としていたギロン人の心臓部を貫く。

『ぐう……。ふふ……。私を倒したところでヤプール様の復活はもう止められない』

『だったら、ヤプールも俺がぶつ倒してやるだけだ』

それが答えだと言わんばかりに刀身を振り下ろし、奴の身体を完全に両断する。

『全ては……。ヤプール様の為にイイイ……。』

その言葉を最期にギロン人は動かなくなり、倒れ込んだ後は光の粒子となって消えていった。

「……。ヤプールの復活……」

『……。一応、親父達に伝えておくか……。』

強大な敵の復活に一抹の不安を抱えているのは陸だけではなく、ゼロも同じだった。

「ワンツースリーフォー、ファイブシックスセブンエイト」

翌日。

今日も今日とて練習だ。予選を終えたとはいえ、先の事を見据えていないグループに栄光はないのだ。

善子は他のメンバーに交じって練習をし、陸は少し離れた場所でそれを眺めている。それはいつもと変わらない。

「それでは十分休憩を取りますわ。皆さん水分補給を忘れないように！」

ダイヤの声でステップが止まり、少女達は地面に大の字になったり会話を始めたりと、思い思いの行動を取り始める。

そんな中、頭の悪そうな言葉が表紙に書かれた本を抱えて陸の元に駆け寄ってくる少女が一人。

「ねえ陸。アンタ今度の生放送に出演してみるつもりはない？」

「ねえよ。なんだその罰ゲームは」

「クック……。この堕天使ヨハネと対を成す存在として、全国のリトルデーモンの皆に紹介してあげるのよ！ 光栄に思いなさい。ほら、こんな衣装着てー」

「却下だ却下。んな恥ずかしい真似できるか」

「何ですよ!! せっかくリトルデーモンからヨハネの相棒に昇格させてあげたのに!!」

「それお前以外誰も得しねえから。ほら、分かったらさっさと諦め——」

「堕天流鳳凰縛!!」

「イデデデッ!! おいコラ善子オ！」

「OKと言うまで絶対に放さないわよ！」

変わった事と言えば、こうやって善子が休憩の時間に絡んでくるようになった事と、

「おい！ 誰でもいいからこいつ何とかしろ！」

「自分で何とかしなよ」

「……。二人で行かせたのは間違いだったか……。一緒に行けばよかった……。」

「先輩のスケコマシ」

千歌、曜、花丸の三人がそれに冷ややかな視線を向けてくることぐらい。前者はともかく後者は全く持って意味が分からなかった。

（なあゼロ。一体何だっただよ!!）

〈諦めろ。自分で蒔いた種だ〉

（お前もか！）

ゼロにも助けてもらえず、結局練習が再開されるまでこのままだった。

六十話 Looking for a shine

「『デエエエヤッ！』」

「ッ——！！」

ゼロは早くもゼロビヨンドへと変身を遂げ、一角超獣バキシムとの戦闘を繰り広げていた。

住民は既に避難を終えたので、本来は町に人はいないはずなのだ。

そう、本来は。

「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」

炎天下の中、轟音を背にAqours面々は緊張した面持ちで携帯の画面を見つめていた。

先日行われたラブライブ予備予選。その結果がもうすぐ発表となるのだ。

「まったく！ どれだけ待たせるんですの?!」

「あーもうこういうの苦手〜！ ちょっと走ってくるー！」

「落ち着いて・・・」

「あんまり食べてると太るよ?」

「食べてないと落ち着かないぞらく・・・」

皆落ち着かない気持ちを誤魔化そうとしているが、それでもやはりそわそわしてしまつてならない。

なにせ初の予備予選結果発表なのだ。そりゃあ緊張もするだろう。

「リトルデーモンの皆さん・・・。この墮天使ヨハネに魔力を・・・霊力を・・・全ての・・・力を!」

善子は自分を中心に魔法陣を展開し、複数の蠟燭に火を灯しながら何やら怪しい儀式を執り行っているが、

『ハアアアアアアア!』

『ツ——!』

「消すな——!」

バキシムが地面に叩きつけられた衝撃で地響きと共に風が吹き、蠟燭の火を全て消してしまう。

「あつ! 来た!」

スマホを凝視していた曜が声をあげ、皆一斉に彼女の元に駆け寄る。

「・・・ラブライブ・・・、予備予選・・・合格者・・・」

「Aqoursのア、ですわよア！ ア！ ア〜！」

『オオウラア！』

ここにいる全員集まると同時に、予選突破グループの名前が液晶画面に映し出される。

そして曜が読み上げた一番上のグループの名前は――、

「イーザー・・・エクスプレス・・・」

皆の心情を現すかのように、今しがた吹いた風とはまた別物のひゅ〜という冷たい風が駆け抜けていく。

「うそー！」

「落ちた・・・」

「そんなあ〜」

「・・・あ、エントリー番号順だった」

落胆していたメンバーが全員同時にずっこけたのを尻目に、曜は再び画面に視線を戻す。

「イーザーエクスプレス・・・、グリーンティーズ・・・、ミナーナ・・・」

何度か画面をスクロールすると、「Aqours」の文字を発見することが出来た。

「A q o u r s !」

「予備予選 突破」

『バルキーコーラス!』

『——ッ!!』

八つの球体から発射された破壊光線がバキシムの身体を貫き、次の瞬間には大爆発を起こした。

「「「「「「「「「「「「「「「!!」」」」」」」」」」」」」

爆音と共に突風が吹きすさぶが、それに構わずA q o u r sは大いに喜んだ。

そしていい加減この異様な光景にツッコむ者が二人。

『お前等少しは危機感つーモンを感じろおおおお!!』

「さあ！ 今朝獲れたばかりの魚だよ！ 皆食べてね！」

果南が上機嫌で捌いた大量の舟盛り刺身が、部室のテーブルを占拠していた。

予備予選突破祝いという事で、彼女が用意してくれたものだった。サザエやウニも添えられており、相当な豪華さだ。

「・・・なんで、お祝いにお刺身なの・・・？」

「だって、干物じゃお祝いつぽくないかなって・・・」

「干物以外もあるでしょ・・・、夏ミカンとか！」

「パンとか！」

「・・・いや、それよりな・・・」

各自ただ自分が食べたいものを口にしていく中、一人釈然としない表情をする陸。

『・・・避難しろよお前等。死にたいのか？』

ブレスレットからゼ口の不満の声も漏れる。

予選結果発表前の緊張もあつたのだろうが、怪獣が出現したのに逃げないというのは如何なるものかと思う。

「まーまー。勝ったんだしいいじゃん」

『信頼されているのは嬉しい限りだが……、万が一の事もある。今度はちゃんと避難しろよ』

「はいはい」

完全に聞き流されていた。勝敗以前にまず戦闘に巻き込まれる危険性もあるのだし本当にちゃんと避難して欲しいものだ。

「見てくださいい！」

陸が溜息をつくくと、パソコンを持ったルビイが慌てた様子で部屋に駆け込んでくる。

「何？ どした？」

「PVの再生回数が……」

先日の予選で歌った曲も、PVとしてネットに投稿していたのだ。

ルビイの言葉の通り再生回数は過去に無い程伸びており、何と十五万回を超えていた。

「私達のPVが!!」

「凄い再生数！」

「それだけじゃなくて、コメントもたくさん付いていて！」

「可愛い……」

「全国……出てくるかもね……!」

「これは……ダークホース……」

「暗黒面!」

PVを視聴した方々の評価もいよいよだ。

手厳しいコメントもいくつも見受けられるが、それでも高評価の方が圧倒的に多い。

「よかった、今度はゼロじゃなくて……」

「当たり前でしょ! 予選突破したんだから、ゼロなんてありえないわよ!」

『……俺自身を否定されている訳ではないのは分かっているが……、それでもちよつとくるものがあるな……』

ゼロを除く皆のテンションが上がっている中、不意に千歌の携帯が鳴る。

「梨子ちゃんだ!」

携帯の画面を確認するや否や、それを自身の耳に押し当ててる千歌。

『予選突破、おめでとう!』

梨子も予選結果を確認したらしく、携帯から彼女の称賛の言葉が聞こえた。

「ピアノの方は?」

『うん。ちゃんと弾けたよ……。探していた曲が……、弾けた気がする』

「……良かったね……」

ダークザギに操られたりと色々あったが、梨子の方もうまくいったようだった。背中を押した陸としては、嬉しい限りである。

「じゃあ、今度は九人で歌おうよ！ 全員揃って！ ラブライブに！」

「……曜ちゃん……！」

当たり前前の事を言う曜を、何故か嬉しそうに千歌が見やる。

（……どうなってるの？）

（……ま、お前は気付かないよな……）

やれやれといった口調のゼロに、余計に首を傾げる陸。

『そうね……、九人で！』

「そしてラブライブで有名になって、浦の星を存続させるのですわ！」

「かんばルビィ！」

「これは学校説明会も期待できそうだね！」

「説明会？」

「うん。セプテンバーに行く事にしたの」

「九月か……」

九月ならば夏休み終盤に執り行われるラブライブ予選の後なので、それを見て入学を希望する者も出てくる。

それに多少は涼しくなることもあり、まさしく絶好のタイミングだと言えるだろう。

「きつと、今回の予選で学校の名前もかなり知れ渡ったはず……」

「そうね。PVの閲覧数からすると、説明会の参加希望の生徒の数の……」

意気揚々とスマホで学校のサイトを開いた鞠莉だが、突然その表情と言葉が固まった。

「……鞠莉さん……?」

何か不穏なものを感じ取ったのか、ダイヤが恐る恐る顔を覗くと、鞠莉は心ここにあらずと言った様子で呟いた。

「……ゼロ……」

「……へ?」

「……ゼロ……だね……」

『呼んだか?』

「すつこんでろ」

「……ゼロ……?」

鞠莉の言葉の意味を理解し、少女達が愕然とするのに時間はかからなかった。

「はあ……、またゼロかあ……。もう何なのおー！」

『うぐつ……!』

「おい千歌。その辺にしとけ。いらん二次災害が発生してる」

「あはは……」

果南の家のダイビングショップのテラスにて、千歌がかき氷をつつきながら文句を垂れる。

「ゼロに愛されてるねー」

「嬉しくなーい……」

『ごあつ……!』

「だから辞めろとゆるとるに。曜も余計なこと言わんでいい」

中の奴が千歌の発言でいちいちダメージを負っているので、とりあえず入学希望者がゼロ人だった事からは話を逸らす。

「……だがいくら何でもこの結果は……。やっぱ入学希望となると話が別な

のかねー」

「だって、あれだけ再生されてるんだよ？ 予備予選終わった帰りだってあんなに大人気だったじゃない！」

千歌の言う通り、予備予選を終えた帰りは大勢のファンがAqoursの元に押ししかけた。

果南はサイン、曜はツーショット写真を求められ、ルビイは握手を望むファンに追っかけ回されていた程に。

「これで生徒が増えなかつたら、どうすればいいんだろ・・・」

千歌がスプーンを咥えたまま身体を後ろにのけ反らせる。

今の浦の星女学院にとって入学希望者数を増やす唯一の希望がこのスクールアイドル活動なのだ。

それによる功績が芳しくない今、何か別の策を講じるのも一つの手なのかもしれない。

「そう言えば、μ'sはもうこの時期には廃校を阻止してたんだよね」

「へえ!! そうだったけ!!」

「うん。学校存続が、ほぼ決まっていたらしいよ」

「半端ねえなμ's・・・」

廃校の危機に瀕していた学校を半年足らずで救ってしまうとは……、流石は伝説のスクールアイドル。

「……まあ、そうは言っても向こうは東京だ。内浦と違って色んなものが揃ってるし、その分人もたくさんいる」

「……差、あるなあ……」

「仕方ないんじゃないかな。ここでスクールアイドルをやるって事は、それほど大変って事」

仕事をしていたらしい果南が、ダイビングスーツを脱ぎながら陸の隣に腰を下ろした。

スーツの下に隠れていたビキニが露わになり、濡れている事もあってより扇情的に見える。

別に小さい頃からずっとこんな感じなのでもう慣れっこだが、多少は躊躇して欲しいものだ。

「ウチだって今日は予約ゼロ。東京みたいにはつといても人が来るような所じゃないんだよ？　……(トーン)は」

妙に説得力のある果南の言葉に、数秒間の沈黙が舞い降りる。

彼女の言う事は正しい。何をするにも人が足りないのだ、この町は。

「……でも、それを言い訳にしちやだめだと思う。それを分かった上で、私達はスクールアイドルやってるんだもん」

その沈黙を破った千歌が、決意表明でもするかのようにかき氷を口の中にかっ込んでいく。

「お、おい……、そんな急いで食ったら……」

やがてかき氷を全てかき込み、その場を飛び出す。

「千歌ちゃん!!」

「一人でもう少し考えてみる!」

そう言つて自分の家に向かつて駆け出した千歌だが、急に立ち止まった頭を抱えた。

どうやら今になって頭痛が来たらしい。

「うう……!! きたあ……!」

「……ヤプールがもう復活してる？」

その日の夜。曜の家で衣装づくりを手伝わされていた陸にゼロはとある可能性を示してきた。

『ああ、昼間に現れたバキシム。アイツも立派な超獣だ』

「ヤプールつーと、この前ギロン人が言ってた奴だよな？ 前も聞いたけどどんな奴なんだよ？」

以前はゼロが無精がつて話してくれなかったが、奴が復活している可能性がある今話さない訳には行かないだろう。

『……異次元に住んでいるとある知的生命体で、かつて別宇宙で怪獣より強い超獣を使って地球侵略を目論んだ連中の事だ。とにかく卑劣で……一言で言うなら、悪魔だな』

「そんなのがどうしてこの地球にいるんだ？」

『さあな。ダークザギみたいに誰かを追っているのかもしれないし、はたまた別の理由——』

「？ 何の話してるの？」

トイレに行っていた曜が部屋に戻って来て、会話は強制的に終了させられる。

へ……とにかく用心しとけて事だ。復活しているなら、いつどこでどんな手を取って

来てもおかしくない」

(………了解)

話を聞いた限りでは、ダークネスファイブと同等、もしくはそれ以上の狡猾さを備えているという事が伺えた。

新たな脅威の出現に不安を感じながらも、曜と共に衣装の採寸に戻る。なんでもすこし前に沼津の商店街の方から出演のオフアールがあつたとかそんな。

衣装代は向こうが出してくれるので部費には響かず、地元や学校のPRも出来るという事もあつて予選を控えたこの時期に受けてしまったのだ。

「………今考えると結構なハードスケジュールだよな。予選前にぶっ倒れるなよお前」
「大丈夫だよ。こうして手伝ってもらってるしねー」

正直採寸など全体の作業から見たら大したことではないが、それでも曜は嬉しいらしい。

もとより拒む気はないし、少しでも彼女の負担を減らせるなら協力は惜しむまい。

そうして腕を動かす事数分、陸と曜の携帯電話が同時に着信音を鳴らす。

「なんだ？ この時間に……」

「千歌ちゃんからだね……」

先日作ったAqoursのグループで、千歌からグループ全員への電話だった。

「もしもし?」

『あ、二人とも出た!』

どうやら自分達が最後だったらしく、既に千歌以外の皆の声も聞こえる。

「で? 一体何の用だ?」

「こんな時間に掛けてくるなんて珍しいね」

『まあ、訳があるんですよ訳が……』

むしろなかったら困る。訳もなくこんな時間にグループ通話をしていたならば、今すぐ高海家に乗り込んで殴りに行っていた。

『あのね、もう一度東京に行こうって思ってるんだ!』

「……え?」

六十一話 栄光の背中

翌日。

「皆さん！ 心をしつかり！ 負けてはなりませんわ！ 飲み込まれないよう！！」

地元じやまずありえない人口密度を誇る雑踏の中で、何故かダイヤがメンバーに注意を促していた。

東京に着くや否やいきなりこれである。

「大丈夫だよー。襲つてきたりしないからー！」

「貴方は分かつていないのですわ！！」

いつも以上に真剣、尚且つ鬼気迫つた面持ちで千歌に詰め寄るダイヤ。

それを見て陸はこっそりルビィに耳打ちをする。

「なあ、なんであんなつてんの？」

「お姉ちゃん……昔、東京で迷子になったらしくて……」

「はーん……」

恐らくその時の事が軽いトラウマになつてゐるのだろう。まあ、高校生にもなつてそれは如何なるものかとは思ふが。

「それで？　桜内はどこなん？」

「ここで待ち合わせだよ」

梨子は今回の為になぞなぞ帰るのを一日遅らせてくれたらしい。

昨日千歌が皆に話したことは、 μ sが何故音ノ木坂学院を救えたのか、何がすごかつたのか、自分達とどう違かつたのかをこの目で見て、皆で考えたいと言ふものだった。

似たような境遇にあつたからこそ、先人である μ sから何か学べるものがあるかもしれない。千歌はそう言いたかつたのだろう。

「・・・あれか？」

少し歩くと、立て付けのコインロッカーに必死に何かを詰め込んでゐる梨子の姿が確認でき、それを見て千歌が駆け寄つていく。

「梨子ちゃん？」

「ひゃあう!!　ち・・・、千歌ちゃん？」

「何入れてるのー?」

「ええと!　お土産とか、お土産とか、あとお土産とかく〜」

全力で目を泳がせて言い訳をする梨子。それほどまでして荷物の事を知られたくな

いのだろうか。

だが千歌は本当に梨子がお土産を詰め込んでいると解釈したらしく、興奮気味に彼女に詰め寄っていく。

「わーっ！ お土産！！」

「わああ！！」

今ので手が滑り、梨子が必死に押し込もうとしていた何か雪崩のように落下してしまつた。

「わああああ！！」

「なに．．．．．？」

荷物の中身を確認しようとした千歌の目を、梨子が必死の形相で塞ぎにかかる。

「あれは．．．．．」

陸には紙袋から少しだけ顔を覗かせる薄い書物に見覚えがあった。

あれは先日善子に連れられて参加した夏コミ。そこで見た梨子が購入していた同人

誌。

どうやらあの趣味は人に知られたくないものらしい。

「．．．．．なんか本の量増えてないか．．．？」

（触れるな）

「んっ・・・、しょ・・・！ さあ、じゃあ行きましようか！」

無事に同人誌達をロッカーの中に押し込んだ梨子が笑顔で振り向く。

「とは言っても・・・、最初はどこに？」

「Tower? Tree? Hills?」

「遊びに来たんじゃありませんわ」

「そうだよ、まずは神社！」

余程強い力で押さえつけられたのか、目元にくつきりと跡が残ってパンダ化した千歌が答える。

「神社って・・・、神田明神か？」

「うん！ 実はね、ある人に話し聞きたくて、すっごい調べたんだ！ ダメ元でメール送ってみたんだけど、そしたら会ってくれるって！」

「ある人？ 誰ずら？」

「それは会つてのお楽しみ！ でも、話を聞くにはうつつけのすごい人だよ」

「東京……、神社……、凄い人……、ツ！ まさか!!」

千歌の言葉を聞いて、黒澤姉妹が目を輝かせ始める。

〈何を期待してんだアイツ等は……〉

(……期待通りにならないに三千ペ〇カ)

「よーし！ じゃー行こー!!」

千歌に続いて皆ぞろぞろと足を進ませていく。

『ククク……。まさかそつちから来てくれるとはな……』

まさか異次元から脅威が迫っているとは、この時は誰も予想だにしていなかった。

「お久しぶりです」

「なあ〜んだ〜……」

「へげっ……」

神田明神で自分達の事を待っていた二人の少女を見て黒澤姉妹が落胆し、陸とゼロは若干顔を引きつらせる。

以前ここ東京で行われたスクールアイドルのイベント。そこで出会った北海道のスクールアイドル、Saint Snowだ。

「おいおい。何でよりによってあいつ等なんだよ!!」

（俺が知るか）

確か鹿角聖良と鹿角理亜だったか。

別に悪い人ではないのだが、前の一件もあって彼女達の印象はあまり良くない陸とゼロ。

「へげっ……なんか嫌味言いに来やがったぞ！ どうせまた諦めろとか言ってくるんだろ！」

（落ち着け。そんなんでわざわざ北海道から来るわけねーだろ）

「大体な——」

「それでは、行きましようか」

聖良の声で、皆次の目的地へと進み出す。

正直陸の中でももやもやしたものが蟠っているが、ここは正直についていくことにし

た。

「わああああ．．．．．、なんかすごいところですね．．．．．」

場所は移り、UTXと言う学校のカフェスペース。学校の施設とは思えない程中は煌びやかに装飾が施されており、田舎者の陸としてはそわそわして落ち着かない。

と言うか一般の人間でも利用できるとか、そこからもう学校らしくない。

「予備予選突破おめでとうございます」

「COOLなパフォーマンスだったね♪」

「褒めてくれなくて結構ですよ？ 再生数は貴方達の方が上だったんですし．．．．．」

梨子と鞠莉から向けられた称賛の言葉に対し、聖良は微塵も表情を変えずに答えた。

「いえいえ．．．」

「それほどでも〜」

それに対し曜とルビイはしっかりと喜んでいた。この時点で心構えと言うか風格と

言うか、色々なもので負けている気がしてならない。

「でも、決勝では勝ちますけどね」

傾けていたティーカップをテーブルに戻すと、どこか余裕を含んだ声音でそう言った。

「あ……………」

その絶対的な自信の前に、場の空気が若干張り詰めたものへと変わる。

「私と理亜は、A—R—I—S—Eを見てスクールアイドルを始めようと思いましたが。だから私達も考えた事があります。A—R—I—S—Eやμsの何がすごかったのか、何が違うのか……………」

「答えは……………、出ました？」

「いいえ……………ただ、勝つしかないって」

「……………」

聖良の言葉に、ゼロが少し反応したようにプレスが震えた。

「勝つて、追いついて、同じ景色を見るしかないのかもって……………」

μs、A—R—I—S—E。彼女達王者の事を知るには、自らもまた頂に立ち、同じ景色を望むしかない。

それがSaint Snowなりに考えて出した答え。

「……勝ちたいですか？」

「え？」

ただ、何故だろうか。

「ラブライブ。勝ちたいですか？」

素直に、その考えが正しいと思う事が出来ない。

不意に千歌が零した言葉に、今まで黙っていた理亜が不機嫌そうに眉をひそめる。

「……姉様。この子バカあ？」

勝ちたいという気持ちは、ラブライブに参加したグループの者ならば誰しもが抱いている願望の**はず**だ。

ラブライブは遊びじゃないと言い放てるほどの理亜だ。当然彼女もその感情を抱いている者の一人。

そしてそれは姉である聖良も同じ。

「……勝ちたくなければ、何故ラブライブに出るのです？」

「……それは」

「μsやA—RISEは、どうしてラブライブに出場したのです？」

少し落ち着きを失ってきたのか、立ち上がって千歌に質問を連ねる聖良。

『……分かる訳ねえだろ。そもそもその理由を求めるのが間違ってるんだよ』

考えがうまく言葉にならず口籠る千歌の代わりに、何とゼロが声を発した。そして真つ直ぐ聖良の目を見据える。

『逆に聞くぞ。何故同じ景色を見るために、そのA—R—R—I—S—Eとやらに追い付く必要がある』

そう問うゼロは、心なしか不機嫌なようにも感じられた。

「……さつきも言ったでしょう？ 私達はA—R—R—I—S—Eに憧れてスクールアイドルを始めたんです。追い付きたい、そして超えたいと思うのは当然の帰結だと思いますが」

『……だからもつと練習して、技術を上げて、力を欲して、強くなって勝ち進みたい。そう言う事だろ？』

「……ええ」

『だったら尚更だ……』

聖良の肯定を、ゼロは嘲るでも否定するでもなく、ただただ真正面から受け止めた。『お前等はまだ小手先の力しか信じちやいねえ。……だが、そんなモンは本当の強さとは言わない』

「……だったら、貴方は知っているんですか？ その本当の強さと言うものを」

立ち上がって睨み合う二人の視線が衝突し、火花でも散っているような錯覚を覚え

る。

一拍の沈黙の後、ゼロがゆっくりと口を開いた。

『……………それは——』

ここにいる誰もがその言葉に耳を傾けようとした瞬間だった。

「えっ……………?」

『ツ!! 何ツ!!』

テーブルの真下。

つまりゼロと聖良の足元に、巨大な亀裂が走ったのは。

(あれは……………!)

亀裂の奥に広がるまだら模様空間には見覚えがあった。

あれは先日、善子と共に乗っていた地下鉄が吸い込まれた異次元空間だ。

「陸ちゃん!!」

「姉様!!」

不意打ちで全く反応することが出来ず、足場もないので踏みとどまることも出来ない。
い。

「クソツ……………!」

「きやあああああ!!」

陸と聖良の二人が異次元空間へと落下していった後床の裂け目は閉じ、何事もなかったかのように穴は消えてしまった。

「え．．．．．？」

残されたA q o u r sと理亜は、呆然と二人がいた場所を見つめる事しか出来なかった。

「デエヤア！」

ゼロの力を使つていち早く着地した陸は、すぐに地面を蹴つて自分と同じく落下してきた聖良を受け止めた。

「．．．．大丈夫ですか？」

「え．．．．ええ．．．．ありがとうございます．．．．．」

聖良を下した後、突如自分達を吸い込んだ空間を見渡す。

やはりアリブインタの時と同じで、気味の悪いまだら模様がどこまでも続いている。

(・・・おいゼロ。もしかしてここ・・・)

へもしかしくなくてもヤプールの異次元空間だな。まんまと閉じ込められた訳だ

(よりによってこのタイミングでか・・・)

ヤプールが既に復活しているというゼロの予想は正しかったらしい。

自分達も無事とは言える状況ではないが、向こうに取り残された千歌達は無事なのだろうか。

(・・・どこかに出口とかないのか?)

へ・・・さあな。だが、ここで何もしないよりは出口を探した方がいいだろうな。こういう時こそジードだ

(だな。ジードとしても、ドーにもならない)

とりあえず行動の方針を固めた後、怯えながら周囲をきよきよとしていている聖良の方を向いた。

「えっと・・・鹿角さん、でしたっけ? 立った上で歩けますか?」

「・・・は、はい・・・」

差し出された陸の腕を掴んで立ち上がった聖良は、不思議そうな視線を向けてきた。

「・・・・・・・・霧囲気変わりましたね。・・・随分と落ち着いてるようですが・・・」

「まあ、慣れてるんで」

こんな果てのなさそうな空間に出口があるかなんて見当もつかない。

だがここでただじっとしているという訳にも行かないのだ、そんなことをしていても助け何か来ないし、何より残された千歌達の事が心配だ。

「とりあえず出口を——」

『その必要はない』

「っ!?」

突如謎の声と共に目の前の空間が歪み、陸は咄嗟に聖良を自身の背後に隠した。

『……ヤプールか』

人格を表に出したゼロがブレスレットからゼロランスを取り出し、歪みの奥にいます。あろうやプールに向かって突きつける。

『ご名答。我らが異次元空間にようこそ。ウルトラマンゼロ』

「え……?」

ヤプールの言葉に、聖良が弾かれた様に陸の方を向く。

「……今のどういう……、ウルトラマンって……」

『チッ……』

ゼロは舌打ちを打って悪態付くと、改めてヤプールを睨み返した。

『何のつもりだ……、何て野暮なことを聞くつもりはねえ。さっさとここから出せ』

『その要求の方が野暮と言うのではないか？ 出せと言われて出してしまふならわざわざここに閉じ込める訳がなからう』

『だよなー。……だつたら今ここでテメエをぶつ飛ばす！』

ゼロが宣戦布告をしても、ヤプールは飄々とした口調で続けた。

『クハハ……、やり合つてしまつては意味がない。貴様はここで指を啜えて見ていればいいのだ』

次元の歪みが広がっていき、その中から赤い甲殻類のような人影が現れる。

アレがヤプール人の意識集合体にして、全てのヤプール人が合体、巨大化した姿――

――巨大ヤプール。

『全ては憎きウルトラ戦士へ復讐の為……、このヤプール、今ここに復活せん！』

『っ！ 待ちやがれ!!』

ヤプールはゲートを開くとそこに向かって飛翔していき、ガラスを割った様な甲高い音と共にその中へと消えていった。

ゲートはすぐさま閉じられ、完全にこの空間に幽閉された事が伺える。

〈陸、行くぞ！〉

「当り前だ。ずっとこんなところにいられるかつてんだ」

だがこちらには次元の壁を超える方法がある。

始めは次元の裂け目でも探すつもりでいたが、望まぬ形とは言えヤプールが聖良に正体をバラしやがったのでその手間は省けた。

「鹿角さん！ 手え放さないでくださいよ！ ついでにこの事内緒でお願いします！」
「えっ!!」

陸は聖良の手を取ると、ブレスから出現させたウルトラゼロアイを装着した。

「ヘデエヤア！」

『クハハハハハ!! 愉快！ 痛快！』

東京の街に出現したヤプールは、召喚した複数の超獣と共に高笑いをあげていた。

『恐れる！ 懼け！ 人間共！ 貴様等の負の感情が我が力となる!!』

ヤプールを背に逃げる人間達を見下ろしながら、更に恐怖を煽るべく次元を歪めてビ
ルを一つ消して見せた。

「怪獣!?!」

「こんな時に……」

外の騒ぎを聞いてUTXから飛び出してきたAqoursと理亜も、禍々しい巨人を
前に驚きを隠せないでいた。

「とにかく私達も逃げよう!」

「でも姉様が……」

「陸ちゃんが一緒だから大丈夫!」

姉の聖良を心配して立ち止まる理亜の手を、千歌と果南が同時に引いて走る。

『ここにヤプール、そして我が超獣軍団の復活を宣言する!』

それと同時にヤプールが右腕を大きく掲げ、UTX目掛けて三日月型の斧を振り下ろ
そうとした時、空に穴が開く。

『デエエエヤアアアア!!』

『ッ!』

一瞬で首元に迫ってきた銀色の切っ先を飛びのいてかわすと、ヤプールは自身に剣を
向けた青い戦士を見据えた。

「ゼロちゃん！」

『思いのほか早かったな。ウルトラマンゼロ』

『……………どつかの誰かが正体バラしてくれたおかげでな』

ウルティメイトイージスを身に纏ったゼロは地上に降り立つと同時に、掌に乗せた少女を千歌達の元へと降ろす。

聖良は目をぱちくりさせて、陸が変身したゼロとA q o u r sを交互に見ていた。

『怪我はねえか。小娘』

「……………ええ……………」

『そうか。……………ならさっさとそいつらと一緒に逃げな』

ゼロは立ち上がるとイージスの装着を解除し、自身もまたヤプールを見据えた。

『姑息な真似しやがって……………殴らせろヤプール!!』

『フハハ……………。いくらウルトラ戦士と言えど、一人でこの数の超獣を相手取るのは厳しいだろうよ』

ヤプールが手を動かすと、奴の後ろで控えていた六体の超獣が前へと出てくる。

満月超獣ルナチクス。蛾超獣ドラゴリー。大鳩超獣ブラックピジョン。古代超獣カメレキング。さぼてん超獣サポテンダー。殺し屋超獣バラバ。

どれもヤプールが誇る強力な超獣兵器である。

『ケツ・・・、タイマン張る自信もねーのかお前は・・・、そんなんでウルトラ兄弟倒そうとか片腹いてーぞ』

『何とでも言うがいい。どんな手を使おうと勝てばいいのだ』

『御大層に悪役みてーなことを・・・、テメエがでけえ顔すんのはな・・・、二万年早いぜ!!』

盛大に啖呵を切ったゼロが、ゼロツインソードを構えて超獣軍団へと立ち向かっていく。

『デエエエヤ!』

剣線が円を描き、六体の超獣を一気に吹き飛ばす。が、

『ハハハハハ!』

『ぐあつ・・・!!』

遠巻きからそれを眺めているヤプールからすれば、それはどうぞ攻撃してくださいと言っているようなものだ。

波状光線が脇腹を直撃し、悶えるゼロに起き上がったバラバとルナチクスの蹴りが迫る。

『チツ・・・』

『ピユウイイイイ!』

それは何とか回避したものの、上空から襲いかかってきたブラックピジョンの嘴がクリーンヒット。

『キュオオオオ！』

『キアア！』

『がはっ………！』

更にサポテンダーの棘とカメレキングの翼の衝撃が胴を抉る。

『グアアグルルル！』

吹き飛んだ先にいたドラゴリーが振り下ろした毒牙をすんでのところで回避し、腹部に回し蹴りを叩き込んだ。

だが数が多すぎる。再びヤプールが放った光線を受け、周囲のビルと共に派手に倒れ込んでしまう。

『く………そ………』

『……キリがねえ………』

『クハハ………、先程までの威勢はどこに消えた？』

今まで単独で複数体の敵と同時に戦った事は何度かあったが、せいぜいが二体。ギャラクトロン軍団の撃退も、オーブとジードの力添えがあったからこそ成し得たものだ。

七体同時、しかも怪獣を超える超獣が六体と、それを統べる超人を相手取るとなると、

流石に分が悪すぎる。

しかもまだヤプールには触れてすらいない。

『ゴオゴアアアア!』

『フハハハハ!』

『がっ……ごあつ……!』

ヤプールとルナチクスの火球が立て続けに殺到し、起き上がりざまに着弾。再び地面を転がることになる。

『このまま始末することは容易い。……だが時にウルトラマンゼロよ。貴様こちら側に着く気はないか?』

『……なんだと……?』

果てのない連続攻撃を受け続け、激しいエネルギー消費故にカラータイマーが点滅を始めたゼロに、ヤプールは手招きするように語り掛けてきた。

『貴様のその進化し続ける肉体をここで滅ぼすのは惜しい。こちら側に来れば、我々が超獣として更なる強さを与える事を約束しよう。……強さを求めているのだから? 貴様のその力は、全宇宙を支配するに相応しいものだ』

圧倒的な物量差で力の差を見せつけてから仲間に引き込むという、卑劣かつ陰湿で狡猾なヤプールの策略。

追い詰められた時、人は冷静な思考を奪われ、迷いが生じる。それはウルトラ戦士と変わらないはずだ。

今のヤプールの言葉は、危機的状況に陥ったゼロの深層意識を突くものであっただろう。

ヤプール自身もそれが分かっているのか、不気味な笑いを漏らし続けている。

そんな中ゼロが出した答えとは――

『……行くわけねーだろ。バーカ……』

『何だと……?』

ゼロは立ち上がると、屈託なくそう答えた。

『確かに俺は強くなりてーし、更なる強さを得られるならそれに越したことはねえ……』

『なら……、何故我等の誘いを断る?』

『……俺は知っている。力に溺れる怖さを』

『つ……!』

その言葉は、陸にも少しくるものがあつた。

ゼロが言っているのは、力を渴望したが故にプラズマスパークに手を出し、危うく道を踏み外しかけた事。

陸の脳裏に過るのはゼロダークネスとして暴走し、ダイヤを殺しかけた戒めの記憶。

『俺は知っている。守るべきものの尊さを！』

ゼロは語る。

『ただ積み重ねただけの、上っ面の力に価値はねえ。貴様の言う力はそういうものだ。……だが俺は違う！ たくさんの想いを背負って、大切なものの為に戦う！ それが本当の強さだ!!』

先程の聖良の問いに、答えを出すように。

『……それは……、コイツ等が改めて俺に教えてくれた事。これが俺の進む道だ!!』

A q o u r s の皆に、感謝を伝えるように。

『だから俺は戦う！ どんな時でも諦めず、不可能を可能にする！ それが俺達ウルトラマンだ!!』

『よく言った』

その時。

威厳のある声と共に、空から舞い降りた六つの光。

『かつてお前は力しか信じず、強大な光を求めて禁忌を犯したな……』

『輝いた者の栄光はいつだって後世の者に道を示す。時に希望の火を灯し、時に救いの手を差し伸べ、時には夢を与える』

『先駆者達も初めはそうだったのだ。輝く夢に魅せられ、自らもまたそうなりたいと願った』

『だがいつか気付く。同じ輝きは二つとしてないと。自分達の道を歩まなければいけない時が来ると』

『それは決して一人で進める道ではない。仲間と共に、たくさんの者の想いを背負って駆け抜けるからこそ、その先にある光を掴むことが出来る』

『そしてその想いが、次の世代へと受け継がれていく。．．それは、我々ウルトラマンとて変わらない』

それは紛れもなく、ウルトラマンの姿だった。

『なッ．．．．．!! 貴様等は．．．!』

明らかに狼狽えて後退するヤプールの視線の先には、因縁深きウルトラ戦士達。『未熟だったお前が、仲間と共にそれを理解することが出来た』

その内の一体。真紅の肉体と、頭部に付いた刃が特徴的な巨人が振り向き、ゼロの肩に手を置く。

『流石は．．．．．、俺の息子だな』

『・・・・・・・・親父・・・・・・・・』

「えっ・・・・・・・・？　じゃあこの人が・・・・・・・・、ウルトラセブン・・・・・・・・」

現れた巨人は、ウルトラセブンを含め六体。

光の国のウルトラマン達に与えられる名誉の称号、ウルトラ兄弟。

その中でも特に特別視され、宇宙警備隊最強の戦士達と謳われるエリート集団――

――栄光の、ウルトラ六兄弟の姿だった。

六十二話 自分達の道

『貴様等アアアアア!!』

因縁の相手を前にし、ヤプールは怒号を上げる。

七体の怪獣と対峙する、七体の巨人。

『そこまでだ。ヤプール』

宇宙警備隊長にして、六兄弟の長男——ゾフィー。

『貴様が何度復活し、何度悪事を働こうと、私達がそれを阻止するだけだ』

初代の名を冠する、怪獣退治の専門家——ウルトラマン。

『息子が意地を見せたのだ。我々がそれに答えずにどうする』

不屈の闘志を秘めた戦士にして、ゼロの父親——ウルトラセブン。

『お前の好きなのにはさせない』

宇宙警備隊随一の武器の使い手——ウルトラマンジャック。

『私達の仲間に敗れた事を忘れたか、ヤプール』

かつてヤプールから地球を守った、光線技の名手——ウルトラマンエース。

『貴様の悪行。到底看過できるものではない』

ウルトラの父譲りのパワーを誇る、宇宙警備隊筆頭教官——ウルトラマンタロウ。

『……コイツはすげえ。ウルトラ六兄弟が揃い踏みとはな……』

そしてセブンの息子にして、宇宙最強の肉体の持ち主——ウルトラマンゼロ。

「ウルトラマンが……、いっぱい……」

十一人の少女が見上げる中、七体の巨人は東京の大地を蹴る。

『ジエア!』

ゾフィーはバラバ。

『シエア!』

ウルトラマンはカメレキング。

『ジュワ!』

セブンはルナチクス。

『シユア!』

ジャックはブラックピジョン。

『トワアアア!』

エースはドラゴリー。

『ンン……、タアアアア!』

タロウはサボテンダー。

歴戦の勇者達の戦いはどれも貫録を感じさせるもので、超獣達を手も足も出させずに翻弄している。

『ぬぐう……、貴様等はいつもいつも……覚えてい——ッ!!』

『逃がすかよ』

超獣たちがウルトラ六兄弟に圧倒されるのを見て戦況は不利と判断したのか、ヤプーは異次元空間に逃げ込もうとするが——ゼロはそれを許さない。

『正々堂々！ タイマン張りやがれ!!』

『ぐおう……!!』

裂帛の気合と共に突き出した拳が、遂にヤプールを捉える。

『行くぜ陸!』

『おうよ!』

『俺に限界はねえ!!』

『『デエエエヤアアアア!!』』

『がッ……はあッ……!!』

ゼロビヨンドが繰り出した左ジャブからの右ストレートのコンボが連続して命中し、ヤプールは苦しそうに嗚咽を漏らしながらその巨体を浮かび上がらせた。

『ビヨンドツインエツジ』

四本のゼロスラッグガーが二本ずつ融合し、ゼロが両手にそれぞれ一本ずつのゼロツインソードを構える。

『ズエリヤアアアアア!!』

『ぐおおおオオオオオオオ!!』

二本のゼロツインソードが果てのない斬撃の嵐を繰り出し、ヤプールの赤い身体を滅多切りにしていく。

『調子に乗るなあ!!』

『フッ!!』

強引に斬撃を振り払って薙ぎ払われた裏拳を掴んで受け止め、力任せに振り回して天高く投げ飛ばした。

『ツ………!!』

そこでヤプールが視界に映したものは、

『ガアアア!!』

ゾフィーがバラバの頭部から射出された剣を受け止め、逆に投げ返して胸元を抉る。

『フツ！』

悲鳴を上げた隙に背後を取ると、後頭部に眼球が飛び出してしまふ程強烈な回し蹴りを叩き込む。

何も見えなくなったバラバの左腕に装着された鎌を引き千切った上に奪い取り、横一文字に振り抜いて首を切断した。

『シエア！』

ウルトラマンはカメレキングが振るつた腕を前転で回避すると、勢いそのままに懐に潜り込んで正面からホールドし、バックドロップを繰り出す。

『キア………』

『シヤアア！』

頭から落下したせいでへし折れたカメレキングの首を、ウルトラマンの放つた八つ裂き光輪が跳ね飛ばした。

『ジャ！ ジャ！ ジャ！』

固く握つた両腕の拳を何度もルナチクスの胸部に叩き込むセブン。

『ジャアアア！！』

背後に回り込んで頭部のアイスラッガーを手に取り、銀色の剣線が頸動脈を切り裂いた。

『シューアー！』

二体の超獣の攻撃をうまく捌くジャック。

上空から襲いかかってきたブラックピジョンの嘴をバク転で回避し、腕のウルトラブレレットから出現させたウルトラランスを投擲して空を舞う巨大な影を貫いた。

更に待ち構えるエースの方へとドラゴリーを蹴り飛ばす。

『トワアアア！』

渾身の力を込めた正拳突きでドラゴリーの腹部に風穴を開け、腕を×字に組む。

そこから上下に開いたエースの両腕から巨大な光の刃——バーチカルギロチンが放たれ、落下してきたブラックピジョンもろともドラゴリーの身体を真っ二つに両断した。

『タアアアア！』

空中で素早くムーンサルトスピンを繰り返したタロウが、急降下と共にサボテンダーに蹴りをお見舞いする。

『タアー！ ハアー！』

流れるような動きで張り手からの回し蹴りを繰り返し、着実にサボテンダーの身体にダメージを蓄積させていく。

『ンン………、トアアアアア！』

十時に組んだタロウの両腕から三日月型の刃が二本放たれ、サボテンダーの両腕を切り落とした。

『今だー！』

長男であるゾフィーを筆頭にウルトラ六兄弟はM87光線、スペシウム光線、ワイドショット、シネラマショット、メタリウム光線、ストリウム光線を放ち、まだ微かに息の残っていた者も含め六体の超獣を跡形もなく粉砕した。

残るはヤプールただ一人。

『おのれ……、ウルトラ兄弟イイイイイイ！！』

『俺の刃を刻み込め』

一本に融合させたゼロツインソードにエネルギーを流し込み、ゼロの身の丈を超える超巨大な光の刃を作り出し、落下してくるヤプール目掛けて振り抜いた。

『ツインギガブレイク！！』

『があアアああアアああアアああアアああアア！！』

Z字の斬痕が刻まれ、赤き悪魔の身体は膨れ上がり、ところどころから光が漏れ出て行く。

『覚えていろ……！ マイナスエネルギーがある限り……、我々は何度でも蘇る……、いつの日か……、必ず復讐に舞い戻るぞおおオオおおオオオオ！！』

断末魔の代わりに復讐を誓ったヤプールは真後ろに倒れ、人々の歓声を掻き消す轟音を立てながら大爆発を起こした。

「よっ………と………」

ゼロへの変身を解除し、傍らで戦いを見守っていたAqoursの元へと戻る。

かつてない程の大決戦が行われた事で東京の街から人はすっかり消えていて、残っていたのは彼女達ぐらいなものだ。

「陸ちゃんお帰り————つて………」

駆け寄ろうとしてきた千歌だが、自分達と共にSaint Snowがいた事を思い出し、青い顔を陸に向けてくる。

「ちよつと陸ちゃん！ 見られちゃっていいの!!」

「あー……、妹の方はともかく、姉の方にはもうバレてるから問題ない」

「ええ!!」

千歌が視線を移した先には、まだ驚きが抜けきっていないような表情で理亜の目を塞

ぐ聖良の姿があつた。

妹にゼロが陸に戻る瞬間を見せていない辺り、本来は秘密にすべき事だという事は理解してくれたらしい。

「……貴方……、何者なんですか……？」

「マネージャーつすよ、ただの」

一言そう答えると、振り返って自分達を見下ろしているウルトラ六兄弟を見上げた。

そして一度主導権をゼロに渡す。

『親父。今回は助かった。……ありがとう』

『氣にするな。前にも言っただろう。たとえ形にならずとも、想いや心はいつでも繋がっている。……私はいつでも、お前を見守っていると』

『……そうか』

セブンの言葉通り目には見えないが、確かに親子の絆があることは分かった。

『仙道陸くん……だったか』

「は、はい!!」

突如セブンに声を掛けられ、予期していなかった事もあつて若干声の上擦ってしまった。

『……こんな息子だが……、これからもよろしく頼む』

「……………！ 勿論ですよ」

「へっ……………、何だよこんな息子って……………つかお前もそれで納得すんなよな」

ゼロは陸の中で悪態付くが、セブンは満足したように頷き、両腕を空に向けて広げた。

『ジイイイヤ!!』

セブンが飛び立っていったのを皮切りに、他のウルトラ兄弟も一斉に大空へと向かって行った。

「結構愛されてんのなお前」

『うるせえ。過保護なんだよ親父の奴は』

「ツンデレか」

『お前な———』

ゼロが何か言い返そうとした時、自分達のすぐ上、UTXの巨大スクリーンに映像が映し出される。

「どうやら管理していた人が電源を入れっぱなしにして避難してしまっていたらしい。」

「そして、そこに映し出されたものは。」

「……………アキバドーム……………」

次のライブ決勝大会の舞台はアキバドームだという事だった。

ただか一部活動に過ぎなかったスクールアイドルがあれほど大きい会場でライブを

できるようになったのも、μsやA—RISEの尽力が大きい。

「……つか、何でここに映ってるの?」

「毎年、ここで発表になるんですよ」

理亜の目から手をどかした聖良が、陸に説明を入れてくれる。

「私達はそろそろ行きますね。もう戻らないとなので」

「……随分と帰り早いんですね」

「ええ、ラブライブに向けて頑張らないといけないので。……それに、貴方の信じる強さと言うものも、分かりましたからね。……あ、あの事は内緒にするのでご安心を」

聖良は最後に不敵に笑うと、理亜と共に避難警報が解除されて徐々に人が戻りつつある街中へと姿を消していった。

Saint Snowが去り、皆の視線がスクリーンに戻る。

「ホントにここでやるんだ……」

「ちよつと、想像できませぬね……」

アキバドームは数万人規模で人が入る会場だ。

今まで地方の小さい会場でしか歌った事のない彼女達にとって、そこは未知の世界。不安や緊張を抱くなどという方が無茶がある。

皆の表情が硬くなる中、梨子がとある提案をした。

「ねえ、音ノ木坂行ってみない？　ここから近いし。前は私がワガママ言ったせいで行けなかったから」

「いいの？」

「うん！　ピアノちゃんと出来たからかな？　今はちよつと行ってみたい。自分がどんな気持ちになるか確かめたいの。皆はどう？」

梨子が問うと、皆首を縦に振った。

その中で最も目を輝かせていたのは、言うまでもなくμ☒s大好き黒澤姉妹である。

「音ノ木坂？」

「μ☒sの？」

「母校くくく？」

子供の様にはしやぐ二人を筆頭に、十人は音ノ木坂学院へと向かって行った。

「うう……、何か緊張する……！ どうしよう！ μ□sの人がいたりしたら……」

「へ、平気ですわ！ その時はさ、さささサインと……写真と……、握手を……」

「もうほつとこうぜ」

先程からI Fの話をしては落ち着きを失っている黒澤姉妹を一瞥すると、陸は目の前に聳える長い階段を見据えた。

この先に伝説のスクールアイドルμ□sの母校、音ノ木坂学院があるという。

「つ……！」

「……!! おい千歌!」

皆が感慨に耽っていた中、千歌がそれを打ち破って一気に階段を駆け上り始めた。

「抜け駆けはズルい……!」

「ずら……!」

負けじと他のメンバーも階段を駆け上り始め、少し遅れて陸も地面を蹴り飛ばす。

ウルトラマンとしての力を使えば全員を追い抜いていち早く頂上に着くことも出来たが、それをしない。

今は、自分達なりに答えを出そうとしている彼女達の背中を見守ろうと思った。

「ここが……、μ☒sのいた……！」

「この学校を……、守った……！」

「ラブライブに出て……！」

「奇跡を成し遂げた……！」

階段を登り切った先に、その学校はあった。

正門前に並び立つ少女達の瞳は、一様に輝いて見える。

μ☒sが愛し、守りたいと願った学校。

今同じ境遇にある彼女達は、μ☒sが守り抜いたこの学校を見て何を思うのか。

A q o u r s が μ☒s に至らないものを、見つけ出すことが出来るのか。

「あの……」

「……………?」

不意に柔らかな声が鼓膜を打ち、十人同時にその発生源へと視線を移す。

前に千歌に見せられた画像の中でμ☒sが着ていた制服——つまりは音ノ木坂学院の制服に身を包んだ少女が、いつの間にかA q o u r s の近くで佇んでいたのだ。

へ・・・不自然だな・・・」

避難警報が解除されてからは、さほど時間は経っていない。

仮に避難した先から学校に戻って来ていたとしても、流星に早すぎる。

現に今周りに人は全くいないのだから。

まるで見計らったかのようなタイミングだ。

「・・・何か？」

陸とゼロが訝し気に視線を注ぐ中、少女はそれを一切意に介す様子もなく千歌達に瞳を向けた。

「すみません。ちょっと見学してただけで・・・」

「もしかして・・・、スクールアイドルの方ですか？」

「ああ。はい。μ'sの事・・・、知りたくて来てみたんですけど・・・」

「そういう人、多いですよ」

伝説のスクールアイドルの母校な事だけあって、やはり今のAqoursのように見学に来るものも多いらしい。

その事を伝えた後、彼女はどこか儂げに笑った。

「・・・でも残念ですけど・・・、ここには、何も残ってなくて・・・」

「え？」

「μ□sの人達、何も残していかなかったらしいです。自分達の物も……。優勝の記念品も……。ものなんか無くても、心は繋がっているからって」

「へっ……………！」

奇しくも、先程のウルトラセブンのゼロに対する言葉と同じものだった。

「……………それでいいんだよって」

セブンの言葉も、μ□sの言葉も、きつと伝えたい事は同じなのだ。

たとえどんなに離れても、目に見える繋がりを失っても、想いはずっと心に残る。

その想いがある限り、心はいつでも一つになれると。セブンもμ□sも、そう信じていたからこそその言葉。

人々の光と、その絆を信じた者達だからこそ言える言葉なのだ。

「どう？ 何かヒントはあった？」

梨子の問いに、千歌は少し間を置いてから頷く。

「……………うん。ほんのちよつとだけど……………梨子ちゃんは？」

「うん。私は来てよかった。ここに来てハッキリ分かった……………私……………この学校好きだったんだって！」

梨子の言葉を嬉しそうに受け取った後、千歌は音ノ木坂学院に向けて深々と頭を下げる。

「結局、東京に行った意味はあったんですの？」

「そうだね……。μsの何がすごいのか、私達と何処が違うのか、ハッキリとは分かっていなかったかな」

千歌の隣で、三年生の会話を耳を傾ける。

「果南は、どうしたらいいと思うの？」

「私？ 私は……。学校は救いたい。けど、Saint Snowの二人みたいには思えない」

顔を伏せながら果南は答える。

自分達の目標としたA—R—I—S—Eと同じ景色を見たいという一つの信念を貫き、純粹に強さと勝利を求めるSaint Snow。

それは学校を救いたいと思うあまりに、大切な繋がりを失ったかつての果南達三年生と似ている。

「……………ん？」

「ビッグになったね。果南も」

「訴えるよ」

感傷に浸る果南の胸を、鞠莉が思いっきり頬を擦り寄せていた。つくづく彼女じゃなかったら犯罪だと思う。

「ねえ！ 海、見ていかない？ 皆で！」

徐々に磨きがかかりつつある鞠莉の闇の仕草に陸が苦笑いをしていると、今の今まで夕日を眺め惚けていた千歌が突然そう提案してきた。

何か言うよりも早く千歌は電車から降りて行ってしまったので、寝ていた連中を急いで起こすと、陸もまた電車から飛び出した。

「……これは……」

「？ どうした？」

「……この場所から、何か強い残留思念を感じる……。終わりと別れに対する寂しさや葛藤……。だがそれでいて強い絆がある……。温かいな……」

「……？」

訳の分からない事を言い出したゼロは放っておき、陸は太陽が沈みゆく海を眺めるみかん髪の少女を視界に映した。

「私ね、分かった気がする。μsの何がすごかったのか」

「本当?」

「:..うん。 :..多分、比べたらダメなんだよ。 μsも、ラブライブも、輝きも:..:」
 ——輝いた者の栄光はいつだって後世の者に道を示す。時に希望の火を灯し、時に救いの手を差し伸べ、時には夢を与える。

「μsの凄いところつて、きつと何もないところを:..、何もない場所を、思いつきり走った事なんだよ」

——先駆者達も初めはそうだったのだ。輝く夢に魅せられ、自らもまたそうなりたいと願った。

「皆の夢を、叶えるために:..自由に、真つ直ぐに、だから飛べたんだ!」

——だがいつか気付く。同じ輝きは二つとしてないと。自分達の道を歩まなければいけない時が来ると。

「μsみたいに輝くって事は、μsの背中を追いかける事じゃない。:..:..自由由に走って事なんじゃないかな?」

——それは決して一人で進める道ではない。仲間と共に、たくさんの者の想いを背負って駆け抜けるからこそ、その先にある光を掴むことが出来る。

「:..:..全身全霊! 何にも囚われずに! 自分達の気持ちに従って!」

——そしてその想いが、次の世代へと受け継がれていく。それは我々ウルトラマン

とて変わらない。

それが彼女達の出した答え。

——未熟だったお前が、仲間と共にそれを理解することが出来た。

初めは純粋な憧れだった。

自分達も、 $\mu\Box s$ と同じように輝きたいと願ったから。

でもいつまでも $\mu\Box s$ の背中を追いかけていては、決してその光に手は届かない。

$\mu\Box s$ が、そしてゼロがそうしたように。

自分達の道を見つけ、走り出さなければいけないのだ。

それこそが、輝くという事。

「……………じゃあ、どこを目指して走るんだ？」

「私は……………、ゼロをイチにしたい」

自分達に寄り添い続けてきた光の巨人。東京のライブで味わった大きな挫折。そして入学希望者。

A q o u r s はいつだって、ゼロと共に歩んできたのだ。

ゼロがいた。ゼロがあったからこそ、今のA q o u r s がある。

そしてA q o u r sはまたゼロに戻る。

「あの時のまま、終わりたくない！」

憧れを捨て、自分達だけの道を歩み出す為に。

「千歌ちゃん……」

「それが今、向かいたいところ」

「ルビイも！」

「そうね、皆もきつと」

「なんか、これで本当に一つにまとまれそうな気がするね！」

「遅すぎですわ」

「皆シャイですから！」

学校を守り抜く為に、前に進んで、自分達の道を貫き、慈愛を胸に、未来の可能性を信じ、光と絆を結び、輝きと言う勝利を目指し、諦めずに想いを繋ぐ。

A q o u r sとはそう言う力なのだ。

「ふふ………！　じゃあ！」

「ああ、待って。指、こうしない？　………ゼロから……イチへ！」

自然に円陣が生まれ、九人の手が大きな円を描いたその時、

「へっ………！！」

千歌の胸に光が宿る。

失いかけた曜との絆を繋ぎ止めた際に発現し、ダークザギが異常な反応を見せた彼女の光。

「……あの光は一体……？」

リトルスターとはまた違う。彼女自身の光。

千歌の中に眠っている光、力とは一体何なのか。

「ほら！ 陸ちゃんとゼロちゃんも！」

「『え？』」

円陣を組んだまま、九人の少女は傍らでそれを見守っていた陸とゼロに笑いかける。

「二人も、A q o u r s の一員だよ！」

「っ……！！」

少し前まで、ずっと自分はA q o u r s にはいない存在なのだと思っていた。共にいる資格なんて、無いのだと思っていた。

戦いに巻き込みました。自らの手で傷付けました。

それでも彼女達は陸とゼロを仲間の一員なのだと受け入れてくれた。

——私達は、皆でウルトラマンなんだよ……。

ああ、そういう事か。今になって気付かされた。
もうとつくに、一人なんかじゃなかったのだ。

『行こうぜ、陸』

「お前いいの？ ゼロは否定されるぞ」

『・・・アイツ等がゼロから始まるなら、俺はその始まりを築いた事になるからな。変な事を気にするのは止めだ。さ、早く行こうぜ』

「・・・おう」

A q o u r s が自分達の道を進もうとするのなら、陸はそれを見守っていればいい、そう思っていた。

でもそれは違う。彼女達と一緒に駆け抜ける事こそが、共にいる陸の為すべき事。だからこそ、この足を進めなければなるまい。

——この大会が終わったら！ μ ⊠ s は・・・、お終いにします！！

「つ・・・」

踏み出した陸の頭に、とある少女達の声が響いた。

〈？ どうした？ 陸〉

「……いや。……確かに温かいな」

いつかAqoursも、μsのように輝ける日が来るのだろうか。

それは誰にも分らないし、今知るべき事でもない。

だから今は、彼女達に寄り添うだけだ。

「イチ！」

「ニ！」

「サン！」

「ヨン！」

「ゴ！」

「ロク！」

「ナナ！」

「ハチ！」

「キュウ！」

九人の作る輪に陸の手が加わり、さらに大きな円を作る。

「……ジュウ……」

『ジュウイチ！』

ここからまた、始まるんだ。

「ゼロからイチへ！ 今！ 全力で輝こう！！」
陸の腕で、ウルティメイトブレスレットが輝きを放つ。

A q o u r s
!!

サ——ン………シャイ——ン！！

六十三話 夏の終わりの帰路の刻

『……順調で何よりです。ヤプールの復活は予想外でしたが……、結果我々の役に立ってくれましたからね』

ダークネスファイブが拠点とする宇宙船の中、メフィラス星人魔導のスライは空間ウインドウに映し出された少女達の姿を見て鼻を鳴らした。

夕焼けの海岸で飛び上がるA q o u r sの中の一人——高海千歌には、より輝きを増した光が宿っている。

『これで計画を次の段階に移行できます。よくやってくれましたね、オウガ。……オウガ?』

スライが称賛の言葉を送っても、オウガは下を向いたままだった。

(光が強くなったから良かったものの……)

一時の感情に流され、千歌に施した暗示を解いてしまったあの時。

結果的により強く光を発現させるといふ目的は達成したものの、あの時の自分の行動はベリアル復活計画自体を破滅に追い込みかねないものだった。

少なくとも、前のオウガならこんな事はやらなかったはずだ。

(ホントに、不思議な子だよねえ……)

どうやら最近、あの高海千歌とか言う少女に毒されてきているらしい。

『もうしばらくは彼女を監視してください。オウガ、マグマ、ババルウ、メトロ
ン……メトロンは何処に……?』

ただ一人メトロン星人がいない事に対しスライが顎に手を当てると、自身も信じられ
ないと言った表情でマグマ星人が答えた。

『いや……それが……それが……』

「お疲れ様〜」

沼津の商店街。

陸とA q o u r sは翌日ここで行うライブステージでのリハーサルを終え、帰路に就こうとしていた。

「……予選までそんなに時間ないんだよな……、ホントに受けて大丈夫だったのか？」

「まあ、普通にスクールアイドルやってるだけじゃ厳しいって分かつちやつたし、やれることはやりたいんだ」

確かに陸も先日の入学希望者人数を見ているのでその気持ちは分からなくはないが、いくら何でもスケジュールが過密すぎやしないだろうか。

それにしてもスカイランタンのPVと言いい花火大会の時のライブと言いい今回の事と言いい、A q o u r sの地域貢献度は中々のものだろう。

「……あの、すみません」

「は……？」

帰ろうとしていた千歌に、不意に今回のイベント担当をしていた商店街の役員が声を掛けてくる。

「明日のイベントの事でお話がありました……、少しお時間頂けないでしょうか？」

「ああ、はい……」

いくら一商店街のイベントと言っても、ラブライブ予備予選突破グループが歌うとなるとそれなりに話題になる。ここ最近注目を浴び始めたAqoursならば尚更だ。

商店街としても威信が掛かってくるので、限界まで打ち合わせはしておきたいのだから。

「ん〜・・・、じゃー誰が・・・」

リーダーである千歌が残るのは確定だが、流石に彼女一人に任せる訳にも行かないのでせめてあと一人は打ち合わせに参加せねばなるまい。

しっかりとしていて、自分の意見をハッキリと伝えられる人間と言ったら・・・、皆自然と、ある少女に向かって視線を集中させた。

「・・・はあ・・・、仕方ありませんわね・・・」

黒澤ダイヤは諦めたように溜息と吐くと、すぐにその翡翠色の瞳を陸に向けてくる。

「少し遅くなりそうなので、ルビィは先にお帰りなさい。・・・仙道さん、お手数ですがルビィを家まで送って頂いてもよろしいでしょうか？」

二人並んで歩く黒澤家へと続く道に、ヒグラシの鳴き声が溶け込んでいく。そろそろ夏休みも終わりか。

「……何だかんだで、ルビイちゃんと二人きりになるのって初めてだよな……」
「……………ですね……………」

無言が続くこの状況が地味に辛く何とか話題を振ったが、それもすぐに終わってしまった。
う。

普段あれだけA q o u r sに関わっておきながら、実はルビイとちゃんと会話をした事はほぼ皆無に等しい。

よって、今この状況がものすごく気まずい訳で。

せめて花丸か曜がいれば……………。

(おいゼロ。なんか話題ないのかよ。お前俺より懐かれてるだろ)

〈懐かれてるってだけで俺も話した事ほぼねーよ。お前が自分で何とかしろ〉

(頼りにならねーなお前……………)

〈それを言ったらお前もだろうが!〉

「あの……………」

陸とゼロが脳内で口喧嘩を始めたその時、ルビイがおずおずと口を開いた。

「．．．ずつと．．．、聞きたかった事があるんですけど．．．．．」

「聞きたかった事．．．．．?」

陸が聞き返すと、ルビイは首を縦に振った。

「．．．はい．．．前に怖い宇宙人さんに花丸ちゃんが捕まっちゃった時があつたじゃないですか」

「ああ．．．、うん」

彼女が言ってるのは、まだルビイと花丸がA q o u r sに入る前の事。

その時ルビイに発現していたリトルスターを狙ってガッツ星人が現れ、花丸を人質に取った時の話だ。

あの時ルビイは自らの意思で前に進み、ガッツ星人から花丸を助け、ダイヤに本当の想いを伝える事で念願のスクールアイドルにもなることが出来た。

確かルビイに勇気を与えるきっかけになったのは．．．．．、

「あの時ルビイの事を励ましてくれたのって．．．．．、仙道先輩ですよ?」

疑問形でありながら、その声音には確信が含まれていた。

「まあ、そうだが．．．、よく分かったな」

「花丸ちゃんの事国木田って呼んでたの．．．．．、あと声で．．．」

「声で分かったのか？　すげえな……」

小さい頃からずっと一緒にいる曜に言われた事は何度かあったが、まだ出会ってさほど時間も経っていなかったルビィが気付くのは凄いだろう。

「……ルビィ、小さい頃からアイドルの曲とかいつぱい聞いてたから、音にはちよつと敏感で……」

少し誇らしげに無い胸を張るルビィ。

次の瞬間には話が逸れた事に気付いてハッと目を見開き、陸に向けて深々と頭を下げてきた。

「ああああの時はありがとうございました！」

「ああいや別に、俺はそんな大層な事は……」

そう言つて陸は両手を振る。

確かに陸はあの時ルビィを叱咤したが、最終的に勇気を出して一步踏み出したのはルビィ自身なので、陸の協力など微々たるものだろう。

「それに、それより前にもルビィと花丸ちゃんを怪獣の攻撃から庇ってくれたりして、ルビィ、先輩に助けられてばかりで……」

「それは俺が勝手にやった事だから気にしなくていいぞ!!」

『そ、そうだ！　それにあれはベロクロンの行動パターンを見切れなかった俺にも責任

「……頭がガンガンする……」

未だ頭の中で高い周波数の音が鳴り響いている。

隣では申し訳なさそうにルビィが頭を下げていた。

「……うゆ……、ゴメンナサイ……」

「いや、いいよ。忘れてたの俺だし……」

陸の言葉でルビィは頭を下げたまま僅かに顔を上げ、こちらの様子を伺う様に視線を向けた。

「あの……、怒ってないですか？」

「……何で俺が起こらなきゃならんのだ。悪いのは俺、ハイ、この話終わりー」

陸が強引に話題を断ち切ると、ようやくルビィの表情が緩んだ。

「……優しいですよね、先輩は……」

「……そうか？」

「・・・はい。花丸ちゃんも先輩はすごくいい人だつていつも言つてるし。善子ちゃんも頼りになるつて」

確かに一年生には他の学年の連中よりも甘く接している部分はあるが、果たしてそこまでだつただらうか。

『まあ、コイツお人好しだからな』

ゼロが冷やかす様に言葉を重ねてくる。

「・・・二人共、先輩と一緒にいると安心できるつて言つてました」

・・・いつの間にかそんなに頼りにされるようになっていたのか。

そもそも頼りになる云々の話なら、ゼロの方がよっぽど信用できると思うのだが。

『・・・お前はもう少し、周りの奴の事に敏感になつた方がいいぞ。刺される前になあ。あれビィ?』

「ですね」

「? どゆ事?」

ゼロとルビィの二人は通じ合っているようだが、陸には全く理解が出来なかつた。

「『……?』」

ふと何者かの気配を感じ、陸は咄嗟にウルティメイトブレスレットに手を掛けた。

『そこにいる奴！ 隠れてねえで出て来い!!』

ゼロが人格を表に出し、電柱の裏に隠れていた者に人差し指を向ける。

「ひよえ!!」

ビクンと身体を震わせて出てきたのは、恐らく陸と同年代であろう女の子だった。

制服を着ている事から学生だろうが、浦女のものではない。

(……普通に女の子だったな……)

へ………何か、もっと別なものに気配に感じられたんだが………

「……あ、あの……、何かルビ……、私達に用ですか……?」

決して身体には触れずに陸の影に隠れたルビが問いかけると、彼女は意を決したように口を開いた。

「あ、あの！ A q o u r s の黒澤ルビちゃんですよね!!」

「は、はいいい!!」

声を上擦らせながらルビが答えると、緊張した面持ちであるものを取り出す。

「やっぱりそうだ……!! ……その……、サインしてください!!」

震える手で差し出されたのは色紙だった。

「どうやらA q o u r s、そしてルビイのファンらしい。」

「ぴ……ぴぎ……え、えと……そのお……」

突然の事に困惑し、どうしたらいいか分からないと言った様子で陸に視線を向けてくる。

「……ここまで来てくれてたんだし、書いてやれよ」

せつかくのファンなのだ。無下に扱う訳にもいくまい。

ルビイは陸の言葉を聞くと、可愛らしい丸っこい文字でサインを書き始めた。

前に果南もサインを求められ、ルビイ同様戸惑いながら書いていたが、まず皆自分のサインを持っているという事が驚きである。

やがてサインを書き終わったルビイが色紙を返すと、少女は嬉しそうに目を輝かせた。

「ありがとうございます！ これ、大事にしますね！」

「……う、うゆ……」

「……ところで……」

少女の表情が一変し、訝し気に陸とルビイを交互に見始めた。

「……何か……？」

「・・・お二人は、恋人同士だったりするのでしょうか？」

「びぎっ・・・・・・・・!!」

「・・・・・・・・どうしてそうなる」

「いやーなんか。並んで歩く男女とかもう付き合ってるカップルにしか見えなくて・・・」
傍から見たらそうだったのだろうか。

それはさておき、この誤解は早く解いておいた方がいいだろう。

変な噂が立てば今後のA q o u r sの活動に影響が出かねないし、何よりルビィに迷惑だ。

「ああ。それは――」

「別に付き合つて無いです!!」

陸の弁明を遮り、ルビィが少し大きめの声でカップル疑惑を否定した。

「仙道先輩はA q o u r sのマネージャーで、今はお家まで送つてもらつただけです
!」

よほどカップルとして見られるのが嫌だったのか、究極の人見知り故にうまく初対面の人と話せないはずのルビィの口調がやたら流暢でハッキリしている。

女子高生は納得して帰って行つたが、陸としてはいまいちスッキリしない。

「? どうかしりました?」

ルビイにそのつもりはなかったのだろうが、あそこまで全力で否定されると少しくるものがある。

「……ルビイちゃんは……俺の事が嫌いですか……？」

「ええっ!!」

一瞬戸惑ったルビイだが、すぐに陸の言葉の意味を理解したのか慌てた様子で腕を振った。

「ああいや、さっきのはそういう意味で言ったんじゃなくて……、その……、仮にそう言う噂でも立ったら花ま……、困る人がいるだろうから……」

「困る人? 誰が?」

「えっと……それは……」

『おい陸。そういうのは聞くもんじゃねーぞ』

返答に困っているルビイを見て、ゼロが陸を諫める。

気にならないと言ったら嘘になるが、嫌われてなかったと分かっただけでも良しとしよう。

「……ルビイは……先輩がマネージャーで良かったと思いますよ……」

再び歩き始めた陸の耳を、ほとんど音になっていないルビイの声が撫でた。

「? なんか言った?」

「・・・何でもないです」

柔らかに微笑みかけてくるルビィ。

「いまいち釈然としないが、下手に詮索して嫌われても困るので聞かない様にしておう。」

「・・・けど、まさかこんなところまでサインもらいにくるようなファンが付くなんてな」
少なくとも結成したばかりの頃の A q o u r s では考えられまい。

最初は千歌の気まぐれで始まったものかと思っていたが、いつの間にか九人になって学校を救うために奮闘している。

本当に、未来とはどんな方向に転がるのか分からない。

『あの時感じた気配は一体・・・?』

「・・・気のせいだったんじゃないの?」

『だがあの感じ・・・、前にどっかで・・・』

『それは私の事じゃないかな?』

『うん!』

「ピギィ!」

ゼロの疑問に答える様に声が発せられ、反射的にその方に視線を流す。

音もなく現れたのは、以前千歌を攫おうと A q o u r s の前に現れたメトロン星人

だった。

そしてメトロン星人は、ルビイの前に仁王立ちしている。

『ルビイ!!』

ゼロランズを取り出して地を蹴ろうとするが、メトロン星人はそれよりも早く手に持った何かをルビイに向けて突き出した。

それは、白くて平たい紙だった。

『・・・サイン。下さいん』

六十四話 君に会えたから

まだルビイが小さかった頃、町に怪獣が現れました。

『キシヤアアアイヴウヴウウウウウウ!!』

「ひぐつ．．．！ ああうつ．．．！」

その怪獣は突然現れて、町を滅茶苦茶に壊してしまいました。

怖くて、痛くて、ルビイはずつと震えながら泣いていました。

いくら泣いても、いくら叫んでも、周りの人は誰も助けてくれなくて。

むしろ皆我先にと逃げることに必死で、小さかったルビイはいつの間にかお姉ちゃん達ともはぐれちゃって、ずっとずっと泣いていました。

その時は怪獣が突然姿を消してくれたおかげで助かったけど、六年後にまた怪獣が現れました。

『ヴァアヴウウウウウ．．．！』

「う．．．．．、うゆ．．．．．」

「ルビイちゃん！ 早く逃げないと．．．！」

高校生になっても、やっぱり怪獣が怖くて動けませんでした。

周りの人が助けしてくれることはなくて、ルビイのせいで花丸ちゃんまで逃げ遅れちゃって。

怪獣の攻撃が飛んできた時は、もうダメかと思いました。

——でもルビイが今ここにいるのは一人の先輩と、一人の巨人さんがいたからです。

『で、どうして俺達をここに連れてきた』

帰り道。いきなりメトロン星人と遭遇したと思ったら、何故かメトロン星人の住処となっている廃アパートに招待された。

警戒心を隠そうともしないゼロが敵意を剥き出しに問いかけるが、メトロン星人は今さつきルビイに書いてもらったサインを上機嫌で眺めていて答える気配がない。

『おい。聞いてんのかカラフル野郎』

『え？ あ、ああすまない。あまりに嬉しかったもんで』

人間態になっていない宇宙人の表情など地球人の陸には分からないはずなのに、何故かその顔はものすごく弛緩している様に見える。

メトロン星人は色紙を柵に飾ると、ちゃぶ台を挟んで陸達の正面に腰を下ろした。

『ほら、そんなに警戒してないで座りたまえ』

「・・・・・・・・」

一応言われた通りに座ったが、まだ警戒心を解いてはいけない。

こいつは前に他の宇宙人と徒党を組んで千歌を誘拐しようとしていた。今のところ敵意は感じないが、今回も何か企てているという可能性がないとは限らないからだ。

『とりあえず自己紹介と行こうか。私はメトロン星人のルイズ。君はゼロと一体化している仙道陸君だね？』

「・・・・・・・・そうだけど・・・・・・・・」

『そつちは黒澤ルビイちゃんだろ？ さつきはサインありがとね』

「は、はあ・・・・・・・・」

ルイズと名乗ったメトロン星人にお礼を言われたルビイはまだ怯えているのか、しっかりと陸の背後に隠れながら答えた。

「……アンタ、ダークネスファイブの仲間じゃなかったのか？」

『それが俺達に何の用だ』

陸とゼロの問いに、ルイズはばつが悪そうにチューリップのような腕で頭を書いた。

『いやね。最初はダークネスファイブに言われて君達の監視をしてたんだよ』

「……最初は……？」

陸が首を傾げると、ルイズが首を縦に振る。

『でね、ある日母星の発明品の実験も兼ねてAqoursのライブに言った訳さ。人の理性を狂わせるライトを使って、君達のライブと友情を滅茶苦茶に——ちよつと待って陸君その武器しまってお願ひ!!』

話の途中で陸がゼロランスを取り出すと、大慌てでそれを宥めようとしてくる。

キャラクターと言ひ口調と言ひどことなくオウガに似ている為、話の内容も相まって思わず攻撃態勢に移ってしまった。

『気持ち分かるけど話は最後まで聞いてくれ！ もう私は君達に危害を加えるつもりはない!』

『……なんだと?』

もう陸やAqoursに手を出さないととなると、必然的にダークネスファイブの命令に背くことになる。

彼がその結論に至った経緯は確かに気になるので、陸はゼロランスをしまつて再び床に座り込んだ。

『いいかな？ 今言った通り、最初はこの《宇宙ケミカルライト》を使ってAqoursやそのファンを凶暴化させて、人間同士の信頼関係を壊すつもりでいたんだ。何故かは分からないけど、そう言う命令だったからね』

そう言うところでは、その《宇宙ケミカルライト》とやらを目の前で掲げて見せた。見た目はライブなどで観客が持っているサイリウムと全く同じもので、これをサイリウムだと言われて渡されてもあっさり信じてしまう程だ。

どうやら近年のスクールアイドル人気を利用してしようとしていたらしい。

『それで、いざこの前のライブで実行してみたんだけど……、不思議なことに全く効果を示さなくてね』

『故障でもしてたのか？』

『いや。ライトが付いた時点できちんと起動はしていたんだよ。でも、君達Aqoursと、そのパフォーマンズを見ていた人間にはいつまで経っても効果が現れなくて……、どういう事だと思ってステージで歌う彼女達の方を見た訳さ。……』

そしたら』

「……そしたら？」

『……気付いたら全力でケミカルライトを振り回し、見事にハマっていたよ。A
qoursというスクールアイドルにね』

あまりに予想外な答えに拍子抜けし、ずるりと滑ってしまふ。

エージェントが任務対象に魅了されてうつつを抜かすのは一番やってはいけない事
だと思うのだが。

でもダークネスファイブの中にもAqoursのライブを見に来ていた奴がいると
千歌に聞いたし、上司が上司なら部下も部下だろう。

『それからというもの、ベリアル復活とか全宇宙の支配とか、なんかもうどうでもよく
なっちゃてね。ライブ繋がりで地球人の友達も出来たし、ダークネスファイブの元にい
た時には味わえなかった充実感を味わえた』

オウガと言いつロツケンと言いつヴィラニアスと言いつ。何でこう、宇宙人って尽くス
クールアイドルにハマるのだろうか。

これならウルトラマンが宇宙警備隊を結成するより、地球人が全宇宙に対してスクー
ルアイドルを披露する方がよっぽど平和になる気がする。

『……なんかヒカルとショウの奴から同じような話を聞いたことあるな……』

『ああ、ジェイスの事かい？ ずっとメトロン星の面汚しと思つていただけ……、
今となつてはその気持ちがよく理解できる。きつと彼も私と同じ気持ちだったんだろ

うね』

「あ、アンタが初めてじゃなかったのね・・・」

そんなんで大丈夫なのだろうかメトロン星は。

陸に母星の心配をされているとは露知らず、ルイズは胸に手を当てながらルビイの事を見据えた。

『私は君の事を押し置いてね。今日サインを貰えたことは本当に嬉しく思うよ』

そう言うルイズはもう侵略者には見えず、ただ純粹にスクールアイドルを愛するただのオタクだ。

『悪の星の元に生まれ、侵略者として名を馳せた種族の出身でも、こうして平和な種族と友好的に関われる切っ掛けを与えてくれたのは紛れもなく君達だ。・・・過去に私がやった事を考えればこんな事を言うのは可笑しいのだろうか。・・・ありがとう』

ぺこりと頭を下げられ、陸もルビイもどう返したらいいのか分からなくなる。

『ここからはここでひっそりと暮らしていくつもりさ。任務を放棄した私を、ダークネスファイブが放っておくとは思えないからね。・・・こんなものまで発現しちゃつたら尚更だよ』

『っ・・・！』

それでもA q o u r sのライブは参加するけどね、と笑ったルイズの胸には、赤色の光の球が宿っていた。

「・・・宇宙人さんって、悪い人ばかりじゃないんですね・・・」

ルイズの住まう廃アパートを後にし、陸はルビイと共に再び帰路を進んでいた。

「・・・ルビイ・・・、ずっと宇宙人さんは怖い人ばかりだって思っていました。・・・」

花丸ちゃんが捕まえちゃった人みたいな・・・」

『まあ、あんときのガッツ星人は正真正銘の下衆野郎だったが・・・、友好的な宇

宙人だって山ほどいる。現に俺だって宇宙人だからな』

「それは・・・、そうなんですけど・・・」

辺りはすっかり暗くなっており、月明かりがぼんやりとルビイの顔を照らす。

「・・・いい人なのに、隠れて生きていけないなんて・・・」

ルビイの言いたいことは分かるが、ルイズだつて日陰者になる覚悟で悪事から足を洗つたのだ。それくらいは彼も割り切っているだろう。

問題は、彼に宿っているリトルスターだ。

(・・・宇宙人も、リトルスターを発症するんだな)

〈別に不思議な事じゃない。カレラン分子さえ体内にあれば、ウルトラ戦士以外の生命体は皆リトルスターを発症する可能性はあるんだ。・・・それよりどうする？

裏切つた上にリトルスター発症となれば、いよいよ本格的にダークネスファイブはカラル野郎の事を見逃さねーだろうよ〉

(・・・)

陸はちらりと隣のルビイを一瞥した。

もしルイズがダークネスファイブに殺されたとなれば、きっと彼女は悲しむだろう。

だが陸はまだ千歌を攫おうとしたルイズの事を許した訳ではない。本人が反省していても、その罪は消えないからだ。

(・・・助ける義理はない)

〈・・・そうか。・・・まあ、仕方ねーわな。どうするかはその時に決めよう〉

今はルイズの事より、明日のイベントでのライブだ。

地域、A q o u r s、そして何より浦女の宣伝になるのだ。明日のイベントの重要性

は高い。

もう千歌やダイヤも打ち合わせを終えて家に帰っているだろうし、ルビイを家に送ったら千歌に何を話したのかを聞くとしよう。

(………ん？ 打ち合わせ終わった？)

何かとてつもなく嫌な予感がし、恐る恐るスマホの画面を確認する。

………そこには、十件を超える黒澤ダイヤからの着信やメールの履歴が………。

「はわわ………」

ルビイも自分の携帯に届いていたメッセージに気付き、青い顔でプルプル震えていた。

互いに、全く気付いていなかったのである。

「せせせせせ先輩………、おねっ………、お姉ちゃんすっごく怒って………」

「………終わった」

この後二人仲良く説教された。

「……陸先輩、昨日ルビイちゃんとなくにしてたずら……?」

「……顔が怖いんだけど……」

翌日。

もうすぐライブが始まる商店街に顔を出すと、いきなり花丸がジト目を向けてきた。心なしか不機嫌に見えるのは、陸がルビイに何か変な事をしたと思っっているからだろうか。

「えーと……、昨日はめと——」

「めと?」

「……いや、何でもない」

花丸がルイズと関わることで危険な目に遭う可能性は否定できない。そう考えると彼女に昨日の事は話さない方がいいだろう。

だがその事をご理解いただけなかったようで、花丸は余計に不機嫌そうな顔で詰め寄ってくる。

「……先輩が話さないって言うならおらにも考えがあるずら……、善子ちゃん——」

花丸が名を呼んだ瞬間、傍らで今のやり取りを見ていた善子が一瞬で陸の背後に回り込んできた。

「ヨハネよ！ けど陸！ リトルデーモンの分際でこの私に隠し事など百年早いわ！

堕天流——うえっ？」

「ずらっ！！」

掴みかかってくる善子を身を翻してかわし、軽く背中を押して勢いのままに花丸と衝突させる。

そして、

「堕天流鳳凰縛」

「ずらああああああ！！」

「よはああああああ！！」

以前喰らった際の感覚を元に善子のコブラツイストを完全再現し、二人の関節を同時に締め上げた。

〈あん……………？〉

花丸と善子が悲鳴を上げる中、ゼロが本来このグループにいるはずの少女がいなくて気が付く。

〈……………ルビイの奴、どこ行った？〉

「うう………」

ライブを見るために集まった人の中から、ルビイは昨日会ったメトロン星人ルイズを探していた。

「……る、ルイズさーん……？」

ルイズは、ルビイに宇宙人は怖い者ばかりではないと教えてくれた。

彼はもう受け入れている様子でいたが、やはりいい人が堂々と生きていけないのは心が痛い。

だからせめてライブは楽しんでいってください、そう伝えられたのに。

「……め、メトロンさーん……？」

一応知りうる限りの呼び名を投げかけたが、ルイズからの返答はなかった。

「……メトロンだと……？」

「ピギィ!!」

代わりに見覚えのない男に隣に立たれ、ルビィは驚き声を上げる。

「……おい娘。貴様の言うメトロンとはメトロン星人の事か」

全身黒尽くめの如何にも怪しい男で、全身から殺気を放つその姿はルビィを警戒させるには十分だった。

そしてすぐに理解する。この男はルイズが所属していた組織の者で、裏切った彼を始末しに来たのだと。

とにかくここは誤魔化さなくては。

「………うゆ………」

と思ったのだが怖くて言葉が出せない。

スカルゴモラやベロクロンが現れたあの時から全く成長していない自分が情けなく思える。ここでなにかうまく言い訳しなければ、ルイズに危険が及ぶかもしれない。

そしてそんな様子を見て、男はルビィがルイズと何かしらの関りがある事に気付いてしまったらしい。

「………やはりな」

「び——」

逃げようとするよりも早くうなじに手刀が叩き込まれ、重い衝撃と共にルビイの意識はブラックアウトした。

『……！ おいカラフル野郎！』

ルビイを探して商店街を走り回っていた陸は、人間態となったルイズを見つけてその近くに駆け寄る。

「おや陸君。どうかしたのかい？」

中年の男性に姿を変えたルイズは頭に鉢巻き両腕にサイリウムを装備しており。もう本当にただのドルオタと化していた。

もう初めて遭遇した時の面影皆無となった彼に、陸は真剣な面持ちを向ける。

「アンタ、ルビイちゃんの事見なかったか？」

「いや、見てないけど………。ルビイちゃんに何かあったの？」

「なんか人を探しに行ったららしいんだが……、アンタのどこじゃなかったのか……」
「何……?」

陸の言葉に、ルイズは眉を寄せた。

「……もうそろそろ始まるってのに……、どこ行つたんだよ……」

「……もしかしたら、私の追っ手に捕まつてるのかもしれない」

「え?」

「……もう音声不審になつてから結構経つし……、どこに追手がいてもおかしくないんだよね……。もしルビイちゃんが本当に私の事を探してたなら、捕まつて人質になつてるなんてことも十分に——」

直後、ルイズの震え声をかき消すように人々の悲鳴が響いた。

それと同時に猛々しい叫びが上がる。

『メトロン星人!! 聞こえてるのか!!』

「……この声……」

「っ! おい!!」

自身を呼んだその声に聞き覚えがあつたのか、ルイズは青い顔で駆け出し、商店街のゲートを抜けて空を見上げた。

そしてそこにいたのは、

「ッ！ アイツはっ……！」

『マグマ星人?!』

「やっぱりか……」

悔しそうに呻くルイズが見上げる先はマグマ星人の掌に載せられた透明な球体。

その中にはルビィが目を閉じて横たわっていた。どうやら本当に捕まっていたらしい。

「あの野郎……！」

『陸、行くぞー!』

「言われるまでも——ってオイッ?!」

陸がブレスレットからウルトラゼロアイを取り出すよりも早くルイズは本来のメトロン星人としての姿に戻り、巨大化してマグマ星人と対峙していた。

六十五話 小さな恋のうた

『出てきたか………、メトロン星人』

逃げ惑っていた人々は、何やらマグマ星人との間にただならぬ雰囲気を漂わせるカラフルな宇宙人を見上げていた。

『アイツ………。殺されるって分かって出て行きやがった………。』

「……そこまでルビィちゃんの事……」

陸とゼロも見守る中、ルイズはマグマ星人の持つ球体に腕を向けた。

『その子を離してもらおうか。貴様の狙いは私だろうか？』

『まさか本当に出てくるとはな。そんなにこの娘が大事か』

『その子は、その子の仲間たちは、例え侵略宇宙人として生まれても、他の星の者と平和的に関われる事が出来ると教えてくれた。運命は変える事が出来ると教えてくれた！

私はその恩を返したいだけだ！ さあ、早くその子を解放しろ！』

『はっ……、愚かしい。よもやそこまで地球人に毒されているとはな。………ほ

らよ』

ルイズはマグマ星人が乱暴に投げつけた球体を丁寧にかッチすると、しゃがみ込んで陸とゼロの目の前に置いた。

こつんと硬質な音がした後球体は弾け、中にいたルビイがそつと地面に下される。

『陸君、ゼロ。彼女の事を頼んだ』

ルビイに怪我などが無い事を確認すると、再び立ち上がってマグマ星人を見据える。

『・・・手荒な真似をしてくれたな』

『目的のためには手段を選ばないのが我々のやり方だろうか？ 貴様の十八番だったじゃないか』

『だからこそその行為が如何に卑劣なものかが分かるのだ』

『ふっ・・・、今更何を抜かすか・・・。やはり貴様は抹殺処分だ・・・。出でよ！ ケルビム!!』

マグマ星人が指を鳴らすと突如地響きが轟き、硬いコンクリートで舗装された道路がせり上がった。

『————ッ!!』

咆哮と共に地中から現れたのは、頭の角と耳部から生えた鎧状の鰭が特徴的な怪獣——

——宇宙狂険怪獣ケルビムだった。

『君と君達のステージは必ず守る！』

だがルイズはケルビムを見ても物怖じする様子はなく、それどころか大地を蹴って猛然と突進していく。

『ツ！ アホ！ ケルビム相手にそんな不用心に突っ込む奴があるか!!』
『がああああ．．．!!』

ゼロの忠告も聞かずに突撃していったルイズは、ケルビムの両腕に生えた鋭利な爪により敢無く跳ね飛ばされてしまう。

『フツ！』
『くっ．．．．．!!』

追撃に襲いかかったマグマ星人のサーベルを転がって回避し、たまらず二体から距離をとるが、

『ツ———!!』
『ぐああああああああ!!』

先端に鋭い棘が何本も生えたケルビムの尻尾に打たれて吹き飛ばされた上に、更に奴が吐き出した火球が直撃してしまう。

動きを見ればルイズが戦闘馴れしていないのは分かるが、それを考慮した上で考えてもあの連撃は恐ろしいものがある。

「何だよあれ………」

『ケルビムに間合いは関係ねえ。そう言った意味でも厄介な怪獣なんだよ。……おまけにアイツは——』

ゼロのセリフの途中でケルビムの身体がふわりと浮かびあがり、倒れ伏すルイズへと向かっていく。

「飛べるのかよ!! あのナリでか!!」

驚愕する陸をよそに、ケルビムは空中で自身を回転させて尻尾を遠心力で振り回し始める。

周囲に突風を巻き起こしながら尻尾の先はルイズの腹部を完全に捉え、一際大きくそのカラフルな巨体を薙ぎ払った。

「ふっ………んん………?」

可愛らしい声が耳朶に触れ、陸は背中におぶさった少女に視線をずらした。

「……起きたか？」

「……仙道先輩……？」

ルビイはしばらく寝ぼけまなこをぱちくりさせていたが、やがて陸に背負われている今の状況を理解したのか、顔を青く染め上げていき——何とか叫ばずに堪える。

「……先輩が助けてくれたんですか？」

降ろされたルビイは、自分がマグマ星人に捕まっていた事は分かっていたらしく、羨望交じりの上目遣いを陸に向けてくる。

それに対し陸は、少し表情を険しくしてウルトラマンのいない戦いの場を視界に映した。

「ルイズさんが……」

目を見開くルビイが見上げる先では、マグマ星人とケルビムに蹂躪されるルイズの姿が。

『ごはっ……』

肺から空気が全て抜けた音がする。

『があ……』

骨が軋む音がする。

『ぐああッ……！』

皮膚が裂ける音がする。

ルイズは既に満身創痍だというのに、マグマ星人もケルビムも攻撃の手を緩めようとしない。

「仙道先輩！ ゼロさん!! ルイズさんを助けてあげてください!!」

『ツ……、ルビィ……、お前……』

今まで触られただけで悲鳴を上げていた陸の身体に自らしがみつぎ、ルビィは必死にそう訴えてきた。

何が彼女にこうまでさせるのか、それは言うまでもない。

ルイズがもう悪質な宇宙人でない事はもう分かっているのだ。ルビィやAqourの事を大好きになっけてくれている事も十分理解している。

だが完全に信じ切れていないのも事実。全てルイズの演技で、出撃していったところを三体で叩き潰すという可能性も捨象出来ない。

陸が葛藤に苛まれる一方、遂にルイズは膝を折ってしまった。

「あ……」

ルビィが声を漏らすと同時に、ケルビムの口に膨大な量の熱が籠っていく。

自身に迫る死を感じ取り、ルイズは諦めて首を垂れた。

「万事……休すか……」

「ルイズさん!!」

ルビィの悲痛な叫びの後、巨大な火球が解き放たれ――、

ルイズに到達する前に描き消えた。

『……?』

いつまで経つても自分の身体が炎に抱かれない事に疑問を覚えたルイズが恐る恐る顔を上げると、そこには。

『……ゼロ……、陸君……』

ルイズを庇うようにケルビムの前に立ちふさがり、バリアを張るウルトラマンゼロの姿が。

『何故……?』

「……勘違いすんな。ライブが中止になるのが嫌だったただけだ」

『ツンデレだな』

「うるせえ。次言ったら引つ叩く」

陸をからかった後、ゼロはマグマ星人とケルビムに向かってファイティングポーズを

取った。

『ライブ前の余興ならもう十分だ。満を持してヒーローの登場だぜ!』

『・・・何故邪魔をするウルトラマンゼロ! 貴様にメトロン星人を助ける義理はないはずだ!!』

『こいつを助けてくれって言うウチのお姫様からの命令なんでね』

前を向いたまま、ゼロは後ろで膝をつくルイズに手を差し出した。

『さあ行こうぜ。守りたいんだろ? アイツ等のライブを』

『っ・・・・・・・・・・。ああ!』

ゼロの言葉に力強く頷き、ルイズは差し出されたその腕を取って立ち上がる。

ルイズに宿ったリトルスターが輝き出すのは、それと同時だった。

『・・・力を・・・、貸してくれるのか・・・?』

その問いに答える様に光は更に輝きを増す。

「そーいや、リトルスターが発現してる時点で何かしらの強い決意があったんだよな。考えてなかったわ」

『ともあれ、これで演者は揃った。そろそろおっぱじめようぜ!!』

駆け出したゼロの身体が蒼く煌き、ゼロランスを構えながらケルビムの懐へと潜り込んだ。

『レボリウムスマッシュユー!』

『ッ——!』

凄まじい衝撃波に襲われて吹き飛ぶケルビムを、更にゼロの後方から飛んできた赤白い光線がヒットする。

ルイズの腕から立ち昇る煙が、あの光線を彼が放ったことを物語っていた。

『ちい……、リトルスターか……!』

マグマ星人は舌打ちを打つと、もう一度指を鳴らしてワープゲートを開いた。

『……流星に分が悪い。ここは一度引くが……、メトロン星人! いずれ貴様は始末するぞ!』

安いセリフを残して、マグマ星人はゲートの中へと姿を消した。

残るは、奴が召喚したケルビムのみ。

『ミラクルゼロスラッガー!』

指揮棒のようにゼロランスを振るい、無数の光の刃をケルビムに向かって殺到させる。

分裂したゼロスラッガーは全て奴の背後に回り、強力な武器となり得る尻尾を切断した。

『ルイズ! 今だ!』

『うおおおおお．．．．．!!』」

前に出したルイズの両腕から赤熱の奔流が放たれ、悲鳴を上げていたケルビムの頭部の角を破壊する。

『ハアアアアアア!!』

今の衝撃で状態が仰け反り、無防備に晒した胴体にゼロランスによる斬撃が一閃。

『ッ——!!』

身体を一刀両断され、掠れた断末魔を上げながらケルビムは爆散した。

『ピンチに颯爽と登場してスカツと敵を倒す！これが主役の生き様だぜー!』

通常形態に戻ってよく分からない事を言うゼロのウルティメイトブレスレットに、ルイズの胸から分離したりトルスターが吸収される。

——— 違えた道を改め、真なる正義に目覚める力——— ウルトラマンジャスティス。

「．．．．．あれ？ 今回はカプセルじゃないの？」

『この前のダイナカプセルで空きのカプセルは全部使っちゃったからな。俺の力を甦らせる訳でもねえし、新しい力としてブレスに宿ったんだろ』

「．．．ホント便利だな。ウルティメイトブレスレット．．．」

流星は神と呼ばれしウルトラマンノアに授かった代物だ。

陸は何でもありのブレスを一瞥した後、荒く息づくルイズに視線を移す。

『……ありがとう。陸君、ゼロ。……ルビィちゃん……』

「っ！ オイ!!」

安堵の溜息をついた後、ルイズは徐々に人間と同じ大きさに戻りながら後方に倒れ込んでいった。

「……ルイズの家に来てくれて……、何する気だよ」

、商店街でのライブから数日が経った。

今日もA q o u r s の練習を終えて自宅でだらけていた陸の携帯に、ルビィからそんなメッセージが届いた。

「一応言われた通り来たが……、アンタ何か聞いてないのか？」

『さあ？ 私もさつき聞いたから』

ルイズと共に胡坐をかいて、眼兔龍茶というらしい謎の飲み物を口に流し込みながら襖の向こうで何やら準備をしているルビイの登場を待つ。

「……そういう身体は大丈夫なのか？俺等が助けるまで随分と滅多打ちにされてたけど」

『ああうん。もうすつかり。これでも一応宇宙人だからね』

ルイズは戦いの後すぐに気を失ってしまい、命懸けで守ったAqoursのライブを拝むことは出来なかった。

一応気を遣った陸が映像を撮っておいたのだが、そんな優遇はファンとしてマナー違反だと言つて見ようとはしなかったのだ。

難儀というか律儀というか、少なくともほんのちよつと前まで侵略行為をしていた者のセリフではない。

「お待たせしました!!」

がらりと勢いよく襖が開き、準備を終えたらしいルビイが元氣よく声を上げた。

「『え?』」

陸、ゼロ、ルイズの三人は、登場したルビイの姿に思わず呆氣にとられる。

どうやら着替えていたらしく、ルビイは先日ライブで着用したライブ衣装にコスチュームチェンジしていた。

『えっと・・・、ルビイちゃん？ その恰好は一体・・・？』

もちろん眼福だけどねと付け加えながら問いかけるルイズに、ルビイは笑って答えた。

「この前のお礼です」

『え？』

「・・・悪い宇宙さんに捕まっちゃったルビイを助けてくれたのに、ルイズさん気絶しちゃつてライブ見れなかったから、その代わり、つて言うのかな？」

なるほど、それその衣装か。

だが、一ファンとして特別な優遇を受けることを望まないルイズの答えは・・・、

『・・・せつかく着替えてくれたけど、それはマナー違反だから——』

「受け取ってやれよ」

あらかじめ返答を見越していた陸は、ルイズの言葉を遮る形で声を発した。

「・・・ファンだとかマナー違反だとか、んな堅苦しい事にこだわらなくてもいいんじゃない

ねーの？」

『・・・しかし・・・』

「アンタは命懸けでA q o u r sのライブを守った。受け取る権利はあるはずだぜ？」

ルビイが今回こうしようと思ったのは、見れなかったライブの代わり以前にルビイ個

人としてのお礼なのだ。

命を張ったルイズがそのお礼を受け取ることに、文句をつける奴は言うまい。むしろいるならばつ飛ばしてやる。

『……分かった。じゃあありがたく受け取るとするよ』

ルイズが首を縦に振ったのを見て、ルビイは嬉しそうに笑みを深めた。

それを微笑ましく思いながら眺めた後、陸はそつと立ち上がって部屋から出て行くこうとする。

邪魔しちや悪いし、自分はとつととずらかるとしよう。

『おや。どうして帰ってしまふんだい?』

それを引き留めたのはルイズだった。

『君だつてずつとA q o u r sの皆を守ってきたんだ。君にだつてこれを受け取る権利はあるはずだぞ。君にこの事を伝えていかなかったという事は、君にもサプライズのつもりだつたんじゃないか? だろう? ルビイちゃん』

「はい! 陸先輩とゼロさんも!!」

前におぶさつて事で陸に触れる事には慣れたのか、しつかりと手を掴んで引き留めてくるルビイ。

ていうかささりげなく名前前で呼んでるし、流行ってるのだろうか。

『……なんつか、すげえよなお前。全く気付かないとことか特に』

「………何が？」

ゼロは時々理解できない事を言う。もつと理解できないのは陸以外の人間は大体ゼロの言っている事を理解している事である。

現にルビィとルイズもジト目に近い視線を陸に突き刺してくる。どうやら意地でもここに残らせるつもりらしい。

「………わーたよ。んじや頼むわ。ルビィ」

聞くまで返してくれそうに無かったので、陸は再び床に腰を下ろした。

今までの事を振り返るとむしろ陸の方が礼を言いたいぐらいなのだが………、ルビィがせっかくこの場を設けたのだ。無下に扱う訳にもいくまい。

地球人と宇宙人の友情を祝って、という事にしておこう。

ルビィにはかつこいいなと思っていた人が二人いました。

一人はA q o u r sのマネージャーをしてきている仙道陸先輩。もう一人はウルトラマンゼロさん。

二人とも優しく、強くて、何度もルビィやA q o u r sの皆を助けてくれました。でも実は先輩はゼロさんで、ゼロさんが先輩で。

その事が分かった時はルビィすつごく頭がこんがらがったけど、それでもすつごく嬉しかったです。

先輩もゼロさんも、ずっとルビィ達を守ってくれてたんだって。

それに、怖いものと思いついてた宇宙人さんと友達になれたのも、二人がいたからです。

もちろんルイズさんにも聞いて欲しいけど、二人にも同じくらい聞いて欲しいから。だからルビィは、その精一杯感謝を伝えます。

精一杯の歌に、大好きを乗せて。

— R E D G E M W I N K

六十六話 五将が動く時

『．．．．．時は来ました』

紅い瞳が幾つも向き合う中、メフィラス星人魔導のスライは厳かに声を出した。

『メトロン星人が裏切ったのは予想外でしたが．．．．．問題はありません。高海千歌の光は水準値にまで発現しました。計画を更なる段階に移す時です』

『ヒエヒエヒエ．．．．．まさかこうも順調に事進むとは思わなかったよなあ．．．』
『グウウウウ．．．』

『．．．遂に吾輩達が動く時という事か．．．腕が鳴るわい』

『落ち着きなさいヴィラニアス。貴方が動くにはまだ早いです．．．まずは貴方に頼みましょうか。ジャータル』

『ギョポツ．．．！ 任せるがいい』

『ケケ．．．、今度は早々に退場するなんて事はねーようにしろよ．．．？』

『今のところそのような事態は想定していませんが．．．まあ、一応用心しておきなさい』

い』

ジャタールに指示を飛ばした後、スライは両腕を広げて高らかに宣言する。

『他の者は急ぎゼガンの準備を！ 偉大なる皇帝陛下復活の礎となれることを誇りに思いなさい。・・・ウルトラマンゼロ、今回のゲームは我々が勝たせて頂きますよ。我等ペリアル陛下直属隊——』

『『『『『ダークネスファイブが！（グオオオオオオオオ！）』』』』』

「・・・誰だよ高いアイス頼んだ奴・・・」

練習中のAqoursの皆に見事にパシリにされた陸は、頼みの品をアイスが入ったレジ袋をぶら下げながら皆の待つ浦女に足を進めていた。

地区予選を明日に控え、ここ最近は毎日練習だ。

毎日毎日必死に汗かいている皆と比べればアイスのパシリ程度大したことはないし、ゼロと一体化しているおかげで暑さも苦ではない。

ただレジ袋の中に入っているアイスは暑さに弱いので急ぐとしよう。

へしかし、ちよつと前まで初心者のペーパーだったあいつ等が、まさかこんな短期間でここまで大きくなるとはな

「ああ、それは俺もびつくりだ」

♫sに憧れた千歌が始め、曜、梨子と続いて入り、体育館でファーストライブを行った。

そこからさらに個性豊かな六人が加わり、今や地区大会に出場できるレベルである。とても始めたばかりの頃からは考えられまい。

「まあ、それでこそ今まで見守ってきた甲斐があるつてもんだよな」

「だな。あとは入学希望者さえ増えれば完璧なんだろうけどな」

先日商店街で行ったライブの結果も芳しくなく、依然浦の星女学院の入学希望者数はゼロ人のままである。

「原因お前なんじゃね？ 一緒にいるとゼロを呼び寄せるとか」

「アホ抜かせ。だったら予選突破出来てねーよ」

「だよなー」

これだけ頑張っているのに入学希望者数が増えないのは、単純に浦女の事が全く世間に知られていないからだろう。

いくら A q o u r s が有名になろうと、それに比例して浦女の名前が広まる訳ではない事は現状を見ればよく分かる。

「まあ、流石に全国区で歌えば一人くらいは増えるんじゃないの?」

「全国で歌って一人かよ。．．．まあ、それがフラグにならなきゃいいけどな」
「．．．．．誰と話してるの?」

浦女の校門に差し掛かったところで、聞き馴染みのない声が耳朶に触れた。

振り返るとそこには、どこかで見覚えのある私服姿の三人の少女が。

「えつと．．．．．、仙道君．．．だっけ．．．?」

「．．．え? あ、ああうん。そうだけど．．．．．?」

確かこの三人は浦女の生徒で、千歌達二年生のクラスメイトの．．．．．。

「．．．．．覚えてないって顔してるね．．．」

「．．．．．面目ない」

何度か千歌が彼女達の名前を呼ぶところを見た事はあったが、如何せん人の名前を覚える機能が死んでいるので覚えていない。

一度でも会話すれば何とか覚えられるのだが……、彼女達とはそう言う機会もなかったので尚更だ。

一応名前を覚えてもらい、彼女達は右からそれぞれむつ、よしみ、いつきという名前だという事を脳内にインプットする。

「……で、俺に何か用でも?」

「いやー、何か一人でぶつぶつ言ってるなーって」

よしみに言われ、普通にゼロと声を出しながら会話していた事に今更ながら気が付く。一人だから完全に油断していた。

A q o u r s の皆にはゼロの事が知られているので基本的には陸もゼロも声を出しながら会話しているが、この三人の少女は知っている訳がないので当然変に見えただろう。

「いや……その……、独り言だから気にしないでいいぞ?」

ちよつと苦しい気もしたが、三人は納得してくれたので良しとする。とりあえず今後は一人の時もあまり気を抜かない様にしようと思つと決心しつつ、陸は三人の顔を見据えた。

「……で? お三方はどうしてわざわざ夏休み中に学校に?」

「あーうん。借りてた本を図書室に返しに」

「となると花丸か……。多分図書室に皆もいるけど、顔出してくか?」

「おお、そうなんだ。じゃあ顔出してこつと！」

その言葉を聞いたいつきを筆頭に、三人とも校舎の中に入って行く。

陸もアイスが溶ける前に届けなければいけないのでその後が続いた。

「……ところで、仙道君はA q o u r sの誰かと付き合っているの？」

夏休み中の校舎は当然の事ながら人の気配はなく、外でやかしく鳴き続けるセミの声と陸達の足音だけが反響していた。

そんな世界に、にやけながらむつが発した声が割り込んでくる。

「……どうしてそうなる」

なんか少し前にもこんな事あったよなと既視感を感じつつも、陸はむつに聞き返す。

「いやー、他校の仙道君がわざわざウチの学校の部活に協力するのは、A q o u r sの中にそういう関係の人がいるからかと思ってたんだけど……、違うの？」

「……まあ、やっぱり俺がいるのは変だよな」

鞠莉さんにも言つてやってくれよと文句をぼやきながら陸は続けた。

「……別に誰かとそう言う関係にやなつてねーよ」

むつはふーんと鼻を鳴らしながら、不思議そうに陸の顔を覗いてくる。

「……じゃあ、何で仙道君はA q o u r sのマネージャーやってるの？」

「え？」

そりゃあ、から続けようとして、言葉に詰まってしまふ。

……そう言えば、何でだ？

「あー！ 陸ちゃんー！」

「……千歌、お前もか……」

翌日。ラブライブ東海地区地方予選当日。

そんな大事な日に盛大に朝寝坊をかました陸は、法定速度を遥かにオーバーする勢いで路上を走行していたところ、同じく寝坊したらしい千歌と十千万の前で遭遇する。

「美渡姉も志満姉も、梨子ちゃんまで起こしてくれなかつたんだよー!! それに誰も連絡してきてくれないし！」

自己中な文句を垂れながら、千歌は一秒の迷いもなく自転車の荷台に腰を下ろした。

どうやらこのまま乗せていってもらう気満々らしい。

「ていうか、何で陸ちゃんまで寝坊してるの!! 曜ちゃんは?」

「・・・昨日ちよつと喧嘩しまして・・・、拗ねて口聞いてくれなくなった」

「相変わらず仲いいね・・・」

『子供だけだろ』

少し呆れ気味に笑いながら、千歌は陸の腰に手を回した。

それを合図に全力でペダルを踏み、人間の限界を遥かに超えた速度で浦女へと急ぐ。

本当は直接沼津駅に行ければベストだったが、ギリギリまで練習をしたいの事で早朝に少しりハーサルをやる事になっていたのだが・・・、この分ではもう無理だろう。

ダイヤに説教される事はもう腹をくくり、自転車は浦女に続く坂道へと差し掛かった。

「・・・そう言えば陸ちゃん。昨日むつちゃん達と何か話したの?」

「・・・どうした急に」

「いや、むつちゃん達と一緒に図書室に入ってきた時からなんか変だなんて・・・」

どうやら気付かれていたらしい。流石幼馴染。

「ここでごまかしても無駄だし、きつとそうしたら怒るだろうから正直に話す事にし

た。

「……聞かれたんだよ。何でAqoursのマネージャーやってんのかって」

「え……?」

「……それで、そーいや何でだろうなって思ってたよ……」

思ってみれば、今こうしてAqoursと共にいるのは流され続けた末だろう。

子供を甘やかす感覚で千歌に協力しようと思つた矢先にゼロと出会い、リトルスターを発症した梨子を守る過程で仲良くなり……、その後も流されに流されて今の陸がある。

彼女達を守りたいと思つているのはウルトラマンとして戦っている陸の願いだ。

だったら、Aqoursのマネージャーとしての陸はどう思っているのか。

それを考えた時、何も浮かんでこなかった。

「……今は何かそれが当たり前みたいになつてるからさ、考えた事なかったな……」
以前曜に居場所に意味を求めるのではなく、その場所にいたいから居ればいいと言つたが、それとはまた別物なのだ。

流されていたとは言え、今もこうして彼女達に付き合っているのは何かしらの理由があるからだ。

けれどもそれが漠然とし過ぎていて、うまく形になつていない。

それがどうにももどかしい。

「……よく分かんないけどき……」

陸の背中にしがみつきなからそれを聞いていた千歌は、ほんの少しだけ腕に力を込めて小さな身体を押し当ててくる。

「……私が陸ちゃんにマネージャーをやって欲しいって思ったのは——」

——ピリリリリリリ!!

「おっ!」

千歌の言葉を遮るように、陸の携帯が着信音を鳴らす。

「……?」

その着信主に少し違和感を覚える。

電話を掛けてきたのは曜で、恐らく早く来いという催促の電話だろうが……、日課を放棄する程へそを曲げている彼女が掛けてくるとは思えない。

それにこういうのはいつも梨子かダイヤの役目のはずだ。

「……もしもし……?」

『陸!! どこで何してんの?! 早くしないと予選に間に合わないよ!!』

恐る恐る携帯を耳に押し当てると、鼓膜を劈く勢いで曜の怒声が響いた。

『皆カンカンだから! 早く来てよね!!』

その言葉を最期にプツリと通話は終了してしまった。

どうやら遅刻した事に対する怒りで昨日の事は吹き飛んでしまったらしい。

ただ一つ気になる事があるとすれば・・・、

「・・・千歌。お前誰かから連絡来てる？」

「え？ いや、さつきも言ったけど誰からも・・・。」

「・・・？」

同じく遅刻している千歌には一本も連絡を入れず、陸だけに早く来るようにと催促を
してきている。

仮に陸と千歌が一緒にいると変わっていても、やはり不自然だ。

とは言えこれ以上皆からの輦蹙を買うのも嫌だったので、陸は浦女へと向けて更に速
度を上げた。

「遅い！」

浦女に着くや否や、案の定曜に説教を喰らう陸と千歌。

「あはは．．．、ごめーん．．．．．」

両手を合わせながら千歌が謝つても、彼女の怒りは収まらなかつた様で。

「とりあえず皆の所行くよ．．．相当怒ってるからね」

その言葉に千歌はぶるりと身体を震わせ、陸は必死に言い訳を頭の中で模索する。

「ほら、早く」

「あー．．．、う——っ！」

曜が手を伸ばしてきたのを見て背筋に悪寒が伝い、反射的に腕を引き戻してしまふ。

(．．．．．なんだ、今の感覚．．．)

〈．．．．．これは．．．〉

殺気に近い、本能的に恐怖を覚える感覚。

「? どうかした？」

「いや．．．、何でもない．．．．．」

一瞬とはいえ、どうして曜からそんなものを感じたのか。

そしてこの感じ、前に一度どこかで体験した事があるような気がする。

へっ．．．！ 気を付けろ！ 何かある！

(は?)

いざ部室に入ろうとした瞬間、突如ゼロが警戒を促してきた。

だが聞こえたのは直接脳内に声が響いた陸だけで、千歌は申し訳なきような顔をしながら部室のドアを開き——そこで固まる。

「え……?」

声にならない声を漏らす千歌は、今自分の目の前に広がっている光景を理解できていないといった表情で硬直している。

陸もまた部室で何が起きているのかを確認すべく千歌の隣に移動し、そこで見たものは。

「……なんだ、これ……」

声を出すのに時間がかかった。

部室には昨日まで無かった物達が鎮座しており、昨日までいた者達の姿はどこにも見当たらない。

「……銅像……?」

中にあつたのは、それぞれ梨子、花丸、善子、ルビイ、ダイヤ、鞠莉、果南を模った銅像が七体。

皆どれもただの銅像とは思えない程に精巧で、苦しんでいるようなその姿は今にも動

き出しそんな錯覚を覚える。

「……皆……?」

「……なんだこの趣味の悪いモンは……」

『……コイツは……、前にグレン達が……!』

「……皆、ブロンズ像にされちゃったんだよ……」

二人が驚愕の表情で銅像達を見やる中、ただ一人その背後で落ち着き払っている曜は陸の方へと手を伸ばし——、

「ッ!!」

首元に迫った剣線を後方に飛びのいてかわした。

「陸ちゃん!!」

陸が曜を攻撃したという事に驚き目を見開く千歌の前で、身体の主導権を握ったゼロはブレスから取り出したゼロランスを曜に突き付ける。

『この俺に同じ手が通用すると思ったか——ブロンズ野郎』

「チツ……」

ゼロにブロンズ野郎と呼ばれた曜は、舌打ちをしながら自身の輪郭を歪ませていく。

『相変わらず……、戦闘に関する勘は流石だな』

やがて曜の姿をしていたそいつは、赤と青の体色を持ち、ノズル状の口を弄ぶ宇宙人

『奴等と同じ状態だ』

ジャタールが手を叩くと、梨子の隣に皆と同様ブロンズ像にされた曜が出現する。どうやら別空間に隠されていたらしい。

『訳も分からずに自分の身体がブロンズ像に変わっていく事に怯えるこやつらの表情と言ったら……、滑稽で滑稽で笑いが止まら——へぶああああッ!!』

下品な笑いを掻き消すようにゼロランスが顔面にめり込み、油断しきっていたジャタールは情けない声と共に壁に叩きつけられる。

「……ふざけてんじゃねーぞ……」

「え……?」

攻撃を仕掛けた陸を見て、千歌は初めて彼に対して恐怖に近い感情を覚えた。

「……陸ちゃん……?」

陸の表情にはかつてない程怒りが滲んでおり、その目は赤く煌いている。

「ダアラッ!!」

『があああ……!』

横薙ぎに振るわれたゼロランスが黒い剣線を描き、闇を迸らせながらジャタールを部屋の外まで吹き飛ばす。

『ベリアルの方が増幅して……』

「ッ!!」

『おい陸!!』

ゼロの制止の声も聞かずに陸は床を蹴り、確固たる殺意を乗せた刃がジャタールの首元へと迫り、

『つたく。やつぱこうなったじゃんか』

突如割って入った銀色の刃にそれは阻まれた。

『ヒアハハ! 感謝しろよジャタールよお! オラア!!』

「がはッ……!」

ゼロランスによる攻撃を受け止めた銀色の影——氷結のグロツケンにはヤクザキツクを腹部に叩き込み、陸を部室の机ごと蹴り飛ばした。

『テメエ等……。一体何だってんだ! さっさとコイツ等を元に戻せ!!』

闇が弱まった一瞬を突いて主人格を奪ったゼロが、ランスを構えながら千歌を背後に隠す。

『だったら、俺等と一緒に来てもらおうぜエ……。』

『なんだと……。』

『おっと、言っておくが貴様等に拒否権はない。ブロンズ像は私の管理下にある。その気になれば粉々に砕く事も出来るのだぞ?』

『・・・何が目的だ・・・』

『別に。ただ計画を実行に移す時が来たってだけだよ』

グロツケンが両腕の刃を床に突き立てると、奴の足元からワープゲートが広がっていき、グロツケン、ジャタール、そしてブロンズ像になったA q o u r sの皆を別の空間へと転送していった。

『こやつらを助けたければ共に来い。来なければ・・・、分かっているな?』

最後にジャタールが吐いた声のみが荒れた部屋に反響し、A q o u r sの中でただ一人残された千歌の不安を煽る。

「・・・ゼロちゃん・・・」

『チツ・・・』

ゼロは舌打ちと共に身体の主導権を陸に戻し、ブレスを介してゲートを見据える。

『落ち着いたか? 陸』

「・・・あ、ああ・・・。ワリイ・・・」

どうやらまだ完全にはベリアルを制御しきれていないらしい。

一度火が付くと我を忘れてしまうのは陸の悪い癖だ。

『・・・どうする? 行くか?』

「当たり前だ。このままじゃ予選間に合わねーし、それ以前に皆が危ない」

『……まあ、お前ならそう言うよな』

「……行くぞ。千歌、手え離すなよ」

「……うん」

自分達が寝坊していなければこうはならなかったはずだ。

きつと千歌もそれは同じ、どうせ一緒に行くって言ってきかなかつただろうし、残すのは彼女に危険がある。

ジャタールとグロツケンがこうしてA q o u r sを襲ったという事は、本格的にダークネスファイブが動き出したという事だ。

「……別に、陸ちゃんのせいじゃないからね」

「……そ」

震えながら力を込めてくる千歌の手を自身も強く握り返し、陸はワープゲートの中へと飛び込んで行った。

六十七話 スライの目論見

「……は……」

ワープゲートを通り抜けた先にあつたのは、以前ゼロと共に乗り込んだダークネスファイブが拠点とする宇宙船だった。

ただ灯りは無く真つ暗で、ゼロと一体化している陸だからこそ暗視が出来ているだけ。千歌は不安気に暗闇の中を見渡しては握った手にきゅっと力を込めてくる。

『……来たようですね』

一斉に点灯した灯りが暗闇を切り裂き、陸達の周囲を囲むようにして立っている五体の巨大な影が姿を現す。

その中の一人、恐らくこの計画を企てた張本人であろう宇宙人を陸は見上げた。

「……何の用だ。スライ」

『……おや、名前を憶えられているとは光栄ですね。どこかの誰かさんの事もあるので尚更です』

『悪かったな!』

ジャタールの不機嫌そうな声を聞き流し、スライは淡々と言葉を連ねた。

『貴方達をここに呼んだのは他でもありません。我等が計画を実行するためには、A q o u r s の皆さんが必要不可欠ですから』

「・・・なんだと・・・？」

『おっと、その前にするべき事がありましたね』

空間が歪み、陸と千歌の目の前にブロンズ像にされたA q o u r s の皆が出現する。

『ジャタール。彼女達のブロンズ像化を解いて差し上げなさい』

『つたく、散々コケにしおった上にその扱いか・・・』

文句を垂れながらもジャタールが腕を翳すと、銅像となっていた皆に色が戻って行く。

「・・・あれ・・・？ 私どうして・・・」

目をぱちくりさせながら、曜は同じように今の状況が飲み込めていないA q o u r s の皆と顔を合わせている。

「っ！」

「うわっ！！」

皆が元に戻ったと分かるや否や千歌が床を蹴り、大粒の涙を零しながら曜に抱き付いた。

三年生は何を言っているのかが分からないといった表情をしているが、千歌をはじめとする一、二年生は顔を見合わせ、同時に頷いた。

「離れるつもりはありません」

『・・・ほう』

「陸ちゃんは・・・、Aqoursのマネージャーだから！」

千歌達の答えに、スライは溜息をつきながら肩を竦める。

『・・・あの時に申し上げたでしょう？ 彼は危険だと・・・』

その声にしり遅れて空間ウィンドウが開き、木陰から抱き合う千歌と曜を狙うゼットン星人を映し出した。

「これって・・・」

「あの日の・・・」

千歌と曜が心当たりを見出す中で、映像の中のゼットン星人は二人に向けて銃を構え

「え・・・？？」

その次の瞬間に起きた出来事に、ダークネスファイブを除いた全員が思わず硬直してしまふ。

何者かの腕に胸を貫かれ。くず折れたゼットン星人を見下ろす影。

瞳こそ赤く瞬いているが、それは紛れもなく仙道陸だったのだ。

「っ……」

そしてその事に最も愕然としているのも、陸自身だった。

あまりの事に皆声も出せないでいると、悪意を隠そうともせずスライが声を発する。

『……彼はまだ陛下の闇を制御しきれしていません。この理性のない獣のような目がその確固たる証拠です』

否定したかったが、出来なかった。

ゼットン星人を殺した際の記憶は何も残ってはいないが、それでもそれが真実だと裏付ける事実があるから。

それは先程、A q o u r s の皆をブロンズ像に変えたジャタールを攻撃した時。

あの時陸は確かに、ベリアルの方に飲まれていた。

『……このまま一緒にいれば、いつこの殺意が貴方達に向けられるのか分からないのですよ?』

これは陸とA q o u r s を引き離す為のスライの策略だという事は理解している。けれどもスライの言っている事は何も間違っていない。

そう。これは偽造でもなんでもなく、紛れもない事実を突きつけられているのだ。

そして、彼女達はベリアルの方の恐ろしさを知っている。

以前、陸がゼロダークネスとして暴走した際の記憶は、今でも鮮明に脳裏に焼き付いているはずだ。

またその惨劇が起こる可能性があるというならば、彼女達も陸から離れざるを得ないはず。

「……やっぱり邪魔者かよ……、俺」

もう突き放される覚悟でいた。

「……それでも、私は陸ちゃんと一緒にいる」

だからこそ、千歌の出したこの答えには驚かされた。

「……貴方、私の言っている事が理解できなかったのですか？ このままでは貴方達が

———」

「そう思ったのは私だから」

「……はい？」

呆れと疑問が入り混じった声を漏らすスライ。

「だって、私が傍にいて欲しいって思ったから、陸ちゃんをマネージャーに誘ったんだも

ん！」

「……千歌……」

自身の身の丈を遥かに超える巨大な宇宙人にも物おしせず、千歌はハッキリとそう言った。

戸惑いの表情を浮かべていたA q o u r sの皆もその言葉で顔つきが変わり、賛同するように頷いた。

『はあ………、時間の無駄だったようですね……。勝手にしなさい』

ウインドウの映像が切り替わり、先程まで陸達がいた内浦の町に出現した怪獣が投影される。

魚と甲殻類が融合したような姿をしており、頭部からはシユモクザメのそのような突起物が横に伸びている。

くすんだ赤と濃い青を基調とした肉体から伸びる両腕には巨大な鋏。背中にはトビウオのような羽。胸部の青い結晶体などなど、派手なパーツが目立つ怪獣だった。

『ゼガンだど!! シャドー星人の兵器が何故こんな所に!!』

『以前陛下がゼガンを倒された際、爆散した肉片の一部を使つて怪獣カプセルを作り出したのですよ』

「つーた……、オウガの野郎か……」

陸の知り得る限りでは、怪獣カプセルで怪獣を召喚できるのは奴だけだ。

「ここ最近はおとなしいと思つていたら、まさか町の破壊活動に踏み出すとは。」

『ええ、それでどうしますか？ 早く行かなければ町が大変なことになってしまいます

よ……?』

『くっ……』

向こうからこつちに来いと言っておいて、いざ来たら怪獣を倒しに行けと、ゼロに対する行動が矛盾している。

だが、奴の狙いは分かった。

スライが今この場に欲しているのはAqoursの皆。恐らく陸とゼロを引き離している隙に何かやるつもりなのだろう。

『……言っておきますが、貴方達に拒否権はありません。……こちらには人質がいま
すから』

「きゃあああああああ!!」

『ッ!!』

悲鳴に反応して振り返った先には、青い光の膜によって閉じ込められてしまったAqoursの皆が。

『ペダン星人の技術を利用して作った特殊なバリアです。地球人に破る事は不可能で
しょうね』

『ちい……、毎度毎度卑怯な事ばかりやがって……』

『だから卑怯もラッキョウもないと言っているでしょう？ 貴方はゼガンを倒しに行くしか道が無いんですよ。安心なさい、ゼガンとの戦闘が終了し次第解放します』

「クソツ……」

馬鹿正直にここに來たせいで、まんまと奴の策略にはまってしまった。

確かにゼガンを倒さなくては町の被害が広がる一方だが、出撃している間、奴等がA q o u r s の皆に何もしないという保証はない。むしろ危害を加える可能性の方が遙かに高いだろう。

「陸！ 行つて！」

「姉ちゃん！！」

「これくらいの問題じゃない！ それより早く早く怪獣を！」

「そうだよ陸ちゃん！ 私達は大丈夫だから！！」

果南に続いて千歌までもがそう訴えてくる。

そうだ。そもそも行くしか選択肢が無いのだ。

行かなければ町が破壊され、囚われたA q o u r s の皆がどうなるか分からない。

「……………無事でいろよ」

『…………やるしかないか…………、おいラッキョウ野郎！ テメエ千歌達に手え出しやがったら光の国の全勢力を持って叩き潰してやつからな！！』

『ええ、肝に銘じておきます』

飄々と答えたスライに更に苛立ちを募らせながらもプレスからゼロアイを取り出して装着。

『シエア!』

青い巨人へと変身し、腹いせに床をぶち抜いてから超特急で地球へと向かった。

『ガルネイトバスタアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

『ツ!』

上空から進った爆炎が背中に直撃し、時空破壊神ゼガンは悲鳴を上げて体勢を崩した。

『ゲエエエエヤアア!!』

着地と共に大地を蹴ったストロングコロナゼロの足元が炎でせり上がり、ブーストの

掛かったアツパーカットを顎に炸裂させて派手に殴り飛ばす。

『ハアア!!』

ブレスからゼロランスを取り出すと間髪入れずに次の攻撃に移り。倒れ伏すゼガン目掛けて振り下ろすが、

『——ッ!』

『ッ!』

胸部の結晶体に光が集約していくのを見て攻撃を中断し、素早くゼロランスを別の形に変形させた。

『ウルトラゼロディフェンダー!』

青い盾でゼガンが放ったゼガントビームを受け止め、衝撃で数歩後退させられたもののダメージはない。

ルナミラクルにタイプチェンジして一度距離を取ると、空中に飛び上がって光の刃を解き放った。

『ミラクルゼロスラッガー』

指揮棒代わりのゼロランスで無数のゼロスラッガーを操り、各自別方向からゼガンに殺到させる。

『——ッ!』

『ッ!! 何!!』

だが奴は両腕の鍔から赤い稲妻状の光線を放ち、光の刃を全て打ち消してしまった。それどころか空中のゼロに狙いを定めると、再度ゼガントビームを放出した。

『ぐっ……、レボリウムスマッシュ!』

掌の衝撃波でゼガントビームを相殺し、今度は攻撃させる暇など与えまいと猛スピードで肉薄してゼロランスを振り下ろす。

『——ッ!』

『がはっ……!』

しかしそれを予見していたかの如くゼガンは身を翻してそれをかわし、赤い稲妻をゼロに直撃させた。

『……この動き……、やっぱ中に誰か入ってやがるな……』

『……ほう。よく分かったねゼロ君。やっぱりにゼガンと戦った事があるからかな?』

一拍置いて帰ってきたその声に、陸は眉を寄せる。

「……オウガ……」

ゼガンの中から聞こえてくるのは、確かにオウガの声だ。

ゼガンを召喚したのがアイツなのは分かっていたが、まさか直接中に入って操ってい

たとは。

『……そうだ。ボクは闇の者なんだ。今こうしてウルトラマンと対立してるのが何よりの証拠だろ』

『……何をごちゃごちゃと抜かしてやがるかは知らねーが……、こっちは時間がねーんだ。さつさと決めさせてもらおう！ 陸!!』

「ああ、今はお前にかまってる暇はねーんだよ！」

「『俺に限界はねえ!!』』

閃光に包まれたゼロの姿が変化し、ゼロビヨンドと成りてビヨンドツインエッジを両腕に構える。

『「ヤアアアアアアア!!」』

『「フツ……、ホツ！」』

鈍色の刃と群青の鋏が衝突し合い、何度も何度も火花を散らす。

『「ハアアア！」』

ゼガンが刺突を放つが、それを紙一重で回避したゼロもまた鋭い突きで応戦する。

『『「ぐおおお……!」』』

一際大きな衝突音が町中に響いた後、その衝撃で互いに後方へと転がった。

『ワイドビヨンドショット!!』

奴よりも一足早く起き上がって腕をL字に組み、光線を疾走させる。

『ゼガントビーム!!』

負けじとゼガンも光線を放つが、威力ではワイドビヨンドショットが勝っている。

徐々に衝突点はゼガンへと迫っていき、勝負が見えた瞬間だった。

『ッ!・しまった!』

優位にあつたはずのゼロが己の失策に気が付いたのは。

『はは・・・、今更気付いてももう遅いよ』

笑いながらにオウガが発した声の後。

光線干渉によって生じた余波は上空へと昇っていき、爆発音と共に巨大な次元の裂け

目が口を開いた。

「何だよあれ!!」

『永久追放空間だよ。これを開く事がボク等の目的さ。・・・あの中にあるベリアル之魂

を回収する為にね!』

『クソツ・・・! それを狙いだったのか!』

「どうすんだよゼロ!! あの穴どんどん開いてつてるぞ!!」

永久追放空間は強力な引力を発生させ、真下にあるありとあらゆるものを飲み込んでいく。

このままでは町民が吸い込まれるのも時間の問題だ。

『どうするって……、閉じるしかねーだろ!!』

早々にゼガンを倒すべく、更に多くのエネルギーを腕に集中させる。

「オオオオオオオオオオオ!!」

更なるエネルギーと気迫が上乘せされた光線がゼガントビームを押し返し、時空破壊神の身体ごと結晶体を打ち抜いた。

『アハハ……、試合に負けて、勝負に勝ったって感じかな……、ぐふつ……』
大爆発を起こしたゼガンには目もくれず、ゼロは次元の裂け目目掛けてその巨体を飛び上らせるが、

『グオオオオオオ!!』

「『があああああ……!』」

突然背後から襲いかかってきた巨大な火球に撃墜され、落下と共に巨大な地響きを起す。

『みすみす閉じさせるとでも思ったか?』

「『ぐつ……、ああ……』」

地に伏せるゼロを取り囲むように五体の宇宙人が地上に降り立ち、その中の一体——
—極悪のヴィラニアスが繰り出した電撃のネットによつて拘束されてしまう。

『デメエ等……、つくづく汚ねえ連中だな……』

『何とでも言いなさい』

淡泊にそう言い放つスライの掌には、バリアの檻に閉じ込められたAqoursの皆
が乗っていた。

『それでは約束通り、彼女達を開放するのでしょうか』

そう言つてスライは、Aqoursを閉じ込めているバリアを解除した。

『なっ……！』

——永久追放空間目掛けて、放り投げてから。

「「「「「「うわあああああああああ！！」「」「」「」」」」」」

空中で解放された彼女達は重力に逆らつて空へと昇つていき、やがて次元の裂け目の
中へと姿を消した。

六十八話 切り開く運命

「んん……」

身体に走る軽い痛みで目が覚め、千歌は横たわっていた身体を起き上がらせた。

「……………どい……………、……………?」

周囲は竜巻の中のようになっており、自分は今浮遊島のように漂っている大地から切り離された地面の上にいる事が分かった。

確かいきなり空中に放り出されたと思ったら、空に開いていた大穴に吸い込まれて、それで……………。

「皆——ッ！ どい——ッ!!」

一緒に吸い込まれたはずの A q o u r s の皆に呼びかけるが返事はない。ただ自分の声だけが謎の空間に消えていくだけだ。

「……………!!」

今一度皆の事を呼ぼうと息を大きく吸った時だった。

どさりと何か落ちてきたような音が耳朶を打ち、反射的に音のした方へと視線を流す。

「ぐ……あ……」

それはいたって普通の青年だった。

まるで爆発にでもあったかのように服は焦げ落ち、全身からは火傷の跡が垣間見える。

「大じよ——」

咄嗟に駆け寄ったが、倒れ伏す青年の顔に見覚えがある事に気が付く。

「……この人……」

突如大空に開いた次元の裂け目の下で睨み合う六体の巨大な宇宙人。

『おいラツキョウ野郎!! 話が違うぞ!!』

『何を仰るのやら……、私は彼女達を開放するとしか言っていない。どのような状況

で・・・、とは一言も口にしていませんよ』

「デメエ・・・。ふざけてんじゃねーぞ！」

ヴィラニアスの電磁拘束を無理矢理振りほどき、スライ目掛けてゼロツインソードを振り抜く。

『おっと、貴方の相手は私ではありませんよ。私は陛下の魂をお迎えに上がらなければいけないので』

スライはそれを素早く回避すると、永久追放空間に向けてその巨体を飛翔させた。

『待ちやが——ッ』

ゼロもそれを追って飛び上がろうとするが、右足が固定されてしまったように地面から離れない。

ひんやりと足に伝わる感覚に視線を落としてみれば、足枷のように貼り付いた氷が右足を地面に縫い付けていた。

『ヒエヒエヒエ・・・、お前等の相手は、俺達だぜエ・・・』

氷結のグロッケン^①の二つ名は伊達ではなかったらしく、いくら力を込めても足は動いてはくれない。

『フンッ！』

『ぐおっ・・・！』

ヴィラニアスが放った光弾も回避不可能。しかも吹き飛ぶ事すら出来ない為、攻撃の威力がそのまま全身を襲う。

『おいヴィラニアス！ 人の獲物横取りしてんじゃねーよ！』

『こういうのは自由競争、早い者勝ちだと前に言っていたではないか』

『キョホホ！ ならば私も参戦と行こうではないか！ 何がブサイクだコノヤロー！！』

『グオオオオオオオ！！』

『がつ………、アアああああ！！』

冷気、爆炎、光弾、電撃を四方から集中砲火され、例えがたい痛みと衝撃に身体が消失し飛びそうな感覚に陥る。

『この………、クアトロゼロスラッガー！！』

軋む身体に鞭を打って放った四本の刃は、弧を描きながらそれぞれ四体の宇宙人の膝裏に命中して体勢を崩れさせる。

更に足元に引き寄せた銀色の剣線は足枷となっていた氷塊を粉碎した。

『バルキーコーラス！！』

『『『ハアアアアアアアア！！（グオオオオオオオ！！）』』』

距離を取ったゼロが出現させた八つの球体から伸びる光の線と四体の合体光線が衝突し、閃光と爆風が内浦の町を疾走する。

『ファイヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

暑苦しい叫び声と共に上空から獄炎が迸り、氷刃を全て蒸発させたうえでグロッケン
を薙ぎ払った。

『あつちいいいいいいいいッ!!』

氷使いであるグロッケンは当然炎への耐性は薄く、悲鳴を上げながら全身を包む炎を
掻き消している。

『何奴!』

『シルバークロス!』

『『ダブルジャンナツクル!!』』

咄嗟に顔を上げた残りの三人にも光の刃とロケットパンチの雨が降り注ぎ、それと同
時に新たな四体の戦士が地上に降り立つ。

『よー、危なかつたなゼロちゃんよお!』

『グレン……!』

その中の一人、どこかチンピラ然とした赤い巨人がゼロの腕を掴んで立ち上がらせ
た。

『遅くなりました。ゼロ』

『全く、相変わらず世話が焼ける』

『リーダーがそんなでは、僕達の顔も立たないぞ』

各々好きに言葉を吐く四体の巨人はゼロを庇うように立ち塞がり、名乗りを上げた。

『燃える炎の戦士！ グレンファイヤー!!』

『鏡の騎士、ミラーナイト』

『ジャンボット!』『ジャンナイン!』

『我等、鋼鉄のジャン兄弟!!』

炎を体現したような姿をしている者、鏡のような凛々しさを纏う者、鋼鉄の身体を持つ者達。

彼等こそがアナザースペースでゼロと共に戦った戦士たち——、

『俺達はウルティメイトフォースゼロ！ 宇宙のワルは、全部——』

『お前等、どうしてここに?』

『ああ、そこ遮っちゃうのねー……』

たまには俺にも言わせろよなー、と文句をぼやくグレンファイヤーを尻目に、ミラーナイトは爽やかな感触でゼロへと言葉を掛けた。

『私達は仲間でしょう？ それ以外に理由が必要ですか？』

それが答えだと言わんばかりに鏡の騎士は背中で語り、炎上のデスローグと対峙する。

『行けゼロ。友の危機なのだろう？』

『ここは僕達に任せろ』

『まあ、そう言うこつた』

他の三人も答えは同じらしく、それ以上は何も言わずにそれぞれ戦闘へと突入していった。

これがゼロの紡いできた絆の形。ウルティメイトフォースゼロなのだ。

『はっ………、やっぱ最高だぜお前等！ ……ここは任せた！』

『[[[[おう!!]]]]』

『シエアア!!』

互いにリーダーの欠けたウルティメイトフォースゼロとダークネスファイブの戦闘が始まったのを合図に、ゼロは永久追放空間へと飛び込んで行った。

「いっつ……」

火傷の痛みで意識が呼び覚まされ、ゆっくりと開いた瞼から光が飛び込んでくる。

確かゼロとの光線の押し合いに負けて、一体化していたゼガンが爆散して、それで……

「つ……！……」

周囲では次元の断層が歪み、竜巻のように渦巻いている。

「……永久追放空間……、そうか、爆発した衝撃でここまで飛ばされたのか……」
 自分で開けた次元の裂け目に吸い込まれるとは間抜けな話だ。生まれた境遇と
 自分は本当に運が悪いらしい。

（……スライもそろそろ来るだろうしボクの仕事も終わりか……、さっさと脱
 出するとしますかね）

何か飛行能力を持ったベリアル融合獣にフュージョンライズしようとし、すぐ近くに
 人の気配がする事に気が付いて腕を止める。

「……どうして君がいるんだい？ ……千歌ちゃん」

「・・・なんかあなたが降ってきたから・・・」

横たわる自分の傍らでちよこんと座っていた少女の姿を見て、真つ先にその言葉が出てきた。

スライの策略でここに放り込まれたのはすぐに理解できたが、それでも彼女が自分の近くにいるのはおかしい。

何故なら自分は彼女に――、

「・・・君、前にボクがやった事を覚えていないのかい？　ボクは――」

「でも、怪我してる人は放っておけない」

言葉の途中でそう言い返され、思わず拍子抜けしてしまう。まさか前に自分を襲った者を介護しようとするとは。

「・・・・・・こうすることで、何か君に危険が及ぶ可能性は考えなかったの？」

「全然」

またしてもあつさりそう答えられ、危うく間拔けな声を上げそうになった。

「・・・確かに前に私にヒドイ事したけど・・・、悪い人には見えないから・・・それにファーストライブの時、いたよね？」

まさか覚えられていたとは。またしても驚きだ。

しかも危うく曜との友情を瓦解させかけたオウガを悪い人には見えないなどと言う

なんて、お人好しなのか、それともただの間抜けなのか。

「……………」

ただ。

ただ少し、今まで光の継承者としてぼんやりとした興味しか抱いていなかった彼女の事を、知ってみたくなくなった。

「ねえ、千歌ちゃん。どうしてスクールアイドルを始めようって思ったんだい？」

そう思った時、自然と口がその疑問を紡いでいた。

どうして彼女は光に選ばれたのか。

絶大な輝きを誇った先代の少女から、光が受け継がれたのか。

先代の子、そして千歌に共通するのはスクールアイドルをやっていた事だ。

ただの偶然か、はたまた——、

「……………どうして、かあ……………」

その問いに、千歌はしばらく顎に手を当てて考え、

「……………ずっと普通だったから」

「……………ほう……………」

「……………私は普通屋に生まれた普通屋人なんだって。どんなに変身しても普通なんだって、そんな風に思ってた、それでも何かあるんじゃないかって、思ってたんだけど……………」

気付いたら高校生になつてた」

「・・・普通ね・・・」

今までA q o u r s、そして千歌が辿つてきた軌跡を考えれば普通だなんて事はあり得ない。

友と心を重ねる事も、輝きなどと言う形のない曖昧なものを追い続けるのも、簡単にできるものではない。

だがその事を口にはしなかった。言うのは野暮だと分かつているからだ。

「マズッ！ このままじゃ本当にこのままだぞ！ 普通星人を通り越して、普通怪獣ちかちーになつちやうーって！ がおー」

芝居っぽく慌てた後、普通怪獣ちかちーはオウガの眼前で顔を綻ばせた。

更にここで彼女に親近感を覚えた。

自分も似たような事を考えていたからだ。

彼女が普通を脱したいと思つていたのなら、自分はベリアルの力の呪縛から逃れたいと思つていた。

どちらも現状を変えようとしたことに変わりはない。

だが根本的に違うのは千歌は自分自身を変えようとし、オウガは周囲の環境を変化させようとした事だ。

オウガも一時期は自分を変え、光になろうと考えた事もあった。だが次第にベリアルを恐れ忌み嫌う者達の心に当てられ、ベリアルの圧倒的なまでの闇を知り、いつしか無理だと思っていた。

それは彼女も同じだったはずだ。彼女の周りにも、普通とは言い難い力を秘めた人間が多くいる。

自分が普通だと思っている彼女なら、尚更劣等感は強くなったはずだろう。なら、どうして。

どうして彼女は、今こうやって普通だった自分を変えることが出来たのか。

「・・・そんな時出会ったんだ。あの人達に！ μ s にー！」

力強くなった千歌の声音に反応し、下に向けていた顔を上げる。

μ s と言うと、あの伝説のスクールアイドルの事だろう。

どうやら彼女がスクールアイドルを始めたいと思ったのは、輝きたいと思ったのは μ s が切っ掛けだったらしい。

「……………皆私と同じような、どこにでもいる普通の高校生なのに、キラキラしてた。……………それで思ったの。一生懸命練習して、皆で心一つにしてステージに立つと、こんなにもカッコよくて、感動出来て、素敵になれるんだって。スクールアイドルって、こんなにも、こんなにも、こーんなにも、キラキラ輝けるんだって！」

熱弁のままに顔を近づけてくる彼女に気圧されつつも、しつかりとその瞳に視線を重ねた。

迷いのない。純粋な瞳だ。

(い)の目……)

そう言えば、かつては自分も同じような目をしていた事を思い出した。それはゼロと出会った時だ。

力強く、雄々しく、逞しく、あのベリアルすらも退ける光の力を秘めた青年。

オウガの心に憧れという光を指し、失望という影を落としたのも彼だ。

最初は自分も彼のようになりたいたいと思い、それが故に追いかけた。

だがその内気付いてしまった。その背中を追うだけ無駄だと。

ゼロが光や多くの仲間との絆を持っているのに対し、オウガが持っているのは誰にも受け入れられないベリアルのみ。

そこで悟った。それが自分の運命なのだ。

どんなに光に焦がれようと、『ディザスト・スマッシュ』によつて誕生した自分は決してそれと相容れる事は出来ないのだ。

そこからは今のように自身を認めさせるべく奔走してきた。

「……………千歌ちゃんは、決められた運命を変えられると思うかい？」

何故今更こんな事を聞いているのだろうか。

もう既に自分の中で答えは出していたはずなのに。

「……」

その問いには、答えは帰って来なかった。

「……やっぱりね」

心のどこかでとある答えを求めていた自分が馬鹿々々しくなり、溜息と共に期待もすべて吐き出す。

「……変えられる訳ないか」

「変えられるよ！」

言葉そのものが光っているかのような澄んだ声音が耳に滑り込む。

「……そんな簡単に言わないでくれるかな」

自分から聞いておいて、楽観的にものを言っているように思える彼女に少し腹が立ち、ついきつく当たってしまふ。

「君程光に恵まれた子が、分かったような口を——」

「だって自分で決めていくのが運命でしょ？」

途端、がんじがらめに纏わりついていた影が光に照らされた気がした。

「生まれた時から決められてるとかそういうのじゃない！ 自分で描き続けるから運命

なんだよ！ 自分の信じた道を進み続けるから奇跡が起こるんだよ！」

一迅の風が心を駆け抜ける。

（・・・ああ、そうか。ジードがやった事は、たったそれだけの事だったのか）

ずっと彼は正義の味方としての道を進む者。生まれた時から用意されていた、運命に抗うヒーローとしての道を進んでいるものかと思っていた。

しかしそれは少し違う。彼はがむしやりに前へと突っ走っていただけなのだ。

他の誰でもない。彼自身が信じた道を、ただただ全力で。

ベリアルによって決めつけられていた、自分の運命に抗うために。

ジードだけじゃない。どんな偉業を成し遂げた者も、始めは皆何も持つてはいなかった。

だが何もなかったからこそ、何か掴みたい思いで自分の道を切り開いてきていたのだ。

「・・・決められている運命も確かにある。ゼロ君も、陸君も・・・ベリアルだってそうだった」

ああ、そうだ。

光の者に生まれながら、闇に落ちて自分の運命どころか他人の運命すら狂わせた傍迷惑なウルトラマンがいたじゃないか。

(・・・なるほど、これが千歌ちゃんに彼に選ばれた理由か・・・)

ずつと自分の中に存在していた何かが音を立てて崩れていくのを感じると、オウガは妙に自分でも不思議なくらい晴れやかな表情で立ち上がった。

「・・・・・・・・何かするの？」

首を傾げる千歌に柔らかに微笑む。

こんな素直に、心からの笑みを作れたのはいつ以来だったか。

「・・・・・・・・別に、ちよつくら抗ってみようかなって、・・・運命って奴に！」

魔人態に変化すると懐からライザーを取り出し、ナツクルに装填した二つの怪獣カプセルを読み取った。

スライが永久追放空間を開いたのは、この中にいるベリアル之魂を回収するためだろう。

千歌達Aqoursがここに放り込まれたのは、ゼロに次元の裂け目を閉じられないため。

中にAqoursがいるとなればゼロは 彼女達の救出を優先するだろう。その隙にスライはベリアル之魂を見つけ出そうとしていた訳だ。

運命に抗うと決めた今、みすみすそうさせる訳にもいくまい。

『脱出するよ。千歌ちゃん、ちよつと離れててね』

六十九話 輝きのゼロ

『フツ！』

地響きと共に着地した青い巨人が掌に乗せた少女を地面に下す。

『これで八人……』

「……あと、千歌だけか……」

永久追放空間内の激しい乱気流の中では流石に複数人を抱えて飛行する余裕はないので、こうして一人一人救出する事になってしまった。

無事に八人は救出することが出来たがかなり時間を食ってしまい、次元の裂け目は今にも閉じてしまいそうだ。

今から突っ込んでも間に合うかどうか……。

「なあゼロ。イージスを使って出入りできないのか？」

『……永久追放空間は俺達のいる次元とは完全に断絶されている。……次元の歪みの中には、流石のイージスでも干渉できねえ』

入った方がいいが閉じてしまったら意味はないだろう。

だが、こんな所で諦めるわけにもいかない。

『行くぞ！』

「・・・間に合ってくれ」

大地を蹴り飛ばし、弾丸が如し速度で大空へと飛翔した。

徐々に開けた口を狭めていく次元の裂け目だけに全意識を集中させ、速く、殊更に速く空へと昇る。

(千歌・・・)

何でA q o u r sと一緒にいるのか。

あの時間かれた時には答える事が出来なかつたが、今なら言える。

——だって、私が傍にいて欲しいって思ったから、陸ちゃんをマネージャーに誘ったんだもん！

あの言葉でようやく分かった。

千歌がそう思っていた様に、陸も彼女達と共に居たいのだ。

それが、ウルトラマンとして戦ってきた理由。今までも、これからだつてそうだ。

「・・・だから・・・、失う訳にはいかないんだよ！」

他の誰にでもない、自分自身に檄を飛ばす。

陸のその想いに呼応し、ゼロは更に加速していき、

『よし！ これならいけ——』

そしていぎ大穴の中へと飛び込もうとした時だった。

『——時間切れです』

「『があッ……！』」

突如として腹部に衝撃が走り、地面に叩き落されてしまう。

『残念。あと一歩遅かったですね』

『……ラツキヨウ野郎……』

見上げてみれば、掌に何やら黒い霧のようなものを乗せたスライが剣の切っ先から煙を上げていた。

『無事、陛下の魂を回収する事には成功しました。このゲーム、我々の勝利です』

『テメエ！』

起き上がると同時に飛び上がり、ある一点目掛けて猛然と突進を仕掛ける。

『……おや』

身構えるスライの横を音速で通り過ぎたゼロが向かう先は、その奥で口を閉じようとしている永久追放空間。

『やれやれ．．．．．、言ったでしよう？ 時間切れだと』

諦めようとしないうゼロと陸を嘲るようにスライが肩を竦めたその瞬間、光線干渉による余波のエネルギーが消失した空間の裂け目は遂にその入り口を閉ざしてしまった。

「あ．．．．．」

真下で A q o u r s の誰かが声を漏らす。

『ツ．．．．．』

真下でウルティメイトフォースゼロの誰かが絶句する。

『．．．．．？』

真下でスライが不思議そうに首を傾げた。

『．．．．．一体何を．．．』

ゼロは飛び続けた。

今の今まで永久追放空間への入り口があつたその場所のみを見据えながら。

『．．．．．諦めないのか？』

「……お前こそ、もう穴閉じちまつてるぜ」

『アホ。諦めるなんて文字、俺の辞書にはねーんだよ』

「……そ。……俺も同じだよ。諦めるもんか」

—— 答えなんて、見つからなくて

—— ……まあ、出来る範囲でいいなら協力してやるよ……。

—— こう答えたのが全ての始まりだった。

今思えば随分と曖昧な返事だっただろう。実はこの時から少し迷いがあったのだ。自分がこの活動に関わってもいいのかと。

—— 結局ほら、情けなくて

—— ……いらねえじゃん……、俺……。

—— 一時はそれが確信に変わり、本気で彼女達から離れようと思つた事もあった。

—— ……それでも君が傍にいてくれた

—— ……私達は、皆でウルトラマンなんだよ……。

—— それでも今もこうして彼女達の傍に居るのは、この言葉があつたからだ。

—— ずっと支えられてきた。

—— ずっと寄り添われてきた。

彼女がいたから、今の陸がいる。
だから今度は、陸が守る番だ。

「『守るべきものがある……』」

『俺は……』

「俺は……」

終わらせてたまるか。

彼女達の可能性を、希望を、未来へとつなげるために。

そう。まだ飛べる。遥かなるこの空へと。

「——ウルトラマンだツ!!」

刹那、ゼロの身体が金色に煌き出した。

遙か空に浮かぶ太陽に負けない程強く、温かい光が世界を照らし、
ブの面々はあまりの眩しさに目を覆う。

「……シャイニー……」

その一方でゼロは更に輝きを増していた。

『ハアアアア………!』

ゼロの身体から発生した光の膜が新たな空間——シャイニングフィールドを生成し徐々に次元の裂け目をゼロ自身の空間へと塗り替えていく。

そして永久追放空間が完全に中和された時、中から一体の巨大な影が姿を現した。

頭部の赤い角に巨大な黒い翼。そして何より目を引くのは胸部の禍々しい意匠。

つまりは、ベリアル融合獣だ。

「……オウガ……」

『よう。陸君ゼロ君。随分と眩しい事になってるじゃないか』

『………まだ闘る気か?』

『まさか。もう君とやり合うつもりはないよ。……決めたのさ。運命に抗うって』

『……何?』

『………運命は自分で描くものだって教えられちゃったからね。彼女に』

怪獣——ストロング・ゴモラントの掌には、目を閉じて横たわる千歌の姿があった。

『目の前で変身したらびっくりして気絶しちゃってさ。悪い事したなあ……』

そう言つて笑いを漏らすオウガの声音は、以前と比べて随分と晴れやかになっている気がした。

『ほら、そんなところで惚けてないで早く行くよ。もうライブまで時間ないんだろ!』
「ツ!! オイ!」

ストロング・ゴモラントはいきなりその翼をはためかせ、千歌を手に乗せたまま北東の方向へ飛び去って行ってしまふ。

『そーいや今日ライブだったな……。俺等も急つ——ぐあ……。』
後を追おうとしたゼロだが、シャイニングを維持できなくなつて一度地面に降り膝を折る。

シャイニングゼロは他の形態にはない破格の能力を多数使用できる反面、ゼロへの負担も他の形態とは比べ物にならない。

特に今のシャイニングスタードライブは膨大な量のエネルギーを消費する故、こうして反動で動けなくなつてしまう事もあるのだ。

「つ……。つ……。つ……」

今回はシャイニング復活直後に無茶な能力酷使を執行したために身体への負荷も半端ではなく、変身すらも解除された陸は荒い息を吐き続けている。

「陸!」

「ちよつと、大丈夫!」

曜と果南が不安気に駆け寄ってくるが、全く身体に力が入らず立ち上がることもすらま

まならない。

オウガの口ぶりからして向かったのはきつと東京だ。もうやり合うつもりはないと言っていたが、まだ信用は出来ない。

だからこんな所で膝をついている場合ではないのに。今すぐ自分達も東京に向かわなければいけないのに。

でなければ千歌の身が危ないし、何より皆のこれまでの努力が無駄になってしまう。

「ぐ……」

プレスを叩くが、いつもの様にウルトラゼロアイは出現してはくれなかった。

『……スマン、陸……、もう……、エネルギーが……』

途切れ途切れのゼロの声音には、いつもの覇気がない。

それほどまでに余力が底をついているのだ。

「く……、そ……」

いくら呼吸を整えようとしても、疲弊しきった身体はもつとよこせと酸素を求めてくる。

これではオウガに追い付く事も出来ないし、予選にも間に合わせる事も出来ない。

その時だった。

『諦めんのかよ。坊主』

自分達を取り囲む、四体の巨大な気配を感じ取ったのは。

『どんな時でも諦めない。それが貴方の信条でしょう？ ゼロ』

『これしきの事で挫けてしまつては、姫様に幻滅されるぞ』

『何のために、僕達仲間がいると思つているんだ』

『……お前等……』

突然身体が浮かび上がり、陸とAqoursはそれぞれウルティメイトフォーエースゼロの四人の掌に乗った。

『なんだ？ そのトーキョーつてどこに行けばいいのか？』

『……グレン……、いいのか？』

『ナインの坊主が言つてたろ？ たまには仲間を頼りやがれ、大将』

自身を掌に乗せる炎の戦士は、胸に拳を当てながら屈託なくそう言った。

グレンの言葉に賛同し、他の三人も首を縦に振る。

『……ああ。そうだったな』

ゼロが今までの戦いの中で紡いできた絆が、思わぬ場所で形になった。

『じゃあ、ちよつくら頼むぜ！』

『おうよ！ そんじゃ飛ばすぜお前等！』

『なぜ貴方が仕切っているのかは分かりませんが……、そうですね』

『彼女達の為だ。仕方ない』

『素直に従うのは少し癪だが……、兄さんの言う通りだな』

『……素直に返事出来ねーのかお前等……』

何かいまいち締まらない形で、A q o u r s を連れたウルティメイトフォースゼロの四人はストロング・ゴモラントの後を追うべく東京へとその速度を上げた。

「おーい！ 皆あー!!」

『やれやれ、やつと来たか』

いつの間にか意識を取り戻していた千歌は、何事もなかったかのようにストロング・ゴモラントの掌に乗って腕を振っている。

「千歌！ 怪我とかしてないか?!」

「うん！ この人が守ってくれたから！」

しかももうすっかり仲良くなっている様子である。一体永久追放空間の中で何があつたのやら。

それは置いておき、とにかく千歌に怪我が無かつた事に一安心だ。

『やる事はやったかな？　じゃあね千歌ちゃん。君達の輝き、期待しているよ』

千歌を地上に返すと、禍々しい風貌の怪獣は徐々にその輪郭をぼかしていく。

『……陸君、ゼロ君。この後少し時間を貰えるかい？　話がある』

声音が一変して低いトーンに切り替わつた後、ストロング・ゴモラントは完全にその姿を消した。

「……よりによつて今呼び出しやがつてあの野郎……」

ライブ会場付近にある、人気のない路地。

オウガに呼び出された陸は、半ば不貞腐れ気味に仁王立ちしていた。

へ……そろそろか、アイツ等の出番

「だろうな。ホントによくここまで来たモンだ」

数々の偶然という名の奇跡があつたからこそ、今のA q o u r sがある。

楽しい事だけじゃなかった。苦しい事や辛い事もたくさんあつた。きつとそれはこれからも変わらない。

けれども彼女達は、それすらも楽しんで前へと歩み続けるのだろう。

楽しむことこそが輝く事。今この瞬間を精一杯楽しみ抜いた先に、輝きはあるのだから。

——イチ!

熱気の籠る会場から声が聞こえた。

——ニ!

——サン!

——ヨン!

——ゴ!

——ロク!

——ナナ!

——ハチ!

——キュウ!

それに続く声も。

「……………ジュウ」

『……………ジュウイチ』

この声が聞こえていたかなど聞くまでもない。

それは今の自分達のとって些末な事だから。

——届けえ—— !!

姿なんか見えなくても、声なんか聞こえなくても気持ちは繋がっている。

それが先代スクールアイドルや、先輩ウルトラマンから学んだことだから。

——A q o u r s !!

だから今は、彼女達の輝きを信じるだけだ。

——サーン……シャイン!!

M I R A I T I C K E T

まだ見た事のない場所へ。

まだ見た事のないステージへ。

自分達だけの輝きを見つけるために。

その想いを胸に、九人の少女は歌う。

胸から溢れだす夢も輝きも、諦めない事で今へと繋がる。

悩み続けた末にある今だからこそ、迷わずに前へと進むのだ。

自分達だけの新世界がきつとあると信じて。

A q o u r s は今、未来へと羽ばたく。

「うおおおおおおッ!! なんだこれ!! なんかすっげーキラキラしてっぞオイ!!」

「落ち着きなさい。周りの方々に迷惑ですよ。．．．．．けれども、確かにこの輝きは鏡の美しさに勝るとも劣らない．．．、素晴らしいですね」

人間態に変化して地球に残ったグレンファイヤーとミラーナイトも、その輝きを目に焼き付けていた。

国も言葉も、星すらも問わずに全てを魅了するのがスクールアイドルだから。

「ああ？　そういうや陸とゼロはどこ行つたんだよ？　こんな時にいねーなんて勿体ねー」

「貴方は……、聞いていなかったのですか？　先程少し用があると言っていましたか……」

「………で？　何の用だよ？　つかこんな時に呼ぶんじゃねーよ。嫌がらせか」

ようやく来たオウガに、陸は不機嫌なのを隠すこともないまま愚痴を吐きつける。

だがオウガはいつも通りそれを一切意に介す様子もなくヘラヘラと笑っていた。

「あはは、ごめんよ。ちよつと彼女達に聞かれるとマズい話だったもんでね。でも出来るだけ早く話した方がいいと思つて」

その笑みは普段と同じ、無遠慮で、どこか鼻に触つて、殴り飛ばしたい衝動に駆られる笑みだ。

だが、前のような底の知れない闇は感じない。

「・・・・・・・・千歌と何があつたんだよ」

「別に、ただ運命をひっくり返す勇気をもらつただけさ。凄いな彼女は。ボクの闇すら取つ払うなんて、あんな子そうそういないよ。・・・・・・・・だからこそ、ベリアルの脅威から守らなくちゃいけない」

「・・・・・・・・どういう事だ？」

ボルテージが最高潮となつた会場の傍らに、不穏で息苦しい空気が舞い降りた。

都会特有の強いビル風が吹き抜けても、重苦しさは依然としてこの場に居座つてい

る。
「・・・・・・・・君達がこの話をどう捉えるかは分からない。・・・けど、今からする話は紛れもない真実だつて事は心に留めておいてくれ」

『・・・・・・・・』

目の前にいるオウガはいつものお調子者ではない。

それを見て、ずしりと地球の重力が増したかのような感覚が身体にのしかかってくる。

陸が汗の代わりに溢れてきた生唾を飲み込んだ後、オウガは口を開いた。

「まず、君たちの知っている情報から整理しようか。アナザークライシスの事は当然も

う知っているよね？」

「・・・ああ」

かつてウルトラマンベリアルが引き起こした戦争、オメガ・アーマゲドン。

その過程でベリアル軍はクライシスインパクトという現象を起こし、二つの地球を破壊した。

一つは朝倉リクことウルトラマンジードがいた地球、サイドアース。

そしてもう一つがここ、今陸達が住んでいる地球だ。

「伏井出ケイがカレラン分子を散布し、リトルスターの発現が確認されたのが二つの地球の共通点さ。・・・けど逆に言うと、これしか共通点がないって事だ」

『・・・何？』

「・・・この地球はウルトラマンキングによって修復されたものではないという事」

サイドアースではクライシスインパクト後にウルトラマンキングが宇宙全体と一体化した事で崩壊は免れたらしいが、キングは二人もいない。よってこちらの地球は他の誰かによって修復されていた。

それ自体は分かっていたが、誰がやったのかは分かっていたはいなかった。

『・・・お前は知っているのか？』

「そして」

『聞けよ』

ゼロのツツコミを認識した上で無視したオウガは構わず続けた。

「この地球でのベリアル軍の狙いは、リトルスターじゃないって事だ」

『・・・なんだと？　じゃあなんで奴等はリトルスター発症者を狙った？』

「万が一に備えての事だよ。計画が順調に進まなかった場合は回収したリトルスターを利用するつもりだったんだ。・・・けど、奴等の真の目的はそこじゃない」

そこまで言つて、どこか陰つた表情になる。

「・・・先に回答発表だけしちゃうと、ダークネスファイブの狙いは千歌ちゃんさ」

「はあ!!」

あまりにも予想外な答えに、思わずそばまで歩み寄つてしまう。

オウガの言う事を信じるのなら、千歌には何か狙われる理由があるという事だ。

「・・・正確には、彼女の宿している光、だけだね」

「・・・千歌の、リトルスターって事か？」

首を横に振つて陸の言葉を否定する。

「いいや。もつと強くて眩しいもの。・・・かつてこの地球を崩壊の危機から救つた伝説の超人——ウルトラマンノアの光」

『なっ・・・!!』

雷に打たれたような衝撃が走る。

ウルトラマンノアと言うと、以前内浦に現れたウルトラマンネクサスの真なる姿。

ゼロにウルティメイトイージスを授けた、神と呼ばれし存在。

そのノアがアナザークライシスから地球を救って、しかもその光が千歌に宿っているという。

「前にダークザギがこの地球に飛来したのも、ノアを追っていたからだよ。ザギはノアを模して造られた存在だからね」

言われてみれば、確かにあの時ダークザギは復讐のために誰かを追っていると言っていた。

『・・・だが、それと千歌にノアの光が宿っている事に何の関係がある?』

「いくらノアとは言え、宇宙の崩壊を食い止めたんだ。キングと同じ様な状態になるのも無理はない」

『・・・本来の力を失っているって事か?』

「ああ。そこで人の絆の力を借りる事にしたのさ。ノア・・・いや、ネクサスは人から人へと受け継がれながら輝きを増していく光の巨人だからね。だからこそネクサスが千歌ちゃんを選んだことは頷ける。彼女は人との絆を糧に成長している。現にもう始まりの光であるアンフアンスは開放したからね。・・・そして、ダークネスフア

イブが狙っているのはその光って事さ」

「いまいちピンとこないが、それらしい心当たりは確かにある。

前にダークネスファイブの使いが徒党を組んで千歌を狙った事。そして何より、陸は千歌の光を二度目の当たりりにしている。

確かにあれは千歌が仲間との絆を深めた際に光り輝いていた。

「・・・君達とダークザギの戦いに乱入したネクサスは、千歌ちゃんやんが曜ちゃんとの絆を取り戻した際に発現したアンファンスの光、そして彼女自身を媒介にして復活したつて

こ——」

「ちよつと待て」

聞き捨てなら無い事が耳に滑り込み、咄嗟に待ったをかける陸。

「・・・お前、その言い方だとまるで・・・」

戦慄く陸に、オウガはその心境を見透かすように首肯した。

「・・・多分君達の思っている事で間違いないと思うよ。・・・彼女にあの時の記憶はないみたいだけどね」

「つ・・・」

脂汗が額を伝い、灼熱の太陽に照らされているというのに悪寒を覚える。

いや・・・、確かに千歌は間近にいたはずなのにネクサスの事を覚えていないと言つ

ていたが……、そんな馬鹿な……。

『……じゃあ、あの時のネクサスは……』

あの時曜を助け、ゼロに光を分け与えた光の巨人は……、

「……千歌……？」

未来は誰にでもやってくる。

それが幸福に満ちたものであろうとも、その反対であろうとも、切り開くのは自分自身だ。

ならば運命とは、望む未来を切り開くために与えられる試練なのかもしれない。

課せられた運命を乗り越える事こそが、人間の使命なのだから。

……例えそれが、どれほど残酷なものであろうとも。

陸が千歌の衝撃的かつ残酷な運命を知った丁度その時。
それは千歌達 A q o u r s のいる会場で、予選の結果が発表された瞬間だった。

第二部 輝きのAqours 前編

七十話 Next Stage

暗く閉ざされた世界を、私は一人で彷徨っていた。

——輝きつて、一体どこから来るんだろう。

一筋の光が差し込み、私の身体を照らした。

そしてそこに向かって飛ぶ紙飛行機が一つ。

知らずの内に、私は導かれるようにその紙飛行機を追いかけていた。

届く気がした。あの輝きに。

「あと……、ちよつと……」

必死に伸ばした手がその光に届こうとした時、紙飛行機は消え、周りの世界が音を立てて崩れた。

「……ええ？」

暗い世界から一変して、周りには夕日に染まる砂漠と、砂の中に沈む遺跡のような物があつた。

『シエアー!』

「わわ………」

突然地面が唸りを上げ、バランスを崩して転倒してしまふ。

何かと思つて顔を上げると、前に内浦に現れたらしい銀色の巨人——ウルトラマンネクサスが黒い巨人と戦っている。

『へアアアア!!』

赤くつり上がった目に、血のような真紅のラインが走る筋肉質な漆黒の肉体。

長く伸びた鋭利な爪やその風貌などは全く異質なのだが、それは間違いなくウルトラマンだった。

『その程度か!! 絆の戦士!!』

『グアアアアアア!!』

黒い巨人が放つた赤黒い光線が直撃し、ネクサスは大きく後方に吹き飛ばされてしまふ。

『ジュ……アア……』

膝を付いたネクサスの輪郭がぼやけたと思つた次の瞬間、その身体は光の粒子となつて虚空に霧散していった。

『フハハハハ……ああん?』

ネクサスを倒して笑いを漏らしていた黒い巨人が、身を縮こまらせて今の戦いを見ていた私の存在に気が付く。

『・・・なるほど、奴がここに呼んだ訳か・・・』

何故か納得するように頷いた後、目の前でしゃがみ込んで私にその赤い双眸を向けてきた。

「ひっ・・・・・・・・」

『まあそう怯えるな。どうせその内受け入れる時が来る。・・・・・・・・だが、まだ早い』

巨人が地面に爪を突き立てるとそこから亀裂が走り、世界は再び砕けた。

「うわあああああああああ!!」

闇の底へと落下していく私を一瞥すると、巨人は背を向けて逆方向へと歩き出す。

『・・・高海千歌。そう遠くない未来に、お前の運命は尽きる。だからせいぜい残された時間を楽しめ。・・・・・・・・そしてよく覚えておけ、この俺——

——ウルトラマンベリアルの名を』

「うわあああああああああ!!」

喉が張り裂けんばかりの絶叫を上げながら千歌は飛び起きた。

「っ………、っ………、っ………、っ………」

乱れる呼吸を整え、まだ胡乱の中にある脳みそでぼんやりと思考を巡らせる。

「………ウルトラマン……ベリアル………?」

まだ混乱しているが、今見たものがただの夢でない事はすぐに理解できた。

あの銀色の巨人——ネクサスは、自分に何かを伝えようとしている。

『フフフフハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ!!』

「きゃあああああ!!」

突然頭の中でベリアルの笑い声が反響し、思わずベッドから転げ落ちてしまう。

「いたたあ……」

痛む頭を擦り、再度自分のいる場所を見渡す。

ここが自分の部屋である事を認識すると、千歌は安堵の息をついた。

だが静寂と共に舞い降りた落ち着きは、すぐに打ち破られることになる。

勢いよく戸が開けられ、千歌の姉である美渡が怒声を浴びせてくる。

「あんたまだ寝てたの?! 早くしないと遅刻するよ!!」

「え………?」

姉の言葉で現実に戻り、うつすらと明瞭になりつつある視界で確認した置き時計が見

（まだ来てないみたいだけど．．．どうせまた寝坊でしょ）

（一人で起きるって言った矢先にそれか．．．．．）

きつと今頃大慌てで通学路を突っ走っているであろう。あのだらしなさで学校を救おうとするスクールアイドルグループのリーダーだといふのだから驚きだ。

「理事長挨拶だと言いましたですわよね？　そこは浦の星の生徒らしい節度を持った行動と勉学に励むのだと——」

「セツゾウを持つ．．．．．？」

舞台袖に隠れて指示を飛ばすダイヤだが、肝心の鞠莉は聞き取れていなかったようだ。

「節度お!!」

「あ．．．はは．．．．．」

全校生徒の前だというのに普段と何ら変わらないやり取りをする二人に、果南も苦笑いである。

（本当に大丈夫かよこの学校．．．．．）

あんなのが理事長と生徒会長だといふのだから、世の中本当に不思議だ。

「それにしても．．．、惜しかったわよね」

「うん。あともうちよつとで全国大会だったみたい」

「過ぎた事をいつまで言っても仕方ないすら」

揉めるダイヤと鞠莉を尻目に、善子、ルビィ、花丸の一年生三人組は先日のラブライブ予選についての話題に触れていた。

「しっかあーし！ 参加賞が二色ボールペンってどうなの？」

「決勝大会に進出すると三色になるとか……」

「未来ずらく……」

「どこがよー！」

「シャラア————ツプ!!」

徐々にひそひそと話し続ける生徒達の声が支配し始めた体育館に、鞠莉の注意の叫びが響く。

同時にマイクのハウリングも生じ、大方の生徒はその不快な音に顔を顰める。花丸だけがドヤ顔で耳を塞いでいた。

「確かに、全国大会に進めなかったのは残念でしたけど……」

「でも、ゼロをイチにする事は出来た。ここにいる皆さんのおかげですわ」

自然な流れでダイヤが鞠莉の隣に立ち、全校生徒に向かってそう言った。

「……理事長挨拶だよな？ これ……」

（まあ、あの二人に言うだけ無駄だと思うよ？）

「そーいや、今入学希望者の数ってどうなってるんだ？」

（……十人……、だったかな？ 予選が終わってから少しずつ増え始めたんだよ）

「まだまだ少ないが、それでも希望は繋がったと思っただろう。」

「ゼロからイチへ。少しずつだが彼女達の努力が実を結び始めている。」

「それだけではありませんわよ！」

「本日！ 発表になりました！ 次のラブライブが！ ……同じように、決勝は

秋葉ドゥーム!!」

その時。

体育館の入り口から、急いで駆け込んできたような足音が聞えた。

「千歌ちゃん！」

「Too Late！」

「大遅刻ですわよ！」

「……次のラブライブ……」

大きく肩を上下させながら、それでも口を動かそうとする千歌。

「どうする!!」

「聞くまでもないと思うけど」

〈まあ、皆分り切ってる事だよな〉

こんな時に彼女が言う言葉くらい、ここにいる全員理解している。

「出よう！ ラブライブ！・・・そして、・・・そして、イチをジユウにして、ジユウをヒヤクにして、学校を救って！———そしたら！」

———そしたら!!

期待を孕んだ全校生徒の声が体育館に木霊する。

「・・・そしたら、私達だけの輝きが見つかると思う！ きつと!!」

———輝ける!!

「・・・ほーん。もう次のラブライブ決まったのか」

「早いもんだよな。まだ前回のラブライブから一か月も経ってねーっつーのに」

西日が傾く夕暮れの刻。

「イチ、ニ、サン、シ・・・」

「んっ・・・、ああ・・・、ああ・・・」

Aqoursが練習前のストレッチを行っている光景を見守っている陸の耳に、善子の呻き声が滑り込んでくる。

「善子ちゃんとは相変わらず身体固いよね？ ちゃんと家でストレッチしてる？」

「うう・・・、ヨハネええ・・・」

目を閉じて音だけ聞いていると、背中を押している果南が善子を虐めているようにも思えなくない。

「そんなんじやダメダメ」

「痛い痛い痛い！」

軽く腰を曲げた前屈の状態から全く動こうとしない善子に、果南は更に体重をかける。身体

の固い人間が無理に関節の限界可動域を超えようとするのは、かなりの痛みが伴

うものだ。

陸も身体は固い方なので、善子には少し同情する。

「ちよつと陸！ 見てないで助けなさいよ！」

「ふふん♪」

「それでもリトルデ——ぎゃあああああああッ！！」

言葉の途中でゴキんと嫌な音が鳴り、一際大きい悲鳴が夕空に溶けていく。

動かなくなつた善子に向かつて十字を切つてから、陸は同じように柔軟体操をしている栗色の少女に目を向けた。

「花丸は随分と曲がるようになったよな」

「ずら。毎日家でもやってるずら」

始めた頃は体力も筋力も柔軟性も壊滅的だった彼女がここまで成長したのは、偏に努力の賜物だろう。

「じゃあもう階段ダツシユの時に背負わなくていいか？」

「それは駄目ずら」

頼むから辞めてくれと視線で訴えてくる花丸。いい加減一人で完走して欲しいものだ。

既にそれが可能な程度には体力は付いてきたと思うのだが、どうしてこうも陸の救助

を求めてくるのか。

「成長の兆しが見えねーな」

「そんな事ないぞら！ 腕立ても出来るようになったぞらー！」

「ホントか〜？」

「む〜・・・、じゃあ見てるぞらー！」

今の口論が聞こえていたのか、腕立ての姿勢に入った花丸に全員の視線が集まる。

「い〜〜〜〜〜〜〜〜ち。・・・完璧ぞら」

肘を曲げて体勢を落としてから、全く動かない。

「〜〜〜〜〜〜〜〜ち。・・・完璧ぞら」

結局再び肘を伸ばすことのないまま力尽き、それでも何故か得意げな顔をする花丸。

「・・・筋トレ追加ですわね」

「そうっすね」

「ずらあつ!!」

「ずらじゃない。善子も柔軟サボるな。姉ちゃん容赦ないから、その内死ぬぞ」

「へ〜・・・い」

成長しているのは確かなのだが・・・、まだ皆苦手分野は克服できていないようだ。

「それで、次のラブライブはいつなの？」

「多分、来年の春だと思っけど……」

「ぶつぶーですわ！ その前に一つやる事がありますわよ」

互いにストレッチをし合っていた曜と梨子の会話に、ダイヤが割り込む。

「忘れたんですの？ 入学希望者を増やすのでしょうか？」

「学校……説明会……」

「ああ、そっか……」

「Off Course！ 既に告知済みだよ！」

「せっかくの機会です！ そこに集まる見学者たちにライブを披露して、この学校の魅力を伝えるのですわ！」

「それいい！」

快活な声が背後から聞こえ、皆一斉にそちらを見やる。

そこにはにっこりと笑顔を作った千歌がいた。

「それ、すっごくいいと思う！」

（……千歌が、ネクサスカ……）

千歌自身にその時の記憶が残っていないのは、ネクサスが彼女の意識を遮断していたからだそうだ。

そのネクサス自体も別に千歌と一体化をしている訳ではなく、彼自身は別の所にいる

らしい。あの時は意識と一部の力だけを飛ばし、絆の光と彼女身体を媒介にして実体化していたとかそんな。

オウガの話によると、あの光はベリアル復活の鍵になる絶望であると同時に、ベリアルを滅ぼす希望なのとか。

仲間との絆が深まれば深まるほどあの光も強く発現し、ネクサス、及びノアは力を取り戻していくそう。

ノアの力を取り戻すことが出来ればこちらのものなのだが、一体どうすれば光を増幅させることが出来るのかは分からない。

だからこそその方法が見つかるその日までは、彼女のためにも千歌を守り抜かなければいけないのだ。

「トイレ長いわよ！ もうとっくに練習始まつてるんだからね！」
「人の事気にしてる場合〜？」

にやにやと意地悪く笑みを深めた果南に更に体重を掛けられ、再び悲鳴を上げる善子。

周りが苦笑する中、ただ一人鞠莉が険しい表情になった事には、まだこの時は誰も気が付いてはいなかった。

「そっか、秋になると終バス早くなっちゃうんだよね」

練習終わり。帰りのバス停前。

皆が談笑する中、一人バスの時刻表を眺めていた曜が不意にそう呟く。

「そうずらね」

「日が暮れるのも早くなっちゃうから、放課後の練習も短くなっちゃうかも」

自転車の陸と一緒に乗っている曜は関係はないが、他の皆はバス通学なのだ。

終バスの時間が早まれば、当然練習の時間も削られてしまう。

「説明会まであまり時間はありませんわよ」

「それは……、分かっているけど……」

「……練習時間は、本気で考えないといけませんわね」

皆が頸を捻る中、何か思いついたような果南が手を叩く。

「朝、あと二時間早く集合しようか」

「・・・姉ちゃん・・・、合宿の日の事覚えてないのか?」

また花丸に泣き付かれても困るし、睡眠時間が削られるのは健康上あまりよろしくない。人前に出るスクールアイドルなら尚更だ。

だが他に案がないのか、誰も別の意見を上げようとしない。

「じゃあ決まりね♪」

「やめんか」

陸も早朝から曜にたたき起こされるのは嫌なので、一人話を進めようとする困った姉を諫める。

「それと善子ちゃん。もう少し早く帰って来るように言われてるんでしょ?」

「ギクツ!・・・ど、どうしてそれを・・・」

梨子の言葉が凶星だったのか、おかしなポーズをとって身体を強張らせる善子。

「うちの母親が、ラブライブの予選の時に善子ちゃんのお母さんと色々話したらしくて・・・、なんか部屋にも入れてもらえないって」

「だ、だからヨハネは墮天使であって、母親はあくまでも仮の同居人と言うか・・・」
そんな事を言っているが、恐らく部屋の惨状を見られたくないのだろう。

以前夏コミでの戦利品を運ぶべく、一度だけ彼女の部屋にお邪魔した事がある

が……、まあ、一般人には理解できない光景が広がっていた。

「お母さんって、どんな人？」

「学校の先生なんだって。善子ちゃん、幼稚園まで哺乳瓶放さなかったからお母さん――」

「……ああああああ!!」

とても楽しそうな笑顔で堕天使ヨハネの黒歴史を開示していく梨子。

まさかとは思うが、ダークザギに操られてダークファウストをなっていた時の様にサ
デステイックな一面を持っていたりするのだろうか。

いや、むしろそれが本性だとかいう可能性も……。

「……待って、沼津からこっちに来るバスは……遅くまであるのかな？」

「えーっと……、仕事帰りの人がいるから……あつ！ 向こうで練習すればいいんだ！」

閃きがそのまま反映されたように明るい表情になる千歌。

「それなら時間も確保出来るぞら！」

「ルビィ賛成！」

「そうだね。……鞠莉は？」

果南が後ろを振り向くと、鞠莉は一人だけ少し離れた場所ですぐ携帯の画面を見つめてい

た。

「・・・へっ？ No Problem！」

「・・・？」

一瞬戸惑ったような表情を浮かべた鞠莉だが、すぐにいつもの笑みを取り繕う。

「よし！ じゃあ決まり！」

「明日練習場所になりそうな場所、皆で探しましょう」

「・・・」

一、二年生が和気藹々と明日の予定を話し合う中、果南は訝しむような視線を鞠莉に向けていた。

七十一話 挑む覚悟

「くああ……」

「……犬かお前は」

手で覆いもせずに大欠伸をかく千歌に陸がジト目で突っ込む。

「それで千歌ちゃん。どこかにいい所あった？」

「うん……、なかなか無いんだよね……」

バス停へのアクセスが良く、沼津方面で、尚且つ九人でダンスの練習が出来る場所となると……、かなり限られてくる。

よってそう簡単には見つからないのだ。

「ずら丸ん家お寺でしょ？ 大広間とか無いの？」

「やめとけ。コイツん家バス停まで結構あるぞ」

「ずら」

それで結局バスに乗り遅れてしまったては元も子もない。

「なら、善子ちゃんの家の方で……………」

「どこにそんなスペースがあるのよ!」

「……………よくわからん物が錯乱してるもんな、お前の部屋」

そもそも誰かの家上がり込んで練習するという事自体があまり良くない気がする。

「……………ていうか陸ちゃん。何でそんな事知ってるの?」

「何でって……………休日コイツ等に付き合わされる事多いから……………、何その蔑みの意しか込められてない目?」

正直に答えたはずなのに、何故か冷たい視線を注がれる。

「……………陸。もしかして皆の家行ったことある?」

「……………鞠莉さん家以外なら」

またしても正直に答えたら、今度は視線どころか室内の気温すら冷えたような気がしてきた。

「……………もう陸ちゃんに皆の事送り迎えさせたらいんじゃないかな? 皆の家知ってるんだし」

「……………そだねー」

「いや何でだよ?!」

幼馴染二人の理不尽な攻撃に思わず立ち上がった陸を尻目に、ゼロはブレスレットの中から部室内を見渡していた。

『………そういや、ダイヤ達はどこ行った?』

ゼロの一言で一旦攻撃が止まり、全員で今部室の中にいる人間を確認する。

今いるのは一年生と二年生のみ。確かに三年生達の姿は見当たらない。

「さつきまでいたのに………」

「鞠莉さんは電話かかってきたみたいだけど………」

「だとしたら理事長室か……理事長様も大変だねえ………」

呑気に笑い飛ばしながらそんな事を言う陸だったが、まだこの時は知る余地もなかった。

この談笑の裏で、全く笑えない話が進行している事に。

「つ………!」

理事長室。

静寂が満たしている世界の中で、鞠莉が苦悶の表情で受話器を置く。

「……もう、覆しようが無いんだね？」

それを傍らで見守っていた果南の言葉を聞き、鞠莉は置いた受話器を再び手に取った。

「いえ……、まだ……！」

だが、果南がそれを止める。

「……果南？」

「ダイヤは知ってるの？」

「……言える訳ない……」

鞠莉が肩を落しながら呟いたその瞬間、ガチャリと部屋のドアが開かれた。

「だつたらちやんと隠しなさい」

「……ダイヤ？」

「この前からコソコソコソコソと……本当にぶつぶーですわ」

「わああ~~~~~」

「広お——い!!」

「す——い……」

A qours は浦女の体育館並みにだだっ広いスタジオの中にいた。

本物のアイドルが使つていそうな程立派な内装に一年生と二年生は大興奮中である。

「ここ、開けると鏡もありますし!」

ルビイが壁の一面を覆うカーテンを開くと、そこに立て付けられていた鏡が姿を現す。

「いざ! 鏡面世界へ!」

「やめんか」

「やめるすら」

田舎では物珍しいものに更にテンションが上がったのか、鏡の中に飛び込もうとする善子を花丸と共に止める陸。このまま突っ込んだ場合善子が行くのは鏡面世界ではなく病院だ。

「……だがしかし、よくこんなところ見つけたな、曜」

「パパの知り合いが借りてる場所なんだけど、しばらく使わないからって」

流石に曜の父親がそこまでの人脈を持つているとは思わなかった。

「流石船長！」

「いや……、関係と思う」

一応陸の父親も船長のはずなのだが……、まあ、漁船では無理か。

「それに！ ここなら帰りにお店もたくさんあるし！」

「本屋もあるぞら！」

「……？」

楽し気に談笑する集団から意識を外すと、何故か俯いている三年生の姿が目に入った。

特に鞠莉は、後輩の会話が弾みを増す度に表情が暗いものへと変わっていく。

『……どうかしたのか？』

「え……つと、その……」

それを訝しく思ったゼロが問いかけると、鞠莉は口籠ってしまふ。

そんな彼女を見かねたのか、意を決したように果南が後輩たちに切り出した。

「ちよつと待って。その前に……話があるんだ」

「……姉ちゃん……？」

何やらおかしな雰囲気纏う果南を見て、陸はふと嫌な予感を感じた。

昔から彼女がこんな表情をする時は、決まって何か良くない事が起こっている時なのだ。

「実は……さ、鞠莉」

そしてその予感、的中する事となる。

次の瞬間鞠莉が発した、衝撃的な一言によって。

「実はっ！ 学校説明会は………中止になるの……」

一瞬にして話し声は止み、重く、苦しい沈黙が舞い降りる。

皆しばらくは、言葉の意味を理解できずに立ち尽くしていた。

「……中止……？」

呆然と千歌が呟いた後、少し遅れて梨子が前に出る。

「どういう意味……？」

「言葉の通りだよ。説明会は中止。浦の星は、正式に来年度の募集を辞める」

これまでのAqoursの努力を嘲笑うかのように、残酷な現実が襲いかかってくる。

「……そんな……」

「いきなり過ぎない!!」

「そうすら! まだ二学期始まったばかりで……」

「うん」

「生徒からすればそうかもしれませんが、学校側は既に二年前から統合を模索していたのですわ」

必死に異議を申し立てる後輩達に、ダイヤは自分自身にも言い聞かせるように言った。

「鞠莉が頑張つて、お父さんを説得して、今まで先延ばしにしてたの」

「……でも入学希望者は確かに増えてるんだろ? 今十人になつたつて」

自分で言っておいてなんだが、十人じゃ全然足りないことぐらいすぐに理解できた。

十人。始めはゼロ人だった事を考えると、今こうして十人になつた事は大きい。

あくまでも、彼女達にとってはの話だが。

二年も前から統合を模索していた学校側が、ただか十人で納得するはずがないのだ。

けど……、

「これから、これからもっと増えるって……」

全員が思っていた事をルビィが口にするが、それでも鞠莉の表情は変わらなかつた。

「それはもちろん言つたわ。けれど、それだけで決定を覆す理由には——」

「鞠莉ちゃん!!」

抑えこんでいたものが一気に噴火したように飛び出した千歌が、鞠莉の肩に掴みかかる。

「・・・・・・・・・・どハッ?」

「ちかつち・・・・・・・・?」

「私が話す!」

爆ぜるように床を蹴ると、千歌はそのまま部屋を出て行ってしまった。

「千歌ちゃん!」

「待つて! アメリカよ!! 鞠莉さんのお父さんはアメリカなのよ!! そうですよね

!!」

「・・・・・・・・Yes・・・・」

アメリカ。行くだけでいくらかかるか・・・・。とても一介の高校生が捻出できるようなものではない。

それに、仮にもし行けたところで話を聞いてもらえるか・・・・・・・・。

「美渡姉や志満姉やお母さん。あと、お小遣い前借りして、前借りしまくって・・・・・・・・

! アメリカ行つて・・・・そして・・・・! もう少しだけ待つて欲しいって話す!」

「ここまで来てしまうともう子供のワガママだ。」

気持ちには分からなくはない。だが、そんな方法で到底敵うはずなど無いのだ。

そんな中声を出したのは、ゼロだった。

『だったら俺が行く』

「ゼロさん?！」

『……精一杯足掻いたうえで結果が実を結ばなかったのならまだ仕方ねえ。……だが、足掻く機会も与えられなかった奴が淘汰されるなんざ、納得できる訳ねーだろっ!!』

そう言つてブレスから取り出したゼロアイを装着しようとするゼロを、梨子が制止する。

「……出来ると思う?」

『出来るか出来ないかの問題じゃねえ! 俺はそんなの認め——』

(辞めろっ!!)

『ぐおっ……!!』

闇を開放して身体の主導権を取り返し、陸はゼロアイをブレスに戻した。

「……俺達がいくら言つたところで無駄だ……」

『……くっ……!!』

皆ゼロと気持ちは同じだ。唐突に今までの努力を否定されたら誰だつて反感は抱く。

「こうなったら私の能力で！」

いつもなら誰かしらが冷やかすはずの善子のジョークにも、誰も反応しない。

ただただ空しく、寂寥感に支配されたスタジオの中に霧散していくだけだ。

「鞠莉はさ……、この学校が大好きで、この場所が大好きで、留学より、自分の将来よりこの学校を優先させてきた」

「今までどれだけ頑張って学校を存続させようとしてきたか。わたくし達が知らないところで、理事長として頑張ってきたか」

「そんな鞠莉が、今度は、もうどうしようもないって言うんだよ」

「でも……!! でもっ……!!」

嫌になるほど辛辣な現実が冷たく刺さる。

言葉も、夢も、努力も、全てを奪い去っていくように残酷で。

生き心地すら失われていく感覚の中で、鞠莉は無理に作った笑みを千歌に向けた。

「ちかつち……ゴメンね。てへぺろっ」

「っ……!!……違う。そんなんじゃない……そんなんじゃない……」

悪者なんてどこにもいない。

三年生も、学校側も、決して今の状況など望んでいなかったはずだ。

そして誰一人、今の状況に納得している者もない。

ゼロの言葉通り、まだ足掻いていないのだ。

だがそんな抗うことすらも否定するように現実が、運命が辛く、重くのしかかってきて。

これがA q o u r s yや、浦の星女学院に課せられた宿命なのだと言わんばかりに女神は微笑みを消した。

この日は練習する気力すらも奪われ、何もすることなく今日は解散となった。

〈・・・明らかに元気が無いな〉

（・・・多分、鞠莉さんが伝えたんだろ・・・、説明会の事）

翌日の放課後。

曜を迎えに浦女の校門前までやってきた陸は、そこから流れ出てくる生徒達の顔を見て思わず目を逸らした。

（・・・そういや、なんでお前今日は姉ちゃんのとこ行かなかったんだ？）

へ………流石に、ついていける雰囲気じゃなかったからな

(………そっか………)

「あつ、仙道君」

聞き覚えのある声に視線を戻すと、A q o u r s ではない三人の少女が自分に近寄ってくるのが見えた。

むつ、いつき、よしみ。千歌のクラスメート達だ。

「………仙道君は知ってるの？ 説明会の事………」

「………昨日、鞠莉さんから聞いた」

彼女達の落胆具合を見れば、如何に今回の事がショックだったのかが分かる。

「………本当にどうしようもないのかな？」

「こればかりは、私達だけじゃね………」

「もしどうにかなるんだったら、千歌達が、とつくに動いてるよ」

何も言えなかった。

彼女達は、自分達の学校が無くなってしまふ事を本当に悲しんでいる。

それに対し陸は自身の学校が無くなると分かった時、特に悲しむこともなくすんなり受け入れてしまったから。

学校に愛着も何もない自分が、今の彼女達に何か言う資格はない。

ただ黙ったまま、皆の悲しむ様を見ている事しか出来ないのだ。

「……ただいま……」

曜を家に送り届けた後、陸もまた自身の家に戻った。

いつもはこの「ただいま」に返事など帰っては来ないが、今は返してくれる者が二人いるのだ。

「よー。遅かったな陸ちゃんよお」

「お帰りなさいませ。……と、我々が言う事かどうかは分かりませんがね」

粗暴な声と凜とした声が同時に奥から聞こえてくる。

人間態となったグレンファイヤーとミラーナイト。彼等は宇宙警備隊から直々に任務を受け、ゼロと共に地球に滞在する事になったらしい。

ごく普通に仙道家を拠点としている件については文句しかないが。

ちなみにジャン兄弟は巨大ロボット故、流石に残れなかったそうだ。

「そんで？ どうだったんだよ、千歌達は」

グレンとミラーナイトには昨日の事を話した。

今後は共に彼女達を守っていく以上、情報は共有しておいた方がいいと思っただ。だから。

口にして答える代わりに首を横に振ると、二人共顔を曇らせた。

「……やはりそうでしたか」

「……まあ、すぐに受け入れられるモンでもねーわな」

これまでの努力が一瞬にして否定される虚しさは、宇宙人である彼等にも分かるらしい。

「……続けるでしょうか？ その、スクールアイドルというものは？」

「さあな……。俺にも分からん」

学校を救うという明確な目標が無くなった今、A q o u r s には活動を続ける意味がないといつてもいい。

千歌がスクールアイドルを始めた切っ掛け、輝きたいという願いも、学校があつてこそ成し得るものだ。

今彼女達がスクールアイドルを辞めると言つても、何も不思議ではないのだ。

「……今は信じるしかねーんじゃないのか？ アイツ等の事」

「・・・かもな」

今まで通り、陸にできる事は見守る事だけ。

進むのは彼女たち自身なのだ。それが再スタートを切った際に A q o u r s が決めた事だから。

それが、浦女の希望となる事を信じて。

水平線に沈みゆく夕日が、内浦の海を橙色に塗り上げていく。

その手前、紅に染まる砂浜の上で、千歌は制服姿のまま座り込んでいた。

「綺麗な夕日・・・」

そんな彼女を背後で見つめていた梨子が、不意にそう零す。

だが千歌はうんともすんとも言わず、ただ黙って夕日に視線を注いでいた。

「・・・私ね、こうなったのはもちろん残念だけど、ここまで頑張つて来れて良かったと

思ってる」

やはり口を開かない千歌の前に歩み出ながら梨子は続ける。

「東京とは違って、こんな小さな海辺の町の私達が、ここまでよくやって来れたなって」
「……それ、本気で言ってる？」

妙に晴れやかな表情でそう語る梨子に対し、千歌はようやく口を開いた。

「……」

「……それ、本気で言ってるんだつたら私。梨子ちゃんの事……」
「……軽蔑する」

冷たく、刺々しい声音でそう吐き出した後、千歌は唇と手を強く引き結んだ。

いくら前を向こうとしても、悔しさとやるせなさがその邪魔をする。

「がおおー!!」

そんな千歌に蟠ったものを吹き飛ばすように、梨子はずっと顔を寄せてそう鳴き声を上げた。

「ふふ……♪ ピー! どつかーん! 普通怪獣りこつぴーだぞー! 喰らえ! 梨子ちゃんビーム!!」

ひとしきり訳の分からない行動をした後、天に向かって拳を突き出した。

「……こんなんだっけ? 普通怪獣ちかちー」

「ふ……………」

自分の自虐ネタを使われ、固いままだった千歌の表情が少しだけ綻ぶ。

「やつと笑った……………」

「つ……………」

「…………私だって、Aqoursのメンバーよ……………」

穏やかな表情を千歌に向けた後、梨子は水平線に視線を移した。

明るく振舞って見せていた彼女の心情を現すように、紫檀色の長い髪が風に靡く。

「…皆とこれから一緒に歌っていこうって、曲も、いっぱい作ろうって思ってた。…いいなんて思う訳ない。これでいいなんて……………」

「梨子ちゃん……………」

千歌の声と共に振り向いた梨子の顔は、とても、今まで見た事ないくらい悲し気で。

「どうすればいいか分からないの……………、どうすれば……………」

しやがみ込んで俯いてしまった彼女に掛ける言葉も見つからず、千歌はただ、海風に揺られながらその哀愁漂う背中を見つめる事しか出来なかった。

その日の夜。

千歌は自室に閉じ籠り、制服のままベッドの上で横になっていた。

「千歌——！　ぐ飯いらないのー！！」

姉の声にも返事せず、沈んだ気持ちそのままに自分もベッドに沈みこんでいく。

寝返りを打って虚空を見上げる瞳には、天井ではなくラブライブの予選で歌っている時の自分達の姿が映されている。

もし、あの時。

ラブライブの予選に勝って、本大会に出場出来ていたら、未来は変わっていたのだろうか。

——学校説明会は………中止になるの……。

誰よりも学校のために尽力してきた鞠莉に、あんな事を言わずに済んだのだろうか。

——どうすればいいか……。

梨子に、あんな物悲しい表情をさせずに済んだのだろうか。

「・・・・・・・・」

部屋に飾られた千羽鶴に視線を流す。

あれは先日、浦女の皆が A q o u r s の応援のために折ってきてくれたものらしい。

予選を突破できていれば、自分達を応援し続けてくれた学校の皆の期待に、応える事が出来たのだろうか。

「・・・・・・・・」

後悔は消えない。

千羽鶴から逃げるように反対側に寝返りを打った千歌は、そのまま意識を手放した。

暗い場所に一人で立ち尽くしていた私を、空から差した力強い輝きが照らす。きつとあれは、あの場所で、ラブライブの予選で私達が届かなかった輝き。

「・・・・・・・・」

どうして今それを見せてくるのか。

今見せられても、手が届かなかったという事と、学校を救えなかつたという事実が蘇ってくるだけなのに。

そう思っていた時、一迅の風が吹き抜けた。

優しく、包み込むように暖かい風が、私の心の中を駆け抜けていく。

「っ……」

ふと、空から紙飛行機が舞い降りた。

それは風に乗って再び空へと舞い上がり、私を照らす輝きへと向かっていく。

まるで何度打ちのめされても、前を向いて這い上がるように。

私に、何かを伝えるかのように。

そう思った時、私は自然とその紙飛行機に触れていた。

「わあっ!!」

すると紙飛行機を輝きから放たれた光が包み込み、その形状を変えていく。

一言で言い現すならば、石造りの翼、だろうか。

だがそれが見えたのも一瞬で、最終的には鞘に納まった白い短剣のようなものが私の手の中で握られていた。

「え……?」

突如目の前に、胸にY字の発光体を備えた銀色の巨人の姿が浮かんだ。

巨人はゆっくりと頷いた後、私の中に溶け込むようにして消えていく。

諦めるな。

そんな声が、聞こえた気がした。

運命が何だ。

宿命が何だ。

何回だって抗ってやる。何回だって祈ってやる。

願いこそが、未来を変えるから。

ひっくり返してやるんだ。

ジーっとしても、ドーにもならないから!!

「がおおおおおおおおおおおおお——ツ!!」

早朝の浦の星女学院のグラウンドに、一人の少女が上げた咆哮が響く。

「起こして見せる！ 奇跡を絶対に！ それまで泣かない……泣くもんか!!」

目尻に溜まった涙を決して流すことなく、千歌は自分自身にそう言い聞かせる。

「やっばり来た」

不意に背後から掛かった聞き馴染みのある声音に引き寄せられるようにして振り向く。

「……曜ちゃん……どうして？」

「分かんない……でも、ほら」

敬礼と共に曜が視線を送った先には、他のAoursのメンバー。そして何故か他校であるはずの陸もいる。

「皆……」

「気づいたら来てた」

「気づいたらここここまで送らされてた」

笑いかけてくる梨子と、無愛想に答える陸。

『……仲間つてのはめんどくせーよな。普段はバラバラなくせに、こんな時ばかり考えてる事が伝わっちゃうんだからよ』

「俺は普通に叩き起こされただけだな」

『おい、ちよつとカツコよく決めたんだから乗れよ』

ゼロと陸が揉め始めたのを尻目に、千歌は自分を見る八人の少女達を見据えた。

共に支え合うこの仲間たちの笑顔こそが、何よりの力になる。

だからこそ、これまでも強くなつて来れた。

「……きつと、諦めたくないんだよ……諦めたくないんだよ……！ 鞠莉ちゃん頑張ってきたのは分かる。でも私も、皆も何もしてない！」

「そうね」

誰かに明日は、未来は求めない。

それを照らすのは太陽でも星でもなく、自分達の胸の中で芽生えた閃光だから。

「無駄かもしれない。けど、最後まで頑張りたい！ 足掻きたい！……ほんの少しだけ見えた輝きを探したい……見つけたい！」

挫けたつて、また立ち上がればいい。

その痛みこそが新たなる運命を描くから。

「諦めが悪いからね。千歌は昔から」

「それは果南さんでもでしょうか？」

「お姉ちゃんも」

『全員そうだろう』

「お前もな」

「……皆はどう？」

微笑む千歌の先では、皆無言で笑みを浮かべ、賛成の意を表明していた。

「ちかっち……皆……」

鞠莉が、その手の中のスマホを握る手に力を込める。

「いいんじゃない？ 足掻くだけ足掻きまくろうよ」

「そうね。やるからには……奇跡を！」

ダイヤがそう言ったのを皮切りに、皆次々に「奇跡を」と口にしていく。

そう。統廃合こそがAqoursに課せられた宿命なのならば、それをひっくり返してやればいい。

宿命を塗り替える事こそが、Aqoursの使命なのだから。

——光に認められし原初の絆——アンフアンス

「っ……!」

〈……光が……〉

重なり合った皆の心を表すかのように、千歌の胸から眩い光が溢れる。

(………絆……、ネクサスの光か……)

絆の光に導かれるように、雲の切れ間から差し込んだ太陽の光が少女達を照らす。

それに焚きつけられたのか、千歌は唐突にグラウンドに設置された鉄棒へと向かい、盛大にスカートを翻しながら逆上がりを決めた。

「千歌ちゃん!!」

「白か」

「起こそう奇跡を! 足掻こう精一杯! 全身全霊! 最後の最後まで! 皆で………、輝こお——うっ!!」

ここからはネクストステージだ。

A q o u r s はまた羽ばたく。
明日に向かって、進み続けるために。

七十二話 次なる試練

早朝。

『デエエエヤアアアツ!!』

『オオオラアアアア!!』

突然内浦の町に現れたロボット——レギオノイドに、ストロングコロナゼロとグレ
ンファイヤーの拳が炸裂する。

出現したレギオノイドの数は十体。だが二人の炎の戦士の前に瞬く間にその数を減
らし、今や二体だけとなっていた。

『おし! あと一体!』

『こつちも負けるかよ!』

最初は迎撃のために出陣したはずなのに、今は何故かどつちが先に五体倒すかの勝負
と化している。

まあ、戦わないよりは遥かにマシだが、それでも少しは真面目に戦って欲しいものだ。
『ウルトラハリケーン!!』

『ダアラツシャアアアアア!!』

同時に天高く投げ飛ばしたレギオノイドに対し、ゼロは右腕の温度を上げ、グレンは自身もまた空へと昇っていく。

『ガルネイトバスタアアアア!!』

『燃えるマグマのオ・・・、ファイヤアア・・・、フアアアアツシュ!!』

爆炎の奔流と紅蓮の槍が二体のレギオノイドの機体を破壊し、またもや同時に大爆発を起こした。

『どうだゼロ！ 俺様の勝ちだろ！』

『何言ってるんだ、俺の方が早かったぞ！』

『ああん？』

『んだゴラア？』

暑苦しい視線で火花を散らし、次の瞬間には殴り合いに発展しそうな雰囲気のもの。ヤンキー二人。

「はあ・・・」

『うおおっ!!』

『おい!! ちよつと待て陸！ まだ勝負は終わって——』

陸は呆れ気味に溜息をついた後変身を解除し、引き留めてくるグレンをガン無視して

自転車に跨った。

「・・・・・・・・・・学校行く」

「なあああああ~~~~~」

放課後。浦の星女学院の屋上にて、千歌が大の字になって身体を床に預けている。

「・・・・・・・・・・どうしたお前」

先程ここについた際に、鞠莉の父親に話をつけて決定を延期させることが成功した事は聞いた。

A q o u r s にとっては良い事はずだったのに、何故千歌はこんな事になっているのだろうか。

「だってラブライブの予備予選がこんなに早くあるなんて、思ってたんだもん」

「出場グループが多いですからね」

「この地区の予備予選は来月始め。場所は特設ステージ」
「そんな近いのか？」

まだ東海地区予選が終わって一か月も経っていないというのに。しかも特設ステージを設置してまで行うとは……、恐るべしラブライブ。

「有象の魑魅魍魎が……集う宴！」

「でも、早いと何が困るすら？」

「それは……、その……」

首を傾げる花丸から目を逸らし、返答がハッキリしない千歌。

「歌詞を作らないといけないからでしょ？」

そんな彼女の代わりに、日頃から千歌に対する歌詞の催促に苦労している梨子が答えた。

「ああ、なるほど……」

納得したように視線を移す陸と花丸を見て、千歌は不満げに口を尖らせて自分ばかりに予先が向く事に講義を始めた。

「あー！ 私ばかりずるいー！ 梨子ちゃんだって二曲作るの大変だって言ってたよー！！」

「それを言ったら曜ちゃんだって」

「あはは……九人分だからね……」

予備予選のみならず、今回は学校説明会で行うライブの準備もあるのだ。

二曲分の作詞、作曲、衣装作りとなれば、それらを担当する二年生への負担は半端ではないだろう。

「つか、この中でダントツで進行遅いのお前だからな」

「なあう……」

詞のイメージが曲の元となり、曲のイメージが衣装の元となるため、千歌が詞を書かない限り梨子と曜は自分の仕事に移れないのだ。

「同じ曲って訳にはいかないの？」

「残念ですが、ラブライブには未発表の曲、という規定がありますわ」

「厳しいよ、ラブライブ……」

もはや運営が高校生に何を求めているのかが分からなくなってきた。

「それを乗り越えた者だけが……頂からの景色を見る事が……出来るのですわ……」

「それは……分かってはいるけど……」

まさしくスクールアイドルの甲子園と言ったところか。

努力に努力を重ね、それでも突破できるか分からないという厳しさ。

ラブライブとは狭き門だ。

「……………で、作詞の方は進んでいるの？」

「……………そ、そりゃあ……………急がなきゃ……………だから……………あは？」

『……………もう見飽きたわこれ』

ファーストライブの時からずっと見続けているこのやり取り。

これだけ経験を重ねても千歌の作詞スピードは一向に上昇の兆しを見せないので、梨子の苦労も程々だろう。

「ここに歌詞ノートがあるすら」

「わ——っ！！」

梨子から隠すようにして置いてあった歌詞ノートを花丸に広げられ、大慌てで奪い返そうとする千歌。

何をそんなに慌てているのだろうかと思ひ、陸が千歌を押さえつけながらノートに目をやると。

「どんだけ進んでねーんだおま——」

あらかじめ結果を予想して用意しておいた言葉は途中で止まることになった。

花丸のページをめくる速度は異常に早く、しかもその視線はある一点のみに集中している。

ご丁寧に毎ページの端に書かれていたのは、歌詞ではなく簡易的なイラストとなった

梨子だった。

目を吊り上げらせ、口元を鳥の嘴のようにしている辺り、かなり完成度は高い。

「すごいぞら〜!」

「そつくり!」

「結構、力作でしょ?」

どうしてこう、この集中力をもつと別のものに使えないのだろうか。

いや、むしろ集中力がないこそ誕生した作品・・・、どちらにしろ感心できるものではない。

「昨日、夜の二時までかかって——」

最後のページが捲れると共に、千歌の描いたイラストと全く同じ表情をした梨子の顔が現れる。

「「あつ……………」」

明らかに頭に来ている梨子に鋭い眼光を向けられ、千歌は上体をのけ反らせた。

「…………千歌ちゃん…………?」

「…………はい…………」

『…………ホント、成長の気配がねーな…………』

呆れ気味のゼロの言葉に、皆うんうんと首を振るのであった。

「うう．．．．．ん．．．」

部室に戻っても、千歌の作詞が進むことはなかった。

手に取ったペンでノートに歌詞を綴ることはせず、先程からずっと唸っては机に突っ伏している。

「でも、このまま全部千歌達に任せっきりというのもね」

ここ数十分間苦しみ続けている千歌を不憫に思ったのか、パソコンを弄っていた果南が不意にそう言った。

「じゃあ果南、久しぶりに作詞やってみる？」

「い、いいや．．．、私はちよつと．．．．．」

「え？ 姉ちゃん作詞やったの？」

「．．．うん。まあ、少しだけ．．．．．」

「へー……想像できねえ」

基本的に身体を動かしているイメージしかない彼女がペンを手に歌詞を綴っている姿が全く想像できないのは陸だけではないだろう。

だがうっかりそう思った事を口にしてしまったのは陸だけだったようで、果南は背後に何やら炎のようなオーラを浮かび上がらせながら掴みかかってくる。

「ん〜？ どういう意味だ〜？」

「あ……、ちょ……、ギブ。姉ちゃんギブ」

ダイビングで鍛えられたしなやかかつ強靱な筋肉に首元を締め付けられ、青い顔になる陸。

「そんなでも前はちゃんと作ってたのよ」

「そんなって何さ。あとそれ言ったら鞠莉だって曲作りしてたでしょ？」

陸を解放すると共に不満げに鞠莉へと反撃をする果南。

果南の作詞も想像しがたいが、鞠莉の作曲もあまりピンとこない。

勝手なイメージで悪いが、彼女が作曲したら全てメタル系の激しい曲調になってしまう。いそうな気がするのだが。

「じゃあ衣装は？」

梨子の問いで、自然と皆の視線が唯一名前の出ていない三年生に移る。

「まあ、わたくしと……」

皆の疑問に答えつつ、ダイヤが自分の妹に目を向ける。

「ああ！ だよね！ ルビイちゃん裁縫得意だったもん！」

「得意って言うか……」

衣装担当の曜に褒められ、照れくさそうに俯くルビイ。

「これも……ルビイちゃんが作ってくれたすら！」

そんな様子を見ていた花丸がどこからか手提げ型のバッグを取り出し、そこに施された刺繍を見せつけてきた。

「可愛い！」

「刺繍もルビイちゃんか？」

「……うん」

「ん？ じゃあこの前ルイズの野郎に渡してたハンカチもお手製か？」

「うゆ。ライブの応援の時、汗かくかなあ……って」

あのルビイソロライブ以降二人はすっかり仲良しになり、ルビイは今でもたまたまに陸を連れてメトロン星人ルイズの家を訪ねているのだ。

このところは彼女の人見知りも徐々に改善されてきていて、やはりこれまで恐怖の対象だった宇宙人と仲良くできた事はルビイの中でも大きかったらしい。

「仙道さん」

「うえ？」

陸が子供の成長を見守る親のような感覚に浸っていると、突然ダイヤの顔が視界いっぱいに映る。

「そのルイズさんとは誰なんですの?! まさか殿方?! ルビイがわたくしの知らない所でこの馬の骨かも知らない殿方と親密になっているというんですの?!」

「ええい顔が近い! つか落ち着けシスコン!!」

親の仇でも見るかのような瞳でここにはいないルイズを睨みつけるダイヤに、年上だという事も忘れてツッコンでしまう。

妹の事が心配なのは分かるが、こいつはちよつと大げさすぎやしないだろうか。

将来ルビイに彼氏でも出来た日は、その彼にとつての一番の壁は間違いなくダイヤだろう。

「じゃあ、二手に分かれてやってみない?!」

がたと椅子が動いた音と共に鞠莉の提案が耳朵に触れる。

「二手……ですの?」

(・・・今だ)

ダイヤの気が逸れた一瞬の隙に部室の隅へと避難する陸。

「曜と、ちかつちと、梨子が説明会用の曲を準備して。他の六人が、ラブライブ用の曲を作る！ そうすれば、皆の負担も減るよ」

「でも、いきなりラブライブ用の曲とかなんて……」

「だから皆で協力してやるの！ 一度ステージに立つてるんだし、ちかつち達よりいい曲作れるかもよ！」

自信満々に豊満な胸を張る鞠莉。不安気なルビイとは対照的だ。色んな意味で。

「かもではなく、作らなくてはいけませんわね。スクールアイドルの先輩として！」

「おおっ！ 言うねえ！」

無駄に好戦的な気質である三年生は全員賛成のようだった。

「それいい！ じゃあどっちがいい曲作るか、競争だね！」

千歌も少しでも作詞の負担から逃げたいらしく、特に反論する様子もないまま賛成の意を表明する。

「ルビイちゃん」

「う、うん」

「承知」

「では、それぞれ曲を作るという事で決まりみたいですな」

「よし！ 皆で、がんばろ——！」

「……」

陸、曜、梨子の三名が不安そうに顔を見合わせる中、それぞれで作曲をするという事で話が合致した。

「じゃあ、私達は千歌ちゃん家で曲作ってるね」

「頑張るぞら〜」

「お前等が一番な」

『……あの面子じゃ不安だし、俺ちよつと向こうについてくわ』

「いいよー。おいで〜」

陸の身体からゼロが抜け、こいこいと手招きする果南へとウルティメイトブレスレットと共に宿る。

ベロクロンのミサイルによる陸の傷はもう癒えたので、もう一体化を解除しても問題

ない。

とうか元々半端じゃない身体能力を誇る果南にゼロの力が宿るとか、軽い流れで地球圏最強生物が誕生してしまった。

「じゃあゼロ！ そつちは任せたぞ！」

『おう！ そつちも気を付けろよ！』

二年生達の背中が話し声と一緒に遠ざかっていくのを一瞥した後、果南は残った五人を見据えた。

「さてと。私達はどこでやろうか？」

「ここら辺だと、やっぱり部室？」

「代り映えしないんじゃない？」

「そうですね。千歌さん達と同じで、誰かの家にするとか？」

『・・・場所が変わるもんなのか？』

「まあ、環境を変えるってのも、大事だと思うよ？ 見えてくるものも変わってくるしね」

『ふん・・・』

ゼロ達ウルティメイトフォーエスゼロがマイティベースという秘密基地がありながら、現在陸の家を拠点にしているのと同じ原理なのだろうか。

「鞠莉んところは？」

「え？ 私？」

「確かに、部屋は広いし、ここからそう遠くもないですし……」

何やら話し込み始めた三年生を尻目に、鞠莉の家に行ったことのない一年生組はひっそりと話し合い始める。

「もしかして、鞠莉ちゃんの家ってすごいお金持ち？」

「うん！ そうみたい！」

「スクールカーストの頂点に立つ者のアジト……」

「私はNo Problemだけど……、三人はそれでいいの？」

鞠莉の問いに、三人は一秒の迷いもなく同時に手を挙げた。

「賛成ずらー！」

「右に同じ！」

「ヨハネの名にかけて！」

「OK！ Let's Together!!」

興奮気味の一年生を引き連れながら、鞠莉はずんずんと自分の家へと歩を進めていく。

『……そんなにすげーのか？ 鞠莉の家って』

「・・・少なくとも、私達とは住んでる世界が違うよ」

と、他のA q o u r sメンバーとは体力面で住んでる世界が違う果南が言うからには間違いなのだろう。

ゼロも少しだけ期待に胸躍らせながら、その後へと着いていった。

七十三話 それぞれの個性

「わあああゝゝゝ．．．．．！」

『マジか．．．』

小原家の正面玄関から足を踏み入れた一年生三人から感嘆の声が上がる。

幼子のようにキラキラと輝かせている瞳の先にはホテルのロビー然とした開放的な空間が広がっており、その中には床一面を覆う大理石やそこに並べられた巨大なソファアームが複数。そして作つた意味が皆目見当もつかない鞠莉を模つた銅像。

とてもここが人の居住地だとは思えない。

「すごい！ きれい！」

「なんか気持ちいいぞら！」

「心の闇が．．．．．、晴れていく．．．！ ああつ．．．！」

「そんなに？」

ぱたりと倒れてしまった善子を半目で見下ろす果南。

「初めて来た時は貴方だつてこんな感じでしたわよ」

「そうだっけ……？」

何でも幼き日の果南はここに住むと断言したそうな。

誤魔化すようそつぽを向いた彼女を一瞥すると、ダイヤはゴホンと咳づいて全員の意識を自分に向けさせる。

「それよりも、ここに来たのは曲を作る為ですわよ！ さあ！」

場所は変わり、来客スペース。

「お待ちせー、AfternoonTeaの時間よー！」

部屋着？に着替えた鞠莉がティースタンドに乗せて運んできたのは、人数分の紅茶のカップと大量の洋菓子だった。

「「わあああ………！」」

物珍しい菓子類を前に、ルビィ、花丸、善子の三人は更にそのテンションを上げてい

た。

「超、未来ずら……」

「好きだけ食べてね♪」

鞠莉の言葉に、三人同時にティースタンドへとへと伸ばす。

「ナニコレ!!」

「このマカロン可愛い!」

「ほっぺがとろけるずら……」

マカロンを口の中へと放り込み、表情筋が力を失ったかのように顔を弛緩させるルビィと花丸。

「ダメよヨハネ! こんなものに心を奪われたら浄化される! 浄化されてしまう!

墮天使の黒で塗り固められたプライドが……!」

そんな二人を見たからか、奇妙な墮天使劇と共に一人理性を保とうとする善子だが……、

「あくん」

「ギラン! ……昇……天……」

花丸が口の中に放り込んできたマカロンにより、幸せそうな顔でソファアールへと倒れ込んでしまった。

『おいダイヤ。さっきのお前の一喝は何だったんだ?』

敢無く高級菓子の前に撃沈した一年生ズを目の当たりにし、呆れ気味のゼロがダイヤに声を掛ける。

「・・・さあ、何なんでしようね?」

「ダイヤ達もどうぞ♪」

高級菓子の魔力に犯されていなかった果南とダイヤにも、鞠莉によるマカロンの誘惑が迫る。

魔の手を伸ばしまくっている鞠莉に自覚が無いようなので、ここは自分がハッキリと言わなければダメだろう。

『あー、おいお前等。このままだと菓子だけじゃなくて作詞の時間まで食い潰すことになるぞ』

そう思いやんわりと注意を促したゼロだが、

「・・・・・・・・」

果南とダイヤが喉を鳴らして生唾を飲み込む音を聞き逃さなかった。

とても幸せそうな一年生の様子を見てしまっているからか、二人の手は徐々にマカロンの山へと伸びていき――、

『ちよ・・・・・・・・、お前等まで堕ちてどうすんだ!』

咄嗟に果南の身体から主導権を奪い取って制止しようとするが、マカロンへの強い好奇心故か、主導権を握るどころか弾かれてしまう。

『何いいいッ!』

結局果南とダイヤもマカロンを口にしてしまい、その魔力の虜となってしまった。

その後、小一時間ほど菓子と怠惰を食っても彼女達の手が止まる事はなく、ただただ無駄に時間が過ぎ去っていく。

「ほわああ……、幸せすら……止まらないすら……」

「このチョコ味がまた堪らないんだよね……」

新たに出されたチョコレートポップコーンに花丸と善子はご満悦である。

「あー、ゾウさんー!」

いつの間にか電源が入れられていたテレビにゾウが映し出され、同じくチョコレートポップコーンを口に運んでいるルビィが反応する。

果南とダイヤも本来の目的を忘れて菓子を食い、全ての元凶である鞠莉は何食わぬ顔で優雅に紅茶のカップを傾けていた。

『……』

そしていい加減、この状況に耐えかねた者が一人。

自分の事は柵に上げて説教をかますダイヤに対し冷静にツッコむゼロ。

「あつちがいいずらく〜！」

「もつとポップコーン食べたかったのに！」

「あ☒あん？」

窓枠に肘をつけて文句を垂れる花丸と善子の間割って入る目つきの悪い青年が一人。

「十分食つただろ」

「……………へい」

ドスと凄みが滲んだゼロの声音に、二人は必ずすると作詞に引き戻されるのであった。

迷走を重ね、ようやく本来の目的である作詞会議に突入する。

「では、まず詩のコンセプトから。ラブライブの予選を突破するには——」

「はいー！」

ダイヤの言葉を途中で遮り、先程まで文句を垂れていた花丸が元気よく手を挙げた。

「ずばり、無、ずらー！」

いつの間にか手にとっていたスケッチブックにいつの間にか書かれていた「無」という文字を皆に見せつけてくる。

「………無？」

しばらくの沈黙の後、半目で問いかけた果南に花丸は立ち上がって答えた。

「そうずらー。即ち無というのは全てがないのではなく、無という状態がそこにあるという事ずらー！ それこそまさに無！」

「は？」

「What？」

「なにそれ………」

周りが難しい顔をしている中、ただ一人善子がゆらりと立ち上がる。

「カッコイイ！」

無という響きに厨二心を擽られたのか、墮天使ながら賛成の意を秘めた瞳を花丸に向けた。

「善子さん。その無という事があるという事こそ、私達が到達できる究極の境地ずらー」「ヨハネ。無……つまり漆黒の闇。そこから出でる力………」

花丸も変なスイッチが入ったのか、普段はツツコミを入れる善子の墮天使モードに

乗っかり、息ピッタリなタイミングで腕を交差した。

「そうずら——！」

「凄い！ 二人共！」

ルビイは感心したように目を輝かせるが、残念ながらそんな反応を示しているのは彼女ののみ。

「そんな境地一生かかっても到達しないでいいわ」

「それに、それでラブライブを突破できるんですの？」

「テーマが難しすぎるし……」

「Off Course！ もつとHappyなのがいいよ」

ゼロ、そして三年生達は真つ向からそれを否定する。

「理解できないとは……」

「不幸ずら……」

「そう言う鞠莉さんは、何かアイディアがありますの？」

不貞腐れる花丸と善子を尻目にダイヤが流した質問に、鞠莉はスマホを取り出しながら答えた。

「まっかせなさい！ 前から温めてた、とびつきり斬新で、Happyな曲がありま
す！！」

流水の様な動きでスマホをスタンドにセットする。

「はう・・・、皆に曲を聞いてもらうこの感覚、二年ブーリですネー！」

「未来ずらく」

「どんな曲？」

「ふふつ、聞いてみる」

皆が期待を表情に含ませたのを見て、鞠莉が微笑みながら再生ボタンを押したその瞬間――、

ズン！

低く力強い爆音が轟き、空気が震えた。

「うおお・・・・・・？」

「イイエーイ♪」

ゼロですら思わず上体を仰け反らせて顔を顰める反面、鞠莉はノリノリで簡単なダンスを披露している。

「なんかいいね♪ 身体を動かしたくなるって言うか」

「まあ、確かに、今までやってこなかったジャンルではありますね」

「・・・何で平気なんだよお前等・・・」

この様子を見るあたりだと、以前この三人でA q o u r sをやっていた時はこんな曲

で踊っていたとでも言うのだろうか。

鞠莉とほぼ同類みたいな果南はまだいいとして、厳格そうなダイヤがこの音楽を受け入れていたとは予想外だ。

「音楽に合わせて、身体を動かせば、Happyになれますネ♪」

「そうだね！ ラブライブだもん！ 勢い付けていかなきゃ！」

「……………この有り様じゃ無理だろ」

音楽を止めたゼロが目を向ける先。

そこには、爆音に耐えかねて死屍累々と化した一年生達の姿があった。

「ルビィ……………こういうの苦手……………」

「耳がキーンしてる……………」

「……………単なる騒音すら……………」

パタリと頭を落とした三人を見て、ゼロは頭が痛くなるのを感じながら蟀谷を押しさえた。

一方その頃、二年生組のいる十千万。

「うう………」

浦女組三人が囲むテーブルに、千歌が唸りながら突っ伏していた。

「浮かびそうもない?」

「うーん………、輝きつて事がキーワードだと思っただけだね………」

「輝きねえ………」

三人寄れば文殊の知恵というのが実際全くそんな事はなく、歌詞ノートは依然真っ白なままである。

「そっちの三人はなにかいいのいない?」

曜が首を回し、離れた場所で見守っていた男三人衆にアイディアを求める。

一人は当然陸。もう二人は陸が呼び出したグレンファイヤーとミラーナイトだ。

ゼロと共にウルティメイトブレスレットまで果南のところに行ってしまった為、今の陸には千歌達の防衛手段が限られてくる。そんな訳で呼び出したという事だ。

「あん? そんなん熱くて燃えるモンに決まっただろうが! ファイヤアアア!! つてな」

マジで炎でも噴出させそうな勢いで叫ぶグレンに、曜は若干引き気味に苦笑いをす

る。

「………例えがよく分からない………陸は？」

「俺に歌詞の事を聞くな。音楽の評定1だぞ」

今だこの方作詞作曲方面でのA q o u r sへの貢献度は0%である。

とまあ微々とも力になれない二人に、ミラーナイトまでもが苦笑いで肩を竦めた。

「全く使えませんがね貴方達……。そうですね、私も歌詞についてはからきしですが……千歌。貴方達は未来を変えるべく、新たなスタートを切ったのでしょうか？ だったら、その気持ちを歌詞に乗せてみたらいかがでしょうか」

「おお………いいかも！」

「二人より頼りになるー！」

「悪かったな！」

頼りにならない二人は無視し、千歌はミラーナイトからもらったヒントから発想を広げようと弱い頭を働かせ始める。

「あー………早くしないと果南ちゃん達に先越されちゃうよね………」

「だよn——」

『その心配はないと思うぞ』

「うおおっ!!」

突然ゼロが帰還し、驚きの声をあげる陸。

更にそれと同時に千歌のケータイが着信音を鳴らし、全員の視線がそちらに移る。

「ルビイちゃん・・・?」

『お前等。今すぐ黒澤家に行け』

ルビイからのメールもゼロの言葉と同様の内容で、いざ今から作詞を始めようとしていた千歌達の表情が焦りと衝撃に染め上げられた。

「うそ?! 本当に先越された?!」

メールの内容を改めて確認し間違いがない事を理解した後、六人は爆ぜるように部屋から飛び出して行った。

「それではライブは突破できません!」

「その曲だったら突破できるって言うの?!」

「花丸の作詞よりはマシデース!」

「むう……」

「でも、あの曲はAqoursには合わないような……」

「新たなChallengeこそ、新たなFutureを切り開くのデース！」

「さらにそこにお琴を！」

「無の境地すら！」

「……え……つと……?」

黒澤家の階段を駆け上がった先で陸達を待ち受けていたのは、二組に分かれて対立しあう一年生と三年生だった。

先程別れた際の一致団結はどこへ消えたのか、今は犬猿の仲をそのまま絵に映したかのような状態と化していた。

『……面目ない、俺がついていながら……』

「あ、あはは……」

「やはり、一緒に曲を作るのは、無理かもしれませんわね……」

口論する鞠莉達を宥めた後、二年生四人や妹のルビィを連れて一度外に出たダイヤは溜息混じりの声音で言った。

「趣味が違い過ぎて……」

「そっか……」

「いいアイデアだと思ったんだけどな……」

あの様子を見る限りでは、とても作詞どころではないだろう。

何とかこれ以上対立が発展する事は防いだが、部屋に残してきた果南と鞠莉、花丸と善子は互いにへそを曲げて口を聞こうとしなくなってしまうた。

「もう少しちゃんと話し合ってみたら？」

「もう既に散々話し合いましたわ。ただ……思ったより好みバラバラで……」

「バラバラかあ……」

まあでも、三年生と一年生では全くと言っていい程タイプが違うので仕方ないとも言えるだろう。

互いに絡んでいる姿もあまり見た事が無いし、原因はそこにもあるのかもしれない。でも、いつまでもバラバラって訳にもいかないし……」

「……確かに、その通りですわね。私達は、決定的にコミュニケーションが不足してい

るのかもしれませんが」

「まあ、一年生と三年生の主なコミュニケーションだったらこの前の姉ちゃんと善子の柔軟と、黒澤家姉妹コントぐらいいしな」

「コントゆるな！ ですが、実際それぐらいいしか絡みが無かったのも事実ですわ」

とは言ってももう過去に戻る事は出来ないし、何か別な方法を検討しなければいけない。

これは作詞以前に、今後のA q o u r sにも関わる問題なので真剣に考えなければならぬまい。

「となると、アレしかありませんわね」

ふと何か思いついたようにダイヤが笑みを浮かべ、ポンと手を叩いた。

「アレ?」

「ええ。まずは互いに親睦を深めるところから始めようかと……。あ、仙道さん借りますわよ」

「え?」

七十四話 九人九色

「仲良くなる?」「」

ダイヤの提案を聞いた果南と鞠莉、そして善子と花丸が声を揃えて仏頂面を同じ方向に向けた。

「そうですね。まずはそこからです」

「曲作りには信頼関係が大事だし」

「このままじゃ今後の活動に支障をきたしかねないし」

黒澤姉妹とその姉の方に強制的に残された陸がそう言うと、若干表情が柔らかくなった花丸が首を傾げる。

「でも、どうすればいいはず?」

一言に「仲良くなる」と言っても、ここまでタイプが違う連中を仲良くさせるなんて簡単に出来るものではない。

ダイヤも具体的な案を挙げないまま事を実行に移してしまったので、この後何をする

かは何も決まっていない。流石はいざという時にポンコツ化する生徒会長と言ったところか。

「ふふっ……、任せて」

やけに自信たつぷりに立ちあがった果南に全員の視線が集中する。

「なんかあんの？」

「うん！ 陸も昔やったでしょ？ 知らない子と仲良くなるには——」

「——一緒に遊ぶ事!!」

ひゆう、と風を切る音と共に果南の投げた剛速球が善子と花丸の間を駆け抜けた。

場所は浦の星女学院の校庭に移っており、一年生と三年生の六人は体育着に着替えていた。

「ナイスボール！」

鞠莉は顔色一つ変えずにそれを受け止め、サムズアップを果南に向ける。

これでまだ肩慣らしだというのだから彼女達は恐ろしい。

『……何でドッジボールなんだよ。善子と花丸の顔完全に引き攣ってんじゃねー

か』

「・・・まあ、体力バカの姉ちゃんらしいつつたららしいけどな」

そう言えば果南と初めて会った日もこんな感じで無理矢理一緒に遊ばされた記憶がある。当時は確か三歳だったか。

あの時やったのもドッジボールだった。

その頃から化け物染みた身体能力を誇っていた果南に初エンカウントの陸と曜はおろか、それよりも前から果南と付き合いがあった千歌ですら手も足も出ずにポコポコにされたが。

まあ、それがあつたからこそこうして今も付き合いがある訳だし、一概に果南の言つてる事も間違いではない。

・・・もつとも、それが通用するのは小学生くらいまでだと思うが。

「さあ！　いつくよお！　マリ・シャイニングくく・・・」

「ずらあッ！」

「任せて！」

花丸を庇う形で前に出た善子が、両腕を広げながら何かの詠唱を開始した。

「力を吸収するのが闇。光を消し、無力化して、深淵の後方に引きずり込む！　・・・そ

れこそ！」

「トルネエード!!」

詠唱の途中で、果南のものに負けず劣らずの速度と威力を誇った剛速球が鞠莉の腕から放たれる。

「黒時………喰炎———なああう!!」

ギリギリで呪文は唱え終わるも時すでに遅し。

ボールは善子の顔面にクリーンヒットし、情けない悲鳴と共に後方に倒れ込んでしま
う。

そしてさらに、

「ずらっ!!」

「ピギイ!!」

善子の顔面で跳ね上がったボールが花丸、ルビイの脳天を連続で直撃し、一年生ズは
仲良く全員地面を転がった。

「ルビイ!! 大丈夫ですか!! しつかりなさい!」

「………あり?」

「………スペックに差があり過ぎる……」

このまま続行。という訳にもいかないのです、ドッジボールで仲良くなるという果南の
作戦はここで潰えたのであった。

「はあゝ．．．、やっぱりここが一番落ち着くずらゝ．．．」

「そっだよねゝ」

制服に着替え直して図書室へと向かった一行は、各々適当な本を手に取っていた。

A q o u r s に入る前まではここに引き籠っていた花丸とルビイは勿論の事、一学期の頭は引き籠りだった善子もこういう静かな空間は落ち着くようだ。

「ふふっ．．．、光で穢された心が、闇に浄化されていきます！」

すっかり調子を取り戻した善子がいつも通り一人墮天芝居に突入する。彼女の顔にはくつきりとボールの跡が残っており、余計に痛々しく見えた。

「あははは！ その顔——！」

『くくっ．．．、傑作だな．．．！』

「何よ！ 聖痕よ！ ステイグマよ！」

先程までとは打って変わって笑い合う一年生ズ。

だが別の机では先程まで笑顔だった二人の少女から笑みは消え、つまらなそうに本のページに羅列された文字を眺めていた。

「んゝ．．．、退屈．．．」

「そーだよゝ．．．、海行こう海ゝ．．．」

「．．．何？ 中毒症状？ 姉ちゃんにとつて海つて何なの．．．」

うゝみゝ．．．、とゾンビのように呻く果南は、麻薬を求める中毒者に見えなくもない。

「私は身体を動かしてないと死んじやう病気なんだよゝ．．．．．」

「回遊魚か」

あながち間違っていないというのが困るところだが。

小学四年生の頃だっただろうか。風邪をひいて学校を休んだ果南の見舞いに行ったら、おとなしくベッドに寝そべる事に限界が来た彼女が軽い禁断症状を起こしていて怖かった記憶がある。

〈果南でも風邪ひくんだな〉

（お前姉ちゃんのことなんだと思ってるの？）

「読書と言うのは、一人でも勿論楽しいはず。でも、皆で読めば、本の感想が聞けて――

「ZZZ……」

もはや聞く気もないのか、花丸が一人語る中、いつの間にか果南と鞠莉は夢の世界に誘われてしまっていた。

「寝てるの？」

「……二人は長い話が苦手ですから……」

一応自分で選んだ本を手にとっておいてこの有り様とは。一体普段の授業ではどんな体たらくになってしまっているのだろうか。

「……ほんと、本能だけで生きてるよなこの二人……」

行動パターンが小学生の姉とその親友に呆れた視線を送った後、陸は早くも心労のため息をつくのであった。

果南と鞠莉を叩き起こし、陸達はバスへと乗り込んだ。

だがここでも一年生と三年生が一緒になる事はなく、通路を境に果南と鞠莉、善子と花丸は別の席に座っていた。

「・・・さつきから運動にしろ読書にしろ、どちらか片方だけの趣味を押し付けてるのがいけないと思うんですよね」

「ええ、それはわたくしも薄々分かってきましたわ。・・・このメンバー・・・」
そもそもあの四人は根本的にタイプが違うのだ。

ダイヤの隣に腰かけた陸は彼女と共に通路を挟んでの左側、果南と鞠莉が座っている席に目を移す。

「わああ・・・、今日は絶好のダイビング日和だね！」

「また一緒に Together しましょーウ！」

「と言うアウトドアな三年生と・・・」

とにかく動いてないと生きていけない悲しき宿命を背負った二人を一瞥し、その反対側の座席に座っている者達を見る。

花丸は読書、善子はよく分からない事をぶつぶつと呟っていた。

「ほおう・・・」

「新たなリトルデーモンをここに召喚せしめよ・・・」

「と言うインドアな一年生に分かれている。という訳ですね」

「どうすればいいの……?」

ルビイの言う通り、正直どうしたらいいのか分からない。

あの四人、何か共通した趣味を持っている訳でもないのに、何かするにしろどうしても行き違いが発生してしまう。まさしく八方塞がりと言ったところか。

だがダイヤには何か考えがあるようで。

「仕方ないですね……」

「? 何かあるんすか?」

深く息を吐き出すと共に発せられた彼女の言葉に聞き返す陸。

「ええ、ここうなったらお互いの姿を……」

ダイヤは妙に自信ありげに目を見開き、腕を突き出してから強く言い放った。

「曝け出すしかありません!」

「……で、温泉か」

ダイヤの提案で露天風呂のある温泉まで移動し、いろんな少女に振り回されまくって疲弊した心身をいやす陸。

ちなみにあの一行で野郎は陸だけだったので、必然的に男風呂に来たのは陸だけである。

「……何で風呂なんだよ」

「……裸の付き合いだだよ」

何でもお互いの一糸纏わぬ姿を晒し合う事で信頼関係を深めるとかダイヤは言っていたが、どうせもう肝心の果南と鞠莉は風呂に飽きている頃であろう。

「しかし、地球人は不思議な文化を持つてるよな。湯に浸かる文化とか他の星じゃまず見ねーぞ」

「そーか？ 俺等にとつちや小さい頃から当たり前なんだが……。光の国には風呂ないのか？」

「ない。そもそも風呂に入るウルトラマンなんてオーブぐらいだ」

「……ガイさんは……。きつと日本人より風呂を愛してるよ」

今もどこかで風呂上がりラムネを楽しむのだろうか。

「それより。ホントにどうすんだよ作詞。このままじゃ絶対完成しねーぞ」

「うむ……」

今まで何度か千歌の全く進まない作詞風景を見てきたが、今回はその比ではない。千歌はともに作詞をするメンバーが曜や梨子と言う比較的距離の近いメンバーだったのに対し、一年生と三年生は日頃からの関りも少ない。

ルビイの言葉を信じるのならば曲作りは信頼関係が大事との事。

よつてあのメンバーが仲良くなる限りは一向に前に進めないのだが……。

「……こればかりは俺一人じゃどうにもならん。……こりやあの六人の問題だからな」

「………とやうと」

「……誰かと仲良くなるつてさ、なんかこう、人に言われたからそうするつて事じゃないだろ？」

「………どういう事だ？」

「……ちよつと説明が悪かったか。そうだな……。例えば、親とかに友達と仲良くしなさいつて言われても、あんまり乗り気にはならないだろ？」

「当たり前だ。俺は人の指図は受けねえ」

「………多分、今の状況つてそれと似たような事だと思ふんだよな。鞠莉さんは知らんけど、姉ちゃんあ見えて人見知りな部分あるし。善子と花丸は積極的に話す方じゃないし。そんな連中に第三者が仲良くしろつて口挟んだところで無理だ」

へ……なるほど。つまり自発的に仲良くなれるような行動に移らなきゃいけないと」

「ああ。何かきっかけさえあればいいんだが……」

その時、冷たい何かがぼつりと陸の鼻先に触れた。

「……雨か？」

唐突に振り出した雨を凌ぐべく、一時的に近くのバス停へと避難した。

「せっかくお風呂入ったのに、雨なんてね……」

先程まで快晴だったというのに、何がどうしてこうなったのやら。

「おい善子。変なところで不運発揮してんじゃねーよ」

「何で私のせいなのよ!!」

「冗談だ」

誰のせいかは置いておいて、空模様を見る限りではまだまだ雨は止みそうもない。

「結局何だったんですの？」

「確かに何しに行つたんだか」

「まるはご満悦ずら」

「ルビイも」

楽しかつた分にはまあ良かったのだろうが、そもそも本来の目的はドッジボールや読書、入浴を楽しむことじゃない。作詞だ。

「あちらを立てればこちらが立たず……全く」

「より違いがハッキリしただけかも」

陸の予想通り果南と鞠莉は早々に風呂に飽きていたらしいし、ご満悦だった一年生との違いはより明瞭になってしまった。

重い空気に雨もたらした湿気が流れ込み、少し息苦しくなった雰囲気の中ゼロが口を開いた。

『……いいんじゃないの？ バラバラで』

「え？」

「どういうことですか？」

『あ……そうだな——』

返答を掻き消すように、ぎああと、より強く雨がアスファルトの道路を打ち付けた。

「どうしよう。傘持ってきてない」

「どうするのよ？ さっきのところに戻る？」

「それはちよつとなあ……」

「くしつ……！ 結局、何も進んでないかも……」

ルビイがそう零したのを皮切りに、暗い沈黙が舞い降りる。

それを打ち破ったのは、不意に花丸が漏らした眩きだった。

「近くに、知り合いのお寺があるにはあるずらが……」

「入っていいずら」

「えっ……」

「……、ですの……？」

ぎぎい……と、錆びれた寺の門が開く。

音や門自体の風格もあり、さながらゲームのラスボスが潜んでいる城にでも乗り込む瞬間のようである。

「……の？」

「連絡したら、好きに使っていいって」

「すげえな。流石寺の子・・・」

陸が集団より前に出て、扉に囲まれた敷地の中の様子を伺う。

太陽光の差さない曇天模様の下でこういう小さな寺はかなり不穏に映り、所々に鎮座している墓石が余計に不気味さを増長させている。

「住職の人は？」

「ここに住んでる訳じゃないから・・・・・・・・・・いらないすらあ・・・」

「ひやあう・・・・・・・・」

「あーはい。怖い怖い」

懐中電灯で自身の顔を下から照らして驚かせようとしてくる花丸を適当に流し、敷地の中央部に位置する本堂らしき建物を見据えた。

「となると・・・・・・・・」

「とりあえずあそこ使わせてもらうか」

「ふえっ・・・・・・・・!!」

誰かの発言にいちいち肩を震わせる果南とルビィ。

恐らく寺の雰囲気気圧されてすっかり怯えてしまっているであろうが、生憎他に雨を凌げそうな場所がないので我慢してもらおう他ない。

「ふっふっふっ……、暗黒の力を……、リトルデーモンの力を、感じ——」

「仏教ずら」

「知ってるわよ！」

善子と花丸のいつものノリを見届けた後、震える果南とルビィを引き摺って本堂の中へと入って行った。

「すげー……。こんな間近で仏像見たの初めてかもしんねー」

宇宙規模で神と呼ばれている存在から預かったブレスを懐中電灯代わりに使い、地球の一部の人間に崇められている仏の像を照らす陸。ノアにしろ仏教にしろ罰当たりもいいところだろう。

ウルティメイトブレスレット以外で光を発しているのは仏壇に供えられた蠟燭のみで、本堂の中は薄暗く、外より更に不気味である。

「で、電気は？」

「無いすら」

「Really?」

近くに電線は見当たらなかったし、もしやとは思ったが、まさか本当に通っていないか。かつたとは。

まあ、こんな歩く度にぎしぎしと床が軋むような古い寺に文明の利器を求めるだけ無駄だとは思うが。

作曲するには最悪の環境に皆が戸惑っていると、先程から震えっぱなしだった果南が上擦り気味の声を発した。

「どどどどうする? 私は平気だけど——はぐう!!」

「むぐつ……姉ちゃん、苦しい……」

だが言葉の途中で雷鳴が轟き、恐らく彼女固有の悲鳴らしきものを上げながら陸に飛びついてきた。

そんな果南に冷たい視線を注いだ後、鞠莉が全員に対し提案する。

「……とりあえずやる事もないし……、曲作り?」

「でも、また喧嘩になっちゃったりしない……?」

「き、曲が必要なのは確かなんだし、とにかくやれるだけやってみようよ!」

「そうですね」

皆がダイヤの言葉に賛同して動き出そうとした直後に床が音を鳴らし、果南は再び豊満な何かと一緒にその身体を陸に押し付けてくる。

「はぐうー！」

「ぐえっ・・・！」

とりあえず使えそうもない果南と彼女に拘束された陸は無視し、鞠莉は話を進めていく。

「意外とパーツと出来るかも！」

「だといわずらね」

「歌詞は進んでるんですの？」

まあ、まず問題になってくるのはそこだろう。

前に梨子が言っていたのだが、曲のメロディは歌詞のイメージが重要になってくるので、これがないければ何も始まらないのだ。

「善子ちゃんがちよつと書いてるの・・・この前見たすら」

「何勝手に見てんのよ！」

花丸の口から意外な名前が挙がり、全員の視線が善子に集中する。

「へえ、やるじゃん」

「すい〜こ」

「Great!」

初めはあまり乗り気でなかったような善子だが、皆の称賛の声を受けて徐々に調子に乗り始める。

「ふっふっ・・・、いいだろう。だがお前達に見つけられるかな?! このヨハネ様のアークを——」

「あつたすら」

「こらあー!」

善子の荷物を勝手にまさぐった花丸がノートを取り出し、皆でそれを囲む。

が、全員そこに記されていた善子語に顔を顰めた。

「なんだこれ・・・」

「う、うらはなれせいきし・・・?」

「りりせいきしだん・・・?」

「裏離聖騎士団りゆうせいしだん!」

そんな斬新すぎる当て字誰も読めるはずがなかった。

「この黒く塗りつぶされているところは何ですか?」

「ブラック・ブランク!」

黒澤姉妹が身を寄せ合いながら同時に飛び上がり、耳を劈く悲鳴を上げる。

「ちよ．．．、落ち着きなさ——え？」

「ずらっ！」

突如として世界が暗転する。

ゼロとの一体化で強化された視覚で辺りを確認すると、今黒澤姉妹が起こした風圧で蠟燭の火が消えていた。

「「「「きやあああああああああああああああッ!」「」」」」

「があああああああああッ!」

瞬間、花丸以外の女子が上げた悲鳴と、果南にとんでもない力で抱き付かれた陸の絶叫が響いた。

「私達、どうなっちゃうの．．．?」

混乱の中何とか蠟燭に火を灯し、すっかり脱力しきった善子が床に身を預けながらそ

う零す。

彼女だけでなく皆も疲弊しており、メンバーを分けて作曲をすると決めた時の元気を保っている者は一人もいない。

「全然噛み合わないぞら……」

「このまんまだと、曲なんてできっこないね……」

「そう、ですわね……」

「So Bad……」

「そんなに違うのかな……、ルビイ達……」

暗い言葉の後には湿っぽい沈黙だけが残り、蠟燭の炎だけが虚しく揺れる。

『……違くていいじゃんか』

そんな静寂を打ち破ったのはゼロだった。

『他人に合わせる必要なんざねーんだよ。各々が思うように、それぞれの色を出せばいい。ほら、十人十色って言うだろ？ 個性なんか人それぞれなんだからよ。ハナから他人に合わせろって方が無理な話だ』

「……しかし、それでは……」

『確かに時には他人に合わせる事だつて大切だ。けど、構成員の個性を消した集団に未来はねーよ。皆それぞれの色を思ったように発揮するから、強くなれる。……千歌つ

ぼく言うと、輝ける。か?』

どこか確信の籠った声音でゼロは続ける。

『ウルティメイトフォースゼロだつてそうだ。いきなり殴りかかつてきた暑苦しい奴もいるわ、いじけて引き籠った先で体育座りしてた奴もいるわ、頭の固い姫様第一主義の奴もいるわ、有機生命体を全部抹殺しようとした奴もいるわ。あれでも最初は今のお前等以上に嘔みあつてなかつたんだぜ?』

「ええ・・・?」

「考えられないぞら・・・」

『それでも今はこうして信頼関係を築けてる。互いの個性を尊重し合つたからこそ、今のウルティメイトフォースゼロがあるんだよ。・・・別に難しい事じゃねえ。お前等なら、出来ない事じゃないはずだぜ』

「ゼロさ———ピギィ!?!」

背中合わせに座っていた黒澤姉妹の首筋に滴り落ちた水滴が落ち、またしても姉妹同時に短い悲鳴を上げる。

「な、何?!!」

「雨漏りぞら!」

花丸の言葉通り、黒澤姉妹が座っていた場所を見上げてみると天井から水滴が染み出

していた。

見た目からしてかなり古そうな寺だったので雨漏りしていても不思議ではないが……、

「つて、いくら何でも雨漏りし過ぎだろ。何力所あんだよ」

しばらく手入れをされていなかったのか、雨宿りをしている意味があまりない程度には至るところで水が漏れ出している。

「どうするの?」

「こつちにお皿あつた」

仏壇の近くの置いてあつた皿を手に、水が滴る箇所へと急ぐ果南。

「今度はこつち! ええつと……」

「鞠莉さん。こちらにお茶碗がありましたわ」

「こつちもお皿ちようだい!」

「OK」

「こつちも欲しいぞら」

「お姉ちゃん。桶、桶」

少し前に陸が口にしたきつかけは唐突に訪れた。

雨漏りと言う不測のアクシデントに、先程までなんのまとまりのなかつた六人が見事

な連携を見せ始めたのだ。

しばらくは、水滴を受け止める皿やお椀の奏でる音に耳を傾けていた。

チン、コツン、チリン。器の大きさがそれぞれ違うので、奏でる音もそれぞれ違う。まるで、囁みあつていかなかった自分達を現すかのように。

確かにそれぞれ違うのだ。ただ、聞いている内にそれは、一つのメロディーとなつて耳に滑り込んでくる。

「……ゼロさんの言う通りかもしれないわね。……テンポも音色も、大きさも」

「二つ一つ、全部違つてバラバラだけど」

「二つ一つが重なつて」

「二つ一つが調和して！」

「二つの曲になつていく」

「まる達もずらー！」

言葉を並べながら彼女達は自然と肩を組み、自分達の顔を見合わせた。

本当に些細なきっかけだった。

一度一つになつてしまえば、あとは簡単だ。

あととはそれぞれの個性をどう組み合わせる曲にしていくかだろう。

「よし！ 今夜はここで合宿すら——!!」

「「「ええっ!!」」」

「え？ 俺も？」

「Off Course!」

結局は鞠莉の持ち前の強引さに押され、今夜は徹夜で作曲する事となった。

「千歌——ッ！」

翌朝。

二年生達が作詞をしている十千万に足を運んだ七人。

屋根に上って朝日を眺めていた千歌の名を果南が呼ぶ。

「あつ！ 皆！ 曲は出来たー!!」

何故そんなところにいるんだという陸の視線は無視し、大声でそう問うてくる。

それに対し六人の少女は自信たつぷりの笑みで返す。

「ばつちりですわ!」

「」「じゃーん!」「」

六人同時のボーキングと共に掲げた歌詞ノートを見て千歌と、彼女を窓から見つめていた梨子と曜の目が輝き出す。

「本当!」

「さあ!　じゃあ練習しなくちゃ!」

「学校とラブライブに向けて!」

リーダーの宣言に、皆の心が重なった丁度その時。

鞠莉の鞆から顔を覗かせていた彼女の携帯が、不穏な着信音を鳴らした。

ここに来て、天は更なる試練をA q o u r s に課してきた。

確かに強めに降っているなどは思っていたが・・・、まさか交通網に支障を来すほどだったとは。

「確かに、その考えは分かるけど・・・」

「でも、よりによって・・・」

深刻そうな雰囲気醸し出しながら顔を俯かせる曜と梨子。

それは他のメンバーにも伝染し、皆どうしたらいいのか分からないと言った顔をずる。・・・ただ一人を除いては。

「ほっ・・・、ほっ・・・」

今の話のシヨックなどまるで受けていない様子の子歌が、危なっかしい動きで屋根の上を移動してくる。

「どうしたの皆々？ その分もつといいパフォーマンスになるよう頑張ればいいじゃん！」

「・・・この馬鹿は・・・」

どうやら全く状況を理解していないらしい彼女に対し頭痛を覚え、額を押さえる陸。

「あのなあ。ラブライブの予備予選が開催されるのはいつだ？」

「いつって・・・、学校説明会の次の日曜でしょ？」

そこは流石に分かっていたかと少しばかり安堵する。まあ、今の状況は全く安心できないのだが。

「・・・そんな時に説明会が一週間延期。ラブライブの予備予選の日程はこっちの都合で動くはずもない。さて、説明会に予備予選。二つが開かれるのはいつだ？」

『流石にこれで気付かなかつたらただの馬鹿だよな』

「もー！ 陸ちゃんもゼロちゃんも私の事馬鹿にしてるのや！」

ぶんすかと効果音が付ききそうな程度に怒って見せた千歌は、腕を組んで豊かな膨らみを備えた胸を張る。

「そんなの簡単だよ！ ・・・ん？」

ようやく千歌も事の重大さを悟つたらしく、余裕ぶっていた表情と身体のバランスを崩す。

「オイ！！」

そしてついには地面に向かって落下を始めてしまう。

咄嗟に地面を蹴って予想落下地点に滑り込んだ陸の身体に、尻餅を付いた千歌の全体重×重力の衝撃が走る。

「重っ・・・！！」

思わずそう零してしまった陸だが、一番聞かれてはマズかった千歌はそれどころでは

ないと言った表情でいる。

問一 ラブライブ予備予選の丁度一週間前に予定されていた学校説明会が雨の影響で丁度丁度一週間延期になってしまった。両者の元々の開催日時は日曜日とする。前述の情報から予備予選と説明会。これらが開催される日程をそれぞれ答えよ。

さて、その答えは？

「同じ日曜だ！」

Q. E. D. 証明完了。つまりそういう事である。

「ここが、ラブライブ予備予選が行われる会場」

「ハイハイ？」

その日の放課後。

浦女の体育館に召集されたA q o u r sと陸は、床に広げられたこの地域の地図と睨

徐々に墮天使の行動パターンが見極められつつ合つて悲しい。

「そうだよ！ 空だよ！」

「ああ？」

何を思ったか、今度は千歌が頓珍漢な事を言い出した。

「鞠莉ちゃん家ならヘリコプターくらい簡単にチャーター出来るよね!! という訳で鞠

莉ちゃん！ ここらで一っ・・・」

「オーウ！ さつすがちかつち！ その手がありましたー！ すぐヘリを手配して・・・と言えと思う？」

最後だけやたら流暢な日本語のノリツツコミを見せた鞠莉に、千歌が残念そうに聞き返す。

「だめなの？」

「Off Course! パパには自力で入学希望者を百人集めると言つたのよ!! 今更力貸してなんか言えると思う？」

強めの語気で千歌へと詰め寄る鞠莉の足元で、何やらぐしやりと音がした。

「・・・・・・・・ちよつと、地図踏んでるよ」

「Oops・・・。とにかく! All or Nothing! だとお考え下さい！」

小原家の力が借りられない以上、状況はいよいよ絶望的になってきたかもしれない。

「だつたらゼロちゃん！ 空飛んで私達の事学校まで運んで〜！」

金持ちがダメなら今度はウルトラマンの力。もう藁にも縋る思いなのはひしひしと伝わってくる。

『無理だな。俺達ウルトラマンはあまり文明に干渉しちゃいけないー決まりがある。本来の仕事は発展途上文明の観測。未知なる脅威が迫った時のみその力を貸すのが基本的な規則だ。・・・まあ、その規則破ったウルトラマンもいるけどな。親父とか、マツクスとか』

「・・・なんか難しいこと言つててよく分かんないけど・・・そこを何とかー！」

『んなことしたら滅茶苦茶目立つし、下手しい俺が陸と一体化してる事がバレかねないんだよ。そうなつたらもうこの地球にはいらねえ』

「そうなの?」

『残念ながらな。混乱を避けるためにも、人類に正体がバレたウルトラマンは光の国に帰還しないとイケなくなる。・・・実際、それが原因で地球を離れざるを得なくなつた先輩もいる』

「・・・それじゃあ、流石に無理は言えないね」

皆も事情を察してくれたらしい。

陸が前までゼロの事を明かしていなかったのは、勿論戦いに巻き込みたくなかつたと

いうのもある。

だが、下手な事をして地球人類全体に正体がバレる事を恐れたゼロからの頼みでもあったのだ。

『悪いな。・・・ベリアルが関わっている以上、俺はここを離れる訳には行かねーんだ』

「・・・ベリアル?」

『ああ。光の国で唯一の犯罪者にして・・・悪夢を具現化したような闇の権化——ウルトラマンベリアル』

「え・・・?」

ゼロがベリアルの名を口にした瞬間、何故か千歌が驚いたように目を見開き、肩を揺らした。

「・・・どうかしたか?」

「んえ!! ああいや、何でもない・・・。ああそうだ! 海からなら会場からショートカットして学校まで行けるじゃん!」

それを訝しく思った陸が顔を覗くと、誤魔化すように別の提案をする。

「船ですわね」

自然と皆一斉にダイビングショップの子である果南の方を向く。

「・・・ウチは無理だよ? 日曜仕事だし」

「じゃあ曜ちゃんは？ お父さん船長さんでしょ？」

「……流石に私情で借りる訳にはいかないよ……」

「むう……。だったら陸ちゃん！ お父さんとお母さん漁師さんでしょ!!」

「太平洋のど真ん中にいる漁船呼び戻せてか。そもそも連絡手段がねーよ馬鹿」

あと船を持っていそうな家は鞠莉の家くらいだが、先程の事を考えると期待は出来ない。

という訳で海路での移動も無しである。

「……現実的に考えて、説明会とラブライブ予選、二つのステージを間に合わせる方法は……一つだけ」

一人集団から歩み出たダイヤがくるりとターンし、表情筋を引き締める。

「一つ……」

「あるんかい」

『あるんなら早く言えよポンコツ』

「黙らっしやい。……予備予選番号を一番で歌った後、すぐであればバスがありますわ。それに乘れば、ギリギリですが説明会には間に合います」

トップで歌を披露した後に急いで会場を出て、すぐ近くのバス停でバスに乗り込み学校へと向かう。

確かに、それならば少なくとも遅れる、という事はないだろう。

だが逆に言ってしまうえば、これぐらいしか現実的な方法が残されていないのだ。

「……ただし、そのバスに乗れないと次は三時間後。つまり、予備予選で歌うのは一番出ないといけません」

「それって……、どうやって決めるの？」

「………そ「それは！」ん？」

せつかく長く溜めを置いていざ言おうとしたのに、痺れを切らした妹によって阻害されてしまったダイヤであった。

「抽選ですか………」

〈完全に運頼りだな……〉

件の抽選会が行われる会場近くのカフェテリア。

そこに入れるのはスクールアイドル当人達とそれらの正式な関係者だけなので、他校

の陸は当然必然当たり前が如し結果待機組である。

〈運営も冷たいよな。ちよつとばかしこつちの都合を汲んでくれてもいいじゃねーかよ〉

（つつても勝負の世界だ。人情一つでどうにかなる程甘くないんだろ。．．．．つか、それはお前が一番よく分かつてるよな？）

〈それはそうだが．．．．．。ああ！ 落ち着かねええええ!!〉
 （止める頭に響く．．．．．）

ジーっとしてもドーにもならない。が最近 A q o u r s の中で流行りつつあるが、そもそもジーっとならない奴がここにいた。

まあでも、ゼロがこうなるのも仕方ない。表面は平静を装っている陸でも内心そわそわしているのだ。

もしこの抽選会で一番を引くことが出来なかった場合、予備予選と学校説明会の両立の実現は絶望的なものになる。

（運次第つてのがホントに心臓に悪い．．．．．）

こうなるともう信じるとか応援するとかそんな話ではなくなってくるのだ。

啜えたストローから甘ったるい飲料を流し込むが、一度落ち着きを失った心はそう簡単に平常を取り戻してはくれない。

あと一体何分このもどかしさに耐え抜けばいいのだろうか。

(ていうか、そんだけ落ち着かねーなら会場行つてくりやいいだろ。お前ならA q o u r sの誰かに憑依すりやいいんだし)

←二人で残すのは可哀想だから付き合つてやるよ

(・・・そりやどうも)

一人会場に入れない事への嫌味に聞こえなくもないが、そういう事を言う奴ではないので素直に気を遣つてもらつてしていると捉えていいだろう。つくづく変なところで優しいウルトラマンだ。

「・・・何か口にしてないと落ち着かないんだよな・・・」

とにかく落ち着かなくて飲み物ばかり飲んでいたら容器が空になってしまった。

もう一つ注文しようと腰を上げた時、陸のケータイが音を鳴らす。

「っ！ 来たか!!」

『おい陸！ さあ出ろ！ 早く出ろ！ 今すぐ出ろ！』

傍から見たら一人でテンションがおかしなことになっている痛い少年としか思われちゃうのだろうが、今はそんな事気にする余裕もない。

慌てて危なく携帯を落としそうになりながらも何とか耳に当てるが、何も音は聞こえない。

「……？ ……あ、メールか」

『……お前なく……』

「悪い悪い……」

電話とメールで着信音は変えているはずなのに間違えるとは、本当に落ち着きを失っているらしい。

気を取り直して、いつになく指を素早く動かして開いたメールの内容は。

件名 りぐぢや〜くん ……(泣)

もう不安しかない件名のメールに添付されていた画像に映っていたのは、鳥のように腕を広げる善子と……、

……エントリー番号二十四番という、学校説明会でのライブ終了のお知らせだった。

「どうすんのさ！ 二十四番なんて中盤じゃん！ ど真ん中じゃん！」

会場を後にし、陸の待つカフェテリアにてA q o u r s が合流した瞬間に喚き出す千歌。

「し、仕方ない。堕天使の力がこの数字を引き寄せたのだから………申し訳ない!!」

始めは何とか言い訳しようとしていた善子だが、お約束の堕天使芸に誰も反応してくれないのを受けて素直に頭を下げる。

「善子ちゃんだけが悪いんじゃないよ」

梨子はこういうが、そもそもどうして壊滅的に運の悪い善子にそんな大役を任せただろうか。

「でも、こうなった以上、本気で考えないといけないね」

「説明会なのか、ライブなのか……」

重々しく開かれた果南とダイヤの口から発せられた言葉に、場の空気が変わる。

「……そのどっちかを選べって事？」

「そうするしかありません」

もう説明会とライブ、双方でライブをやるのはもう諦めるべきだろう。

これ以上この事項を実現させることを画策していても時間の無駄だ。説明会にしろライブにしろ、あまりその事に時間を掛け過ぎるとパフォーマンスに影響が出る。

「そうだったら説明会ね」

「今学校を見捨てる訳にはいかないもんね・・・」

「今一番必要なのは入学希望者を集める事。一番効果的なのはラブライブではありませんか？」

「たくさんの人に見てもらえるし・・・」

「注目されるし・・・」

意見は見事に真つ二つに分かれてしまっている。

学校説明会に、ラブライブ。どちらも学校のPRとなる事は間違いないのだ。

どちらの主張も間違った事を言っている訳ではないので、すぐにどうするかを決める事は出来ない。

それにどちらも大切なのだ。学校の存続も、ラブライブに出て輝くという事も。

結局この日は何も決められず、そのまま解散となった。

七十六話 目指すものは

冷たい夜風が吹き抜ける。暗く、人気のない砂浜。

「フツッ！ ハア！」

「ははっ！ まだまだ甘いぜ陸！ 攻撃つてのはもつとパンチが効いたやつ……
こういうのを言うんだぜエ！ ファイヤアアア！」

陸と近接格闘のスパークリングを行っていたグレンファイヤー。

気持ちりが燃え上がってしまったのか、これが稽古だという事も忘れて炎を宿した拳を横一文字に薙いでくる。

「うおッ！！」

咄嗟に上体を仰け反らせて回避したものの、尾を引いていた火が前髪のを翳めてしまふ。

「あぢぢぢぢぢぢッ！！」

一瞬にして頭部が燃え上がり、ミスターファイヤーヘッドと化した陸は大慌てで海に

転がり込んだ。

「バツシャーン！ と派手に水柱が立ち、水面が激しく波立つ。

「おいグレン!! スパークリングだって言っただろうが!!」

「ああ？ よく分かんねーけど、勝負ってなあいつだって本気でやるもんだろ？」

『……あーもう……。ウチの馬鹿がスマン……。』

「はあ……。』

全く反省の色が見えないグレンに、離れた場所で見守っていたミラーナイトすらも呆れ気味に溜息を吐く。

本当に、ゼロと一体化していなければとんでもない事になっていた。

「……その脳内固形燃料に任せたのがそもそもの間違いでしたね。陸。次は私がお相手しましょう」

「ああ。よろしく」

グレンを押しのけたミラーナイトが構えたのを合図に、陸も地面を蹴った。

この体術訓練は最近の日課だ。

単純にゼロ一人の力だけで戦っている時はいいものの、陸に主導権が渡るゼロダークネス。そしてゼロとのシンクロ状態になるゼロビヨンドの時には陸自身の力がゼロの戦闘力に直結してくる。

よってこうして、夜な夜なグレンやミラーナイトに稽古をつけてもらっているのだが……。

先程のようにグレンは手加減と言うものを知らないため、こうして陸の身体が炎に抱かれることもしばしばあるのだ。

「……それで、結局説明会とラブライブはどっちを取るようになったのですか？」
稽古が終わった後、爽やかに汗を拭うミラーナイトがそう問うてくる。

「あー……、五人と四人。二手に分かれてラブライブと説明会で歌う事になった……」
苦虫を噛み潰したような顔をしながらそう答えると、やはり向こうの顔も陰る。

「……確かに、双方を実現させたい場合、現実的に考えればそれが妥当でしょうが……、果たして、それでAqoursと言えるのでしょうか？」

「……その事も話に出た……そもそも、五人じゃ予備予選も突破できるのかかんねーしな」

Aqoursは平均的なスクールアイドルグループに比べて人数が多い。

九人が織り成す、九人でしかできない迫力のあるパフォーマンスこそがAqoursの持ち味でもあるのだ。

それを欠いてしまつては、当然今まで比べてパフォーマンスの見栄えが劣つてしまふ事は否めない。

「ただ、他に方法が無いんだよな……」

「……方法……ですか……」

「会場から学校まで走るつてのじゃダメなのかよ?」

『俺達ならともかく、到底人間が間に合うような距離じゃねえよ』

善子を責めるようで悪いが、やはり一番手で歌えない事は大きい。

自分達は奇跡は起こせない。前回のラブライブ予選の事も、浦女の統廃合の話も。

だからこそ、今はその中で一番いいと思えることを全力でやるしかないのかもしれない。

今まで、そうしてきたように。

そして迎えてしまつた日曜日。予備予選と説明会当日。

「結局、二手に分かれて歌う事になったんだっけ？」

「ああ……はい。散々考えたけどやっぱりこれしかないかなって……皆が」

千歌の姉二人と予備予選の方の会場に来た陸は、もうすぐあと少しと迫ったAqoursの順番を待つていた。

「浦女の皆も学校説明会で応援これないしね。今回は厳しいかもね……」

「だったら、その分私達が応援しなきゃ。ね♪」

ノリノリでどっかの墮天使のようなポーズをとる志満。あまり仲良くしているとうか話している場面すら見た事ないが、気に入っているのだろうか。

「まー、応援する事に変わりは無いのは確かだけどね……、如何せん人数が……、陸は誰か呼んでないの？」

「……まあ、出来る限りで……」

期待はしないでほしいと目で訴えながら、陸は自分の傍らでサイリウム片手にスタンバイしている野郎共に視線を向ける。

「……Aqoursの総人数より少ないって……陸。アンタ友達いないの？」

「……そんな可哀想な人を見るような目で見ないでください」

千歌を馬鹿にする時以上に哀れみの秘められた瞳を向けてくる美渡に対し必死に弁明をしていると、肩に四つの手が乗る。

「安心しろ陸。一度は拳を交えた仲だろ？俺達はもうマブダチだぜ」

「そうですよ。我々は共に戦う仲間でしょう？」

「大丈夫。少なくとも私とルビィちゃんは君の事を友達だと思ってるから」

「やめろ。なんか余計に悲しくなってるだろうが」

呼んだのはグレン、ミラーナイト、ルイズの三人。呼ぼうと思えばオウガも呼べたが呼びたくなかった。

つまり呼んでないのだ、呼んでないのだ。呼んでいないはずなのに……

「無駄だよ陸君。呼ばれてなくてもジャジャジャーンするのがボクだから」

「しれっと人の肩に手え乗せた上に心を読むな」

まあこの通り。相変わらずどこにでも現れるゴキブリっぷりである。

どうせ放っておいても毎回 A q o u r s のライブにはいるのでこちらから声を掛ける必要なしだ。

「賑やかなお友達ね〜」

微笑ましく陸と愉快な仲間？達のやり取りを見守る志満。

まさか妹の友達の友達が誰も地球人じゃないとは夢にも思っていないのだろうか。

『エントリー番号二十四番！ A q o u r s の皆さんでーす!!』
 「「「「っー」」」」

そんなこんなしていると司会者の快活な声が会場に響き、パツとステージが照明の光に照らされる。

男五人衆が一斉に顔を向けた先。舞台の上にいる少女は千歌、曜、梨子、ルビィ、ダイヤの五人。

浦女の生徒が来ていないせいかやたら疎らな拍手の音も徐々に小さくなり、しん：と会場が静まり返る。

だが、五人はいつまで経っても歌う気配を見せない。

「燃え上がれエエエエエ——!!」

千歌達を盛り上げるためにグレンが張り上げた声も、群衆の中へと孤独に霧散していく。さりげなくグレンの周辺から人が遠ざかったのは内緒だ。

「……やはり、全員一緒ではないという事が影響しているのでしょうか……」

「……ルビィちゃん……」

「いやいや。……そんなタマじゃないでしょ、A q o u r s は」

次第に暗いものに変わっていく宇宙人連合A q o u r s 応援団の中、ただ一人ニヤリと歯を見せて笑うオウガ。

「……だろ？ マネージャーくん♪」

「……だな」

「勘違いしないように！」

唐突に、決して大きくはないはずのその声が、会場にいる全員の耳朵に触れた。

『……これこそAqoursだよな』

ゼロとの一体化で異常強化された陸の聴覚には届いていたのだ。

舞台裏に隠れ、サプライズで登場しようとしていた果南、鞠莉、花丸、善子。残りのAqoursメンバーの声が。

「やっぱり、私達は一つじやなきやね」

「みんな……」

元々予備予選で歌うはずだったメンバーにもこの事は予想外だったようで、驚きに目を見開いている。

「ほらほら、始めるわよ」

「ルビィちゃん。この衣装素敵ずら！」

「さあ、やるよ！」

「っ……！ うんっ！！」

本当に、この九人が揃うとどうしてこうも頼もしく思えてくるのだろうか。一つ一つは小さなはずなのに、こうして全員力を合わせる事で大きくなっていく。へ・・・この場面であの曲を歌うたあ・・・、千歌風に言うなら奇跡だな〜

—— MY舞☆TONIGHT

バラバラに迸っていた個性は交錯し合う。

感性も、主観も、好みも全てが違っていた。

でもだからこそそれぞれがそれぞれの音色を奏で、今一つの歌となったのだ。

和風で、ロックで、歌詞もどこか厨二チックで。

メンバー皆の強い個性がうまく生かされている。それこそAqoursらしい一曲だ。

パフォーマンス後、関を切ったように会場は割れんばかりの拍手喝采に包まれていた。

「熱い！ 最高だぜお前等！」

「こういうテイストも悪くないですね・・・」

「黒澤姉妹センター曲とか……私今滅茶苦茶幸せなんだけど……尊い……」
「歌詞の雰囲気的に……書いたのは善子ちゃんとか丸ちゃんかな？」

「なんで分かるんだよ怖えーよ。……まあでも、とりあえずは一安心だな……」
へだな。こつちも一晩中付き合つた甲斐があるつてもんだ」

恐れていた最悪の事態は免れた。というか、大成功と言つても言い過ぎではないだろう。

しみじみと感慨に耽つていると、ふと思ひ出したようにミラーナイトが呟いた。

「………ところで……、全員こちらに来てしまったという事は、説明会でのライブはどうなるのでしょうか？」

「………んん？ あああッ！」

そうだ。本来の説明会でライブをするはずだった果南達がこちらに来てしまったという事は、今学校にライブが出来るスクールアイドルは一人もない事になる。

「ちよつと陸君？ なんか皆急いでどっか行つちやつたけど」

「はあッ！」

次から次へと何なのだろう。

オウガに言われてステージに視線を戻せば、二年生三人が戸惑い気味のメンバーを急かしながら引率して舞台裏へと向かっている。

「おいおい……まさか間に合わせる気じゃないだろうな……」

「……なんか方法でもあんのか……？ まあいい。とにかく追うぞお前等！」

急いで席を立ち、四人の宇宙人に声を掛けてから出口に向かって行かを蹴る。

「ちよ……」

「陸ちゃん!!」

突然立ち上がった事に驚いている美渡と志満を尻目に、感慨に耽っているルイズを除く四人は急いで会場を後にした。

「………何？ 何しにここに来たの……」

会場を飛び出し、走る千歌達の後を追って辿り着いた場所はみかん畑だった。

そして収穫したみかんを運搬するためのモノレールに腰かけたA q o u r sと、千歌達のクラスメートであるよしみとむつ。

「あー！ 陸ちゃんー！」

「お前……、まさかこれ乗って下まで降りるのか？」

「そーだよ！ ここから学校近くまではずつとみかん畑が続いてるから、これに乗れば間に合うよ！」

なんともまあ滅茶苦茶な。

だが土壇場でこれを思いつくとは、千歌のみかん好きが功を奏したか。

「……まあ、お前らしいと言ったららしいか」

「でしょ？ 凄いでしょ？ 最高でしょ？ 天っ才でしょ？」

「ウチの馬鹿が無茶言つてスマン」

調子に乗つた千歌は無視し、もしかしなくても協力者であろうよしみとむつに頭を下げる。

「いいよいいよこれくらい。学校を救おうとしてくれてるんだもん」

「私達も少しくらい力になりたいしね」

こんな優しいご好意に預かれるとは、本当にA q o u r s は地域の人々に愛されてい
るらしい。

「皆乗つたー？」

「全速前進！ ヨーソロ〜！」

何とかギリギリ九人がモノレールに乗り込み、曜の掛け声と共に先頭の果南がレバ

を引く。……が、

「……遅くね？」

「……冗談はよしこさんずら」

「……ヨハネ」

「つて言われても、仕方ないんだけどね……」

あくまでも収穫したみかんを楽に運搬できるようにするためのもの。人が乗る事を想定して作られた訳ではないため……当然遅い。歩いた方が断然早い。

「……っ！ もつとスピード出ないの?!」

勢いで生きる少女松浦果南はこの勢いの欠片もないモノレールの速度を前に徐々に苛立ちを募らせてゆき、乱暴にレバーを押ししたり引いたりしている。

——バキンッ！

「……ん？」

嫌な音が耳に刺さり、恐る恐る音の発生源である果南の手の中に目を向ける。

「……取れちゃった……♡」

果南がひよいと根元からへし折れたレバーを掲げると同時に、モノレールは勾配のきつい坂へと差し掛かり——、

「……ええええええええええええ——?!」

一瞬にしてジェットコースターが如し速度へと切り替わり、A q o u r s の絶叫を乗せながら下へ下へと進んでいく。

「『……っ！ 嘘だろ（でしょう）！』『』」

「アハハハハ！ やっぱり君達といると飽きないねえ！」

突然の事に一瞬反応が遅れた陸達も、大慌てでその後を追い始めた。

「………で、俺達の方が早く着くのか……」

やはり人知を超えた力を駆使して走れるのは大きい。まさかあの速度のモノレールを追い抜いてしまうとは。

「間に合うのかねー？ アイツ等」

「……時間はかなり押しているようですね。彼女達の御学友も気がでない様子です」
ミラーナイトの言う通り、九人分の衣装を持って A q o u r s の到着を待つ浦女の生徒はそわそわと落ち着きを失っている。

暴走モノレールへの搭乗で相当移動時間を削減できたことに変わりはないが、モノレールの終着点からここ浦の星女学院までは少し走る必要がある。

既に予選のステージで踊り、みかん畑まである程度の距離を走っている彼女達はそれなりに疲労が溜まっているだろう。

果たして間に合うかどうか……。

「……諦めないよね、千歌ちゃんは」

これからAqoursが躍る予定のステージを眺めながら、唐突にオウガがそう呟く。

「昔からずっとそうだよ。アイツは。……中途半端が嫌いで、諦める事も嫌いで、ちよつとは大人になって欲しいって何回思ったかも分かんねーよ。……けど——」
「それが彼女を、いや。彼女達Aqoursをここまで成長させた。……そう言いたいんだろ？」

言いたかったことを先に言っていたり顔をするオウガ。そのうざったい顔を殴りた
い衝動をぐつと堪える。

「……ネクサスはさ、強い意志を持ちながらも、心のどこかに影を抱えている人間をデユ
ナミストに選ぶんだよ」

またしても唐突。しかも今度は全く別の話題だ。

だが話題は千歌とネクサスについての事。自然と身体が聞く姿勢に入る。

「彼女は確かに自分の心に強く、深い影を秘めている。けど、その中に確固たる強い信念

もあるんだ。A q o u r s の皆も、君も、勿論ボクも、その心に触れて変わることが出来た。．．．きつと、ネクサスは千歌ちゃんのそういうところに光を見出したんだと思うよ？」

陸やゼロとは別の世界を見ているかのような黒い瞳。

きつと自分達と彼では、その目に望んでいる景色が違うのだろう。

自分達よりもずっと明確に、千歌とネクサスの事を見据えている。

「でもその影が千歌ちゃん自身の更なる成長を妨げてるのも確かだ。．．．．．その影

が光によって晴らされた時、どんな輝きを見せるのかが楽しみだよ。．．．．．」

どこか期待を孕んだ声音がステージとは別の方向へ向けられた。

言葉の行き先を目で追うと、道の奥でみかん髪の少女が大きく飛び上がったのが見えた。

「おお！ 来たぜアイツ等!!」

「．．．時間ギリギリ．．．、本当にヒヤヒヤさせますね．．．」

「．．．．．彼女を支える仲間との絆．．．、それが鍵だ」

周囲の人々の視線が走ってくるA q o u r s に集まっている隙に、これから別のライブがあるにも関わらずオウガは身体を影に変換してこの場から立ち去ってしまった。

「．．．．．」

度重なる意味深な発言に首を傾げつつも、今は目の前の事に集中しようと九人の少女に軽く手を振る。

晴れやかな表情をする彼女達の背後には、輝く虹が大空にアーチを掛けていたという。

——君の心は輝いてるかい？

新しい事を始める時の新鮮な気持ちをも、困難にぶつかっていた時でも諦めずに未来を描こうとする想いを歌に込め、これから次のステップに進もうとしている入学希望者に伝える。

ミラーナイトの助言は後者だけだったので、前者は千歌による入学希望者達への計らいだらう。

前に進むための確固たる強い信念に触れる事が、燻っている自分を変える事に繋がる。

なんとなくだがオウガの言いたかったことが理解できた。

「おつかれー」

説明会終了後、陸、グレン、ミラーナイトの三人は、一応A q o u r sの皆に顔は出しておこうと思いいステージ裏へと移動していた。

「・・・・・・・・・・疲れた・・・・・・・・・・」

「第一声がそれか」

誰一人としてステージ上で見せた笑顔をしている者はおらず、全員揃って疲労困憊といった顔で床や柱に身を預けている。

まあでも予備予選で歌い、途中ショートカットはあったものの予選会場から学校まで突っ走り、そしてまた学校でライブをしたとなれば疲れて当たり前だろう。あの果南ですら息が上がっているのだから。

「・・・・・・・・・・けど、どっちも叶えられた!」

後悔はない。そう言わんばかりに満面の笑みを見せる千歌。他のメンバーの表情にも、疲労の中に一つの達成感が見受けられた。

確かに、今日成し遂げた事を考えれば疲労なんて些末な問題だろ――、

「・・・・・・・・・・ところで、どうして皆さん予選会場からここまで走って移動するなんて時

間も体力も消費する方法を選んだのですか？」

「「「「「「『え？』」」」」」」」」」」」」」」

A q o u r s 全員、陸、ゼロ、グレン。総勢十二人が一齐に首を傾げるミラーナイトへと振り向く。

「いやほら。私の力で鏡と鏡を繋げれば、予選会場からここまで一瞬でしたのに……」
「!?」

言葉の途中で自分に向けられる視線に殺気が込められている事に気が付いたミラーナイト。

「……え？ あなの？ 皆さん？ どうしたのですかそんな怖い顔をして……、端正な御顔が台無しですよ……」

こんな風に自然とナンパ師のようなセリフが出てくるのはミラーナイトの凄いら道だ。

一応は一国の姫に使える者だと聞いた事があるし、それくらいは一般教養という事だろうか。

まあ、そんな安い褒め言葉、今のA q o u r s の耳には届いていないのだが。

なんとなくこの後起こることを察した陸とグレンが両手を合わせたのを尻目に、A q o u r s 九人は疲れも忘れてミラーナイトを取り囲み、

七十七話 何気ない付き合い

私には妹や弟みたいな幼馴染が三人いる。

小さい頃はよく一緒に遊んで、それこそ姉妹とか姉弟みたいに過ごして。

最近是一緒に同じことはやってるけど、あんまり遊ぶって事は無くなってきたかなん
？

皆成長して変わっちゃったからかもしれない。

千歌は、引っ込み思案で何をするにもあとからついてきた感じだったのに、逆に今は
皆を引つ張るリーダー。

曜は、はっちゃけていた性格にセーブが掛かって、千歌と入れ替わるように少し大人
しくなった。

関係こそ変わってないけど、昔みたいに甘えてくることは少なくなってきたから、少
し寂しかったりもする。

まあ、昔からずつと甘えるのも、人を頼ることも苦手な子がいるんだけどね。

陸は、小さい頃からほとんど変わってない。

大きく変わった事と言えば、突然光の巨人として皆を守るために戦っていることぐらい。

でも結局それも全部一人で抱え込んだりやって、前に一度パンクしちゃったこともあった。

だからこそ、私が支えなきゃなんだ。

「ん……」

窓から差し込む朝日に意識を呼び起こされ、果南はゆっくりと身体を起き上がらせた。

寝ぼけまなこで確認した時計は五時半。いつも通りの時間だ。

日頃からの習慣というのは自然と身体に染みつくもので、今ではこの時間に起きる事が普通になってきている。

逆に言うところの時間以外だと遅かろうが早かろうが起きられない。夏合宿の時の花丸には本当に悪い事をしたと思っている。

「くあ………」

欠伸を噛み殺してベッドから降りると、棚に立て掛けてあつたランニングウェアに着替え始める。毎朝の走り込み。これも日頃の習慣だ。

長く伸びた髪をヘアゴムでポニーテールに束ね、起きたばかりの身体にスイッチを入れる。

準備を終えて部屋を出て行こうとした時、普段滅多に向かわない机の上に置いてあるとあるものに目が行った。

「ふふ……」

太陽光を浴びるその青く透き通った水晶体は、まるで海のように優しく輝いていた。

「ワンツースリーフォーワンツースリーフォー」

会場間の移動に多大な苦勞を要し、ミラーナイトがボコボコにされた予備予選の日から数日。

まだ結果は出ていないとはいえ、先を見据えて行動しないグループに勝利はない——
—黒澤ダイヤ語録——に従い今日も変わらぬ練習だ。

「はい！ それでは少しの間休憩としますわ！」

手を叩きリズムをとっていたダイヤの一声でステップを刻む皆の足が止まり、各々水分を補給したり「今のステップが——」とか話し始めたりする。

『この練習風景も大分板についてきたよな』

「まー、始めたばっかの頃の千歌の滅茶苦茶なステップに比べればな」

「それだけ皆頑張ってるって事でしょ」

壁に寄りかかって練習風景を眺めていた陸の隣に、水の入ったペットボトルを片手に持った果南が寄ってくる。

『お前等三年はA q o u r s に加入した時から難なく練習こなしてたよな』

「そりやあまあ、一年の頃もやってたからね。スクールアイドル」

「そーいや、姉ちゃん達三人でスクールアイドルやってた時の練習ってどんなもんだっただの？」

体力バカの果南。スクールアイドル愛の塊のダイヤ。常にハイテンションの鞠莉。

見る限りストップパールのいない元祖A q o u r s は一体どんな恐ろしい練習をしていたのか、純粹に気になる。

「……別に、今やってる事と大差ないよ？ 基礎体力付けて、ダンスやフォーメーションの確認して、歌の練習もして」

「へー……、以外。てつきりダイヤさん加入当初の鬼のような練習メニューを毎日やってたものかと思ってた」

「あれは……、溜め込んでたダイヤのスクールアイドル愛が爆発したただけだから……」
まあ、果南ならあの練習メニューでも全く問題なくこなせるだろうが。本当にどこでつけたんだかあんな体力。

「私も一年の時はあの熱に折れてスクールアイドル始めたからね。……ああ、勿論学校を救いたって言うのもあったけど」

「………鞠莉さん勧誘した時はダイヤさん並にノリノリだったって聞いたけど……」
「………ダイヤのせいです」

何があつたかは頑なに教えてくれなかった。もしかして黒澤家の地下に眠る独房か何かにもぶち込まれてスクールアイドル好きになるように調教を施されていたり……。
などと言う益体もなければ黒澤家への風評被害にしなければならない妄想もこの辺にしておこう。本当に黒澤家に潰されかねない。

「ま、楽しそうで何よりだよ」

「まあね。鞠莉とダイヤだけじゃなくて、幼馴染や他の皆もいる。楽しくない訳ないよ」

休学中だった頃に比べ、随分と晴れやかに笑うようになったことは確かだ。

鞠莉への気遣いや抑えこんでいた気持ちの呪縛から解放された確かな証拠だろう。

「果南さん。練習再開しますわよ」

「あーうん。今行くー」

ダイヤからの招集が掛かり、豪快にペットボトルの水を喉に流し込むと踵を返して皆の所に戻るうとする。

その瞬間だった。

「あ た つ ? ! !」

ペチンと陸の額に走った軽い痛み、そしてそれと同時に視界を埋め尽くす長く青い髪。

「 あ れ ? ! 」

いまいち状況を飲み込めていない果南の足元に落ちているのは、今し方陸の額を強襲した彼女の所持品。

ぷつりと途切れ、もう髪を束ねるといふ本来の役割を果たせなくなったヘアゴムだった。

後日。人が賑わう沼津の商店街。

「いやーゴムメンね陸。付き合わせちゃって」

「…………それは別にいいんだけどさ、俺でよかったの？ その手の事なら曜とか桜内のほうが詳しいと思うけど…………」

「ヘアゴム買いに来ただけだしね。それに幼馴染でもない梨子ちゃんを誘うのは気が引けるし、かといって曜を誘ったら絶対服屋で着せ替え人形にさせられるし、だからと言つて一人で沼津とか絶対迷うし、陸ぐらいしかいなくてさー」

「まーどうせ暇だしいいんだけどね。ていうか姉ちゃんヘアゴムの予備持つてないの？」

普通の女の子ならその手の物の予備は所持しているものだと思うのだが…………、
「……………？　なんでまだ使えるのに他の買わなきゃいけないの？」

その返答で目の前にいるのは普通の女の子ではない事を改めて実感し、こんな事聞いた自分が馬鹿だったと理解する陸。

『ちなみに、コイツヘアゴムなくなつた次の日は輪ゴムで髪束ねてたぞ』

「馬鹿なの？　ねえ？　姉ちゃん馬鹿なの？」

「……まあ、流石に解く時に髪抜けて痛かったし、ダイヤにも怒られるから次の日から髪下ろして行っただけだよ」

言葉の通り、今の果南は髪を下ろしている。

幼い頃からずっと人前に出る時は髪を束ねていたので、こういう彼女を見るのは新鮮だ。というか別人だ。

少なくとも、普段の果南と同一人物には見えない。こっちの方が遥かに上品に見える。……とか言ったらハグで絞め殺されそうなので口にしない。

「なんか纏めてないと落ち着かないんだよねー。ほら、早く買いに行こ」

「おい待て。ハグしながら背中を押すな。周りの視線を気にしろ」

落ち着かないからってすぐにハグに移るのは辞めて欲しい。やはり見てくれが変わっても中身はそのままだ。

背中に温かく柔らかい感覚が広がっていく反面、頭はどんどん頭痛を溜め込んでいくのであった。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

音のない宇宙空間を漂いながら、「ソレ」はある一点を見据えて飛翔していた。視線の先、青い豊かな水を湛えた星から、巨大なエネルギーを感じる。

あの星にも、星のエネルギーが秘められた水晶体が存在するのだろう。自分の目的はそれだ。星のエネルギーを喰らう。

だが水晶体に星のエネルギーが宿るのは一時的。いつそれが星自身に還元されるかは分からない。

だから急ごう。

次の標的——地球へ。

『キウアアアウウウウウウウウウウ!!』

「ソレ」が上げた咆哮は、音は出さずとも確かに宇宙空間を揺らしていった。

「ふいー．．．、やっぱりこつちの方が落ち着くねー．．．」

お目当ての品を無事購入し、数日ぶりに髪の毛を束ねる事が出来た果南が弛緩した顔で息を漏らす。

落ち着いた以上さつきみたいに人前でハグされる心配もなさそうなので、陸としても一安心だ。

「うん。やっぱそつちの方が姉ちゃんらしくて落ち着く」

「何？ さつきまでの私は私じゃなかったの？」

「髪型変わると印象って結構変わるなーって話」

髪下ろしただけで色気と気品が増し、普段の快活体力モンスターは影も形もなかった。本当に先程まで自分と一緒にいた少女は誰だったのだろうか。

まあそれでもハグ魔だった事は変わらなかったし、口にしたら調子に乗るのは目に見えているので絶対と言わない。

「思ったより早く済んだね。今日はお店も練習も休みだし、暇だなあ．．．」

せつかく練習以外で沼津に来たんだし．．．、と呟きながらきよろきよろと周囲を見渡す果南。

確かに彼女が沼津にいるという構図も珍しい。最近では練習場所の都合でこつちに来

る事も多くなつたが、それ以外の用事でここにいるという事はまずない。

花より団子ならぬ都会より海な彼女だ。花の女子高生が好みそうな都会にいるより、慣れ親しんだ海に潜っている方が楽しいのだろう。

「お……♪」

だがそんな彼女でも興味を引かれるものが目に入ったようで、陸の腕を掴むとそこに向けて足を進め始めた。

「はあ……」

二人でいる時は少し無邪気になるのは分かっている。

反論するだけ無駄そうなので、大人しく手を引かれる事にしよう。

強引に引き摺られやってきたのは、閃光と騒音の大洪水の只中だった。

目に痛い電子画面の光と、様々な筐体の放つ電子音が目と耳に殺到してくる。やはりここは何度来ても慣れない。

まあ要するに、ゲームセンターである。

「おおく……！　なんかギラギラしてる」

語彙力のない感想を紡ぐと共に、見慣れない筐体に興味津々の果南がゲーセンの奥へと進んでいく。

「姉ちゃん。ゲーセン来た事ないの？」

「小さい頃にもぐら叩きのゲームやったくらいだよ。陸は？」

「俺は……、たまに善子に付き合わされてる」

『友達いないもんなアイツ……』

インドア派のくせしてゲーセンに新台が入った時のみ活発になりやがり、その上親しい友達が見る限りゲームに疎そうな花丸とルビイしかいない。

よってその新台が二人以上の人数を要するものだった場合、孤独な善子は陸に泣きついてくるのだ。本当に迷惑この上ない。

「多分今日も……、ほらいた」

騒音喧しい空間の一角。

クレールゲームの台が所狭しと並べられているプライズコーナーの中に、見慣れたダークブルーの髪とシニヨンの後ろ姿を発見する。

「あ！　善子ちゃんじゃん！」

「っ?!　果南?!　何でアンタがこんな所に?!」

やはり善子にも野生児の果南がここに居るのは予想外だったらしい。

「よー善子。また一人とか、相変わらず寂しい奴だな……」

「やかましいわい！……って、陸！」

獲物を見つけた猛獣のように目を輝かせ、実年齢より十歳くらい幼そうな笑顔を向けてくる。どうせまた一人ではプレイできないゲームを見つけてうずうずしていたのだろう。

「ちようど良かったわ！ 三人以上でしかプレイできない新台をさっき見つけたのよ。アンタ達これ終わったらちよつと付き合いなさ——」

「善子ちゃん今何のゲームしてるの？」

「聞きなさいよ！」

元々善子がそういう属性なのか、それともただテンションの上がった果南が話を聞いていないだけなのか。

まあどつちにしろ墮天使のお誘いは軽い流れで無視され、スルーした張本人は物珍しそうな瞳を今善子がプレイしているゲームに向けていた。

「……見て分からないの？ クレーンゲームよ」

誘いはスルーされても親切に教えてあげるあたり、頭のネジは何本か飛んでいるとは言え根はいい子の善子らしい。

「知ってるけどやった事は無いんだよね。ちよつと遊んでるところを見せてよ」

「………遮ったのアンタじゃないの？」

だがやはりいい子。ぶつぶつと文句を垂れながらも操作を始めてくれるあたりホントにいい子。

この手のゲームはクレーンで持ち上げたり棒で突き落としたり、様々な手段で景品を穴に落としてゲットする手のゲームである。

「………」

それにならつて善子もクレーンのアームを悪魔か何だかよく分からない謎のぬいぐるみの羽に引つ掛かけ、そのまま持ちあげる。

筐体の流すBGMのリズムに乗りながらアームは初期位置に戻り、掴み取ったぬいぐるみを開口部に落とした。

「ふっ……、この墮天使ヨハネの力をもってすればこの程度造作もない事よ」

このぬいぐるみが元々狙っていた品だったのか、善子は満足気にそれを抱き上げる。

今日に至るまでいくら費やしてきたかは知らないが、苦も無く一発ゲットできる腕前は相当やり込んでいる証拠である。

『………友達作りもこれくらい器用だったらどんなに幸せだったんだろうなお前』
「ちよつと、悲しい事言わないでくれる？」

「事実だししゃーない」

陸の容赦のないマジレスが気に障ったのか、お得意の墮天流鳳凰縛で攻撃してくる善子。

隣で年下二人がぎゃーすか騒いでいるのを尻目に、果南は一人真剣な面持ちでクレインの動作を確認している。

「よっ」

そして何かを理解したように頷くと、がま口財布から百円玉を取り出しコイン投入口に入れた。どうやら彼女もやりたいらしい。

「……………」

予想していなかった果南の行動に陸も善子も取っ組み合う腕を止め、静かに事の成り行きを見守る。

ボタンやレバーを駆使して操作されるアームは、イルカと思われるぬいぐるみ目掛けで降下していく。

だが狙いが甘い。アームの爪はイルカの頭を少し上げただけで持ちあがりもしない。

「い……、今のは練習だから！」

別に誰も何も言っていないのに言い訳をした果南は次なる百円玉を投入し、再度アームを動かし始める。が、

「むう……」

今度は尾ヒレの先つぽを引つ掛けて多少右にずらしたのみ。

この前に善子腕前を拝見した事を無しにしても、果南はUFOキャッチャードヘタだった。

まあ、果南がゲーム下手なのは知っていたし、薄々予想はしていたが。

「……ちなみに、五百円入れると六回出来るわよ」

返答こそなかったが聞いてはいたらしく、素直に五百円玉を投入。

だが尽く失敗し、イルカくんは全くその場から動こうとしない。

「むぐぐ……」

「どいっ」

果南が千五百円くらい消費した辺りで、見ていられなくなった陸が渋々財布を取り出す。彼女の負けず嫌いな性格が変なところで発揮されてしまったようだ。

陸も善子に付き合い合われてたまにやっているのである程度の腕前はある。

果南のおかげでクレインの可動域などは大体把握したし、何とかなるだろう。

百円玉を投入し、いざプレイ。レバーを操作し狙いを定めると、決定ボタンを押して掴み取りにかかる。

「っ！　そ、それは……！」

背後で善子が大袈裟なりアクションを取ると共に、陸が狙ったイルカは初めて持ち上がった。

「苦もなく、ブラッド・ネイル魔装血爪を使うなんて……貴方何者……？」

「タグに引つ掛けただけだろ。あと墮天使と悪魔どっちやねん」

「……いや、タグ引つ掛けもかなりの高等テクニックなんだけど……」

ゼロとの一体化により動体視力がかなり向上しているので、十五回も同じ動きを見ればこの程度造作もない。

タグを引つ掛けられたイルカはぶらぶらと揺られながら開口部の真上に移動し、アームが展開されると共に落下——しなかった。

「ヤベ。深く引つ掛け過ぎた」

深々とタグをアームに貫かれたイルカは絶妙なバランスを保って落ちようとしな

「大丈夫よ。これならゲットつて事になるから、店員さんに言えば取ってもらえるわ」

「ああそうなの？ ならよか——」

『待つてられるか』

いきなり身体の主導権を奪い取ってきたゼロは、何を思ったか右足を振り上げ、

ズドン！

そのまま大きく床を踏み鳴らした。

刹那地震でも来たかのように揺れる店内、そして。

「あ」

善子が声を漏らした直後、保っていたバランスを崩されたイルカはずりりとアームから滑り落ち、開口部に落下した。

「「あ」」

今度は善子だけではなく陸と果南も声を出した。

落下していくイルカの後ろ、今の振動で筐体内の他のぬいぐるみ達がほほほーんと跳ね上がり、その中の二つが開口部にダイブしてしまったのだ。

『よし』

「よしじゃねえ。．．．．．どーすんだこれ」

イルカのぬいぐるみは元々ゲット出来ていたようなのでいいだろう。だが後から飛び降りてきたペンギンとラッコのぬいぐるみは明らかにアウトである。

「．．．．．とりあえず店長に話してくるわ」

「何故店長．．．」

「顔見知りなのよ。多少は甘く見てくれると思うわ」

「日頃どんだけ入り浸ってんだお前．．．．．」

もつとロクな事に金と時間を使えと言いたいところだが、人の生き方にとやかく言う

権利は陸には無いし、入り浸ってるおかげでこの状況が何とかかなりそうなので何も言わない。

「じゃあ、ちよつと行つて——」

——バチンツ！

「え？」

『あ？』

「ハグウー！」

「ぐええツ！！」

そこらかしこで照明がギラギラしていた世界が一変。一瞬の内に光が失われ、暗闇が建物中に広がった。

果南に抱き付かれた善子の短い悲鳴は聞き流し、冷静に状況を分析する。

似たような事が前にもあったからだ。まだ三人だった頃の A q o u r s がファーストライブを行った時。

あれは停電が原因だった。今回のこれも停電だとするならば、思い当たる節は一つ。

「……おい犯人。何とかしろよ」

『流石にあの程度で停電する訳ねーだろ！　．．．．．多分』

自信が無くなってきたのか、徐々に声が小さくなっていくゼロ。

まあ、まだコイツのせいと決まった訳ではないので、とりあえずこの事は置いておこう。

「．．．とりあえず何がどうなってるのか知りたいよな。おい善子、件の店長さんとやらがいる場所に案内し——」

ウルティメイトブレスレットの光を懐中電灯代わりに使い、今なお呻き続ける善子と
その原因である果南の姿を照らす。

そこで気が付いた。

果南の鞆の中で、何かが蒼く光り輝いている事に。

七十八話 互いのキモチ

「あはは……、いやー、まさかヘアゴム買いに行っただけでこんな事になるなんてねー」
「……うん。まさかゲーセンに三時間も閉じ込められるとは……」

沼津での一騒動を終え、松浦家まで勝ち取ったぬいぐるみを運びに来た陸。

あの停電、最初はゼロが起こした振動によりブレーカーが何かに異常を来したのかと思っていたが、どうやら商店街全域が停電していたらしい。

一応今は復旧したのだが、それでも脱出するのに三時間かかってしまった。

何でも原因は商店街の変電所に石が投げ込まれたとかそんな。だが犯人の痕跡は一切なく、投げ込まれた石も鳥をそのまま石にしたようなものだったらしいが……。

「善子ちゃんには悪いことしちゃったねー、結局これも全部くれちゃったし」

ゼロの不正？ で手に入れた人形は、地震で落ちてしまったと善子が店長に説明したのだが、電気復旧後だった事もあり今は手が回らないという事でなんとタダでくれた。

善子はまだ部屋にぬいぐるみを置くスペースがないらしいので、ちゃんとゲットした

ものも含め三つ全部こちらに回ってきたのだ。

「とりあえず今度ルビイちゃん辺りにあげてみよっか」

「まあ、ぬいぐるみ好きそうなのはルビイぐらいしか思いつかないしね」

果南も自分が狙っていたイルカくんだけで十分らしいので、ルビイがダメだった時のために他の貰い手も探しておこう。

「……………」

「…………? どしたの? 私の顔何かついてる?」

「…………いや、姉ちゃんがぬいぐるみ獲りたがるとか珍しいなーって」

今いる果南の部屋には、可愛らしい小物とか飾り物とか、何と言うか女の子らしいものがない。

強いて言うなら、机の上に飾ってある青色の水晶体ぐらいたが…………。

「…………姉ちゃん、これまだ持ってたんだな」

それをひよいと摘み取り、手の中で転がす。心地の良い冷たさが掌から広がっていく。

「まあね。なんか不思議な石だし、お守りにいいかなーって」

果南の言う通り、この水晶体は確かに不思議だ。

いくら握っても一向に温まる気配がなく、ひんやりと冷をもたらし続けてくれるの

だ。それにほんの少しだが青い光を放っている。

『……果南。これはどこで手に入れたんだ？』

ゼロも興味を持ったのか、いつもより真面目なトーンで果南に問う。

「小さい時に海で。私と陸と千歌と曜でシノーケリングしてる時に拾ったんだよ」

三歳を過ぎた辺りだっただろうか。

陸を預かっていた曜の家も少し忙しくなり、曜と共にママ友繋がりで果南の家に預けられることが多くなった。

そこで果南、そして当時から果南と仲が良かった千歌と知り合い、共に遊ぶようになった。

果南の家の目の前が海だったという事もあり、自然と遊ぶ場所も海だったのだ。

まあ、実際に海に潜ったのは六歳辺りだったが。

「……なんか海底で光ってるなーって。それで？　この石がどうかしたの？　確かに不思議ではあるけど……」

『……この石から、何か不思議な力を感じる』

急に善子みたいなお話を言い出すゼロに首を傾げかけたが、そもそもコイツ自身が不思議な力を持っている事を思い出す。

「……不思議な力って？」

『・・・星のエネルギーというか、地球の意思というか・・・、アナザークライシスの時に生成されたものなのか？・・・なんにしろ、俺達ウルトラマンにも近い力だ』

「ええ？ そんな凄いものだったのコレ？」

陸から返却された水晶体をまじまじと見つめる果南。

キラキラしているその目は、昔この水晶体を見つけた時と同じくらい無邪気さを感じる。

話を聞く限りだとまるで地球そのものが意思をもってこの水晶体を作り出したかのようだが、本当にそんな事があるのだろうか。

『・・・んなすげーモンを託されるたあ、お前よつぼど海に愛されてんだな』

「・・・海に愛されてるかは知らないけど、私は海が好きだね。この気持ちは誰にも負ける気はしないよ？」

『それだけで十分だ。その想いが、地球に認められる切っ掛けになったのかもな』

さも当たり前のように笑うが、ツツコミどころは満載である。

「・・・なんだよ、星に認められるって」

『地球が自らの意思で、その石を果南に託したかもっていう話だ』

「「ええ？」」

果南の海への愛は自他共に認めるものだし、実際彼女は海にゴミなどを投げ捨てる者がいれば例え大人であろうと食って掛かる。

もしかしたら地球は、果南のそんなところを認めたのかもしれないと言うゼロ。

「てことは何？ 姉ちゃんは地球の力を貰ったって事？」

『間接的にはあるが・・・、俺の仮説が正しいならそういう事になるな』

「マジか・・・」

なら、果南のあの異常な身体能力やスタミナは地球に力を与えられたから——、

『あー、あくまでも力が秘められてるのはその石だから、果南の身体能力は自前だぞ』

「・・・思考を読まれた事以上にその事が衝撃的だよ」

どうしよう。最近姉と慕う彼女の事が普通の人間だと思えなくなってきた。

「・・・じゃあ・・・」

そんな疑惑が立ち昇り始めた果南が、おずおずと話に入ってきて来る。

「・・・これがあれば、私も陸とゼロの力になれるかもしれないって事？」

水晶体をまじまじと見つめ、その瞳に幼馴染の陸でも知らない色を映す。

まるで、自分も戦おうとも言うように。

「・・・そんなに不甲斐無いか？ 俺・・・」

「ああいや！ そう言う事じゃないんだ！」

顔を陰らせる陸に慌ててフォローを入れた後、少し寂し気に笑った。

「・・・少しはき、頼って欲しいんだ」

「え？」

「ほら、前に一人で抱え込み過ぎて破裂しちやつたことあつたじゃん。あれから少しは改善できたところもあるけどさ、それでも、やっぱり戦うって事になるとどうしても私達の事遠ざけようとするでしょ？」

果南はそう言うが、戦う力を持たない彼女達、ましてや陸自身が守ろうと思っている彼女達を戦いに関わらせるのは好ましい事じゃない。

それは、前よりは周りの事を見るようになった今でも変わらない。

「・・・勿論、直接関与させろとは言わないけど、少しはお姉ちゃんの事も頼ってよ」

果南が自分の事をお姉ちゃんと呼びせているのは、昔からずっと陸一人だけ。つまりそれほど心配されているという事だ。

理由は前に彼女が言っていた通り、一人で抱え込む性だった陸が少しでも頼りやすくなるようにと。友達思いの彼女らしい配慮だろう。

「・・・でも、姉ちゃんを巻き込むのは本意じゃない」

でも、それでも。やはり死の危険が伴うような事に関与はさせたくない。

ただでさえダークネスファイブに目を付けられている今の状況、下手に踏み込んでし

まえば奴等の魔の手が果南に集中するという事も十分にあり得る。

それは例え本当に果南が戦う力を授けられているのだとしても避けたい事だ。

「……だから、変な真似はしないで」

それだけ言つて立ち上がり、陸は足早に果南の部屋を出て行つてしまつた。

一方部屋に残された果南は、悲しむように顔を俯かせた。

そんな彼女に、身体に憑りつく事で残つたゼロは言葉を選びながら声を掛ける。

「……まあ、なんつたらいいのかは分からんが……、アイツにもアイツなりの考えがあるつて事は汲んでやつてくれねーか？」

「……それは、分かつてるんだけどね」

「……それに戦いに関与するのは俺も賛成できないな。その石がお前の力になるかどうかはまだハッキリしねーし。……ただ未知の力が秘められている事に変わりはないから、狙われる可能性も捨てられない。何かあつたらすぐに呼べよ」

最後に注意を促すと、ゼロも陸の後を追つてこの場から去つて行つた。

「……また守つてもらふのか……」

自身もまた立ち上がつて移動し、陸に獲つてもらつたぬいぐるみを抱えながらベッドに倒れ込む。

別に、守ってもらっているこの状況が嫌な訳じゃない、むしろ嬉しいくらいだ。
だが……、

「……戦ってる陸には分からないだろうけどさ、……、……、大切な人が傷付くのをただ見てるって言うのは、結構辛いだよ……」
その言葉は誰の耳に届くでもなく、ただただ静かな部屋の中に消えていった。

へ……、……、……、気持ちは分かるが……、少しは果南の事も考えてやれよ

淡島から出る連絡船乗り場へと向かう道。

果南の元から戻ってくるや否や、母親の説教染みた小言を連発してくるゼロ。

へ……、アイツはお前の事を他の A q o u r s の誰よりも理解してる。まあ、流石に戦いに巻き込む気は俺にもねーが……、……、……、少しくらい、アイツの気持ちを聞いてやっても良かったんじゃないのか？

ゼロも、コイツにそう言わせる果南も、別に間違ったことは何一つ言っていないのだ。

というかこの問題に正しい答えなんてない。

危険な目に遭って欲しくない者に、少しでも力になりたい者。

自身を顧みずに他人の力になろうと出来る果南はきつと強い。

「……果南の言う通り、お前は人を頼るのが苦手な節がある。一緒に戦わせるとまでは言わねーけど、多少は頼つてもバチは当たらないと思うぞ」

「……それは姉ちゃんも一緒だよ」

でもだからこそ、陸は彼女の弱さを知っている。

「姉ちゃんは昔からずっと、いつでも他人優先で、ここぞという時に自分の事はないがしろにしている。で、ため込み続けた結果が鞠莉さんとのすれ違いだろ。……本人は気付いてねーけど、姉ちゃんは俺以上に人を頼るのが苦手なんだよ」

それは幼い時から自分より年下の子と関わり続けてきたが彼女だからこそ、自然と自分がいかにしつかりしなきやと思うようになっていたのだろう。

その事が元の姉御肌を拍車をかけ、次第に友人を頼れなくなっていた。

彼女も昔から変わっていない。

陸と同じで、助けを求めるのが下手……と言うよりは、助けを求めようとも思わないのだ。

でもそれはその内限界が来る、かつて陸が一人で突っ走って崩れたように。

「……だから、せめて俺一人でも支えてあげる人がいてもいいと思うんだよ」
ずっと自分が支えてもらってきただから。

あの時も、果南がいたから立ち直ることが出来たから。

「……ホントお前、果南の事好きだよな。このシスコンが」
「うるせ。……まあでも、否定はしな——」

刹那、地面が振動と共に大きく音を鳴らした。

「おあつ……!! 何だ?!」

よろめきながらも何とか踏ん張り、地響きの震源を目で追う。

『キウアアアウウウウウウ!!』

ズン、ズン、と巨大な足音を響かせるのは、一体の巨大な影。

身の丈ほどある二本の尻尾を生やした二足歩行のシルエツト。太く湾曲した悪魔の
ような一対の角を頭部に備え、両腕から肩に掛けて触手状の頭部がそれぞれ二つ。

「……怪獣か……」

「……果南の家の方角に向かってるな。止めるぞ陸」

「当たり前だ」

ゼロの言葉の通り、怪獣は一切迷う様子もなく果南の家に向かって行っている。
あそこに何か狙いがあるのか。それは分からないがみすみす見過ごす訳がない。

『シエア!』

素早く左腕のブレスレットからゼロアイを取り出し、即座に装着してゼロへと変身を遂げた。

「ふう．．．．．ん．．．」

いつの間にか寝てしまっていたらしい。

重い響きで轟く轟音で目が覚め、果南はぬいぐるみを抱きかかえたまま窓の外の様子を確認する。

『デエエエエエヤツ!!』

『キウアアアウウウウウウ!!』

「っ．．．．．!」

一瞬で目が覚めてしまうその光景。

自分の家から少し離れた場所で、陸の変身するウルトラマンゼロが怪獣——石
化魔獣ガールゴゴンと戦っている。

『があああああ……!』

「あ……」

ガールゴゴンの背後から伸びた尾が直撃し、大きく後方へと吹き飛ばされるゼロ。
更に追撃の雷が襲いかかり、盛大に火花を散らして地面に倒れ込んでしまう。

「……っ!」

それを見た時には、既に果南は水晶体を握って部屋を飛び出していた。

「……強え……」

『……エックスから話は聞いていたが……、まさかこれ程とはな……』

猛るガールゴゴンを前に、大きく肩を上下させるゼロ。

雷撃に近接格闘、タフな体力とどれをとっても並の怪獣を凌駕したスペックを持つている。

「……そのエックスってウルトラマンもきぞかし苦戦したんだろうな……」

『ああ、一回は負けちまつてるらしい。……ただでさえ素の能力が高いつーのに、加えてアイツは——』

『キウアアアウウウウウウ!!』

ゼロが言い終わる前にガーゴルゴンの口が開き、中に隠れていた巨大な一つ目が露わになる。

その眼球に渦巻くエネルギーが収束した途端、放出された光の柱がこちらに進行を開始した。

『フツ!』

ゼロがバク転で軌道から外れた事により、光線は後方にあつた鉄塔に命中する。

鉄塔はじわりじわりと金属の光沢が失われてゆき、やがては光を反射しなくすんだ灰色に変わってしまった。

『……と、見ての通り。アイツは対象を石化させる能力がある』

「マジで?! アイツかなりヤベエ奴じゃん?!」

対象を石化。まるでギリシャ神話に出てくるメデューサのようだ。

となると昼間の石化した石化した鳥・・・、十中八九停電の原因もこいつだろう。ともあれ、そんなことが出来るなら迂闊に近寄れなくなつた。

『ガーゴルゴンは石化したもののエネルギーを奪うことが出来る。かつてその能力を生かし、惑星を丸々石化させて星のエネルギーを根こそぎ奪い取つた例もあるぐらいだ』

「・・・星のエネルギー・・・？ ツ!! じゃあコイツの狙いは——」

嫌な予感と寒気が背筋を伝う。

その瞬間、まるで引き寄せられたかのようにガーゴルゴンの視線が横に流れた。

『ウウウウウウウウウウウ・・・』

そして無情な事にも、最悪な形で予感の中にしてしまう。

ガーゴルゴンがその視界に捉えたのは一人の少女。

青い水晶体を握り、不安に染まつた顔で戦いを見ていた松浦果南だった。

「姉ちゃん!!」

『あの馬鹿・・・』

下手な真似はするなと言つた矢先にこれだ。

普段なら果南から意識を逸らすことぐらい容易いが、今の彼女には狙われる理由——

地球のエネルギーが秘められた水晶体がある。

ガーゴルゴンの反応からして、それはもう確定だ。

現に奴の目、物質を石化させる光線を放つ一つ目は、エネルギーを溜めながら果南に向けられている。

『キウアアアウウウウウウウウ!!』

「ツ!! 姉ちゃんツ!!」

『果南ツ!!』

ガーゴルゴンは、果南ごと水晶体を石化させて地球のエネルギーを奪い取ろうとしている。

そんな事を理解するまでもなく、ただ果南が危ないという理由だけでもう身体は地面を蹴っていた。

「『がッ……ああああああああああ!!』」

果南を底う形で一体と一人の間に割って入ったゼロに、ガーゴルゴンが解き放った光線が炸裂する。

「え……」

『ぐ……ああ……』

絶句する果南の眼前で、ゼロの身体はどんどん灰色の何かへと変わっていく。

「ちよ……、陸!! ゼロ!!」

「……姉ちゃん……、にげ……ろ……」

それ以降、言葉が続く事はなく。
ウルトラマンゼロ及び仙道陸は、完全に物言わぬ石像と化してしまった。

七十九話 海の化身

「……………、つ……………」

全身の力が抜けきってしまったかのように、果南がその場にくず折れる。

「り……………く……………」

今まで誰にも見せた事が無いような弱々しい表情で見つめる先には、たった今自分を庇って石に変えられてしまったウルトラマンゼロの姿が。

ゼロが石化すれば、当然一体化している陸も……………。

『キウアアアウウウウウウウウ!!』

二人をこんな状態にした怪獣——石化魔獣ガ—ゴルゴンは、猛々しく勝利の咆哮を上げている。

自分が狙われていたのは先程の行動を見れば分かる。きっと勝利の余韻に浸り終われば、再びこちらを目指して進行してくるのだろう。

……………しかし、全く逃げる気にはなれなかった。

「……………」

自分のせいだ。

下手な真似はするなという陸とゼロの忠告を聞かず、無謀にも飛び出してしまつたから二人が……。

『キウアアアウウウウウウウ!!』

「うあつ……!」

再度果南に狙いを定めたのか。雷撃が近くに衝突し、衝撃で浜辺まで吹き飛ばされてしまう。

「あつ……うつ……!」

『ウウウウウウウウウ……!』

今ので邪魔立てする者が誰もいないことを理解し、いよいよ星のエネルギーを吸収すべく石化光線のチャージを始めるガーゴルゴン。

転がった身体を起き上がらせるが、到底回避する時間などない。

刻々と迫る発射の時を迎える前に、果南はちらりと石化したゼロの方を見た。

「……ごめんね……」

そんな言葉しか出てこなかった。

何がお姉ちゃんだ。

何が支えるだ。

結局、ただ足を引つ張っていただけじゃないか。何も出来ていないじゃないか。

——・・・でも、姉ちゃんを巻き込むのは本意じゃない

——・・・だから、変な真似はしないで

陸の気持ちは分かっていた。分かった上でエゴを貫いたのは自分自身だ。

自分は何も成長していない。勝手な思い込みで鞠莉とすれ違ったあの頃から。

また大切な人を失ってしまふ。今度は、取り返しのつかない形で。

『キウアアアウウウウウウウウ!!』

ガ—ゴルゴンの放った光線が迫る。

「っ・・・・・・・・」

そつと目を瞑り、水晶体を守るように光線に背中を向けた。

かわす術が無いのなら、せめてこの地球のエネルギーをだけでも守らなければ。そう

思うと、自然と身体が動いていた。

ズドオオオオオオオン・・・・・・・・!!

地鳴りと共に炸裂音が轟き、辺り一面が石化していく音が聞こえる。

だが何故か、一向に身体が固まっていく感覚がしない。

「・・・・・・・・？」

違和感を覚え恐る恐る目を開いてみると、自分を中心に青いドーム状のバリアのよう

な物が展開されていた。どうやらこれが自分を守ってくれたらしい。

「……陸……?」

まさかゼロが、そう思い顔を上げてみるが、やはりゼロは石化したままだ。

「ん……?」

掌が温かいような、冷たいような。

そんな感覚につられて視線を落とせば、自分の手の中にある水晶体から光の幕が発生していた。

「……まさか……、守ってくれたの……?」

その言葉に答えるように水晶体は更に輝きを増し、確かな光で果南の心を照らしてくれる。

まるで、まだ自分には出来る事があると訴えて来るように。

『キウアアアウウウウウウ……』

ハッキリと光を視界に捉え、ガーゴルゴンはゆつくりとこちらに向けて巨大な図体を進行させてくる。

けれども今の果南にはそんなもの目に入っていない。

「……地球の……、海の光……」

前を向けと、海が温かく接してくれる。

君にはやることがあると、救いたい者がいるのだろうと、背中を押してくる。だから、海を頼れと語り掛けてくる。

「っ……!」

水晶体はふわりと浮かび上がり、中空で浮遊している。

少し手を伸ばせば、届く場所で。

「……まだ、届くの……?」

もう遠く離れた場所に行ってしまったような彼に。

「……まだ、間に合うの……?」

もうどうにもならないと思っていたこの状況に。

そしてその問いを肯定する言葉が、君が望むなら。そんな声が聞こえた気がした。

自分が望む。

本当に果南が陸を助けたいと持っているのなら力を貸そう。海はそう言っている。

……そんなの考えるまでもない。

「……まだ陸を支えられるなら……」

少しずつ身体を前に進ませる。

「……もし、まだ陸が私の事を姉ちゃんと呼んでくれるなら、私がそれに見合う事が

出来るなら……！」

擦り傷の痛みに耐え、伸ばした手を水晶体の光に向ける。

「……お願い……！ 私に力を貸して!!」

決意と共に、眩い光を掴み取る。

『ウウウウウウウウウ……!!』

瞬間、青い閃光が辺りを包み、その眩しさにガーゴルゴンは思わず後退した。

そしてその反対方向から聞こえる、何かが迫ってくるかのような音。

「っ……!!」

振り向いてから言葉を失った。

ガーゴルゴンの正面、果南の背後、つまりは海。

そこから、今まで見た事もないような大波がこちらに迫ってきているのだ。

「え……」

浜辺に襲来した巨大津波は果南を飲み込み、大海の中へとその身体を誘っていった。

温かい。

海中で私が真つ先に思つた事はそれだった。

優しくて、親しみがあつて。まるで陸や A q o u r s の皆みたいで。

(・・・そっか・・・)

でもあの九人に会う前から、私はこの暖かさを感じていた。

(・・・ずっと、見守つててくれたんだ・・・)

手の中に納まっていた青い光は次第に膨らんで行つて、私を包み込んでいく。

その温もりを全身で感じながら、私は素直な気持ちで言葉をにした。

(――・・・ありがとう)

『キウアアアウウウウウウウウ!!』

海が割れる。

自ら蒼く光り輝く海が、モーセが割つた海の如く真つ二つに。

『フウウウ・・・』

その中央。割れた海の水が滝のように流れ落ちる中で、一体の青い巨人が佇んでい

る。

大海の如く深い青色の肉体に走る銀色のライン。金と黒のプロテクター。強い意志を感じさせる双眸に、胸に輝く青いランプ。

『ウウウウウウウウ……』

突然の事にガーゴルゴンが硬直する中、巨人はゆつくりと立ち上がり、その青い巨体を空へと飛び上がらせる。

空を舞うその姿は美しく、雄々しく、海そのものが人型を形どったようである。

見る者全てを圧巻させた後、巨人——ウルトラマンアグルは強烈な地響きを轟かせながら大地に舞い降りた。

『フツ……』

『キウアアアウウウウウウウウ!!』

クイクイと挑発的な手招きに乗せられ、両肩から雷撃を発生させながら突進してくるガーゴルゴン。

『ジュワアアアアアア!』

アグルはそれを側転で回避すると、そのまま胸元に潜り込んで渾身のストレートパンチを叩き込む。

怯んだところを更に左腕を取り、足を払うと同時に大きく投げ飛ばした。

アグルセイバーにより切り裂かれた眼球は発光が止まり、機能を失った事が伺える。その直後、石化したゼロの身体が微かに光を帯びていった。

『ぐ……うう……』

輝きを失っていたゼロの双眸とカラータイマーに光が戻り、徐々に身体が元に戻っていく。

「……あれ……？ 俺達……」

『……一体何が……ッ？！』

状況が飲み込み切れていない様子で周囲を見渡すゼロと陸の視界に、一体の青い巨人が映り込む。

『……アンタは……！』

ゆっくりと歩み寄ると、ゼロの手を取って立ち上がらせてくれる。

「……姉ちゃん……？」

陸の声に頷き、再び目の前の敵に意識を向けるアグル。

『……陸』

「・・・うん」

どうしてウルトラマンになっているかなんて野暮なことは聞かない。

隣にいる巨人が、ずっと自分を見守ってくれていた果南だということが分かれば十分だ。

それだけで、心強い。

『シエヤア!』

『ドアアアアア!』

二体の青い巨人が並び立ち、ファイティングポーズを取るとガーゴルゴンへ向けて共に立ち向かっていく。

『キウアアアウウウウウウウ!!』

『フツ!』

殺到する雷撃をアグルがバリアでガードし、その背中を踏み台にして飛び上がったゼ口のウルトラゼロキックが頭部を強襲。

『ジュヤアアアア!!』

立て続けにアグルが繰り出した破壊光弾——フォトンスクリューがよろめいた隙に炸裂し、緑色の悪魔を後方へと跳ね飛ばした。

『アエエエエエエ!!』

「・・・つくづくチート染みてんなアイツ・・・」

とにかくこれで接近戦は控えた方がいいだろう。至近距離であれを繰り出されたら回避が難しい。

『セヤー!』

『ダアアア!』

二本のゼロスラツガーとアグルスラツシユが殺到するが、これまでの猛攻で相当頭に来ているらしいガーゴルゴンは剛腕でそれらを弾いてしまう。

『キウアアアウウウウウウウ!!』

『ドウワアアアアア!!』

迫りくる石化光線に対してアグルが頭部のブラインドスポットから垂直に伸ばした光の刃——フォトンクラツシャーが衝突し、舞い上がった爆炎が辺りを包み込んだ。

『キャウアアアア!!』

『がはっ・・・!!』

『グアアア・・・!!』

濛々と立ち込める黒煙の中から飛び出してきたガーゴルゴンの突進に、悪い視界のせいで反応が遅れた二人は難なく地面を転がる。

『チッ・・・』

モロに攻撃が直撃したためか、二人のカラータイマーとライフゲージが点滅を始める。

「……………肩も治ってきてるな……………」

切り飛ばされた二つの頭部があった奴の両肩の傷は既に塞がっている。つまりあの雷撃を放つ頭が修復されるのも時間の問題だという事だ。

『サツサと決めるぞ！ エメリウムスラッシュ！』

ゼロのビームランプから熱線が足元に伸び、驚いたように後ろへ飛びのくガールゴ
ン。

『ジュアア！！』

奴が見せた隙を縫い、アグルの鋭い二段蹴りが下顎に連続でヒットした。

再生能力があるとはいえ、受けたダメージまでもが消える訳ではない。傷こそ消えたものの、蓄積した疲労や消費した体力はそのままだ。

『ダオラアアア！！』

爆ぜるようにゼロが飛び出し、ビックバンゼロを駆使してガードの脆い側頭部を豪快に殴り飛ばした。

『キウ……………アア……………ウウウウウウ……………』

よろよろと何とか起き上がるが、もはやその身体に力は残されていない。もう終い

だ。

『デエエエヤアアア!!』

『ドウワアアアアア!!』

トドメに発射したワイドゼロショットとアグルストリームが完全にグロッキーになったガーゴルゴンの胴を貫き、石化魔獣の身体は盛大な大爆発を起こして消滅した。

『ふいー．．．、助かったぜ果な——ん?』

礼を述べようとした時には既にアグルの身体はぼやけ始めており、輪郭が定まっていなかった。

——誇りを胸に、遍く生を守護する力——ウルトラマンアグル

その青い肉体から漏れ出る光の粒子がウルティメイトブレスレットに吸収され、新たな力が宿る。

『．．．俺達に．．．力を．．．』

『フウウウ．．．』

「おい?! 姉ちゃん?!」

鷹揚に頷いたのを最後に光は地表の一点に集約していき、巨人が一人の少女の姿に戻る。

果南は横たわって瞼を閉じており、ウルトラマンになった反動で何かあったのではないかと不安が脳裏を過った。

焦る気持ちのまま即座に変身を解除し、彼女を抱き上げる。

「姉ちゃ——」

〈意識を失つてただけだ。安心しろ〉

ゼロの言葉に安堵し、本当によかったと胸を撫で下ろす陸。

「……心配させんなよ。バカ姉が……」

鼻先がじわりと痛むのを我慢し、そつと立ち上がる。

小さい頃からずつと親しんできた温かさを衣服越しに感じながら、陸は少しだけ果南を抱き上げる腕に力を込めた。

「……まさか姉ちゃんがウルトラマンになっちゃまうとは……」

「あはは……、私もびっくり……」

ダイビングショップのテラスから水平線に沈む夕陽を眺め、意識を取り戻した果南と並ぶ。

「……何で逃げなかったの？ 下手な真似はしないでって言ったよね」
咎めるように言葉を紡ぐ。

助けてもらった事が不満な訳じゃない。ただ危険を顧みなかった彼女に少し腹が立っているだけだ。

「……ごめん」

果南にしては珍しい弱気な声音が帰って来る。

「……居ても立っても居られなくてさ。やっぱり陸が傷付くところを見るのは辛い……」

「……だからって、果南姉ちゃんまで危険な目に遭う事はないだろ」

こんな事を言っただってどうしようもない事は理解している。

果南は優しい。自分の気持ち押し殺してまで、鞠莉の未来を優先させるくらいには。

だが、逆にその優しさが彼女自身を縛り付けているのだ。

「姉ちゃん、前に言ってたよな。俺は昔から人を頼るのが苦手だったから、頼ってもらえるように、支えてあげられるようになりたいって」

「……？ ……ああ、うん……」

不意に話が切り替わった事に戸惑いつつも、果南は首を縦に振ってくれた。彼女の青紫色の瞳と視線が重なる。

「…そう思ってくれてた事はスゲー嬉しいし、実際俺は何回も姉ちゃんに助けてもらって来てる。…夏休み前のあの時も、姉ちゃんがいなかったら立ち直れてなかったと思うし。きっと皆も姉ちゃんの仕事は頼りにしてる。けど——」

素直に感謝を綴るといふのは想像以上に恥ずかしい。幼い頃からの付き合いである果南相手なら尚更だ。

けれども決して目だけは逸らさずに、陸は続けた。

「そんな姉ちゃんのこととはさ、一体誰が守ってくれるんだよ」

「え…?」

考えた事もなかった。果南の顔はそう言っている。

「小さい時から俺達みたいな年下と関わる事が多かったから、自分がしつかりしなきゃって思うのは分かるよ。その内俺と同じで人を頼るのが苦手になってたのも」

同じような性格をしているダイヤとの独断で元祖Aqoursを解散させたのも恐らくはそう言う事。

やはり果南自信に自覚は無かったようで、盲点を突かれたように頬を掻いている。

「だからさ、せめて俺一人くらいは頼ってくれよ。姉ちゃんがそう思ってくれてたみた

いに、俺だつて姉ちゃんが傷付くところとか、苦しむのは見たくないんだよ」
ずっと支えてもらつてきたから。ずっと助けてもらつてきたから。

だから、今度は――、

「・・・俺は、もつと姉ちゃんに俺の事頼つて欲しい」

こうして果南に素直な気持ちをつけたのはいつ以来か。

昔から支えてもらうのが当たり前で、その状況に何の疑問も抱いてなくて。

でも今だから。果南の強さも弱さも知つた今だからこそ言える。

「姉ちゃんが今この時が楽しいから頑張っちゃやう気持ちも分かつてる。でもだつたらなおの事自分の事も大事にしないとダメだろ。もしそれで姉ちゃんに何かあったら、俺も皆も悲しむからさ」

「・・・・・・陸・・・」

瞬間。

果南の握つていた水晶体から光が消えた。

同時に海の名も地球に還元されたらしく、もう何の名も感じない何の変哲もない水晶体だ。

「・・・もう。あのウルトラマンにはなれないのかな?」

『多分な。・・・けど、それでいいんじゃないか?』

ほんの少し寂し気に水晶を見つめる果南に、ゼロは確信付いた言葉を返した。

『・・・もう一人で抱え込むお前はこれで終い。たまには仲間を頼ることも強さだ。・・・きつと地球は、海は、お前にそれを伝えたかったんだと思うぞ』

果南が海を愛した事と同じで、海もまた果南を愛し、見守り続けていた。つまりはそう言う事だ。

誰かを頼ることが出来る今、果南にあの力はいらぬ。

「俺に仲間を頼つて言つてくれたのは姉ちゃんだろ？　・・・まさかそんな姉ちゃんが、人を頼れないなんて言わないよな？」

意地悪い微笑を果南に向ける。

それを見た彼女は、可笑しそうに息を吐いた。

「・・・生意気な子に成長しちゃったなあ・・・」

それでも全く嫌そうではなく、むしろ表情は憑き物が取れたように晴れやかで。

「ま、でも・・・」

幼き日を懐かしむように夕陽を眺めた後、そつと陸の頭を自身の胸元に抱き寄せた。

「・・・ありがとね。陸・・・」

優しく頭を撫でられる感覚と、腕の温もりが身体に広がっていく。

気恥ずかしい反面、どこか心地よいと思つている自分も確かにいて。

結局は果南が満足するまで、そのままでしたのであった。

微笑ましかつたけど、寂しさもあった。

ウルトラマンとして戦っている陸が、もう私の支えなんていらなくらい遠くに行ってしまったような気がして。

でも陸は今でもこうして私に寄り添ってくれている。

今度は俺が支えるんだって、そうあれるようになりたいんだって。

これじゃあべこべだ。どっちが年上なのか分かんない。

でもそれが嬉しくて、胸が温かい。

痛いような、苦しいような、それでいて心地のいい気持ち。

まさかこんな感情を陸に対して感じるなんて、思ってもみなかったかなん？

八十話 硬さに秘めた憧れ

『……！ またか……』

？78 星雲、光の国。

数多の宇宙に配備された宇宙警備隊を統べる大隊長——ウルトラマンケン——
通称ウルトラの父は、ただならぬ気配を纏って腰を上げた。

『どうかしましたか？ 大隊長』

明らかに様子がいつもと違う事を察したゾフィーが問いかけると、ウルトラの父は何か意を決したように声を出した。

『……最近、微弱だが奴の……ペリアルルの気配を感じるようになってきた……』
『なっ……、本当ですか……？』

驚愕を滲ませるウルトラ六兄弟の長男に対し、首を縦に振る事で応ずる。

『……君からダークネスファイブが暗躍していると聞いてまさかとは思ったが……、
間違いないようだな』

『……では、奴は今あの地球にいると？』

『……詳しい事はまだ分からないが……、そう見て間違いはないだろうな』
最強最悪の脅威が迫っている事はもう紛れもない事実なようだった。

『……我々が動くにはまだ情報が少なすぎる……、ここはゼロに任せるとしよう』

朝焼けが町と海に輝きをもたらす。

今日も今日とて変わらず登校。まずは曜を高海家近くのバス停まで送り届ける。

「あら陸ちゃん曜ちゃん。おはよう」

「はよーす」

「おはようございまーす」

欠伸を噛み殺し、十千万の玄関前で箒片手に掃き掃除をしていた志満に軽く挨拶を返す。

「志満さん、千歌もう起きてます?」

慣れた流れでいつもの確認作業。

ちなみにこの質問に対し Yes が帰ってきた試しはほぼ皆無である。高校二年生になつてからはまだ一度もない。

だからこそ、今日の返答はシンプルながらも予想の遥か上を行くものだった。

「あー……、千歌ちゃんなら今朝早く学校行つちやつたけど……。それにやけに機嫌よかつたわね」

「……ええ!! 珍しい……。しかもこんな日に……」

「……雨でも降んのか……?」

「いやいや、雪って可能性も」

「天変地異の前触れか……?」

『お前等千歌を何だと思つてんだよ』

で、本当に雨が降ってきたその日の放課後。

「~~~~~♪」

「………何？ 今朝からずっとあんな感じなのか？」

『ああ。今日は曜の中に入ってずっと見てたんだが………、不気味なくらい機嫌が悪い』

練習着姿で鼻歌を口ずさみながらせつせと窓拭きをする千歌。それ以外のメンバーは緊張を隠し切れない面持ちでいるというのに、この差は一体何なのだろうか。

今日は、千歌達 A q o u r s にとって重要な事が発表される日だというのに。

「………忘れてるとか？」

「……今朝志満さんから聞いた感じだと………、その可能性が高い気がする」

「Really?」

普通こんな大事な事忘れないと思うが、忘れ物常習犯の彼女ならばありえない話でも無いのだ。

「千歌。……今日、何の日か覚えてるか……？」

「ん？」

もしかすると緊張のあまりぶつ壊れてしまった可能性も無きにしも非ずなので、早急に確認作業に移る。

だがそんな陸の心配はよそに、千歌は特に考える様子もなくあっさりと答えた。

「ん〜？ ラブライブの予備予選の結果が出る日でしょ？」

「「おお〜〜！」」

「覚えていたずら！」

「き、緊張しないの？」

「ぜーんぜん！ だって、あんなに上手くいつて、あんなに素敵なお歌を歌えたんだもん。絶対突破してる！」

前回の予備予選結果発表の時は震えるほど緊張していたというのに、何が彼女にそこまで自信を持たせているのだろう。

「昨日、聖良さんにも言われたんだよ。『私が見る限り、恐らくトップ通過ね』って」

「うわ。死ぬほど似てねえ」

「・・・いつの間になんか仲良しさんに・・・」

聖良と言うと、あのSaint Snowの鹿角聖良だろう。トップレベルの実力を持つスクールアイドルにして、Aqours以外だと唯一陸がウルトラマンゼロだという事を知っている者。

東京でのあのやり取りを見る限りではあまり関係は良好とは思えなかったが・・・、仲良くなってくれたようで何よりだ。

「来たあ！」

そんなこんなしている内にピロン、とパソコンが結果が出た事を知らせてくれる。

千歌を除いた全員がパソコンの前に雪崩れ込んでいき、カーソルが届いたメールを開く瞬間を見届ける。

「緊張するぞら……」

「……い、いきますー!」

予備予選結果発表とある画面に移り、ルビイが震える手でキーボードのEnterキーを押した。

次の瞬間、パソコンの液晶に映し出されたものは――、

「「「「「「おおおおお——!」」」」」」

歓喜の声が結果がどうであったかを教えてくれる。

A q o u r s 。二度目の予備予選突破である。

「もしかしてこれ、トップってこと?」

予選と違いトップのみが次のステージに進める訳ではないが、それでも一位というのはA q o u r s の皆としてもモチベーションが上がるといふものだ。

「ね?」

凄いでしょ、と言いたげに胸を張る千歌。一応言っておくと手柄はコイツではなく聖良のものだ。

「やったずら!」

「うむ! 良きに計らえ!」

「鞠莉!」

「Oh! Yes!」

果南と花丸はハグ、鞠莉と善子はハイタッチからの墮天ポーズでそれぞれの喜びと高ぶった気持ちを表現する。

予備予選で歌う曲を作ってからと言うもの一年生と三年生の関りも増え、こうしたコミュニケーションも多くなってきた。

「……?」

ふと横に流した視線。その先には、呆然とコミュニケーションを交わす四人を眺めているダイヤがいた。

『……どうしたよダイヤ。浮かねー顔し——』

「ダイヤさんも!」

ゼロも怪訝に思ったらしいが、突然横に現れた千歌によって言葉は遮られてしまう。千歌の掌はダイヤに向けられている。

「え？ は．．．、はあ．．．．．」

『．．．．．？』

どこか陰のある表情で千歌とハイタッチを交わすダイヤを見て、陸とゼロの疑念はさらに深まるのであった。

「とは言ったものの．．．．．」

予備予選突破の祝勝ムードも終了し、制服に着替え直した千歌は部室の机に突っ伏していた。

「また？」

「今度は何？」

「ほら．．．、ここんどこ説明会とライブと、二つもあつたでしょ？ ．．．．．」

だからお金が．．．」

ゆっくりと顔を上げた千歌の目線の先には、スクールアイドル部の部費が保管されて

いる貯金箱。

「この前千円ずつ入れたのにく……」

「もうなくなっちゃったの?」

A q u o u r s は九人と人数が多い。

人数が多いという事は、相対的に衣装代などで掛かるお金も増えてくるのだ。

もうここ最近だと学校から支給される部費だけでは賄えなくなってきた。や交通費は彼女達が自腹を切つて捻出する事も多くなってきた。

「このままだと、予算が無くなって、仮に決勝に進出しても……アヒルボートで東京まで行く事態になってしまうぞら」

「沈むわい!」

まあ、花丸の挙げた例が極端な事には同意見だが……、実際、残っている金額によってはアヒルボートが現実になってしまいかもしれない。

そんな陸の懸念を汲んだらしい梨子が手に取つた貯金箱を逆さにしてみせる。

チャリンという硬質な音と共に落ちてきた煌きの正体は——、

「Oh! 綺麗な五円デース!」

「縁がありますように!」

「S o H a p p y!」

「言ってる場合か!」

「・・・ヤバイ。マジでアヒルボートが現実になってきた」

最悪東京までの移動は先日 A q o u r s の皆による集団暴行の餌食となったミラーナイトの能力を使えば何とかなるが、これは本当に最終手段だ。

何の対価もなく部とは無関係の者の力を借りるのはフェアではない。それが人外の者であれば尚更だ。

『・・・おい。ダイヤ』

「えっ?」

騒々しいやり取りをする集団を注意する訳でもなく、羨ましそうに眺めていたダイヤが声の主であるゼロの方を向く。

『どうした。何か気になる事でもあんのか?』

「あ・・・いえ。果南さんも鞠莉さんも、随分皆さんと打ち解けたと思いでして」どこか寂しさを感じる彼女の声音。

確かに関りが増えたおかげで仲が良くなったことは確かだが・・・、何か問題があるのだろうか。

「果南ちゃんはどう思うぞら?」

「そうだねえ・・・」

「っ……!」

花丸が発したとある単語に、ダイヤがピクリと反応する。

「果南………ちゃん……?」

という訳で場所は移り、鎌倉にある銭洗弁天を模したような祠の前に来ていた。

「………」

半目の陸と果南の目線の先には、スクールアイドル部全部費である五円玉を祠の流水で清め、何とか神の御利益にあやかろうとする千歌がいた。

「……いきなり神頼み……」

「お願い聞いてくれるかな?」

情けなく両手を擦り合わせるその姿は、見ていてとても嘆かわしい。

「何卒五円を五倍、十倍、いや百倍に!」

「百倍は五百円だよ♪」

「あ………」

小学校低学年レベルの計算が出来ていないのは、追い詰められたこの状況による焦りが原因だと信じたい。

「……というか、神頼みするくらいなら……」

梨子の声に乗り、一年生と二年生が一斉にある少女へと顔を向けた。

「……鞠莉（ちゃん）！」「……」

苦し紛れにお金持ちに縋るが、予備予選時のヘリコプターの件からして返答はもう決まっているようなものだ。

「小原家の力は借りられませーん！」

「ですよね……」

皆がより一層難しい顔になる中、またしてもダイヤは一人だけ呆然と今のやり取りを眺めていた。

「鞠莉……ちゃん……？」

その後も皆で色々と画策したが名案は何も浮かばず、気付けば空は夕日の赤に染まっ

ていた。

時間带的にも、もう解散である。

「鞠莉ちゃん！ またねー！」

「果南ちゃん！ 明日本もつてくずらー！」

「うむー！」

「お姉ちゃんも早くー！」

散々迷走した結果何故か淡島へと辿り着き、淡島住まいではない果南と鞠莉以外の面子は連絡船に乗り込んで行く。

後輩全員の姿が船の中に消えたのを確認すると、二人は帰ろうとしていた自分達を引き留めたダイヤの傍による。

「で？ 何のTalkですか？」

「え？ いえ・・・、大したことではないのですが・・・」

また羨むような目をして惚けていたダイヤは、二人の声で本来の目的を思い出す。

「その・・・二人共、急に仲良くなりましたわね」

「仲良く？」

「私と・・・果南が？」

社交ダンスのようなポーズをとりつつ、釈然としていなさそうなダイヤに疑念の意を

込めた視線を向ける。

「違いますわ！ 一年生や二年生とです！」

何故か声を荒げるあたり、凶星だったのは目に見えた。

「……………もしかしてダイヤ、妬いてるの〜？」

「っ…………！」

反応がいちいち分かりやすい。隠し事が苦手なのは相変わらずのようだった。

「ま、まさか…………！ 生徒会長としてちゃんと規律を守らねば皆に示しがつきませんわ
！」

ぷいっとそっぽを向いてしまった事からして、またもや凶星らしい。

「またそういう固いこと言う〜」

「Very Hardねえ……………」

果南も鞠莉も幼い頃からの付き合いでダイヤがどういう性格なのかは知り尽くしているため、今の言葉が本心でないことぐらいはすぐに分かった。

「……………ただ……………」

「ただ？」

「……………ただ」

そこから続けようとするダイヤだが、確信に触れたいと言わんばかりに迫ってくる幼

馴染を前に言葉を飲みこんでしまう。

「何でもありませんわ！　ただ、鞠莉さん達も上級生である自覚を無くさないように！」
強引に会話を終わらせるために声を荒げると、そのままずんずかと連絡船に乗り込んで行った。

そんな態度を見せてしまえば、二人の疑心が深くなるのも当たり前だ。

「……………どう思う？」

「Smellプンプン嫉妬fire〜〜♪」

嫉妬の炎を表現するように突き出した腕を動かす鞠莉。

一通りふざけた後、出港した船を眺めながら呆れ気味に息をついた。

「しばらくすれば尻尾見せるでしょ。ダイヤは自分の事になるとへっぼこびーだから」

「へっぼこびー？」

「ふーん……………」

二人は気付いていなかった。

今の話を盗み聞きしていた者が、密かに果南の身体を抜けて行った事に。

〈ただいま……つて、大丈夫かお前……〉

様子がおかしいダイヤの真意を探るために三年生の会話を聞き耳を立てていたゼロが帰還する。

(おう……、お帰り……)

他の皆がワイワイ楽しそうに会話している中、一人ぐったりと座席にもたれ掛かっている陸。

波がもたらす不規則な揺れにより、しっかりと船酔いを起こしていた。

〈あ……、そういや前に船に弱いかそんな事言つてたな。生きてるか？〉

(……勝手に殺すな。……それより、何か分かった事あるか?)

吐き気を抑えて頭だけ動かすと、楽しそうに談笑するルビイの隣で黄昏ているダイヤが確認できた。

物憂げなその表情を見る限りでは、何か悩みがある様にも見えなくはないが……

〈詳しい事はさっぱりだ。……強いて言うなら、ダイヤがへっぴりつてことぐらいだな〉

(……は?)

八十一話 Round in circles

『ほう……、これがペダン星の……』

空間ウィンドウに映し出された漆黒のロボットを見て、メフィラス星人魔導のスライは感心したように声を漏らした。

『遙か未来で開発された代物と聞いていましたが……、よく再現出来ましたね』

『はっ……。レイオニクスによつて破壊された機体の残骸が惑星ハマーに転がっておりますので、その機体情報を元に旧型を改造しまして』

スライの前で膝を付くのはペダン星人。全宇宙最高とも言われる程の科学力を持つた宇宙人だ。

『……この機体、少し拝借しても大丈夫でしょうか？』

『え？ ええ……。既にデータは取つてあるので、別に破壊されても問題はありませんが……』

『そうですか……』

ペダン星人の返答を聞いたスライは、別のウィンドウに意識を向ける。

そこには、複雑そうな表情をした黒髪の少女の姿があった。

『少し……試してみるとしますか……』

翌日。普段練習しているスタジオがある建物の屋上。

ベンチに腰かけた千歌、曜、梨子は同時に溜息をついた。

なぜこうなっているのかと言うと、活動資金集めのためにバイトをしないかという話
が上がっているのだ。

「……まあ、しようがないわよ」

学校から支給されている部費は底をつき、(鞠莉を除いて) A q o u r s の皆のお財布
事情もそろそろ限界だ。

現実的に考えればもうバイトぐらいしか方法が残されていない。

「あら？ 今度は何ですの？」

見計らったようなタイミングで現れたダイヤに三人が顔を向けた。やけにモジモジ
しているのが気になる。

「あ、はい……」

「お腹痛いんですか?」

「違いますわ! ……い、いえ、何か見てらしたような……」

「はい! 内浦でバイト探してて、コンビニか新聞配達かな……」

そう言つてバイトの求人誌を見せる曜。

ダイヤはその隣に腰かけると、妙ににこやかな笑顔を向ける。

「なら、沼津の方がいいかもしれませんわね」

「沼津でか……」

「そうだね。沼津なら色々あるよ」

沼津付近に住む曜がカフェ、花屋、写真スタジオのモデル、etc……と、様々な例を挙げていく。

「おお! ……なんか楽しそう!」

「でしょ?」

流星に人の多い沼津となるとバイトの種類が豊富だ。

珍しい職種に期待が弾んだのか、徐々にそのテンションを上げていく千歌達。恐らく日程とか時給とかは全く考えていないらしい。

「よし! バイトは沼津にけつて——」

「ブツブウウウウウ——ツ！　ですわッ！」

千歌の声を遮る様に響いたダイヤの踏みしめた足の衝撃と怒号で建物が揺れる。

「安直すぎですわ！　バイトはそう簡単ではありません！　大抵土日も含む週四日からシフトですので九人そろって練習というのも難しくなります！　大体なんでも簡単に決めてはいけません!!　ちゃんとなさい——あ．．．」

怒涛の勢いで捲し立てた後、やってしまったという顔になるダイヤ。

「確かに．．．ダイヤさんの言う通りね．．．」

「流石ダイヤさん！」

だが二年生三人はその事に気が付かない。

「でも、じゃあどうするの？」

「何かあります？　ダイヤさん」

「えっ．．．えーつと．．．．．」

「『．．．．．』」

そしてそれを遠巻きから眺めていた陸、ゼロ、果南、鞠莉の四人。

『やーっぱなんか変だよな。ダイヤの奴．．．』

「挙動が怪しいというか……」

「不自然というか……」

「これはもう間違いなくBlackデース」

見つかからないように隠れて円を組み、第一回黒澤ダイヤ不審挙動説明議会を開催する。

「……ていうか、ゼロはともかく、りくつちが気付いていたのは意外だね?」

「……? そうつつすか?」

「Yes. 普段のあれを見る限り、その手の事に関してはIgnorantかと思つてたわ」

その言葉に鞠莉だけでなく、果南やゼロまでもがうんうんと喉を鳴らす。一体何なんだか。

「……とにかく、もう少し様子を見よつか」

「フリマかあゝ……」

数日後。

とある公園に出向いたA q o u r sの面々は、各々が持ち寄つたいらぬ私物を屋台に並べていた。

バイトの目処が未だに立たないので、ダイヤが緊急対処案としてフリーマーケットへの出店を提案してきたのだ。

「これならあまり時間もとられず、お金も集まりますわ！」

「凄い！ お姉ちゃん！」

「ダイヤさんはこんな事も思いつくずらね！」

「流石ダイヤさん！」

「略してさすダイヤ！」

「そ、それほどでも……ありますわ！」

誇るように胸を張るダイヤだが、やはり一瞬その笑顔が陰った。

「ここ数日そういう事が多いのだ。何か気にしている事は確かなのだが、中々尻尾を見せない。」

「ふふ……、貴方にこの墮天使の羽を授けましょう」

「……光栄ですわ」

善子によって頭に刺された羽を抜こうともしない。いつもならやんわりと注意を促すというのに。

「……あんまりたくなかった手だが……、仕方ない」

すう、と陸の身体からゼロが抜け、擬古地のない挙動を続けるダイヤの中に入っていく。

「ちよつと頭の中覗かせてもらうぜ」

ゼロは憑依した相手の思考が読み取れる。

人の腹の中を探るのはゼロとしてもあまり好ましい方法では無いのだが、この際背に腹は代えられまい。

「さてと……」

「よし！ この調子で打ち解けて、信用を得られれば……」

何か企んでいるようなダイヤの頭の中にとあるイメージ映像が浮かび上がる。

千歌がダイヤに向かって走り寄ってきて、

「一緒に帰ろう！ ダイヤちゃん！」

次。大量の本を傍らに置いた花丸が、

「これ読むぞら。ダイヤちゃん！」

さらに次。何やらダイヤとのツーショット写真を持った曜が、
「はい。この前の写真だよ！ ダイヤちゃん！」

〈つ．．．．．〉

「デッへへへへ．．．．．」

とりあえず一旦何も見なかつた事にしたゼロが、壁に額を押し付けて不気味な笑みを漏らし続けるダイヤの身体から分離する。

(．．．．．どうだった．．．?)

〈．．．．．漆黒の鼓動が闇のビートを刻んでやがる．．．〉

軽くダイヤに恐怖を感じ始めた陸が問うと、善子みたいな返答をされた。

〈．．．なんつーか．．．、闇を感じた〉

(闇か．．．．．)

悩みとか一人で抱え込みそうな彼女だし、闇の一つや二つ抱いていても何の不思議もない。

「お待ちせ〜！」

「あ？ やつと来たか．．．．．」

どこかで着替えてくると言っていた少女が帰ってきたのを見て、今度は陸が絶句する

番になる。

そこにいたのは半分カットのみかんをそのまま装着したかのような着ぐるみを纏い、マスコットキャラクター然とした千歌だった。

「ナニソレ……」

「美渡姉の会社で使わなくなったからって……どう？」

「使用目的が謎過ぎますわ」

「……美渡さんの会社、どんな仕事してんだ……」

少なくともあれを着ないと出来ない仕事など想像もつかないのだが……。

「みかんのお姉ちゃん！」

フリマ会場に出現したみかん普通怪獣を呼ぶ可愛らしい声の一つ。

千歌が振り返った先には、ペンギンの人形を抱きかかえた幼い女の子がいた。

あれは先日ゼロのチート技で獲得した代物だ。貰い手がいなかったのでフリマに提供した。

「あつ！ みかんだよ！ 冬にはみかん！ 行け！ ビタミンCパワー！」

「もうっ！」

身体を擦り合わせてくるみかんモンスターから距離を取った後、女の子はペンギンの人形を見せてくる。

「これ、いくらですか？」

「えっ？ えっと・・・、どうしようかな・・・」

開店の準備を終える前に来られてしまったので、まだその人形には売値がついていない。

「でも、これしかないけど・・・」

千歌がダイヤや他の皆に助けを求めていると女の子はポケットを漁り、最近部室で見た記憶がある黄金の硬貨を差し出してくる。

「・・・五円・・・」

「ええっと・・・」

いくらゼロがプライスレスで獲得した代物とはいえ、市場価格だと恐らく千円は下らないだろう。

千歌もそれが分かっているので渋るような表情を見せるが・・・、

「毎度ありー！」

恐ろしい破壊力を秘めた女の子の上目遣いにやられ、結局五円玉と交換してしまっ

た。

「やった！ 倍だよ」

「弁天様のおかげだね」

「………陸ちゃん。ゴメン」

「……気にすんな。あれには俺も抗える気がしねー……」

『可愛いのは正義………か』

「何を言ってくれてるんですの貴方達!!」

千歌と共に小さくなっていく女の子の背中を眺めながら五円玉を握りしめると、商魂逞しいダイヤが声を張り上げてくる。

「ちやんとなさい! A q o u r s の活動資金を集めるためにここに來てるのでしよう!! まずは心を鬼にして、しっかりと稼ぎませんと!」

「だつてえ………」

「すみませーん。これ千円でいいかしら?」

「見てなさい」

情けなかつた千歌に模範となる商売人の姿を見せるべく、一瞬にして商人モードへと切り替わつたダイヤが新たな客の前に駆け寄つた。

「いらつしやいませ! 残念ですが原価的にそれはブツブツ! ですわ!」

「で、でも………」

へりくだる訳でもなく、少し喧嘩腰気味に構えるダイヤ。もうダメだ。嫌な予感しかない。

「ハッキリと言っておきますが新品ではございませんが未使用品！ 出品にあたりましては一つ一つ丁寧にクリーニングを施した自慢の一品！ それをこのお値段、既に価格破壊となっておりますわ！」

ビシッとお客様に対し指を突き付けたダイヤの姿は凛々しく、絵になるようだ。
ただ、

「お客さんに指さしちゃダメだよ……………」

「はあ…………、アヒルボート決定ずら……………」

「ピギィ！！」

算盤を弾いて本日の売り上げを算出していた花丸が諦めたようにそう零した。

結果だけ言ってしまうと稼ぎは全く芳しくなく、申し訳程度に部費の足しになつたくらいだ。

「それにしても……………」

「何者にも屈しない迫力だったわね」

「さつすがダイヤさん！」

商売中のダイヤの勢いはそれはもう凄く、A q o u r s もお客様も関係無しに見る者全てを圧倒させるものだった。

「だよね」

「は……は……は……は……は……は……」

皆から称賛されているというのにも関わらず、当のダイヤは下を向いて苦笑いするばかりだ。

「それに引き換え、鞠莉はそんなの持つてくるし……」

「……それ売る気だったの？」

売れ残った品を美渡の運転するトラックの荷台に運ぶ鞠莉。

彼女が今抱えているのは、先程千歌が着ていた着ぐるみ以上に使用用途が不明な自分を模った銅像だった。

何で作ったのか、そして何でそれを今日売ろうと思ったのか。未来の僕らは知ってるのだろうか。

「それを言ったら善子だって売り上げN o t h i n g デース！」

「……ヨハネよ」

何故それを出品しようと思ったのかとツツコミを入れたくなる者はもう一人。

鞠莉と同じく売れ残った品を荷台に積む善子の腕の中には、段ボール箱の中に入った大量の黒い羽根があった。

唐突に今の善子の心境を現すように風が吹き抜け、未練と共に数多の漆黒が宙を舞う。

「ふっふっふ……、まるで傷付いた私の心を癒してくれているかのよう……美しい……」

「馬鹿なこと言っていないでさっさと拾いな——!!」

「うう……、はい……」

美渡が雷を落とした事で傷心墮天使モードはあっさりと解除され、他のメンバーと一緒に羽の回収に勤しむ善子。

「……陸。ダイヤの事なんだが……」

「……なーんであーなってるんだか……」

他のメンバーが出動している中、ただ一人離れた場所で沈んでいるダイヤ。

普段なら率先して統率を取るはずなのに、やはり普段の彼女ではない。

（で？ 何か分かったのか？）

「ああ……、その事なんだが……」

先程身体の中に入ってダイヤの思考を読み取ったはずなのに、何故かゼロは彼女の考

えていた事を教えてくれなかった。

何でも少し考察する時間が欲しいとの事だったが、こうして自分から切り出してきたという事は何か確証を得たという事だろうか。

へ・・・ダイヤは多分・・・、ダイヤちゃんって呼ばれたいんだと思う

「はっ。」

予想の遙か上に行くゼロの見解に思わず声を出してしまった。

てつきりメンバーの誰かに手を焼いていたり、ルビイが構ってくれなくなったとかそんな感じだと思っていたのだが。

(いやいや・・・、あの人に限ってそんな・・・)

へ・・・さつき、ダイヤの頭の中を覗いた時、うっかりアイツの秘めた妄想を垣間見ちまつたんだが・・・

(・・・が?)

いまいち信じていない陸に、ゼロは先ほど見たダイヤの妄想をそのまま頭の中に投影してくる。

そしてその真実を受け入れざるを得なくなつた。

(・・・ダイヤちゃん・・・、ね)

彼女の妄想の中の千歌、花丸、曜。

シユチュエーションこそ違つたが、総じて親しく接しており、ダイヤの事をちゃん付けで呼んでいた。

〈思つて見れば、最近果南と鞠莉は後輩と仲がいいからな。恐らくだがそれを見て羨ましくなつたんだろ〉

(……子供か……)

再びちらりと視線を戻した先にいたダイヤは、やはり深い深いため息をついていたのであった。

無事善子の羽も回収し終わり、それぞれが帰路についた。

陸は曜を後部座席に乗せ、我が家に向かつて走行中である。

変える際にダイヤを呼び止めた果南と鞠莉の真意は気になるが、そこは彼女との付き合いが長い二人に任せる事にした。

「……どーすんだ活動資金。予選体育着で踊るのお前等」

「……それだけは……、何としてでも避けないとね……」

あんな野暮ったいジャージで歌った日にはいい笑い者だろう。

その為にも何とかして資金を調達しなければならぬのに未だ功績は芳しくなく、これといった解決法は思いつかない。

「バイトするにも、シフトの日程によっては練習に影響出かねないしね……」
「うゝむ……」

このままでは予算が確保できず、かといって無理にバイトをすれば練習する時間がなくなってしまう。

ホントにもう、どうしてAqoursにはこんなにも試練が舞い込んでくるのだろうか。

「なんか美味い話はないのかね——」

文句をぼやくようにそう口にした時、ズボンのポケットに突っ込んでおいたスマホが音を鳴らした。

「……」

「ここ最近Aqoursメンバーからの着信ばかりだった事を無しにしても、この発信者は珍しい。」

「……」

『あーもしもし？ 陸ちゃん？』

スマホ越しに聞こえてくる女性の声。陸より少し年上くらいの声音だ。

この人は両親の友人の娘といった関係で、昔漁協の集會に連れ出された時に知り合った人だ。

今は確か千歌の家からすぐのシーパラダイスで働いていると聞いたが……。

「何すか？ 連絡よこすとは珍しい」

『それなんだけどさ。すぐ曜ちゃんと連絡とれる？』

「曜なら今一緒にいますけど」

『おー、相変わらず仲いいね。もう付き合っちゃえよ』

「何言ってるんだアンタ。で？ 用件とは一体？」

『あーそれなんだけどね。曜ちゃんもいるなら手間も省けてよかった。いやさー、幼稚園の団体さんが来る日にバイトの子が皆来れなくなっちゃってさ、二人で十人くらい友達誘って仕事手伝ってくれない？』

「……なんでそんな日にバイト全員休みなんですか。呪われてんの？」

『頼むよー！ 二人共前にバイトした事あるじゃん！ ちゃんとバイト代は出すって館長も言ってるからさー！』

「……との事だが、どうするよ曜」

途中からスピーカーモードに切り替えて会話を聞かせていた曜に意見を求める。

すると彼女は快く首を縦に振った。

「いいんじゃないの？ 丁度バイト探してたんだからさ」

『おおく……！ 流石曜ちゃんは優しいね〜！ 人数のアテはあるの？』

「ああはい。そこは問題なく」

『りよーかい！ じゃあOKって事で館長に伝えとくねー！』

そこでぶつんと通話は途切れ、陸はスマホをポケットにしまった。

「………思わぬ形で過去が今に繋がったな」

「何でもやってみるモンだよ〜」

とりあえずAqoursメンバーに今の出来事を伝えたところ全員OKとの事だったので、今日に引き続き次の休みも資金稼ぎに奔走する事となった。

八十二話　ダイヤらしいダイヤ

「いやー！　ほんつつつとにありがとね！　陸ちゃん曜ちゃん！」

沼津の公園で行ったフリーマーケットから数日。

全体での集合時間より少し早めに集合した陸と曜は、両手を合わせる若い女性に頭を下げられていた。

「まー、丁度バイト探してたところなんで至れり尽くせりですけどね」

「あんまり時間も取れない状況だったので、一日だけの手伝いはこつちとしても助かります」

「そう？　ならよかったです．．．．．それより陸ちゃん。どうして君以外皆女の子なのかなあ？　千歌ちゃんと果南ちゃんはギリギリ知ってるけど、それ以外は皆知らない子だぞお？　お？？」

にやけながらウリウリと肘で小突いてくる。この人は初めて漁協や観光課の定例会で会った日からずつとこんな感じだ。

一応あの場には親に連れてこられた多くの子供がいたはずなのだが、陸と曜は何故だか気に入られてしまい、こうして今でもたまに絡んでくるのだ。

まあ、今回はそのおかげでバイトにありつけたのだし、旧縁というのも案外捨てたものではない。

「別にそんなじゃないつすよ。これで用終わりなら俺等もう行きますよ?」

「おーおー照れちやつて〜! まーでも、陸ちゃんには曜ちゃんがいるもんね〜?」

「んなつ．．．!」

普通ならスルーすべきなのに、過剰反応してしまうのが色恋沙汰の話が苦手な渡辺曜である。

ついうっかり合わせてしまった曜の顔には目に見てハッキリ分かるほど赤みが差ししており、次に何が起こるのかは容易に想像できた。

「あー．．．．．」

悪い事したなー、と表情で語る彼女の視線の先。

そこには、曜全力のグーパンを右頬で受けた陸の姿があった。

(．．．．．ホント、何で毎回俺なんだ．．．．．ぐふつ．．．)

「まだ痛むんだが……」

へ……まあ、今回ばかりは同情する……

「何その普段は俺が悪いみたいない方……」

ぶつぶつ文句を言いながら、シーパラの出入り口を見渡す。

他の学年は皆来たのだが、三年生がまだ一人も顔を出さないのだ。

普通に考えてあのメンバーが何も言わずに遅刻するなんてことはあり得ないので、こうして探しに来た訳だ。

「フフフ……」

聞き覚えのある、悪意丸出しの笑い声が耳朶に触れ、自然とそちらの方にいた人物達を視

界に捉える。

そこにいたのは三年生組のダイヤ、果南、鞠莉の三人。どうやらここで何か話をしていたらしい。

「まさかダイヤが……」

「ダイヤちゃんって呼ばれたいなんて……」

建物の影に隠れて三人の会話に聞き耳を立てていると、先日ゼロが出した仮説と同じ様な事が聞き取れた。

(……姉ちゃん達も同じ結論に……)

〈多分、あの様子から察するにダイヤが自分から言ったんだろ〉

となると必然的にゼロの推測が正しかった事になる。

ダイヤの真意も気になるのでこのまま盗み聞きさせてもらおう——、

「誰ッ?!!」

とか思った瞬間に果南の顔が一瞬にして引き締まり、陸が隠れている場所目掛けて声を張り上げた。

(……なんで気付かれた?)

〈野生かよ。尽く人間離れしてんなアイツ……〉

どうやらアグルに変身して以降元々の野生の勘に更なる磨きが掛かったらしい。

逃げるのも手だが、何故か捕まりそうな気がしてならないので大人しく出頭するとうよう。

両腕を掲げ、降参のポーズを取りながら三人に顔を見せる。

「……陸」

「あー・・・・・・・・・・、その・・・、すみません偶然通りかかったもんで・・・」
「・・・・・・・・・・もしかして、聞いてましたの？」

プルプルと震えながらそう問うてくるダイヤの目は、明らかに笑っていない。

「はい」と答えたなら何をされるか分かったものではないが、嘘をつくのもそれはそれで怖い。一体どうしたもんか。

「大丈夫よ。りくつちもダイヤの様子がおかしい事には勘付いてたから」

「・・・・・・・・そんなに分かりやすかったですの？ わたくし・・・」

「『うん。すつぐく』』』

迷いのない四人同時返答にがくりと頭を垂れるダイヤ。

『最初は信じ難かったけどな。まさかお前がちゃん付けで呼ばれたがつてるたーな』

「別に呼ばれたい訳ではありません！・・・・・・・・ただわたくしだけ違うのは・・・」

「そんなのどうだつていいじゃん」

「よくありませんわ！　こんな形でメンバー間に距離があるのは、今後のためにもよくなくなく無いというか・・・」

羨ましがっているのは目に見えていた。ここまで分かりやすい子もそうはいるまい。

「まあまあ、とにかく皆で一緒に一日アルバイトだからさ♪」

「距離を縮めて、ダイヤちゃんって呼ばれるチャンスだよ？」

「ダイヤ……ちゃん……!」

キラキラと翡翠色の瞳を輝かせながらダイヤは虚空を望む。恐らくその眼にはダイヤちゃんと呼ばれている自分の姿が映っているのであろう。

そしてそんな事は果南と鞠莉も分かり切っているので、それを見て意地悪く笑っている。

「……べ、別にそんなの求めている訳ではありませんから〜」

「……説得力ねえ〜」

『フリマの日のあの妄想を見る限りじゃな……』

「っ!!」

何気なく零したゼロのその言葉に、表情筋ぶつ壊れたのではないかと思ってしまうくらいに顔を弛緩されていたダイヤが急に目を見開いた。

そしてぎぎぎ……と油の切れたロボットが如し動きで陸の方を向いてくる。

「……見たんですの? ……あれを……?」

「ヒイ……ッ!!」

蒼白になった顔色。瞳孔が開いたり閉じたり忙しい瞳。ヒクヒクと痙攣する口元。

一言で簡潔に言ううと滅茶苦茶怖い。

『え……つとまあ、偶然というか、成り行きというか……』

なんとなく事を察したらしいゼロが慌てて言い訳に移るが時すでに遅し。

次の瞬間にはダイヤの顔は真っ赤に染まり、戒めの強烈な平手打ちが叩き込まれていた。

「びぎやああああああ!!」

「何故俺ッ!!」

ただし、陸の左頬に。

くつきりと手形が残った左頬はそのままに、気を取り直して仕事だ。

「きつねうどん! お待たせしましたー!!」

元気な千歌の声が反響するお昼時の売店とフードコート。配属されたのは千歌、花丸、ダイヤ、陸の四人。

「うどん! もう一丁!」

「まるは麺苦手ずら……」

『見るのもダメなのか・・・?』

「ほら、のんびりしてる暇はありませんわよ!」

ダイヤ一人ではいささか不安だったので一応同じ仕事についてみたが、今のところは特に変わった事はしていない。しっかり者の、いつもの彼女だ。

先程の果南と鞠莉のアドバイスをもう忘れたのだろうか。

「はあくい・・・」

「ずらあく・・・」

「っ・・・!」

いや、忘れていたというよりは日常の条件反射で行動してしまったようだった。

二人からもらったアドバイスは、いつもダイヤは硬すぎなので、まずは話しやすい話題を振って親しみやすくなれ、との事。

「ち、千歌さん・・・」

「はい?」

「・・・きよ、今日はいい天気ですわね・・・」

(嘘だろあの人・・・)

ベタ過ぎて思わず両手で持っていた皿を落としかけてしまう。

よほどこういう事に慣れていないのか、頭はいいのにその手の発想は貧相らしい。

「・・・？ はあ・・・」

千歌の反応も微妙だ。

「花丸さん。うどんはお嫌い・・・？」

「うえええ・・・？」

花丸に至つては軽く怯えていた。

ダイヤとしては命一杯優しく話題を振つたらしいので、この状況が理解出来ずに視線で陸に救援を求めてきた。

（すみません仙道さん!! 思っていた反応と違うのですが!!）

（何で自然な流れでテレパシー使つてんだアンタ!! と、とりあえず二人共困惑してるので何か対処を・・・）

（わ、分かりましたわ!）

謎の超常現象に衝撃こそ受けたが、陸まで態度に出すと二人に怪しまれるので何とか堪える。

「何？ 何かあつた？ あつたずら？」

「分からないずら・・・けど多分・・・あれは・・・」

あれが思いつく限りの最善の対処法だったのか、ダイヤは今の状況では不気味としか捉えられない笑顔を作り・・・、

「うふっ……♪」

「すっごい怒ってるぞら〜〜〜〜〜!!」

結果、ダブルで誤解を植え付ける事となった。

「………ダメだこりゃ」

へアイツとんだだけ友達作り向いてねーんだ……

休憩時間。陸を連れて海を眺めることが出来る場所に來たダイヤ。

「………上手くいきませんわ」

そんなこんなしている内に時間はどんどん過ぎてゆき、バイト時間が残り僅かになると共にダイヤの「皆と親睦を深めよう大作戦」も終わりを告げようとしていた。

あの後もダイヤの奇行は酷くなる一方で、時に梨子とルビイの前で調教用の笛を駆使しアシカを操って見せ、時にちゃん付けで名前を呼んで曜と善子を戦慄させ、時に千歌と花丸の失敗を咎めなかつた事で二人を余計に怯えさせ、時に e t c . . . 。

とまあ怪しすぎる行動で後輩たちにはすっかり不信感を抱かれ、状況はダイヤが望んでいたものとはかけ離れたものとなってしまった。

今頃果南と鞠莉が誤解を解くと共に真実を伝えている頃だろう。

「……わたくしとは、一体何なのでしょうね？」

消え入りそうなダイヤの声は、海風に流されて霧散していく。

「……どうしました？ 急に」

「……昔から周囲のわたくしに対する印象は、真面目でちゃんとしていて、頭が良くしてお嬢様で……といったものでしてね」

その言葉が真実なのは日頃の千歌達の話聞いていれば分かる。実際にそういう噂を耳にした経験もあるので殊更に。

浦女での肩書や生徒への印象もそうなのだろう。生徒会長で。規律に厳しく、成績もいい、おまけにスクールアイドルも出来る雲の上の存在。ダイヤもその期待に応えるためにそうあるように振舞ってきた。

けれどもそれはいつしか脅迫のようなものに変わっていき、そうならなくてはいけなという思いに縛られ、いつの間にか周りとの距離が生まれていた……とダイヤは続けた。

「……本当は、これでも結構寂しがり屋なんですの……」

知ってる、皆知ってる、と喉まで出掛かったがぐつと飲み込む。

「結局、数多くこなしている習い事も、生徒会長も、スクールアイドルですらも、わたしの弱い部分を誤魔化すためのハリボテに過ぎなかったということでしょうか」

「そりや違いますよ」

即座にダイヤの言葉を否定し、真っ直ぐに彼女の瞳を見返す。

「・・・ハリボテなんかじゃないですよ。例え周りからの期待に応えるためのものだとし、ても、それに対するアンタの気持ちはハリボテなんかじゃなかったはずでしょ？ 習い事も、生徒会長も、スクールアイドルも、全部自分が好きだったから今までやってきた。違いますか？」

「・・・それはまあ・・・、そうですが・・・」

「じゃあいいじゃないですか。今までアンタが積み上げてきた黒澤ダイヤは、紛れもないアンタ自身だ。弱さのない人間なんざこの世にいない。しっかり者っていう強さも、寂しがり屋っていう弱さも、全部ひつくるめて黒澤ダイヤでしょ？ だから今の自分を否定しないでください」

我ながららしくない事を言っているなどはつくづく思う。

でも、こうやって自分の在り方に悩んでいる人は何故か放っておけないのだ。

・・・少し前までの自分がそうだったから。

「そういう・・・、ものなのですか？」

「そういうもんですよ。・・・それに呼び方がダイヤさんだからって、他の連中に距離を取られてる訳じゃないと思いますけどね」

「え・・・？」

「俺はダイヤさんは今のままでいいと思いますよ。厳しくて、頭硬くて、シスコンで、でもその中に確かに優しさもある。いっつも皆の事を大切に思ってくれている。・・・そんなアンタだから皆も尊敬してるし、頼りにしてる。・・・勿論俺も」

自分で言つてて恥ずかしくなってきたので目を逸らす。ダイヤの視線が妙にキラキラしてるのが余計に気恥ずかしい。

「だからその・・・無理に変わろうとする必要はないと思いますよ？」

最後の方は不格好になつてしまつたが、言いたいことは伝えられたし良しとしよう。

「・・・いいのでしょうか、今のわたくしのままで・・・」

「まあ、少なくとも俺は——」

『果たして、それで本当にいいのでしょうかね？』

「『うん』」

突如会話に割つて入つた声に思わず身構える。

邪悪に染まつた貫禄があり、聞くだけで苛立ちが募つていくのが分かる。こんな奴陸

の知る限りじゃ一人しかいない。

「・・・スライ・・・」

『久しいですね。仙道陸』

ダイヤを後ろに下げ、ブレスから取り出したゼロランスをメフィラス星人魔導のスライに向けて構える。

『ラツキョウ野郎・・・、一体何の用だ!』

『まあまあ、そう身構えなさらず。今回用があるのは貴方達ではありませんから』

そう言った刹那、スライの姿が一瞬にして消えた。

『何?!』

「ヒギヤアアア?!!」

瞬間背後から聞こえる悲鳴。振り返ればスライは陸の後ろに回り込み、そこにいたダイヤの肩を掴んでいた。

『少し、利用させて頂きますよ』

「え・・・」

『ダイヤツ!! そいつの目を見るな!!』

ゼロの忠告も僅かに遅い。紅く煌く奴の双眸と目を合わせてしまったダイヤの瞳は徐々に赤く染まっていく。

「あ……うあ……」

「ダイヤさん!!」

『安心なさい。そこまで深い催眠を掛けてはいません』

またしても一瞬。

視界一杯に白い甲冑を身に纏った宇宙人の姿が映ったと思うと、胸部に走った強烈な衝撃によって大きく吹き飛ばされてしまう。

「があっ……!」

『それでは、失礼いたします。』

スライが消えると奴の催眠に掛かったダイヤはゆっくりと顔を上げ、いつの間にか手に持っていたリモコンらしき物のスイッチを入れる。

『○△□——!』

それによって操作されているものは海中に潜んでいたらしい。

巨大な水柱を立てながら巨大なランチャー砲を備えた漆黒のロボット——キン
グジョーブラックがその姿を現した。

八十三話 硬度十の誇り

「ダイヤ……ちゃん？」

時はほんの少しだけ遡り、状況を見かねた果南と鞠莉が後輩達を集めていた。

「皆ともう少し距離を近づけたって事なんだろうけど……」

「それで……」

「じゃあ、あの笑顔は起こっている訳じゃなかったずら？」

二人からダイヤの奇行の真意が明かされ、とんでもなく怒らせてしまったのではないかと思っていた千歌と花丸は深い深い安堵の息をつく。

「でも、可愛いところあるんですね。ダイヤさん」

「言ってくればいいのに」

「でしよ〜？」

「だから、小学校の時から、私達以外はなかなか気付かなくて……苦労したものの
グース」

いつの間にか作られていた理想像と期待を押し付けられ、ダイヤもそれに答えようとするあまりどんどん周りとの距離が開いていった。

「ほんととは凄く寂しがり屋なのにな〜」

果南が先程ダイヤ自身が陸に自白した事を口にした瞬間、地面が大きく揺れた。

「な・・・？ 何?!!」

「あつ！ あれ！」

『デエエエヤ!!』

『○△□——!!』

顔を上げた皆の視界に映ったのは、シーパラダイスのすぐ近くの海上で激突する青い巨人と黒いロボットだった。

『ガルネイトバスタアアアアア!!』

闘魂の爆炎が、キングジョーブラックにヒットすることなく宙を駆け抜けていく。

『チツ・・・』

「・・・コイツもダメか・・・」

このキングジョーブラック。強化機体だけあって以前戦ったキングジョーとは比べ物にならない程強い。

通常形態にしろ、ルナミラクルにしろ、ストロングコロナにしろ、尽く全ての攻撃が読まれてしまう。

「・・・なあゼロ。コイツ・・・」

『ああ、操作してんのは間違いないくダイヤだろうな。・・・自律型にしては動きが器用すぎる』

先程まで陸がいた場所では、瞳を真っ赤に染めたダイヤがリモコンらしき物を動かしている。

スライの言葉からして、操られているのは間違いないだろう。

「・・・じゃあ何だ？　ダイヤさん、今までの俺達の戦いを事細かに覚えてるつてのかわ？」

『・・・にわかには信じがたいが・・・、そうとしか思えないな。・・・ホントに頭いいんだなアイツ』

思ってみれば普段ポンコツなだけで、ダイヤは生徒会長で成績もよい優等生だった。頭が悪くない訳ないのだ。

仮にダイヤが今まで自分の目で見たゼロの戦闘を全て記憶していたら、かなり対抗手段が限られてくる。

通常形態はおろか、日頃から頻繁に使用しているルナミラクル、ストロングコロナ、ゼロビヨンドは通用しないと考えた方がいいだろう。

『………だつたらー！』

駆け出したゼロが鈍色の鎧を身に纏い、ウルティメイトゼロと成りて攻撃を仕掛けに掛かる。

使用回数が少ないのはウルティメイトゼロ、ゼロダークネス、シャイニングゼロの三形態。

反動が大きいシャイニングは最終手段とし、とりあえずは善子以外の前で戦闘を行っているウルティメイトゼロの出番だ。

『ブエエエエー！』

『○△□———↓！』

切っ先が描く剣閃が幾筋も繰り出されるが、キングジョーブラックは機体を四つに分裂させて器用にそれをかわしてしまう。

『むぎい……、ちよこまかと………！』

以前戦ったキングジョーよりも分裂したUFOの反応が早い。

その強化機体という事に加え、ダイヤという直接操作している者がいる。高スペツクな機体にダイヤの頭の良さ。思わぬベストマッチだ。

その証拠にウルティメイトゼロの動きも見切られていつている。

『クソツ．．．、こうなりや単騎に集中砲火だ！』

全体の制御装置のある頭部パーツに狙いを定め、ウルトラ念力で操るゼロスラッガーと同時に剣撃を連発。

すると四機のUFOのフォーメーションが崩れ、狙い通り頭部パーツが集団から外れる。

『ソードレイ．．．．．ウルティメイトゼロ!!』

白銀の剣を振るうと共に解き放った光の刃が回転しながら頭部に迫る。

が、

『なっ．．．、何!!』

ダイヤにはそれすらも見切られていたらしい。

キングジョーブラックは素早く全機合体すると、右腕のランチャー砲——ペダニウムランチャーから砲弾を放って光刃を相殺してしまった。

そして更に、

『ぐっ．．．．．おおおお．．．．．』

舞い上がった爆炎の向こうから幾つもの厚い弾幕が殺到し、飛翔するゼロを海中へと叩き落した。

『ちい……、陸！』

「……ああ」

こうなつたらもう手段は一つしかない。

『ダアアアアアラッ！』

海中から漆黒の巨人が飛び出し、荒々しくキングジョーブラックに突進を仕掛ける。

「こんのっ……、オウラア！」

ランチャー砲を掴み取るとそのままブンブン振り回し、今のお返しだと海の中へと放り投げる。

「……行けそうか？」

「ああ、少なくとも前みたいな感覚はない」

ロボットなのに海水を物ともしないキングジョーブラックが起き上がったのを確認した後、ゼロは急降下を開始した。

今の姿はゼロダークネス。この状況では切り札の一つだ。

皮肉な事に、過去全て暴走しているためにまともな戦闘データがない。よもや黒歴史がこんなところで役に立つことになろうとは。

「……………」

今までグレンやミラーナイトと特訓してきた成果が今出る。こんな時のための特訓だったのだ。

一度はダイヤを殺めかけたこの力で、今度はダイヤを救う。

『シヤア！』

再び分裂される前に掴みかかり、その黒いボディにパンチキックの連続コンボを叩き込む。

だが硬い装甲に素手による打撃が通用するはずもなく、逆に殴る度にダメージを受けているのはこつちだ。

『ザアアア！』

打撃がダメなら斬撃だ。両腕にゼロスラッガーを構え、装甲の薄い関節部分を重点的に狙って振るう。

『○△□——！』

『グオオオオ！！』

早く、的確に繰り出していた斬撃の一瞬の隙を突き、キングジョーブラックはその場で回転しながら弾幕を撒き散らしてくる。

「ちつ……」

弾を処理している間に宙に飛び上がられ、すぐさまその後を追うゼロ。

『ゼアアアアア!』

『○△□——!』

ダークゼロツインシユートで撃墜を試みるも、先程と同様に身体を分裂されてかわされてしまう。

「空中戦は慣れねえ……」

元々飛べない人間である陸がそう簡単に空を飛ぶ感覚を身に着けられる訳がない。

ゼロ自身が飛ぶよりもかなりよろよろと危なっかしく飛翔しながらUFOの一体へと接近していく。

『ハアア!』

腕。パーツ目掛けて放ったデスシウムショットはあっさりと回避され、何もない虚空を切り裂くのみ。

だったらと別の攻撃に転じ右足を振るうがそれも命中しない。

「ああもう! 虫かよコイツ!」

へ……一瞬でも動きが止まれば勝機はあるんだが……、つて! あぶねえ!」

『フツ!!』

いつの間にか四機のUFOに囲まれ、放出された電撃により拘束されてしまうゼロ。

『○△□—↓!』

『グアアアアア………!!』

ダイヤの操作で合体したキングジョーブラックが、再び海中に叩き落された黒い巨人目掛けてペダニウムランチャーを発射。

その威力に水中にも拘らず大爆発が起き、モロに喰らったゼロのカラータイマーも点滅を始めてしまう。

「つ……、クソが………」

〈強え………〉

規格外の強さを誇るキングジョーブラックを前に、思わず戦慄を禁じ得ない陸だった。

(………わたくしは一体……、何をしているのでしょうか………?)
うまく頭が回らない。

意識はあるのに、それとはまた別の意識に思考が支配されているようで、ウルトラマンゼロを倒すという事しか考えることが出来ない。

どうして彼等を倒さなくてはいけないのか、それすら考えることも出来ず、自分はキングジョーブラックを操作している。

(・・・わた・・・くし・・・は・・・)

自分自身何がしたいのかも分からない。

先程までは後輩と仲良くなるうとして空回りを繰り返し、今となつては自分の考えすらも見失っている。

自分は弱い。胡乱な思考の中、これだけはハッキリと分かった。

——今の自分を否定しないでください。

(っ・・・!!)

不意に、優しい声音が脳裏を駆け巡った。

『デエエエヤアアア!!』

すぐ近くで自分の操るロボットがゼロと衝突する音が翳みがかつている意識に響く。

ハッキリしない思考でも、ゼロのあの姿には自然と身体が反応する。

ゼロダークネス。かつて自分を殺しかけたゼロの、そして陸の闇だ。

「……………うあ……………」

ズキリと頭が痛んだ。

それと同時にトラウマとも言える記憶が思わず閉じた瞼の裏に投影される。

「……すみませんでした……」

恐らくA q u o r s 全員、今後忘れる事はないであろう言葉も。

今思えば、あの時の陸も今の自分と似たような状況だったのだろう。

目先の事に必死にあるあまり本来の自分を見失い、結果周囲を大きく混乱させた。

『ダアアアア！ ハッ！』

それでも彼は自分を貫く事を辞めなかった。

たとえ孤独になろうとも、戦う自分自身だけは信じ抜いていた。

「……自分……」

「あ……う……」

押し込められていた思考が徐々に広がっていくのを感じる。

「……わ……た……は……」

「……自分も、自分が貫いてきた黒澤ダイヤを信じ抜かなければ。」

「……わたくし……は……」

心を強く持て。ダイヤモンドが如き頑強な強い心を。

皆が信じた、自分らしくあるために。

「「「わあああああああああ!!」「」」」」

ダイヤの瞳が翡翠色に戻り始めたその時。

施設の方から悲鳴や歓声が入り混じった幼い声が聞こえた。

(・・・なん・・・ですの・・・?)

痛む頭を動かして視線をやると、今日団体でシーパラダイスに来ていた幼稚園児達がそこら中で走り回っている。

ある者はその場で泣き続け、ある者は逃げ惑い、また一部の野次馬園児は巨人とロボットの戦いの場へと近づいて行っていた。

「駄目! そっちは危な——うあつ・・・!」

園児を止めようとした千歌も地響きによって転倒してしまった。

千歌だけでなく他の A q o u r s の皆もどうしたらいいのか分からないといった様子で慌て、ルビイに至っては泣いてしまっている。

「っ・・・!」

翡翠色が元の光を取り戻した時。

何かを決意した顔でダイヤは駆け出し、かしゃりという音と共にリモコンは地面へと落ちた。

——ピイイイ——!!

地鳴りも、悲鳴も、歓声も。何物にも負けず。

唐突に響き渡ったその音は、高い響きでその場全員の鼓膜を打った。

「さあ皆！ 注もお——く!!」

凜とした声の音源、スタジアムのステージ上に立つ一人の少女。

スライの催眠から抜け出した黒澤ダイヤは、混沌が支配するこの場を制する一声を上げたのだ。

「園児の皆！ 興奮したり、怖かったりするのは分かりますが、こんな時こそ皆で協力し合わなければブツブツ！ ですわ！」

突然の登場にA q o u r sの皆が呆気にとられる中、ダイヤは巧みに園児達を誘導していく。

そして見事全ての園児を集める事に成功し、柔らかな笑顔でこう言った。

「さあ！ 大きな声で、ウルトラマンを応援しますわよ!!」

——— 頑張れえ ——— !!

『フツ………?』

集団による統率の取れた応援に自然と意識が吸い込まれる。

見ればそこにはシーパラダイスに来ていた幼稚園児達、そしてそれらを牽引するダイヤの姿があつた。

「ダイヤさん!!」

〈洗脳が解けたのか……!〉

黒い巨人と視線が重なつたダイヤは、いつも通りの凛々しい表情で力強く頷いた。

自分を殺しかけた者への恐怖など、微塵も感じさせない様子で。

「へっ……、やつぱ強い人だよ。ダイヤさんは!」

改めて構え直し、操縦者がいなくなつた事で動きがおかしくなつたキングジョーブラックへと肉薄していく。

『ジュヤアア!!』

遂に届いた斬撃は頑丈な装甲を切り裂き、闇の放出に乗せてその身体を盛大に薙ぎ払つた。

続くコンボも次々と黒いロボットを捉え続け、先程までの劣勢が嘘のように流れがこちらに来る。

〈殴ってばっかじゃキリがねーぞ〉

「分かってるよ。その為の特訓だろうが！」

二本のゼロスラッガーを融合させ、黒光りするゼロツインソードを両腕で装備する。

グレン達との特訓で学んでいる事は二つ。

一つは体術。これがなければ戦闘など始まりもしないから。

もう一つは・・・、剣術だ。

ゼロはゼロスラッガーを始め、刃物を使った攻撃パターンが多い。

ゼロビヨンド時にもビヨンドツインエッジやツインギガブレイク等の武器や技が存在するため、陸も武器を扱えるようになる必要がある。

その過程で編み出したのが、ゼロダークネスオリジナルの剣技だ。

「アスシウムスライサーアアアア——！！」

『アエエエヤアアアアア！！』

眩い漆黒を纏った大剣が振り抜かれ、回転する巨大な刃が打ち出される。

自身の身の丈を遥かに超える闊刃を受け止め切ることが出来なかつたキングジョーブラックは、身体を両断されて真後ろに倒れ込む。

そして次の瞬間には、ネジやら大量の部品を巻き散らしながら大爆発を起こした。
『フ……』

大喜びする園児達の中であただ一人静かに微笑む少女に向けてサムズアップを向ける。
それを見たダイヤもまたサムズアップを返してくれたのを確認し、ゼロは大空へと飛び去って行った。

「……ご迷惑おかけしましたわ」

「いえいえ、お気にせず」

『そーだそーだ。全部あのラッキョウ野郎がワリーんだ』

バイト時間も終了し、夕闇が辺りを包み込み始めた。

「いいえ。それだけでなく、わたくしのワガママで随分と苦勞を掛けてしまったので……」

ダイヤが誘導してくれたおかげで、園児達に怪我はなかったそうだ。

これも日頃生徒会長として全校生徒や A q o u r s の問題児どもを纏め上げている賜物だろう。

「・・・そんで？ 答えは出たんですか？」

「ええ。・・・結局、わたくしはわたくしでしかないのですわね・・・」

「それでいいと思います」

施設の入り口で話していた二人の会話に割り込む声が一つ。

振り返れば、同じくバイトを終えた他の A q o u r s 八人が揃ってこちらを見ていた。

「私、ダイヤさんはダイヤさんでいて欲しいと思います」

先程果南と鞠莉から彼女の本心を聞いた千歌が一人前に出て言葉を紡ぐ。

「確かに、果南ちゃんや鞠莉ちゃんと違って、ふざけたり、冗談言ったり出来ないなって思う事もあるけど・・・でもダイヤさんはいざという時頼りになって、私達がだらけている時は叱ってくれる。ちゃんとしてるんです！」

皆だつて考えている事は同じなのだ。

厳しくて、頭が硬くて、シスコンで、けれども確かに頼りにされている。それが黒澤

ダイヤだ。

「だから皆安心できるし、そんなダイヤさんが大好きです！ ね？」

千歌の求めた同意に皆首を縦に振る。

「だからこれからもずつと、ダイヤさんでいて下さい！ よろしくお願いします！」

「……………ほら、別に焦る必要なかったでしょ？」

台詞を投げかけると、ほんの僅かに瞳を潤ませるダイヤが視認できた。

誤魔化すようにホクロを掻き、穏やかに綻んでいる。

ちなみに果南と鞠莉によると、ダイヤは嘘をつく時ホクロを掻く癖があるそう。

「わたくしは……………、どちらでもいいんですよ？ ……別に……………」

その言葉が完全な本心でない事は、その事を知らない皆でも分かっているだろう。

だからこそ、声を揃えてこう呼んだ。

「せーのっー！」

—————
ダイヤちゃん!!

「……………本当に、今日はお世話になりっぱなしでしたわね」

「……………そんな大層な事やった覚えはないっすよ。俺がやりたいようにやっただけです」
「ふふ……………、貴方らしいですわね」

解散後、改めてダイヤに呼び出された。

何でも話があるとかそんな。相手がダイヤだというだけで内心ビクビクしてたのは内緒だ。

「……………それで？ 一体話とは何ぞで？」

「……………いいえ……………、大したことではないのですが……………」

頬に朱を差し、妙にもじもじしているのが気になる。お腹でも痛いのだろうか。

またおかしくなったのかと陸が不安になっていると、ダイヤは言葉を続けた。

「その……………、名前でお呼びしてもよろしいでしょうか？」

「は？」

予想の八十九度くらい斜め上をいく申し出に、思わず間拔けた声が出てしまう。

「えつとその……………、理由をお聞きしても？」

「……………それは……………その……………、貴方だけ苗字呼びというのも、少し思うところがありまして……………」

戸惑いつつも聞き返すフレーズをひり出すと、ダイヤはそう答えた。

そういえばA q o u r s 加入以降、ダイヤはそれ以前は苗字で呼んでいた千歌達を名前と呼ぶようになった。

きつとそれは彼女なりのケジメだったのだろう。距離が近くなつた以上、他人行儀ではないけないと。

恐らく今回の申し出もそういう理由か。

「……別に俺が許可出すようなものでもない気がしますけどね。どうぞ何なりと」
へ……うん。やっぱスゲーよお前。その鈍さはもはや尊敬に値するぜ」

ゼロの言っている事は相変わらず理解不能なのでスルーだ。

「……とりあえず戻りませんか？ アイツ等待ちくたびれてると思うんで」

日はもうとつぷりと沈んでいる。連絡船は一度乗り遅れると次便までかなり感覚が開いてしまうので逃すのはマズい。

「ええ、そうですわね………陸さん」

割と満更でもない響きを背中越しに感じつつ、船着き場へと向かう。

なおこの後、二人で何してたんだと散々問い詰められたのはまた別のお話。

八十四話 刻印の出会い

いくら天候が悪かろうと、ラブライブは待つてはくれない。

「果南ちゃんと梨子ちゃんはウチの車で帰ろう。陸ちゃんと曜ちゃんはー？」

「ミラーナイトに力使わせるから問題ない」

だから今日も負けじと練習！ のつもりだったのだが、流石に雨が強くなってきたので帰宅時の安全も考えて本日はここで解散となった。

「善子ちゃんは？」

メンバーが各々車に搭乗する中、ただ一人傘を差したまま動かない善子。

「嵐が堕天使の翼を揺さぶる。．．．．秘めた力がこの羽に宿る！」

「ふざけてる場合じゃないよー」

「拠点は至近距離にあります。いざとなれば瞬間で移動できますので」

他の皆と違って善子の家はここの近辺。徒歩でも雨が酷くなる前には帰宅できるだろう。

その事は皆理解出来たらしいので、それ以上は何も言わずに車ごと走り去って行く。

「「バイバイ」」

「シャイニー♪」

「「ご機嫌よう」」

「事故るなよー」

「よーしこー!」

「ヨハネよ!」

お決まりのツツコミの後全員がこの場から去り、一人になった善子は帰路を進み始める。

ふと見上げた空は、これでもかというくらい曇天という言葉が似あう程曇っていた。

「胸騒ぎがするこの空………、最終決戦的な何かが始まろうと——」

刹那善子の墮天使芸を邪魔するように突風が吹き、手に持っていた傘が飛ばされて言ってしまった。

「「こらあ!」 待てえ! 待ちなさい! 待つのです!」

素の善子から墮天使ヨハネと色々なパターンで制止しようとするも、傘は風に煽られどんどん善子から離れていく。

ある程度距離が開いたところで傘は止まり、ゆらゆらと怪し気に揺れ始めた。

「何……？ その動き。もしかして、何かが私を導いて——うにやあ!!」

またしても風により墮天使芸は阻まれ、おまけに傘も吹き飛ばされてしまう。

つくづく運が悪いなと考えながら、善子は自販機と塀の間に挟まった自分の傘を手取る。

「ん？」

ふと何かの気配を感じ、傘が挟まっていた場所に視線を戻す。

「……………ふふ……………」

その正体を確認した善子は柔らかに微笑み、せっかく回収した傘をその場所に置き直した。

「今日こそ決めないと!」

後日十千万。千歌の部屋。今ここで、ライブ予選の作戦会議が行われていた。

「もう時間もないんだよ」

司会進行の果南の一声で、皆頭を働かせ始める。

「分かっているぞ……………」

「でも、テーマって言われると……」

歌詞にしる曲にしるダンスにしる衣装にしる、それらを制作する際には統一された一つのコンセプトが必要となる。

もう何度もこの作業は繰り返してきているのだが、やはり悩ましいところだ。

「かといって、暗黒と言うのはあり得ませんけどね」

「どうしてよー！」

過去の墮天使PVという前例がある為、出来る限りそのテーマは避けて通りたい。と
いうか容認できない。

「墮天使と言えば暗黒！ A q o u r s と共に歩んだ墮天使ヨハネの軌せ——」

「やっぱり輝きだよー！」

「聞きなさいよー！」

さも当たり前のように千歌に遮られ憤慨する善子。

だがそれすらも触れてもらえず、話は進行していった。

「まあ、輝きってというのは、千歌が始めた時からずっと追いかけてきているものだから
ね」

『説明会の時も同じようなテーマで歌詞書いてなかったか？』

「輝きに関してならいくらでも書けるよー！」

いくらでも書けるのならば普段あんなに作詞で苦しんでいる事もないと思うのだが。

「ですが、Aqoursの可能性を広げるためには、もっと模索が必要ですよ」

そう言ってダイヤは自身の携帯電話を開き、その液晶画面を見せてくる。

そこに映されていたのは二人の少女によるライブ映像だった。

『お、子娘共じゃねーか』

「Saint Snowですよ。いい加減名前を覚えなさい」

冷静にダイヤがゼロに突っ込む。

Saint Snowと言うと、Aqoursが東京に行く度に会っている北海道の姉妹スクールアイドルの事だ。

「ええ!! これSaint Snowさんなの!!」

以前東京のイベントで見せた『SELF CONTROL!!』とは打って変わった雰囲気のパフォーマンスで、特に激しいダンスはなく歌が主体となっている。

「二つに止まらない多くの魅力を持っていなければ全国大会に進めませんわ」

「そうだね。次はこの前突破できなかった地区大会」

「何か新しい要素が欲しいよね……」

とは言ってもそう簡単に思いつくものでもない。

三人寄れば文殊の知恵というが、九人集まってもこのザマなのだ。少しその諺の信憑

性が薄れてくる。

「むう……」

「くう……」

『あ?』

全員で頭を捻る中、緊張感のない寝息が耳朶に触れた。

音源に視線を流してみれば、アニメ目がプリントされた眼鏡をかけて居眠りをこいている鞠莉が確認できた。

「またこんな眼鏡で誤魔化して……あれ?」

呆れ気味に梨子が眼鏡を取ると、そこにはぼつちりと見開かれた鞠莉の目が。

と思ったたら、すぐに二つの目は剥がれ落ちてしまう。どうやらシールを張っていたらしい。

「待てば海路の日和ありだつて」

「はあ……」

「鞠莉ちゃん、長い話とか苦手だから……、ね? 善子ちゃん?」

「ワン!」

明らかに返答がおかしい。

「わあっ!?」

明らかに千歌の反応もおかしい。

その違和感に、今度は全員の視線が善子の方へ移る。

そこにいたのは、もはや善子の面影など微塵もない獣。ふさふさの体毛に、やたらと大きい凶体。

つまりは高海家の愛犬、しいたけである。

「よ、善子ちゃんがしいたけちゃんに!!」

「そんな訳ないでしょう!!」

「ふあああ・・・、騒がしいデスねく・・・」

ちよつとした混乱が駆け巡る中安眠を妨害された鞠莉が目を覚まし、呑気に身体を伸ばす。

『・・・いつの間に消えたんだアイツ・・・?』

「あ、善子ちゃんからメールずら」

突然の怪奇現象に驚いていると、最近買い替えたばかりだという花丸のスマホに善子からの連絡が入る。

「天界の勢力の波動を察知したため、現空間から離脱・・・」

「・・・どゆ事?」

「要するに、帰るって事ずら」

「全く、わたくし達に一言も言わずに……」

「一言も言っていないって言えば……、ゼロ、今日陸は？」

『ああ？　なんか今日は学校の方で用事があるとか言ってたぞ？』

「それも早く言いなさいな……」

(……ゼロがいないと静かだな……)

体育倉庫整理などと言う明らかに面倒事を押し付けたようにしか思えない傍迷惑な頼まれ事を終え、自転車で軽快に帰路を疾走する陸。

時間帯的にも今日はA q o u r s の皆は解散しているだろうし、まっすぐ家に向かうとしよう。

(……何だかんだ一人になるのは久々な気がする)

この頃は常にA q o u r s の誰かしらと、そうでなくてもゼロが体内に宿っていたからこうして一人になる事はまずなかった。

これは是非とも久々の平穩を味わいたいところだが、こういう時に限って誰か知り合

いに会ってしまふのが陸の悲しい体質だ。

そう思った矢先に、制服姿のままサングラスを掛けてホームセンターにおかしな挙動を取る怪しき全開の少女が視界に入る。

「……………何してんのお前……………」

「うにゃあッ!」

陸が声を掛けるとその少女——津島善子は新種のネコ科動物みたいな奇声を上げながら飛び上がった。

「何買ったんだ?」

「それは我が眷属の蠢きし魔城に着いてからのお楽しみよ。リトルデーモン」

「頼むから日本語で喋ってくれよ」

珍しい奴を荷台に乗せながら自転車漕ぐ。

あの後なんだかんだで善子の買物に付き合わされ、その流れで自宅まで送っていく事に。

何でも見せたいものがあるとか言っていたが、一体なんだというのだろうか。

「つかお前、打ち合わせはどうした。もうそろそろ決めないとマズいんじゃないやなかったのか?」

「進みそうもなかったからこつそり抜け出してきたわ。用事もあつたし」

「それが今の買物だど?」

「ええ。天界議決によつて定められし墮天使ヨハネの生業……といつたところかしら?」

「天界議決つて仕事斡旋してくれんのか……」

要するに必要なものがあつたから買いに行つたという事らしい。仕事というよりは義務のようだ。

「つか、天界追放されてんのに天界議決に従うんだな」

「つ! そ、それは……」

設定の矛盾にツッコまれ、善子は不貞腐れて頬を膨らませる。

そこから二十分ほど他愛のない会話を続け、自転車は善子の住むマンションの前へと辿り着いた。

「お疲れ様。悪かつたわね。付き合わせて」

「気にすんな。曜に比べりやまだ軽かつた」

「………曜泣くわよ」

「アホ。アイツはお前より鍛えてるから筋肉あるんだよ。お前も今はもやしっ子だけど、もうちよと鍛えないと大変な事になるかもな」

「ど〜いう意味よ〜!!」

荷台に座ったまま墮天流鳳凰縛。普段なら難なく回避できるものを、この状況に限っては背後という死角＋ゼロ距離のダブルコンボでロクな対応が出来ず、あっさりと捕縛されてしまった。

「ぬぐ………ん?」

引き剥がそうと抵抗をしていると、ふとある人物が視界に入る。

マンションに立て付けられた小さな祠の前。そこに置かれたゲージの中を覗いている紫檀色の髪を持つ少女。

本来はここにはいないはずの、桜内梨子だ。

「……おい善子。あれ」

「何よ………って、ああ!!」

善子も梨子の存在を確認するや否や陸から離れ、今度はそちらの背後に移動する。

「むうううう!!」

そして何を思ったか、いきなり梨子の口を塞いでゲージから引き離し始めたではない

か。

善子は細身の割にはやけに力が強いので、凡庸の極みたるもやしつ子である梨子は必死の抵抗空しくずるずると引き摺られていく。

「やめんか」

普段花丸がやっているように手刀を落とすと善子は止まった。

「え？ 善子ちゃん!! 仙道君も・・・」

「よー、桜内」

「ヨハネー！ 何で梨子がここにいるの？」

普通に挨拶はしたがそれは確かに疑問だ。

彼女の家は千歌の家である十千万のお隣、つまり沼津にある善子の家からはかなり距離があるはずだ。

きょうはこつちでの練習もないので、ここにいる理由もないと思うのだが。

「いえ・・・ちよつと忘れ物を届けに。この前善子ちゃんのお母さんが家に忘れていったっていうから・・・」

梨子が鞆から取り出したのはスマートフォンだった。無駄にデコられている善子の物とは違うので、言葉の通り彼女の母親の物だろう。

「で？ 今桜内何見てたん？」

「ああえつと……、その中に何かいるな……」

梨子が指さすのは祠の前に鎮座しているゲージ。

確かにその中で何か潜んでいるのが分かる。

「なあ善子。このゲージお前が置いたの？」

今さっきの善子の反応から察するに、これを置いたのは間違ひなく善子だ。

となると必然的にゲージの中に何がいるのかも知っている事になる。

「ええそうよ。アンタには見せるつもりだったし、丁度いいわね」

そう言いながらレジ袋を探り、中から缶詰らしき物を取り出した。パッケージのデザインからしてあれはドッグフードだろう。

「ほら、ご飯だよ」

開いた缶詰をゲージの前に置き、開かれた扉から出てきたものは――、

「……あら、可愛い……」

その正体に拒絶反応を起こした梨子が陸の背後に隠れる。

しかし梨子の怯えた視線など一切意に介する様子もなく、檻より解放されし獣は与えられた餌を一心不乱にがつついていっている。

「慌てて食ばなくていいのよっ」

それを見て微笑む善子の表情はまるで聖母のようで、日頃墮天使がどうのこうのとか

言っている奴と同一人物とは思えない。

だが根はA q o u r sで一番いい子の善子だ。きっとこつちが素の彼女なのだろう。

「……善子ちゃん……それ……」

「……見て分らない？ 犬よ」

「……よね」

そう。今日の前にいるのは桜内梨子の苦手なものナンバーワンの犬である。

天敵の存在を改めて認識した梨子が更に顔を引きつらせると同時に、善子はその犬を抱き上げる。

「あら……、可愛い……」

不意に善子が立ちあがり、一步退く梨子。

「へへ……、可愛いね……」

善子に一步踏み出され、更に後退りする。

「つ……！ 可愛いよ……？」

「……」

明らかに梨子が距離を取ろうとしているのが気に喰わなかったのか、善子はむつとしながら犬を地面に下すと、

「行けえ！」

梨子を指さし、そう指示を飛ばした。

「アン！」

「ふあっ!! ふわああああっ!!」

「ひでえなお前」

わんこは命令通りに地面を蹴り、大慌てで逃げる梨子の跡を追いかけまわしている。

一通り逃げ回った後Uターンしてこっちに戻ってきたので、一人と一頭の間で割つて入ると犬の方を回収する。

「・・・本当に苦手なのね」

肩で息をする梨子に、こうなつた元凶である墮天使は悪びれもせず、に歎息した。

「拾つた？」

「違う出会つたの。邂逅・・・・・・・・Destinyが二人を巡り合わせたの」

「つまり拾つたのか」

食後のミルクを与えられた犬の頭を撫でながら素っ気なく突っ込む陸。

今のご時世捨て犬というのも珍しいものだろう。てつきりもう漫画とかそのへんのみが存在かと思っていたが、まさかお目にかかる日が来ようとは。

「それで……、飼う事にしたのね？」

「……………」

「……………」

何故か善子は無言のまま返事を返さない。

「……違うの？」

「……私の家……、動物は禁止で……………」

「じゃあ何で拾ったお前」

考えてみればマンションなので当たり前といつちや当たり前だ。

しばらくの沈黙の後、善子は口を開いた。

「……………お願いがあるんだけど……………」

「聞かない!!」

「まだ何も言っていない!」

とは言っても、この状況と流れからしてなんのお願いかは大体察しが付く。

当然梨子もそんなお願い聞くまでもないと即刻拒否し、それを聞いた善子はむくれながらミルクを飲み終えた犬を抱きかかえる。

「……どう考えても無理でしょ……」

「ほんの少しだけでいいの！ この子の生きていく場所は私が見つけるから！」

立ち上がったって訴えるも、警戒度Maxの梨子はどんどん善子から距離を取ってしま
う。

「そうだ！ 花丸ちゃんカルビイちゃんに頼んだら？ 二人なら……」

「駄目！ ずら丸の家もルビイの家も許可取るの面倒みたいだし……」

二人共結構歴史ある家の子なので、そういう所で動物を飼うというのはやはり難しい
のだろう。

「鞠莉ちゃんは……？」

「ホテルでしょ？」

鞠莉の家は高級ホテル。動物なんて当然厳禁だ。

「果南の所もお店があるみたいだし、千歌の所はしいたけもいるし……」

二人共飼えない事は無いのだろうが、鞠莉と同じく実家が何かしらの店を営業してい
る彼女達に預けるのは少し気が引ける。

「だったら仙道君は？」

「預かれない事はないが……、グレンがいるから燃やされかねない」

理屈で止まらない馬鹿が居候している陸の家も無理だ。

「・・・じゃあ、曜ちゃんとか・・・」

「アイツん家も無理だな。小さい時に犬飼いたいって言って撃沈したらしい」

「・・・ていうか、そんなに嫌なの？」

自分以外誰も預かれない事が判明し、完全に逃げ道を塞がれてしまった梨子。

「嫌って言うか・・・」

この状況でもなおおぼれる彼女に、善子は再び犬を地に下し、

「行けえ！」

「ウアン！ アンアン！」

「ふあああああ！！ ひいひいひい！！」

二度目の追い掛けっこが勃発。

一週目と全く同じルートを通りながら戻ってきた一人と一匹を保護すると、犬を抱き

上げた善子は最後の懇願に移った。

「とにかくお願い！ この子は墮天使ヨハネにとって、神々の黄昏に匹敵する重大既決

事項なの！」

(くっ……、まさか逃げられるとは……)

宇宙空間を飛行する宇宙船の中。不測の事態に直面したとある宇宙人が血相を変えて必死にあるものの行方を追っていた。

(……太陽系第三惑星……地球か。おのれ……逃がさんぞ……！)

首から下げたペンダントを開き、その中にしまつてある写真を見つめた。

写真に写されているのは、黄色い釣り目と長い紫檀色の髪が特徴的な少女の姿。

(……貴様はこの手で……殺す……！)

八十五話 トリコリコPlease

「……………はあ……………、どうしよう……………」

自転車を押しながら、項垂れる梨子の隣を歩く。

彼女が腕から下げたゲージの中では、先程まで善子に抱かれていた犬が元気にはしゃいでいる。

結局あの後彼女に根負けし、しばらくの間その犬を預かる事になってしまったのだ。

「……………まあ、善子の方も早めに手は打つて言ってたし、んな気に病む必要はねーんじゃないの?」

「でも……………」

しかし善子も中々に酷な事をしたものだ。まさか犬が苦手な梨子に犬を預けるとは。

別に無理にA q o u r sメンバーに頼ることもなかった気がするのだが。他の友達などいくらでも……………しまった彼女は友達がいらない事で有名な津島善子だった。

「愚痴ばっか言っても仕方ねーし、とりあえず家戻ったら? 送ってってやるから、次

のバスまで結構時間あるだろ」

「・・・うん。ありがと」

陸が自転車に跨ると、梨子もその後ろにちよこんと座る。ゲージを持たせたままだと交通安全的にも彼女の精神的にも危ないので陸が預かり、ペダルを踏む足に力を籠めた。

「そーいやゼロは？ そっちの方に行つてたんだろ？」

「解散した時は曜ちゃんに憑依してたよ？」

「だったら問題ないな。帰る時に回収していくか」

ゲージを抱えているせいで片手運転となり、しかも二人乗りという中々に危ないこの状況。

正直ゼロの力を借りたかったのは事実だが、いない者に頼つても仕方がない。ここは自分で何とかしよう。

「桜内ー、よく掴まつてろよー」

「え？ あ、ああうん」

梨子がきゅつと陸の制服を握つたのを確認してから、一気に速度を上げる。

喜んでいいのかは分からないが最近ではベリアルの方が身体に馴染んできており、その気になればこうして自身の身体能力を向上させる芸当も可能になったのだ。

「うわわあああああああ！！」

疾風が如し速度で進む自転車が、悲鳴を乗せながら町中を爆走していった。

「アン！ ウアン！」

「元氣だなー、お前」

桜内家に辿り着いたので、とりあえず犬の入ったゲージを梨子の部屋まで運んできた。

思えば梨子の部屋に入るのはダダが彼女のリトルスターを狙って襲ってきた時以来だ。あの時は不法侵入だったので、ちゃんとお邪魔したのは今回が初めて。

「……で、大丈夫か桜内？」

「……まだ動悸が……」

全速前進で自転車を飛ばした結果、犬と関わる前に梨子をノックダウンさせてしまった。

曜が最近この速度に慣れてきたのですっかり忘れていたが、あくまでも曜の適応力が

異常なだけで一般人はこうなつて当たり前だ。

「ウアン！ ワフ！」

「静かにしろー。まだ桜内の親御さんに説明してねーんだから」

今この空間で元氣全開なのはこのワンころだけ。先程からずっとゲージの壁を叩きながらはしゃいでいる。

「クウン……」

と思つたらいきなりしよんぼりと元氣がなくなつた。この感じは自分の意図が伝わらなくて凹んでいる顔だ。

「お？ どした？」

生憎陸に犬語は理解できないので首を傾げる事しか出来ない。

すると後ろでグロツキーになつていた梨子が何かに気付いたように声を発した。

「……もしかしてお腹空いてるのかな？ えっと……、善子ちゃんはこれが一番好きだつて言つてたけど……」

そう言つた彼女は善子から渡された袋を漁り、中から犬用のビスケットを取り出す。

「アン！ アン！」

それを機会に捉えた瞬間元氣を取り戻し、早くくれと言わんばかりに吠え始めた。

「……コイツさつきも食つてなかつたか？」

「……誰かさんが無茶な運転するから疲れちゃったんじゃない？」

「……はい。すみませんでした」

「どうやらまだご立腹らしい。」

申し訳なさで委縮する陸を尻目に、梨子は更に盛ったビスケットをゲージの前に置いた。

「……扉開けないと食えないだろ」

「……だよね」

目の前にご飯があるのにゲージが開かないせいでお預け状態。腹が減っている状態で一体何の拷問だろうか。

かといって犬を開放したら梨子がパニックになるだろうし、どうしたものか。

「食い終わったら俺がゲージの中に戻すから、その間は離れてろよ」

「……うん。そうする……」

陸の提案に乗った梨子が部屋の外に移動し、少しだけ扉を開いて中の様子を覗いている。

それを確認してからゲージの扉を開き、犬を小さな檻から解放する。

「……敵と味方を見分ける不思議な力か……」

一心不乱に餌に食らいつく犬を見て、不意に梨子がそう呟いた。

「あ？ 何それ？」

「・・・ミーティングの時、千歌ちゃんが犬には敵と味方を見分ける不思議な力があるって言ってたのを思い出して」

相変わらずの不思議発言だ。何を根拠に言っているのだろうか。

敵と味方を見分ける不思議な力・・・番犬というのはその力とやらを見込んだ人間が始めたものなのだろうか。

「クウ・・・、アン！ アン！」

「ふふ・・・、しつ・・・よ？」

自身に向かって吠える犬に対し、梨子は普段しいたけに向けるそれよりずっと穏やかな表情で微笑みかけた。

その数日後。

「ワンツスリーフォーワンツ。そこで皆近づいて！ はい！」

果南の手拍子に合わせて他の八人がダンスとフォーメーション確認を組み合わせた

練習をしていた。

「うん。前よりダイブ良くなってるよ！」

「ホント?！」

この頃に練習二に練習と何事よりも練習を優先している甲斐あって、Aqoursのパフォーマンスレベルは格段に向上しているのが伺える。

「ではもう一度・・・と言いたいところですが」

言いかけたダイヤが見上げた空は、既に逢魔が時が支配し始めていた。

「日も短くなってるからね」

「怪我するといけないし、あとは沼津で練習する時にしよう」

暗くなれば当然練習に危険も伴う。不本意だが、ここは鞠莉の提案通りにした方がいいだろう。

だが、一人だけ嬉々としてその言葉を受け止めている者がいた。

「じゃあ終わり?！」

『・・・・・・・・・・梨子?』

梨子だけが、妙に嬉しそうな表情で食いついていた。

「うん・・・・・・・・・・どうしたの?」

「へっ?! いや・・・・・・・・ちよつと・・・・・・・・私、今日は先帰るね?」

「えっ?! また〜?」

別れの挨拶もほどほどに済まし、足早に去って行ってしまった。

「何かあつたずら?」

ここ最近、梨子は練習が終わるとすぐに帰ってしまうのだ。

普段なら談笑するなり千歌に歌詞の催促をするなりのコミュニケーションがあるのだが、それすらもする気配はない。

〈……………〉

ゼロはただ一人心当たりのありそうな顔をしている者を見つけ、果南の身体から抜け出てその者の身体に憑依する。

〈……………善子。お前なんか知ってるだろ〉

〈……………心当たりというか……………いや、まさかとは思うけどね……………〉

「……………あんのクソ教師……………」

またもや雑務を押し付けられて下校が遅くなった陸は、呪詛のように愚痴を零しながら帰路を進んでいた。

やるのが面倒くさいのは分かるが、それを生徒に押し付けるのは如何なるものなのだろうか。

(・・・もうアイツ等も練習終わってる頃だよな。最近顔出してねーな)

正式なマネージャーではないので顔を出す義務など微塵もないのだが、すつぽかすと怒ってくる連中が数名いる。しかも最近はどんどんその人数が増えて言っているのがこれら一体。

まあ事情の説明はゼロに任せてあるし、もう練習が終わっているのならまっすぐ帰っても問題はないだろう。

そう思い先日善子とエンカウントしたホームセンターの前に差し掛かったその時だった。

「……………ん?」

スキップしてる変人がいる。

浦の星女学院の制服に身を包み、紫檀色の長髪を揺らしながらスキップでホームセンターに入ろうとしている変人がいる。

「……………何してんのお前……………」

「ひゃうっ!!」

たまらず陸が声を掛けるとその変人——桜内梨子は短い悲鳴と共に大きく跳ね上

がった。

「たっだいま〜♪ ふっふふ〜ん♪」

「お邪魔しまーす」

やたら上機嫌な梨子を家まで送ったついでで部屋まで招かれてしまった。よもやこんな近間隔で桜内家に来よう事になろうとは。

彼女の部屋の中央では、数日前に来た時と変わらずゲージの中の犬が元気にはしゃいでいる。

「いい子にしてた〜？ 今日はお土産があるのよ〜？」

普段の彼女からは考えられないぐらいの謎テンションのまま、ホームセンターで買った代物が入っているレジ袋を漁る梨子。

「じゃーん！ えへへ、面白そうでしょ？」

「アン！ アンアンアン!!」

何の生物かも分からない犬用玩具を見せると、それを欲しがるように大興奮でゲージ

のドアを叩き始めた。お気に召してもらえたらしい。

「はい」

少しだけ開いた戸の隙間から玩具が投入され、犬はすぐさまそれを加えて遊び出す。

「ふふ……、面白い？」

それを見て我が子を見守るように微笑む梨子に、しいたけ相手にあれだけビビっていた過去の姿はない。

「………何日か前のお前どこ行った」

「うへへ………」

ダメだ聞いちゃいない。もう完全に迷い犬のトリコリコのようなだ。

しかしまあ、今はゲージ越しの関りとは言え、これで少しでも梨子の犬耐性が上がってくればいいのだが。

「……楽しんで何よりだよ。用事は済んだし、俺もう帰るわ」

とりあえず犬の様子だけ見に来ただけなので、あとはもう用はない。

そう思った陸が帰宅しようと腰を上げた時、不意にドアがノックされた。

「はい？」

「梨子ー、お友達よー」

梨子の返事の後に開いたドアの後ろにいたのは梨子の母と、

「あ、善子ちゃん」

「ヨハネ。．．．陸も来てたのね」

梨子に犬を押し付けた張本人、津島善子だった。

「よう善子。コイツの様子見に来たのか？」

「まあそんな感じ。．．．アンタが来てたなら丁度良かったわね」

おもむろに善子が左袖を捲り、隠れていた銀と青の輝きを見せつけてきた。

あれはウルティメイトブレスレット。という事はゼロも彼女について来ていたらしい。

「よお、お前もこつちいたのか」

（お前こそ何で善子？ いつもは曜か姉ちゃんといくるくせに）

「へここ最近梨子が妙に帰るのが早いんでな。善子がここに来るっつーから付いて来たんだよ」

相変わらず鼻のいい奴だ。もう第六感とかその辺の域に到達してはないだろうか。

「あら？ そのワンちゃんまだいたの？」

「あー．．．うん。なんか、もう少しだけって言われちゃって．．．」

その返答に梨子の母は納得するが、善子は腑に落ちない表情で梨子の下に歩み寄り、犬の入ったゲージを手を取った。

「でも梨子ちゃん、犬凄い苦手だから、やっぱり私の家で預かるうかなーなんて……」
梨子の母がいる手前、いつもの墮天使や砕けた態度は封印しているらしい。梨子ちゃん呼びは違和感しかないが。

「ああら、善子ちゃんの家はマンションだからダメって聞いたけど？」
「少しなら大丈夫よ」

互いに譲りたくないらしく、ドッグゲージを奪われては奪い返している。

流石にこの状況、陸もゼロも梨子の母も苦笑いだ。

「駄目って言うから私が預かったのよ？ さあご飯にしましょうね」
「ノクターン……?」

「まあ……、どうぞごゆっくり……」

普段の自分を知っている者がいなくなると、すぐさま平常運転モードに戻る善子。

「どうやら勝手に名前を付けられていた事がご立腹らしい。」

「ちよつと！ ノクターンって何よ！」

「この子の名前！」

「はあ!!」

「いつまでもワンちゃんじゃ可哀想でしょ〜?」

「この子は私が出会ったのよ!! 名前だってライラプスって言う立派なのがあるんだか

らー」

「ラブライブ・・・？」

「ライラブス！」

（・・・どうすんだこれ）

口論が激化し始め、さつきから奪い合いされ続けているゲージの中のノクターンだから
イラブスだかも可愛そうになってきた。

〈任せろ〉

（？ 何か手でもあんのか？）

〈おうよ。俺に任しとけ。ビシツと決めてやる〉

珍しく戦闘以外でゼロが頼もしく感じる。たまにはやるところを見せてくれるのだら
うか。

『あーおいちよつとお前等』

二人の激論に割って入り、この状況を打破する言葉を紡ぎ出す。

『その犬の名前、親父の名前を借りて・・・モロボシくんってのはどうだ！』
「誰も名前を考えろとは言ってねえ！」

前言撤回。やはりゼロはゼロのままだった。そしてネーミングセンスも相変わらず
酷い。

「却下」

ゼロの意見は一瞬であしらい、二人はすぐさま言い合いに戻った。

「大体何よ！ 犬苦手だったんじゃないの?!!」

「苦手だけど……仕方ないでしょ！ 面倒見て欲しいって言ったのは善子ちゃんよ?!!」

「ヨハネー！」

論争の激化に連れ、二人の空気もどんどん険悪なものに変わっていく。

こんな事で仲違いされたらA q o u r sのパフォーマンスに影響が出かねないし、そもそも誰もそんな事望んでいない。

見かねた陸が二人を止めようと一歩踏み出した時、再び部屋のドアがノックされた。

「二人共く……、ちよつといい?」

「ええッ?!!」

部屋に入ってきた梨子の母に対し威圧気味に振り向く二人。

その剣幕に若干気圧されつつも、梨子の母が見せてきたのは一枚の紙。

「沼津の方で、もらってきたんだけど……」

その紙に描かれていたのは、丁度今二人が揉める原因となっている犬の搜索願だった。

その日の内に飼い主に連絡がつき、無事迷い犬は本来の家族の下に戻る事が出来た。

「あんこ〜♪ よかったね〜♪ アハハ♪」

「……………」

「……………よ、よかったですね……………」

「……………あんこか……………」

犬の名前はノクターンでもライラプスでもモロボシくんでもなく「あんこ」だったらしい。

そのあんこの飼い主である幼い少女が感動の対面で満面の笑み見せる一方、善子と梨子の表情からは輝きが失われていた。

「本当にありがとうございました」

少女の母親に頭を下げられても、二人の顔は一向に晴れる気がしない。

「あんこもお礼を言いなさい。ありがとうって」

「アン！」

少女が駆け寄ってきた際に、彼女の腕の中で抱かれていたあんこがぺろりと梨子の手のひらを舐めた。

「っ……」

前にあんこよりも小さい犬のわたあめに舐められただけでも大いに取り乱していた梨子だが、何故か今回はぽーつと舐められた手のひらを眺めているだけ。

「それじゃあ、失礼しまーす！」

「バイバーイー！」

車に乗り込んだ親子とあんこがこの場を去っても、梨子は手のひらを見つめるだけだった。

「ううう……！ ライラプス……」

「……ハナからお前の犬じゃないからな」

それに対して子供のように泣く善子。一応高校生だという事を忘れてはいけない。だが流石にここで普段の雑な扱いは可哀想だったので、慰める形で頭を撫でる。

「……切り替えるよ。リトルデーモンなら俺がやってやるから」

「……うん……」

手のかかる後輩な事で。妹とかがいたらこんな感じなのだろうか。

ともあれ駄々っ子になるような事は無かったので、とりあえず二人を家まで送るとしよう。

「・・・・・・・・・・？ 桜内、大丈夫か？」

陸と善子が歩き出しても、梨子は手のひらを見つめたまま動く気配がない。

「ふえっ!! あ、う、うん。大丈夫・・・・・・・・」

少し心配になって声を掛けると、命一杯の作り笑いを浮かべながらこちらの後を追ってきた。

八十六話 惜別と襲撃

「……ノクターン……」

「……ライラプス……」

全く同じ表情で、木の枝を駆使しグラウンドにあんこの絵を描く梨子と善子。挙動のタイミングも寸分も違っておらず、二人で意識を共有しているようだ。

まあ実際、とある感情は共有しているのだろうが。

迷い犬だったあんこを飼い主の下に戻した翌日。

久々にAqoursの練習に顔を出した陸は、校庭で謎のシンクロ劇を見せる梨子と善子を半目で眺めていた。

「うう……取ってこい……」

すっかりドッグロスになってしまった二人が、またもや同時に木の枝を放った。枝の軌道すらも一致しているのかもはや奇跡ではないだろうか。

「……シンクロ?」

「でもどうして二人が……」

陸だけでなく、二人を除くA q o u r sメンバーも不可解な光景に疑念を覚えていた。

「まさか……悪霊に憑りつかれたすら……?」

「なんかちよつと善子ちゃんっぽいね、花丸ちゃん」

「ずらん……!」

花丸の墮天使芝居は置いておき、この中で唯一二人がこうなっている原因を知っている陸はどうしたものかと首を捻る。

(……皆にも言うべきなのか……?)

へ……どーだか、変に話したところで状況が悪化するようにはか思えないけどな

確かにゼロの言う通り、迂闊な事は言えない。どうやら本人たちが立ち直すことに期待するしかないらしい。

「善子ちゃん……」

「……ヨハネ……」

とりあえず今は様子を見る事にしたその時、体育座りを決め込んでいた梨子がすくつと立ち上がった。

「……練習……しよつ」

決意したような表情で零した、何の変哲もない誘い。それに対し善子も立ちあがり、

「そうね。思いつきり身体を動かして、このもやもやした気持ちを全部吹っ飛ば——」

「——せない……」

秋と共に紅く染まった木々に彩られた坂道で項垂れる梨子と善子。

思い立ったが吉日と思う存分身体を動かしたはいいが、やはりその程度で払拭できるようなものではなく。

結局気持ちが晴れる事もないまま、今日の練習は終わってしまった。

「はあ……、飼い主の元に戻ったのはよかったんだけど……」

「やっぱりこんなの間違ってる！」

「え？」

唐突な墮天使モードの突入と頓珍漢な発言に、若干引き気味に聞き返す。

「よく考えてみれば、あの人が飼い主だつて証拠はないはずよ！ 仮に飼っていたとしても、本当に飼っていたのがライラプスだとは限らない。そっくりの違う犬だったという可能性も……」

「そんな無茶苦茶な……」

あまりにも方向違いな暴論だった。寂しいのは分かるが、いくらなんでも滅茶苦茶だ。

「取り戻しに行くわよ！」

「はいい？　ちよ、待って！」

一応持つてきていたドッグゲージを手に取り階段を駆け下りようとする善子を慌てて呼び止める。

「言つたでしょ？　あの子と私は、上級契約の関係。Destinyで結ばれているの……」

「無茶よ！　迷惑でしょ？　そんなことしたら！」

普通に考えればそんな事はすぐにわかる。

だが善子が聞く耳を持たないのを見る限り、完全に冷静な思考は失われているのは理解できた。

「だったらいい！　私一人で行くから！」

そう言い残し、善子は階段を下って行ってしまった。

そんな姿を一瞥した後、梨子はポケットを漁って犬用のビスケットを取り出す。

あんこが一番好きだったもの。梨子の家で預かっている間は、毎日これをおやつに与

えていた。

「……………」

これを見てみると、あんこを預かっていた間の日々を思い出してしまふ。

「……………はあ……………」

もうそうなつてしまつては梨子も歯止めが利かず、気付けば善子の後を追つていた。

「……………どうするよ、あれ』

「……………取り戻しに行くとか、普通に犯罪だからなお前等……………」

強化された視覚と聴覚を駆使し、遠巻きから二人の様子を眺めていた陸とゼロ。

梨子にしろ善子にしろ、たった数日であんこに入れ込み過ぎだ。

「……………とりあえず後つけるぞ。何仕出かすか分かんねーし」

『……………だな』

数時間後。

「・・・・・・・・雨か」

青色が広がっていた空は灰色に支配され、曇天から冷たい雨がもたらされ始めた。

傘は持つてきていないが、今帰る訳には行かないので我慢だ。ゼロと一体化しているのでこれくらい屁でもない。

へ・・・・・・・・アイツいつまでいるつもりだよ

帰れない理由は、パーキングエリアの精算機に立て付けられた雨避けの下にいる善子。

ここはあんこの飼い主が住む家のすぐ近くで、何でもあんこが出てくるまでここで粘るそうナ。

時間も時間だったので梨子はもう帰ってしまったが、彼女は根気強く粘っている。

あの墮天使が何を仕出かすか分からない以上、この場を離れる訳には行かないのだ。

「・・・・・・・・」

何が彼女をあそこまでさせるのだろうか。

ただ拾った犬を可愛がっただけにしては執着し過ぎている。

善子は普段の言動こそおかしいものの、理由もなしに人の迷惑になるような事をするような子ではない。

運命。先程善子はあんこを取り戻すと意気込んでいた際にこう言っていた。

一体、何が……、

〈……！ おい陸〉

(………桜内……)

雨避けの下でしゃがみ込む善子の前に現れたのは、先程帰宅したはずの梨子だった。

「梨子………」

「風邪……引くわよ？ あと……、これ」

雨の中一人でいる善子を気に掛けたのか、恐らく兵糧が入っているであろうレジ袋を彼女に突き出す。

「………いらない」

「……はぐ」

そつぽを向かれても、それだけ言つて袋の中の鰻お握りを改めて突き出す。

一度は断つた善子だが、空腹と梨子の優しさに折れたのか、静かにそれを受け取つて食べ始めた。

(………俺も腹減ってきた)

〈我慢しろ〉

陸も少し空腹を感じ始めてきた頃なのに、人が美味しく食事をしているところを見ているとか何の拷問だろうか。

「……どうして戻ってきたの？」

「考えてみたら、帰っちゃったら本当に出てきた時に、会えないなって……」
乾いた音を鳴らす腹を押さえていると、しばらく黙っていた二人の会話に進展が見えた。

「私が先に出会ったんだからね？」

「それは分かっているけど……」

(……本来の飼い主の方が先だぞ)

大事な事だから一応内心で突っ込んでおく陸。

そこからはまた無言の時間が続いた。

アスファルトの道路を打ち付ける雨音だけが耳に飛び込み、無音ではないがどこか心地の良い空気が舞い降りる。

それを打ち破ったのは、不意に口を開いた梨子の口から紡がれた言葉だった。

「……どうして、運命なの？」

「……何が？」

「・・・犬」

丁度陸が気になっていたりした事を梨子が聞いてくれた。

善子があんこに固執しているのは、偏にこの運命という言葉に由来する。

如何にも善子が好みそうな言葉ではあるが、あの場面で口にしたという事は何か意味があるという事だ。

「DestinyはDestinyよ」

「・・・? そうかもしれないけど・・・」

だが答えは素っ気ないもので、陸は勿論問いかけた梨子も納得していない。

「・・・・・・墮天使って、いると思う?」

「え?」

それに対する説明なのか、善子が演じている設定自体にツツコむ話題を振ってきた。

「私さ、小さい頃からすごい運が悪かったの・・・」

立ち上がって昔話を始める。今だって十分運は悪いだろとは梨子も傍目で見てた陸もツツコまなかった。

「外に出れば雨に降られるし、転ぶし、何しても自分だけうまくいかないし。・・・」

それで思ったの。きつと、私が特別だから、見えない力が働いてるんだって」

「・・・・・・それで、墮天使?」

「勿論、墮天使なんているはずないって、それはもうなんとなく感じてる。クラスじや言わない様にしてるし。……でもさ」

自動販売機の前まで移動すると。ポケットから取り出した小銭を投入しながらなおも話を続ける。

「本当に、そういうの全く無いのかなって。人智なんて明らかに超越してる陸とかゼロとか見てると、運命とか、見えない力とか、ホントはあるんじゃないのかなって。……そんな時、出会ったの……」

「……ノクターンに？」

「ライラプスよ！……ええ、何か見えない力で、引き寄せられているようだった。これは絶対、偶然じゃなくて、何かに導かれてるんだって……。そう思った。不思議な力が働いてるんだって」

……善子の奇行の原因の一端は陸とゼロにもあつたらしい。

見えない力が働き、導かれるように出会った。

一年前の陸なら一蹴していただろうが、今となつては分かる気がする。

ゼロとの出会いは、偶然の一言で片づけられるものではない。この出会いがあつたからこそ、それが連鎖するように今の A q o u r s との出会いがあつたから。

だから善子の言っている事は一理ある。

「ほい、ライラプス」

いつの間にか雨は止み、善子は鰻お握りのお札なのか今自販機で購入した代物を梨子にトスする。

「む・・・、ノクターン！」

缶のパッケージは「あんこたつぷりぜんざい」。完全に狙ったとしか思えない。

自分の考案した名前のみ省かれた事に梨子が反論したその時、遂に待ち望んでいた者が現れた。

ライラプスでもノクターンでもなくあんここと、その飼い主の少女である。

「止んだねー」

どうやら雨が止んだので散歩に出かけるらしい。

だったら先回りして偶然の体を装うとしたが、母親の呼びかけで少女は一旦家の中へと戻ってしまった。

だが、あんこは首輪のリードを家の策に繋がれたままだ。

「善子ちゃん」

予定は狂ったものの、今ならあんこと触れ合い放題である。

一応先に出会っているという事で梨子は先手を譲るが、何故か善子はあるこの元に行こうとしない。

代わりに数歩前に歩み出て缶を持った腕を突き出すと、何やら念力でも送っているかのような動きと呪文の詠唱を始めた。

「むむむ………気付いて……！」

傍から見れば何ともまあシユールな光景だろう。

空き缶片手にポーズを取る少女が、一匹の犬に向かって念を送っている。

「………そんなんで向くわけ………」

「クウ………？」

向いた。

「うそーん………」

流石はフラグ建設のスペシャリスト、ウルトラマンゼロさんだ。陸達にできない事を平然とやってのける。ただしそこに痺れもしないし憧れもしない。

「私よ、分かるぞ！」

犬は頭のいい動物だ。そう簡単に人の事を忘れはしない。数日間とは言えいう事を聞くほど懐いていた善子の事を忘れるはずが………と思っていたのだが、当のあんこは善子を見ても首を傾げるだけである。

「ごめんね、雨あがったばかりだから、まだお散歩駄目だつて〜」

それどころか女の子が戻ってくると一瞬で善子への興味を失くし、そちらの方へと駆

け寄ってしまった。

ボタンとドアが閉じられ、何とも言えない寂寥感がこの場を支配した。

「は……は……ははは……」

これにはさすがの善子も苦笑いだった。

結局あんこと触れ合う事は出来ず、傷心の帰り道。

「……ふふ……、やはり偶然だったようね。この墮天使ヨハネに気付かないなんて……」

『キュウ……』

「……ん？」

善子の足元から何かの鳴き声が出た。

くぐもっている高い響き声で、自然と音のする足元に視線が流れる。

「……何？　これ……？」

善子が拾い上げたそれはカプセル状の形をしており、中には猫のような愛嬌のある生き物が閉じ込められていた。

『キュウ……キュ……』

か弱いその表情に加え、消え入りそうな小さい鳴き声には悲壯感を禁じ得ない。

「……捨てられたって事かしら？」

「こんな狭いところに入れるなんて……、酷い」

大方飼いきれなくなつて捨てたという感じだろう。

それだけでも無責任で酷いのに、その上こんなガシヤポンのカプセルのようなものに閉じ込めるなど飼い主は本当に人間なのだろうか。

「とりあえず、まずはここから出してあげないと……」

「見つけたぞ……」

梨子がその生き物を解放してあげようとカプセルに手を駆けたその時、突如として低い声音が二人に投げかけられた。

「えっ……!!」

「ちよ……!! 何よアン……」

身構えた善子だが、その影が自分達に向けている銃を見て思わず硬直してしまふ。

「そいつをこつちに渡せ」

襲撃者は短くそう要求した。視線は良子でも梨子でもなくカプセル内の生き物に向けられており、底の知れない殺意を感じ取れた。

「つ……！ 何しようつてのよ！」

硬直が解けた善子が即座に言い返すが、襲撃者は微塵も態度を崩すことなく続けた。

「お前達には関係のない事だ。痛い目に遭いたくなければすぐにそいつをよこせ」

「理由もなしにそんな事言われても……。こんな可哀想なのに……」

「はっ……。何を言うか。そいつは……」

梨子の反論にもすぐに返したが、何故か彼女の顔を見た瞬間から言葉は続かなかった。

信じられないものを見たかのような表情で、梨子へと視線を注いでいる。

「あの……。なにか……?」

「梨子！ 逃げるわよ！」

それを不審に思った梨子が問いかけようとするが、襲撃者の隙を突いた善子に手を取られる。

「つ……。！ 待て！」

「デエエエヤ！」

一瞬遅れて二人を追いかけようとした襲撃者を襲撃する者が一人。

「陸?!」

「仙道君?!」

「いいから逃げろ！ こいつは俺が何とかしとくから！」

ゼロランスを構えた陸が襲撃者と交戦するのを一瞥し、二人はカプセルを手に前へと走った。

「ぐ……、誰だ貴様は！」

『そいつはこっちのセリフだコノヤロー！』

銃と槍を構え、互いに睨み合う二つの人影。

人格を表に出したゼロは、ゼロランスを突き付けながら梨子と善子を襲撃した男を睨みつけていた。

見た目は地球人の男性と変わらないが、防護服のような装備と銃を見ればそうでないのは一目瞭然だ。

「邪魔をするな！」

『ハア！』

男が左腕のブレスレットから放った光線をランスで弾き、一気に懐まで潜り込む。

続けて斬撃を迸らせるがそれはあつかりと回避され、反撃にと迫る回し蹴り。

『チ・・・・・・・・』

即座にランスをゼロデイフエンダーに変形させて防御し、力任せに足を男の身体ごと押し返した。

「・・・・貴様その動き・・・・、この星の原住民ではないな・・・・。名は？」

『ウルトラマンゼロ。M78星雲光の国から来た宇宙警備隊だ』

「何・・・・・・・・?」

ゼロが名乗りを上げると男は意外そうな顔をしながらも戦闘態勢を解き、銃を下した。

『・・・・・・・・? どうした?』

「・・・・武器を下せ。今ここでお前と争う事に意味はない」

今の今まで纏っていた殺気も一瞬の内に霧散し、表情も幾分か穏やかになった。決して柔和なものではないが。

「なるほど・・・・、お前が噂のウルトラマンゼロか・・・・・・・・」

全身を舐め回すような視線でまじまじと見つめられる。見た目完全に中年な奴にやられると精神的にキツイ。

『・・・・・・・・、何なんだよお前・・・・・・・・』

引き気味に上体を仰げ反らせる。流石のゼロもこれはキツイらしい。

「・・・だつたら話は早い。ウルトラマンゼロ、私に協力してくれ」

『はあ?』

突然の申し出。態度の軟化が急降下過ぎて頭がついて行かない。

何やらゼロの事も知っているようだし、余計に頭がついて行かない。

「見たところお前はさっきの娘たちと親交があるようだから。私が警戒されてしまった以上、お前の協力が不可欠だ」

『ちよ・・・! ちよつと待て! まず誰なんだよお前!』

これ以上は混乱するばかりなので一方的に進む話を強引に遮る。

「つ・・・! ああすまない。私はダイス星人のシン。AIBのエージェントだ」

『AIBだと? それがアイツ等に何の用だつてんだ』

そのAIBとやらを知らない陸は完全に置いて行かれたが、実際に会話している二人の間でコミュニケーションが成立しているので良しとする。陸は完全に蚊帳の外だが、大事な事なので二回言った。

「厳密に言うとう用があるのはあの二人ではない。彼女達が拾ったあの生物だ」

『・・・拾ったつと、さっきのカプセルに入ったあのちっこいのか?』

「ああ。あれをブラックホールに輸送している最中に逃走されてな。そうして奴が辿り

着いたのがこの星だった」

『ブラックホール……、駆除対象って事か？ あんな可愛げのある奴が……』

「可愛げか……、奴に可愛げと言うものがあればどれほど良かったものか……」

ダイス星人シンは深く深く溜息をついた後、目の色を変えてゼロと真っ直ぐに顔を合わせた。

「……奴の名はギャビツシュ。高い知能と醜悪な狡猾さを持つ……、凶悪な宇宙
怪獣だ」

八十七話 箱の中の凶獣

「つ……つ……つ……」

突如として何者かに襲撃されてから数十分。

陸の乱入により何とか危機を脱した二人は、善子の家の付近まで辿り着いていた。

「何なのよ……！ さっきの奴は……！」

「分からないつ……仙道君大丈夫かな……？」

普段から走り込んでいるとは言え、沼津まで全力疾走は流石に辛い。

「……にしても、この子……」

善子の手の中から漏れ出る小さな鳴き声。

先程の銃撃者はこのカプセルに入った小動物を狙っているようだった。

「……見た事ないわね……。地球の生物なのかしら？」

選択肢に地球外生物が含まれることなど普通の女子高生ならまずありえないだろう。

だが喜んでいいのか悪いのか、やたら宇宙人やら宇宙怪獣やらと関わる A q o u r s

メンバーはこういう事に敏感なのだ。

『わ．．．．．は、ギャ．．．ユ．．．』

「ん？」

不意に高い声が耳に入り込み、二人は互いの顔を見合わせた。

「善子ちゃん、何か言った？」

「う、ううん．．．。梨子こそ．．．．．」

『わた．．．は．．．ギャ．．．シュ．．．．．』

「え．．．」

その声が善子の手元から発せられている事に気が付き、同時に手の中のカプセルに目を落とす。

「え？ 何？ もしかしてこの子が？」

「．．．ホントに宇宙生物だったの．．．？」

少なくとも地球上に人間以外で人語を話す生物はいない。そうなればもう確定だろう。

『私はギャビツシュ．．．．．、私を助けて．．．．．』

良心の最奥をついてくるような弱々しい響き。

それによって警戒心は薄まり、逆に守らなくてはという使命感すらも湧いてくるよう

な感じがする。

「さっきの奴、この子の事殺そうとしてたんじゃ……」

特に先程のあんことの一件があつた善子は傷心を癒やされたらしく、すっかりその宇宙生物——ギャビツシユの味方となつていた。

「大丈夫。貴方はヨハネが守るわ……」

「で、でも大丈夫なの？ 狙われたら危ないし……、仙道君とゼロちゃんに相談した方がいいんじゃない？」

「ふふ……私を誰だと思つているの？ この墮天使ヨハネの翼の加護がある限り、必ずや安泰を約束するわ……とうっ！」

それだけ言い残すと、善子はギャビツシユが入つたカプセルを抱えたまま自分の家の方へと走り去つて行つてしまった。

「ウアンワン！」

「ふやああつ！！」

早速通りすがつた散歩中の犬に吠えられている善子を見て溜息をついた後、胸の中で蟠つている違和感と向き合つた。

どうしてあのギャビツシユとか言う宇宙生物に心を開き切れないのか。

なにかこう、危険本能というか、それこそ六年前スカルゴモラが出現した時のような

感覚がある。

そしてそれに加え……、

(敵と味方を見分ける不思議な力か……)

ギャビツシユを保護した瞬間に犬に吠えられるようになった善子を見て、ますます梨子の疑念は深まるのであった。

「あーもう！ どこ行ったアイツ等！」

ゼロとダイス星人シンの間で勝手に話が進み、身体の主導権が戻ってきた頃にはそのギャビツシユとやらの搜索をする羽目に遭っていた。

奴が入っているカプセルを持っていたのは梨子と善子だが、どんな速度で走り去って行ったのか全く見つかかる気配がない。

へAIBの連中が探してるって事はそれなりに厄介な奴なはずだ。さっさと見つけろ
「他力本願だなテメー。つか何なんだよその、えーあいびー？ ってのは」

陸は見た事も聞いた事もない組織だが、ゼロは知っている感じの雰囲気だったので聞いてみる。

「AIBってのは犯罪行為を行った異星人の取り締まりをしている宇宙規模の連合組織の事だ。元々はクライシス・インパクト後にサイドアースで結成された組織なんだが、最近では別宇宙でも仕事をしてるらしい」

「・・・それがどうして宇宙怪獣の駆除を執行してる訳？」

「確かに。確かにたまに宇宙怪獣の駆除や保護をしているのは知っていたが・・・、んな凶悪な宇宙生物の輸送を担うか・・・？ それに文明に干渉し過ぎだ」

「いまいちシンの事も信用しきれない。その星の文明に影響を与える事を良しとしないう組織ならば、原住民を脅してまで任務を執行するだろうか。」

「へとにかく、俺達が誰よりも早くギャビツシュを回収した方がいい事には変わりはない。急げ」

「了解」

シンがギャビツシュを使って何かを企んでいる可能性も無きにしても非ずだし、そうでなくても梨子と善子に危険が及ぶかもしれない。

どっちにしろ急ぐ以外の選択肢は無いのだ。

「つ・・・！ 桜内！」

ウルトラマンの力を借りて走ること数分。善子の家付近のバス停にいた梨子を見つけた。

「あ……、仙道君！ 大丈夫だった!!」

「こっちは問題ない。それより善子は?!」

梨子はギャビツシユの入ったカプセルを持っているようには見えない。となると今奴は十中八九善子と共にいるだろう。

「……善子ちゃんならさつきあの子を連れて家に帰っちゃったけど……」

「……あの馬鹿面倒くさい事を……」

不幸体質だと常々ぼやいているが、実際自分の行動が不幸を招いているだけなのではないだろうか。

「どうしたのそんなに焦って?」

「……お前等が回収したあのちっこいの、実は結構ヤバい感じの怪獣らしい」

「え……」

梨子の顔が幾分か青ざめたのが見て伺えた。先程までともにいたという事もあるのだろうか、そんな危険な生物を後輩に渡してしまった事もあるのだろうか。

「じゃあ、あの助けてっていうのは……」

『助けて……何の事だ?』

「さつきその怪獣が、私と善子ちゃんに向かって助けてって言ってきたの！」

『何………?』

どうやら高い知能を有した狡猾な性格、というのとは間違いではなかったらしい。

そうになると、今一人でギャビツシユと共にいる善子が危ない。

「……ごめんなさい。私が善子ちゃんを一人にしたから……」

「いや、むしろお前が無事でよかったよ。とりあえず今日はもう帰つてろ。後は俺が何とかする」

感じる義務もない自責の念に駆られる梨子に優しく言葉を投げかけると、踵を返して善子の住むマンションへと向かう。

「私も行く。こんな事になったのに放っておけないよ」

危険を承知で、梨子は陸の後に付いて来た。

自身を顧みずに友達のために行動できるとは、今のA q o u r sメンバーの絆は揺るぎないものようだ。

「……危なくなったら逃げろよ」

無下にするわけにも行かないのでそれだけ伝えると、大急ぎで墮天使の住まう居城へと速度を上げた。

パツと証明がつき、窓がカーテンに覆われて真つ暗だった部屋の中が明るく照らされる。

そんな部屋に急ぎ気味に入った善子は、水晶やら口ザリオやらで散らかっている机上を手短に片付ける。

「……流石にここまででは追つてこれないでしょ……」

そこにギャビツシユが入ったカプセルを置き、まずはふうと息をついた。

「あんなのに狙われるつて、アンタもつくづく不幸ね。でも安心しなさい。この墮天使ヨハネと共にある限り、貴方の安全は私が保証するわ」

人語を喋る不思議な生物を前に、善子のテンションも少し上がっている。

そのテンションのままに墮天使芸に突入するが、ギャビツシユから帰つて来るのはくぐもつた鳴き声のみ。

「……ずつとこの狭い場所に入れておくのも可哀想よね」

とりあえずこのカプセルから解放してあげようと手を掛けるが、蓋が硬くて中々開け

ることが出来ない。

「こんなものっ……我が……闇の波動でっ……」

渾身の力を込めてようやく蓋が緩んだ時、ポケットに入れていたスマホが着信音を鳴らした。

「こんな時に……!」

とりあえず電話対応はカプセルを開けてからにしようと思い、ラストスパートだと言わんばかりに細い二の腕へと力を籠める。

「ふぬぬ……わあっ!!」

カッポーンと勢いよく蓋が外れ、勢い余って盛大に尻餅を付いてしまう善子。

痛みに顔を顰めながらもカプセルが開いた事を確認し、先程からうるさい携帯を手にとった。

「もしもし?」

『あ、やつと出た。おい善子! 今お前ギャビツシユと一緒にか!!』

電話の向こう側にいるのは陸。ついさつき襲撃者から自分達を助けて交戦状態になっていたはずだが、元気そうで何よりだ。

「陸ね? 無事でよかったわ。……それよりなんでこの子の名前知ってるのよ?」

『やっぱ一緒にいるのか……、いいか!! ギャビツシユの入ったカプセルは絶対開ける

んじゃねーぞー!」

「ええ!! そんな事言われてももう——」

『グキユウウウウウツ!!』

「わあああツ!!」

突然謎の咆哮と共に部屋が揺れ、善子は再び床に転倒してしまふ。

「いてて……、んな……」

原因を探ろうと視線を上げてから、言葉は続かなかつた。

今の今まで存在していなかつたソレに紅い双眸で見つめられ、硬直してしまつた身体は言う事を聞いてくれない。

『グウウウウウ……』

「え……? 何……?」

今自分の目の前にいるのはギヤビツシュだという事はすぐに理解できた。

だが、カプセルに入っていた時とは何もかもが違う。愛嬌ある小動物は影も形もなく、悪魔のように醜悪な姿をした青い獣となつており、体長もゆうに善子の四倍はある。

『グキユウウウウウツ!!』

「きやああああああああああつ!!」

変わり果てたギヤビツシュの瞳から赤い光が放たれ、それを浴びた善子は光線の発生

源である目の中へと取り込まれてしまう。

『ッ!! おい! 善子!! 善——』

『グキユウウウウウウウウウウウウウウウウウツ!!』

陸の声のみが発せられる善子のスマホを踏みつぶすと。ギャビツシユは咆哮と共にテレポートでその姿を消した。

悲鳴を機に、携帯から通話相手の声が聞こえなくなる。

「善子!! おい! 善子!!」

必死に呼びかけるが返答はなく、何かが砕けたような音の後通話は途切れた。

『……こりやちよつとヤベエかもな……』

「ギャビツシユ……!」

どうやらダイス星人シンの話は本当だったらしい。

善子はどうなった? 狡猾な性格をしているという話からしてすぐに殺したという

のはなさそうだが、どつちにしろ危険が及んでいるという事に変わりはなさそうだ。

「・・仙道君・・・、善子ちゃんは・・・？」

「無事な保証はないな」

不安気な梨子の問いに返したのは、陸のものでもゼロのものでもない低い声。

「どうやら、ギャビツシュが動き出したようだな」

その主は白い防護服のようなものに身を包んだ男。つまりはダイス星人のシンだった。

「ひ・・・・・」

梨子が陸の背後に隠れる。そういえばダイス星人についての誤解はまだ解いていなかった。まあ、陸も完全に彼の事を信用していた訳ではないが。

『大丈夫だ梨子。コイツは敵じゃねえ』

ゼロは梨子に弁明を入れた後、音もなく登場したダイス星人に言葉を向けた。

『ギャビツシュは今どこだ』

「レーダーにはちゃんと捉えられている。あの娘の生命反応も一緒だ」

『・・・・・無事なんだろうな』

「ああ、性格上ギャビツシュは簡単に人間を殺しはしないが・・・、急いだほうがいい事に変わりはない」

挨拶もほどほどに梨子と別れ、大地を蹴ってシンの後を追う。

あまりに急いでいたものだから、梨子がどうしたかを確認する事は出来なかった。

「……だ」

「……って……」

ダイス星人が持つレーダーの反応通りにギャビツシユの跡を追ってみれば、辿り着いたのは善子の住むマンシヨンのゴミ捨て場だった。

「……そんな遠くには行ってなかったの……。つかくせえ……」

ゴミ捨て場なのだしゴミの臭いがするのは当たり前だが、だとしても臭すぎる。確実に何かがあつた証拠だ。

「つ……！……いたぞ」

シンの指示で物陰に隠れ、生ゴミの収集箱に頭を突っ込んでいる青い獣を視界に捉えた。

サイズは始めて見た時の百倍以上は巨大化しており、第一印象は痩せた青いネズミ、といった感じだ。

顔面も禍々しく歪んでおり、もう可愛さなど微塵もない。

『……食事中か?』

「ずっとカプセルの中にいたからな。腹が減っているのも頷ける」

この臭いの原因は奴が生ゴミをそこら中に錯乱させていたかららしい。

『……善子は?』

「……大丈夫だ。生命反応に変化はない」

ギャビツシユに食われた、という最悪の事態は起こっていないとひとまず安心する。

だがだとしたら善子は今どこに。シンの話からしてギャビツシユと共にいるようだが……。

「……とにかく捕獲だ。行くぞ」

「ああ」

身体の主導権がゼロに切り替わる。

奴は今生ゴミの中の食べ物を食べるのに夢中、奇襲を仕掛けるなら今が最大のチャンスだ。

シンがタイミングを伺い、腕を下げて攻撃の合図を出したその瞬間、

『デエエエヤー!』

『グキユウウウウウウウ!』

無防備に晒していた首元にゼロランスによる強烈な一撃が叩き込まれ、生ゴミを巻き散らしながら悲鳴を上げるギャビツシュ。

反撃に振るわれた尻尾を前宙で回避。そして回転の勢いのままに槍を縦に一閃。

『オウラア!』

着地から更にブレイクダンスの要領で身を翻し、奴の下腹部を思いきり蹴り飛ばした。

「ギャビツシュツ!!」

とんでもない剣幕で吹き飛んだ青い獣を睨みつけたシンは、腕のブレスレットから縄状の光線を放つ。

それはカウボーイの投擲した投げ縄のような動きで青い身体を絡めとり、見事ギャビツシュを拘束してみた。

と、思ったのだが、

『グキユウウウウウウウ!!』

『ツ!! 何!!』

苦し紛れに遠吠えをしたと思った次の瞬間、捕縛光線の中からギャビツシュは消えて

いた。

『テレポート?! そんな芸当までできるってのか?!』

「クソツ……」

隣からターゲットを取り逃がしてしまったシンの声が聞こえる。

だがそれは単純な失敗への悔しさや不甲斐無い自分への叱咤ではなく、むしろギャビツシユへと向けられた憎悪や怒りのようにも思えた。

「とにかく追うぞ! まだそう遠くへは言っていないはずだ!!」

『お……おう……』

先程までの冷静さが塵ほども無くなったシンに若干気圧されつつも、ゼロは床を蹴つてギャビツシユの追跡へと出た。

テレポーターション能力を備えているとなると、かなり捕獲は難しくなる。

シンの当初の目的のようにその場で殺処分できればいいのだが、奴に襲われた善子の安否が分からない以上今は殺すことが出来ない。

とにかくあんなものを町に野放しにする訳にはいかない。早急に奴を捉えねば――

「うわああああああつ?!」

ゴミ置き場を出た瞬間、聞き覚えのある声音が悲鳴となって耳に届く。

シンと共に悲鳴の発生源へと向かうと、そこには睨んだ通りギャビツシユと、それの前に腰が抜けてしまった浦女の制服を着た紫檀髪の少女がいた。

『梨子?!』

(あの馬鹿……何で付いて来た……)

友達が心配なのは分かるが、だからと言って危険な事に首を突っ込んでいい訳ではない。

「その娘に手を出すな!」

ゼロが何かするより早く前に出たシンが、光線中を構えて突撃していく。

『キュウウ!』

「がはっ……!」

だが銃弾はものの見事に全て回避され、逆に長い尻尾による攻撃をもろに受けて吹っ飛ばされてしまった。

『キュキュウ……!』

シンが梨子を助けようとしたのを見て何か巧妙な策が浮かんだのか、意地悪そうに唸り声を漏らしたギャビツシユは梨子にその双眸を向けた。

そして、

『グキュウウウウウウ!!』

「ぎやあああああああ!!」

『ツ!! 梨子!!』

「紅い光が煌いた後、梨子までもが人質として瞳の中に囚われてしまった。

八十八話 出逢いの意味

『梨子!!』

ダイス星人シンの捕縛光線から抜け出したギャビツシユが、姑息な事にも梨子を目の中に取り込んでしまった。

そうになると、先程から行方が分からない善子も恐らく奴の目の中だ。

「ぐっ・・・!! この!!」

『おい待て!!』

先程貰った一撃のダメージを引きずりながらも、シンは身体に鞭を打ってギャビツシユへと突進。ゼロも遅れてそれに続く。

「ふっ!!」

『ッ!!』

シンが打ち出した銃弾をギャビツシユは跳躍して回避する。距離は決して遠くはなかった。それに反応できるという事は、かなりの瞬発力を備えているのが伺える。

だが、

『アエエエヤー!』

それを予め見越していたゼロは既にその上を取っており、袈裟懸けにゼロランスを振り下ろす。

空中ならば持ち前の俊敏さも発揮できまい。加えてテレポートは使用するのにそれなりの溜め時間を要すると見た。

だからこれは決まった。そう思ったはずなのに。

『っ……!』

かわすのは無理だと判断したらしいギャビツシユが盾にしたのは自身の紅い瞳。

その中には、気を失っている津島善子の姿が確認できた。

『ちい……!』

いくら奴を撃退するためとは言え、善子ごと掻っ捌く訳には行かない。

咄嗟に手を止めるが、それはギャビツシユから見たらどうぞ攻撃してくださいと言っているのも同然で。

『グキユウウウウウ!!』

『ごあつ……!!』

頭突きによって思い衝撃が腹部にもたらされる。

当然空中では威力を受け流すことも不可能なので、敢無く吹き飛ばされて地面を事がってしまおう。

『ぐ……あ……あ……』

『グキユウウウウウウウウウウウウウウ——!!』

咆哮と共に、ギャビツシユの青い身体がどんどん膨れ上がっていく。

『な……、何?!』

『く……、地球の大气に適応したか……』

大地が揺れる。

もうさつきまでの愛くるしい小動物は何だったのか、今のギャビツシユは体長七十メートル程に巨大化してしまっていた。

『まだデカくなりやがるのか?!』

『……むしろ、アレが本来の大ききさだ』

身長の振幅が大きすぎる。どうすればあんな巨大獣がハムスターみたいなサイズに縮むことが出来るのだろうか。

『おい、どうすんだあれ』

とりあえずは身体の主導権が戻ってきた陸だが、どうしたらいいものか。

変身するには人の目が多すぎる。その事すらも計算に入れてここで巨大化したとす

るならば、もはやこちらの予想を遥かに上回る知能の高さだ。

対抗策を次々潰されていく陸とゼロが焦燥に駆られる中、その傍らのシンは逆に燃え上がっていく。

「……出来れば二度と拝みたくなかった姿だな。ギャビツシユツ!!」

エンカウント時当初の冷静なイメージを根っこから打ち砕くほど声を荒げ、光線銃を奴に向けて連射する。

だが人間サイズの片手銃が人の数十倍もの体の大きさを誇る怪獣に通用するはずもなく、ヒットはするがギャビツシユは意にも介していない。

「クソツ……!」

「オイ! 落ち着け!」

陸の制止も聞かずに飛び出すシン。鬼気迫るその表情からは、まるで過去にギャビツシユとの間に何かあったかのように伺えた。

だがいくら何でもあの大きさ相手に生身で突っ込むのは無謀だ。

「……貴様はいつもそうだな。そうして優しき人間の心に取り込み、散々利用した挙句に殺す……その娘たちを私の娘のように殺させはしない!!」

「え……」

『……お前、娘をアイツに……』

「ギャビツシユウツ!!」

残酷な過去の告白に一瞬とはいえ呆然とするゼロを尻目に、シンは銃を乱射する。

いくら機械とは言え、ギャビツシユの感覚的には虫にたかられているようなものなのだろう。

『グキユウウウウウウ!!』

人間ならば虫にたかられた時はその虫を振り払う。それは人間とはかけ離れた図体を持つ奴として変わらない。

「危ねえ!!」

羽虫を叩き潰すかの如くギャビツシユが長い尾をしならせ、シン目掛けて勢いよく振り下ろす。

さしものゼロとて人間の姿のままではどうにも出来ない。

そして復讐者を標的の凶撃が押し潰そうとしたその時、

『フツ!!』

万物を反射する閃光と共に出現した銀色の巨人によつてそれは防がれた。

『シエエエイ!』

『グウウウウ!!』

鋭い上段回し蹴りを側頭部にもらい、ギャビツシユは悲鳴と共に転倒する。

『ミラーナイト!!』

『間一髪でしたね』

シンの窮地を救った銀色の巨人——ミラーナイトは、戦闘中にもかかわらずこちらに向かって挨拶なのか頭を下げるという余裕を見せている。

『グレンはどうした?』

『あのお馬鹿さんなら大いびきかいて寝ていますよ。一応声は掛けたのですが、起きる気配がないので置いて来ました』

淡々とそう言うが、声音には確かな苛立ちも含まれていた。

『すぐに戻って小一時間ほど説教したい気分なので、早めにカタをつけるとしますか』

『待て! 善子と梨子がそいつに捕まってる!!』

お得意の刃乱射でギヤビツシユを八つ裂きにしようとしていたミラーナイトを攻撃に移る寸でのところで止める。

『・・・なるほど・・・レディを人質に取るとは感心しませんね』

聞く話によると彼はエスメラルダという星の王女に使える者らしい。いちいち女性に対する言動が気障なのはそれが一因してるとか。

『それで、私はどうすれば?』

流石グレンと違って話の理解が早くて助かる。あの馬鹿ならばとてりあえず燃やすと

か言い出していただろう。

「とりあえずそいつの動きを抑えてくれないか？」

対処法を挙げたのはシンだった。ミラーナイトの介入により冷静さを取り戻したのか、熱気はすっかり抜けきっていた。

「その隙に私が彼女達を救出する」

『……了解です』

シンの存在にツツコまない辺り、味方であることは理解してくれたようだ。片腕から繰り出す光の刃——ミラーナイフでギャビツシュを牽制しつつ、勇ましくその巨体に掴みかかる。

『グキユウウウウウ！』

『出来ればもつとスマートにやりたいところでしたが……、これでいいでしょうか？』

「十分すぎるくらいだ。感謝する。行くぞゼロ」

「え——おうわっ!!」

シンに肩を掴まれたと思った次の瞬間、周りの景色が一変する。

辺り一面真っ赤に染まり、足元にあったコンクリートの歩道などは消え失せている事から今の今までいた場所ではないのは確かだ。

『おい、ここは一体——』

どこだ、とゼロが続けようとした時、とある存在が視界に入った陸はすぐさまそれに向かって駆けよった。

『善子……つーこた、ここは奴の目の中か……』

「ああ。テレポート装置を使った」

ミラーナイトにギャビツシユの動きを抑制するよう頼んだのはこのテレポートの座標がズレないようにするためだったようだ。

「……桜内梨子は私に任せろ。お前はその娘の安全を確保してくれ」

「言われるまでもねーよ」

『……つか、随分と梨子を気に掛けてるみてーだな』

「……偶々だ」

そう短く返答すると、シンはテレポート装置を使って善子を抱き上げた陸をギャビツシユの体外へと転送した。

「……はは……、偶々か……」

誰もいなくなった眼球の中で、首から下げたペンダントを開く。

その中の写真に写されているのは、かつてギャビツシユによりその命を奪われた娘の姿。

(・・・きつと、そんな事はないのだろうか)

彼女も津島善子と同じように優しさを利用されたのだ。唯一違ったのは、その挙句に命を奪われたどうか。

思えばあの日から自分はギャビツシユ殺しに奔走するようになったのだったか。

復讐を果たすことだけを胸に、奴の同族を始末し続けてきた。

・・・まさかここに来て、別の思いが芽生えるとは思ってもいなかったが。

(・・・二度と・・・、同じ思いはしてなるものか・・・！)

ペンダントを強く握りしめ、シンは梨子の捕らえられているもう片方の眼球へと自身の身体を転送した。

「うおおおおおおおッ
!!」

気を失っている善子を抱えながら、陸は続々と背後から襲い掛かる雷撃を回避する。

『おいコラミラーナイト！ ちゃんとそいつ抑えてろよ!!』

『流石に尻尾まで抑えられる訳ないでしょうが！ それくらい自分で何とかしなさい！』

『んだとコノヤロオ!!』

「こんな時に喧嘩してんじゃねえよお前等！」

ウルティメイトフォースゼロらしいといえはらしいが、時と場所ぐらい考えて欲しいものだ。ミラーナイトがこうなるのは珍しいといえは珍しいが。

「つーかしつけーなああの野郎」

善子を奪われた仕返しだと言わんばかりにこちらを狙ってくるギャビツシユ。知能が高いが故か、どこことなく人間臭い怪獣だ。

『全くだ。絶対友達いねーだろアイツ』

とにかく奴の目の中に行っている間に町の人々の避難が終わったのは幸いだった。

ゼロと身体能力を共有している今の陸だからこそ避けられるものの、ここにまだ一般人が残っていたら大惨事だっただろう。

『ぐっ……!』

『グキユウウウウウ!!』

「うおあつ………」

強引にミラーナイトに光弾を叩き込み吹き飛ばしたギャビツシュが地面に突き立てた尻尾から電撃が放たれ、衝撃で道路が大きく捲れ上がった。

「あがつ………」

それにより吹き飛ばされてしまったが、咄嗟に自分を下敷きにしたので善子に怪我をさせずに済んだ。

だがマズイ。ギャビツシュが捉えていた少女を奪われた事に怒りを覚えているのなら狙われるのは確実だ。それに加えミラーナイトもまだ起き上がれそうにない。

地面を転がった今なら尚更………

『グウウウウウ………』

だがギャビツシュの瞳はこちらを見ていない。

「があ………」

『ツ！ お前等!!』

凶獣が狙いを定めたのは見た目中年の男と紫檀髪の少女の二人。つまり奴の内部から脱出したシンと梨子だ。

「ちょ……大丈夫ですか!!」

梨子の方は意識を失っておらず、苦しそうに悶えるシンを前にどうしたらいいか分か

らないといった様な表情をしている。どうやらシンも陸と同じように自身を下敷きにしたらしい。

「……………私はいい……………逃げろ……………」

「……………！ そんな事出来る訳——」

『グキユウウウウウウウウウウウウウウウウ!!』

二人が揉めている今を好機ととつたのか、邪悪に微笑んだギャビツシユは梨子目掛けて鋭い鉤爪を振りかかった。

「ッ！ 桜内ッ!!」

反射的に飛び出すのが、当然間に合うはずもない。

必死の形相で四肢を動かす陸の眼前で、無情にも紅い鮮血が迸った。

本当に死んだと思った。

自信目掛けて腕を吹き翳した怪獣を前に死を悟り、目を瞑ってその時を待った。

「っ……………!」

生々しい音が耳に届く。きつと肉が引き裂かれたのだろう。

だが、痛みはない。違和感といえは生暖かい感覚が顔の一部に広がっていくぐらいだ。

「……え……」

何が起こったのかと恐る恐る目を開き、そこで言葉を失う。

「っ……！っ……！」

顔に掛かった生温い液体の正体。それは、梨子を庇ってギャビツシユの攻撃を受けたシンの吹き出した血潮だった。

「っ……！っ……！な……なんで……」

震えが止まらない手で、俯せになって倒れるシンの身体に触れる。その背中にある思わず目を逸らしたくなってしまう程深く痛々しい傷から夥しい量の血が溢れ出ていた。

「……無事で……、良かった……」

シンは途切れ途切れに口を開く。弱々しい声音の反面呼吸は荒く、早急に手を打ったところで助かるか怪しいのも明らかだ。

「……なんで……、助け……」

梨子の方はどこも怪我は追っていないはずなのに、うまく言葉が出せない。

理解が追い付かなかった。どうして縁もゆかりもなく、今日会ったばかりの、しかも

先程までシンの事を敵だと誤解していた自分を庇ったのか。

「．．．．．私が、助けたかったから．．．．．助けただけだ．．．．．」

そんな梨子の心境を汲んだのか、慰めるように口を動かすシン。

「喋つちやダメです！ 死んじや——」

「．．．もういいさ。どちらにしろ．．．もう間に合わない．．．」

そう論ず表情は妙に晴れやかで、致命傷を負い、死が迫っているとは思えない。

背中に傷があるにも拘らず仰向けになると、胸のペンダントを引き千切つて震える梨子の手の中に握らせた。

「．．．．．君は．．．．．死んだ娘に似ている．．．．．。丁度．．．．．あの個体に

殺されたんだ．．．．．」

「．．．．．！」

開かれたペンダントの中で佇む写真には、確かに梨子とよく似た少女と、その隣で笑うシンの姿があつた。

「．．．まさか．．．．．それで私を．．．．．?」

虚ろな瞳を梨子の視線と重ね、微かに微笑む。

「．．．君の顔を見た時．．．．．ギャビツシユに殺された娘の事が頭を過つた．．．．．

それと同時に、もしまた誰かが、ギャビツシユに寄つて娘と同じ道を辿つてしまつたら

と思うと……、たまらなく胸が痛んだんだ……」

「……それはつまり、シンにこうさせてしまったのは梨子のせ——、私には、ギヤビツシユを殺すことしか頭になかった……」

そう思いかけた梨子の思考を、シンは尚も声を出すことで遮った。

「復讐者として……、娘の仇を……、娘が味わった苦しみを奴ら全てに……、与えるために……、だが、そんなものは人のする事ではない……、がはっ……！」

口から血を吐き出しながらも言葉を続けることを辞めず、消えゆく命の灯に喝を入れ、ただ真つ直ぐに眼前の梨子へと向け続ける。

「……全ての出会いには意味がある……。私は、君に会って、ギヤビツシユを倒す本当の目的……。もう二度と、娘のように優しさを裏切られることが無いようにと……。それを思い出すことが出来た……。人の心を取り戻すことが出来た……」

改めてペンダントを梨子の手の中に収めさせると、シンもまた強くその手を握る。

「……だから……。君が、気に病む必要はない……。私は、むしろ君に感謝しているよ……。ありがとう——」

『ゼロはよろよろと起き上がったギャビツシユに対し、吠えた。
『．．．テメエだけは．．．．．絶対に許さねえ!!』』

八十九話 見えない力

『……テメエだけは！ 絶対に許さねえ!!』

ゼロの怒りの咆哮で地面が揺れる。

シンを殺したギャビツシユに対して憤怒を覚えているのは陸も同じ。悪趣味に、ただ生命を殺し、その死に愉悅を感じる奴を到底許せるはずもない。

「……桜内。善子の事頼むわ……」

陸のその言葉を皮切りに、ゼロはその足を踏み出した。

『デエエエヤ!!』

『グキユウウウウウウ!!』

烈火の如し正拳突きが眉間へとめり込み、ギャビツシユは顔を歪めながら悲鳴を上げる。

『ブラックホールが——』

「——吹き荒れるぜ!!」

「俺に限界はねえ!!」

紫色の閃光が舞う。

ネオ・フュージョンライズしたウルトラマンゼロビヨンドが連続で突き出す百裂パンチにより、青い獣の身体は空中へと打ち上がっていく。

「ハアアアア!!」

天を穿つように渾身の力を込めた拳を振り上げ、その衝撃の余波で道路のアスファルトが捲れ上がる。

そんな一撃を貰ったギャビツシユは口から空気と血を吐き出し、威力を殺しきれずに空へと昇った。

「フツ!!」

ビヨンドツインエッジを両腕に構えたゼロもそれを追い、空中に飛び上がった。

「デエエエエヤアアアアアアアアア!!」

飛翔できるゼロとそれが出来ないギャビツシユだ。空中ではゼロに圧倒的なアドバンテージがある。

『ビヨンドリープアタック』

超能力による瞬間移動を駆使して目にも止まらぬ速さで天を駆けるゼロが、光の軌跡を描きながら二本の刃で斬撃を繰り返した。

『もう止められないぜ』

剣技の嵐とも呼べる猛攻が終わった後、額のビームランプに集約したエネルギーを一気に解き放つ。

『エメリウムスラッシュ!!』

極太の光の線が疾走し、青い身体を貫かんと前へ伸びる。

『グキユウウウウウ!』

だがここでギャビツシュの能力が更にもう一つお披露目された。

善子と梨子を捕らえていた紅い瞳はあらゆるものを吸収できるらしく、エメリウムスラッシュを残らず吸い寄せると、鋭い牙を覗かせる口からカウンターとしてそれを跳ね返した。

『……………』

ズガアアアアアン! と爆発音が轟き、濛々と爆炎が上がる。

『グキユウウウウウ……………!!』

そして何故か悲鳴と一緒に地上へ落下していくギャビツシュ。

やがて黒煙は晴れ、その中から姿を現したのは一切ダメージを負っていないゼロ――

『私を忘れてもらっては困りますよ』

ゼロを守った鈍色の光。

実際ほとんど忘れられていたミラーナイトが展開した鏡の盾が、跳ね返された光線を更に跳ね返していた。

『・・・ゼロ』

『ああ』

ミラーナイトの声を受けたゼロが超高速で飛び出し、駒のように回転しながら落下するギャビツシユ目掛けて急降下する。

斬撃の竜巻と化したゼロがギャビツシユと交錯した刹那、シンの命を切り裂いた長い尻尾を切断。

『地獄で、あの親子に詫びやがれ!!』

奴より先に地上に降り立ち、自身のエネルギーを高めていく。それと同時に発射したのはクアトロゼロスラッガー。

『スラツキングコーラス!!』

八つの球体から一斉に放出されたゼロ最強の破壊光線、そして四本の刃がギャビツシユを貫き、断末魔の遠吠えを掻き消しながら大爆発を起こした。

ギャビツシユを粉碎し、陸は変身を解いて梨子と善子の元へと戻っていた。

「にしても、ライラプスには忘れられて、ギャビツシユにはいつの間にかいなくなられて……」

気絶状態から復活した善子がいつもの調子で愚痴を零す。

梨子と相談し、善子にはシンの事を伝えない事にした。ギャビツシユが実は凶悪な宇宙怪獣だったという事も、シンが奴に殺された事も。

〈こいつにや悪いが……、仕方ないよな〉

今回の一件。決して善子が悪い訳ではないが、心根が優しい彼女ならばきつと自分を責めるだろうから。

ただ一応シンの名誉のため、シンは希少動物の保護をしている者だとし、ギャビツシユは彼に連れられ宇宙に帰ったという感じに事実を隠蔽しておいた。

「……この墮天使ヨハネを蔑ろにするなんて……、やっぱり偶ぜ——」

「・・・でも、あんこちゃんは、見てくれたじゃん」

「え？」

先程から黙りこくっていた梨子が不意に口を開き、善子の言葉を遮った。

「・・・見えない力はあると思う。善子ちゃんの中だけじゃなく、どんな人にも・・・」
死んでいったシンが遺したペンダントを握り、そう語る梨子の顔は朗らかで。

ペンダントの託していった彼へと、優しく微笑みかけるようだった。

「・・・そうかな・・・？」

「うん。・・・だから信じている限り、その力は・・・。働いていると思うよ」

梨子が明るく微笑み、その手に収められたペンダントもまた笑うように輝く。

まるでシンが、そしてその娘が、今の言葉を聞いていた。そう教えてくれるように。

「ま、要するにお前らしくいろつてこった。・・・。アイツが遺していった分もな」

最後の方だけ善子に聞こえないような小声で呟き、梨子と二人で笑みを交わす。

「・・・なんか妙に良い雰囲気になってるのが気になるけど・・・、流石我がリトルデーモン！ ヨハネの名において、上級リトルデーモンに認定してあげる!!」

自分の理解者を得た事が嬉しかったのか、お得意のリトルデーモン認定を陸と梨子にしてくる。

「なんか前にも言われた気がするぞそれ」

「ふふ……、ありがとう。ヨハネちゃん♪」

「善子……って、あれ……?」

調子を崩される善子を見て笑う梨子。

その小さな手の中では、やはりシンのペンダントが彼女を見守るように煌いていた。

「……悪かったな。辛い思いさせて……」

善子と別れた後。

今日も梨子を家まで送るべく彼女を後部の荷台に座らせて自転車を漕いでいる最中、陸はふとそんな事を口にした。

自分とは何の関係もなかった宇宙人とは言え、自分の目の前で人の命が失われるのは辛い。

多少はそういう事に慣れている陸でも少しくるものがあるのだ。一介の女子高生である梨子なら尚更だろう。

現にシンは、彼女を庇ってその命を散らしたから。

「……仙道君のせいじゃないよ。確かに私が無事だった事を素直には喜べないけど……あの人は自分がやりたいことをやっただけだから」

夕陽が彼女の長い髪を朱く照らす。普段は見惚れるはずのその色も、今日ばかりは血の色を連想してしまう。

『……あの野郎、最期になんて言ってた？』

善子という時は隠すようにしていた感傷を纏いながら、ゼロが厳かに声を出す。

「……ありがとう……って……」

『……そうか……』

それ以上は何も聞かなかった。

何故シンがそう思ったのか、そう行動するに至ったのか、梨子はきつと彼から聞いている。

けれど、その答えを持っているのは彼女だけでいい。

「……仙道君はさ、見えない力はあると思う？」

暫くの沈黙の後、梨子はふとそう言った。

「……さつき善子に言ってたやつの事か？」

「……うん。あの人が言ってたんだ。全ての出会いには意味があるって。それってさ、

何か見えないものに導かれて出会ったって事なのかなって。そう思ったの」

シンが梨子との出会いにどんな意味を見出していたのかは陸には分からない。けれども、梨子の顔を見るにはきつと素敵なものだったのだろう。

「・・・運命とか、そう言う力に・・・」

運命。この言葉をどうとるかは人次第だろう。

予め定められた幸福なものだったり、不幸なものだったり。自分で切り開くものだったり。

だが、それは誰しにも秘められた可能性だから。

「・・・アイツがそう言ったんなら、そうなんじゃねーの？ 意味のない出会いなんてない」

正直それが事実だという確証もないし、どこまでも胡乱で曖昧なものだ。

けど、それを信じる限り、見えない所で人と人は繋がっている。そう思いたいから。

「アイツだけに限った事じゃなくて、A q o u r s 皆、千歌も、曜も、桜内も、出会うべくして出会ったって・・・その顔は何でしょうか？」

シンの言っていたらしいことを自分なりに解釈していると、何故か梨子が軽く頬を膨らませてしまった。

「え？ 何？ 俺何か間違った？ アイツの意思汲み取れなかった？」

捉え方は人それぞれだろうと思いつつもこの状況にオロオロする陸に対し、梨子は尚も膨れながら口を開いた。

「………苗字」

「うえ？」

「………何で私だけずっと苗字呼びのままなの？」

憂い交じりの上目遣いを向けてくる。

その言葉に安堵を覚えつつも、拍子抜けして危うくサドルからずり落ちかけてしまった。

「……なんだそんな事かよ………心配して損した」

「そんな事って何!? これでも一人だけ避けられてるんじゃないかと思つて結構不安だったんだよ!!」

千歌に作詞を急かす時のような勢いで梨子に捲し立てられる。まさか気にしていたとは思わなかった。

『流石は鈍感帝王。梨子はピアノコンクールの一件以降からだつつの………』

そしてこういう時のお約束になってきたゼロの小言。もう何度目だか分からないが未だに理解できない。

「まあ、気にしてたなら悪かったけどよ。………そういう割には、お前も俺の事苗

字呼びだよな?」

「つ……! それは……その……こつちだけ名前で呼んでたらその……あれみたいじゃない……」

「……? あれって何?」

『あー、そーいゝのは聞くもんじゃねーって何回言つたら分かんだよ馬鹿。いい加減学習しやがれボケナス』

「口悪いなオイ」

これは悪いのは陸なのだろうか。そしてゼロが愛と正義の伝道師なのだろうか。どちらにしろ、切り抜ける方法は一つしかないだろう。

「……なんかいまいち釈然としねーが……、なんか悪かったな。梨子」

花丸に善子と続き、こういう強要されて名前を呼ぶのは何回経験しようと思えない。というか何回も経験するものなのだろうかこれは。

「……うん。……陸君」

妙に嬉しそうな梨子の声を背に、改めてペダルを漕ぐ足に力を籠める。

まあ、何だかんだ言つて可愛い女の子に名前前で呼んでもらえる事に悪い気はしない。むしろこれはこれでいい。

これもまた、意味のある事だという事で。

「あ、そうだ陸君。ちよつとお願いしてもいいかな？」
「ん？」

日はすっかり沈み、秋の風物詩とも言える満月が辺りを照らし始めた頃。

「……梨子ちゃん？ それに陸ちゃんも……二人共どうしたの？」

自宅である十千万旅館の玄関口でいた相手は奮闘している梨子と、それを見守る陸を見かけた千歌が二人の声を掛ける。

「……俺も知らん。詳しくは梨子に聞け」

「？」

呼び方が変わった事と行動の不可解さに首を傾げながら、千歌は梨子の方に視線を移す。

「………試してみようかなって、これも出会いだから」

「え？」

今までしいたけには恐怖しか抱いていなかった梨子が、穏やかな表情を保つたままその手を近づけていく。

「……私ね、もしかして、この世界に偶然は無いのかもって思ったの」

「偶然は………無い……?」

自身に起こった出来事を偶然の一言で済みますのか、それともっと別の言葉で表すのか。それは人それぞれだ。

でも、少なくとも梨子は――、

「色んな人が、色んな思いを抱いて、その想いが見えない力になって、引き寄せられて………運命のように出会う。………全てに意味がある」

甲を下にして開かれた梨子の手の平には、あんに与えていたものである犬用のビスケットが乗っていた。

「………見えないだけで、きつと……!」

じつといていてくれたしいだけが緩慢に動き、梨子の手から直接ビスケットを口にす

る。それを見て幾分か表情に喜びの色が差した梨子は、そつと、ゆつくりと、空いている方の手をしていたけの頭に近づけて行き………、

「……ふふっ」

『おっ!』

「わあああ……!」

遂に自分から、犬であるしいたけに触れることが出来た。

触り心地を味わうようにその頭を撫でながら、梨子は千歌に向かって微笑んだ。

「……そう思えたら、素敵じゃない？」

「……偶然じゃない。全てには意味がある……か。……確かに素敵だね、梨子ちゃん♪」

梨子の奮闘を見届けたオウガの漏らした笑い声が、潮風に乗って運ばれていく。

「今のボクがあるのは、紛れもなく君達との出会いがあったからさ。だとしたら、梨子ちゃんの言う通りこの出会いには意味があつて、ボク等は出会うべくして出会ったのかもしれない」

梨子を中心に笑う陸達を一瞥し、十千万からは少し離れた場所にある民家の屋根に寝転ぶ。

「……だつたら、元は光の勢力に身を置いていた君が闇に落ちた事も、何かしらの意味のある事なのかもしれないね」

満月に手を掲げながら、決して届くはずのない言葉を紡ぐ。

「……君は、今の君自身をどう思っているんだい………ベリアル」
星空に投げかけた疑問は当然帰って来る事はなく、オウガは笑いながら身体を闇へと
変換して消えていった。

「夜空はなんでも知ってるの？ ……なんてね」

九十話 超えるべき壁

「……………」

浦の星女学院スクールアイドル部部室は、不気味な程静寂に包まれていた。

三年生組を除くA q o u r s は、固唾を飲んでパソコンの画面を見つめている。

「……何だよアイツ等のあの剣幕は……」

（予選の会場、今日発表になるらしい）

そう。この日はラブライブ本戦へと進むための最後の砦、地区予選大会の会場が発表される日なのだ。

前回の地区予選大会といえば、夏休みの――、

「来ました!」

パソコンが鳴らしたピロン! というメロディの後、声を上げたルビィに続いて五人の視線が一斉に画面へと集中する。

「見た事あるぞら!」

「……は……、前回ラグナロクが行われた約束の場所」

「私達が突破できなかった、地区大会」

前に梨子が言っていた見えない力とやらに引き寄せられたのか、数奇な事に以前Aqoursが破れた会場が予選の舞台となったのだ。

まあ、同じ東海地区予選なので当たり前といえは当たり前だが。

「リベンジだね」

「……………うん」

「……………」

Aqours一二年生が前回の雪辱を晴らすことに燃える中、陸は一人浮かぬ顔でその光景を眺めていた。

「……………そういや、あの事知ったのもあの場所だったな」

（……………ああ）

Aqoursにとつては以前力及ばずに敗退した、ある意味いい原点回帰のきっかけとなった場所。

だが陸にとつては、知らなければいけないが、知りたくなかった事実を知った場所でもある。

……………じゃあ、あの時のネクサスは……………

……………千歌……………?

かつてこの宇宙を崩壊の危機から救った伝説の超人、ウルトラマンノア。

そのノアの光が、ウルトラマンネクサスという形で A q o u r s のリーダーである高海千歌には宿っているのだ。

(・・・正直、まだ信じたくねーってのはあるけどよ)

オウガにその話を聞いた時はそれこそ半信半疑だった。

だが前にネクサスが降臨した時の状況、千歌のデュナミストとしての素質、そして何より実際にその光を目の当たりにした新学期の朝の事。

これらはオウガの話に確証を持たせる材料としては十分過ぎた。

へ・・・もうそれが紛れもない真実な事に変わりはないんだが・・・、如何せん、最近ネクサスの光がウンともスンともしねーからな

千歌に宿る光は、ベリアルを打ち破る希望であり、同時に絶望を呼び起こす鍵でもある。

後者にさせないための絶対条件としてこちらが先にその光を完全に発現させなければいけないのだが・・・、ゼロの言葉の通りあの日以降何も音沙汰が無いのだ。

(・・・千歌を支える仲間との絆が鍵・・・)

へああ？　んだそりゃ？

(・・・前にオウガが言ってた事だ。千歌が心に秘めてる影がアイツ自身の成長を妨げて

るってな)

そしてその影が光——ここではその千歌を支える仲間との絆の事を差すのだろう——によつて照らされた時に見せる輝きが楽しみだと、オウガはそう言っていた。

「なるほどな。まあ確かに心の影つてのはデュナミストの特色ではあるが……、アイツの影……一体なんだ……？」

傍から見れば、というか親しい者から見ても千歌にそんなものがあるようには思えない。

「……心当たりはないといたら嘘になるが。」

「……普通怪獣……」

「へえ？」

「ついうっかり口に出してしまい、ゼロだけでなく千歌まで反応してしまった。」

「……陸ちゃん、なんか言った？」

「上手くは聞き取れなかったのか、不思議そうな顔で問いかけてくる千歌に対し陸は。」

「……いや……、何でもない……」

今のところは、そう誤魔化しておいた。

一方その頃。

「五十七人?!」

生徒会室にて鞠莉、果南と共に仕事をしていたダイヤが、とある数字を見て声を上げた。

「そう。今日現在、入学希望者は五十七人」

「そんな……この一ヶ月で十人も増えていないと言うのですか?!」

鞠莉のスマホを手に取りダイヤが確認していたのは、今現在の浦の星女学院の入学希望者の総数。

統廃合を止める条件として課された入学希望者数百人までとは程遠い。

「鞠莉のお父さんに言われた期限まで、あと一ヶ月もないよね……」

「……ラブライブ地区予選大会の行われる日の夜。そこまでに百人を突破しなければ……今度こそ、後はNothingデス」

入学希望者数を増やすための奮闘を始めてから早数ヶ月。それでたった五十七人しか集まらなかったというのに、あと一ヶ月でその人数と大差ない四十三人を集めるのは困難を極めるだろう。

「つまり、次の地区予選が……」

「Yes……。Last Chance……」

薄れゆく希望に、室内は重苦しい空気に包まれる。

「そこに掛けるしかないという事ですわね……」

ダイヤの零した言葉にうんと言える者は、この場にはいなかった。

『ほう……、それは面白い事を聞きましたね……』

ダークネスファイブの潜む宇宙船内。

諜報員を媒介に三年生組の会話を聞いていた魔導のスライは、IQ一万とも呼ばれる頭脳を駆使して不穏な策を企てていた。

『……なあ、何か最近アイツ一人だけで作戦進行してる気がしね？ 俺達影薄くね？』

『グウウウウ……』

『あやつが参謀役なのだから仕方ないが……、これ我等は必要なのか？』

『む……、ここから一つ吾輩達も行動を……』

『駄目です』

団欒を組んでひそひそと話し合うグロツケン、デスローグ、ジャタール、ヴィラニアスの四人に速攻で釘をさすスライ。

『どこぞのブロンズ野郎のように単独行動に走って死なれては困るのですよ。我々には一人一人役割がありますから』

『ぬぐう……』

痛いところを突かれて押し黙るジャタール。

『のうスライ。お前今度は何をやるうとしてるのだ？』

『別に……』

問いかけるヴィラニアスに、スライは邪悪な色を滲ませながら笑う。

『……ただ、奴を利用してみようと思っただけですよ』

紅い双眸が見据える先の空間ウインドウには、かつてウルトラマンゼロに倒された赤い悪魔の姿が映っていた。

「ワンツースリーフォーワンツースリーフォー！　ここで変わって!!」

沼津の練習スタジオ。

壁に備え付けられた鏡を前に、振付やフォーメーションの練習をするAqours一同。

「Changeしてー！　Up！　Up！」

リズムを刻んでいた鞠莉の手拍子が止まり、各々最後の決めポーズを取りながら止まる。

「Oh Good！　ここの腕の角度を合わせたいねー。花丸はもうちよいと上げて」

「むううううう……」

「そうそう♪　その角度を忘れないでね。じゃあInterval後、各個人で練習ね」

「「ふうううう……」」

その一言で休憩入り。

やはり前回突破できなかった予選を控えている事だけあり、練習量は上がってきている。

「疲れたずらう……！！」

「お疲れー」

『なんもやってねー俺等が言うのも変な感じだな』

A q o u r s 筆頭で体力のない花丸が床に倒れ込む。まあ、この練習メニューは体力のある人でも辛いものがあるだろうが。

「わっ！ 全国大会が有力視されてるグループだって！」

「ずら？」

「なになに？ そんなのあるの？」

曜が鞆から取り出したスマホに皆の視線が集まり、羅列されたスクールアイドル達の名前を閲覧していく。

「ラブライブ人気あるから、そういうの予想する人も多いみたい」

「どんなグループがあるの？」

「えつと……」

聞いた事はあるグループ名もチラホラ見受けられる。とは言っても前年度全国大会に出場したグループの名が多いが。

そう例えば、

「「「「あつ」」」」

画面をスクロールしていた曜がA q o u r s には一番馴染みのある名前をタップし、それについてのまとめ記事を表示する。

グループ名は、Saint Snow。

「前回、地区予選をトップで通過し、決勝では八位入賞したSaint Snow。姉、聖良は今年三年生。ラストチャンスに優勝を目指す」

「・・・やっぱ出てくるか」

以前聖良本人が言っていた事だが、やはりどこのスクールアイドルもレベルが上がってきている。誰だって努力しているのだ。

「二人共気合入ってるだろうな」

「あとは・・・、あつ！ Aquours！」

「えっ!!」

「ほら！」

「まる達ずらくー！」

「Hey! なんて書いてあるの?」

数ある実力の高いグループ等の中に自分達の名前を見つけ、衝撃を覚えながらも改めてそれに目を通す。

「前は地区大会で涙をのんだAquoursだが、本大会予備予選の内容は、全国大会出場者に引けを取らない見事なパフォーマンスだった。今後の成長に期待したい」

「・・・期待・・・」

期待。浦の星や、地域の皆からのものでなく、純粋にAqoursの実力を見たスクールアイドルファン達からの期待。

今までAqoursが背負ってこなかったものも、ここでズシリと押し掛かってくるのを感じた。

「ふっふっふ……、この堕天使ヨハネの闇能力をもつてすれば、その程度造作もない事です！」

「そう！ 造作もない事です！」

「あ？」

普段は全員にガンスルーされるか花丸のツツコミが襲いかかる善子の堕天使芸だが、今回はそれに乗る声が一つ。

しかも、意外過ぎる人物が。

「………梨子？ どうしたお前」

「………はっ！」

陸の一声で無事こちら側に帰還する梨子。

何だろうか。地獄の底から這いあがってきた堕天使っぽい何かに憑りつかれてもしてしまっただろうか。

「さっすが我と契約を結んだだけの事はあるぞ、リトルデーモンリリーよ！」

「っ！ 無礼な！ 我はそのような契約、交わしておらぬわ！」

一瞬バグっただけかと思つたが、善子に呼応してすぐに墮天してしまう。

「どうしたの？」

「リリー……？」

「これが墮天ずら」

「うゆ……！」

流石の豹変具合に他のメンバーも戸惑い気味である。

梨子と善子はあんことギャビツシユの騒動以降妙に仲良くなり、二人で行動したり話すことも増えてきたのだが……、どうやら変なところで影響されてしまったらしい。

「まあ、なんつか……お疲れ様」

「ちよつと待つて陸君違う！ これは違くて——！」

滑つた善子を慰める時と同じ目で見ると必死に否定はしてくるが、

「Welcome to Hell Zone」

「待てええい！」

見ての通りこの有り様なのでご愁傷様としか言いようがない。遅るべし墮天ウイラス。

「なんか楽しそうで良かった」

「千歌ちゃんまで」

まあ、仲良くなったならそれはそれでよしである。それより問題は予選の方だ。

「今回の地区予選は、会場とネットの投票で決勝進出者を決めるって……」

つまり今までのように結果発表に時間はかからず、全グループのパフォーマンスが終わったその日の内に発表されるという事だ。

「会場の投票ね……」

ルビイの言葉に、ちよつとした懸念が頭を過る。

「良かったじゃん。結果出るまで何日も待つより——」

「そんな簡単な問題ではございませんわ」

楽観的な千歌の言葉を遮ったのはダイヤのその一声だった。

そして彼女に続く形で隣にいた鞠莉が口を開く。

「会場には、出場グループの学校の生徒が応援に来てるのよ？」

「つ……！ ネット投票もあるとは言え、生徒数が多い方が有利……！」

「じゃあもしかすると……」

普通に考えれば、自分の学校のグループに投票するのは当たり前だとすると……、

「そう……、生徒数で言えば、浦の星が一番不利ですわね」

と、言う事になってしまう。

なんともまあ、世知辛い現実だ。

「俺、グレン、ミラーナイト、ルイズ……あとオウガの奴も来るだろうから票は入れられるが……、五票じゃ弱いよな……」

少しは重い空気を払拭できるかと微妙か過ぎる希望を口にして見たものの、余計に空しくなっただけなので迂闊だったと反省する。

『……なあ、試したい事があるんだが、ちよつといいか?』

そんな雰囲気にはいい意味で水を差したのはゼロだった。

「……地球の法に触れないなら……」

ゼロは以前地鳴らしてUFOキャッチャーの景品を不法ゲットした前科があるヤンキーだ。そんな奴に頼るのはちよつと心許無い気もするが藁にも縋る思いでもあるのだ。

『おー、それじゃちよつと身体抜けるぜ』

そう言つて陸の身体から光の筋が幾筋も伸び、ウルティメイトブレスレットが消失する。

集約した光は人の形を作り、目つきの悪い一人の青年となった。

さりげなく陸は始めて見る、ウルトラマンゼロの人間態だ。前に果南から話は聞いて

いたがこんな感じだったのか。

「で？ それでどうすんの？」

「ふっ．．．、見てやがれ」

ゼロが自信满满かつ不敵に笑った次の瞬間、いきなりゼロの輪郭が覚束なくなる。

「え？」

いや、正確には輪郭が幾つも重なっているように見えると言うべきか。

何故なら今ゼロは．．．、

「「「「「「ははははははははッ！ どーよ！」「「「「「「」」

大体三十人くらいに分身し、陸とA q o u r sを全力でドン引かせているから。

「お前こんなのも出来るのな．．．」

「「「「「「ああ、前にマックスに習ったんだよ」「「「「「「」」

三十人の分身が一寸違わぬ動きでこちらに笑いかけてくる。

何だろう。頭にフォッフオッフオッフオッフオとか言ってる蟬みたいな両腕ハサミの生命体が浮かび上がってくるのは何故なんだろう。そして顔がうるさい。

「「「「「「どうだ？ これなら人数稼げるだろ？」「「「「「「」」

「気持ち悪いからお止めなさい」

「「「「「「あ？ そう？」「「「「「「」」

三十人の分身を相手に一切臆する様子もないダイヤにスツパリ切り捨てられ、ちよつとしよんぼりしながら戻ってくるぜ口。

『上手くいかねーもんだな』

「どつちにしろ不審がられて終わりだつての」

とにかくA q o u r sが不利だという状況は覆しようが無いようだ。

本当に問題や試練ばかりが押し寄せてくるグループで飽きさせてくれない。全く喜べないが。

「……生徒数の差ねえ……」

今更愚痴を言ったところでどうにもならない事をぼやきながら、陸は再び練習に戻っていく少女達の姿を眺めるのであった。

九十一話 もつと上へ
 TAKE ME HIGH
 R S

ラブライブ予選にて、Aquoursが最も不利な立場にあると分かったその夜。陸はこの状況を覆すためのヒントを求め、とある人物への相談を試みていた。

その人物とは――、

『――もしもし?』

数回のコールの後、目的の人物と電話が繋がる。

『……貴方から掛けてくるとは珍しいですね。仙道さん』

「……いや、ちよいと相談したいことがありますね……」

通話相手は鹿角聖良。今日話題にも出た北海道のスクールアイドル、Saint Snowのリーダー。

東京でヤプールに襲われたあの日以降、向こうからの申し出でたまに連絡を取り合うようになったのだ。

『あら、さつき千歌さんからも相談があると電話を貰いましたが……、もしかして同じ内容でしょうか?』

「ああ、そうだったんすか?」

そういうえば千歌に言われて聖良の番号を教えてあげたなと思いつ陸。

「で? アイツは何と?」

『……何でも、投票のルール上出場グループの中で圧倒的に不利、との事でしたが』

「……質問しようとした事が全く持つて同じだったのでちよつと悲しくなつてきました俺」

いくら幼馴染とはいえそこまで思考が似るものなのだろうか。……いや、今

回の場合はA q o u r s全員千歌と同じ事を考えているだろう。

『……私は、圧倒的なパフォーマンスを見せて生徒数のハンデを逆転するしかない、と千歌さんには伝えました』

「……他校の生徒も味方につけると……」

方法としては単純だが、途方もなく難しい事だ。その理由は言わずもがな。

『……圧倒的なパフォーマンスというのは、上手さだけではないと思います。むしろ今の出演者の多くは、先輩達に引けを取らない、歌とダンスのレベルにある』

それは東京のイベントで痛い程痛感した。スクールアイドルのレベルは今も発展途

『……まあ、私がそう思えたのは、貴方のおかげですけどね。いつも相談に乗って頂きありがとうございます』

今回相談を持ち掛けたのは陸の方だというのに、聖良側から丁寧なお礼をされてしまう。

まあ、最近よく電話越しに聖良の相談に乗っていたのは事実だが、今回ばかりは陸がお礼を言う番だ。

「……いや、こつちこそ当たり前の事聞いてすみません。そつちも忙しいだろうに」「これくらいなら別に構いませんよ。普段のお礼という事で。……それでは」
通話を終了させ、携帯をベッドの上に放り投げて自身もそこに転がる。

A q o u r s の輝き……、一体どんなものなのやら。

「……なあぜ口。A q o u r s が自分達の輝きを見つけるのつてさ……」
『……ああ』

『……俺等、見守るぐらいしか出来る事なくね?』

「A q o u r s r a s h i y e .」

次の日の屋上。

練習前の準備体操中だった皆に対し、千歌は話したい事があると言った。

「うん……。昨日、聖良さんと話してみて思ったの。私達だけの道を歩くつてどういう事だろう……。私達の輝きつて何なんだろう……。それを見つける事が大事だつて、ラブライブに出て分かったのに……。それが何なのか、まだ言葉になつてない……。まだ形になつてない」

昨日の陸同様、千歌もその事について考えていたらしい。頭弱いくせにらしくないことをする。

だが陸と聖良が導き出した結論と同じものに辿り着いたようで、こうして頭を悩ませていた。

「だから、形にしたい。形に……」

とは言つても、輝きという姿の見えない曖昧なものを形にし、尚且つステージ上で表現するとなると難しい。

当然皆もそれは分かっているの、答えは出せずに静寂を生み出してしまふ。

「このタイミングでこんな話が千歌さんから出るなんて、奇跡ですわ」

それを打ち破ったのはダイヤの一声だった。

やる気を出したダイヤは大地地雷なのだが、今回は彼女の纏っている雰囲気も違うので自然と期待を抱いてしまう。

「あれ、話しますわね」

「えっ……！！ でもあれは……」

ダイヤが横に流した言葉と視線に、珍しく果南が狼狽える。

「何？ それ何の話？！」

その反面千歌は興味津々といった様子で視線と共に彼女達へと詰め寄っていった。

「二年前、わたくし達三人がラブライブ決勝に進むために作ったフォーメーションがありますの」

二年前と言うと……今の三年生が一年生だった頃に結成していた元祖Aqoursの事だ。

「フォーメーション？」

「フォーリンエンジェルズ？」

「ずらっ？」

「ら、ら、ら……？」

「しりとりじゃないから」

「そんなのがあったんだ！ すごい！ 教えて！」

背後で謎の漫才をするメンバーを全く意に介さずに興奮する千歌。

だがそのフォーメーションを考案したであろう果南の表情は険しいものだ。

「……でも、それをやろうとして鞠莉は足を痛めた。それに、皆の負担も大きい。……今、そこまでしてやる意味があるの？」

果南の態度からは、どうしてもやらせたくないというのがひしひしと伝わってくる。

だが、

「なんで？」

閉ざした彼女の瞳を、千歌の屈託のない瞳が捉えた。

「果南ちゃん。今そこまでしなくていつするの？ 最初に約束したよね!! 精一杯足掻こうよ! ラブライブはすぐそこなんだよ!! 今こそ足掻いて、やれることは全部やりたいんだよ!」

精一杯足掻く、やれることは全部やる。廃校の決定を覆すと誓ったあの日に皆で決めた事。当然その場には果南もいた。

「……でも! これはセンターを務める人の負担が大きい! あの時は、私だけだっけど……千歌にそれが出来るの?!」

人間離れた身体能力を持つ果南がこう言うのだ。言葉の通りそのフォーメーショ

ンにはかなりの負担と危険が伴うのだろう。

そして彼女の性格上、そんな事は絶対に望まない。

「・・・大丈夫。やるよ、私」

突き放し、話を終わらせようとする果南の腕を千歌は掴み、確かな決意をもってそう言った。

「決まりですわね。あのノートは渡しましょう。果南さん」

「今のAqoursをBreak Throughするためには、必ず超えなくちゃならないWallerがありマース！」

「今が、その時かもしれないませんわね」

ダイヤと鞠莉に押され、果南は渋々守るように抱えていたノートを千歌に手渡した。

「言っとくけど、危ないと判断したら・・・私はラブライブを棄権してでも千歌を止めるからね」

そう、忠告を残して。

「よっ……ととわあぁっ!!」

その日の夜。

十千万前の砂浜には、起き上がったては転ぶ千歌の姿が確認できた。

「……ちよつと様子見に来たらこれか……」

『……まあ、確かに心配だよな……』

変に顔を出して邪魔をするのも悪かったので、少し離れた場所にある物陰に隠れながらそれを眺める陸。

そして、

「心配?」

「……やっぱり、こうなっちゃうんだなあって……」

陸より先にこの物陰から千歌を見守っていた果南と鞠莉。

二人共淡島住まいだというのにこんな時間まで千歌を気遣ってくれているとは、この二人らしいと言ったらしいが。

『つかあんな振り付け、お前等前はどんだけ激しい曲で踊ってたんだよ……』

果南のノートに記されていたフォーメーションというのは、他メンバーのドルフィンの後、センターの者がロンドアートからのバク転を披露すると言うもの。確かに危険だ。

「・・・鞠莉さんが怪我した理由って、あれが原因だったんですね」

「まーね。ちょこーつとハマしちゃって。てへぺろ♪」

軽く笑っているが、当時センターで無かった鞠莉でも怪我をする程なのだ。

全員の負傷の可能性が増えるこのフォーメーション。

確かに、果南が頑なにこれを取り入れる事を拒んでいたのも頷ける。

「あれ・・・やりたかったね、私達で」

かつての失敗を悔やみ、そして懐かしむように鞠莉が言う。

「それなら、何で千歌達にやらせるの？　まるで押し付けるみたいに」

「ちかっちなら出来るって信じてるから。・・・今のAqoursなら、必ず成功

する。果南だって、そう信じてるんでしょ？」

「・・・・・・・・」

鞠莉のその言葉に、果南は前にどこかで見せた仏頂面を保ったまま何も答えなかった。

時間は千歌の奮闘と共に流れ、気付けばラブライブ予選まで残すところ二週間となっていた。

「行きまあ——す!!」

「千歌あ——！ 頑張つてえ——！」

練習中である他の部活の生徒の声を受け、体育館のステージ上に立つ千歌は目の前に敷かれたマット目掛けて駆け出す。

ドン！ と床を踏みしめ、次の瞬間身体を翻し——、

「うあああつ!!」

バランスを崩し、派手に頭から落下。いくら柔らかいマットが衝撃を和らげてくれるとは言え、見ていて不安にならない訳ではない。

「おい、大丈夫か？」

いつも通り放課後に顔を出した陸が倒れる千歌に手を伸ばす。

「……だ、だいじようぶ……大丈夫……もう一回！」

その手を掴んで立ち上がった千歌は、なおも練習を続けようと荒い息を整えようとする。

「少し休もう？ 五日もこんな調子じゃ、身体壊しちゃうよ？」

「うん。まだ大丈夫。もうちよつとで、掴めそうで」

「地区大会まであと、二週間なんだよ？　ここで無理して怪我したら……」

「うん。分かつてる。……でも、やってみたいんだ」

梨子と曜が心配そうに声を掛けても、千歌は止まろうとしなかった。

その真つ直ぐな瞳には、一体何を映しているのか――。

「私ね……、一番最初にここで歌った時に思ったの、皆がいなければ何も出来なかつたつて。ラブライブ地区予選大会の時も、この前の予備予選の時も、皆が一緒だったから頑張れた。学校の皆にも、町の人にも助けてもらつて、だから……。一つくらい恩返ししたい」

「……」

どこか引つ掛かるものがあつた。

千歌の吐露したその心情に、本心に。

千歌自身が、まるで支えられているだけでここまで来たと言っているような言葉に。

確かに、影を感じたのだ。

「怪我しないように注意するから、もう少しやらせて！」

そう言つてスタート地点に戻り、未だ成功の気配を見せない練習へと戻つていった。

水平線に沈む夕日がオレンジ色に染め上げる砂浜。

普段は静けさに包まれている場所に、ドサ、ドサと、砂に映る影が何度も倒れる。

「大丈夫——!?」

「へーきだよ——!!」

A q o u r sとしての練習が終わった後も、千歌はずっとこうして自身の練習を続けていた。

その小さな身体に、幾つもの傷を作りながら。

「……気持ちは分かるけど……、やっぱり心配」

「……だよね……」

逆さにして不法投棄されていたボートに腰かけ、そんな千歌を見守る陸、曜、梨子、果南の四人。

「じゃあ、二人で止めたら？ 私が言うより、二人が言った方が聞くとと思うよ？ 千歌」

「うーん……」

「嫌なの？」

「聞くのは話だけだよ。どうせ何言っても恩返しだの頑張らないとだの一点張りして止めやしねーし」

こうなると言ったところで止まらないのは皆知っている。その強引さに押され、今の Aqours があるから。

だが、千歌は……、

「言ったでしょ？ 気持ちには分かるって」

両手に顎を寄せ、何度も転ぶ千歌を眺める果南に梨子は続けた。

「千歌ちゃん、普通怪獣だったんです」

「怪獣？」

『レッドファ——』

「黙ってる」

真面目な場面で赤い通り魔を降臨させる訳にもいかないの言い切らせる前に遮る。

「普通怪獣ちかちー。何でも普通で、いつもキラキラ輝いている光を遠くから眺めて……、ホントは凄い力があるのに……」

「自分は普通だって、いつも一歩引いて……」

そう。

「だから、自分の力で何とかしたいと思ってる。ただ見てるんじゃないやなくて、自分の手で……」

これが、高海千歌の影。

幼い事から抱いてきた周りとの劣等感の故に誕生した、彼女を縛り付ける負の鎖。

本当は普通など、とうに超えているくせに。彼女はそれを知らない……、いや、無意識の内に認めていないと言った方が正しいだろう。

へ…… オウガの野郎が言ってたのはこれか……

千歌は自分の心に強く、深い影を秘めていて、それが千歌自身の成長を妨げていると。オウガはそう言っていた。

(…… 千歌を支える、仲間との絆……)

その影を晴らすために必要な鍵。そしてそれによって心の影が晴らされた時に見せる千歌の輝き。

(…… 普通怪獣ね……)

砂浜に座り込み、夕日に手を伸ばす千歌は今、何を想い、その瞳に何を映しているのか。

そんなものは彼女以外には分からない。だが、確かに言える事は。

今回のパフォーマンス。千歌が自分自身を普通だと思いきむ事から脱却しない限り、

成功はない。

「・・・・・・・・・・」

陸がその結論に至ったその時、隣で座っていた果南が不意に腰を上げた。

「・・・・・・・・・・姉ちゃん？」

陸に声に答える事のないまま前へと進み、千歌の前で立ち止まる。

「千歌」

「・・・・・・・・・・果南ちゃん？」

きよとんとした視線を向けてくる千歌に対し、果南はゆっくりと口を開いた。

「・・・・・・・・約束して。明日の朝までに出来なかつたら、諦めるって」

「っ・・・・・・・・・・！」

まさかの言葉に目を見開いたのは千歌だけではない。その様子を目にした梨子達も同じ表情だ。

「よくやったよ千歌。・・・・・・・・・・もう限界でしょ？」

「果南ちゃん・・・・・・・・・・」

きつとその言葉には千歌を思う気持ち、そして果南自身の怖れが秘められている。

かつて、このフォーメーションが切っ掛けで関係は綻び、元祖Aqoursはすれ違ってしまったから。

(.....姉ちゃん.....)

勿論ラブライブには出場したい。学校は救いたい。

けれども、それでも彼女の内に秘めた臆病さが。

これでもし千歌が怪我を負い、それが友情関係に響き、かつての自分達と同じ道を辿らせてしまう事を何よりも恐れている。

「.....っ!!」

静かに、強く拳を握りしめ、千歌は背を向けて歩き去っていく果南に悔しそうな視線を向ける。

『.....翌朝まで.....か.....』

ハードルは高い。

バク転も、千歌自身の心の問題も。簡単に解決するようなものではない。

けれども必ず、超えなくてはいけない壁なんだ。

九十二話 奇跡の波

果南にタイムリミットを宣告されたその日の夜。

「バク転なんざババツって走ってシュバって手え着いてギューンって回転すりやあ
いいんだよ」

「……ごめん分かんない」

「だーかーらー!」

「御馬鹿な貴方は引つ込んでなさい。いいですか千歌。ロンダートまでは出来ているの
ですから、あとは如何にその勢いを殺さずに後ろに飛ぶかです。身体をしつかり伸ばす
ことを忘れないでください」

「ふむふむ」

「勢いよく身体を倒すことが出来たら首を返して着手して、あとは倒立姿勢を経過して
着地。一通りこれがこなせればきつと完成するはずですよ」

「なるほど……」。ありがとミラちゃん!」

「いえいえ、御構い無く」

グレンやミラーナイトにコツを聞き、休む間もなく特訓を続ける千歌。

もう夜も随分と遅い。そろそろ寝始める者も出てくる頃だ。

「……お前帰んなくていいの？」

「……そつちこそ」

千歌は過去に何かしらの運動をやっていた訳ではないので、その手のものにノウハウがない。見ている陸や曜としても不安だ。

「……千歌ちゃん」

家から練習する千歌の姿が見えたのか、ぼつりとその名前を呟きながら梨子もやってくる。

曜はあえて彼女を呼んでいなかったのか、申し訳なさに頭を下げた。

「梨子ちゃんに言うのと止められるからって……ごめんね？」

「ううん……でも、こんな夜中まで……」

「仕方ないだろ。……あんな事言われちゃったらよ」

夕刻に果南が千歌に放ったあの言葉。

あの辛辣な言葉も、彼女なりの千歌への思いやり、そして元祖Aquoursの失敗が起因しているために間違っているとは言えない。

だからこそ、今こうして千歌の成功を祈ることしか出来ないのだ。

「っ……!! っ……!! っ……!! フツ!!」

助走をつけて上体を前へと倒し、手首を返して足を伸ばす。

だが、

「うぐっ……!!」

肝心の後方に飛ぶ際に勢いが失われ、その身体は吸い込まれるように地面へと倒れた。

「ふ……っ……うう……」

「惜しいな……」

「あと少しなんだけどなく……」

「うん………あと少し………」

三人の応援と心配する視線を受けながら、千歌は再び助走をつけ始める。

しかし今と同じところでまた……、

「ぐう……!!」

「惜しい!」

陸の隣で二人が少し腰を持ち上げる。

その一方で、千歌は砂浜に寝そべったまま不甲斐無い自分へと苛立ちを募らせてい

く。

「ああつ！ もう！！」

地面に拳を叩きつけ、砂の中へと荒ぶる感情を沈める。

「どこがダメなんだろう……私……私……」

答えの帰つて来ない自問。終わりの見えない特訓。

せめて一度でも成功できれば、きつと感覚は掴めるはずなのに。

「……なあぜロ。お前がアイツの中に入って、コツを掴ませるとか出来ないか？」

『……無理だな。他の奴なら出来るが……、今のアイツにはネクサスの……ノアの光がある。俺が入ったところで追い出されるのがオチだ』

以前善子のリトルスターによつて身体から追放された時と同じ事が起きる以上、自分には手が出せないというぜロ。

『つか、アイツが自分の力でどうにかしたいって言つてんだ。今更俺の協力なんざ受け入れねーだろ』

「……それもそうか……」

自分の力で。周りに劣等感を抱いているからこそその決意だろう。

今更そんな事気にする必要もないだろうに。

「千歌ちゃん！」

大の字になつて転がる千歌に、曜と梨子が駆け寄る。

「焦らないで。力を抜いて、練習通りに……………」

「出来るよ。絶対できる！ 頑張つて！」

「見てるから」

「……………うん！」

激励と一緒に差し出された手を取り、千歌は笑顔で立ち上がる。

成功しないという事実には吹かれて消えかけていた闘志にも再び火がつき、もう何度目かも分からない助走に入ろうとしたその時。

「千歌（ちゃあ——ん）！！ ファイト（ずら）——！！！！」

いつの間にかやってきていた一年生三人組の応援の叫びが届き、それを背に受け千歌は大地を大きく踏みしめ——、

「ふうっ……………！！」

ロンダートからの繋ぎで、全身で着地してしまう。つまりまた失敗だ。

「なあああああああ！！ 出来るパターンだろこれえ！！」

夜の美浜に、自称普通怪獣の怒号が響く。

自分が情けなくて、やるせなくて、そんな感情が抑えられずに漏らした叫び。

「なんでだろ……………なんで出来ないんだろ……………。梨子ちゃんも、曜ちゃん

も・・・皆こんなに応援してくれてるのに・・・！！」

廃校を覆すという奇跡を起こすまでは絶対に泣かない。その誓いに従い、千歌は涙声になりながらも悲しみの雫を零さぬように目元を押さえる。

「やだ・・・やだよ！ 私、何もしてないのに！ 何も出来ないのに！！」

思い通りにいかないのが悔しくて、皆の応援に答えられないのが辛くて。ぶつけ所のない感情だけがどンドン増幅していく。

「・・・・・・・・ち——」

「びー！ どつかーん！ ずびびびびびびび——！！ 普通怪獣よーそろーだぞー！！」

「おっと好きにはさせぬ！ りっこびーもいるぞー！」

掛ける言葉を必死に探し、何とか声に出したそれを遮ったのは、新たに出現した二体の普通怪獣の鳴き声だった。

「なぬっ！！ ずどどどどーん！」

「がおーん！」

二体とも登場するや否や先に出現していたちかちーを威嚇したりと闘争本能の塊のような怪獣だ。

そもそもどつかーん！ とか、ずどどどどーん！ とか謎の爆発を起こせる辺りどう考えても普通ではないが。

「……いや、注目すべきはそこではなかった。」

『……他に方法ねーのかよコイツ等』

アクター、CV共に本人の怪獣達を前に、夕方赤い通り魔になりかけてたゼロも呆気に取られている。

そして、それは勿論千歌も同じで。

何故このタイミングで自身の自虐ネタを真似されているのだろうかと首を傾げていた。

「……まだ自分は普通だと思ってる?」

「……」

ウルトラセブンよろしく額に両手を当てる曜の問いに、千歌は黙ったまま目を伏せた。無言の肯定、というやつだろう。

「普通怪獣ちかちかで、リーダーなのに皆に助けられて、ここまで来たのに自分は何も出てないって。……違う?」

梨子はウルトラマンのように腕を十字に組んだまま、千歌の心情を言い当てる。怪獣じゃなかったのだろうかコイツ等。

「だって……そうでしょ?」

消え入りそうな声で認める千歌に、二人は優しく微笑みかけた。

そして、陸の方へと視線を向けてくる。今度はお前の番だぞという事らしい。

「はあ………」

本当はAqoursの力だけで前に進ませたかったところだが、ここまで来たらもう変わらないしいだろう。

それに、前に千歌は陸とゼロもAqoursの一員だと言ってくれていたし。

「あのなあ千歌。今こうしていられるのは、誰のおかげだ？」

一歩踏み出し、きつと彼女は忘れていであろう大事な事を問いかける。

「それは……学校の皆でしょ、町の人達に、梨子ちゃん、曜ちゃん、陸ちゃ「違う」たあっ!!」

もう既にすっかり間違えていたので、お仕置きの脳天チヨップで言葉を遮った。

『……一番大事な奴を忘れてんだよ。バーカ』

そう言ったのはゼロだった。彼もまた、Aqours結成時から彼女を見守って来た者の一人だから。

「……何？」

その疑問に答えるのは陸とゼロの役目ではない。再度彼女によって、彼女の作ったAqoursに加入した者達の出番だ。

「今のAqoursが出来たのは誰のおかげ？ 最初にやろうって言ったのは誰？」

「……それは………」

言い淀む千歌に対し、梨子と曜の二人は尚も言葉を掛け続けた。

「千歌ちゃんがいいたから私は、スクールアイドルを始めた」

「私もそう。．．．皆だつてそう」

他の誰でも、今のAqoursは作れなかつたから。千歌がいいたから、今があるから。その事だけは、例えその張本人であろうと忘れてはいけない。

「自分の事を普通だつて思っている人が、諦めずに挑み続ける。それが出来るつて、すごい事よ！　すごい勇気が必要だと思う！」

「そんな千歌ちゃんだから、皆頑張ろうつて思える。Aqoursをやつてみようつて、思えたんだよ！」

静かに波立つ水平線の向こうから、沈んでいた太陽が昇り始める。

「恩返しなんて思わないで！　皆ワクワクしてるんだよ？　．．．千歌ちゃんと一緒に、自分達の輝きを、見つけられるのを」

東京でのイベントの後。Aqoursが再スタートを切つた時のように、道路の方で見守るに徹していたルビィ、花丸、善子の三人も駆け寄ってくる。

その頬や腕には、千歌と同じように練習で負つたものであろう傷が確認できた。

「新たなAqoursのWaveだね♪」

そして今のAqoursは六人じゃない。九人だ。

あの時はいなかった鞠莉、ダイヤ、そして果南の三人も、与えられた猶予の終わりを告げるように千歌の眼前で並ぶ。

「千歌、時間だよ。……準備はいい?」

並び立つた八人の少女が道を作り、その奥で果南が腕を組んで待ち構えている。

正真正銘、これがラストチャンスだ。

「……行けよ」

陸が軽くその背中を押す。

「大丈夫。今の貴方なら、きつと成功します」

『信じる。今まで信じてこなかった自分の力を。仲間信じてもらったお前自身を』

「……なあ千歌。仲間ってなあ……いいモンだよな……」

コーチをしてくれたミラーナイト、あらゆる面で支えてきてくれた陸とゼロ、ほぼ何もしてないグレンファイヤー。どうしてコイツが一番カッコつけてるのやら。

「……今のお前は、一人じゃねえだろ」

「……っ!」

再度陸の声を背中に浮け、千歌は仲間が作ってくれた道を駆けだした。

友の期待に応えるために、自分を信じて。

これまで自分を支えてくれた、仲間との絆を胸に。

「……ありがとう。千歌」

果南の謝意をバネへと変え、これまでの想いを全て乗せて飛んだ千歌の胸には――
、

―― 劣弱の鎖を砕き、内なる己を信ずる煌き―― ジュネツス

―― 赤く、強い輝きが宿っていた。

―― M I R A C L E W A V E

じれったかった自分を超える者。

過去に置いてきた物を取り戻す者。

迷う気持ちに別れを告げ、自分の本当の力を信じた者達が起こす、A q o u r s の波。

その波に乗り、前回の地区大会で超えられなかった壁を超えるため、千歌は飛んだ。「……大事に至らなくて何よりだよ」

パフォーマンスが終わった後、やはり今回も来ていたらしいオウガが隣に寄ってくる。

「果南ちゃんがタイムリミットを宣告しに来たときはヒヤヒヤしたけど、無事成功して良かった良かった。何でこう君等ってスポ魂アニメや漫画の王道を行くんない？」

「ずっと見てやがったのかお前？」

「ボクは君達のストーリーカードだからね」

気持ちの悪い事を言いながら相変わらざるムカつくニヤけ顔を向けてくる。

その笑顔がA q o u r sのパフォーマンス成功に対してのものだけでは無いのだろうが。

「……………じゃあ見てたんだろ。千歌の光」

「まーね。この目でしかと」

オウガの言葉の通り、千歌を支える仲間との絆によってネクサスの光は、基礎形態のアンファンスからジュネッスへと変化した。

そして前に、彼はそれを望むような事を口にしていた。

「あれが、お前の見たかった千歌の輝きなのか？」

「……まさか君は、アレが千歌ちゃんの輝きだとは思ってないだろうね？」

「は？」

以前の話と整合性が取れていないことに首を傾げる。そしてそれは陸一人ではなくて、

『どういう事だ？ デュナミストが発現するジュネツス形態は一人につき一つのはずだぞ』

ネクサスは光を受け継ぐデュナミストを選び、その度にデュナミストはそれぞれ異なったジュネツス形態を取る。

それはゼロの言葉通り各個人一つなはずなのだが……、何故かオウガには呆れ顔で肩を竦められてしまった。

「……あのねえお二人さん。何でダークネスファイブがわざわざ千歌ちゃんに狙いを定めたんだと思ってるんだい？ 単純にデュナミストを欲しているなら他にいくらでもチャンスがあつただろ？」

「……千歌じゃなきや駄目な理由があつたと？」

「そ。千歌ちゃんは特異体質のデュナミストだからね。ていうかネクサスに変身せずジュネツスを発現させた時点で気付けよ。疑問に思わなかったのかい？」

言われてみれば確かにそうだ。本来変身後の形態であるアンフアンスやジュネツス

の光を、どうして千歌は変身せずとも目覚めさせることが出来たのか。

『特異体質つてのが関係してるのか?』

「ああ。人は誰しも光を受け継ぐ可能性を秘めていて、ネクサスはその中から影を抱えている者をデユナミストに選ぶんだけど……、極稀にネクサスとの親和性が異様に高いデユナミストが現れる」

「ここまでの話からして、聞かずともそれは千歌だろう。」

「そしてそのデユナミストは親和性の高さ故、一人で幾つもの色、つまりジュネツス形態を開放できるのさ」

『……そんな奴が……』

デユナミストがどういう存在かの情報はあっても、その中の更に特殊な存在については宇宙警備隊でも把握できていなかったようだ。流星は謎に満ちた伝説の超人に選ばれし者と言ったところか。

「ボク等が確認出来た中だと、過去それは三人。一人は親交を深めた先代のデユナミスト達から光とその想いを受け継ぎ、遂にはウルトラマンノアにまで覚醒した孤門一輝。二人目を飛ばして三人目は君等のよく知る高海千歌ちゃん。……そして気になる二人目は……」

翻した上着の裏側に並んで装着された九つの缶バッチ。その内の一つ———明るい

ブラウンの髪をサイドテールに纏めた少女のプリントされたものを指さす。

そして陸は、その少女を知っている。

「……………μsリーダー、高坂穂乃果ちゃんさ」

「……………マジで？」

胸元にスクールアイドルの缶バッチを常備している気持ち悪さが吹き飛んでしまう程の衝撃が身体を駆け巡った。

μsは、いや高坂穂乃果は千歌が憧れ、スクールアイドルを始める全てのきっかけとなった少女だ。

千歌は、そんな少女から光を受け継いでいたという。

『待て。そいつがデユナミストになったのはどう考えてもアナザークライシスの後、ダークネスファイブの計画が開始し始めてから何年も経っている。なら、どうして奴等は俺みたいな邪魔するウルトラマンもない絶好のタイミングをみすみす見逃した』

それもそうだ。当時の穂乃果にはゼロのような守ってくれる者がいない。手を伸ばせばすぐに届くものだったはずだ。

そんな格好の機会を逃すなど、ダークネスファイブの参謀であるスライがやることとは思えない。

「……………逆さ、ウルトラマンがいなかったから、彼等は手を出さなかったんだよ」

『何……?』

考えていた事と全く逆の返答をされ、ゼロの声音が幾分か低くなる。

「そうだなあ……。ちよつと話が長くなるけど説明しようか。孤門一輝と穂乃果ちゃんには、同じ特異体質のデュナミストでも違う点が幾つかある。先代のデュナミストに触れる事があったか。ウルトラマンと接触したかどうか。実際にネクサスに変身したかどうか。孤門はどれも満たしてるけど、逆に穂乃果ちゃんは何一つ満たしていない」

『……それがどう関係がある』

いまいち話を飲み込み切れていないゼロに、オウガは再度ニタリと笑って答えた。

「……考えてみるよ。千歌ちゃんはその全てを満たしている」

掲げられた証拠に、しっかりとした疑問が引つ掛かる。

「ちよつと待て。確かに千歌はゼロに接触してるし、実際ネクサスにも変身したけど……その先代デュナミストの高坂穂乃果さんとは関わりはないはずだぞ」

陸としてはハッキリ矛盾点を突き付けたつもりだったが、オウガの表情は尚も崩れる心配を見せない。

「触れたじゃないか。ちよつと前までその穂乃果ちゃんのいた、 $\mu\boxtimes s$ の背中を追いかけていたという形で。 $\mu\boxtimes s$ の軌跡は、ある意味デュナミスト高坂穂乃果の歩んだ道でもあるんだから」

「っ………！」

流石に盲点だ。よもや単純な憧れが千歌と穂乃果に繋がりになるとは。

だが納得も行く。A q o u r s 全員で μ \boxtimes s と自分達の違いを見つけに行つた東京遠征。

あの日音ノ木坂の生徒伝いに μ \boxtimes s の想いを知り、自分達の道を見つけた際、ネクサスの光は輝いていた。

「この三つを満たすこと事が、デユナミストがネクサスをノアへと完全覚醒させる条件なのさ。ま、千歌ちゃん結構イレギュラーな満たし方だったけどね。そしてダークネスファイブが狙っているが、その覚醒したノアの光つて事。アンドンスタン？」

「……あ、ああ……うん………」

つまりざっくり整理すると、千歌はジュネツス形態を幾つも発現できる特殊なデユナミストで、その光は μ \boxtimes s の高坂穂乃果から受け継がれたもの。

そして穂乃果と違い、千歌はかつて孤門一輝がノアに覚醒した時と同じ条件を満たしている、という事だ。

「二応言っておくけど、穂乃果ちゃんは機会と時代に恵まれなかっただけで、光の適応者としての能力は孤門や千歌ちゃんより上だからね。あれほど人々の絆を繋げられる子なんてそうはいない。ネクサスが実体化できるまで回復したのもほとんど彼女のおかげ

げさ」

かつてμsが中心となり、全国のスクールアイドルが一堂に会してライブを行った事がある。

それは多くの人を魅了し、愛され、応援されたμsだからこそ成し得た事であり、それによつて紡がれたスクールアイドル達の絆は大いにノア及びネクサスの力となった。

「別にボクはA q o u r sや千歌ちゃんにμsや穂乃果ちゃんを超えて欲しいんじゃない。それぞれ違う思いを胸に秘めてるんだ。超えるとか、どっちが上だとか、そんなもので測れるものじゃないだろ」

そんな事はどっちに対しても失礼極まりないとオウガは続ける。

「だから、ボクがA q o u r sや千歌ちゃんに求めるものは一つ。自分達だけの絆と輝きを作り上げてくれて事だけさ。・・・そうすればきつと、ノアは答えてくれるはずだよ」

くるりとステージに背を向け、まだ全グループのパフォーマンスが終わっていないというのに出口に向かってその足を進める。

「・・・ま、半分くらいは千歌ちゃん推しとしての個人的な願望だけだね」

最後にそう言い残し、ひらひらとこちらに手を振るオウガは満足気に会場の外へと出て行った。

「……アイツ千歌推しだったのな……」

全グループのパフォーマンスが終了し、陸は新たに判明したクソほどうでもいい事実を口にししながら会場の外へと出た。

本大会出場グループの発表まではまだ時間があるので、少しここで風に当たっているとしよう。

〈アイツ等に声掛けなくてよかったのか?〉

(……そんな気分にならない)

あんな事言われた後にどんな面で千歌と顔を合わせればいいのかやら。

(……あのジュネツスは千歌の輝きって訳じゃないんだよな)

〈オウガの話によるとな。……まあでも実際、俺もあれと似たような色のジュネツスなら何度か見た事がある。多分アイツが言ってるのは、誰も見た事のない、アイツや A q o u r s だけの色の事を言ってるんだろ〉

つまり今のところ千歌は、歴代デユナミストの誰かと同じ思いを抱き、同じジュネツス形態を発現させているに過ぎない。これも多数のジュネツス形態を目覚めさせるこ

とが出来た故なのだろうか。

「……今回で解決と思っただけど、まだ様子見って事——ん？」
ふと見上げた空。

目に優しい青い秋空の中に、光る文字のような物が漂っているのが確認できた。

〈あれは……！〉

ゼロがそれに反応する。

陸には何がおなのか全く持って理解不能だが、ゼロはそれが何なのか分かっているよ
うだ。

〈……緊急の……ウルトラサイン……？〉

九十三話 月面の邂逅

「ぐおおおお．．．．．！」

今し方全部グループのパフォーマンスが終了したラブライブ予選の会場。

その建物に隣接された人気のないゴミ置き場で、倒れたゴミ箱が中身を零しながらゴロゴロと転がる。

「ぐっ．．．うう．．．！ ちよっ．．．！ ゼロツ．．．！」

ゴミ箱を倒した犯人である仙道陸は、意地でも左腕に装着されたウルティメイトブレスレットに触れてなるものと全力で抵抗していた。

「ちよつと待て！ 終わったらすぐ行くから！ だから今変身だけは止めるっ．．．．．！」

『うるせー！ 急ぎの要件だと言ってんだからこっちが優先だ！』

一体化しているウルトラマンゼロと身体の主導権を奪われては奪い返す。

ついさつき光の国にある宇宙警備隊本部からウルトラサインが来たらしく、ゼロは早

急に指定された場所に向かおうとしているのだ。

だが、この後には……、

「結果発表だけは何が何でも見ないといけなんだよっ……！！」

『んなモン帰ってきてからでも分かるだろうが！ そんな事より今は出勤するんだよ！』

今回の予選は全パフォーマンス終了後その日の内に会場で結果が発表される。

ラブライブ本戦にAqoursが出場できるかどうかだけはその仕事の前に知っておきたいのだが、身体の共有者が言う事を聞いてくれない。

「これっ……！！ だけは——うおお！！」

半端に身体を操られ、先日千歌があれだけ苦労して完成させたバク転で積み上げられたゴミ袋の山に突っ込む。

「ゼ……ロオ……！！」

ゴミ袋を辺りに散乱させ、その上を転がりながら尚も抗うが、遂にプレスに到達した右手の中にウルトラゼロアイが収まってしまう。

「おいゼロ？ ダメだからな？ ホントに怒るぞ……！！」

『いいからサツサと……！！ 行くんだよ！！』

「あああああああああああ！！」

陸の絶叫空しくゼロアイは目元に装着され——、

『シエアツ!!』

無事変身を遂げたウルトラマンゼロは、予選会場から大空目掛けて飛び上がったのであった。

悲しくも陸がゼロに連れ去られた一方。

『それでは皆さん！ ラブライブ、ファイナリストの発表でえ——す!!』

頭に響く甲高いハイテンションな声がマイクの拡声器に乗って響き渡る。

それによりライブの余韻でどよめき立っていた会場内は一瞬にして静まり返り、その場にいる全員が巨大なモニターに視線を集中させた。

「決勝に進めるのは三グループ……」

モニターに表示されたグラフが右肩上がりに伸びていくのを見て、他のメンバーと共にステージ上に乗った鞠莉がそう呟く。

「……………」

千歌の頬を汗が伝う。

「お願いー！」

曜が両手を合わせ、集団から抜きん出た水色、赤色、緑色のグラフに祈る。

『上位三組はあ………！このグループです!!』

パツと切り替わったモニターに決勝に出場できる三グループが映し出され、会場は再び爆発的な歓声と熱気に包まれる。

そんな中上位三グループにライトが当てられ、呆然としていたA q o u r s はようやく自分達が一位で予選を通過した事を自覚した。

「千歌ちゃん!!」

感極まった曜が千歌に抱き付く。

「や……やったの………?」

それでも千歌はまだ今自分の目の前で起こっている喜ばしい現実を理解しきれず、他のメンバーへと問う。

それへの返しがメンバー全員の微笑みだった事で、千歌の顔にも笑顔が広がっている。

「夢じゃないよね………? あ………ってならないよね………?」

「ならないわ………」

梨子の肯定に続き、果南、鞠莉、ダイヤの三年生がサムズアップで答えてくれた。夢ではないのだ。

「本当？　だつて決勝だよ？　ドームだよ？　ホントだったら奇跡じゃん・・・」

「奇跡よ・・・、奇跡を起こしたの・・・私達・・・」

「・・・うん・・・！」

しっかりとその感動を噛み締めながら、千歌はゆっくりと頷いた。

「さあ皆！　いっくよー!!　全速前し——ん・・・」

曜が集団から離れ、A q u o r s 全員に見えるように右腕を掲げる。

彼女の掛け声に合わせて、メンバー達も右手を人差し指を伸ばし、

「——————ヨースロー——————!!」

決勝進出と、以前超えられなかった壁を突破した事を祝い、勝鬨を上げた。

『そろそろ、目標地点だぞ』

目標地点を完全に構え、ゼロは宇宙空間を飛翔していた。

「・・・一応曜に地球離れるって連絡入れときたいんだけど。勝手にいなくなるとキレられるし・・・ここ圏外だよな」

『つたくうつせーな・・・。ああ、多分な』

インナースペースの中で不貞腐れる陸に舌打ちをしつつ、更にその速度を上げる。

『なんか前にレイトが似たような事言つてた気がするな・・・なんで俺と一体化する奴は問題のある奴ばっかなんだか』

「・・・お前自身が問題児だからじゃねーの？」

何があっても光の国の生命線とも言えるプラズマスパークに手を出すような奴の事を優等生とは呼ばないだろう。類は友を呼ぶというやつだ。

『・・・ま、確かに俺も人様に誇れるような人生送つてねーけどよ。・・・さあ、到着だ』

「・・・こつて・・・」

見渡す限り岩と砂だけが広がる荒涼とした世界で、顔を上げれば星々と、先程まで陸達がいいた青い地球が目に入った。

この風景は陸も本やテレビで見た事がある。

「・・・月か？」

『ああ。何でもここに来ていつていう内容だったが………、一体何だつてんだ』
 「何？ 呼び出されたの？」

ヤンキーの「ちよつと体育館裏来いや」的な感じで呼び出されていたならどうしようという不安が一瞬頭を過つたが、聞く話によると善良な人柄がほとんどうららしい光の国でそんな事をするのは素行不良のゼロとベリアルくらいだろう。

「……ちなみに誰から？」

『それが送り主無記名でな』

「………露骨に怪しくないかそれ。罨とかじゃ——」

陸が口にした刹那、途端に月面の大地がまるで生きているかのように唸りを上げ始めた。

『——ッ！』

『っ！ なあ!!』

怪獣の咆哮らしき揺れの後、地面を突き破って飛び出してきたのは先端に鉤爪のついた四本の青い触手。

内二本がゼロの身体を絡めとり、瞬く間に拘束してしまった。

『何なんだこりゃ!! 気持ちワル!!』

「ああもう！ やっぱ罨だったじゃねーか！」

『お前が余計な事言ったからだろ!!』

こんな状況でも言い争いを始める陸とゼロに対し、触手はここぞとばかりに次々と飛び出してきては襲いかかってくる。

『クソツ……! キリがねえ……!』

行動を制限されながらもゼロスラッガーやエメリウムスラッシュで触手軍を切り捨て続けるが、威力が足りない。

そして迎撃の網を搔い潜った一本がゼロの腹部目掛けて突っ込んでくるのが見えた。

『ぐっ……!』

万事休すかと思われたその時、

『シヨウラア!!』

『ツオリヤツ!!』

上空から降り注いだ光が、一瞬の内にゼロに巻き付いていた触手を弾き飛ばした。

『っ……! 今だ!』

捕縛から抜け出し、一度大きく距離を取る。

『ワイドゼロショットオ!!』

し字に組んだ腕から光の線を伸ばし、根元を叩いて全ての触手を地中の中へと撤退させることに成功する。

『ふい〜．．．、あつぶねー．．．』

「．．．．．にしても、さっきの攻撃は．．．．．って！」

自分達を救出した光線の出所を探り顔を上げてみれば、巨大な二つの影がこちらに向かって急降下してくるのが見えた。

そしてそれらが目の前に着地し、そのシルエットが露わになる。

『ハアア．．．』

方や赤と銀のスリムかつマツシヴな肉体を持ち、全身についたクリスタルが特徴の巨人。

『フツ．．．』

方や赤と黒を基調とした肉体に銀色のラインを走らせ、全身のV字型のクリスタルと同じくV字型をした胸のランプが特徴の巨人。

それ等は――、

『お前等．．．！』

――ウルトラマンギンガと、ウルトラマンビクトリーの姿だった。

「緊張で何も喉が通らなかつたずらく……」

「アンタはずつと食べてたでしょ！」

無事決勝へ駒を進め、結果発表までの緊張から解放されたAqours一同。

制服に着替えた後会場を後にし、改めて安堵の息をついていた。

「にしても、アキバドームかぁ……」

果南がそう零したのを皮切りに、「どんな場所なんだろう」「いい曲を作りたい」「ダンスもつと元気にしたい」と皆がそれぞれ内に秘めた思いを口にしていく。

「ん？……見て！」

「んん？」

不意にルビイが声を上げ、全員で流した視線の先には会場にあつた物と同じぐらいのサイズを誇る巨大なモニター。

そこには、先程千歌達が披露した楽曲とパフォーマンスが映し出されていた。

「凄い再生回数!!」

五万台に迫る再生回数を見て驚きと喜びの声上がる。

つい先ほど公開されたと考えると物凄い伸びだろう。

「本当……こんな沢山の人が……」

今までAqoursが積み上げてきた努力が、想いが、見てくれた大勢の人々に伝わったからこそその数字だ。

「……そういえば、いつもなら真つ先に顔を出しに来るはずの陸先輩が見当たらないからね」

「……ああ……、言われてみれば……」

Aqours結成当初から彼女達を見守り続けてきた古株がない。

「ミラちゃん達は？ 何か知らない？」

「……全グループのパフォーマンスが終わった後、外の空気を吸ってくると言って……、それ以降は私も把握していませんね」

「俺も知らねーな。まあ、多分ゼロの野郎が何かやってるんだらうけどよ」

たまにフラットといなくなる事はあったが、何の連絡もよこさず、しかも重要なライブ中にいなくなるとは過去にない。

「もー、こんな大事な時にいなくなるなんてー」

ゼロと一緒になので身の心配はそこまでしなくてもいいだろうが、決勝進出という快挙を見届けぬままだこかへ行ってしまったのは少し腹立たしい千歌だった。

「まあまあ、戻ってきた時に驚かせてあげればいいじゃん。予選突破と、ライブ映像の再生回数的事。今までの私達じゃ出来なかつた事だからきつと陸ひつくり返るよ」

「生徒数の差を考えれば当然ですわ。これだけの人が見て、わたくし達を応援してくれ
た」

早々に切り替えたらしい果南の言葉に同調するようにダイヤがそう言う。

「あつー！ じゃあ入学希望者も!!」

最高のパフォーマンスは最高の宣伝に繋がる。

それを思い出した面々は、一斉に浦女の入学希望者数の閲覧権限のある鞠莉へと視線を集中させた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

だが、当の鞠莉はサイトが開かれているであろうスマホの画面を見ながら硬直していた。

「どうしたのよっ」

「うそ・・・・・・・・」

「まさか・・・・・・・・」

訝しむ善子の声と、嫌な予感を察してしまった梨子とダイヤの声が重なる。

それらを受けた鞠莉は、信じられないといった様子で口を動かす。

「携帯、フリーズしてるだけだね？ 昨日だって何人か増えてたし……」

「……おい。まさか全く増えてないんじゃないだろうな……」

掠れた鞠莉の言葉の続きを疑問としてグレンが紡ぐ。

それに対する彼女の沈黙は、肯定と取っていいものだった。

「……鞠莉ちゃんのお父さんに言われてる期限って、今夜だよね？」

純粹な不安によって口から漏れたルビイの借問の波が広がり、徐々に皆の表情も曇っていく。

「大丈夫、まだ時間はありますわ」

戦勝ムードから一変した重い空気を壊したのは、ダイヤが普段通りの凜々しい声音で放った気散じだった。

「学校に行けば、正式な数が分かりますわよね？」

「……うん」

これ以上空気は重くしまいという意味をくみ取った鞠莉が頷く。

「よし！ 帰ろう！」

統率を取ったリーダーに続き、Aqoursは自分達の母校へとその足を進めていっ

た。

『ギンガ………ビクトリー………』

場所は再び月面に移る。

『よう。ゼロ』

『久しぶりだな』

突然大地から伸びた触手からゼロを救出したのは二体の巨人、ウルトラマンギンガとウルトラマンビクトリーだった。

ゼロは二人と面識があるようで、今こうして予期せぬ再開に驚いているところだ。

『助かったぜお前等。ウルトラサインもお前等のか？』

『は？』

ギンガとビクトリーはこの宇宙出身のウルトラマンではない。

わざわざ別宇宙に来ていたという事は何か事情がありそうだったのでゼロが問いか

けると、今度は二人が驚いたような様子を見せた。

『何言ってるんだよゼロ。そっちが俺達の事呼んだんだろ？ ゼロが呼んでるってタロウが言うから来たんだぞ？』

『は？ いや、俺ウルトラサインなんて送ってねーぞ？ つか俺もウルトラサインでここに呼ばれただけなんだが……』

どうにも話が食い合わない。互いにウルトラサインを受け取っているが、これまた互いに送っていないという。

『なら……、誰かが俺達をここに呼んだという事か？』

首を傾げ、顎に手を当てるビクトリー。

『……てつきりさっきの触手の案件で俺達もここに呼ばれたのだと思っていたが——』

『ククク……、揃ったようだな』

『『『』』』』

その疑問を裏付けるように、この中の三者の誰のものでもない邪悪な声音が耳朶に触れる。

『この声……』

ギンガが低く耳語を打つ。

彼だけでなく、ビクトリーも、ゼロも、陸もその声には聞き覚えがあった。

『どこだ！ どこに隠れてやがる!!』

『姿を現せ!!』

ゼロとビクトリーが咆哮を周囲に散らした刹那、

『そうか……、ならばお望み通り、見せてやろうではないかアア!!』

『『なっ———』』』』』

禍々しい高笑いと共に地が裂け、ゼロ達の身の丈を遥かに超える超巨大な影が地中から突き上がってくる。

『フハハハハハ!! 久方ぶりだな！ 我等が因縁のウルトラ戦士共!!』

『ぐっ……!!』

怪物が出現した衝撃の余波が身体に襲いかかる。

骨の髄まで響いてくるその威力に身を屈めながらも、ゼロは苦し気にその声の持ち主の名を呼んだ。

『……ヤプール……!!』

『ハハハ……! ヤプールの強大なマイナスエネルギーが蘇ったのだ!! 今こそウルトラ戦士共への復讐の時! 貴様等はその最初の犠牲者という訳だ! ……さあやれ、ウキラーザウルスウウウウウウウウ!!』

『ッ———!!』

ヤプールの指示に従い、金色の獣がその巨体をこちらに進行させてくる。

『チツ．．．！ しつけー野郎だな．．．．．！ 行くぞお前等!!』

『おう!!』

三人の戦士もすぐさまスイッチを入れ、見るからに今までの敵とは格が違う究極超獣を迎え撃った。

九十四話 二つの戦い

「ちよつと待ってて」

予選会場は東京故、A q o u r s が学校に辿り着くまでにも時間がかかる。

時刻は夜八時を過ぎ、辺りも既に暗闇が支配していた。

「どうっ？」

理事長室に戻るや否や鞠莉はパソコンを開き、正確な入学希望者数を確認する。

「・・・・・・・・変わってない・・・・・・・・」

「そんな・・・・・・・・」

揺るがぬ数字と現実が九人のいる室内を包んだ。

「まさか・・・・・・・・天界の邪魔が・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・」

こんな時でもいつも通りの善子にルビイと花丸の冷たい視線が注がれる。少しは気を盛り立てようとしてくれたのだろうが、今回ばかりはやるタイミングを見誤ったとしか言えない。

「ではやはり……」

今現在の人数は八十人。統廃合の話を白紙にするために課された条件まではあと二十人だ。

だが、指定されたタイムリミットまでは……

「あと四時間しかないよ?」

「A q o u r s の再生数は?」

「ずっと増え続けている……」

ライブの再生数が増えても、それに比例して入学希望者数が増える訳じゃない。

A q o u r s を知る者にとってA q o u r s はスクールアイドルでしかなく、どこの学校なのかは些末な事なのだ。

ましてや浦の星は田舎の学校。ライブに魅了されたと言っても、同じ学校に通いたいとは思いいく部分があるのだろう。

「……パパに電話してくる」

すつと立ち上がった鞠莉と、それに続いたダイヤが部屋を出て行く。

「……」

少し静かになった理事長室の中で、残されたメンバーはその身に留めきれない不安と緊張を抱きながら二人の背中を見送った。

鞠莉とダイヤが交渉に臨んでから一時間が経過した。

午後九時を回った時計の針が刻む時間が刻一刻とタイムリミットに迫り、少女達の焦燥をより焚きつける。

「遅いね・・・鞠莉ちゃん・・・」

「・・・うん」

「向こうは早朝だからね。なかなか電話が繋がらないのかもしれないし——」

ガチャリと開いた扉が果南の言葉を遮り。出て行った時よりは幾分か朗らかになった表情で腕を組む鞠莉が現れる。

「・・・Waitingだったね」

「・・・お父さんと話せた?」

不安を隠し切れない様子で千歌が問う。

「うん。話した。決勝に進んで、再生数が凄い事になってるって」

「・・・それで?」

梨子の問いにはすぐに返答が帰って来ない。しばらくの沈黙の後に鞠莉が顔を下げ、

代わりに彼女に同行していたダイヤが口を開いた。

「何とか明日の朝まで伸ばしてもらいましたわ。ただ、日本時間で朝の五時。そこまでに百人に達しなければ、募集ページは停止すると……」

「最終通告って事ね……」

これまでも散々期限を引き延ばしてもらっているのだ。これ以上鞠莉にも彼女の父にもワガママは言えまい。

「でも、あと三時間だったのが八時間に伸びた」

たった五時間、されど五時間。今の自分達にはとても大きな希望だ。

そして、その希望が連鎖するように、

「ふわあつ！ 今、一人増えた!!」

ルビイがパソコンを抱えたまま興奮気味に叫ぶ。

「やっぱり……！ 私達を見てくれた人が興味を持ってくれたのよ！」

「このまま増えてくれれば……」

「っ！」

自分達のしてきた事が無駄ではなかった。それが証明されそうだというのに、千歌はパソコンに目もくれずに部屋から出て行こうとする。

「ちよっ!! ちよ、どこ行くのよ!!」

「駅前……浦の星をお願いしますって、皆にお願いして、それから！ それから……」

タイムリミットこそ伸びたとはいえ、入学希望者数はまだまだ百人には届きそうにない。

それにより抑えこんでいた焦りが爆発してしまったのか、善子の呼び止めも聞かずにドアノブへと手を掛ける。

「今からじゃ無理よ！」

「っ……！ じゃ、じゃあ今からライブをやろう！ それをネットで……！」

梨子の制止で一旦は止まるが、すぐに別の案を掲げて皆に促した。

「……今行なったところで、視聴数は期待できないと思いますわ」

「それに、準備してる間に朝になっちゃうよ？」

ダイヤと果南の年長組にも制され、すぐにその考えは無理だと流されてしまう。

だが、それでも千歌は必死に頭を働かせ、振り向いては更なる動きを見せる。

「そうだ——！」

「千歌ちゃん！」

そんな彼女を、曜は抱き付く事で物理的に留まらせた。

幼馴染であり親友である曜の自分を思うが故の行動に、千歌は徐々にその身体を脱力

させていく。

「落ち着いて! . . . 大丈夫、大丈夫だよ . . . !」

「 . . . でも、何もしいなんて . . . !」

最後まで足掻く。それが千歌の、そしてA q o u r s 皆の決めた事。

今から自分に出来る事なんてほとんどないだろう。けど、学校を廃校にしたい。だからいくら手段が少なくてもやれることは全部やりたい。

「信じるしかないよ。今日の私達を」

もう一人の幼馴染が優しく励ましてくれる。

皆だつて気持ちと同じだ。じつとしていられない。何か行動したい。だが、今はただ自分達のやってきた事を信じ、祈ることしか出来ないから。

「 そうだよね あれだけの人に見てもらえたんだもん だいじよぶ、だよね」

部屋の中を見回し、皆が自分と同じ心境であることを悟つた千歌はようやく焦りから解放される。

「さあ、そうとなつたら皆さん帰宅してください」

事が収束したタイミングを見計らい、ダイヤが下校を促す。

もう時刻は九時を過ぎている。流石に帰らないと親御さんたちが心配するだろう。

「帰るすらか？」

「なんか一人でいるとイライラしそう……」

「落ち着かないよね……気になって……」

だが、誰もすぐには帰ろうとせず、それどころか暗い表情へと変わっていく。

流石にこうなってしまうては変える事が後ろめたくなってくるのだ。

「だつて？」

「こうなることが予め分かっていた様子の果南がダイヤに目線を向ける。

「仕方ないですわね」

ダイヤも薄々勘付いてはいたようで、特に嫌な顔もせずにあつさりと承諾。

「じゃあ、いてもいいの？」

「皆さんの家の許可と……、理事長の許可さえあれば……」

目だけを動かして鞠莉を見やる。

当然、浦の星の理事長様はこんな時に気が利かない程シケてはいない。むしろ喜んで

即答した。

「勿論！ 皆で見守ろう！」

清き水を湛えた地球を眼前に構えた月面。

A q o u r s がじわじわと攻めよつてくる統廃合のタイムリミットと戦う一方で、こちら側でも別の激闘が展開されていた。

『ツ———!!』

Uキラーザウルスの放つ四本の触手やミサイルを、三人のウルトラ戦士は縦横無尽に宙を舞つてそれを回避し続ける。

『ハアアアア………!!』

旋回して身体の向きを変えたギンガの全身のクリスタルが赤く発光を始め、自身の周囲に燃え盛る隕石のような火の玉を生成。

『ギンガファイヤーボール!!』

突き出した腕の動きに合わせて進軍を始めた火炎弾がミサイル群と衝突し、互いの威力で爆散し合う。

『エメリウムスラッシュ!!』

『ツ———!!』

爆発によつて生じた黒煙の中から、ゼロの頭部から伸びた熱線が不意を打つように飛び出す。

だがUキラーザウルスはいとも容易くそれを跳ね除け、逆に触手の内一本を死角からゼロへと伸ばした。

「ウルトランス！ キングジョー！ ランチャー！！」

『ツオリヤ！！』

触手を弾いたのはビクトリーの腕から飛んできた光弾。

その腕の形状は元のビクトリーのものではなく、かつて戦ったキングジョーブラックに供えられていたペダニウムランチャーに酷似していた。

「何だあれ！！ 腕の形変わってんだけど！！」

『ん？ ああ、ビクトリーは怪獣の力を身体の一部に還元できるんだよ』

唯一彼の能力を知らない陸のみが驚きを見せ、ゼロ、ギンガ、ビクトリーの三人は尚も敵の攻撃をかわし続ける。

「ウルトランス！ サドラ！ シザース！！」

『ヒカル！ 今だ！』

『おう！』

今度は右腕をカニのような鉗へと変化させ、Uキラーザウルスの攻撃を纏めて弾く。

『ギンガセイバー！！』

奴の意識がビクトリーに集中した隙に、腕から光剣を伸ばしたギンガが二本同時に触

手を刈り取った。

『流石のコンビネーションだな．．．．．つと!』

ブレスを叩き、その身を青く染め上げながら横一文字に薙ぎ払われた剛腕を回避する。

『ミラクルゼロスラッガー!』

ルナミラクルゼロへとタイププチェンジ。指揮棒代わりのゼロランスを駆使して操る光の刃で次々とミサイルを切り裂いていく。

『オオオオオ．．．．．!』

クリスタルを黄色に光らせ、頭上に発生させた雷雲から吸い寄せた電気をその身に宿すギンガ。

『ギンガサンダーボルト!!』

「ウルトランス! ハイパーゼットン! シザース!!」

投擲された円盤状の雷撃と並んでビクトリーが飛び出し、巨大な爪となった右腕をUキラーザウルス本体へと向けて刺突させる。

が、

『ツ———!!』

『っ!!』

奴の頭部の発行体に煌き、そこから放たれた光の柱がギンガサンダーボルトもろともビクトリーを飲み込んだ。

『シヨウ！ だいじよ——ぐあああああああ!!』

気を取られたギンガにも大量のミサイルが襲いかかり、爆発の衝撃波が音のない宇宙空間に轟く。

『ガルネイトバスタアアアアアアアア!!』

落下していく二人へ向けられた意識をこちらに向けなるべく、ストロングコロナゼロが爆炎を奴へとぶつける。

『ツ——!!』

『ぐっ……!!』

狙い通りこちらに向かって来たのはいいのだが、これ程身体の大きさに差があるとタイマンで相手取るのは無理がある。

「ゼロ飛べ！ 距離取ってあの二人が起き上がるまで時間を稼げ！」

『っ！ そうか！』

陸のアイデアを聞いたゼロは言葉の通りに飛び上がってUキラーザウルスから距離を取るが、

『いっ……!!』

奴は上空のゼロを追い、その巨大な体躯が浮かび上がらせたのだ。

「飛べんの!! 嘘だろ!!」

『当たり前だ! 我等が技術の粋を結集した最強の超獣を侮るでないわ!!』

Uキラーザウルスが押されている間は黙っていたヤプールが、形勢が逆転した途端勝ち馬に乗って高々に我が子の自慢をしてくる。

『ッ———!!』

『「がああああああああああああああ!!」』

瞬く間に上を取られ、振り下ろされた巨大な両腕がゼロを強襲した。

拳だけでもゼロの身体を上回る大きさを持つているのだ。防ぐ術もなければ回避する術もなく、弾丸が如し速度で地面に叩き落されてしまう。

『ぐ……あ……!!』

その一撃は重く、モロに喰らった身体はすぐには起き上がってくれない。

『クク……、どうだ。かつてウルトラ兄弟を苦しめた我が最強兵器の実力は?』

『がっ……ああああ……!!』

虫ケラを踏み潰すかのように踏みつけられ、奴の全体重が押し掛かってくる。

『フハハハ……!! どうだ? かつて倒した敵に甚振られる気分は?』

『……テメエ……!! どうしてこんなに早く復活した……!!』

ヤプール人は負の感情を糧とし生きる存在。例え肉体を滅ぼそうとも、人々のマイナスエネルギーがあれば何度でも蘇ることが出来る。

だが、今回はいくら何でも復活までが早すぎる。東京で奴を倒した時から、まだ半年もたっていないというのに。

『フフ…、いいだろう。冥土の土産に教えてやる。肉体を失くし、異次元空間を彷徨っていた我等に語り掛ける者がいたのだ。我等を復活させる代わりにウルトラマンゼロを倒せ、とな…』

『何……？ 誰だそいつは!!』

『スライとかいうメファイラス星人だ。……貴様等もよく知っているであろう?!』
「つ……!! またあの野郎か……!」

ダイヤを操った一件以降はナリを潜めていたが、ここへ来てとんでもない奴を復活させやがった。

『ウルトラサインを偽造し、かつて我が野望を潰しおったウルトラマンギンガとウルトラマンビクトリーもここへおびき寄せ、まとめて叩き潰す。……これほど、我が完全復活を宣言するに相応しい舞台があるか?!』

『くっ……!』

『……!』

ギンガとビクトリーが自身は異次元空間で高みの見物を決め込んでいるヤプールの睨みつけるが、依然地を舐めたままで立ち上がることが出来ない。

『苦しめ！ 慄け！ 恐れる！ 貴様等の負の感情が更に我等の力を増大させる!!』

「ぐ．．．．．あああああ．．．．．!」

ぐりぐりと左右に踏み躪られ、身体を内部からぐちゃぐちゃにされているかのような激痛が駆け巡った。

『我が復讐はこれだけでは終わらん！ 貴様等を倒した後は、貴様等の守り続けてきたものを全て破壊してくれるわ!』

『な．．．．．に．．．?』

ヤプールの意思に沿うように、ウキラーザウルスが地球へと目を向ける。

『．．．まずはウルトラマンゼロ。あの地球で貴様が随分と気に掛けているあの子娘共からだ!』

徐々に薄れ始めた陸の意識の最奥に、九人の少女の姿が浮かんだ。

「破壊．．．する．．．．．?」

『どう捌り殺してやろうか．．．．．さて、超獣に改造して死ぬまで我等が操り人形にするもの一興．．．．．!』

「殺す．．．．．?」

胡乱の中に引きずり込まれつつあった思考が這い上がってくると共に、何か別の何か
が身体の奥底から湧き上がってくるのを感じる。

『……いや、まずは貴様等の亡骸を見せしめるところから始めなくてはな。あの子娘共
の泣き叫ぶ顔を見てから捕らえ、どうするかは一人一人ゆつくり決めるとしよ
う。……何せ九人もいるのだからな』

（泣かせる？）

九人。その単語が出てきた時点でヤプールの狙いはA q o u r sとみて間違いない
だろう。

その瞬間、

「っ……！！」

ドクンと、心臓が強く跳ね上がったのを感じた。

（アイツ等を……？）

頭の中が真っ白になり、不思議な感覚が全身に広がっていく。
冷たく、刺さるような心地の悪い感覚。

苦しみのあまり、今にも狂いそうな感覚。

（んなことさせるか……）

九十五話 足掻いた末

鞠莉の父の尽力によって統廃合の期限が延ばされてから、既に四時間が経った。

時計の時刻は一時を回り、理事長室もお通夜ムードである。

「あれから、全然増えない……」

床に座り込んだルビィの言う通り、だいぶ前に八十七人になってから数字は微動だにしてくれない。

「つ……！ やっぱりパソコンがおかしいんじゃないの？」

痺れを切らした善子がぶんぶんパソコンを上下に振るが、やはりピクリとも動きはしなかった。

「Stop。壊れてないわ」

穏やかな笑顔に疲れの色を滲ませた鞠莉がその手を止めさせ、それに他の三年生が続く。

「これが現実なのですわ。……これだけの人が、浦の星の名前を知っても……」

「例え町が綺麗で、人が優しくても、わざわざここまで通おうとは思わない・・・」
紛れもない事実である果南の言葉が刺さる。

いくらAqoursが魅力的で、人気があっても、浦の星女学院の魅力がそれに劣つてしまう。

恐らくほとんどの人にとってメインはAqoursで、立地の悪い学校は飾りでしかないという事だ。

「……………」

重い沈黙が室内を包む。

そんな空気に、ぐうぐ、という乾いた音が水を差した。

「そっさいえーばー、お昼食べた後、何も食べてないわね!!」

音の発生源である梨子が誤魔化すべく必死に弁明をする。

緊迫の糸が切れ、微かながらも笑いが理事長室に溶け込んでいった。

『ハアアアア……!!』

圧倒的な殺意をその身から醸すゼロダークネスが月面上空を舞う。

『ツ———!』

殺到するミサイルを尽く回避し、Uキラーザウルスへと突進していくその姿はまるで鬼。

『ズザラアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

眩い闇を抱いた漆黒のゼロツインソードが振り抜かれ、初使用時の何倍にも膨れ上がったデスシウムスライサーが轟音と共に炸裂。

『ツ———!!』

胸部に深々と斬撃を刻み込まれ、悲鳴と憤怒の混じった慟哭が上がった。

『何だあれ……!!』

よろよろと起き上がったギンガが、黒と赤に染め上がったゼロの肉体を見てそう零す。

『……本当にあのゼロなのか……?』

ビクトリーも驚きを隠せないでいる一方で、ゼロダークネスの暴れつぷりを目の当たりにしたヤプールから焦りの声が漏れる。

『なんだ……なんだその闇の力は……!!』

Uキラーザウルスはウルトラ戦士を倒すために作られた、いわば対ウルトラ戦士専用のキリングマシン。

そんな傑作が、たった一人のウルトラマンに圧倒されているというのだから。

『この……、認めるものか……！ 貴様などにイイイイイ！』

ヤプールの怒号に同調するようにUキラーザウルスが咆哮を上げ、ミサイルにレーザー、破壊光線と、奴がその身に搭載したありつただけの攻撃がゼロへと押し寄せる。

『ジュアア!!』

だが黒き戦士には何一つ命中しない。

繰り返される急旋回を前に破壊光線とレーザーはもの見事に全回避され、ミサイルもデスシウムショットによって次々と打ち落とされていく。

〈おい陸落ち着け！ 闇に飲まれるな！〉

ゼロダークネスの中。身体を動かさせないでいるゼロは激しい焦燥と責任感に襲われていた。

「悪いゼロ……。アイツだけは俺が……！」

へっ……!! お前意識が……!

聞こえていないものかと思っていた呼びかけに対しての返答。

まさかの事に気後れこそしたが、同時に違和感も覚え改めて今の状況を整理する。

へ………目は紅い。ベリアル力が発動している事は間違いないな

引つ掛かるのはそこではない。そのベリアル力の増大具合と、それでもなお陸が自我を保っている事だ。

これ程までの闇。陸のような人間どころか、ウルトラマンでも正気を保っていられるものではない。

だというのに、陸は会話できるレベルまでの意識を持ち続けている。

へ………おかしい

それだけではない。以前ゼロダークネスとしてキングジョーブラックと戦った際、陸は慣れない空中飛行に苦戦していた。

なのに、今彼はゆうに百は超えているであろうミサイルの群衆を一つたりともヒットさせることなくかわし続けている。あれからまだ一、二ヶ月しか経っていないというのに。

へ………いくら何でも、成長速度が速すぎる

『ザアアア!!』

ゼロがそんな疑問を抱いている間にも、頭部にドロップキックをもらったUキラーザウルスは派手に転倒する。

『シヨウ、俺達も』

『ああ』

『貴様等は引つ込んでいろ!!』

ゼロ一人に任せつきりにする訳にも行かないとギンガとビクトリーが地を蹴るが、今はゼロダークネスの撃滅しか考えていないヤプール。

その命令に従ったUキラザーウルスが伸ばした二本の触手が二人を捕らえてしまった。

『う……ぐう……!!』

『外れん……!!』

首根っこを掴まれ、その細さからは考えられない剛力が足を地面から引き剥がす。

神経が圧迫され、徐々に黒ずんでいく視界と意識。

身体に力が入らなくなったギンガが、するりとその手を落としかけ――、

『ストリウム! 光線!!』

瞬間、背後から駆け抜けた七色の光線が触手を焼き切った。

『ふうっ……』

『おい、しつかりしろヒカル!』

辛うじて気絶せずに済んだギンガを支えるビクトリー。

続いて何が起こったのだろうと光線の発生源である宇宙空間見上げるとそこには。

『フウウン………』

二本角が特徴の真紅の巨人——ウルトラマンタロウが両腕をT字に構えた状態でこちらを見下ろしていた。

『タロウ………』

『大丈夫か？ ヒカル、シヨウ』

地上に降り立ち、彼もまた心配するように二人へ駆け寄る。

『どうしてここに？』

『あのウルトラサインが偽造だと分かった。それで罨だと判断し、君達を引き留めに来たのだが………、もう既に遅かったようだな』

眼前で猛るUキラーザウルスを視界に捉え、悔しそうに呟くタロウ。

が、それと戦う暗黒の戦士の存在に気が付いた瞬間に顔色が変わった。

『つ………!! あれがゼロなのか?!』

ギンガとビクトリー以上に驚いた様子を見せる。

それに対し二人はこくりと頷いた。

『ああ、何でかは分かんないけど、いきなり』

『ヤプールの言葉が一体化してる奴の逆鱗に触れたらしくてな。その後は見ての通りだ』

『……オーブが言っていたものとはこれだったのか……』

まさかこれ程とはなと続け、ギンガへと顔を向ける。

『とにかく、今はヤプールの事が最優先だ。ヒカル!』

光の粒子へと変わったタロウがカラータイマーを介してギンガの体内へ入り込み、その力を彼へと授けた。

『久しぶりに行くぞ。準備はいいな?』

その間に、懐かしさを感じつつも頷く。

『っ……、ああ! ショウ!』

『ふっ……、任せろ!』

次の瞬間、二大戦士のクリスタルから閃光が溢れた。

『今こそ、一つになる時! ウルトラマンタロウ!』

そのエネルギーが太陽を模ったような光の輪を現出させ、ギンガとタロウ、そして他のウルトラ六兄弟の姿が重なっていく。

『ギンガに力を! ギンガストリウム!!』

輝きが収束し、新たなギンガがその姿を現す。

シルエット自体に変化はないが、額のビーブランプや胸部のプロテクターなど、ところどころに六兄弟の面影を匂わせていた。

「ウルトランス！ ウルトランマンヒカリ！」

一方ビクトリー。先程までとはまた別のウルトランスを披露するが、今度は腕に特に変わった変化は見受けられない。

「ナイトティンバー!!」

代わりに出現したのは青い笛のような形をしたアイテム——ナイトティンバー。

ビクトリーはそれを手に取ると吹口部に自らの口をあてがい、演奏でもするように高いメロディを奏で始める。

『~~~~~♪』

そのリズムに同調し、どこからともなく湧き出た青いオーラがビクトリーを包み込んだ。

『フツ！ ハア！』

ナイトティンバーを横笛型のティンバーモードから片手剣型のソードモードに移行させ、天に掲げる。

すると周囲のオーラが青い結晶体へと変化。展開された刃から放たれた蒼い光が続々とその結晶体を反射し、V字型のカラータイマーに注ぎ込まれていく。

「放て！ 聖なる力！」

『ツイヤ・・・』

こちらもギンガ同様シルエットこそ変わっていないが、カラーリングが大きく異なるものとなっている。

蒼を基調とした身体に白のラインが走り、紅く変化したクリスタルとの色補強もいい姿だ。

『シヨウラア!!』

『ツオリヤツ!!』

強化変身を終えたウルトラマンギンガストリウム。そしてウルトラマンビクトリーナイトが地を蹴り上げ、未だUキラーザウルスとの攻防を続けるゼロダークネスの元へと飛翔していった。

梨子のみでなく、全員が空腹を感じ始めたので、仕方なく一年生三人が買い出しに。

「全く……世話が焼けるつたらありやしない。私はリトルデーモンの事で手一杯なのに」
「仕方ないすら」

「今のAqoursを作ったのは千歌ちゃん達二年生。元のAqoursを作ったのはお姉ちゃん達三年生。責任感じてるんだよ」

どうして自分なんだと文句を垂れる善子を花丸とルビイが諭す。

不満は漏らしつつも、薄々勘付いてはいたらしい彼女は今の返答に若干顔を陰らせる。

「……そんなもん、感じなくていいのに………：少なくなとも私は、感謝しか………」
そんな謝辞を述べている途中で違和感を覚え、振り返ると二人は足を止めて娘の成長を見守るような眼差しを向けてきていた。

「リ、リトルデーモンを増やすために、Aqoursに入っただけだし！」

素直に心情を吐露した事が恥ずかしくなり、顔に朱を差しながら今更苦しい言い訳をひり出す。

そんな善子を見て、幼馴染である花丸は更に朗らかな笑みを作った。

「だからまる達が面倒見るすら。それが仲間すら！」

春までは本さえあれば十分だと言っていた花丸。

善子だけじゃない、花丸だってAqoursとの出会いで変わることが出来たから。

「ふふっ…、なんかいいな、そういうの。支え合ってる気がする♪」
ルビイだつて勇気をもらった一人。

こんな時だからこそ、普段は聞けないそれぞれの思いを口にできる。

「……………そうずらね」

「ふん…♪ いいこと言つたご褒美に特別に餅巾着あげる！」

「ええ、出来たら黒はんぺんがはいずら」

「うえっ!! それは駄目!!」

「ルビイはたまご！」

「うっ!! それも駄目!!」

上級生の待つ学校へ足を進めながら、いつも通りじゃれ合う三人。

今しかないこの瞬間を噛み締めるように笑う彼女達を、夜空に灯る星々が温かく見守っていた。

「ウルトラマンの力よ！」

『スペシウム光線!!』

ウルトラ六兄弟の力を宿したギンガの放つ光線がUキラーザウルスを強襲する。

『貴様等……!! 邪魔をするな!!』

横槍を入れられて頭に來たらしいヤプールの命令で、ゼロダークネスに向けられていたミサイルの群衆が二人に押し寄せてくる。

「ワン！ ナイトビクトリウムフラッシュユ！」

『ナイトビクトリウムフラッシュユ!!』

自らの力を開放したビクトリーがナイトティンバーのポンプアクションを一回行い、蒼い軌跡を描きながら回転切りを繰り返す。

プロペラのように宙を駆け巡り、全てのミサイルを切り伏せた。

『よう。陸とか言ったか』

ビクトリーは爆発で生じた黒煙の世界から抜け出し、Uキラーザウルスの上を取っていたゼロダークネスの隣に並ぶ。

『そんだけの力を扱えるなんてスゲーじゃねーか。けど、一人じゃ限界がある。……一緒にコイツ倒そうぜ』

続くギンガがそつと肩に手を置いた。

以前オーブやジードに精神的に助けられた事もあつてか、先輩戦士の声には半暴走状態でも身体は自然と聞きに入る。

「・・・・・・・・はい」

ほんの少しだが落ち着きを取り戻した陸は、紅く輝かせた目はそのままにビクトリーと並んでUキラーザウルスへと切り込んでいく。

『この・・・・・・・・虫ケラ共がああああああ！』

ヤプールの焦りと怒りの感情が乗り移りでもしたかのようなUキラーザウルスが先程ビクトリーを飲み込んだ光筋の束をぶっ放してくる。

『ヒカル!!』

『ああ、任せとけ!』

サポートとして二人の後ろに回っていたギンガが、左腕に装着されたストリウムブレースに手を掛けた。

「ウルトラマンエースの力よ!」

『メタリウム光線!!』

L字に組まれた両腕から青、桃色、白の三色が映える光線が放たれ、Uキラーザウルスのものとの押し合いを制し奴の本体に直撃。

「ツー! ナイトビクトリウムブレイク!!」

刹那、ゼロの構えた黒剣とビクトリーの構えた群青の剣が刃に鈍い光を宿す。

『ナイトビクトリウムブレイク!!』

『ザラアアアアアア!!』

蒼の剣閃が横薙ぎに迸った後、立て続けに抉り込まれるゼロ距離発射のデスシウムスライサー。

同じ部位に三連撃を喰らい、Uキラーザウルスは月全体を揺らすけたたましい悲鳴を轟かせた。

『あとは任せろ。決めるぞシヨウ!!』

ギングの指示で二大戦士が月面に並び立つ。

ポージングを繰り返して力を高める者。基本形態に戻って全身のクリスタルにエネルギーを集中させる者。

そして、これら二つの波長が重なった時。

『コスモミラクルエスペシャリー!!』

誕生した小銀河から虹色の光が幕を伸ばし、疾走するV字のエネルギー弾と融合する。

『ッ——!!』

やがて一つとなった光線が地表を抉りながら突き進んでゆき、Uキラーザウルスの全

身を木端微塵に消し飛ばした。

『ぬぐうう………ウルトラ兄弟でもない貴様等などにイ………!!』

最強の超獣兵器を亡き者とされ、募り募ったぶつけどころのない怒りを声音に乗せたヤプールの気配が消える。どうやらどこかに逃げ込んだらしい。

『グ……アアア………』

異次元の悪意が遠ざかり、糸が切れたようにゼロダークネスがその場で膝を付く。体内から漏れだしていた闇のオーラが霧散し、元の赤と青の姿に戻る。

『お、おい……大丈夫か?』

『……ああ……、問題ない………』

ようやく身体の主導権が戻ってきたゼロは強がつて見せるが、肩を大きく揺らし、カラータイマーは点滅を始めてしまっている。

〈ゼロ〉

ビクトリーの肩を借りるゼロに、ギンガから分離したタロウは他の者に聞こえないようにテレパシーで直接脳内に語り掛けてきた。

〈……彼のその力、君自身の身体も蝕む程のものなのか?〉

〈……アンタも気付いたか〉

宇宙警備隊筆頭教官の慧眼には猿芝居が通用しない。

力の危険性を鑑みたのか、ゼロの身を案じているのか、適当なはぐらかしは通用しなさそうな雰囲気醸し出している。

「……ここ最近、戦闘に関する成長速度が恐ろしく早い。それにベリアルの方も増幅する一方だ」

「……そうか」

ゼロのインナースペースの中では陸もまた肩を大きく上下させている。人間があれ程の闇をコントロールしたのだ。むしろ疲弊するだけで済んでいる方がおかしい。

「……タロウ教官はどう見る？」

「……今のところ、私にはまだ何も言えない。この一件は一度本部に持って帰るとしよう」

「……了解した。頼みます」

ゼロにしては珍しい敬語を受けた後、会話を切り上げてギンガとビクトリーに顔を向けた。

『ヒカル、シヨウ。私は本部に戻る。悪いが君達は地球までゼロにつき添ってあげてくれないか？ 流石にこの様子では一人に出来ない』

『おう、任せとけ』

ギンガが二つ返事で快く承諾し、ビクトリーもそれに同意して頷いた。

『トアアアアア!!』

二人の答えを聞いたタロウはゆっくり頷くと、両腕を広げて宇宙空間の彼方へと飛び去って行った。

「・・・あと三人!」

入学希望者の募集締め切り時刻まで、あと十分を切った。

現在の人数は九十七人。条件として提示された百人まで本当にあと少しだ。

あと、本当に一押しで学校が救われる。

「でも・・・時間はもう・・・」

「お願い・・・! お願い・・・!」

唸るように喉奥から出でた願いが室内に浸透する。

しかし時間とは残酷に過ぎゆくもの。彼女達の懸命な祈りとは裏腹に、時計の分針は一分、また一分と終わりの時へ近づいて行く。

「九十八!」

一つ繰り上がった数字を千歌が口に出す。

「……時計は……」

「だいじよぶー!」

残り一分になった時刻には目を向けず、ただひたすらにパソコンの画面に表示された九十八に視線と全意識を注げる。

「大丈夫……絶対に届くー!」

あと二人、あとたった二人で今までの努力が報われる。皆が笑えるというのに。

「だいじよぶ……届く……!」

千歌一人しか言葉にしないものの、考えている事は皆一緒。

救いたい。共に学び、成長してきたこの学校を。皆が愛した浦の星女学院を。

「届く……!」

もつとこの学校を愛していたい。もつともつとこの場所で皆といたい。

届く。その言葉を信じ、その言葉に全ての想いを乗せ、ただひたすらに数字が百に届く事を祈る。

「……届く……!」

カタン。

何十分にも感じられた長い長い一分が過ぎ、時刻が五時になった事を時計の針の音が示す。

その瞬間、無情に、冷酷に全ての願いと努力を無に帰す神の嘲笑が吹き荒び、九十八が募集終了の四文字へと切り替わる。

——浦の星女学院の統廃合が、正式に決定した瞬間だった。

九十六話 潰えた祈り

『……………』

M78星雲。光の国。

ヤプールの刺客であるUキラーザウルスを倒し、宇宙警備隊本部に帰還したウルトラマンタロウは一人首を捻っていた。

へ……地球人が、あれ程の闇を扱えるというのか………？

現在ウルトラマンゼロと一体化している地球の少年、仙道陸。

ウルトラマンオーブから彼がベリアルの力を宿している事は聞いていたが、よもやあれ程とは思っていなかった。

へ以前兄さん達と地球に出向いた時は何も感じなかったが………

ウルトラ六兄弟が揃っているのに、あの量の闇に気付けなかったなどまずありえない。

感知する事が出来なかったというよりは、あの日から今日に至るまでに力が増大して

いったと考える方が妥当だろう。

「だが、地球人が闇を、しかもあのベリアルを体内に溜め込み、増幅させているなどあり得る事なのか……？」

ベリアルの方の侵食は、タロウのようなウルトラ戦士でも抗えるか厳しいものだ。

だが陸は、自我を保つどころか制御までしている。今尚その力を膨れ上がらせながら。

「……まさか……」

タロウの中でとある一つの仮説が導き出された。

だがそれは、恐ろしく残酷なもので。

「……もし仙道陸の力が、後天的なものではないとしたら——」

「……どうかしましたか？ タロウ教官」

背後から声が掛かる。

「……メビウスか……」

振り向いた先にいたのは、若々しきを感じる一人のウルトラ戦士。

ウルトラ兄弟の一人であり、自分の教え子の一人でもあるウルトラマンメビウスだ。

「っ……！」

ぱつと頭の中で閃きの光が灯った。確かメビウスのパートナーには彼がいたはずだ。

優れた科学者として光の国最高の名誉であるスターマークを授与された、あの青い戦士が。

『メビウス。少し頼まれてくれないか?』

『え? あ、はい……』

自身を育ててくれた教官の頼みに、少し委縮しながらも頷くメビウス。

『彼を……ヒカリを呼んできてくれないか?』

募集終了。

百人を目前にして、最も見たくなかった四文字がパソコンの画面を支配した。

「……募集終了……」

「時間切れですわ……」

遂に迎えてしまった約束の時。

必死に足掻いた結果に訪れた、現実という名の、全てを奪い去っていく波。

「そんな……大丈夫だよ。あと一日あれば、ううん、半日でもいい。一時間でもいい。そ

れで絶対大丈夫……」

「それが約束ですから」

焦り、戸惑い。様々な感情でごちゃごちゃになった感情に飲み込まれている千歌をダイヤが宥める。

「でもそれだけだったら……!」

「そうだよ。ずっとじゃなくてもいいんだよ? あと……一日だけ……」

「何度も掛け合いましたわ。一晩中。何度も……何度も……ですが……」

自身も認めたくはないという想いを滲ませたまま、その心情を汲み取って寄り添ってきたルビィを抱きしめるダイヤ。

「もう既に、二度も期限を引き延ばしてもらっているのです」

「いくらパパでも、全てを一人の権限で決める事は出来ない。……もう限界だつて……」

鞠莉の父が尽力してくれた事はよく分かっている。だが、もうそんな彼でも手が及ばないところまで来てしまったのだ。

「……でも、一日なら……」

「この前だってそれで……」

「……今頃もう、統合の手続きに入ってる」

諦めきれないルビィと善子に、鞠莉の告げた皮肉な現実が刺さる。

彼女だってこんな事は望んでいない。むしろこの中の誰よりも浦の星を存続させるために力を尽くしてきたはずだ。

その鞠莉にすら、そんな事を言わせてしまう状況なのだ。

「……じゃあ……」

「本当に駄目って事……?」

即座に訪れた沈黙が肯定となり、全員がもう廃校という現実を覆せない事を悟った。

「……駄目だよ……」

けれども、そう簡単に受けとめ、割り切れるものではない。

「だって、私達まだ足掻いてない。精一杯足掻こうって約束したじゃん。やれることはやろうって約束したじゃん!!」

抑えきれない、行き所を失った感情が悔しさとなって次々と口から飛び出してくる。

何も出来なかった。足掻こう、そう誓ったのにも関わらず。

「……全部やったよ。そして、決勝に進んだ。私達はやれることは全部やった」

果南の言葉に間違いはない。

出来る事はやった。全力で、一心不乱に。

その結果がラブライブの決勝に出場。そしてこの統廃合決定もまた、やれることをや

り切った結果なのだ。

「じゃあ何で……学校が無くなっちゃうの？ 学校を守れないの？」

今にも泣き崩れそうなその声音には、きつと今千歌が抱いている想いの全てが込められている。

目の前にある、自分達のこれまでを根こそぎ否定するような現実に対する憤り、力及ばなかつた自分への呵責。

それら一つ一つが、今の千歌の挙動となつて表れている。

「そんなの……そんなの！」

ぶつけようのない気持ちをも、どこにもぶつけることが出来ないままにいるその姿は、見ていてとても心苦しい。

「……」

「待ちなさい」

そんな彼女を見て、不意にドアの方へ向かつた鞠莉をダイヤが制止する。

「何をする気ですの？」

「もう一度だけパパに連絡してみる！」

「……これ以上言つたら、鞠莉が理事長を辞めるように言われる」

二度目の制止は、曜や梨子と共に千歌の肩に手を置く果南だった。

「……いいよ。少しでも学校を守れる可能性があるんなら、こんな立場——」
「駄目だよ」

怒鳴るでもなく、泣くでもなく。ただただ静かに諭す。

「受け入れるしかない。……学校は、なくなる……」

「……?」

その時、ずずんと建物が揺れた。

「……なんぞら……?」

一瞬地震かと思つたが、それにしても揺れが瞬間的だ。

同時に響いた音は校庭の方から聞こえてきたので、果南を先頭に、曜と梨子は千歌に寄り添う形で外へと出て行き、目にしたものは。

「……ゼロ……」

カラータイマーを点滅させるゼロと、彼に肩を貸す見た事もない二人のウルトラマンの姿だった。

「……………う……………」

浦の星女学院の校庭に降り立ち、ゼロへの変身を解除する。

一瞬自我が飛びかけていたとはいえ、流石にベリアルの力を行使し過ぎた。

「立てるか？」

「ああはい。ありがとうございます……………」

支えてくれていたギンガとビクトリー。

彼等も変身を解除し、橙色の隊員服らしき衣類に身を包んだ二人の青年から離れる。

「……………陸」

慣れ親しんだ声音が耳朶に触れ、自然とそちらに視線が流れた。

「……………果南姉ちゃん……………」

そこにいたのは松浦果南と、その背後で心配そうにこちらを見やるAqoursメン

バー数名だった。

日が昇った直後ならば誰もいないだろうとここに着地したのだが、どうして学校に集

まっているのだろうか。

「……………どこ行ってたの？」

急にいなくなった事を責めるでもなく、果南はそれだけ言つて陸の方に歩み寄つてくる。

「・・・月。・・・何にも言わずにいなくなったのはゴメン・・・」

その様子に違和感を覚えつつも答えると、疲弊しきつた陸の身体を案じるように頭を手を乗せてきた。

「・・・皆心配してたんだからね」

月で何か戦いがあった事は察してくれたのだろう。お咎めはそれだけで、その後はお得意のハグだ。

「・・・?」

違和感が引つ掛かった。

普段のスキンシップ程度のハグではなく、誰かの温かみを求めるような、折れてしまわないように支えて欲しいと言つたような、そんな感じのもの。

果南がこうなるのは、大抵何かあつた時。

「・・・ねーちゃ——」

何があつたのかと問おうとしたその瞬間。曜と梨子に付き添われながら昇降口から出てくる千歌が視界に入った。

「・・・千歌?」

今まで見た事もないような、輝きの失われた気力のない表情。

どうして彼女がこうなっているのか。その理由を探り、すぐに心当たりを弾き出す。

『……おい果南。まさかラブライブは……』

ゼロも薄々嫌な雰囲気を感じたらしく、殆どこいつのせいで確認することが出来なかったラブライブ予選の結果を問う。

まさかAqoursは……、そんな最悪な結果が脳裏を過った。

「……ううん。予選の方は大丈夫。ちゃんと決勝に進出できた」

その想像を果南は否定する。

ひとまず決勝に進めた事はほっとしつつも、だったら千歌のあの様子の真実は一体何なんだといった目を彼女に向けた。

「……けど、統廃合は防げなかった……」

『……!』

陸の背中に回された腕に込められた力が強くなる。

そうだ。千歌のパフォーマンスの事やネクサスの事で殆ど考える暇もなかったが、ラブライブ予選の日は、同時に浦の星女学院の命運が決定する日でもあったのだ。

『……嘘だろ……?』

信じたくはない。

だが、色々と納得が言つてしまふのだ。

千歌や果南の、普段とは全く違う弱々しい様子。顔には出さないようにしているものの、雰囲気はどこかほの暗い他のAqoursメンバー。

再確認せずとも、浦の星女学院の統廃合が事実であることは理解できてしまった。

「……………廃校……………」

浦女は陸自身の学校ではない。

だが、これまで学校を守ろうとするAqoursや、同じくらいに学校を愛し、Aqoursを応援していた浦女の皆の事を知った今では、やはりその現実辛い。

「……………」

少し離れた場所で、絶望のどん底にいるような顔をした千歌が俯いている。

学校を救えなかった事。学校の皆の期待に応えられなかった事。それら全てが自責の念となつて彼女に重く押し掛かっているのだろう。

何か掛ける言葉を探すが、この状況でどんなことを彼女に言えばいいのか。その答えを持つている者はここにはいない。

———起こそう奇跡を！ 足掻こう精一杯！ 全身全霊！ 最後の最後まで！

皆で……………輝こお———うっ！！

奇跡を起こすと誓った。精一杯最後まで足掻くと誓った。

だがそれに伴った結果は描いていた未来とは程遠いもの。心根がポツキリ折れてしまっているのはハッキリ見て伺えた。

空気は重力が何倍にも増えたかのように重い。

息苦しく、押しつぶされそうで、この場で言葉を発すものはいなかった。

……ただ一人を除いては。

「アレーナ!! 何でアレーナがここに!!」

「はいい?」

ギンガに変身していた青年は、この空気にも関わらず驚きを前面に出しながら何故かダイヤへと詰め寄っていた。

「……おい……、ヒカル……」

ビクトリーに変身していた青年も空気を読めと目を細める。

「もしかして、ここがアレーナの世界なのか!!」

「ちよ! ちよお! いきなり何なんです!! ていうか何方ですの貴方は!!」

訳が分からなそうに戸惑うダイヤの様子を見て、彼女の事をアレーナと連呼していた青年は更に驚いた顔で問うた。

「……もしかして、アレーナじゃない……?」

「今気づいたのか」

もう一人の方から起きれ顔でツツコミが入る。

「あはは……ごめんな。俺は礼堂ヒカル。ウルトラマンギンガつて奴と一緒に戦つてる」
すつかり警戒モードになったダイヤに対し非礼を詫びると、青年——礼堂ヒカルは
白い歯を見せてニカリと笑つた。

「で、こつちが俺の仲間で地底人のシヨウ。ウルトラマンビクトリーな」

「おい。簡単に正体を明かすな」

もう一人の青年——シヨウは不機嫌そうにヒカルを睨み、どうせゼロの仲間だろうし構わんけどなと言ってから A q o u r s の面々に軽く会釈をする。

「地底の民、ビクトリアンのシヨウだ。コイツの言つた通りビクトリーと共に戦つてい
る」

「は、はあ……」

普通は地底人と聞けばもつと興奮したり驚くものだろう。

だがそれを程のインパクトをもってしても、沈んだ彼女達の心を盛り立てる事は不可
能だった。

「まあ……、何ていうかさ……」

その様子を目にしたヒカルは、後頭部を搔きながら掛ける言葉を探す。

「……確かに学校つてのは大事な場所だと思うぜ？ 大切な友達と関わったり、勉強で頭抱えたり、その事で一杯悩んだりしてさ。その学校が無くなるのは確かに辛い。……けど——」

そこまで続けた辺りで、A q o u r sメンバーの顔色を窺ったシヨウがヒカルを止めた。

「……今はあまりそういう事を言わない方がいい。そつとしておいてやれ」

過去の自分を見ているかのような顔をするシヨウ。下を向き、落とした視線を先では、怪獣のような形をした青いクリスタルが握られていた。

「……」

そして再び訪れてしまった沈黙。

結局この後、自然な形で解散となるまで誰一人として声を上げる者はいなかった。

九十七話 繋げる形

『浦の星女学院は来年度より、沼津の高校と統合する事になります。皆さんは来年の春より、そちらの高校の生徒として、明るく元気な高校生活を送ってもらいたいと思います』

体育館にて、浦の星女学院全生徒へと告げられた悲しい現実。

壇上では、取り繕った笑顔を貼り付けた鞠莉が精一杯の明るい声をマイクに乗せていた。

「？」

「？」

ガヤガヤと、たつた今統廃合の事実を知ったAqours以外の生徒が戸惑いを見せ始める。

誰もが望んでいなかった足掻きの結果が、その日の浦の星女学院全体を静かに包み込んでいった。

「千歌ちゃん・・・千歌ちゃん！」

「・・・ん？」

統廃合が決定しても、授業が無くなる訳ではない。今朝やった緊急の朝礼以外は通常運行だ。

「次、移動教室だよ？」

「あー・・・、そっか・・・」

抜け殻のように窓の外を眺めていた千歌は、曜の呼びかけで無気力な瞳を彼女に向けた。

「千歌！」

「いよいよ決勝だね！ ラブライブ！」

「またいい曲聞かせてね！」

氣遣つてくれているのか、上手く統廃合から話題を逸らしながら励ましかけてくれるむつ、いつき、よしみの三人。

そんな声を受け、ガタツと音を立てて立ち上がった千歌にクラス中の視線が集中す

る。

「そうだよね！ 優勝目指して頑張る！」

そう言った笑顔は吹っ切れていた。……吹っ切れているように見せていた。周りは誤魔化しているが、付き合いの長い曜。

「……………」

「……………無理しやがって」

そして、廊下から今の様子を伺っていた梨子とゼロには通用しなかった。

「今は前を向く？」

梨子は早歩きで授業先の移動教室へと向かう背中を追う。

目の前にいるのはクラスの皆からの応援に、本音を隠してしまった千歌。

「ラブライブはまだ終わってないんだから……………」

「分かってる」

前を向こうという言葉にそう答えつつも、一切振り返る事なく立ち去っていく。

「……………」

普段の彼女でない事は見て明らかだ。その拒絶感漂う雰囲気、肩を掴もうとする手

を伸ばしきれずに止めてしまう。

それ以上何も言えず、ただ足早に歩き去っていく背中を見つめる事しか出来ない。

「……悪い、梨子。今日はもう戻る……」

「……うん」

冬制服の袖の中に隠していたウルティメイトブレスレットが消失し、梨子の体内からゼロが抜け出ていく。

「……放課後。……練習の時は来てね」

「……分かってる」

短く答え、ゼロはこの場から逃げるように陸の元へと帰還していった。

「マジ?! 浦女も統廃合?!」

「マジマジ。統合先の学校も同じだってよ」

「うおおお! てことはAqoursの子達と同じ学校になれるって事か?!」

陸の通っている学校。

浦の星女学院の統廃合。朝っぱらからこの話題で持ち切りのクラス内は話し声轟しく、陸は自席の机に突っ伏しながら級友達の興奮した声を右耳から左耳に聞き流していた。

〈……おい、生きてるかお前〉

(……ゼロ?)

突然の帰還に少しだけ目線を上げる。

(……お前見張りはどうした?)

〈……流石にあの空気の中にいるのはキツイ。窒息する〉

薄々予想はしていたが、やはり統廃合が決定した浦女の雰囲気もかなり重苦しいものとなってしまうているらしい。

〈沸き立ってんじやねーかクラスメイト共〉

(超ウゼエ。コイツ等Aqoursがどんな思いでいたのか分かってんのかよ……) 今更クラスメイトに腹を立てたところでどうしようもないのは分かっているが、これまでのAqoursの苦心や努力を知らない連中が可愛い女の子と同じ学校になれるという理由だけで喜んでるのは見ていて気分が悪い。

(……千歌はどうだった?)

耳障りなクラス内の喧騒を無視するために耳を塞ぎ、ゼロに伺い立てる。

学校が無くなる。当然 A q o u r s 全員が今まで見た事もないような顔でショックを受けていたが、中でも一番酷いのは千歌だ。

「……ずっと上の空って感じだな。一応、クラスメイトには明るく振舞っちゃいるが」

（やっぱりか……）

東京遠征でボロボロな結果に終わった際、A q o u r s メンバーや陸にすら本心を隠していた千歌だ。

自身の沈んだ気持ちを周りに伝染させないように気を遣っているのだろう。

「へとりあえず、梨子が練習には顔出させて言つてたぜ」

（……ん。了解）

普段なら言われるまでもなく浦女に足を運んでいるというのに。

今日ばかりは、これまでの日々が嘘のように足が重く感じる。

「……」

どうして、自分はそんな大事な時に寄り添ってあげられなかったのか。

傍で見守り、時に力を貸すこと。それが自分に出来る事だと思つていたのに。

「……何やってんだろ。俺……」

その眩きがクラスメイトの耳に届く事はなく、いつまでも陸の中だけで反芻し続けて

いた。

「学校が統合になったのは残念ですが、ラブライブは待つてくれませんわ」

こんな時に限って時間とは早く過ぎ去って言うてしまうものだ。

夕暮れ空の下、浦の星女学院の屋上に集まったAqoursメンバーと陸。そして何故か着いて来たヒカルとシヨウ。

「昨日までの事は忘れ、今日から気持ちを新たに、決勝目指して頑張ろう！」

「勿論よ！ 五万五千のリトルデーモンが待つ魔窟だもの！」

「皆善子ちゃんの滑り芸を待つてるぞら〜♪」

「ヨハネ！」

てつきり沈んでいるものかと思つて来てみれば、皆の顔は異様に明るかった。

無論、それが表面上の張り付けただけのものだという事を理解するのに時間は掛からなかつたが。

「……何でアンタ等もいるんすか？」

隣に視線を流し、興味津々と言った様子のヒカルを見やる。ちなみに昨日はシヨウと共に当然必然当たり前が如く仙道家に居座っていた。何故なんだ。

「スクールアイドルなんつーもんは俺達の世界にはないからな。そりや興味も沸くよ」となると、以前クレナイガイや朝倉リクがA q o u r sの練習を見に来たのも単に物珍しさ故だったのだろうか。

「……全く、何故俺まで……」

「いいじゃんかよー。それに学校でアイドルなんて千草が食いつきそうなもの見逃せる訳ねーだろ？ 丁度いいしサクヤにも教えてやれよ。アイドルに興味持つかもしれねーぜ？」

「何……？ そんなふしだらなものサクヤにはやらせんぞ！」

「あ、あ!! 何がふしだらなんだよ！ 千草に喧嘩売ってんのかお前!!」

それ以前に目の前の九人の少女に喧嘩を売りまくっている事を理解して欲しい。

「そ、それに！ お姉ちゃん達は、三年生はこれが最後のラブライブだから……」

一瞬にして口喧嘩に発展した二人は無視し、皆に続いて声を上げたルビィの方を向く。

「だから……だから……！ 絶対に！ 優勝したい！」

優勝したい。

一瞬語気を弱めつつも、心からの願いであろうその言葉はハッキリと口にした。
「ルビィ……」

「Yes! じゃあ優勝だね!」

「そんな簡単な話じゃないけどね……」

全員が、互いに仲間として支え合う言葉を掛け合う。

「でも、そのつもりでいかないと」

学校を救う事が出来なかった事は確かに悲しい。だが、いつまでもそれに囚われていてはラブライブ優勝など夢のまた夢。

「……うん、優勝しよう……」

そうは言うものの、どこか空虚に感じるその声音。

沈みゆく朱い夕陽が普段通りに。されど、痛いほど優しく彼女達のいる屋上を包み込む。

「じゃあ、アツプしてー!」

「ライブ後だから入念にね〜」

三年生の声におー! と皆で答え、それぞれ位置について日頃の練習メニューを頭からこなしていく。

「じゃあストレッチいくよー。せーのっ!」

「「「「「「「イチニ、サンシ」」」」」」」」

「そつちもいい加減に」

準備体操を始めた九人を横目に、陸は陸で練習の邪魔になりそうなので未だに言い争っているヒカルとシヨウを止めに入る。

「・・・・・・・・・・」

二人を宥めながら、再びちらりと千歌の方へ意識を向けた。

身体を動かせば少しは気が紛れるだろうかと思っていたが、やはりそう簡単に割り切れるものでない事は見て伺える。

「「「「「「「ニーニ、サンシ」」」」」」」」

いつもの輝きが見えない彼女の瞳には、今何が映されているのか。

傷付いた本心を隠す仲間の姿か。ラブライブの決勝か。

それとも――、

「つ・・・・・・・・・・!!」

その答えは、彼女の瞳の端から流れ出た一筋の雫によって明らかとなる。

「・・・・・・・・・・千歌ちゃん・・・・・・・・」

「・・・・・・・・? どうしたの?」

気付いたのは陸だけじゃない。Aqoursの皆も、ヒカルも、シヨウも。彼女の心

が無意識の内に零した涙を前にただ立ち尽くしていた。

「・・・・・・・・忘れられる訳ねーよな」

そう。あの瞳には、今もきつと鮮明に焼き付いている光景がある。

あと二人。たった二人だった。

だというのに、無情にも時と現実によつて全てを否定されたあの瞬間。

「・・・・・・・・皆？」

取り繕った笑顔をどんどん崩していくメンバーを見て千歌はきよとんと首を傾げる。

「今日は・・・・・・・・やめておこうか」

そう切り出したのは果南だった。

彼女は千歌と一番付き合いが長い。例え言葉に出されずとも、千歌の心情を読み取る事など造作もない事なのだろう。

そしてその言葉は、今はそれが最善であると判断したからこそそのもの。

「え・・・・・・・・？　なんで？　平気だよ!!」

千歌はそう訴えるも、こうなると頑固な果南の表情は揺るがない。

「ごめんね・・・・・・・・無理にでも前を向いた方がいいと思っただけど・・・・・・・・。やっぱり、気持ちの整理が追い付かないよね」

続く鞠莉も、いくら論理では前を向こうと言つても完全に吹っ切れる事は出来ない

いう旨を重ねた。

「そんな事ないよ。ほら、ルビイちゃんも言ってたじゃん！
のライブなんだよ！ それに・・・それに・・・！！」

「千歌だけじゃない」

前に歩み出た果南が言い募る千歌の両手を握った。

「皆そうなの」

今この瞬間まではあえて隠していた事実を告げる。

「ここにいる全員。そう簡単に割り切れると思ってるんですの？」

浦の星女学院を救うために誰よりも努力した九人だから。

全校生徒の学校が大好きだという想いを背負ってここまで走り続けてきたA q o u

r sだからこそ、統廃合決定というショックは大きい。

「やつぱり、私はちゃんと考えた方がいいと思う」

一年生の頃にも廃校を阻止しようと立ち上がったいた果南が皆に提示した思いは――

「本当にこのままライブの決勝に出るのか、それとも・・・」

その言葉を受けた千歌は、静かにこれまでの道を共に歩み続けてきたメンバーの顔を見渡した。

「・・・・・・・・そうですわね」

陰つた笑みを浮かべる者。眉を下げ、心の曇りを見せる者。

表情こそそれぞれ違えど、皆一様に諦めの色を含んでいる事に千歌は敏感に反応する。

「ま・・・待つてよ！ そんなの出るに決まつてるよ！ 決勝だよ!! ダイヤさん達の――」

「本当にそう思つてる?」

鞠莉の一言が千歌を制する。

「自分の心に聞いてみて。・・・・・・・・ちかちちだけじゃない。ここにいる皆・・・」

「・・・・・・・・なんか、大変な時にお邪魔しちゃったみたいだな・・・」

結局練習は行われずに解散。

一緒に帰つたはずの曜ともロクに会話を交わさずに自宅へ戻つた陸へ、ヒカルは気まぐすそうにそう言つた。

「……いや……、誰が悪い訳じゃないですよ……」

何者かの悪意が引き起こした悲劇じゃない。これまでの事が運んできた結果だ。だからこそ、残った悔しさややるせなきの矛先が向くのは自分自身。

「……すみません。せめてあの夜、私達が付いておくべきでした」

「……それで結果が変わったとは思えねえけどよ。やっぱ、せめて何か言つてやることぐらい出来たと思うとな……」

現に、浦女の統廃合に何の関わりもないミラーナイトとグレンファイヤーですらも今の状況に責任を感じているのだから。

「……で、なんでお前はずつと黙つてんだよシヨウ」

「……」

戻つて以降、何故かずつと黙りこくつているシヨウ。

その手に握られているのはやはり、あの青いクリスタルで出来た怪獣の人形のような代物——クリスタルスパークドールズだ。

「なんだ？ シエパードンが恋しくなっちゃまったのか？」

「違う。……ただ、少し思い出しただけだ。あの時の事をな」

クリスタルスパークドールズは、元はシエパードンという地底の怪獣だったらしい。

シヨウが幼い頃から仲が良かったらしいが、ある事件の際に敵の攻撃からシヨウを庇

い命を落としてしまったとか。

「……コイツは、シエパードンは命を落とそうとも俺に寄り添ってくれた」

その命を落としたシエパードンの魂が変化したのが、彼の手の中にあるクリスタルスパークドールズ。

「……死んでしまえば、形が無くなってしまうてはもう、何も伝える事が出来ないと考えていた。……だが、シエパードンは死んでも尚俺に想いを託してくれた」

自分を庇ったせいで死んでしまったのだと、彼はその時自分自身を責めたであろう。だが、今もこうして前を向けるのは、シエパードンが託してくれた意思があったから。

「……大切なものを失う事は誰でも怖い。アイツ等の場合はそれが学校という友との居場所だった。だからこそ未来でも残っていたいと思ひ、その結果があれば気持ち折れるのも分かる。……だが……」

自分自身にも問いかけるように、シヨウは疑念を投げかけた。

「……形を残すことだけが、未来に繋がるという事なのか？」
「……」

すぐに返せる者はこの場にはいなかった。

Aqoursは浦の星女学院を廃校にさせたくないという想いで努力してきた。きつと彼女達の頭には、廃校を防ぐという事しか学校を救う方法がないから。

「・・・・・・・・何か別の、救う形・・・・・・・・」

そう呟いては見たものの、やはりすぐに思い浮かぶものではなく。ただ時間だけが、陸達を取り残して未来へと進んでいくだけ。

「・・・・・・・・未来へ受け継がれていくのが永遠の命・・・・・・・・」

不意にヒカルがそう呟き、何かを導き出したように表情を変える。

「そうだ・・・・・・・・。ちよつと聞いてくれ！」

思い悩んでいたウルトラマン達に、天光が差し込んだ瞬間だった。

九十八話 未来への翼

ラブライブの決勝に出場するかどうか。

その話が持ち上がった翌日、Aqoursは全員、心の整理がついたような顔で浦女の屋上に集まっていた。

「やっぱり、皆ここに来たね」

「結局、皆同じ気持ちで事でしよう?」

悩みを抱えた時、その事を誰かに話したい時。自然と足がここに向かう。

町が一望できて、海や富士山が見えて、何より、今まで練習をしてきた、大好きな学校の一部であるここに。

「……出た方がいいって言うのは分かる……」

「……でも、学校は救えなかった」

「なのに、決勝に出て、歌って……」

「例えそれで優勝したって……」

それが、全員が悩み抜いた末に出した答え。

この九人でラブライブに出場した理由は、学校を救うため。だが統廃合を防ぐという目的を防ぐことは出来なかった。

だからこそ、もう決勝で歌う意味もない……と。

「確かに、そうですね……」

ダイヤが横目にある一点を映す。

皆が自信で出した意見を伝えていく中、千歌は一人背を向けて扉に寄りかかっていた。

「でも、千歌達は学校を救う為にスクールアイドルを始めた訳じゃない」

そんな彼女を見て果南が零した。

「……輝キを探すため」

それに原点の一人である曜が答える。

スクールアイドルを始めたいと思った時、まだ千歌は浦女が廃校になる未来など知るよしもなかった。

彼女にそう思わせたのは、もっと別なもの。

「皆それぞれ、自分達だけの輝キを見つげるため……」

千歌を突き動かしていたのは、純粹な欲。

輝キという形もなければ概念もあやふやなものに恋い焦がれ、自らもそれを掴み取り

たいと願ったから。

でも――、

「見つからない」

自分の心情の答えであるはずの鞠莉の言葉を、千歌は遮る形で否定した。

「……だって、これで優勝しても学校は無くなっちゃうんだよ?」

千歌は確かに、輝きを見つけるためにスクールアイドルを始めた。

「奇跡を起こして、学校を救って、だから輝けたんだ。輝きを見つけれられたんだ……!」

学校が救えなかったのに、輝きが見つかるなんて思えないっ!!」

だが、スクールアイドルを続けていく内に統廃合の話が持ち上がり、今自分達のいる学校が如何に大切なものなのかを理解した。

そしていつの間にか、奇跡を起こして学校を救うことこそが、スクールアイドルを続けてライブで歌う目的になっていたのだ。

「私ね、今はライブなんてどうでもよくなってる」

学校を救うためにライブへ出場した。けどそれは果たせなかった。奇跡は起こせなかった。

だから、もう輝きなんて見つかるはずがない。千歌はそう語る。

「私達の輝きなんてどうでもいい……!」

千歌の中にはまだ、学校を救いたいという気持ちが残っている。

もう叶はずもないその想いは、統廃合を実感する度に募り募っていき、やがては膨大な負の感情となつてその身から溢れ出す。

「学校を救いたい！」

抑えきれなくなつたそれは、もはや抗えない現実に対するワガママに過ぎない。

言葉にすればするほど増幅していく願いが切実に震え、マイナスエネルギーの塊となつて口から飛び出す。

「皆と一緒に頑張つてきたここを——」

その時——、

『うぬの祈りは届かぬ。現状にも、未来にも……誰の心にもな』

「え……」

低い声音がどこからともなく耳に滑り込む。

それと同時に空の色が禍々しものに切り替わり、その中に一つの巨大な影が浮かび上がる。

『クハハ……、貴様等のマイナスエネルギー、大変美味であつたぞ』

甲殻類を彷彿とさせる真紅の外殻と、三日月状の鎌などで武装された人型の身体。

以前東京で卑劣な手を尽くした異次元人ヤプール人の集合体——巨大ヤプールだ。

『……もう叶いもしない事をいつまでもいつまでも引き摺る……、本当に人間とは愚かな存在だ』

千歌を見下ろしながら、ヤプールは嘲笑を漏らす。

『いつの時代も、どこの世界でも変わらぬ。希望だの未来など宣いながら、いざそれが潰えれば絶える事なく負の感情を漏らし続け……、我等を幾度となく蘇らせる！』
両腕を広げた奴の肉体からは、以前とは比べ物にならない程の力が漲っているように見える。

統廃合が決まり、学校全体を包み込んだ負の感情は、ヤプールの絶好のエネルギーとなつてしまつた訳だ。

『……貴様は、この学校とか言う場所を守りたいと願っていたな……』
顎に手を当てて考えるような仕草を見せた後、何かを弾き出して表情を邪悪に彩る。

『ならば、形もろとも無くなつてしまえば……更なる絶望を我等に見せてくれるのだろうか？』

ヤプールが手を掲げた刹那、音を立てて空が砕けた。

ガラスのように割れた空の奥には、ヤプール人の拠点である異次元空間が見える。

そしてその中から、大勢の何かがこちらに向かって進行して来ており――、

「!!!!!!!!!!!!」
ツ!!「!!!!!!!!!!!!」

ベロクロン、アリブンタ、バキシム、ドラゴリー、バラバ、ルナチクス、カメレキング、サボテンダー、ブラックピジョン。

過去に出現した超獣に加え、ハンザギランやジャンボキングなどの強力な超獣達が浦の星女学院目掛けて侵攻を開始したのだ。

「「わあああああああああ!!」」

「.....」

他のメンバーが避難行動に移ろうとしても、千歌だけはただ一人立ち止まったままヤプール軍を見上げていた。

「千歌ちゃん!」

恐怖で動けないでいるのか、諦めてしまったのか。

今の千歌ならばどちらもあり得る話だ。

「千歌!」

曜や果南の声にも応じないその姿は、自身や学校が壊される瞬間を待っているようにも見えた。

いや、正しくは度重なる災厄や理不尽を前に、考える事を放棄してしまったのだろう。

『・・・逃げないのならば丁度いい。ウルトラマンゼロや仙道陸の前で、無残に己が亡骸を晒すといいわ!!』

ヤプールの振り下ろした斧が千歌へと迫る。

同時にAqoursが目を覆い——光が迸った。

「ウルトラ——イブ！ ウルトラマン！ ギンガ!!」

「ウルトライブ！ ウルトラマンビクトリー!! ビクトリー ビクトリー・・・」

『シヨウラア!』『ツイヤ!』

『グオオオおおお・・・!!』

閃光の中から突き出てきた二つの拳によって大きく後方へと殴り飛ばされるヤプールの。

『ぬう・・・、貴様等ア・・・!』

『・・・ヤプール・・・』

『顔を合わせるのはジユダの一件以来だな・・・』

一撃を繰り出したウルトラマンギンガとウルトラマンビクトリーは、声音に微かな怒りを含ませながら校舎を守るように超獣軍団の前に立ち塞がった。

『おい、そこのお前』

ファイティングポーズを取りながら、声だけを千歌に向けてくるビクトリー。

『お前も守るべきものの為に戦ってきたのは陸とゼロから聞いた。だからそれが失われた今、心が折れてしまったのも分からなくもない』

「ウルトラランス！ EXレッドキング！ ナツクル!!」

かつて戦いの中で友を失った彼は、腕を燃え盛る巨大な拳に変化させ、ギンガに先んじ前へと飛び出した。

『気落ちするぐらいならば何も言うまい……だが戦うのを辞めるだ!! 諦めるのが早すぎだ馬鹿どもが!』

『グアアグルルルッ!!』

感情を剥き出しにした咆哮と共に、肥大化した拳でドラゴリーを横薙ぎに殴打する。

『守るべきものが無くなったから戦う意味がない!! もうどうでもいい!! 失う覚悟もしていない奴がよくも奇跡を起こすのだと大口を叩いたものだな!!』

回し蹴りの要領で右足を振るい、踝に備わったクリスタルから放つ鍬型の光線——
ビクトリウムスラッシュをベロクロンとアリブンタに叩き込む。

『その程度の覚悟しかないのなら、最初から守るなどと抜かすな!!』

これがビクトリーの——シヨウの想い。

如何なる絶望の中からも這い上がってきた彼だからこそ言える言葉。

『ビクトリウムシュート!!』

V字を描いて形成したエネルギーを右腕のクリスタルに吸収し、L字に組んだ両腕から発射された光線がルナチクスを爆散させた。

『確かに失う事は怖い。．．．けど、形を残すことが未来に受け継がれる事じゃ．．．絆を繋げる事じゃない!』

続きギンガがバラバの腹部を正拳突きで強襲する。

『前に、生命の時間を止める事で永遠の命をもたらそうとしていた奴がいた。けどそんなものは永遠じゃないだろ? 一つの命が次の命へ続いていく! だから命は永遠に輝くんのだ!!』

カメレキングの頭部を抑えこみ、下段のキックでサボテンダーを牽制しつつ目線だけはしっかりと九人の少女に固定。

『お前等が守ろうとしていたのも、ある意味学校の命だろ? 確かに学校を存続させられたら一番良かったんだらうけど、それだけが学校を残すってことだけじゃないだろ!』

右腕から伸ばしたギンガセイバーを駆使しバキシムに連続で斬撃を浴びせ、更に刺突でその巨体を横転させる。

『形に残すことだけが永遠じゃない．．．．．。想いが、絆が! 未来へ受け継がれていくのが．．．．．、永遠の命だ!!』

それがギンガ——ヒカルの想い。

命への葛藤に触れ、未来の可能性を信じた彼だからこそ言える言葉。

『ギンガクロスシュート!!』

全身のクリスタルを青色に発行させ、立てた右腕の肘に左拳を当てる構えで放った光線がハンザギランを背中から打ち抜いた。

「……………諦めるのが早い……………」

「……………未来へ受け継がれていく……………」

ルビイと花丸が二人の気持ちを復唱する。

まるで、まだA q o u r sには浦の星女学院のために何かできる事があるかのような口ぶりだった。

『確かにお前達が思い描いていた形の夢は潰えた。だが、勝手に全てが終わったと決めつけるな!』

『俺の友達にも、夢に挑戦して何度も失敗した奴等がいる。夢に破れた瞬間にアイツ等が悔しさの中で流した涙は今でも覚えてるよ。一度は夢を捨てようとしていた事もあった!』

ヒカルとシヨウの言葉は続く。

『でも、それでもそいつ等は、例え思い通りにならなくても自分らしくあった。迷わずに

生きるために……強くあつたんだ!」

ラブライブ出場を諦めるといふ結論は、廃校という現実に屈し、輝きを追い求めるといふ自分達らしさを捨てた結論だった。

ヒカルの友人とは逆に、弱かったという事だ。

『テイヤア!』

『ツオリヤ!!』

ギンガファイヤーボール超至近距離発射でバキシムを爆散させ、黒煙の中からビクトリーのキングジョーランチャーによる弾幕が飛び出しベロクロンに連続ヒット。

『俺達は成長する……昨日までの自分を、超えていく!!』

成長。

今、二人のウルトラマンの想いを受け取ったA q o u r sならば、何か別の、学校を救う形が導き出せると。

ヒカルとシヨウは、そう言っているように思えた。

『どんな絶望の中でも、絶対に希望を持つことを止めちゃいけない!』

『そしてそれが、未来へ導く光になる!』

「ウルトランス! シェパードン! セイバー!!」

地中から出現した青い刀身の剣——シェパードンセイバーがビクトリーの腕に握

られ、劍線がアリブントアの胴を切り裂く。

『だから!』

二人が大空に浮かぶ太陽目掛けて指さした。

つられて見上げた先には、こちらに向かって急降下してくる一体の影。それは――

『全身全霊、最後の最後まで……』

「諦めるな!!」

『ぬっ……がああ!!』

炎を纏った飛び蹴りでヤプールの襲ったのはウルトラマンゼロと仙道陸。

A q o u r s を結成当初から見守つて来た、友であり。ある意味恩人のような存在。

「……諦めるな……」

千歌の脳裏にとある記憶が過る。

新学期が始まったばかりの時に見た夢——ウルトラマンネクサスが、自身に伝えてきた事と同じだ。

「陸!! 学校は?」

「サボった!」

全く褒められたものではない回答。

堂々と陸にサボリ宣言をさせた後、ゼロツインシュートを駆使してジャンボキングを粉砕するゼロ。

「思い出してみろよ！ 東京のライブで再スタートを切ってからずっと何を掲げてきたかを！」

『ぐうう……！』

陸の弁を宇宙拳法のラツシュに乗せ、上体を起こしたヤプールへと立て続けに殺到させる。

「ネオ・フュージョンライズ！」

「——ゼロから」

『イチへ——』

「ウルトラマン！ ゼロビヨンド！」

限界の概念から解き放たれたゼロが雄々しく吠える。

『今もまたゼロに戻って、イチから歩み出す時じゃないのかよ!!』

『あ、あああああああ!!』

絶大なエネルギーを纏った右拳が奴の顔面へとめり込み、空間を揺らす程の余波と共に

に赤い身体を大地に叩きつけた。

『人間には、何度転んでも立ち上がる力がある!』

『今こそ立ち上がれ! これまでに紡いだ絆を糧に!!』

『見せてやるぜ! 俺達の絆!!』

『ギンガアア!』『ビクトリイイ!』

ギンガとビクトリー。二人のウルトラマンの姿が融合し、新たな一人の戦士として現出する。

『『ギンガビクトリー!!』』

新たな巨人の出現に反応した超獣軍が押し寄せてくるのに対し、落ち着き払った様子で左腕のブレスレットに手を掛けた。

「ウルトラマンゼロの力よ!」

かつて敗北を前にしても、諦めなかったヒカルとショウに託された力。

ウルトラ十勇士と呼ばれる十人のウルトラマンの能力を併せ持った究極の巨人――

――ウルトラマンギンガビクトリーだ。

『『ワイドゼロショット!!』』

ゼロの姿と重なったギンガビクトリーの光線が空を舞うブラックピジョンを打ち抜く。

「大体出場辞退とか、予選突破できなかったグループに失礼だと思わねーのかよー!」

ラブライブの決勝に進出するという事は、A q o u r s や浦の星女学院想いだけを背負うだけじゃない。

これまでに敗れていった、他のスクールアイドルの想いも胸に秘めて歌うという事。

『どつちにせよ、出場しなきゃいけないってこった!　そして優勝することでお前等の愛した学校を救え!!』

眩く輝くゼロツインソードがドラゴリーの身体を両断する。続きサボテンダーとカメレキングを蹴り飛ばした先にいたのはギンガビクトリー。

「ウルトラマンネクサスの力よ!」

『オーバーレイシュトローム!!』

以前千歌が発現したウルトラマンネクサス——ジュネッスの力。

二体の超獣を撃破した後も猛攻は続き、ヤプールの兵は瞬く間にその数を減らしていく。

『あつ……がああ……!』

そして遂には一人だけとなったヤプールの下腹部にゼロとギンガビクトリーの掌底

が炸裂する。

『未来へ繋げる形は一つじゃない!』

『歩みを止めるな! 自分達らしく進んだ先に光はある!』

『限界を超えろ! 諦めるなんざ……二万年早いなだよ!』

「だってまだ終わってねーしな!!」

「『』だから——『』」

「『』——救ってよ!!」

A q o u r s の閉ざされた世界を照らす一片の願い。

九人は咄嗟に駆け出し、扉の真下にある校庭を見下ろした。

「だったら救って! ラブライブに出て……! 優勝して!!」

決して広くはない校庭に集った数十人の少女達——浦の星女学院の全生徒。

「皆……」

「出来る事ならそうしたい! 諦めたくない! 皆ともっともつと足掻いて! ……」

そして！」

ずっと応援し続けてきてくれた皆の声を受け、千歌は複雑に織り交ざった感情を表情に出しながら返す。

「そして！！」

「……………そして……………学校を、存続させられたら……………！」

言っている途中で俯いてしまった千歌。少しの静寂が世界を満たす。

それを切り裂いたのは、A q o u r s に思いを託そうとする皆の言葉だった。

「それだけが学校を救うって事！！」

はっと目を見開いて上げた顔で、二体のウルトラマンを見上げる。

最初からこうなることが分かっていた様子の彼等は、それが答えだと言わんばかりに頷いた。

『さつきも言ったろ？ 形に残すことだけが永遠じゃない。未来に受け継がれていくのが永遠だって』

「私達、皆に聞いたよ！ 千歌達にどうして欲しいか！ どうなったら嬉しいか！」

ギンガビクトリーに次ぎ、浦女の皆は訴える。

「皆一緒だった！ ラブライブで優勝して欲しい！ 千歌達のためだけじゃない！ 私達のために！ 学校のために！」

「この学校の名前を残してきて欲しい!!」

「学校の……」

予想だにしなかったその結論に、一同嘩然とするAqours。

「千歌達しかいないの! 千歌達にしか出来ないの!!」

無名だったAqoursが地区予選を突破し、決勝に進出するという奇跡を成し遂げたからこそ、皆は千歌達に思いを託すことが出来る。

一番近くでAqoursを見てきた彼女達は、他の誰よりもAqoursに勇気をもたらってきたから。

「浦の星女学院、スクールアイドル! Aqours! その名前を、ラブライブの歴史に……あの舞台に! 永遠に残してきて欲しい!!」

未来に受け継がれていくのが永遠。ヒカルの言葉が反芻する。

「Aqoursと共に、浦の星女学院の名前を!!」

廃校を防げなくともいい。多くの人の心に残るラブライブと言う大きな舞台に、これから空っぽになる学校の名前を刻み込んできて欲しい。

それが、受け取った勇気を返そうとする学校の皆の想い。

「だから——輝いて!!」

Aqoursがラブライブで優勝し、輝く事。

それこそが、形のなくなる学校を、皆の思いを未来へ受け継ぐ方法なのだと、皆は言った。

「優勝して……学校の名前を……！」

「ラブライブに……！」

浦の星女学院が学校として存続し得なくなり、一つの目標を失った彼女達に、その言葉は新たな心火を灯す種となった。

『……なつ、なあ……、マイナスエネルギーが……消えて……』

表情に光が戻っていくAqoursの面々を前に、狼狽えて後退し始めるヤプール。負の感情などもうここにはない。ここにあるのは未来への希望に満ちた想いだけだ。

『何故だ……、何故だああ……！ あれ程のマイナスエネルギーが何故一瞬にして……』

『分かんねえのか？』

『確かに、一人一人の力は弱いかもしれない。壁にぶつかり、絶望を知る事だつてあるだろっよ』

『それでも俺達には仲間がいる。その支えが、いつも俺達を前へと進ませてくれる!!』
堂々と言い放ち、爆発的なエネルギーを自身へ集約させていく。

『『それが人間の力だ!!』』

二人に口調に乗り、揃ってにやけ面で訪ねてくる曜と梨子。

そんな二人に対し、千歌は先程とは沸き立つ感情を抑えきれずに何度も床を踏み鳴らした。

「・・・やめるわけないじゃん。・・・決まってんじゃん・・・！ 決まってんじゃん決まってんじゃん!!」

ぱつと上げた千歌の顔は、つい先程までの落胆が嘘のように晴れやかで、やる気に満ち溢れていた。

「優勝する！ ぶつちぎりで優勝する！ 相手なんか関係ない！ アキバドームも・・・優勝も関係ない！ 優勝する！ ・・・優勝して、この学校の名前を・・・！ 一生消えない思い出を作ろう!!」

絶望を乗り越え、新たな誓いを立てた千歌の胸には――、

――自分の光を走り抜き、未来へ羽ばたく群青の翼――ジュネツスブルー

――羽のように広がる、蒼い光が灯っていた。

「色々お世話になりました」

ヤプールの脅威を退け、合体を解除したギンガとビクトリーにインナースペースの中心で頭を下げる陸。

『俺達は大したことはしてねーよ』

『ああ、ただ背中を押したに過ぎないからな』

謙遜こそするが、二人がいなければ陸もあの結論には辿りつけなかったし、物理的に浦女を守る事が出来なかった。

そして何より、千歌達に大事な事を思い出させてくれたのは紛れもなく浦女の皆と、この二人だ。

『もう帰るんだろ？ 送ってやってやるよ』

そう言ったゼロの左腕にあるウルティメイトブレスレットから光が広がり、鈍色の鎧となつてその身に装着される。

『ライブライブ・・・だったっけ？ 優勝できるといいな』

不意にギンガが千歌達を見下ろし、握った拳を千歌達に向ける。

『俺達は、この空で繋がってる。住んでる世界は違うけど、お前達の成功を祈ってるぜ』
『今のお前達なら、きつと出来る。頑張れよ』

「はい！」

力強く返答した千歌に、もう影は感じられない。

それを見た二人は何も言わずに頷くと、大空に空いた次元の穴にゼロと一緒に飛び込んで行った。

九十九話 衝撃は笑顔と共に

「ううえ〜い．．．．．」

とある夜中の内浦。

今日も仕事と飲み会を終え、完全に酔っぱらっているサラリーマンが千鳥足で帰路を歩んでいた。

「．．．．．んえええ？」

聞きなれない音楽が耳朶に触れ、サラリーマンは音の方へ視線を移した先にあつたのは一台の屋台。

坊主頭の中年の男性が一人で引いており、屋台が進むと、それと一緒にチャルメラの笛の音が鳴っている。

「．．．蕎麦かあ〜．．．．？ おつちやあ〜ん。蕎麦いつちよ〜．．．！」

サラリーマンは酔っぱらった勢いのままに覚束ない足取りで屋台へと向かう。

普通こんな客が着たら何らかの対応をするものだが、屋台の主は嫌な顔一つせずに彼

を招き入れた。

「・・・・・・・・・・」

言葉は一言も発さず、どこか不気味な動きで蓋を取った鍋の中からは――、

『・・・・・・・・ふふふふふふ・・・・・・・・・・』

黒い不定形の怪物が、その見た目に似合わない少年のような笑い声と共に這いあがってきたのだ。

「っ!! わああああああああああああつ!!」

酔いがさめたサラリーマンが腰砕けになりながらも逃げようとするが、怪物は一瞬にして彼を飲み込み、鍋の中に戻ってしまう。

「・・・・・・・・・・」

何もなかったかのような静けさを取り戻した後、坊主はそつと蓋を閉め、再びチャルメラを吹き鳴らしながら屋台を引いて歩み始めた。

「ワンツーワンツー!」

ヒカルとシヨウ、そして浦女の皆の激励を受けて新たな目標を掲げたあの日から数日。

優勝し、浦女の名前を永遠にラブライブの舞台へ刻み込むことを決めたAqoursは、より一層練習に精を出していた。

(・・・そういうやき、ガイさんとリクさんの時も思ってたんだけど、他の宇宙のウルトラマンってどうやってこの次元に来てんの?)

そんな彼女達を眺めていた時、ポンと頭に浮かび上がった疑問をゼロに投げかけてみる。

一応確認しておきたいのだが、次元移動できるゼロがイレギュラーなだけで、次元移動など普通は出来る事ではない。

へあ? ああ、まー、一応ギンガみたいに単体なら次元超えられる奴もいるし、光の国には俺のイージスを元に作った簡易型次元移動装置があるが・・・、他のウルトラマンはスターゲートつー宇宙同士を繋げている特異点を利用してる)

(・・・んな便利なモンがあるのか)

流石宇宙は広い。

あまり深く聞くと長々と語られるので避けておく。以前イージスの事を聞いたらマ

ルチバースが云々の話を三時間に渡って説明されたのであんな事はもう御免だ。

「じゃあ、一旦休憩ねー」

リズムを刻んでいた果南の声が止まり、休憩に入った九人の少女がフォーメーションを崩す。

「陸ちゃーん！ みずー！」

「あー、こつちもー！」

千歌が水分を要求してきたのを皮切りに、彼女と同じく喉が渴いているらしい皆も続々と手を挙げる。

「へーへー」

この場で唯一動いていないのは陸だし、A q o u r s のために出来る事がこれくらいしかないのが素直に従った。

「ねー、りくつちー。ちよつと頼みごとがあるんだけど」

水の入ったペットボトルを全員に配り終えた時、不意に鞠莉から声が掛かる。

「なんすか？」

特に何の疑問も抱きもせず振り向いた先にあつたのは、いつも通りのにこやかな笑み。

どうせ千歌のように何かのバシリにしてくるんだろうと思っていると、彼女は何気な

い様子で一言。

「私の……恋人になつてくれない？」

ぷふううつ。

鞠莉を除く八人の少女が口の中に含んだ水を盛大に吹き出した。

虹がかかつて見えるほど微細な噴霧は、運悪く八人の真正面にいた少年、つまりは陸の顔面に直撃する。

「……………おい……………」

ぼたぼたと顔から水を滴らせながら恨めし気に睨む。

美少女八人からの顔射。多分オウガとかルイズとかなら大喜びだろうが、陸としては何も嬉しくない。

「オウ、どうしたの皆ー。いきなりSprayingしてー」

こうなった元凶の鞠莉が悪びれもせずには笑う。

「ちよつ……ちよお……！ ちよつと鞠莉どういう事？」

陸が非難の目を向けると同時に、果南が大いに取り乱しながら詰め寄っていく。

他のメンバーも果南と考えている事は同じようで、疑問と、何か別の感情が混じった視線を爆弾発言の主に注いでいた。

「どうもこうもありませーン。言葉の通りデース」

そんな視線をのりくりりと回避し、鞠莉は嗜虐的かつ悪戯っぽい笑みを作る。

その時点で陸はからかうつもりだったのだろうと悟ったが、生憎ここにはそういうのを真に受けてしまう素直な少女が八人いるのだ。

「……じゃ、じゃあ何？ 鞠莉ちゃんは陸の事……」

その手の話に弱い曜が自らそれを口にするとは珍しい。何で戦慄しているのかは理解不能だが。

それにしても誰も噴霧した事に関して謝ってこないのはどういふことなのだろうか。

「あー、多分皆が思ってるような事じゃないから安心して？ 私ほちよつとりくつちに

お願いが……協力して欲しいだけよ」

「……お願い？」

「……協力？」

皆が眉を顰めたのを見て、鞠莉は少し困ったように頷いた。

「うん。実はね——」

『ギャハハハハハハハッ!! 傑作だなオイ!!』

「……………うるさい……………」

後日。

とある場所とある衣服に着替えた陸は、殴りたくなる衝動を必死に抑えながらゼロの下品な笑いを受け止めていた。

「……………こんなモン始めて着たぞ。窮屈だな……………」

『俺は何度か着たことあるぞ』

「どうせ前の地球で一体化してた人だろ? サラリーマンの」

確か伊賀栗レイトとか言っていたか。こんな奴と一体化していたのだからさぞサラリーマンの業務に支障を来した事だろう。

「……………つか、ホントに俺で大丈夫なのかよ……………」

先日鞠莉が陸にしてきたお願い。

それに協力すると決めた方がいいが、果たして自分に務まるのだろうかと非常に不安に

よほど酷いのか言葉すら発さない梨子。

まーよくも全員揃って散々な反応である。陸だつて着たくて着た訳ではないというのに。

「……俺は用意されたものを着ただけだ。俺じゃなくてこれを用意した鞠莉さんが悪い」
「まあ、そもそもスーツが似合う高校生なんてそうはいませんから安心なさい。……貴方は成長しても駄目そうです」

「フオローする気ないだろポンコツ生徒会長」

そう。陸が着用しているのは社交パーティーなどで金持ちが着ているような黒スーツ。普段なら絶対に身に着ける機会もなさそうなこれを身に着けているのには――、

「あら、りくつち。意外と似合つて……無いわね」

自分で頼んでおいて失礼すぎる言葉と共に登場した鞠莉。全ては彼女のお願いが始まりだった。

「わあー！ 鞠莉ちゃん可愛いー！」

「着物かあ……」

陸の時とは打って変わり、紫を基調とした着物に身を包んだ鞠莉を褒め千切る一同。何だろうこの疎外感。

まあ、鞠莉は元々かなりの美人なので陸と違って何を着ても似合うのかもしれない

が。

「ゴメンねりくつち。面倒なのに付き合わせちゃって」

「・・・それは別にいいんですけど・・・、俺はこれからどんな金持ちのボンボンと顔合わせりやいいんすか？」

鞠莉が陸に頼んできた事。それは見合い話の回避。

国内外を問わずかなりの影響力を持つ小原家の一人娘である鞠莉には、こうして縁談が持ち込まれる事もしばしばあるのだそう。

『お嬢様も大変だよな』

齡十八、しかも在学中にも関わらず縁談の話が舞い込むとは。やはり彼女は陸達とは住んでいる世界が違う。

言い換えれば面倒事が多い。お金持ちもいいこと尽くめではないという事だ。

「そういえばさ鞠莉。お見合いって普通お互いの家同士でやるものだよな？ 何で陸が必要だったの？」

気になつてた事を果南が問いかけてくれた。

彼女の言う通り、通常見合いは一对一で行うもの。いたとしても双方の親族程度だろう。

それが何故、部外者中の部外者である陸の協力が必要な事態になつてしまったのか。

「あー、えつとね、これまでも何度かそういう話はあって、その度に適当な理由をつけて断ってただけど、今回の相手はしつこくてね。そのような相手がいないならばやるべきだつて。・・・だから」

「・・・だから？」

「・・・断る口実になると思つて恋人ぐらいいるつて言い返したら、だつたら自分とどっちが相応しいかこの目で見極めてやるとか言い出して・・・それで・・・」
一氣に場が静まり返る。

要するに見合いを断るための口実に生み出した架空の恋人役として陸が抜擢されてしまつたらしい。

「・・・これ俺怒つてもいいやつ？」

少なくともニセの恋人を演じているとバレたらただでは済まない気がする。

「お願い！そこをなんとか！こんな事頼めるのりくつちしかいないの！私ずっと果南とダイヤしか話す相手いなかったから男の子の友達いないの！」

頭の前で両掌を擦り合わせて懇願してくる鞠莉。最後までつもなく悲しい事が聞こえた気がするが地雷つばいのでスルーだ。

「バイト代は出すから・・・ね？」

遂にはそつちの話を持ち上げるほどギリギリの状況らしい。

ともあれ、事情は知らされていなかったとはいえ一度引き受けたことを放棄するのも気が引ける。

「……ま、今鞠莉さんになんかあつたらAqoursとしても困るだろうし、別にいいですけど」

大抵の面倒事は自分一人で処理してしまう鞠莉がこうして助けを求めてきているのだ。受け入れない訳にもいくまい。

「……りくつち……」

「あと別にバイト代はいいです。もらうまでもないんで」

こんな事で報酬を受け取ることなんか無いし、そもそも陸はそんなもの無くても彼女の力になる。

その返答を受けた鞠莉は、どこか納得した表情で自身を除くAqoursメンバーを見やった。

「……りくつちがモテる理由がちよつと分かった気がするわ」

「「っ……!」」

『コイツは直接言われないと一生気付かないだろうがな』

鞠莉の発言に対する反応は様々。首を傾げる陸。何故か硬直するAqoursの面々。呆れた様子の子のゼロ。意味が分からなくますます疑念が深まる。

「……………どゆこと?」

「何でもないわ。そろそろいいこっか。先方も多分待つてるし」

そう言うのと陸の手を取り、その先方とやらが待つロビー目指して歩み始めた。

ちなみに今いるのは鞠莉の家が営業しているホテルオハラ。今日はここのロビーで面会の約束があるらしい。

「ああそうだ。ゼロは離れてて。暴れられたら困るから」

『……………お前俺を何だと思ってるんだよ……………』

そう愚痴りつつもゼロは素直に陸の身体を抜け、複雑な面持ちをしている果南の中へ入って行く。

「……………ところでりくつち」

「はい?」

「社会の窓が……………Full Openよ?」

「え……………? おわあああああつ!!」

「……………大丈夫かな……………」

いまいち決まらない陸に、一抹の不安を抱かずにはいられない一同だった。

百話 大變！ 厄介が来た！

「お久しぶりだね。小原家の令嬢さん」

(「……………え？ 見合い相手ってこのオツサン……………」)

ホテルオハラのリビーで陸と鞠莉を出迎えたのは確実に四十歳は年食っていそうな中年の男性だった。

目配せして鞠莉に伺い立てると、彼女は心底嫌そうな雰囲気醸し出しながら首肯した。

「ん……………で、君の婚約者と言うのは……………」

知らないところで滅茶苦茶話が発展していた。ニセの恋人を演じろとは言われたが婚約者まで演じろと言われた覚えはない。

再び鞠莉に答えを求めようとする、既に彼女は「これがこの世界の頭の中よ。お花畑なの」と訴えてきていた。

「……………ふひ……………」

陸の全身を舐め回すように見た後、勝利への確信と嘲りを含んだ笑いを漏らす男。この一瞬だけで相当下に見られているのは理解できた。

「まさかこんなお子様とは……、何? まさか夜の遊び相手とか言うんじゃないだろうね?」

「安心して。りくつちはまだチェリーボーイよ」

まだ一分も経っていないがもう帰りたくなってきた。どちらの間違った事は言っていないのだが、もうちよつとオブラートに包めないものなのだろうか。どうしてこんなにもストレートな物言いなのだろうか。

「……まあいい。今回はその子供より私の方が君に相応しいと証明しに来たんだつたな。始めようか」

偉そうにそう言うのと、陸達とはテーブルを挟んで反対側にあるソファアにどさりと腰かける。

とつとといなくなりたい気分だが。とにかく座らないと始まりそうもないし終わりそうもないので素直に陸達も腰を下ろした。

「君イ……、名前は?」

「……仙道陸です」

踏ん反り返りながら陸に細目を向けてくる男。オウガ以上にムカつく野郎を目にし

たのは初めてかもしれない。

だが、オウガにやるように拳を出す訳にも行かないのでここはぐつと我慢の子。

「ふうん……名前も庶民臭いねえ。君のような一般人が彼女と釣り合うだなんて到底思えないよ」

礼儀つて概念を知っているか怪しくなるくらいに礼儀とモラルを欠いた態度だ。よくもまあこんなで見合いを申し込んだなどと思う。

まあ、今回は陸を怒らせるのが目的と見たが。

「愛に身分の差なんて関係ないと思うけど？ それに貴方よりりくつちの方が何万倍もましよ」

鞠莉も鞠莉で中々に挑発的かつ聞いていて恥ずかしい事を言う。どうしてこんな会話を素面で出来るのだろうかこの二人。

というか鞠莉は絶対この男を嫌っている。

「……ああ、申し遅れたね。私は無水原。ムスイリゾートのオーナーをしている者さ」
鞠莉の言葉を聞かなかつたように受け流すと、自慢気に自身の肩書を紹介してくる男

——無水。

(……ムスイリゾート……)

庶民でお子様な一般人の陸でも聞いたことぐらひはある名前。このグループは規模

が大きくて有名なのだ。

もつとも、評判は最悪と言つてもいいが。

ムスイリゾートは一度目を付けた土地は、どんな強引な手を使つてでも手に入れてリゾート地に開発してしまう。

恐喝、買収、そんな黒い噂が絶えないのだ。

(.....なるほど、土地狙いね)

恐らく無水が鞠莉に取り入つてきたのもここ内浦の地に目を付けたから。

小原家はこの辺の地域にもそれなりの影響力は持っている。それを利用して内浦をリゾートに改造しようとしているのだろう。

「単刀直入に聞こう。君は彼女の事をどう思っているんだい？」

早々に陸に狙いを看破されたとも知らず、無水はそんな事を聞いてくる。それ多分父親が言うやつとか言つてはいけない。

「.....どうって.....素敵な人だと思えますよ? 明るいお調子者だと思われがちだけど、実は誰よりも人の事よく見てるし。何より自分にとつて大切だつて思ったものは、何が何でも守り抜こうとする強さも——」

「そういう事を聞いているんじゃない」

陸が中々に恥ずかしい思いをして頑張つていたというのに、無水は冷たい声音でそれ

を遮つてしまった。

「駄目だね。君はその子の価値を理解していない」

「……価値……?」

その言い方に何か違和感が引つ掛かり、陸が眉を顰める。

「考えてみたまえ。彼女はあの小原家の一人娘なんだぞ? そこに目を当てずに明るさ

だの強さだの、そんな一銭の価値のない事ばかりに気を取られて……やはり君は彼女には相応しくないよ」

「……」

隣の鞠莉が俯いたのが横目で伺えた。

瞬時に彼女の心境を読み取った陸は、テーブル上に用意されていた水を自ら引つ掛けた後立ち上がった。

「すみません。ちよつと水溢しちやつたんで、衣装室で拭いて来ますね」

「あ、ああ、私も行くわ……」

アイコンタクトを受け取った鞠莉も陸に続き、一度この場から離脱する。

あの胸くそ悪い野郎と同じ空気を吸っているだけで頭が痛い。

「……だいいじよぶですか?」

逃げ込むようにゲストルームへと入り、普段より静かな鞠莉の顔を覗く。

「……うん。ありがとりくつち……」

笑みを返してはくれるが、それもどこかぎこちない。

理由は……言わずもなだらう。

「……あんな奴なんすね。ムスイのオーナー」

「……私も初めて知ったわ。ロクな性格はしてないでしょうとは思ってたけどね……」
無水のあの物言い。

あれは鞠莉を小原鞠莉としてではなく、自分にとって利用価値のある小原家の娘としてか思っていないのが見え見えだった。

「……あんな野郎の言葉、気にしちゃダメっすよ」

「うん……分かってる……」

そもそもよくあんな態度で鞠莉との見合いが成功すると思っっているのだろうか。先程鞠莉が言ったようにマジで頭の中お花畑なのだろうか。

どちらにしろ、あんなクソ野郎に鞠莉はやれまい。

「……もういつその場でりくつちと既成事実でも作っちゃおうかなー。そうすればもうお見合いなんてしなくて済むし」

「やめんか」

さらっととんでもない事を言っただけなので細目で諫める。仮にも鞠莉とそんな理

由でそんな事になろうものなら他の八人にボコボコにされる未来が見える。

「冗談よ。そんなことしたら私、A q o u r s に居場所がなくなっちゃうわ」

「………?」

居場所がなくなる人物が違くないかと思ひ首を傾げつつも、少し落ち着いたらしい鞠莉に続いてゲストルームを出る。

「ちよつと！ あの言い方なんなの!!」

ロビーに戻ると、聞き慣れた響きに怒気を含ませた声音が耳朵に触れた。

「………何なんだい君は？」

高級ホテルのロビーで一体何が起こったのかとその方を見やれば、臆することなく年上の無水に食い掛かっている少女が確認できた。

「なんだっていい。それより鞠莉に何か言う事ないの!! まるで小原家の子じゃなかったら鞠莉に価値がないみたいない方して！」

ポニーテールに束ねた長い青髪に、発育のいい身体。先程ゼロが憑依した際に装備されたウルティメイトブレスレット。

陸と鞠莉。二人の幼馴染である松浦果南だ。

「果南………」

「……何やってんだよ姉ちゃん………」

今回他のA q o u r sメンバーも離れた場所で様子を伺っていると云っていたが、それが災いしてしまった。

「・・・君の顔は見た事があるな・・・。確か一緒にスクールアイドルとやらをやっている子だったかな」

スクールアイドルとして活動している事は知っていた辺り、小原家の娘以外では鞠莉の事を何も知らない、という訳ではないらしい。

「・・・そうだけど・・・。」

眉を吊り上げながら果南が頷くと、無水は彼女を威圧するように口を動かした。

「丁度良かった。彼女に言っておいてくれないか? 君は今すぐそのスクールアイドルを辞めるべきだと」

「・・・は?」

フロア全体の空気が凍り付くのを肌で感じた。

無水は穏やかに笑っていた。まるでそうすることが至極当然かのように。

「ちよつと何言つてんの!! そんな事言う訳・・・、ていうかそんな事言う権利アンタにないでしょ!」

たまらず果南が反論するが、無水は表情を一切変える事なく、されど威圧感だけは更に背負いながら少し語気を強めて言い放った。

「権利も何も無い。君も分かっているだろう？　今のあの子にどれだけの価値があるか。スクールアイドルなんていうくだらないものに時間を使わせて彼女の価値を下げる訳には行かないんだよ」

「・・・何ソレ・・・鞠莉はアンタのものじゃない！」

普段は温厚な果南でも流石に頭に來たらしい。友人への情に厚い彼女ゆえだろう。

だがそんな怒りの熱気も、感情を持ち合わせない冷徹さを前には無力だった。

「君はスクールアイドルで彼女から華々しい未来の可能性すらも奪うつもりなのか!」

その言葉に中身はない。奴は鞠莉本人の事などはどうでもよく、求めているのは小原家と言う肩書だけ。その事はすぐに看破出来たので普通は気に留める価値のない。しかし、果南に対しては効果覲面過ぎた。

「つ・・・」

かつて鞠莉の将来を考えた果南は、スクールアイドルを辞め、例え彼女と決別しようとも約束されているであろう未来を切り開こうとした。

そんな過去があつたからこそ、今の果南は無水に対して何も言い返せないのだ。

「・・・分かつたら早く——」

「勝手なこと言わないで!!」

陸が出るよりも早く鞠莉が飛び出した。

「私は自分でこの道を選んだの! 私自身の意思で! 果南がそんな事言われる謂れないわ!!」

鞠莉がここまで感情を表に出すのは果南、ダイヤと和解したあの日以来だろう。

ただ今回は純粹なる怒りの感情。まるで果南や、A q o u r s の皆が鞠莉の邪魔をし、剩えそれをメンバーから告げさせようとする行為に。

「何も分かつてないくせにそんな事——」

「何も分かつていないのは君の方だ」

「むうっ……!!」

ワガママを言う子供を黙らせるように、無水は片手で鞠莉の口元を押さえつけた。

「あの小原家の人間がチャラチャラした雰囲気で人前に出るなど印象を下げかねない。大体、君の学校はとうに廃校が決まっているんだろう? なのにスクールアイドルを続ける意味がどこにある?」

「っ……、それは! 浦の星の名前を永遠にラブライブの舞台に刻んで、一生消えない思い出を作ろうって——」

「それが分かつていないと言っているんだ」

敵意を弱めず必死に言い返そうとするが、再び口を塞がれて黙らされてしまう。

「いいか? もう一度言うぞ? 君は小原家の一人娘なんだ。もつとその立場の重要性

と有用性を理解しなさい！ 思い出だのくだらないものに縋つて時間を無駄にしてはいけないんだよ」

「……くんだりない……？ 学校の皆がどんな気持ちで私達に想いを託してくれたのか分かつてるの?!」

「理解する意味なんて無いし必要もない。……私は君の学校が無くなって良かったと思つているからね」

「……え……」

鞠莉の熱気がささーっと引いていくのを感じた。

「君があこの学校に理事長として就任したのは不都合だったんだよ。もう廃校が決まつているような学校に固執し続けるとなれば小原家の評判自体が下がりがねないだろう？」

何度も言うが、コイツは鞠莉自身や小原家自体の事を心配している訳ではない。自分の利益になる小原家の株が下がる事を危惧しているだけだ。

「統廃合が決まり、ようやく君がスクールアイドルをやる意味も無くなつただろうと思つていれば……今度は思い出を作るだど？ いつまでくだらないアイドルごっこを続けるつもりなんだ」

無水にとつては自分にとって利益になるものが全て。形として価値を残せるものしか重要性を見出せないのだ。

だが、鞠莉やA q o u r sメンバー。そして浦の星女学院の皆は、思い出を永遠に残すという事に価値を見つけ出した。

これらは、絶対に相容れないものだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・くだらなくなんか・・・・・・・・・・ない・・・・・・・・・・」

鞠莉は自身の大切に行っているものが否定されると打たれ弱い

先程からずっと無水に立場の事しか目を当てられず、自分自身の存在は否定され、更
に守ろうとしてきた学校やスクールアイドルを全て価値のないものと言ひ捨てられた。

「君は欠陥品だが、小原家の娘と言う立場は大いに利用価値がある。私ならそれを最大
限に活用できるんだ」

もう完全に鞠莉を道具として認定している言葉。

「・・・・・・・・・・私は・・・・・・・・」

鞠莉の頬を光るものが伝った。

それを目にし、遂に堪忍袋の緒が切れた果南が拳を強く握り、無水目掛けて振り抜こ
うとした次の瞬間――、

「だからさっさとスクールアイドルなんか辞め――へふうあつ!!」

唐突に割り込んだ第二の拳が、歪んだ顔面を強襲した。

「陸!!」

目を剥く果南をよそに、もんどり打った無水はそのままロビー中央まで吹き飛んで行く。

「・・・・・・・・さつきから黙って聞いてりやくだらないだの価値がないだのとゴタゴタ抜かしやがって・・・・・・・・」

煮えくり返った怒りで震える声音が世界を満たす。

拳の主である陸は、紅く染まった双眸を酷薄に細めて倒れ伏す無水を見下ろした。

「人の痛みも分かんねえような奴にこの人の努力は否定させねえ・・・・・・・・。テメエが鞠莉さんの価値を語るなんざ・・・・・・・・二万年早えんだよ!!」

コイツがどんな肩書を持っていて、どんな権力を持っているかなど知った事ではない。

そんな上つ面の価値がどうでもいいという訳ではない。ただ、それがどうでもよくなる程に無水の発言の数々は許しがたいものだった。

「・・・・・・・・りくつち・・・・・・・・」

涙で濡れた黄土色の瞳が、微かな羨望をもつて陸を見上げてくる。

煌く宝石の光のような視線を背中に受け、陸は感情とは真逆の冷たさで吐き捨てた。

「利益でしか測れねえ価値なんざクソ喰らえだ。一生そややって空っぽのもの追いかけてろよ」

「な、なにをこの……」

自分に手を挙げた無礼者を捲し立てようとした無水だが、その声はやがて掻き消えるように萎んでいった。

陸に宿るはベリアル力の力。

形は見えなくても、無水が今まで体験した事のない獯猛な殺気が蠢いている。

「……ぐ……」

それに本能的な恐怖を覚えたらしく、青ざめた顔で逃げるように後ずさりする。そしてくるりと踵を返し、早足でホテルオハラのリビーから出て行くのだった。

『あのヤロオ……! とんでもなく下劣な奴だな……!』

嵐が過ぎ去った後のエントランス。

果南の中でずっと堪えていたゼロは、陸のところに戻ってくるや否や無水への怒りを滾らせていた。

「……酷い人だったよね……」

「くだらないなんて……」

「ああいう成金主義はそのうち身を持ち崩すぞ。今に見てるといいぞら」

「一人だけとんでもなく口悪いなお前」

それは遠目で見守っていたAqoursメンバーとて例外でなく、千歌や梨子のように心配そうに鞠莉を見やる者や、花丸のように怒りでキャラ崩壊一步手前の者もいる。

「にしても陸アンタ。派手にぶん殴ったわね」

善子が言っているのは、陸が一時の感情に身を任せて無水を殴り飛ばした時の事だ。

あの時はああする事に迷いはなかったのだが、冷静になって考えてみればもつと他にあつただろうと反省点しか浮かび上がってこない。

これでまた鞠莉が変な難癖付けられなければいいのだが。

「……りくつち……」

層思っていた時、鞠莉の口から小さく陸の名前が零れる。

「……ごめんね。私のせいでこんな……」

恐らく無水はこれしきの事で諦めはしないだろう。

むしろプライドだけは高そうな奴の事だ。自分に恥辱を味合わせた陸を許すとは思えない。報復が来てもおかしくはないだろう。

「……いいんですよ。ああ言う奴は痛い目に遭わせないと分からないんですから。」

それに姉ちゃんにぶん殴らせるよかずつとマシですしね」

「……………うん、何かゴメン……………」

鞠莉の隣で委縮する果南。あと少し陸が遅かったらゼロの力を宿した彼女の地球圏最強パンチが無水の身体を粉碎していたであろう。

もしそうなっていたら無水はあの世行きだし、果南は刑務所行きなのでそんな後者を誰も望んでいない未来にならなくてよかった。

「鞠莉さんが気にする必要はないっすよ。俺が自分自身の意思で選んだ道ですから」

陸がああの行動に出たのは鞠莉がスクールアイドルを続けているのと同じ理由。

それを伝え、陸は窮屈なスーツの上着を勢いよく脱いだ。

何か普段とは違う、鞠莉の視線を浴びながら。

百一話 夜鳴きのオビコ

時刻は五時を過ぎ、辺りも薄暗くなってきた頃。

「……………あのクソガキ……………!」

ホテルオハラの玄関口から、怒り心頭と言った様子の無水原が歩み出てくる。

庶民の子供に殴り飛ばされて恥辱を味わったどころか、引き下がってきたせいで鞠莉との縁談もお釈迦になってしまった。

「全く……………これだから田舎は嫌なんだ」

いくら自然や景観が自分好みの土地とは言え、そこに住まう人々までもが自分に都合の良い存在であるわけではない。

これまでも土地を買収する際にそういう事は幾度かあったが、ここ内浦は最も無水の機嫌を損ねたと言つてもいいだろう。

(……………しかし、どうする……………)

自分が小原家に取り入るために鞠莉へ近づいた事はもう向こうにもバレてしまっているはずだ。

小原家の後ろ盾は内浦の地以外でも十二分に力を發揮するので得ておきたかったが、こうなつてしまつてはもう無理だ。

(・・・なら、せめてこの土地だけでも・・・)

幸い強請りのネタなら念の為にと仕入れていたものがたつぷりある。

ここ内浦には、昔から根強くこの地に力を持っている家がある。その家を強請りや買収で落として進めていくしかあるまい。

確かその家は、かつて綱元だったという黒澤——、

「・・・?」

不意に聞きなれない音楽が耳に滑り込んできた。

穏やかではない気配を感じて視線を流してみれば、坊主頭の男が屋台を引きながらこちらに歩いてくるのが見えた。

「・・・仮にもホテルの敷地内にあんなものを入れるだと?　ますます理解出来ないな・・・」

これ以上は頭が痛くなりそうなので気に留めない事にし、その横を通り過ぎようとしたその時——、

「・・・お主、この村が好きか・・・?」

「・・・はっ?」

細く、萎びた声で坊主が声を掛けてきた。

「・・・・・・・・村が好きか・・・・・・・・？」

刃でも当てられたかのような寒気を背筋に感じつつも、先程陸に殴り飛ばされたという事もあり、これ以上逃げ腰でいられるかと気丈に振舞った。

「ふん・・・・・・・・！ こんな場所、さつきとリゾート地に開発してくれるわ」

どうしてこんな事を見ず知らずの男に言ったのかは分からない。

ついさつきどこの馬の骨の骨かも知らない子供にしてやられ、恥をかいた。

だから、質問からしてこの町を愛しているであろうこの男が、内浦がリゾートに開発されると聞いて哀惜の表情を浮かべるのが見てすつきりしたかったのかもしれない。

「・・・・・・・・」

どんな顔をしたのだろうか、ちらりと坊主の方を伺う。

だが無水の思惑とは違い、坊主は顔色を変えずに、ただ無言で屋台に置いてあった鍋の蓋を開けた。

『あそぼ・・・・・・・・オビコとあそぼ・・・・・・・・？』

その瞬間、大きな影の塊が無邪気な少年のような声を発しながら鍋の底から這いあがってきた。

「つ・・・・・・・・！！ ああああああああああ！！」

「……なんだ……?」

窮屈なスーツを脱ぎ、ようやく一息つけた陸が唐突に響いた悲鳴に反応する。

『……この声、さっきの下衆野郎のだな……』

ゲストルームから出ると、同じく悲鳴を聞き付けたらしいA q o u r sメンバーが扉の前に集結していた。

「……りくつち……」

「……とりあえず行きましよう。宇宙人でも出たのかもしれないし」

いくらあの野郎が下衆でも、守らない理由にはならない。それがウルトラマンとしての使命だから。

陸が先陣を切り、悲鳴の聞こえた場所へ向かうべく玄関口からホテルオハラ庭園へと飛び出す。

『何ッ……?』

そこで目にした異形の怪物に思わず立ち止まってしまふ。

腰砕けになる無水と、その眼前にいる坊主頭の男。そして彼の引く屋台から伸びた黒

い影。

「ひっ……ひいい……！！」

「……マズイツ!!」

無水を飲み込まんと魔の手を伸ばした影を迎撃すべく、陸はゼロランスを構えて大地を蹴り飛ばす。

だが影は尋常ならざる速度で無水を包み、彼を飲み込んだまま屋台に備わった大鍋の中に収納されてしまった。

「くひひ……じゃあの〜♪」

「ッ！ 待てゴラア!!」

陸が切り込みにかかるも、坊主は建物の影に逃げ込み、一瞬で姿を消してしまふ。

「なっ……!!」

即座に静寂が舞い降り、一体何が起こったんだという静けさがこの場を支配する。

「……今のつて……」

ぽつりと花丸の零した眩きだけが、夕闇に溶け込んでいくのだった。

「オビコ?」

「・・・それが、さつき下衆野郎を襲った奴の名前なのか?」

無水を攫つて行つた坊主と影の居場所に心当たりがあるという花丸に続き、街灯がつき始めた仄暗い道を行く陸とAqours一同。

別に無水を助けたいと思つている者はいない。ただこの事で無水がまた難癖付けてきそうな事と、何より治安を考えたら動かないわけにはいくまい。

「うん。この地に伝わる妖怪の名前すら。昔は神様として崇められてたんだけど、次第に人々から忘れられていつて妖怪に堕ちたすら」

「・・・そういえば、そんな話をお母様から聞いた事があるような気がしますわ。闇に住むといわれていた神・・・確かお彦様」

「すら。まるもおばあちゃんから聞いた程度なんだけど・・・」

流石。寺の子の花丸と、歴史ある家の長女であるダイヤはその手の話に詳しい。

「・・・それで? なんでさつきの奴がその・・・オビコ? だつて分かつたの?」

「確証がある訳じゃないすら。ただ、こんな言い伝えがあるすら。オビコに呼ばれて、振り返つたら食われる・・・」

となると、無水はオビコの呼びかけに応じてしまったがためにあの影の餌食となつて

しまったらしい。

「……あれ？ 最近この辺で急に人がいなくなるって噂があるよね？ それって……」

「多分、オビコの仕業すら」

この頃内浦で、夜中に外に出ると帰って来れなくなるという噂がある。

実際その期間に行方不明になっている者もいるので何か事件の匂いは感じていたが、まさか元神様の妖怪が引き起こしていたとは。

『花丸。俺達は今どこに向かつてるんだ？』

「昔、お彦様を祀っていたお寺すらよ。もしかしたら何か手がかりがあるかもしれないし。その和尚さんともあった事はあるから行つても大丈夫だと思おうすら」

前雨宿りに知り合いのお寺を使わせてもらった時と言ひ、花丸はこの地域の神道や仏教の方面で顔が広いようだ。

「今まで襲われた人達は無事なの？」

鞠莉の疑問はもつともだ。もし帰つて来ないような事があれば噂から事件に発達してしまふ。

「……無事……って言つていいのかは分からないすらね」

「……どういふこと？」

首を傾げる一同に、花丸は困った様子で答えた。

「オビコは人を殺しはしないから。人を捕まえても、その内返してくれる。けど、帰ってきた人は決まって衰弱しきつてるといふ話があるから」

『……捕まってる間に何かされたって事か?』

「あくまでも噂だからまるには何も……、それに妖怪の考える事なんてさっぱり。……さあ、着いたらずらよ」

顔を上げ、一部だけ切り開かれた森の中にポツンと立っている鳥居を視界に定める。

「こういうのは専門家に聞くのが一番ずら」

「……まあ、それはいいとして……」

中に進んでいこうとする花丸を一瞥した後、陸は先程からずっと無言で震えている赤髪と青髪の少女達を見やった。

「震えるほど怖いんなら……姉ちゃんとルビイは帰つたら?」

A q o u r s を代表する怖がり二名。松浦果南と黒澤ルビイ。

「べ……別に大丈夫だよ? これ以上被害が出るみたいなら放っておけないし、私は別に……」

果南は強がって見せるも、身体と声音はしつかり震えていた。

以前果南のこの一面を見ている一年生と彼女の幼馴染達は既に知れている事なので何も言わない。梨子だけが意外そうな顔をしていた。

「る、る、ルビイは……」

そこまで言つて何も続かなくなつたルビイ。

こつちはまあ予想通りなので誰も反応しない。

「ま、まあ！ とにかく行こうよ。もしかしたら何か掴めるかもだし——」「にやあゝ」

——はぐう！」

「むぎゆ……」

同様に誤魔化すべく果南が先陣を切ろうとするも、道の脇から飛び出してきた子猫に驚いて千歌と曜に抱き付いてしまう。

「……おいて行くぞらよ」

そんな彼女に細めた瞳を注いだ花丸がすたこらと進み始め、他の皆もお荷物二名を連れてその後が続くのだった。

「許可は貰つたから、常識的な範囲なら好きにして大丈夫ぞら」

花丸の一言で散開する面々。と言つてもダイヤはルビイに、千歌と曜は果南に抱き付

かかれていて動けそうにないので実質五人での搜索だが。

「………なんか大変な事になっちゃったね」

しばらく一人で探索していると、いつの間にか鞠莉が隣にやってきていた。

「そつすね。縁談中に相手を殴り飛ばして、その後に妖怪探しなんざもう一生味わえそうもないです」

苦笑交じりに返す。本当、ゼロやA q o u r sの皆と出会ってからまるつきり人生が変わったかのように色々とあつた。

「………ねえ、りくつち」

普段の快活然した彼女とは対照的に、少し恥じらうようなもじもじとした仕草を見せながら再び声を掛けてくる鞠莉。

「はい?」

何気なく振り返つた後にその事に気が付き、何かあつたのだらうかと思ひながら次の言葉を待つ。

「………どうして、さつき私のために怒ってくれたの?」

どこか弱々しいようにも感じ取れる雰囲気伝わってくる。

「……さつきって……、無水の野郎のことですか?」

聞き返すと彼女はこくりと首肯した。

この様子を見る限りだと、どうやらまだあの事を気にしているようにも思えた。
「・・・そうっすね・・・」

言葉を纏めるために少し頭を捻り、数秒後に口を開く。

「だって鞠莉さん。頑張ってたじゃないですか」

その理由は至ってシンプル。

「学校が大好きで、学校の皆が大好きで、それを守るために鞠莉さんは精一杯努力して
た。その末に流した涙の意味も分かってないような奴が偉そうにゴタゴタ言ってたら、
そりゃ腹も立ちますって」

意外そうな顔をする鞠莉に、柔らかに笑みを作って続けた。

「誰よりも自分の大切なものに一途な鞠莉さんだったから、俺はあいつをぶん殴ったん
ですよ。・・・野郎が手え挙げる動機なんて、それで十分でしょ？」

前にも言ったが、陸はただ自分の信念を貫いたに過ぎない。

鞠莉が学校を救おうと奮戦していた事や、陸が今までウルトラマンとして戦ってきた
理由と同じ。

ただこうしたいと言う、自分の気持ちに従っただけだ。

「ほら、それに俺アイツが言うには婚約者(笑)ですし？ 恋人が泣かされるような事が
あれば怒って当然ですよ」

「……きつとりくつちは、そうでなくても怒ってくれたと思うよ」

陸のちよつとした揶揄いに對し、幾ばくか安心したように鞠莉は口元を綻ばせる。

「……だつて、りくつちだもん」

それだけは納得しにくいのだが、彼女としては満足のいく根拠だつたらしい。

信頼されているようだし、陸としても悪い気はしない。何より鞠莉がそれでいいなら何も言うまい。

「……あーあ。……私も落とされちゃつたか……」

少し頬を赤らめ、普通なら聴こえないような声で鞠莉がそう呟いたのを残念ながら色々と普通ではない陸は聞き逃さなかつた。

「……? 今のどういう——」

「……うう……」

その時、紛れもなく人間のものである呻き声が耳朶に触れた。

突然の事に一瞬間を飛び上がらせたが、その声に覚えがあつた陸は即座に切り替えてその方へと足を進めた。

そこで目にしたものとは——、

「……っ!」

あまり当たつて欲しくなかつた花丸の予想が嫌な形で中してしまつた。

絶句する陸と鞠莉の眼前には、ぐったりとした様子が無水が石造りの井戸に寄りかかっていたのだ。

顔から生気は何えず、その上余程の目に遭ったのか髪の毛は一本残らず真っ白に染め上がってしまったている。

「何………これ………」

確実に人間の仕業ではないそれに、ただただ慄く。

『………これもオビコの仕業だつてのか……』

「くひひ………♪ 正解じゃ」

「『くひひ』」

咄嗟に鞠莉を庇う形で背中に隠し、いつの間にか現れていた不気味な笑い声の主を見据えた。

「……オビコ………」

陸が射貫くような視線を向けるが、オビコは平然とそれを受け止め、にやにやしたまま大した反応も見せない。

「……お主、この村が好きか？」

その代わりなのか、意図の読めない質問を投げかけてくる。

「………」

オビコに呼ばれて振り返ったら食われる。

恐らくあの言い伝えは、この問いに答えてはいけないという事を示していたのだろう。

「・・・村が好きか？」

推測に習い無言のまま固まっていると、再度同じ事を問うてくるオビコ。

きつと、このままだんまりを決め込んだままでは同じ事を繰り返すだけだ。

ちらりと鞠莉とアイコンタクトを交わしてから、恐る恐る言葉を返す。

「・・・それが何と関係がある」

「・・・村が好きか？」

回答の選択肢はYesかNoだけらしい。

とりあえずNoと答えない方がよさそうだ。そもそもそう答える理由など無いのだが。

「・・・私は好きよ。もちろんりくくつちも」

陸の代わりに鞠莉が返答を綴った。

「私達だけじゃない。皆そうよ。この町が大好きだから、皆ここにいるの。山も、空も、海も、学校も・・・」

学校。そう零した鞠莉からは少し寂しさも感じられた。

これから消えていく、されど大切なものへの純粹な思い。

オビコも彼女の哀愁を感じ取ったのか、初めて笑みを崩す。

「・・・・・・・・・・そうか・・・・・・・・・・」

短くそれだけ言い残すと、特に何か襲いかかってくる訳でもなく、オビコは影の中へと消えていった。

百二話 変わりゆくもの

「……どうだったんすか？ 無水の奴」

「……命に別状はないみたいだけど……、衰弱しきつてるみたいね」

翌日の昼下がりに。

他のA q o u r s メンバーが部室に戻って行った練習終わりの浦の星女学院の屋上で、難しい顔を突き合わせる陸と鞠莉。

『……結局、オビコは何がしてえんだよ』

陸達が把握してる範囲内でオビコの行動を纏めると、人間を謎の黒い塊と共に攫い、すぐに返していることぐらい。

攫われた人間が何をされたかは不明だ。ただ、皆一様に衰弱しきってしまったているという。

「……ねえりくつち。昨日オビコにこの村が好きかって聞かれて、私それに答えただでしょ？」

「・・・はい」

「・・・花丸から聞いた言い伝えに習えば、呼びかけに答えたんだから襲われるはず。でも、あの時オビコは何もしてこなかった」

確かにそこは気になっていたところだ。

鞠莉の答えを受けた時、オビコはどこか悲しげだった彼女に同情するような態度を見せた。

あの時までのふざけた態度など、元からなかったかのように。

「・・・何と言うか、単純に嫌がらせとか、恐怖を与えたいとか、そんな理由じゃない気がするの」

「・・・と言うと?」

「・・・何と言うかね。あの時見たオビコ・・・すっごく寂しそうだった」

「寂しい?」

なんというか、妖怪らしくない気がする。

だが逆にあの時オビコが引き下がったのは、鞠莉の抱えていた哀惜に、自身の感情を重ねたから、と取ることも出来る。

「でも、だとしたら何に?」

「分からない。・・・けど、調べてみたら何か分かるかも。・・・なんか放ってお

けないし」

シンパシーを感じたのはオビコだけでなく、鞠莉もまたそう。

似たような感情を抱く者同士、もしかしたら分かり合えるのかもしれない。そんな淡い期待が陸の中で生まれた。

「……そつすね。あれでも元神様みたいだし。倒しちゃうのも忍びな——」

「陸先輩！ 鞠莉ちゃん！」

同意したところで突如介入した第三者の声に遮られる。

首を声の方に向けて確認してみれば、そこにいたのは先程部室に向かって行ったはずの花丸だった。

「……どうしたの？」

何やら慌てた様子の彼女を不思議に思ったのか、鞠莉が寄せる。

「……オビコが……」

「……え？」

荒い呼吸交じりに、今まさに自分達の話題に出ていた存在の名前が挙がる。

「……オビコが、町に出たぞら！」

「ひよほほ………」

「ぐっ………」

浦女から飛び出して早数時間。

花丸の報せ通りオビコは内浦の町中に出現し、陸達とハチャメチャな鬼ごっこを繰り広げていた。

「じゃあの〜♪」

「あっ！ おい待て！」

陸が走る速度を上げるも、オビコはひらひらと手を振りながら民家の作った影の中に消えていってしまう。

「……くそ……！ またか……」

神出鬼没に出現する奴を見つけ出すのは至難の業。

それに加え、例え見つけ出しても闇から闇へ移動する能力によってすぐに逃げられてしまうのだ。

日は徐々に傾き始めている。いつまでこの果てしない鬼ごっこを続けなければいいのだろうか。

『マジで何が目的なんだアイツは……』

こんな事をしているのは何か訳があるのだろうか。奴を追い続けているのだが、まずその尻尾を掴むことが出来ないのも何も始まらない。

「梨子。他はどうだつて？」

「……こつちと同じみたい。見つけても、すぐ逃げられちゃうつて」

今陸とAqoursメンバーは三手に分かれてオビコを探していた。

千歌、曜、ルビイの三人にグレンファイヤーを加えた一陣。ダイヤ、果南、花丸、ミラーナイトの二陣。そして陸、鞠莉、梨子、善子の三陣だ。

「……つーか、俺が個人的にやってる事だから別に梨子達が手伝う義理はないぞ？ あぶねーかもしれないのに」

「ううん。陸君はいつも私達の力になってくれてるし、こんな時くらい手伝わせてよ」
そう言つて梨子は一片の曇りもなく微笑んでくれる。

人外の力を持つグレン達に比べれば彼女達の力など微々たるものだろうが、それでもやはりそう言つてもらえるのは嬉しい。

「ほらそー」。いい感じの雰囲気になつてないで行くよー」

「早くしないと日が暮れるわよ」

からかうような鞠莉と、妙にむすつとした善子の声で、再びオビコの追跡を再開する。「それにしても、変だね」

「・・・ですね」

花丸やダイヤの話によると、オビコは闇に生きる存在故に明るい光に弱いらしい。

そんなオビコが、苦手とする明るい時間帯でまで活動しているのはやはり引つ掛かる。

「何か伝えたい事でもあるのかな？」

「・・・だとしたら何を・・・」

人間を攫つては返し、町中に出現して人々を混乱させている。

現時点では、内浦の人間に自身に対する恐怖感を植え付けようとしてるとしか思えない。

「案外、目立ちたいだけだったたりしてね」

「お前じゃねーんだから」

「どーという意味よー！」

突っかかってくる善子を抑えながら、陸は思考を巡らせる。

何故内浦という狭い地域にのみ限定して出現するのか、何故襲った人々をすぐに返す

のか。……どうして古くからこの地域に伝わる妖怪が、今になって行動を起こしたのか。

これらから何かを導き出せるはずなのだ。

「……もしかして……」

ふと、鞠莉が何かを弾き出したかのように顔を上げた。

「何か分かったの？」

問いかけてきた梨子に対し、こくりと頷く。

「……まだ概算に過ぎないけど、多分合ってる。一回、皆で集まろう」

数十分後。鞠莉の言葉に従い、昨日無水が倒れていたお寺に全員集合。

「それで？ 何が分かったんですの？」

「……うん。実は、今までオビコに襲われた人の事、ちよつと調べてみたんだ」

「調べたって……え？ 一体どうやって……」

「それは……知らない方がいいと思う」

当人も触れて欲しくなさそうなので小原家の闇は置いておき、本題に移る。

「……オビコが襲った人達、建設業だったり観光業だったり、皆何かしら開発に関わつてる人達だったの」

そういえば無水はリゾート開発グループのオーナーだった。クズさと下衆さに照点が行き過ぎて完全に忘れていたが。

「でも、なんでそんな人たちがここに？」

「……ほら、ここ最近観光客が減ってるし、役所の観光課もちよつと焦ってるのよ」

「ああ……。そういえばうちも昔と比べてお客さん減ってるって愚痴ってたな
く……」

うんうんと頷く千歌。

過疎化が進むここ内浦では、観光客や住民の減少が年々問題になっている。

浦女の廃校も、一概にはそれと関係がないとは言い切れないのだ。

「……それがオビコと何の関係が？」

「……もしかしたら、オビコはこの町が好きなんじゃないかって」

「……はい？」

予想の斜め上を行く彼女の推測に思わず声を出してしまう。

オビコがこれまでやってきた事を考えれば、むしろ逆だと思つていたのだが。

「どうしてそう思つたずら？」

「これは私とりくつちしか知らない事だけど、オビコは人を襲う前にこの村が好きかつて聞いてくるの」

「それが何と関係があるの？」

首を傾けた曜に、ゆつくりと確証を含ませて鞠莉は頷く。

「多分ね、オビコはどこかで内浦が開発されるかもつて言う噂を聞いてちやつて、それでこの町が開発されるのが嫌で、自分が騒ぎを起こしてそれを防ごうとしてるんだと思う」
建築も観光も、ここ内浦の地を変える事に繋がる。

それに携わつていた人達に加え、極めつけは内浦をリゾートに改造しようとしていた無水。

確かに陸達よりずっと昔からこの地を知つていて、ここが大好きなオビコならば多少強引な行動に出ても不思議ではないだろう。

『・・・なるほど。それなら確かに辻褄が合うな』

オビコが鞠莉に。そして鞠莉がオビコに抱いた親近感の正体はこれだったらしい。

鞠莉なら浦の星女学院女学院。オビコならこの内浦という自分の愛した場所。

失うのが怖くて、零れ落ちていくのが怖くて。

だから、守り抜くために行動を起こした。

「……なんか、それ聞いちゃうと、ちよつと可哀想に思えてくるね……」

「……でも、こんな手荒な真似に出るこたあなかつたよな」

「うん。だからここに皆を呼んだの。オビコの場所を突き止めて、ちゃんと話をするために」

そう言った後、自身の寄りかかっていた石造りの井戸に手を掛ける鞠莉。

「オビコの鍋の中に飲み込まれた無水は、ここに倒れてたでしょ？ あの鍋の中はこの井戸に繋がってると思うの」

まだよく分かっていなさそうな面々に、続けて説明を加える。

「闇から闇へ。鍋の中が井戸に繋がってるって事は……」

「っ！ この井戸も鍋の中に繋がってる……！」

つまりこの井戸の中に何かを放り込めば、それはオビコの持つ鍋の中から出てくるという事。

何か目印になるようなものを放り込めば、オビコの場所が特定できる。

『なるほどな……グレン！』

「おうよ！ まかせ——」

「その必要はないぞ」

オビコは自身が気絶させた二人には目もくれず、自身の目的を看破した鞠莉を興味深そうに見つめていた。

「……けど、ちよこーつと違うぞ。ワシ等のやりたかったこととは」

「……それは何？」

対話を望む鞠莉は、彼の想いをきちんと理解しようとする間いかける。

「……その必要はないさ。もうワシ等が、そうする必要もなくなったからのう」

だがオビコは、何故か満足気に答える事を否定した。

「見てみい。あれをー」

腕を広げてオビコが見下ろしたのは、森が切り開けた場所から見える灯りが消えた内浦の町だった。

オビコの噂はすっかり広まってしまい、彼を恐れた人々がその怒りに触れないよう、灯りを消して町を暗闇で包んだのだ。

「村が……戻ってきたんじゃあ!!」

喜色満面で、陸達にそう笑いかけてくるオビコ。

「は……?」

当然だが、あれは昔の内浦の村ではない。オビコが見ているのは村に恋い焦がれた彼が見た幻に過ぎない。

陸達の目には、ただの真つ暗な内浦の町が映るだけだ。

「・・・・・・・・・・」

オビコの真意を悟ったらしい面々が、痛ましい表情を浮かべて視線を落とす。

彼の心は、もう存在し得ない昔の村に囚われ続けているのだ。

別に村を取り戻そうと行動していた訳じゃない。けれど、自身の居場所がいつ開発されるかも分からないこの状況で見たかつての村を彷彿とさせる光景が、そうさせているだけ。

「あそこには綺麗な小川が流れていてな——」

「違うわ」

嬉々としながらかつての村の様子を語るオビコを、鞠莉は静かに制した。

「・・・・・・・・あれは・・・・・・・・もう村じゃないの」

優しさと悲しさの混じった、重い重い声音。

オビコはまだ前に進めていないのだ。守りたかった学校を失っても、仲間の声で前に進めた A q o u r s とは違って。

だから鞠莉は自身が厳しい言葉をぶつけ、オビコを村の呪縛から解き放つてあげようとしているように見えた。

「・・・・・・・・・・」

その言葉を受けたオビコは弁を止め、ゆっくりと鞠莉に視線を戻した。

「：大丈夫。きつと、あなたも前に進めるから。だから、今は現実を受け止めて……」
 そつと手を伸ばし、穏やかに語らい、そして微笑む。

彼女も彼も同じ。思いを馳せた大切なものになくなられたものだから。

だから、自分も立ち直れたから、きつとオビコも立ち直れるよと、鞠莉はそう言っている。

「……」

オビコの身体が小刻みに震えだす。

「あれが……あれが昔の村でないのなら……」

その身を闇で包み込み始め、怒りで染まり上がった表情を真つ暗な町に向ける。

「村でないのなら……！ この手で……叩き潰してくれる!!」

怒号と共に巨大化したオビコは、もう人間の姿をしないなかった。

人型であることは変わらないのだが、鎧を纏い、身体はそれこそ妖怪そのものへと変貌していた。

『……』

村はもうないと言い切った鞠莉を一瞥した後、壊してやると宣言した町目掛けて歩み始めるオビコ。

「あんの馬鹿……」

多少はオビコにも同情はするが、破壊活動に出るならば指を啜えて見ているという訳にもいくまい。

陸はグレンとミラーナイトにA q o u r sメンバーの事を頼むと、ブレスから取り出したゼロアイを自身の目元に装着した。

『シエアア!!』

百三話 追憶の星空

『おいコラテメエ！ 馬鹿なことしないで止まりやがれ!!』

夜空を照らした閃光の中からゼロが飛び出し、その巨体を灯りの消えた町に向かって進行させていたオビコを取り押さえる。

『——ッ!』

『うおおお!!』

笛の音のような声と一緒に火炎が放射され、ゼロを炙る。

こどもも接近していると回避しづらいが、かといつて距離を取り、町に向かわせる訳にも行かないので奴の前に立ち塞がる事は止めない。

「今のお前がやってる事はただの八つ当たりなんだぞ！ 元々神様だつてんなら、やっていい事と悪いことぐらいの分別ぐらいつけやがれ！」

『うるさい！ うるさいうるさい!!』

忘れる事の出来ないかつての村に縋るオビコは、陸の説得も聞かずに駄々をこねるよ

うにゼロへの攻撃を浴びせかける。

『お前達に何が分かる！ 失う悲しみが！ 居場所がなくなる恐ろしさが!!』

現実に対する怒りと悲しみが、吐き出された炎となつて襲いかかってくる。

『ぐっ……！ ちつたあ落ち着けこの野郎!!』

感情の火を受け切つたゼロが地面を蹴り飛ばして跳躍し、ルナミラクルゼロへと姿を変えた。

『フルムーンウェーブ』

落ち着いた声音に乗つて突き出された掌から伸びた泡のような光が、優しくオビコを包み込んでいく。

ゼロも、陸も、A q o u r s メンバーも、誰もオビコを倒そうとは思っていない。だからこそ今はこうして落ち着かせるようとしているのだが——、

『——ッ!!』

『何ッ!!』

光の中から突き出てきた拳が腹部を捉える。

感情の抑制作用のあるこの光線を受けても、高ぶつたオビコの感情を抑えることは出来なかつたのだ。

『正しい事をしているだなんて思つてはいない！ だが、こうでもしていないとやつて

いられないんだ!!』

押し寄せる猛攻をゼロデイフェンダーで凌ぐ。

その攻撃の一つ一つからはオビコが今日の暴拳に至るまでに募った感情が秘められており、威力こそないが気持ちで押されていく。

『こんの・・・分からず屋が!!』

爆炎が吹き荒ぶ。

激昂を上げたストロングコロナゼロが、闇夜に光る鎧ごと夜鳴き妖怪の巨体を派手に殴り飛ばした。

『お前はただワガママを言っているだけだ! そんなモンからは何も生まれねーんだよ!!』

当たり散らしに破壊活動をしたところで、その後に残るのは虚しさだけ。

その事を伝えようとしても、聞く耳を持たないオビコは起き上がり様に火炎を吹く。

『ガルネイトバスタアアアアアア!!』

だがそれは一瞬にして掻き消され、逆にゼロの放った爆炎が頬を翳めて駆け抜けた。踏んでいる場数の数が天と地ほどの差がある。戦闘力では圧倒的にゼロの方が上だ。

『——ッ!』

その事を理解しつつもオビコは止まらない。ブレーキの壊れた暴走列車のように、そ

の身一つでゼロへと突進を仕掛けた。

『ちいつ……!』

奴の心情を慮うゼロは積極的には攻撃を加えない。

それを知ってか知らずか、どちらにしろ止まらないであろうオビコはそんなゼロへ攻撃を加え続ける。

『失うことを知らないお前等に分かるか! 　いつ消えゆくのかも分からぬ希望に縋る者の矜持など!!』

「——分かるわ!!」

唐突に割り込んだ第三者の声がオビコを制止させる。

その方を見やれば、ずっとオビコに自身に近いものを感じていた鞠莉が悲し気に黒い妖怪を見上げている。

「聞いて。私達にも、守りたい場所があったの。そこにいる皆がそこが大好きで、ずっと残していきたいって、そう思ってた!」

そうして始まった鞠莉の語らいに、オビコは初めて耳を傾けた。

何度だって言うが、きつとオビコも彼女にシンパシーを抱いていただろうから。

だから、今こうすることが出来るのは鞠莉しかない。

「でもね、私達はその場所を守れなかった。何度も何度も足掻いて、精一杯努力したのに……」

『……鞠莉……』

「……守りたかった場所……」

鞠莉が言っている守りたかった場所というのは、もしかしなくても浦の星女学院だろう。

悲し気にその事を語る彼女の姿からは、彼女なりの自責や呵責が感じ取れた。

「……一度は何もかも投げ出そうかとも考えたわ。もう頑張る意味もないって、投げやりになった。でもね、それでも支えてくれた、勇気をくれた仲間がいたから、私は今もこうして前を向ける」

ヒカルやショウ。浦の星女学院の皆などの支えてくれる仲間がいた鞠莉、孤独に苦しみ続けたオビコ。二人の決定的な違いはこれだ。

支えられる心強さを知っているから、鞠莉は自らその支えになろうとしている。

「だから。きつとあなたも前を向ける。立ち上がれるから——」

『……』

鞠莉の弁の途中ですつとオビコは立ち上がり、身体をゼロの方に向けた。

『ッ———!!』

そして、再度町目掛けて突進を再開したのだ。

『チツ……!』

両腕を盾に防御姿勢を取りつつも、絶対に反撃はしないゼロ。

八つ当たりするいじけた子供のような攻撃をするオビコの目からは、現実から目を背けきれずに流した涙が零れ落ちていく。

感情のやり場がなくて、何もかもがぐちゃぐちゃになっているのだろう。

「町を壊しても駄目なの……もう村は……戻ってこないの!!」

『ッ……!』

鞠莉の悲痛な叫びを受け、ハッキリと現実を突き付けられたオビコは遂に腕を振り上げたまま固まってしまう。

『……!』

ゆっくりと頭を上げ、通常形態に戻ったゼロの背後にある町を改めて見つめる。

無言のまま、じつくりと、これまでの時間を噛み締めるように町を見るその瞳からは、真実を悟ったような色が伺えた。

『……そうか……!』

幾分も落ち着いた声で、遂に諦めたのか掲げていた拳を下し、

『ツ………ツ———!!』

低い唸り声をあげ、口元に溢れんばかりの炎を溜め込みだしたのだ。

『ぐっ………! エメリウムスラッシュユ!!』

そして、反射的にゼロが光線を放つたのを確認してから、口に溜まった炎を掻き消し、

『ッ!!』

「なあっ………!!」

エメリウムスラッシュユを、自身の胸元に直撃させた。

『ッ………!!』

『お………オイ!』

盛大に火花を散らして真後ろに倒れ込んだオビコを抱き上げるゼロ。

多彩な能力があるオビコとは言え、数多くの敵を葬ってきたゼロの光線を受けて無事

で済むわけがない。

『お前………わざと………!!』

ゼロの腕の中で、オビコは虚ろな瞳で天を仰いだ。

唯一、昔と変わらぬこの夜空。

諦めきれずに胸に秘めた想いを、この夜空へと馳せるように。

オビコは、ゆっくりとその瞳を閉じた。

『……………っ……………!』

彼の絶命を見取った後、ゼロは自身の能力を駆使してオビコの身体を光の粒子へと変換させていく。

『……………達者でな……………』

やがて全身が光となったオビコは、蛍のように舞い踊りながら、内浦の夜空へと消えていった。

ビビり過ぎて気絶した果南を背負いながら、オビコを祀っていた寺のある山を下る。

「……………結局、救ってあげられませんでしたね」

「……………そうだね……………」

オビコが倒された事に喜ぶ者は誰一人としていなかった。

鞠莉だけじゃない。学校を守ろうと奮闘したAqoursメンバーもまた、オビコに近い感情を抱いていたから。

『……悪い。まさか自害しようとするとは思ってなかった。……予測を怠った俺のせいだ』

「……ゼロちゃんは悪くないよ」

「Yes. 多分ゼロがやらなくても、オビコはあの道を選んでいたと思うわ」

オビコは当の昔に、失ったものにしか心を添わせて生きていけない者になっていた。

目を背け続けていた現実を突き付けられた以上、こちらが手を下さずとも自ら命を絶つたであろう。

「……でも私は、一人のまま死なせるような事にならないで良かったと思ってる。誰にも覚えてもらえなくなっっちゃうなんて、そんなの悲しいし」

皆が顔を曇らせる中、一人そう呟く鞠莉。

「私ね、思ったの。ひよっとして、オビコが町の人々を怖がらせたのは、自分の事を覚えていて欲しかったからなのかもって……」

あの時オビコが鞠莉に言いかけた真実。

やがて消えゆき、歴史の澱となるやもしれん自分の事を、せめてここに住まう人々の記憶に留めておいて欲しいという願い。

「アイツが昔の内浦をずっと覚えていたみたいに……ですか？」

「うん……私達が、学校の名前をずっと憶えていて欲しいって思ったみたいに……」

ね」

そんな言葉を交わす陸達が見上げた夜空には、オビコが愛した暗闇の中に、点々と星々が瞬いているのだった。

後日。練習時間を終えた沼津のスタジオ。

「ええ？ アイツ今度はダイヤのどこに来たの？」

「ええ。どうやら今度は黒澤家の方に目を付けたらしいですわ」

喜んでいいのか分からないが復活したらしい無水は、元網元の家である黒澤家に縁談を持ち込みに行ったらしい。

あんな事があったというのによくもまあ。その立ち直りの速さだけは認めなくもないが。

「うゆ……いきなり来たからルビイもびっくりしちやった」

「それで？ どうしたのよ？」

「即刻追い返しました．．．．．とやりたいところですが、生憎全く引き下がろうとしなかつたので手を打たせて頂きました」

「．．．え？ 何したの．．．？」

ちよつと怯えた視線がダイヤに集まる。大方黒澤家の裏の顔を駆使して闇に葬つたとか思っているのだろう。

「大したことはしていませんわ。ただ鞠莉さんと陸さんを召喚しただけです」

「．．．あの人に対しては効果靦面だね．．．．．」

「りくつちを見た時のアイツの顔．．．．．今思い出しても笑えてくるわ．．．！」
いきなりダイヤに呼び出されて黒澤家に向かつてみれば無水がいたのだ。陸も驚かなかつたといつたら嘘になる。

「それでなんかあの手この手を尽くしてりくつちを潰そうとしてたから—」

「少し小原家と黒澤家の力をちらつかせたら尻尾を巻いて逃げていきましたわ」

「．．．．．俺アンタ等が一番怖い気がするんですけど．．．．．」

笑顔でとんでもない事を言つてのける二人だ。

それにしてもこの地域で逆らつてはいけな二大巨頭の跡継ぎ娘が揃っている A q
ours とは一体何なのだろうか。

まあ、何だかんだそれで助かつた身なので何も言えないが。

「これで全部解決ね。パパにもあんまり見合い話を持ち込まないようにしてもらわないと」

「・・・またあんなの相手に恋人役やるのは御免ですからね」

無水一人でも胃がキリキリしていたのだ。多分これ以上はストレスで身体が持たない。
い。

「りくつち。今回は本当にありがとね」

そんな陸を労うように眩しい笑みを向けてくる鞠莉。まあ、もしかしたらこの笑みが失われていたのかもしれないし、逝ったオビコの愛した内浦すらも危うかったので、無駄だったというつもりはないが。

「あつ、そうだ。報酬のこと忘れてた〜♪」

「え？ あ、いや、別にいらなくて言った・・・」

「遠慮しなくていいよ。金目のものでもないしね」

陸自身本当にお礼の品など受け取るつもりはなかったのだが、これは承諾しないと終わりそうにない雰囲気だ。

鞠莉もこう言っているし、陸も嬉しくない訳じゃないのでここは素直に受け取っておこう。

「それじゃ、目瞑って♪」

「……？　ことうつすか？」

言われた通りに瞼を閉じる。

テレビなどでよく見る感じのやつだが、鞠莉の場合何をしてくるか分からないといった恐怖がある。

「……あの、鞠莉さん？　一体何を——」

少し不安になった陸が恐る恐る訪ねたその時、何かが顔に近づくと共に甘い芳香が鼻腔を擦る。

そして、

——頬に柔らかく、温かい感触を覚えた。

「…….…….…….ほえ…….?」

間拔けた声が口から漏れ、無意識に瞼を開ける。

その瞬間視界に飛び込んだのは驚愕の表情で固まるA q o u r sメンバーと、その視線が向けられている鞠莉。

色白の頬に赤みを差した彼女は、少し後退した後その場でくるとターンし、銃を撃つように伸ばした人差し指をこちらに向け、

「ロック………オーン！」

架空の銃弾が陸目掛けて撃ち出される。

「ふふっ………」

もう一度踵を返すと、鞠莉はそのままスタジオの外へと走り去って行く。

残ったのは突然の事に理解が追いついていない陸とその他の少女達。

「つ………！ まあああああいいいいいい！！」

水を打ったかのように静まり返っていた室内は、赤面しながら鞠莉を追って飛び出して行った果南によって再び騒々しくなる。

彼女が動いた事によって、皆の硬直が解けてしまったからだ。

「え？ ええ！！」

「い、いい今のつて………キ………」

「先輩！ 手当たり次第に女の子落とし回すのもいい加減にするぞらー！」

「なんで俺が怒られんのっ！！」

『………こりゃあ、またブラックホールが吹き荒れそうだな………』

混乱気味の少女達にもみくちゃにされる陸の体内で、ゼロは新たな嵐の予感を感じ取るのだった。

百四話 White of Encounter

M78星雲、光の国。

『……どうだい?』

『……ううむ……』

この蒼き巨人——ウルトラマンヒカリ。

ウルトラマンタロウの依頼を受け、異常な成長を見せる仙道陸について調べを纏めていたのだが、どうにも行き詰っている様子だ。

『……今のところは情報が少ない。異常だとは俺も思うが、まだ完全には判断しかねるな』

『……ベリアルのカ……か……』

同じくタロウに頼まれてヒカリを訪ねてきていたメビウスも小さく唸る。

『確かに教官の言う通り、あれ程の闇を地球人が制御できるとは思いにくいね』

『ああ』

かつてそのベリアルが闇に魅入られる切っ掛けとなつた暗黒宇宙大皇帝、エンペラ星人と対峙した事のある二人には、その闇がいかに強大なものかが分かる。

『偶然その仙道陸と言う少年が、ベリアルやレイブラットとの親和性が高い存在だとう可能性もある。．．．だが、あそこはアナザークライシスが起きた宇宙だ。何があつても不思議ではない』

ゼロが存在を再確認するまで、あの宇宙からは宇宙警備隊の監視の目が離れていた。その間にベリアルが使いが何か仕込んでいても、何もおかしくはない。

『．．．なににせよ。この目で見るのが一番だな。メビウス。君も来てくれ』
『え？ あ、ああうん。．．．ていうかどこに．．．？』

白。

穢れのない純白が、肌に刺さる冷たさを誇る風と共に視界を埋め尽くしている。

「(トト)．．．(トト)．．．ど(トト)．．．？」

「なにも．．．．．見えますせんわね．．．！」

防寒具はつけてきたが、冷気の槍はそれすらも貫いてくる。

今まで体験した事もないような吹雪に、A q o u r sメンバーは凍えを隠せないでいた。

「天は……ルビイ達を……」

「見放したずら……」

「これがSnow White……。Beautiful……」

「ちよつと！ しつかり！」

降雪量が少ない太平洋側に住んでいる故に体制の薄い少女達は、次々に寒さの前に屈していく。

「雪め！ 甘いわ！ ヨハネ！ 避けるべし！ 避けるべし！ 避けるべし——ぶおわっ！！」

抗いの意思を見せていた善子も一段と強く吹き付けた風に見舞われ、派手に後方へ転倒する始末。

「私もなんだか眠くなつて……」

「私も……」

「駄目だよ！ 寝たら死んじゃうよ！ 寝ちや駄目！」

身を寄せ合つてへたり込む曜と梨子の肩を揺するのは、オレンジ色の覆面をつけて強

盗のようになつた千歌。

「これは夢だよ……ゆめ……」

「そうだよ……。だつて内浦にこんなに雪が降るわけないもん……」

「じゃあこのまま目を閉じて寝ちやえば、自分の家で目が覚め——」

「ないよ」

「だつて……」

淡白なツツコミと同時に吹雪は止み、視界が明瞭になる。

そして見上げた先に映つたのは、函館駅の文字が供えられた巨大な建物。

「北海道だもーん!!」

「……へ?」

時は少し遡り、静岡県の沼津。

『……行つたな。アイツ等』

「……なんでもわざわざ北海道なんだ……？ もっと他に場所もあつたらうに」
空港へと向かつていったAqours九人を見送つた陸は、彼女達が乗り込んで行つた電車を眺めながらそんな疑問を口にしていた。

『だがまあ、そのホツカイドーとやらに呼ばれるたあ、アイツ等も有名になつたもんだな』

「決勝進出して有名にならないつてのも変な話だとは思うけどな」

何でもラブライブ北海道地区大会のゲストに招待されたとかそんな。

ちなみに交通費宿泊費等を運営が負担してくれるAqoursメンバーとは違い、公認のマネージャーでも無ければ浦女でもない陸には当然そんなものはない。よつてお留守番だ。

『まーしかし、最近寒くなつてきたよな』

「お前が北海道行き拒んだのもそれだつたよな」

そう。別に陸達も行こうと思えば行けなかつた訳じゃない。ゼロに変身すれば北海道までの距離程度一瞬である。夜もコンビニ等に籠つていれば越すことは出来る。

ならどうして陸達は向かわなかつたのか、その理由はゼロにある。

『当たり前だろ。寒いつて分かつてる場所に用もなくわざわざ行くかつてんだ』

光の国には冬という季節がなく、大半のM78星雲出身のウルトラマンは寒さに弱

い。

ゼロとて例外ではないために、今回の北海道行きを断固拒否したのだ。

「まあでも、寒いのは同意。さっさと帰ってグレンであつたまるか」

『暖房代わりにすんのはやめてやれよ……。つか、その前にやる事があんだろ』

「……ん。そうだった」

気だるげにブレスレットを叩き、ウルトラゼロアイをその手に掴む。

陸とゼロが離れるとなれば、その隙を狙ってダークネスファイブが A q o u r s を

狙つてもおかしくない。

なのでゼロは今回、自分の代わりに助つ人を向かわせると言っていた。

「……ところで俺等どこ行くんだ？」

『それはついてのお楽しみだ』

「お前いつもそれだよな」

もったいぶつて教えてくれないし、陸自身さっさと帰って温まりたいのでさっさと済

ませるとしよう。

周りに人目がない事を確認してからゼロアイを装着し、赤と青の巨人に姿を変える。

『そんじゃあ……、行くぜエ!!』

飛び上がると共にウルティメイトイージスを身に纏つたゼロは。大空に開けた時空

バルタン星人の振り下ろした鋏を回避すると、右足を軸に身体を回転させて回し蹴りを叩き込む。

『ハヤト!』

「了解! 喰らいやがれ! ファントン光視砲!」

戦闘機から放たれた光弾が直撃し、怯んだところを巨人はタツクルで畳みかける。

更に追撃の裏拳を叩き込み、バルタン星人の身体を薙ぎ払った。

『トドメだ! 大地!』

「ああ!」

巨人の胸に備わったX字のランプが強く光り輝き、発生したエネルギーの余波が地面を捲れ上がらせていく。

左足で踏ん張る動作を見せながら両腕を左側に振りかぶり、流れるようにX字に組んで溜め込んだ力を開放する。

『ザナディウム——』

『ファイナルウルティメイトゼロ!!』

が、その光線が炸裂する前に突如上空から迸った光矢によってバルタン星人の身体は打ち抜かれ、爆散してしまう。

「……え?」

『な．．．なんだ．．．？』

呆氣にとられる巨人が見上げた空には、手元に戻ってきた矢を鎧に変えて装着するもう一体の巨人——ウルトラマンゼロの姿があった。

『『ゼロッ!!』』

『よー。久しぶりだなお前等』

地上に降り立つと、まだよく状況が飲み込めていない巨人の方に歩み寄っていくゼロ。

「え？ ああ．．．うん。久しぶり．．．」

『久しぶり．．．．．なのはいいんだが．．．．．どうして君がここに?』

『ああ、ちよつとお前等に用があつて来たんだよ』

そう言つて巨人の肩を掴み、再び空へと飛びあがる。

「はあ!! ちよ．．．え? どういう事!!」

『おい待てゼロ!! 一体何なんだ!!』

『ちよつとコイツ等借りてくぜ』

思う存分場を掻き回した後、大空に次元の穴を開けたゼロはその中に飛び込んで巨人を誘拐していった。

「いやあ〜！ はるばる来たね！ 北海道！」

吹雪も収まり、あの茶番をする必要もなくなる程度には視界がハッキリしてきた。

「まさか地区大会のゲストに……」

「招待されるなんてね……！」

果南の手にもつチラシには、北海道地区大会予選の案内要項が記載されていた。

夏大会の際とは違い、今大会は北海道予選が東海予選よりも後に行われる。

そういう事もあり、先に決勝進出を決めたA q o u r s がこうして招待されたのだ。

「……うう……、寒い……」

グレンファイヤーがいれば簡単に暖を取れたのだろうが、陸同様グレンも呼ばれる訳がないのでここにはいない。

よつて、各々自前の装備でこの寒さを凌がなくてはいけない訳で。

「曜ちゃん。もうちよつと厚着した方がいいわよ？」

梨子があと一枚くらい羽織った方がいいと促したその時、彼女と曜の間に割って入る者が一人。

「さあ、行くわよ！ リトルデーモン！ リリー！」
「ええ……」

地元ではまず見ない白銀の世界に興奮気味の善子がいつものポーズで墮天し、幼子のように目を輝かせながら眼前を見据える。

「レッツ……ニューワールどわあっ！」

だが駆け出した瞬間、凍った路面でスリップし、派手に尻から転倒してしまう。

「雪道でそんな靴履いてちゃダメだよ」

「その通りデース！」

「そんな時こそ、これ！」

テレビショッピングの販売員の要領で自分達の装着している靴を見せつけてくる鞠莉とダイヤ。

「じゃーん！」

二人の履いている靴は、靴裏に滑り止めが施された代物だ。何でもこの日に備えてノリノリで用意していたそう。

「これでバッチリデース！」

「流石お姉ちゃん！」

性能を披露したいのか、二人は雪が降り積もった小山に登り始める。

「これでこのような雪山でも、ご覧の通——うぶっ!!」

「ヒギイ!!」

そう言いながら頂点に到達した瞬間、雪山が陥没してできた穴の中に吸い込まれていった二人に冷たい視線を注ぐ面々。

「お待たせずら〜」

「「.....」」

次にその視線が向けられたのは花丸だった。

よほど寒かったのか、過剰な厚着をして元の体型より何回りか膨らんだ巨体をこちらに向けて進行させてくる。

「やっど温かくなつたずら〜♪」

どいう訳か、声音もくぐもっている。

「花丸ちゃん!!」

「まるは丸々つと丸くなつたずら〜♪」

「ちよつと.....!」

直後にその厚着が仇になり、花丸は大きく身体のバランスを崩す。

そして——、

「「わあああああつ!!」」

不幸にもその前方にいた曜、ルビイ、善子を下敷きに派手に倒れ込んだ。
「あはは……」

『……ん？　ここでもいいのか？』

「え？」

苦笑する千歌達の耳に、この中の誰のものでもない声が滑り込んできた。

『……つて、あれ？　おーい！　何も見えないぞ！』

「え？　何……？」

声がするのは千歌のポケット。その中にあるスマートフォンからだ。

『おいゼロという——ああ、明るくなった』

突然の事に警戒心と畏怖を抱きつつも取り出した彼女のスマホの画面には、人型のシ
ルエットが映し出されていた。

その姿はまるで、これまでA q o u r sが何度も触れてきた光の巨人達のように――
、

「……何コレ」

『……ん？　あー……、君達が、A q o u r sでいいのか？』

画面に移る向こう側も千歌の存在を確認したのか、スマホのスピーカーを介してそう

問いかけてくる。

「ええ？ あ、うん。．．．．．そっちは．．．．．？」

『そうかそうか。無事にコンタクトできて何よりだ』

混乱するA q o u r sとは対照的に、随分と落ち着いた様子で納得する謎の存在。仮称を存在Xとでもしようか。

「えつと．．．．．あなたは？ ゼロちゃんのお友達？」

『ん？ ああスマン。自己紹介が遅れたな。ゼロに頼まれてここに来たんだ』

マイペースな印象を受けさせる存在X。その名は、

『私はエックス。ウルトラマンエックスだ』

百五話 聖なる雪

『………ホツカイドー? どこなんだよそりや』

『地球………日本のとある地域の呼び名ですよ』

宇宙船の中で向き合うメフィラス星人魔導のスライと、グローザ星系人氷結のグロツケン。

『ふーん………。で? そこに行つて何すりやいいんだ?』

『ええ。実は久方ぶりにあるものの反応が観測されてね。ゼロの手に渡る前に保持者を見つけ出し………あとは言わずとも分かるでしょう?』

その答えは捕獲、最悪の場合は抹殺。過去それを所持する自分達が何度も試みた事だ。

『北海道は寒冷的な地帯です。貴方に持つてこいな舞台ではありませんか?』

『ケケ………なるほどなア………』

ようやく自身の出番が来たと分かった途端に剣呑な光を紅い双眸に宿す。

『んじゃ、ちよつくらアスローグの奴でも連れて行つてくるとするかな……』
両腕に備わった鋭利な刃を鈍色に煌かせるグロッケン姿からは、見る者全てを凍てつかせる絶対零度の冷気が溢れ出ていた。

同じ頃。北海道の函館にて。

「「「「「ウルトラマンエックス?」」」」」

千歌の携帯端末に視線を集中させ、声を揃えるAqours一行。

『ああ。言った通り、ゼロに頼まれてここに来た』

携帯の中からこちらに声を向けてくる謎の存在——ウルトラマンエックス。

スピーカー越し故に電子的なエコーが掛かった低い声と、サイバー感を醸すシルエツト。

今まで目にしてきた他の戦士達と差異はあるが、その姿は紛れもなくウルトラマンだった。

『君達がこつちにいる間は私が傍にいる……事になっていくらしい。ゼロによるとな。といつても、私もさつき聞いたばかりでよく分からないんだが……まあ、よろしく頼む』

「は……、はあ……」

どうやらよく分からないまま押し付けられたクチらしい。

まあ、出発前にゼロも助っ人をよこすとは言っていたし、信頼しても大丈夫だろう。

『とりあえず、君達と共に居る間はこのデバイスの中に居させてもらおう』

「……ていうか、どうやって入ってるの？ それ……」

エックスの声はスピーカー、姿は電子画面に表示されている。どこから電話してきているという訳でもなさそうなので、言葉の通り形態の中に入っているのだろう。一体どういう仕組みなんだか。

『ん？ ああ、私は身体をデータ化する事が出来るんだ。デバイス同士が接続されているなら、こうして……』

そう言うと、突然千歌の携帯からエックスの姿が消える。

「え？ あれ？」

『こつちだ』

次に声したのは梨子のポケット。その中にある彼女の携帯端末だ。

取り出してみると、やはり画面にはエックスの姿が映し出されていた。

『とまあこの通り、デバイス同士を移動することも出来る』

「おおく……」

「未来ずらく……」

「いや……それはちよつと違うくない？」

何はともあれ、エックスの摩訶不思議な能力によつてすぐにA q o u r sと馴染むことが出来たようだ。

その後も未知のウルトラマン相手に問答を繰り返しながら、千歌達は目的地へと向かつて行ったのであった。

携帯のデータを読み込んだエックスのナビゲートで無事目的地に辿り着いた一行。

「うわあ……！ やつと着いたあ！」

「凄い人だね……」

流星は空前絶後の任期を誇るラブライブだ。

地方の予選とは言え、多くの人で溢れかえっている。

「あ、Saint Snowさんだ」

「さっすが優勝候補だね」

『……あー、おい千歌。さつきから言ってるそのスクールアイドルとかラブライブとやらは一体何なんだ?』

巨大な看板モニターに映し出されたライブルチームに反応する千歌と梨子。そしていまいち現在の状況が分かかっていないエックス。

ちなみに視界が内臓カメラに限られている為、携帯を手で持っていないと周りが見えないらしい。

「陸ちゃんとゼロちゃんから聞いてないの?」

『いいやなにも。それに私達の世界にもそんな文化はなかったからな』

「へー……、そんな世界あるんだ……」

『この世界特有の文化だと思うぞ。……まあ、とりあえず教えてくれ。気になる』
「ああうう。スクールアイドルっていうのはね——」

先程散々質問攻めされたので、今度はエックスが質問する番らしい。

千歌達としてもスクールアイドルの素晴らしさが伝わるなら洩る必要もないだろうと、持てる表現力の全てを尽くして解説する。

『ふむ、なるほど。大体理解した』

未だ完全理解には及ばないゼロと違って遥かに話の呑み込みが早くて助かった。掛かった時間ものの数分。

「・・・ていうか、今の千歌ちゃんの説明で分かったの？」

『あんなキラキラとかワクワクだとか擬音だらけの表現で分かる訳ないだろう？ ネットに潜り込んで情報を読み取ったんだ』

「割と物言いは容赦ないんだね・・・」

下手な解説で偏差値の低さを露呈した千歌を尻目に、自身の入った端末を看板モニターの方に向けさせるエックス。

『彼女達の情報もあったぞ。Saint Snow 北海道のスクールアイドルで、今大会優勝候補の一角。前回大会でも上位に食い込んだらしいな。すこしパフォーマンズの映像も覗いてみたが見事だった』

「・・・いつの間にかここまで・・・」

あまりの手の周りの速さに驚くと共に、ネットを利用して情報を獲るといふところには親近感を覚える。

何と言うか、どこことなく人間臭いウルトラマンだ。

「ふっ・・・ならばこの目で、この地の覇者とならんのを確かめてやろうじゃない・・・」

『善子のあれは何なんだ?』

「気にしなくていいよー」

墮天使芸のくだりはスルーし、一行がある人物達のいる場所に向かおうしたその時、背後から声が掛かる。

「あの! . . . A q u o u r s の皆さん ですよね?」

「ふえ . . . ?」

振り向いた先にいたのは三人の少女。

学生服に身を包んでいるあたり、彼女達もスクールアイドルなのだろうか。

「ええーつと あの あの! 一緒に写真撮ってもらっていいですか?」

三人の内、カメラを抱えた一人が緊張した面持ちでそう申し入れてくる。

当然の事にはばらく硬直した後、状況を理解した面々に混乱が溢れかえった。

「 」

「 い? ちよつと皆、お、落ち着こう!」

『君が一番落ち着くべきだと思っぞ?』

その後何とか落ち着きを取り戻し、ご所望の写真撮影をしてあげる事に成功する。

「ありがとうございます! 応援してます! 頑張ってください!」

「ありがとう♪ 頑張るよ〜」

地元で握手やサインを求められることはざらだが、まさか遠方の地である北海道まで来て共に写真を撮ってくれなどと言われるなど思ってもみなかった。少なくとも以前の Aqours ならあり得なかつた事だろう。

決勝に進むという事は、それほどまでの事なのだ。

「失礼しまーす．．．．．Saint Snowのお二人は．．．．．」

Saint Snowの二人を訪ねるべく、北海道地区予選に参加するスクールアイドルの控室に入る千歌達。

「はい．．．？ あっ！ お久しぶりです」

出迎えてくれたのは、既にライブ衣装への着替えを済ませていた鹿角聖良だ。その隣では彼女の妹である鹿角理亜が目を閉じたままイヤホンで音楽を聴いている。

「ごめんなさい。本番前に」

「いいえ。今日は楽しんでいって下さいね。．．．．．皆さんと決勝で戦うのは、まだ

先ですから」

「はい。そのつもりです」

前に東京で見せつけて着たような圧倒的な自信に満ちた表情を浮かべる聖良。それほどまでに自分達の力を信じているという証拠だろう。

「お二人共、前回の地区大会は圧倒的な差で勝ちあがってこられたし……」

「もしかして、また見せつけようとしてるんじゃないの？ 自分達の実力を」

喧嘩腰気味に悪戯っぽく笑う果南が言っているのは、まだAqoursが六人だった頃の話。

東京でのライブイベントに招待された際に、千歌達の心をへし折り、成長させるきっかけとなったあのパフォーマンスの事だ。

「いえいえ。他意はありません。それにもう……皆さんは、何があっても動揺しない」「どういうことですか？」

「Aqoursは、格段にレベルアップしました。今は紛れもない優勝候補ですから」「優勝候補……」

改めて感じる、今の自分達が昇りつめた場所と、そこにいる事の重圧。

忘れていた訳ではないが、ここに來てから何度もそれを再実感させられる。

「あの時は失礼な事を言いました。……お詫びします」

席を立つた聖良が、棘を感じた初対面の時から考えられない柔和な態度で頭を下げてくる。

「聖良さん……………」

『……………彼女のどこが礼儀に欠く生意気な子娘なんだ？　むしろその真逆だと思うのだが……………』

「……………え？」

突然梨子の持つていた携帯端末から発せられた声を聞き取り、顔を上げる聖良。

『まあ陸も否定していたから真に受けてはいなかったが———』

「ちよ……………ちよつとエックスさん!!」

A q o u r s 以外にも人がいるというのに、ごく当たり前のように喋り出したエックスに慌て出す梨子。

「え……………えつと……………これはですね……………」

あたふたとエックスの事を誤魔化そうとする千歌。

だが聖良は特に驚く様子もなく、むしろ納得したような表情で梨子の携帯に映るエックスを見据えた。

「あ、もしかしてその方がウルトラマンエックスさん……………ですか？」

「うえつ!!」

まさかの言葉に驚くA q o u r s一行。

そんな彼女たちを尻目に、聖良は次の語を紡いだ。

「仙道さんから話は聞いていましたから。A q o u r sと一緒に助つ人のウルトラマンも来るって」

聖良がそういつた事で、そういえば彼女は陸がゼロと一体化している事を知っていた
と思いだす千歌。

『ああ、君が陸達が言っていた子だったのか。ウルトラマンエックスだ。よろしく頼む』
「はい。こちらんこそ」

いつの間にか陸と聖良が連絡を取り合うような間柄になっていいる事にも驚きだが、初
対面のウルトラマン相手にここまで落ち付いている聖良にも驚きだ。

「千歌さん」

エックスにも一礼した後、再度千歌の方を向き、手を差し出してくる聖良。

「次に会う決勝は、A q o u r sと一緒に．．．．ラブライブの歴史に残る決勝にし
ましようー！」

今度は遠回しの嫌みでもない、純粋な宣言。

「千歌ちゃん」

「ここは受けて立つところデース」

「……………うん」

予想していなかった事に一瞬戸惑う千歌だが、曜と鞠莉の声を受けてしつかりと互いの手を握り合った。

「……………理亞！ 理亞も挨拶なさい!!」

振り返って自身の妹にも挨拶を促すが、当人である理亞は目を閉じたまま何の反応も見せない。

「理亞!!」

「ああ、いいんです！……………本番前ですから」

険悪な雰囲気になる前に千歌が聖良を制止し、そのまま控え室を後にする事に。

『……………ん?』

出て行く寸前、ふと目線を流したエックスの視界に入ったのは未だだんまりを決め込んでいる理亞の手。

腿の上で重ねられた二つの手は、微かに震えていた。

「……………」

その事に気が付いたのはエックスともう一人。

同じ妹として気になっていたのか、先程からずっと理亞の事を見ていたルビィだった。

「わああああ．．．！ 凄い声援！」

招かれた側の A q u o u r s に用意されていたのは、ステージどころか会場のひとつ全体が見渡せる特等席だった。

スクールアイドル達の登場を今か今かと待つ観客達の持つサイリウムの光が会場全体を彩り、幻想的な光景が目の前に広がっている。

「お客さんもいっぱい」

「観客席から見る事で、ステージ上の自分達がどう見えているか．．．」

「どうすれば楽しんでもらえるのか、凄い勉強になるはずだよ」

「．．．だよね」

いつもステージ上で歌う立場だからこそ、こういった観客席側から見るライブは新鮮だ。

『おい千歌。もうちよつと持ち上げてくれ。ステージが見えない』

「．．．ここ撮影禁止だから．．．これ以上持ち上げたら勘違いされそう．．．．．」

『なんだとっ?!!』

「Saint Snowさんは?」

何とか出来ないのかと訴えてくるエックスは無視し、梨子の持つプログラム表に目を通そうとするルビィ。

「確か・・・次のはずだけど・・・」

噂をすれば何とやら。言ってるうちに証明が切り替わり、灯された光が背中合わせでステーションに立った二人の少女を照らす。

本大会最有力優勝候補の一角、Saint Snowの登場だ。

「It、s Showtime!!」

Saint Snowのパフォーマンスを初めて生で見る鞠莉も興奮した様子で声を上げる。

激しいギターのリズムが会場全体に鳴り響き、これまでに無い程に会場の熱気が湧き上がる。

この時は、まだ誰一人として思っても見ていなかったのだ。

———次の瞬間二人に襲いかかった。受け入れ難い、残酷な悲劇を。

百六話 二つの姉妹

『大地。なんかおかしいなところとかあったか？』

「うーん……今のところは何も……」

こちらの世界に戻り、無事ウルトラマンエックスもA q o u r sメンバーの元に送らせた後。

何故か陸はエックスと一体化していた青年——大空大地の持つ不思議な形をしたデバイスで身体を検査されていた。

「なあゼロ。俺は一体何を調べられてんの？」

『いいから大人しく調べられとけ』

理由を問うてもこの返答の一边倒である。本当に何を調べられているのやら。

「デバイザーで調べてみたけど……特におかしいところはなかったよ？」

やがて検査を終えたららしい大地がそう言い、そのデバイザーとやらに映し出された結果を見せてくる。

『……そうか……。やっぱタロウ教官からの報せを待つしかないか』

どうにもゼロの様子がおかしい。何か隠している事は明らかなのだが、それをどうしても陸に知られたくないらしい。

「ところでゼロ。俺はいつまでこっちの世界にいればいいの？」

前に見たヒカルやショウの物とはまた違った隊員服に身を包んだ大地が目細める。

「ほら、俺よく分からないままこっちに連れてこられたし、やる事もあるからそこまで長居は出来ないんだけど……」

彼もエックスと共に無理矢理こっちの世界に連れてこられたゼロの被害者であるため、そう思うのはもつともだ。

だが、生憎ここにいるのは理屈が通じないで有名なウルトラマンゼロさんなのだ。

『さあ？ アイツ等が帰って来るまでじゃねーの？ いつかは知らないけどな』

「ええっ!! 俺Xioの皆に何も言ってきてないんだけど!!」

『まあ、何とかなるんじゃないかね?』

「ちよつとお!!」

「すみません大地さん……こんな奴で……」

全グループのパフォーマンスが終了し、投票の集計に基づいた結果が会場の大スクリーンに映し出される。

一位 Super Wing

二位 あしも☆えくる

三位 Kiss Bear

そこに、AqoursのライバルであるSaint Snowの名前はなかった。

「……びつくりしたね」

「まさか、あんな事になるなんて……」

「これが……ラブライブなんだね……」

『……一度の失敗が全てのリズムを崩す。ミスすると立ち直ることは難しいという事だな……』

携帯のカメラ越しに決勝進出者たちの名前を眺めるエックスが零した言葉により、全員の脳裏にとある光景が蘇る。

パフォーマンス開始直後の事だったのだ。Saint Snowの二人が身体を衝突させ、大観衆の前で転倒してしまったのは。

その後の事は——言わずもがなだ。

彼女達の失敗が何に起因していたのかは分からない。多くの人々から押し寄せる期待が不安となつてしまったのか。

だが、その期待が大きかったからこそ、今回の彼女達の敗退はより色濃く映る。

「一歩間違えれば、私たちもつてこと？」

『……きつと誰でも、君達だって、その可能性は抱えているのだろうな……』

それはA q o u r s とて例外ではない。むしろより多くの人々の期待を受ける決勝となれば、より悲惨な失敗を犯してしまうかもしれないのだ。

「でもこれで、もう決勝に進めないんだよね……」

二人……」

何よりもその現実が刺さる。

互いに互いを刺激し合えたライバルの敗退は、やはりこたえるものがあつた。

「……Saint Snowの二人、先に帰られたみたいですよ」

再び控室に顔を出した千歌達だが、既にそこに二人の姿はなかつた。

「この後、本選出場グループの壮行会があるんですけど……」

「控室で待つてゐるって、聖良さん言ってくれたのに……」

同室していた第三者の言葉と揺るがぬ事実から、Saint Snowの二人が抱いた感情が伺い知れる。

「今日は、いつもの感じじゃなかったから……」

「ずっと……理亞ちゃん黙ったままだったし……」

「……あんな二人、今まで見た事ない」

「あれじゃ動揺して歌えるわけないよ」

脳裏に、何度目かも分からない光景がフラッシュバックする。

あの時、転倒した彼女達が見せた、戸惑い、焦り、不安の表情。

忘れろと言われて忘れられるようなものではない。

「それにちよつと、喧嘩してみたみたい」

不規則に揺れる路面電車の中を支配していたのは、夕陽の差した赤みと、圧倒的な静けさだった。

「まだ気になる？」

「……うん」

その理由は言うまでもなく、Saint Snowの二人の事だ。

「ずっと二人でやってきたんだもんね……」

「それが最後の大会でミスして、喧嘩までして……」

『……?』

曜が口にした「最後」という単語に、ルビイが軽く肩を揺らした事に気が付くエックス。

「……ルビイ。どうかしたのか？」

気を遣ってか、皆には聞こえないようテレパシーで直接脳内に声を掛けてきてくれる。

（……何でもないです）

一瞬何かを言いかけ、結局はそれを飲み込んだルビイにエックスの疑念は余計に深まる。

そして次の瞬間に彼女が視線を向けたのは、姉であるダイヤの横顔だった。

『……』

以前デリカシーのなさでアスナという女隊員にボロクソ言われているので余計な口

出しはしないが、ルビイはルビイで何か別の事で思い悩んでいるように捉えられた。

「やっぱり、会いに行かない方がいいのかな？」

「そうね！　気まずいだけかも！」

「私達が気に病んでも仕方のないことデース」

努めて明るく振舞おうとする善子と鞠莉を一瞥した後、エックスは再度ルビイに視線を戻す。

「そうかもね」

「あの二人なら大丈夫だよ」

「仲のいい姉妹だしね……」

少しずつ皆の表情に余裕が戻っていく中、やはりただ一人彼女だけが浮かかない顔のままだった。

「それじゃあこの後はホテルにチェックインしてー」

「明日は晴れるらしいから、函館観光だね」

『……………』

ルビイの様子がどこかおかしい事に気が付いたのはエックスともう一人。

エックス同様先程からルビイを気に掛けるように見つめていた、彼女の姉である黒澤ダイヤだった。

「ルビイの様子が変？」

『ああ、何かこう、悩んでいるようにも思えてな。心当たりはないか？』

A q o u r s メンバーが無事ホテルにチェックインしたという知らせを受けてから数十分、半ば強制的に向こうに向かわせたエックスからそんな知らせを受ける。

ちなみに今は電話越しに話している状態、サイバーウルトラマンという分類に入るらしいエックスは自分の入っている端末から他の端末に通信を入れる事も出来るらしい。

「・・・出発前にはそんな感じはしなかったけどな」

〈様子が変でもお前は気付かぬーだろ〉

(どういう意味だ)

まあ実際、曜が思い詰めていた時に気付けなかった前科があるのでこれ以上は何も言えないのだが。

「心当たりつつつてもな・・・、そっちはいつ頃気付いたんだ？」

『………Saint Snowのライブが終わってからだな』

その名前が出た途端、本人たちはいないというのに幾分か空気が重くなつたかのよう
な感覚がのしかかつてきた。

陸も、あの瞬間をネットの中継で見えていたから。

「……あれ見て自分達も不安になつちまつたとかか？」

『さあな。それはルビイ本人にしか分からない。………一つ気になるところがある
とすれば、ダイヤを見る視線に哀愁を感じたくらいだな』

「……哀愁？」

一体何を寂しがっていたのだろうかあのちんちくりんは………と思ひかけ、前にルビイ
が言っていたとある事を記憶の底から弾き出す。

「………エックス。確証がないからまだ何も言えないんだけど………、とり
あえず、また何かあつたら教えてくれ」

『ん？ ああ、分かった』

通話を終了させ、もう一度ルビイのある言葉を頭の中で反芻させる。

——お姉ちゃん達は、三年生はこれが最後のラブライブだから………

三年生にとって最後のラブライブ。そして同じく最後のラブライブであったであろう聖良達の失敗。

「……………聖良さん達の件で変に悩んでるみたいだな」

『……………ホント色恋沙汰以外の事は鋭いよな』

「……………なんかよく分からんが悪かったな」

もう何度目だろうか、このやり取り。よくもまあ飽きないものだ。

『それはそうとお前』

「ああ？」

『どうなんだよ。鞠莉に告られてからは』

「……………」

少し前に陸の人生五本の指に入るほどの大事件が起きた。

A q o u r s メンバーの一人であり、陸の幼馴染である果南の親友でもある小原鞠莉。

そんな彼女が、先日大胆にもA q o u r s メンバーの面前で頬にキスからのロックオン宣言という中々にド派手な事をやつてのけたのだ。

「……………どうといわれても……………そもそもこういう事自体初めてというか……………、その、嬉しくない訳じゃないというか……………どう接したらいいか分からないとい

うか……」

『鈍感なくせに反応はウブなんだな……』

呆れ気味に溜息をつくゼロ。

だがそれにはちよいとばかりの好奇も混ざっており、

へ……これがあと八人分残つてると思うと面白くなってきたな……

「「わあああ〜〜♪」」

A q o u r s i n 五稜郭タワー。

展望台から見渡せる星形の城郭を真下に望み、千歌達は揃って声を上げていた。

「すごい！ すごーい!!」

「なんだかおいしそうな形ずらね」

『食べながら言うセリフか……?』

アイスクリームを味わいながらもまだ食のことを考える花丸にツツコんだ後、他のメ

ンバーにも目を配るエックス。

「何という光景……間違いない。これこそわが夢にまで見た魔法陣！ これで超巨大トリルデーモンを！」

「ううう……カッコイイ！」

善子は墮天使魂を揺さぶる形だったらしい五稜郭、曜はかつてのこの地で起こった戊辰戦争の中心人物である土方歳三の銅像を見てそれぞれ目を輝かせている。

「全然平気平気！」

別所ではガラス張りの床の上に立った果南が声を上擦らせながら決して下は見まいとしているのが確認できた。

「……はぐう……」

「ワーオ！」

だが結局足が竦み、隣にいた鞠莉に抱き付いてしまう。

「ちよつと果南さん！」

「……」

三年生達の奥に、ルビイの姿はあった。

果南や鞠莉と戯れる自身の姉の姿を見て一瞬口元を綻ばせるものの、またすぐに思い悩んでいるような表情に戻ってしまう。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「ねえねえエックスちゃん！」

更に深まつていく違和感を胸に引つ掛けながら、エックスは千歌に頼まれ五稜郭と戊辰戦争の情報をネットから引つ張り出すのであった。

「なんか、落ち着くね。こっ」

「内浦と同じ空気を感ずる」

続きやつてきたのは八幡坂。

目の前の坂を見上げながら、千歌はほうつと息をつく。

「そっかあ・・・・・・・・海が目の前にあつて、潮の香りがする街で、坂の上にある高校で・・・・・・・・」

上から下つてきた高校生と会釈を交わし、再度自分達の育った町との面影を重ねる。

「繋がってないようで、何故かどこかで繋がってるものね・・・・・・・・皆」

不意にポケットから取り出したペンダントを見つめ、そう呟く梨子。

ここにあの出来事の詳細を知る者はいないが、これは彼女が見えない力を信じたきつかけをくれた彼が残してくれた物だ。

「お待たせずらー」

しみりりとした梨子の感傷をぶち壊すように、機能どこかで聞いたようなのしりという音が近づいてくる。

その正体は、やはり花丸の足音だった。

「ピギイッ!!」

「また!!」

「何でまた着てくんのよ!!」

昨日のあれをもう忘れてしまったのか、また大量の防寒具を着こんで暖かそうにして
いる。

そして案の定バランスを崩し、昨日同様ルビィ、曜、善子の三人を下敷きにして盛大に倒れ込むのであった。

『………何をやっているんだ一体……』

「学習能力ゼロですわ……」

「うう．．．．寒い．．．．．」

「Tea timeにでもしますか？」

「賛成！」

しばらく函館を観光し、身体も冷え始めてきた頃。

「もうだめずら．．．．．限界ずら．．．．．」

そろそろ怪我人が出そうだからと上着を引き剥がされた花丸が自身の身体を抱いて震えている。

「と、いう訳で！」

待つてましたと言わんばかりに善子が声を上げた場所はとある喫茶店の前。

くじら汁。と書かれたメニュー表が入り口前に掲げられている甘味処だ。

「くじら汁．．．．．」

「渋い．．．．．」

『ふむ．．．．．、この地域の正月料理として有名なようだな．．．』

完全にナビゲーターと化したエックスの解説で多少の興味を抱き、ゆつくりと店の戸を開いて中の様子を伺う。

「すみませーん．．．」

店内に人の気配はなく、千歌が呼びかけてみるものの店員が出てくる様子もない。

「すみませーん！．．．あれ？」

『営業時間外なんじゃないのか？』

「でも、商い中つて、ありマース」

入っつていいのかダメなのか、現状では判断しかねる。

「うう．．．もう無理．．．中に入れて欲しいすら．．．」

断りもなしに入るのは気が引けるが、もう限界らしい花丸を見ているのもなんだか忍びない。

「仕方ないね．．．じゃあ失礼しまーす」

「ううう．．．やつと助かるすら．．．」

店内に踏み入った瞬間、暖かな空気が千歌達を包んだ。暖房が効いていると言うことは、何かしらの理由で店員が出てこれないだけで営業自体はしているらしい。

「．．．．．？」

適当な座席に座つてメニュー表に目を通しだす他のメンバーを尻目に、店の奥の方に灯っている灯りを目にしたルビィはそちらに向かつて行く。

『．．．．．ルビィ？』

昨夜陸に頼まれた手前、おかしな挙動から目を話すわけにはいくまい。

そう思いエックスが彼女の携帯端末の中に入り込むと、それと同時に灯りの出所であるろう部屋の中からすすり泣くような音が聞こえた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

もしかしたら店員の人のなにかと思い、覗き込むように部屋の中の様子を伺って音の正体を探る。

「つ・・・・・・・・！」

そこには、何の変哲もない部屋の奥に置かれたベッドの上で俯せになって泣く少女が一人。

こちらの気配に気が付いたのか、涙で濡れた瞳でこちらを見た次の瞬間、互いに衝撃が走った。

へ・・・・・・・・彼女は・・・・、Saint Snowの・・・・・・・・

そう。そこにいたのはSaint Snowの鹿角理亞。
ここは、この甘味処は彼女達の実家であったのだ。

百七話 傍にいる存在

「すごい．．．．美味しそう．．．」

「とても温まりますよ？ どうぞお召し上がりください」

黄色を基調としたウエイトレス姿の聖良が注文したぜんざいなどの品を配膳してくれる。

「頂きます。雰囲気のある、いいお店ですね」

「そうだね♪」

「制服も可愛いし♪」

偶然立ち寄ったこの甘味処、実はSaint Snowの姉妹の実家であったのだ。

顔見知りとしての気遣いを抜きにしても、出されたスイーツの見栄えや店内の雰囲気は申し分のないものだ。

「この美味しさ．．．．天界からの貢ぎ物！」

「おかわりずら！」

「はやつ！！」

つい先程まで凍えていた花丸もご満悦のようである。

「ふふ……学校に寄られるかもとは聞いていましたが……でもびつくりしました」
「あー……、はい。せつかくなのであちこち回ってたら、偶然と言うか……」
この店を指定した善子がこの事を知っていたかは定かではないが、意図していないとしたら一体どれくらいの確率なのだろうか。

「街並みも素敵ですね。落ち着いてて、ロマンチックで……」

賛美の言葉を並べる梨子に、聖良は屈託のない喜びを笑みに映す。

「ありがとうございます。私も理亞も、ここが大好きで、大人になったら二人でこの店を
継いで、暮らしていきたいねって」

「そうなんだ……」

『……』

その言葉を聞き、ルビイとエックスは先程見てしまった光景を思い浮かべる。
「残念でしたわね。……昨日は……」

言うべきか言わざるべきなのかは迷ったが、話題に出さないと変に気を遣わせてしま
うだろうと判断したらしいダイヤがそれを口にする。

「いえ……」

聖良は特に気にしない様子で返すが、それが地雷となってしまう者が一人。

「でも——」

「食べたらさつきと出て行つて!!」

「なあっ!?」

奥の方で聞き耳を立てていた理亞が怒鳴り声をあげ、確かな緊張感が店内を疾走した。

「理亞! なんて言い方を!」

顔見知りとは言え、A q o u r s はあくまでもお客様だ。聖良が姉として彼女の態度を叱りつけるが、当の理亞は聞く耳を持たずにこの場から立ち去ろうとする。

「さっきのこと言つたら．．．．．ただじゃおかないから．．．」

「ピッ．．．!?」

すれ違った刹那に耳朶に触れた低い声音に短い悲鳴を上げるルビィ。

「理亞!!」

声を荒げる姉をも無視し、理亞は店の奥に消えていった。

鹿角姉妹の間に漂った険悪なムードに、A q o u r s もただ黙っている事しか出来ない。

「ごめんなさい．．．．．まだちよつと、昨日の事が引つ掛かつてるみたいで．．．」
「やっぱり、そうですよね．．．．．」

「会場でもちよつとケンカしてたらしいじゃ——」ツ!!——ツ!!」

善子のデリカシーに欠ける発言は例の如く花丸が遮り、聖良の次の言葉を待つ。

「ふふ……いいんですよ。ラブライブですからね。ああいう事もあります。私は後悔してません……」

そうは言うものの、やはり弁を成すその表情には影がある。

「だから理亜も、きつと次は——」

「嫌ツ!!」

それに対する理亜の返しが、ヒステリックな叫び声となつて店内に反響した。

「何度言つても同じ! 私は続けない……」

『……ッ!』

これまでずっと一緒に歌ってきた姉の前で続けない意思を表明する理亜に衝撃を受けるAqoursと、それとはまた別のものに目を見張るエックス。

「スクールアイドルは……Saint Snowはもう終わり!!」

そう強く宣言した理亜の胸。

そこには、燃える炎のように輝く光の球が宿っていた。

へ……あれは……

他の者が誰も反応していないのを見るあたり、現段階ではエックスにしか感知できな

いものらしい。

「……本当にいいの？ あなたはまだ一年生。来年だつてチャンスは……」
「いい。だからもう関係ないから。ラブライブも、スクールアイドルも……」

それを言い残し、理亜は再び厨房の中へと戻つて行く。

「お恥ずかしいところをお見せしてしまいましたね……。ごゆつくり」

その後を追うように、聖良もAqoursに一礼した後厨房の中へと消えていった。

「一口……一口だけ……」

「ダメずら〜」

「一口くらいいいでしょ!!」

鹿角家の甘味処を後にし、今度はファストフード店。

この店の看板メニューである巨大なハンバーガーで揉めるよしまるコンビは蚊帳の外に置き、難しい顔突き合わせる千歌達。

「何もやめちゃうことないのに……」

「でも、理亞ちゃん……続けるにしても、来年は一人になっちゃうんでしょ？」
話題は勿論Saint Snow.

「新メンバーを集めてRestart!」

『……きつと、そんな単純な話ではないのだろうな……。すぐに割り切つて前を向けるほど、心というものは簡単にできてはいない』

「わたくし達もそうでしたものね……」

「結局、ステージのミスつて、ステージで取り返すしかないんだもんね」

だが、もうSaint Snowはライブの舞台に立つことは出来ない。もうその失敗を取り返す場所が存在し得ないのだ。

「……自身、失くしちゃったのかな？」

「違うと思う」

唐突に割り込んだその言葉に、全員が視線を流す。

「聖良さんがいなくなっちゃうから……。お姉ちゃんと一緒に、続けられない事が嫌なんだと思う」

声の主はルビィ。

各々が理亞の気持ちを推察する中、普段は自分の意見を引つ込めてしまう彼女が自分から意見をあげたのだ。

「お姉ちゃんがいけないなら、もう続けたくないって……………」

自分の意見をしっかりと言葉にするその姿からは、いつもの気弱さは感じられない。

「……ルビィ……」

「ぴぎゃつ……………」

姉に名を呟かれ、はつと我に返る。

「あんた……………」

「凄いすら……………」

「そっだよね……………寂しいよね……………」

大好きな姉と一緒にのグループでスクールアイドル活動をしている。

理亜と同じ境遇にあるルビィだからこそ、察する事の出来た気持ちだ。

「うう……ち、違うの！ ルビィはただ理亜ちゃんが泣いて——」

『おいルビィそれは……………！』

「あつ……………」

うっかり言っただけいけない事を口にしてしまい、エックスの指摘で自身の失態に気が付くルビィ。

「ピギィィィィィィィィィィッ!!」

呵責に耐えかねたのか、次の瞬間にはお馴染みの鳴き声を上げながら店の外へと走り

去って行ってしまった。

冷たい潮風が頬を撫でる。

たまらず飛び出してきてしまったルビイは、一人ベンチに座って風に揺られる海を見て黄昏ていた。

『・・・どうしたんだ?』

ポケットの中から自身に呼びかける声がし、ロクな防寒着もつけてこなかったせいでかじかんだ手で携帯を取り出す。

『皆、心配しているぞ?』

「エックスさん・・・」

デバイス同士を移動できる能力を利用していち早く後を追ってきたらしい。

そして、ルビイを追ってきた者はエックスだけではない。

「綺麗ですわね・・・」

不意に肩に掛かったコートの温かみが、彼女が最も親しみ、寄り添ってきた声音と共

にもたらされる。

『早かったな。ダイヤ』

「姉として当然ですわ」

エックスが発信した位置情報を辿って、彼女もまたルビイを追ってきた……と言うよりは迎えに来たのだろう。

「理亞さんに何か言われたんですの？」

流石姉は察しがいい。ルビイの様子の際からそれを読み取ったらしい。

「ううん……ただ……」

彼女の想いに耳を傾けるべく、ダイヤは妹に背を向けて同じベンチに座る。

「きつと、そうなんじゃないかなって……ルビイもそうだから」

先程理亞の気持ちを推察した時に零した言葉は、ルビイもまた彼女と同じ気持ちだったから。

「お姉ちゃん……お姉ちゃんは決勝が終わったら……」

理亞はあの時、姉と共にスクールアイドルが出来なくなること寂しさを感じていたのだろう。

そしてそれは同じ想いを抱いていたルビイにも伝染し、必ず来る終わりの時を語る。

「……それは仕方ありませんわ……」

聖良が今回の大会が最後のラブライブだったように、彼女と同じ三年生の果南、鞠莉、そしてダイヤもこれが最後の大会となる。

「でも……あんなにスクールアイドルに憧れてたのに……あんなに目指してたのに……」

堪えきれない感情が一筋の煌めきとなってルビイの頬を伝う。

「もう終わっちゃうなんて……」

これから待ち受ける決勝を終えれば、結果がどうであれ終わりは訪れる。

ルビイにはそれがたまらなく寂しく、辛いのだ。

「……わたくしは、十分満足していますわ」

徐々に近づいてくる終わりを悲観するルビイとは対照的に、既に吹っ切れたような顔でダイヤはそう零す。

「果南さんと鞠莉さん、二年生や一年生の皆さん……そして何よりルビイと一緒にスクールアイドルをやることが出来た——」

「ツ」

彼女にとつて、「今」というこの瞬間はかけがえのないもののはずだ。

一度は大切な友と、自身の想いに向き合うことが出来なかった過去があるからこそ、今が幸福感で満たされている。

だから、だからこそ、それを大好きな姉の口から伝えられたルビイは思わずダイヤを抱きしめた。

「・・・それでラブライブの決勝です。アキバドームです・・・夢のようすわ・・・」
かつては諦めた道があつた。

それを今は大切な仲間と一緒に歩み、頂に至らんとしている。

これ以上の喜びがあるかと、そう語っているようにも見えた。

「でも・・・！！ でもルビイは・・・お姉ちゃんともつと歌いたい・・・！！」

叶うはずのない曖昧な願いが、留まる事を知らずにせり上がってくる。

「・・・お姉ちゃんの背中を見て・・・お姉ちゃんの息を感じて・・・お姉ちゃんと一緒に汗をかいて・・・」

ダイヤもまたルビイを抱きしめるが、一度決壊した涙腺の堤防は次々に涙を溢れさせた。

「・・・ルビイを・・・置いて行かないで・・・！！」

妹の言葉に潤ませた瞳をハツと見開いては柔らかに笑みを作るダイヤ。

「・・・大きくくなりましたね」

妹にとって姉とは、生まれた時からずっとそばにいる存在。

そして同時に、姉にとつても妹とは生まれた時から見守つて来た存在なのだ。

「・・・それに、一段と美人になりましたわ」

普段シスコンと呼ばれてしまう程にルビイの事を大切に思っているダイヤだ。引つ込み思案だった妹に素直な気持ちをつづけてもらえてうれしくない訳がない。

「そんなこと・・・」

「終わつたらどうするつもりですか?」

終わりの時を恐れるルビイに、あえてそれを乗り越えた後のことを問いかけるダイヤ。

「分かんない・・・でも学校無くなつちやうし、お姉ちゃん達もいなくなつちやうし・・・」

「そうですわね・・・」

「お姉ちゃんは?」

「・・・そうね。分からないですわ。その時になつてみないと」

その答えはダイヤも同じだった。

「今はラブライブの決勝しか考えないようにしていますし」

それが彼女自身のためなのか、それとも名前を残すと誓つた学校のためなのかは分からない。

だが、今はその答えを出すべきではないというのだけは理解できた。

「ただ……ただ、貴方がわたくしにスクールアイドルになりたいって言うてきた時、……あの時、すごく嬉しかったのです」

水平線に沈みゆく紅を見つめ、ダイヤも自身の感情を連ねる。

「わたくしの知らない所で、ルビイはこんなにも一生懸命考えて、自分の足で答えに辿り着いたんだって！」

ルビイは昔から人の一歩後を進む子だった。

だが今は違う。しっかりと自分の意思を伝え、前に歩むことのできる。

そんな姿に、ダイヤは姉とした確かな喜びを感じていたのだった。

その夜。

ルビイは自分の足で、自分の意思で今成すべきことを見つけ、とある場所に向かっていった。

『……正直な話、私には兄弟や姉妹と言うものがよく分からなかった』

夜道を一人で歩くのは危ないだろうとエックスも一緒について来てくれている。

『だが君とダイヤ、そしてSaint Snowの二人を見てなんとなくだが分かった気がする。君達は決して一つの存在ではないが・・・繋がっている。互いを想い、尊び、共に心をユナイトさせた存在なのだろうな』

「・・・・・・・・はい」

目的地である甘味処に辿りつき、そこで閉店の片づけをしていた一人の少女——鹿角理亞に呼びかける。

「あのっ！」

「・・・・・・・・あなた・・・」

「ルビィ・・・・・・・・黒澤ルビィです!!」

振り返った理亞にペこりと頭を下げるルビィ。

怪訝そうに顰められた眉から向けられる視線を受けても、今のルビィは臆することなく自分の想いを伝えた。

「お話が・・・お話があるの！ 少しだけ!!」

「……ねえ、どこまで行くの？ 話って何？」

レンガ倉庫が立ち並ぶ、ぼんやりとした灯りが燈る夜道。

理亞を連れ出し、そこを二人で進んでいた。

「あ……ルビイにも理亞ちゃ……あ、理亞さんと同じでお姉ちゃんがいて……」

「黒澤ダイヤ」

「知ってるの?!!」

姉の名前を認知していた事に勢いよく反応したルビイに対し、理亞は少し萎縮しながら目を伏せる。

「一応調べたから……Aquoursの事……」

理亞も、かつては歯牙にもかけていなかったAquoursを認めてくれているらしい。

「でも、私の姉様の方が上。美人だし、歌もダンスも一級品だし」

誇らしげに聖良の魅力がダイヤより勝っている事をアピールされ、ルビイは少しむっとした表情になる。

「ルビイのお姉ちゃんも、負けてないと思う……けど……」

「バク転できないでしょ？」

「日本舞踊だったら、人に教えられるくらいだし、お琴も出来るし！」

「スクールアイドルに関係ない！」

「そんな事ないもん！ 必要な基礎は同じだって、果南ちゃんも言ってたもん！」

「でも、私の姉様の方が上！」

〈全く、姉の事になると強気なんだか弱気なんだか……〉

互いの姉のいいところを挙げ、どっちの方が優れているのか言い合う二人を見て苦笑するエックス。

それほど自分達の姉を大切に、そして誇りに思っている確固たる証拠だ。

「……やっぱり、聖良さんの事大好きなんだね？」

無口な印象の強かった理亜がここまでムキになるのは、ルビイと同じくらい自分の姉を慕っているから。

「あ……、当たり前でしょう!! アンタの方こそ何？ 普段気弱そうなくせに！」

「だって大好きだもん！ お姉ちゃんの事」

「ッ！」

はつきりと姉の事が大好きだとルビイは口にする。

真つ直ぐに姉への想いを語った彼女を見て、何かに気が付いたような表情になる理

亜。

「それでね、ルビィ、お姉ちゃんと話して分かったの。嬉しいんだってー！」
「なにが？」

「お姉ちゃんがいなくても、別々でも、頑張ってお姉ちゃんの力なしでルビィが何かできたら嬉しいんだって」

ダイヤはルビィの成長を楽しみ、喜んでくれている。

そしてそれと同じくらいに、心配もしてくれている。

「きつと、聖良さんもそうなんじゃないかな？」

「・・・・・・・・そんなの分かっている・・・・・・・・」

理亞の瞳の端に涙が滲む。

「だから頑張ってきた。姉様がいなくても一人で出来るって、安心してって・・・・・・・・」
なのに・・・・・・・・最後の大会だったのに・・・・・・・・」

自身の失敗のせいで安心させるどころか、余計に心配を掛けさせてしまった。

さらに Saint Snowとして歌う機会すらも失い、その失敗を取り返すことすらも出来なくなった。

「じゃあ、最後にしなければいいんじゃないかな?！」

自身の後悔や自責を吐露する理亞に、ルビィはそう力強く言った。

理亞の肩を抱き、しっかりと顔を合わせる。

「えへへっ！」

「えっ？　ちよ……ちよつと！」

その手を引くようにして、前へと駆け出す。

へ……ダイヤが見たら、きつと喜ぶんだろっな

そこに気弱なルビイの姿はない。

もう彼女は誰かの手を引いて前に進めるまでに大きくなっているのだ。

へ……君はもう、立派に一人で進んでいるよ

やがて二人の前には、一本のクリスマスツリーが強く暖かな光で夜の帳を切り裂いていた。

「歌いませんか？　一緒に曲を！」

最後のチャンス逃してしまったなら、それを最後にしなければいい。

「お姉ちゃんに送る曲を作って、この光の中で、もう一度！」

百八話 ちんちくりん決起会

「ライブ？」

「()で？」

「・・・うん・・・」

同じ一年生である花丸と善子に、昨夜自分が提案したライブの計画を伝えるルビィ。

『まあ、色々あつてな。話だけでも聞いてやってくれないか？』

ルビィと理亞。二人の想いを知っているエックスも同調する。

「どうしてそう思ったずら？」

「理亞ちゃんと一緒にライブをやつて・・・見せたいの。聖良さんと・・・お姉ちゃ

んに・・・」

「出来るの？」

手に持っていた焼き鳥を口に運びながら問いを連ねてくる二人に、ちゃんと自分の意思を伝えるべく口を動かす。

「分からないけど……でも、もしできたら、理亞ちゃん元気になってくれるかなって……」

「準備は？」

「それは……」

漠然としたやりたいという気持ちがあるだけで、それ以外は何一つ揃っていないので言い淀むしかない。

「あ……面白そうずらー！」

「そうそ……え？」

何か考えるような仕草の後にまさかの食いつきを見せた花丸に思わず驚く善子。

「まるも協力するずら」

「本当!? じゃあこの後、理亞ちゃんと会う事になってるんだけど、一緒に来てくれる？」

「うん！」

理亞を励ましてあげたい。その想いを汲み取り、協力を申し出てくれたのだろう。

思えばずっとルビイの背中を押してきたのだ。こんな時に否を突き出す彼女ではない。

「善子ちゃんも勿論、行くずらね？」

「クツクツ……そんな時間、有るわけなからう……」

花丸とは反対に、善子は拒否の意思を表明する。

いい子だがいまいち素直になり切れない彼女の事だ。勿論協力の意思はあるのだが、それを墮天使の裏に隠してしまっているのだろう。

「リトルデーモンを探すという崇高な使命があるのだ。だがどうしてもというなら……」

いつもならここらで花丸が「馬鹿な事やってないで行くぞらよー」などと引き摺っていくところだが、今日の花丸はそこまで優しくなかった。

「さ、行くぞらよー」

『おーい。善子ー』

「本当はそんな遊戯に付き合っている暇などない。だが我と契約を交わせし、他ならぬ上級リトルデーモンの頼みだというのなら聞いてやらんことも……」

『善子ー、聞いてるかー?』

「ああもううっさいわね！ 人がせつかく協力してあげよう——」

『もう二人共行ってしまったぞ』

一応残つてあげたエックスの言葉で我に返り室内を見渡した善子の視界には、もうルビイと花丸の姿は映り込まない。

ここでようやく、善子は置いて行かれた事に気が付いた。

「……あああああゝゝゝ！ 待つてよおお！ てかヨハネエエエエエエ！！」

『おい待て善子！ 携帯忘れてるぞ！ ていうか私も連れていけええええ！！』

「……………」

「……………」

待ち合わせ場所である、昨日も訪れたハンバーガーショップ。

約束の時間は破っていないのに、ストローを加えた理亜は不機嫌そうに飲み物を泡立てていた。

「……………二人も来るなんて聞いてない」

へ……………気の難しい奴だな……………

気を損ねたせいかな不貞腐れてしまった彼女を見て、善子のポケットからひよこつとカメラのレンズを覗かせて様子を伺うエックスも首を捻る。

「ああでも、花丸ちゃんもよしk．．．ヨハネちゃんもとても頼りになるから」

「関係ない!．．．私、もともとみんなまでワイワイとか好きじゃないし．．．」

どうやらルビィ以外にも人が来ている事が不満らしい。逆に言えば、ルビィにはある程度心を開いてくれているという事だ。

「それを言ったら、まるもそうずら。善子ちゃんに至っては、更に孤独ずら」

「ヨハネ! 何さらつと酷いこと言ってるのよ」

飄々とした顔で毒づく花丸に善子がツツコみ、理亜は訝し気に眉を顰める。

「ずら?」

「はっ．．．! これは．．．おらの口癖と言うか．．．」

「おら．．．?」

「違うずら．．．まる．．．」

A q o u r s メンバーが既に慣れてしまっているだけで、花丸の口癖というのは存外に珍しい。

聞き馴染みのない理亜ならば不思議に思っても無理はない。

「ずら丸はこれが口癖なの。だからルビィと一緒に図書室に籠ってただから」

先程の仕返しか、善子が説明をすると同時にあまり誇らしくない花丸の過去を晒す。「そうなの？」

「ずら……今年春まではずっと、そんな感じだったけど……」

出来れば封印しておきたかった黒歴史に食いつかれ、縮こまってそう答える花丸。

「私も……学校では、結構そうだから……」

一転して理亜の態度が柔らかくなり、恥じらいながらもそんな事まで教えてくれる。

「……類は友を呼ぶというやつか……？ 女子というのはよく分からないな……」

互いに全く誇れない過去もしくは現在を晒しあったことで共感を覚えたのか、理亜の表情が朗らかになったのを見たエックスはそんな失礼な事を考えるのであった。

「私は負けない。何があっても……」

「愛する人とあの頂に立って、必ずや勝利の雄叫びを上げようぞ……」

少女の声に乗って店内に溶け込む、言ってしまうと痛い詩の内容に、周りで聞いてい

た店員や他のお客さん達までもが恥ずかしそうな顔になっていく。

「……………なんだ？　これは……………」

音楽に関してはズブの素人であるエックスが聞いていても酷いと感じるその歌詞は、例のライブで披露する歌として理亞が考案したものだった。

「だから言ったでしょ！！　詞も曲もほとんど姉様が作ってるって！」

「まだ具体的な事は何も言っていないけど……………」

決して頭が悪そうには見えない理亞でこうなのだ。日頃 A q o u r s の曲を作詞しているらしい千歌も馬鹿にできたものではない。

「しっかし、何の捻りもないわよね」

「何？　文句あるの？」

「善子ちゃんも前に似たような歌詞書いてたぞらね？」

「う……………」

遠慮なく口にした一言に即座にツッコまれ、同じような作詞センスの善子も黙るしかなかった。

「でも、歌いたいイメージは大体分かったぞら！」

「ルビイも手伝うから、一緒に作ってみよう？」

ルビイ達ができる気を見せる反面、何故か理亞は不安そうな顔を向けてくる。

「あなた達、ラブライブの決勝があるんでしょ？ 歌作ってる暇なんてあるの？」

「それは……」

「ルビイちゃんは、どうしても理亞ちゃんの手伝いをしたいぞら！」

事実その通りなので言葉に詰まるルビイの隣で花丸が立ちあがり、柔和な笑みで代わりに返答をする。

「理亞ちゃんや、お姉ちゃんと話してて思ったの。私達だけでも、出来るってところを見せなくちゃいけないんじゃないかなって……安心して卒業できないんじゃないかなって！」

そんな彼女に背中を押されたのか、ルビイも一変して強気な姿勢を見せた。

その時だった。

『連絡です』

「ふあっ!!」

「げえっ!! リリーだ！」

突如エックスが無機質な声を発し、彼の事が理亞にバレる事を危惧したルビイと花丸、その連絡の送り主を見た善子が短い悲鳴に似た何かをあげる。

「どこにいるの？ もう帰る準備しなきゃダメよ……って」

『連絡です』

直後怒りマークと共に『リリーって言わないで』と届き、更に驚愕の表情でのけ反る善子。

「っ!! 思考を読んだだどっ・・・・・・・・!!」

「もうそんな時間!!」

「どうするの?」

今沼津に帰ってしまつては、作詞はおろかライブそのものが出来なくなつてしまふ。諦めと落胆が舞い降りかけたその時、ふと花丸が何か思いついたような顔で提案する。

「今は冬休みすら」

「だから?」

「だから——」

「はああっ!! 残るっ!!」

エックスからの連絡を受けて驚愕の声を上げたのは仙道陸と大空大地。

何でも一年生三人組が北海道に残ることになったため、付き添いでエックスも残ると言い出したのだ。

「ちよ……ちよつとエックス?! そっちが戻ってこないと俺帰れないんだけど!!」
『ああ、大地か。別に無理に私と共に居る必要は無いのだし、君だけゼロに送ってもらったらどうなんだ?』

「もうこっちの世界に二日もいるんだよ? 一人で戻ったらじゃあもつと早く帰って来れただろって言われるし、もうそれで始末書を書かされるのは御免だからね」

「………本当にウチの馬鹿が申し訳ない」

防衛隊というちゃんとした仕事に就いている大地だからこそ、ゼロの行動が迷惑を被りまくっている。

同じく防衛隊所属のヒカルとショウが来たときはちゃんと断ってからの行動らしいが、大地に関してはゼロが無理矢理連れてきているのだ。何も説明していないと言っていたし、恐らく彼の所属しているX i oとやらもまだ状況が掴めていないだろう。

『まーとにかく、こっちの案件が終わるまでは私も戻れない。一応それを伝えておこうと思つてな』

「一応つて……俺にとつては結構重要な案件なんだけど……」

『ああ、それともう一つ。私にも何なんだかよく分からない現象が起きてな』

声のトーンを下げ、エックスは次の話題を切り出してくる。

『……何があつた？』

少なくとも普通ではないその雰囲気、ゼロも聞き入る構えに移る。

『まだ私以外は気付いていないのだが、Saint Snowの妹の方……鹿角理亞だったか。彼女の胸が赤い光の球のように輝いてな』

『何……!!』

胸に宿った光の球。心当たりがあり過ぎるその響きに陸もゼロも緊張感をその身に走らせた。

「……なあゼロ。それって……」

『……ああ、間違いなくリトルスターだろうな……』

かつてダークネスファイブがこの地球に散布したカレラン分子が、宇宙を循環する幼年期放射を集めて生成された光の塊。それがリトルスターだ。

リトルスターを発現する事で付与される能力は個人によるが、総じて共通する事は怪獣を呼び寄せるという事。

理亞がリトルスターを発現したとなると、彼女の姉である聖良や、向こうに残る一年生三人が危険だ。

『……この状況においては、お前が向こうに残ってくれるのはありがたいな。リ

トルスターを狙う宇宙人が襲ってくる可能性もないとは言えないから、警戒は怠るなよ』

『ああ、分かった』

通話の切れた携帯をしまい、久々の発現となる理亜のリトルスターについて思考を巡らせる。

「・・・発言の理由、もしかしなくてもライブでの失敗が原因だよな・・・」

『だろうな。明確にアイツの気持ち分かる訳じゃねーが・・・あれが起因しているのは間違いない』

リトルスターは幼年期放射とエネルギーと宿主の強い想いがあって初めて輝く。

理亜にもなにか、ライブの失敗で抱いた何かがあるはずなのだ。

『こっちにいる限りは分からない事だらけだな・・・とりあえず、エックスからの続報を待とう』

「ここが理亜ちゃんの部屋？」

上級生達にもきちんと許可をもらい（ダイヤは微妙だが）、無事北海道に残れることになったAqours一年生ズ。

今はこつちにいる間お世話になる鹿角家、その一室である理亞の部屋に招かれたところだ。

「好きに使っていいけど、勝手にあちこち——」

「うわあ……綺麗ずらあ！」

言った直後から棚に飾ってあったスノードームを手取る花丸。それを即座に奪い返した理亞は眉をキツと吊り上げながら荒げた口調で言い放った。

「勝手に触らないで！」

『それは雪の結晶か？』

「ええ。そ……」

普通に返答しようとした理亞だが、明らかに声音がここにいる誰のものでもない事に気が付き固まる。

『ん？ おーい。どうしたんだ君達』

ルビイ、花丸、善子の三人も硬直してしまった事で完全に場が凍り付き、こうなった犯人であるエックスの声だけが部屋の中で反響する。

何を思ったのかこのウルトラマン、身を響めるところか理亞の前で、しかも彼女に対

して質問を投げかけたのだ。

「え？ え？ 何コレ．．．．．？」

「ちよ．．．ちよつとエックス！ 何アンタ堂々と喋ってんのよ!! バレたらマズいんじゃないかったの?!」

しばらくこつちにいるのだからその内隠すのにも限界が来るとは思っていたが、こんな躊躇もなしに正体明かしていく奴がどこにいるのだろうか。

『ん？ ああ、いや。どうせバレてしまうのならもう今の内に曝け出した方がいいんじゃないかと思つてな』

「だとしても一言ぐらいまる達に声掛けしてからにして欲しかったぞらー!」

「．．．．し、心臓に悪い．．．」

「え．．．．つと？ 何なのそれ．．．？」

ただ一人状況が飲み込めていない理亞が目を白黒させながらエックスの宿っている端末とルビイ達を交互に見やる。

『すまない。急な事で驚かせてしまったようだな』

そんな彼女に、エックスは相変わらずのマイペースっぷりで自身の名と正体を打ち明けた。

百九話 秘めたる力

『地球に向かいたい?』

『ああ、仙道陸の件だが、直接この目で見て調べたくてな。そちらもタロウから聞いているだろう?』

光の国。

宇宙警備隊本部のある建物の一角で向き合うゾフィーとヒカリ。そしてそれを少し離れた場所で眺めているのはメビウスだ。

『・・・ベリアル力の件か……。タロウやオーブからの情報だけでは足りないのか?』
『そういう訳ではないんだが……。俺はこの目で見るのが一番だと判断した。それと科学者としての勘だ』

『そうか……。』

しばし何かを考察するような素振りを見せた後、ゾフィーは首を縦に振った。

『分かった。科学の事は専門家に任せよう。大隊長には私の方から報告しておく』

『感謝する』

『メビウス。君もついて行ってやれ』

『は．．．はい！』

宇宙警備隊長からの命に、メビウスは若干声を上擦らせる。

なにせここに居るのは二万歳を超えているゾフィーとヒカリ。六千八百歳のメビウスとしては肩身が狭いのだ。

〈それにしても．．．．．地球か．．．〉

地球には思い入れが深い。

初めての任務を受けて飛来し、時に悲しみ、時に挫け、最高の仲間達と絆を紡いだ。

これから向かう地球は自分を成長させてくれた地球とはまた別だが、それでも身が引き締まるのを感じる。

〈今の君はちゃんと、仲間の顔が見えているかい？．．．．．ゼロ〉

かつてとある事件が起こったプラズマスパークタワーを見上げながら。メビウスは数少ない後輩であるゼロの過去を思い浮かべるのであった。

「はあ!! ちょ………ウルトラマンってどういう事!!」

エックスの自己紹介とカミングアウトに、普段の物静かさなど塵ほども消え去った理亜が多いに錯乱する。

『そんなに驚く事もないだろう? さほど珍しい存在でもあるまいし』

「どういう判断基準よ……」

善子にツツコまれ首を捻る。

『? なにかおかしいことでも言ったか?』

言った通り宇宙全体から見ればウルトラマンの名は知れている。

こつちの世界にもゼロというウルトラマンが飛来しているのだし、何より聖良が全く動じていなかったたので妹である理亜も大丈夫かと思っただが………どうやらエックスの見当違いだったらしい。

『あ………どうやら混乱させてしまったようだな。すまない』

自分に少しでも非があるならまず謝罪。宇宙のバランスを保つウルトラマンがこんな事でいざこざを起こしては顔が立たない。

とりあえず今は彼女が落ち着くまで待ち、その後事情を説明するでしょう。

——数分後。

『で、そろそろいいか?』

「う………うん………」

ルビィと花丸の協力もあつて理亞の混乱も一旦は収まったので、気を取り直して話をするとする。

『改めて自己紹介するが、私はウルトラマンエックス。とある事情で今は彼女達と共に行動している』

「……は、はあ……」

目を丸くして携帯端末を凝視する理亞というのも、これまでとはまた違った印象を抱かせる。

物静かで刺々しい雰囲気は隠れがちだが、彼女だつて普通の女の子なのだ。

「………事情つて、何……?」

『ゼロは君も知っているだろう? そのゼロがA q o u r s がこつちにいる間は付いてやって欲しいと頼んできたんだ。ゼロには借りが多くてな、断るに断れなかつた』

まあ、エックスとしてもこつちで得るものはあつたので無駄だったというつもりはないが。

「・・・頼まれたって・・・あなた達、ウルトラマンとどんな関係なの？」

『ゼロが陸と一体化s——』

「ちよつと色々あつたのよ！」

そこも説明を入れようとしたところが善子に遮られ、そういえばA q o u r s 以外でゼロと陸の関係を知っているのは聖良だけだった事をようやく思い出すエックス。

これならばエックスを見た時の反応が聖良と理亞で違かつたことも領ける。これまでウルトラマンに触れた事が無かつたのだから驚いて当り前だ。

『んっん！ 詳しくは大つびらには言えないんだ。すまない』

「・・・まあ、別にいいけど・・・」

なら今陸とゼロの事を話すのはマズいだろうと判断して、この場では誤魔化しておく。理亞自身も納得はしてないがある程度察してはくれたのでまあいいだろう。

『とりあえず、私の事は内緒にしてくれると助かる。聖良の方はもう知っているから話しても問題ないぞ』

「姉様・・・そんな様子は全然感じなかつたけど・・・」

『彼女は肝が太そうだからな』

何が起きてても気品を崩さずに対処できそうな、そんなオーラを感じた。差し詰め無敵キャラとでも称したところか。

『それで話は戻すが、君の抱えているそのオブジェは雪の結晶なのか？』

「まだ気になってたのアンタ!!」

「しかもこのタイミングで……、マイペースすぎるすら……」

そんな事を言われても気になるものは気になるのだから仕方ない。

答えを求めて端末の中から理亞を見上げると、彼女は物憂げな眼をして語り 시작했다。

「……そう。昔、姉様と雪の日に、一緒に探したの。二人でスクールアイドルになるって決めた。あの瞬間から、雪の結晶を……Saint Snowのシンボルにしようって……」

理亞の瞳に苦渋が滲む。

鹿角姉妹にとってはその日に見た雪の結晶を、二人の絆を形として残したものがSaint Snowなのかもしれない。

「……それなのに……最後のラブライブだったのに……」

自分達の原点を思い返した事で自身の失敗がフラッシュバックしたのか、後悔に震える声音が部屋の中に広がる。

聞いたのは失敗だったかとエックスが思ったその時、

「綺麗だね」

それを振り払ったのは、ルビイの零したその言葉だった。

「当たり前でしょ！ 姉様が見つつけてきたんだから！ ほら、あなたの姉より上でしょ？」

「つ……！ そんな事ないもん！ お姉ちゃんはルビイに似合う服すぐ見つけてくれるもん！」

「そんなの姉様だったらもつ——と可愛いの見つけてくれる！」

「そんなの——！」

『まだ続いてたんだなその論争……』

第二次姉自慢大会の勃発に呆れた溜息をつくエックス。

だが第一次の様子を知らない花丸と善子は、意外そうな顔をして理亞と口論を繰り広げるルビイを見やっていた。

「こんな強気なルビイちゃん……」

「始めて見た……！」

エックスとは違いルビイの事を良く知る二人でも驚くほどムキになるルビイ。

やはり彼女はダイヤ——大好きなもののことになると普段とは違う顔を覗かせる。

「ほんと、姉の事になるとムキになるんだから……」

「それは……お互い様だよ」

「そうかも」

言い合った後でも微笑み合うことが出来るのは、互いに互いの心中を知っているから。

微かながらも、そこには確かな絆が芽生えつつあった。

「皆さん………本当に戻らなくてよかったんですか？」

ノックの音と一緒にドアが開かれ、理亞と同じく店の制服に身を包んだ聖良がそう訪ねてくる。

「あ、はい」

「他のメンバーに頼まれて、どうしてもこっちでやっておかなきゃならないことがあるぞらー！」

「ああ、そうですか」

花丸の誤魔化しの後、善子が一步前に踏み出し、綺麗に腰を九十度曲げて頭を下げる。

「こちらこそ、急に押しかけてきてしまって……すみません」

「いえいえ。うちは全然大丈夫なんですけど。では……ご飯が出来たら呼びますね」

年下相手にも関わらず丁寧に一礼してから聖良は去っていく。

その後の室内を支配していたのは、豹変した善子に向ける好奇と畏怖の感情だった。

「……………何とか誤魔化せたわね……………」

「善子ちゃんが……………」

「ちゃんと会話してる……………」

『……………そんなにひどいのか日頃……………』

まあでも確かに、函館で見た彼女しか知らないエックスでも変な奴だとは思わされたぐらいだし、普段はもつと墮天しているのだろう。

「ヨハネ！ アンタ達に任せておけないから仕方なくよ！ 仕方なく！……………墮天使はちゃんと世に溶け込む術を知ってるのだ！」

そんな彼女でも、墮天使の皮を剥けば十分現実的。名前の通り善い子なのだ。

「皆意外な一面があるすら」

「隠し持っている魔導力と言ってもらいたい！」

年相応の反応を見せる理亞。強気なルビィ。常識的な善子。

確かに第一印象からは考えにくい一面だろう。

「でも、そうかも！」

『ん？』

不意に二人の言葉を肯定するように声を上げたルビィに皆の瞳が向けられる。

「ルビィ最近思うの。お姉ちゃんや上級生から見れば頼りないかも知れないけど、隠さ

れた力が沢山あるのかもしれないって！」

『………隠された力か……』

パツと脳裏にとある青年の顔が浮かぶ。

彼も最初はなんだか頼りない印象だったが、エックスと共に戦いを重ねるうちに成長していった。その成長はゼロやギンガなどの先輩戦士にも認められているほどだ。

戦いの形こそ違えど、芯の部分には通ずるものがあるだろう。

『……うむ。誰の中にもある、可能性の蕾なんだろうな。君にもきつと咲かせられる』

「じゃ、決まりずらー！」

今度は花丸が何か閃いたように挙手。

『何がだ？』

問いかけるエックスに、彼女はピースサインを作つて答えた。

「歌のテーマずら」

一方内浦。

一年生ズがいなくとも練習をサボる訳には行かないのでいるメンバーのみで練習。

考えてみれば二年生と三年生だけの組み合わせというのも珍しい。

「まだ帰って来ないの？」

「さつきエックスから連絡があつたんですよ。もうしばらく残るって」

「はあああゝ……………」

駄菓子屋のベンチに腰掛けながら深い深い溜息をついた二人。妹のことが心配でならないダイヤと、いい加減帰らないと上司からのお咎めがとんでもないことになつてしまふ大地だ。

「まさか、本当に新たにグループを結成して……………」

「流石にないだろ……………」

それは帰りの飛行機の中で誕生したらしいルビイ達がA q o u r s を抜けて理亞と新しいグループを組もうとしているかもという益体のない妄想。

何でもこれで一悶着（ダイヤのみ）あつたらしいが……………なんなんだか。

「思いつきそうなのはあの墮天使ね！」

何故だか忌々し気にここにはいない善子を睨む梨子。そもそも人付き合いがあまり得意ではないあの三人がそんなこと考えるはずもないだろうに。

「大丈夫」

ひよこりとみかんを手にしたままの千歌が駄菓子屋の中から顔を出す。

「大丈夫だよ」

陸はエックス伝いでルビイ達に協力を要請されているので彼女達のやらんとしている事を知っているが、千歌はまだ聞かされていなかったので知っているはずがない。

「千歌ちゃん。この前何か知ってる感じだったけど」

「何か聞いているの？」

「聞いた訳じゃないよ……ただ、自分達だけで、何かやろうとしてるんじゃないかな？」

自身の髪と同じ色に染まった空を見上げて千歌はそう零す。

結論から言うとな彼女の言っている事は大体当たっている。忘れられがちだが彼女も姉が二人いる立派な妹。同じ妹として、ルビイ達や理亜の意図を悟っているのかもしれない。

「頑張るって決めたら……」

「次、負ないんだって……」

「これでこう……どようつ。」

「こうして……」

「だったら……」

「んじゃあ……」

その夜。

もうとつぷりと夜も更け、普段なら寝静まっている時間帯になっても、ルビイと理亞はライブで披露する曲の作詞を続けていた。

『……頑張っているな、二人共』

「……ええ。あんな楽しそうにしている理亞は久しぶりです。何を頑張っているのかは知りませんが」

その様子を部屋の外から見守る聖良と、彼女の携帯端末に入ったエックス。

既に睡魔の前に屈した善子と花丸は撃沈しているが、共に姉への想いを秘めた二人の妹は今だ眠る気配を見せない。

そして――、

「やったああああ—— ツ!!!」

嬉々とした二人の歓声が聞こえ、聖良は一層微笑ましそうに笑みを浮かべた。

彼女達が自分達にプレゼントする曲を作っというなどは思っても見ていないだろうが、それでも妹である理亞がルビイと共に喜びを分かち合っている事が何よりも嬉し
いようだ。

「・・・そういうえば、エックスさんは二人に混ざらなくていいんですか？ 理亞に正体は打ち明けたのでしょうか？」

『ああいやまあ・・・変に私が入るのもどうかと思っただな・・・はは・・・』
実はこれ真つ赤な嘘である。本当はロクに曲の事も知らない奴が口を出すなど言われ追い出されただけだ。

『君は声を掛けなくていいのか？』

変に勘繰りされてエックスがボ口を出し、二人の計画が聖良にバレてしまうというのは避けなくてはならない。

話題を逸らそうとひり出した問いを受けると、聖良はどこか悲し気な瞳で自分の妹を見やった。

「・・・私も・・・邪魔したら悪いかなって・・・」

喜びとは別の何かに震えた声音が静かに廊下の中に消えていく。

『・・・聖良——』

「・・・私も、そろそろ部屋に向かいましょうか。もう夜も遅いですし」
敏感にそれを感じ取ったエックスが何かを言い切るより早く、聖良は笑いあう理亞とルビィから視線を外して自室へと向かった。

——彼女の胸に光るものが宿ったことには、まだ誰も気が付いてはいなかった。

『・・・・・・・・あん・・・・・・・・？』

極寒の世界と化した夜の函館に潜伏していた氷結のグロツケンが低く唸る。

リトルスターを発現した少女の特定は完了し、あとは隙を見て母船へ連れ去るだけだった。

だが、研ぎ澄まされた鋭敏な感覚はまた別の力が発芽しようとしている事を教えてくれる。

『・・・・・・・・この感じ・・・・・・・・リトルスター保持者は一人じゃねえな・・・・・・・・』

辺りの気温が更に下がり、凍り付いた大気中の水分が雪の結晶となって吹き荒れる。

『ケケ．．．．、面白そうじゃねえかよ．．．．ヒヤハハハハハハハハハハハハハハハハ』

視界すら定まらない猛吹雪の中、グロツケン は鮮血のように紅い双眸を夜闇の中に煌かせた。

百十話 その背中を押す者は

——ピリリリ!

「……んあ?」

時計の針が頂点に差し掛かろうとしている時間帯。

不意に携帯電話が着信音を鳴らし、そろそろ寝ようかとしていた陸は気だるげにそれを手に取る。

画面に表示されていたのは、鹿角聖良の名前。

「……もしもし?」

『……すみません仙道さん。こんな夜分遅くに』

呼びかけに返ってきたのは、どこか元気の無いようにも感じられる聖良の声音。

「どうかしました?」

『……いえ。ちよつと寝る前に誰かと話したい気分になりました。お時間よろしいですか?』

「ええ、構いませんけど」

たまにスクールアイドル関連で第三者の意見を求められる事はあったが、こうやってただ話すだけというのは初めてな気がする。

「どうですか？ ルビィ達」

予選の事については既に散々話したので触れないことにする。代わりに思いついた事と言えばもうこれしかなかった。

『ふふ。とても頑張っていますよ。理亞とも仲良くしてくれてるみたいですし』

彼女達が計画しているサプライズについてはまだバレていないようで何よりだ。陸も下手にボロを出さないようにしなければ。

「大体の事はエックスから聞いてましたけど、やつぱそつちから見ても楽しそうですか？ ルビィ達も、御宅の妹さんも」

『ええ。本当に………理亞があんな楽しそうに笑うのを見るのは、凄く久しぶりな気がします』

聖良らしからぬ弱々しい、張りのない声がスピーカーから聞こえる。

『少なくともあんな顔、私には向けてはくれないですから………』

理亞がルビィ達と打ち解けられた事に喜びと、それに伴う一抹の哀愁が電話越しに伝わってくる。

『ねえ、仙道さん。私は、ちゃんとあの子の姉として何かしてあげられているのでしょうか?』

不意に投げかけられたその質問は、姉としての自信を無くしているからこそその不安を孕んでいるようにも感じ取れた。

少しの間の後、聖良は次の言葉を重ねた。

『私をもっとしつかりしていれば、あのライブでの失敗も、理亜がスクールアイドルをやめるだなんて言い出すこともなかったと思うんです』

理亜が自身の失敗を悔やんでいたように、聖良も彼女なりに今回の事で悩んでいたのだろう。

それもすべて、妹の事を大切に思っているが故。

『……もしかしたら私は、あの子の足枷になっているんじゃないかって……』
「……そうっすかねえ……?」

欠伸を噛み殺しながら、決して声質が重くならないようにやんわりと聖良の考えを否定する。

「少なくとも俺は、聖良さんが妹さんの事を大切に思ってるのは知ってます」

「これまでに聖良が持ち掛けてきた相談には、必ずと言っていいほど理亜の名前が出てきていた。」

このフォーメーションで妹の魅力は発揮されているのか、妹の立ち位置に違和感はないか。

「アンタ、自分の事はそつちのけで妹の事はつか話してましたからね」

この人は本当に妹が、理亞と一緒にスクールアイドルをしているこの時間が大好きなんだと分かったのだ。

それこそ、どこぞのシスコンダイヤモンドに匹敵するほどに。

「……まだ知り合って一年も経ってない俺でもそこまで分かるんです。十何年も聖良さんと一緒にいるアイツが、その事を知らないはずないでしょ？」

『……そういう、ものなのでしょうか？』

「そういうもんですよ」

まあ、陸は別に兄弟とかがいる訳ではないのだが。それでもこれくらいは分かる。

「聖良さんがスクールアイドルとして重ねてきた努力も、姉としてずっと妹の事を大切に思ってた事も、俺が絶対否定させません。勿論、聖良さん自身にもですよ」

努力は人を裏切らないとはよく言ったものだが、陸は事実その通りだと思っている。結果が伴うかどうかはさておき、積み重ねた努力や想いは形を変えて帰って来る。

聖良の場合、それは理亞という妹からの敬慕だろうから。

「だから、胸張っていいと思いますよ」

偉そうに陸が言うような事でも無いのかもしれないが、聖良の努力や想いは紛れもない事実であり、本物だ。

それを自分自身で否定してしまうなど、彼女にはさせたくない。

『……貴方は、本当に不思議な人ですね』

「俺自身よく分かりませんが、よく言われます」

これでも結構常識はある方だとは思っているのだが、何故だか周りにいる皆は口を揃えてそう言ってくる。褒められているんだか罵倒されているんだか分からないのが困ったところだ。

『……でも私は、嫌いじゃないですよ？ 貴方のそういうところ』

「そりやどーも」

幾分か明るさの戻ってきた声を受け、陸もまた笑って返す。

そこからは静謐な沈黙が続き、電話を介して妙に熱っぽく感じる聖良の息遣いだけが聞こえてくる。

そんな静けさを打ち破ったのは、陸でも聖良でもない第三者——、

『……いい雰囲気なところを邪魔して悪いが……』

会話に割り込んできたのはウルトラマンエックス。ゼロに無理矢理北海道に向かわされたウルトラ戦士だ。

携帯電話の中に入り込めるのは知っていたが、通話に介入する事も可能らしい。

『聖良。理亞とルビィがあのまま寝落ちした。私が声掛けしても起きないから頼んでもいいか?』

『ああ、はい。了解しました』

曲が作り終わったという話はエックスから聞いていたが、その後疲れて眠ってしまつたらしい。

一人でも大丈夫だつてところを見せると言っていたのに、まだまだ子供っぽいようだ。

『仙道さん、こんな時間に付き合つて頂きありがとうございます。それでは——』

「あ、ちよつと待つてください。一つ言いたいことが」

『……? 何ですか?』

「さつき、妹の方にも聖良さんの気持ちは伝わってるって言いましたよね? 近々、それが分かると思いますよ。そんなじゃ、おやすみです」

そう言い残して通話を切り、ごろんとベッドに寝転ぶ。

『お前何人に手え出したら気が済むんだよ』

とりあえずゼロは無視し、ここしばらく会っていない三人の少女の顔を思い浮かべる。

「あとはお前等次第だぜ？　ちんちくりん共……」

『二人共顔色が悪いぞ』

ルビイと理亞が姉に送るライブを行う機会は、クリスマスの日に実施されるイベントでと決めていた。

そしてそこで歌うためには、そのイベントに相応しいかどうか、選考会に合格する事が求められるのだ。

「うう……ルビイ、知らない人と話すの苦手……」

「私だって……」

代表者は当然ルビイと理亞。

これから選考員の人たちと話さなければいけないというのに、二人共血の気の引いた顔で身体を強張らせていた。

『ガチガチになっているところを悪いが……そろそろ君達の番だ』

そうしている間にも刻一刻とその時間は迫ってきている。

だが緊張とプレッシャーに押し潰されている身体は言う事を聞いてくれず、椅子から離れてはくれない。

「姉様がいないのがこんなにも不安だなんて……」

理亞の震え声が更にルビイの煽る。

何もかもが重く感じ、心中に灯っていた炎が消えてしまいそうな感覚に陥ったその時、手の甲に触れた暖かな感覚に意識を引かれた。

「でもさ、自分達でやらなきゃ」

「全部意味がなくなるぞら」

花丸と善子の激励が染み入る。

これから大きな壁に挑む自分達。当然不安も感じるが、こんな時に背中を押してくれるのが仲間であり、友達だ。

『……そういえば、ルビイ。陸から伝言だ』

「え……？」

友達という時とはまた別の感情を与えてくれる者の名前に少し胸が高鳴るのを感じた。

『恐れに負けてやりたいことを見失わないように、悔いのない道を選べ。ダイヤに想いを伝えた時みたいにな……との事だ』

「つ………！」

かつて自分の背中を押した言葉が脳裏で反芻する。

そうだ。出来るか出来ないかじゃない。やりたいかどうかだ。

自分はこのライブで姉に、ダイヤに成長した姿を見せたいんだ。

「………先輩らしいぞら」

『それと、これは私の独り言だが………』

ルビイが表情を引き締めると、自身も何か言いたげにエックスが弁を続ける。

『君達に限らず、人とは何か恐ろしいものに直面した時、自分の殻に籠ってしまっ』

その言葉はルビイに限らず、理亜にも、花丸にも、善子にも。自分の世界に閉じこもってしまっていた者全てに向けられている気がした。

『そこから牙を剥き、自分だけの世界に閉じ籠る事は誰にだって出来る。だが、友と手を取り合い、恐れる心を乗り越えた者こそが未来を切り開き、明日へ歩み出せるんだ』

はつと理亜が目を見開き、この数日間共に協力してきた仲間——否友の顔を見る。

同じように顔を上げていたルビイは彼女と目が合うと、くすりと笑った。

『今の君達は一人じゃない。想いが、心が、深い絆でユナイトしている。自信をもって、思いの丈を伝えてこい』

「次の方、どうぞ」

狙いましたかのようなタイミングで自分達の番がくる。

だがもう足をここに縫い付けるものはない。友達や、特別な先輩に背中を押してもらえた。

そして何より、気持ちを再確認することが出来た。

「理亞ちゃん……」

「うん」

理亞と視線を交わし、同時に一步を踏み出す。

「行こう。私達だけで！」

「私達は、スクールアイドルをやっています！」

堂々と胸を張り、ルビィと理亞はハッキリと想いの全てを審査員にぶつける。

「今回は、このクリスマスイベントで、遠くに暮らす別々のグループが手を取り合い、新たな歌を歌おうと思っています！」

「大切に人に送る歌を！」

もうそこに姉の影に隠れていた弱々しい妹はいない、譲らぬ想いを胸に秘めた、頼もしい姿だ。

そしてそんな二人を見て、号泣する者もまた二人。

「何泣いてるずら〜．．．．．？」

「アンタの方が泣いてるわよ．．．．．！」

「ずらあ．．．．．」

『．．．何をそんなに泣いているんだ君達は．．．．．』

まるで母親にでもなったかのように泣きじやくる花丸と善子を呆れ気味に一瞥し、横に視線を流す。

『．．．．．？』

そこでエックスの目に留まったのは、自分達と同じく中の理亞達の様子を伺っている二人の少女。

へ．．．．．あの制服は．．．．．聖良と理亞の．．．．．

『……』という事なんですけど、ちよつとお願ひしてもいいですか?』

「ん、了解した」

ルビイからの報告と依頼を受け、快く承諾する陸。

「選考会、頑張つたな」

『えへへ……』

シンプルに賞賛の言葉を送ると、電話の向こう側から嬉しそうな声が帰つて来る。

『……理亞ちゃんと一緒だったし。花丸ちゃんと、善子ちゃんと、エックスさんにも励ましてもらえて……それに先輩が背中を押してくれたから……』

「別に俺は何もしてねーよ。勇気を出したのはお前自身だろ?」

ルビイは元々、好きなものに対してはどこまでも真つ直ぐに、いくらでも力を發揮できてる。

陸はあくまでもその力を信じたただけだ。

「……成功するつて信じてるぞ。ライブ」

『はい!』

元氣な返答を受け取り、通話を終了させてそのお願いとやらを実行しに移る。

『ルビイも中々ぶつ飛んだ行動に出るようになったよな』

「しまったゼロの病気が移ったか……」

『どういう意味だこの野郎!』

身体の共有者とじゃれ合いながら携帯を操作し、ダイヤを除いたAqours三年生のアドレスを表示する。

Aqoursでルビィ達の計画を知らないのは、サプライズを受ける側のダイヤのみだ。

「えっと……姉ちゃんでもいいか」

今の陸では鞠莉とまともに話せそうにならないので安全策に決定。

数回のコールの後、目的の果南に繋がる。

『もしもーし? 陸? どうかした?』

「ああ姉ちゃん? ルビィ達の件んですけど、ちょっと協力してくれない?」

『グウウウウ……?』

グロツケンが函館でリトルスター保持者を探る一方、彼と共に動いていたはずのデス

レ星雲人炎上のデスローグは母船にて魔導のスライと共にいた。

『ああ、これですか？』

スライの眼前に展開された空間ウィンドウ。デスローグはそこに映し出されているロボットに興味を示す。

『これが貴方を一度こちらに呼び戻した理由です。これは別宇宙で発見されたものを解析し、再現したものなのですが……まだ実戦データがなくてですね。それでも今回の件で戦闘になるような事があれば、試運転も兼ねてこちらを使って頂きたいのです』

『グウウウウ……』

分かった。といったように頷き、召喚装置を受け取ったデスローグは再度グロツケンの待つ函館へと向かって行った。

『ふう……』

静寂が舞い降りた空間の中で、スライは孤独に疲労の溜息をつく。

『やはりグロツケンがいないと、デスローグとコミュニケーションを取るのも一苦勞です。ねえ……』

百十一話 U n i t e

「二人共、選考会は頑張ったずらね」

無事選考会を終え、降り積もった雪で白く染め上げられた公園で一息つくルビイ達一行。

「クツクツクツ……貴様に、リトルデーモン十五の称号を授けよう」

「ありがと……」

善子に獲たところでなんの得もなさそうな肩書きを授けられ、理亞は細目で適当な返事を返す。

『しかし理亞。あんな事言つて本当に大丈夫だったのか？』

「仕方ないでしょ!! 絶対満員になるって言わないと合格できそうもなかったし……」

二人の提案が通った決定打は別に二つのスクールルアイドルグループが協力するからとかそういう事ではなく、理亞が放ったこの満員になるという言葉。

集客が肝となるイベントなのでそりゃ客の入りは重要だろうが、そんな確証もない事

を豪語して本当に良かったのやら。

「しようがないわね。いざとなったらリトルデーモンを召喚……」

「どこにいるずら〜?」

カレーまん片手に善子の益体のない妄想に茶々を入れる花丸。

「……ずら丸。アンタまた食べてるの? こっち来てから食べ過ぎじゃない?」

「美味しいずら〜」

『その食べ物には脂質などが多く含まれているし、何よりカロリーが高い。あまり食べ

過ぎると太 r ——』

「うるさいずら」

『うおおお!! ちょっと待てひっくり返すな何も見えない!』

食事に水を差すなどと言わんばかりに端末をひっくり返され、視界を暗転させられてしまおうエックス。

一応アイドルと言うからには体調管理も必要だろうし、気を使つての事だったというのに。

「クツクツクツ………フラグが完全に立ってるわよ……」

真つ暗でどんな顔をしているのかは分からないが、いつもの墮天使イズムで花丸の体重増加を暗喩する善子。

『……ん？』

ルビイに端末を持ってもらい、無事回復した視界で確認した彼女の姿に違和感を覚える。

『なあ、善子』

『うっさいわね！ スクールアイドルは体重管理も大事——』

『善子ちゃん』

『……その有り様では、お世辞にも体重管理が出来ているとは言い難いな……』
皆の視線が集中する善子は今、シーソーの端に立っている。

だが注目すべきはその反対側。そこに花丸とルビイが座っているという事だ。

それだというのに、シーソーが善子側に傾いているという事は……、

「フラグは、既に立っていたはずだよ……」

「……へ？」

余裕ぶっていた表情から一転、まさかの事実と対面した善子は口元を引き攣らせる。
「むしろ。見てて気が付いたんだけど……」

さらに追い打ちを掛けるように理亜がつついた彼女の頬は、ぽよん、という効果音が
相応しいほど見事に波打つ。

余分な肉がついている事は、火を見るよりも明らかだった。

『さあ今日は！ クリスマスフェスティバル出場者の……えつと……』
『Saint Aqours Snowです！』

『が、お越しくございましたー！』

「……ド直球すぎんだろネーミング……」

函館の地域ラジオでライブの宣伝をすると聞き付けたので、携帯を使ってその様子を音だけで伺う陸。

ちなみに北海道からの電波をどうして内浦で受信できているかと言うと、エックスの力である。詳しくは知らない。

『北の大地、結界と共に亡者が蘇りし……』

『ちゃんと告知するぞら』

『うん♪』

道内放送にも関わらずいつも通りな善子を諫めた後、花丸は告知時間というものもあるのでさっさと説明に移ろうとする。

『クリスマスライブにライブを行います』

『よろしくず……じゃなくて、よろしくお願いします……じゃなくて……』

ルビィに続こうとするが、どうしても口癖である「ずら」が抜けない。

『お願いしますずら♪．．．．．あ』

そのあたりでぶつんと通信が着れ、彼女達の出番と宣伝時間が終了した事を教えてくれる。

最後の最後まで口癖の訂正に時間を要し、肝心のライブの事をロクに話していない。慣れていないとはいえ、スクールアイドルとして人前で歌っている彼女達ならばそこまで難しい事でも無かったはず。

「．．．．．何も聞かなかった。いいな？」

『．．．お、おう．．．』

とりあえず、一瞬でも花丸に期待した自分が馬鹿だったという事にしておこう。

「はあ．．．．．失敗したずら．．．．．」

深い溜息を吐きながら放送局から退散する花丸。一時とは言え偶然聞いていた人達

にはいい笑いのネタを提供してしまった事だろう。

「大丈夫だよ、花丸ちゃん」

『別に告知に失敗してもライブが失敗するとは限らないからな……ん?』

微妙に慰めにならない言葉で慰めようとするエックスだが、不意に視界に入り込んだ人影に意識の注目が寄せられる。

へ……理亞。もしかしてあの二人、君の知り合いか?」

「え……?」

テレパシーで投げかけた問いに反応し、理亞と、それにつられた残りの三人も一斉に同じ方向へ視線をやる。

その先にいたのは選考会の時にエックスが見かけた、聖良や理亞と同じ制服に身を包んでいる少女。

「どなた?」

「……クラスメイト」

逃げるようにルビィの背後に隠れた理亞は、聞こえるか聞こえないかくらいの声でそう答える。

「どうして隠れるの?」

「だって、ほとんど話した事ないし……」

大人数でいるのが好きではないとか、人見知りするとかは本人の口から聞いてはいたが、学校でもそれは健在、むしろより顕著に発揮されてしまっているらしい。

であればこの反応も頷ける。話した事もないような。けどもお互いに認知している者と偶然会ってしまえば、どうしたらいいのか分からなくもなるだろう。

へ・・・学校での課題か。それは確かに、ルビィ達とだけじゃ厳しいかもな

理亞はまだ、完全に自分の世界の殻から抜け出しきれていないらしい。

ルビィ達とも仲良くなり、面接官に勇気を出して自身の想いをぶつけることも出来た。

けれども今回の相手は普段話すような事もないクラスメイト。互いに気まずいと認識している以上、どちらからか動くということは難しいかもしれない。

「Saint Snowのライブです！ 理亞ちゃん出ます！」

無言が続き、重くなっていた空気をぶち壊したのは、ふとルビィが言い放ったその一言だった。

それにより張りつめていた空気が緩和し、相手側二人の表情が幾ばくも朗らかなになる。

「理亞ちゃん・・・」

「私達も行ってもいいの？」

「えっ……うん……」

戸惑いながらも頷いた後、申し訳なきように目を伏せる理亞。

「それと……今更だけど、ラブライブ予選は……ごめんなさい」

緊張と罪悪感で委縮する彼女に、二人は柔らかな態度を保ったまま首を横に振る。

「いいんだよ。私達の方こそ、嫌われてるのかなって……。会場にも行けずに、

ゴメン」

「理亞ちゃんや聖良先輩が、皆の為に頑張ってたのは知ってるよ」

直接形にはせずとも、聖良と理亞のこれまでの努力や想いはきちんと学校の皆にも伝わっていたという事。

普段思っている言葉にして伝えない事だからこそ、直接口に出した気持ちというのはより強く心を打つ。

「Saint Snowは学校の……私達の誇りだよ！」

「クリスマスフェスティバル出るんですよ！ 皆も来たいって！ いいね！」

「……うん……！ うう……！」

図らずとも遠ざけていた級友からの言葉。自分達の、Saint Snowとして積み重ねてきた軌跡が無駄ではなかった事。今理亞が流す涙には、これら全てに対する感情が滲んでいるのだろう。

『……やれやれ……』

それにつられて瞳を潤わせるルビイを見て、エックスは感心半分呆れ半分の溜息をつく。

選考会の時の花丸と善子といい、今回のルビイといい、よくもまあ他人の成長や幸福などを涙を流して喜べるものだ。

だが決して悪い意味ではない。それが出来るのは互いの事を心から思い合い、深くその絆を繋げる、自分風に言うならばユナイトさせているからだ。

『この数日間君達は確実に大きく成長し、自分で進む道を切り開いた。……ダイヤや聖良がどんな顔をするのか楽しみだな』

「……はい。早く、お姉ちゃんに会いたいです」

「……あら」

その夜。函館山の麓と展望台を繋ぐロープウェイの中。

とある事情で再び函館の地へと赴いたダイヤは、隣立つ人影の正体に気が付いた。

「聖良さん？」

「あら、どうしてここに？」

同じくダイヤの存在に気が付いたらしい聖良は意外そうに眉を上げる。

「いえ、ちよつとここに来るように言われまして」

「えっ……？ 実は、私もです」

ダイヤがここに来たのは、陸、そして果南と鞠莉越しにルビイ達を函館まで迎えに来て欲しいという依頼を受けたから。

それでここ函館山に呼ばれるのはどうしてだろうとは思っていたが、聖良もいるとなるとより一層疑念は深まる。

「そちらでお世話になつていゝ間、ルビイがなにかご迷惑をお掛けしたりしていませんでしたでしょうか？」

その疑問は直接妹たちに会えばわかるとして、このまま頂上に着くまで無言のままというのも気まずい。

何か話題を振ろうと、とりあえずはここ数日間妹たちが何か粗相を仕出かしていないかの確認を取る。

「いえ、そんなことは全く。むしろ理亞とも仲良くして頂いたみたいで、姉としては嬉しい限りです」

「そうですか……」

とりあえずはほつと安堵し、窓枠の外で流れていく景色を見やる。

「……ルビイさん達。こちらにいる間は理亞と一緒にずつとあることを頑張っているみたいでしたよ」

「? 何をですの?」

「さあ? 私には分かりません。仙道さんは何か知っているようでしたが……」

「函館に残ると言い出した時、ルビイ達は理亞を元気づけるためだと言っていた。」

その頑張っている何かが、理亞を励ますために必要な事だったのだろうか。

「ここに呼び出された事も、何か関係しているのでしょうか?」

「……仙道さんもそれらしきことは言っていたので恐らくは……」

先日につながりもや聖良の口から陸の名前が出てくる。どうやらまた連絡を取っていたらしい。

何故だか心が穏やかではないが、そんなものを聖良に晒す訳にもいかなないので顔には出さない。

「まあ、とにかく頂上に着けばわかるで……」

そう言いかけたところで違和感を感じ、首を振ってその正体を探る。

「どうかしまし……?」

聖良もそれに気が付いたらしく、怪訝そうに眉を顰める。

「……何ですか？　これ……」

違和感の正体は異様な冷氣。

寒冷地である函館なのだから寒いのは当たり前だろうが、それでも暖房設備が備わっているこのロープウェイの中で凍えそうになる程の寒さを感じるのをおかしい。

『ヒエヒエヒエ……見つけたぜエ……！』

「っ!!」

突如二人しかいなかったはずの空間に第三者の声が入り込み、弾かれた様にその気配のする背後を振り向く。

そこにいたのは、全身が銀色の刃で構成された、確実に人間ではない存在で――、

『まずは……一人……!!』

剣呑な光が煌いたと思った次の瞬間には、ダイヤと聖良の意識は既に暗闇の中にあつた。

「クリスマス——」

「——プレゼントです」

頂上までやってきた自分達の姉に、それぞれ手作りの封筒を手渡すルビイと理亞。

「クリスマスイブに、ルビイと理亞ちゃん、ライブをやるの！」

「姉様に教わったこと……全部使って、私達だけで作ったステージで！」

「自分達だけの力でどこまでできるか！」

「見て欲しい！」

遂に自分達で計画し、準備したサプライズをお披露目する時が来た。

もう自分達はこれから、自分達自身の力だけで前に進める事を見せるため。それが今までずっと寄り添ってくれてきた姉への恩返しだと思っから。

「あの一……」

ルビイ達が目と目を重ね合う中、頭上から花丸の音がする。

視線を上げれば、そこには——、

「私のリトルデーモン達も見たいって！」

「誰がリトルデーモンよ！」

函館山の山頂に備わったデッキの上で今の光景を見守っていた、他のAqoursメンバーの姿が。

「千歌ちゃん！ 皆！」

「来てたの？」

「鞠莉ちゃんが飛行機代出してくれるから、一緒にトウギャザーだつて！」

「あつたり前デース！ こんなイベント見過ごすわけないよー！」

「流石太っ腹！」

「太いのは善子ちゃんずらく♪」

「うにやあああああああああ！！！」

笑いが場を包む中、ルビィと理亜は改めてダイヤと聖良と向き合い、自分の中に募った気持ち全てを伝える。

「姉様」

「お姉ちゃん」

「私達の作るライブ、見てくれますか?!」

「……………」

ダイヤに先んじ一歩前に歩み出た聖良が、妹の顔を見据え――

「……………やーだねエ！」

——その口元を醜悪に歪めた。

「えっ……?」

『っ……!!』

「ケケ……」

想定外の拒否に面々が驚愕を覚え、騒然とする中、腕を高々と振り上げる聖良。

『ルビィ! 理亜! 離れろ!!』

「遅せえんだよ!!」

「えっ……!」

エックスの警告を切り裂くように、氷の刃に変形した拳が理亜の胸元に迫る。

『理亜ア!』

「っ……!!」

防ぐ術もなく、無情にも氷刃がその身体を貫こうとしたその時、理亜の胸で赤い光が煌く。

「ぐおおおおっ……!!」

吹き出した炎が襲いかかり、聖良は怯んだように二、三步後退した。

だが少しも嫌な顔はせず、むしろ喜ぶように笑う。

「ケケ……、やっぱピンゴか……」

『貴様等……ダイヤと聖良ではないな……』

ここ数日触れてきた穏やかな雰囲気が一変したエックスが、理亞のコートの胸ポケットから敵意と警戒心を向ける。

「……………チツ……………」

「……………」

ニセ聖良が鈍い響きで舌を打ち、ずっと無言のままのニセダイヤが鋭い眼光でルビイと理亞を睨む。

「……………バレちゃあ仕方ねえなア！」

「グウウウウウ……………」

「ピギツ……………！」

刹那ひび割れるニセ聖良の顔と、解け落ちるニセダイヤの身体。

ルビイが短く悲鳴を上げた後、氷が砕け散るような音と共に莫大な冷気と熱気が山頂を駆け抜けた。

「何……………?」

そして次の瞬間、ルビイ達の視界に映ったものは――、

『ヒヤハハハハハハ!! 久しぶりだなア!!』

『グオオオオオオオオオオオオオオ!!』

巨大化した夜景の光を受けて燦然と輝く銀色の宇宙人と、夜空に咆哮を轟かせる骨肉反転の宇宙人。

かつてAqoursが遭遇したダークネスファイブが一角、否二角、氷結のグロツケンと炎上のデスローグは、呆然とする理亜を見下ろした。

『俺達の狙いはお前の持つリトルスターなんだよ。大人しくついて来てもらうぜエ・・・』

「姉様は・・・？」

『あん・・・？』

「姉様はどい？」

呼び出したはずの聖良とダイヤがグロツケンとデスローグになり替わっていたという事は、今二人にも何か危害が及んでいる可能性がある。

『・・・ヒエヒエヒエ・・・、こんな時でも姉様姉様・・・、美しい姉妹愛だねエ・・・』

そんな理亜の懸念を一蹴するグロツケン。

『ま、今のお前が知る必要はな——』

『貴様等は・・・』

その時、低い声が冷たい言葉を遮った。

『貴様等は分かっているのか？ ルビィと理亜が、どんな思いで今日この日のために努

力してきたかを!!』

カタカタと端末が震え、如何にエックスが憤りを感じているかが伝わってくる。

『んだテメエは? そいつ等が何を考えてたかなんて知ったこつちやねーよ。俺達が求めてるのはそいつのリトルスターだ』

それを飄々と受け流し、嘲笑を漏らすグロッケンは腕を広げて言い放つ。

『どうせ陛下が復活すればこんな星すぐに滅ぶんだ。一夜の思い出なんざ塵になる。全部無駄なんだよ』

『無駄な訳があるか!!』

荒々しい怒声と共に携帯端末から放たれる幾筋もの光の束。

周囲に衝撃波を迸らせた後それは一度端末に集約し、今度はX字の光を展開する。

そしてその中央から飛び出した、一体の巨人。

『イイイイイイイツ・・・サアアアアアアアアアツ!!』

『がはあああああつ・・・!!』

吹き飛ばされたグロッケン、着地した巨人によつて引き起こされた二つの地鳴りが函館の町に轟く。

自身のエネルギーで発生した余波を振り払った後、巨人は土煙を舞いあげたまま二体の宇宙人に対しファイティングポーズ取った。

『確かに思い出とは脆く儂く、簡単に掻き消えてしまうものなのかもしれない。だが、たとえ形としては存在し得なくなろうとも、その想いはいつまでも心に残る!』

『デメエは……!』

メカニカルな印象を受ける外見と、スリムかつマツシヴな体格。

そして何より胸部に備わったX字のカラータイマーが、その巨人がウルトラマンであることを示してくれる。

『それを否定し、剰えは踏み躪ろうとする貴様等を……私は決して許さん!!』

あれがウルトラマンエックス。

こちらにいる間ずっとルビイ達に寄り添っていた存在の、真の姿だ。

『行くぞ! 下衆ども——』

「え……!! っ(っどっ!!)」

飛び出そうとしたエックスに水を差した、慌てているような声。

『え?!』

「「「「「え?」」」」」」

『え?!』

『グウウウウ?』

敵味方問わず、同時に首を傾げる一同。

この声は理亜のもの。だがそれが発せられているのは明らかにエックスの方から。
「ちよ．．．！ どうなってるのコレ!!」

A q o u r s メンバーは似たようなものを何度も目にしている。これは陸とゼロが
一体化して戦っている時と同じだ。

つまりは、今理亜はエックスの中にいる訳で．．．．．、

『しまったあああああああああツ!! つい大地とユナイトする流れでええええツ

!!』

「「「」

!!!?????

百十二話 燃える銀氷

千歌達が再度函館へと向かって行ったその日の夜。

「そろそろクリスマスだねー」

「そうだねー」

「そうだねー、じゃねーよ。何ウチで実家感醸し出してんだお前等」

ナチュラルに我が家へと上がり込んできた宇宙人二人の頭を引っ叩く陸。

だがそんなツツコミを受けてもその宇宙人——カド——星人オウガとメトロン星人ルイズは気に掛けない様子で呑気に茶を啜っている。

「まあまあ、せっかく友達が来たんだからちよつとくらい歓迎する態度を見せてもいいんじゃない？」

「出てけ」

百歩譲ってルイズは友達認定してもいいとして、どうしてオウガが大親友みたいな顔を出来るのかが分からない。

「そんな」と言っ——。どうせA q o u r sの皆がまた函館に行っちゃって寂しかった

んだろ？」

「適当につまめるもの買ってきたから、男だけで盃を酌み交わして語り合うのもたまには悪くないだろう？ そりや可愛い女の子に比べればそっちの方がいいだろうけど」

「余計な気遣いだわ。あと未成年に酒飲まそうとすんじゃねえ」

「大丈夫。眼兔龍茶だから」

「言っちゃなんだがもつと他になかったのか？」

「なんだかんだ言っておいて結局追い出さず家の中に留まらせてしまう。」

まあ、実際ちよつと寂しくなつてたのは事実だし、ルイズの言う通りたまには野郎同士で集まるのも新鮮かもしれない。

もつとも、陸は普段野郎しかない男子校に通っているのだが、ついでに言うとなにはグレンとミラーナイトがいるから基本どこでも野郎と一緒にいるのだが。

「賑やかな友達だね・・・」

一連のやり取りを見ていた大地に、少し前に志満にされたものと同じ評価を下される。やはり傍から見るとそんな印象なのだろうか。

「皆クリスマスまで帰つて来ないんだろ？ 日頃あれだけ可愛い女の子に囲まれてるのにクリぼつちだなんて、君も奇妙な業を背負つてるねえ」

「当日向こうでライブやるんでしょ？ 私も現地入りして見てこようかな・・・」

「何でそこまで知ってんのお前等怖いんだけど」

今向こうにいる面子はともかく、陸とゼロ以外でその事を知っているのは大地くらいなはずなのだが・・・、恐るべし宇宙人のネットワークと言ったところか。

「それで？ どうなんだい？」

「どうって、何が？」

「鞠莉ちゃんの事に決まってるだろ？ 流石の君でも気付いていないって事はないだろうし、そこのところどう思ってるのか聞きたくてね」

こいつもか、と苦虫を噛み潰したような顔になる陸。どうしてどいつもこいつも人の恋路に敏感でいちいち食いついてくるのだろうか。

『あー、やめとけやめとけ。コイツ鈍感な上に色恋沙汰の話に耐性がなさ過ぎて話にならん』

「あはは、やっぱそうなんだ。薄々勘づいてはいたけどねー」

「だったら最初から聞くんじゃねえよ」

結局陸の辱められ損ではないだろうか。

「つたく・・・」

気を紛らわすために何か見ようと思い、テレビのリモコンのボタンを押す。

適当にバラエティー番組でもつけければこいつ等の気も逸れるだろうと思っていたの

だが、何故かどの局もニュースしかやっていない。

「あれ……？ どういうこ……」

「函館に未知のウルトラマンが出現、という文字を目にし、思わず硬直してしまう。

せわしなく口を動かすアナウンサーの横で流れている映像。それはダークネスファイブの構成員であるグロツケン、そしてデスローグと対峙する巨人だった。

「エックス!!」

勢いよく立ち上がった大地がその名を口にす。

そう、今函館に現れたのはウルトラマンエックス。寒いのを嫌がったゼロが使わせたサイバーウルトラマン。

それが今、陸達の宿敵とも言えるダークネスファイブのメンバーと睨み合っているのだから。

『アイツ等……鹿角理亜のリトルスターを狙ってきたな……』

「え？ え？ どうなってるの!!」

『ああ、えっとだな．．．!』

グロツケンを殴り飛ばしてからの着地という派手な登場をしておきながら、その直後に側頭部のヘッドフォンのような部分に手を当てて何やら慌てた様子を見せるエックス。

「エックス?! これなに?!」

『す．．．スマン。とにかくすぐ解除を．．．!』

『させると思ってたのか?』

『あたあつ?!』

周りを一切警戒せずに理亞に弁明するその隙だらけの姿は、戦闘中のこの状況ではどうぞ殴ってくださいと言っているようなもの。

先程の仕返しだと言わんばかりに後方から殴られ、エックスは俯せに転倒してしまふ。

『グオオオオオオオオ!!』

『あぢぢぢぢぢぢ!!』

続けデスローグの炎が頭部を燃やし、必死にそれを消しにかかる。

ゴロゴロと地面を転がって何とか鎮火した後、立ち上がったのは二体の敵を睨みつけた。

『貴様等・・・・・・・・聖良とダイヤはどこだ・・・・・・・・!』

『ケケケ・・・・・・・・この状況でまだ他人の心配する余裕がありやがるか・・・』

『いいから答えろ』

『へーへー。分かったよオ!』

グロツケンが右腕の刃を地表に突き立て、巨大な氷のオブジェクトを出現させる。

「あれてて・・・・・・・・」

見覚えのあるその造形に目を見張る理亞。あれは彼女の部屋に置いてあったスノードームの模様であった雪の結晶と同じ形だ。

そして、その中央には――、

「姉様!!」

「聖良さん!!」

同時に悲鳴に近い声を上げる理亞と千歌。

結晶の中心部には、気を失ってがくりと項垂れた聖良が磔にされていたのだ。

『ヒエヒエヒエ・・・・・・・・、聖なる雪の磔刑ってどこか? ヒヤハハハハ!!』

「そんな・・・・・・・・」

あの雪の結晶は、Saint Snowのシンボル。

グロツケンも狙っての事なのか。まるでSaint Snowの存在が、理亞の存在

が聖良を束縛しているとしてもどうかのような悪意がひしひしと伝わってくる。

『グウウウウ……』

「お姉ちゃん!!」

「ダイヤー!」

デスローグの背後で炎の柱が立ち昇る。

その炎が絡みつくように拘束していたのは、聖良と同じく気を失ったダイヤだった。

『グオオオオオオ』

『火の温度は調整してるから安心しろ……だってよ』

炎の色は真紅。ルビイの髪の色と同じ。

ルビイが、ダイヤの枷となつているとでも言いたげなものだ。

『どこまで彼女達の想いを愚弄したら気が済むのだ貴様等は!!』

『グオオオ!!』

エックスの放った矢尻型の光弾——エックススラッシュをデスローグの火球が相殺し、パラパラと火花が宙を舞う。

『もう我慢ならない……このまま行くぞ理亞!!』

「ええっ!!」

戸惑う理亞を尻目に、エックスは地響きを轟かせながら突撃を開始した。

『ヒヤハハ！ 来やがれ！』

『グオオオオオオオオ!!』

紅眼の宇宙人達が発生させた熱風と吹雪をバリアで防ぐ。壁を介して熱気と冷気が衝突し、その影響で白煙が生じる。

『エックスクロスチョップ!!』

『があっ……!!』

濛々と立ち込める白い世界から飛び出したエックスがエネルギーを集約させた右腕を振るい、その名の通りのX字になるよう手刀をグロツケンに叩き込む。

『イイイイイ……サッ!』

『グウ……!!』

立て続けに繰り出した回し蹴りはデスローグの扇状の巨大な右腕に阻まれてしまう。

『グオオオオオオオ!!』

『くっ……!!』

身体ごと足を振り払われ、宙に浮かび上がる。

そして今相手取っている連中は、それを見逃すような事はしない。

『喰らいやがれエ!!』

『ぐああああ……!!』

氷を纏って一回りも二回りも肥大化したグロツケンの刃がエックスの身体を強襲する。

『グオオオオオオオ!!』

『ぬうう……!』

何件もの建物を巻き添えにして吹き飛んだエックスは起き上がり様に反撃をしようとするが、迫りくる火球を防ぎきれずに再度地面と衝突する。

『フツ!』

牽制にエックススラッシュを飛ばし、グロツケンとデスローグが後退した隙に体勢を立て直す。

『『オオオオオオオ………!!』』

エックスが自身のエネルギーを高め、その余波で大地が震える。

それに反応したグロツケン達が迎撃体勢に入るよりも一歩早く、身体全体で左へ振りかぶって溜め込んだ力を一気に解き放つ。

『ザナダイウム光線!!』

——が、

『なっ………!!』

クロスした両腕から光線が伸びる事はなく、行き場を失ったエネルギーだけが周囲に

霧散していく。

『これは……、ッ!!』

接近してくる嫌な気配に顔を上げるが時すでに遅し。

『ハアアアアアアアアッ!!』

『グオオオオオオオオオッ!!』

『がッ……あああああああああああッ……!!』

冷気の嵐と灼熱の業火球がエックスの身体を飲み込み、次の瞬間に炸裂した大爆発の衝撃波が函館の街を疾走する。

『ぐ……うう……。理亞……無事か……?』

「え? ああ……。うん。何とも……」

『そうか……。よかつ……。がふつ……。』

カラータイマーを赤く点滅させ、エックスはがくりと膝を付く。

『……やはり……。ユナイトが不完全か……。』

ザナディウム光線は一体化している相手とのシンクロ、つまりユナイトが最高潮になった時のみに放てる技。

それが不発したという事は、エックスと理亞がユナイトしきれていないという事に他ならない。

『おいおいどうしたあ？ その程度かよウルトラマンエックス』

『ぐっ……』

心が完全にシンクロすれば、肉体の感覚も共有する事になる。

理亞に戦いのダメージが一体及んでいないのは、多少はエックスが請け負っているという事もあるが、ユナイトが不完全であるが故だ。

『どうすれば……』

一度ユナイトを解除して再び出陣するのも手だが、奴等がそんな隙を与えてくれるとは思えない。

八方塞がりな状況に追いつめられたエックスは、確かなる戦慄を禁じ得ないのだつた。

「ふ……んん……？」

耳を劈く爆音に、泥濘の中にあつた意識を引き戻される。

「(ハハ)は……？」

今自分がいる場所の高さにゾツとした後、腕と背中に冷たさを感じて確認してみれ

ば、今自分は氷の結晶に磔にされているという事が分かった。

『ヒヤハハハハ！』

「ッ!!」

どこかで聞いたような声に視線を流し、さらに衝撃を受ける。

闇夜に煌いていたのは、二体の巨大な怪物の双眸。こんな事、六年前に現れたあの赤い角の怪獣以来一回もなかったというのに。

『ぐ····うう····』

更にそれと対峙しているのは、ゼロとはまた違ったウルトラマン。

だがそのサイバー感のある外見と、赤く点滅するX字のカラータイマーには見覚えがある。

『グオオオオオオオ!!』

『があっ····!!』

「っ····!! エックスさん!!」

巨大な火球が直撃し、後方へ吹き飛んだ巨人を見て思わずその名前を叫んでしまう聖良。

『····!! 聖良!!』

「姉様!」

だがエックスに対する心配は、全く別の衝撃によって上塗りされる事となる。自身の叫びに反応したエックスの中から聞こえたのは、紛れもない妹の声。

「え．．．？ 理亞．．．．．？」

「理亞．．．！！ 理亞なの！！」

「姉様．．．よかった．．．」

目を覚まし、エックスの中にいる自分に呼びかける姉の姿を見て理亞はほっと安堵する。

「どうしてそんなところに．．．？」

『すまない。私が巻き込んでしまっただな．．．．．』

ウルトラマンの威厳もなしに、エックスは事情を説明すると共に謝罪する。

そして、そんな中接近してくる銀色の影。

『呑気におしやべりたあまだまだ余裕だな！！』

『ぐあああ！』

「理亞！」

強烈な刺突を叩き込まれた衝撃で巨人が再度倒れ込み、聖良の悲鳴に近い声が響く。
『結局何しに来たんだオメーはよお』

ぐりぐりとエックスを踏みつけ、嘲りの笑いを見せるグロツケン。

もう既に勝利を確信し、敵を罵り甚振る姿勢に入っている事は見る者全員が理解できていた。

『そーいや、今お前の中にはリトルスター保持者がいるんだっただけか……。丁度いいな』

そう言うのと右腕に冷気を集約し始め、先程と同じように巨大な氷の刃を作り出す。

『鹿角理亜もろとも、お前の身体を氷漬けにしてやんよ』

「っ……。やめてください!」

いざ腕を振り下ろさんとしたグロツケンを聖良が制止する。

「私はどうなろうと構いません! でも理亜には——」

『馬鹿な事を言うな!』

そしてそんな聖良を、エックスが一喝する。

『君の妹が失意から立ち上がり、壁を乗り越えようとしているの……。姉である君が諦めてしまつてどうする!!』

『ぎゃーッ……。!』

立ちあがり様に繰り出した回し蹴りで冷気を退け、流れるような動作で連発したエックスラッシュが立て続けに炸裂。

『理亞。君の願いはなんだ？』

「え．．．？」

唐突な質問に目を丸くする理亞。

『もう一度口にしてみてくれ。どうして君はルビイの申し出を受け入れ、ライブをやろうと思ったのかを』

「それは．．．．．姉様に一人でも大丈夫だって、安心してもらうため．．．」

『そうだ。私は君達のその美しい愛に感銘を受け、協力をしようと思った。だから今度は、君が私の願いを叶えるために協力してくれないか？』

「．．．．．願い？」

『ああ、私の願いは』

しっかりと地面を踏みしめ、勇ましく構えを取ったエックスの願い。それは。

『君達の願いを、成就させることだ』

「っ．．．！」

その言葉に目を見開いた理亞の脳裏を過ったのは、今日この日までに重ねてきた努力。

エックスにルビィ。花丸や善子という仲間と一緒にやってきた事。

『……ゼロ達が到着するまでの少しの間でいい。共に戦おう。私達の願いの為に！』

「……………うん」

エックスのカラータイマーが黄色の光を放つ。

最高潮、とまではいかないが、二人の心が重なった瞬間だ。

『シャアア！』

地表を蹴り飛ばし、エックスは猛然と二体の宇宙人に迫る。

『グウウウウ！』

『フッ！』

殺到する攻撃を側転で回避し、一気に距離を詰めては渾身の力を込めた拳を突き出す。

『セエエイヤ!!』

『ウウウウウウ……!』

威力の上がった一撃を貰い悶えるデスローグ。

『サアア！ イイイイイツ……クサ!!』

腕を取るとそのまま背負い投げ。更にマウントポジションを取り、鋭いチョップを何発もその骨のような身体に叩きこむ。

『チィ……こんにやろ!!』

『そう何度も……喰らってたまるか!』

『うおおおお!!』

グロツケンの二度目の刺突を今度こそ受け止め、その勢いを利用した巴投げで後方へと放り投げた。

『凍りつけえ!!』

即座に体勢を整えた氷の悪魔の口から吹き荒ぶ冷凍光線。だがエックスは回避行動に移らず、むしろ迎え撃つ構えに入った。

身体を振りかぶり、エネルギーを増幅させていく。

『オオオオオ……』

もう先程とは違う、エックスと理亜の心は重なった。

今ならば、撃てる。

『ザナディウム光線!!』

X字に交差した腕から伸びた光線が極寒の冷気と衝突し、激しい衝撃が大気を震わせる。

始めは拮抗していた両者の力は、徐々に釣り合いが崩れていく。そして、

『がはああああ……ッ!!』

押し合いを制したのは——ザナディウム光線だった。

咄嗟に両腕を盾に防御姿勢に入るも、威力を殺しきれずに吹っ飛ぶグロツケン。

『ケケ……本領発揮ってか……』

ようやく戦況が優勢に傾く。人々がそう思ったのも一瞬だった。

『グオオオオオ!!』

『うがあッ……!』

流石に二対一では向こうに分がある。グロツケンを相手取っている内にデスローグはダウン復帰していた。

ガラ空きの横腹に叩きつけられた扇状の腕が身体を跳ね飛ばし、エックスはA q o u r sメンバーのいる函館山に激突する。

「わあああああああ!!」

『残念だったなあ……、もうちよつと早くその力を発揮できてれば何とかなつたかも知れぬーのによ』

少女達の悲鳴などには耳も貸さず、グロツケンはもう一度氷の刃をエックスに突き付ける。

いくら力を発揮できるようになつたとはいえ、残されたエネルギー自体が少ないのでそう早くは立ち上がれない。

『こいつで終わりだ!!』

死の宣告がなされ、残虐なまでに冷徹な氷刃が動き始める。

思わず目を瞑る者、大事な人の名前を叫ぶ者。それらすべての絶望の色を楽しむように、グロツケンエックスにトドメを刺さんとし――、

『ぐはああつ!!』

桜内梨子の首から下げられたペンダント――ダイス星人の遺品であるそれから伸びる光の線に吹き飛ばされた。

「え・・・?」

『オオラアア!!』

『何!!』

『フウウン!』

『グウウウウウ・・・!』

そしてその光から飛び出した二つの巨大な人影がタッグを組んだ宇宙人へと強襲を仕掛ける。あれはグレンファイヤーとミラーナイトだ。

「間に合ったか!」

更に飛び出る二つの影。

「陸ちゃん！」

「大地さんも……」

今度は仙道陸と大空大地。内浦にいたはずの彼等が、ウルトラマンへ変身もせず遠く離れた函館の地に現れたのだ。

「え……？　なんで梨子ちゃんのペンダントから……？」

「まさか……リリーと主従契約を……」

「そそそそんなまさか……」

「ミラーナイトの力だよ。アイツ鏡同士を繋げられるし」

陸は困惑する面々に説明を入れた後、大地と共によろよろと起き上がったエックスを仰ぐ。

「エックス！　まだいけるでしょ！！」

ジオデバイザーを向け、大地は声を上げる。

それを受け、エックスも力強く頷いた。

『ああ、了解した！』

身体をデータに変換したエックスが、一度理亜をルビイ達の元に戻してから大地の持つジオデバイザーの中へと入り込む。

『理亞。巻き込んでしまつて本当にすまない。そして、いいユナイトだつたぞ』

装飾が銀から金に変わったジオデバイザー——エクステバイザーの中から理亞に称賛の言葉を贈つた。

『あとは、我々に任せてくれ』

エックスの言葉の後、二人の男がそれに同調する意を背中で語る。

「行くぞエックス。ユナイトだ！」

『よし！ 行くぞ！』

エクステバイザーを構えた大地が、その上部に備わつたスイッチを押して側面パーツをX字に展開する。

そしてその時出現したエックスのスパークドールズを手に取り、デバイザーに読み込ませた。

「ウルトラマンエックスと、ユナイトします」

そしてデバイザーを掲げ、叫ぶ。

「エックスウウウウウウウウ——！！」

『イイイイイッ……サアアアアアアッ！！』

「エックス、ユナイトテッド」

『陸。俺達も』

「おうよ」

それとほぼ同時に、陸もウルティメイトブレスレットから取り出したウルトラゼロア
イを目元に装着した。

「『シユア!!』」

函館山の山頂を、二つの眩い閃光が包み込んだ。

『ウルトラゼロ』

『エックスクロス』

——
キツク!!』

『オオオオオオツ
!!』

取っ組み合っていたところに痛烈な飛び蹴りが命中し、地響きを立てて横転するグ

ロツケンとデスローグ。

『彼女達の努力は無駄にはさせない』

それとはまた別の地響きが轟き、二体のウルトラマンが降臨する。

そのウルトラマン——ゼロとエックスは、様々な想いを背負い、同時にファイティングポーズを取った。

『聖夜の捌きを受ける時だ』

『さあ、ここからが……クライマックスだぜ!!』

百十三話 凍える闘志

『オオオオウラ!!』

『ウオオオオオオ!!』

『フウウオオツ!!』

『グオオオオオオ!!』

街の夜景を背に激突する、六体の巨人達。

『アエエエイヤア!!』

その身に沁みついた宇宙拳法を駆使し、ゼロは息つく間もない打撃の嵐をグロツケンに殺到させていく。

『ファイヤアアアフラアアアツシユ!!』

『ぐあがあッ．．．!!』

猛攻の間を縫うようにして振り抜かれたグレンファイヤーの炎の棍棒がクリーンヒット。グロツケンは後方に弾き飛ばされる。

『ちいいい……!! 凍れエ!!』

『なはははは! 炎にそんなモン効くかよ!』

吐き出された冷気をゼ口は回避するが、グレンは余裕綽々と言った様子でそれを受け止めた。

燃える炎の戦士に恥じぬその身の熱量は、凍てつく寒気の波動をものともしていな

い。
『ぎいいいいい! 相つ変わらず腹立つなテーマは!』

『ジャンケンつてよお、チヨキはグーに絶対え勝てないよなあ?』

『ああ!!』

反撃の銀色の刃を受け止め、挑発的な物言いに乗せて額を突き合わせる。

『氷も炎にやあ、絶対勝てねえつてことよ!』

『ほざきやがれエ!』

ガツチリと互いを掴みあつたまま、一方では急激に温度が上昇し、また一方では急激に温度が低下していく。

『フアイヤアアアアアアアアアア!!』

『ブリザアアアアアアアアアア!!』

叫びが夜空を駆け、莫大な熱気と冷気が衝突する。

共に相殺し合った双方のエネルギーは、白煙となって周囲に霧散していった。

『うひゃく……つめてー……』

『どうしたあ……？ あいこだったぜエ……？』

先程にお返しに今度はグロツケンが煽るように笑う。

『くううう……！ だが、今回ばかりはあいこでいいんだよなあ……これが』

『んだと？』

『あっち向いてホイ！』

突然グレンが真上を指差し、釣られてその方向を見上げるグロツケン。

——そこにいたのは、両腕をL字に組んだ赤と青の巨人。

『ワイドゼロシヨット!!』

『ぐううううおとおおッ……!!』

垂直落下で進行してくる光線を受け止めきれず、グロツケンは後方へ飛びのいて威力を受け流す。

——そしてその先にいたのは、今さっきまで奴が殴り合っていた炎の戦士。

『はっはあ！ こいつは効くぜ！』

『ああ!! 何する気だ!!』

背後からしつかりとホールドし、上体を仰げ反らせたグレンが次の瞬間に繰り出した

技は――、

『グレンドライバアアアアアア！』

『ぐぎやあああああッ!!』

グロツケンの身体を逆さに掲げ、勢いよく首から地面へと叩きつけた。

所謂。パイルドライバーである。

『ひゃっほう！ 決まったぜエ！』

『俺達最強！』

パアン、と小気味のいい音を立ててハイタッチをするゼロとグレン。

『やりやがったなテーマ等アアアアアア！』

もう勝利したかのように振舞うチンピラ二人に、もう一人のチンピラは両腕の刃を伸ばしつつも突撃を仕掛けていった。

一方。

『全く、あの二人は相変わらず暑苦しい・・・』

不良の喧嘩の様子を呈してきたゼロ達の戦闘を見て、やれやれと溜息を吐くミラーナ

イト。

『その点、貴方のその無口な点は評価できませんがね』

『グウウウウ……』

ミラーナイトとエックスが対峙するのは、炎使いである炎上のデスローグ。

『行くぞ。ミラーナイト君』

『了解しました』

地面を蹴り上げ、同時に駆け出す二人。

迫りくる火球をエックスが展開したバリアで防御すると、その背中を踏み台に飛び上がったミラーナイトの鋭い飛び蹴りがデスローグを捉える。

『イイイイ……ツクサ!!』

続くエックスの身体全体を使った突進。薙ぎ払われた奴の右腕を側転で回避すると、今度は身を翻して回し蹴りを炸裂させた。

『ミラーナイト!!』

『グオオオオオオ!!』

唸り声を発したデスローグは炎の壁を作り出し、押し寄せる鏡の刃の群れを消滅させてしまう。

だがその身一つで壁を突き破ったエックスは、敵の懐に潜り込むと同時に強烈な正拳

突きを繰り出した。

『シヤアアア!!』

『グウウウウ・・・!!』

予期せぬ攻撃に思わず悶絶するデスローグ。

すかさずミラーナイトが畳みかけるが、そうはいくかと自身の周囲に熱風を発生させ、二体の巨人を跳ね飛ばす。

『大地!!』

「ああ! 行くぞ!」

大きく振りかぶりながら両腕にエネルギーを凝縮させ、クロスさせては一気に解き放つ。

『「ザナディウム光線!!」』

理亜と共に放った時のものとは桁違いの威力を誇った光の線がデスローグへと伸びる。

一緒に数多の戦いを潜り抜けてきたからこそ、今の二人がある。

そんな二人が放つからこそその、最高威力のザナディウム光線なのだ。

『グオオオオオオオ!』

『っ?! 何ッ?!』

だがデスローグも譲らない。

相殺は無理だと判断するや否や火球を自分の足元に叩きつけ、その衝撃波で身体を宙に放り出したのだ。

さらに地表に着弾したザナディウム光線によって引き起こされた爆風に乗り、一気に距離を詰めてくる。

『グウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

『『『があああああつ………!』』』

獄炎を纏った鉤爪が胸元を直撃し、火花を散らしながら地に伏せる二人。

『ぐ……これではゼロにどやされてしまうな……』

『あちらは相手との相性がよく、尚且つ二人共互いの事を熟知しています。相性も五分

五分で、即席コンビのこちらとは訳が違うという事ですよ』

『……なるほどな』

状況を踏まえ、エックスは構え直しながら敵を見やる。

『なら、息を合わせればいいだけの話だろう?』

『簡単に言ってくれますね……誰かさんに似ていて嫌いではありません!』

先んじてミラーナイトが飛び出し、手先から放った銀色の刃を宙に舞わせる。

デスローグは先程の例に習って生成した炎の壁でそれを防ぐが、これまた例に習った

エックスが障壁を突破。

が、

『グオオオオオオ!!』

『くっ……!!』

流石に二度目となると通用せず、追撃を警戒していたデスローグによって弾かれてしまう。

『グウウウウ!!』

炎の後ろに退避したエックスを追おうと壁を焼失させたデスローグだが、自身の壁に立ち塞がっていた何人もの自分の存在に驚愕する事となる。

『貴方のその防御の弱点は、自分自身の視界を塞いでしまうことです!』
突然現れたデスローグたちの正体は、鏡に映ったデスローグ自身の姿。

これはミラーナイトが生み出した鏡の壁。奴の視界を塞ぐ炎の壁の中でエックスが気を引いている間に設置したものだ。

『シルバークロス!』

『ッ……!!』

自分目掛けて一直線に飛んできた十字の銀刃を受け止め、力点をずらして真横にいなす。

だが奴を中心に展開された鏡の壁に反射された刃は、幾度となくデスローグに襲いかかっていたのだ。

『グオオオオオオオ!!』

業を煮やしたデスローグは超特大サイズの火球を爆ぜさせ、自分を取り囲む壁もろとも辺り一面を消し飛ばした。

『・・・随分と、荒っぽい防御ですね・・・』

パラパラと粉塵が舞い、ケホケホと咳き込むミラーナイトに降りかかる。

隙の更に隙を突いた攻撃さえも破られ、もう手段はないように思われた。

しかし、これこそがエックスとミラーナイトの仕掛けた最大の釣り針だったのだ。

『ウウウ・・・??』

上空に巨大な熱量を感じし、視線を上流すデスローグ。

即座に危機感を察するが、その時には既にエックスと大地は全ての準備を整えていた。

『アタッカー・・・エエエエックス!!』

『ググウウウウウウウウウウ・・・!!』

全身から放出されたX字の爆炎が、デスローグに着弾すると同時に大規模な爆発を起

こす。

大気を焦がす熱風が激しく吹き荒び、その中央にいたデスローグはせわしなく息づく。

『即席コンビでも案外うまくいくものだな』

『ええ。貴方とは仲良くできそうです』

ベリアル軍幹部クラスの敵をここまで圧倒出来れば見事と言ってもいいだろう。

冷静なようでどこか抜けているという共通点を持つ二人は、ゼロ達と同じようにグータッチを交わすのだった。

「理亞ちゃん！」

「大丈夫ずら!!」

エックスとのユナイトが解除され、皆の元に戻ってきた理亞に駆け寄るルビィ、花丸、善子の三人。

「怪我は!! どこか痛いところとかない!!」

「う、うん……大丈夫……」

少し前の自分では出会えなかったであろう心配してくる友の存在を少し嬉しく思いつつ、理亜は目の前で戦闘を開始した巨人達——そのうちの目つきの悪いウルトラマンを見やった。

「あなた達のマネージャー……ウルトラマンだったの……？」

「……う、うん……」

理亜とゼロとのファーストコンタクトは東京での事。

謎の穴に吸い込まれた聖良を助け出してくれたのが、あのウルトラマンゼロだった。

あの時どうして一緒に吸い込まれたはずの陸はいなかったのだろうかという疑問には思っていたが、まさか彼がゼロ本人だったとは。

「……あんまり驚かないのね」

「……いや、驚いてる事には驚いてるんだけど……」

ついさっきまで実体化したエックスに巻き込まれてユナイトだかそんな状態になっていたのだ。

正直今の理亜は大抵の事では驚かない自信がある。

「……勝てるの？」

小さな声でそう呟き、ルビイの顔を覗く。

理亜自身はほとんど戦っていないが、それでもあの宇宙人達が相当強い事は理解でき

た。

奴等をどうにかしなければ、捕まっている聖良達がどうなってしまうか分からなく、それがたまらなく怖い。

「大丈夫だよ」

そんな理亞に、ルビイは優しく笑いかけた。

「先輩も、ゼロさんも、絶対負けないから！」

『チツ……流石にこの数相手じゃ分が悪いか……』

一度ゼロとグレンから距離を取ったグロツケンが肩を大きく揺らしながら苦し気に呻く。

『オイデスローグ！ スライから預かったアレ、使うぞ！』

冷気でエックスとミラーナイトを牽制しつつ、同じように追い詰められつつあったデスローグの隣に並び立つ。

「……奥の手……？」

『なんか隠してやがんのか？ あるんならさっさと出して来やがれ!!』

出させる前に倒した方がいいじゃないのか、とか思った陸だが、ゼロ相手にその理屈は通用しないのでぐつと飲み込んだ。

『使わせる前に倒した方がいいんじゃないのか？』

だがそれも空気を読まないエックスの一言ですべて無駄となる。

『んな姑息な真似はしねー。正面切って戦うのが俺の流儀だ』

同じウルトラマンでもここまでタイプが違うものなのだろうか。常識的な判断をしているといったら間違いなくエックスだと思うが。

『ケケ……、後で後悔すんじゃないぞー!』

デスローグから何かの装置らしきものを受け取ったグロッケンが、宙に放り投げるや否や腕の刃でそれを一刀両断してしまう。

その刹那、真つ二つにされた装置から闇が広がり、球体を形取る。

『○△□……!』

漆黒の鉤爪が球体を内部から切り裂き、その姿を露わにしてゆく。

「……ロボット……?」

低い機械音と共に出現したのは、大地の言葉通りのロボット。

全身を武器で武装した自律型兵器、という表現が最も適切だろう。頭部のモノアイ、

巨大な爪の備わった腕に裝飾された砲台。上部を飾る扇形の襟飾り。

漆黒の中に真紅を走らせたカラーリングが、その危険度を現してくれているようだった。

『機神魔鎧装グローカーダークネス。デラシオンの兵器、グローカービショップの改造品だよ』

『この気配……ペリアルが纏っていたあの鎧と同じ……』

『アーマードダークネスだよ……中々察しがいいじゃねーか……』

アーマードダークネス。

かつて全宇宙の支配を目論んだ暗黒宇宙大皇帝エンペラ星人の為に作られた最凶最悪の鎧。

『へっ……、どうやってアーマードダークネスの閥を制御してるのかは知らねーが……上等だ！』

啖呵を切ったゼロが爆ぜるようにグローカーダークネスの真正面まで肉薄し、先手必勝と言わんばかりに掌底を叩き込む。

『○△□——！！』

『うおおおっ！！』

だが奴はピクリとも動く様子を見せず、逆にその剛腕でゼロを振り払ってしまう。

『大地！ 私達も行くぞ！』

「分かってるよ！」

次に仕掛けたのはエックスだった。

地に伏せたゼロを庇うように立ち塞がると、進行してくる巨体を押し返さんと掴みかかるが――、

『○△□——！！』

「『』あつ・・・！！』』

グローカーの両腕から照射された光弾をモロに喰らい、起き上がったばかりのゼロも巻き込んで大きく吹き飛ばされる。

『ゼロ！』

『今加勢に行きま——』

『おっと？ 俺達を忘れてもらっちゃあ困るぜエ？』

グレンとミラーナイトもグロッケン達に阻まれて思うように動くことが出来ない。

『ぐっ・・・』

『だから使わせる前に倒した方がいいと言ったじゃないか・・・！』

エックスがそうぼやくも、今更どうしようもない。

グローカーダークネスの登場で状況が一変、形勢がグロッケン達に傾いた瞬間であつ

た。

『今更文句言ったところでどうしようもねえ！ 陸！ 大地！ エックス！ こっちも全力で行くぞ!!』

「『了解!』」

二人のウルトラマンを閃光が包み込む。

「ネオ・フュージョンライズ!」

『俺に限界はねえ!!』』

「ウルトラマンエックス、パワーアップ」

『行くぞ! エクシード! エーックス!!』』

紫色と虹色のオーラが現出し、夜景よりもずっと輝かしく夜空を照らす。

『ハアアアア!!』』

強化変身を遂げたウルトラマンゼロビヨンドとウルトラマンエクシードエックスは、裂帛の気合と共に漆黒の機神との戦闘に突入していった。

百十四話 氷炎乱舞

『アエエエヤ!!』

ゼロビヨンドの構える二刀流の大剣——ビヨンドツインエッジが振り抜かれ、機神魔鎧装グローカーダークネスの外装とぶつかり火花が散る。

更にバク転で奴の懐に潜り込み、逆立ち状態のまま下顎を力の限りを尽くして蹴り飛ばした。

『イイイイイツ・・・サツ!!』

仰け反らせた上体に斬りかかったのはエクシードエックス。

こちらは一刀流——エクストラッガーを駆使し、その漆黒の機体に次々と剣撃を叩き込んでゆく。

『オオウラ!!』

『シヤアア!!』

剣技の速度についていけず、一瞬ロボットアームの反応が鈍くなったのを二人は見逃

さなかつた。

ガラ空きになった胸部にゼロのストレートパンチ、エックスの回し蹴りが炸裂し、グローカーダークネスは派手に弾き飛ばされた。

『………妙だな』

強化変身をしてからと言うもの、形勢は不気味な程にこちらに傾いた。

その事を訝しく思ったゼロが首を捻り、低音を縦ながら起き上がった漆黒のロボットを見据える。

『アーマードダークネスの力を組み込んでいる割にはあまりにも手ごたえがない………。何か裏があるのか……？』

『さあな。だがどうであれ、あまりうかうかはしてられないぞ』

エックスが視線を向ける先には、未だ囚われの身であるダイヤと聖良がいる。

あまり戦闘が長引くようなものなら、グロッケンとデスローグが何をしようものか分らない。

『彼女達は必ず助ける。行くぞ大地！』

「分かっている！」

『あつ……、おい！』

特別理亞を気に掛けている様子のエックスが駆け出し、再度グローカーダークネスへ

と攻撃を仕掛ける。

聖良とダイヤが無事でなければサプライズも成り立たないし、何より多くの人が悲しむ。

確かに躊躇っている暇はないだろう。

『つたく……、俺達も行くぞー！』

「おうよー」

遅れてゼロも飛び出し、ビヨンドツインエッジを一刀流に融合したゼロツインソードでグローカーダークネスの胸元を斬り上げる。

「『ぬあああああつ！！』」

ゼロが右腕、エックスが左腕をがっしりと掴みかかると共に背負い投げに似た形で投げ飛ばし、地面に叩きつける。

奴はパワーこそあるが動きは鈍い。なら、反応速度を超過したスピードで攻撃を繰り返せばいい。

だがその目論みは、早くも潰える事となる。

『○△□——！』

突如としてグローカーダークネスの後部パーツが煌き、これまでは想像できない速度で体当たりを仕掛けてきたのだ。

「ぐあああ……!」

不意を突かれ、跳ね飛ばされるエックス。

『エックス!』

「っ……! 来るぞ!」

いち早く無機質な殺気を感じし、迎撃態勢に入る。だが、

『○△□——!』

「『なあっ………!!』」

受け止める姿勢を取っていたゼロを襲ったのは、奴のモノアイから発射された光弾。当然防御も間に合わずゼロに命中してしまふ。

あの突進攻撃を仕掛けてくるのだらうと思いついていたのが仇となってしまった。

『ちっ……機械のくせに結構頭回るじゃねーか………』

『そっちの頭が弱いだけなんじゃねーのか?』

『んだとこの野郎!』

「落ち着け」

グロツケンからの挑発に乗りかけたゼロを諫め、陸は再度グローカーダークネスを見る。やる。

頭部のモノアイや両腕の砲台による遠距離火力と、バーニアによるスピードアタック

ク。

正反対の性質を持つ攻撃が組み合わさった故の予測しにくさがある。

「せめて攻撃が見切れればな・・・」

そう言っている間にもグローカーダークネスは攻撃態勢に移っている。

あの威力の攻撃をそう何発も受ける訳にはいかない。早く攻略の手掛かりを見つけなければいけないのに。

『動きを見切る必要なんざねーよ。簡単な話だ』

陸が焦る一方、ゼロには何か解決案があるような様子だった。

「何かあるのか?」

『見てれば分かる。踏ん張れよ!』

バーニアの加速に乗ったグローカーダークネスが迫る中、そう言ったゼロは両腕からオーラを伸ばす。

そして、

「ぐっ・・・うう・・・!」

展開したビヨンドデیفエンサーで正面から奴を受け止め、これ以上の前方への侵攻を阻む。

『大地! エックス! 今だ!』

『オオオオオ！』

ゼロの意図を汲み取ったエックスがエクストラッガーのスライドパネルを二度なぞり、グローカーダークネスの背後を取った。

『エクシードスラッシュ!!』

超高速で振るわれるエクストラッガーが虹色の斬撃を無数に描き、次々と漆黒の機体を切り刻んでゆく。

奴がああ速度で移動できるのは前方にだけ。こうして正面から押さえおけば逃げる事は出来まい。

『イイイイイ……ックサ!!』

渾身の力で振り下ろした虹色の短剣が深々と背後のバーニアに突き刺さり、内部がショートした事により起爆。

その衝撃で前方へのめり込んだグローカーダークネスの真正面には——ゼロがいる。

バリアを解除した後、再びゼロツインソードをその腕に取る。

『俺の刃を刻み込め』

エネルギーが流し込まれ、紫色の光を纏ったゼロツインソードがゼロの身の丈を超えるまでに巨大化。そして——、

『ツインギガブレイク!!』

Zを描くように剣線が迸り、奴の両腕に深々と斬撃を刻み込んだ。

『○△□——ッ!』

それでもなおグローカーダーダークネスは砲台の機能を失った剛腕を振るうが、バーニアによる加速を失った今、もはや恐るるに足りない。

『エクシードイリユージョン!!』

エクストラッガーを三回スライドタッチしたエックスが四体に分身し、それぞれが強烈に奴の胸元を斬り付けた。

遂にその強固な外装に亀裂が走り、決め技を叩き込むべき一点が誕生する。

『ワイドビヨンドショット!!』

L字に組まれた両腕から伸びた光線がひび割れた胴に吸い込まれていく。

しばらくは光線を浴び続けていたグローカーダーダークネスだが、やがて限界が来たのか真後ろに倒れ込み、そのまま機体の形成パーツを四散させながら爆発を起こした。

『『『つ……………?!』』』

爆発したはずだったのだ。

『何だあれは……………』

『……………鎧……………?』

今の今までグローカーダークネスがいた空間に浮遊する謎の物体。

陸の言葉の通りそれは紫色をした鎧であり、身の毛がよだつような悪寒をひしひしと感ずる。

『ケケ……、まんまと罠にかかってくれたみてーだな。ごくろーさん』
『なんだと……？』

自軍のロボットが撃破されたのにも関わらず笑うグロッケンは、全て目論み通りとでも言っているようで――、

『素体を見つげ出した時、そいつは大量のロボット兵を生産するための機械だった。ピシヨップはその生産ラインを切り離して戦闘に特化した形態だ。だから俺達は戦闘能力を低下させると引き換えに、再びそいつに生産ラインを搭載したんだよ』

「それが……、あの鎧って事か？」

『その通り。パーツに組み込んだアーマードダークネスの闇の力を抽出し、あの鎧に凝縮させる。けどその為には結構なエネルギーが必要だよ。それで、お前等と戦わせてそのエネルギーを利用させてもらったって訳だよ』

説明口調でベラベラ喋るグロッケンというのも中々に珍しい光景だが、注目すべきはそこではない。

奴の言っている事こそゼロが感じていた違和感の正体。グローカーダークネスは初

めから倒されるために召喚されたのだ。

全ては、あの鎧を生成するために。

『んじゃ……反撃と行こうぜデスローグ！』

『グオオオオオオオ！』

取っ組み合っていたグレンファイヤーとミラーナイトを払いのけた二人が咆哮を上げると、不気味に浮遊していた鎧が奴等の身体に集合していく。

『ヒヤハハハハ！ アーマードグロッケン参上！』

大部分を紫色で覆い、鋭利な部分のみが剥き出しになった白銀の身体が闇夜に光る。

シルエツト自体に大きな変化はないが、まさしく戦用の甲冑を着こんだといった印象だ。

『ヌグオオオオオオオオオオツ!!』

『アーマードデスローグ見参……だってよ……』

こちらはグロッケンとは異なり、外見的な変化が大きい。

全身の武装はもちろんの事、扇状の鎧が装着された事により右腕も左腕と同じように巨大化していた。

『行くぜエ！』

『グオオオオオオオオ！』

デスローグが両腕に火球を発生させ、飛び出したグロツケンと並行するように放り投げる。

『ハアア！』

『ぐっ……！』

回避行動に移ろうとしたところでグロツケンの吐き出した冷気が足を地面に縫い付け、飛び上がることが不可能となる。

「ぬ……ぐ……ああああああ！」

ゼロツインソードを盾に使おうとするも、火球の大きさはその二倍はある。

当然受け止めきれず、ゼロは難なくその火球の餌食となってしまうた。

『ゼロ！』

『よそ見してる場合かよ！』

稲妻が如き速度でエックスへと肉薄したグロツケンの刃が冷気と闇と纏う。

『ヒヤハハハハハハ！！』

「がはああっ……！」

二つの属性をもつてして繰り出される斬撃の嵐がエックスを捉え、その度に尋常ではない爆音が空気を揺らす。

『ゼロ！ エックス！』

『これは……闇属性の力……』

『今度はテメー等だ!』

くず折れたエツクスを蹴り飛ばすと、今度はグレンとミラーナイトに狙いを定めるグロツケン。

『つ……、氷が炎に勝てるかよ!!』

絶対に冷気に負ける事のないであろうフルパワーの爆炎が放出され、銀色の悪魔目掛けて突き進んでいく。

だがグロツケンは苦手なはずの炎を前にしても一切臆することなく、むしろ笑いながらその腕に宿したものは――、

『アーマードインフェルノオ!!』

『なああつ……、』

闘魂の爆炎と激突したのは、冷気とは正反対の獄炎。

しかも高熱攻撃を得意とするグレンの炎を押し返し、その赤き身体へと到達したのだ。

『あぢぢつ!!』

自身の体温をも超える高温に驚愕するグレン。

『炎属性まで……、』

何か危険な予感がして飛び上がったミラーナイトが今の今までいた場所には、闇の瘴気が立ち昇るクレーターが生成されていた。

『……………貴方も闇属性ですか……………』

『グオオオオオオオオ！』

左腕から炎、右腕から闇を放出し、デスローグは鏡の騎士を襲う。

『くっ……………！』

次々と殺到してくる火球と暗黒球を素早く回避し、一度距離を取ったミラーナイトは両腕を重ねる。

『シルバークロス！』

十字の光が虚空を切り裂きながら一直線に突き進む。

だが見事に隙を突き、奴が火球を生成する時間もなく、完全に決まったものかと思われたその鏡の刃は、突如として砕け散った。

『なっ……………!!』

目を剥くミラーナイトの視線の先には、月の光を受け、神秘的でありながら戦慄を覚えるような輝きを発する大剣が。

『グウウウウ……………』

その剣の正体は、デスローグの右腕を巨大化させていた鎧が変形したもの。

『変幻自在の鎧・・・？』

『グオオオオオオオ!!』

大剣が薙ぎ払われ、猛烈な風圧と共に闇の波動がミラーナイトを攻め立てる。

『シヤアア！ オウラア！』

『うおっ・・・!!』

他方ではグロッケン連続殴打を捌くのがやつとのグレンファイヤー。

『・・・!!』

二人共々後退し過ぎたのか、遂には互いに背中合わせとなってしまう。

『グオオオオオオ!!』

その瞬間を待っていたといわんばかりにデスローグが火球を地面にたたきつけ、辺りを爆発によって生じた黒煙で包み込む。

そしてその暗い世界を切り裂いたのは、赤と、青の剣閃だった。

『インパクトツイイイイイ!!』

『『がああああああッ・・・!!!』』

『ッ・・・!! グレン!!』

『ミラーナイト君!!』

グロッケンによる氷炎の剣撃が収まった時には、既にグレンとミラーナイトの身体は

徐々にぼやけ始めていた。

『ゼロ………すまねえ………!!』

『我々は………ここが限界です………』

『お前等!』

人間態に戻っていく二人にゼロは手を伸ばす。

ウルトラマンであるゼロとは違い、グレンとミラーナイトは一度やられてしまえば肉体の再生が出来ない。

だからこそ、完全に力尽きる前に撤退する必要があるのだ。

「………つちもそろそろヤバいぞ………」

ピコン、ピコンとカラータイマーが点滅を始め、ゼロ達が実体化できる時間の限界が迫っている事を告げてくる。

「もう時間がない!」

『クソが………行くぞエックス!』

『言われずとも!』

グレンとミラーナイトがやられた怒りと、近い限界に対する焦りで冷静さを欠いた二体の巨人が同時に駆け出す。

『デエエエエヤ!』

ゼロツインソードとグロッケンの手刀がぶつかり、ガキイン、と衝突音が響く。

『ヒエヒエヒエ……、もう大してエネルギーも残ってないお前等に負けるかよ!』

「ぐなっ……!」

腕ごと剣を弾かれ、空いた懐に鋭い蹴りが刺さる。

『身体が動かねえ……!』

函館の気温と、グロッケンの発する冷気は、寒さに弱いゼロにとっては何よりも障害となる。

おかげで関節の動きは鈍く、全身の筋肉にも力が伝わらない。

『寒いんならあっためてやるよ!』

「ぐああああッ……!」

鎧から噴き出させたアーマードインフェルノを浴びせられ、焼け爛れるような痛みに苛まれながら勢いよく飛んでいくゼロ。

その先にあつたのは、聖良が礫にされている氷の塔。

「きやああああああ!」

「つ……! 聖良さん!!」

ゼロが衝突した事により塔は崩れ、解放はされたが重力に従って聖良は落下していく。

咄嗟に陸が反応し、受け止めた事で聖良は事なきを得るが、その行動は敵の宇宙人達に良からぬことも考えさせてしまう。

『ケケ………やっぱり守るよなア……』

悪意に満ちた笑いを漏らすグロツケンが横目にするものは、炎の塔に拘束されている、意識を失ったままのダイヤ。

『待て……、止めろ……！』

『だったら助けてみるよなア！ デスローグ！』

エックスと交戦中だったデスローグが腕を翳すと、ダイヤを捉えていた炎が消失する。

縛り付けるものが無くなったダイヤは、聖良の例に倣って落下してゆく。

『クアトロゼロスラッガー！』

投擲した四本のゼロスラッガーの内、一本でダイヤを受け止め、残りの三本でグロツケンとデスローグを牽制。

「姉様！」

「お姉ちゃん！」

その隙に囚われていた二人を函館山の山頂にそつと下ろすと、妹二人はすぐさま自分達の姉へと抱き付くのが伺えた。

「んん．．．．．、．．．．．ルビィ．．．？」

目を覚まし、状況こそ飲み込めていないが自らの胸に顔を埋める妹の温かみを数日ぶりに感じるダイヤ。

その隣では理亞もまた瞳の端に涙を溜めて聖良の身体に腕を回していた。

「『フツ！』」

それを見届けた後、ゼロは確かな怒りを込めて二体の宇宙人を相手取るエックスに加勢せんと飛翔する。

だが残されたエネルギーはもはや空前の灯。結果は見えているといつてもよかった。

『グオオオオオオオオ！』

「『『あぐあつ．．．．．！』』」

巨大な槍へと変形したデスローグの右腕が直撃し、火花が散る。

『シァアアアアアアアア！！』

冷気、炎、闇、三つの属性が合わさった切っ先が次々に振りかざされ、その度にゼロとエックスのただでさえ少ない余力は抉り取られていく。

『足りねえなア！ 全ッ然足りねえなア！！』

果てしない連撃を受け、遂にカラータイマーが点滅を止めたその刹那――、

『そんなんじや俺は．．．．．満たされねえんだよおおおお！！』

「『ぐっ……あああああああああああああああ!!!」
迸った赤熱と群青の閃光が身体を貫き、二人のウルトラマンは光の粒子となって掻き消えていった。」

百十五話 目覚める力

「陸ちゃん！」

「大地さん！」

変身が解除され、息を荒げながら地に伏せる陸と大地の元に駆け寄る少女達。

「陸！ しつかり！」

「・・・う・・・あ・・・」

『おい！ 陸！』

陸の身体を抱き上げた果南がすぐさま怪我の具合を確認するが、一瞬目を逸らしそうになつてしまう程のものであつた。

裂傷や打撲は当たり前前、その他にも凍傷や火傷などが身体のいたる部位で確認できる。

「エックス・・・？ エックス！」

理亜の時のようにエックスがダメージを請け負っていたのか、陸に比べればまだ軽傷な大地がエクステバイザーの中にある相棒に呼びかける。

「デバイザーは、まるで封印でもされたかのように霜で覆われて白く染めあげられていた。」

「エックス！ 返事をしてくれ！」

『落ち着け……無事だ……』

「デバイザーから返ってきた声を受けてほっと息をつく。」

『だがこの氷のせいでデバイザーの機能が幾つか凍結してしまっている……今の状態ではユナイトが出来ない……』

「そんな……」

「ゼロ、エックス、グレンファイヤー、ミラーナイトの四人を蹴散らしたアーマードグロツケンとアーマードデスロークはまだまだ健在。」

「ウルトラマンの敗北は、この状況では何よりも人々の恐怖を煽る。」

「当然それはA q o u r sやS a i n t S n o wの二人とて例外ではなく、光の戦士を破った宇宙人達を見上げる顔には、しっかりと恐怖の色が滲んでいた。」

「なら……俺が……！」

『待て！ その怪我で何するつもりだ！』

「じゃあ誰が戦うんだ……よ……」

「ブレスを掴み、立ち上がろうとする陸だが、既にボロボロのその身体は思うように動

いてくれない。

それどころか強烈な脱力感に襲われ、再度倒れ伏してしまった。

『ヒエヒエヒエ……勝負あつたな……』

暗黒の鎧を身に纏つたグロツケンが陸達を見下ろし、ケタケタと笑いを漏らす。

『もつたいねえよなあ……。そんな奴等守つてなけりやもつと善戦出来たろうによお』

「っ……！ 先に人質を取つたのはどっちだと思つてんのよ！」

自分の身の丈を遥かに超える宇宙人に対し、臆することなく善子が食い掛かる。

『うっせーな……。手段もクソも関係あるかつてんだ。フッ！』

「うにやつ！」

羽虫でも振り払うかのようにグロツケンが息を吹き、絶対零度の冷気が善子に降りかかる。

「善子ちゃん！」

『まだお前等に用はねーんだよ。ちよつと大人しくしてろ』

「まだ」という意味深な言葉と共に冷気は襲い掛かる範囲を広げ、陸と大地、Saint Snowを除き、Aquoursメンバーの身体だけを凍てつかせていく。

「うう……」

「……寒い……」

小さな身体に氷の結晶を降り積もらせて凍える少女達は、一人、また一人と膝を折っていく。

「待て！ 止めろ!!」

『だったら止めてみるよなあ……。つっても今のお前等に立ちあがる力なんざ残っちゃいねー。指でも啜えて見てやがれ』

「デメエ……。!」

グロツケンに対する怒りと共に、また別のどす黒い何かが奥底から込み上がってくるのが分かった。

そしてその何か——ベリアルの間を、陸は自ら放出する。

「……。仙道さん……。?」

「……。陸君……。それは……。?」

瞳を赤く煌かせる陸を見て大地と聖良は驚くような、恐れるようなといった表情を向ける。

『……。? 傷が……。!』

空間を黒く染め上げていくその禍々しいオーラが傷口を覆い、塞いでゆく。

勿論だがゼロの力ではない。増大し続けるベリアルの間が陸の身体を修復すると同時に、蝕んでいつているのだ。

『ケケ……種の発芽が近いみてーだな……』

『何……？ どういう事だ！』

『そーだな……。一つだけ教えてやるよ。オウガがそいつに陛下の力を植え付けたのはもつと別の訳があるんだぜエ……』

『……訳……？』

『そいつが陛下の力を酷使すればするほど、俺達にとつちや好都合ってこつた』

『なんだと……?! 陸！』

『……今これ以外に方法があるかよ』

リスクなんて知ったこつちやない。例えそれが奴等の目論見通りであっても、ここで引く訳にはいかないのだ。

『陸!!』

『があああッ！』

痛む身体に鞭を打ってプレスを叩き、ウルトラゼロアイをその手に掴む。

『……ゼロ……行くぞ！』

ゼロアイが出現できたという事は、ゼロにも変身できる程度のエネルギーは残っている。
ゼロのエネルギーだけでは戦えなくても、ベリアル力の使ったゼロダークネスな

ら、まだ戦える。

『お前……アイツの言った事聞いてなかったのか?! お前にベリアルの力を使わせるのがダークネスファイブの狙いなんだぞ! それにこれ以上闇を身体に浸透させたらお前自身がどうなっちまうかわかんね——』

「でも……俺達がやんなきゃだろ!!」

怒涛の勢いで捲し立ててくるゼロを、陸もまた強い語気で跳ね返す。

「今戦えるのは……、千歌達や聖良さん達を守れるのは俺等だけなんだよ……」

グレンとミラーナイトは戦える傷ではないし、大地とエックスも今は変身できる状況じゃない。陸とゼロが出るしかないのだ。

「こんな時に無茶しちまうのが俺の悪い癖なんだつてのは重々承知してるよ。けど……何かのために命かけて戦うのがウルトラマンつてもんだろ! ……それに……」

一度口調を落ち着かせ、陸は姉であるダイヤに身を寄せて震えるルビイを見やった。

「……このままじゃ、ルビイ達が頑張ってきた事が全部無駄になる」

協力してきたからこそ、陸は彼女達が今日この日のためにどれだけ苦労し、壁を乗り越えてきたかを知っている。

その成果をダイヤと聖良に見せられなくなるなど、許される事じゃない。

「……だから……俺はたたか——」

ゼロアイを強く握り直し、目元に装着しようとした次の瞬間、温かく、柔らかな何か
が陸の手を掴み止めた。

「……………もう……………、いいです……………」

その刹那に耳朵に触れた弱々しくも意思を感じる声音。

熱くなっていた感覚が急激に冷まされていく感覚に引き寄せられて振り向いた背後
では、聖良が陸の腕に触れていた。

「……………聖良さん……………」

『……………ソイツぁ……………!』

陸から放出されるベリアルのは、宿主に触れた聖良も侵食せんと闇を伸ばしてい
る。

だがそれが聖良を蝕む前に消失させているのは、彼女の胸の輝きから発せられた鎧の
ような、光の膜だった。

『……………リトルスター……………!』

思い返してみれば、聖良も理亞を慮り、一人悩んでいた。

妹に対する強いその想いは、確かにリトルスターを発現するには十分だ。

「……………あなた方の狙いは……………これですよね……………」

巨大な宇宙人達を見上げ、聖良は自身の胸に手を当てながらそう言う。

聖良がリトルスターを発現したという事は、彼女にもダークネスファイブに狙われる理由が出来るという事。

奴等が狙ってきたリトルスター保持者は、理亞だけではなかったという事だ。

『へえ……妹の方と違って理解が早いじゃねーか……』

理亞を乏しめるような物言いをするグロッケンに少しむつとしたような表情をした後、再び顔を引き締めては言う。

「私がそちらについて行けば、この場では誰にも手を出さずに引き下がってくれれば約束してくれますか？」

「っ……!! 聖良さん……!!」

「姉様……?」

思わず耳を疑う陸と理亞。

だが聖良は振り返らず続ける。

「約束してくれますか？」

巨大な宇宙人相手に臆する様子を見せず、それどころか有無を言わせない威圧的な態度で圧を掛ける。

その剣幕に流石のグロッケンも気圧されたのか、若干言葉に詰まった後口を開いた。

『……いいぜ。約束してやるよ』

そう言った後、物理的に温度の低い視線を理亞に向ける。

『……どーせ、どつちかが欠けりやあ残った方はぶつ壊れちまうしな』

聖良も理亞も、互いに互いを想い合っているからこそリトルスターを発現した。

そしてそれが故に二人の星は脆い。思いやる存在がいなくなってしまうえば、リトルスターは形を成さなくなる。

つまり、リトルスターの始末が目的の奴等からすれば、一人攫えば無問題な訳だ。

「そうですか……」

「姉様！」

ならば迷う事はないといった様子で歩き出そうとする聖良を呼び止める理亞。

聖良は振り返ると、今にも泣きそうな顔をする妹に対し、一言。

「……ありがとう」

「え……?」

「こんな私でも、姉様と呼んでくれて……」

儂い笑みと共に紡がれたその言葉には、どれほどの感情が籠っているのか。

それらを全て読み取る間もなく、聖良は再度グロツケン達へと足を向ける。

「待って……私……まだ何も……」

グロツケンの目論見通り、徐々に理亞の胸に宿った輝きは弱々しく萎んでいく。

それから目を逸らすように前だけを向いた聖良は、再び歩を進め——また立ち止まることとなる。

「……………」

「……………行かせるかよ……………」

先程聖良が陸にしてきたように、今度は陸が聖良の手を掴んで引き留めたのだ。

「……………ここで妹から離れたら、アンタはずっと自分を肯定出来なくなる……………」
 から絶対行かせねえ……………」

絶対に放すものかと握るその手に力を籠め、顔を上げる。

「……………どうして……………貴方がそこまでやる理由は——」

「言いましたよね」

初めて。前のようにゼロに身体を奪われてではなく、陸自身の意思でしつかりと視線を重ねた。

他の力に頼らなくていい、陸の意思だけでやらなければいけない事だから、必要のないベリアルノ闇は身体の奥底に押し戻す。

「今まで聖良さんが積み上げてきた事は……………聖良さんにも否定はさせないって」

話の流れで零した口約束かもしれないが、約束は約束だ。

改めてその事を口にした陸に、決意に固まっていた聖良の瞳が微かに揺れ動いたよう

に感じた。

「・・・それに・・・」

元の色を取り戻した双眸を理亞に向ける。

別段彼女と特別な関りがある訳じゃない。むしろ会話した事もないくらいだ。

だが、今彼女が考えていることぐらいは、分かる。

「・・・・・・・・聖良さんがいないと、アンタの妹も前に進めねえんだよ」

『陸の言う通りだ』

続きエックスも言葉を連ねてくる。

『君が理亞の事を心の底から想っているという事は、ここ数日間でハッキリと感じ取れた。だが君はそれが故に妹の声を聞き逃してしまっている。・・・嫌な事を思い返させるようで悪いが・・・ラブライブでの失敗も、それが起因していないとは言い切れない』

氷に閉ざされたデバイザーの中から発せられる、理亞の想いを知っているからこそその声。

『またその失敗を繰り返すことなど誰も望んではない。だからこそ君が今すべきなのは自分を犠牲にする事じゃなく、理亞の声を聞いてやることじゃないのか？』

今回の Saint Snow の失敗は、互いが互いをよく見えていなかった事に起因

している。

どんなに親しくて、互いの事を知り尽くしていても、言葉にしないと伝わらない事がある。

それはかつて陸が仲間に伝え、改めて仲間に伝えられた事。

その事を伝えた後、エックスは理亞に言葉を向けた。

『理亞……、伝えてやれ。君が聖良の事をどう思っているのか。……これから君自身がどうありたいのか』

「っ……」

鹿角姉妹が改めて互いの顔を伺い合う。

「わ……私は……」

『みすみす言わせるかよ！』

今まで何度も送り込んだ刺客が失敗するところを見てきているのだ。グロツケンも同じ轍を踏むほど馬鹿ではない。

口籠る理亞を好機と捉えたか、希望の芽を潰すかの如く白銀の切っ先を聖良へと振り下ろす。

「姉さ——」

『伝えろ！ 理亞ア!!』

陸が盾になるように聖良の前に出たのとほぼ同時に、エックスの叫びが理亞を一喝する。

グロツケンの手刀が到達すれば、聖良は間違いなく理亞の手の届かない場所へと行ってしまう。

その事実と、エックスの言葉に焚きつけられてか、意を決したように眉を吊り上げる。「私は……姉様にいっぱい感謝してる！ だから……！！」一人でも大丈夫なんだって証明したい！ もう心配いらぬよって、安心して欲しい！！

赤く燈った彼女の胸の光に乗り、理不尽に襲いかかった絶望を切り裂く理亞の願いが響く。

「理亞……………」

『ぐおあぁッ!!』

それに呼応するように聖良のリトルスターは輝きを増し、現出した光の盾がグロツケンを弾き飛ばす。

「……………」

「……………エックス……………これって……………！」

想いの連鎖はそれだけでは止まらなかつた。

理亞と聖良のリトルスター。そして陸のウルティメイトブレスレット。大地のエク

ステバイザーまでもが共鳴し合うように光を帯び始めたのだ。

『これは……結びの光……!』

「そうか……この地球でも、ユウト君と同じ……」

何か悟ったような顔をした大地が鹿角姉妹を交互に見やり、首を縦に振る。

「エックス。今度は行けるよね?」

『ああ。……だが、まだ足りない。……理亞、聖良』

あと一押し、そう言わんばかりのエックス。

『一度負けている手前、こんな事を言うのは変な感覚がするが……もう一度、我々を信じてはくれないか? ……その想いが、何よりも私達の力になる』

「……うん」

そんなこと言われなくても信じている。そう言った様子の理亞が静かに、されど力強く頷く。聖良も態度には出さずとも、そう思ってくれたようで。

その証拠に二つの星は二人の胸を離れ、青の輝きはウルティメイトブレスレット、赤の輝きはエクステバイザーへと、それぞれ吸い寄せられていく

——友情を結び、未熟を融解せし勇氣の炎——ウルトラマンメビウス

——邪を払い、高潔を貫く群青の誉れ——ウルトラマンヒカリ

『……!』

瞬間、エクステバイザーを覆っていた氷は焼き尽くされ、ブレスとゼロアイにも光が満ちる。

『陸……行ける』

『大地！ 行けるぞ！』

『よし！ 陸君！』

「はい！」

変身可能になったところで、身体のダメージが抜けた訳ではない。

だがこうしてリトルスターが譲渡されたという事は、二人はまたゼロとエックス、陸と大地を信じてくれたという事。

それを、裏切る訳にはいくまい。

『シエア！』

『イイイイツ……サアアアアア!!』

閃光が立ち昇り、再度二人のウルトラマンが函館の街に降臨する。

『ぎい……！ 立ち上がったところで力の差が埋まったまるか!!』

『グオオオオオオオオオオ!!』

嫌な流れに入った事を悟ったのか、戦況を覆される前に叩こうとするグロツケンとデスローグ。

つい先程自分達を打ちのめした強大な敵が接近するも。ゼロとエックスに物怖じする様子はない。

『フッ!』

光りの巨人と、闇を纏った宇宙人。

暗い寒空の下、三度目の衝突が勃発したのであった。

『デエエエエヤ!!』

『オオウラ!!』

身体を蒼く染め上げたゼロが操るゼロランスと、グロツケンの二刀の刃が激突し、炸裂音が響く。

『ケケケ……………やっぱ動きは鈍いみてえだな……………』

『ぐっ……………』

スピードと超能力が強化されるルナミラクルゼロでも、この寒さでは存分に能力が発揮しきれない。

それでも他の形態よりは早く動けるので攻撃はいなせるが、それも限界があるだろう。

『んだよ？ 結局負け晒しに来たのかよオイ！』

『うおお……』

ゼロランスの腹で振り下ろされた切っ先を受け止めるが、強化された奴の剛力を受け止めるにはルナミラクルではパワーが足りない。

『レボリウムスマッシュ！』

『ッ……！ 甘いんだよオ！』

掌の衝撃波で引き離そうとするも、それを押し返す冷気が吐き出され、胸元を強襲してしまう。

『ヒヤハハ！』

『フッ！』

ゼロデイフェンダーでグロツケンの回し蹴りを受け止めると、その勢いを利用して後方へと飛びのく。

そして再度ゼロランスを手にとると、放った光の刃を指揮するように振るった。

『ミラクルゼロスラッガー!』

『アーマードインフェルノオ!!』

グロツケンも負けじと火炎を放出するが、他方から迫るゼロスラッガーの大群までは処理しきれない。

『ぎいい．．．!』

背後からゼロスラッガーの一撃を貰い、のけ反った身体に突っ込む蒼い影。

『デエエエイヤア!』

『がふあつ．．．!』

ゼロの繰り出した鋭い刺突が腹部を捕らえ、グロツケンは思わず悶え——たかのように見えた。

『．．．．．なんてな』

暗黒魔鎧装によって守られたその身体には、殆どダメージが通っていないかった。

『．．．パワーが足りないか．．．』

『シャオラア!』

『『があつ．．．!』』

お返しだと言わんばかりに薙がれた剛腕が直撃。堪え切れずに殴り飛ばされるゼロ。

『．．．．．お前、さつき努力は否定させないだのなんだの言ってたよな．．．』

後頭部を掻くような仕草を見せながら、グロツケンはゼロに冷ややかな視線を送る。

「……だからなんだ」

『……いや。もうとつくに自分の事を否定してる奴にそんなこと言うなんざ……おもしろーなつて思つてよ』

「ああ？」

ねめつける陸の視線を軽く流し、自分達を見上げる聖良の方に視線を移す。

『ラブライブ……だったか？ こいつあもうその色んなものを捧げてきた大会で負けたんだろ？ その時点で積み上げてきたモノなんざ皆崩れ去る。自分が招いた失敗で全部失つたんだ。自分で自分……いや妹との二人分の努力を否定したも同然だろ』

ケタケタと笑いながら綴るその言葉は、確かに筋は通つているようにも思える。

『はっ……馬鹿言つてんじゃねーよ』

だがそれでも、ゼロは強い意志を含ませたまま言葉を返した。

『一度や二度の失敗でなくなつちまうほど、人の想いは軟じゃねえよ』

「……ああ。……それに、積み上げてきたモンはスクールアイドルとしての努力だけじゃない」

ただ一人、聖良からスクールアイドルとしてではなく、鹿角理亜の姉としての話を聞いていた陸は知っている。

「聖良さんが妹のことを想って積み重ねてきたものは、絶対になくなったりしねえ」
形として残るものではない。けど、確かに存在するもの。

聖良に自覚はないが、周りには、理亜にはしつかりそれが伝わっているから。だからこそ理亜はそれを返そうとしているから。

「Saint Snowとしての努力も同じだよ。積み上げてきたものは何一つ変わらず残ってる……。その二人の意思は……」

一拍入れ、冷氣から解放されたAquoursメンバーを見下ろす。

「……アイツ等が背負って歌ってくれろ」

『俺達はその想いを背負って、繋げるために戦ってたんだ。……だから、負けられるかよ！』

ここで陸達が負ければ何もかもおじゃんになる。聖良は自責に捕らわれたままだし、理亜は前に進めない。

だから……諦めてなるものか。

『う……。……おとおお!!』

刺さるような痛みと冷氣を跳ね返し、ルナミラクルの限界を超えた力でゼロランスを振り回す。

『そいつ等の想いも背負って戦うだあ？　しやらくせえ！　負けた時点でそいつ等にや

もう夢も形も何も残っちゃいねえ!』

それを受け止めて鏢迫り合いの形になったグロツケンは今も笑う。

『それに他人に想いを託すなんざ、自分の無力さを棚に上げてワガママを押し付けてるだけに過ぎねえんだよ!』

『そんな訳があるか!!』

『グウオオオオオオオ!!』

『なああッ……!!』

突如吹き飛ばされてきたデスローグが衝突し、派手に転倒するグロツケン。

『友に託す事も……立派な夢の形だ!!』

『ゴモラアーマー! アクティブ!!』

『グウ……オオオオ……!!』

エックスの纏う青い重厚な鎧——ゴモラアーマーの鉤爪から放たれた振動波が追撃を掛ける。

「俺もずつと無理だつて言われてた夢があった。けど、諦めなかったからこそエックスが、アスナが、皆が! 一緒に無茶な夢を追いかけてくれる! 夢を託せる仲間が出来たんだ!!」

グロツケンとデスローグ。そしてAqoursとSaint Snowに対し大地

も言葉を重ねる。

そして並び立った二体の巨人は、確かな頼もしさを持って十一人の少女を見下ろした。

『託して、託される。それが仲間というものだろうか?』

『コイツ等が俺達を信じて、託してくれた想い……もう無駄にはしねえ!!』

『——俺達（私達）は……テーマ等（貴様等）を倒す!!』

刹那。

ゼロ達の意味に呼応するかのようにウルティメイトブレスレットが輝き、クリスタル部分から二つの蒼い光球が浮き出てくる。

『……?』

「これ……、聖良さんと、姉ちゃんの……」

ヒカリと……アグルの力。

この蒼い光は、共に他者を頼り、寄り添う事を知った二人から託されたものだ。

「これは……」

それはエックスと大地も同じ。

炎のように暖かい光が、ゴモラアーマーに覆われたX字のカラータイマーから優しく漏れ出ている。

『理亜の……炎……』

理亜の心情を想い、気に掛け、前に進ませる手助けをしたエックスだからこそ託された力。

『……エックス……』

『……ああ』

……でこの光が呼び起こされた理由を悟った二人が互いに顔を合わせ、頷く。

『君達の託してくれた想い……決して無駄にはしない!!』

『ここからが真のクライマックスだ。……さあ、行くぜ!』

二つの光をブレスの中に押し戻すように、二つに光を叩く。

瞬間、蒼い閃光が爆発するように四方に伸び、ゼロの身体を包み込んだ。

『フウウウ……』

プロテクターが金色に変わり、青と銀の胴体には黒のラインが走る。

これがルナミラルクの力に、アグルとヒカリ、二人のウルトラマンの力が上乗せされた強化形態……その名も——、

『グランナイト……ゼロ!!』

「ゴモラアーマー！ バーニングフェイス！」

方やエックス。

理亞のリトルスターから発生した炎が赤熱と共にゴモラアーマーを包み込んでいく。

「……この光……物凄いエネルギーを感じる」

『当たり前だ。なにせ、私が信じた理亞の光なのだから』

「調子のいいことばかり言っ……まあでも、今回はそういう事にしといてあげるよ。……さあ、行くぞエックス！」

『もちろんだ！』

炎を吹き飛ばし、姿を現したゴモラアーマーの色は——真紅。

「『スカーレットゴモラアーマー!!』』

「『『ハアア!!』』』」

北の大地に唸りを上げさせ、蒼と紅の巨人が同時に駆け出す。

『チツ……だが、パワーアップしてんのはそっちだけじゃねーんだよ!!』

『グオオオオオオオオオオ!!』

デスローグが両腕で漆黒の業火球を生成し、突撃するゼロとエックスに投げつけてくる。

『大地!』

「ああ、分かってる!」

その火球を受け止めたのは、ゼロに先んじて前に出たエックス。

両腕を交差し、紅のゴモラーマーから噴出した灼熱の炎で攻撃を打ち消した。

『シャアア!』

群青の閃光が迸る。

一瞬にしてグロツケンとデスローグの背後を取ったゼロが、展開されたウルティメイ
トブレスレットの先端から伸びた蒼い光剣を音速で振り回す。

『ナイトビームセイバー!』

『グオオオツ……!』

『ケツ……！ 凍えろオ!!』

速くなったならまた凍えさせて動きを鈍くすればいい。そんな目論見で吐き出したであろう冷気がゼロに迫るが――、

『ツ……!! な——ぐあつ……!』

吹き付ける吹雪に屈する事もなく、ナイトビームセイバーがグロツケンの胴を横薙ぎにする。

『同じ手を何度も喰らうか!』

今のゼロには、大海の化身であるアグルの力が宿っている。

温かさを湛え、全てを包む偉大な海の前には、冷気など可愛いものだ。

『ウオオオオオオオ!!』

冷気と、そのエネルギーを全て刃に集め、横一文字に振り抜く。

『アブソリユートゼロレイド!!』

『ガああツ……!! なあツ……!!』

迸った極零の刃を受け、ピシリと音を立ててひび割れた自身の鎧を目にして驚愕の声を漏らすグロツケン。

『ハアアアア!!』

『ぐつ……ううう……!』

驚きを嘸み締める暇など与えず、ゼロは即座に斬り掛かる。

グロツケンが防御に回す両腕の刃を上回る速度で振るわれる光剣は、次々にその銀色の身体と紫色の鎧を切り刻んでいく。

『そう好きなように……させるかよ!!』

『くっ……!』

ならばと多少のダメージは覚悟で突進を仕掛け、無理矢理剣戟の網を突破したグロツケンの一撃が通ってしまう。

が、

『イイイイイツ……サアアアアア!!』

『グはあぁッ……!!』

奴の死角から懐に潜り込んできたのはエックス。

スコップのように地面を抉りながら振り上げられた真紅の鉤爪が鳩尾を直撃し、グロツケンの身体は空中に打ち上がった。

『グオオオオオオオオオオ!!』

『フウッ!』

右腕の鎧を大剣へと変形させたデスローグの切っ先が迫るも、元の防御力が更に強化されたスカーレットゴモラーマーは苦も無くそれを受け止めて見せた。

そして流れるような動きで両腕の爪をデスローグの胴に突き立てると――、

『グレンネイルアツパー!!』

『グオオオオオオツ……!!』

莫大な熱量と振動数を誇る衝撃波が解き放たれ、鎧の胸部にひび割れを走らせると共に豪快に弾き飛ばした。

『ぎい……!! デスローグ!!』

本格的に焦りを覚えたのか、グロツケンは冷気でゼロとエックスを牽制しつつデスローグの傍らに寄る。

そして互いに目配せを交わした後、尋常ならざる熱量の爆炎と絶対零度の柱が立ち昇った。

『双天煉獄氷斬!! (グオオオオオオオオオ!!)』

地面から突き出てきた無数の氷の槍と、それに続く形で放出される無数の火焰球。

『ハアアア……!!』

迫る合体技を前に、左腕のウルティメイトブレスレット、両腕のゴモラアーマーを掲げ、頭上でエネルギーを増幅させる。

その光が収束した後、ゼロは腕を十字に組み、エックスは真紅の爪を突き出した。

『リキデイトシュート!!』

『フルフレイム・・・ゴモラ超振動波!!』

絶大なエネルギーが双方の中間で衝突する。

『『『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』』』

光線干渉の余波で揺れる大気は、まるで空間そのものが意思を持つて震えているかのよう。

『何だとツ・・・!!』

だがやがてその均衡は崩れ、徐々に蒼雷と熱波の光線が氷炎の槍を押し返し始める。

『クツソ・・・!! 何でだ・・・!! 何でテメエ等はいつも・・・!!』

『分からねえのか?』

『人が人を想い、繋がり合おうとする心。それが天と地とを結ぶ光。その光とユナイトするからこそ、私達は光の巨人と呼ばれるんだ!』

『・・・こつちにだつて意地があんだ・・・負けてたまるかアアアアアアアアア!!!』

怒号と共に余力の全てを叩き込むグロツケンだが、その身に纏った鎧は絶大な光を受け続け、崩壊を始める。

『仲間を支え、尊ぶ想いがいつだつて俺達に力を与えてくれる!』

『それこそが・・・貴様が嘲笑った彼女達の力・・・想いの力を舐めるな!!』

『グウウ・・・オオオオオオオ・・・!!』

デスローグも維持と根気で踏ん張り続けるも、増大し続けるエネルギーを前に皮肉な事にも鎧は徐々に崩れていく。

『これが俺達が友から受け継いだ力・・・』

『・・・そしてこの星の人々の持つ、希望の力だ!!』

そう言い放った直後に輝きが増し、光線はグロツケンとデスローグに直撃。凄まじい閃光と共に轟音が夜空を疾走した。

『ウ・・・ウウウウウ・・・』

『あ・・・ぐあ・・・』

ゼロとエックス。人間の想いを乗せた二人の渾身の光線を受けた二人の鎧は完全に砕け散り、白銀と武骨な身体が露わになってしまっていた。

ふらふらと立っているのもやつとな様子で、もう力が残っていないのが伺える。

『・・・ケケ・・・想いだの希望だの・・・、んな事がどこまで通用するかなア・・・』

『・・・?』

魔鎧装は完全に消滅したというのに、何故かグロツケンとデスローグの身体からは闇の瘴気が漏れ、空に昇っていく。

へ・・・この感じ・・・

『ヒャ・・・ハハ・・・もうじき陛下は復活する・・・その時、テメエ等は知

ることになるだろうよ……そんなモンは真の絶望の前にや無意味だってなア……
訝しむゼロの眼前でそこまで言った後、糸が切れたようにふらりとバランスを崩し—

『破滅の……未来で………待つてるぜエエエエエエエエエエエエエエエエ!!』

『グオオオオオオオオオオオ!!』

真後ろに倒れ込んだ二人の身体が、次の瞬間には轟音と共に爆散する。

ここにダークネスファイブの一角が二人、氷結のグロツケンと炎上のデスローグを討ち取ったのだった。

A w a k e n t h e p o w e r

言葉に出来なかつた想いが。今日この日まで積み上げてきた努力と感謝が。

それら全てを詩として歌い、曲として表現する。

刹那として生まれた一つとしてない輝きを、永遠の思い出とするために。

『……雪の結晶……か』

大決戦から数日経ったクリスマス夜の夜。

夜景の中で歌う十一人の少女達を見つめ、エックスがそう零す。

『……理亜が言っていたんだ。聖良が卒業してもスクールアイドルは続けるが、Saint Snowはもう続けないとな』

こうして彼女達がAquoursとSaint Snowの十一人で歌う事を決めた理由。それは定かではない。

だが、

『形として永遠に残すより、思い出として永遠に残すことを選んだ。Saint Snowという、理亜と、聖良だけの雪の結晶を、決して消えない輝きにするために』
 曲が止み、最後のボーリングと共にパフォーマンスが終了する。

内の一人、氷の妖精のような衣装に身を包んだ理亜をエックスは再度見つめる。

『彼女がまた、新たな雪の結晶を見つけたために……な……』

Saint Snowとしての思い出は、ここで区切りを打った。

理亜も聖良も、これからは新たな道を進む。

やり切れなかつた想いを、A q o u r s に託して。

それは世界の片隅で起こつた、ささやかな聖夜の物語。

百十六話 あと何回

『エックス。そいつ等の事任せるぜ』

『ああ、了解した』

人目につかない山林の中。

陸とゼロは、これからこの地球、ないしは宇宙から離れる三体の巨人を見上げていた。

『悪いなゼロ……。俺等が不甲斐ねえばかりに』

『エックス。貴方にも迷惑を掛けます……。』

『気にするな。一度とはいえ、共に戦った仲間だろう？』

対グロツケン&デスローグ戦でグレンとミラーナイトが負った傷は深い。なので一度ウルティメイトフォースゼロの秘密基地であるマイティベースで傷を癒す必要がある。

エックスはマイティベースまでの同行兼、光の国への報告だ。

『俺が行けりやベストだったんだが……。生憎今ここを離れる訳にはいかないから

な』

『分かつているさ。彼女達の事、頼んだぞ』

『ああ、恩に着る。大地。今回は迷惑かけたな』

『ほんとだよ。・・・まあでもいいもの見れたし、ブラックキングのスパークドールズも戻ってきたから良しとするよ。陸君、ありがとね』

「ああいや、なんか成り行きで持ってただけ何で、気にしないでください」

ほとんど存在を忘れつつあったブラックキングのスパークドールズ。

春にナツクル星人から奪い返したものだだったが、無事あるべきところに戻れて何よりである。完全に忘れ去られる前に。

『では・・・そろそろ行くとするか。陸、聖良と理亞によろしく言っておいてくれ』

「りよーかい。大地さん。今回はほんつとうにウチの馬鹿が迷惑かけました」

『オイ。馬鹿つて何だよ』

「いいよいいよ。もう気にしてないから」

『それに今に始まった事じゃないしな』

『毎回一言多いんだよお前は！』

何かする訳でもなく、三人の巨人と一人の少年が談笑している。傍から見ればかなり不思議な光景だろう。

『じゃーな陸』

『離れた場所からですが応援していると、千歌達に伝えておいてください』

『問題ねえ。アイツ等ならブラックホールを吹き荒らしてくれるぜ！』

「伝えとく。お前等もお大事にな」

『ここで見た彼女達の成長を、私は一生忘れる事はないだろう。いい経験を見せてもらった。．．．また会おう』

その言葉を最後に、エックス、グレン、ミラーナイトの三人は夜空へと飛び立っていった。

『．．．行つたな』

「．．．．．だな。また家が静かになる」

文句こそ垂れていたが、基本家で一人だった陸にとってグレンやミラーナイトが同じ屋根の下にいるというのも新鮮で、悪くはなかった。

なんだかんだ言つて、少し寂しくなるなという気持ちは確かにあるのだ。

「．．．．．まー、なんつーか．．．．．」

ごーん、ごーんと、遠方にある寺の鐘が鳴らす音色が耳朶に触れる。

「．．．．．こんな形で年越しすんのは初めてだわ」

——新年、明けましておめでとうございます。

『……やはり慣れんな……』

ダークネスファイブの母船。

自分達の会合場所である広間の中で、空席となった二カ所を一瞥した極悪のヴィラニアスは、呆れとも哀愁とも感じ取れるような溜息をついた。

『おや……、珍しいですね。貴方が仲間の死を悼むとは……』

『馬鹿を言うな。ただ部屋が広く感じただけだ』

『それを寂しがつているというのではないのか……?』

会話こそ可能だが、ムードメーカーのグロツケンが欠けているというのはやはり調子が狂わない気がしないでもない一同。

会話すら不能なデスローグでさえ、今では可愛げがあったかのように感じる。

『……彼等を失つても、我々のやることは変わりません。全てはベリアル陛下御復活のため、ここで止まる訳にはいかないのです。……己の身が滅びようとも……』

『ふうむ……』

『ああ、分かっている』

スライの言葉に頷いたヴィラニアスは、一層引き締まった表情でここにはいない自分達の帝王の姿を思い浮かべた。

『……一度は志半ばで果てた身だ。二度目の生こそ、吾輩の命を全うしてくれる……』

「陸―。それこつち持ってきて―」

「これか？ よいしょつと……」

少し埃臭い倉庫の中で、ボンベやらのダイビング道具を整理する陸と果南。

どうして新年早々こんな事をやっているかというと訳があるのだ。

「ごめんね？ こんな面倒事押し付けて。年末思ったより時間なくてさ」

「いいよ。どうせ親父達帰って来ねーし」

果南の家はダイビングショップ。冬はダイビング自体がシーズンオフなため、やることはこのような備品の点検のみ。

ただ今日は果南の両親が用事で家を空けているらしく、一人でやるのも寂しかったらしいのでこうして陸が呼ばれた訳だ。

「今日練習何時からだっけ？」

「お昼くらいに学校集合じゃなかったっけ？ それまでには終わらせないとね」

家族の団欒を考えて午前中は空けているが、正月とてA q o u r sの練習は行われる。

ラブライブ優勝に向けて一日も努力を欠かす訳にはいかないのだ。

「ふう．．．」

そんな訳で作業する事小一時間。大方の仕事も終わり、最後の酸素ボンベを定位置に戻した陸が一息つく。

「おつかれー．．．って、もうこんな時間か．．．着替えてくるから、ちよつと私の部屋で待ってて」

倉庫の外からひよこりと顔を覗かせた果南がそう言い、頷いて返す陸。

「あーうん。分かった」

手についた埃を払った後に倉庫に別れを告げ、慣れた仕草で果南の部屋に向かって行った。

へお前の親、こんな時にも帰って来ねーんだな

数千年の間親の事もろくに知らないで生きてきたゼロがこんな事を聞くのもなんだが、純粹に疑問に思ったので問いかけてみる。

まあ、理由はそれ以外にもあるのだが。

「まーな。日本にいる方が珍しいくらいだし、俺もここ数年まともに顔見た記憶がねーよ」

へ………そうか……

ふと嫌な感覚が脳裏を過った。

いくら何でも、陸の両親に関する情報が、滅多に帰って来れない事を抜きにしても少なすぎる。

家には写真一枚として置いていないし、物心つく前から陸と一緒にいたはずの曜でさえ両親の顔を見た事が無いという。

へ………それに

疑問はまだ尽きない。

去年の夏。まだ六人だった頃のA q o u r sがダークネスファイブに連れ去られたと知り、奴等の母船へ乗り込んだ際の事。

そこで奴等が見せつけてきた、スカルゴモラに怯える幼き日の陸の映像。

へ・・・何故アイツ等は、俺と出会う前の陸の映像を持っていた・・・？
 ゼロと一体化しているという以外で、ダークネスファイブと陸に接点はないはずだ。
 スカルゴモラの様子を記録していた際に偶然映り込み、これまた偶然ピンポイントで
 陸の映像だけが残っていたとは考えにくい。

——— オウガがそいつに陛下の力を植え付けたのにはもつと別の訳があるんだ
 ゼエ・・・。

それに加え、函館でグロツケンが残っていた言葉。

陸がベリアル力の力をする事も、まるで計算の上だったというのだろうか。

へ・・・まさか、ずっと陸を・・・？ だが何故・・・？

「・・・ん？」

どんどん嫌な方向に進んでいくゼロの思考を遮ったのは、いつの間にか果南の部屋に
 辿り着いていた陸が漏らした声だった。

それに反応し、ゼロも陸の視線の先に意識を向けると、そこには——、

「・・・インストラクターの・・・、資格履修・・・？」

果南の机の上で積み上げられていた本を手に取り、見出しの文字を口にする陸。

「……この本、全部資格関連のやつだな……」

ダイビング趣味で購入したものかとも思ったが、それにしても冊数が多い。

表紙からペラペラとめくっていくと、線や付箋で印がされているページがいくつも見受けられた。

それらのページに決まって記されているのは、ダイビングのインストラクターの資格について。

「……………」

そして、海外での資格研修について。

どのページでも、海外で資格を取得する方法などにチェックなどが施されている。

「お待たせー」

「……あ、ねーちゃ……………え？」

着替えを終えて部屋に入ってきた果南にその事について問おうとした陸だが、彼女の恰好を見た瞬間に言葉が出なくなる。

そんな陸の反応が期待通りだったのか、満足そうに笑みを作った果南は、普段は滅多に着ないであろうその衣服の袖を翻しながら言い放った。

「や、練習いくよー」

「……いやいや、おかしいだろ……」

浦女に集合したA q o u r sメンバーの恰好を見て、思わずそう口にするというか、ツッコまざるを得ない陸。

「なに？ 似合わない？」

「……そういう事ではないけど……」

陸以外の皆が身を包んでいるのは振袖。

似合わないという事はないし、むしろ皆似合い過ぎてて怖いくらいなのだが……、何と云うか、こう、直接的に言うならば場違いだ。揃いも揃って元日からいきなり正月ボケだろうか。

「……つかゼロ、お前さつきから静かだな……」

『……！ あ、いや……まあ、ちよつとな……』

普段ならこういう時真つ先に意見するはずのゼロが、今回は珍しく無言だ。

疑問に対する返答もどこかぎこちなく、怪しい。

「なんか考え事か？」

『……そんなところだ』

やはりどこか臭うのだが、その言葉に嘘は感じられなかったのでこれ以上は言及しないことにする。

「ダイヤさん達まだかな？」

「Oh! Uターンしてきたみたいデース！」

皆から少し離れた場所にいた鞠莉がそう声を上げた直後、黒塗りのお高そうな車が浦女の校門前に停車する。

「お待たせ——！」

後部座席に隣接したドアの窓が開き、姿を現したのは恐らくこの車の手配主であろう黒澤姉妹と——、

「皆さん。明けておめでとうございます」

「げ！ ホントに来た！」

「悪い？」

何とSaint Snowの二人。鹿角聖良と鹿角理亞だった。

年末に聞かされた練習の助っ人をしてくれるという話はほとんど冗談だと思っていたのだが、まさか本当に北海道からはるばる来てくれるとは。

「……………ていうか、その恰好……………」

再開の余韻もここまで。練習前に晴れ着姿でいるA q o u r sメンバーを見た理亞にジト目でツッコまれ、聖良には目を丸くされている。

「それじゃあ皆さん!」

そんな二人の視線も気にせず、横並びに整列した九人は、千歌の音頭の後に声を揃えた。

「……………明けましておめでとうございます!」……………」

「……………」

振袖を理亞に引き剥がされ、いつも通りの練習着にコスチュームチェンジした九人が校庭でフルフルと震える。

「アンタ達やる気あんの?」

「いいぞもつと言ってやれ」

ちなみに鹿角姉妹は薄手のジャージ姿だというのに震えることなくピンピンしている。流石は道産子と言ったところだろうか。

「いい学校ですね。私達と同じ、丘の上なんですネ」

校庭から浦の星女学院全体と、ここから一望できる景色を見渡した聖良がそう口にする。

陸は一人だけ函館観光をしていないので詳しくは分からないが、あの二人の学校も丘の上に設立されているのだとか。

「うん。海も見えるし！」

「でも、無くなっちゃうんだけどね」

「えっ……?」

曜の言葉を聞き、驚いたように目を見開く聖良と理亞。

「何? 教えてなかったのか?」

「うん……、教えるような事でもないし……」

まあ確かにそんな簡単に扱っていい事象ではないだろうし、教えて変に気を使わせてしまうのも忍びないので、千歌の判断は間違っではない。

「今年の春、統廃合になるの。だから……ここは三月でThe End」

ほんの少し儂げな雰囲気を感じながら、鞠莉が廃校の件を知らない二人に説明を入れ

る。

「そうなの……?」

「でも、ラブライブで集まったら、生徒が集まれば……」

「……ですよね。私達も、ずっとそう思ってきたんですけど……」

もう割り切ったかのような表情を作りつつも、哀愁交じりの視線をグラウンドに向けるAquours一同。

「……そうだったんですか……」

「あ、でもね! 学校の皆が言ってくれたんだ! ラブライブで優勝して、この学校の名前を残してきて欲しいって!」

「浦の星女学院のスクールアイドルが、ラブライブで優勝したって。そんな学校がここにあったんだって」

何かを掴めなかったからこそ発露した新たな夢。何かを諦めざるを得なかったからこそ見つけ出した、皆の望み。

現実からの妥協だと言われるかもしれないが、それでも彼女達にとっては、自分達の心を照らしてくれる光だから。

「……最高の仲間じゃないですか! 素敵です!」

感銘を受け、目を輝かせてはそう言う聖良。

初対面時の彼女からは仲間なんて言葉が出て来るなどとは想像しにくいが・・・、本人に言ったら怒られそうなので黙っておく。

「だったら、遠慮しないよ」

理亞も考えている事は同じなのか、引き締めた表情を向けてくる。

「・・・マジ?」

「マジ」

「マジずら?」

「マジずら」

「マジですか・・・?」

「だからマジだって言ってるでしょ!」

「仲いいなお前等」

一年生四人は函館の一件ですっかり打ち解けたようであり、何よりである。

ともあれ、ラブライブ決勝を目前に控えたこの時期に実力のある Saint Snow の協力が得られるのは心強い。

「・・・こうして時って、進んでいくんだね」

不意に鞠莉の零した眩きが耳朶に触れる。

どこか寂し気な響きを含んだその声は、ただただ静かに、閑散としたグラウンドに溶

けていくのであった。

「ふやうう．．．．．」

「お正月ですからね。皆さん」

いざ練習に突入したはいいが、あまりの体たらくに聖良に呆れ気味の溜息をつかれてしまう。

「どういう事ですの．．．．．?」

「だいぶ身体が鈍ってるって事よ」

先程の振袖姿での集合で薄々察してはいたが、やはり皆心のみならず身体まで正月モードのままだったらしい。

体力お化けの果南を除き、A q o u r s メンバーは総じて突然の運動に息を切らしていた。

「身体を、一度起こさないとダメですね。校門まで坂道ダッシュして、校舎を三周してきてくれませんか?」

「「えええっ?!」」

「さっき言ったよ、遠慮しないって」

「気張れー」

一人蚊帳の外から殆ど感情の籠っていない応援を飛ばす陸。

ちなみに陸も一緒に走ってはいるが、例え身体が鈍つていようとゼロがいるので全く問題は無い。

「はい! スタートです!」

聖良の掛け声で皆渋々腰を上げ、浦女へと続く道を駆け上がり始める。

「これ、やりがいあるよね♪」

重い足取りで坂を登るメンバーの中、やはり一人だけピンピンしている果南が先頭を取り、瞬く間に後続との距離を開いていく。

「.....」

遅れて少女達の後ろを走っていた陸が、目を細めてそんな彼女の背中を見据える。

(.....海外研修.....)

誰にも相談していかなかったという事はそれなりの事情があるのかもしれないが、このままでは蟠っているものが晴れない。やはり聞いておくべきだろう。

「せんば——ずらあ?!」

そう決めたら後は速かった。

泣きつこうとしてきた花丸には一瞥もくれず、陸は果南に追い付くべくその速度を上げた。

「あれ？ 今日の花丸ちゃん助けなくていいの？」

一足先にゴール地点で待機していると、一人だけぶつちぎりで校舎三周を終わらせた果南が到着する。予想はしていたがやはり一着か。

「・・・なあ、姉ちゃん」

「ん〜？」

陸が恐らく今頃グラウンドでヒーヒー言っているであろう花丸を助けずにここにいるのは訳がある。

今日の前で水の入ったペットボトルを傾ける彼女にとあることを聞かためだ。

「・・・・・・・・姉ちゃんはさ、卒業した後にか・・・・・決めてんの？」

陸が口にしたその問いに反応し、ぴくりと果南の形のいい眉が揺れる。

「……もしかして、見ちゃった？」

軽い苦笑いに、陸は申し訳なきげに頷いて返す。

「……ごめん……」

「いや、どうせ陸にはその内言うつもりだったから別にいいけどね」

後頭部を搔いて「見られちゃったかあ……」と続けながら、どこか照れくさそうにも見える仕草を見せる果南。

そして次に彼女が語った事は――、

「私ね、卒業したら海外でインストラクターの資格、ちゃんと取りたいんだ」

求めてはいたが、心のどこかで拒んでもいた答えが返ってくる。

「……そっか」

果南の海好きは小さい頃から既知の上だし、それを生業にしたいと思っていたのも勿論知っていた。

だがそれでもやはり、本人の口から改めて告げられると感じるものも違って来る。

「……何？もしかして寂しいの？」

「うっせ……」

にやけつ面を向けられ、反射的に顔を逸らしてしまう。

そういうえば、「言葉にしないと伝わらない想いもある」だったか、鞠莉とすれ違ってい

た時の果南に陸が告げた事は。

過去にそんな事を言ってしまった故か、ここで言葉にしなかつたらいつか後悔するかもしれない。そんな気持ちが頭を過つて——、

「……………寂しく思つてなかつたら、わざわざ聞きに来るわけねーだろ……」
 久々に言葉にしたかもしれない、正直かつ純粹な感情。

素直に口してみたものの、やはり付き合ひの長い手前慣れない事をやるというのはこつぱずかしい。

果南にはどう受け取られたのか、少し気になつて逸らした視線を戻してみると——

「……………う……………」

「いひひ……………」

珍しいものが見れた事に加え、寂しがっている事が知れて嬉しかったらしく、余計に笑みを深められていた。

「陸はそういうところあるよね。どれどれ、お姉ちゃんが慰めてあげよう♪」
 「だあああ！ いちいち抱き付くな！」

いつも通りハグで捕縛され、どこのとは言わないが柔らかい感触を感じる。

反抗的な態度は見せつつも、やはり心地よく思っている自分もいて。

あと何回、こんなやり取りが出来るのか。そんな不安を抱いているのはきつと陸だけではなはずだ。

だがそれでも終わりと別れは、一步、また一步と近づきつつあるという事もまた、改めて感じざるを得ないのだった。

百十七話 星を探して

「理事?」

聖良に課された校舎三周も終了し、体育館に場所を移した一行。

休憩中に両親からの電話を受け取っていたらしい鞠莉の話に注目を寄せていた。

「Off Course! 統合先の、学校の理事に就任して欲しいって。ほら、浦の星から生徒もたくさん行く事になるし、私がいた方が……皆も安心できるだろうからって」

「マジか……」

陸の学校も統廃合が決まっているので、編入先は千歌達と同じ。

つまり陸も今の浦女の皆同様、同年代の女の子が理事長という不思議な光景を味わうかもしれないという事だ。

「……理事?」

「鞠莉ちゃん、浦の星の理事長でもあるの」

「えええ!!」

浦女の特殊な理事情を知らなかった理亞が、ルビイの説明を受けて驚いたように声を上げた。

「そういえば、初めて鞠莉と会った時もこんな感じだったか。あの時の千歌、曜、梨子、ダイヤの四人の驚き具合は今でもはつきり覚えている。」

「じゃあ、春からも鞠莉ちゃん一緒に学校に？ A q o u r s も続けられる？」

「いや、それ留年したみたいだし」

「そもそもその時にやもう鞠莉さん高校生じゃないしな」

頓珍漢な事を言う千歌に陸と曜のツツコミが入る。

「まあでもしかし、統合先で不安も多いであろう浦女の生徒たちにとって引き続き鞠莉が理事というのは確かに心強いだろう。」

「そう思った刹那、まさかの言葉が鞠莉から発せられた。」

「大丈夫。断ったから」

「「えええっ！！」」

「先程よりさらに大きな驚愕の声が体育館に反響する。」

「理事にはならないよ。私ね、この学校卒業したら、パパが薦めるイタリアの大学に通うの。……だから、あと三か月。ここにいられるのも」

「……………」

果南のみならず、鞠莉も。

しかも、二人とも海外。卒業後は簡単には会えなくなるのは確かだろう。いつかは来るはずの別れを、ここにきて一気に実感するようになった。

「では」

気付けば夕暮れ時だ。

Saint Snowの二人による監督時間も終了し、今は聖良と理亞のお見送りに沼津駅の前に集っていた。

「・・・てか、今日来て今日帰るんすねアンタ等」

「もつとゆつくりしていけばいいのに」

わざわざ北海道から内浦まで出向いてきたというのに、一日と滞在せずに帰ってしまいうらしい。日帰り旅行にしても距離が遠すぎる気がするのだが。

何かすぐに帰らなくてはいけない特別な事情でもあるのだろうか。

「ちよつと、他にも寄る予定があるので」

「予定？」

「ルビィ知ってるよ！ 二人で遊園地行くんだって！」

「言わなくていい!!」

なんともまあ可愛らしい理由で安心したような拍子抜けしたような。顔を赤らめて声を荒げているのを見るあたり提案者は理亜らしい。

だがしかし、遊園地のアトラクションに乗る Saint Snow というものが全く想像つかないのだが。

聖良に関しては俗世離れたイメージがあるので尚更だ。妹の方は置いておいて。

「これ、姉様と二人で考えた練習メニュー」

陸にそんな失礼な事を考えられているとは露知らず、理亜はその練習メニューとやらが記されたメモを千歌に手渡す。

「うわっ!! こんなに!!」

夏合宿の時ダイヤが立てたメニュー並みに過酷な内容を見て軽く慄く善子。

「言ったよ。遠慮しないって」

「ただの思い出作りじゃないはずですよ」

浦の星女学院全校生徒の想い。そして、やり切れなかった Saint Snow の想い。

彼女達の背中を押すものは大勢いる。

「必ず優勝して。．．．信じてる」

「うん！」

それを改めて実感した千歌が力強く頷く。

「がんばぁ．．．ルビィ！」

「．．．．．なにそれ」

「ルビィちゃんの必殺技ずら〜」

「びぎい．．．．．」

「技だったの!?!」

新たに理亜を加えた新生一年生ズを中心に発生した笑いが、夕陽の色と共に空へ溶け込んでいく。

つかの間の休息の時間が、終わりを告げようとしていた。

紅に燃える夕日が、水平線へと沈んでいく。

聖良達の見送りが終わった後はあの場で解散となり、砂浜に移動した二年生四人組はどこかものの寂しい雰囲気を感じながらその景色を眺めていた。

「……イタリアかあ……」

「そうね。きつとそうなるのかもあつて、どこかでは思つてたけど……」

「実際、そうなるよね……」

別に何も不思議な話ではない。鞠莉は元々イタリアに留学していたところを無理言つて浦の星の理事長に就任したのだ。だから、今回はただ戻るだけ。

「……あと、三ヶ月もないんだよね」

「ラブライブが終わったら、すぐ卒業式で……」

「鞠莉ちゃんだけじゃないわ。ダイヤさんも、果南ちゃんも……」

ハッキリと進路の事を聞かされた二人とは違い、ダイヤが卒業後にどうするかは分からない。

だがそれでも、これまで通りの関係ではなくなることだけは確かだ。

「春になったら、もう皆と一緒に学校帰ったり、バス停で皆とバイバイしたりもなくなつて……、制服も、教室も……」

場所も、格好も、周りの人間関係も何もかも変わる。

同じ学校になる二年生と一年生でさえ、これまで通りの関係でいられるかは分からない

いのだ。

「っ……！」

不意に飛び出た千歌が、木の棒で砂浜をなぞる。

描かれた文字は……、『Aqours』

スクールアイドルアイドルとして駆け出した際に、運命のように出会った始まりの文字。

「Aqoursは……どうなるの？」

「三年生……卒業したら……」

「分かんない。……ホントに考えてない」

曜と梨子の問いに、千歌はシンプルかつ曖昧に答えた。

「なんかね、ライブが終わるまでは、決勝で結果が出るまでは……、そこから先の事は、考えちゃいけない気がするんだ」

未来への想いは確かに人の背中を押す。だが時にそれは不安となり、足枷となる事があるのも確か。

だからこそ、未来の事は考えない。今を全力で輝くために。

「全身全霊、全ての想いをかけて、ライブ決勝に出て優勝して……ずっと探してた輝きを見つけて！それが、学校の皆と、卒業する鞠莉ちゃん、果南ちゃん、ダ

イヤさんに対する礼儀だと思ふ」

始めは自分一人の願いだつた輝く事は、いつの間にか皆のための願ひとなつた。

それを聞いた梨子は何か言うより早く千歌に歩み寄り、そんな皆のリーダーの頬を挟んで柔らかに笑ふ。

「むう……なに……？」

「賛成」

それに続き、曜も。

「大賛成！」

その気持ちは皆一緒。

身を寄せながら笑う合う三人の少女の影が砂浜に伸び、後方でそれを眺める陸の影と交わる。

『……………オオオオ……………』

人知れず、その影の中で紅くつり上がった双眸が煌いた刹那——、

「……………っ……………！」

ズキリと、陸の頭に痛みが走つた。

「ああ、うん。それじゃ」

とある事情で家に置いてある衛星電話を耳に押し付けていた陸が通話を終了させる。
「春前に一回帰って来るらしいぞ。親父達」

『・・・ホントに存在してたんだなお前の『両親』』

「勝手に亡き者にすんじゃねえ」

今電話を受け取ったのは現在太平洋上にいる陸の両親。

普段電話をよこしてくるなどと滅多にないのだが、新年だったことを思い出して慌てて掛けてきたらしい。

『・・・まあそれはいい。とにかく一安心だ』

「・・・? 何が?」

『何でもねえよ。こつちの話だ』

訳が分からない状況は続行中だが、どうやらやつと普段通りのゼロに戻ったらしい。

いつもは頼まれなくてもベラベラ話すくせに、今日はやたらと静かだったので少し心

配したのだが、杞憂だったらしい。

「お前、脳筋のくせにたまに何考えてるのか分かんないことあるよな」

『うるせー。．．．それより頭痛の方はどうだ？』

「まだ痛い．．．」

海辺で千歌達を見守っていた辺りからだろうか、その頃からずつと頭が痛む。

原因こそ分らないが、あの三人と別れてから痛みは強くなる一方だ。

「風邪でも引いたか．．．？」

ウルトラマンと一体化しているのに風邪とか引くものなのだろうか。そんな事を考えながら一応常備している薬を手取る。

『よくそんなちっちゃい粒で治そうと思えるよな．．．．．訳分かんねー』

「．．．よく分からん力であっさり傷治しちまうウルトラマンに言われたくないんだが．．．」

多分殆ど科学やら超能力頼りで光の国には薬と言うものが存在しないのだろう。そんな事を考えながら、薬を喉奥に流し込むための水をコップに注いでいた時だった。

「ツ．．．！！」

手に持っていたコップが落下し、砕ける音と共に水が辺りに飛散する。

『．．．陸？』

「う………があ………!!」

真つ先に割れたガラスのコップを処理するでも、飛び散った水を拭き取るでもなく、陸は自分の頭を抑えた。

『おい！ 大丈夫か?!』

「……何だ……これ………」

今まで体感した事もないような鋭い痛みが頭を駆け巡る。

割れそうだとか、刺されているようだとか、そんな言葉では形容できないような感覚。少なくとも、今さっきまでの痛みとは比べ物にならない。

「ぐううツ………!!」

『おい………り——ツ?!』

呼びかけを続けていたゼロの声が突如として止まる。

だが今の陸にそれを気にする余裕はなく、自分の瞳が紅く染まっている事にも気付かずに苦しむだけだ。

『何故今ベリアルの方が………?』

頭痛と共に、殺意に近いどす黒い何かが身体の奥底から湧き上がってくるのを感じる。

その波に飲まれ、ほとんど陸の意思とは関係無しに動いた腕が辺りの物を破壊せんと

振るわれたその瞬間、

「りーくちやーん!!」

ガチャリと勢いよく玄関のドアが開く音が耳朶に触れ、一緒に聞き慣れた緊張感のな
い声が家の中に飛び込んでくる。

「うあ………。」

不可解な事が起こったのはそれと同時だった。

今の今まで陸に襲いかかっていた頭痛は嘘のようにサッパリ消え去り、殺意が湧き上
がってくる感覚ももうしない。

「………え?」

『……? 力が収まった………?』

「陸ちや——つて、何コレ大惨事じゃん!!」

驚いたような声に反応して顔を上げると、みかん色の髪が目の前で揺れていた。

「……千歌? なんで家に?」

「え? ああいや、ちよつと今から出かけない? 皆で!」

「………は?」

女の子九人、野郎一人と、二つの意味で肩身が狭い空間を作り出したワーゲンバスが雨の中道を進む。

千歌に言われるがままに家から引きずり出され、乗り込んだのがこのワーゲンだった。

「まさか鞠莉の運転する車に乗る日が来るなんてね」

「それは私のセリフ。まさか果南やダイヤを乗せて運転する日が来るなんて」

運転手は何と鞠莉。なんでも海外で必要だから、誕生日を迎えた際に取ったそうなの。

リズムカルな振動を刻む車内では、鞠莉の危なっかしい運転に怯える者だったり、既に適応して窓から見える景色を楽しむ者がいたり様々だ。

「……………」

そんな中、ただ一人黙りこくって窓枠の外の曇天を眺める陸。

「…………お前、今は何ともないのか？」

（怖いくらいな…………どうなってんだ）

もしかしなくても、先程の異常な頭痛はベリアルが原因だろう。

だが、どうして戦闘時でも、感情が高ぶってもいかなかったあの瞬間に現出したのか、それが謎だ。

その理由を考えていると、以前耳にした不穏な言葉が脳裏を反芻した。

—— オウガがそいつに陛下の力を植え付けたのにはもつと別の訳があるんだぜエ……。

ダークネスファイブの一人であるグロッケンが遺していったこの言葉。

先程の発作のようなものも、奴等の目論見通りだったとでもいうのだろうか。

へ……とにかく、理由が分かるまではベリアル力は封印だ。前にも言ったが、これ以上はお前自身がどうなっちゃうか分かんねえ

(……分かった)

ここへきて、ようやく自分の身体がベリアルに力に蝕まれ始めているという事を如実に勘づるようになった。

恐らくほどなくして、ベリアル軍との最終決戦も始める。そうなったら、陸自身は一体どうなっていくのか。

そんな一抹の不安も乗せて、鞠莉の運転する車は進んでいくのであった。

「雨……ですわね」

「何をお願いするつもりだった？」

山を登った車が止まり、どこからか取り出した星座早見表を手に取った鞠莉が悲し気に空を見上げる。

何でも星を探しに行くとかそんな話になっていたらしいが、空は生憎の曇天模様。当然星なんか見えもしない。

「……決まってるよ」

「ずっと一緒にいられますように？」

「これから離れ離れになるの？」

聞く話によると、ダイヤも推薦が決まった東京の大学に進学するらしい。

これにより、三年生全員が卒業後にはここを離れ、バラバラになる。

「だからだよ。だからお祈りしておくの。いつか必ず……また一緒になれるようにって！……でも」

肝心の願いを託す星は、厚い雲の向こう側に隠れてしまっている。

鞠莉のその祈りを、妨げるように。

「……無理なのかな？」

「なれるよ！」

鞠莉が目尻に溜めた涙を零しかけたその時、千歌の声が社内には反響した。

「絶対一緒になれるって、信じてる！ 鞠莉ちゃん、それいい？」

「え？」

「千歌ちゃん!!」

半ば強引に鞠莉から星座早見表を受け取った千歌は、何を考えたか一人雨の降る社外へと飛び出し、天に向かってそれを掲げる。

「この雨だって、全部流れ落ちたら……必ず、星が見えるよ！ だから晴れるまで、もっと……もっと遊ぼう！」

次第に千歌の周りには他のメンバーが集まり、同じように星座早見表に手を添えた。

「晴れなかったら……神様も勘当デース！」

自分達のリーダーがこの宇宙の救済神であるウルトラマンノアの光を宿した特異点だという事は露知らず、そんな罰当たりな事で笑い合う少女達。

「……ノア勘当されるってよ」

『……地球滅ぼす気がアイツ等……』

今ノアの力が完全消滅したら、再びクライシスインプクト直後の状態に戻ってしまう可能性もあるというのに。

流石にそんな事態になるのはノアも避けたかったのか、それとも神様が空気を読んだのか、次第に空を支配していた雲は退き、暗闇に広がる星の海が姿を現した。

「わあああああ．．．！」

「すごい．．．本当に晴れた．．．!!」

やっと見えた星空に感嘆の声上がる。

やがて手を合わせ、各々の願いを星に届けようとする彼女達を、ただただ、陸とゼロは見守り続けるのであった。

『時は近いようですね．．．。あと一步と言ったところででしょうか』

床に投影された映像を見てほくそ笑むスライ。

映像の中では、合わさった四人の影の中で、帝王の瞳が禍々しく煌いているのが確認できる。

『……次は私が行こう』

何かを決意したジャタールが名乗りを上げた。

スライとヴィラニアスもそれに異論はないようで、むしろジャタールが一番適任だろうと言った瞳を向けている。

『ヒョホホ……』。どれ、久々に挑戦状を叩き付けてくれるわ……』

百十八話 覚醒の兆し

「そうそう。こつち気を付けて」

「千歌ちゃんも、そつち大丈夫？」

浦の星女学院校舎の校門前では、華やかに彩られたアーチの建設が進んでいた。

「よつと・・・」

「こつちは大丈夫。固定して」

「そいつ！」

トン、カン、と小気味の良い音が鳴らしたトンカチが杭を地面に差し込み、アーチを支えるためのロープを真っ直ぐに張らせる。

「ふう・・・出来た♪」

「完璧ね」

普段なら授業を行っている時間にも拘らず、千歌達がこんな日曜大工のような事をやっているのには訳がある。

「うん！ これまでの分の感謝も込めて、盛大に盛り上がろうよ！」

「ヨースロー！」

三人が見上げるアーチに描かれた、「閉校祭」の文字。

浦の星女学院に感謝と、別れを告げる。校内最後の思い出作りだ。

「な、な！ なんか週末に浦女で閉校祭ってのやるらしいぞ！」

ハイエナ並みの嗅覚で浦女の閉校祭の話を嗅ぎつけた陸のクラスメート達が、女子校に入れるまたとないチャンスを受けて目の色を変えている。

そんな様子を、日頃その浦女に入り浸っている陸は半目で眺めていた。

（……アイツ等に俺の交友関係知れたらどうなるんだろうな）

〈殺されるんじゃない？〉

クラスメートにはA q u o r sのマネージャー（笑）をやっている事はおろか、千歌、果南と幼馴染であることすらも教えていない。

当たり前だ。女子に縁がないこいつ等の前でそんな事が知れた日には集団リンチ

待ったなし。最悪あの三人にも迷惑が掛かりかねない。

(・・・てか、お前今日はこっちにいるんだな)

〈そりやそうだろ。またあの発作が起こったらどうするつもりだ〉

ゼロの言う発作というのは、元日の夜に陸が発症したベリアルが原因と思われる頭痛の事。

あれからも何回か同じ症状に見舞われているが、未だに解決の糸口が見つからないままである。

〈最近のお前はベリアルの方の力のせいで身体能力が上がってんだ。もし暴走なんかした日
にや、普通の人間がただで済む訳ねーだろ。教室血祭りになるぞ〉

ごもつともなので黙る事しか出来ない。

幸いなのは、今のところA q o u r sメンバーの前では発作は起きていないため、陸の異常は知られてはいないという事。

彼女達はラブライブの決勝を控えている。余計な心配はさせたくない。

〈そーいや、今日のヘーコーサイ？だったか？　その準備には顔出すのか？〉

(・・・来いとは言われてるから、多分こき使われると思う)

正直発作の事もあるためあまり気乗りはしないのだが、半ば強引とは言え約束されてしまったので行くしかない。

よつて本日も浦女行き決定だ。

「……なんじゃこりゃ」

そんな訳で放課後になつたので浦女に顔を出してみれば、校門でいきなり倒れたアーチのお出迎えである。

「で、なんでお前いるの？」

「バウツ！」

それに加え、何故かここにいないはずの高海家の愛犬、しいたけが白い布を被つた状態で陸の足元に寄つてくる。

「あ！ 陸ちゃん！」

とりあえず美渡にしいたけが迷子になっているという連絡を入れると、校舎の方から陸を呼ぶ声が一つ。

目線に向けてみればそこにいたのは千歌。陸を来た事を確認して駆け寄ろうとしてくるが、倒れたアーチに気が付くとすぐに青ざめた顔になる。

「……何があつたんだこれ？」

「あ……あははは……」

逢魔が時が徐々に町を包み込み始めた頃。

「器物破損、被害甚大……アーチの修復だけで十人がかりの四時間のロス」

「だって……」

「そもそも、何でしいたけちゃんや学校にいるの……？」

「なんか、美渡姉散歩してたらリード放しちやつたみたいで……」

生徒会室に呼び出され、ダイヤから説教をされる千歌、梨子、花丸の三人。

普通は全然笑える雰囲気ではないはずなのだが、ダイヤの額に押された「承認」判子の文字でどうしても口元が緩んでしまう。

大方以前の陸と同じように、鞠莉にやられたのだろう。

「いい訳は結構です。とにかくこの遅れをどうするか……閉校祭は明日なんですのよ？」

「うう……頑張ります……」

「それで済む話ですか？ もう下校時間までわずかしありませんわ」

「そろそろ終バスの時間すら」

「準備、間に合うかなあ……」

「だよね……」

計画通りに進んでいれば下校時間までに間に合っていたらしいのだが、それも予期せぬアクシデントで水の泡に。

過ぎた事をいつまで言っても仕方ないのですぐさま作業に移りたいのだが、彼女達の言葉の通りタイムリミットまであと僅か。

控えめに言っただーにもこーにもどうにもならない大ピンチだ。

「OK. そういう事であれば、小原家が責任をもって送るわ。全員」

立ち込めた暗い空気を吹き飛ばしたのは、説教されている後輩を部屋の隅で眺めていた鞠莉の一言だった。

「本当すら！！」

「でも、全員って？」

「準備で学校に残る生徒全員。もちろん、家にもちゃんと連絡するようにね」

理事長の粹な計らいに、沈みかけていた千歌達の表情も明るいものへと戻る。

「ありがとう！ 皆に伝えてくる!!」

感謝の言葉を口にするや否や、喜びのままに生徒会室から駆け出ていった。

「必要なモン揃ったか？」

「うん。バッチリずら」

「そ、んじゃさっさと行こうぜ」

善子に頼まれた備品の買い出しを終え、すっかり暗くなつた道を花丸と並んで歩く。

両腕から下げる袋に収まり切らず、少しその姿を露呈させているのはメートル単位で買わされた黒い布。他にも装飾品やらなんやら、使用用途が不明すぎる物を大量に買わされた。

「・・・アイツ一体何するつもりなんだ・・・？」

「それは明日になってからのお楽しみずら」

花丸は件のしいたいけ騒動が起こるまでは善子と共に作業していたらしいのだが、問いかけてもこれの一点張りである。

まあどうせ顔は出す羽目に遭うのだろうし、その祭に確認すればいいか。

「閉校祭……、学校の皆が企画した事なんだっけか？」

「そうだよ。最後に感謝の気持ちを込めて、近所の人達も一緒に、パーツと盛り上がるって」

「ほーん……」

浦女関係者のみで抑えておけば、明日陸の同級生が浦女に雪崩れ込むこともないだろうに。

そう思ったが、嬉しそうに語る花丸の表情を見て意見を引つ込める。

これが彼女達の楽しみ方で、感謝の形なのだ。突つ込むのは野暮と言うものだろう。

「……そういえば、先輩、明日は何か予定あるずらか？」

「閉校祭に任意という名の強制参加だが」

「そうじゃなくて！ 閉校祭で何か予定はあるのって聞いてるずらー！」

「……いや……ありませんけど……」

来いと言われてはいるが、具体的に何をしろとは言われてないので特にこれと言った予定はない。

そんな返答を聞いた花丸は、どうしてか少し緊張した様子で次の言葉を紡いだ。

「じゃ、じゃあ……、まあ、先輩と一緒に回ってもいいずらか……？」

「別にいいけど」

特に断る理由も見つからないので二つ返事で快諾。

だが陸の態度がどこか気に喰わなかったのか、何故か不満げに膨れられてしまう。

「……え？ 何？ なんか変なこと言った？ 言ったはずら？」

「……もう少し悩むとか戸惑うとかの反応が欲しかったすら」

なんともまあ、文学少女らしい答えに安心しつつも落胆する。

正直そんなラブプロメチックな事陸に求められても無理だ。

「何に期待してんだお前は。ほら、さっさと行くぞ」

「ずら。……えへへ……」

拗ねたと思いきや急にご機嫌に。女の子って本当に分からない。

もし妹とかがいたらこんな感じなのだろうかと思いつつ、浦女に向けて再び足を進め

始める。

〈多分あと八人くらい同じ事考えてる奴がいると思うから、用心しとけよ〉

(……どゆこと?)

真に用心すべきは陸と花丸が一緒にいるのを見た時の同級生の反応だと思うのだが。

「……そういえば、先輩と二人きりなるの、結構久しぶりな気がするすら」

「……あー……、そういやそうだな……」

思えば花丸の家で太平風土記を解説していた時以来だろうか。花丸と仲良くなったのも確かあれが切っ掛けだった。

「ルビイから聞いたんだが……、何か図書館とかで太平風土記漁ってるらしいなお前」

「コピー本だけどね。でも結構楽しいぞら」

何でも館長が花丸の頼みを聞き入れてわざわざ取り寄せてくれたとかそんな。常連にしても仲が良過ぎやしないだろうか。

「で？ 何か新しく分かった事でもあんの？」

国木田家にあつた太平風土記に記されていた巨人というのは、やはりノアの事なのだろうか。

千歌に宿っている巨人の事だ。出来る限り情報は知っておきたい。浦女までの暇つぶしがてら何か有益な情報がないか伺うとしよう。花丸も語りたそうな顔をしているので尚更だ。

「分かった事と言うか、気になる事なら……」

「気になる事？」

「うん。前先輩と一緒に解説した風土記に、銀色の巨人さんが描かれてたでしょ？」

丁度陸が気になっていた、ノアと思しき巨人の事だろう。

「・・・それについて何か？」

「ううん。その巨人さんの事じゃなくて、別の巨人さんの事すら」

「・・・別・・・?」

単に別の書物に描かれていた同一の巨人を勘違い・・・と言うのは花丸に限ってあり得ないだろう。

「・・・どんな巨人だった？」

陸の問いに、花丸は一拍置いて答えた。

「・・・黒くて、つり上がった赤い目をした巨人さんだったすら」

「・・・何?」

続き反応したのはゼロ。だがそうなるのも無理はない。

黒と赤の、つり上がった目の巨人——間違いなくベリアル的事だろう。

「・・・どうしてアイツが・・・」

太平風土記は大きく分けて二パターンある。

一つは過去に起きた事を未来に伝承するための歴史書。もう一つは、未来に起こり得るやもしれない事を記した預言書だ。

「・・・何が描いてあったんだ？」

ベリアルがこれまでこの地球に飛来していない事を考えるならば、太平風土記に記さ

れていた事は恐らく後者の未来の出来事。

これから復活するというベリアルを破る術が分かるかもしれない。そんな淡い期待と確かな緊張感を持って再度花丸に問う。

「記述は何も……描いてあったのはこれだけすら」

そう言うのと、撮影したらしいその絵を携帯の画面越しに見せてくれる。

そこに映っていたのは、燃える炎の紅の中で佇む黒い巨人。そして――、

「……なんだコイツ……」

黒い巨人――ベリアルの胸の辺りに重なって描かれた一つの影。

男かも女かも分からないが、少なくとも、それが人間だという事だけは理解できた。

「……ゼロも分からないか？」

『……いや……ないな……』

当然だが誰も心当たりはない。

まさかここに来て新たな刺客が出現するともいうのだろうか。

だがそれだとこの絵、まるでベリアルと一体化しているかのような描写の説明が付きづらい。

ならば……、

(……ベリアルが人間に化けた姿……とかか?)

花丸には聞かれないように、脳内だけでゼロと会話する。

〈・・・有り得なくはないが・・・、だとしたら一体誰が・・・〉

もしこの概算が当たっているとしたら、既にベリアルは陸達の近くにいて考えた方がいいだろう。

帝王とまで呼ばれたベリアル的事だ。復活の瞬間までただ指を咥えて大人しくしているとは考えにくい。

(・・・関わった奴等で怪しそうなものは・・・)

創作の世界での定番パターンなどで考えると学校の同級生などなのだろうが、零と出会って以降、陸の学校に転校生は来ていない。

浦女だとゼロと同時期に転校してきた梨子がいるが・・・あの時はベリアルの魂はまだ永久追放空間の中だ。

(・・・パツとは出てこないな)

〈当たり前だ。仮にお前の推察が当たっていたとしても、そう簡単に正体がバレるようなヘマを踏むなんざアイツに限ってあり得ないしな〉

普段敵の力など認めやしないゼロにここまで言わせる程の存在だ。そりゃあ一筋縄ではないだろう。

へだが俺達が一体化しているのが割れている以上、何かしら策を打ってくるのは間違いない

ないだろうな」

(「……………待て? 一体化……………?)

閃きが脳内を駆け巡る。

もしこの人間がベリアル本人ではなく、陸とゼロとの関係のように、ベリアルと一体化した者だとしたら——、

「ぐうう……………ツ!!」

思考を巡らせたその時、何者かがそれを拒むかのように頭痛が迸った。

「先輩!!」

『ぐ……………よりによって今か……………』

突然苦悶の声と共に頭を抑えた陸に驚く花丸と、焦りを声音に滲ませるゼロ。

(「……………ヤバイ……………」)

混乱しながらも心配そうにこちらを見やってくる彼女を見て、危機感を覚える。

これまでの発作が大事に至らなかつたのは、あくまでも周りに人がいない状況だったから。

もし今湧き出る殺意が花丸に向けられようものならば……………、

「……………花丸……………、離れろ……………!」

「え……………? で、でも……………」

喉奥から何とか声をひり出すが、何が起こったのか分かっていない花丸はただ立ち尽くすだけ。

発作の事が A q o u r s メンバーに知られていない事が災いしてしまった。

「があ……あ……あ……あ……！」

「……と、とりあえずどこかで一旦座って……」

『ツ！ 待て！ 花丸!!』

心優しい性格が陸とゼロの警告に勝ってしまったのか、花丸は苦しむ陸をどうにかしてあげようと手を伸ばした。

「ツ……！！！」

そして彼女の指先が身体に触れた刹那、瞳の真紅がより色濃く煌き――、

「うっ……！！！」

花丸の足が地面から離れ、その直後に鈍い音が鳴る。

何が起きたのかは、花丸の首元に伸びた陸の腕が物語っていた。

「……せん……ぱい……？」

首を掴み上げられ、その上電柱に叩き付けられた花丸の口から漏れる掠れた声。

「くう……あ……！！！」

明らかに人間のそれを超えている力で圧迫される気道が、少女の恐怖心と共に微かな空気を吐き出す。

『クソツ……仕方ねえ！ 身体借りるぞ花丸!!』

痛苦の表情から一転、カツと見開かれた花丸の瞳と、彼女の左腕に銀と青の光が宿った。

『デエエエイヤア!!』

「ツ——!」

花丸の身体に憑依したゼロが腕を振り払い、普段よりもずっと小柄な身体を翻す。

直後に鋭い回し蹴りが陸の胸元に叩き込まれ、胴体ごとその身体を薙ぎ払った。

「つ……、つ……、つ……、つ……」

ゴロゴロと地面を転がった陸の瞳が元の色を取り戻す。

『おい。大丈夫か?』

「ツ……! 花丸!」

ゼロが抜け、膝から崩れ落ちた花丸の姿が明瞭になった視界と思考に入り込んだ。

即座に駆け寄って抱き起した彼女が無事な事を確認し安心しつつも、すぐに別の感覚が身体の奥底から湧き上がってくる。

．．．．．今．．．．．何をしてた．．．？

「．．．．．」

無言のまま玄関を通り抜ける。

生まれてからずっと住み続けてきた我が家が、今のこの瞬間に限ってはとてつもなく重苦しい場所に思えた。

「．．．．．なにやっつてんだ俺．．．」

途方もない自責の念に駆られながら、崩れ落ちるようにベッドに倒れ込む。
また人を殺めかけた。

一度とならず二度までも、自らの手で守るべき者を傷付けた。

へ．．．．．あんまり気落ちするな．．．．．って言つても無理だよな．．．

花丸も何となく陸の状態を悟ったのか、許すどころか心配までしてくれた。

だが、ゼロの言う通りそれだけで吹っ切れられる程今回やってしまったことは軽くはない。

「……殺そうとしてたよな……」

「……それは……」

意識もあつた。あつた上で、陸は花丸に殺意を向けていた。理性も吹き飛んでダイヤごとギヤラクトロンMK3を殲滅しようとした時とは訳が違う。

思考がベリアル力の力に侵食されていたとはいえ、花丸を……

「……行くんじやなかつたな」

迂闊だった。

やはり発作の事を何も分かっていない状態で彼女達と関わるべきではなかつたのだ。

「……どうすんだ？ 明日の閉校祭……」

「行くわけないだろ……。今度こそ何してかすかかんねえのに……」

もしまた明日あの場で同じことが起きようものなら、誰かを気付付けるだけではなく、浦女の皆の感謝や思い出を台無しにしてしまう。

そんな事許される訳がない。

「……ごめんな、花丸……」

再度謝罪の言葉を口にする。

傷付けただけでなく、約束までも破ってしまう。先輩失格もいところだろう。

そんな呵責に浸りながら、明日は行かないと花丸に連絡を入れようとしたその時――

「、『随分と苦しそうじゃないか』

「『ッ……!!』」

邪悪な声が室内に反響する。

警戒し、身構えた次の瞬間、赤と青の影が目の前で揺れ動いた。

「ヒヨホホ……。久しぶりだな……。…」

「テメエは……。…」

どこか苛立たせてくる喋り方と、片手で弄ばれるノズル状の口。

その者がかつてA q o u r s メンバーを襲った敵だと認識すると、自然と身体がざわついた。

「……チャンパール……!」

『ジャタールだ!! シリアスな顔して堂々と名前間違えるんじゃないやねえ!!』

憤慨するチャンパール——もとい地獄のジャタール。ダークネスファイブの一角だ。

『いい加減名前を覚えろ全く……。わざわざ出向いた理由を忘れるところだったぞ……。』

「……。…」
「何しに来た」
ウルティメイトブレスレットに手を掛けながら陸はジャタールを睨みつける。

『大層な事ではない……。私は貴様等にゲームを挑みに来ただけだ』

『……ゲームだと……?』

『ああ。……言っておくが貴様等に拒否権はない。拒否すれば……。分かってい
るな?』

「……チツ……」

ジャタールの能力は対象を石化させる能力。石化させたものは、奴の意思一つで戻す
も砕くも自由自在。

一度でも人質を取られれば、こちらはもう何も出来ないのだ。

「……分かったよ」

『ギョポツ……。それでいい。舞台は……。ここだ』

ジャタールが手を叩き、虚空に映像が浮かび上がる。

『ツ……。!』

そこに映し出された場所は――、

『明日。この場所で行われる祭りと同時刻にゲームスタートだ。内容は……。開始
と同時に伝える』

――皆の想いが詰まった閉校祭の舞台となる、浦の星女学院だった。

百十九話 地獄惑星からの挑戦

「昨日は悪かった」

閉校祭当日。

既に生徒と外部の客で賑わい始めた浦女に着くや否や陸は花丸の元へ赴き、頭を下げた。

「大丈夫ずらよ。昨日も言ったけど、気にしてないから・・・」

そう言う花丸の首元には微かだが昨日の痕が残ってしまったている。

懐いてくれている後輩にこんな傷を作ってしまったのだと思うと、許して貰っているとは言え、罪悪感は禁じ得ない。

「今日はせつかくの閉校祭だよ？ そんな暗い顔してないでいっぱい回るずらよ」

「お、おい・・・」

そんな陸の心境を悟ったのか、明るく振舞っては腕を引いて出店の方へ進んでいく花丸。

彼女も胸に引つ掛かっているものが色々あるだろうに、それでもこちらの特殊な事情を悟って何も言つて来ず、むしろ励まそうとしてくれている。改めて花丸の優しさに触れた気がした。

「まずどこから行くぞら？ たこ焼きとかりんご飴とか焼きみかんとか、鞠莉ちゃんの新作シャイ煮もあるみたいぞら！」

『全部食い物じゃねーか……』

「……ああもう、奢つてやるから好きに回れ」

「いいの？ まるは出店全部制覇する気概でいるよ？」

「好きにしろ。先輩風びゅーびゅーに吹かせたい気分なんだよ」

だが、何度も裏切るように花丸には悪いが、陸はまだ純粹にこの祭りを楽しんでいない……いや、楽しんではいけない。

今日この場所でダークネスファイブが一人、地獄のジャタールがゲームとやらで挑んでくる。

「じゃあシャイ煮から行くぞらー！」

花丸だけじゃない。ここにいる皆、想いの形は違えど、この閉校祭を楽しんでいる。

だからこそ、それを壊しかねないジャタールの卑劣なゲームに打ち勝たなくてはいいのだ。

無邪気な後輩に腕を引かれながら、陸は決意を固めるのであった。

そんな様子を上空から眺める影が一つ。

「……プレイヤーは揃った」

ヒツポリト星人——地獄のジャタール。

その瞳に映しているのは仙道陸でもウルトラマンゼロでもなく、彼等と関わりの深い一人の少女。

「……情弱な地球人が何を選択するか……見物だな」

ステルス迷彩を施した宇宙船が浦の星女学院の真上で制止し、校舎を囲うようにエネルギーを放出していく。

「ヒョホホ……ゲームのスタートだ……！」

臙げに揺れたジャタールの影が虚空に消える。

閉校祭の開催は——、その直後だった。

「……………」

「?」 どうかしたずら?」

「いや……………ホント食うよなお前……………まあ別にいいんだけどさ……………」

小言を口にしながらか軽くなった財布をポケットにしまう。

現在、完全に冗談で言ったものかと思っていた花丸の全店制覇というのが現実になりつつあり、戦慄しているところである。胃袋にブラックホールでも隠し持っているのだろうかこの子娘は。

「……………ていうか、陸ちゃんずっと花丸ちゃんと一緒に回ってたの?」

現在来ているのは千歌達のクラス。このクラスは喫茶店をやっていたらしく、教室内には和風テイストのウエイトレス姿の生徒がチラホラ見受けられる。

「……………そうだけど……………何か問題でも?」

千歌としてその例外ではなく、周りと同じウエイトレス姿で接客に来てくれたはいいのだが……………何故か花丸と一緒にいる事を目撃されてからというもの、ずっと目を細めたままだ。

「えーつとまあ……別にそういう訳じゃないんだけど……」

口籠られても陸にどうしろというのだろうか。それともそんなに伝えにくいことなのか。

どちらにしろ煮え切らない千歌を見かねたのか、後ろから助け船が飛んできた。

「ちーか！ そろそろ交代の時間だよな？ 少し校内見て来なよ！」

声の主はむつ。千歌とは比較的親密な方のクラスメイトで、陸も夏に知り合っている。

そのせいなのか、彼女の言動は割と陸の前でも遠慮がない。

「恋つてのは度胸だよ！ 恐れずぶちかましてこいやあ!!」

「わー！ そーいうのじゃないからあ!!」

何のやり取りか陸にはサツパリだが、周りの連中は理解が出来たのか、くすくすと笑う者だったり妙な視線を陸と千歌に注ぐ者もいる。

「もう！ 皆して私の事からかつて……！！ 行こう陸ちゃん！」

発生した謎の空気が嫌だったのか、少し頬に赤みを差しながら衣装を脱ぎ去り、陸の手を取って教室から出ていこうとする千歌。

「仙道君も頑張つてね〜」

「何をだよ」

むつの冷やかしに適当に返しつつ、特に抵抗する気もないので千歌と二人妙に居心地の悪くなった教室から脱出する。

ちなみに花丸はそろそろ孤独な善子の手伝いがあるそうなのでたった今離脱した。ここからは千歌と二人だ。

「とりあえず適当に回ってみよっか」

「・・・だな」

一応くるつと校内は一周したが、花丸が食べ物にしか興味を示さない為、展示やゲーム等は全てスルーしている。

千歌ならそちらを選ぶだろうし、少なくともまた同じ店に行くという事はないだろう。

『おい千歌。曜と梨子は一緒じゃねーのか?』

「曜ちゃんは別の教室で果南ちゃんと出し物。梨子ちゃんは仕事終わったらどこか行っちゃった」

「ふーん・・・」

皆それぞれ閉校祭を楽しんでいるようで何よりである。

それほどまだこの学校でやり残した事があるという事なのだろうか。

「・・・・・・・・・・どうかした?」

「・・・あ？」

不意に、千歌が顔を覗き込んできた。

「・・・どうかしたって・・・、なにが？」

「なんか陸ちゃん・・・楽しくなさそう」

不安気な視線が刺さり、その瞳には確信に近い何かの色が映っている。

流石は幼馴染。ジャタールの事で警戒心を張り巡らしている事を薄々感じ取ったらしい。

「・・・また何かあったの？」

そしてやはりその問いが飛んでくる。全部一人で抱え込んで崩れた過去があるため、余計に心配されているのだろう

その優しさは素直に嬉しいものだ。

「別に何も・・・どうした急に？」

だがそれでも、今起こっている事を伝える訳にはいかない。

危険が及ぶかもしれないとかそんな仮定の話じゃない。今回に関しては本当に危険が及ぶからだ。

——ゲームの事を他の者に伝えた場合は・・・そやつのブロンズ像が完成するものと思え

昨夜、去り際にジャタールが残していった言葉。

ブロンズ像を好きに操れる奴が相手では、誰かをブロンズ化された時点で勝負は負け。

奴等の標的である千歌とて例外ではない。むしろ殺してからネクサスの光を摘出する事など平気でやってきそうな連中だ。

だからこそ、話す訳にはいかない。

『………賢明な判断だな』

「『ッ!』」

探してこそいたが、聞きたくはなかった声が研ぎ澄ませていた聴覚に響く。

へ………ブロンズ野郎……!」

周りの人間が反応していないのを見る限り、これは陸のみに向けられたテレパシーのようなもの。

隣にいる千歌に勘付かれないよう注意し、陸は警戒心の糸を更に張りつめさせた。

(……どこだ……)

周囲に巡らせる視線に映り込む赤と青の影。

それがこちらを挑発するように手招きするジャタールだと分かると、自然に床を蹴り飛ばしていた。

「え……？ 陸ちゃん!!」

「悪い……! 埋め合わせはする!!」

この閉校祭は絶対に壊させやしない。

戸惑う千歌の声を背に、陸は人混みの中を縫うように駆け抜けていった。

『わざわざご苦労だったな』

『そう思うんならここまで鬼ごっこさせんじゃねーよこのブサイク野郎』

ジャタールを追って校舎裏の塀を飛び越えた辺りで追いかけたのは終わった。

人格を表に出したゼロが目端を吊り上げ、閉校祭を壊してしまうやもしれん輩を睨みつけている。

『まずはまんまと罠に引っかけられてありがとうと言おうか……』

『……なんだと?』

ブサイク扱いされ、ゼロランスを突き付けられてもジャタールは余裕の表情を崩さな

い。

その一切瞳孔の動く様子のない瞳には何を映しているのか、まるで伺えない。

『あれを見てみる』

ノズル状の口を弄ぶのを止めた奴の腕が陸の後方を指す。

そこにあるのは陸が先程までうろついていた浦の星女学院だが、普段見る光景とは何が違う。

『ヒツポリトカプセル!!』

宇宙船から伸び、校舎を覆う透明な壁を見て驚愕の声を上げるゼロ。

『流石にカプセルの存在は知れ渡っていたか……まあ、かつて我が同族が猛威を振るったからな』

両腕を広げた語るジャタールに、以前ゼロから聞かされた不穏な単語と、その恐ろしさが脳裏を過る。

ヒツポリトカプセル。奴等ヒツポリト星人が所有する切り札的アイテムであり、その効果は閉じ込めた対象を一定時間でブロンズ像に変えてしまうという恐ろしいもの。

『チツ……!!』

それが浦女を覆っているということは、学校自体と、そこにいる全員が人質にとられたようなもの。

とにかく早急に対処しなければ、閉校祭を楽しんでいる皆がブロンズ像になってしまう。

『そんなモンすぐに叩き壊してやらあ!!』

あのヒツポリトカプセルがジャタール自身のものでないならば、あの宇宙船を叩けばカプセルは壊せる。

ウルティメイトブレスレットから出でたゼロアイを掴み取り、目元に装着しようとした刹那――、

『やらせるか!!』

『ッ!!』

当然横から割って入った巨大な槍が陸の腕を襲い、手の中に握られていたゼロアイを弾き飛ばしてしまう。

『ウオオオオオオオ!!』

『マグマ星人……!! テメエ!!』

間髪入れずに襲い掛かって来たのはサーベル暴君マグマ星人。

予期せぬ攻撃に気を取られ、校舎の方へ吹っ飛んで行ったゼロアイの行方を見失ってしまった。

『都合よくウルトラゼロアイだけすり抜かせやがって……!! この野郎!!』

『ぐおおッ!!』

ヤケクソ気味に身体を翻し、マグマ星人の鳩尾に鋭いニーキックを叩き込む。

不意こそ打たれたが正面切って戦えばゼロの敵ではない。追撃の裏拳を脇腹にめり込ませ、その黒い身体を薙ぎ払った。

『ブロンズ野郎!!』

変身を封じられた以上はジャタールを叩くしかない。

『ブエエエエエ——— だああッ!!』

構え直したゼロランスを手に地面を蹴るが、その直後に硬い感触の何かに激突。

見れば陸を閉じ込めるように半透明の壁が生成されており、ゼロの力で攻撃を加えても壊れる気配がない。

『クソッ……! 俺等まで……!』

それがヒツポリトカプセルだということは問うまでもなく理解できる。

マグマ星人と交戦している隙を突かれてしまった。

『おいブロンズ野郎! 俺達にゲームを挑むんじゃないのか!!』

『ギョポッ……! いつから……、ゲームのプレイヤーが貴様等だと錯覚していた?』

『なに……?』

憤慨するゼロに、ジャタールは驚愕の言葉を返してくる。

『貴様等はまだブロンズ像にはせん。そうなるかはゲームの結果次第……あの娘が何を選ぶかだ』

『あの娘……？ 今度は誰に手を出そうってんだ!!』

『それを貴様等が知る必要はない。言っておくがそのカプセルは内側からは絶対に壊せんで……さらばだ』

『待ちやがれこの野郎!』

全身全霊の力を込めてカプセルを叩き付けるも、奴の言葉の通り壁にはヒビすら入らない。

消えていったジャタールの影を見て、陸もゼロも歯嚙みをする事しか出来ないのだ。た。

「皆〜! 浦の星アクアリウムへようこそ〜!」

装飾により、まるで海の中のように青く染め上がった教室内。

海底を模したセットの裏からみとシーのマスコットであるうちっちーの着ぐるみを

装着した曜が登場し、観客である園児達に手を振る。

「元気かな〜?」

「元気——!!」

「は〜い!」

「ここは広くて深〜い内浦の海!」

別個体の着ぐるみを纏った果南の登場に再度園児達が声を上げる。

これが曜と果南の教室に海を再現しようという計画。同級生の皆が見るには退屈だろうが、園児達を喜ばせるにはピツタリだろう。

「よし、じゃあ皆も——」

——がしやああああん!!

「わあああああツ!!」

企画もシメに入ろうとしたその時、前触れもなく何かが砕ける音がし、それに驚いた園児達の悲鳴が響く。

「なこ……?」

曜も心臓を飛び上がらせつつ音源の方に視線をずらすと、床に錯乱するガラスの破片

と、窓が割れた原因であるらしい代物が目に入る。

「あれって……」

駆け寄って拾い上げたそれは、銀の中に赤と青のラインが走るメガネのような形状をしたアイテム。

陸とゼロが変身の際に用いている……ウルトラゼロアイだ。

「なんでそれがここに……?」

ゼロアイの存在を認識したらしい果南も、園児達を宥めつつ心配そうに疑問を紡ぐ。

「何かあったって事かな……?」

思えば今日は陸の姿を見ていない。

この閉校祭の裏で蠢く陰謀と戦っていたのかもしれないが、その彼の所持品がここに飛んできたという事は間違いなく何かあったという証拠だ。

「……私ちよつと校舎見てくるよ。曜はこの子達——」

『悪いがプレイヤーは貴様ではない』

不気味な声が反響すると同時に、教室を飛び出そうとした果南を捕らえるように半透明のカプセルが出現した。

ごちんと派手に額をぶつけた果南に駆け寄ろうとするも、すぐさま感じ取った気配に足が止まる。

『ヒヨホホ……久しいな。渡辺曜』

「……あ……」

「アンタ……!」

続いて出現した宇宙人の姿に曜は思わず身体を震わせ、カプセルに閉じ込められた果南は敵意を込めた視線を突き刺す。

その暗い赤と青の体色には、トラウマに近い過去の記憶が呼び起こされた。

『よもや忘れたとは抜かすまいな、あの日の事を……』

忘れたくても忘れられない、ラブライブ夏大会東海地区予選の日の出来事。

物言わぬ銅像と化した友人と、徐々に固まっていく自分の身体にただただ怯えた記憶が脳裏を過った。

『これは私からの挑戦だ。大切な者を秤に掛ける勇気が……貴様にあるかな……?』

幸せの色に満ちていた閉校祭の雰囲気、全く別の色に塗り替えられる。

恐怖と因縁が入り混じる中、地獄のジャタールの微笑が青く照らされた教室内に溶け込んでいった。

百二十話 拭えない憂い

「挑戦．．．．．？」

緊迫した空気が張りつめた教室内で、地獄のジャタールの顔を覗き込む曜。

『ああ。なに、難しい事ではない。貴様はただ選べばいいだけだ』

「選ぶって．．．．．なにを．．．．．」

最近はず宇宙人に対面する事も多くなってきたので慣れつつあったが、ジャタールに対しては過去に襲われた経験がある以上、どうしても足が竦む。

『ヒョホホ．．．．．』

おもむろに手を翳したジャタールの真横に空間ウィンドウが浮かび上がる。

「あ．．．」

思わず力の抜けた声が口から漏れてしまう。

だがそうなってしまうのも仕方はなかった。ウィンドウに映し出されたのは、果南同様半透明のカプセルに閉じ込められた陸の姿。

『ヒツポリトカプセルは閉じ込めた者をブロンズ像に変えられる．．．．．。以前の貴

様のような』

あとは分かっているなど言った視線を曜に向け、次の瞬間、ジャタールは恐ろしい選択を曜に突き付けた。

『友を取るか、想い人を取るか………貴様はどちらを選ぶ……?』

「ああもうクツソ！ 何で壊れねーんだよ!!」

一方浦女の校舎裏。

滅多に人目につかない塀の影に、ガンガンと陸がヒツポリトカプセルを叩く音が響く。

『……ヒツポリトカプセルは内側からじゃまず壊せねえ……。いくら俺等が中から叩いたところで脱出できるとは思えない……。』

「なんでそんなに冷静なんだよお前……」

とにかくこうしている間にも、ジャタールが何を仕出かしているか分かったものではない。

プレイヤーが陸達ではないという発言からして、奴の狙いは他の人間。恐らくだが A
ours members の誰かだ。

「何とかして壊せねーのかよ……」

『外側から強い衝撃を加えれば何とかなるかもだが……。期待は出来ねえな……。』
周辺ではマグマ星人が警備態勢を敷いている。脱出を防ぐために誰もここに近づかせないようになっているのだ。よって偶然ここを通った者に通った者に手を貸してもらうのは到底不可能。

『マグマ星人にバレずにここに近寄れる奴がいれば話は別なんだが……。そんな奴……。』

「なんか大変そうだね〜」

必死に突破口を模索していたその時、不意に聞き覚えのある、気の抜けた声音が耳朶を撫でた。

振り返ればそこにいたのは、笑みが気持ち悪いと言う点を除けば至って普通の男。

「よー陸君。そんなところで何遊んでるんだい？ 楽しいのそれ？」

閉校祭で購入してきたのか、鞠莉特製のシャイ煮を咀嚼するのはカドー星人オウガ。

かつては敵対していたのだが、今は色々あつて和解？している元ベリアル軍の宇宙人だ。

「いやー．．．まさか可愛い女の子達が可愛い衣装着て働いてるっていうへブンを無視してこんな所で一人遊びするクソ寒野郎だとは思ってなかったよ陸君。なに？ 普段モテてるからっていう勝者のおごり？ 非リアへの嫌味？」

「お前．．．．．、こっちはふざけてる場合じゃ——」

「ないんでしょ？」

空気を読まないマシンガントークに覚えた苛立ちと、それと同時に感じていた焦りを見透かすようにオウガは陸を制止する。

「冗談じよーだん。分かってるって。だから助けに来てあげたんだろ？」

状況を理解せずに冷やかしに来たものかと思つたが、どうやら違うようなので肩から少し力を抜く。

だが考えてみればオウガは元々ダークネスファイブの仲間だったのだ。ジャタールの能力を知つていても何ら不思議ではない。

『だったら話は早い．．．．．応援を呼ぶでも道具を使うでもいい。このカプセルを壊してくれ』

「あのねえ．．．．．」

何を思ったのか、ゼロの言葉に呆れたような反応を見せるオウガ。

さらには誰かを呼ぶでもなく、道具を手に取る事もせずに身を翻し――、

「ハアアアア！」

赤黒い闇が尾を引く彼の右足が目の前を通り過ぎたと思った次の瞬間、高い音を立て陸とオウガを隔てていた硬質な物体が碎け散る。

つまり、カプセルが壊れたのだ。

「……うえ？」

「……意外そうな顔するなよ。ボクだつてベリアル力の力を持つてるんだ。これくらいできるさ」

完全に予想外と言った顔をする陸に対し、やれやれと肩を竦ませて見せるオウガ。

だが考えてみればオウガは陸にベリアル力の力を分け与えた張本人。これくらい出来ても何ら不思議ではない。

素の戦闘力が低いというだけで、純粋な破壊力を持ち合わせていないという訳ではないのだ。

『……マグマ星人の監視はどうやって掻い潜つたんだ？』

「ボクはベリアル軍の裏切り者だよ？ あれくらい監視網に引つ掛かてるようじゃ今頃とつづくに殺されてるさ」

どうして常々自分の命が危機に晒されているこの状況でそれもケタケタと笑えるのか。やはり何を考えているのか分からない。

「まだボクにはやらなくちゃいけない事がある。．．．．それまでは死ねないよ」
ほんの一瞬、オウガの表情に曇りが移る。

その様子に違和感を覚えつつも、とりあえず陸は素直な感謝を口にした。

「．．．．．まあ、とりあえず．．．．．ありがとうな」

「おお．．．．．なんか陸君に感謝されるのって初めてな気がするね」

僅かながらにも掛かった不穏な影を訝しく思ったものの、ウリウリと肘で小突き、「もつと素直になつてもいいんだよ？」と言ってくるあたりはいつものオウガだ。どうやら杞憂らしい。

「．．．．．でも、そのありがとうは受け取らないでよくよ。．．．．．ボクは誰かに感謝される資格なんて持つちゃいない。特に、君と千歌ちゃんにはね．．．」
と思えばまた重苦しい声音で自責の言葉を綴る。

彼の瞳に映った色を見る限りでは、どうやら陸の事を気に掛けているらしいが．．．。

「．．．．．お前、もしかして俺にベリアルを植え付けた事気にしてんのか？」

「っ．．．．．！」

普段滅多に崩れないオウガの笑顔に綻びが伺えた。日頃から掴みにくいキャラに隠して腹の内を探られないようにしている彼が露骨に反応を示すという事は、凶星らしい。

そんな事いちいち気にするような奴ではなかった気がするが……オウガも変わったという事だろうか。

「……いいから行けよ。こうしてる間にも誰かがブロンズ化してるかもよ?」
急遽取り繕った笑みを顔に張り付け、急かすような言葉が投げかけられる。

……そうだ。コイツの事も気にはなるが、今はジャタールが優先だ。

奴の言っていたゲームが既に始まっていると考えるなら、誰かしらに魔の手が伸びていると考えた方がいい。

「……まあいいや。その辺は後々改めて聞く。……とにかくありがとな」
手短にそう言い残し、校舎に向かって駆け出す。

姑息な奴の事だ。ゲームとのたまったからには、騒ぎになるような真似はしないでらう。

そうなる、どこかしらの教室にいるはずだ。

「がんばれ〜」

こんな状況でも軽々しいオウガの声を背に受けながら、陸は足を前へと動かす速度を

上げた。

「……ごめんよ陸君」

ぽつりと口にした言葉が風に乗って木々の合間を駆けてゆく。

陸の背中が見えなくなったのを確認してから、オウガは本人の耳には届かない謝辞を零した。

「……いつかは伝えなくちゃいけないんだろうけど……まだ、今はまだ言えない」

この事が陸に、ゼロに、A q o u r sの誰かにでも知られてしまえば、彼等の関係自体が崩れかねない。

ラブライブの決勝やベリアルとの決戦が迫る今そうなれば……全てがダメな方向に傾いてしまう。

当然そんな事は誰も望んじやいない。

「……」

開閉する手のひらを見つめ、力を分け与えたあの日の事を思い返す。

こんな状況を作り上げてしまったのは紛れもなくオウガ自身だ。だからこそ、今自分がやることは……。

「……よーやく、友達つてものが出来たはずなのになあ……」
悔恨の念が胸を抉る。

太陽を隠した雲が作る影に溶け込むように、オウガは闇となってこの場から消えて行った。

「選ぶって……」

『言葉の通りだ。仙道陸か、松浦果南か。貴様の好きな方を選べばいい』

水を打ったかのように静かになった教室内で蠢く黒い陰謀。

園児達の悲鳴がしないのは、皆眠らされて床に横たわっているから。ジャタールが何かしたらしい。

「……選ばなかった方は……？」

『……簡単な事よ』

おもむろにジャタールが腕を動かし、先程まで曜が使用していたうちっちーの着ぐるみを掴み上げる。

奴には触れたものを銅に変えてしまう力があるため、うちっちーとて例外なく硬質な物体へと変質していく。

『選ばれなかった方は即座にブロンズ像にする。当然命の保証もせん』

ずん、と重い音でブロンズ化したうちっちーの頭部が床に落とされる。

ここへきてようやく、今自分に突き付けられている選択の残酷さを知る事となった。

「……………何で、私に……………」

『……………貴様が最も、仲間への依存が強いからだ』

「え……………」

『自分が帰依している存在同志を、自らの意思で選別する……………興味深いだろう？』

疑問の答えになっているのかが分からない言葉が返ってくる。

だがジャタールはそれこそが理由であると言わんばかりに、嘲笑を含みながら邪悪な声を打つ。

『特に、幼い頃から共にいた故か、貴様は拠り所を仙道陸に求めている傾向がある。……………』

だがそれは一方的なものだ』

どうしてか知っている陸と曜の過去が、ジャタールの口から出でる。

『己の存在が不必要なものだと自覚もせずにな。．．．．．愚かしい事よ』
以前にも投げかけられたような言葉が刺さる。

嫌な過去を呼び起こしてくる奴の弁を頭の中から追い出そうとするも、それをさせる間もなく二の句が継がれた。

『知っているか？ 今奴に起きている異変を』

「．．．．．異変？」

『．．．やはり気付いてはいなかったか．．．．．』

曜の反応は分かり切っていた事なのか、一人納得するように首を縦に振って見せるジャタール。

『．．．断言しようじゃないか。貴様は仙道陸にとつて、足枷に過ぎない』

強い悪意を含んだその断定に、前回のラブライブ予備予選大会、その直前の記憶が脳裏を駆け巡った。

ダークザギに投げかけられ続けた、曜自身を否定する言葉の数々。

．．．吹っ切れたように見えて、実はずっと心に引つ掛かっていた言葉が。

『幼馴染という理由だけで守られ、貴様から奴を支えているという事はしていない。ただ奴に負担を掛け続けているだけの、共にいる必要のない役立たずに過ぎん』

必要ない。役立たず。

あの日に苦しめられた言葉が、事実が、何度も何度も頭の中で反芻する。

『ギョポツ……今貴様は、奴を救える状況にある。その上でもう一度問うぞ。……貴様はどちらを選ぶ。松浦果南も、貴様にとっては姉のような存在だという事は知っているがな……ヒヨホホ……』

再度突きつけられる選択。

「曜……」

選べるはずがなかった。

陸を救いたい気持ちは勿論だ。彼はずっと自分を助けてきてくれたから。

けれど、果南だつて自分にとっては頼れる姉のような存在だから。秤に掛けるなど考えられない。

(………陸……！)

きゅつと、手の中に隠したゼロアイを強く握る。

こんな時でも彼の助けを求めてしまうのが情けなかった。長く共にいる間に、陸を頼ることが当たり前になつていて。

だからこそ、こんな時でも思つてしまう——。

——ガララ！

「っ……?」

勢いよく開かれた扉の音に、閉じていた瞳を開く。

まさかと思いい流した視線で確認した先では、弾丸のように教室内へ突っ込んでくる人影が一つ。

「ジャタアアルウウウツ!!」

『へぶああっ!!』

聞きなれた響きの怒号と、吹き飛んだジャタールが立てた音が、場を満たしていた空気を一変させた。

そしてその理由を作ったであろう者は、ジャタールに対し曜を庇うように立ち塞がる。

「………陸……?」

そんなはずがない。そう思いながらも、自身の目でしっかりと映し出したのは、紛れもなく何度も見た彼の背中で。

「……やっぱここだったか………このヤロオ……!」

『馬鹿な………どうやって脱出した!!』

驚愕と焦燥を隠そうともしないジャタールをねめつけつつ、陸はゼロランスを振るって果南を捕らえていたヒツポルトカプセルを叩き壊す。

『偶然、通りすがりの宇宙人が俺達をストーキングしてたもんでな』

『ツ……！ オウガか……！』

恨めしそうに話題に出た謎の人物の名を口にするジャタール。

どうやら、そのオウガとかいう人物が陸を助けてくれたらしい。

『……。テメエの言うゲームはこれで終いだ。今度はこつちから仕掛けさせてもらうぜ……』

陸の瞳が蒼く煌き、主人格がゼロに入れ替わった事を告げる。

そして姿勢を下げ、ゼロランスを構え直したのを合図に――、

『正々堂々！ タイマン張りやがれ!!』

『ぬうう……!』

突風が如し勢いで突っこんだゼロの一撃を、両腕を交差して受け止めるジャタール。

高校生の身体とは言えど、ウルトラマンの力が付与されたその一撃。地球人と同じ大きさになっているジャタールにはかなり答えるだろう。

『ち……!』

『うおおッ!!』

突き出された腕を身を翻して回避。

切り返して振るったゼロランスも、奴が手の平で受け止めようとしているのを察知し、無理矢理方向を変えてしまう。

『……どうした？ そんなにブロンズ像になるのが怖いか？』

『ああ……、片手だけでももう御免だ……』

苦笑いを浮かべつつ、ゼロは一旦距離を取る。

あの腕に一度でも触れられてしまえば一気に不利になつてしまうのだろう。

『ヒョホホ………来ないのならこちらから行くぞ！』

ジャタールの胸部にある発光体がエネルギーと共に熱を帯びる。

そしてであろうことか、この狭く、小さな子供もいる教室内で光線を放つたではないか。

『ぬっ……ぐううう………！』

かわす訳にもいかず、仕方なくゼロランスをゼロデイフェンダーに変形させて受け止めるゼロ。

『テメエ……！ ずりいぞこの野郎！』

『何とでも言え。どんな手を使おうが勝つた方が正義だ！』

辛うじて凌ぎ切つたのにも拘らず、ジャタールは間髪入れずにもう一度光線を放出。ゼロも同じように受け止める。

『ギョポツ．．．！ 周りの被害を気にして思うように回避できないか．．．．．。それが貴様等の甘さよ』

『．．．んだと？』

攻撃の手を一度止め、ジャタールは嘲るように笑う

だがその双眸が向けられているのはゼロではなく、傍らで今の攻防を見る事しか出来ていなかった自分で――、

『．．．．．そうだと思わないか？ ．．．．．渡辺曜』

「っ．．．！」

不意に悪意と侮蔑が向けられ、心臓が跳ね上がった感覚に襲われる。

『あ——あ あっ？！』

「．．．．．曜に何の関係がある」

曜の名前が出た途端に身体を奪い返した陸が低い声をジャタールに向ける。

だがジャタールはそれを気に留める事をせず、続けて曜に語らう。

『．．．．．先程、私が貴様に言った事があつたな．．．』

「．．．．．」

身体が震えるのが分かった。

吐きかけられた言葉の数々や、その事でまた追い詰められていた事を陸に知られる事

が怖かった。

幻滅される事ではない。また別の事が——、

『それを……貴様自身で証明しろ』

「え——」

恐れていた事が起きなくて一安心——とはならなかった。

罵倒の代わりに曜に向けられていたのは、赤い光の線。

つまりは、今さつきまでゼロに向けられていた、奴の破壊光線だ。

「よ——」

「曜ッ!!」

果南の叫びと重なって、別の声が耳に届く。

そしてその声が誰のものか理解した時には、その声の主は自分の盾になるように光線

の前に立ち塞がり。

「ぐあつ……!」

「あうつ……!」

体勢を整えきれていなかったが故に光線を受け止めきれず、後方へ吹き飛んだその人影の身体が曜と衝突。まとめて転倒する。

そのはずみで、手の中に握っていた「あるもの」が音を立てて床に落ちる。

「っ……!! それ……!!」

『ウルトラゼロアイ………。ここに飛ばされてたのか……』

即座に身体を起き上げ、何らかの理由があつて手放してしまったであろうゼロアイに視線を向ける陸。

だがすぐにゼロアイを拾う事はせず、真つ先に彼がした事は、自分の下敷きになつていた曜を起き上げる事だつた。

「……曜……、大丈夫か……?」

自分の事よりも早く曜の心配が出来るのは、彼が自分の事よりも曜を大事に思つてくれているから。

それが嬉しいようで、少し辛かつた。

『……つたく、散々やりたい放題やりやがつて……。ようやくこつちのターンだ。行くぜ陸!』

「わーつてるよ!」

曜に怪我が無い事を確認してから、力強く失つていたゼロアイを掴み上げる。

そしてそれを目元に装着する直前に、陸は曜の方に顔を向け――、

「……お前が持つててくれてよかつたよ。ありがとな」

「っ……」

なんで。

なんで今、そんな言葉を掛けてくれるのだろう。

「『シエア!』」

その理由を問える前に、陸の身体は閃光に包まれ――、

『ゲエエエイヤア!!』

『グおおうう・・・ツ!!』

光の奔流にジャタルを乗せ、浦の星女学院の外へと飛び出して行った。

百二十一話 帝王の鼓動

『デエエエイヤッ！』

『オオオオオオッ！』

教室の窓枠から、二体の巨人が衝突するのが見える。

突如として勃発したウルトラマンと宇宙人の戦闘に校庭から悲鳴が聞こえる中、曜は気の抜けた様子その光景を見上げていた。

『オオオラア！！』

『へぶあつ・・・！！』

——・・・断言しようじゃないか。貴様は仙道陸にとって、足枷に過ぎない。たった今ゼロに殴り飛ばされた宇宙人——地獄のジャタールの言葉が脳裏で反芻する。

必要とされているかとはともかく、足枷になっている。というのは事実と言ってもいい。

日頃何か陸の力になれている訳でもないのに、何かあればすぐに彼を頼ってしまう。足手まといもいいところだろう。

なのに、それだというのに。

——・・・お前が持つててくれてよかったよ。ありがとな

どうして、そんな言葉を掛けてくれるのか。

どうして、ただの偶然が生み出した事なのに、それを嬉しく思ってしまったている自分がいるのか。

「・・・・・・・・・・。っ・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・っ、ちよつと、曜!!」

ゼロと共に戦っている彼を見ているのが、いつになく辛くて。

無意識の内に足は動き、教室を飛び出していた。

『ぐあっ・・・・・・・・・・!』

ジャタールに宇宙拳法による連撃を加えていたゼロだが、突如真下から付き上がって

きた銀色のサーベルによって宙を舞う。

『貴様等……いつの間に脱出した……?』

タイツでも着こんでいるかのような漆黒の身体と、顔を覆うように装着されたマスクが特徴的な宇宙人。

先程までヒツポリトカプセルに閉じ込められていた陸の脱走を防ぐために警戒網を張っていた——サーベル暴君マグマ星人だ。

『……その質問ならさつきも聞かれた。二度も答える義務はねえ!!』

起き上がり様にゼロランスを握り、目の前の敵を牽制するように真横に薙ぐ。

『アエエエエヤア!!』

『ハッ!』

空中へ飛びのいたマグマ星人目掛けて鋭い刺突を繰り出すも、奴の腕に装着された巨大なサーベルによっていなされてしまう。

『なるっ……オオリヤ!!』

『ぐうううう……!』

瞬時に身を翻してランスをバットののようにスイングし、受け流された刺突の勢いをそのまま利用した大振りの一撃を見舞う。

これもサーベルによって受け止められこそしてしまったものの、純粋な力勝負ならぜ

口に分がある。

このまま強引に押し切って——、

『ツ———ッ!!』

殺意と共に赤黒い閃光が迫ってくるのを察知し、バックステップを取って辛うじて回避。

その隙を突いてきたマグマ星人の追撃も何とか凌ぎ切った後、ゼロは今の攻撃の発生源であろう宇宙人を睨みつけた。

『……中々面白い真似してくれんじゃねーか……。前タイマンで負けたから人数増やしやがったな……。』

『ギョポツ……。生憎、正々堂々などという言葉は我等の辞書にはないものでな……。』
変身する前にゼロが言ったタイマン勝負はこちらが押し付けたものだが、こうもあっさり破られると多少なり腹は立つ。

だがジャタルはそんなことは気に留める事もなく、胸部の発行体にエネルギーを集約させていく。

『あの時の恨み……。晴らさせてもらおうぞ!!』

『くっ……。!』

ヒップポリト星人の得意とする光線——プレストクラッシュャーが足元に着弾し、もう

もうと土煙が上がる。

こう何発も回避しているようではキリがない。早急にジャタールを叩こうとゼロラ
ンスを構え直すが一、

『オオオオオオ!!』

『ちいいい．．．!』

土煙の中から飛び出してきたマグマ星人のサーベルが頬を翳める。

咄嗟に回し蹴りで反撃するものの、その間に打ち出されていたブレストクラッシュャー
が直撃し、難なく吹き飛ばされてしまった。

『．．．ヒヨホ．．．なるほど、貴様、アレのせいで力を出し切れてはいないな．．．』

『．．．．．』

ジャタールの指摘に、若干の不快感を示すゼロ。

その背後には、ジャタールの張ったヒポリトカプセルとはまた別の光の膜に覆われ
た浦の星女学院が。

『確かにヒツポリトタールや、我等の攻撃が被弾する事は避けられるだろうが．．．．』

ノズル状の口を弄びつつ、ジャタールは視線だけでマグマ星人に指示を与えては胸部
を不吉に輝かせる。

『そんな状態で．．．．いつまで持つかな．．．』

飛び出したマグマ星人の後方から続くようにプレストクラッシャーが放出され、確かな破壊力を持つてゼロを照らす。

光線を回避する事自体はそこまで苦でも無いのだが、かわした先には決まって――

『ハアアアアア!!』

『ぐっ……おおお……!!』

マグマ星人の追撃を受け止めるも、力が入り切っていないために押されてしまう。力点をずらして直撃こそ避けたが、その衝撃はビリビリと手先から広がっていく。

『……はは……ちよつとキツイかもな……』

「……ちよつとなんてもんじゃねーだろ……」

浦の星女学院を守るバリアを展開している以上、多少なり力に制限が掛かる。

加えこの状況。マグマ星人には接近戦で応じつつ、ジャタールの遠距離攻撃を凌がなくてはいけない。

『……とりあえず上手く立ち回って隙が出来るのを待つ。数打ちや当たるだ!』

「……ちよつと意味違くないか……?」

ジャタールの動きに注意を払いつつ、ランスを構えてマグマ星人に突進。

案の定先程と同じ攻撃パターンを取ってきた奴等だが、そう何度も同じ手にやられる

ほどゼロも馬鹿ではない。

『シエア!!』

『ぬっ……!』

マグマ星人と鏝迫り合いの形になったゼロを狙って三度プレストクラツシャーを解き放とうとしたジャタールだが、真横から飛来した二つの銀色の光によって妨害される。

『フツ……! ハアアア!!』

ウルトラ念力で操る二本のゼロスラツガーが宙を駆け巡り、それぞれ一本ずつがジャタールとマグマ星人の双方を翻弄。そして、

『ウオラアツ!!』

『グおおうう……!』

マグマ星人の気がゼロスラツガーによって逸れた一瞬を突き、炎を纏った右足が奴の土手っ腹を打ち抜く。

更に左足も地面から引き離し、支点を失った事で逆流したキツクの勢いを利用し勢いよく飛翔。飛び上がった先で手元に戻ってきたゼロスラツガーを融合させる。

『デエエエエエエイヤアツ!!』

『ギョフオオツ……!!』

ゼロツインソードとウルトラゼロランス。交差した大剣と槍が描く剣線を胸元に叩き込まれ、ジャタールは盛大に火花を散らして真後ろに倒れ込んだ。

「うっ——！」

それと同時に、陸の頭にズキリと痛みが走る。

『又オオオオ！』

『シエエエ——うぐっ？！』

マグマ星人の放った上段回し蹴りを前腕で受け止め、ゼロツインソードで切り返そうとするゼロだが、突如身体に電撃でも迸ったかのように動きが止まる。

『フンッ！』

『がああああつ……！』

何度も場数を踏んでいる相手の前でそんな隙を作るのは命取りと言うもの。

疾風が如し勢いで振るわれたサーベルが腹部ごとゼロを薙ぎ払い、受け身も取れずに大地と衝突してしまう。

「ぐっ……がああ……！」

『クソッ……こんな時に……』

ウルトラマンの姿に変身すれば、陸とゼロの感覚は共有される。

つまり陸の発作が起これば、当然ゼロにも何かしらの影響が出るのだ。

『ギョポツ．．．．．、やはり、戦闘中は陛下の力が過敏になるようだな．．．』
起き上がったジャタールが、膝を付くゼロを見下ろす。

その余裕の増した態度は、まるで初めからこうなる事が分かっていたとでも言いたげな様子だ。

『．．．．．テメエ．．．まさかこれを狙って．．．』

『さあ？ どうだろうか！』

『ぐあッ．．．．．！』

ほんのお返しだとしても言うように足を振るい、ゼロの下腹部を蹴り上げるジャタール。

『．．．．．一つ聞かせろ。仙道陸』

「．．．．．ああ？」

『．．．．．何故、私がゲームを仕掛けた相手が渡辺曜だとすぐに看破した』

純粹な疑問なのか、俯せに倒れ伏した巨人を踏みつけつつそう問いかけてくる。

確かに陸は、なんとなくだがジャタールの狙う場所が分かっていた。

『．．．．．答える必要なんざねえ』

発作に耐える陸の代わりにゼロがそう答える。

それを受けたジャタールは、やれやれと肩を竦めた。

『……まあいい。どうせ貴様も分かつてはいたのだろう？ 私が一番の弱い役立たずな人間を狙う事は』

「……はあ……？」

頭にガンガンと痛みが響く中でもハッキリと耳朶を打った侮蔑の言葉に自然と身体が反応する。

「……曜が役立たずとでも言いてえのかよ……」

今自分に発作が起きている事も忘れる程度には沸々と苛立ちが湧き上がってくるのが分かった。

ジャタールもそれを感じ取ったのか、更にその悪意を滲ませて曜への侮辱を連ねる。

『ああ、何度でも言つてやろう。日頃何か貴様の助けになるような事もしないというのに、いざという事態は貴様を頼ることしかない。……ただの足枷ではないか』
自分の吐きかけた言葉で苦しみ、悩む曜を思い出して愉悦に浸っているのか、お馴染みの気持ちの悪い笑いが頭痛と共に頭に響く。

その声が——思考を真っ黒に塗り潰す程に不快だった。

『きつと奴の仲間も、口には出さずともそう思っているだろうよ。……それに……』
ゆらりと、緩慢な動きで立ち上がったゼ口をジャタールはしたり顔で見やる。

『……こう言えば、貴様は頭に来るだろう？』

「当たり前だろ……！」

狼煙のように立ち昇る闇に包まれる黒い巨人

獣の如し殺気を纏い、鮮血のように紅く相貌を煌かせるその姿はやはり、ゼロダーク
ネスだった。

熱が滾る。

空っぽの器に、失われていた何かが満ちていくような、そんな感覚。
これを味わうのも、この状態になってからもう何回目だろうか。

……。

入れ物、容器、依り代……いや、呼び方なんて何でもいい。どのみち自分が抜けられ

ばただの抜け殻と成り果てる身だ。

衝突する巨人達を見上げるその者の視界を介し、自らもまたその中の一体を見やる。

『ア、アアアアアア』

『又ウウウウン!!』

宿縁の仇と同じ姿をしつつも、本質では違うソレが散華させる闇を確認し、内心で笑う。

あの闇だ。

あの闇が、自分を……。

……。

天啓のようにふと思う。

遠からず、自分の力は蘇る。より強大に、より過激を極め、君臨する。

それはもう確定事項だ。だが……、

それまで、ただ見ているだけというのも退屈だ。

……少し、遊ぶか……。

奴と自分を繋げる「糸」を辿り、闇を逆流させる。

—— さあ、目覚めろ…… —— よ……。

『ガアツ……！』

火花を散らした漆黒の巨人が地面に追突する。

身体へのダメージも蓄積しており、脱力感も否めない。

だがそれでもゼロダークネスは—— 陸は即座に起き上がり、目の前の敵に向かって突撃を仕掛けて行った。

〈おい陸！ 俺に変われ！〉

制止するゼロの声も聞かず、野性的なフォームで回し蹴りを繰り返す。

だが、いくらこれまで戦ってきたとは言え、ジャタールやマグマ星人に比べれば陸の戦闘経験は浅い。

それに加え怒りという感情が先行している今の状態。

『フンツ・・・ハアアア!!』

『グアアアアアツ・・・!!』

当然だが、通用しない。

自分がやった回し蹴りをそのまま返され、敢無く地面を転がる。

「クソツ・・・!!」

ピコン、ピコン、と点滅を始めるカラータイマーが余計に気持ちを急かし、また無茶苦茶な突撃で二体の宇宙人に迫るも、結果は変わらない。

へ・・・ツッ！ 気持ちには分かるが落ち着け！ あれはブロンズ野郎の挑発だ！ 全部お前を怒らせてベリアル力の力を使わせるために――>

「・・・それでもツ・・・アイツが本心で囃を愚弄しやがった事に変わりはねえだろ!!」
軋む身体に鞭打ち、果敢に立ち上がる。

だが既にマグマ星人は懐に肉薄しており、繰り出された刺突の衝撃が鳩尾を貫いた。
『ガッ・・・アア・・・!!』

全開でベリアル力の力を酷使している事もあり、解けた金属を身体に流し込まれたかのように痛みが全身に広がっていく。

『・・・潮時か』

徐々に輪郭がぼやけてくる視界の中見上げたジャタールは、ゼロを見ていなかった。まるで敬意でも払うようなかのような視線を向け、何かを確認したようにも思える。

『マグマ星人……後は貴様に任せる。頃合いを見て戻ってこい』
『はっ』

先程まで愉悦たつぷりにゼロを痛めつけていたにも関わらず、謎の行動の後、この場から立ち去ろうとするジャタール。

「……待てっ……!」

『計画こそ狂ったが、当初の目的は果たしたからな。これ以上貴様と遊ぶ必要もない。……今後も頼むぞ……?』

「何訳分かんねーことを……!」

立ち去る奴を追わんとするも、今さつきマグマ星人に貰った一撃がまだ響いており立ち上がれない。

「この……! 待てっ……!」

奴等がこの場からいなくなる事自体は良いことのはずだ。これ以上ゼロと陸の身体に負担を掛けるものは無くなるし、閉校祭も無事に続けられる。

だが、だがそれでもおいおいと見過ごす訳には行かなかった。

アイツは、ジャタールは曜を傷付けた。

「ら。ダークザギの一件以降も、ずっと密かに自分自身に問答していた事を知っておきな

「がっ……うう……！！」

倒せなくなっている。せめて、あの腐れ外道の顔面をぶん殴ってやるまでは終われない。

「そうでないと、曜に示すことが出来ない。」

「曜自身も気付いていない事が。」

「陸が……伝えていない事が。」

「ま……て……！！」

「気力で痛む身体を動かし、転送ゲートを開いて母艦に戻ろうとするジャタールへと手を伸ばす。」

「その時だった。」

「……目覚めろ……。」

「っ……！！」

「聞き覚えこそなければ、何故だか親しみを覚える声が脳裏に響く。」

囁き掛けてくるようなその響きは僅かな抱擁感を持ち、すんなりと陸の中に溶け込んでくる。

——…お前は俺と同じだ。表面で取り繕ってはいるが、奥底では強大な闇がのた打ち回っている…。

声が続くと共に、ドクン、と。身体に膂力が溢れてくるのを感じた。

灼熱の炎にでも包まれているかのように感覚という感覚が鋭敏になってゆく。

その反面、思考は徐々に遠くなっていき——、

——超えてやれ。お前を、お前の友を見下した奴等を…！

深く、黒い闇が……爆発した。

『つ——！』

静かに、鮮烈に、闇が飛散する。

『ぬがあ……あつ……！』

一切の予備動作もなく放たれたデスシウムショットはマグマ星人の顔面を直撃し、装着されたマスクに無数のヒビを走らせていた。

『なんだ……？ 一体……？』

顔を手で覆いつつ、明らかに様子が一変したゼロダークネスを見やるマグマ星人。

へ……おい……、陸……！<

ゼロに、出来れば思い出さなくなかった記憶が去来する。

血のような真紅の双眸に、いつの間にか禍々しい紫へと変色していたカラータイマー。

それはまるで、かつてベリアルに身体を奪われ、仲間を惨殺したあの時の様で——、

『……！ ツ！』

『ツ——！』

無言のまま爆ぜるようにゼロダークネスが飛び出し、一瞬でマグマ星人と交錯。

静寂が場を満たす中、ゼロダークネスの両腕に握られた漆黒のゼロスラッガーが答えを物語っていた。

『う………ぐあ………』

今のすれ違いの瞬間だけで全身に刻まれた傷跡から血潮を吹き出し、マグマ星人はがくりと膝を落とす。

だがゼロダークネスは一切の躊躇も、慈悲もなくカラータイマーの左右にスラツガーを装着。そして――、

『ゼアアアアアアアアツ!!』

『が………あああああああああああツ!!』

満身創痍のマグマ星人にダークゼロツインシユートを直撃させ、爆発と共にその身体を吹き飛ばした。

そして、尚もゼロダークネスは止まらない。

『ヌウウウ!!』

『ギョフオオツ………!!』

優位な状況から一変、一瞬の内に葬られたマグマ星人を見て足止まりしていたジャートルにデスシウムシヨットが突き刺さる。

『………ッ! 貴様ア!!』

あくまでも目的は陸の挑発であり、それが終われば早々に撤退するつもりだったのか、足止めのマグマ星人がいなくなり焦りの色を浮かばせたジャートルがブレストク

ラツシャーでゼロダークネスを牽制。
が――、

『フウウン！』

『なあつ……！』

腕先から発生した巨大な爪により先頭から真つ二つに両断され、破壊光線が漆黒の巨人の左右に着弾する。

『ツ……！』

『貴様……！ それは……』

ゼロも、ジャタールも、ある存在の影を見出す。

大きく湾曲した巨大な鉤爪は、まるで――、

『ウアアアアアアツ!!』

『グオオオオオオオ……ツ!!』

漆黒の軌跡が弧を描き、深々とジャタールに突き刺さる。

獣が如し様相で闇のエネルギーによって生成された鉤爪を振るうゼロダークネスの猛攻は留まる事を知らず、何度も、荒々しく、されど的確に、地獄星人の身体を切り刻んでゆく。

『フウアア！』

ように身体をよろめかせる。

〈おい………陸……?〉

ゼロの呼びかけに答えが返って来る事はなく、程なくして巨人の身体は掻き消えて行った。

百二十二話 友愛ヨーソロー

「——あん！」

馴染みのあるあどけない声はどこからか響き、閉ざされていた意識を呼び覚ましてくれる。

「陸ちゃん！ リークーちゃん！」

「うあ……？」

ゆつくりと瞳を開くと、眩しさと一緒に一人の少女の顔が視界いっぱい広がった。

「……千歌……？」

名前を口にする、千歌は安堵したように表情を弛緩させた。

「よかったあ……いきなりいなくなつたと思つたら戦い始めるし、戦い終わつたと思つたら今度は倒れてるし、心配したよ？」

ズキズキと痛む頭を抑えつつ、ハッキリとしない記憶を辿る。

確か、曜と果南を襲つていたジャタールとの戦鬪になつて、それで……、

「つ……！ そうだジャタール……！ あの野郎はどうなつた!？」

「え……？」

奴との戦闘中、ゼロダークネスに変身してからの記憶がない。

その間に何があったのか、ジャタールはどうなったのか、恐らくそれを見ていたであろう千歌にそれを問うと、何故だか首を傾げられてしまう。

『……お前………覚えてないのか……?』

共に戦っていたはずのゼロにすらそう言われてしまう。

状況が飲み込めずに首を傾げていると、こちらを心配するような表情を作った千歌がある事を教えてくれる。

「……さっきの宇宙人なら、二人が倒したよ? ほら、あの真つ黒な姿で……」

「……え?」

まさかの返答に間拔けな声が出てしまう。

真つ黒な姿というと、間違いないくゼロダークネスだろう。となると、ジャタールを倒したのは陸という事になる。

『……その反応を見る限り、覚えてねえみたいだな……』

「なんか凄かったよね。バババー! って感じで」

語彙力皆無の千歌の説明ではいまいち分からないが、とにかく凄かったらしい。

「……でも覚えてないって………大丈夫? どこか悪いところとか——」

『千歌。この事はあまり詮索しない方がいい』

少しだけ重苦しくなったゼロの声音が千歌を制止する。

有無を言わせない凄みが含まれており、触れて欲しくないという想いがひしひしと伝わってくる。

「……まあ、ゼロちゃんがそういうならやめるけど……。それより陸ちゃん、何もなければ閉校祭回ろうよ。もうあんまり時間もなし……」

「え……、ああ、うん。いいけど……」

何か大事な事を忘れている気がする。

ゼロダークネスとなつてジャタールを倒したというのが、そもそもどういう経緯でゼロダークネスになったのだったか……、

「陸……」

千歌に手を取られたその時、別な方向から飛んできた声が耳朶に触れた。

見てみれば、ポニーテールに纏めた青髪を揺らす少女がこちらに駆け寄ってきていた。

「果南ちゃん？」

足を止め、自らの幼馴染である彼女の名前を口にする千歌。

先程ジャタールに襲われていた彼女が無事な事を改めて確認出来て安堵しつつも、もう一人の幼馴染の姿が確認出来ない事に疑問を覚える。

「……姉ちゃん……曜は？」

「……そつちにも来てないか……」

所在を問うと、果南は困ったように顔を曇らせた。

「……陸が戦つてる途中で飛び出して行つちやつてさ。ずっと探してるんだけど……」
電気でも走つたかのような感覚が脳裏を巡り、翳み掛かつていた記憶が明瞭になる。

そうだ、昨日のゼロの忠告を破つてゼロダークネスになった理由、それは……。

「……ちよつと行つてくる」

「え……ちよ、陸ちゃん!!」

見えない何かに導かれるようにして地面を蹴る。

戸惑う千歌と、何かを感じ取つたような果南の視線を背に受け、陸は一人の少女の元に向かった。

『……全く、陛下もお戯れが過ぎますね……』

床に投影されたゼロダークネスの光線を受けて爆発四散するジャタールの姿を見下

ろしつつ、困ったような、呆れたような、そんな溜息をつく魔導のスライ。

突如として豹変したゼロダークネスの様子からして、「あの方」が陸に何かしたのは確実だろう。

自身の復活の時間を早めたいのか、はたまたただの気まぐれか。どちらにしろ、その巻き添えを喰らったジャタールを予期せぬ形で失ってしまった。

少しは、こうなった際の対処をする自分の苦勞も分かかって欲しいものだ。

『いずれは陛下に捧げる命とは言え、こう無計画に命を散らされると困るのですよ。ジャタール……』

『……まるでグロツケンとデスローグが死んだのは計画の上だったとでも言いたげだな』

訝し気にヴィラニアスが顔を覗いてくる。

ああ、そう言えば「あの事」を知っているのは自分だけだったか。

『……スライ。お前、吾輩達を利用して何か企んでいるのか……?』

『……貴方が知る必要はありませんよ……』

そう。彼がそれを知る必要はない。

別にヴィラニアス達を利用しようとしている訳でも、何かを企んでいる訳でもない。

これはただの必然事項だから。

『貴方も私も、これまで通りに行動すれば必然的に辿り着きますから』
だが、あの方が今回手を出してきたという事は、今の状況に退屈しているか、早々
自分の復活を所望しているという事だろう。

主が動き始めたのだ。部下である自分達が行動しない訳にもいくまい。

『……我々も少し、計画の進行を早めた方が良さそうですね……』

浦の星女学院の屋上。

「……………」

冷たい風が頬を撫で、沈み始めた夕陽の色が目染みる。

思わず教室を飛び出してしまった曜は、ジャタールが倒された後もただただ無作為
に、ぼうつと遠くの景色を眺めていた。

——ただ奴に負担を掛け続けているだけの、共にいる必要のない役立たずに過ぎん
ジャタールはいなくなっても、吐き掛けられた言葉は消えることなくいつまでも囁き

掛けてくる。

別段屋上に来て何かしようという訳でもなかった。無意識の内に、走る足がここに赴いていただけ。

特別何かする訳でもなく、いや、何をしたらいいのか分からず、閉校祭も終わりに差し掛かるまで時間を食ってしまった。

「・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・」

後夜祭的な催しでキャンプファイヤーをやるという話だったので校庭に顔を出さなければいけないのだが、憂鬱だ。

何も言わずに飛び出してきてしまった手前、事を知る果南や陸と顔を合わせるのがどことなく気まずい。

特に陸とはどんな顔をして向き合えばいいのか、そんな事を考えると足は更に重くなる。

だがいつまでも顔を出さないと流石に迷惑だろう。早めに行って、目立たないようにしよう。

そう思い、校庭へ降りようとした時、錆びた蝶番が動く音と共に戸が開く。

「・・・・・・・・・・やっぱここだったか・・・・・・・・」

声と一緒に視界に入り込んできたのは、呆れるような、安堵するような、そんな顔を

した最も付き合ひの長い少年。

「……………」

「……………はあ……………」

目を逸らすように背を向けると、遅れて彼の溜息と頭を搔く音が聞こえた。

「……………何言われたかは知らねーけど、あんな奴の言う事気にするもんでもねーだろ」

その言葉に嘘が混じっているのはすぐに分かった。きつと、陸は曜がジャタールに何を言われたか知っている。

……………それに答える事すらも出来ずに、剩えは助けすら求めていた事も。

「……………ねえ、何でここにいて分かったの？」

皮肉、とでも言うべきなのだろうか。

ジャタールに言われた事も、逃げてきた先がここだという事も、知られたくない、気付いてほしくない事ばかり彼は敏感に察知する。

……………本当に気付いて欲しいことには、微塵も気が付いてくれないくせに。

「……………何年一緒にいると思つてんだ。お前の考える事くらい分かるつつの」

端的にそう返され、ぎゅつと唇を噛んだ。

違う。何も分かつてなんかいない。

彼に見えているのは。クセだとか、行動パターンだとか、そういう事。

真に曜が抱いている事には、何も――、

「……ワリ、今の嘘」

「……え？」

自分の中で湧き上がってきた反抗心のままに言い返そうとしたその時、思いがけない訂正が耳朶に触れる。

思わず振り返って視界の中に定めた陸の顔には、自責と言うか、自虐と言うか、そんな感情が浮かんでいるようにも見えた。

「前にも似たようなのあったよな。必要ないだの言いくるめられて、塞ぎ込んだしまった時」

陸からも話題に出された、ダークザギの一件。

「……笑える話だよな。幼馴染つつーか、ほとんど兄妹みたいなお前があとだけ苦しんでたのに、俺は全然気づけなかった。その結果お前を一人で追い詰めちまって、ほんと馬鹿みてーな話だわ」

風を受けた髪や服を靡かせ、自分自身を嘲るように笑う陸。

あれは曜の思い込みが招いた事なのに、それ以外の何でもないのに。それでも責任を感じていたらしい。

「だからあれ以降は意識するようにしたんだよ。お前だけじゃなくて、皆の事。なんか

様子がおかしかったらすぐ気付けるように」

おまけに、こんな気遣いまで。

元々彼が心根の優しい少年だというのは、共に過ごすうちに理解はしていたが、それに拍車をかけてしまっているのは曜なのかもしれない。

「……でも、また気付いてなかったみたいだな……。ゴメン」

どうして彼が謝るのだろうか。

悪いのは自分なのに。背負う必要のないものを背負わせてしまっているのは、曜なのに。

「……もういいよ」

それが辛く、苦しく感じて。

「……正直に言つて、陸。邪魔だよね」

自分でも拗らせているにも程がある事も、面倒くさくなっている事も分かっている。でも今はこうせすにはいられなかった。

彼を拒絶したかった。

彼に、拒絶されたかった。

「……つたく」

始まったよ……とでも言いたげに再度溜息を吐く陸。

「思ってる訳ねーだろんな事……。あいつ変わらず一回思い込むと勝手に沈ん——」
「……いいから、そういうの」

誤魔化してほしくはなかった。

正直に言ってもらって、その後どうするかは何も考えてはいない。でも、それでも言ってもらえれば、何か自分の中で区切りが打てる気がしたので。

「……わーたよ、正直に言えばいいんだろ」

再度ガリガリと後頭部を搔き、陸は若干の苛立ちを含む素振りを見せた。

そして倦怠感を映した瞳を曜に向け、口を開く。

「……まあ、確かに、お前俺の前だとワガママだし、よく分かんねーことで怒るし、今みたいに拗ねると面倒だし、正直一緒にいて苦労するなって思う事は多いよ。つかお前くらいだよそんなの」

身に覚えのあり過ぎる自分の欠点が深々と刺さる。

正直に言って、と訴えたのは自分だが、やはりこうして面と向かって言われると応える者がある。

何もかも矛盾だらけだ。

「……でも、邪魔だと思った事なんざ、一回もねーよ」

変わらぬその答えに、作った拳をぐつと握った。

そっか。そうだ。

彼は、そういうタイプだったんだ。

「・・・ごめんね、陸」

「あ?」

「もういいよ。そういうの。・・・これ以上迷惑かけたくないし」

戦った後で身体へのダメージもあるだろうに、自分の事を心配して迎えに来てくれる陸の優しさ。

それが嬉しくて、いつも甘えてしまう。

「そんな風に気を遣わせちゃうって事は、やっぱり私、迷惑だよね」

だから。

「それに陸が責任感じたり、気を遣う必要なんてないよ。元はといえば全部私のワガママだから。・・・だからもう終わりにする。具体的にどうするかは決めてないけど、絶対もう迷惑はかけないようにするか——ッ!」

決意の言葉が、突然襲いかかってきた何かによって遮られる。

「・・・り・・・く・・・?」

氣道を圧迫され、掠れた声が口から漏れる。

不意に齎された苦しみに表情が歪み、そこでようやくやくそれが胸元に伸びた陸の手に

よって胸倉を掴みあげられていると理解した。

「……いい加減にしろよお前」

彼の低い声に、ぞくりと猛烈な悪寒が背筋を伝う。

「お前が俺という事をどう思つてようが勝手だよ。……けど、お前の思い込みで俺がお前に対してどう思つてるかまで決めつけられると気分悪いぞ」

怒っているのは見て明らかだった。

けど、これは彼が宇宙人などに向けている時のような敵意の怒りではなく、もつと別なもの。

表現するならば、曜に対する、曜のための怒り。

「ワガママとか面倒とか……ぶつちやけんなモンどうでもいいわ。俺がお前といたいと思つてるから今こうしてここにいるんだよ」

「つ……」

とくん、と胸が脈打った気がした。

信じていかなかったはずで、それでも心のどこかで求めていた言葉が、心を閉ざしていた自己否定の鎖を解いていく。

「小さい頃から、それこそ気が付いた時には一緒にいて。散々バカやって、笑つて、今も似たように過ごしてて、その時間が好きなんだよ」

彼の瞳と視線が重なる。

いつもの気怠けなソレではなく、真っ直ぐな視線が。

それを見れば、今陸の言っている事が嘘偽りのない正直な気持ちだという事は簡単に分かった。

そんな事からも目を逸らしていたのだ。

「喧嘩も、苦勞も、氣遣いも迷惑がる事も全部。全部含めてお前という時間なんだよ！

それが心地いいから一緒にいるんだろぅが!!」

どうして気が付かなかつたんだろぅ。

こんなにも曜との時間を大切に想ってくれて、曜自身のために怒ってくれるような彼の気持ちに。

「お前のよく分かんねーそれがワガママだつてんなら、俺だつて俺のワガママ通して勝手にお前といんだよ」

役に立たないとか、足手まといとか、陸にはそんな事どうでもよくて。そもそも考えてすらいなくて。

ただ純粹に曜という時間を心地よく思ってくれていて、曜を大事に思ってくれていて。陸にとつて、守る理由なんてそれで十分で。

「…お前は、渡辺曜は、千歌にも、果南姉ちゃんにも代わりなんてできない。俺にとつ

ちや欠けちやいけない大事な存在だ」

誰よりも長く彼といたのは曜のはずなのに……。普段陸をバカだの鈍感だのと罵ってきた事が申し訳なく思えてくる。

その反面、彼の感情を受け止めた身体はどんどん熱を帯びていった。

「……………それだけは忘れんな」

乱暴に腕が胸元から離れ、解放された気道と肺が酸素を求めて深く呼吸をする。だが、何度大きく息を吸い込んでも、火照った顔は一向に冷める気配がない。

「……………うん……………」

小さく頷くと、険しかった表情を緩め、少しだけ口角を上げてくれる。

その控えめな笑顔が、妙に眩しい。

「さ、行くぞ。キャンプファイヤー始まっちゃうし」

それ以上は特に言及する事もなく、元々このために来たんだと仕草だけで示してくれ。そんな優しさに、また胸が痛くなる。

けれど先程のように負の感情に塗れたものではなく、苦しくもどこか温かい感情。

この感情の正体を、自分は知っているはずだ。

そうだ。彼に負担や迷惑を掛けたくないと思いつながらも離れきれなかったのも、全

部、曜が陸にこの感情を抱いていたからだつた。

悪意に言いくるめられ、勝手に思い込み、一度は抑え込もうとした。

けど、そんなものを全部吹き飛ばすくらい彼の優しさや、気持ちが嬉しくて。

気付いた時には、思いきり彼に胸に抱き付いていた。

「おい……曜………」

自分でも何がしたいのかよく分からない。

沸き立つこの強い感情が、自然とそうさせる。

「……ねえ、陸。さつき、私といるのが陸のワガママなんだつて言ったよね？」

「……え？ ああ……うん………」

戸惑いながらも、そう言つて頷いてくれる陸。

「……私も一緒。心に引つ掛かつてる事から目を逸らして今の関係に甘えてたのも、全部」

熱い鼓動が止まらない。

こんな事があつた直後に伝える内容でも、伝えてる場合でも無いのは分かっている。

でも、それでも止まる事なんか出来なかつた。

込み上げてくる感情が心地よくて、切なくて、それが途方もなく苦しくて、
こうでもしないと、おかしくなってしまいそうで――、

「・・・全部、私のワガママ。陸といるのが好きだったから・・・ううん――
――」

ほんの少しだけ、時間は遡る。

「もおく・・・、キャンプファイヤー始まっちゃうよ・・・」

人が捌け、閑散とした階段に千歌の足音とぼやく声だけが染み入っていく。

もうじき始まる閉校祭最後の催しに際して皆校庭に集まっているというのに、顔を出さないのは陸と曜だけだ。

「ただ呼びに行くのにこんなに時間掛かる・・・？　まーた曜ちゃん拗ねてるのか
なあ・・・」

二人がいる場所は分かっている。高飛び込みをやっていたが故か、曜は何か悩みなどがある高い場所に行きたがる傾向がある。陸もそれは分かっているだろうし、二人共屋上にいるのだろう。

「結局全然閉校祭回れなかったし……陸ちゃんのせいだからね〜!」

ジャタールを追っていた際に陸が別れ際に残していた「埋め合わせはする」という言葉。

恐らく出まかせだろうが、有耶無耶になんかさせてたまるか。こうなったら意地でも今日のリベンジをしてやる。

「……いた……!」

松月でみかんフルコースでも奢らせてやろうかと考えながらゆつくりと開いた屋上へ繋がる扉。そこからは千歌の睨んだ通り、陸と曜の姿を確認出来た。

「りくちゃん——っ……!!」

呼びかけようと声を出すも、刹那に起きたまさかの光景を前にぐつと飲み込んでしまふ。

混乱が訪れた頭で必死に思考を巡らせるも、状況が理解できない。

——どうして曜は、陸に思いきり抱き付いているのだろうか。

「……曜ちゃん……?」

咄嗟にドアの影に身を隠し、聞き耳を立てた耳朶に術に込んできたのは――、

「私がずっと陸の事……好きだったから……！」

「……………え……」

千歌の中で、何かが崩れる音がした。

百二十三話 温かきの先に

『……随分と手荒い歓迎だね』

『……大方、他の宇宙人が地球に飛来するのを阻むためだろうがな』

ウルトラマンメビウスに、ウルトラマンヒカリ。

互いに良きパートナーと呼び合える二人の眼前には、蒼い水を湛えた地球と、大群をなして飛翔してくる大量の影。

『とにかく、アレを切り開かない事には地球にはたどり着けん……行くぞ！』
『分かっているさ！』

両者の腕に備わったブレスレットから光の剣を伸ばし、迫りくる宇宙怪獣の群れの中へと飛び込んでゆく。

『セアアアアッ！』

『フウウウンッ！』

突如として勃発した戦いによって静謐な無音は切り裂かれ、至る所で爆音が轟く。

『……?』

すれ違い様に宇宙有翼怪獣アリゲラの身体を両断し、立て続けに次の怪獣に斬り掛かろうとしたメビウスの視界に奇妙なものが映り込む。

『……オーロラか……? だが何だこのエネルギー量は……』

ぽつんと地球上空の宇宙空間に浮かんだ円盤から星を包み込むようにして広がっていく、光の膜。

不可解な現象にヒカリは首を傾げているが、メビウスは強い既視感と、異様な胸のざわつきを覚えていた。

『ツ……! まさか——ツ!』

「——ずっと陸の事……好きだったから……!」

物心ついた時には既に隣にいた。それが陸にとつての渡辺曜という存在だ。

遊ぶにも、喧嘩するにも、何をするにも一緒にいた、それこそ兄妹のような存在。そんな彼女に今、自分は告白されている。

ハッキリと、曜自身の口で、陸の事が好きだと。

「つ……………!!」

徐々に暗闇が広がってゆく夕空の下で、陸はたった今曜から伝えられた言葉を反芻した。

好き。その意味を理解するにはそう時間は掛からなかった。

戸惑いと共に、以前鞠莉にロックオン宣言された時と同じ様な熱が顔に広がって行く。

「……………よ……………曜……………」

どうしたらいいのか分からず、陸の胸元に抱き付いたままの曜に視線を向ける。

「……………」

「……………」

そこで目が合った彼女と、数秒間無言のまま見つめ合う。

——そして、

「つ……………!!??」
「ツ……………!!!!」

ふと我に返ったかのような顔になった後、告白された陸の数十倍動揺した様子で胸元

から離れる曜。

かつてない程に頬を真っ赤に染め上げては白黒させている瞳をこちらに向け、あたふたと盛大に取り乱している。

「……ああああええと……！ その陸これは違くて……いや違わないけど……！
ええと……ええとおお……！！」

一瞬冗談か何かと考えたが、曜はそんな夕チの悪い事はしないし、そもそも恋愛沙汰のネタが苦手な彼女が出来るはずがない。

それに、この慌て具合で嘘だと言われても無理があるだろう。

「……マジ……なのか……？」

それでもまだ実感というか、今起こっている出来事が信じられず、改めて曜の顔を伺う。

曜もまた陸の顔を伺い、自分が告白してしまったという事実を受け入れたのか、覚悟を決めたように今にも湯気が立ち昇りそうな程上気した顔を首肯させた。

「……うん……」

「な……っあ……！！」

その頷きにより曜の気持ちが高ぶるという事が証明され、顔の熱りと鼓動が加速する。

「・・・・・・・・え・・・・・・・・ちよ・・・・・・・・え・・・・・・・・？」

どう反応したらよいのか、どんな言葉を返すのが正解なのか、答えは見つからずただただ狼狽えるばかり。

すぐに返しが浮かぶ訳でもないのに、間が開けば開くほど答えづらさは増してゆく。つい数分前まであんな事言っておいてこの有り様だ。不格好もいい所だろう。

「・・・・・・・・あはは・・・・・・・・っ！」

そんな息苦しい空気を打ち破ったのは、陸の情けない面を拝んだ曜の口から漏れた緊張感のない笑い声だった。

「・・・・・・・・なんか変だよ。今更こんな感じになるの！」

まだ少しだけ先程の錯乱の余韻を残しつつも、幾分か落ち着いた様子でほうつと息をつく。

再度こちらに向けてきた表情が熱っぽく思えてしまうのは、きつと気のせいではないのだろう。

「変に気にしてくれなくても大丈夫だよ。別に、付き合っただけで欲しいとか、そう言う関係になりたいとか、今はそんな事思っただけから！」

この場の空気や彼女の気持ちにそうさせているのか、普段ならば言い淀んでしまうはずのニュアンスを連ね、そう伝えてくる。

「……私だつて女の子だし、憧れとかなない訳じゃないんだけどね。でも変に今陸とそういう事になって皆とギクシヤクしても困るし、ラブライブ決勝も近いしき」

以前陸の事が好きだと言つた鞠莉や幼馴染の千歌や果南に関わらず、このタイミグで陸と曜がくっ付けば多少なりAquoursの皆も動揺を見せるかもしれない。

その事を懸念しているのか、今は積極的にはならないと、曜はそう言う。

「……まあ、でも……」

不意に一步後ろに下がると、スクールアイドルの練習で磨いた綺麗なターンを披露し、その場で一回転。

そして次に彼女が見せたのは、ビシツと背筋を伸ばした敬礼のポーズという、最も渡辺曜らしい仕草だった。

「少しは意識してくれたりすると、嬉しいであります!!」

照れ隠しか、調子に乗っている時の船乗り口調で紡がれたアプローチの言葉。

昔からずっと変わらない屈託のない笑みがいつになく眩しく映って、言葉に詰まる。

「……さ、戻ろつか。もう始まつてるよね?」

長引かせてゴメンねと付け足しつつ、もうじき始まるであろうキャンプファイヤーに向かおうと陸に促してくる曜。

これも些細なアプローチのつもりなのか、すれ違い様に陸の手を握り、階段の方へと

早足で歩を進めていく。

「……………」

曜と手を繋ぐなど、一体いつ以来だろうか。少なくとも最後にこの手を握ったのは十年以上前だったはずだ。

やんちゃだった曜が手を引き、陸が渋々それに着いていく。この構図はあの時と何も変わらない。

でも、今この瞬間ここから見える曜の顔はあの時とは違う。

背も伸びた。髪型や顔付きだって多少なり変わったし、女の子特有の膨らみだって立派に出ている。けれどそんな事、互いに成長の過程を見てきた陸と曜からしたら変化の内に入りはしない。

決定的に変わったのは——今、陸が曜を一人の女の子として意識しているという事。

「……………照れてる?」

「……………うるせえ」

恥ずかしくて、照れくさくて。

曜の揶揄いに対し過剰に反応してしまう程平常心を保ってられないというのに、不思議と悪い気はしない。

懐かしいような、それでいて新鮮な所感と温かさを覚えつつ、少しだけ握り返す手に力を籠めた。

その直前、唯一の目撃者である少女が逃げるように階段を駆け下りて行ったとも知らず。

「めんなさい」

校庭に辿り着いた時には、既に閉校祭はその幕を下ろそうとしていた。

学校への感謝を込めて、学校を愛してくれた皆への感謝を込めて、途中ジャターの乱入もあつたものの、皆が笑顔で過ごしていたこの閉校祭。

だからこそ、全校生徒や、来校した父母の方々に頭を下げる鞠莉の姿は異色に映った。

「……鞠莉……さん？」

「……ごめんなさい……ごめんなさい……！」

状況が飲み込めずに首を捻る陸、事を悟った聴衆の眼前で、嗚咽に震えた謝罪の言葉だけが孤独に霧散してゆく。

そして数拍置き、陸もその理由を理解する事となった。

「もう少し……もう少し頑張れば……！」

きつと鞠莉の脳裏には、今も焼き付いて離れない景色がある。

学校が好きで、学校にいる皆が好きで、多くのものを犠牲にしてまで浦の星女学院を守ろうと奮闘した日々、その努力をあざ笑うかのように全てを掻っ攫っていった、あの瞬間。

あと二人が届かず、廃校に屈した、あの一瞬が。

〈鞠莉……〉

掛ける言葉など見つかるはずもなく、気詰まりな空気が場を支配する。

きつと鞠莉はあの時からずっと自分を責め続けてきたはずだ。明るく振舞う笑顔の裏で、一人。

そんな彼女に、どう言葉を掛けろと言うのだろうか。誰もがそう考えていたであろうその時、

「あーくーあつ！ あーくーあつ！」

どこからか飛び出し、沈黙を切り裂いたその声が呼ぶ名は——AqoursAqoursAqours
鞠莉だけでない。学校の為に、皆の為に多くの想いを背負って歌い、これからも輝こうとする九人の名前。

「「あーくーあつ！ あーくーあつ！」

その声に感化され、次第に一つ二つとAqoursと唱える声は重なってゆき、

「「「あーくーあつ！ あーくーあつ！ あーくーあつ！！」「」

「「「あーくーあつ！ あーくーあつ！ あーくーあつ！！」「」

「「「あーくーあつ！ あーくーあつ！ あーくーあつ！！」「」

やがて津波のように大きく、一つとなつた声がキャンプファイヤーの火に照らされる校庭に響いた。

誰も、ここに鞠莉の事、強いてはAqoursの事を責めている者など一人もない。むしろ諦めかけていた皆の心に光を灯し、学校の廃校が決まった今でも輝きを見せてくれる事に対する感謝。Aqoursのやってきた事は決して無駄ではなかったという証明。

このA q o u r s コールは、その気持ちの表れのようにも思えた。

その想いを受け、雁字搦めに巻き付き、鞠莉を苦しめていた戒めの鎖も解かれてゆく。

「つ……！ みんなあー！ ありがとうとおお——!!」

自身もまた感謝の言葉を返す鞠莉の笑みに、陰ったものは感じられなかった。

ようやく、鞠莉が自分のやってきた事を肯定出来た瞬間、だったのかもしれない。

「じゃあラストに、皆で一緒に歌おう！ 最高に明るく！ 最高に楽しく！ さいっこうに声を出して!!」

——— 勇気はどこに？ 君の胸に！

重なる歌声に囲まれ、閉校祭の、学校の最期を告げるように、燃え尽きた薪だけとなった暖火が燦る。

だがその名前は消えない。浦の星女学院も、A q o u r s も、形として存在し得なくなるその日が来ても、人々の胸に刻み込んだその名前と輝きの証は消させやしない。

そのための戦いは、まだ終わっていないから。この先の未来へ走り続ける。

皆で誓った奇跡を起こすために。

やり残した事などない。

いつの日か、笑ってそう歌えるように。

色も形も違う、各々の奏でる想いが、これから空っぽになる浦の星女学院を彩っていたのだった。

『・・・美しい歌ですね・・・』

船底のヴィジョン越しに調和した想いを見下ろし、スライは感嘆の息を漏らす。

芯に同じものを通して者達が魅せる感謝と激励の歌・・・地球人とは離れた価値観を持つメフィラス星人の自分としても素晴らしいものと感じるものだ。

『永遠に存在し得ないからこそ魅せる輝きが美しい、ですか・・・そんな輝きを私の手で消してしまう事になろうとは・・・運命とは残酷ですねえ』

だがあの場にその事を嘆く者はいない。いたとしても一部の特異な者のみだろう。

あの想いは人々の胸に保たれたまま消えるのではなく、最初から存在しなかった事になるのだから。

『ふふふ．．．』

予め整えてあつた仕掛けを作動させるだけの簡単な作業を、これほど愉快地感じた事があつただらうか。

あの方の復活が目前に控えているのだ。興奮するなという方が無理がある。

『．．．人が悪いですね、私も』

紅い双眸が煌くと同時に、スライの放つ波長と共鳴した宇宙船が膨大なエネルギーを地球に向けて照射する。

『．．．さあ、ゲームの始まりです．．．．．！』

悪夢の始まりは、この後だった。

「くあ……！」

閉校祭から一夜明けた翌日。

がちやりと仙道家のドアが開き、くつきりと目の下にクマを作った陸が欠伸と一緒に朝日を浴びる。

「……………結局一睡も出来なかったな」

『相変わらず反応はウブだなお前……………』

眠れなかった陸の心配など微塵もせずに小言を飛ばしてくるゼロ。聞けばコイツはとつくに曜の好意には気付いていたそうなの。

『で？ どうすんだ曜の件は』

「どうも……………まずまともにアイツの顔見れるか怪しいわ……………」

出会ってまだ一年も経っていない鞠莉にですら自分に好意があると分かっているからには変に意識してしまつてまともに接せていないというのに、約十七年の付き合いのある曜に告白された今どう接しろというのか。

ラブライブ決勝や、陸自身の事など、色々問題もあるというのに。曜もまた立て込んでいる時期に告白してきたものだ。

「……………そーいやアイツ遅くねーか？ いつもならとつくに来てんのに」

『……………昨日の件が恥ずかしくて引き籠つてんじゃねーの？』

あり得なくはない、となってしまうのが渡辺曜の悲しいところである。仕方ない。都合よく起きれている事だし、今日は陸の方から出向くとするか。

「……って、出てきたか……」

と思つていた矢先、向かいにある渡辺家の戸が開き、制服姿の曜が姿を見せる。

どうしても昨日の光景が想起されてしまい声を掛けるのを躊躇ってしまうが、それはいつまで経つても始まらない。

とりあえず珍しく起きている事を示して驚かせてみよう。そうしよう。

「おー曜。おは——」

「……」

多少ぎこちなくはなりつつも、普段通りに近い形で声を掛ける。

だが曜はそれに反応せず、陸を置いてスタスタと歩き去って行ってしまう。

「え……ちょ……」

確かに見気付いていたはずなのに、曜はまるで陸を無視するかのように通り過ぎてしまった。

仮に本当に気付かれていなかったとしても、陸を呼びにくるはず。少なくとも黙って一人で行ってしまうなんてことはまずないはずだ。

「お……おい！ 曜！」

どこかおかしく思い、先程まで抱いていたドギマギも忘れて曜へ詰め寄る。するとようやく彼女はこちらへ振り向き、陸を視界に入れた。

「……………何？」

いやに冷たい瞳が向けられる。

今まで見た事もなかったようなその視線に気圧されつつも、陸はどうにか言い返す。

「……………いや何ってお前……………。いつも頼んでもねえのに俺の自転車乗ってくくせして何で今日はまた……………」

「……………はっ。」

再び突き刺さる、熱と言うものを全く感じない瞳。

「……………何言ってるのか分かんないけど、用もないなら話しかけてこないでよ。そっちがどう考えてるかは知らないし、知りたくもないけどさ——」

次の瞬間、戦慄などと言う表現も生温い程の悪寒が陸の全身に迸る事になる。

「——私は陸の事、嫌いだから」

第三部 輝きのAqours後編

百二十四話 決壊

状況が飲み込めなかった。

今日の前で起きている事が、自分が耳にした曜の言葉が本当に現実なのか。

「よ………曜……?」

聞き間違いでなければ、彼女はその口で陸の事を「嫌い」だと言った。

今まで見た事もない、冷たい顔で。

「………冗談……だよな? お前昨日と言ってる事正反対………」

「………ほんとに何言ってるの?」

純然な疑念の他に、嫌悪や蔑視の渦巻く瞳が向けられる。

それを見てしまえば、曜は今ふざけているとかいう訳ではなく、本心でそう言っている事くらいすぐに分かった。

「とにかく、関わらないでよね。陸といるとこ見られたくないから」

そう吐き捨て、足早に陸から離れていく曜。

呆然と眺めるその背中に、ほんの昨日まで隣にいたはずの彼女は見る影もない。まるで、別人にでもなってしまったかのように。

「……なんだってんだよアイツ……」

『単純にフラれた……って訳でもなさそうだな……』

何か曜が怒るような事をした……という記憶はない。

となると、昨日の告白を見ていた第三者が曜に干渉し、何か手を加えた可能性が高い。

『……とりあえず先回りだ。アイツが他の皆に接触する前に状況を共有しておいた方がいい』

「……分かった」

ゼロの提案に従い、自転車に跨っては全力でペダルを踏む。

(……曜……)

いつも背中に感じている温かさがなくて、毎朝通る道も全く別物に思える。

そんな一抹の寂しさも乗せ、自転車は疾風のような速度で通学路を駆け抜けるのだった。

「梨子!!」

普段は三十分ほど掛かる道を十分に走り切り、十千万旅館前に到着。

そこでバス停に向かう紫檀色の長髪が目に入り、陸は焦るままにその名前を呼んだ。

「・・・・・・・・・・」

だが当の梨子は一瞬こちらを見たのみで、まるで無視でもするかのように返事をする事も、歩く足を止める事もしなかった。

「つ・・・・・・・・・・おい！ 聞こえてんだろ!!」

曜と似たような反応にますます焦燥感は募り、少し声を荒げてすぐそばにまで詰め寄る。

そこでようやく焦点を陸に合わせた彼女が口にした言葉は――、

「・・・・・・・・近寄らないで」

無機質な声音に身体が硬直する。

重ねた彼女の瞳もやはり敵意の籠った、昨日までとはまるで違ったものとなっていた。

「・・・・・・・・・・どうなってんだよ・・・・・・・・おい・・・・・・・・!」

梨子の乗り込んだバスが見えなくなつてから、震える声を零す。

何かタチの悪い冗談だろうか。悪い夢でも見ているのだろうか。そんな事ばかりが頭の中を駆け巡る。

分からない事だらけだが、何か水面下でヤバい事が進行している。それだけは理解出来た。

「・・・他の皆なら何か——」

「無駄だよ」

とにかく他のA q o u r sメンバーの所へ向かおうとした陸を制止する一声。

「誰の所へ行つても変わらない。曜ちゃんや梨子ちゃんと同じ反応が返ってくるだけさ」

「・・・オウガ・・・？」

音もなく現れ、儂くも抱いていた陸の希望を打ち砕くようにそう言い放つたのはカドー星人オウガ。

彼までも自分を敵視しているような事はなく微かな安堵を覚えるが・・・それ以上に疑問も覚えた。

『・・・お前、何が起きてるのか知ってるのか』

「ああ・・・悔しいけど、まんまとやられたよ」

ゼロに問われ、いつになく深刻味を滲ませてオウガはそう答える。

「警戒して然るべきだったんだ。・・・ベリアル復活のための時間的余裕があまり残されていいない今の状況で奴等が動かないはずがない」

「? どういう・・・」

「こんなことが出来るのはダークネスファイブには一人しかいない。・・・メフィラス星人のスライだけだ」

『———』
『ご名答』

「『ッ・・・』」

不意に耳朶に触れたこの場にいる誰のものでもない声に、今度は何だと警戒心を強める。

声のした方、つまり陸達の上空を見上げればそこには白い甲冑を着こんだ宇宙人——
—メフィラス星人魔導のスライの姿があった。

『ふふふ・・・私の仕掛けたゲームは楽しんで頂けているようですね』

「・・・史上最高のクソゲーだよスライ。いくら何でも趣味が悪いんじゃない?」

『そうですか・・・ですが、どんなゲームでもクリアしない事にはエンディングは訪れませんよ。・・・でしょう? 仙道陸』

オウガをスルーして陸を捉えたスライの双眸から伝わる隠す気もない悪意を跳ね返すように、陸も睨みを利かせて対抗する。

「お前何しやがった……!」

曜も梨子も普通じゃなかった。

もしオウガの言葉の通りスライが彼女達に何か手を出し、歪めたのならば。そう考えるだけで沸々と怒りが湧き出てくる。

『簡単な事ですよ。私が彼女達の……いや、この地球に住まう者達の記憶を塗り替えた

ウルトラマンゼロは人類の敵だ……と』

『……何だと……?』

淡々と告げられた奴の所業に戦慄する。

ゼロが人類の敵。となると、先程曜達が向けてきた嫌悪の正体は——、

『特にその正体を知るA q o u r sの皆さんには、貴方達に対する一際強い憎悪を植え付けてあります……無事彼女達を正気に戻せたならば私の負けを認めましょう』

「馬鹿言ってるじゃねえ……さっさと戻せよ!」

音速で難いだゼロランスが奴の身体を搔つ捌くものの、立体映像で映し出されたそれが損傷したところでスライ本人には何のダメージもない。

『……ラブライブの決勝戦……でしたか? それまでにクリアできる事を祈つ

てますよ………では』

「ふざけんな………ふざけんなツ!!」

スライの影が消え失せ、陸の怒号だけが孤独に響く。

何が目的でこんな事に及んだのかは分からない。だがまるで物を扱うかのように気持ち踏み躪り、記憶や感情を操作する奴の行為を許せるわけがなかった。

地球人は……Aquoursの皆はスライの都合の良い道具じゃない。

「早く……早くなんとかしねえと……!」

「落ち着けよ……焦りに突き動かされたところでどうにもならないさ」

「じゃあこのまま大人しくしてろってか!!」

腹立たしくて、それでもどうしたらよいか分からなくて、ほとんど八つ当たりに近い叫びをオウガに浴びせてしまう。

「とにかく今は頭を冷やしなよ………今の君じゃ、何も変えられやない」

そんな陸に対してそう言い残し、自らもまた焦りが払拭し切れていないといった顔で影となつてゆくオウガ。

その身体が完全に消えていった後、残された陸が肩を落とす。

「………どうしろってんだよ……」

ただ一人世界から孤立した少年の掠れた声が、誰の耳に届くでもなく虚空に霧散して

いった。

私は何もない真つ暗な空間を走っていた。

『いい加減認めろ。無自覚の内に募らせ、燻らせていた己の感情を』

いや、逃げていた。という方がいいかもしれない

影も、姿もないけれど、それでも確かに存在している誰かの声から、必死で。

『俺には分かる．．．貴様の中で激しく、醜く燃え上がる嫉妬の炎が．．．』

聞いていると頭がおかしくなりそうだった。

私が私で無くなってしまいうような感覚が怖くてたまらなくて、とにかく必死で走った。

『妬ましいだろうか？ 憎いだろうか？ 仙道陸に群がり、貴様から奴を奪おうとするあの

女共が』

「いや．．．．．いやあ．．．．．！」

不覚にも浮かんでしまった皆の顔を振り払い、そんな事ないと私自身に言い聞かせる。

『貴様は俺と同じだ。輝く者を妬み、それに及ばない自分を憎み……その結果誰もかれもが離れていった。貴様も、すぐにそうなる』

「や——あうっ……!」

竦んだ足がもつれて転んでしまう。

更に強い危機感を覚えて咄嗟に振り返ると、いつの間にか形を成していた黒い何かを私を飲み込もうとでもしているかのように影を広げていた。

『呼び覚ませ……お前の深奥に秘めた闇を……!』

「ひっ……!」

黒の中に浮かぶ、紅く、釣り上がった目が迫ってくる。

その瞬間だった。

「え……?」

目の前にぼんやりと光が燈る。

純白の羽のような光は次第にその輝きを増してゆき、やがては短剣のようなアイテムの形を成した。

「うあぁっ!!」

導かれるようにして私がそれを掴むと光が更にその強さを増し、立ち昇った白銀の閃光が闇を切り裂く。

「っ………!」

眩しくも温かいそれに包まれた、ほんの一瞬。

光の向こうに、銀色の巨人の姿が見えて

………

「っ………! っ………!」

額にびっしりと脂汗を浮かばせ。千歌は目覚めた身体を起き上がらせる。

「………はぁ………」

まただ。またこの夢だ。

二学期に入つて以降、時々こんな夢を見るようになったが、やはり何度見ても慣れない。

しかもここ最近では夢に見る頻度が増えているから困りものだ。

「………んん? これ………」

自分の手に何かが握られている事に気が付き、視線を落とす。

翡翠色の発行体や赤のラインが走る短剣が鞘に収まったような形をしたアイテムらしき物体……夢で千歌が手にしたものと全く同じだ。

「……なんでこれが……って、えええつ!!」

抱いた疑問が時計という第三者によってもたらされた衝撃に打ち消される。

針が示す時刻は八時二十分。普段ならもう学校にいる時間……つまり完全に遅刻である。

「もおおお！　なんで美渡姉も志満姉も起こしてくれないの!!」

とりあえず謎のアイテムはスクールバッグの中に放り込み、急いでベッドから飛び降りる。

そして高速で着替えを済ますや否や自室を飛び出し、朝の挨拶も無しに学校へ向かって駆け出した。

「行つてきまあ——すつ!!」

急いでロクに周りを確認していなかったが故に、この時の千歌はまだ気が付いていなかった。

すれ違った人々、家族ですらも、自身に向ける視線が普段とは異質だったことに。

「せーっふー！」

家から全力疾走で学校まで辿り着いた千歌が教室に滑り込む。

どうしてか今日はものすごく身体の調子がいい。遅刻確定だと思っていた時間に間に合っただけでなく、ここまで走ってきたというのに疲れを感じない。

「あはは．．．寝坊しちゃったー．．．。おはよー曜ちゃん」

隣の席に座る曜を見て、昨日図らずも目撃してしまったある光景が想起されるも、それを振り払っていつものように挨拶。したところではたと足を止める。

「あれ．．．？ 私の机は．．．？」

二年生に進学してからずっとこの教室にあったものが、何故か今日は忽然と姿を消していた。

閉校祭で机を別の教室に移動させてそのまま置いて来てしまったのだろうか。その事を曜に聞こうと顔を上げ、新たに気が付く。

何故か自分に向けられているクラス中の視線。その様子が、どうにもおかしい。

呆然とし、好奇や怪訝を含んだ少なくともこれまで千歌に向けてきた事はない。そんな視線だ。

「……どうしたの皆……、そんな目して……」

席がない事に加えて更なる違和感を覚え、不安のままに千歌もまた皆を見返す。そしてその不安は、思いもよらぬ言葉によつて的中する事となつてしまふ。

「……えつと……誰……?」

「へ……?」

腑抜けた声と共に、身体が硬直する。

しかもその言葉の主は、ずっと一緒にいた幼馴染であるはずの曜だった。

「え、ちよ……あはは……曜ちゃん冗談キツイなあ……」

たははと笑いかけるも、曜は首を傾げるだけ。

他のクラスメイトも曜と同調するように不可解そうな目をするばかりだ。

「ねえ梨子ちゃん。これ何の嫌がらせ!!」

曜たちでは埒が明かず、同じAqoursの仲間である梨子に助けを求めぬ。

だが他の皆と反応は変わらず、彼女もまた千歌を知らないような素振りで苦笑いをした。

「その……転校生か何かかな?」

「ツ……!」

いい加減頭に血が上った。

いくら友人でも、悪ふざけの度が過ぎている。

「もう！ 何で曜ちゃんも梨子ちゃんもこんなことするの!! 一緒にスクールアイドルやってきたじゃん！」

地団駄と共に怒声を散らし、頭にきているんだという事を態度で示す。

「・・・スクールアイドルって・・・何？」

それを目の当たりにしてもなお変わらない態度に、もう許せなくなるくらいの怒りが湧き上がってくるのを感じた。

「いい加減にしてよ!! Aquorsだよ!! 私も曜ちゃんも梨子ちゃんも、一緒に輝こうねって頑張ってきたじゃん!!」

千歌としては、皆これでこの夕子の悪いイジメのような行為を止め、いつも通りに接してくれると思っていたのだ。

だがそんな理想は、次の瞬間に曜と梨子の口から紡がれた言葉によって打ち砕かれる事になる。

「あくあ・・・？」

「・・・ごめん、何かの勘違いじゃないかな？」

これだけ訴えても変わらぬ様子を見て、千歌はようやくただ事ではないと理解した。

悪戯でも悪意でもなんでもなく、彼女達は本気でそう言っているのだ。

千歌の事も、A q o u r s の事も……本当に覚えていない。
「……なんで……」

途端に今の今まで憤怒だった感情が悲しみに成り代わり、強張っていた身体から力が抜ける。

「……そうだ！」

千歌の鞆の中にある歌詞ノートやスマホには、これまでのA q o u r s の活動や一緒に過ごした日々の思い出が残っているはずだ。これを見せれば何か変わるかもしれない。

そう思い開いた鞆の中からは……今朝の夢で見た眩い光が溢れ出していた。

「……これって……」

光を放っていたのは、今朝起きた時に何故か千歌が握っていた謎の短剣。

そして夢の中同様、導かれるようにしてそれを掴むと——、

「うええっ！！」

視界が白一色に染まる。

それが短剣——エボルトラスターによるものだと理解した時には、既に千歌の姿は教室から消えていた。

「う……」

視界を覆っていた閃光が止んだのを感じ取り、恐る恐る目を開く。

「……」

今自分が経っている場所には強い見覚えがあった。

埃っぽく、誰が置いていったんだか分からない荷物がそこら中に置いてある暗い部屋。町がない。

共に笑い、騒ぎ、時に喧嘩もした……スクールアイドル部の部室だ。

「……どうなってるの?！」

ほんの昨日までここはAqoursの皆がいる部室だったはずなのに。今は春に千歌達が清掃をする前の物置場の姿に戻ってしまっている。

——あくあ……?」

——……ごめん、何かの勘違いじゃないかな?」

フラッシュバックする、始まりからずっと一緒に頑張ってきた二人の、何も知らないような表情と言葉。

信じたくない。そんな気持ちを抱きながらスマホを取り出し、全国のスクールアイドルが登録されたサイトでAqoursのページを開こうと試みる。

「つ……」

だが表示されたのは無情にも、『No Found』の文字。

「……嘘……、なん……で……」

それはA q o u r sがこの世に存在していないという事実を克明かつ残酷に語る、確固たる証拠だった。

「……は……は……は……」

「……陸……」

もう乾いた笑いしか出てこない。

その後、オウガの忠告にも耳を貸さず、焦りのままに各A q o u r sメンバーの前へと赴いた。

だがそれはスライの言葉が真実だったという事を陸に突き付けただけで。

花丸も、善子も、ルビイも、ダイヤも、鞠莉も……果南でさえも、まるで親の仇でも見るかのような嫌悪を向けてくるばかりだった。

「……解けないのか？ アイツの催眠……」

へ……アイツの種族、メフィラス星人の超能力は俺達ウルトラ戦士以上に強力だ。しかもラツキョウ野郎はメフィラスの中でも頭一つ抜けている……悪いが……ハッキリとは言い切らなかつたものの、ゼロの力だけで打ち破るのは厳しい事を示唆している事は分かつた。

へゲーム……と言っていたからには、恐らく俺がウルトラサインで救援を要請するのも無しだろうな。俺達で何とかするしかねえ……

「何とかって……それこそどうするんだよ……」

A q o u r s の皆だけでなく、世間までもがウルトラマンゼロを敵だと刷り込まれてしまっている以上、S a i n t S n o w の二人など他の人間に協力を求める事も不可能。

どう考えても、この四面楚歌の状況を打破できる方法が思い浮かばない。

へ……とりあえずは無事な者同士で情報を共有しておいた方がいいな。オウガが無事だったんなら、多分レイズの奴も催眠の影響は受けていない。まずはアイツに接触しておこう

「・・・ん」

異星人に対抗するならこちらも異星人と協力する、という事なのだろう。

ルイズは元々ダークネスファイブ側に付いていた者だし、陸達よりあちらの都合に詳しい。加えてA q o u r sのファンともなれば協力してくれることは間違いないだろう。

そう思いルイズの潜むアパートの方角へ踵を返したその時、視界に入ってみかん髪の少女に意識を引き寄せられる。

「・・・どうしたんだアイツ・・・」

いつも笑顔で明るさを振りまいていたはずの彼女だが、どうにも様子がおかしい。俯き、とぼとぼと重い足取りで歩を進め、纏っている雰囲気は見るからに暗い。

「・・・」

きっと彼女もスライの催眠下にある。顔を合わせたところで飛んでくるのは他のA q o u r sメンバーと同じ様な罵詈雑言だろう。

だが、これも幼馴染であるが故か。

もしかしたら彼女なら・・・そんな思いが芽生えた刹那、引き寄せられるようにしてその名を口にしていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・千歌・・・・・・・・」

「つ・・・・・・・・・・・・・・・・！」

求めていた声が、耳朶に触れる。
顔を上げれば、そこには・・・・、

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・！」

誰もA q o u r sを、そして自分を覚えていなかった。

親しかつた学友、共に歩んできた仲間、そして家族でさえも、誰一人として、まるで元から自分がこの世界に存在していなかったかのように。

そんな絶望の暗雲に光を差したのは、他の誰でもない、自分にとって特別だった☒彼の声。

「りく．．．ちや．．．」

顔を上げれば、彼もまた自分と同じくらいに驚いたような顔でこちらを見ていた。けれど、今はそんな事は気にならないくらいに嬉しくて。

「うおあつ^{!!}」

衝動的に身体は動き、千歌は陸の胸の中へと飛び込んでいた。

「ひぐつ．．．．．！ ああう．．．！」

二の腕で強く彼の身体を抱きしめ、顔を押し付けて嗚咽を漏らす。

陸自身も尻餅をついた状態で困惑つつも、その中に確かな喜びを映しているのは分かった。

「千歌．．．．．お前．．．．．」

「うう．．．つ．．．、う．．．ああああああ．．．つ！」

つい今朝までモヤモヤしていた曜が彼に気持ちを伝えた件。そんな事は本当にどうでもいい。

今は陸の胸の中であんなに、声と涙が枯れるまで泣き続けた。

百二十五話 月の導き

「・・・ウルトラマンネクサス・・・？」

目に痛い夕陽の光が満たす部屋の中、小さく動いた千歌の口から発せられたその名前。

「・・・そのウルトラマンが私の中にいるの？」

まだ信じ切れていないと言った顔をする彼女に対し、頷く事でそれを肯定する。

彼女には全てを打ち明ける事にした。

アナザークライシスの事。ダークネスファイブの事。ベリアルの事。ネクサスの事。

そして、世界を救う希望でもあり、同時に終演を齎す絶望であるという事も。

こうなってしまう現状だ。全てを話しておくのが彼女のためだろうと、ゼロと共に考えた結果だった。

「えつとじゃあ・・・私だけAquoursを忘れてなかったのは、そのネクサスつてウルトラマンのおかげって事？」

『ああ・・・、アイツ等はネクサスの力に阻まれてお前を洗脳できない。だから俺達と同

じように世界から切り離してやろうと考えたんだらうな．．．』

その形が、人々の記憶からスクールアイドルグループAquors及び、高海千歌の存在の抹消。

『．．．すまない。俺の警戒が甘かったばかりにこんな辛い目に遭わせちゃまって』

「．．．ネクサスの事、もつと早くお前に話してりやこんな事にもならなかったかもしれねーのに．．．」

「二人は悪くないよ．．．それより」

優しく微笑んだ後、神妙な顔を覗かせてくる。

「．．．．．曜ちゃんも、梨子ちゃんも、ううんAquorsだって他の皆だって．．．、元に戻るよね．．．？」

皆への心配や、自分の現状に対する不安。そんなものが感じ取れた。

突然誰も自分の事を覚えていない世界に放り出される．．．そんな恐怖は陸の想像を遥かに絶している事だろう。それから解放されたいと思うのは当然の事だ。

けれども、首を縦に振る事は出来なかった。

『．．．．．正直、俺達にもどうしたらいいのかわからねえ．．．』

形や程度こそ違うが、陸とゼロも似たような状況にある。世界から孤立しているのは同じだ。勿論解決できるならば今すぐにでも動いている——だがそれが出来ないのは、本当に解決の手立てが見当たらないから。

『ラツキョウ野郎の……スライの催眠は俺じやあどうしようもならない位に強力だ。無理矢理打ち破る事なんざ出来ねえし、どうすれば皆が元の記憶を取り戻すきつかけになるのかも……』

ゼロが重苦しくそこまで告げた辺りで、一縷の希望に縋っていた千歌の顔が絶望に染まるのが伺えた。

「そんな……駄目だよ……！ 皆あんなに頑張ってきたんだよ!! 聖良さん達にも協力してもらって、学校の皆とも絶対優勝して、浦の星の名前を刻むんだって約束して……」

最初こそ語気を強めていたが、現実を悟って声がすぼんでいく千歌。

そう、確かに皆頑張ってきた。たくさんさんの強力だつて得た。約束だつて交わした。

しかし、Aqoursも、Saint Snowも、浦の星の皆だつて誰一人、その事を覚えている者はいない。全て無かつた事にされてしまっているのだ。

「……こんなもの……」

普段の活気に満ちた声など影もない、マイナスな感情に染まつた声音が辛い響きで耳

朶を打つ。

何と言うのが正解なのか、どう声を掛ければいいのか。正解の見えない自問の中、それでも何とかして言葉を紡ぎ出すが、

「……ち——」

『——ッ！』

それを阻むようにして轟いた咆哮が、陸の声に覆い被さった。

「……これ……これ……」

『……ああ。間違いなく俺達を誘ってる……多分だが、見せつけようとしてるんだろ。どうする？ 行くか？』

「……それ以外選択肢ねえだろ」

奴等の狙いが何であろうと、被害が出る以上は出陣しない訳には行かない。今は千歌の傍を離れたくないのが正直なところだが、止むを得まい。

「……ちよつと行ってくる」

千歌もすぐに察してくれたのか、俯いたまま軽く首を振ってくれる。

それを確認した後、踵を返した陸は家を飛び出してはウルトラゼロアイを装着した。

『デエエエイヤア!』

『——ッ!!』

閃光を迸らせると共に出現したウルトラマンゼロの手刀が直撃し、内浦の上空を舞っていた円盤が叩き落とされる。

『……ナースか……』

濛々と上がる土煙の中から伸びたのは長い首に胴体、そして尾を持った龍のような見た目をしたロボット——宇宙竜ナース。

あの円盤はこのナースが蜷局を巻いた姿だったらしい。

『——ッ!』

『フッ!』

身体を鞭のようにしならせながら突撃してくるナースの攻撃を回避し、ウルトラ念力を用いてゼロスラッガーを飛ばす。

紅の陽を受けた二本の刃が煌き、軌道を描きながらナースの身体をバラバラに切断し

た。

「なんだ……？ 妙にあつさりと……」

『……いや……コイツあ……』

首を傾げる陸に、何か引つかかっている様子のゼロ。

そして彼の違和感は、すぐに形となって現れる事となった。

「出てけ——ッ！」

『……ああ……？』

先頭が終わったタイミングを見計らったように上がった怒声。

「サツサといなくなつちまえ——ッ！」

「テメエの顔なんて見たくねえんだよ！」

「消えろ！」

『ツ……！』

背後から飛んでくるのは、町民からの罵詈雑言の数々。

これまで守ってきた人々からの、ゼロに対する、憎しみの声。

『……コイツが狙いか……！』

ナースを出現させた理由、それは陸とゼロを□スライの催眠下にある人々□の前に呼び出す事。

こうして直接怒りや憎しみを浴びせる事により、世界から切り離された孤独感を、より際立たせるために。

『……………ぐ……………』

何となく分かっていた事とは言え、実際に体感するとやはり堪える。

味方のいないこの場から逃げるようにして、ゼロの身体は光となつて掻き消えていった。

「……………アイツ等はいつもと変わらなかつたな……………」

『学校の連中は俺とお前が一体化してる事は知らねーしな。お前に嫌悪を向ける理由がない』

次の日。

一旦スライの催眠による影響がどの程度出ているのかを確認するために登校したが、Aqoursメンバーとは違い陸に対して特に変わった態度を見せる事はなかった。

ゼロの言葉の通り、陸に嫌悪を向けてくるのはゼロと一体化している事を知っている者だけらしい。

『まあでも、お前が迫害みてーな仕打ちを受けるような事はなくて安心したよ』

「俺の事あどうでもいいよ……問題は千歌だな」

街の人達のゼロに対する言葉を聞いてから、千歌は余計に沈み込んでしまった。

今朝陸を送り出した時の顔こそ笑顔だったが、それも張り付けたものである事は間違いないだろう。

「別にサボってもよかったのよ……変な気遣いしやがって……」

『アイツの優しさだろ。実際、ちよつとは気休めになっただろ?』

「まあ、そうだけだよ……」

確かに、学校にいる間は気が楽だった。

あの場だけは陸が知っている、普段通りの日常だったから。

「……でも、千歌は一人だつてのに、俺だけこんなんでいいのか……?」

『……そんな心配ならさっさと帰りゃいいだろ……。ほら、買い物くらい早く

済ませようぜ』

今陸がいるのは統合先になる学校の近隣にある商店街。

とりあえず事が解決するまでは千歌は陸の家に泊まらせる事にしたので、急遽彼女の分の兵糧が必要になった次第だ。

ちなみに近所の店を避けたのは家が近い曜や善子と鉢合わせしてしまうのを避けるためである。

『何かアイツの好きなものでも買って帰ってやったらどうだ?』

「……だな。みかんはつと……」

「あれ? りつくくん?」

瞬時に好物を弾き出し、普段ならまず買わない橙色の柑橘類を求めて周囲を見回した刹那。

不意に見覚えのある顔がこちらを見つめているのが視界に入り、陸はそちらに向けて視線を固定した。

「やっぱりりつくんだ! 久しぶりだね!」

「……月……!」

どこことなくボーイッシュな印象を抱かせる容姿を持った少女は、肩辺りまで伸びた黒

髪を揺らしながら、恐らく彼女しか使用していないであろう陸の呼び名を口にして駆け寄ってくる。

「珍しいね、こつちの方まで来るなんて。何か用事？」

「いやまあ……ちよつと買物にな……」

彼女は渡辺月。

春から新しく通う事となる静真高校の生徒であり、それなりに小さな頃から付き合っている友人の一人。

「……？」どことなく曜に似てるな……」

（……まあ、コイツ曜の従姉妹だしな）

渡辺、という名字の通り、彼女は曜の従姉妹でもある。

昔、十年以上前だが、イタリアの方に住んでいた月が曜の家を訪れた際に渡辺家にいる事が多かった陸とも知り合ったのだ。

以来、千歌達ほどではないがたまに顔を合わせるようになった、そんな関係。

「ほら、四月から俺もそつちの学校行くし、買物がてらちよつと見に来たんだよ。あんま来た事ないしさ」

流石にウルトラマンとして戦っていたら敵の策略によって仲間嫌われたので行動範囲をずらした……などは口走れないので適当にはぐらかす。

「へー……。あ、じゃあ、ボクがこちら辺の事教えてあげるよ。時間大丈夫？」
「は？」

その誤魔化しが凶と出てしまったのか、何故かノリノリでそう提案してくる月。

「い、いや……。俺は別にいいけどお前もなんか用事とか……」

「いいのいいの！ ちよつとりくんの話も聞きたいしさ」

しまった、と陸は内心で自分の失策を呪った。

自分の置かれていた状況が状況で完全に失念していたが、月は会う度に陸や曜の学校での話を聞きたがるのだ。本人曰く違う学校生活を味わってるみたいで楽しいのだからか。

「とりあえず皆がよく寄ってる場所を知っておいた方がいいよね。りつくん達が早く静真の皆と仲良くなれるようにさ。……あ、買い物先ならそつちを優先してもらって大丈夫だよ」

「はあ……。いいよ、月に任せる」

魂胆としては陸の話を聞く大義名分が欲しかったのだろうが、統合先の学校の皆と早く打ち解けられるように、という心遣いを前には無下に扱う訳にもいくまい。

千歌には悪いが、少し道草を食わせてもらおうとしよう。

「それで、最近曜ちゃんとはどう？」

歩き始めて数秒、早速月が聞きたがっていた話題を切り出してくる。

会うと決まって月が最初に聞いてくるのがこの話題。つい最近までは珍紛漢紛だったが、曜に告白された今となつては分かる。恐らく月も曜の好意には気が付いているのだろう。

「どうと言われてもねえ……」

だがその曜は今スライの催眠下にある。好意なんてものはおろか、嫌悪すら向けてくる始末。流石にそんな事言えまい。

「別にどうもしねえよ。……てか、毎度毎度お前ばつか聞いてきてズルいだろ。たまにはお前の方の話も聞かせろ」

再び適当にはぐらかすと同時に、あまり月にはばかり主導権を握らせているとボロが出る気がしたのでたまには陸から話題を振る。

「もう少ししたら通う事になるんだし、少しは静真の事知っておいた方がいいだろ」
「……うくん……、それもそうだね」

一応それっぽい理由も加えると、少し不満げな顔をしていた月も納得してくれた。本当に申し訳ないとは思うが、こればかりは仕方がないと自身の良心に言い聞かせる。

「けど静真の話って言っても、部活動に力を入れてるってくらいしか話す事もないよ？」

「……別の学校と統合になるって事は話題にならないのか？」

「ウチは生徒数多いからね。転校生が来る、程度の感覚でしか捉えてないみたい」

静真はいわゆるマンモス校という類で、月の言葉の通り浦女や陸の学校とは比べ物にならない位生徒数が多い。そんな学校に通う生徒たちにとっては、今更一、二クラス程の生徒が増える程度は大した話題にもならないらしい。

「けどボクは楽しみだよ。りつくんや曜ちゃんが来てくれるし。それに、曜ちゃんが会う度に話してくる☒あの子☒とも仲良くなりたいたいからね」

そう言えば話題に出す度に会いたがっていたなと苦笑する陸。

まあ月は曜同様にコミュニケーション能力には長けているし、打ち解けるのにそういう間は掛からないだろ——

「・・・お前今なんて言った?」

う、とまで考えた辺りで強烈な違和感が生じる。

「・・・え? ボク何か気に障ること言ったかな・・・?」

「いやそうじゃなくて・・・あの子って・・・」

おかしい。

月の言う☒あの子☒とは、恐らく千歌の事。

だが今千歌は世界中からその存在を忘れ去られているはずなのに・・・。

「ああほら、あの子だよ。いつも曜ちゃんが楽しそうに話してくれるあの・・・あ

れ……？ 名前が……」

うーん、と月がもどかしそうに唸る。だが現状それ自体がおかしい事のはずなのだ。

千歌の話では、A q o u r s や学校の皆は実際に千歌を前にしたり、今までの思い出を語つても引つ掛かる様子すら見せなかつたという。

だが月には☒曜に千歌の話をされた☒という記憶が残っている。

(……これって……)

へ……

考えてみれば真つ先に引つ掛かるべき事はあつた。

どうして月は陸と曜の現状の関係を把握していないのか。

ゼロと出会つて以降の記憶が塗り替えられているのなら、その間少なくとも一度は会っているはずの月に曜の陸に対する嫌悪が伝わっていないのは不自然だ。

へどういう事だ……

月にのみ上手く暗示が掛からなかつた……とは考えにくい。

これまで千歌と深く関わってきた者ですらその存在を完全に忘れているのに、彼女と直接的な関わりのない月に限つてそんな事が――、

「っ……！」

いや……むしろその逆。月は千歌と直接会つた事が無い。

それが故に月はスライにその存在を☒知られていない☒のだ。

スライの性格からして計画に綻びは許さないはず。恐らく記憶の矛盾を生じさせない為に千歌と関わった者の記憶は、些細な事に関するものまで入念に塗り替えたはず。それ以外の者はせいぜい集団催眠でスクールアイドルAqoursとしての高海千歌の記憶を弄ったくらいであろう。スクールアイドルとしての千歌しか知らない人々にはそれで十分なのだから。

だがもし、面識がないが故にスライに把握されておらず、スクールアイドルという形以外で千歌と関わった人物がいたら？

直接目にした事こそなければ、従姉妹と仲の良い親友、という形で間接的にその存在を認識していた者がいるとするなら。

月の記憶から消えているものはAqoursとしての高海千歌と、その名前くらい。度々従姉妹の話に出てくる、☒渡辺曜の親友としての千歌☒の記憶は臆気ではあるが残っているのだ。

「……………りつくくん？」

ふと舞い降りた閃きが光を差す。

スライとて完全にAqoursの皆を監視できていた訳ではない。きつと曜と月のように、把握出来ていない関わりや交流があったはず。

百二十六話 最後の刺客

「だれ……かあ……」

終わりの見えない暗闇を一人彷徨う。

どれだけ歩いてても降り払えない、いくら求めても光りなんか見えない、孤独の闇。怖い。寂しい。そんな感情のままに四肢を動かし、必死に独りぼつちから逃れる救いの手を求めた。

「っ……！ 陸ちゃん！」

どのくらい走ったのか。その感覚すらも覚束ない中で遂に差し込んだ希望。

ぼう、と明るくなった場所で一人佇む少年の姿を見つけ、走る速度を上げては彼へと近づく。

「陸ちゃ——」

抱きつくように伸ばした腕が彼の身体に触れ——一瞬の内にその温もりが消える。

「……え？」

確かにそこにいたはずなのに。彼に触れたその手が空を握った事を理解したその時にはその存在を想起させるものは何一つ残っていなかった。

「りく……ちゃん……?」

「……」

急速に冴えていく意識のままに身体を起き上がらせ、最悪な気分のまま手に収めた白い短剣を見つめる。

ぼんやりとした光を点滅させるエボルトラスター。夢の中でこれを手にした日からずっとこの調子だ。

一体彼は——ウルトラマンネクサスは自分に何を伝えようとしているのか。
「あ、やっと起きたかお前」

自身もねぼすけな事を棚に上げ、開いたドアの向こうがらから呆れ顔を覗かせてくる陸。

そうだ。家族までも忘れられて抛り所のない千歌に彼が自宅の空いている部屋を貸してくれたため、今は陸と同居……という状態になっていた。

「陸ちゃん・・・? どうしたのなんかそわそわして」

「お前がずっと寝てるからだろ。いいからばつぱと飯食ってくれ。行くところあるから」

千歌にもついてきて欲しい、ていうかついて来い。続けて陸はそう言う。

昨日妙にすつきりした表情で嫌いなはずのみかんを買って帰ってきた事と何か関係があるのだろうか。

「・・・何かあるの?」

「まあ、な」

問い返してみれば、ここ最近ずっと険しいままだった彼の表情が、言うなれば不敵に笑って見せていた。

「今のお前にとつちやこれ以上ない吉報だよ」

「・・・なるほど」

ひっそりと佇む廃アパート。メトロン星人ルイズの根城であるその建物で顔を突き

合わせるのは、スライの催眠の影響を受けていない四人の地球人と宇宙人。

月の事、そして彼女の特珠な立ち位置故に僅かながらも千歌の事を覚えていた事、そしてそこから導き出した打開法。それらを全て話した。

「つまり、陸君には普段あれだけ可愛い女の子達に囲まれていきながらまだそんな特殊ポジションの隠しヒロインがいたと・・・、君ギャルゲーの主人公か何かなの？」

「そう言う話をしてるんじゃないやねーよアホ」

「じよーだん、冗談だよ。要するに記憶の特性を利用してようつて事だろ？」

「構成要素の欠如か・・・確かにソレならどこかで綻びが出るね」

「・・・全然分かんない・・・」

ルイズが感心したように首を振る中、ただ一人小難しい顔で目をぐるぐるさせている千歌。彼女にとっては容量オーバーの話だったらしい。

実際、陸も自分で気が付いたのではなく他者に説明されたと同じ事になっていただけうが。

「えつとまあ、千歌ちゃんにも分かりやすく説明するとね、記憶っていうのは必ずしも特定の事象同士が一对一で対応してる訳じゃないんだよ。何かの出来事が何かの出来事と、そしてそれもまた別の何かと繋がって出来ている。だからそのうちのいくつかを消しても必ずどこかで綻びが出るんだよ」

スライの性格上綻びが生じるのは好まないと思つていたが、オウガの言葉の通り実際にはそんな事は不可能。

だから奴がした事は綻びを全て消すことではなく、把握できる範囲で目立つ綻びを潰していっただけ。

スライとて全てを知り得ている訳ではない。月がそうであつたように、必ずどこかで記憶の空白が生じているはずなのだ。

「……まだよく分かんない……」

「うん……そうだなあ……。まあ早い話、前にボクが君から曜ちゃんに関する記憶を奪つた時みたいなきっかけで起きてる訳。千歌ちゃんあの時、曜ちゃんの事は覚えてないはずなのに何故か違和感を感じたろ？」

「……つまり、記憶を変えられる前は当然だつたことが急に当然じゃなくなると変な感じがするって事？」

「そ。その現象が今、他の皆に起きているかもつて事。それでその歪みを大きくするこゝとが出来れば皆の記憶を元に戻せるかも……つて話、アンダスタン？」

オウガの説明でようやく話を理解したか、納得したように首を振り、ぱああとその表情を明るくものに染め上げていく千歌。

「……じゃあ、皆元に戻るかもしれないんだよね！ また皆とA q o u r sでいられる

んだよね！」

およそ数日ぶりに見せた彼女らしい明るい笑みに釣られ、陸とルイズが口元を綻ばせる。

こんな状況になった責任の一端は陸にもある。どうにかならないかと模索した甲斐があつたか、笑顔は戻つたし、解決の糸口も——、

「あー……それなだけどね……」

少なからず全員が抱いていた緊張が緩み、前向きな空気が舞い降りる。

そんな空気に、会話には入つてこそいたものの、決して光明を見るような表情はしていなかつたオウガが水を差した。

「……ボクもノリノリで解説しといてなんだけど、……そう簡単にはいかないと思うよ」

「……え？」

三人同時に鳩が豆鉄砲を食つたような顔をオウガに向け、その言葉の真意を視線で問う

「あ、えつとね、勘違いしないで欲しいのは、陸君が見つけたその方法自体は有効ではあるんだ。……ただ、かなりその場面が限られる」

『どういう事だ？ ラツキョウ野郎が皆から千歌の存在や、俺や陸との記憶を抹消して

るなら、必ず渡辺月のようにどこかで空白が生じる……お前が言った事じゃねーか」

自ら陸の攻略法を解説した行動と矛盾する今の言葉にゼロも疑問を覚えたか、ウルティメイトブレスレットを介して声を発する。

そんなゼロに、オウガは苦々しい顔で返した。

「……まあ、とにかく見てみれば分かると思うよ」

「————なっ……?」

オウガに連れられた先は、A q o u r s の集会所の一つでもあった松月。

道路脇から眺める店内で談笑するのは、曜、梨子、そして、どこことなく千歌を思わせる、見知らぬ少女の三人だった。

「……見ての通り、千歌ちゃんの記憶が消えた事で生じた穴は埋められて……
アイツがスライの用意した千歌ちゃんの代わりなんだ」

「代わり……?」

「そ。多分スライには、その内君達があの打開策に辿り着く事は想定範囲内だったんだと思う。だからこうして手を打っていた」

敵しいこと言っちゃうと、記憶の穴を利用するなんて一番最初に思いつく事だしね。と付け足しつつオウガは続ける。

「・・・ダークネスファイブには、彼等に使える五人の宇宙人部隊があったんだ。それがダークネスファイブ特戦隊。君達側に寝返ったカドー星人のボクに、メトロン星人のルイズ。君達が倒したゼットン星人、マグマ星人。そしてアイツが最後の一人——ババルウ星人ゲルツ」

『ババルウ・・・あの時のか・・・！』

まだ陸とゼロの関係が皆にバレる前の夏の日。ネクサスの光が目的か、スライが宇宙人を使役して千歌を狙った事があった。

その時送り込まれたうちの一体がババルウ星人。以前ゼロから聞いた話によれば、自由自在に姿を変えたり、その能力をコピーする力があるのだとか。

つまり奴は今その能力を利用して人間に化け、記憶が塗り替えられる前の千歌の立ち位置を演じているという事。

「繰り返し返すけど、決して陸君の見つけた方法が悪い訳じゃないんだ。ちゃんとこの状況でも通用する方法ではある。・・・けどゲルツがいる限り、千歌ちゃんと

の記憶を利用して突破口をこじ開けるのは……・・・・・厳しいと思う」

重苦しいオウガの声に続き、松月の中から明るい笑い声が発生した。

曜の、梨子の、そしてゲルツとか言うババルウ星人が化けたニセモノの、本来は千歌であつたはずの笑い声が。

「……・……」

彼女につかの間の笑顔を与えた希望は、瞬く間に消えた。

横に視線を流せば、呆然と虚空を見つめる千歌の顔が、虚しく映つた。

幾度となく見上げ、見慣れた自室の天井が遠く感じる。

『……あー……・……・……なんつーかその、気にすんな。何もお前一人が悪い訳じゃねえ』
陸を氣遣うゼロの声もいつになく空虚な感じがする。彼だって今その言葉が意味を成さない事は理解しているのだろう。

……・……迂闊だつた。

もつと慎重に行動していれば気が付けたはずなのに。

現状を何とかしたい。あの日以降暗い顔ばかりの千歌の気を少しでも楽にしてあげたい。

その想いが焦りを生み、結果として更に千歌を傷付ける事となってしまった。

「……何やってんだ俺……」

千歌は気にしていないような素振りを見せていたがそんな訳ないのは分かるし、その後に一転して無口になったのを見れば相当なショックを受けていたのは明らかだった。

「……」

寝そべったベッドの上で深く息をつく。

オウガの言った通り、あのババルウ星人がいる限り月のようなケースは期待できない。

千歌以外でA q o u r sメンバーと関りがあり、尚且つスライの催眠やババルウの存在の影響を受けないやり取りを交わした可能性があるのは陸とルイズだが、両者とも警戒されてしまっている以上期待は出来ない。

「……どうすりゃ——」

「……陸ちゃん……」

不意に掛かった声でいつの間にか部屋の入口に千歌が経っていた事に気が付き、慌て

て彼女のの前では口に出さないようにしていたマイナスな言葉を押し脅す。

「……どうした？」

「……ちよつと怖い夢見ちゃって……今日はこちらいい？」

もう寝ていたのかかと思ひ時計見やってを確認すると、もう既に針は天辺をゆうに過ぎていた。自覚はなかったが随分と惚けていたようだ。

「……別に、構いはしないけど」

「……ありがと」

承諾すると、陸の横たわっているベッドに腰を下ろして身を寄せてくる千歌。何を思ったか同じ布団で眠る気らしい。

「……」

小さい頃は曜や果南も加えて一緒に昼寝する事はあったものの、流星に高校生にもなつてこれは如何なるものなのか。

そう思ひ自分は別の布団を引っ張り出して床で寝ようと身体を起き上がらせようとした刹那、引っ張られるような感覚にそれは阻まれた。

「……千歌？」

千歌が寝間着の裾をつまんでいるのが原因なのはすぐに分かり、怪訝と共に流した視線が彼女と重なる。

離れないで。

寂しそうに揺れる瞳が、そう訴えていた。

「……………はあ……………」

その中に隠しきれていない不安や哀愁を感じ取り、小さな溜息と共に隣で寝る事、所謂☒添い寝☒を黙認する。

「……………ゴメンな」

「……………え？」

再度身体を横にし、天井を見上げたまま謝罪の言葉を口にする。

「……………期待裏切った上に……………あんな胸くそ悪いモンまで見せつけて……………」

どうして千歌がこの行動を思い立ったのかは分からないはまだ。けれど、少なからず昼間にあつた一件に関係があるのは確かだろう。

「……………気にしないで……………陸ちゃんが悪い訳じゃないよ……………」

か細い声が震える。

慰めでも気休めでもなんでもない。本心でそういつてるからこそ、その言葉は余計に突き刺さった。

「……………こつちこそゴメンね。なんか無理させちゃって……………」

違う。今の彼女がこんな気遣いをする必要はない。

「全部陸ちゃん達に任せっぱなしだし、それなのに都合のいい結果ばかり期待してちやダメだよね……」

続いたのは、それこそ本当に千歌が気にするような事じゃない事に対する自責。

何も出来ない無力感と、度重なる精神的疲労が彼女を押し潰してゆく。

「ホントは私が自分で何とかしないとイケないのに、千歌なんにも出来ないから……陸ちゃんに甘えちゃって……」

千歌が一人称で自分の名前を使う時は、誰かに甘える時、そして誰かの寄り添いを求める時だという事を陸は知っている。

「だから、これくらい……だいじょうぶ……つ……だから……」

顔を陸の胸元に押し付け、抑えきれない感情を涙と声に乗せて漏らす千歌。

シャツがじんわりと温かい湿り気を帯びる中、あまりにも弱々しい彼女の姿に堪え切れない程に胸が痛む。

涙で濡れたシャツはそのうち乾くだろう。

だが、今こうして泣き続ける千歌の心の涙が止め、乾かすことはできるのだろうか。……めん……めん……」

結局、千歌が泣き疲れて眠りに落ちるまでの数十分間、ずっと。

抱きつかれたままの陸は、己の無力さを痛感しながらみかん色の柔らかな髪を撫で続けていた。

「……んあ……?」

耳朶に触れた喧しい音に瞼を開く。いつの間にか陸も寝ていたらしい。

「……何だよこんな時間に……」

音の正体はとある事情で陸の家に置いてある衛星電話の鳴らした着信音。

時計を見ればまだ四時半。こんな時間に電話をかけてくるなど迷惑もいところだろう。

まだ半分寝惚けている身体を渋々起き上げ、まだ安らかに寝息を立てている千歌を起こさぬようそつと電話を取っては部屋を出る。

そしてわざわざ衛星電話で連絡を寄越してくる時点で殆ど相手が誰であるのか分かる事も失念したままスピーカーを耳に押し当て、そこから聞こえてきた声に目を見開い

百二十七話 無自覚センサーション

『……しかし、虚しいものだな』

波立つ青の中に揺れるそれを見つめ、ぽつりとヴィラニアスが零す。

『傀儡と化した者。利用されるために命を受けた者。それ以上の価値など存在し得ない生………呆れるほど虚しい』

『……そうですかねえ？ 陛下御復活の礎となれる……この上なく誇らしい事だと思いますが』

『………そうか』

不穏な参謀の笑いを背に受ける。次は自分の出番だ。

スライの考えがどうであれ、ヴィラニアスとてベリアル復活に命を捨てる覚悟があるのは変わらない。

だがベリアルに身命を賭したダークネスファイブである以前に、自分は一人の戦士。

戦いの中でこそ、己の真価は輝くものだから。

『……行くぞ。相棒』

「……………いいんだよ」

当然その可能性には千歌も気付いていたし、不安がっていたのも見て分かった。だからこそ、陸は自分が何とかすると言った。いや、言わざるを得なかった。

「……………これ以上苦しめられるかよ」

偶然デユナミストとしての素質に優れ、偶然ネクサスに継承者として選ばれた。

自ら望んだ訳でもないそんな光に選ばれ、自覚もない内に狙われ、拳句の果てに友人や家族、居場所すらも奪われた。

今そんな彼女に寄り添えるのは……………自分だけだから。

（俺が……………しつかりしないと……………!）

「……………何してるの?」

停留所に止まったバスから降りてきた曜の冷たい視線が刺さる。

記憶改変が為されている中ではいつものように彼女を千歌の家まで送り届ける必要もないのだが、それでも陸は高海家の営む十千万へと足を運んだ。

「……別に、今日はお前に用はねえよ」

十千万に來た以上通学中にここを經由する曜やお隣である梨子から避難や罵倒を受けるのは避けられない事。それでもここへ來た理由は一つ、千歌に成り代わっているあのババルウ星人と接触するためだ。

「……じゃあ何？ 今日百歌ちゃんに嫌がらせしに來たの？」

「百歌……？」

曜が口にした名前は、千歌と同じ響きを含んだもの。

そこから推測するに、そいつがババルウ星人の人間体なのだろう。

「……陸に百歌ちゃんと顔合わせる資格あるの……？ あの時一番悲しんでたの百歌ちゃんなんだよ？」

曜や皆の記憶がどこまで弄られ、どれだけ事実が捻じ曲げられているかは分からない。

だが彼女の様子から察するに、千歌との記憶は都合よく改竄され、丸々その百歌とやらに置き換えられているのは間違いないと思われる。

「……また何か悲しませるような事したら私——」

「あ……」

狙いすましたかのように曜の言葉を遮る形で表玄関の戸が開き、容姿や雰囲気や千歌に合わせたような少女が顔を見せる。

噂をすれば何とやら、その百歌とかいうものの登場だ。

「……えつと……」

険しい表情の曜と、その敵意の矛先である陸を見て何かを悟ったか、一瞬戸惑うように見せた仕草の後、

「……ちよつと……二人にしてもらえるかな？」

「……何のつもりだ？」

「何って……そつちこそこつちに用があつて来たんじゃないの？」

庭の木々の裏へと場所を変え、百歌——ババルウ星人と穏やかではない視線をぶつ
け合う。

「ま、大方私の事だろうけど」

見た目は至って普通の女子高生。口調もそれに合わせているのか、星人本来のものでなく容姿相応のそれだ。

「最初に言っておくと、私は自分から動いて地球人に危害を加えるつもりはないよ。変に動くと周りの記憶と齟齬を起こしかねないし」

『……それを俺達に言っていていいのか』

「……言ったところでどうこうできると思っていないしね」

挑発するようにすう、と目を細め、焦点の示す視線の先が木々の間から僅かに見える曜へと移る。

「……面白いよね。ハハハ」

真意は何か、唐突にそんな事を言い出す百歌。

今更だがコイツの名前、そして容姿をあからさまなまでに千歌に似せているのは何の皮肉なのか。

「あの子だけじゃない。学校の子とか、地域の人とか、この旅館の人とか。皆が私に対して温かいのは、高海千歌が築いてきたものがあつたからでしょ？」

つらつらと入れ替わってからの出来事を挙げつつ、本来ならばそこにいたはずの千歌の名前を出す。

「……その高海千歌との記憶や感情を私とのものだと思い込まされて、本人たちはそれ

が至極当たり前みたいに接してくるの……死ぬほど滑稽だ」

一転して声音がどす黒く塗り替わり、瞳に侮蔑の色が浮かぶ。

その吐き気すら催しそうな悪意と邪念に、改めてコイツが百歌などではなくババルウ星人なのだという事を感じる。

『考えてもみる。元の奴等ならばこの状況に怒りだったり悲しみだったり感情を抱いて反発するだろうよ。だが今はそれすらも出来ない……いや、しようとも思わなくされている奴等……友や家族ですらそうなっているのは滑稽以外の何物でもないだろ?』

「……殺されてーのかお前」

込み上がってくる感情のままにゼロランスを首元に突き付けるも、ババルウは薄ら寒い笑いを浮かべたまま飄々としている。

『いいのか? 言った通り今は俺が周りから愛される存在で、逆にウルトラマンゼロは全人類の敵。そんな状況で俺に傷でもつけければ、ゼロがお前だと知る A q o u r s だとか言う連中はどう思うかねえ……?』

「っ……」

脳裏にちらついた顔に思わずゼロランスの切っ先が揺れる。

そんな一瞬の動揺の根幹にあるものを見透かしたように不敵な笑みを浮かべたババルウ星人は、少女の姿のままその顔を陸に寄せる。

『とにかく、お前は俺に対して何も手は出せないって事だ。……まあ、せいぜい頑張つて』

そう言うどくるりと踵を返し、わざとらしく傷心を取り繕うかのような笑みを作つてバス停の方へと去つてゆく。

奴が向かつた先では曜と、いつの間にか来ていたらしい梨子が、敵意を込めた瞳をこちらに向けているのが見えた。

「っ……」

この時感じた胸の痛みは、きつと気のせいなどではなかつたのだろう。

ぼんやりと西日差し込む賑やかな商店街の中孤独に一人佇む。

『……まあ、あれだ。曜達もラツキヨウ野郎に洗脳されてるだけで本心つて訳じゃねーから、そんな気にする事もねーよ』

「……別にそんなんじゃないし」

口ではそう言うが、実際それ以外の理由も考えられないのが事実だ。

恐らく、いやほぼ確実に、あの時陸は曜達からの非難を想像し、尻込みした。自分がしつかりしないと。そう決意した矢先にこの有り様とは笑えもしない。

『……しつかりババルウの奴、見た目だけじゃなく口調とか性格まで千歌に似せやがって……』

「……そんだけ皆の中で千歌が影響してたって事だろ」

言うなれば感覚としての慣れ、だろうか。

例え記憶を塗り替えられようと、言動や雰囲気の些細な違いには無意識のうちに違和感を覚えてしまうのだろう。

スライはそれすらも嫌い、ああやってババルウ星人を使わせた。

「……それに比べて俺は……」

『……やっぱダメージ受けてんじやねーかよ。めんどくせえなお前……』

自分でもよく分からない。スライの力によるものだと分かっているのに。元の皆が言うようなものでない事ぐらい分かっているのに。

陸が思っていた以上に、皆から拒絶されると言うのが、辛い。

『……だが、妙だな』

「……何がだよ？」

『お前、鞠莉と曜に告げられてるよな？ それなのにお前に対する想いが弱かったっての

も変じゃねーか?』

言われてみれば、と悲観するばかりの思考を止める。

自分で言うのもあれだし恥ずかしい話だが、ゼロの言葉の通り陸に好意を向けていたメンバーもいる。

好き、という明確な感情を違和感も何もなく捻じ曲げる事が出来て、千歌に対するそれを誤魔化す事が出来ないというのもいささか疑問だ。

『鞠莉と曜だけじゃねえ、他の連中だって……。周りから見たらお前も俺も千歌に負けないくらいには大きい存在にはなってたはずだ』

「……。お前自分に自信あり過ぎだろ……。でも確かに……」

そもそもウルトラマンであるゼロがいる時点で皆への印象が千歌より薄いというのも疑わしい話だ。

となると、千歌の場合は穴を埋めて誤魔化すためではなく、もっと別の目的でババルウ星人を配置したという事になる。

陸には必要なく、千歌には必要だったもの。それは一体……。『ごめんねりつくーん! 待たせちゃった?』

電柱に寄りかかり思考を巡らせる陸に掛かる声。

一度考えるのを止めて視線を流せば、月が雑踏の中からはたばたとこちらに駆けてく

るのが見えた。

「別にそんな待つてないから気にすんな。……てか俺でいいのかわ？」

「いや、ボクりつくくんしかそっちの学校に友達いないからむしろ助かるよ。付き合わせてゴメンね」

先日ここでバツタリ月と会った際、別れ際に統合絡みの事で手伝って欲しいことがあると頼まれた。

初めは断つたのだが、ババルウ星人の件が発覚し、それにより月に対しても確かめておきたい事が出来たために引き受けた次第だ。

「……そういや初め断つたから詳しいこと聞いてないんだが……何すりゃいいんだ」「ちよつと統合の事で揉めててさ……それで各学校の代表同士で話した方がいいかもつて先生が……」

これは先日知った事だが、月は陸達の統合先である静真で生徒会長を務めているそう
な。

統廃合になった他校の生徒を受け入れる準備のために最近の彼女等生徒会は大忙しらしい。

「大変だよなあ……ウチなんかまず生徒会が存在しねーぞ……」

「あはは……だからこうやってりつくんに頼むことになっちゃったんだよね……」

こんな事を言うのもあれだが、完全に催眠の影響を受けてはならず、尚且つ陸達の事情を知らない月といるのは少し気が紛れる。

自分が何とかせねばとは思いつつ、周りの敵となったこの状況においてやはり心のどこかで休まる場所を求めているのかもしれない。

「……そういえばさ」

しばらく歩いた後、伺うタイミングを探していたような月がふと話題を変える。

「ボク今日の事で曜ちゃんにも声掛けたんだけどさ、りつくんもいるって言ったらいきなり怒ったみたいになんか断られちゃって……何かあったの？」

気を緩めた瞬間に飛んできた不意打ちに一瞬口元を引き攣らせる。

そんな陸の反応を見、月は何か心辺りがあるように次の言葉を継いだ。

「……もしかしてまた喧嘩したの？」

「……そんな感じ」

日頃よく喧嘩していたのが功を奏したか、日常茶飯事の一片だと認識してくれたらしい。

実際は喧嘩とかそんな可愛いものではないのだが、誤魔化せるならそれに越した事はないのでそのまま月の勘違いに乗つかるとする。

「ははっ、変わらないね二人共。ホントに仲良しだなあ……」

そう言つて笑う月の表情は人当たりの良さを感じるいつものそれだが、どこことなくその瞳はどこか寂し気に揺れているようにも見えた。

「同じ学校だったらもつと二人の面白い所見れたんだろなあ……二人は静真に来ると思つてたのに、どっちとも別の学校行くつて言つた時は驚いたよ。静真の方が近いのに」

「……まあ、アイツが浦女行くつて言つた時は正直俺も驚いた」

確か学区的にも学力的にも浦女に行くしかなない千歌が誘つたのがきっかけだったか。

当初は静真に進学するつもりでいた曜だったが、最終的にはその誘いに乗り、浦女を選んだ。

「曜ちゃんは仲のいい友達に誘われたから……つて言つてたけど、りつくんは何で向こうに？」

「……俺も大体同じ理由。今の所の方が中学からの顔見知り多かつたからな」

曜の家とお隣の陸も当然学区的には静真だったが、色々あつて今の高校に行く事とした。

結果として違う学校になつた後でも千歌や曜、果南との付き合いは続く事となつたので後悔はないが。

「……とは言つても、曜ちゃんが静真に来てたら絶対りつくんも静真選んでたよね？」

「……………なんだその俺がアイツ目当てで学校選んでたみたいな言い方……」
「え？　そう？」

呆れ気味に返すと、不思議そうに、かつ確信めいた何かを瞳に秘めた月が次の瞬間に
紡いだ言葉は――、

「ボクはずっと、りつくんは曜ちゃんが好きなんだと思ってたけど」

「……………ほえ……？」

百二十八話 暴君の鉄槌

駿河湾へと沈む夕日を浴び、古びた印象を与える木造の校舎が赤く萌ゆる。

その門前に構えられたバス停の前で月と別れた陸は、複雑に感情が入り混じった溜息を深々と吐いた。

「……ぜんぜん話が入って来なかった……」

『学校代表がそれでいいのかよ……』

「あんなこと言われて集中しろって方が無理だっつの……」

——ボクはずっと、りつくくんは曜ちゃんが好きなんだと思ってたけど

月のその一言は最近告白されたばかりだという事に加え、スライの催眠で豹変してしまつた彼女を少なからず辛く思つていた陸を動揺させるには十分すぎた。

おかげで何か統合に際して大切な話をされたのにも関わらず内容はさっぱりである。

『……まあなんつーか、月に便乗するみてーに今更こんなこと言うのもあれだとは思
うが……俺もお前は曜が好きなんだとばかり……』

「お前もそつち側か!？」

——喧嘩も、苦勞も、氣遣いも迷惑がる事も全部。全部含めてお前といる時間なんだよ！それが心地いいから一緒にいるんだろぅが!!

異国のチャンパールだか遅刻のテンパールだかのせいで自暴自棄気味になり、自分は迷惑しか掛けてないからこれ以上近づかない方がいい、そう言った曜に対し陸が言い返した言葉。

感情のままに思っていたことをそのまま言葉にしたが、今思えば確かに告白のそれだ。

『あの場には俺等しかいなかったが……ギヤラリーいたらモロバレだぞあれ』
言われてみればそれらしき節が思っていたより多い……ていうか過去の自分が恥ずかしいことを宣いすぎていて震える。よくもまああんな恥ずかしいことをペラペラと……。

「い、いやそりゃ好きか嫌いかで言われりや勿論好きだけだよ……友達としてーとかそんなんじゃ……」

『……そうだな……、例えば、A q o u r s の誰かがその辺の野郎に告白されてその答えに悩んでたとするぞ？ どう思うよ』

「何だその例え……まあ、多少気になるとは思うけど……」

言った通り多少なり気になりはするが、どうするかは本人が決める事だし陸の意志が

入り込むものでもないだろうに。

実際スクールアイドルをやっている以上はそう言う機会もあるだろうし想像には難くない。

『……じゃあお前、それを曜で想像できるか?』

「いやお前出来るもなにもアイツが一番そう言うの多いと……」

答えかけの言葉が止まる。

想像することはしたので。曜に惹かれた誰かからの想いを受け取り、結果がどちらであれ自分なりに答えを出そうとツする彼女の姿を。

……何かこう、嫉妬などとは少し違うのだが、凄くモヤモヤする。

『……まあ、お前の気持ちの事だから断定はしないけどよ……』

そう言えば中学の時、曜が人気のあるサッカー部の男子から交際を申し込まれたことがあり、千歌や果南と一緒に——何なら陸が一番——断つたと言う報告を聞くまでハラハラした事があつたか。

思えば、あの頃にはもう……?

『少なくとも曜は、お前に好きって気持ちを伝えてくれてんだ。……それにお前なりの答えぐらいは出してやれ』

流石に自覚せざるを得ないのだろうか。

曜の事が、好き。

正直に恥ずかしいし、こうしてゼロに色々指摘されて穴にだつて入りたくらいだ。

・・・けれど、決して嫌な感情という訳ではなくて――、

『あと鞠莉の方にもな』

「注文が多い・・・てかそれだつたら余計今の状態をなんとか――つと」

悶々と没入していた思考が身体に加わつた衝撃に遮断される。どうやら人とぶつかつてしまったらしい。

「すみません・・・！ よく前見てなく・・・て・・・」

見上げた先の顔に咄嗟に口から出た言葉が徐々に霧散してゆく。

見つめていると心身が乖離するような感覚を覚える、どこまでも黒い瞳。

その双眸は遠く、陸を見ているようで、もつと別の何かを見ているようにも思えた。

「なに、お気にせず」

何故だか背筋が凍るような薄い笑み。ぶつかつてきた陸を責めない思慮のある男性、と言つた印象だが、その紳士的な振る舞いの裏からは底の知れない何かを感じる。

「それでは」

数秒の間陸を見つめた後ぺこりと一礼し、歩き去る男の青のメッシュがかかつた黒い

髪が揺れる。

油断してはいけない。直感がそう警告し、陸はその背中を見えなくなるまで目を離すことが出来なかった。

「……なんだ今の感覚……」

『……アイツ、この星の人間じゃねえな』

幾分か低い声音になったゼロが静かに告げる。

鼻が利くゼロが言うのだから間違いはないのだろうが、それだけじゃない。説明は出来ないが確信めいたものがあつた。

今まで接触してきた宇宙人ではなく、どちらかというゼロに近いような……、

『宇宙人全員が全員悪党って訳じゃねーが……用心しておくに越した事はないか。次また見かけるようなら警戒だな』

「……分かった」

どつと溢れ出てきた疲れに深く息をつく。

結局月に対して確かめたかった事も叶わずじまい。判明したのはこつぱずかしい陸の恋心疑惑とまた何か怪しい奴がその辺をうろついているという事。

特に状況を改善させるようなものは得られず、むしろその足かせになりそうなものばかり。

こんな事をしてる場合じゃないのに。完全に無駄にした一日が重く押し掛かる。

『……とりあえず今日はもういいだろ。お前の親も帰ってくるんだろ』

「ああそうだ……千歌の件の言い訳考えねえとなあ……」

再度溜息をついた陸の影の伸びる、その先。

背後で手を組む男が陸と同じく伸ばした影の中で嗤う仮面の悪魔の存在には、まだこの時は気付いていなかった。

夢を見る。

夏のある日をきかっけに毎晩のように見続ける、何度目かも分からない悪夢。

だから、またあの夢だ。胡乱な意識の中でもそれだけは分かった。

『随分と楽しそうだったな。お前でない何かと戯れるお前のお友達は』

一筋の光すら差さない、黒で塗り潰された暗闇の中に声が木霊する。

そんな世界を彷徨う私は、いつも一人だ。

『哀れなものだな。お前が大切な仲間だと思っていた連中は、今やすっかりお前を忘れ、

それを気に留めることなくのうのうと過ごしている。所詮、お前という存在は奴等にとつてその程度だったという事だ』

日に日に、迫る巨影が大きくなってゆく。

つり上がった赤い双眸は足を竦ませ、慣れる事のない恐怖が全身を震わせる。

『どんなに逃れようとところで人間の本質は闇、どこまででも付きまとう。大いなる光を宿した貴様としてそれは変わらん。……だが受け入れれば楽になる。貴様の抱く嫉妬や劣等感もろともな』

囁く声と一緒に影は私を飲み込み、更に深い漆黒が世界を包んだ。

いつになつたらこんな悪夢から解放されるんだろう。

放り出された闇の中で一人孤独に思う。

いつもいつも、このただ辛く苦しい時間が過ぎるのを待つだけで――、

『感心しないねえ……』

ぼつんと、虚空から発された☒もう一つの声☒。

それは稀にこの夢に現れる白銀の光ではなく、青黒いオーラを纏った魔方陣を伴って現出し――、

『光も、そして闇も、皆等しく空虚だ。固執する価値などない。……それより今はお目覚めの時間だよお嬢さん。光や闇なんかよりもつと、面白いものが見られる――』

|]

一言で言い表すと目覚めの気分は最悪だった。

部屋はまだ暗いまま。ハッキリしない視界で辛うじて確認できた時計の針は頂点を過ぎ、一桁の数字を差している。草木も眠る丑三つ時というやつか。

「．．．なんだったんだろ」

夢の終わり、あの強制的に自分を悪夢から引き離れたようにも思えた謎の声と魔法陣。

少なくとも偶然で片付けられるような雰囲気を纏ったものではなかった。夢の中の存在とはまた別の、得体のしれない恐怖を覚える。

「．．．」

キュツと枕を抱き、昨日の夜を思い出す。

急に一人になったような感覚が怖く、泣きじやくった千歌を受け入れてくれた陸の、腕の中の温もり。

(．．．暖かかったな．．．)

どうにもこの、あの夢を連想させる一人きりの暗闇というのが心地が悪い。

彼ならばまた、こんな恐怖も取り除いてくれるのだろうか。

そう思うと、自然と足は彼の元へと向かっていった。

(・・・まだ起きてるのかな・・・?)

ドアノブに手を掛けた時、扉の向こうから陸とゼロと思しき話し声が聞こえる。

「——つばお前等の想い過ぎじゃ・・・」

『・・・そんなに認めたくないのかよ・・・、曜じゃ嫌なのか?』

「いやそうじゃないんだけど・・・なんかこう思ってたのと違うと言うか・・・」

『そんなもんだろ。人を好きになるってことは』

話の内容はうまく聞き取れないが、とにかくまだ起きていることは確かなようだ。

曜が以前寝ている陸に近づいたら敵と勘違いしたゼロに迎撃されたことがあると

言っていたが、起きているならその心配はなさそうだ。

「ああもう月の奴こんな時に余計なこと言いやがって・・・!!」

『まあいいじゃねーか。これでラッキョウ野郎の催眠が解けたら晴れて両想いだぞ?』

「・・・お前楽しんでないか・・・?　つか断定しないんじゃないのかよ・・・」

(両・・・想い・・・?)

少しだけ開いた扉から漏れ出た声に、数秒の硬直どころか思考停止にまで陥る事とな

る。

それが寝起きの胡乱の中での聞き間違いでない事くらいすぐに理解出来た。

—— ずっと陸の事……好きだったから……!

同時にフラッシュバックするある日の光景。

そこからある答えを導き出すことくらい、頭の弱い自分でも容易だった。

「……千歌?」

「っ……!」

背後からかかった声にびっくりと肩を震わせ、振り返ってみれば陸の顔が映る。

するとこうして彼と二人でいる事が、何故か途端に辛くも思えてきて。

『……どうした。またおかしな夢でも見たか?』

「……う、ううん。ちよつとトイレ行こうかなーって思ったら、なんか話してるみたい

だったから気になって……邪魔してたらゴメン……」

どうして誤魔化したのか自分でも分からないまま、用もないトイレに駆け込む。

最後のゴメンは、一体何に対するゴメンだったのか。

「……は……やっぱりバカチカだ……私……」

込み上がってくる哀感と、また別の黒いものが滲みとなり、視界を揺らした。

「少しずつ春の兆しが見えて来ているとは言え、季節はまだ冬。肌に吹き付ける潮風は刺すように痛い。」

「……なんか千歌に避けられてる気がするんだけど……」

陸の両親が帰って来る日。わざわざ港まで出向いて海風に揺られる船の中から生みの親の乗る漁船を探そうとしていたのだが、今やすっかり別のものに注意が向いていた。

「昨日の朝辺りからか、どうにも千歌の態度がよそよそしい。」

『……お前が何かしたんじゃないの……?』

「……だとしてもそれで拗ねるような奴じゃないと思うんだけどな……」
「そもそもその何かをした覚えもない。」

「強いて何か心辺りを上げるなら……、」

「……もしかして聞かれてた……?」

『……さあな……けどないとは言えない……』

あの夜不自然に陸の部屋の前にいたし、可能性としてはあり得なくはない。ないのだ

が、仮にそうだとしても避けられる理由が……、

『……知らぬが仏とはよく言ったものだが……やはり無知とは哀れなものだな』

『ツ……?!』

ビリビリと全身に警告が走り、咄嗟に低く身構える。

ジャタールの時のようなテレパシー……とも思ったがこの声は確かに耳を撫でた。

辺りを見渡してもそれらしき影は見えない——となれば、

『久しいな仙道陸………侘びしい道化よ』

「ヴイラニアス……!」

見上げた先に映る異形の姿。

青く頑強な鎧が如し体表に、特徴的な両腕の鋏と金色のマント。

ダークネスファイブの一角——極悪のヴイラニアスの姿が確かにそこにはあった。

「………どういう意味だ」

『そのままの意味だ。己の生の意味すら分からぬまま踊り続けたマリオネットに対する、な』

そう言い放つヴィラニアスに以前の業然たる態度は薄く、むしろどこか控えめさすら感じさせる。

『生の意味だあ……？ ハッ、んなモンは初めから持つてるんじゃない、進みながら見つけていくモンなんだよ』

『……貴様等は本当にそのような言い回しに拘るな……どうでもいいことだが』
どこか遠く息をついたヴィラニアスは、ふと顔を上げ波立つ渚に視線を飛ばす。

『……だがそんな戯言ではどうにもならないものもある』

ヴィラニアスの見やるその先、先程から出入りしている地元のそれらよりも二回りほど大きい漁船が波に揺れている。

小さい頃から幾度かこうして帰りを待っていた陸には分かる。陸が生まれた時から変わらぬという、どこか古びた、両親の船。

『……その意味がこれだ』
儂げにすら見えたその双眸が、突如として赤く煌く。

そしてそれに呼応するように、穏やかだった海は激しく波立ちはじめ――、

『ツ———!!!』

「なあっ………!!」

自ら上げた巨大な水飛沫を弾き飛ばし、君臨した巨大ななにか。

部。
 ヴイラニアスと同様の赤い双眸に、鉄球や鎌の装着された両腕、口のようになった腹

その全身が兵器かのような出で立ちのそれは、間違いなく怪獣だった。

『タイラントツ……………!!』

「……………おい……………やめろツ——!!!」

次に起きようとする事態を悟るも、時すでに遅し。

その刹那にゼロがタイラントと呼んだその怪獣は、唸り声を上げると共に頭部の角へ

エネルギーを集約させ——、

『ツツ————!!!』

解き放たれた、三日月形の光弾。

それは両親の乗る船を含め、周囲の漁船を残らず直撃し——爆発と共に紺碧

の海を紅蓮渦巻く地獄へと一変させた。

百二十九話 芽生えた恐怖

黒い喪服に、並ぶ暗く厳かな顔、経の独特の響き。

控えめな彩色の花々に彩られた壇上に備えられた二つの遺影の前で手を合わせてはまた一本花を添えてゆく人々の流れを、陸は虚ろな目で眺め続ける。

あの日、穏やかだった漁港は一変地獄絵図と化した。

出航していた船は一隻残らず大破し、漏れ出たガソリンに引火した事で海すらも赤く燃え上がったその光景は、とても何かに例えられるものではないような惨劇で。

その中で苦しみ、炎に抱かれ、絶望の中息絶えてゆく者達の姿は、それを目撃した人々にすら火傷を残した。

暴君怪獣タイラントの襲撃により犠牲になった人々は三十二人。

遺体すらも残らなかった犠牲者へのせめてもの弔いか、それぞれへの葬式は地域を上

げてのものとなり、今日は最後の二人。陸の両親の葬儀が執り行われたのだった。

「りつくくん！」

顔も合わせたことのない親族や漁業組合の人々から掛けられる哀悼や励ましの言葉が、何処にも留まることもなく空虚に消えてゆく。

そんな中で陸の意識を引いたのはただ一つ、焦燥を浮かばせた顔で駆け寄ってくる月の声だけだった。

「…………どうした？」

微塵の生気もない乾いた声で返す。

月とは式が始まる前にも顔を合わせたし、その時にお悔やみの言葉も貰ったはずだ。「…………ごめんねりつくくん。ご両親亡くした後こんな事聞くのは非常識だってことは分かっているんだけど…」

そう断った月の表情はいつになく真剣で、同時に不安も孕んでいて——陸にとつては危機感すらも感じるものだった。

「……曜ちゃんとは何があつたの?」

そして、その予感はずっと現実のものとなる。

家が隣な上に陸の親と親交があつた両親に連れられて出席した曜と顔を会わせ、そこで違和感を感じた。訝しむ瞳はそう訴えてきている。

「余計なお世話かもしれないけど、何かりつくんを手助けできるようなことないかなつて、さつき曜ちゃんに相談しに行つたんだ。……でも曜ちゃん、知らないとか助けなくていいとか言つて全然聞いてくれないし、終いには怒つて帰つちやつたんだ」

それは先日陸と曜の喧嘩話を楽しそうに聞いて笑つていた彼女とは違う。

普段のイザコザでは済まされない程の関係の破綻と、その背景にあるとんでもない何かを不安がっている顔だ。

「いくら喧嘩した後だったとしてもこんな時にまで持ち出すのはおかしいし……あんなのボクの知つてる曜ちゃんじゃないよ……」

月は陸がウルトラマンゼロであることも、曜がスライに記憶を操作され、陸への憎悪を植え付けられていることも知らない。

陸や曜に関する記憶が弄られていない彼女にとって、この状況は異常事態以外の何物でもないのだろう。

「黙つてゐるってことはやっぱり何かあつたんだよね? ……お願いりつくん、何があつた

のか教えて」

それが意地悪や好奇によるものでなく、こんな時だからこそ陸と曜を心配してのことだということは分かっている。

その優しさは嬉しくもあるが……それ以上に怖くもあつた。

「……なんでもねーよ。ただ喧嘩した後になんかこんなことになつたから気まずいだけだろ」

「……わかつた」

咄嗟についた見え見えの嘘に、何かに納得したように首を振る月。

誤魔化せたのか……いや、きっと彼女はこれが嘘だということくらいわかつているはずだ。

「……やつぱり今聞くことじゃなかつたね。……ごめん、こんな大変な時に」

ごめん。再度そう残して去つていった彼女に、ズキリと強烈な痛みが胸を抉つた。

違うんだ。彼女は純粹な優しさで親身になつてくれただけだし、陸自身もそれが嫌なわけじゃない。

ただ、真実を話すことで月までが離れて行つてしまうことが、怖かつた。それだけなんだ。

——ただ喧嘩した後になんかことになったから気まずいだけだろ

その言葉が嘘なのはすぐに分かった。彼だつて見破られていることは悟っているはずだ。

嘘をついたことも気にしてはいない。むしろこんな時に聞いた月の方が非常識なくらいだ。

ただ、一つ。あの瞬間に陸から感じた憔悴とは別の何か引つかかる。

恐らくだが彼が嘘をついた根底にある、何か。

無論無理に詮索するつもりはないが、人が変わったかのような、曜のあの様子。

月の知っている限りではあの曜が陸を嫌いかのような素振りを見せるなどまずありえないと、従姉妹としての勘が告げている。

それにあの陸が本気で曜に嫌われるような真似をすることも考えにくい。

ともなると何か外的なもの、特殊な力でも働いたのか……などとファンタジーめいたことすら考えてしまう。

『……知りたいか、娘』

「え……？」

不意にかかった声に思考と足を止める。

ただ呼びかけられただけならこんな反応にはならなかっただろうが、その声にはまるで月の心を見透かしているかのような、そんな気味悪さに思わず立ち止まってしまった。

『知りたければ教えてやろう。．．．ただし——』

声の主を探して目線を挙げた真上。

金色のマントをはためかせた青い異形を視認したその刹那、暗転する視界の闇の中へと意識は消えていった。

一人でいるはずの家の中の空気は随分と重く感じる。

待つことには慣れていたはずだった。

戦っている陸を信じて、自分は帰ってきた彼を笑顔で迎えるんだって。そう思っているつも彼を待っていたつもりだった。

でもそれは、都合のいい妄想だったのかもしれない。

——　　ずっと陸の事……好きだったから……!!
——　　まあいいじゃねーか。これでラッキョウ野郎の催眠が解けたら晴れて両
想いだぞ？

彼の帰る場所に自分は含まれていないなどと言うつもりはない。
けれど、今までだって、これからだって、一番陸がお帰りの声を望んでいるのは、きつ
と彼女のはずだから。

「……陸ちゃん……」

こんな時、彼女ならどんな言葉を掛けるだろうか。

天涯孤独の身となった彼に、どんな顔で接するのだろうか。

それすらもわからずに陸の負担の一因となっている自分は、果たしてここにいていい
のか。

日に日に自分の知っている陸じゃなくなっていくって、どんどん自分の知っている陸が
壊れていって。その原因が自分にもあるのが恐ろしくて。

そんな彼が帰ってくるのが、今日は途轍もなく怖かった。

「……!」

きい、と音を立てて玄関の戸が開く。

反射的に飛び出せばやはり陸がおり、しつかりとしたそれながらもどこか不安を覚え

る足取りで歩み寄ってくる。

「りくちや——」

次に続ける言葉を探しながら口に出したその名前は彼によつて遮られる。

思い切り抱き締められている。そう理解するのには少し時間がかかった。

「……………めん……………もう少し……………」

羞恥と驚きに顔を染めながらも、何処かすんなりと受け入れている自分がいる。

微かに震えるその身体が物語るのは、確かな怯え。

不意に垣間見えた彼の弱さに覚えた同情が胸を締め付ける半面、何処か救われたような気もした。

今の陸には、自分しかないんだ。

その事実にはどこか、自虐を帯びた優越感があった。

「そうだ。もつと互いに依存しあえ」

なにあれーと指をさす幼女に、見ちやダメとその両目を塞いで足早に立ち去る母親。そんな漫画染みたやり取りをする親子の目の向きで、男が一人。

「いずれそれは牙を剥き、やがてお前達自身を破滅に導く」

その風貌に不似合いなロリホップキャンディーを舐め回す様は不気味を極め、当然周囲の雑踏から向けられる視線は好奇や畏怖、怪訝と好まれたものではない。

だがそんなものには興味がない。そう言うかのように笑いを漏らし始めた男の真つ暗な瞳の奥で、何かが渦巻く。

「己の心の弱さが大切なものを壊した絶望の味は……実に甘美だろうなあ……」
歯を立てられた飴に走るヒビ。

それは即座に亀裂を広げてゆき、やがて円盤状に型取られた渦巻は砕け、ポロポロと地面に零れてゆく。

「ハハ…….アーツハツハツハツハツ……. . .」
反り返った男から伸びる影の中で、仮面の悪魔の笑いが蠢いた。

正直に言つてしまうと、幼少期から両親と過ごした記憶はほとんどなかった。

一年の大半を仕事で家を空けているし、何なら預けられていた曜の家での思い出のほうが多いくらいだった。

けど、それでもたまに電話で交わしたやり取りや、短いながらも帰ってきている間の団欒で、自分が愛されている事は分かっていたし、それは確かに嬉しかった。

だからこそあの瞬間から流れているこの時間が、途方もなく苦しいんだ。

「……残念だったね。ご両親の事……」

「……オウガ……」

窓から差す月光が照らす部屋に、ふと黒い男が現れたことに気がつく。

普段から気持ちの悪い笑顔を絶やさないその男は珍しく神妙な顔つきをしており、儂さすら感じさせる雰囲気は不思議と慰められているような感覚がした。

「ごめんよ、こんな時に……。君に言っておかなくちゃいけないことがあるんだ」

どうやって入ったんだとか不法侵入だとかはどうでもよかった。

今はもう、こいつでもよかったから。

「……いつ言うべきなのか分からなかったし、そもそも言つていいことなのかも分からなかった。けど、今だからこそ言わなきゃいけない気がしてね」

最近のオウガはどこか物悲しそうにも見える。

今の心情も相まってか、今日はそれが顕著だ。

「君は——ッ!？」

『それはルール違反だと分かつてのことか？ オウガ』

物々しく紡がれようとした言葉を遮る声が一つ。

そして次の瞬間にはオウガが吹き飛び、激突した壁が派手な音を立てる。

『スライが言うから泳がせていたが…、やはりお前は処分しておくべきだったな』

「月……?」

『いや……違う……!』

音も立てずにオウガを強襲したそいつは、陸のよく知る者。

だが纏う覇気や瞳の奥で燦る闘志は明らかに彼女のものでなく、その身体を支配しているのが全くの別者だということを物語っていた。

「……久しぶりだったのに随分なご挨拶だね、ヴィラニアス……」

『貴様に掛ける慈悲などないわ。裏切り者が』

ヴィラニアス。

そう呼ばれた月——の身体を乗っ取ったのであろうテンペラー星人——極悪のヴィラニアスが不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「何で月に……」

『……我輩も随分とスライに毒されているらしくてな。利用できるものは利用したまでの話……それに、今の貴様には靦面であろう?』

自身の支配する身体を指差し、人質だと言わんばかりに奴が浮かべる笑みから溢れるスライのものはまた別質の悪意。

何を企んでいるのか分からないというのではなく、むしろ愚直なまでに己の目論見を示しているような、そんな底意だ。

『なに、大したことではない。ただ我等と戦えばよいだけの話だ』

『戦えだあ……?』

心身ともに消耗している陸達を正面から叩き潰しに来た。恐らくはそういうことなのだろう。

『ああ。……ちようど貴様等も、こいつへの憎しみが募ってきた頃だろう……?』

身を翻したヴィラニアスの背後。窓枠の外に広がる月夜の中で吼える、紅い双眸の獣。

そのシルエットが奴のものだと悟った刹那には、既に身体はそいつへ向かって動き出していた。

「……陸ちゃん……? 今の音な——え……?」

不穏な気配を感じ取り部屋を覗いてきた千歌の眼前で閃光が迸る。

直後に轟いた地響きを上げた赤と青の巨人は、ウルトラマンの象徴であるその胸の光を闇夜に煌かせた。

百三十話　また、一人

寝静まっていた夜の町に、二体の獣の咆哮が轟く。

「あっちゃー……、こりや完全にキレてるね陸君。……無理もないけどさ」

月光の下で衝突を繰り返すのは暴君怪獣タイラントに、即座に漆黒の姿へとその身を
変えたウルトラマンゼロ。

普段に増して荒々しいその戦闘スタイルは、多くの人々を、肉親を屠った奴への怒りの現われにも見えた。

「あなたは……」

「やつほー千歌ちゃん。残念ながら二人っきりの時間は楽しめそうにないよ」

自分でも少し滑ったなと思う冗談を口にしつつ、オウガは少しでも冷静であろうとする頭で戦況を分析する。

タイラントは強い。特にヴィラニアスのあの固体は過去にウルトラ戦士を相手取ってきた固体と比べても格が違うと言えるだろう。

正直冷静さを欠いている今の陸で勝てる可能性は……限りなく低い。

「いやらしい手使ってくるじゃん。君らしくないねヴィラニ……ヴィラニアス？」
流した視線の先で、少女の姿を借りた極悪星人は影も形もなく消えていることに気がつく。

次になにが起ころうとしているのか。それだけは容易に想像できた。

『ギヤアアアアアアヴウウウウウツツ!!』

『グアアアア……ツ!』

振り上げられた鎌状の腕が胸元を抉り、激しく火花を散らしたゼロダークネスがその巨体を地面に打ち付ける。

「くっそ……!」

「おい陸落ち着け! 闇雲に戦って勝てる相手じゃ——」

『ジュアアアアアツ!!』

ゼロの忠告に耳を貸さず、主人格が陸にある漆黒の巨人は再度突進を仕掛ける。

だが怒りのままに繰り出される攻撃は尽くタイラントに防がれ、カウンターで逆にダ

メージを貰うばかり。戦闘が始まってからずっとこの調子だ。

『ギャアアアアヴウウウウツツ!!』

『ハアアツ!』

一度距離を取ったゼロダークネスへの追撃で放たれた三日月形の光線をデスシウムシヨットで相殺。

舞い上がった黒煙で視界が悪化するが、奴の位置は分かっている。死角から一発お見舞いしてやろうと光線の発射モーシヨンに入るが――、

『ツ・・・!? ガ・・・アアア・・・!』

それよりも一瞬早くジャラララと音を立てて鎖に繋がれた鎌が飛来し、ゼロダークネスを弾き飛ばすと共に溜め込んでいたエネルギーを霧散させてしまう。

「読まれ――ツ!？」

『当たり前だ。我輩の相棒を舐めるでないぞ』

不意に背後に気配を感じ、咄嗟に防御姿勢を取った両腕に衝撃が走る。

後転受身の後に顔を上げれば、そこにはやはり金色のマントを揺らす両腕の鍔が特徴の青い宇宙人。

『最強のテンペラーと最強のタイラント・・・我等、極暴タッグよ!!』

多彩な能力を持つテンペラー星人最強格のヴィラニアスと、様々な怪獣の長所が結集

しているタイラント。

そんなコンビを独力で突破するの困難なのは分かっているが——、
へはっ……相変わらずだっせーコンビ名しやがって……おい陸変われ。俺がやる

『ウアアアアアアッ!!』

へっておい聞けよ!!』

手のひらからデスシウムショットを連射しながら三度突撃。

しかしヴィラニアスは右腕の鉄から発生させた雷の鞭でいとも容易くそれを弾いて見せ、そのまま撓りを利かせた雷撃が巨人の身体を打つ。

『オオオオオ……!』

ならば弾けないほどの威力で叩き込んでやればいい。そんな安直な考えの下、先日ジャタールを粉碎したデスシウム光線のチャージに入る。

〈待てッ! タイラント相手に光線技は——〉

ゼロの静止も僅かに遅く、解き放たれた赤と黒の雷槍が迸る。

そしてヴィラニアスを庇うように前へ出たタイラントへと直撃し——、

『ツ……!?!』

——微塵もダメージを与えることもなく全て腹部の口へと吸収された。

『ギャアアアアアヴウウウツ!!』

『ヌツ……ンン……!!』

光線のエネルギーで活性化したのか、より猛々しさを増したタイラントの体当たりの衝撃が全身を貫く。

辛うじて吹き飛ばずに持ちこたえたものの、こう掴み合いの純粋な力比べではやはり劣ってしまう。

『教えてやろう。正しい光線の使い方というものをな』

『グアアアアア……!!』

タイラントとの押し合いの形となったゼロダークネスの背後に回ったヴィラニアスの放った光線。

それは身体の内部から破壊されていくような激痛を伴って強襲し、著しい体力の消耗がカラータイマーの光を赤く点滅させる。

『フハハ……! 貴様等ウルトラ戦士にはよく効くだろう?』

ウルトラ兄弟必殺光線。かつてウルトラマンタロウと戦ったテンペラー星人が星の科学力を結集して編み出した対ウルトラマン用の破壊光線……以前そんな話をゼロから聞いたことを今になって思い出す。

そんな光線をいつまでも受け続けていては身体が持たないが、抜け出そうにもタイラ

ントがそうさせてくれない。

なら——、

『ンンン………ハアアアアアア!!』

『ギヤアアアアアヴウウウツ!!』

赤黒く発光させた全身から闇の波動を放ち、タイラントの拘束とヴィラニアスの光線を同時に振り払う。

不意の反撃に怯んだその一瞬を突いて暴君怪獣の足元を蹴り上げては転倒させ、ムカデのような尻尾を掴んだのちに力任せに放り投げた。

『グ………ウウウ………』

が、逆転劇を見せたのも束の間。

ただでさえ消耗していた体力の中放った大技は余力を根こそぎ持つてゆき、襲い掛かってきた脱力感がゼロダークネスに膝をつかせる。

『悪足掻きを………だがもう勝負は見えたな』

バリバリと帯電するヴィラニアスの両腕が決着が近いことを知らせる。

敵討ちどころか、少しのダメージも与えることも出来なかった。そんな無力感に打ちひしがれる陸の眼前でエネルギーは解放され——、

『ツ………!!?』

満身創痕の巨人を大きく逸れ、何も無い虚空を疾走する。

外したのか。一瞬そんな甘えが脳裏を過るが、その狙いはすぐ明らかとなった。

「・・・月ッ・・・！！」

雷撃が向かうその先。

ヴィラニアスから解放されると共に放置されたか、気を失い、横たわる月の姿がそこにはあつた。

「ん・・・、んん・・・！！？」

耳をつんざくような衝撃音や爆発音が暗闇の底にあつた意識を引き戻し、月は閉じていた瞼を開けた。

胡乱な思考でも既に辺りが暗くなっているのは理解でき、自分に何があつたのかと昼間の記憶を辿ろうとするが、次の瞬間目に飛び込んできた光景によって遮られる。

「え・・・？」

自身の真上に黒い巨人の顔が見えた。

その巨人は背後の宇宙人の雷撃を苦しみながらも受け続けており、それはまるでソイツの攻撃から月を守っているようにも思えて——、

「なんで……？　なんでボクを……」

理解が追い付かなかった。

あの巨人は、ウルトラマンゼロは人類の敵。周りの人々は皆口を揃えてそう言うし、月自身、それが当たり前なんだと思っていた。

けれど目の前の彼はどうにも身を挺して自分の盾になってくれている。そう思えてならなかった。

『ウ……アア……』

どうしてそう思ってしまうのか。その疑問に答えを出す前にゼロの胸の輝きが消え、身体を消滅させながら前のめりに倒れこむ。

やがて落下してきた光が弾け、その姿を現した者の正体に——目を疑った。

「りっ……くん……?」

「がっ……あ……!」

死ぬほどに痛む全身と、人としての肉体に戻っているという事実が敗北を告げた。

変身解除までに追い詰められた身体は思うように動かず、立ち上がろうにも途方もない疲労感がそれを拒んでしまう。

『笑止』

傲然とした声が頭上から降りかかった。

その主であるヴィラニアスは言葉通りの不機嫌さを示しており、線上に並んだ紅い複眼は侮蔑を込めて陸を見下ろしていた。

『宇宙最強の肉体の持ち主と一体化し、陛下の力を得てなおその程度か。つまらんど』

『……明らかにフェアじゃねえ勝負持ち込んでよくもまあんな口が叩けんなテメエ』

『なんとでも言え。どちらにせ貴様等が負けた事実が変わらん』

食ってかかるゼロを軽くないなし、陸達にトドメを差すのかと思えば次の瞬間。

『興醒めだ。戻るぞタイラント』

ぼつりとそう零し、ヴィラニアスとタイラントを囲うように発生した光が奴等の身体をどこかへと転送してゆく。

退いてくれて安心した。そう言った感情はなく、むしろ目的は果たしたとでもいうような極悪星人の視線に不穏な予感を禁じ得ない。

そしてその予感は、またしても最悪の形での中する事となる。

「……そっか…….、そういう事だったんだね…….」

見たくなかった表情が、聞きたくなかった声色がそこにはあった。

「……曜ちゃんは、知ってたんだ…….だから…….」

「…….月…….」

…….ああ、そうか。

戸惑いを隠せていない月の顔を見て全てを悟る。

ヴィラニアスの本当の目的は、ここにあったのか。

「…….りつくくんが…….ウルトラマン…….」

何故わざわざ月を人質に取って勝負を仕掛けてきたのか。

何故その月に対し攻撃を放ち、陸が彼女を庇うように仕向けたのか。

何故変身解除にまで追い込んだ陸とゼロにトドメを差していかなかったのか。

全てはこのため。

月の目の前でウルトラマンゼロが陸に戻るのを見せつけることで、彼女の心を陸から

引き離すため…….つまりはそういう事だ。

「その、月…….これはっ…….っ…….!」

「っ………！」

痛む身体に鞭打って何とか起き上がるも、月の瞳に映った色に再度脱力する。

畏怖、怯え………彼女のそれは明らかに陸への拒絶を示していた。

「……ごめん……ボク………、どうしたらいいかわかんないや……」

逃げるように陸に背を向けて走り去ってゆく月が、物理的な距離以上に遠く感じる。

傷付いた身体以上に心が悲鳴を上げ、保っていた何かが崩れかける。

同時に蟠っていく黒い感覚に誘われ、糸が切れた意識は暗闇の中へと沈んでいった。

百三十一話 歯車が欠け始める

目が覚めると知らない天井。疚しい意味ではないがこれまでにはよくあった事だ。

何者かに力及ばず破れた時はいつもそうで、その度に周りの誰かを心配させ、泣かせてきた。

でも今回は違う。開いた眼に最初に飛び込んだのは最も親しんだ自室の天井。誰かの泣く声も聞こえず、その代わりに耳を打ったのは幼馴染の穏やかな声だった。

「・・・起きた？」

全てを包み込む聖母のような柔らかさをもってして微笑む千歌。

その笑みの裏に映る決意のような色は何なのか。それを考える間もなく千歌は次の句を継いだ。

「いっぱい怪我してたけど大丈夫？ 痛くない？」

「・・・痛いっっちゃ痛い・・・」

目覚めたばかりだからだろうか、何故だか視界と思考に靄が掛かったような感覚が

し、心なしか声を出すのにも辛さがある。

そんな中でもハッキリと浮かぶのは深々と刻み込まれた、敗北の色。

ヴィラニアスに負けた。

敵討ち・・・いや、そんな御大層なものではなく、憎悪に塗れた復讐・・・だったのかも知れない。

その結果、心のどこかで抛り所にしていた月すらもが離れてしまった。

どちらにせ、手も足も出さず完敗を喫したのは事実だ。

「・・・どのくらい寝てた・・・？」

「半日くらいかな・・・？　もうそろそろ夕方だし」

「・・・そっか。悪い、早くやる事やらないと——・・・」

立ち上がろうと床に足をついた刹那。

全くと言っていいほど踏ん張りの利かない脚が膝を折り、重力が作用するままに床へと崩れ落ちる。

そのまま覚醒したばかりの意識は、再び胡乱の中へと呼び戻されてゆき——、

「陸ちゃん・・・？　陸ちゃん!!」

突然倒れた陸の正面に回り、ひとまず抱き起そうと触れた手に熱が伝わる。

熱い。それも異様に。とても人体から発せられるような熱量でないそれを彼から感じたのだ。

「ゼロちゃん!? どうなってるのこれ!? 風邪!?」

『・・・流石に限界か……。ただでさえ心が弱ってたんだ。そこにあれと来ればな……。』
陸に何が起きているのかはまだ理解し切れていないが、急を要する事態なのは確かだろう。

とにかくと熱さを堪えてゼロのサポートと共に陸を再度ベッドへと戻し、息を荒げる彼を見ては矢も楯もたまらず部屋、そして家の外へと飛び出す。

『あ、おい……。!?!』

「ちよつと効きそうなもの無いか探してくる!!」

守られるのが当たり前になっていたのは何時からだろうか。

陸は強くて、優しく、そして自分のヒーロー。

そんな風に思い、彼ならなんとかしてくれてくれるって甘えて、任せきっていた。そんな情けない自分だったから、こんなことになってしまったのだろうか。

「・・・・・・・・」

あんなに弱々しい陸は初めて見た。

押せば倒れてしまいそうなくらいボロボロで、これ以上何かを失うことに怯えて、誰かの支えに縋るような姿。

彼は強い。それが間違っていないのは自分が知っている。

けどその強さの中に確かな弱さも存在していることも自分は知っていた。知っていないはずなのに、理不尽を悲観する中で彼に甘え、目を逸らしていたんだ。

——どんなに強いヒーローでも、一人じゃ戦えない。支えてくれる仲間が必要なんだ

いつの日か言われた言葉がある。

——「……苦しくなったらいつでも頼って、一人で戦うなんて言わないで。……私達は、皆でウルトラマンなんだよ……」

いつの日か言った言葉がある。

何が支えるだ。

何が皆でウルトラマンだ。

結局また独りよがりです突き進ませて、傷つけてしまった。

あれだけ弱つても、傷付いても、全てが終わるまではきつと戦う事を止めないだろう。けど必ず限界は来る。そうならないように自分が助けなきやなんだ。陸が誰を好んでいるかは関係ない。

今の陸には、自分しかないから。

(・・・私が守らなきや・・・)

「・・・・・・・・美しい・・・」

「・・・・・・・・?」

独り言のように呟かれた感嘆に近い声が耳を撫でる。

それが自分に向けられている確信などないのに何故だかその声は意識を手繰り寄せ、千歌は足を止めた。

「・・・実に美しい空だ・・・・・・・・そう思わないかい? お嬢さん」

「え・・・・・・・・あ、はい・・・・・・・・?」

こちらの存在に気が付いたのか、声の主である男は軽く身を捻って上半身のみを千歌に向ける。

青のメツシユが掛かった黒髪に、左右で白黒に二分された服装。

決して敵意などを発している訳じゃない。けれどその底が知れないほどに深く黒い瞳は、自然と警戒心を湧き立たせるような何かを秘めていた。

「陽の輝きとは残酷だ。地を燦々と照らし光をもたらす半面、その届かない場所には深い影を落とす……まるで世の真理を表しているかのよう……フフ……」
お世辞にも今日の天気はいいとは言えない。空の青の多くは暗い雲に遮られ、たまに顔を出す太陽もすぐにまた隠れてしまう。

けれどこの男はそれこそが至高であるかのように悦を帯びた表情を浮かべていた。

「……君が今なろうとしてるのは……誰かの光、なのかな？」

「っ……」

まるで心を直接覗いてくるような瞳に恐怖すらも覚えるが、離れようにも身体は蛇に睨まれた蛙のように動いてくれない。

そしてそんな心情すらも見透かしたような男はそのまま千歌の方へと歩み寄り、鼻先が触れ合いそうなほどに近づけた顔を視界いっぱいに映してくる。

「……いい目だ」

連ねられる言葉が何を意味しているのかなんて分かりやしない。

けど、この男もきつと陸の苦しみの要因になる者……それだけは分かる。

そう思うと何か、ボツと黒いものが湧き上がってくるのを感じた。

「いいねえ実にいい。君なら彼の心に変化を与えることが出来そうだ」

「……陸ちゃんに何する気……？」

睨むように眉を吊り上げた千歌を面白がるように男の笑みが深まる。

恐怖心が消えたわけじゃない。けれど今の陸を傷つけようとするなら……そう考えるだけで恐れなんてものは些末なものに変わった。

「おっと、勘違いしないで欲しいな。私は彼に手は出していないし出すつもりはない」

顔を離し、両手を上げて自身が潔白であるように振る舞った男はやがて千歌に背を向け歩き出す。

「私はただの傍観者。君や彼の行く末を楽しむにしているだけさ」

最後にそう言い残した男の背中が、薄気味悪い笑い声と共に遠くなつてゆく。

その不穏な影が見えなくなるまでずっと、千歌は微動だにしないままそれに警戒の視線を注ぎ続けた。

『ダメか……』

光の国へ向けたウルトラサインが送信した直後に消滅するのを確認し、溜息交じりにゼロが零す。

地球全体に及ぶ催眠や、ベリアル復活の復活。そして陸の事。

情けない話だがここまでくるともうゼロ一人の手では負えない。こうなった以上宇宙警備隊の応援を要請したいところだが、何故だか一切の光の国との通信手段が遮断されている。

『……どうする……』

一度帰還して直接救援を仰ぐ……というのは地球の現状や陸の事がある以上あまり現実的でない。

だがこのままゼロ一人では最悪の結果を迎えてしまうのが時間の問題なのもまた事実だ。

手つ取り早く奴等を倒せればそれがベストなのだが、心身ともに限界寸前の陸の状態を鑑みれば不可能なの言うまでもない。

一体化を解除して単体で戦う手もあるが、レゾリウム光線のダメージが回復しきつ

ていない状態で戦うのは無謀。何より今この身体を離れるのは陸自身が危険だ。

『クツソ……グレンとミラーナイトがいれば……』

叶わぬ愚痴を綴る。

宇宙警備隊からの指令でこの地球に滞在していたグレンファイヤーとミラーナイトも氷結のグロツケンと炎上のデスロークにより深手を負い、今はマイティベースで――

『……おいおい、計算されてやがったとかいうんじゃないだろうな……』

初めからこうなることが想定された上で事が進んでいた……そんなぶっ飛んだ想像を一度は降り払うが、奴等の参謀はメフィラス星人のスライだ。おかしい話じゃない。

だが仮に全てがスライの計算の上だったとすれば、こうまでした狙いは一体何なのか。

奴等がベリアル復活のために求めているのは千歌に宿るネクサス――ウルトラマンノアの光なはず。その千歌が対象ならばまだわからなくもないが、どうして彼女以上に陸を追い詰めるのか。

邪魔なゼロを陸ごと弱らせてから仕留める……という線はヴィラニアスが自分達に止めを刺さずに撤収した時点で消えている。本当に始末したがっているならあの時点で息の根を止めにきたはずだ。

ならどうしてだ。陸を追い詰めることで何か奴等にメリットが生じるとは——、
『……いや、まてよ……』

そういうえぼと、以前から引つかかっていた記憶と照らし合わせてみる。

ゼットン星人によってまだ六人だったところの *Aquors* が連れ去られた時の事だ。彼女等の救出のためにダークネスファイブの宇宙船に乗り込んだ際、そこでスライが見せてきたもの。

——あの時の虚弱な少年が、随分とものを言うようになったと思うと……、面白くて

この星でいう六年前、内浦を襲撃したスカルゴモラに怯える陸の映像を何故か奴等は所持していた。

伏井出ケイが記録していたものなのかは知らないが、偶然にしては出来すぎていないだろうか。

——そーだな……。一つだけ教えてやるよ。オウガがそいつに陛下の力を植え付けたのにはもつと別の訳があるんだぜエ……

——そいつが陛下の力を酷使すればするほど、俺達にとつちや好都合ってこった。加えグロツケンが遺したこの発言から建てられる仮説がある。

クライシスインパクトに、神に近い力を持つウルトラマンによるその復元。カレ

ラン分子の散布およびリトルスターの回収。

これはジードのいるサイドアースで起きた一連の流れと一致する。

そして、サイドアースでのジードのポジジョンをこちらの地球に当てはめてみれば――

『まさか……初めから陸が狙いだったのか……?』
もし。

もしこの仮説が正しかったのならば、以前花丸が見せてきた太平風土記に記されていた闇の巨人――恐らくはベリアルであろうそいつと一体化していた人間というのは――

「――陸ちゃん!」

どたばたと駆け込んでくる少女の気配を察知し、核心の手前まで迫っていた思索を一且止めるゼロ。

止めてもらえてよかった。

どこかでそう考えている自分がある。その事実とはまだ、あまり向き合いたくないものだった。

『・・・不穏な輩の匂いがしますねえ』

『確かに少し異質な気配を感じるな・・・』

自分達に近いように、最も遠い位置にある。そんな矛盾めいた気配。

その正体はさておき、計画の妨げとなるようならば取り除かなければいけないものだ
が・・・、

『まあ一先ずは泳がせておくという事でいいでしょう。・・・それよりヴィラニアスが
『分かってる』

闇の中で翻されたマントが鈍くその金色を主張する。

瞬く紅の双眸が、次なる残虐を予感させた。

百三十二話 仮面の予定調和

——いいねえ実にいい。君なら彼の心に変化を与えることが出来そうだ

——私はただの傍観者。君や彼の行く末を楽しみにしているだけだ

あの男は一体何だったのだろう。何をやる気なのだろう。それで陸に何が起こってしまうのだろう。そんな事ばかりが脳内を反芻する。

今になってこの声に不安を煽られるのはきつと、目の前で起きている光景に呼び起こされたからなのだろう。

「陸ちゃんツ!!!」

しばらく上げる事のなかった大声を巨人に向かって張り上げた。

傷付き、今にも倒れそうである少年と共に戦っている、青い巨人に。

『ゲエエエイヤア!』

『ギャアアアアアウウウウツ!!』

勇ましく猛る怪獣に巨人の蹴りが刺さる。

今のところ苦戦しているような様子こそ見えないが、それでも不安で、怖くてたまらなかつた。

これ以上陸が壊れてしまうのが。また何も出来ないでいるのが。それが、途方もなく怖くて辛い。

「はは．．．．．これはいい。面白いものが見れそうじゃないか」

そんな心情を知ってか知らずか．．．いや、見抜いた上のものであろう声。その正体は振り返らずとも分かつた。

「．．．やあ。また会つたね、お嬢さん」

音もなく隣に現れていた、無表情ながらもどこか不気味な雰囲気をつた男。

初対面はつい一日前だというのに、千歌にはもう何年も前からの因縁があるようにも感じられた。

「．．．．．今度は何の用．．．？」

「．．．なあに。ちょうど甘い絶望の香りがしたものでね。ついつい引き寄せられてしまったよ」

怯む姿を見せてはならないと己を振るい立て、頑としてそいつに睨みを向ける。

だが男は怯むどころか愉快そうにそれを受け流し、むしろ吐息を吹きかけて逆に千歌を怯ませて見せる。

「けど私が求めているのはそれじゃない。もつと、もつと大きくて甘美なもの……だから、君を助けたくてねえ……」

「何言って……」

「あのウルトラマンを助けたいんだろ……？ まあ、すぐに分かるさ」

繋がらない文脈に首を捻ったその時、ついさつきまで視線を向けていた方向で地鳴りが響く。

原因は明白だった。怪獣の攻撃を受けたゼロが地面に叩きつけられたのだ。

「っ……！」

もう何度も見たはずの光景なのに、今になってそれは不安を煽る。むしろ何故今まで重大視してこなかったのだと思う程に。

「……私なら君に彼を助けるための手助けができる……そう言ったらどうする？」

文字通りの悪魔の囁きが、いつになく強く心を揺らした。

『ギヤアアアアアウウウツ！』

『シィイヤ！』

振り下ろされたタイラントの右腕を真横に転がり間一髪回避。即座に立ち上がって側頭部に一発お見舞いする。

『流石に前よりは動いているようだな！』

注意を払っていた背後のヴィラニアスが動いたのを察知し、真後ろから不意打ちを気配だけで躲す。

追撃の光弾は投擲したゼロスラッガーで相殺。その隙に一旦距離を取り体勢を立て直した。

『ハハハ・・・！ それでこそウルトラマンゼロよ！』

『うるせえ！ 突拍子もなく現れやがって・・・何が目的だ！』

今度のヴィラニアスは唐突に現れた。

以前のようにあちら側から挑戦を持ち掛けてくる形ではなく、いきなり街中に出現してはゼロを誘うように破壊活動を開始したのだ。

自身がどんな状況であれ滞在している星の原住民に危害が及ぶ可能性があれば出動しなければならないのがウルトラマンの宿命。例えば一体化している人間がポロポロであつても、だ。

『戦士同士の戦いで目的を問うのは無粋というものではないのか？ 吾輩がここに立つ理由は一つ！ 貴様との戦いよ！』

高揚した声音で宣ったヴィラニアスが突撃を再開してくる。

宇宙警備隊という肩書き上あまり声高に言えたことではないが、ウルトラマンの中では血気盛んな自分でも今は戦いは避けたかった。町が破壊されていてもだ。

昨晩から陸の容態の悪化が目に見えて止まらない。

頭痛に動悸、発熱だけを見ても並みの地球人ならとつくに死に至っていてもおかしくない程だ。

心労か、はたまたまた別の理由か。とにかく原因が分からない以上は戦いなど以ての外だが、始まってしまった以上は仕方ない。

『ワイドゼロシヨット！』

『ぐ．．．うお．．．！』

早急にコイツ等を突破して光の国との交信手段を取り戻さないしは見つけ出す。それが今できる最善の手だ。

『デエエエエヤツ!!』

光線技で牽制をかけた後に素早く接近戦へと持ち込み、宇宙拳法でラッシュをかける。

気を緩めるな。一瞬の隙を突き続けろ。反撃の間を与えるな。一体化している以上ダメージを受ければそれは陸にも通る事になる。そうなければ何が起こるかなど想像もつかなくなる。

よつて被ダメージは厳禁。一方的に押し切れ。

『ギャアアアアアウウウウッ!』

『オオラッ!』

タイラントの発射した鎖繋ぎの鎌を巻き取る形で掴み上げ、接合部が引き千切れんばかりの力でぶん回しヴィラニアスへと投げつける。

勿論ダークネスファイブの一角を相手にワンサイドゲームを決めようなど無謀もいといところだろう。だがこの賭け、勝つしか道はない。

『ガルネイトバスターアアアアッ!!!』

灼熱の熱線がタイラントの吸収が作用しない背中へと打ち込まれ、悲鳴と爆音が大地を揺らす。

余波で上がった黒煙が濛々と立ち昇るが、それを物ともせずにとストロングコロナゼロはその拳でタイラントへと追撃をかけた。

『その姿との手合わせは初めてだな!』

『フ・・・ンッ!』

転倒するタイラントの影から飛び出すヴィラニアスの電磁ロッドを右腕で巻きつけるようにしてキヤツチ。胸元へ手繰り寄せると同時に突き出した拳で胸部に打撃を決める。

『ダアアアアア！』

『グおお．．．！』

ひと際力を籠めて振るったパンチングに悶えたヴィラニアスが堪らず電撃の鞭を解除し先程のゼロのように距離を取る。

『．．．既に研究され尽くした形態でなおその強さ．．．面白！』

開いた両腕の缺は虹色の光線が伸び、大気を焦がしながらゼロに迫る。

ウルトラ兄弟必殺光線．．．先日陸がやられはしたが、ゼロとしてはもう何度も見た技だ。そう何度も喰らいはしない。

『ナイトビームセイバー！』

煌いた蒼い閃光が光線を両断し、二方向に分かれて地面に着弾。それにより巻き起こった爆風に乗ってヴィラニアスに突っ込んだゼロの姿もまた蒼。

ルナミラクルにアグルとヒカリの力が上乘せされた強化形態——グランナイトゼ

ロ。

『セエエエエヤッ！』

『ぬおおお．．．！』

光剣の刺突と鍔が衝突する度に上がる火花の中で青と青がぶつかり合う。

同じダークネスファイブのグロッケンやデスローグを圧倒した剣戟ですらもその肉体に完全には到達しない。やはり体捌きならば奴等の中でもトップクラスか。

『ギャアアアアアウウウウ！』

加えタイラントにより度々入る文字通りの横槍。訓練された獣の補助が更にそれを阻害する。

せめて一対一か、グランナイト以上のパワーが必要になるか．．．

「．．．ゼロ．．．．．俺も．．．．．！」

『いいからお前は引っ込んで！』

ゼロビヨンドならば．．．一瞬そんな考えが過るも、陸との感覚が今より更にシンク口する以上使う訳にはいかない。

疲労や力の行使も今の陸には厳禁だ。もしかたべリアルの方に染まるような事があれば容体は悪化しかねないだろう。自分一人で乗り切らねば。

『ら．．．あああ！』

ビームセイバーを用いて突きを受け流し即攻撃へ転じる。

空いた横腹を張り手で叩き、振り払おうと薙がれた剛腕を屈んで回避しては光剣で斬

り返す。

『その程度………効かぬわア!』

とは言え速度重視で力の籠つていない斬撃は奴の頑強な外殻の前にはあまりダメー
ジが通らない。

敢えて攻撃を受けることでゼロの動きを補足したヴィラニアスはその鳩尾目掛け足
を振り上げる。

『ツ………パーティクルナミラクル!』

体捌きでは凌げないと悟り、咄嗟に身体を光の粒子へ変えて攻撃をやり過ごす。

だが致命傷には至らないはずのその攻撃を必死に回避したゼロを不可解に思ったか、
ヴィラニアスは首を捻り――、

『……貴様、もしや仙道陸を慮って攻撃を受けないようにしているな』

『ツ……!』

心中を看破され、狼狽えるようにゼロが一步後退。

その反応で自身の推察が正しいことを確信したか、ヴィラニアスは呆れ半分、期待半
分と言った様子で息をついた。

『……吾輩相手にここまでのことをしたのは見事だ………だがあまり舐められる
のも気分が悪いな』

微かな苛立ちを示すように開閉した鋏で音を立て、ぎらりと赤い双眸をゼロに向け
る。

『・・・しかしあの立ち振る舞いでこれほどの力を発揮できるのは興味深いのも事実。こ
こは一つ、貴様の本気というものを引き出してみるところか!』

ヴィラニアス、そしてタイラントが同時に飛び出し、両者が猛烈な圧を伴ってゼロに
迫る。

二方向から押し寄せる攻撃をバックステップで躲し、一先ず間を開けて状況を分析。
奴等の狙いがどう変わろうと被弾してはいけないことに変わりはない。速攻あるの
みだ。

『セエエエヤ!』

横薙ぎにされたタイラントの腕を飛び越え、ムーンサルトキックで後頭部を強襲。よ
ろめいたところを更に背後から蹴り飛ばし転倒させる。

『リキデイトシュート!』

『フンツ!』

十字に組んだ腕から☒弱めに☒打ち出した光の線はヴィラニアスにより易々と弾か
れ、撃墜した地面から土煙を上げる。

『目くらまし・・・小癩な!』

無論この程度ヴィラニアスに通じないのは分かっていた事だ。予想通り翻したマン
トが影を生み出し、視界を覆っていた土煙が吹き飛ばされる。

——銀色の光を散らしながら。

『……これは……?』

その光の正体は氷。リキデイトシュートの冷気が凍らせた土埃が光を反射し輝いて
いるのだ。

そしてリキデイトシュートを弾いたヴィラニアスの腕は——?

『ぬ……ぐ……!』

周囲の空気に霜を生み出す程の冷気を秘めた光線は振り下ろされたヴィラニアスの
腕を地面に縫い付け、その場に固定する。

動かぬ標的へと一閃。全力で振り抜く。

『アブソリユートゼロレイド!』

『ぐおおおおおおッ……!!』

迸った極零の刃が遂にその胸へと到達。風圧に乗った氷の塵が舞い散った。

だが会心の一撃とはいえ致命傷には至らなかったようで、傷口に手を得て呻くもの
のヴィラニアス自身はまだ健在のようだった。

『……フハハ……これが宇宙最強の肉体と謳われる者の力……!』

肩を大きく揺らしながらもヴィラニアスは笑う。

それは侮蔑や嘲笑などではなく、純粹に今この時を楽しむ、戦士の表情。

『この高鳴り……この高揚感……面白い……面白いぞゼロ！ これこそ吾輩が求めていた強者の姿よ！』

高ぶる感情のままに声を上げたヴィラニアスが金色のマントをはためかせ、真正面からゼロへと突撃。

紙一重でゼロの脇を掠めた電磁ロッドによる攻撃は、心なしか数段スピードが向上しているようにも思えた。

『タイラント、お前は手を出すな……吾輩一人でやる』

途端、接近戦に持ち込んできたヴィラニアスの連撃が更にその速度を上げ始める。

その戦闘スタイルの差異に気付くのにそう時間はかからなかった。恐らくタイラントとの連携を断ち切ったことでヴィラニアス本来のスタイルに戻った……ということなのだろう。

『又アアアッ！』

『ぐっ……！』

一発一発に鋭さが増し、威力も向上しているのが伺える。

鉄の殴打を躲せば息つく間もなく電磁ロッドの追撃が迫り、それを回避しても今度は

回し蹴りが襲いかかってくる。

『アブソリユート——ッ……!』

反撃しようにもラツシユに絶え間がなき過ぎる。

連携を捨て、ゼロ一人に集中することで動きに隙が無くなっているのだ。

『貴様がどう戦おうと構いはしない……吾輩はそれを超えるまでよ!』

『ッ……!』

電撃の掠めた腕に確かな痛みが足る。

ダメージほとんどこそないが、それ以上に余裕が削られるのが痛い。

『そこそが吾輩の……戦いに身を賭した戦士の誉れ!!』

更に激しさを増す連撃に思考すらも曖昧に纏まらなくなつてゆく。

そして熱線を躲した直後、体勢を崩したゼロへと一直線にアツパーカットが伸び——

!

『がっ……あああ……!』

衝撃が土手つ腹を突き抜け、痺れるような痛みが全身に広がる。

加え点滅を始めたカラータイマーが活動時間と余力の限界を告げ、その表れか腕から

伸びていたナイトビームセイバーが掻き消える。

「ぜ……ろ……おっ……!」

『ツ・・・!?!』

抑え込む力の抜けたその一瞬に陸のベリアル力が膨れ上がるのを感じた。

同時にその鼓動は脈打つと共にゼロを蝕み、波が重なる度にその痛みは増幅してゆく。

『ぐ・・・ああ・・・!?!』

最悪でも一発二発は耐えられると思っていたが、それが甘い考えだったと悟る。

一体化して戦う以上、どんなに手を尽くそうとある程度感覚は共有する事となる。

ヴェラニアスという強敵との戦いでゼロの運動や消費エネルギー、疲労が齎す刺激は、今の弱った陸からベリアル力の呼び起こすには十分すぎた。

それが抑え込む力が弱まった瞬間に爆発した・・・という事だ。

『又エエエイツ!』

『がああつ・・・ああ・・・!』

更に追い打ちの蹴りが入り、更なる激痛が外と内両サイドから襲い掛かる。

遂にはグランナイトすら維持できなくなり、粒子を巻き上げて倒れ込んだゼロが大地を揺らした。

「陸ちゃん……陸ちゃん!!」

急に様子のおかしくなつたゼロが地面に倒れ伏すのを見た千歌が堪らず悲鳴に近い叫びをあげる。

全力をもつて叩き伏せ、己の力を誇示せんとする宇宙人を前に、既に彼等が満身創痍なのは火を見るよりも明らか。

それでもなお攻撃の手が止まる事はなく、絶えず打撃音と短い悲鳴が周囲に響いた。

「……やめて……死んじゃうよお……」

そう思うだけで途方もないくらいの恐怖が脳裏を駆け巡つた。

小さな時から近くにいた彼の優しさ、強さ、その全てが他の皆にはない温かさをくれて、安心できる。

そんな陸だけなのに。今の自分には陸しかないのに。

ここで彼まで失つてしまつたら、本当に独りぼちになつてしまう。

「おやおや、随分と苦しそうじゃないか……君のオトモダチ」

傍らで愉悦に震える男の声もほとんど入つては来なかつた。

自身の目尻から零れるものにも気が付かず、ただただ制止を求め、悲痛に声を上げ続ける。

「……まさかこうも思った通りに進むとはねえ。やはり彼等は面白い」

「……?」

わざとらしく、あえて千歌に聞かせるように男が呟く。

今度は明確に耳朶を打ったその声に、これでもかと敵意を込めて睨みつけた。

「陸ちゃんに何したの……?」

「おっと、誤解するのはやめて欲しいな」

千歌が食いかかってきたことへの快哉に浸るように口角を吊り上げた男の顔が近付けられる。

「前にも言ったが私はただの傍観者。自ら手を出すようなことはしない……君が望むのなら、話は別だけどね」

虚空。

そうとしか例えようのない黒さを持った双眸が千歌の眼前まで迫った。

「私也是这样も言った。私なら君に彼を救う手助けができるからね。君が望めば今すぐに」

取引を求めるように千歌の懇願を望むような男の姿は商人と呼ぶには生温かった。

悪魔。そんな呼び名が相応しいと感じるまでに男の囁きは千歌を捕らえて離さず、心に付け入ってくる。

「勿論強要はしないさ。生命は悩み迷うからこそ美しいもの。それを私自身の手で壊してしまつては意味がないからね」

あくまでも千歌の意志に委ねる。そう言った男の背後でまたも轟音が上がった。

選択の余地などない。そう言うかのように。

「……まあ、ただ。このままじゃ君のだけいい好きなのが無事に帰ってくる保証はないだろうけどね」

「っ……！」

見えざる手によって導かれるかのように、自然と動いた手がポケットの中からエボルトラスターを取り出す。

脈打つように灯る結晶体の輝きは、まるで千歌の意志に呼応しているようにも見えた。

「……君は実にいい」

それを承認と取ったか、一步引いた男の人差し指が千歌の額を弾く。

いや、正確には☒千歌の記憶に被さっていた蓋☒を。

「……よき、旅の終わりを」

男がそう口にした時、既にその声を聞く者は場にいなかった。

——お前は何故戦う？

——実体のない縞瑪瑙のような空間の中で問われた。

——友のため、世界のため……それとも己のためか？

——それは声として発されている訳でも、直接頭の中に語り掛けてきている訳でもない。

——ぼんやりとしたイメージとしてだけの存在だったが、そう言っているのだろうと、何故だか理解出来た。

——分かんないよそんなの。

——自分の返答もまた声にはならず、仮に伝わってなかりうとも構わなかった。

——きつとこれは、自分の中で抱えているだけで十分だろうから——、

——でも、私がやらなきゃダメなんだ。……絶対に。

『ゼロツインシュート！』

ヴィラニアスの連撃を凌ぐその間髪。

ウルトラ念力でゼロスラッガーをカラータイマーの両サイドに装着すると同時に両腕のガードを解き、放出した光の奔流でヴィラニアスを振り払う。

『いいぞ……もつと吾輩を楽しませろ！』

消耗したエネルギー量の関係上ダメージこそ期待できないが、距離を取れるだけ十分。

以前の言動からして奴等には自分達にとドメを刺す意思が無い。陸の状況を鑑みればここは一度引くのが最善——、

『……？』

猛進してくるヴィラニアスから撤退すべく変身を解除しようとしたその瞬間。

不意に肌を撫でた温かさの方へと視線を流せば、燦然と輝く光の柱が空へと昇っていた。

『あれは……！』

ヴィラニアスすらも足を止める中、その光は猛烈な既視感を伴って一点へと集約してゆく。

やがてある姿を形どった眩さは途端に弾け、×銀色の巨人×として現出する。

『ネクサス・・・!?!』

『シィイヤー!』

光が完全に収束し切るのを待たずに巨人が大地を蹴り、飛び蹴りの姿勢でヴィラニアスへと突撃。

「・・・・・・・・ち、か・・・?」

ネクサス。

ウルトラマンネクサス。

かつて時空消滅爆弾により崩壊しかけたこの宇宙を救った伝説の巨人——ノアの仮の姿であり、世代を超えて繋げられてきたその光を今は千歌に宿したウルトラマン。

『フウ・・・アアアアアアア!!』

以前ダークザギによる窮地からゼ口達を救ったネクサスだが、今回は前のような神秘性は感じられず、むしろどこことなく人間臭くも感じる。

焦燥、追捲りなどと言った必死さがひしひしと伝わるその動きでヴィラニアスを攻め立て——、

『邪魔を・・・・・・・・するなアアアアッ!!』

『アアアアアア・・・・・・・・ツ!?!』

激昂に乗ったヴィラニアスの剛腕がネクサスの下腹部へクリーンヒット。踏ん張り

すら利かせられずに吹き飛んだ巨人が地を揺らす。

『人の身でありながら吾輩の興を邪魔するその蛮行……身の程を知れ小娘が!!』
ゼロに対するそれよりも遥かに荒々しく、力の籠った打撃からヴィラニアスの激怒具合が窺い知れるが、着目すべきはそこではない。

あまりにもネクサスが弱すぎる。いくら相手がヴィラニアスとは言え、あのダークザギと渡り合えたネクサスがここまで一方的にやられるのは不可解だ。

理由があるとすれば、それは――、

『まさか……千歌……?』

よくよく考えてみればヴィラニアスへの攻撃も拙い動きだった……そう考えると今の巨人の身体の主導権は千歌にあるという事になるが、どうも合点がいかない。

ダークザギの時と違いネクサスが自身で戦わないのは千歌の意志を尊重したのかもしれないが、例えそうだとしても変身者の危機を知らせるエナジーコアの点滅にも関わらずまだ主導権を切り替えないのはおかしい。

そうなる何か、外的な要因でネクサスの人格が表に出れていない……?

『それを抜きにしても危険すぎるのですよ……貴方からはゼロと似た気配を感じます』

「……ほお……!」

カツと見開かれた男の目が更なる享楽を得た事を物語った。

その現れかのように男の手にはプロテクターのような意匠の施された何か握られる。

「……まさか見抜かれるとはね。少々見くびっていたよ」

折りたたまれていたそれは展開と同時に黒い仮面のような形状となり、そのまま薄ら寒く笑う男の顔へと宛がわれる。

その刹那、闇が渦巻いた。

『なっ……!?!』

仮の姿から一変。何かを封じるかのように全身に纏った拘束器具に、素顔を隠す黒い仮面。

その姿を一言で表すのならば、自称した通りの悪魔であった。

『……けど悪魔というのもあながち間違っていないくてね。そうだなあ……』
トレギア、とも呼んでくれたまえ』

百三十三話 再来の悪魔

目を覚ましてすぐに理解した。

また、失敗したのだと。

「……陸ちゃん……」

自分以上にボロボロの様相でいる彼の名を呟く。

ベッドの上の自分と、その傍らに置かれた椅子の上でこちらを見守るような姿勢で眠る彼。

本当ならば逆だったはずなのに。こうさせてしまったのは紛れもなく自分だ。

——私なら君に彼を助けるための手助けができる……そう言ったらどうする？

——まあ、ただ。このままじゃ君のだけい好きな彼が無事に帰ってくる保証はないだろうけどね

自分は何をやった。何がしたかった。

結局ただ無暗に突っ走って空回りしただけじゃないか。

まんまと口車に乗せられて、陸の事しか見えていなくて。その結果更に彼への負担を増す事となった。

ダメだ。このままじゃダメなんだ。

役に立たなきや。陸を助けなきや。今の陸には自分しかいないんだ。ひたすらにそう言い聞かせ、奥底の熱い何かを滾らせる。

それでいい。

確かに聞こえたその声が、歯止めの利かない想いを増長させた。

『……トレギア、ですか……』

ダークネスファイブ参謀、魔導のスライは一人唸る。

悩みの種は高海千歌を焚きつけネクスラスへと変身させたあのトレギアと名乗った謎の宇宙人だ。

地球周辺には宇宙怪獣を配備しておいたのだが、それを突破して飛来してきたとかなりの手練れ。その上ウルトラマンゼロ含め宇宙警備隊を相手取っている以上敵

対するのはあまり好ましくない。

実際本人にこちらと敵対する気はなく、結果的に言えば奴の行動がこちらにとって有益だったのも事実。

だがそれ以上に、奴にはスライを警戒させる何かがあった。

『あの気配は確かに——』

『・・・用とは何だスライ』

呼び出したヴィラニアスが近づいてくるのを察し、IQ一万の頭脳をフル稼働し迅速に思考を纏める。

今この状況では間違いなく、こうする事が最善解だ。

『大した用ではありませんよ。ただ次の作戦の内容を共有しておこうと思ひましてね』

『・・・次は何だ。張り合いのないのは御免だぞ』

『いえ、そうではなくてですね』

トレギアの行動がどうであれ警戒すべきことに変わりはない。頃合いの瞬間に不安材料が出来たのは少々計算外だが、元より自分達の目的は一つだ。

幸い☒あの御方☒も、お考えは同じであるようだから。

『・・・次は私が出ます。直々にエンドマークを打って差し上げましょう』

「……とにかく、無茶するのはやめろ」

少ない気力を振り絞ったような声が向けられる。

結果から言うとな身した事はこつぴどくとまではいかずとも、予想外に叱られた。生気など殆どなかった彼がその声に確かな怒気を孕んで。

彼のためにした事なのに、なんで。

陸を助けたくてやった事なのに、ナンデ。

役に立たなかつたから。迷惑をかけたから。負けたから。独り歩きする思考が次々と極端な想像を浮かばせては積み上げてゆく。

ともかくとして彼にまで拒絶されるような事になるのだけは避けたかった。

陸に自分しかいないように、今の自分にも陸しかない。一度は優越感を覚えたそれも、今となつては強迫観念以外の何物でもなかつた。

「陸ちゃん……私——」

『ご機嫌、いかがでしょうか』

千歌と同じような気を背負った彼の背中に掛けた声は予期せぬもう一つの声に阻まれる。

その正体に気が付いたのは瞬刻の後、身体の主導権を切り替えたゼロが千歌を背後に隠してからだだった。

『・・・今度はテメエからツキョウ野郎』

『久方ぶり・・・でもありませんね。私のゲームは楽しんで頂けているようで』

確かスライ・・・だとか言ったか。何度も陸やAqoursに魔の手を伸ばしてくる組織の参謀であり、一連の事態を引き起こした張本人。

つまりAqoursの存在を消し、今尚千歌を・・・陸を苦しめている元凶。そう思うだけで抑えようのない何か湧き上がってくる。

『連日ウチのヴィラニアスが失礼いたしました。なので今回は私が挑戦に出向いた次第です』

『吹っ掛けてきたのはテメエのくせによく言いやがる・・・挑戦だあ？ 受ける訳ねえだろそんなモン。受ける理由がねえ』

『理由ですか・・・ではこういうのは如何でしょう』

千歌と、それ以上の眼光を光らせるゼロを前にしても余裕綽々として手を打つスライ。

そして一拍置いた後に奴が提示したのは――、

『私に勝つことが出来たら催眠を解き皆さんを元に戻して差し上げる……』
のほ』

『なに——うお……!?!』

怪しい含みを持つてスライが口にした甘言にゼロによって抑え込まれていた陸の意識が再び表へと出る。

活力を失っていた彼の瞳には傍目にも伝わるほどの闘志が宿り、今の一言が如何に陸に對し効果的だったかが伺える。

『……受けて頂ける……』という判断でよろしいのですね』

『待て陸！ 罠に決まってるんだろ！ 落ち着け！』

低く笑うスライに、ゼロの制止も聞かずに陸がゼロアイをその手に握る。

彼を突き動かしているのは陸自身のためでもあり千歌のためでもある。その事を理解してはいても、図らずとも共依存の状態を受け入れていた千歌にとって自分以外の誰かに縋ろうとする姿は少し、釈然としない。

直後に迸った赤と青の閃光も、その靄までは切り裂いてはくれなかった。

自分じゃダメなのだろうか。

やっぱり彼が必要としているのは彼女なのだろうか。

拒絶されても、心無い言葉を吐かれても、それでも彼は彼女を求めたのだろうか。

今の彼には自分しかないのに、それでも彼が求めるのは彼女なのだろうか。

—— ずっと陸の事……好きだったから……!

—— これでラツキヨウ野郎の催眠が解けたら晴れて両思いだぞ？

偶然にも聞いてしまった言葉が、砕けかけている心を深々と抉る。

ダメだ。それではダメなんだ。

もう彼しかいない。最後に残った彼すらも離れてしまつたら自分はどうなつてしま

うのか。それが怖い。

—— 力が欲しいか？ もっと強大で、望むがままに振るえる力が。

☒あの声☒に、今回ばかりは力強く頷いた。

彼を助けなきや、こつちを見てもらわなきや。そうでないともう壊れてしまうそう

で。

—— 俺を受け入れろ。そうすればお前は更に大きな力を手にできる。

今度こそ、絶対に……

—— 超えてやれ、お前を無下にする全てを、奪い去ろうとするアイツ等を……!

瞬いた黒が、全てを染め上げていった。

「……やれやれ、邪魔をするな……ということかな？」

深層意識に干渉しようとする度に微弱ながらも深い闇の波動に阻害される。

この程度ならば打ち破るのは容易いがその必要はないだろう。そうした方が□面白
い□だろうから。

「……やつと見つけた」

背後から掛かった声に振り返れば、そこには至って普通な男。

そんな男から感じる妙な気配が今しがた自分の干渉を阻んだそれと同質であること
を悟ると、男——トレギアは偽りの顔を愉悦に歪ませた。

「おやおやこれは……裏切り者の君が何の御用で？」

「お、そこまで知ってるんだ。なら自己紹介の必要はないね」

笑みを保ったままの男に再度内心で嗤う。

これはいい。これから起こる一大イベントまでの余興には十分だろう。

「単刀直入に聞くよ。何が狙いだい？」

言葉の通り、余計な要素を省いたシンプルな問い。

その主の黒い瞳に秘められた敵意や警戒と言ったものはむしろ薄く、むしろ同類を見るような暗さがあつた。

「そうだなあ……ただ答えるだけというのもつまらない。ここは一つゲームといこうか、カド―星人」

「ゲームねえ……付き合つてあげたいところだけど、そう時間も無さそうなんだよねえ」

一瞬眉を揺らすも、カド―星人は平静に努めて答える。

その視線が向く先ではこの星の者ではない二つの巨影が轟音を響かせている。

「まあいいや。どうせそうしないと答えてくれないんだろ……まあ、陸君が絡んでくるのは確かだよね」

「……それは以前君が犯した過ちと重ねているのかな？」

またもカド―星人の眉が揺れる。

動揺……とまではいえないが、楽しむには十分なくらいだ。

「……ボクが言うのもあれだけど気持ち悪いね君。流星に知りすぎじゃない？」

「おっと、それは御堪忍。私の悪い癖だね」

胸に手を当て紳士的に一礼。もっとも誠意の一つも向こうは感じていないのだろうが。

「……でも実際君の言う通りだよ。これでも友達のもりだからね、ボクのやった事で彼が苦しんでるなら助けるのが道理つてもんだよ」

「ほう……あの少年との絆とでも言い出すのかな？」

「……そう言えたらどんなに幸せだったかね。まあ彼がどう思ってるにしろボクが勝手にやってる事だから、ちよつち君のやってる事は看過できないんだよね」

「……流石、闇の者でありながら光に感化され、結局どちらにもなり得なかった道化の言うことは違うなあ」

無意味と理解しつつ戯言を吐く。

コイツは付け入る迷いや苦惱こそあるが既に腹を括っている。暇つぶし程度にはなるが渴きを満たす程ではない。

「……そんな君に敬意を表して一つ教えるよ。私の玩具は彼だけじゃない」
「なに……？」

この星の人間を模した仮の肉体を動かし、カド―星人の視線を誘導するように身体を反り返らせる。

二体の巨人に向かって走る一人の少女。そんな彼女が背負った雑多な感情に思わず

嗤ってしまった。

「・・・・・・・・千歌ちゃん・・・・・・・・?」

「彼女は素晴らしい・・・・・・・・嫉妬、焦り、孤独感に葛藤・・・・・・・・器を満たすには十分だと思わないかい?」

「・・・・・・・・つ! まさか・・・・・・・・」

本質こそ違えど近かりし存在の自分には分かる。

目障りな光に隠れてこそいるが、彼はそこにいる。

「待て千歌ちゃん! 今ネクサスになるの———ごあツ・・・・!?!」

「邪魔するなよ。これからもっと面白くなるんだ」

ようやく顔色を変えたカド―星人を振るった腕からの波動で薙ぎ払う。導いては意味がない。自分の意志で選ぶからこそ生命は輝くのだ。

自ら破滅を呼び寄せたとなれば、それはもう格別の甘美を齎すだろう。

「さあ・・・・・・・・楽しいパーティーの始まりだ」

直後に立ち昇った光の柱が、更なる愉悦を確実のものとした。

悪意の疾走する数刻前。

甲冑を着込んだ悪魔のような宇宙人の前で漆黒の巨人が膝をつく。

『グ……アア……』

『随分とお苦しみのようですねえ……ナイトさん』

端的に言うとは、スライは強かった。

ヴィラニアスのような圧倒的な力も、グロツケンやデスローグ、ジャタールのような特殊な能力がある訳ではない。だがそれらを除く全てでこのスライがダークネスファイブの頂点である事は間違いないだろう。

『普段の貴方ならばいざ知れず、この状況ともなるとこどもも違うものですかね』

そんな相手に本調子ではない上に冷静さも欠いている陸が勝てるはずがなかった。ゼロが主人格を入れ替えようにもベリアルの方が大きすぎて干渉する事も出来ない。

『ゼアアアッ！』

『フフ……』

肉薄と同時に放ったデスシウムショットも一刀の下に打ち砕かれ、逆にカウンターの回し蹴りが腹部にめり込む。

点滅を始めたカラータイマーが危機を知らせ、その脱力感を物語るようにゼロダークネスが再度膝をついた。

『もう終わりですか…………ほら』

腕を背後で組んだスライが赤い双眸を向ける先で閃光が空へと立ち昇る。

間もなく収束し始めた光が象つたのは巨人の姿。ウルトラマンネクサスだった。

「千歌……」

〈アイツまた………、……？〉

ヴィラニアスの時のように無策で突っこむことを警戒するが、すぐに異変に気が付く。

何故だかネクサスはその場から動く気配がない。

『………』

何か行動を起こす事もなく、銀色の巨人が無言で佇んでいる光景はただただ異質だった。

「……千歌……？ どうし——」

『ツツ!!』

妙な緊張だけが流れる時間に耐え兼ね、漆黒の巨人がゆっくりと歩み寄ったその時、遂に動き出すネクサス。

それまでとはまるで違う、疾風の如き鋭きで大地を蹴り——、
『グアアアア……ッ!』

——ゼロダークネスを攻撃した。

「っ……!!?」

〈どうなつてやがる……? なんで俺達を……〉

唐突な出来事に陸もゼロも戸惑いを見せるが、迫りくるネクサスのラツシユは止まる
心配を見せない。

「千歌……? 千歌ッ!」

〈おいラツキヨウ野郎! テメエ何しやがった!〉

荒波のような激しい連撃がこれでもかと押し寄せる中飛ばした声にも返事がない。

何かが起きていることは明白であり、その原因と思しきスライに怒声を飛ばすも奴は
笑い続けるだけ。

『私は何もしていませんよ……時は満ちた。それだけのことです』

〈なに……?〉

『……貴方にも分かりますよ。すぐにね』

スライの零した不穏な言葉が耳朵に触れると共にネクサスの手刀がヒット。確かな
ダメージと共に火花が散る。

へ．．．．．ネクサス．．．ではないな

ヴィラニアスの時の様子からして今のネクサスは千歌に干渉できていないが、だからといって千歌の意志とも考えにくい。

ともなると千歌とネクサスのシンクロを遮っている何者かが千歌を操らないしは身体を操作している可能性が高いが．．．．．、

———．．．．．！

へッ．．．!? おい．．．嘘だろ．．．．．?>

語り掛けてくる声ではない声とその正体を告げる。

だがそれはあまりに信じがたく、嚴重に注意を張り巡らせていた脅威とはかけ離れたもので——、

〈陸ッ．．．! 離れろッ!〉

咄嗟に張り上げたその声が届くよりも早く。

突き出されたネクサスの腕が、文字通りゼロダークネスの土手っ腹を貫く。

『グッ．．．アアアアア．．．．．ッ!』

途端、ゼロダークネスから溢れる闇が腕を介してエナジーコアへと注がれてゆく。

いや、正確には陸のペリアル力が吸収されている．．．と言った方が正しいか。ともかく流れ出る闇がネクサスを、千歌を侵食する。

地球人の少女から発せられる、小さな身体に不釣り合いな程の威圧感。
そんな触れているだけで狂いそうな程の覇気に旧懐すらも覚えつつ、ゼロは最大級の
敵意を持つて忌々しき宿敵の名を口にした。

へ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ペリアル・・・・・・・・ツ！

百三十四話 衝撃は終わらない

声を出す事も、身体を動かす事も叶わない。重く押し掛かる暗闇だけが延々と広がる空間に一人沈む。

『．．．そんな奴はもういない』

闇の奥から声が聞こえる。自分の声だった。

『．．．久しぶりだな。逢いたかったぜエ．．．．．』

自分の声であつて自分の声でないそれが闇の中で反響する。それでも何もすることはできず、動くのことがない身体が闇の底へと沈んでゆく。

『お前も俺に会えて嬉しいだろ．．．．．ゼロ』

(．．．．．なんか．．．．．眠いや．．．．．)

思考すらも覚束なくなつてゆき、意識までもが暗闇へと消えてゆく。

一瞬、赤黒い双眸が瞬いたと思つた次の瞬間には、押し潰されるように自分の全ては黒く染まつた。

へ………ベリアル………ッ！

何が起こったのか理解出来なかった。いや、理解したくなかったのだろう。

最後に残った幼馴染が、最悪の存在と成り果ててしまった事を。

『……多少予定とは違うが………まあいい』

ベリアル。

ウルトラマンベリアル。

光の国で唯一の犯罪者であり、かつて何度も宇宙を恐怖に陥れた最強最悪の闇のウルトラマン。

そんな存在が目の前にいるのだ。

ちっぽけな地球の少女………それもよりにもよって、千歌の身体を我が物として。

へお前………どうして千歌に………!?

『どうもこうもない………俺はずっとコイツの中にいた』

へなに・・・？

『気付いていなかったのですか・・・？ 一度だけあったでしょう。陛下と高海千歌が接触する機会が』

陸やゼロはおろか、ダークネスファイブの面々でさえ直接ベリアルと相見える事はなかった。

そんな中千歌だけがベリアルに触れる事など――、

へっ・・・！ 永久追放空間・・・！

いや、一つだけあった。

ラブライブ夏季大会地方予選決勝のあの日、突如ダークネスファイブの襲撃を受けたあの時だ。

スライによってA q o u r s 九人が放り込まれた永久追放空間。あの目的はベリアルの魂の回収までの時間稼ぎではなく、ベリアルの魂を千歌に宿らせる事だった・・・という事になる。

『貴方達は高海千歌が近くにいれば陛下のお力が暴走しないのをネクサスの力とと思っていたようですが・・・ 実際は彼女の中にいる陛下が力を吸収していたからです』

陸の力が膨らめば膨らむ程ベリアルに注がれる闇も増大していたと続けるスライに自分達までもが利用され、結局ずっと奴の手の上で踊らされていただけだったと悟る。

催眠や殺戮で味方や親しい人を奪ったのも、陸に植え付けたベリアルを力を増大させるためだった。そうすることでより多くの力がベリアルに吸収させていたのだ。

『彼女の身体を支配下にさえ置ければ後は単純な話です。サイドアースでウルトラマンキングの力を吸収した時と同様、伏井出ケイから奪ったストルム器官でノアの光を反転させていくだけ……ここまで光を蘇らせてくれた事には感謝しないといけませんね』

Aqoursの歩みも、皆の努力や想いも、これまでの全てはベリアルを復活させるための茶番に過ぎなかった……スライの笑いはそう語る。

『……だが、まだ足りねえな……』

絶望を更なる絶望で塗り潰すように千歌の身体を介してベリアルが動く。

おもむろにライザーを手を取ったかと思えば、瘴気を纏って浮かび上がった二本の黒いカプセルをリード。

《フュージョンライズ！》

《ファイブキング》

《ソグ 第二形態》

《ウルトラマンベリアル》

ライザーによつてカプセルのエネルギーが解放され、具象化した二体の怪獣が咆哮を上げる。

直後に吸い上げられたそれらは千歌の身体を膨れ上がらせ、紅が瞬くと共に爆発した。

《キメラベロス！》

真紅の翼が雄々しく、それでいて恐ろしく広がる。

ベリアルをそのまま怪獣化させたかのような怪物はその体軀に似合わない程の速度で宙を駆け、ゼロダークネスを襲った。

『へアアアアッ!!』

ウルトラマンのそれよりも肥大化した腕から伸びる爪が腹を搔つ捌く。

これまでの敵とは比較のしようがない程の膂力に傷を開かれるどころか軽々と吹き飛ばされ、二度上下を逆転させた巨人が地面に叩きつけられる。

『フウウアアアアアアアッ!!』

辛うじてベリアル^{ベリアル}の形を保つ頭部に熱が集約。開かれた口より放出された獄炎が焼け爛れる痛みを伴ってゼロダークネスを飲み込む。

元よりエネルギーが底をつきかけていた状態での被弾は致命傷に等しく、一度の攻撃も許される事のないままゼロダークネスが膝をついた。

『フハハハ．．．！．．．これで完成する．．．！』

なおもキメラベロスは進撃を止めず、抵抗も虚しく掴み上げられてしまう。

更に眼前でベリアルとしてのカラータイマーが煌いたと思つた直後、その光に吸い上げられるかのような脱力感が最後に残つた気力さえも掻き消してゆく。

へコイツは．．．．．ジードの時と同じ．．．ッ!?>

陸ごとその体内に宿る自身の力を吸収しようとしているのを悟るが、もはや踏ん張りも利かず徐々にゼロから引き剥がされる。

やがてゼロダークネスの状態も解除され、ベリアルに飲み込まれるヴィジョンがハッキリと脳裏を過つた。

『セアアアアアアッ！』

『ジイイイイヤッ！』

『グオオオオオオ．．．．．ツ!?!』
しかし。

不意を突く形で天から降り注いだ赤と青の光線がキメラペロスを直撃。発生した爆発の余波が奴とゼロを引き離す。

『ぬうううツ．．．．．、誰だツ!?!』

光線の発生源、キメラペロスが怒声を散らした真上から舞い降りる二体の巨人。

方や若さの中に無限の雄志を秘めたような赤い巨人。

方や騎士を連想させる堅牢な佇まいの群青の巨人。

〈アンタ等は．．．!〉

彼等もまたウルトラマンであることは明白であり、面識があるようなゼロが確かな驚きを持ってその名を口にする。

〈メビウス．．．．．それにヒカリ．．．〉

『間に合った．．．．．とは言えないけど、最悪の事態は防げたのかな．．．』

『すまないゼロ。この星を覆うように結界が発生しててな．．．．．突破するのに時間かかった』

『結界．．．．．そんなものは．．．．．?』

静かに語る青い巨人——ウルトラマンヒカリの言葉に首を捻ったのはスライだった。

そしてすぐにその答えを見つけたのか——、

『貴方ですか……』

ここにはいない何者かへの溜息。

それが霧散するのを待つことなく、ヒカリは赤い巨人——ウルトラマンメビウスと共に最悪の敵へと視線を向けた。

『ベリアル……!』

『まさか蘇っていたとはな……』

『ほう……誰かと思えば。あの時のひよつ子とスターマークの研究者か。そんな状態で何しようってんだ』

ベリアルの指摘通り、既にメビウスとヒカリのカラータイマーは点滅を始めている。恐らく件の結界を突破した際の消耗が激しかったのだろう。

『……陛下。ここは退きましよう』

だが乗り気の帝王に対し、スライが提案したのは撤退だった。

当然ベリアルの刺すような視線が向けられるが、スライは取り乱す事なく続けた。

『貴方様の御力を疑っている訳ではありません。ですが相手が相手です。復活なされた

とはいえ、まだ不完全な状態で彼等を相手取るのはリスクが大きいかと』
『ぬう……』

論理性ではスライが勝るか、折れるようにベリアルが喰る。

『……仕方ねえ。お前の働きに免じてそうしてやる』

『ご理解感謝致します』

『ツ……！ 待て——ツ!?!』

目くらましか、キメラベロスの放った光線が大地に着弾し濛々と火花を含んだ土煙を上げる。

視界が晴れた時には既に奴等の姿はなく、かつてない程の敗北感だけがその場に残されていた。

「……とにかくゼロ。状況の説明を頼む」

爽やかな印象を抱かせる青年、そして精悍な顔付きの男と顔を突き合わせる。

この二人はウルトラマンメビウスとウルトラマンヒカリ。栄光のウルトラ兄弟にも

名を連ねる光の国の戦士……その人間体だ。

『……状況も何も見ての通りだ。それに——』

ギンガやビクトリーと共に月面でUキラザーウルスと戦った際に駆け付けたウルトラマンタロウ。そのタロウの命を受け科学者であるヒカリとその相棒メビウスが飛来したのだとか。

なんでも陸を調べに来たとの事だったが、そんなのは今はどうでもよかった。

「……助けに行かないんですか……？」

陸の口にした言葉に三人のウルトラマンの会話が止まる。

『……落ち着け。今のまま無策で突っこんでも何も出来る訳ねえだろ』

「……けど……、このままじゃ千歌が……」

既にベリアルが復活し、キメラベロスへと変身してから半日以上が経っている。

ネクサスの加護があるのかもしれないが、なにせあのベリアル。一刻の猶予だって残されてないはずなんだ。

「……僕達も出来ればそうしたいんだけど、地球を覆う結界に阻まれて奴等の下までいけないんだ」

「しかもあのメフィラス星人の口ぶりから察するに犯人は奴等とは別……つまり星を丸ごと覆えるような力を持っているか、もしくはそのような能力を持つ怪獣を使役

している何者かがこの星に在るといふ訳だ。どちらにせよ迂闊には動けん」

更にその境界のせいで光の国との交信も断たれ、応援を呼ぶことも出来ないというヒカリ。

味方は限りなく少なく、敵はより強大に。控えめに言つても最悪な状況だった。

「……じゃあどうすんだよ……！ どうすりゃいいんだよ……！」

その悲痛な呻きに返す声はなかった。

ここにいる誰が悪い訳じゃない。けどやり場のない感情が蟠つていく一方で、どうしてもこのまま策が見つかるまで待つというのも耐えられない。

流れ落ちて床を叩いた雫は、その表れなのだろうか。

「……なるほど……なし崩し的にヒカリに付いて来たけど、結果的に来て正解だったみたいだね」

ようやく答えたのはメビウスだった。

同情や哀惜。確かにそんな感情も含んでいるはずなのに、その瞳はどこか険しげでいて。

「君の気持ちは痛いほどわかる……けど、その涙で何が出来るんだい？」

「え……」

「……君は今、何のために戦つてるの？」

圧すら感じるその言葉。

それに答えられないでいると、何かを悟ったようにメビウスは息をついた。

「……………それが見つからない限り、前には進めないよ」

構えたメビウスの左腕に宿る炎を模したようなブレス——メビウスブレス。

彼はその中心のクリスタルサークルを回転させると、迸った光ごと腕を天へと突き上げた。

「メビウ——スツツ!!」

∞の字を描くように立ち昇った光の柱が巨人の形を生成する。

やがて出現したウルトラマンメビウスは陸を見下ろし、その心を試すかのように言った。

『今の君には足りないものがある。それを見つuckerんだ……………君自身で』

百三十五話 その力は何がため

『お、おお………陛下………!』

千歌であり千歌でない少女に頭を下げるのはテンペラー星人極悪のヴィラニアス。

彼女の身に宿る帝王は、誇り高い戦士の彼ですらも従えるほどの覇気を放っている。

『ヴィラニアスか………息災で何よりだ』

そんな彼に一瞥をくれ、帝王——ウルトラマンベリアルは地球人の少女の身体を動かして船艇の中を見回す。

『………お前等二人だけか』

『はい。グロツケン、デスローグ、ジャタール。皆最期の一刻まで陛下への忠誠に尽くし、散ってゆきました』

ヴィラニアス同様に淡々と同胞の死を告げるスライ。

対しベリアルは少しつまらなそうに鼻を鳴らすと圧の籠った双眸で見下ろす。

『……まさか、俺の気まぐれで狂う程軟な計画は建てねえよな………スライ』

『そこはぬかりありません．．．．．ですが少々、ウルトラマンメビウスとウルトラマンヒカリ、そしてあのトレギアなどと言う輩が少々厄介かと』

『ほお．．．．．ヴィラニアス』

ベリアルが目線が再度横へと流れる。

『お前にまどろっこしい命令は必要ないよなあ．．．．．？ アイツ等を片付けて来い』

赤と銀のウルトラマンと対峙する。

ウルトラマンメビウス．．．．．かつての宇宙警備隊のルーキーにして、暗黒宇宙大皇帝エンペラ星人を倒すまでに至った若き勇者。

『セヤアアアツ!!』

「ツ．．．！」

彼のメビウスブレスから伸びた光剣が眼前で煌き、咄嗟に屈んだ次の瞬間に頭があった場所を残像が駆け抜けた。

メビウスは本気だ。すぐにそれを察知する。

「だああ……!!」

握ったゼロランスでメビウムブレードを受け止め、一度後退し距離を取る。

今の陸に欠けているものを見つけさせる。そう言っただけでメビウスが挑んできたのがこの一対一の勝負だった。

『ハアッ!』

肉薄したメビウスが開いた間を一瞬で詰める。

強い。ゼロならばともかく、陸では防御に徹するのが精いっぱいな程に。

「ツ……アア!」

ゼロには頼らず陸一人で戦えと言ってきたメビウスの意図は分からない。

けれど何かを伝えてこようとしてきている以上、押されっぱなしという訳にもいかない。

「ぐう……お…….…….らあッ!!」

鋭く蹴り出された一撃を身一つで受け止める。

意識が飛びそうになる程の痛みが全身を疾走するが、意地で踏ん張り力任せに彼を投げ飛ばす。

これが一人でも誰かが戻って来る事に繋がるなら。そう思えばいくらでも無茶が出来る。

『……強いね。とてもたった一年で積み上げてきたものとは思えないよ』
立ち上がるメビウスにもそう評される。

でもこれじゃダメなんだ。もっと、もっと強くならないとずっとこのまま——、

『……でもそれは、何のための強さだい……?』

「え……」

答えを出せずに動きを止め、その隙に懐へと潜り込んだメビウムブレードが炸裂。

それが決定打となったか。ウルトラマンとしての肉体が掻き消え、変身の解除された陸がゴロゴロと地面を転がった。

「今の君は独りよがりだ。失うことを恐れて君が戦う本当の意味を見失っている」

人間体に戻ったメビウスが真っ先に口にした言葉はそれだった。

「……どうして君が強くなれたのか……それをもう一度考えてみて」

拳こそ交えたが彼の瞳に敵意はない。自分を重ねているかのような寄り添いの情があるように思えた。

それはスライが皆の記憶を書き換えたあの日以降、久々に触れるもので。

「君がそれを取り戻したいのなら、僕が力になるよ」

そしてそれ以上に彼の言葉。

それをもう一度見出す事が皆を元に戻すことに繋がるのならば。

「……お願いします」

差し出された手を握り返す。

柔らかく、それでいて頼もしく笑ったメビウスの瞳に、自分自身へ立ち向かう事を誓った。

「……それで、本来の目的の話をしていいか？」

「……ああ、タロウ教官もそう言ってるんだろ」

陸がメビウスの指導を受ける一方でテレパシーを通しヒカリと会話するゼロ。

「長旅の後早々ですまねえが、出来るだけ早く調べて欲しい。正直俺一人じゃ限界だ」

ヒカリの目的は陸を調べる事。ゼロも何度も試みたが結果の出なかつたためこの助けは有難い。

光の国の技術力……それもスターマークを授かるほどの科学者であるヒカリならば……、

「……元よりそのつもりだ。だが覚悟はしておいてくれ」

〈覚悟……？〉

〈ああ……、陸の今の精神状態なども関係しているのだろうが……タロウの言う通り地球人が耐えられるようなエネルギー量じゃない〉

暗く重いトーンで続けたヒカリにただならぬ雰囲気を感じる。

〈……最悪の場合、彼を殺さないといけなくなるかもしれない〉

「ツ……！ ツ……！」

裏でそんな会話がされているとは露知らず、メビウスの手解きを受けた陸が息を荒げ肩を上下させる。

メビウスの指導はウルトラマンとして戦ってきた陸でさえも途中で折れそうになる程だった。正直滅茶苦茶キツイ。

皆を元に戻したい一心で何とか食らいついたが、メビウスはその成果……と
いうより心に満足のいつていないように見えた。

この試練の先にあるものは未だ不明瞭なままだ。

「……………僕も昔、敵に仲間を奪われた事があったんだ」

「……………え？」

唐突にそう言うメビウス。

その瞳は誇らしげでありつつ、どこかもの悲しさも感じた。

メビウスが語ったのは、彼がまだ宇宙警備隊のルーキーだった頃……ヒビノミライという名前で地球を守る任務に就いていた時の話だ。

未熟ながらもメビウスは地球で出会った仲間——G U Y Sのメンバーと心を通わせ成長していった。その事は以前ゼロから聞いた事がある。

そんなG U Y Sの皆を奪ったのもスライと同じメファイラス星人の催眠……………陸やゼロと同様、メビウスが敵……………という偽りの記憶を植え付けられて。

「……………どうやって、取り戻したんですか……………？」

求めていた答えが目の前にあるような気がしてついそう問うてしまう。

けれどメビウスはそれに答えを出す事はせず、柔和にはにかんで言った。

「僕は何もしてないよ……………ただ強いて言うなら、僕は皆を信じていただけ。だから皆も僕を信じてくれた」

メビウスはまるで単純な事のように語るが、どうにもそれは曖昧なものに思える。

「君にだっているだろ。信じられる、そして信じてもらえる仲間が」

「・・・・・・・・仲間・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・。

メビウスの言葉が反芻する夕暮れの道。

少し調べる事があるという彼の言葉に従い、一人閑散とした道を進む。

——何のための強さだい

——君にだっているだろ。信じられる、そして信じてもらえる仲間が

ぐるぐると、ただ延々に、変わらぬトーンで回り続ける。

答えられなかったからか、陸としても引つ掛かるものがあつたからか。どちらにせそ

の言葉が脳裏に焼き付いて離れない。

早く何とかしないといけないのに。

早く千歌を助けないと、皆を元に戻さないといけないのに。

なのに。

なのにどうして、同じ場所にばかり立ち止まり続けてしまうんだ。

「・・・・・・・・あ・・・・」

聞き覚えのある声が小さく耳朶に触れ、下に向けていた顔を上げる。

直後にそうしたことを後悔したのは、きっとその先にいたのが□彼女□だったから。

「……りっ……くん」

肩辺りまで伸びるサラサラとした黒髪に、幼馴染に似たボーイッシュな顔立ち。

渡辺月。曜の従姉妹にして、陸とゼロの関係を知る、この状況においては出会いたく

なかつた人物の一人。

あの夜彼女に向けられた畏怖の眼差しは、今も鮮明に焼き付いている。

「あ………待って!!」

咄嗟に逃げ出そうとした陸の手を掴み、引き留める月。

今一度重ね合わせた彼女の瞳からはあの時の恐怖こそ滲んでいたが、それ以上の決意

を感じて――、

「………話が、あるんだ」

百三十六話 約束の勇炎

『………来たな』

潮風に揺れる林道の影に佇む宇宙人を前にし、無言で構えた。

やはり陸と離れたのは正解だったか。まだ彼は戦わせていい状態じゃない。

「……僕を呼んだのはお前か？」

『当然よ。陛下の命とあらばな』

「………」

静かにメビウスブレスを構える。

短時間だったとはいえ一度変身したばかりだ。その状態でダークネスファイブの一

角にどこまで対処できるか……、

『とはいえ、貴様はあのエンペラ星人を倒した猛者………例え命でなからうとも戦

う理由などいくらでもある。……手合わせ願おうか、ウルトラマンメビウス!!』

「く………」

やるしかない。

彼が何を選ぶかは彼次第。自分にできるのはせいぜいそれを守ることぐらいだ。かつて教官がそうしてくれたように、今度は自分が。

「メビウ——スッ!!」

掲げられたメビウスプレスが∞の字を描いた光を迸らせ、その姿を本来の巨人へと変身させた。

無言の間に流れる時には心地よさとその逆がある。

今感じているのは言わずもがな後者。居心地の悪い沈黙と嫌な緊張感が余裕のない心を押し潰す。

「……………ごめんね。あの時は」

永遠にも感じられたそれを月の眩きが破る。

警戒故か少し強張っていた身体の力がその一言で抜けた気がした。

「あれからさ、色々考えたんだ」

ベンチを見つけて腰かけた月が隣に座れと催促され、言われるがままにする。沈みか

けている西日が眩しかった。

「なんでりつくくんが……. つてき、そしたらなんにもわかんなくなっちゃった」
「え……. ?」

そこで初めて月の顔を見る。あの夜とは違う、妙にすっきりした顔が映った。

「ボクが知ってるりつくくんは悪い人じゃないし、それは今も変わってないのも知ってるよ。だからその……. ウルトラマンと一緒にいるのも何か訳があるんじゃないか
と思つてた」

抑えめにおずおずと話す月。やはりスライによるウルトラマンは敵という刷り込みは抜けていないのだろう。

けれどそれでも彼女は今陸の前にいる。彼女にそうさせる何かがあるから。

「……. でもそこで分からなくなつたんだ。☒何が正しい☒のか」

前にも触れた彼女の記憶のズレ。それが周りとの認識もずらしたのか。

スライの催眠下ではまずありえないはずの現状への疑問を彼女は口にする。

「……. だつてそうでしょ？ 何があつたつて曜ちゃんがりつくくんを嫌うだなんて思えないし、りつくくんは曜ちゃんにそう思わせるような事はしないし」

ずつと陸と曜の関係性を見てきたからこそその信頼。それ故なのか。

月は陸やゼロの事を敵だと思ひ切れていない……. そう伝えてくる。

「・・・皆ウルトラマンの事を敵だと思ってるし、実際ボクもそれは拭い切れてないんだ。でもそれが心の底から思ってる事なのかって言うと、それでも無くてさ」

まありつくんだったからって言うのも大きいんだけど、とはにかみ、月は続ける。

「だってあの時りつくん、ボクの事守ってくれたでしょ？」

月にまで離れられてしまったと思っていたあの夜の事。すぐ目の前で恐怖や敵意の対象がいて、その正体が見知った人間だった。彼女にとっては恐怖以外の何物でもなかったはずだ。

でも、それでもそう思えるのは、月自身が陸を信じてくれている事に他ならないから。「まだウルトラマンは怖いし、よく思っただけ無いのでも正直少しあるんだ。・・・でもなにが本当の事で、どれを信じたらいいのかも分からないから・・・」

月と視線が重なる。

その瞳にはまだ迷いこそあったが、言葉一つ一つは嘘偽りのない感情なのだ伝えて来ている。

「・・・だからボクはボクの信じたい人を・・・りつくんを信じるよ」

月の咲かせた笑顔が、いつになく眩しく見えた。

でもしつかりと向き合えた。眩しさに目を逸らす事なく、真正面から。

そしてその笑顔を・・・その瞳を陸は知っている。

——陸は確かに、皆の事を危険な目に遭わせたり、ダイヤを傷付けた。……でも、それ以上に皆の事を守ってきたんだよ。……その事は、忘れないで……

——ずっと私達を守ってくれて、ありがと——ッ!

——苦しくなったらいつでも頼って、一人で戦うなんて言わないで。……私達は、皆でウルトラマンなんだよ……

彼女達が陸に、そしてゼロに向けてくれた言葉は数多くある。

でもそれは初めから向けられていた訳じゃない。

それこそ最初は誰の応援もなく一人で戦っていたはずなのに。時には自ら離れようとした事もあつたくらいなのに。

——僕は皆を信じていただけ。だから皆も僕を信じてくれた

またメビウスの声が反芻する。

——何のための強さだい

何のために戦っていたのか。

——君にだってしているだろ。信じられる、そして信じてもらえる仲間が

誰のために戦っていたのか。

何度傷付いても、何度死にかけても、それでも逃げ出さずに戦ってきたのは何故だったのか。

改めて考えてみれば単純明快、皆を守りたかったから。

頼まれてもないのに勝手に戦って、勝手に守って。その結果として皆も陸を信じて寄り添ってくれた。月が改めて陸を信じてくれたのも同じ事だったはずだ。

それが全て崩れ去ったのなら、また最初から積み上げてゆけばいいだけ。

ゼロからイチへ……全部彼女達が教えてくれた事じゃないか。

「はは……アホくせえ……」

いつだってそう思っていたはずなのに、いつの間にか見落としていたらしい。

失わないためでも、まして独りにならないためでもない。

守りたいものを守っていた。ただそれだけだった。

「……なんかスッキリしたわ。ありがとな月」

「ううん。ボクこそ、あの時は——」

何か言いかけた月の声を遮る形で地鳴りが響く。

ヴィラニアスに……あともう一人。

見失っていたものを陸自身で見つけられるよう促してくれた、想いに応えるべきあのウルトラマンだ。

「りつくん！」

駆け出した陸に背後から声が掛かる。けど振り返らなかつた。

「守ってくれてありがとう……言いそびれちゃったから」

立ち止まらず、片腕のガッツポーズだけで返す。

それに応えるべきもここじゃない。きつちり奴を倒して、両者に示さなければ。

『ギヤアアアアアウウウウツ!!』

『フウウン!』

タイラントの斧を側転で躲し、間を開けてはメビウムスラッシュで牽制。

光線自体は吸収されるもその隙に伸ばしたメビウムブレードで腹部を搔つ捌く。

『流石、やはり貴様のようなものとの戦いは心が躍る!』

『グアアアア……!』

とは言え不慣れな一対二。一方に集中すればどうしてももう一方への注意が甘くなる。

ヴィラニアスの電磁ロッドに打ち付けられ、メビウスの身体が宙を舞った。

『不思議だね。そこまでの強さがあってどうしてベリアルに・・・』

『愚問だな』

テンペラーとタイラント。どちらもかなり腕の立つ星人と怪獣であることに加え、タイラントとの戦闘経験はない。

その為否が応でもタイラントに注意が割かれるが、それではヴィラニアスの攻撃が凌げない。

『強き者が弱者を淘汰し圧する。弱者に価値はない。それだけの話よ！』

『・・・卑しい価値観だな』

そうしてまたメビウスに迫った攻撃は、天に昇った蒼雷によって弾かれた。

ウルトラ兄弟唯一であるブルー族の蒼い身体。ウルトラマンヒカリが手を差し出してくる。

『ヒカリ・・・！』

『全く・・・お前も少し突っ張り過ぎだ』

咎めるように言いつつも怒気はない。むしろ普段よりも冷静に努めているように見えた。

『ツルギ・・・か』

『その名を口にするな。今は仲間に貰ったこの名がある』

『どうでもいい。かつて劍豪と名を馳せた貴様とも手合わせできるとはな．．．．．！』
『おっと、勘違いするな。俺が来たのはメビウスを助けるためでも、まして貴様と戦うためでもない．．．．．この目で見届けるためだ』

『なにを．．．．．』

首を傾げるヴィラニアスの真後ろでまた新たに光の柱が上がった。

赤と青の閃光が弾け、やがて姿を見せたその戦士は――、

『．．．．．見せてもらおうぞ。仙道陸』

「ごめんゼロ。もう大丈夫．．．．．かはわかんないけど、もう見失わない」

見慣れた光の空間。その中で相棒と向き合う。

『．．．．お前、本当にこれでいいのか？』

「．．．．よくなかったらここにいなえよ」

どうして戦ってきたのか。何故戦いたいと願ったのか。それを思い出したから。

「……………だから、最後まで一緒に戦わせてくれ」
「……………わかったよ」

呆れたようにゼロが頭を掻いた。迷いつつ、考えつつ、それでも陸の意志を尊重するように。

『けどこれだけは覚えとけ。お前がアイツ等を守るように、俺もお前を守る』
濁してこそいるが意図は伝わった。もう長らく一緒にいるから。

「行こうぜ」

『……………俺に命令なんざ二万年早えよ。……………ああ!』

『陸君……………』

爆炎を吹き荒らせてヴァイラスへと殴りかかる赤熱の巨人……………彼であるのは言うまでもない。

『……………意外か?』

『いや、そうではないけど……………て言うかヒカリ彼の事見てたでしょ』

『それが俺の任務だからな．．．．．それより、お前もやるべき事があるだろ』

勿論彼を信じていた事に間違いはないのだが、想像していたよりもずっと早かったと言うか。やはり人間の力と言うものには毎度驚かされる。

どうであれ彼は壁を乗り越えてきた．．．．．ならば師を務めた者としてやることは一つだろう。

『陸君！』

自身の胸に炎の紋様を浮かび上がらせる。

かつてかけがえのない仲間と描いた、不屈の勇炎を。その証を。

『受け取れエツ!!』

突き出された両腕が想いを乗せ、炎と共にゼ口を包んだ。

『メビウス．．．．．!』

熱が湧き上がった。

全身が燃えるような、心の奥底から沸き立つ炎。

「ッ……！」

その熱に呼応するように、ウルティメイトブレスから赤い光が漏れる。

陸や皆に触れて変わっていったルイズが灯したリトルスター……ジャスティスの光。

「メビウスさん……ルイズ……！」

そうだ。進むんだ。

守りたいものを守るために。

信じてくれた仲間のために。

——私達はラブライブで優勝する。だから陸ちゃんも生きて帰って私達の事見守ってよ

あの日の約束を、守るために。

「行くぞ……ゼロッ！」

ブレスを叩き、メビウスの炎とジャスティスの光。その双方を我が身に宿す。

途端に激しさを増す炎。それはストロングコロナの力と融合し、更なる闘気を爆発さ

せた。

『オオオオオオオ………!!』

金色の炎が溢れ出し、誓いを刻み込むかのようにエンブレムを浮かび上がらせる。

『クラツシャープレイブ………ゼロツ!!』

『だああああらッ!!』

突き出された拳が炸裂。噴火が如き轟音を上げてタイラントを殴り飛ばし、余波で発生した熱風が周囲の木々を燃やす。

『貴様……その姿は………!?!』

『オオオオオオツ!!』

蹴り飛ばした大地が焦土と化す。

そんな身体に収まり切らない程の熱量はヴィラニアスの電磁ロッドをも燃やし尽く

し、灼熱のラッシュが幾度となく奴を捉えた。

『ギャアアアアアアウウウウツ!!』

猛攻の隙を突くようにタイラントの鎌が死角から迫るが、次の瞬間には切り落とされ地面を貫いた。

『アアアアアアアツ・・・!?』

一瞬の出来事を理解出来ないタイラントの懐に今しがた奴の右腕を切断した光剣が一閃。

更にその勢いのまま掲げられたそれは膨大な熱を集約させ、さらに熱く、大きく、刀身を膨れ上がらせてゆく。

『プロミネンスパニツシヤアアアアツツツ!!』

天を貫かんばかりの大剣と化した光剣が大気を焼き切りながら振り下ろされ、タイラントを両断。爆発と共に熱波が駆け抜けた。

『クク・・・ハハハハハツ・・・! いい・・・いいぞオツ!!』

相棒が爆散したのにも関わらず嬉々として笑うヴィラニアスの一撃を片腕で止める。

『やはり期待以上だウルトラマンゼロ! もつとだ、もつと楽しませろ!』

『俺一人の力なんかじゃねえ・・・それに、楽しむだど?』

滾る熱の反面、冷静に攻撃を処理しつつゼロが低く言う。

『仲間が死んだっつーのに楽しむだのなんだの……タイラントは相棒じゃなかったのかよッ!』

怒号に乗せた握り拳がヴィラニアスの顔面を射抜く。

その一撃にふらつきつつも笑うヴィラニアスは、嘲るように、見下すように言い放った。

『笑止。仲間とは強き者の事を言う。弱者に掛ける情などないわ!』

『……やっぱ、テメエみてえな奴が一番ムカつくぜ』

静かな声音に反して戦いの過激さは加速してゆく。

拳と拳。意地と意地。双方の譲れないものが幾度となく衝突した。

『ムカつくも何もない。今貴様がここに立っていることがその何よりの証明だろう……仙道陸』

「ああ……?」

攻防の間を縫い全てを悟ったように言う。

『情弱な仲間には価値ないと悟ったのだろう? あの娘共も、貴様の両親も、力がないからこそ淘汰され、足枷にしかならない雑魚共を見限ったからこそ——』

「ふざけた事抜かしてんじやねえッ!」

身体の奥底から吐き出した怒声と共に強くヴィラニアスを殴りつけた。

相棒と呼んでいた者の死にすら心を痛めないコイツに、仲間を語る資格などない。

「強いも弱いも、どう思われてるかも関係ねえ！ ただそこにおいてくれるだけで力になるんだよ・・・戦ってこれたんだよッ!!」

勿論、それだけでは拭い切れない痛みもある。けど前を向かない限り何も始まらないから。

だからもう見失わない。

せめて、自分の守りたいものくらいは。

まだ、守れるものだけは。

「これまでもこれからも何にも変わりやしねえ、ただ自分の守りたいモン守る・・・」

それだけだこの野郎ッ!!!」

『グおおおオオオッ・・・!?!』

より激しさを増したガルネイトバスターの奔流に乗せて薙ぎ払う。

強弱で全てを決めつけるコイツなどに、絶対に負けはしない。

『オオオオオオ・・・!!』

胸のエンブレムから発生させた炎にありつたけのエネルギーを注ぎ込む。

みるみる膨れ上がってゆくそれはやがて巨大な火球となり、その圧倒的な熱量を表す

かのように陽炎が躍る。

『小癩な——ぬううツ?!』

チャージの隙を突き放ったウルトラ兄弟必殺光線も、疾走する二本の光線により相殺される。

メビウムシユートにナイトシユート。メビウスとヒカリによる援護射撃だという事は確認せずとも分かった。

『貴様等ア……!』

『ゆけ、ゼロ!』

『決めるんだ陸君! 君自身の手で!』

二人の……いや、遠方から微かに聞こえる三人目の声も受け、臨界点に到達した火球が∞の字を描くように羽を広げた。

「テメエの歪みを焼き尽くす……!」

『俺達の……勇炎でな!』

掲げた両腕の間で光をスパークさせ、ゼロの体躯をも超えた火球に叩き込む。

『ダグビューム……バーストオオオオオオツツツ!!!』

スローイングのようなモーションで投げつけられた業火球があらゆるものを焼き尽

くし猛進する。

『ぐうう……、これが、力なき者に寄り添う強さだと……?』

直撃したヴィラニアスにも例外なく火焰は襲い掛かり、その悉くを融解させてゆく。

そして――、

『認めん……、吾輩は……認めんぞオオオオオオツツツ!!!』

断末魔を掻き消すように爆音が轟く。

塵や黒煙と共に瘴気も空へと昇ってゆくが、そんなものは気にも掛けずにある人の方を向いた。

「………ありがとうな」

敵意の眼差しの中一人微笑んでいる少女に向けて親指を立てる。

四人目のダークネスファイブ――極悪のヴィラニアスをここに打ち倒した。

「え? ここに留まるんすか?」

決戦を終えたその夜。

メビウスとヒカリの意外な言葉に陸とゼロが目を丸くする。

「言つただろ、元々お前の事を調べにここに来たのだと」

「ベリアル復活も知っちゃったから尚更だね……それに今地球から出れないし」

とまあ、こう言つた理由でメビウスとヒカリはもうしばらく地球に滞在するらしい。

少し意外ではあつたが、今この状況において二人がいるのは心強い。

「迷惑かみだけど、もうしばらくよろしくね。陸君」

「は、はい。メビウスさ……いや師匠!」

「ししよ……!?!」

指導への謝意を込めて敬称を口にするメビウスが異様な反応を見せる。

どうしてかヒカリまでもが呆れたような反応を見せているのが引つ掛かるがこれは一体。

「な、なんか気に障りました……?」

「も、もう一回」

「へ?」

「もう一回言つて?」

不安になり顔をうかがつてみればどうしてか嬉しそうにしている。

ともかくまあ、本人も言っている事だしもう一度。

「し、師匠？」

「師匠………僕が………！」

二度口にすれば鼻息が荒くなる。

ピンと背を伸ばして毅然と振舞おうとはしているが感情は全く隠せていなかった。

「えっ………と、これは……？」

「気にするな。ただの馬鹿だ」

ゼロの笑い声と、ヒカリの溜息が同時に聞こえる。

実はメビウスがあまり後輩に慕ってもらえてない事を気にしていたのを知ったのはこの後だった。

百三十七話 魔獣に雪を添えて

「・・・これも絆の力か・・・また一つ勉強になった」

見下ろした街の景観の中からある一つだけを見下ろし、ぼそりと呟く。

信頼や絆、そんなものに価値がないことに揺るぎはない。ただ少々予想外だったのは認めよう。

おかげで計画に狂いが生じた。早急な修正が必要だ。

「物事はハプニングこそ醍醐味だが、この手のモノは好きじゃない」

彼が絶望から這い上がった事でマイナスエネルギーの供給元が絶たれた。

既に相当量を収集出来たとは言え、まだ足りない。

「・・・だから、もう一度私好みに染め上げてあげよう」

手品師のように一本ずつ指を折り、パツと開いては何も握られていなかった手のひらに指輪を一つ転がす。

「・・・行つてらっしゃい」

蠟燭の火を消すように文字通り「命」を吹き込む。
途端に瘴気が指輪を包み、妖艶な光が瞬いた。

「……この星を覆っている結界の正体だがな……恐らくブルドンによるものだ」
「ブルトン……？」

ヴィラニアスを倒した翌日の事。

陸の事以外にも調査を進めていたヒカリが掴んだ情報を共有したいのことで呼び出された場で口にしたのがその名だった。

『おいおいマジかよ……だとすると相当マズくないかそれ』

「かもね……。能力の範囲が地球だけに留まってるって事はまだそこまでの力はないんだらうけど」

「……まずなんだよそのブルトンって」

ゼロとメビウスのウルトラマン組が勝手に警戒の色を強めていくがソイツを知らない陸にとっては何の事だか。

「四次元怪獣と呼ばれている少し特殊な怪獣だな。空間を操る力を持っているのだが……稀に別々の時空を繋げてしまう事例が起きていてな」

『過去にレイブラット星人つてのがブルトンの力を使って色んな宇宙から怪獣やらスペースビーストを呼び寄せた事もあつたりしたんだよ』

「……んじゃそりゃ」

話の規模が大きくなりすぎてイマイチ把握し切れないがとにかくヤバい奴だという事は伝わった。

ゼロのように並行宇宙を移動できると言うだけでもとんでもない話なのにそれを繋げてしまうような生物がいるとは。やはり宇宙は広い。

「それも前にあのメフィラス星人が言っていた☒第三者☒の仕業つてこと？」

「恐らくな。過去に隕石から誕生したケースもあるようだが今回ののは人為的と捉えていいだろう」

となるとブルトンの能力を地球に結界を張るのだけに使っているのもソイツだろう。

こちらの敵であるのは間違いないが、あの時のスライの様子を鑑みるに奴等の味方であるとも考えにくい。

今のところは何か別の目的で動いており、怪獣を使役できるような力を持つ何者か、分かっているのはそれだけだ。

『——気になるかい?』

「ツ……!?!」

直接心に語り掛けてくるような声が四人の耳朵を打った。自然と警戒心が身を引き締める。

「……貴様だな。この事態の元凶は」

『……察しいいじゃないか。流石スターマークを授与された科学者なだけある』

その慧眼か、はたまた科学者としての功績にか、謎の声がヒカリに称賛のを送る。

全員黙って次の言葉に神経を尖らせた。奴はヒカリがスターマーク勲章を授けられた光の国の科学者だという事を言い当てた。

つまり、ある程度こちらの情報に精通している者……という事になる。

『……何が目的だ』

『問題児さんはせっかちでもあるようだね……なあに、大したことじゃないさ。ただ君達のおかげでまた一つ学ばせてもらったからね。そのお礼さ』

「……礼だと……?」

『ああ……』

パチン、と、指を鳴らしたかのような高い音が響く。

直後に窓枠の外で紫色の光が瞬き、轟いた地鳴りが周辺を揺らした。

『フフ……せいで楽しんでくれ』

『何が礼だこの野郎ッ！ ただの嫌がらせじゃねーかッ!!』

声は霧散し、ゼロの怒号には何も帰っては来ない。

代わりにどんどん大きくなってゆく轟音が今すべき事を伝えた。

「とにかく行くこう陸君、ヒカリ」

「……待て、俺は奴を探ってみる」

メビウスの呼びかけに待ったをかけるヒカリ。

その表情には何か含みがあるようにも見えた。

「……奴とは会った事があるかもしれない」

「え……?」

『どういう事だ？ 昔取り逃した犯罪者か?』

「分からん……だが、妙な胸騒ぎがする」

神妙な面持ちでヒカリが語る。

繰り返すがヒカリは光の国でも随一の科学者だ。そんな彼の勘が告げているのならば馬鹿にできたものではないだろう。

「……分かった。そっちはヒカリに任せるよ。陸君！」

「はいー」

どうれあれ陸のやることは変わらない。出現した怪獣を倒すだけだ。ウルトラゼロアイとメビウスプレスが光を放ち、直後に二体のウルトラマンが君臨した。

『ツ——！！』

殺到してくる触手の群れをゼロランスとメビウムブレードで切断。一気に距離は詰めずに出方を伺う。

反転した頭部に図体に似つかない両翼。そのホラー染みた姿はさながら神話に登場するような怪物を連想させた。

『ナイトファング………』

『どっから起こしてきたこんな奴……』

メビウスがナイトファングと呼んだその怪獣。ゼロ曰く宇宙怪獣の一種だが、その多くは知的生命体の巢食う星で眠っていることが多いのだとか。

『ツ——！』

人間のすすり泣く声のようにも聞こえる方向を上げ、ナイトフアングから放たれる波状光線。

そいつをいち早くメビウスがバリアーで防いだ後、押し返すように光線を反射。ナイトフアングに直撃する。

『デエエエイヤア！』

すかさず飛び込んだゼロの鋭い蹴りが刺さった。

たまらずナイトフアングが鉤爪と鞭が合わさったような腕で反撃をしてくるが、それを難なく躲すともう一度蹴り込む。

「……なんかそんなでもないような気がするんだが……」

『馬鹿言え。ナイトフアングが面倒なのはここからだ』

警戒の糸を緩めないゼロとメビウスに疑問を抱くと同時に別の違和感も覚える。

スライが世界を塗り替えて以降、ウルトラマンが出現すると毎度毎度上がっていた罵詈雑言の声が今ははたりと止んでいるのだ。

そしてその答えはすぐ明らかとなった。

『ナイトフアングの出す音波には生物に無理矢理悪夢を見せる力があってな……』
そうすることで発生したマイナスエネルギーを奴は糧にしてるって訳だ』

ゼロの説明通り、怒声を上げていた人々は今や苦悶の表情で地に転がっている。悪夢を見せる魔獣。その力によって苦しみの檻に囚われているのか。

『とにかく早く片付けよう。長引くとマズい』

『わかつてらあ!』

両者ともに得物を構え、一も二もなく眼前の魔獣を斬りに掛かる。

だが今度は同じようにはいかず、直後に鳴り響いた高音に足を止めた。

「ぐ……あああ……!」

『ちい……!』

割れるような頭痛がのた打ち回る。さながら頭の中で鐘の音を鳴らしているようだった。

生き物に悪夢を見せる音波……他と差はあれどウルトラマンにも有効だったか。

「いきなり強くなりすぎじゃねーの……?」

『あの野郎の仕業だろうよ……舐めた真似しやがる』

とは言え一度目の音波はこちらに何の影響も与えなかった。そうなる何か外的な要因が影響していると考えるのが妥当。そして思い当たる節ではそんなものは奴しかない。

空間を操る怪獣をも操る力を持つ宇宙人……使役する怪獣を強化するなど造作もないという事か。

ともかく、向こうがパワーアップしたのならこちらもやることは一つ。

『オオオオオオオ……!』

悪夢すらも焼き尽くすように発生した炎がゼロを包む。

体表を焼く熱がエンブレムを刻み、吹き出した火焰が左腕に集約した。

『ツツリアアアツ!!』

熱波が音波の壁に開けた穴を貫くように突き出された拳が連続でナイトフアングを捉える。

その一発一発が撃ち込まれる度に低い炸裂音が響き、奴の余力を奪い続けてゆく。

『ダアラツツ!!』

ハンマーが如く振り下ろされた両腕がクレーターを生み出す程の衝撃でナイトフアングに叩き込まれた。

『ハアアア……!』

一方でメビウスが自身のブレスのエネルギーを両腕を掲げる事で増幅させる。

『セヤアアアアツ!!』

ゼロの連撃によりナイトフアングがグロッキーをなつた瞬間を狙い定めたように腕

を十字に組み、解き放たれた光線——メビウムシユートが奴を粉碎せんと迫つた、その刹那、

「『ツ……!?!』」

ナイトファングの盾になるように黒い魔法陣のようなゲートが出現。光を丸ごと覆い尽くすかの如くメビウムシユートを虚空の彼方へと誘った。

『……やれやれ、そこまでするのは君達の役割じゃないよ』

光線を飲み込んだ円陣の向こうから声が語り掛けてくる。間違いなく奴だだろう。

『お楽しみはファイナーレに持ってきてこそその興だろう？　こんなところで潰されては勿体ないのでね……では』

『……!　待てツ!』

絡みつくような声が遠くなってゆくと共にナイトファングが粒子となって消えてゆく。

残響した声までもが霧散した後に奴等の影はなく、熱波による蒸し暑さと焦げた臭いだけが漂っていた。

「——り!」

「……!」

仕方なく飛び去ろうと空を見上げるが、その寸前に耳を撫でた声に足を止められる。

見下ろせばそこに二人の少女。

「……すみません師匠、先戻っててください」

少しだけ考え、一人変身を解除する。

もう見失わない。そう決めたから。

戦いの影響で普段よりも荒い波が押し寄せる防波堤。その一角にある船着き場へと陸は向かう。

間違いない。きつとあの二人は——、

「鞠莉！ 鞠莉ッ！ 聞こえる!？」

停泊した船艇の真横で横たわる鞠莉と彼女に呼びかける果南を改めて確認しやはりと一人頷く。

果南の手の中で目を閉じ苦悶の表情を浮かべる鞠莉を見れば何があつたかなどすぐに理解出来た。

「……ナイトファングの影響ならすぐ起きるらしいから心配ないってよ……って、

そう言っても無理か」

状況を理解しつつも声をかける事に迷いは無かった。その為にここへ来たのだから。

「………陸……！」

突き刺すような果南の視線が痛い。わかっている、覚悟はしていてもやはり辛いものだ。

だがここで怖気づくようであればわざわざ声など掛けやしない。

「……別に何もしやしねーよ。怪我とかしてない？」

「どの口が………」

「う……ん………」

偽の記憶に動かされる果南が食って掛かろうとしたそのタイミングで鞠莉の眼が開く。

まだ胡乱の中にあるのか、半開きの瞳で周囲を確認し――、

「鞠莉……？ だいじよ――」

「ひっ……!?!」

上がったのは恐怖するような驚嘆の声。

しかもその対象は陸ではなく、彼女の親友であるはずの果南であった。

「あ……、鞠莉ッ!?!」

その恐怖に突き動かされるように鞠莉が引き攣った顔で走り去ってゆく。

淡島に戻るための定期船の存在すらも気に掛けられないと言ったように逃げる彼女に、陸も果南も呆然とその背中を眺める事しか出来なかつた。

「・・・何だったんだアレ」

『ナイトファングの影響・・・てのは間違いないんだろがな』

ゼロの考察同様、悪夢を見せられていたのは間違いないだろうが、問題はその内容。

陸ではなく果南に恐怖するような内容、メビウス曰くナイトファングは人のトラウマのようなものを引き出す悪夢を見せるらしいが・・・、

「いい加減にして下さい！ 何なのですか貴方達は!!」

と、帰路とは逆方面からの揉めるような騒がしきに気が付く。

今日はどうかやら三年生に縁がある日らしい。声の主がダイヤであることをすぐに理解し、何か不屈きな輩に絡まれているのなら——などと思ひ振り返ってみて、驚愕。

「とにかく貴方達の事など知りませんわ。行きますわよルビィ」

「うゆ．．．．．お姉ちゃ．．．．．」

「ちよつと！ ルビィ！」

ダイヤに手を引かれるルビィが何か気に掛けつつも逆らえずにつれていかれる。

その視線の先には、本来ここにはいないはずの☒彼女達☒がいた。

「．．．．．なんなのよコレ．．．．．どうなっちゃったの．．．．．？」

小さくなつてゆく黒澤姉妹の背中を方や戸惑いながら、方や涙声を漏らしながら眺める、もう一組の姉妹。

函館聖泉女子高等学院スクールアイドル．．．．．Saint Snowの二人がそこにはいた。

百三十八話 届く呼び声

見慣れたはずの景色がモノクロに映る。

知っている場所なのに、まるで知らない場所にいるような感覚。

「・・・・・・・・」

色彩の失われた世界の中で唯一色付いて見えるパソコンの画面が目に入った。凄く印象的で、きつと二度と忘れないくらいに辛く悲しい現実が映し出されていた。

浦の星女学院統廃合の知らせ。届く事のなかった祈りが燻る中自ら綴った悲しみの記憶。

例え今見ている世界が虚構のものであろうとも、きつと。

この事実だけは、揺るがぬ現実なんだ。

少し肌寒い静かな夕陽の世界を大声が犯す。

「どうなってるのよこの状況!!」

顔を合わせて開口一番にこれである。やはり姉と違い妹の方は少し苦手だ。

いや違う注目すべきはそこじゃない、どうして彼女達がここに居るのか、だ。

「この事態で動かない方がおかしいでしょ! アンタバカなの!」

それを問うてみれば再度怒声で返される。妙に当たりが強いのは焦り故だろうか。

「どうしちゃったのよアンタ達…… A q o u r s は? ルビイも何があつたのよ!」

戸惑い、不安、理亜の表情からはそんな感情が見て伺えた。

だが混乱している点ではこちらも同じ。本来この二人はここにはいない……いや、そもそも訪ねて来るはずもないのに。

〈コイツ記憶が……〉

理亜が口に行っているのは今現在なかつた事にされている出来事だ。誰の記憶にも、勿論その当人達にもその記憶はない。

けれど彼女は今ハッキリと口にした……それは理亜がスライの催眠圏外にい

る事実に他ならない。

それならば、今起きている事を知る権利ぐらいがあるだろう。

「……心構えはしといてくれよ」

場所は移り仙道家。

「……そんな……」

陸の差し出したココアを啜っていた理亜の手から離れたカップが音を立てて床を叩き、零れたブラウンが広がっていく。

この反応も無理はない。むしろこんな事を聞いて平然としていられる者の方が珍しいくらいだ。

「じゃあ、なに……？ A q o u r s が無くなったの……？ 皆忘れちゃったの！？」

『忘れてるっつーよりは、なかった事にされてるって感じだな。ともかく、誰も A q o u r s を……アイツ等自身も覚えちゃいねえよ』

より詳細に語ったゼロの言葉に理亜が押し黙る。その様子はどこか同じくその事を

知った時の千歌と重なった。

「つまり、その宇宙人の力で誤った記憶と事実を植え付けられている……. という事でもいいのでしょうか？」

言葉も出ないと言った様子の理亞をそっと抱擁しつつ、聖良が静かに口を動かす。

『にしても、まさかお前等が無事だったとは思って無かったよ。エックスの奴が何かしていったのか？』

「すみません……. 実を言うと、私も全てを思い出せた訳ではないんです」

流石彼女はこんな時でも取り乱さない……. と感心した直後に同じ口から語られる意外な事実。

「……お恥ずかしい話、理亞に異変を訴えられるまでは私も陸さんやゼロさんを人類の敵だと思っていましたし、何なら憎んですらいました」

聖良曰く、その時の彼女はどこで会った、どうしてその正体を知っているのかすらも分からないはずの陸を憎んでいた。しかもそんな矛盾に気付きすらしなかったという。

『……ん？ そうなると理亞、お前はなんで…….』

「私も……. 最初は姉様と同じだった」

自然と理亞に視線が流れ、その理由を問うとともに考察する。

理亞と他の皆との違いを上げるとするならばエックスのようなウルトラマンと一体

化した経験があるという事。その時エックスから付与された何かが催眠を打ち消したのか……

「ウルトラマンの事も、アンタの事も憎かったし、姉様も私と同じでアンタを嫌ってるのがなんか嬉しかった。スッキリした」

だが理亜の言葉からするに彼女も割としつかり洗脳されていたようで。

「だったらどうして。月と同じようにどこかで記憶の穴があつたのか、それともまた別の理由か。」

「……でも、どうして姉様がアンタを憎んでるとスッキリするのかが分かんなかった。なんかまるで、アンタに嫉妬してたみたいな……それを考えてたら思い出したの」

一人考え込む陸をよそに、理亜は一人淡々と言葉を連ね――、

「私、元からアンタの事嫌いだったって」

あつさりとその答えを口にした。

「……え」

意外過ぎる事実に落胆と言うか、もはやショックとすら思わない。

まあつまり端的に説明するところ。催眠を受けるまでもなく陸の事を嫌っていたためそこだけは上塗りされず、何故聖良が陸を嫌っているとスッキリするのを考えてい

たらその感情の理由と元々それが胸の内にあつた事を思い出し、芋づる式に他の記憶も蘇つた……という事。

まあ味方が戻つた分にはいいのだが、どこか釈然としない。

『惚けてる場合かよ。コイツのパターンは結構重要な発見だぞ』

例え記憶を塗り替へられていても心身的な感覚までは変わっていないという事を証明できたのは大きいとゼロは言うし、一応前向きに捉えておこう。嫌われていた事は全く喜べないが。

「……すみません……ハッキリ口にはしないよう釘は刺したのですが……」
聖良にすら気を遣われる始末。元々自分から切り出した話題だというのに。

「そんな事今はどうでもいい！ アンタ達優勝するつて約束したじゃない……こんな事で立ち止まつてる場合!？」

「……つっても、もうな……」

正直、ラブライブに関してはまだほとんど諦めていた。

世界が塗り替わつてからかなり日数が経っている。勿論皆を元に戻すことに変わりはないのだが、その頃にはもう既に……、

「……?」

沈黙が舞い降りる。だがそれは想像していたものとは少し違った。

聖良も理亞も、何故か拍子抜けしたように陸を見る。

「・・・アンタ、今まで何してたの？」

イラつきすらしたかのように、棘のある含みで理亞が一言。

次に彼女が見せてきたのは何か特別変わった感じはしない彼女の携帯電話・・・・・・・・のはずだった。

ある一点を除いては。

「この日付、変だと思わないの？」

画面に映し出された日付は陸の感覚よりも☒二週間☒ほど遅れたもの・・・・・・・・つまりあの日から時が進んでいないという事になる。

『ツ・・・・！　そうかブルトン・・・・・・・・！』

ゼロの閃きが頭に流れ込んでくる。

ブルトンは本来空間を操る怪獣。もし今地球を覆っている結果が時の流れにも作用していても不思議ではないし、それならばこの状況にも説明がつく。

「・・・けど、だとしたらブルトンを仕向けた奴は何のために・・・？」

『・・・・・・・・いや、むしろその方が都合なのかもな』

「・・・・・・・・ちよつと、勝手に話進めないでくれる？」

ゼロが何かに気付いたその時に蚊帳の外の理亞に遮られる。

「とにかくこんな事で終わるなんて絶対に許さないから。ルビイ達を元に戻すんだから……!」

絞り出すようにそう言った理亞の姿が、今度は少し前までの陸と重なる。

戸惑つて、焦つて、見えない何かに怯えているような……そんな様子。

「アンタが出来ないなら私がやる……こんな終わり方認めない!!」

それらに突き動かされるようにして理亞が飛び出していく。その後姿を見れば彼女の心情は想像に難くなかった。

「……すみません……色々、焦つてるみたいで」

「いえ……元はと言えば俺が原因みたいなものなんですし……」

ともかくじつとしてはいられないのは陸も同じだ。目的が不明瞭な以上ナイトフアング並びにそれを操る何者かへの対処が最優先だが、並行して皆とも向きある必要がある。

聖良と理亞のケースをみる限り希望はある。今度はこちらから動く番だ。

「うぶっ……！」

『…相変わらず酷いな』

ルビイ達が元に戻るまで帰らないという理亞達と別れて一夜。船酔いにやられつつも栗島へ上陸。

目的はナイトフアング出現直後の様子に違和感を覚えた彼女だ。

『……これで元に戻る保証なんてあるのか？』

「…別に、元に戻るのが目的じゃないよ。……約束したからな」

その人のトラウマなどを呼び起こす悪夢を見せるといふナイトフアング。状況からして彼女もその影響を受けたのだということは容易に想像できた。

その悪夢の内容までに確信は持てないが、恐らくは――、

「……やつぱりここか」

木漏れ日の差し込む薄暗い木々の間、小さな社の前で一人佇む少女を見つける。

「……何か用？」

陸の存在に気が付き、細い陽に照らされる金髪を揺らしながら振り向いたのは小原鞠

莉。

その表情に少し前まで自分に向けられていた柔らかさはない。主に警戒の色が占めていた。

「この前ちよつと調子悪そうな気がしたんすよ。何か考え事する時は大体一人でここに来てるって、前教えてくれたんで」

「…そんな覚えはないんだけど？」

やはり態度は刺々しい。一体今の彼女に陸はどう見えているのか。

まあただそれは今関係ない。肝心なのは彼女自身のことだ。

「とりあえず外してくれない？ 余計調子悪くなりそうだから」

「……素直に心配してるのにその言われようはちよつと傷つきますね」

棘があるというか、いくら催眠の影響を受けているとはいえ彼女らしくない発言。

その裏には何か、無意識のうちに自分を守ろうとしている……そんな風に思えた。

「……学校のことつすか？」

「ツ……！」

眉が揺れた。やはりか。

「なに……？ 笑いに來たの……？」

その眼光に敵意が差す。

同時に瞳が映した怯えが心の奥に秘めたものを物語った。

「何もできなかつた、何も残せなかつたって……そんな風に……!」

「…鞠莉さ——」

確証を得るが、同時に揺れた大地の鳴らす咆哮が掛ける声を遮る。

立ち昇つた妖光の中から出現したのはナイトファンク。あの声の使わず、鞠莉の悪夢の一端を担う怪獣。

「(こんな時に……!」

『ツ——!!!』

唸り声と共に波動が放出され、悪夢の音波が内浦を包む。

途端に襲い掛かつてきた頭痛に顔を歪めながらも、根気で意識を手繰り寄せては倒れる鞠莉を抱きとめる。

『タイミングが不自然すぎる……あの野郎見てやがるなツ!』

『へえ……それなりの洞察力はあるみたいだねえ』

眼前で闇が渦巻いた。

徐々に大きくなるそれはやがて空間すら歪ませ、生じた狭間から赤く瞳を光らせる一つの影が現れる。

「(こうして顔を合わせるの二度目かな、仙道陸君」

「お前……」

やがて人の形を成した影の姿に記憶の鐘が鳴る。

青くメツシユ掛かった髪に左右を白黒に分けたピエロを彷彿とさせるような服装、そして抱く悉くを伺わせないその双眸。

雑踏の中で一度だけ言葉を交わしたあの男だ。

「自己紹介と行こうか。私はトレギア。しがたい悪魔とも思ってくれればいいさ」

『トレギアだと……?』

自らを悪魔と称するトレギアという男の名に異様な反応を見せるゼロ。

オウガのように過去に関わった宇宙人なのか、ただ驚いているだけ……とは思いにくい。

「今日は挨拶に来たんだよ。もうじき私の計画を次の段階に移行する頃だね。一度ここを離れる前に何か一言……とでも思った次第さ」

「…何が目的だ」

「それを言ったら面白くないだろう? お楽しみというのはいつも最後に持ってくるのがセオリーというものだよ」

陸の構える得物には目もくれず、トレギアは自分の思うように言葉を並べる。

不気味。改めて対峙してもその印象は変わらなかった。込み上げてくるような悪寒

が背中を伝う。

「…さて、あまり挨拶が長くなってはいけないね。そうだろうウルトラマン」

うすら寒い視線を頂点からつま先まで舐め回すように流し、回した片腕によつて黒い魔方陣が生成された。

「このゲートを潜れば彼女の悪夢の中に行ける……二択だ。町をとりナイトフアングを倒すか、彼女をとり奴を放置するか」

トレギアの後方でまたも轟音が響いた。何か爆発した音だ。

今対処しなければきつと、更に大きな被害が出るだろう。

だがそれを嫌って陸が飛び出せばトレギアは意識のない鞠莉に何をするかわからない。

奴が強いっているのはそういう二択だ。

「さあ、君に何ができるのか、何を選ぶのか私に見せてくれ……！」

自ら突きつけるその選択を楽しむようにトレギアは笑う。

悪魔……確かに奴には相応しい言葉なのかもしれない。どちらを選ぼうと残るのは拭えない罪悪感のみ。それを理解しつつそうしているのだから。

けど――、

「…選ぶ必要なんざねえよ。どっちもだ」

「はあ……?」

不機嫌そうにトレギアの眉が釣りあがる。

「……言っている意味が分からないな。私は選択を求めたんだよ?」

「だからどっちもどうにかするって言ったんだろ」

「ははっ……、これはこれは。とんだ欲張りさんのようだ」

しかし余裕然とした態度は崩さず、陸の動揺を誘いたいとでも言うようにまた嗤った。

「……だが忘れたのかい? 君一人で全てを抱えようとした結果何が起こったかを」

トレギアが言うのは、恐らく千歌のこと。手の中にあるものをこぼさないために必死で、一人突っ走った結果多くを失った。そんな否定も拭うこともできない事実。

「人は強情だが同時に無力だ……それはウルトラマンゼロと一体化している君とて変わらない。全てを守ろうなどと言って、結局最後に残るのは虚無だけだ」

「……確かにそうだよ。一人で全部守ろうだなんてできやしねえ。また同じことの繰り返しだ」

「そうだろう? だから君のとれる選択は——」

「……けど、今は一人じゃない」

また別の轟音が上がった。だが今度は破壊の音ではない。

『セヤアアアアツツ!!』

『ツ——!!』

破壊音が今度は悲鳴に変わった。

駆け付けたメビウスとヒカリによってナイトファンクの侵攻は停止。二人との衝突に移る。

『陸！ 元凶はそいつか！』

鞠莉と接触中にナイトファンクが出現することも想定して二人と意思を疎通しておいたのは正解だった。

仲間の存在。改めてその大きさを実感させられる。

「師匠ッ！ そいつのこと頼みます!!」

ともあれこれで二択は消えた。あとはもう片方を掴みに行くのみ。

一瞬、睨むようなトレギアの眼と視線を交差させ、暗黒の魔方陣の中へと飛び込んだ。

「……………あれ……」

氣づけば暗闇の中にいた。例の画面以外に目視できるものはなく、底の見えない暗闇が延々と続いている。

「…鞠莉さん……」

「ダイヤ……?」

凜とした声に振り返れば親友がいた。

けれどその顔は険しく、少なくとも自分には向けられたことのないような黒いものが渦巻いているように見えた。

「……貴女、結局何をしに戻ってきたのですか?」

「え……?」

凍てつくような視線と共に放たれた一言に出かけていた言葉が完全に消失する。

「我儘を押し通して日本に戻り、その結果残ったものは何なのですか? 何も残らなかったじゃありませんか」

「ダイ……ヤ……?」

「それだけじゃありませんわ……わたくしと果南さんがどんな想いで貴女を……!」

一言一言が重く胸に突き刺さる。

聞いているだけで泣き出しそう、そんな痛みが彼女の言葉にはあった。

「もう貴女を友人だとは思いませんわ。さようなら」

「……ちよ……待ってよダイヤツ……!!」

離れていく親友に手を伸ばすが、触れた瞬間に彼女の身体は霧のように消えてしま
う。

「鞠莉」

「か……なん……」

また背後に現れるもう一人の親友。

彼女もまた眉を寄せ、暗く冷え切った眼で自分を見下ろしている。

「……なんで学校を救えなかったの?」

「っ……」

一番聞きたくなかった言葉が、一番聞きたくなかった者の口から放たれる。

「ねえなんで?! 学校を救うために戻ってきたんじゃないの!?!」

「それは……:……ッ!」

言い淀めば、今度は彼女の背後に幾つもの影が現れる。

同じ制服に身を包み、そして皆一様に冷えた視線を注ぎ、次々と吐かれる言葉が暗い
空間に蔓延してゆく。

——無意味。

——役立たず。

「いや……！」

羅列される罵詈雑言の嵐に思わず俯きしやがみ込む。

頑張ったんだ。精一杯足掻いたんだ。それは紛れもない事実。

けど現実はそれに答えてはくれなかった。残ったのは最悪の結果と、それに伴う周囲の声だけ。

——全部無駄な努力だったんだ。

「いやあああああツツツ!!」

孤独な叫びが虚空に消えていった。けれど声は止まない。

「なん……で……」

何度も何度も、泣いても叫んでも、絶えることなく声は聞こえる。

何も残らなかつたんだ。

努力も何も、全部無駄だったんだ。

独りよがりのままで、このままずっと、ずっと——、

「そんな訳ねえだろオオオツツツ
!!!!」

刹那、光が迸った。

今にも自分を包まんとする闇を切り裂き、もつと前から傍にあつたような安心感のあ
る、そんな荒々しくも暖かい光が。

「何も残つてねえし全部無駄だあ…？ 本気で言つてんならぶつ飛ばすぞ小原鞠莉ッ
！」

そう訴える少年にはこれでもかというほど見覚えがあつた。

憎むべき対象、そう思っているはずなのに、何故だか今はそれ以上の親しみを覚える。

「…だつて学校は救えなくて…何も残せなくて、皆も…！」

「ホントにそうかよ！ 今までアンタが見てきたモンはホントにこれだったのかよツツ
!!」

また闇を薙ぎ払った彼が叫ぶ。

関係なんてないはずの自分にここまで必死になって訴えかける彼を見ていると込み
上げてくるものを知っているはずだ。

言葉が紡がれるたびに胸に迫ってくる、彼へのこの感情を。

「言つたよな!? アンタのやつてきたことは……アンタの努力は否定させねえって！俺は誰よりも努力してきたアンタを見たからそう思つたんだよ……それをアンタ自身で否定してどうするんだよッ!!」

「ッ——……!」

——人の痛みも分かんねえような奴にこの人の努力は否定させねえ……。テメエが鞠莉さんの価値を語るなんざ……二万年早えんだよ!!

頭に響いた声に酷く頭が痛む。

——誰よりも自分の大切なものに一途な鞠莉さんだつたから、俺はあいつをぶん殴つたんですよ。……野郎が手え挙げる動機なんて、それで十分でしょ？

零れていたものが戻ってくるような感覚。とても、とても大切な何か。

「別にアンタが俺を嫌おうが構いやしねえよ……けど、今アンタが否定しようとしてんのはアンタ自身が皆と見つけたモンだろうが！ そんな大事なモンまで見失つてんじゃねえ！」

「……ッ!」

暗闇を完全に光が照らした。

そうだ。そうだった。

見失つてはいけないもの、忘れてはいけないもの。

彼と、皆と一緒に見つけた、皆で歩んできた証。

「だから……………前を向けッ!!」

しがらみのように纏わりついてた闇を自ら弾く。

差し伸べられた腕をとり、その名前を呼んだ。

「りくつち……………!」

こちら側に戻つてくると既にトレギアは姿を消しており、丁度ナイトファングも最期の時を迎えた瞬間だった。

「りくつち……………、その……………」

「あはは……………、なんかすみません、色々偉そうなこと言っちゃって」

伝えづらそうに口籠る鞠莉に、上がった爆発音をバツクにたははと笑う。

彼女の無事を確認したらどつと疲労感が込み上げてきた。もうしばらくは地面とお友達でいよう。

「いや……………そうじゃなくて……………」

「無事ならそれでいいですよ。それだけで十分なんで」

口にした通り本当にそれで十分なのだが、どうにも本人は納得しきれないようだ。

まあ彼女の性格上無理はないというか、記憶が戻ったとわかった時から薄々こうなる予感はしていたが。

「……………めん……………なさい……………」

その声と共に溢れ出してきた雫が地面を叩く。

できれば泣かせたくはなかったのだが、こうなってしまった以上は仕方ない。

ともあれようやく自分の知る顔が帰ってきたのだ。今ただ、それが笑顔になれるよう専念しよう。

「……………ルビィ……………」

慣れない海辺の町を一人孤独に歩く。

昨日の件で警戒されてしまったか、今日は声をかけるところか顔を合わせることすら叶わなかった。

「なんなのよ……………もう……………」

催眠だどうだの、そんなことは知るか。現に自分や姉は記憶を取り戻したのだから。所詮彼女にはスクールアイドルも、自分との思い出もその程度だったのか。違うと理解していてもそんな考えが浮かび上がってくる。

「…どうぞ？」

「え…？」

突然目の前に現れた白と黒の男。

その手の中の黒い一輪の花を理亞へと渡し、それ以上は何も言わず、何事もなかったかのように立ち去ってゆく。

「なに？ 嫌味…？」

無性に腹立たしくなり、たった今手渡された花を乱雑に投げ捨てる。

その後姿を、静かに仮面の悪魔の微笑が見守っていた。

百三十九話 幻影の輪花

『グ…………ウウ…………!』

『陛下、まだご復活なさって間もないのです。無理だけはなさらぬよう』

『…………俺に心配なんて必要ねえ…………、引っ込んでろ』

怪獣の姿のまま肩を大きく上下させ唸る主の言に従い後退する。

ウルトラマンネクサス…………いくら力を失っているとはいえあのノアだ。如何に絶大な力を誇る我等が主と言えど吸収には相当の労を要するらしい。

ともかくしばらく動けそうにない。当然その間は自分の判断が事態を左右するが…………一つ気掛かりな存在がいる。

『おやおや…………、随分とお苦しみのようで』

カツン。自分達以外は誰もいないはずの船内に床を叩く音が溶ける。

自分達の存在を知っておりかつこの挑発するような態度。そして容易くここに侵入できるのは奴くらいしかおるまい。

『……丁度、貴方について考えていたところですよ。トレギアさん』

『覚えてもらえていて光栄だよ。魔導のスライさん』

微塵もそんなことは思っていないと態度に出しつつ、教えてもいないスライの名を口にするトレギア。

確認できる範囲での此奴の暗躍の数々……正直現状においてはウルトラマンゼロ以上の障害だ。

『……どういふつもりですか？』

『……と、言うとは？』

『貴方の行動の件ですよ。キツパリ言ってしまうと、我々にとって不利益な結果を生んでいるのでね』

仙道陸に立ち直られたのは計算外であり痛手だ。おまけに一人だが仲間の記憶が戻ってしまったのはますます計画に支障をきたす。おまけに一人だが仲間の記憶が

『おいおい、私はどつちの味方にもなった覚えはない。今回の件も私の計画を進行した結果起きたもの……いわば副産物に過ぎないさ』

ブルトンの作り出した結果が時間稼ぎになっているのもその結果、トレギアはそう言う。

『ほう……ではその計画とやらを聞かせて頂いても？』

『そう結論ばかり急ぐものではないよ。……君もそう思うだろうか?』

スライの言攻めをのらりくらりと躲し、皮肉っぽく別な方向へ向けて嗤う。

『君も中々に興味深い。望んで光から離れた訳でもなければ闇に堕ちた訳でもなく、今なお闇に身を置く動機は単純な恨みだけ』

命知らずかただの馬鹿か、はたまた別の何かか。

あろうことか主に矛先を向けたトレギアは、如何にも自分の主張こそが正しいといわんばかりに弁を振るうが――、

『思想もなければ信念もない。そんな君の何に彼等が惹きつけられたのか……』

『……気に入らねえな』

刹那。

明らかな苛立ちを含む声に続き、迸った赤黒い雷槍がトレギアに迫った。

『ツツ……!!』

初めて焦るような様子を見せたトレギアにそれは直撃し、両腕の防御もろとも奴の身体を数十メートル後方まで運んだ。

『口達者なだけで偉そうに踏ん反り返るな……俺に何か言いたきや力で示せ』

この主は少々好戦的というか短気というか、俗っぽく言うならば喧嘩っ早いのが困るところだ。

まあ少なからず、理詰めのトレギアに対してはその方が効果的なのかもしれないが。

『…いや、やめておこう。お互い消耗するのは不都合だろう?』

『フン……腑抜けが。……着飾っても所詮は光の国の奴等と同じか』

加えどうにも主はトレギアに対し相性がいいようで。

吐き捨てられたその言葉への反応は、スライのそれに対するものとは明らかに違つて見えた。

『ははは……まあ、流石にこの姿では同族の君にはバレてしまうか』

『なっ…!』

肯定したトレギアに驚愕したのはスライだけだった。

同族。確かに奴はそう口にしたのだ。

『まさか、貴方も……!』

『あの星の連中と同じ括りで捉えるのはやめてもらいたいな。私が見ているのはもつと別のものさ……つと、こんな話をしに来たんじゃなかったね』

なおも余裕だけは崩さずに奴はやれやれと肩を竦めて見せる。

確かにトレギアの行動は☒あの種族☒の信念とは正反対のものだが、かといって主と同じ側かと言われればそうとも言い難い。

奴の言葉の通り光や闇、善や悪とは乖離した何かを見つめているように思える。

『じきにここを離れるのでね。その前に挨拶でも……と思っただけさ』

紳士染みた一礼の真後ろで広がった闇が魔方阵を形成し、その奥へとトレギアを誘っていった。

『先程の発言は詫びるよ。それではまたどこかで……もつとも、その☒また☒があればの話だがね』

「トレギアだと……!?!」

『ああ、確かに奴はそう言った』

トレギア。

その名に衝撃を受けたのはゼロだけでなく、彼伝いにそれを聞いたメビウスとヒカリも同じだった。

「確証はあるの?」

『さあな。けど、今回の手口は聞いていたそれと同じだ。それにわざわざアイツの名前を名乗る物好きな奴なんざいないだろ』

三人の属する宇宙警備隊の追っていた犯罪者か何かなのか、これまでとは明らかに反応が違うのは言うまでもない。

現にゼロは奴と接触して以降、これまで以上に警戒の糸を張っているように見える。

「……とりあえず、どんな奴なんすかそのトレギアってのは」

実際に触れて見て陸が感じたのは、これまでの宇宙人は支配や侵略といった利己的な目的で行動していたことに対し、トレギアにはそれがないように思えた。

言うなれば愉快犯だろうか。ともかく奴からは他人の苦しむ様を楽しんでいるような節が垣間見えた。

だが逆に言えばそれだけ。確かに強大な力を有しているのだろうが、それでもこの三人がこれほどまでに神経を尖らせるような相手とは考えにくい。

一体、トレギアの何が彼等をここまでさせるのか。その理由はすぐに明かされることとなった。

「……奴は、光の国の出身だ」

「……は？」

ヒカリの零した言葉は数秒の沈黙を生むには十分だった。

光の国。それはゼロ達の故郷だ。ともなれば当然奴も――、

「……ウルトラマントレギア。真正正銘、俺達と同じ光の国のウルトラマンだ」

「え…、でも、光の国で闇に堕ちたのはベリアルだけなんじゃ……」

「ベリアルは光の国唯一の☒犯罪者☒つてだけさ。地球人にいい人や悪い人がいるように、ウルトラマンもそれぞれ色々な考えを持っている」

ともなれば当然過激な考えに至るウルトラマンも現れる……ヒカリの言葉を継いだメビウスはそう言った。

「現に俺やゼロもかつては道を誤りかけた。トレギアは、踏み止まられずそのまま闇に墜ちてしまった者の一人という訳だ」

自分が如何にウルトラマンという存在に盲目的だったかを実感する。

宇宙の守護者。その認識は間違っていないのだろうが、全員が全員そうと限った訳ではないのだ。

「こればかりはどうしようもないことなんだがな。かつての俺も罪を犯した手前、ベリアルやトレギアと言った同族によって傷つけられた者を見るのはそうにも居たたまれん」

何故か、ヒカリの憐れむような視線が陸に向けられる。

タイミング悪く着信音を鳴らした携帯に阻まれ、この時はまだその意味を理解し得ないのだった。

黒い炎の中で佇む漆黒の巨人に、その影と重なるもう一人の人影。

絶望の渦中と思われるその様子は、自然と破滅の訪れを連想させた。

「花丸ちゃん、最近ずっとそれ見てるね」

閑散とした図書室の中で、古びた巻物とにらめっこをする自分に掛かる声。顔を上げた先で綺麗な赤髪が揺れた。

「あ…、ごめんねルビィちゃん。図書室の整理手伝ってもらってるのに」

「ううん。来たと言って言ったのはルビィだから、気にしないで」

嫌味なく、かつどこか不安げに親友がはにかむ。

数日前から見覚えもない少女が何度も何度も訪ねて来るらしい。今日図書委員である自分に付き添って休日の学校に来たのもその少女を避けるためなのだろう。

「何が描いてあるの、それ」

「なんだろう、……でも」

知らぬ間に手元にあった巻物。

太平風土記。どこかで、誰かに聞いた覚えもないのに、自分はこれを覚えている。その中の一幕……この黒い巨人のページを見ると、何故だか酷く不安になるのだ。

「まる……知ってるのかな、このこと」

失いたくない大切な誰かが手の届かない場所に行ってしまう。そんな感覚。

その正体が誰なのか、それすらも分からないのに、どうしてこんなに怖いのか。

そもそも描かれている事象が現実になることすら考えにくいのに、その感覚だけは確かなものとして胸に存在している。

「はっ……！ ひよっとして何者かがまる達の記憶に細工を……!?!」

「……ファンタジーの読みすぎじゃない？」

突如口走ったフィクションめいたことに容赦のないツツコミが飛ぶ。こういうのは現不登校の幼馴染の仕事だというのに。

と、言いつつまあ、現実身近にそれを可能にしまいそうな存在がいるのだが。「先生に言われてた分は終わったから、帰ろっか」

「……あれ、こんな花この辺に咲いてたっけ？」

その帰り。

図書室内から引き続き歩きスマホならぬ歩き巻物に勤しんだと、傍らのルビイが何かを発見。

「チューリップかなあ？ でも真つ黒……」

独り言に興味を引かれ視線を巻物からずらせば、確かにルビイの言葉通りの黒い花が存在感を放っていた。

「花丸ちゃん、このお花何かわかる？」

ルビイの無垢な瞳が向けられる。

本ばかり読み漁っている手前多少なりの知識、少なくともここら一体に自生している植物の知識ぐらいはあるつもりでいたが……、

「……見たことないすら……」

と、普段は抑えるようにしている口癖が出てしまう程度には該当する知識が存在しなかった。

仮に外国の珍しい花の種子が何かの拍子でここに根付いたとするならば外来種の観念からこの場で処理するべきなのだが……、

「でも、綺麗だね……！」

興味津々かつ魅入っている親友にそうとは言いにくい。

仕方ない。ここは環境に影響が出ないことを祈って見過ごすでしょう。

「あれ……？」

ふとルビイの顔から花に視線を戻すと、弁の辺りからふわりと花粉のようなものが見えた。

風媒花の一種なのだろうか。そんなことが頭を過った次の瞬間に変化は起こった。

「びびび……!!？」

ルビイの悲鳴が短く上がる。

もしかしてまた例の少女が……そう思うも、それは悪い形で外れることとなる。

「っ……！」

気付けば走り出していた。追わなければいけない気がした。

何故かルビイはそれに対する反応とは思えないほど怯えているが、それを認識する余裕すらなく足は前へと進む。

「待つて……！」

素顔を伺わせない影が遠ざかってゆく。

太平風土記の中にあつた炎の中の影。その姿と重なるそれを夢中で追った。

失っちゃいけない。手放しちゃいけない。理性ではなく心がそう叫んでいた。

「あ……………」

不意に、それまで踏みしめていた地面の感覚がなくなる。

切り立った斜面へ足を踏み外したのはすぐに分かった。必死になるあまりあの影以外が見えていなかったのだ。

「花丸ちゃんッ!!」

ルビイの声がするが、答える声は出ずに視界が下へと流れてゆく。

流石に無事では済まないだろう。そう覚悟し目を瞑った時、がっしりとした何かの花丸の身体を受け止めた。

「…………お前、馬鹿なの?」

恐る恐る開いた目が非難めいた少年を映す。

彼が今の今まで追っていた影とは対極の位置にある存在だということを理解するのに、そう時間はかからなかった。

「下ろすぞら！ おらは助けてなんて——」

「暴れんな。落ちるぞ」

自分は何をしているのだろうか。

存在するはずもないものを追って怪我をし、今は触れあつてはいけないような少年に介護されている。

「…理事長に何したぞら？」

「……どうもこうも、偶然通りかかっただけってあの人も言つてたろ」

煮え切らない反応に疑念が深まる。

ルビイは自分が陸に連れていかれるのを危ぶんでいたようだが、ふらりと現れた理事長に連れられ家に帰されてしまった。偶然にしては聊か都合が良さすぎやしないだろうか。

「何か弱みでも握つてるぞら——？ それとも……」

「…大した想像力だな。小説家にもなつたらどうだ？」

「それ犯人のセリフぞら……」

口元を緩ませ、すぐに締めなおす。

一瞬だ。ほんの一瞬だが、この軽口の叩き合いを楽しんでいると思つてしまった。それも足

の痛みを忘れるほどに。

「いいからおとなしくおぶさつとけ。これで悪化でもされちゃ俺も後味悪いんだよ」
理解が出来ない。

敵なはずなのに。助ける理由なんてないはずなのに、どうして彼は自分を助けたのか。

「……変な人すら」

でも、最も理解出来ないのは自分の心だ。

嫌いなことに間違いはない。実際嫌悪感だつて確かなものとして胸の中にある。

なのに――、

(なんで、こんなに安心するんだろ……)

不意に生じたそれを誤魔化のように、その背中に顔を埋めた。

「……で？ 何か分かったことは？」

無事花丸を家まで送り届け、そのついでに摘んできた黒い花を片手にゼロに問う。

彼女を助けられたのは本当に偶然。丁度鞠莉に話を持ち掛けられてこの花を調べている最中に遭遇したのだ。

『コイツは地球の植物じゃねえってことはわかったよ。メージュグつつー人のトラウマみたいなもんを幻影として見せて、それに対する恐怖感情を養分にする宇宙植物だ。まあ、大方トレギアの野郎の仕業だろうな』

ナイトフアングと今回のメージュグに共通しているのは人の恐怖心……つまりマイナスエネルギーを刺激しているということだ。

恐らくはそれに関連した何かを狙いなのだろうか、相変わらず意図が掴めない。

「ほんつとに何が目的なんだよアイツ……」

ぼやいてばかりではどうしようもないことは理解しつつもそれは口から出てしまう。

正直トレギアの目的自体は今のところどうでもいい。奴の張っている結界のせいで千歌を助けに行けないのが一番の問題だ。

『近い内に去る……とは言ってたがな。それに期待してばつかじゃ——』

「——少しいいか」

暗がりの中から呼びかけられる。

また別の宇宙人かと身構えるも、電灯によって照らされたその正体はヒカリ。昼間見

せたような神妙な面持ちでいる。

『どうした？ トレギアの居場所でも掴めたか？』

「いや、そうでないのだが重要な話だ」

静かな口調だが、その裏には計り知れないような何かがあるように感じた。

「……元々、俺とメビウスがこの地球に来た理由は覚えているな？」

『……陸を調べに来たんだろ』

真意を悟つたらしいゼロが緊張感をもって返す。

「ああ、タロウからの依頼だな。……そしてその結果が出た」

淡々と語るが、その一言一言は重い。

「正直伝えるかどうか迷ったが……やはりお前達は知っておくべきだと判断した」

明らかに変わった空気感にぐつと息を飲む。

少なからず良い知らせではない。そんな予感を秘めたヒカリの眼は、憐憫を含んで陸に向けられ――、

「……陸、君は――」

百四十話 見抜け真実

「次こそゆつくり話したいもんだねえ」

「だからそんなんじゃないずらー!」

近所迷惑になるような家が周辺にないのをいいことに大声を飛ばしながら部屋の戸を閉める。自分の祖母ながら誤解もいいところだろう。

花丸が前にも陸を家に連れてきたと言い、あろうことか恋仲と勘違いするなど……、

「ない……絶対じゃないずら……!」

どうしてか火照る身体を必死に冷ましつつ机に向かう。

そして祖母が口にした言葉を思い出しつつ太平風土記を手を取った。

「……なんであんなこと……!」

小さく呟いて巻子を解く。

どうして、祖母は前にも陸と会ったことがあるような、しかも彼と花丸が親しい中で会ったかのような口ぶりで話すのか。

当然信じ難い話だが、あの時陸に触れた際に感じた熱のせいか、何故かそれを信じた
いと思っっている自分もいて。

そうして風土記を流し見していく中である記述が意識を縫い留めた。

地泣きて零れし時、眠りたるものだけ、禍古獣目覚めん

禍古獣。三日月の角で天ヲ穿ち、地ヲ裂き、山ヲ崩さん

天より出でし鈍色の巨人。此れを封印す

図書室で睨めっこしていた文献とはまた別の巻。禍古獣と記された怪獣と銀色の巨
人が対峙している場面を描いたものだ。

そして何故か、読み解いたはずのない内容や事の顛末を、自分は知っている。

「……………これ…」

ひらりと、開き切ったそれから一枚の紙切れが舞い落ちる。

確かに自分の筆跡で書かれたその内容は、拙くはあるがこの文献の訳文。つまり花丸
自身がこれを読み解いた他ならぬ証拠だった。

「いやいや……………あり得ないぞら……………」

もしかして誤っているのは自分の記憶なのか。などと頭に浮かんだ珍妙な妄想を振

り払う。

だが、いざこうして物証を目の当たりにしてしまうと否定しきれなくなるのが自分の性だ。

「……」

祖母曰く、以前花丸が陸を連れてきたのは偶然見つけた太平風土記を解読するため。そして実際、それを仄めかすような訳文も見つかった。

——まるで、この巻物に書いてある伝説を紐解くぞら！

遠く、朧げな声が頭の中で反響する。自分の声だ。

悶々と理性と感情がせめぎ合う。そんな夜だった。

寝耳に水、足元から雉が立つ、青天の霹靂。これに当てはまる言葉を探すとすれば何なのか。

少なくとも、地球の諺程度で表せるようなスケールのものではないことに間違いはないのだろう。

「…で、どうした藪から棒に」

「……確かめたいことがあるぞら」

乱雑に回る思考を一度振り払い、呼び出してきた花丸と言葉を交わす。

自分でも少し、自分自身の在り様が怖く思えた。妙に平静でいる自分が、あの事実を知った直後に迷いなく応じた自分が。

理解が追い付いていないのか、それとも心のどこかで受け入れられていないのか。どちらにせ自分でも意外なくらい落ち着いている。

「これ、何か分かるぞら？」

自分のことと彼女達のこと。その優先度の違いがそうさせたのか、とにかく来てしまった以上は勘づかれない為にも向き合う必要がある。

広げられた巻物に描かれた、三日月の角を持つ獣と全身を光で覆われた人型の影。

それは以前、彼女と共に解読をした文献であるということは見間違はずもなかった。

「……マガゴモラか？」

「…やっぱり、知ってるんだ」

すぐに答えた陸に、信じられなさそうな反面、どこか腑に落ちた様子でいる花丸。

「おらもこれを知ってて、その証拠……みたいなものも残ってるのに、読み解いた記憶がない。まるでおらの記憶だけ抜け落ちてるみたい……」

続けて花丸が見せてきた紙切れが確かな証拠として過去を語る。

呼び起こされるのは、四苦八苦しながらも共に解読を続けたあの日だった。

「ばあちゃんが言ってた。前にこれを解読してたって、二人で」

確かに陸は花丸に連れられ彼女の家で太平風土記を解読しようとしていた。

その際に少しだが顔を合わせた花丸の祖母が陸のことを覚えていたのは、恐らくは月と同じパターンだろう。

そして花丸も今、それと似たような状態にあるということ。

「……だから、確かめたい。何が本当なのか」

訴えかけるような花丸の眼に、何かが沸き上がってくるような感覚がする。

感情や記憶に干渉を受けながらも、それを関係なしに自分を信じようとしてくれるこの眼。月の時にも感じたこの感覚。

そしてこれを感じたのは一度や二度じゃない。もつと、ずっと前から傍にあった。

「……やっぱりおかしいのかね、俺……」

何故自分の秘密を、あの事実を受け入れられたのかを理解し、自虐気味に笑う。

例え自分が何者であろうと、それは自分の恐れることには直結しない。それだけの話。

「どうかしたずら……?」

「…いや、何でもない」

改めて花丸を顔を合わせた後、一步を踏み出した。

自分が、自分自身であるための。

この感覚を自分は何度も感じたことがあるはずだ。それもこの人の傍で。

いつからだろうと記憶と辿っても何も見つからないし、手応えもない。でもこれは確かに前から自分の胸の中にあつたと自信を持って言える。

最初からじゃない。少しづつ、少しづつ感じる機会は増えて、気付いたらそれが当たり前になっていったような、そんな感じ。

自分で言うのもあれだがそこまであつさりと心を許す性格ではないと思っっている。それが今の今まで憎しみの対象だった相手とくれば猶更だ。

けど、確かに自分は今それをこの人に感じている。抑え込まれていたそれが蘇るかのよう。

でもそれ以上にこの気持ち、そしてあの時この人の背中越しに感じた温かさが本物なのかを確かめたい。

「……………()ずらう？」

「らしいぞ。俺も後でオウガの奴に聞いたから詳しくは知らんけど」

辺りを木々に囲まれた暗い木陰にポツンと碑石のようなものが佇んでいる。

黒曜石を思わせるような深い黒は瞳のようにも見え、不思議とこちらを覗いているような錯覚を感じた。

「……………」

無言でその碑石に触れる。ひやりとした感覚が手のひらから広がってゆく。

だがそれだけ。特に目立った変化はなく、ただ碑石の表面が生温くなつてゆくばかり。

「……………ま、そら都合よく起きてくれる訳ないよな。空気は読んで欲しかったけど」

特に驚く様子もなくぼそりと陸が呟く。

さも自然体と言ったような口調に慌てていたり戸惑っている感じはなく、自分が信用されるか否かの問題だというのにその態度には全く焦りはなかった。

「…証明できなくていいの？」

「お前にや悪いけどハナから期待してた訳じゃなかったしな。事実何も起きなかったんだし騒いだところでどうしようもないだろ」

あまりの緊張感のなさに自然体を通り越してもはや真面目に取り組んでいないのかとすら思う。

「……なんでそんな落ち着いていられるずら？ これじゃあ……」

「期待裏切っちゃまったのは謝るよ。けど、こうなつた以上は仕方ないだろ」

「そうじゃないずら…… だってこれじゃ、信じるにも理由が……」

ここで諦めては何も分からないまま。

それでは何を信じればいいのかも分からないし、この感情を確かめることもできなくなる。

この何故だかもつと前から抱いていたような感情、これが一体、何なのか——、
「…俺的にや誰かを信じるのに理由とか、別に要らないんでね。自分が信じたいと思つてりやそれでいいんだよ。…まあお前がどう思うかは別だけど」

なおもラフに、かつ迷いない返答に一人の親友の顔が浮かんだ。

彼と彼女ではまず根本的に立ち位置が違うのは理解している。けど、ある一点においてはその根底は同じなのではないだろうか。

そもそも自分はどうして、陸を信じるための理由を探していたのか。

元はと言えば全て、自分が陸を信じたいと思ったからだっただじやないか。

それはきつと、結論を出すのと変わらないはず。

「信じる……」

理解はしていたんだ。ただ、どこかで拒み続けていただけで。

もう認めたっていいんじゃないだろうか。これを何と呼ぶかだって知っているはずだ。

「……まるは……」

ふわりと、光が舞った。

花丸の感情に呼応したかのようにぼんやりと灯るそれは一つではなく、周囲の、それもあのいつの間にか咲いていた黒い花から上がっている。

「っ……!?! マズ……!」

一転して目の色を変えた陸の声も姿が途端に遠くなる。

代わりに浮かんだのは、太平風土記によって抱いたあのイメージ。赤黒い炎の中で揺らめく、決して届かない影。

「あ……」

擦れた声が出た。

これが現実なのかどうかは分からない。ただ、今度のそれは離れていくのではなく、まるで自分までもどこかに連れていくのかのように近づいてくることは分かる。

「ひっ……!!？」

手と思しき黒が伸びてくる。

それに触れられたら自分はどうなってしまうのか。こんな時にばかりよく働く脳が悪い方向へと想像を傾けると同時に酷く恐怖が込み上がってきた。

——…黒くて、つり上がった赤い目をした巨人さんだったずら

「っ………!」

その手が迫るにつれ、頭の中で瞬くビジョンと声が明瞭になっていく。

流水の如く流れていく記憶の中でハッキリと映ったのは、確かに今自分の隣にある顔
で——、

「…違う………!」

そうだ。怖かったんだ。

太平風土記のあの文献を見た時、どうしてか自分にとって大切なあの人と重なって、自分の手の届かない場所に行つてしまふそうで。

きっと今日の前にあるのは、その恐怖が見せているものなんだ。

けど、違う。

自分の☒好き☒なあの人は——こんなじゃない。

「違うぞらッツ!!」

刹那に再び舞つた光。またしても花丸の声に応えたかのように、眩く発光した大地から光が溢れていた。

「おいゼロ……これ……」

『マガゴモラが……?』

槍を手にとつた迎撃体制のまま固まつた陸の眼前で光に触れた影が消滅してゆく。

まるで悪夢を振り払うように舞い踊るその光は、やがて長い夢すらも覚ますように溶け込んでいった花丸の中で弾けた。

「花丸……?」

光が自分の中で満ちていくような感覚の中、声が聞こえたような気がした。

人のものじゃない。けど確かに花丸へ何かを伝えるかのような、そんな声が。

「……ありがとう」

あの怪獣さんがどうしてこんなことをしてくれたのか、はっきりとは分からない。
い。

けれど自分にとって大切なものを取り戻させてくれたことは確かだから。自分もまた、そう伝えた。

そしてもう一人、伝えなければならない人が目の前にいる。

「……先輩」

実質的な時間はそう長くは経っていないはずなのに、彼をそうやって呼ぶのに懐かしさすら覚える。

けどそれは次の瞬間には別な感情へと変換され、駆り立てられるままにくしゃくしゃになった顔を陸の胸に押し付けた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……！」

「お、おい……？」

泣きじやくる花丸の声と吐息が胸元を撫でる。

擦ったさや妙な感覚が沸き上がってくる以上に驚きが勝った。この様子からするに、まさか——、

『記憶が戻ったのか……?』

代弁したゼロの言葉に花丸が頻りに頷く。

「…まる、あんな大切なこと忘れて……先輩に酷いこと……」

先程の光……マガゴモラの成したことなのか。紛れもなく今の彼女は陸の知る花丸だ。

まだ理解の追い付いていない部分もあるが、少なからずマガゴモラの光がメージラグの素粒子を退けたことに変わりはない。

恩返しとでもいふべきなのか、どうであれマガゴモラが彼女の記憶を呼び戻す最後の引き金となつたらしい。

「…泣くなつて、別に気にしちやいねーよ」

「けど……」

「気にしてねーつってんだろ。あんましつこいとキレるぞ……それより」

今までやっていたようにそつと手を置いた彼女の頭を撫で、開けた森の外に映る一点を見る。

マガゴモラの光に退けられたメーヅラグの粒子が宙を舞い、やがて集束していったそれは空を覆わんばかりに肥大化。

『——ッ!!』

鬼を思わせる巨大な二本角と黒い体毛を持つ獣人が咆哮を上げる。大気を揺らすほどの轟きは、奴が幻影ではなく質量を持った実体であることを物語った。

「ちよつと片付けてくる。話はあとな」

「——その必要はないよ」

地面を踏む音と共に薄ら寒い声が舞い降りた。

もはや驚きもしない。メーヅラグの性質上、首謀がコイツであることは分かっていたから。

「……トレギア……」

だが警戒すべき相手であることに変わりはない。引き離れた花丸を背後に隠す。

「まずはおめでとうと言っておこうかな。どうだい、真実……自分の正体を知った気分は？」

「……正体……?」

凍るような緊迫感の中、嫌味つたらしく首を傾けたトレギアに反応し顔を見上げてきた花丸を横目に短く舌を打った。

『…知ってやがったのか』

「私だつて最初は驚いたものさ。けれどそれ以上に興味深かつた。その事実を知つた上で、君がどのような選択を取るのか」

出来れば隠しておきたかつたという陸の心持ちを瓦解させるように、あえて遠回しに語るトレギアの論調が花丸をも絡めとる。

「所詮君は用意された舞台の上でヒーローを演じたただだけの造られた英雄だ。君の言う大切なものも、今の君という段階に至るための過程に過ぎなかつた」

深淵のように暗いその瞳は何を映しているのか、陸やヒカリが知り得た以上の何かをコイツは知っている。

それが何の意味を成すのか、それを知り得るのもまた、この場においてはコイツだけだ。

「……それでもまだ君は守ると言うのかな？ 仲間などと言う、つまらないものを」
内に秘めた虚無を伺わせる、奴の象徴でもある絡みつくような問い。

張り付いた笑みは相も変わらず狂気を醸す。真意こそ見せないが、悪意は隠す気もないらしい。

「なんてね。今更君がこんな程度で答えを変えないのは分かつているさ。だから一つ、楽しませてくれた礼も兼ねて忠告を……と思つたんだよ」

答える前に態度を一変。身構える陸を制止し、上滑りな態度で距離を詰めたトレギアの顔が視界いっぱいになる。

「君が選ぼうとしている未来は君自身の旅を終わらせる。……よく、胸に刻んでおきたまえ」

瞬刻、トレギアの顔に黒い仮面が覆いかぶさり、赤い煌めきと共に溢れた闇が膨れあがってゆく。

そして槍のように点へと突き上がった黒雷が猛る獣人——モルヴァイアの胴を貫き、瞬く間に爆散させた。

『……こちらの姿でお会いするのは初めてかな？ フフ……』

自ら生み出した怪獣を屠って見せたその黒い仮面の巨人は、トレギアの真の姿か。

拘束具に遮られながらも象徴的な胸の青い光が目を引く。所々に差異こそあれど、初めて、奴もまたウルトラマンであることを思い知らされた。

『前にも言った通り、一応の目的は果たしたのでね。名残惜しいが君達とはお別れだ。……その前に』

異形の指先が音を鳴らした。

生じた波紋はやがて空間に溶け、それを覆っていた何かと共に、弾けた。

『今ブルトンの結界を解除したよ。これで君は、君自身が歪めた彼女の元へ行ける』

……もつとも、良い結果が得られる保証はしないがね」

広げられた腕が魔方阵を描き、トレギア自身をその奥へと誘う。

『よき、旅の終わりを』

悪魔の笑いが遠ざかってゆく。

魔方阵の消えた後に奴の姿はなく、ただ一つ残ったトレギアの声が風に吹かれ、翳むように霧散していった。

「……ゼロ」

「待って……！」

ゼロアイを掴んだその手を花丸が必死の形相で掴み制止する。

その表情に映る不安や恐怖は彼女をひたすらに謝らせ続けてたそれは違い、もつと大きく、明瞭なものにも思えた。

「今のどういうことすら……？ 正体とかなんだとかつて……」

奴が素直に去る訳もなく、残した種は考えうる限り最も厄介な人物に宿った。

花丸は唯一太平風土記の内容を知っている。加え彼女の洞察力や慧眼、知られたくない真実に辿り着いてしまうのも時間の問題だろう。

「ちやんと答えてよ……！ 黙ってちや納得できないぞら！」

既にほんのりと朱に泣き腫らした瞳がまた潤んだ。

そしてぎゅつと、陸の腕を掴むその手に力が籠る。

「……先輩、いなくなったりしないよね……？」

抱いていた煩慮を吐露するようにか細い声が震える。

「……ごめん。今はまだ話せないし、どうなるのかもわかんねえ」

対照的に、小さくも明確な口調で答えた。

正直陸にもこの先の未来がどうなるかはわからない。トレギアの示唆した未来に進むのか、花丸が憂う未来に進むのか、まだ、何も。

けど、ただ一つはつきりと言えるのは――、

「でもさ、それが怖くて逃げたら意味がないんだよ」

ゆつくりと解いた花丸の手を握り、自虐めいた笑みを見せる。

「……最後まで、俺でいるために」

「せんぱ――」

何か言いかけた花丸の前で閃光が迸り、陸から変身した巨人が大地を揺らす。

瞬く間に突風が吹き荒び、ウルトラマンゼロは宇宙の一点へと飛翔した。

百四十一話 者達の導

上下の間隔すらない宇宙空間を猛烈な速度で飛翔する。

目指すはベリアルとスライの待つ敵の本拠地。全ては千歌を救うために。

「……………なんもないな」

既に奴等の母船を肉眼で捉えているが、ここに至るまでも、ここから先も、いわゆる警備兵のようなものは一切存在しない。

一時的なものであるにしろ拠点として構えていることは間違いないのだし、レギオノイドくらいは配備されているものと思っていたが……………これではアリの子一匹どころか宇宙怪獣でも通り放題だろう。

『誘つてる……………まあ、そんなところだろうな』

飛んで火にいる夏の虫、今の自分達を言い表すならばこの言葉だろうか。

『奴等の狙いはお前だ。一瞬たりとも気は抜くんじゃねーぞ』

「……………わかつてるよ」

一つ嘘をついた。いざとなったら……………ゼロに悟られぬようそう考える。

無論そうならないよう全力は尽くす。けれどもし、どうしようもならないと判断したなら、その時は迷わない。

——君が選ぼうとしている未来は君自身の旅を終わらせる。……よく、胸に刻んでおきたまえ

ある意味、トレギアの言うことは的を射ていたのかもしれない。

この方法なら、確実に千歌を救える。けれど代償としてゼロとの、友との約束を破ることを意味する。

もしそうすればきつと、仙道陸としての未来を失うことになるだろうから。

「ルビィちゃん！ ルビィちゃん!!」

連絡という手段すら忘れ、その足で駆け込んだ親友の家の戸を何度も叩く。

伝えてどうするのかも分からない。けど伝えなければいけないと心が叫ぶ。決して忘れてはいけないあの人達のことを。

「花丸ちゃん……？ どうしたの……」

「ルビイちゃんツ！」

恐る恐る顔を覗かせた親友の両肩を掴んでは迫った。

逼迫した花丸の表情を見て何かを悟ったのか、ルビイも気圧されながらも面持ちを変え
える。

「思い出さなきやダメずら……ルビイちゃんも、皆も、忘れちゃだめ……！」

普段ならもつと上手く言葉が出てくるはずなのに、ごちゃごちゃな感情がその邪魔を
する。

気持ちだけが先走る言葉は支離滅裂に紡がれ、もはや何の意図も伝わりはしなかつ
た。

「……何のこと？　なんかおかしいよ、花丸ちゃん」

怪訝そうに、かつ不安そうにルビイが顔を覗き込んでくる。

違う。こうじゃないんだ。こんなことをしに来たんじゃ——、

「ルビイと……花丸さん？　騒がしいですわよ。まだ昼間とは言え玄関先で大声を出す
のは非常識ですわ」

何も進まないまま、また一人……いや二人か。

顔を出してきたダイヤに続き、足跡が近づいてくる。

「ちよつとダイヤー？　まだ話は終わってないんだけどー？」

おちやらかした態度でありつつ、不満げに口を尖らせて顔を見せたのは鞠莉。この人もまたルビィやダイヤと同じく、元の世界ではA q u o r sだった人だ。

ルビィ一人でもこの様なのに、増してこの二人。余計に生じた焦りが頭を真つ白にする。

「聞く必要などありませんわ。急に訪ねてきて何を言い出すのかと思えば、わたくし達がウルトラマンと一緒にいたなどと……」

「え……?」

白の中に落ちた更なる白。けどそれは前のものとは逆の意味を持っていた。

こんがらがっていた思考が急速に纏まってゆき、二人のやり取りの裏を探る。

「あら、花丸じゃない。Good Afternoon」

そして閃くように悟った。この人も自分と同じなんだ。

「鞠莉……ちゃん……?」

「……! 花丸、あなた……!」

それはすぐに鞠莉も察したようで、花丸の反応を見ては顔色を変える。

驚き……そしてそれ以上に喜びが伺いとれた。

「戻った……いや思い出したのね!」

「やっぱり鞠莉ちゃんも……!」

勢いよく抱擁してきた鞠莉の腕の中で覚えた安心感が全身を包んだ。

どうして、などとは聞かなかつた。もはや問う必要もないから。

「…鞠莉さん、花丸さんとお知り合いなのですか？」

「だからそうだつて何度も言つてるでシヨ―？」

ダイヤとルビイの怪訝な視線が向けられる。今はこれが当たり前の状態なんだ。

本来の自分達で再会できたことを喜ぶのはまだ早い。こんなことではまた全員で歌うことなど叶いやしないから。

これまででも、今もまた身を挺して戦つてる人がいる。それなのに何もしないなんてで
きる訳がない。

「…あのねルビイちゃん。まるスクールアイドルやつてるんだよ」

「花丸ちゃんが……？」

「うん……ルビイちゃんも一緒に」

先程までとは正反対に落ち着いた口調で、柔らかく笑う。

「待つてください。そもそも浦女にスクールアイドルは……！」

「あるよ……A q o u r s が。二人とも知つてるはずだよ」

鞠莉も同じ考えでいるのは言葉を交わさなくても分かつた。

特別な力なんてものは自分達にはない。だったら正直な想いをぶつけるだけだ。

「…あの日ルビイちゃんが背中を押してくれて、まる嬉しかった。ルビイちゃんが踏み出す勇気をくれたんだよ」

でも今のルビイはあの時と同じ。まだ自分を抑え込んだままなんだ。

今度は自分が背中を押す番だ。

「……スクールアイドル、好きなんですよ？ だったら、もつと自分の気持ちに正直にならないとダメだよ」

「そーよルビイ！」

だが幸か不幸か、このタイミングで神は粋な客を超越す。

「……理亞ちゃん…!?!」

淡い紫が上下する肩と共に揺れている。

怯えた視線を向けるルビイに対する瞳は力強く、曲げぬと誓った信念のようなものを感じた。

「花丸の言う通りよ。アンタスクールアイドル大好きなんじゃないの!?!」

記憶の戻っている自分や鞠莉の反面、黒澤姉妹の反応は喜ばしいものではない。

ルビイの話していた頻繁に訪ねてくる見知らぬ女の子……今思えば理亞ことだったのだろう。

きつと彼女も、ルビイを元に戻したい一心で――、

「また来たのですか…？ いい加減にしないと出すところに……」

「Wait. ダイヤ。大丈夫よ」

「…その人も鞠莉さん達の知り合いなのですか？」

「Yes…てか、本当はダイヤ達も知ってるはずなんだけどね……」

鞠莉は何か知っていたのか、特に理亜に対する驚きも見せずにダイヤを宥める。

そして何か二人に対する説明を求めるように花丸へと目配せ。

「……まる達の友達すら」

「…アンタも元に戻ってたのね」

険しい表情を少しだけ緩ませた理亜の顔。

だがそれはすぐに元へと戻り、再びルビィへと向けられる。

「だったら話は早いわ。花丸……友達の言うことなら信じられるでしょ」

自虐気味に理亜が言葉をひりだす。

ルビィの話だと何度も訪ねてはその度に突っ返されていたそうなの。多少卑屈になっ

てしまうのも分からなくはない。

「…とにかく、ちゃんと思い出してよ」

「すぐに信じてとは言わないけど……話は聞いてあげて欲しいすら」

どんな経緯で理亜がここににいるのかは分からないが、想いは同じであることに間違い

はない。

ルビィに救われた自分達だからこそ、彼女にはそのことを忘れてほしくないんだ。

「そ、そんなこと言われても……」

だが当の本人は未だ理亞に対する警戒心が拭えぬようで、こちらの話に耳を傾けこそしているがそれ以上には至っていない。

「しっかりとしないよルビィ！ アンタ達言ったじゃない……私達に分まで歌ってくるって、ラブライブで優勝するって！」

「ぴぎ……だって、ルビィそんなこと言っていない……」

焦りや戸惑い、孤独感。傍目に見るだけでは計り知れない感情に駆られるように思える。

悲痛な訴えも届かず、更に冷静さを欠いた理亞はルビィの肩を掴んではなおも迫った。

「ふざけないで！ 忘れたなんて言わせない……アンタは——」

「ふざけてないもん！ そっちだってさつきから言ってること全然分かんないし……ルビィに押し付けけないでよ！」

直後、耐え兼ねたのかはち切れたように叫んだルビィが理亞の手を払う。

普段の彼女ならまず見せない剣幕に流石の理亞も怯んだか……と思つたが、力なく肩

を落とした彼女の様子はどうにも思ったそれとは違った。

「……………そつか…、結局、ルビイもそういうんだ……………」

「え……………」

先程までの勢いはどこへやら。一変して表情に差す影を濃くした理亜がか細く声を漏らす。

そしてくるり。あれほど必死になって訴え続けていたルビイに背を向けると、そのままとぼとぼと一人歩き去って行ってしまふ。

「…あ……………れ……………?」

追うに追えないまま少し経ったのち、困惑した様子でルビイは自身の頬を伝う涙を拭った。

「…大丈夫ですかルビイ? 貴方があんなに声を荒げるのだからそれほど……………」

「違うよお姉ちゃん……………けどなんか、なんでか分かんないのに悲しくて……………」

口にした通り理由は分からない。けどどうしてか胸が痛い。

知らないはずのあの子の訴えがどうにも苦しくて、あの子の涙を見ると無性に悲しくて。

彼女や花丸が言ったように、何か零れてはいけない大事なものが欠けてしまっている気がして――、

「……………!」

「え…、ルビイ!？」

追いかけなきや。

稲妻のように走った感覚がそう告げ、ルビイは既に背中も見えなくなつた彼女を探し駆けだした。

『アエエエイヤッツ!!』

纏つた白銀の鎧から伸びる刀身にエネルギーを集中させ、目視したそれに突撃。

直後の閃光と爆音の中に飛び込むと、崩れ落ちてゆく宇宙船の中に降り立った。

『全く、手荒しいのは相変わらずですか……』

爆炎が揺らめくその奥から声が飛ぶ。きつとスライだ。

プレスへと戻るイージスを忌々しく見下ろすそれらに対し、ゼロ達も最大級の敵意を

持つて視線を返した。

『…よお、遅かったじゃねえか』

巨大な翼を伴った影が動いた。

つり上がった深紅の瞳が闇の中で煌めき、やがてその全身を露わとする。

『まさか、今の今まで怖じ気づいてた訳じゃねえよな？』

『安心しやがれ。少なくともテメーを地獄に叩き落とすまでは逃げやしねえよ』

キメラベロス——ベリアルが笑う。

走る緊張に震える身体を鞭打ちつつ眼前の悪魔、その中に囚われる少女の事を想った。

奴の身体に取り込まれてからかなり時間が経っている……もはや一刻すらも惜しい。

『……来い』

そんな陸の心境を見透かしたように動かされたベリアルの指先が、直後に迫った戦いを煽った。

数拍の間の後、爆発寸前までに高まった緊張の刹那——両者の闘志が激突した。

百四十二話 フラグメントメモリー

「あつ……鞠莉さん！」

「……聖良」

理亞を追っていったルビイを探していれば、またも意外な人物と出会う。最も、理亞がいた時点で姉の方もいるとは薄々思ってはいたが。

「今理亞とルビイさんが走っていくのを見たのですが、何かあつたんですか？」

「まあ、ちよつとあつてね。実は——」

理亞の時同様、鞠莉と聖良の間に驚きは伺えない。きつと花丸が戻る前から既にあの三人は記憶を取り戻し合流していたのだろう。

…と、花丸はすぐに理解したが、この場において唯一記憶を取り戻していないダイヤだけは怪訝かつ不安気に妹の姿を探していた。

「…そうでしたか。かなり躍起になっていたので、宥めてはいたのですか……」

「この状況じゃ仕方ないし、理亞ちゃんの気持ちも分かるよ？ とりあえず、二人がどこ

に行つたか分かる？ 聖良も理亞を探してたんでしょ？」

「待つてください！ まずその方は一体……」

「今は気にしてる場合じゃないでしょ？ ほら、早く二人を追うよ」

そう言いつつ鞠莉は笑っていた。まるでこの後起こることが分かっているかのよう
に。

まだ少し混乱している様子のダイヤだったが、自信ありげな幼馴染の姿を見ると従う
ようにその後が続いた。

「お久しぶりです……と言っても一月ほどですが」

「……すみません。失礼ですがどこかで……」

「……まあ、覚えていらつしやらなくても無理はないですよね」

花丸達を導きながら、ダイヤに軽く会釈する聖良。

記憶の改変を受けたままの彼女は覚えていないのだが、聖良はそれに傷つく様子もな
く、何か論ずるように続けた。

「……けどせめて、あの日の二人の姿だけは思い出してあげてください。妹の成長を見
届けた姉として」

『ハアアアツ!!』

蒼雷の光剣の描く軌跡が幾度となく巨獣を掠める。

当たらない訳ではないが捉えきれない。キメラペロスの鉄板のような強度を誇る皮膚を持つてすれば剣が掠る程度痒くもないのだろう。

『軽い』

『ぐあつ……!』

水平に滑らせた一閃は軽々と受け止められ、逆に重く巨大な拳を打ち込まれる。

いくらスピードで上回っていようと決定力に欠けてしまえば奴は倒せない。万全のキメラペロスを相手取るにはグランナイトでは不利だろう。

『陸!』

「分かってるよ!」

心の内から滾らせた熱を全身で増幅。そのまま爆炎を纏ってキメラペロスを殴りつける。

『ほう…ヴィラニアスをやった力か』

クラッシュヤーブレイブの力を試すように、そして楽しむように、低く笑った奴から殺到する赤黒い波状光線。

それらを拳の一振りのもとに粉碎して見せると、ゼロは更に重みと熱量を増した一撃を叩き込んだ。

『へエエエラッ！』

『フンッ！』

横から迫る剛腕を片腕を立ててガード。切り返しにドロップキックを見舞うも、身じろぎ程度で堪えたキメラベロスに足を掴まれそのまま放られる。

『ガルネイトバスタアアアアッ！！』

素早くとつた受け身の後に放った高熱光線が直撃し、爆音と共に低く呻き声が零れる。

即座にグランナイトへと再変身すると一気に肉薄。音速で振り抜いた一刀がキメラベロスの胴を斬り上げた。

『オオオオッ！』

『パーティクルナミラクル』

大木の如し腕とそこから伸びる巨大な爪がゼロを引き裂かんと迫るが、寸でで身体を光の粒子へと変えそれらに空を切らせる。

『リキデイト——』

そのまま奴の背後で実体化し、十字に組んだ腕から至近距離射撃を試みるも——、
『見えていないとでも思ったか？』

『なっ——がああっ……!?!』

待ち構えていたかのように両腕の倍は太く剛力な尻尾に打ち上げられ宙を舞う。

更に翼を広げたキメラベロスはその体躯に似合わぬ速度で飛翔してはゼロの上を取り、今度は全体重を掛けたテールハンマーで蒼き身体を叩き落とす。

『力が…増して……!?!』

『当然だろう。俺はこの娘を通してノアの力を吸収し続けている……力の差は歴然だ』

どの程度ネクサスの力が奪われているかは懸念材料ではあったが、正直、想定は上回っていたと言わざるを得ない。

だが完全に吸収し切れていないということはまだ千歌もネクサスも消えてはいないということだ。

『はっ…、思いがんな。俺に勝った気になるなんざ……二万年早いぜ!』

《ニュージェネレーションカプセル!》

《α! β!》

「俺に限界はねえ！」

《ウルトラマンゼロビヨンド!》

双剣を構えた巨人の放つ閃光が吹き荒れた。

その眩さも収まらん前にゼロはキメラペロスの懐に潜り込み、両刃を重ねて振り抜く。

『ツインギガブレイク!!』

『ぐ……おとおお……ッ!』

直後、音のない宇宙に轟々と衝撃音が響く。

光を纏い肥大化した大剣による一撃はキメラペロスのみならず船体をも飲み込み、ダークネスファイブの拠点であった宇宙船は完全に崩壊してしまう。

『陛下の中には高海千歌がいるというのに……容赦ないものですね』

難なく船体の崩壊から逃れて見せたスライの声が真上から飛ぶ。

『……あんま……んな事あ言いたかねーけどな』

スライの方は向かず、静かに宇宙空間に静止したゼロ。

刹那に上横真下の全方向に巡らせた警戒網が察知した影へゼロスラッガーを投擲す

る。

『この程度でどうにかなるような奴なら、この俺が何度も手を焼くはずねえだろうが』
言い放つと同時に四つの刃を悉く弾かれ、雄々しく広げられた翼が肩を掠めた。

急旋回の後に進んでくる奴を掴み掛かる形で受け止めると、視線ですらも鎬を削るように顔を突き合わせる。

『随分と高く買ってくれてるもんじゃねーかゼロ。嬉しいぜ』

『認めたかねーがなッ！』

深く刻まれた因果は何度否定しても離れないとでもいうように幾度となく両者が衝突し、その度に空間が振動した。

『そうか……なら嫌でも認めさせてやる』

紅い双眸が瞬き、高まってゆくそのエネルギー量を示すようにキメラベロス周辺で熱が発生する。

コイツはヤバイ。本能的にそう察知し、一気に距離を開けたゼロは自身を囲うように次々と球体を生成する。

『バルキーコーラス！』

やがて八つとなった光球からレーザーの如く光線を一齐発射。

だがまたもキメラベロスはその全てを回避して見せ、両腕に赤黒い雷を集中させつつ

ゼロへと迫った。

『なっ……!?』

狭い上に科学的に重力が生成されていた舟艇の中とは違い宇宙空間には奴の枷となるものがない。

つまり今この場合は、キメラペロスの飛翔能力と機動性が最大限生かせてしまう場所と
いうことに他ならず――、

「『がっ……あああああああ……!!』」

十字に組まれた両腕が胸元に叩きつけられ、ゼロ距離で放出された光線がその身体を
押し流した。

あの子の悲しそうな顔を見ると、猛烈に胸が痛んだ。

それが何故か自分自身までも否定になりそう。自分の大好きなものさえも否定
しているようで。

この感情の正体は何なのか、どこから生まれてきているのか、それを確かめないといけない。

「……………ええつと……………理亞……………ちゃん…?」

海辺の堤防で座り込んでいた理亞を見つけ、親友が呼んでいた名前をおずおずと口にする。

すると彼女は少し期待するかのような目で振り返ったが、すぐ何かを理解したようにまた元の方を向いてしまう。

「…何しに来たの」

海風に乗り、小さな声が耳を撫でる。

抱えていたものを投げ出したような、どこか自棄的な含みを感じた。

「……………お話、聞きたくて」

必死に言葉を選んだ結果、口癖のようだった謝罪でなく正直な想いを口にする。

「スクールアイドル、楽しい?」

あれほど抱えていた緊張や恐怖はもうなかった。

むしろ彼女のことを知りたくて、彼女の言う自分がのめり込んでいたものがどんな景色を見せてくれるのか、興味があった。

「……………楽しくなかったらやってないわよ」

少し表情を緩ませて理亞が答えた。

「ずっと憧れてたから、そんなスクールアイドルを姉さまと一緒に出来るのがうれしくて仕方なかった」

そこまで言って再び表情が陰る。次に彼女にとって辛い事実が並べられるのは想像に難くなかった。

「……でも、私がそれを壊した」

ずきりと、知り得ないはずの事象を口にした理亞の姿に胸が痛んだ。

想像できるというか、自分は知っているのか、その時の彼女の苦悩や葛藤が克明に浮かぶ。

「……ごめんね。嫌なこと思い出させて」

「なんでアンタが謝ってるのよ。これは私が向き合わないといけないことなんだから……そもそも、向き合う勇気をくれたのはアンタじゃない」

ハッキリとそう口にした理亞にどこかこそばゆくなる。何の取り柄もないように思えていたが、少なくとも彼女の力にはなれていたらしい。と言ってもその記憶はないのだが。

「ルビィのおかげで、また新しく踏み出せたんだもん……感謝してる」

照れるように語尾を萎ませる理亞。

けれど三度表情は沈む。今度その原因を作っているのは自分なのだろう。

「けどアンタは覚えてない……ううん、そもそもあの日のこともなかったことに……」

それを表すように心底悔しそうな眩きが二人の間に滲む。また訪れた沈黙が酷く苦しかった。

「……ルビイ、どんなスクールアイドルだったの？」

もう理亜の言っていることが嘘か本当かなどはどうでもよかった。真偽など関係なしにその顔を見るのが辛い。

そしてそれ以上に、今の自分の知らない自分がどうであったのかを彼女の口から聞きたい。

「……どうもこうも、今のアンタそのものって感じだけど？ 気弱で、自信も無さげで。

正直、最初は舐めてるかと思ってた」

辛辣な評価に思わず苦笑い。先程の理亜の言葉からして、少しは懂れていたようなスクールアイドルに近づいている自分を想像していたのだが。

「そんな落ち込むことない。そう見えるだけで、ルビイは私よりずっと強い……立派なスクールアイドルだったよ」

励ます方法を探していたつもりが、何故か逆に励まされている。

でもどうしてか心地いい。褒められたからとかそういうのではなく、単純に今、理亜

とこうして言葉を交わしているのが。

「……姉さまに歌を届けられたのだって、ルビイが一緒だったからだもん」

「歌!? ルビイ理亞ちゃんと一緒に歌ったの!? すごい……聞かせて!」

もうすっかり目的も忘れて子犬のように目を輝かせた。それを見て釣られるように理亞も笑う。

「……もう、仕方ないんだから……」

照れつつも、また何かを期待するようにその曲を口ずさみ始める理亞。

そしてこれまでになく強く——心が震えた。

「……始まる時は、終わりのことなど——」

静かに歌いだす理亞。

いつか来る終わりを憂いつつも、それ以上に今この瞬間を楽しもうとする想いが伝わって……いや、呼び起こされると言うべきか。

——歌いませんか? 一緒に曲を! お姉ちゃんに送る曲を作って、この光の中で、もう一度!

自分の声……なのだろうか。

理亞の歌声に重なって聞こえるのは、その歌に込められた理亞の……ルビイの想い。

——……ルビイを……置いて行かないで……!

抑えきれなかった寂しさが。

—— わたくしの知らない所で、ルビイはこんなにも一生懸命考えて、自分の足で答えに辿り着いたんだって！

成長した自分に対する姉の喜びが。

全部、全部この曲に、この歌に込められている。

「——頑張るって決めたら」

「……絶対、負けないんだ」

理亞から歌を継ぐように、自然と口にしていた。

自分は……この歌を知っている。

「……ルビイ？」

姉がいなくなってしまうのが寂しくて、もう一緒に歌えなくなるのが嫌で。

けど、だからこそ成長した姿を見せて、もう一人でも大丈夫なんだと安心させたかった。

そんな想いで自分はこの曲を……理亞と一緒に作ったんだ。

「……理亞ちゃん」

ぎゅっと、理亞の手を取った。

どんな顔で、どんな言葉を言えばいいのか。正解は分からない。

だからまた伝えるんだ。自分の、正直な気持ちで。

「……ルビィ……」

遠目から見る妹の背中は大きかった。

もつと前に、もつと間近で、自分はその姿を見ている。そんな確信があった。

「…少し、寂しい気もしますね」

傍らで聖良が呟いた。

「あの日理亜がああ言ってくれたのが嬉しかった反面、やはり寂しさは拭えませんか」

「……そうですね」

静かに頷く。

不明瞭なことだらけだが、ただ一つはつきりと言えることがある。

「正直、まだわからないことの方が多いですし、信じ難いのも確かです。……けど」

雪の結晶のように煌めく聖夜の贈り物。これだけは確かなものだと言える。

「せめて妹のことくらいは信じたいですね……姉として」

「すーぐ全部信じさせてあげるわよ。スッポンのマリーとはわた——」

——ドオオオオオ……ン……！！

唐突に、脈絡もなく。

轟音と共に大地が揺れ、震源と思しき内浦の海から柱のような水飛沫が上がる。

「うわわあ……!?!」

「なんですの……?」

雨のように降り注ぐ海水に目を細めながらも見やった先で、深紅の翼が雄々しく広がった。

底に叩きつけられた後、急速に浮かび上がる感覚。そこでようやく水中にいることを把握する。

『がっ……あ……!』

水面上がると共に蘇る痛み。苦悶の声を漏らしながらも敵の姿を探すと、今自分が

どこにいるのかを理解した。

何の因果か、両親の命が奪われた内浦の海……光線によって地球にまで叩き落されたか。

「くっそ……!」

カラータイマーの点滅を確認した途端に脱力感が加速する。

どんなに鞭打とうとも力が入らず、静かに舞い降りてくるキメラベロスの影が更に大きく感じた。

『ノアの力も大分馴染んできた……そろそろ頃合いか』

『ぐああああっ……!』

振り上げられた鉤爪が横腹と共に余力を抉り取る。

気力だけで立ち上がるも既に風前の灯火。ゼロビヨンドの変身は解かれ、海の底を踏む足にもはや力はない。

『ちと弱つちいが、模造品にしては上出来だ。ここまで待った甲斐があった』

ゼロを抑え込むキメラベロスのカラータイマーの禍々しく光が灯る。

途端に生まれた更なる脱力感はその日と同じ。陸を吸収しようとするもの。

『やらせ……るかあッ!!』

絞り出したエメリウムスラッシュで辛くも拘束を振りほどくが、遂にエネルギーが底

をつき立つことすらもままならなくなる。

『受け入れる。お前はそうなるために生まれた運命……抗うことなど出来ん』

『んなモン、知ったことかよ……!』

だがそれでも抜いた剣を納めないゼ口達を見下ろし、呆れたように息を吐いた。

『…全く、せめてもの情けで隠してやってたが………知った方が諦めがつくか。なあ、

仙道陸』

猛攻の手を一度止め、尊大にベリアルは笑う。

消えた闘争心の代わりにその双眸が映すのは、途方もないような執念と狂気だった。

『ずっと待っていた。お前の中で俺の力が増幅するのを……俺の遺伝子□が目覚める

のを』

淡々と封じ込めていた蓋をこじ開ける悪魔が一拍の間を置き、やがてその瞬間を心待

ちにするかのように、告げた。

『お前は人間じゃない』

百四十三話 覚悟の宿命

「……自分の生まれをどう思ってるかって？」

そう遠くない過去の記憶が過る。

朝倉リク——ウルトラマンジード。崩れかけていた自分を救ってくれた、ウルトラの先輩の一人。

「まあ、そりゃあ、最初はだいぶ戸惑ったし、普通の人間に生まれたかったなって思うこともあったよ」

あの時彼が話してくれた胸の内。

こんな状況だからか、何気ない会話の中で交わした言葉の一つ一つが滲む。

「けどウルトラマンにならなかつたら見えなかつたものがあるし、出会えなかつた人達もいる。僕にとつてはそれがかげがえのない大切なものだから。だからもう、父さんの息子として生まれたことに、この道を選んだことに後悔はないよ。……まあ、まだたまに困ったりすることはあるけど」

この人は強い。その時も何も知らないながらにそう思ったものだが、今となっては改

めてそれを実感する。

自分はこの人のように強くあれるのか。

この運命を受け止めることが出来るのか……事実を告げられた時、深く問答した。

『……この星で言う十八年前か。俺はあのストルム星人に銘じて様々な星の生命体に俺の遺伝子を植え付けさせた。肉体を失った俺の依り代とするためにな』

語られる言葉が流れてゆく。

人間じゃない。証明されてしまったその事実だけが頭の中を反芻する。

『その内の一人がお前だ仙道陸。お前は自分を普通の地球人と思つて生きてきたようだが、実際は俺に利用されるためだけに生まれた命……本来なら誕生するはずもなかった存在だ』

仙道陸と言う存在には、ただそれだけの意味しかなかった。

何かを成すような無限の可能性も、輝かしいものへ歩みだす未来も、最初から自分は

持ち合わせてなどいなかった。

『……これを聞いてまだ俺を拒むか？ 抗ったところでその先の生に意味などない。お前と言う存在に意義を与えられるのは俺だけだ』

本当にベリアルにしか自分の存在する意味はないのか。

奴に利用される以外の選択肢は残されていないのか。

『さあ、俺の下へ来い。お前に与えられた唯一の価値を示せ』

そんな問答の肯定か、救いの手を差し伸べるようにベリアルが語り掛けてくる。

だったら、自分の返す答えは――、

「――知ってたよッ！」

『ッ……!?!』

闇を纏った拳が降り上げられ、油断しきっていたキメラベロスの首元を捉える。

従順ではなく抗うために奴の力を開放し、漆黒の巨人と成りてその前に立つ。

「んなモン、テメエに教えられるまでもなくわかってたんだよ……とうに受け入れてんだよそんな運命ッ！」

――君は人間じゃないかもしれない。

あの夜、ヒカリにそう告げられた。

あくまでも可能性の話だ。彼はそう言っていたが、陸自身、どこかで真実がどうであ

るか理解していたのだろう。

『抗うだと……お前如きのちっぼけな力で運命など変えられるものか』

「運命は与えられるモンじゃねえ、自分で掴み取るモンだ。リクさんに……テメエの息子にそう教わった」

『ジード……』

勿論それだけで片づけられる事でないのも分かっている。

それでもあの人達に気付かせてもらったことがあったからこそ、受け入れられた。

〈お前……、使うなってあんだけ……！〉

「もうスツカスカのくせに何言ってるんだ。……多少の無茶は許してくれ」

無茶では済まないことを理解しつつ相棒にそう言う。

彼だけじゃない。きっと皆この選択を許してはくれないだろう……でも後悔はない。

『息子も、あのカドー星人も、貴様も！俺の血を受け継ぎながら敵対する愚か者共が！

自ら無二の存在価値を捨てるか！』

「んなモンこつちから願ひ下げだつっーんだよ！」

確かに空っぽなのかもしれない。奴が言うこと以上の価値など存在しないのかもしれない。

けどここまで戦ってこれたのは彼女達がいたから。彼女達が自分と言う存在に意味

を与えてくれたから。

今抗う理由があるとするならばきつと、その大切な人達を守りたいから。それ以上の理由などいらぬ。

「う……おとおお……！」

迫る巨体を渾身の力で押し返す。

解放出来る限りの闇を開放し、文字通りの全身全霊で。

『無駄だ。所詮貴様が全ての力を出したところでその程度……俺には勝てん』

「ああ……だろうな」

奴の力を全開にしたことが引き金となったか、再び煌めいたキメラベロスのカラータイマーに吸い寄せられるような感覚に襲われる。

しかもこちらの出した力が大きい分それを吸収する力も強くなるのか、まるで踏ん張りが利かない。

『フハハハハ……！　これがその証明だ。模造品がいくら足掻いたところで俺は超えられない！』

へクツソ……！　踏ん張れよ陸ツ！

枯れる寸前のゼロの力によって辛うじて持ちこたえているが、それも時間の問題か。

最ももう——堪える必要などないのだが。

「ゼロ……………ごめん！」

〈んなあッ……………!?!〉

今までキメラベロスの方へと向けていた力を逆流させ、ゼロとのリンクを弾く。

それを断ち切ればベリアルによる接収を遮るものはない。当然流れる先は奴の身体だ。

〈お前なんで——〉

「……………」

答えはしなかった。

ただ最後にゼロと視線を交え、完全に彼の中から消える。

〈陸ッ!!〉

『ッ……………!?!』

途端に身体を維持できなくなったゼロが消えるが、勝利を掴んだかに見えるキメラベロスが驕りを見せることはなかった。

むしろ逆に、自らの失策を呪うように激高する。

『貴様……………まさかわざと俺の身体に——ッ!?!』

「……よお」

時間にしてほんの数日、されど数日。

途方もないほどに長く感じられた時間の後だからこそか、彼女の顔は酷く懐かしく、また安堵を覚えさせる。

「……ごめんな、色々気負わせちゃまって」

返答はない。意識がないのか、呼びかけても目を瞑ったままにいる。

千歌は半透明の白い翼のような物体の中にいる。恐らくだがこれがベリアルによる浸食を防いでいたのだろう。

「ち——」

触れた途端、指先から走った電撃のような痛みに弾かれる。

ゼロと一体化していたからこそその感覚だが、ウルトラマンと似たような力を感じた。これはネクサスの力によるものだ。

「……ちいと過保護じゃねーのノアさんよお」

どうしてそのネクサスの力が陸を拒むのか。

ベリアルと同じ遺伝子を持つている陸を拒絶してるという可能性もあるが、何か別な理由を感じる。

「っ……うっ…………！」

この痛みは何かを示している。そんな気がしてならない。

何を伝えんとしているのか。その意味を求めるように再度触れた翼が痛みと共に齎したのは――、

——曜ちゃんのこと、好きなの？

確かに、千歌の声が聞こえた。

それに続くように流れてくるのは彼女の記憶。閉校祭の日に曜が口にした陸への想いや、逆に曜への感情で思い悩む自分の姿。

この翼——ストーンフリーゲルは千歌の心と同調している。

「…お前、これを気にしてたのか……？」

見られていたのか、という驚きや気恥ずかしさはこの際なかった。

寂しかった、怖かった。ストーンフリーゲルを通して千歌の抱いていた感情が伝わってくる。

陸の想いが自分ではない別の誰かに向いている。平時ならまだしも、世界から忘れ去

られ、陸しか頼る者がいなくなっていたその状況下で知ってしまったその事實は千歌の心に大きな負担となっていた……そんな怯えを知る。

「……そっか、ちゃんとお前のこと見えてなかったんだな」

こんな時ばかりは自分の鈍感さが憎いが、今はそうしている場合ではない。

起きてしまったことも、抱いてしまった想いも今更どうしようもない。

だったらちゃんと伝えるべきなのだろう。

「……正直否定は出来ん。確かにアイツが好きなのかって言われればそうなのかもしれないし」

人間じゃない。ベリアルにそう告げられた時、何故か真っ先に曜の顔が浮かんだ。

関係性がどうなるにしろ、この先も彼女とは一緒にいるだろうし、陸自身、それを望んでいた。あの時曜の顔が浮かんだのは、その未来が失われるのが怖かったからなのだろう。

だからこれはもう好きと呼んでもいいのかもしれない。

「けど、それでもお前が俺にとって大事な存在なのは変わんねえよ」

でもそれは決して曜とだけの未来ではなかった。

果南や千歌、皆と過ごしてきた日々がこの先も続くことを願ったから。だから誰も欠けちゃいけないんだ。

「お前の気持ちには答えられないかもものに都合いいよな。ワガママだよな。……でも、それでもさ」

思えばずっとその想いで、自分は戦ってきたはずだから。

「……今、俺が守りたいのはお前なんだよ」

瞬間、溶けるようにしてストーンフリーユーゲルが消えてゆく。

三度伸ばした腕の中には今度こそ千歌の身体が収まり、その温かさを確かなものとして噛み締めた。

「陸……ちゃん……」

「……柄でもねえこと言わせやがって……おら、ぱっぱと起きろ」

その足で立ち上がらせた千歌と視線が合った。まだ不安気な彼女の頭をポンポンと叩く。

「一人にはならねえよ、何があったって。……皆ちゃんと繋がってる」

どんなに離れたって、何者かに隔てられたって、培った絆は途切れはしない。

A q o u r s や月、先輩ウルトラマン達……自分を自分でいさせてくれた皆に教えられたことだ。

「……確かめて来いよ。自分の眼で」

「えっ……?」

今度は自分が返す番だ。

ポツンと開いた光の穴へ千歌を押すと、陸を残し、吸い寄せられるように流れてゆく。「なんで……陸ちゃ——」

千歌に手を掴まれるも、既に赤黒い蔦のようなものに拘束されつつある陸の身体が動くことはなかった。

ベリアルが欲しているのは陸と千歌両方だ。ここに飛び込んできた時から既に奴の浸食は始まっていた。こうして拘束される前に千歌を助けられたのは幸運だったろう。

「……俺は残るよ。ベリアルは俺が何とかする」

こうなることは分かっていたんだ。

陸一人の力では二人揃って脱出なんて出来やしない。自分か千歌か、そんなもの秤にかけるまでもなかった。

「ほら、早く行けッ！」

再び千歌までもが捕らえられてしまう前に腕を振りほどき、光の方へ突き飛ばす。「ごめん……ありがとうな」

この先の未来を皆と歩めなくなるのは怖いし、嫌だ。

でもそれ以上に、彼女達から……自分を自分でいさせてくれた皆から未来の可能性が奪われるのが嫌なんだ。

「うあつ……！」

放り出されるように地面に叩きつけられる。痛みに顔を顰める反面、五感で世界に触れる感覚がどこか懐かしく思える。

〈千歌なのか……？〉

「ゼロちゃん……？」

ゼロの声が自分の中から聞こえることに首を傾げた。

本来このウルトラマンは自分ではなく、あの少年の中にいるはずでは——、

「つ……！ 陸ちゃんは……！？」

『ウ……グオオオツ……！？』

そうだと直前に起こった出来事が脳内を駆け巡った瞬間、野太い呻き声が耳朶に触れる。

眼前ではキメラベロス……先程まで自分を捕えていた存在の身体が消滅した瞬間だった。

そして同時に落下してきた一人の少年が、その身体から闇の瘴気を昇らせながら何かへ抵抗するように苦悶の声を漏らしている。

「うあッ……！　アああアア……！！」

〈陸……？〉

藻掻くその姿は人と言うよりも、獣を感じさせた。

そしてそれは現実となるのか。煌々と光る双眸に始まり、身体の至る部位は人ではない何かへと変貌しようとしている。

『何の……つもりだアア……！！』

「へへッ………テメエの……思うようには、いかねえよッ……！！」

自身の身体から漏れ出る闇が発する声に脂汗を垂らしながら笑いで答える陸。

その瞳に映る覚悟はどこまでも揺ぎ無く、危険を孕んだものだった。

『俺に……従えエエエッ！！』

「ああぐッ……！！？　ガ………アアアアアッ……！！」

「陸ちゃ……！！？」

半身が黒く変わってゆく。

瞳は紅く大きく釣り上がり、腕は筋肉質に膨れ、巨大な爪が伸びると共に血のような紅が走る。

「は……はは……、わざわざ後押しありがとうよ……!」

ベリアルへと変貌しつつある肉体を動かしながら、不敵に陸が笑った。

紅に浸食される瞳の中に微かに残った彼の眼光が胸の陽光な輝きを捉えた瞬間、全員がその意図を悟った。

「……」までテメエの身体になりやあ……流石に、ただじゃ済まねえよなあ……!」

〈待て陸ッ! やめろッ!!〉

ゼロの叫びももう、彼を止めるには至らないのか。

最後に詫びるような眼をこちらに向けた次の瞬間、完全にベリアルのと化した腕をカラータイマーが浮かぶ自身の胸を貫かんと振り下ろし――、

「――させないよ、そんなこと」

「あ――」

疾風のような速度で叩き込まれた回し蹴りはその動きを止めた。

その足を媒体としてベリアルと同質の闇が注ぎ込まれ、互いに打ち消し合ったのか力尽きるように陸が崩れる。

「………決死の覚悟を無駄にしてごめんよ。けど、君はこの先の未来を生きななきゃダメだ」
〈オウガ……？〉

倒れ込んだ陸の身体を受け止めたのは、千歌にも見覚えのある青年だった。

全てに詫びるような眼でこちらを向くと、青年——カドー星人オウガはその印象からはかけ離れた神妙な面持ちで言った。

「もう、隠しても置けないよね……全部話すよ、彼のこと」

百四十四話 糸繰上のレゾナンス

『いい加減……受け入れろ！』

殴られる。蹴られる。

暗闇に降りしきる雨の中、陸の屈服を求めるといっても、執拗に、ベリアルを齎す痛みに襲われる。

『抗ったところで何になる？ 今更元のように生きられないのはお前自身理解しているはずだ、結局お前と言う存在に俺以外の居場所はない』

抵抗も意味を成さず、ただただ殴られる痛みだけが走る。

痛みから逃れたい、楽になりたい。何度もそう思うが、それでも気力だけは手放さなかつた。

ここで折れれば、全部終わってしまう。

命に代えてでも守りたい、自分と言う存在に意味を与えてくれた彼女達。

絶対を守る。

その想いだけで立つ陸を挫けさせんと、絶え間なく重い音が響いていった。

陸がゼロであることを知る十一人の少女と、三人のウルトラマン。

「まず最初に結論から言っちゃうと、陸君は純粋な地球人じゃないんだ」

自らが集めさせた面々の前で開口一番にオウガが言い放った一言に、その場にいた全員が空気が凍り付いた。

皆一様にベッドに横たわる陸に視線を向け、中には今にも崩れ落ちそうな者もいた。

「…待て、純粋な…とはどういうことだ」

重い沈黙を打ち破ったのは唯一自力でその結論に辿り着いたヒカリだった。

陸からベリアルの子の遺伝子が検出された。そう伝えられたことで結果として陸があの行動に至ったのだから、ヒカリ自身、何か気負っているものがあるらしい。

「そーだなあ……とりあえず、少し昔話でもしよっか」

この空気の中でも軽いノリを保てるのはオウガらしくもあるのだが、それはどこか彼自身の気を紛らわせているようにも感じた。

「ベリアルに関する説明はこの際省くけど、そのベリアルが引き起こしたオメガ・アーマゲドンって言う宇宙規模の戦争があったんだよ。それでその戦争の渦中で肉体を失ったベリアルが自身の復活のために伏井出ケイに作らせた人造生命体が君らも知ってるウルトラマンジード」

「…陸っちもそれと同じってこと？」

「まだ答えを急ぐもんじゃないよ。実験には失敗が付き物、当然ジードが誕生する前から様々な実験が行われては失敗した。…で、その失敗例が僕等デイザスト・スマツシュってこと」

デイザスト・スマツシュ。

以前ゼロと陸がオウガから聞いた話では戦闘用に生み出されたという話だったが、元々はジードのようなベリアルの受け皿となるものを作るために計画されたらしい。

「製造法はあら簡単。適当な星の生命体にベリアルの遺伝子を与えれば完成…：まあ、ボクを除いて皆すぐ絶命しちゃったんだけど」

その失敗を踏まえた結果ジードが生まれた。そこまで説明し終えたあたりで努めて軽く振舞っていたオウガの顔に影が差す。

「…ジードの成功例を得た伏井出ケイは、デイザスト・スマツシュにベリアルの遺伝子を安定させる方法を見つけてしまった。そこで彼は、もしサイドアースでの計画が失敗し

た場合に備えて、別の地球に第二のウルトラマンジードを用意しておくことにしたんだ」

永遠にも感じられた一拍の後、オウガは一つの結論を口にする。

「……それが仙道陸君、最後にして最高傑作のディザスト・スマッシュユキ」

受け止めるに受け止めきれない事実が波のように寄せては返す。

一人が愕然とすればそれが全員に伝播してゆき、一言一言の度に重力が増したかのように皆が押し黙った。

『……つまりコイツは、お前のようにベリアルの子孫を植え付けられた地球人ってことか』

「そういうこと。まあ、厳密にはボク達とは少し違うんだけど」

憐憫と、また別な何かを含んだ視線が陸に落とされる。

「ボク以外のディザスト・スマッシュユキはベリアルの力に耐え切れずに死んでいったらどう？ それは既に出て来た上がっていたその生物としての機能と、ベリアルの遺伝子が反発した結果だ……だからジードのように、生まれる前からベリアルの遺伝子を植え付けることにしたんだ」

淡々と語られるにはあまりに惨い事実がまたも押し寄せる。

だがオウガはこんなのはまだ序の口だと言わんばかりに続けた。

「ほら、この星にもクローン技術はあるだろ？ とある生物の卵子から核を抜いて別の生物の遺伝子を移植するってやつ。それを人間の卵とベリアルルの遺伝子に置き換えたと考えてくれればいいかな」

「でも陸ちゃんにはちやんとお父さんもお母さんもいるじゃん……この前だってあんなに……！」

身を乗り出して訴えた千歌の臉の裏には、あの時の弱り切った陸の様子が浮かんでい
るのだろう。

だが言ってることには一理ある。伏井出ケイによつて生み出された命だということな
ら、確かに存在していた陸の両親についてはどう説明を付けるのか。

「……あの二人が陸君の両親なのに間違いはないよ。けど言った通り、陸君は人間の卵に
ベリアルルの遺伝子を植え付けた、言わば人間とウルトラマンのハーフ……それを生み出
すためには、一度人体から卵を取り出す必要があるだろ」

オウガがそこで口を噤んだ意味は全員が瞬時に悟った。

「じゃあつまり、陸君の両親はその時に……？」

「……そう、陸君となる卵を取り出した際に、二人とも殺されている。あとは彼を育てる
ための傀儡として死んだまま動かされ続けてただけだよ。……ウイルスニアスに始末さ
れたのは陸君を追い込む狙いもあつたんだらうけど、多分もう、用済みだったんだ」

生まれて以降殆ど両親が陸と共にいなかったのは、彼等が既に死んでいるという事実を悟られにくくするため。そして漁師と言う職業の夫婦を選んだのも、陸から引き離れた際の違和感を生まない為だったのだろう。

周到に練られた計画はあまりにも残酷で、千歌達はおろかウルトラマンであるゼ口達ですら言葉を失う。

「ごめん、ちよつと語り過ぎたよ。……生まれた後しばらくの陸君は、千歌ちゃんや曜ちゃん、果南ちゃんが知ってる通りの彼だよ。その間は奴等も手を出さなかったみたい……六年前にスカルゴモラが出現するまではね」

六年前に出現した怪獣。そのフリーズにこの場にいる地球人全員の表情が固まる。

内浦のみならず東京や函館にもスカルゴモラは出現している。皆一様にトラウマを刻まれているのだろう。

「この星での伏井出ケイが何度も繰り返しスカルゴモラに変身していたのは怪獣へのフュージョンライズの実験にリトルスターの発生状況の確認……そして陸君の観察さ」
既に知らされていた二つの狙いに続き明らかになる本当の目的。

「後に伏井出ケイはサイドアースへ移って君等も知ってる一連の事件を起こす訳だけど、そんな彼の代わりにこの星を監視していたのがダークネスファイブだよ」

ダークネスファイブの母艦へと乗り込んだあの時にスライが見せてきた幼き日の陸

の映像。

どうして奴等がそれを持つていたのか、想像してはいたが、説明させる形でようやく合点がいく。

「広く知られていなかったとはいえ一度滅びながらも修復され、その上宇宙警備隊の監察下からも外れていた格好の的みたいなの星が一度も侵略の危機に晒されてなかったのは彼等が睨みを利かせていたから……全ては第二のジードを作り上げるためにね」
何故サイドアースにダークネスファイブが現れなかったのか、これまでこの星に侵略者は現れなかったのか。引つ掛かりながらも説明が付かなかった点が次々と腑に落ちてゆく。

ここまでくるともう、否定しようのない事実だということは誰もが思い知らされた。

「そしてまあ、後は彼等の計画通りに事が進んで今に至るつてこと」

「……それはつまり、ゼロがこの地球に来るのも計算の内だったということか?」

「いや、ゼロ君の登場は計算外だったし、好ましいことでもなかったと思うよ。ゼロ君がこの地球に居座つたら、陸君がウルトラマンになる必要がなくなるだろ?」

陸をウルトラマンにする必要があったのはジードと同じと考えていいだろう。リトルスターは宿主がウルトラマンに祈ることしか分離されない。ペリアル復活に必要な力を集めさせるのに必要な存在だったということ……そして、

「デュナミストがノアに覚醒するための条件は三つ。先代のデュナミストに触れること、実際にネクサスに変身すること、そして最後の一つ、ウルトラマンに触れるって言う条件はこの地球においてはネクサス以外のウルトラマンが存在しないと成立させにくい……これがこの地球でもウルトラマンが必要だった一番の理由かな」

対象を先代のデュナミストに触れさせること自体はそう難しいことではないが、その時点では対象が変身者以上デュナミストが変身するネクサスに触れるというのは物理的に不可能だ。

だからこそネクサスとは別のウルトラマンを用意する必要があった。

オウガの使用するライザーも、元々は陸に使わせる予定だった代物らしい。

「だからゼロ君の存在はダークネスファイブにとつてもまずかつた訳さ。……まあ、結果的に二人が一体化したから、そんな心配はなくなっちゃった訳だけど」

そんなライザーがオウガの手に渡ったのも、結果論とは言えゼロすらも奴等の計画を完遂させるための条件を満たしてしまつたから。

偶然が重なつた出来事な上に予測できるはずもないのだが、それで片づけるにはあまりにも大きい。

「……そしてボクが陸君が人間じゃいられなくなる引き金を引いた」

ゼロが感じたそれ以上の罪悪感や重責を含むオウガの台詞。

彼が自身の口で語るのを待つべきか、それともきっかけを作るべきか、少し考えた後に後者を選ぶ。

『俺が陸と一体化した時にはベリアルルの気配なんざ微塵も感じなかった……それと関係あるのか』

「……そうだね。ジードと違って陸君の中の遺伝子は外部からの刺激を受けないと発芽しないようになってたから、ボクがベリアルルの力を与えたその時までにはただの人間だったんだよ」

——オウガがそいつに陛下の力を植え付けたのにはもつと別の訳があるんだ
ゼエ……

ずっと引つ掛かっていた、少し前に函館でグロツケンが言い遺した言葉の意味が判明する。

「なるほどな。ゼロと一体化してしまえば陸の中のベリアルルの遺伝子が目覚めなくなる。だから着火剤としてベリアルルの力を植え付けるためにお前が使われたという訳か」
「……察しが良くて助かるよ」

オウガだけでなくヒカリの表情までもが苦々しいのは、自身の開発したライザーがまた誰かの運命を狂わせることに利用されようとしていたからか。

「……思い出しましたわ。黒い巨人に襲われるような……あれは夢ではなかったのです

ね」

「ダイヤちゃんにも迷惑かけたね。あれに関してはボクに非があるから、陸君のことは責めないであげてくれよ」

守るために手を伸ばした力が守るべきものを傷付けてしまった、陸にとつても、ゼロにとつても戒めの記憶。

結果的にあの暴走は克服することが出来たが、思えばそれこそが陸の中でベリアルの子が目覚めつつある表れだったか。

その後も度々力の暴走が見られたのは、遺伝子が目覚めたことよって制御した以上に力が増幅したから。そして再びその力を克服することで更に遺伝子は覚醒してゆき、また力が増す……この繰り返しで今に至るのだろう。

『……結局何から何まで、俺達はアイツ等の手のひらで踊らされ続けてたって訳かよ』
そもそもその時点で気付くべきだったのだ。

ストルム器官を持つ伏井出ケイですらベリアルを一時的にしか保持出来なかったのに、地球人であるはずの陸がその力を溜め込める上に増幅させられるのか。それこそが彼の中にベリアルの子の遺伝子が眠っている確固たる表れだったというのに。

「助けられないの……？」

「方法がない訳じゃないけど……正直、今のままじゃ……！」

「なんだってやるよ！ 皆だって……！」

オウガに詰め寄った後に振り返った千歌に皆頷くが、数名はまだ、迷うように俯いたままだった。

「曜ちゃん……？」

「訳わかんないよ……そんなこと急に言われたって、わかる訳……！」

逃げるように、後ずさりした曜が病室を去ってゆく。

曜だけじゃない。まだ記憶が混濁の中にあるメンバーには少なからず戸惑い以上の何かが伺えた。

「曜ちゃん……！」

後を追うように飛び出していった千歌を横目に、オウガの顔が苦々しく陰る。

救う以前に、全員が一致しない。気持ちの時点でバラバラなのだ。

数名が欠けた部屋の中に、重苦しさだけが残響していった。

百四十五話 呼び起こす者

「…信じてくれるの?」

「……あんなこと聞かされたら流石にね…」

「どつちにしろ、こんな状況じゃ無視する訳にもいかないでしょ」

受け入れられない者もいれば、意外に早く順応を見せる者もいる。

少なからずまだ記憶を取り戻していないこの二人がその姿勢を見せたのは少し以外
と言うべきか。

「それにちよつと記憶が混濁してるといふか、思い出した……みたいなのもあつて」

「…ま、とにかく信じようって思っただけよ」

梨子と善子の返答に表情を和らげる面々。

仙道陸と言う存在の背負う過去の壮絶さもあるのだろうが、それ以上に彼が齎したも
の大きさがそうさせるのか。

ともあれこれで一歩前進だろう。

「…あとはあの二人か……」

ヒカリの声が短く反響する。

その言葉は誰が継ぐでもなく、数名が飛び出していった病室の戸を見やることで応じることしか出来なかった。

——陸君は純粋な地球人じゃないんだ

そう告げられた時、言葉に出来ないような漠然とした何かが襲い掛かってきた。

自分でもどうしてそんな感情が沸き上がってくるのか分からないままに次々と残酷な真実は押し寄せ、確かな痛みを伴って胸が締め付けられる。

そしてまた痛みを増長させるのは、紛れもない彼の声だった。

——ここにいたいからいる！ それで十分だろ！

——小さい頃から、それこそ気が付いた時には一緒にいて。散々バカやって、笑って、今も似たように過ごして、その時間が好きなんだよ

何度も何度も、まるでその時抱いた感情も蘇るようにその声が聞こえる。

苦しくて、だけどあつたかくて、今の今まで抱いていたそれとはまるで違う何か。

——喧嘩も、苦労も、氣遣いも迷惑がる事も全部。全部含めてお前という時間なんだよ！ それが心地いいから一緒にいるんだろぅが！

分からない。

自分の気持ちはどうなのか、何が真実なのか。

そんな渦中に自分があるのがひたすらに怖くて、逃げるように走った。

「……あ、いたー！」

どこまで走ってきたのか、それすらも分からないまま掛かった声に足を止める。

「急にいなくなるから探したよ……って、何かあつたの？」

呼び出される寸前まで一緒にいた従姉妹の顔が目にいる。

その瞬間、弾かれたように彼女の元へ詰め寄った。

「どこまで知ってたの!?!」

「え……?」

「月ちゃんは、陸のこと……!」

この頃ずっと陸について話を持ち掛けてきた月。

彼女が何を知って何を感じたのか、それを知れば何か分かるかもしれない。

「落ち着いて曜ちゃん……りっくん、何かあったの……？」

けれど返ってきた回答は期待していたものではなく、彼女も陸の身のことを知り得ていないことを証明した。

「わかんないよ……！」

今まで見せたこともないような顔で膝をついた。

陸だけじゃない。同様に感情を揺さぶってくるみかん髪の少女の事もあるのに、心はそれを整理させる余裕すらも与えてくれない。

「嫌いなはずなのに……、あんな子知らないはずなのに、なんで……」
記憶と記憶がせめぎ合う。

知らないはずなのに、この記憶は、あの二人の存在する当たり前がどうしても捨てがたく思えてならない。

「……私、何を信じたら……」

「曜ちゃん……」

縋るような曜に困惑した表情を浮かべつつも、どこか同情するような月の手が肩に触れる。

従姉妹の自分でも知らない顔、けれども何故か安心感を抱かせてくる彼女は、そのまま寄り添うように言った。

「……曜ちゃんの言うりつくんの事が何なのかは分からないけど、りつくんがウルトラマンなのは知ってる。その上で曜ちゃんに話を聞いて欲しくて」

「え……う？」

想像にしてなかった告白に間抜けた声を漏らす。だが合点は行った。

ここ最近頻繁に月が陸のことで話を持ち掛けてくるのが疑問だったが、今思えばそう言うことだったのか。

彼女はゼロの正体を知った上で陸に力を貸していた。

つまり月はウルトラマンを……陸を信じる事が出来ているんだ。

「なんで……」

いつどこでそれを知ったのか。そんなことはどうでもよかった。

ウルトラマンは敵だ。その記憶があることには自分も月も変わりはないはずだ。それなのにどうして彼女は陸を信じられるのか。

「……と言っても知ったのは本当に最近のことだし、始めはボクも色々戸惑ったけど……信じたくなかったんだよ、ボクの知ってるりつくんを」

守ってもらった。正体を知った上でも自分の知る陸と変わりなかった。だから一度逃げ出しながらも信じられた。

続けて語る月の言葉が心からのものであることは疑うまでもなかった。

「……だから曜ちゃんも、曜ちゃんの信じたい人を信じてあげて」

その一言は風のように心を吹き抜ける。

ただそれだけで月は曜の答えがわかりきったかのようにそれ以上は何も言わなかった。陸を信じているように、彼女は曜のことだつて信じてくれているのだろう。

「信じたい人……」

何が真実なのか、どうすることが正しいのか。何もかもが不明瞭だからこそ、後悔はしない選択をするべきなのではないか。

何を信じたい。心はどうすることを求めている。

それを自分自身に問うてみれば自ずと、答えは返ってきた。

さざ波の音が聞こえる。

世界に危機が迫ろうとも、自分達を育んだこの海は今日も穏やかに揺れていた。

「……どうしたの？ 用があるって」

掛かった声に振り返る。

百花、幼馴染であり一番の親友。

けど、今は不思議と距離を感じてしまう。

「…ほら、さつき呼んだのに来なかったからさ、一応、何があつただけ言っておこうかなって」

「ふーん……」

興味無さげ、と言つた様子だつた。

陸の名前は出して伝えていたのだが、少し前に彼と話していた時は感情的な様子を見せていたとは思えない。

「……まあ、話したいのは陸のことじゃないんだけどね」

「え？」

勿論自分自身でも整理がついてない手前、まだその事実を知らない彼女にこれ話すのは気乗りしないというのもある。

けどそれよりも、この口で伝えておかないといけないことがあつた。

「そこで会つたんだ、私の、親友かもしれない子に」

「…どういうこと？ 曜ちゃん、親友は私だつて……」

「うん、そうなんだよ。そうなんだけど……なんかこう、あの子にも似たようなのを感じたつて言うかさ……私の、親友なのかなって」

「曜ちゃん……！」

今度は若干の喜びが籠った声が聞こえた。

声音、髪色、容姿、全てが親友と似ているが、芯に秘めたものは全く異質なように見える。

高海……千歌。今自分が信じたいと思っている人。

「……追つてきたの？」

「うん……心配だったから」

何故だからそう言ってくれる千歌に喜びを感じている自分がいる。

一度や二度じゃない、何度も感じたかのような温かさも胸に生じた。

「まさか、その子のこと言ってるの……？」

反面、千歌を視界に捉えた瞬間に脂汗を浮かべた百花が語気を強めて言い寄ってくる。

その姿がどうにも、自分の記憶の中にある親友の姿と乖離した。

「なんで……そんな子知らない、曜ちゃんの親友は私でしょ!？」

憤慨する百花に、回答を曜に委ねるように視線を向けてくる千歌。

けれど努めて穏やかに、他愛ない会話をするように語り掛ける。

「勿論そうだよ。……でも私、この子……千歌ちゃんの言ってることも信じたくてさ」

滅茶苦茶を言っているのは理解している。

百花との記憶は確かに存在している。けど千歌に対する何かが存在しているのも田鹿なんだ。自分には、そのどちらも否定することはできない。

「百花ちゃんのことにも信じてるのに変わりはないよ」

「だったらなんでそんな子のこと……」

「矛盾してるよね、ワガママなのも、わかってる。でも……」

そう、今はどちらも手放せないから。

「……私はどっちも信じたいんだ」

都合の良すぎることを言っているのかもしれない。

どちらも傷つけないように見えて、実はどちらも裏切っている。こんなこと受け入れろと言う方が滅茶苦茶だろう。

けど、自分の知っている☒彼女☒なら、きつと——、

「ふざけないですよ……！ ハッキリしてよ！ 曜ちゃんの隣にいるのは私でしょ！」

そんな考えを打ち砕くように、焦りを滲ませた百花に詰め寄られる。

けど屈しも怯みもしない。ただ静かに彼女の眼を見つめた。

「くそ……！ こうなったら……！」

百花の瞳に非人間的な光が灯る。

そして像を覚束せる手を曜へ向けて掲げ——、

『——はいはい、そこまでですよ』

制止するように舞い降りた声。

そして、

「え———」

ずしゅ。

紅い目のような光が瞬いたかと思った刹那、背中からその身体を貫いた刃物が百花の胸から突き出ていた。

『あ、あ………？ あああああ………!?!』

何が起こったのか理解できない。

そんな表情のまま、百花の腕に生じていた輪郭の歪みは全身へと広がり、やがて元の少女の姿は見る影もない金髪 of 宇宙人のものへと変わる。

『スライ……様………？ 何、故え………ツ?』

『貴方の役目は終わりましたから。これ以上は邪魔なだけです』

慈悲もなく振り下ろされたスライの魔剣が百花だった宇宙人——ババルウ星人を両断する。

べちやりと、生々しく音を立てて転がった肉塊に二人揃って声と顔を引き攣らせた。

「百花ちゃ………」

『そんな人間は始めから存在しませんよ。高海千歌の代わりに過ぎないただの傀儡です』

悪魔のような紅い双眸に、着込まれた白い甲冑が奥底にある記憶を揺さぶった。

たつた今一つの命を散らせたスライは、微塵の呵責すらも感じていないような飄々とした態度でこちらへと歩み寄ってくる。

『貴女には二つ謝罪しなければなりませんね。一つはこの件、こちらの都合で記憶を改変したことについては申し訳なく思っています』

刀身にこびり付いた血痕を払うように腕を振るうと、スライは曜の方を向き紳士然として頭を下げてくる。

これだけ見れば友好的に思えなくもないが、隣にいる千歌の表情、そして訴えかけてくる自身の本能が最大級に危険を告げた。

『……もう一つは……また、身勝手な真似をすることへの御許しを』

そして早くもその警告が現実をなるように、

「曜ちゃ——」

下げられていた刀身が揺らめき、気が付いた時には曜の背後まで振り抜かれる。

もはや痛みすらも感じなかった。それどころか身体すらも斬られたことに気付いていなかったかのように、遅れて鮮血が舞う。

『そして誇りに思いなさい。偉大なる陛下ご復活の礎となれることに』

自身の身体から流れ出る血潮の海に崩れた曜を見下ろし、冷徹にスライが吐き捨てた。

そればかりかまだ微かに息が残っているのを確認すると、トドメと言わんばかりに再び剣を振り上げる。

「だめえッ!!」

翳んでゆく視界の中で、それを阻止するようにスライに体当たりする千歌が見えた。

けれど相手は屈強な宇宙人。そんな衝撃程度では身じろぎすらせず、逆に片手の一振り千歌を跳ね飛ばしてしまう。

『もはや貴女にも用はないのですよ。……そこで見ていなさい』

今度こそ、二度目の凶刃が迫ってくるのが分かった。

ごめんね。もはや声にすらならない声で伝える。

結局最期まで彼女のことを完全に思い出せることはなかったのに、それでも千歌がこうまでしてくれたことが嬉しく、それ以上に悔しかった。

千歌だけじゃない、陸だつてそうだ。彼への本当の気持ちを理解しないままに、あんな酷い言葉を吐き捨てたままになってしまう。

だからこれはそんな自分への罰なのかもしれない。

許される限りの謝罪を続け、やがて力も入らなくなった瞼を閉じ――、

「――セエエエヤッ！」

その寸前に割って入った一つの影が剣戟の前に立ちはだかるのが見えた。

だがもう気力も持たない。事の顛末を見終わる前に視界が黒に染まり、闇の底へと意識は引き摺り込まれていった。

「よ――」

『スライか……よくやった』

ベリアルを通して流れてきた光景に血が凍り付くような悪寒を覚える。

赤の中に沈む少女が彼女であると認識した途端、途方もないような脱力感に身体が震ええた。

『奴等がお前の守るべきものなのはよくわかった……その上での選択だ』

陸を殴る手が止まり、今度は言葉が向けられる。

だが、それは殴打などよりもずつと暴力的で、卑劣な含みを孕んでいた。

『お前が抵抗を続ける限り、一人ずつ殺していく……………そう言ったらどうする?』
もはや選択肢など無かった。

ここで手放したら何が起こるかなんて簡単に分かる。けど、一度それを見せられてしまつと、目先の恐怖が勝つてしまう。

「……………わかつたよ」

『…それでいい』

絞り出すような声への返答は、全身を覆ってくる闇だった。

何もかもが手の中から離れていくのを感じる。もはや抵抗すらも利かなくなつた暗闇の中で、ただ一人、どうにもできない己の無力感を呪つた。

『ハハ……………!』

また更に数名がいなくなった病室の中、静けさを打ち壊した笑い声に全員の視線が一点に向く。

不安を抱く反面どこかで期待してしまう。そんな思いは鋭さを増した双眸の見せる紅によつて儚くも打ち砕かれた。

「先輩……？」

「いや……違う」

傍へ寄ろうとする花丸を何かを悟つたオウガが制止する。

この場においてその意味を悟つた者は皆、一様に姿勢を下げて警戒の意を示した。

『……こんななよつちい女共と一緒だあ、俺も甘く見られたモンだな』

ゼロやヒカリが背後に隠す少女達を見て舌を打つ陸。

これを受ければもう全員、その身体を支配するのが陸でないのは嫌でも理解できた。

『それともなんだ？ コイツが俺に抗えらとでも本気で信じてたのか？』

「ベリアル……陸に何しやがった……！」

呼吸すらも苦しくなるほどに重い緊張感の中で宿縁を持つ者同士の目線が交わる。

自身へ向けられるゼロの視線が戦意を含むことを悟ると、ベリアルは不敵に口角を釣り上げた。

『もうそんなものは関係ない……それよりもっと別なことを心配したらどうだ』

カツと瞳が見開かれた直後、空間すらも恐怖しているかのように空気が震える。

途端にその身体から沸き上がった闇は瞬く間に柱のようになり、悪魔の咆哮と共に爆

発した。

『この肉体……この感覚………久しいな』

巻き起こった突風に地鳴りが少女達の悲鳴を呼ぶ。

だがそんな彼女達も、濛々と立ち昇った土煙の向こうに映る巨影を前に声も出さずに震えた。

『フフ……待ちわびたぞ、この瞬間を……！』

黒の中に血のような紅が走る筋肉質な肉体に、釣り上がった双瞳や大きく裂けた口から覗く牙。凶悪さそのものが具現化したかのようなソレの姿は悪魔と呼ぶに相応しいか。

だがその胸に輝く妖しい煌めきが、紛れもなくその巨人もウルトラマンであることを告げる。

『フフフ……ハハハハハ……ツツ!!』

あらゆる者が見上げる先で漆黒の巨人は笑う。

暗く雷鳴を鳴らす天地、荒く波立つ海。それら全てがその存在——ウルトラマンベリアルの脅威を物語った。

百四十六話 心からの願い

『ベリアル……ツツ!!』

陸の身体を介さないまま本来の巨人の肉体へと変身したゼロがベリアルへ向け拳を振るう。

だが虫でも払うかのように難なく薙ぎ払われ、その巨体を大地と衝突させる結果となる。

『俺に会えてそんなに嬉しいか？ ゼロオ…』

『ふざけたこと抜かしてんじやねえ!』

空拳からの回し蹴り、更に正拳突きと流れるように攻撃を繰り返してゆくが、その悉くはベリアルにより受け流されてしまう。

それどころか、その逐一に受けるカウンターにより消耗しているのは攻撃しているはずのゼロだった。

「まだ単体での実体化じゃ本調子は出せないか……仕方ない」

変身してから三十秒足らずで点滅を始めたカラータイマーを視認しオウガが意を決したようにライザーを掴む。

ウルトラマンは一体化することで対象の傷を癒すことができ、またウルトラマンも一体化することで時間はかかるが自らの身体を癒すことができる。

だがゼロの場合はベリアルの子孫の遺伝子を持つ陸と一体化していたことで回復が阻害され、未だレゾリウム光線で負ったダメージが回復しきっていないのだ。

《フュージョンライズ！》

手早く取り出した怪獣カプセルを起動させ、即座にライザーでリード。

しばらく変身していなかったがこの際仕方ない。胸元に持ってきたライザーのトリガーを引きその力を開放させる。

《ゼットン！》

《ベムスター！》

《ウルトラマンベリアル！》

《ベムゼード！》

自分以外は避難し空となった病室の窓枠から飛び出し、カプセルの力を融合させた怪獣へと変身する。

相手が相手な以上、自分と同じ人型の方が立ち振る舞いやすい。そうならば必然的にこの融合獣だ。

『ゼロ君！』

両腕から火球を生成しベリアルを牽制。

同時にテレポーターシジョンを駆使し奴からゼロを引き離す。

『オウガ……お前……！』

『流石に黙って見てるわけにもいかないからね……』

咄嗟に飛び出してきたはいいが、相手取っているのはあのベリアル。しかもノアや陸の力を吸収しその力はより強大になっていると考えると考えていい。

正直、このまま対峙してもやられるのは時間の問題だ。

『……それでもまあ、逃げはしないけど！』

再度火球を生み出し、放出と共に突撃。

策がある訳じゃないし勝算もない。けれど奴を野放しにする訳にもいかなかった。

『歯向かうか……面白い』

いとも容易く炎は掻き消され、その勢いのままに巨大な爪が眼前まで迫る。

同じベリアルスの力とは言え、本物と紛い物ではこうも違うか。やはりあらゆる面での差は大きい。

『ぐツ……!』

回避も間に合わず直撃。殴打以上に爪痕が齎す激痛が身体を抉る。

たまたらず距離を取ろうと試みるも瞬時に詰められ、追撃が深々と突き刺さった。

『どうした? その程度かカドー星人』

『…まっさかあ』

目くらましに足元に着弾させた火球で煙幕を発生させるも、ベリアルスは構わず突っ込んでくる。

だがそんなことは想定内。土煙を起こした理由は別にある。

『ヌウ……ッ!?!』

ベリアルスの爪が再びヒットする寸前にテレポートで姿を消す。

瞬刻前に攻撃を食らっていたことで今度も当たる確信があったのか、大振りの一撃が躲されたことで奴の体勢が崩れる。

『デエエエエリアッ!』

『ウオオ……ッ!?!』

その真横。土煙に紛れ接近したゼロの振り抜いたゼロツインソードがベリアルを捉える。

立て続けに斬り下ろされた大剣はまたも黒い身体を薙ぎ、確かなダメージを示すように火花が上がった。

微々たる量だが攻撃が通じない訳じゃない。

倒しきるのは流石に不可能だが、ならせめて、次に繋がる戦いをするべきだ。

『貴様ら……！』

繰り返して土煙で姿を隠すも、二度は通じず打ち出されたデスシウム光線がゼロを貫かんと猛進。

手負いのゼロでは防ぐ術も躲す術もない。煙に浮き出た影に赤黒い一閃が衝突する。

『ふう……あつぶないあつぶない』

が、ゼロだと思われたその影は瞬く間にデスシウム光線が吸収してゆく。

明瞭になった視界から現れたのはベムゼード。たった今取り込んだエネルギーを右腕から解き放ちベリアルを攻撃兼牽制し、同時に立ち位置を入れ替えたゼロと共に奴へ殺到した。

デスシウム光線がゼロに直撃する寸前にテレポートで入れ替わり、ベムゼードの掌でそれを吸収する算段だったが、成功したと言っていいだろう。

たった一度でいいからベリアルに致命傷を与える……その為には奴の力を利用するのが一番だった。

『ワイドゼロショットッ!』

『トリリオンインフェルノッ!』

至近距離から放つゼロの光線と一兆度を超える豪火球。

さしものベリアルと言えど、これをこの距離で浴びれば一溜まりも——、
『ほお、少しは考えたな……だが』

《デモニックフュージョン・アンリーシュ!》

その考えは浅はかだったと告げるように、終焉の鐘が鳴る。

《エンペラ星人》

《ダークルギエル》

『ぐううう……ッ!?!』

二人の魔人が放つ強烈なオーラを前に光線や火球はおろかゼロとベムゼードをも吹

き飛ばされ、大地を転がった。

その強大な闇は周囲のものを薙ぎ払うだけに留まらず、轟いた咆哮に呼応するようにしてベリアル の身体へと集約してゆく。

《ウルトラマンベリアル・アトロシマス！》

邪悪を連想させる赤や黒の色はなかった。

だが無骨かつモノトーン調となったその肉体はより禍々しく、より凶悪な印象を抱かせる。

ウルトラマンベリアル……アトロシマス。

全宇宙の生命が知り得る限りの、ベリアル最恐最悪の形態。

『準備運動は終わりだ……真の絶望を味わえ』

雷鳴も、荒れる海原も、その姿を前に恐れ慄くように静まり返る。
脅威に震える世界が、絶望の到来を予感させた。

お姉ちゃん。

いつから彼に対しそう名乗り始めたか。

初めはただ、不器用な彼に頼って欲しかっただけなんだ。

「ちよつと、果南！」

塞ぎ込んでいた思考にずかずかと入り込んでくる声。

普段ならすぐ明るくなれるこの声を聞いても気分は晴れないし、そんな気も起らない。むしろ今に限っては鬱陶しさをすら感じた。

「……ごめん、一人にして」

「シヨックだったのは分かりませんが、そうもいかないでしょう……？」

陸の出生を、その事実を知って思わず飛び出してきてしまった。

でもシヨックだったのはそれだけじゃない。むしろそれ以上に、自分の行動が信じられなかった。

どうして、どうしてよりもよってあの瞬間に思い出すんだ。

「……果南。あなた、もう思い出してるんでしょう？」

確信づくように鞠莉がそう言う。

答えこそしなかったが、長く一緒にいたからか見透かされている。今この瞬間ばかり

は幼馴染という関係を呪った。

「今りくつちには支えが必要なはずだよ？　なのに果南が逃げてどうするの……お姉ちゃんなんですよ？」

「……そんなのじゃない」

お姉ちゃん。何度も何度も自ら名乗った言葉が反芻する。

その度に襲い掛かってくるのは拭いきれない後悔と痛み。虚勢を張るばかりで何も成せない、むしろ害してばかりの己に失望した。

「……お姉ちゃんなんかじゃない……大事なことを忘れて、傷付けて……」

「それはあの宇宙人のせいだと言っていたでしょう？　確かにそれで片づけられる問題ではないのですが、だからと言って逃げていい理由にもなりませんわよ」

「……………今更どの面下げて傍にいろつて言うのさ」

陸を想う度に思い返す。

彼に取った態度を、彼に浴びせた言葉を。記憶がどうだとか、そんなのは関係ない。「……あんな酷いこと言ったんだよ？　苦しんでたのに見向きもしないで、それなのに

……………」

何がお姉ちゃんだ。

何が守ってあげきやだ。

結局ただ自己満足に浸っていただけじゃないか。

「…わかんないよ……どうしたらいいのか……」

何も信じたくはなかった。陸に隠された過去も、自分のやったことも、全部。

でもそれは揺るがぬ事実で、どんなに逃げようとしたって纏わりついてくる。

今だって雁字搦めに纏わりついてきて、まるでお前にはその資格はないと言わんばかりに気持ちの整理すらつかせてくれない。

「……それは皆同じだよ」

ふとしゃがみ込んだ鞠莉が手を握ってくる。

親しんだ温もりに引かれるようにようやく彼女の顔を見る。曇りこそないが、その瞳の奥には確かに、自分と同じ迷いが蟠っていた。

「皆そうだよ。皆受け止めきれないし、どうしたらいいかなんてこれっぽっちもわからない……でも、だからこそ向き合えないといけないんだって、そう思ってる」

答えをくれる訳じゃなかった。

何が正しいかの答えなんて誰も持ってはいない。そう語るように。

「果南がりくつちのことを大切に思ってたのは知ってるよ。自分が許せなくなってるのもわかる。それも皆同じ」

「鞠莉さんの言う通りですわ。皆、思ってることは同じ。果南さんだけじゃない、皆陸さ

んに酷いことをしましたし、言いました」

この二人がどういう経緯で記憶を取り戻したかなんてわからない。

でもその際に抱いた衝撃は、感情は同じなんだと、その目が物語っている。

「…でも、それでもあの人がわたくし達と向き合うのをやめようとしなかったのは、また元のわたくし達と一緒にいたかったからではないのですか？」

「……それは……」

あの瞳がフラツシユバツクする。

どんなに苛辣に突き放したって決して背けられることがなかったあの瞳は、彼の想う全てに向けられていたはずだ。

その陸に対して二人は逃げなかった。皆だって、戸惑いながらも向き合おうとしている。

「りくつちは逃げなかったし、一緒にいたいって、その気持ちも同じはずだよ」

また、親友二人と視線が重なった。

せり上がってくるのは、忘れることのないあの日の感情。

もうあんな思いはしないし、させない。そう誓ったはずだ。

「……だったら、お姉ちゃんが逃げる訳にはいかないんじゃない？」

差し伸ばされた二人の手を自然と握っていた。

心の準備が出来た訳じゃない。奥底ではまだ、向き合うことを恐れている。

それでも、逃げることもだけはしたくなかった。

「とにかく今はあの人の近くにいてあげてください。それが——」

「お姉ちゃん！」

連れられるままに飛び出してきた道を戻りかけたその時に、血相を変えたルビィが姉の下へ駆け込んでくるのが見えた。

彼女だけでなく、後から続いてきた皆も一様に焦りを浮かべている。

一体何事か。それは直後に連続して襲い掛かってきた揺れが物語ってくる。

「What!?! 何があつたの!?!」

「……ベリアルが実体化して暴れだした。ゼロとあのカドー星人が応戦しているがここは危険だ」

「じゃあ、陸は……?」

説明している暇はない。鬼気迫ったヒカリに促されるまま、人と悲鳴の濁流に流されてゆく。

ようやく現状を把握したのは病院の外へと押し出されたその時。ゼロ、そしてその味方と思しき怪獣と対峙する、白と銀の、巨人を見た瞬間だった。

『へエルアアアッ!!』

巨大な爪を備えたその腕の一振りだけで突風が巻き起こり、人々の更なる恐怖と悲鳴を呼ぶ。

ゼロ達も応戦の姿勢を見せるが差は歴然。圧倒的と呼ぶのも生温いほどに、その巨人の力は絶大なものに見えた。

「ねえ……陸は？　陸はどうしたの!？」

人波から解放されたその瞬間にヒカリへと詰め寄る。

皆が危険を警告してきたあの瞬間から嫌な予感はしていたんだ。けど、それを受け入れたら何とか繋いでいるこの気力までもが折れてしまいそうで。

けれどヒカリの表情は、その考えが現実であるということを静かに伝えてくる。

「……今は、ベリアルに取り込まれている」

血の気が引いた。またも信じたくなかったことを突き付けられる。

あの絶望を体現したような存在と陸が一つになっている。辛うじて繋いでいた糸を千切るには十分すぎるくらいだった。

『へエエアッ!』

「マズイ……ッ!」

ベリアルの繰り出す斬撃の余波が眼前の建物を瓦解させ、無数の瓦礫が雨のように迫ってくる。

瞬時に自身の身体を光球へと変化させたヒカリのバリアにより事なきを得るが、既にここも安全でないことは火を見るより明らかだった。

『こうなれば俺もいく……君達はメビウスと合流するんだ』

目の前で蒼い光球が膨れ上がるうとしていいる。恐らく本来のウルトラマンの姿に戻るのだろう。

このままでいいのだろうか。心が訴えてくる。

これじゃまたいつもと同じだ。ただ守られるだけ。

別に守られることを拒んでいる訳じゃない。陸が自分を守りたいと言ってくれた時、それを受け入れたのもまた自分だから。

けどその時、ずっと陸に寄り添い続けると誓ったのも自分なはずだ。

「待って」

気付けば危険も忘れてヒカリを呼び止めていた。

自分はどうしたいのか。改めて己に問いかけてみる。

支えたい、守りたい。その想いは自分の中にもある。それは陸がウルトラマンになる前から抱いていた想いだった。

けど、今こうしてその陸を失いそうになっている今、改めて思う。

陸がそう思ってくれたように、自分だってそう。支えるとか守るとか、それ以前に――

自分をもっと、陸と一緒にいたい。

「……私も連れて行って」

『なッ……?』

紛れもない、自分の意思で口にする。

無茶で無謀な願いだということは理解している。それでも、今自分が納得できる行動はこれしかないんだ。

『……気持ちはわかるが容認できない。ここは俺達に任せるんだ』

「ただ見てるだけなんてできないよ!」

『ダメだ』

周りの制止も振り切って訴えかけるも、ヒカリが揺るぐことはなかった。

表情こそ何うことはできないが、何か強い意志が彼にそう言わせていることはわかった。

『ベリアルはこれまで君達が見てきた敵とは訳が違う……仮に陸を助けられたとしても、俺達が無事である保証はない。そんな場所に、君を連れて行くなどできない』

「危険なんてどうだっていい！ それに、私だって一度ウルトラマンになって戦ったことも——」

『彼の帰る場所に君がいなくてどうする！』

語気を強めたヒカリの凄みに数名の肩が揺れる。

それでも怯むことはなかった。この意思を曲げるつもりはないと、示すように。

「帰る場所でいたいから助けに行きたいの。それもう任せっきりになるのは嫌なんだ……お願い」

『しかし——』

『ヒカリ』

また一つ声が割り込んでくる。

振り返るがその声の主は見当たらない。その代わり、いつの間にかそこにいた千歌の隣の曜の左腕には炎を模したような赤いブレスレットが備わっていた。

『メビウス…!? 何故君が彼女と……』

『あのメフィラス星人に襲撃されてね……こうするしか救う方法がなかった』

曜の衣服は血痕と思しき赤で痛々しいほどに染め上がっていた。

メビウスが言っているのは恐らくそのこと。かつてゼロが陸にそうしてように、メビウスも一体化することで曜の命を繋いだのだろう。

『そうしたら、彼女に言われたんだ。自分も戦いたいわって』

メビウスの声に続き、曜が頷く。

「…罪滅ぼしとか、そういうつもりじゃないけど、でももう何もできずに見てるだけなん
てできないから……きつと、果南ちゃんも同じ」

その瞳の端には涙の跡が見える。きつと曜も自分と同じ、記憶が戻り苦悩しながらも、そうすることを選んだのだろう。

メビウスは、その意思を汲んだんだ。

『…わかっているのかメビウス。君がやろうとしているのは、彼女達を触れる必要のない死の危険に晒すことだぞ』

『そんなことは彼女達が一番わかっていると思うよ。それと、誰に何を言われても自分の意思を貫き通そうとしたのは僕達も同じだろう？』

かつての己を重ねているのか、数秒、二人のウルトラマンの間に沈黙が流れる。

『それに信じてみたいんだ………地球人の可能性を、彼女達の紡いだ絆を』

そう言ったメビウスの声音からは、何か郷愁や、一抹の寂寥感が伝わってくる。

そしてそれ以上に期待や確信めいたものが含まれているのは、ヒカリにも届いたのだろうか。

『………わかった』

蒼い光が収束し、再び光球となつて果南の中に溶け込んでゆく。

直後に右腕に現れたメビウスのそれと似た蒼いブレスレットが、ヒカリが自分と一体化してくれたことを教えてくれる。

『ただし覚悟は決めておけ。もう退くことはできないぞ』

「うん………ありがとう」

ブレスに手を当てつつ、曜と視線を重ねる。彼女もとつくに覚悟は固めていた。

「……いこっか」

「……うん」

猛るベリアルを前に、頭の中に流れてくる声に従いナイトブレスの光を開放する。

見据えるはただ一つ。その想いはもう、皆一緒のはずだから。

（待ってて………！）

天へ掲げられた両者のブレスが眩い輝きを解き放ち、メビウスとヒカリ、二体の巨人を君臨させた。

百四十七話　その身命を賭して

空へと昇る赤と蒼の光。

胸に輝きを宿す二体の巨人の出現に視線を集めたのは逃げ惑う人々だけでなく、この騒動の引き金である三体の巨影もだった。

『ほお…、今度は貴様らが相手か』

メビウスとヒカリを視認するや否や、圧倒的な圧を伴って距離を詰めてくるベリアル。

振り下ろされた鉤爪を両者共にプレスから伸ばした光剣で受け止めると、そのまま流れるように縦一直線に振り下ろす。

『くり返すがこうなったからには覚悟を決める。気を引き締めていくぞ果南！』

「わかってるー！」

ヒカリの感覚を通して伝わってくる圧力と緊迫感。

海が力を与えてくれた時とは違う、ウルトラマンと一体となって戦う感覚。これがい

つも陸が潜り抜けてきたものなんだ。

『デエエエイツ！』

ナイトビームブレードを駆使し、ベリアルルの攻撃をいなしつつカウンターの機会を伺う。

蒼い身体が動かされる度にヒカリの思考が流れ込んでくる。動作一つ一つの度に神経が削られてゆく感覚がした。

『セエエエア！』

「ツ…… 後ろ！」

背後からメビウスの波状光線が殺到してくるのを視認し警告の声を上げるも、ヒカリはそんなことはとうにわかっていたと言わんばかりに身体を翻して見せる。

ヒカリの身体が壁となりベリアルルに認識されていなかった光の鍔は連続して奴の身体に突き刺さった。

『ヒカリ！』

『ああ！』

ベリアルルはたった数歩の身じろぎで今の攻撃の威力を殺してしまうが、二人は既に次の攻撃の準備へと移っていた。

反撃の隙も与えまいと瞬時に奴の懐へ潜り込み、メビウムブレードとナイトビーム

ブレード、その双方を胴体目掛けて疾走させる。

「すい……」

二人のコンビネーションにまるでついていけない。

振り回されているだけで、思考も身体の動きもヒカリと同調させているとはとても言えない。恐らくメビウスの中にいる曜も自分と同じ状態だろう。

こんな戦いをいつも、何度も、陸は繰り返していたんだ。

『…地球人の気配が混じっているな……それも小娘か』

土煙の向こうでベリアル双眸が煌めく。

今の連撃が通用しなかった。身体そのものがそう主張してくるかのように傷はおろかダメージすら負っている様子は見られない。

『……随分と舐められたものだな』

「っ——」

鎌鼬のように、切り裂かれた空間の跡がそのまま襲い掛かってくるような光線が迫る。

だがそれは命中する直前にもう一人の赤と青の巨人によって防がれ、その巨人——ゼロはそのまま自分達を庇うようにベリアルの前に立ち塞がった。

『どういふことだ！ 何故曜と果南がアンタ達と一体化してる!?!』

『彼女達の意思だ』

ゼロに応えたのは最初難色を示していたヒカリだった。

果南達に覚悟を求めたように、彼もまた果南達と戦う覚悟を決めた。そんな意思を感じる。

「そうだよ！ 私達から頼んだの！」

「無茶なのはわかってるけどお願い……私達にも戦わせて」

『けどな——』

『言い争うのもお説教も後だよ後！ 今は目の前のことだけ考えて！』

ベムゼードもまた前に出て牽制の火球を飛ばすも、それは命中することなく真つ二つに叩き割られる。

『これはこれは……賑やかなことで』

また一人、爆炎の向こうに現れる影。

ベムゼードの攻撃を軽く打ち消して見せたメフィラス星人——魔導のスライは、眼前のウルトラ戦士達へ一瞥をくると自らの主へと一言。

『陛下、あまり時間がないのは我々も同様です。ここは私にお任せください』

高い知能を誇り、ダークネスファイブの参謀役でもあったスライ……ヒカリを介して奴の情報が流れてくる。

そんなスライの進言だからこそなのか、戦闘を続行する気でいたはずのベリアルもそれを聞き入れるように自らの腕を下げた。

『…仕方ねえ。スライ、ここはお前に任せる。俺の邪魔をさせるな』

『承知致しました』

『ツ…！ 待ちやがれツ！』

直後に開いた何かしらのゲートと思しき次元の裂け目へとベリアルが消えてゆき、それを追うようにゼロまでもがその中へと飛び込んでゆく。

残ったのは二体のウルトラマンにベムゼード、そしてそれらと対峙するスライの四人。

『邪魔をさせるなって言ってなかったっけ？ ゼロ君行かせちゃっていいの？』

『如何にゼロと言えどあの状態では何もできないでしょう。それよりも貴方達を足止める方が合理的と判断したままですよ』

紳士然としているが、その本性が紳士と程遠いことは知っている。

皆の記憶を書き換え、陸から何もかも奪った張本人。自然と握る拳に力が入る。

『さあ……貴方達の相手は私ですよ』

虚空を薙いだスライの剣が緊張の糸を断ち切り、四つの巨体が同時に大地を蹴る。

『セヤアツ！』

まず最初に攻撃を到達させたのはメビウスだった。

互いに斬り合う形でスライと剣を交錯させ、火花と共にメビウムブレードの光が舞う。

『如何にあのエンペラ星人を倒した勇者と言えど、剣技は私に分があるようですね』
『ぐっ……っ？』

粗削りにも思える剣線の網を容易く掻い潜ったスライは、そのまま抜刀術に近い一太刀でカウンターを浴びせる。

三対一のこの状況でも余裕を崩さないのは余程の自信があるのだろうとは思っていたが、やはり相当なものなのだろうと直感で理解する。

『これならばさほど時間は掛からなそうですね。早急に片づけて私も陛下の下へ向かうとしますか』

『舐めるな！』

メビウスとスイッチし、今度はヒカリがナイトビームブレードを斬り下ろす。

だがメビウス同様、重ねて描く太刀筋のキレが弱い。当然そんなものがスライに通用するはずもなく、ヒカリもまた前者の二の舞となってしまう。

『感情だけで突っ走るな果南！ 気を落ち着かせろ！』

『曜ちゃんも、気持ちをはわかるけどだからこそ冷静になるんだ』

別段怒りに吞まれ我を失っているわけではない。それは曜も同じだろう。けれど奴と対峙しているとどうしてもその所業と、それにより起きてしまった悲劇が頭を過る。

とてもじゃないが、一体化しているウルトラマンと同調できる状況じゃない。

『こないのならここから行きますよ』

対しスライの太刀筋には迷いも雑念もない。余計なものを一切排した、自身の信仰する主へ捧げる剣は幾度となく赤と蒼の身体を切り刻んだ。

「あ……うう……」

共有する感覚がヒカリに伝わるダメージをそのまま果南にも与える。

これがウルトラマンと一体化する、ということなんだ。痛みといった全ての感覚はリンクするし、どちらかの感情が不安定になればパートナーにも支障をきたす。

現状自分達はヒカリ達の足を引っ張っているだけだ。

「ハの……」

自分から望んでおいてこんな有様では立つ瀬がない。何とか振り払おうとナイトビームブレードを振るうも、今度は強引な突破を図ったメビウスと衝突してしまう。

先程のような連携が取れていない。そんなことは傍目から見ても明らかなのだろう。

『当てないようにかあ……難しいなもう！』

後方からベムゼードの火球が援護をしてくれるも、この様ではまるで活かせていない。
い。

このままでは陸を助けることはおろか、スライにも勝てぬままここで力尽きることとなってしまう。

『ツ……』

現状での接近戦は不利と見たか、バックステップを取ったメビウスがブレスから連射するメビウムスラッシュを殺到させるが、これもまたスライは難なく撃墜。

一部の隙も見せていないのにも関わらず、その態度は余裕然としたまま。

『そう言えば、彼女と一体化したのですねえ』

更にそれは加速してゆき、紅い双眸がメビウス……いや、正確には彼と一体化している曜を捉えた。

『彼女の命を救うためだったのはわかりますが、それが故に戦闘に支障をきたしてしまつては本末転倒なのでは？』

『お前から仕掛けてきておいて何を……！』

やはり曜の衣服を染め上げていた血痕はスライによる襲撃の跡だったか。

あのレベルの出血、メビウスがいなければ確実に命を落としていただろう。その所業にまた沸々と怒りが沸き上がってくるのを感じるが、同時にその目的がわからなくな

る。

『そもそも何故彼女を殺す必要があった。目的が陸君なら無益に命を奪う必要はないはずだ』

『ええ、その仙道陸ですよ。完全には復活されていなかったとは言え、まさか体内で陛下を抑え込むとは我々としても想定外だったのですね』

激しい攻防に伴って問答が展開される。

流石はゼロの先輩戦士か。動きが制限されている中でも最低限の戦闘は行えている。

『なので最も彼が心の抛り所としていた彼女を失えば折れると考えたのですが、まさかこんなことになるとは……』

「私が、陸の……?」

『はい。ただ脅しの材料となっただけで心までは折ることはできませんでしたがね。まあ、結果として貴方の足枷となっているので無駄ではなかったのでしょうか』

『下劣な……耳を貸す必要なんてないよ曜ちゃん。君が今できることをやれば、それだけで僕達の力になる』

「……うん……」

ベリアルが陸の身体を乗っ取れたのも、つまりそういうことらしい。

そのために曜を襲った。奴にとっては、ベリアル以外の者なんて目的のための駒も同

然なのだと改めて実感させられる。

『……つまり、決して陸がベリアルに屈した訳ではないということだな』

いよいよ抑えきれなくなってきた感情を鎮めたのは、ヒカリによるその一言だった。

彼から伝わってくるのは先程のような落ち着けという声でも、まして足を引つ張る果南に対する呆れでもない。

ただ単純に、目の前の希望を示した。暗雲立ち込めていたと思われていた状況に光を差したのだ。

『……お前は一つ大きな間違いを犯したぞ魔導のスライ』

『……はい?』

不安、怒り、自責、雑多な感情がすつと消え、ただ大切な人への一つの想いを糧にヒカリと心が重なっていくのを感じる。

そうだ。自分は、スライを倒すためにここにいるんじゃない。

原動力は怒りじゃない。陸と一緒にいたいという想いだ。

そのためだったらこんな壁、超えてみせる。

『見縊ったな、地球人を』

ヒカリと共に、大地を蹴る。

揺るがぬ決意を太刀に乗せ、全ての禍根や因果を断ち切るように振り抜く。

『まさか……よく理解していますよ』

その一刀はまたもスライに防がれるが、明らかに先の一撃よりは手応えがあった。

『…それがわかるのはこの戦いが終わってからだ。よくその目に刻んでおけ』

『今更何を——』

一発、もう一発と叩き込んでゆく度にその重みも、その鋭さも増してゆく。

そして全身に稲光のような感覚が走った刹那、遂に迸った刀身がスライを捉える。

『なああッ……!?!』

斬撃に刺突、更には光線技も。

形勢逆転……とまでは行かぬものの、ヒカリの攻撃が確かにスライを捉え始めてゆく。

『これはッ…、シンクロ率が上がっている……!?!』

『言っていたな、貴様は地球人をよく理解していると。事実それは間違っていないのだから』

見える。ヒカリがどう考え、次にどう動くのかが。

感覚が、呼吸が、一つになる。これが真の意味で一体化するということなんだ。

『人間は確かに非力だ。種族としての能力では俺達宇宙人には遥かに劣る……だが、貴様等にはない強い心を持っている。友を想い、共に未来へ歩もうとする力をだ』

暖かな光の中で円を作る六人の姿が浮かぶ。

ヒカリの記憶、なのだろうか。固く、強く、悠久の時を経ても綻びないと思わせる絆を感じた。

『だからこそこうして記憶を変えウルトラマンと地球人の紡ぐ絆の力を奪ったのでしようが！ その何が理解出来ていないと——』

『その認識こそが貴様の間違いだ。人とウルトラマン、貴様等が恐れているのはそれのみ。人間自体のことは見下している』

かつて剣豪として名を馳せたヒカリの嵐のような斬撃のラツシュがスライを飲み込む。

『俺達は知っている。どんな絶望の中でも希望を手放さなかった者達の姿を。自分達の力のみで守るべきものを守ろうとした者達の姿を！ それこそが人間の力……個々の持つ想いの力だ！』

『がッ……！ アアアアア……！』

スライは囁を嘲り、果南達がヒカリ達の足を引っ張っていると笑ったように、ウルトラマンと絆を紡いでいない人間の力を侮っていた。

実際、自分達の間には絆と呼べるようなものはない。けれど現にこうして力と想いを一人にできている。

それは紛れもなく人の持つ力が起こしたことだと、ヒカリは吠えた。

『又ウツ……！ 虚は突かれましたが、一騎打ちで負ける私では——』

『だーからわかってないとか言われちゃうんだよスライ』

反撃に移ろうとしたスライに今度こそ何発もの火球が命中する。

動揺もあつてヒカリばかりに気が向いていたのか、見るからに奴に隙が生まれてい
る。

『ボクもこの星で陸君達に触れてきたけどさ、人間、そんなヤワなモンじゃないよ』

『貴方に何が……！』

『少なくとも君よりはわかってるつもりだよ』

自信を含んでそう言うベムゼードが現れたのは、スライの真正面。

テレポーテーションでヒカリと位置を入れ替えた彼は両腕の掌底を奴へとあてがい、

最大火力で爆炎を噴出した。

『決める！ メビウス！』

「曜！」

吹き飛ばすスライの行く先で、更に熱い炎が燃え上がる。

『オオオオオオ……！』

胸に炎の紋章を浮かび上がらせたメビウスの腕の中で、太陽にも思えるほどの火球が

生成されてゆく。

『セヤアアアアアアアアツツ!!』

メビウスだけじゃない。曜の想いも乗せた莫大な熱量の炎の塊が放出される。

メビュームバースト。メビウスの技の中でも最強クラスとされるそれは大気を焦がしながら猛進し、瞬く間にスライを飲み込んだ。

『フ……ハハハハ……! まさかこの私が敗れようとは……ツ!』

炎の中で笑うスライの姿が、やがて灰となって崩れてゆく。

『これ以上のお力添えが出来ぬことをお許しください……そして、この身が…滅ぼうとも……ッ、我が、魂はッ、貴方様に……!』

遂に立つこともままならなくなったか、ゆつくりと後ろへ倒れ込む悪魔の影。

それでもなお揺るがぬのは、その身に刻まれた忠誠心。

『陛下アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツツツ!!』

最期の叫びを掻き消すように起こった爆発が奴の全てを消し飛ばす。

ダークネスファイブ、その最後の知将が崩れる。もうベリアルへの道を阻むものはいなかった。

『行くぞ!』

爆心地から上がる黒い瘴気を追うように、二人の戦士はゼロとベリアルが飛び込んで

いった時空の裂け目へと消えていった。

百四十八話 想いの行く末

お前は何をしたい。

弱々しい光の中でそう問われる。

「……」

今更何が起きているかわからない訳じゃないし、どうしたらいいかわからない訳でもない。

けれど何故か、答えられなかった。

「……どうしたいのかな」

光の収まった鞆に視線を落とす。

これをした。そんな情動は確かに存在している。けれどまた別に存在する胸のしこりがその邪魔をしてしまうのだ。

「——梨子ちゃん!？」

「つ……！」

鬼気迫ったような声に元の世界へ呼び戻される。

メビウス達がスライを撃破した直後にあちらへ誘われた記憶はある。時間にしてほんの数秒程度だろう。

そんな僅かな時間だったが、それでも目に見える変化は大きかった。

「善子ちゃんも、大丈夫ずら……？」

梨子と、善子。少なからず数秒前までは何ともなかった彼女達が同時に苦悶の表情で頭を押さえていた。

頭痛は一瞬のものだったらしくすぐに頭を上げるが、揃って千歌に向けられた顔色は良いとは言えない。

「……あ」

「ち、か……」

か細く震える声で確かに口にしたのは千歌の名前。

確か、この二人に共通して言えることは――、

「……スライが倒されて催眠が解けたんだ。当然、記憶も元に戻るさ」

横から割り入った声。今回は自分だけでなく、その場にいた全員がオウガであるとするに理解する。

あの怪獣に変身して戦っていたのは彼なのだろう。全身に傷や火傷の跡を作り、その足取りは心許ない。

「他の人間達は都合よく記憶が補完されるだろうけど、二人は自分達が催眠に掛かっていることを知っていた……だからその間の記憶が消えていないんだ」

つまり、催眠に掛かっている間の記憶がそのまま残っているということ。

別にそれ自体は皆と変わらないのだ。皆だって、催眠下の中の記憶は残ったまま。

ただ一つ違うのは、この二人だけは自力で元の記憶を取り戻していない、という点。

「ごめん……なんかまだ、混乱してて……」

罪悪感や自責の念。そんな負の感情が二人から沸き上がってくるのを感じた。

どう言葉を掛けたらいいのだろう。陸がいない今、その感情を和らげられるのは自分竹なはずなのに。

「……とりあえず、三人で話してきたら？」

三者揃って言葉を探す中、不意にオウガがそう促してくる。

陸の働きかけやそれを受けて元に戻った皆を見てきたであろう彼。だからこそなのか、その言葉には何か確信めいたものを感じた。

「何でもないことだったりするからさ、案外ね」

『二人とも、身体の方は大丈夫？』

「うんまあ、一応はね」

「…所々痛むけど」

万華鏡を覗いた時のような文様が延々と続く空間を進む。

メビウス曰く、この空間は一種のワープゲートに近いものらしく、別の宇宙に繋がっている可能性が高いそうだ。

自身の復活という目的を果たした今これ以上ベリアルがあ地球に留まる理由はないが、過去の行動やその思考を鑑みるにこのまま引くとも考えにくいというのが二人の考えだった。

『…元々ベリアルは強大な力を持っていた。ノアの光や陸を取り込んだ今、その力がどれほどになっているか見当もつかない……少なくとも、魔導のスライとは格が違うと思ってくれ』

やがて見えてきた出口を目前に、ヒカリがそう口にする。

恐らくこれは最後の忠告。退くなら今、ということなのだろう。

「……ここまで来たなら退けないよ」

「ていうか、元々退く気もないしね」

『……君達ならそう言うと思っていたよ』

互いに覚悟を再確認し、出口へ向け速度を上げる。

超空間を突破した先で広がっていたのは、今まで見たこともないような光景だった。

『（ハハ）は……！』

『怪獣墓場……？』

剥き出しの焦げたような黒い岩盤に、それらの隙間を走る灼熱の溶岩が一面を支配している。

活火山帯のようにも思えるが、それとは別に何か異質な気配を感じる。言うなれば地獄のような場所だ。

「ツ……！ ゼロ……！」

その深部、振り返った山々が連なる地点の手前に見える二つの影。

丁度、ベリアルの一撃によりゼロが吹き飛ばされた瞬間だった。

『……お前、等……！』

『ほお、スライを突破してきたか』

少しだけ感心したかのようなベリアルの視線が向けられる。

ほんの僅かだが好奇心が湧いた。そんな目だ。

『大丈夫かゼロ』

『心配ねえ…、ちつとふらつくだけだ』

肩を貸すヒカリにそう答えるゼロ。強がってはいるが、既に満身創痍であるのは火を見るよりも明らかだった。

ウルティメイトブレスによるエネルギー供給で辛うじて戦闘を継続出来ているものの、カラータイマーの点滅は先程よりも目に見えて早くなっている。

『ここまで来れたのは褒めてやる。これはその褒美だと思え』

高く掲げられたベリアル右腕に、地面から湧いて出た黒い瘴気の塊が集約している。

その数四つ。更に遅れて自分達が通ってきた空間の穴から飛来してきたものを含め、計五つとなつてベリアル周囲を漂っている。

そしてその瘴気、つい先程見たばかりのそれと全く同じに思えた。

『これが何か分かるか、ゼロ。貴様等が倒したダークネスファイブを動かしていたものだ』

『動かして……？』

首を傾げたのはゼロだけではなかった。

ただ一人、ヒカリだけがその言葉の意味を理解したようにベリアルに視線を向けていた。

『やはりそうか……奴等は、ダークネスファイブはオメガ・アーマゲドンの中で一度死んでいる』

「え……？」

ヒカリの出した結論にゼロ達が固まる中、今度はベリアルだけが笑いを見せていた。『何かおかしいとは思っていた。オメガ・アーマゲドンの際、俺は確かにダークネスファイブを討ち取ったという報告を受けた』

『けど、現に奴等はゼロや僕達の前に姿を現した。それは一体——』

『俺が蘇らせたんだよ』

メビウスの疑念に答えを出す形で、ベリアルがその真実を告げる。

『あのストルム星人と共にディザスト・スマッシュやジードを生み出す際、その失敗に備えて別な計画を並行して進める要因としてだ。レイブラッド星人の遺伝子を受け継ぐレイオニクスの力と、ギガバトルナイザーを利用してなア』

レイブラッド星人、レイオニクス、そしてギガバトルナイザー。初めて聞くその名前をヒカリから流れてくる情報が補完する。

つまり果南達の地球に現れていたダークネスファイブは、怪獣を操るレイオニクスの

力を持つベリアルによって復活させられた者達……ということになる。

『だがプラズマスパークのようなエネルギーも無しに奴等を蘇らせるのは流石に負荷が大きかった。奴等を蘇らせた代償として、ギガバトルナイザーは怪獣を役する力を失った』

『……サイドアースで怪獣をモンスロードしなかったのはそういうことか』

『ああ……だが、もうそれも終わりだ。ダークネスファイブに宿っていたギガバトルナイザーの力は、今ここに帰ってきたのだからな！』

ダークネスファイブを倒す度に空へと昇っていた瘴気の正体は、奴等が復活した際に受け渡されたギガバトルナイザーの力。

それが怪獣墓場に來た目的なのだとすれば、ダークネスファイブが全員打ち滅ぼされるのもベリアルの計画の内だったということになる。

『……ウジュイカ・レ・エガミヨ』

『レイバトスの呪文……まさか……！』

ベリアルが不可解な呪文を唱えた刹那、人魂のような炎を纏った何か瘴気と共に奴の手の中で融合してゆく。

やがて形を成したのは、両端に幾つもの光点を宿す、棍棒状の武器だった。

『ギガバトルナイザー……！』

『冥土の土産だ。最後に味わうがいい』

また別の光が、ベリアル腕から怪獣墓場の大地に注がれてゆく。

途端、地面そのものが命を宿したかのように鼓動を始め、幾千もの咆哮が轟いた。

『怪獣達の魂が……!?!』

『野郎オ……ノアの光で……!』

魂。そう称されたように、亡霊を思わせる怪獣の形をしたものが何体も地面から這い上がってくる。

その全てをギガバトルナイザーで吸収して見せた後、ベリアルは終焉を告げるように、宣言した。

『百体モンスロードツツ!!!』

「……身体、大丈夫？」

「え……？」

「ほら、あの黒いウルトラマンに取り込まれてたつて言うから……」
「ああ……うん。だいじよぶ」

気の抜けた会話が続けていた。

オウガは得意気な顔をしていたが、正直気まずい。

大好きな友達だったはずなのに、今も大好きなはずなのに。

「……なんか、浮かない顔ね」

しばらくそんな空気を漂わせていると、流星に訝しまれたか善子に首を傾げられてしまふ。

「やっぱり、陸君が心配？」

「……」

言葉に詰まる。

そう思っているのは確かなはずなのに、どうしてかそうだと答えられない。

「……もしかして、やきもち焼いてたりする？」

「え？」

「ああごめんね、変なこと言って。でもなにか、やきもちってほどじゃないけどそんな気がして……」

否定しようとし、留まる。

そうだ、まだどこかひとりぼっちな感覚がしたんだ。

皆記憶が戻っていくのに、皆も、自分自身も、陸のことばかりでそれどころじゃなくて、心に空いていた穴がそのままだった。

「ごめん……本当に。なんて謝ったらいいのか……」

「…梨子ちゃん達が悪いんじゃないよ」

その受け答えが更なる苦しさを呼び、ぎゅつと手の中のエボルトラスタを握る。

こんな話があったんじゃない。もつと普通を感じたい。まだそんなことを考えてしまおう自分がいる。

そんなこと言ってる場合じゃないのに……最低だ。

「……千歌ちゃんは、一人なんかじゃないよ」

「それ……」

梨子がポケットから取り出したのは、桜色のシユシユ。

自分の気持ちに素直になって。そう伝えた千歌に伝えて東京に向かった梨子が、皆に送ってくれたもの。

「なんで持っていたのかもわからなかったけど、手放しちやダメな気がして、ずっと持ってたんだ」

離れていても心は一つ。このシユシユを付けてライブをした時、そう思ったのを今で

も覚えている。

もしかしたらそう思ってくれていたのは、梨子も同じだったのかもしれない。

「こんなこと私が言うのは都合が良すぎるのかもしれないし、烏澁がましいかもしれないけど、覚えてたんだと思う。記憶じゃなくて、心で。千歌ちゃんに救われたこと」

ちゃんと繋がってた。梨子の目はそう語っている。

ふと思り返す。千歌との関りがなかったことにされているのならば、スクールアイドルに触れてからの彼女も存在しないことになるはずだ。だが、時折見た梨子の表情や仕草はスクールアイドルを始めてからのそれそのものだった。

それはつまり梨子の中で千歌という存在が消されても、千歌が残したものは変わらなかったということ。

「…私だってそうよ。感謝してるのは、同じ」

続き、善子がそう零す。

見上げると、嘘のない澄んだ目がそこにあった。

一人になっても、何もなくてもいなくなかった。

自分が勝手に、そう思い込んでいただけで。

「こつちが忘れておいてなんだって話よね……でも、そう思ってるのは本当。あの時、千歌が手を差し伸べてくれたから、私が私でいられる場所できてくれたから、今の私があ

るの」

照れているのか、微かに赤い頬を掻きながら伝えてくる。

思えば、不登校だったはずの彼女も記憶や史実の改変に関わらず学校生活を送っていた。

「…千歌にその気がなくなつて、それで救われたのは私だけじゃないと思うわ。だから記憶がなくなつても、そこだけは変わらなかつたんだと思う」

梨子にも、善子にも、自分が言ったことは一つだった。

「…自分の気持ちに素直になつて、そう言ってくれたのは千歌ちゃんだよ」
自分の気持ち。

そもそも、普通を感じたかったのも、この状況から目を逸らしたがっていたのも何故だったか。

全部皆が好きだったから、皆のいるあの時間が好きだったから、そのはずだ。

自分は今どうしたいのか。

あの日梨子へそうしたように、改めて自分自身に問いかける。

今度はハッキリと答えられた。自分はいつも通りがいいんだ。

皆がいて、同じことに向かって全力で駆け抜ける、あの日常を取り戻したい。最初からその想いだったはずだ。

「……！」

答えを出せた千歌の心に呼応するように、手の中で灯る光。

望むのなら応えよう。そう言ってくれているようだった。

「私、皆と一緒に輝きたいんだよ。まだ何も掴んでないから、今こんな形で誰かが欠けちゃいけないんだって」

孤独に耐え兼ねて、唆されて、脱線していつてしまったけど。

元を辿れば全部、皆といたい、その想い一つだった。

「だからお願い……もう一回、力を貸して」

羽のように広がった光に包まれる。

やがて形を成した巨人——ウルトラマンネクサスは、その想いを、光を繋ぐ場所へと、飛んだ。

百四十九話 反撃の光

声が聞こえた。

果てしない闇の中、確かに、その過去を垣間見えるような響きで。

—— 絶対的な力を持った者が全てを支配すれば、宇宙は平和になる
彼なりの正義が。

—— 超えてやる……！ 俺を見下したアイツ等を……！！

それが故に起きた悲しみが、抱いた怒りが。

—— ウルトラ戦士の心なんてのは、何万年も前に捨てたよ

—— 俺は完全復活を遂げた……光の国への復讐の時だ！

もう戻れなくなるまで、歪んでしまったその心が。

全部、全部、その心を通して伝わってくる。

ベリアルだって、始めから歪んでいた訳じゃない。些細なズレが誰にも理解されることのないまま膨れ上がった、闇の塊。それがベリアルなんだ。

「……リクさん、俺は……」

かつてジードも、朝倉リクも、同じものを見て、感じたのだろうか。

だったら、同じベリアルに生み出された者として何が出来たのか。闇の中で、深く自問を繰り返した。

地獄の様相を呈しながらも静けさを保っていたその場所は、一瞬にして本物の地獄へと変わった。

無数の怪物が揺らす大地。絶えることなく上がる咆哮。これを地獄と呼ばずしてどう呼ぶのか。

「あ、う……」

「曜……しっかり……!」

身体が言うことを聞かない。

ベリアルが怪物達を召還してどれほど時間が経ったのか。少なくとも、自分達がこうやって地を舐めるまでにはそう時間は掛かってないのは確かだ。

『もう全滅か……？ 張り合いがねえな』

怖い、怖い。刹那に生まれた感情がどんどん膨れ上がってゆく。

ダメージ以上に、恐怖で身体が動かない。救いたい想いも渴望もまだ燃えているのに、それすらも覆ってしまうほどの恐怖心が押し掛かってくる。

『クツ……ソ……！』

危機を知らせるカラータイマーの点滅も加速する一方。ゼロも、メビウスも、ヒカリも、もはやその力も底を尽きかけようとしていた。

『ゼロ……お前は最後の楽しみだ。まだ殺さん。だがこの子娘どもは……』

「かッ……、あ……！！」

「果南ちゃ……！！」

腹を襲った衝撃に意識を手放しかける。

その殺意が本気であることはもはや語るまでもなかった。

『地球人の分際でこの俺の前に立ったことだけは褒めてやる……だが、それもここで終わりだ。死ぬ』

ギガバトルナイザーに稲妻が集中してゆく。

直後に振り下ろされたそれが唸りを上げ、ヒカリもろとも成す術もない果南を貫こうとし——、

『又ウツ……!?!』

音もなく飛んできた光刃にベリアル動きが止まる。

その一瞬、危機を逃れたヒカリは即座にギガバトルナイザーの射程距離から外れる。

『シイヤツ!』

『ウオオオ……ツ!?!』

続けて銀色の光芒が伸び、今度こそベリアルに炸裂する。

その軌跡を追った先で地面に降り立ったのは白銀の巨人。異質な気配を放ちつつも、

その者もまたウルトラマンであることはすぐに理解できた。

『ネクス……!』

ゼロが口にしたその名には聞き覚えがあった。

陸の真実を聞いた際、あのオウガとかいう宇宙人が口に使っていた、千歌の中にいるというウルトラマン。

それが今こうして自分達の前に現れているということは……、

「千歌……？」

彼女の名を呟く果南の先で、ネクサスはベリアルへと迫る。

残像すらも生む速度で一気に奴へと肉薄すると、その勢いのままに拳を打ち出す。

『ノアか……今の貴様に何が出来る！』

ベリアルは軽々とそれを防いだ上で弾き返して見せると、召喚した怪獣達を操りネクサスへと進行させる。

途端に幾重もの火炎や光弾がネクサスを飲み込み、轟音と共に爆ぜた。

『オオオオ……！』

かに見えたが、爆炎すら寄せ付けないほどの光が轟音の中心地で瞬く。

水面に生じた波紋のような光はネクサスへと注がれ、やがてその肉体に赤い輝きを宿す。

『ほお……』

劣弱の鎖を砕き、内なる己を信ずる煌めき。

深紅のネクサス——ジュネッス。デュナミストの心に呼応しネクサスが発現するという力の一つだ。

『シューアア！』

高速で空中を舞うネクサスの両腕から射出される三日月形の刃が次々と怪獣を射抜

いてゆく。

雨のように降り注ぐそれらはやがて怪獣のみならずベリアルにも襲い掛かり、連続して爆音が上がった。

「すげーい……」

ゼロやヒカリ達が劣っている訳ではないが、その戦い方はまるで違う。

スピーディーでその動きにも無駄がない。それは千歌とネクサス、二人の心が重なっている何よりの現れにも見えた。

『小癩な……だが！』

ベリアルの指示で怪獣達の攻撃に訪れる変化。

波のようにリズムよく押し寄せてゆく火球の群れはまるでネクサスの動きを誘導しているようにも思える。

そして――、

『『『ツツ――！！！！』』』』

『グアアアアア……ッ！』

遂に光弾の一つがネクサスを捉えた。

一度当たればその後も二発、三発。次々と命中する攻撃にネクサスの高度が下がる。

『へエエエヤッ！』

早々にカタを付ける気か、ギガバトルナイザーによって描かれた軌跡が鎌状の光線——ベリアルデスサイズとなつて一直線に疾走。その軌道線上にいた怪獣を数体巻き込みながら迫る。

『オオオ……！』

素早く着地すると、流れるように両腕を下方で交差させるネクサス。

徐々に広げられてゆく両前腕に雷が集束してゆき、ゼロのそれと同様にし字に組み込まれた瞬間、絶大なエネルギーが吹き荒ぶ。

『ジイイヤッ！』

オーバーレイ・シユトローム。

スペースビーストと呼ばれる怪物すらも一撃で消滅させるといふ、ネクサスの必殺技。

『チイイツ……！』

自身の光弾が一瞬のうちに消滅させられたのを見るや否や、雷撃を纏わせたギガバトルナイザーを振るい光線の進路を曲げるベリアル。

着弾した怪獣達が消滅していくのを気にも留めず、むしろ更なる興奮を生んだかのようになら高笑いした。

『これが貴様の力か……絆の戦士！』

遂に興味が勝ったか、群がらせていた怪獣達を下げると自らの身で突撃を開始する。それに応えるよう、ネクサスもまたベリアルへと駆けた。

『ハアアア……！』

その中で、またも光の波紋をその身に浴びたネクサスが変化してゆく。

自身の光を走り抜き、未来へ羽ばたく群青の翼。

蒼きネクサス——ジュネツスブル。

『シィイヤー！』

『ヌウアアアッ！』

右腕から伸びた光の短剣がギガバトルナイザーと衝突し、ギリギリと音を鳴らす。

蒼いネクサスの力はまだわからないが、少なくとも、パワーにおいてはベリアルが勝っているようだった。

『オオオラッ！』

競り勝ったベリアルがネクサスを押し飛ばす。

続きその得物の先端から鞭状の雷撃を伸ばし敵を打ち付けんとするが、それは何かにヒットすることなく地面を砕くこととなる。

『甘い！』

ジュネツスよりも数段早い速度でネクサスはベリアルの背後へと周る。

だが見切られていたか、武器を持たぬ方の腕から放たれた黒閃がその頭部を撃ち抜かんと奔った。

『ッ……!?!』

その黒閃がネクサスの腕で廻る。

徐々に浄化され純粋な光となったそれは蒼い拳に乗り、ベリアルへと還される。

『デアアツ!』

『ぐおおっ……!』

遂にベリアルへ到達した一撃。

ダメージは微量でも、それは大きな意味を持つ。抗えない絶望じゃないんだ。

一縷の希望が灯るも——それはまたすぐに掻き消えることとなる。

『ハアアツ!』

『ジュア……ッ!』

カウンターの威力を殺すことに成功するも、青かった胸の輝きが点滅を始めてしまう。

ここに来るまでの移動に、ベリアルとの戦闘。そして何よりオーバーレイ・シユトロームでのエネルギー消費……やはり負担は大きかったらしい。

『やはり、完全には力を発揮できんか』

蘇りかけていた光も大半をベリアルに奪われてしまっていたネクススもまた満身創痕だったのだろう。

それでも辛うじて戦えるまでの光を掴んだのは、きっと千歌の決意がそうさせたから。

なのに、自分達が地を這いつくばっていてどうする。

「ヒカリ……………」

『ああ…………』

一人で立ち向かってきたんじゃない。

どんな時だって近くに皆がいて、一緒に向き合ってた。

向き合うものが変わったって、離れていたって、それは変わらないはず。

「千歌…、陸……………」

残された力全てで立ち上がり、目の前に聳える巨大な影へと突き進む。

弾かれ、薙ぎ払われ、それでも進むことをやめない。やめたくない。

諦めたくないんだ。

『デエエエエヤッ！』

『ゼ……………口オ……………！』

何度目かの突撃かわからなくなったその時、ゼロの叩き込んだ炎の一脚がベリアルの

体勢を崩す。

繋ぐ。また地に落ちたゼロの双眸からは、そんな思念を感じ取った。

『行けエツ!!』

ゼロの後押しと声を受け、メビウスと共に両脇からベリアルを抑え込む。

果南も、曜も、ゼロも、皆も、気持ちは一つ。だから繋ぐんだ。

「千歌ちゃん!」

「千歌ツ——!」

自分達の信じる、千歌希望に。

『オオオオ……!』

突き出されたネクサスの右腕に集約していく光。

やがて解き放たれたそれは不死鳥の如く羽を広げ、金色の光を以ってベリアルへと突

き刺さった。

『グツ…オオオオ……!』

『シィヤアツ!』

全身全霊を込めた光の矢——オーバーアローレイ・シユトロームが作った小さな入

口。

その中へと手を差し伸べるようにネクサスもまた自身を光へと変え、友の下へと飛翔

した。

「陸ちゃ——んッ！」

光が差した。

闇そのものが広がるその場所を照らし、あるべき方へと導くような光。

「千歌……？」

纏わりつく瘴気が見せていたベリアル過去の記憶が晴れ、彼女の顔が映る。

今度こそ陸の手を離すまいとする。光を背に手を伸ばす千歌には、もう迷いなどは感じられなかった。

「戻ってきて陸ちゃん！ 皆待つてるから！」

手を伸ばしかけ、また下げる。

戻りたい。そう思っているのは陸も同じだ。けど、ここでその手を掴んでしまえばまた誰かが……、

「誰も欠けてないよ……曜ちゃんも、果南ちゃんも、皆、皆待つてる！」

大丈夫。千歌の瞳はそう語る。

誰も離れてない。皆傍にいる。そう伝えてくるように。

「皆そうだよ！ 皆、皆が大事なんだよ！ だから今も繋がってる……誰も欠けちゃいけないんだよ！」

光が一層その輝きを増す。

眩いそれが示したのは希望なのか。抱く不安を払うように、優しく、されど力強く、陸を照らした。

「私のもつと……皆といたい！」

零された、彼女の願い。

「陸ッ——！」

「ッ……！」

それに続くように、光の奥からまた声が聞こえた。

曜に、果南。それだけじゃない。声としては聞こえなくとも、確かに皆を感じた。

「陸ちゃんッ！」

あの時掴めなかった……掴まなかった腕を、今度こそ掴む。

その瞬間、わかった気がした。

(そっか……)

突き放されて、孤独になって、それは誰もが成り得る可能性だ。

陸も、千歌も、一度それを経験した。けど、それでもこうしてまた誰かの手を掴めて
いるのは、きつと——、

(ベリアル……お前は……——)

『がッ…、アアアアアッ……!!?』

カラータイマーを中心にベリアルの肉体が輝きだし、直後に解放されるように銀色の
巨人が飛び出してくる。

その掌の中にある影を確認すると、全員に向けヒカリは叫んだ。

『撤退だッ!』

一旦の目的は果たした。もうこれ以上勝ち目のない戦いを続ける必要はない。

その号令に続き、全員、一齐にゼロの開けた空間の穴へと急加速する。

『逃がすか……!』

だがベリアルもタダで譲るつもりはない。

一時的に陸を取り込んだことで復活を果たしたが、彼を完全に吸収することでより強
大な力を振るえる。力を求めるベリアルにとって、取り逃す訳には行かないのだろう。

数も余力も圧倒的に向こうの優勢。全速で逃げるも、その魔の手はすぐ背後にまで迫って――、

『ストリウム……光線ッ!!』

『又ウウ……!?』

天より伸びた七色の光。

自分達を援護するようにベリアルを襲ったその光線には、ゼロ、メビウス、ヒカリ、その全員が誰のものであるかを理解したように顔を上げた。

『タロウ教官……何故ここに』

両腕をT字に組んだ姿勢でベリアルと睨み合うのはウルトラマンタロウ。

そしてそのタロウの背後には、数十人ものウルトラ戦士が。

『ベリアルが怪獣墓場に向かったという知らせが宇宙警備隊に入ったんだ。カドー星人……と名乗る宇宙人からだった』

宇宙警備隊。その隊員である戦士達から放たれる光線の雨が怪獣の群れを薙ぎ払ってゆく。

『ここは我々に任せて君達は退くんだ!』

『恩に着る……行くぞ!』

咆哮に爆音、そしてベリアルの怒号。

戦いの息吹をその背中で感じ取りつつ、次元の穴へ飛び込んだゼロ達は皆の待つ場所へと向かった。

「……さーて、やれることはやれたかな」

暗くなり始めた空から降りてくる一筋の光を見上げ、カドー星人オウガは誰に聞かせるでもなく一人呟く。

ウルトラサイン……スライヤヤプールからの見様見真似だったが上手くいったようで何よりだ。

「こんなのでベリアルがどうにかなるとは思えないけど……それでも希望は繋いだ」
遠く見据えた先でまた一つ輝きが瞬く。

遂に戻ってきた九人と、もう一人が作る輪。抱き着き、泣きじゃくる幼馴染達にもみくちやにされる少年を眺めながら、オウガは静かに笑った。

「……君達は、どんな未来を描くんだろうね」

百五十話 俺が俺らしくいるために

夜闇に隠れ始める太陽が見せる夕空のコントラスト。

その空の下でカツカツ、キュッキュと床を叩く靴底の音が重なって響く。この時間は自分だけの特権のような感じがして好きだ。

「ルビイちゃん、そこもつとステッブ大きく」

「は、はいいい！」

「花丸ちゃんも、気持ち早めで」

「ずらあ〜」

「よし！ じゃあ全体合わせてやってみよう！」

とは言っても、漂う緊張感は本物だ。残り少ない限られた時間の中、ただ一つ見据えた目標へと全力で突っ走っている。

「……なんか、やつと戻ってきたって感じだな」

『言うほど時間は経ってねえはずなんだがな……なんか懐かしいぜ』

スライが倒されたことにより催眠は解け、世界の歯車はまた元通り回り始めた。失ってから気付く……とかいうやつなのだろうか、何気なかつた光景は前よりもずっと尊く感じる。

「……………戻ってきたんだな」

ベリアルから解放され、ようやく全てを取り戻せたあの日。

すぐく謝られたし、またすぐく謝った。今となつては反省するばかりだ。

「…それで、ベリアルは？」

『さあな……宇宙警備隊の方もまだ行方を掴めていないらしい』

宇宙警備隊により追い詰められたように思えたベリアルだが、戦闘の最中使役する怪獣の能力を使いその場から姿を眩ませたらしい。

その後は何の音沙汰もないとのことだが、奴のことだ。このまま終わるとは考えられない。

「そういうや、俺のことはどうなるんだよ。一応俺、ベリアルの遺伝子、持つてる訳だし……」

『一応今のところは経過観察ってことになったら嬉しいぞ。メビウスとヒカリが相当掛け合ってくれたってよ』

「……………そっか」

メビウスとヒカリ。彼等にも相当助けられた。

ヴィラニアスの件から、陸の救出、何から何まで。彼等がいなければ、今こうして元の日々を嘯み締めることすらも出来なかつただろう。

「…全部終わった後でいいからさ、師匠にお礼言つといてくれよ、曜のこと」

ベリアルを通して見せられた曜が殺害される様。メビウスが一体化しその命を取り留めてくれていなければ、陸も皆も、本当にどうなつていたかわからない。

話す間もなく光の国へと帰還してしまつたが、もしまた顔を合わせる事があれば、その時は自分の口で礼を述べたい。

「それとヒカリにも……ちゃんとハッキリ伝えてくれたから、俺も向き合えたからさ」
『……おう』

自分の生まれ……その全てを受け入れ切れた訳じゃない。正直今も、狂いそうなほどに苦しい時もある。

でも逃げないと決めた。皆がいれば、皆に貰つたものがあれば、向き合つてゆける。そう思えた。

「もーう！ まーた暗い顔してる！」

感情の独白に耽つていると、いつの間にかその皆の視線が自分へと向いていた。

既に最後の練習を終えたのか、各々タオルや水筒など終了の合図である私物を手に

取っている。

「もしかして聞いてなかったの？ 今の話」

その皆の内の一人、Aqoursのリーダーである千歌がふくれっ面を寄せてくる。スライによる人々の記憶改変以降、精神的にかなり消耗していた彼女だが、今では見ての通り持ち前の明るさを取り戻している。

家族の方とも特に問題は起きなかったようで、今はもう完全に元の生活に戻れているようだ。

「…ああ、ごめん。それで何話してたんだよ」

ネクサスの件もあるが、彼女自身が問題ないと言っていた以上あまり詮索する必要もないだろう。

それより今は聞き逃した話の内容を知るのが先決だ。

「ふっふ、それはね……鞠莉ちゃん、どうぞー！」

妙にハイテンションな千歌により回答のバトンが鞠莉へと渡される。

その鞠莉もまた見るからにご機嫌がよく、彼女を象徴するような声量とイントネーションでその答えを告げた。

「合宿デース!!」

「……職権乱用じゃねーのこれ」

「まあまあ、皆合意の上だから……」

トントンと小気味よいリズムを奏でながら腕と口を動かす。

慣れた作業ではあるが、見慣れぬ場所、なおかつ隣に彼女がいるとどうにも落ち着かない気分になる。

「しっかしまたなんで急に合宿なんて……明日には東京向かうんだろ？」

「……だからだよ。だから少しでも長く、ここにいたいんじゃないかな」

今日はAqours全員で浦の星に泊まる。鞠莉によって陸がそう告げられた時は、皆もうその提案を知った上で受け入れていた。

この生徒ではない陸にはいまいちその感覚は薄い、浦女はAqoursにとって、学校の皆にとって大切な場所。

この場所が好きで、だから守りたくて。

必死に足掻いて、それでも叶わなくて。けどその度に新たな目標を見つけて走つてこられた。

嬉しいことも辛いことも全部ひつくるめて、皆で培つてきた思い出がある場所。

だからこそ決勝前に、少しでも学校の皆の想いをここで感じたかったのかもしれない。

「……ま、そこに関しちゃう俺が口出すところじゃねーか」

再びトントンとここに放り込まれた時には既に用意されていた食材を刻んでゆく。

合宿にあたって陸と曜は夕食担当だという鞠莉のご指名だった。何というかこう本当にフリーダムだ。

「っ……」

鞠莉もそれを理解した上でこの配置にしたのかはわからないが、曜と二人きりという状況がどうにも落ち着かない。

記憶が書き換えられている間は彼女を元に戻すことに必死過ぎて気に留めてなかったが、月の一言でそれを意識してしまったことが今になって……。

「……なんか、久しぶりだね、こういう感じ」

「そうか……？」

もう十七年は一緒にいるはずなのにどうして今更こんなことになるのか。

自分が意識してしまっているだけならまだいいのだが、どうしても曜に言われたあることが頭から離れない。

「これでいいかなあ……と、陸ー、ちよつと味見してみてー」

「うえっ……?」

不意な一撃に今度こそ漏れる情けない声。

どうしてこう次から次へと、コイツもコイツでわかってやっているのだろうか。

「……どうしたの急に」

「いや、なんでもない……」

前にもそれっぽいこと言っていたので狙っているかと思っただがこの顔は無意識にやってる顔だ。

意識しすぎなんだと自分に言い聞かせ、曜から受け取ったそれを口に含む。

「……?」

途端、本来あるはずのそれと共に火照っていた顔の感覚も消えてゆく。

「あり? なんか変な味でもした?」

「ああいや、大丈夫だと思うぞ?」

不安気な顔をする曜へ咄嗟に誤魔化しの言葉を向ける。

この時抱いた違和感は、この先も消えることはなかった。

夕食も済んで数時間、皆が寝静まった夜中。

浦女の屋上から見上げる夜空には視界に映りきらないほどの星空が広がっていた。

「……星ってこんな綺麗だったんだな」

余裕もなく、止まることもできずにただ突っ走ってきて。

ふと立ち止まり見上げた星々は、いつも見るそれよりも輝いて見えた。

『……なあ陸、前にお前言ってたよな、最後まで戦いたいって』

「……なんだよ急に」

『……お前の気持ちは尊重するつもりではいる。けど正直、俺自身はこれ以上お前を戦わせていいのかわからない』

そう零した相棒からは、何か哀願めいたものを感じた。

『……おかしくなってるんだろ、身体』

「……」

あの後自分で味見をした時、そして夕食の時も違和感はなかった。

それでも曜に味見を求められたあの一瞬、味を感じられなかった瞬間があったのは確かだ。

『違和感とまではなつてなくても、今お前の身体は少しづつ変わってきてる……お前が一番気付いてるはずだろ』

味覚が薄くなりつつある反面、逆に視覚、聴覚といった感覚器官は鋭くなってきている。

まるで戦闘に必要なものを削ぎ落とし、戦うだけの身体に変化していつているようだ。

「……ベリアルに取り込まれてたせいかな？」

『さあな……けど、直接アイツに触れたことでお前の中のベリアル因子がより活性化したとも考えられる』

これまでもそうだったように戦いを続ければ陸の中の遺伝子は更に活性化するだろうとゼロは続ける。

ディザスト・スマツシユは戦うために生み出された先兵、生み出された過程こそ違えて同じ存在である陸が同じ身体に変化するのも不思議はない。

『それに——』

「……人間としての俺の身体がベリアルルの力に耐えられなくなってる可能性もある……ってことだろ」

かつてオウガは言っていた。アイツ以外のデイザスト・スマツシユは皆植え付けられたベリアルルの力に耐え切れず死んでいったと。

元々ウルトラマンが人間に近い姿をしていたこと、そして陸の場合は生まれる前からベリアルルの遺伝子を持つていた。そのためある程度の力には耐えられたが、その力が大きくなればなるほど身体への負担も大きくなる。

身体能力や耐久性ではきつと地球人は宇宙の中でも低い部類に入るはずだ。

いざその力の負担が人間としての部分の限界を超えた時、陸の身体は耐えきれぬのか……という話だ。

「この先も生き延びることを諦めるつもりはないよ……けど、ここで逃げ出すつもりもない」

ベリアルルは再び陸達の前に現れる。そんな確信があった。

勝てる保証なんてないし、仮に勝っても陸が無事である保証もない。

それでも逃げ出すということだけは出来なかった。

「親父達のこととか、俺の生まれのこととか、多分一人じゃ耐えられなかったし、何なら人間のままいられたかもわかんない……けど、俺が人間のまままでいられるのは皆がいたから、皆が作ってくれた今の俺があつたからなんだよ」

千歌、曜、果南、梨子、花丸、ルビィ、善子、鞠莉、ダイヤ。皆と触れてきたからこそ今の陸がいる。

今まで皆と一緒にいた中でやってきたこと。それこそが陸が陸である証のはずだから。

「…死ぬのは怖いけどさ、ここで命惜しさに逃げ出したら、俺自身を否定することになる……それはもつと、嫌だからさ」

我儘なのはわかつてる。

けどこれは、貫き通さなければいけないことだから。

「だから……最後まで俺でいたいから戦うんだ」

『……何言っても無駄か』

それ以上は何も言ってこなかった。

そこまで言うなら覚悟を見せてみる。そういうことなのだろうか。

『なんつーか……よかったよ、この星で一体化したのがお前で』

「俺もだよ……お前いなかったらどうなってたかわからんしな」

いずれは壊されていたとはいえ、ゼロと出会わなければもつと平穩に過ごせていたのかも知れない。

けど後悔はない。間違いなくゼロだって今の陸を形作った一人だから。

「……何最後の別れみたいな話してるのさ」

「……曜？」

夜風に乗って耳朶に触れたのは彼女の声だった。

儂い含みで笑みを見せると、そのまま隣に腰かけてくる。

「…明後日にゃ決勝だろ、寝てなくていいのかよ」

「……なんか眠れなくてさ」

ゆつくりと時が流れ、海岸の波の音が聞こえる。

今日の夜は静かだった。

「……いなくならないよね」

とさりと、曜が身を寄せて体重を預けてくる。

離すまいといった様子で腕を掴んでくる彼女の両手は、心なしか震えているように見

えた。

「…聞いてたな」

「(ゴ)めん……」

タイミング的にもしやとは思っていたが、やはりか。

恐らく味見の感想をはぐらかしたあの時にはもう違和感に気付かれていたのだろう。

「いいよ、言わなかった俺が悪いし」

「大丈夫……なの？」

「さあ？　正直わからん」

あつげらかんと答えると目を丸くされた。まあ話題に対して態度が軽すぎた感じはあるが。

けど実際そればかり気にしてもキリがないのも確かだ。

「大丈夫……なんて無責任なこと言わないけどさ、でもいなくなるらないよ」

それより今はそう思うことの方が大事なはず。

自分が犠牲になるつもりはないし、この先の未来も諦めない。改めてそう口にする。

「……やっぱり、聞いてもいいかな……あの日の答え」

それに対する曜の言葉は、少し意外なものだった。

そう言えば彼女に想いを伝えられたのもこの場所だったか。

まだ答えはいらない。そう言っていたはずの彼女がどうして今それを口にしたのかはわからない。

けどただ一つ確かに感じるの、不安。

「悪い……今は答えられない」

それを理解した上で回答を拒んだ。

こんな形で答えを出すのは陸としても、また曜としても不本意なはずだから。

それに――、

「……今ここで答えたら、やりきったってなっちまうかもしれないからさ。だから……」
実際、答えは殆ど決まっている。

でもここで口にするのは一つ、陸の未来への渴望を減らすことになるから。

「……………全部終わったら、答えを出すから」

「……うん……」

頭を撫でたその手に伝わる暖かさ。

この温もりが確かなものである限り、前を向ける。改めて強くそう思った。

「……………敵わないね」

屋上へと続く扉を背に、八つの足音が階段を下ってゆく。

「さあ、大事な決勝が近いのです。あまり夜更かしは出来ませんよ」

「……………そうだね」

改めて認識した彼の気持ち。少し寂しさはある。けれど落胆はなかった。皆がいる。一番大事なのはそれのほすだから。

それぞれの思惑と共に夜が深まってゆく。
決戦の日は……もう、すぐそこまで迫っていた。

百五十一話 その場所へ

「……と、まあ、俺はこんな感じでやってるよ」

早朝の、まだ薄暗い時間帯。

まだ低い位置にある太陽の日を浴びつつ、墓石の並ぶ場所で陸は一人誰かへと語り掛けていた。

「じゃ、そろそろ行くわ。アイツ等の姿、見届けないとだし」

返答は返つてこず、ただただまだ真新しい墓石が朝日を反射している。

A qours のこと、ゼロのこと、そして陸自身のこと、色々話した。

どこまでこの人達に届いているかわからないけど、陸がこうしたいと思つたことだから。

「……また来るから」

本当の意味で会つたことはないし、それはこの先も叶うことは絶対がない。

それでも向き合うことはやめたくなかった。この辛い記憶も、今陸がここにいる証だ

から。

『……………もういいのか?』

「あんま長居する訳にもいかないしな」

両親の眠る地から足を踏み出すと、一気に加速。

人気もなく閑散としている朝の街並みを風のような速度で突っ走り、彼女達の下へと戻る。

「……………お話、できた?」

浦女の前まで戻ると、既に準備を終えた皆が校門の前で並んでいた。

「聞こえてたかはわからんがな……………そっちももういいのか?」

その問いかけに頷かない者はいなかった。

この時のためにすごく練習した。

朝も早くから夜も遅く、たまに弱音も吐いたけれど、皆一度もサボらずに頑張った。

その日々が全部、この学校には詰まっている。

「それじゃ、行こっか」

楽しいことも、辛いことも、幾重にも重なる過去を束ね、彼女達は今、憧れの舞台に立とうとしている。

皆の愛した学校、浦の星女学院の名前を刻みに。

『『行ってきます!!!』』

『何……? 第五部隊が全滅……!?!』

『はい、同様に第三、第七部隊とも通信が取れない状況にあります』

光の国。宇宙警備隊本部。

その支部長であるウルトラマンタロウに、ベリアルを追跡していた部隊の全滅情報が届いた瞬間だった。

『反応が消失した地点はどこだ?』

『はい……第五部隊がベリアルを捕捉したという地点がM80球状星団付近。そして他の舞台の反応が消失したのは……アナザークライシスの起きた宇宙です』

『なんだと……!?!』

その報告にタロウだけでなく、周囲の隊員達や別部隊の指揮を取っていた兄弟達にも

激震が走る。

つまりベリアルはまたあの地球へと向かっているということだ。

『今まで我々が追っていたのはフェイクだったと思われます……その隙にあの地球へ向かったのかと』

『何ということだ……』

ダークネスファイブを失った今ベリアル一人でそんな芸当が出来るとは考えていなかったが……認識が甘かった。

ともかく起きてしまった以上悔やむのは後だ。今は全力で、あの悪魔の進行を阻止しなければ。

『君は大隊長への報告を頼む。私は先にベリアルを追う。メビウス、君も同行してくれ』
『勿論です！』

早急に部下への指示を済ませ、弟子と共に光の国を飛び出す。

その双眸にはかつての厄災を二度と繰り返すまいという、強い決意が現れていた。

東京の街に来るのは、これで三度目か。

一度目に現実に打ちのめされ、二度目に自分達の進む道を探しに。

そして今回は……その答えを示すために。

「oh! 変わらず beautiful!」

神田明神。ここに来ようと提案したのは千歌だった。

この場所に行ったという憧れのグループの後を追ひ、その輝きを知った上で自分達に何が出来るのかを模索した。

その答えを得ることが出来たのかはまだわからない。

けど抱くものも見える景色も前とは違う。その想いを胸に、A q o u r s は三度その地を踏む。

「…じゃあ、お祈りしよっか」

千歌に続き、皆も賽銭を投げ入れては手と手を合わせる。

「会場の全員に想いが届きますように」

「全力を出し切れますように」

「緊張しませんように…」

「ずらって言いませんように……」

「…全てのリトルデーモンに喜びを」

「浦の星の皆の想いを」

「届けられるような歌が歌えますように」

「明日のステージが、最高のものになりますように」

皆口にする言葉はそれぞれ違う。

けれどその先にあるのはただ一つの、純粋な願い。

「ライブで、優勝できますように」

どんな未来が待っているのか、それはまだ誰も知らない。

それでもこの九人ならば叶えられる。根拠はないが、そんな想いは確かに生まれてい

た。

「……これ……」

何気なく絵馬掛け所を眺めていた時、ふとあるものが目に入る。

「どうしたの？」

「……見てみる」

集まってくる九人に陸が見せたのは数枚の絵馬。

A q o u r s が優勝しますように。そう書かれた絵馬が日付を変え、何枚もそこには

掛けられていた。

「皆……！」

改めてA q o u r sの優勝はこの九人だけの悲願じゃないのだと実感させられる。

皆願っていたんだ。千歌が屋上で宣言したあの日から。

絶対に消えない思い出を作る。

その願いはもう、浦の星の生徒全員のもの。

『……他にも、色んな奴等があるな……』

「コイツ等だけじゃないんだよ……どのグループも勝ちたくてここにきてんだ」

勿論ラブライブで歌うのはA q o u r sだけじゃない。

決勝進出を決めたグループ……その殆どの名前がここで確認できた。

「皆さーん……！」

また一段と士気を高めていたその瞬間、自分達に向けられたものと思われる声が境内に響く。

振り返った先に並んでいた二人の少女が目に入ると、千歌達はよりその笑みを深めた。

「聖良さん……！」

「理亞ちゃん……！」

S a i n t S n o w の二人。

ある時は A q o u r s に壁を示し、またある時は共に一つの答えへ向かって同じステージで歌ったライバルであり仲間。宣言通り決勝を見に来てくれたらしい。

「遂に、ここまで来ましたね！」

「ビビってたら負けちゃうわよ！」

それは叱咤か激励か。

ライバルとして A q o u r s の成長を見届けてきた彼女達の言葉には何気のないものでも重みがあった。

「わかってるわよ！」

「アキバドームは、今までの会場とは違うずら……」

「どんなところか、想像もつかないよ……」

勿論もうその重みに気圧される彼女達ではないが、挑むのは未知の舞台。どうしても多少の不安は付きまとう。

『お前等はある所で歌ったことあるんだよな』

「ええ……今でも信じられない」

「自分の視界……全てがキラキラ光る、まるで、雲の上で踊っているようでした」

「雲の上……」

一度そのステージに立った聖良達の言葉を受け、彼女達が想像することは何なのか。少なからず、高い実力を持つ Saint Snowの二人でも圧倒されるような舞台……それだけは確かだ。

それこそがライブ決勝。数多のスクールアイドルが憧れる舞台なんだ。

「だから！ 中途半端なライブしたら、許さないんだからね！」

「あ、当たり前だよ！ 頑張るビィするよ！」

「……また一緒に歌おうね」

「……うん！」

この先の未来を語らい、ルビィと共に笑い合う理亞。

思えば初対面の頃から随分と変わったものだ。ルビィ達と触れ、彼女もまた成長している。何かと彼女を気に掛けていたエックスもさぞ喜ぶだろう。

「……素敵な笑顔ですね」

それは姉である聖良も同じ。

その一方、彼女は何か別なものも感じ取っているように思えた。

「初めて会った時、なんて弱々しいんだろうって、思っていました。けど、今の皆さんはとも頼もしく思えます……その上で問いますね」

それを投げかけるように、真剣味を帯びた表情の聖良が千歌へと迫った。

「勝ちたいですか?」

「え……?」

「以前、千歌さんは私に聞きましたね。勝ちたいですか……ライブ」

二度目に東京を訪れた時、A q o u r sの形を模索していた千歌が聖良に問うたこと。

聖良が千歌に問い返せるのは、彼女がこれまでの過程の中で自分達の答えを見つけているからなのだろう。

「それと、誰のための、ライブですか?」

「……」

何のために歌うのか。何のためにあの舞台に立つのか。あの日出せなかった答えも、今ならば出せるかもしれない。

けれど、どこかまだ迷いがあるような様子で千歌は黙ってしまい、そのままその場で答えが出ることはなかった

「勝ちたいか、ねえ……」

その夜。

今回は流石に宿を取った陸も、聖良の口にした問いについて悶々と思考を巡らせていた。

「お前、あの時えらそーに聖良さんに説教垂れてたよな。小手先の力がどーとかなんの」
『メンドクセーことばっか覚えてんなオメーは………俺あただ、あん時のアイツ等の姿勢に思うところがあつただけだ』

勝ちたいか。

学校の皆の前で誓ったことがあるはずなのに、千歌はそれを答えようとはしなかった。

『それにこれはアイツ等が見つけるモンだし、それぞれで見つけ出す答えも違う。違う誰かに掲げられるようなモンでもないだろ』

「……それもそうか」

結局最後まで陸が出来るのは彼女達の行く末を見守ることだけらしい。

少々不安はあるが……まあ、大丈夫なのだろうと思ってしまう自分は確かにいた。

『……もう、明日なんだよな……』

「…色々あったよなあ。何度どうなることかと思っただか」

楽しかったこと、苦しかったこと、辛いでは済まされなかつたこと。

本当、たった一年とは思えないほど色々あった…：それも明日で終わる。

泣いても、笑っても、これまでの日々の結果が出るのだ。

彼女達も今、そんな想いを馳せているのだろうか——、

「マリー・シャイニング☆トルネードッ!!」

が、隣の部屋から聞こえてきたのはあまりにも想像とかけ離れたもので。

間違いなく鞠莉のものと思われる声に続き、はしやぎ始める皆の声と、何か柔らかいものがぶつかり合うような衝突音が壁越しに伝わってくる。

「お前等なにや——おぶっ!?!」

流星に見過ごせせず確認がてら一言物申そうと隣の部屋の障子を開けた瞬間、ふんわりとした衝撃と共に視界が真っ白に染まる。

直後にぼてんと陸の顔から落ちたのはここの旅館の枕。なるほど、定番のアレか。

「人がちよーつと心配してやってたら当の本人達がこれかよ…：…おい!」

「うにやつ!?!」

反撃に陸の投げた枕が偶然軌道上にいた善子にクリーンヒット。

暴れたせいで軽く制服が開けているとか、汗をかいて少し扇情的に見えるとか、この際どうでもよかった。

「決勝前に何しとんのじゃお前等はああッ!!」

枕の嵐が巻き起こる。

数分後、陸以外誰も立っていないのは言うまでもなかった。

「あはは、エライ目にあった」

「首謀者テメーだろうが」

宿から少し離れた場所に赴き、二年生組で夜風にあたる。

何でもこつちにいた頃の梨子のお気に入り場所らしいが、枕投げで上がった体温にここの風は優しかった。

「決勝前だつてのにこんなことしていいのかよ……怪我したらどうすんだ」

『一番無双してたお前が言うな』

「あはは……でも、決勝前なのにこんなことしてると、なんか私達らしいよね」

自分達らしき。

そう口にした千歌の目には、聖良にあの質問を投げかけられた時と同じものが映っているように見えた。

支え合う仲間の笑顔が力。

いつだかウルトラの先輩にそう言われたことがあった。

今だつてそう。少なからず抱いていた不安を払拭するように皆で笑い合う。

聖良の言っていた頼もしきとは、もしかしたらこのことだったのかもしれない。

「……やっぱり行きたかった？ 音ノ木坂」

誰のためのラブライブか。

少しずつだが自分達なりの答えに近づいている実感の中、千歌同様何かまだ抱えてる様子の梨子に彼女は問う。

「そうね……今だからこそ、確かめたい気持ちもあるけど……」

自身の曲、ピアノ、そして発表会。逃げるように内浦へと来た梨子が、そこでの出会いを通して再び向き合えたものは多くある。

そんな彼女が唯一取りこぼしてきたもの、それが梨子の原点である音ノ木坂。

「なら、明日は会場集合にして、自由行動にしない？」

「自由行動……？」

訪問を進める千歌に対し、決勝があるからと断る梨子。

「だったらと彼女が提案したのは、決勝戦の時間まで各々の好きなように行動する……というものだった。」

「本番前に自分を見つめなおす……私も、そうしたいの」

何のために歌うのか。どうして勝ちたいのか。自分自身と、更にはその疑問と向き合う時間にしよう。A q o u r sのリーダーとして千歌はそう語る。

「賛成！」

「……そうね。なら、そうさせてもらおうわ」

曜に続き、梨子もその意を受け入れる。

事実千歌だけじゃなく、皆、それぞれその問いには向き合おうとしていたから。今の提案はその意も組んでいるのだろう。

「……なんか、リーダーっぽくなったよな」

「む、褒めてるの？」

「褒めてるよ、べた褒めだったの」

かつて偉大なグループを引っ張っていたあの人のようなリーダー性は千歌にはない。けれど、だからこそ見えているものもある。

前を走って皆を引っ張るリーダーではなく、皆の隣を走るリーダー。思えばずっとそ

うしてきたと、改めて思う。

「よっしゃ！ そうと決まれば皆にも伝えないとね。旅館まで競争だ！ 負けた人ジューズ驕りー！」

「うああ!! 抜け駆けはズルい！ ほら梨子ちゃん早く！」

「ちよ……待ってよ二人共——！」

明日あのステージに立ち、あのステージで歌うのは彼女達自身。離れてゆく始まりの三人の背中へ、あの時よりも大きく見えた。

「いやあー、青春って感じだね！ 輝いてる！」

「……？」

その背中を追おうとした時、真後ろから聞こえた声に意識を縫い留められた。

振り返れば女性が一人。快活さを感じさせるその人はキラキラした目で千歌達を追っていた。

「ねね、あの子達スクールアイドルだよね？ 見慣れない制服だけどこの時期にここに
いるってことはやっぱりラブライブ？ ラブライブだよね!？」

「え…、あ、ああ……はい……」

「おおうす——いい！」

快活……というよりはそれを通り越してもはや太陽のような人だ。

見るからにスクールアイドル好きといった感じだが、ひよつとして元スクールアイドルだったりするのだろうか。

「あ、ごめんね引き留めて。置いて行かれちゃうよ?」

「え……うおおおッ!」

気付けば見失っていた彼女達を追って道を覚えていない陸は全力で追う。

去り際に軽く会釈をすると女性も快く返してくれる。

どうしてかその笑みが暫くの間、頭から離れることはなかった。

「ライブライブかあ……懐かしいなあ……」

明らかに人間の限界を超えた速度で走り去っていく少年を気にも留めず、瞳を閉じてはかつての記憶に想いを馳せる。

「……限られた時間の中で、精一杯輝くスクールアイドルが好き……か」

あの子達がどんな道を歩んで、どんな想いを抱いてきたのかは知らないけれど。

あの日自分達の見つけたものが、伝えたかった想いが受け継がれていると信じて、

エールを送ろう。

「…フアイトだよ！」

考えも、立場も、世代も超えて、それぞれの想いを一つに紡ぎながら。
ラブライブ決勝。その日を迎えようとしていた。

百五十二話 叶えた景色

その日は快晴だった。

普段通りの朝、されども特別な朝。冬の置いていった微かな肌寒さと共に心地の良い緊張感が漂う。

「ごめんね、付き合わせちゃって」

「…別に、やることなかったからいいよ。特別行きたい場所もないしな」

本番前はそれぞれ自由行動で、自分を見つめなおす時間にして欲しい。

千歌のその提案に異を唱えたメンバーはおらず、今は皆思い思いの場所で自分と向き合っていることだろう。

そんな中で一緒に来て欲しいと陸を誘ったのは花丸だった。

「……お前は図書館か」

静けさに溢れていた空間から抜け出た後にそう問うと花丸はこくと頷く。

図書館……というよりは本なのだろう。彼女の原点、スクールアイドルとの出会い

も、花丸にとっては本だったか。

「…千歌ちゃんにね、聞かれたんだ。勝ちたいかどうかって」

千歌だけでなく、全員が抱いていたその問い。

自分の原点と向き合いながら、彼女はどうか答えを出したのか。

「勿論あの時も勝ちたいって答えたよ。けど、本を通して今までのことを思い返してたら、改めてそう思ったぞら」

そう語る花丸の目に映るのは、本の世界に閉じこもっていた過去の自分なのか。

けれど後悔のようなものはなく、むしろ未来への期待を含んだキラキラとした情動を感じる。

「まるはずっとルビィちゃんと二人で図書室で本を読んでるだけで幸せだったけど、千歌ちゃん達のおかげで外の世界に出られて、皆と一緒になら色んなことが出来るんだって知ったよ」

本を通して、友人を通して、スクールアイドルを通して、体験した色々なこと。

その全てが今の花丸を形作っている。

「だから勝ちたいぞら。それが今、一番楽しいから」

「…そっか」

本の世界に閉じこもっていた彼女は変わった。

あの日閉じかけた自分の物語を描き、今も未体験な水平線へ向かい進み続けている。

「…歌って、素敵だよね」

そんな花丸が暫くの間の後にそう零す。

「思うんだ。上手く言葉に出来ない想いも、歌でなら伝えられるって。それが出来るスクールアイドルって凄いなって」

読書家の彼女を感じる歌を通して伝えられる言葉の力。

ずっと自分の気持ちと一緒に言葉も抑え込んできた彼女だから、それはより鮮明に感じるのか。

「……でも、ちゃんと自分の言葉で口にしないといけない想いもあると思うぞら」

そう語る瞳は遠かった。

もう叶わない。そんな諦めのようなものを孕みつつも、決して悲観などはしていない。そんな瞳は陸に向けられる。

「先輩」

一陣の風が吹いた。

柔らかな感覚と共に花丸の紡ぐ言葉に乗せ、その想いを舞わせる。

「……まるとは、先輩が好きだよ」

何気なく会話を交わすように、花丸は自身の気持ちを口にした。

ほんの少しだけ朱に染まった頬は肌寒さからか気恥ずかしさからか。どちらにしろ今声に出したのは本当のことらしい。

「…それ言うために俺のこと誘ったのか？」

「…む、思ったより反応薄いずらね。これだからりあじゅうは」

「何言ってるんだお前」

最後の方は何を言っているかわからなかったが彼女の気持ちは伝わった。

何故このタイミングで伝えてきたのか。それは定かではないが、どうであれそれに応えることは――、

「…気持ちは嬉しいけどよ、俺は――」

「ああ、曜ちゃんのこと好きなんですよ？」

決勝に響くことがあつては困ると言葉を選びながら答えを綴っていると、花丸はあつけらかんとそう言う。

「…え？ なに？ バレてんの？」

「皆知ってるよ。屋上でいちやいちやしてたところ見てたし」

「はあッ!？」

図書館の中だったら間違いなく追い出されるレベルの音量でのリアクション。

正直告白されたことよりもこっちの方が衝撃的だった。

「……なーんでこつちの方が動揺してるずらあ？」

「いや……だって、その……、ええ……」

見るからに慌てふためいていると不満気に頬を膨らませられる。

あの瞬間を見られていたのはもう何と何と何と爆散したいくらいだが、となると花丸はそれを知っていた上で今こうしてきたと言うことになる。

あの目も、そう言うことだったのだろうか。

「……知ってたんならなんで今言ってきたんだよ」

「さあ？　まるにもよくわかんないけど………多分、伝えておきたかったんだと思う」

「はあ……？」

「鈍感な先輩には一生わかんない感情ずらー」

隣を歩いていった花丸がばたばたと陸の数歩先に行く。

心なしか、その表情は気持ち伝えてくる前よりも晴れやかに思えた。

「じゃ、まるはルビイちゃんとの待ち合わせがあるからここで失礼するずら。あとは若いお二人さんに任せるずらー」

「は？」

「あれ、陸？」

花丸の背中が遠ざかっていく一方で、背後から陸に掛かる声。

振り返らずとも声の主と花丸の奇行の理由を理解する。去り際に見せていった嫌らしい顔が憎たらしかった。

「……あんのマセガキ……！」

「今の花丸ちゃんだよ？ 何話してたの？」

「……何でもない。それよりお前は何してんの」

振り向いた先にいたのは勿論曜なのだが、衝撃の事実を暴露された直後だからか顔を合わせづらい。確実に取り乱す未来が見えるので彼女には言わないでおこう。

「別に……ただ何となくぶらぶらしてただけだよ。陸は？」

「……俺もそんなとこだよ」

「そっか……なら、ちよつと付き合ってくれない？」

そう言うのと陸の返答を待たずにその手を掴み、都会の雑踏の中へと足を踏み入れてゆく。

「そう言えば陸は知らないんだよ……あの日のこと」

「ああ？」

思い出を想起するように曜が見回しているのは駅前電気街。ゲームセンターや量販店などが立ち並ぶそこは陸にとっては単に秋葉原の一角に過ぎないが、曜にとっては特別な場所らしい。

「…やっぱり、ここだったんだ」

そしてその思い出に導かれここに赴いていたのはもう一人。

曜がここへ至る際に客引きのメイドに渡された一枚のチラシを手渡したのは、皆に自由行動を提案した千歌だった。

「曜ちゃん…陸ちゃん…なんでここに？」

「…何となく、見ておきたくてさ」

「俺はコイツに連れてこられた」

曜と同じように、千歌もまた自分を見つめ直すためにここに來たらしい。

彼女達にとつての特別な場所。曜の手渡したチラシにも、同じ意味が込められているのだろうか。

「始まりは、ここだったから」

そう言えばと、思い返す。

去年もこうして秋葉原に来ていた千歌は、スクールアイドルに出会って帰ってきた。そうなると、この場所は……、

「あつ……」

また風が吹き、曜の手から離れたチラシが宙を舞う。

しばらくは呆然と互いの顔を見つめるだけの二人だったが、やがて何かを重ねるよう

にチラシを追って走り出した。

「オイ……………」

状況を理解出来ぬまま陸もその後を追う。

駅を超え、階段を超え、風に乗るチラシはやがて巨大なモニターの前まで二人を導いた。

『(ハ)は…………』

(ああそういうや……………ここでμ□sに出会ったって言ってたっけ)

あの日この場所で千歌が見たμ□sの輝きを知る由はないけれど、今千歌の、皆の手が届きかけているのは、きつとあの人達にも負けないもの。

「…見つかるかな。私があの時見つけたって思った輝き」

「きつと見つかるよ。もうすぐ…あと少しで」

モニターに映し出されるラブライブファイナリストの名前。

そこにはかつて千歌が見たあの名前のように、A q o u r s の名前も存在している。

「勝ちたい…？ ラブライブ、勝ちたい？」

「勿論」

曜にもその問いかけをした千歌に対し、彼女は親友の背に顔を埋めながら答える。

「…………やつと一緒に来たことだもん」

千歌の誘いを受けたあの日、曜は言っていた。

ずっと千歌と一緒に何かに向かって、夢中になってみたかったと。

その憧れだった千歌とやつと一緒に出来たことがスクールアイドルであり、ラブライブ。だからこそ勝ちたいと、曜は言う。

「…だからいいんだよ。いつもの千歌ちゃんです」

千歌にとつての始まりがμ'sで、花丸にとつては本だったのが、曜にとつては千歌だったから。

その千歌がいつも通りであって欲しい。そう願っている。

「未来のことに憶病にならないで、いいんだよ」

勝ちたいか。かつて聖良に問うたことが返ってきた時答えを出せなかった千歌の心に引つ掛かっているもの。

花丸と曜を通じ彼女達の気持ちを見てきたからか、今だからこそわかる。

「…お前が何かのためにとって頑張ってきたのは知ってるよ。ずっと見てきたから」

廃校を防ぐために奔走したように、これまでスクールアイドルをやる中で千歌は多くの想いを抱いてきた。

今もそれは変わらない。学校の名前を残して一生消えない思い出を作る。だから優勝という結果を出さなければいけない。

その全てを水の泡にする未来を恐れてか、そんな思いが纏わりついているように思えた。

「…でも一番初めにお前が思ってたことは、違うだろ？」

千歌がμsに、スクールアイドルに出会った瞬間のことを陸は知らないけれど、その後の事はずっと見てきている。

自分もμsと同じように輝きたい。始まりはただ純粹な、やりたいという思いだったはずだ。

「一人じゃないよ……千歌ちゃんは」

皆だつてそうだ。入り方や目標はそれぞれ違ったけれど、皆始まりはやりたいという思いだった。

今だつてそれぞれ背負っているものはあるけれど、精一杯、あのステージで歌いたい。その思いは皆同じはずだ。

「あ、梨子ちゃん！」

その思いに引き寄せられるようにまた一人、梨子が顔を見せる。

昨晩話していたように彼女が行っていたのは音ノ木坂だろう。今ここに顔を出しているということはもう、彼女の中で決着はついたのか。

「梨子ちゃんは、勝ちたい？」

「うん！」

曜以上に、梨子は力強く、かつ自信をもって答えた。

「私、自分の選んだ道が間違っていないって、心の底から思えた。辛くてピアノから逃げた私を救ってくれた、千歌ちゃん達との出会いこそが奇跡なんだって」

悩みを乗り越え、以前にはなかったものを手にした梨子が、改めて訪れた音ノ木坂で見てきたもの。

その場所でも何をしてきたのかはわからなくても、自分の原点で実感した己の変化は彼女に成長を齎している。それだけは確かなことなのだろう。

「だから勝ちたい……ライブで勝ちたい。この道でよかったんだって、証明したい」
千歌に誘われた時のように、初め梨子にとってスクールアイドルはピアノと向き合えるようになるための手段だった。

けれど勝ちたい。彼女はそう言った。それはきつとA q o u r sとして歌っていく内にスクールアイドルを好きになったから、この瞬間が、楽しいって思っているから。

「今を精一杯全力で……心から……！」

千歌と曜。今の自分を作った切っ掛けの二人を抱きしめ、梨子は叫ぶ。

「スクールアイドルをやりたい!!」

今しかできないこの瞬間を、スクールアイドルを精一杯楽しみたい。

それがスクールアイドルを通じて逃げてきたものとも向きあえた梨子の、心からの言葉。

「…で、さつきから人に聞いてばっかのお前はどうかなんだよ」

わかりきった答えだと理解しつつ敢えて問いかける。

言葉にしないといけない想い。その気持ちは間違はなくそれだろうから。

「ゼロをイチにして、一步一步進んできて、そのままがいいんだよね。普通で、怪獣で……今があるんだよね」

掲げられた一枚の紙切れは、A q o u r s のゼロの象徴の一つ。

現実叩き伏せられて、初めてゼロを叩きつけられたあの瞬間のもの。

でも、もうそのゼロは忌まわしき数字じゃない。

このゼロがあつたからこそ、今のA q o u r s がある。そう言うように。

「私も全力で勝ちたい！ 勝って、輝きを見つけてみせる！」

曜の、梨子の、皆の気持ちを受けて、始まりの想いに立ち返った千歌はその答えを出す。

輝きたい。それが最初からずっと抱いてきた、千歌の想いだから。

「ありがとう……ばいばい」

今をくれたゼロに感謝を込めて、あの日の悔しさに別れを告げて、吹きゆく風に言葉

を乗せる。

この先にある、未来へと向かうために。

「もう大丈夫」

「行こっか、千歌ちゃん」

「うん！」

自分を振り返り過去へと戻っていた彼女達は、再び今に、未来に向かって走り出す。

ゼロからイチへ。

イチから、その先へ。

どこまで来たのか、この道はどこまで続いていくのか。

わからないけれど、仲間と駆け抜けてきたあの時間と、今思っている全てがあって、今ここに辿り着いているのだろう。

けど、そこは終着点じゃない。その先にある未来へ進まなければいけないから。

雲の上のような場所、空を飛んでいるような感覚。

その瞬間を思いっきり楽しんで、優勝するために。

今を精一杯楽しんだ先にあるA q o u r sだけの輝きと証を見つけに、その輝きと共に浦の星女学院の名前をライブの舞台に刻むために。

これまでの想い全てをその心に抱き、未来へと向かってゆく――、

— WATER BLUE NEW WORLD —

光の海。

A q o u r s 全身全霊のパフォーマンスが生み出す光景は、そう表現するほかなかつた。

決して平坦ではない道の中で彼女達は幾多の壁にぶつかり、時にその現実打ちひしがれながらもその一瞬一瞬を全力で駆け抜けてきた。

笑い合ったこと、嬉しかったこと、泣いたこと、悲しかったこと。過ぎ去っていった数多の過去の先にある、最高のこの瞬間。

その今を重ね、未来へ向かっていく。

雲の上のような、青い光の海。

その光景は確かに A q o u r s にしか作り出せない、彼女達だけの、輝きだった。

「…なーに泣いてんのさ」

「いやなんか……………こまで来たんだなって」

W I E N E R A q o u r s

割れんばかりの拍手や歓声と共にメインモニターに表示された優勝者の名前。 A q o u r s の歩んだ今を、浦の星女学院の名前を、ラブライブの歴史に刻み込んだ瞬間だった。

「ま、ボクは彼女達なら出来るって信じてたけどね」

「…調子のいいことばっか言ってるんじゃないよ。てかなんでまたお前が隣の席なんだよ」

「さっきまで気にしてなかったくせにいきなりかい？ 泣いちやったのが恥ずかしいのはわかるけど誤魔化しにしては無理矢理じゃない……………へいへい落ち着けよ陸君ボク達は会話が出来るだろ暴力で解決なんてそんな野蛮な——」

「あーくあつー！」

余韻もへつたくれもなく陸とこれで通算三度目の相席であるオウガが揉め始めていると、ふと会場のどこかからA q o u r sを呼ぶ声上がる。

閉校祭の時のように浦の星の誰かの声なのか、それともそのパフォーマンスに魅了された誰かが上げた声なのか。

それを特定する間もないままその声はどんどん大きく、重なってゆき、やがては会場にいる全ての人がA q o u r sの名を呼び始めたのだ。

「ツツツ………!?!」

暫くの後にその声に応えるように会場が暗転し、スポットライトがステージを照らした。

A q o u r s! サンシャイン!

九人の掛け声と共に会場のボルテージは再び最高潮へと昇ってゆく。

けれど陸とオウガが反応したのはソレではなく、また再び登場する彼女達の姿を注視することもなかった。

「……この感じ……!」

「……最悪のタイムミングで来たね。よりによって今か……!」

全身に走った電撃のような悪寒。

五万人近い客が入っているこの会場でそれを感じたのは陸とオウガのただ二人。そしてある一つの共通点を持つ陸達のみが察知したということとは――、

「ベリアルだ……すぐ近くまで来てる」

『マジかよ……!』

いつか決着をつけないといけない日が来るとは思っていたんだ。

けどそれがこんなすぐ近くで、よりによってこの日だなんて。

「……行くぞ」

けど、迷わなかった。

一瞬、衣装を変えて再びステージに立った皆を見てその意を告げる。

この輝きは、会場全体が彼女達を呼んだあの声は、A q o u r s の歩んできた結果で、証なんだ。

それを壊されたくない……壊される訳にはいかないから。

掴み取った最高の景色、最高の舞台の中で、A q o u r s は再び歌う。
その最高の輝きを背に受け、陸はその場へと——最後の決戦へと向かった。

百五十三話 オワリノハジマリ

先程まで晴天広がっていた空は、今は暗雲が支配していた。

人々はざわめきながらその空を見上げる。視線を集めるのは曇天だけでなく、敵の存在もない中出现したウルトラマンゼロもまた騒ぎの一因となっている。

だがゼロはそんなもの気にも留めていなかった。

ただただ静かに、宿敵が現れるであろう空を静かに注視している。

『……来たな』

その気配を察知したゼロが身構えたその瞬間、台風の目の如く空を覆う暗雲に生じる巨大な穴。

そこより飛来した邪悪の化身は降臨と共に周囲の建物を薙ぎ払い、人々を一瞬のうちに恐怖の渦へと誘った。

『邪魔な雑魚共に手子摺らされたが……』

逃げ惑う人々を羽虫でも見るかの如く蔑視する悪魔に戦慄を覚えぬ者はいなかった。

続々と立ち込める畏怖の中、ゼロだけがただ静かに宿敵と対峙する。

『……ベリアル……！』

『もう邪魔者はいない……決着をつけるぞ、ゼロオ！』

挨拶代わりに振るわれたギガバトルナイザーの起こす突風がゼロの真横を疾走し、並び立っていたビルを何棟も倒壊させる。

これから何か恐ろしいことが始まる。その様を見た全ての者がそう悟ったという。

「……なあ、ベリアル」

『ああ……？』

いざ戦いの火蓋が切って落とされようとしたその瞬間、待ったをかけるように陸はベリアルに声を飛ばす。

もう避けられぬ戦いなのはわかってる。そういう運命なものも理解している。

それでもただ一つ、問いたかった。

「……お前、この戦いが終わったらどうするつもりだ」

ベリアルの中で見た憎悪に苦しみ、力への渴望。

でもそれは全てベリアルなりの正義があつたから、それを理解されなかつたからこそものもの。

歪んでさえしまわなければ、その心にも仲間や平和への愛があつたはずなんだ。

『陸……』

『…フン、詰まらんことを聞くな。俺はただ光の国への復讐が出来ればそれでいい』
「…お前は何度も何度も蘇ってき、その度に恨みを募らせて……もう、自分でも止まれなくなってるんだろ」

『わかったようなことを言うな！ 俺はゼロも、光の国も、貴様も、全てをぶっ壊すだけだ！』

「……そうか。だったら、俺達が終わらせてやる」

こんな言葉でベリアルが止まるだなんて毛頭思ってたなんかいない。

それでも問うたのは陸自身の覚悟を固めるため。戦う他にコイツを止める方法は無いのだ。

「……いこう、ゼロ」

『……ああ』

《《ニュージエネレーションカップセル！》》

《《α！》》

《《β！》》

《《ネオ・フュージョンライズ！》》

「俺達に……限界はねえ!!」

《ウルトラマンゼロビヨンド!》

ベリアルが全てを壊そうとするなら、自分達はそれを守るだけ。
陸が陸である証……皆にもらったこの力で。

『……来い』

嵐の前の静けさ。そう例える他ない静寂が束の間に舞い降りる。
それが打ち壊されたのは——すぐ、直後だった。

「やったよ……皆……!」

会場から届く光が、声援はまだ止もうとしない。

優勝した。その実感を噛み締めながら、千歌は共に歌った八人の仲間と抱擁を交わした。

「優勝…したんだよね、私達…！」

「うん…、うん…！」

やったんだ。ラブライブの歴史に浦の星女学院の名前を、学校の皆の想いを刻み込むことが出来た。

未だ止まない熱気と声援がその事実を物語り、悲願の涙は止めどなく流れる。

「ルビィ！」

「理亞ちゃん…！」

控室に駆け込んできた友に抱き着かれ、ただでさえ落涙していたルビィは更に大粒の涙を流す。

「おめでどう…おめでどうルビィ…！」

「なんで理亞ちゃんの方が泣いてるのおお…！」

「いや、アンタも中々だからね!？」

「善子ちゃんも泣いてるぞらー！」

Aqoursや浦の星の星の皆だけじゃない。託されていたSaint Snowの想いにも応えることが出来た。

これまで自分達がどれだけの人達を支えられてきたか。改めてそれを実感する。

「おめでどうございます！」

ルビィと抱き合って泣きじやくる理亜とは対照的に、遅れて控室へと入ってきた聖良は静かに礼賛の意を述べた。

「答え、見つかったんですね」

「……はいー」

前日に聖良が投げかけてくれたかつての自分自身の問い。

あの問いに答えを出せたからこそ、全員が自分自身と向き合えたからこそ、今この瞬間があるのだと思う。

「素晴らしいステージでした。あの瞬間、間違いなく皆さんは輝いていたと思います」

「なんか、面と向かって言われると照れるね」

「聖良さん達が力を貸してくれたおかげですわ」

「イエース！ 聖良、理亜ちゃん、Thank you very much！」

「いえ、私達の力なんて微々たるもの……この優勝は、A q o u r sと浦の星の皆さんで掴み取ったものですよ」

暫くは互いに高め合ってきたライバルでもある友との会話と泣きじやくる声が室内を満たす。

そんな空気の中、曜の口にしたとある疑念が微妙な間を生む。

「…遅いね、陸」

真つ先に飛び込んできそうな彼が一向に顔を見せない。少なからずそれを疑問に思っていたのは曜だけではなかった。

特に何かを知っているような曜の様子を見ると、多少なり不安に思う心は生まれ
てしまう。

「…外で待ってるんじゃないかな」

「案外、道に迷つてたりしてね」

「まーだ客席で泣いてる可能性もあるずらー」

それでも彼の現状を予想して笑い話にしている仲間達を見ていると自然にその不安も和らぐ。

自分も何か言つて参加しよう。そんな緩んだ空気はすぐに打ち壊されることとなる。

「ウルトラマンが——！」

何やら控室の外が騒がしい、そう思った瞬間に鬼気迫る声が聞こえる。

ウルトラマンゼロと謎の巨人が交戦を始めた。それを知ったのは、この直後だった。

『デエエエエヤッツ!!!』

『へエエエエラッツ!!!』

互いに仕掛けたゼロとベリアルの特物が衝突し合い、発生した衝撃波が轟音と共に東京の街を疾走する。

既にあすファルトの大地はひび割れ、周辺の建物の殆どは原型を留めていない。

ただ一つ無傷なまま鎮座しているのは、陸にとつての大事なものの全てがあるアキバドームだけだった。

『オオアアアッ!』

『あがッ……!』

横薙ぎに払われたギガバトルナイザーがゼロを掠め、その身体を回転と共に打ち上げる。

だがゼロは即座に着地するとその回転を利用してようにベリアルの懐へと突っ込み

『ツインギガブレイク!』

『グオオオオオッ……!』

ビヨンドツインエッジによる二連斬が今度はベリアルの胴を薙いだ。

どちらかが一撃を繰り出してはすぐさまもう一方が反撃に移る。そんな果てのない攻撃と攻撃の押収を、人々は抱く恐怖のままに見上げていた。

『いいぞ……この姿の前に無様に散っていったあの時よりは楽しませてくれそうだな』

『テメエが強大な力を手に入れるなら、俺は仲間と共に成長する。これまで出会って来た全ての奴等と育んだ想いと力が、今俺をここに立たせているんだ！』

エメリウムスラッシュとアトロスリッパー。ぶつかり合った互いの光線が弾け、火花となつて崩壊する街に降り注ぐ。

『その全てが俺にとってかけがえない守るべきものだ。テメエには指一本触れさせねえ』

『守るべきものか……それが貴様の力なら、その全てをぶっ壊してやるだけだ』

『絶対にやらせねえ……俺の、俺達の友に手を出すなんざ、二万年早いゼツ！』

『ほざけ。すぐあの時のように地を這わせてやる』

ギガバトルナイザーの両端から発生した轟雷がゼロを打ち付け、その度に爆ぜる。

何度も何度も上がる爆音は人々の希望を削ぐように轟き続け、祈りすら覆いつくすように濛々と爆炎を立ち込めさせた。

『そうだろ……陸ッ!』

だがまだ光は潰えない。

爆炎を吹き飛ばすような声と共に蒼い輝きが疾走し、目にも止まらぬ速度でその軌道を描く。

「当たり前だ。壊されてたまるかよ!」

グランナイト。これもまた仲間から受け取った力だ。

誰かを守り支えたいという海のように深く、騎士のように強い心。あの日触れたものも、間違いなく今の自分達を形作っている。

『アブソリユートゼロレイドッ!』

絶対零度の太刀が破壊のオーラを纏ったベリアル魔爪——アトロスヘルクロ——と刻み合う。

方や砕け、方や凍り付き、その余波で地面に幾つもの斬痕を刻みながら両者の斬り合いは次のフェーズへと移行する。

『ハアッ!』

『フンッ!』

次なる舞台は空中。蒼の光と邪な闇が軌跡を描きながら幾度となくぶつかり、交錯する。

『軽い！ 軽いでゼロ！』

『ぐっ……！』

全神経を集中させ、攻撃を行いつつアトロスヘルクローによる反撃を回避する。

あの爪から繰り出される攻撃には生物の細胞を破壊する力があると、サイドアースでもアトロシアスと対峙しているゼロの思考が伝えてくる。

もしスピードや機動力が格段に上がる代わりにパワーと防御力で劣るグランナイトの状態でそれを食らえば、戦闘に大きな支障をきたし兼ねない。

だから焦るな。それでいて急げ。

『レボリウムスマツシュ！』

肉薄してくるベリアルを掌からの衝撃波で押し戻し一端の距離を取る。

『リキデイトシュート！』

『舐めるなア！』

十字に組んだ腕から光線を放つも、再び雷を発生させたギガバトルナイザーの一振りによつて弾かれてしまう。

それどころか更に発生した雷撃はゼロへと伸び、もう何度目かもわからない衝突音と火花を散らせた。

「負ける……かアツ!!」

『ダグビュームバーストツツツ!!』

突き出した両腕の動きに合わせ火球が進行を始める。

太陽そのものが落下してゆくかのような一撃は着弾と共にベリアルを飲み込んだ。

『ツ……!!?』

これにより決着——とはいかなかった。

地に落ちてでもなお膨れ上がる火球には徐々に紫電が迸ってゆき、やがてその形を崩壊させてゆく。

「炎が……砕け——ツ!？」

何が起こっているのか。そう思った刹那だった。

ゆうに百メートルは肥大化していたであろう火球が爆発霧散し、その地点から紫電を纏った暗黒の光線が眼前へと迫る。

「『がっ…あああああッ……!!』」

回避も間に合わず直撃。身体が消し飛ぶかのような激痛が全身に突き刺さりながら地面へと落ちる。

突然のことに思考が上手く回らないが、ただ一つ確かなのはまだベリアルは健在だということ。

最高火力を誇るクラッシュャーブレイブの必殺技を受け続けてもなお、奴はその足でゼ

口達の前に立ちはだかつている。

『……ハエがいるな』

ギガバトルナイザーを振り翳したベリアルの一撃が向けられたのは未だ立ち上がれないでいるゼロ——ではなく、奴の頭上。

それは攻撃ではなく、天空より飛来した火球の群れを粉碎するために放たれたものであるのだと理解したのはこのすぐ後。

『…一度のみならず二度もこの俺に牙を向けるか失敗作よ』

『失敗作だからだよ。飼いだに手を噛まれる気分はどうだい？』

首を刈り取らんとするギガバトルナイザーの一振りをレポートで回避して見せると、ゼロの傍らに着地しその肩を貸すのはベムゼード。

ベリアル融合獣であるそれに変身を可能とするのは、陸の知る限りでは一人——、
「オウガ……！」

『ごめんね二人共、奇襲作戦失敗』

陸と共にベリアルの接近を察知していたオウガ。

出撃前に持ち掛けてきた話では隙を見て参戦することだったが、恐らく戦況を重く見てゼロの援護を優先したのでだろう。

『情けない結果ですまねえな』

『気にすんなよ。……それより今は目の前のことだ』

オウガもベリアルと対峙するのはこれで二回目。

初戦で力量の差を嫌というほど味わったからか、彼の変身するベムゼードからは普段の彼からは想像もつかない緊張感が溢れていた。

『フン……ひよつ子が一人増えたところで何も変わらん』

『それはボク一人の場合だろベリアル。流石に君の動きに宇宙警備隊が気付いてない訳がないからね……もうじき増援が来る頃だと思っよ』

苦し紛れにも思えるが、宇宙警備隊が動き出しているのは事実だし、ここに到着するのも時間の問題だろう。

だがその言葉を受けてもなおベリアルの態度が崩れることはなかった。

『援軍……まだそんなものに縋っていたか』

「……どういう意味だ」

『……どうもこうも、見ての通りだ』

せめてもの手向けだといわんばかりに、ベリアルはギガバトルナイザーを掲げて見せる。

『何故、俺がこの戦いでモンスロードをしていないと思う？』

『ッ………！』

『まさか……!』

ゼロとベムゼード、その双方が同時に見上げたのは真上。

暗い雲に覆われその上空の様子を窺い知することは出来ないが、微かに聞こえる咆哮がその答えを物語っていた。

『そのまさかだ。この星の上空……貴様等の求める増援は今頃俺様の怪獣軍団に蹴散らされてる頃だろうよ』

そう告げられた途端、上空から何か爆散する音が聞こえた。

それが味方であつたにしろ敵であつたにしろ、もう宇宙警備隊からの援軍は期待できないと判断した方がいいだろう。

『……解せないね。確かにそうすれば一時的に宇宙警備隊がこの地球に飛来するのは防げるだろうけど、突破されるのも時間の問題だ。それだつたらこの場で百体モンスロードをして僕等を蹴散らした方がよっぽど手っ取り早いと思うけど』

『……時間稼ぎが出来ればいい。そう言つたらどうする?』

『なんだつて……?』

眉をひそめた陸達の前で、邪悪な光が灯った。

ベリアルのカラータイマーから溢れるそれは確かに光なのだ。けれど周囲を照らすどころか光を奪つてゆく様は、その性質が真逆になつたかのように感じる。

『ようやくだ……ようやく全ての光の変換を終えた……!』

そしてその光の正体は陸達のすぐ近くにあったもの。

即ち、元はウルトラマンノアの光であったことを感覚で理解する。

『俺が今までやっていたのはあくまでノアの光を体内で抑え込むことだけだ。だが光のままではその力を十分に発揮できない……だからこれを使った』

『ストルム器官でノアの光を変換するための時間稼ぎだった訳か……!』

ベリアルルの背後で禍々しく灯るストルム器官にはものの性質を反転させる力がある。熱いものは冷たく、柔らかいものは硬く……そして光は闇に。

怪獣墓場での騒動から行方を眩ませていたのも、この地球に飛来してからの行動も、全てはノアの光を闇へと変えるための時間稼ぎだったということ。

『準備運動もここらで十分だろう……遊びは終わりだ』

そして闇へと変わったノアの光は、真の意味でベリアルルに力を与える。

『フフフ……ハハハハハハハハハハッツツ!!』

『『ツツ……!?!』』

膨れ上がってゆく邪な波動がベリアルルを飲み込み、その姿を更に邪悪に、禍々しく変質させてゆく。

バキバキと無骨だった装甲が剥がれ落ちてはモノトーン調の肉体の中に血のような

紅が走り、その背中には神話における破壊神を連想させるような翼が伸びる。

全宇宙の神と呼ばれるノアと、模造品でありその対となり得るダークザギ。

ベリアルを介しその相反する存在を一つに融合させたかのような巨人が咆哮を上げると、その余波だけで大地は震え、より黒い暗雲が立ち込めた。

『真の絶望を味わえ……このウルトラマンベリアル————シグマディアボロスの力の前にな』

百五十四話 終焉に沈む

先行して地球へと向かったタロウとメビウスが見たのは待ち構えていたかのように宇宙空間に鎮座する怪獣の群れだった。

遅れてくる本隊が到着するまで少しでも怪獣の数を減らす。そう判断したのはタロウだった。

『ッ——!!』

『セヤアアッ!』

全方位から襲い来る怪獣達に最大の警戒心を払い、一体一体的確に撃ち落とすべく。

正直効率はかなり悪いが、これが一番確実だ。下手に存命させてしまった怪獣を地球に落とすわけにはいかない。

『キリがありませんね……』

『ああ……だがこれを打ち倒さないことにはベリアルの下には迎えん』

ギガバトルナイザーの制御下にある怪獣ならばともかく、この戦場にはダークロプス

やレギオノイドと言ったかつてのベリアル軍が率いていたロボット兵器も多数見受けられる。

各宇宙に散らばっていた各機体が全てこの宇宙に集まっているとするとするのならば、それはもう想像もつかないような数になる。

『恐らく機体同士の通信で互いに呼び寄せ合っているんだ。まずはロボットから殲滅するぞメビウス!』

『はい!』

愛弟子と共に宇宙空間を駆け、一騎爆散させてはまた一機と確実にその数を減らしてゆく。

だが如何に歴戦の戦士と言えど多勢に無勢。徐々に波のように押し寄せる攻撃に対処が回らなくなってゆく。

『ストリウム……ブラスターツ!!』

自分達のものでない光線が怪獣を貫いたのは、丁度その瞬間だった。

七色の光線が飛来してきた方向を見やれば、点々と瞬く星々に混じり精鋭達の集う部隊がこちらに向かってくるのが見えた。

『待て! 何故お前がここにいる!?!』

ようやく追いついた援軍にタロウも胸を撫で下ろす……ことはなく、むしろ更に鬼気

迫った様子で怪獣の群れに突っ込んでゆく若い戦士を諫めようとする。

『お前にはまだ早いとあれほど言っただろう！　ここは我々に任せて——』

『いつまでも子供扱いしないでください！　俺だって、宇宙警備隊だ！』

『ッ……！　待て！』

タロウの制止を振り切り、その戦士は再び怪獣達への攻撃を再開する。

強くなって己の名を示さなければいけない。そんな念に囚われているような彼を見て頭を抱えるタロウに近づく戦士が一人。

『セブン兄さん……』

『やはり心配か？　息子というものは』

『ええ……特に、アイツはまだ危なっかしい……』

『若いな……あの頃のゼロと重なる』

そう言うセブンの姿に、あの事件の日のゼロが目に見え浮かぶ。

『……心配ですか？　ゼロのこと』

『……心配していないと言ったら嘘になるのだろうか』

厳格な双眸に映る、父親としての感情。

そんな目で青い水を湛えた星を見下ろしつつ、セブンは続けた。

『……だが、信じてやるのも父親の仕事。私は息子と、息子の仲間達を信じるだけだ』

「シグマディアボロス……」

対峙するだけでわかった。これまでとは圧倒的に何かが違う。

威圧感、存在感、そして絶望感。その全てがこれまで出会ってきたものとは比べ物にならない。

ただそこに立っているだけで敗北したような感覚になる。格が違うのだと、本能で理解してしまっているように。

『御大層な名前つけちゃってさ……、中二病かな』

『だがこの感じ……！』

ゼロもオウガも、既に陸と同じそれを感じているようだった。

過敏なまでに高まった緊張感に、時の流れすらも遅く感じる。ただ奴と睨み合っているこの瞬間が永遠にも思えた。

「ゼロ……」

『……ああ』

こちらの出方を探っているのか、ベリアルが自ら動こうとする気配は感じられない。なら多少リスクはあるがこちらから仕掛けるべきか。奴の力がわからない以上慎重に行くべきではあるが、この精神すらも蝕んでくるような緊張感がそう急かしてくる。

それに――、

『オオオオオ……！』

攻撃しないことに、奴は倒せないから。

『ダグビュームバーストツツ!!』

『トリリオン・メテオ!』

ゼロとベムゼード。その双方の放った火球が融合し、爆発的な熱量を伴ったそれが悉くを燃やし尽くさん勢いでベリアルへ進行する。

それに対しベリアルは、ただ静かにその右腕を真横に振るって見せ――、
「え……う？」

その風圧だけで、ロウソクの火の如く掻き消える火球。

散り散りになり霧散していく火の粉の奥には、愉しそうに首を鳴らすベリアルの姿があった。

『どうした…？ それが本気か？』

『ぐっ……！』

同様のままに打ち出したガルネイトバスターもまた、奴へ到達する前に掻き消される。

ならばと振り下ろした煉獄の大剣も一瞬のうちに燃えカスと化し、ただ空虚に腕を振り抜くだけ。

『…言ったはずだぞ。遊びは終わりだな』

攻撃が通用しない。

ダークネスファイブをも一撃で粉碎した攻撃の数々すらも、奴は指も触れずに消滅させてしまう。

「くっそ……！」

徐々に大きくなってゆく不安感を押し殺し、両の拳を燃やしては大地を蹴った。

対峙しているだけで押し潰されそうで、生物としての生存本能が全力で危機を訴えていて、動いていないと気がおかしくなりそうだった。

『…この力の差を前に逃げ出さない度胸だけは褒めてやる』

一步、また一步とベリアルへと近づく度に本能が叫ぶ。

コイツはヤバイ、死ぬぞ。どれだけ己を奮い立たせても止まない声が頭の中で入り乱

れる。

『だがそれは勇敢でも何も無い、ただの無謀だと知れ』

そしてそれが正しかったとでも証明するように。

次の瞬間には突進していた方向の真逆へと身体は吹き飛んでいた。

「あ……？」

何が起こったのか。

気付けば背中から地面に倒れており、強烈な痛みが全身を駆け巡っている。

『せいぜい地獄で悔やむがいい。俺に歯向かう……その最大の過ちを』

『……そんなものしてないし、する予定もないよ』

すぐには立ち上がれない状態の中、ゆっくりと歩を進めるベリアル。

その言葉に否を突き付けつつ、ベムゼードは自らゼロの盾になるように立ち塞がった。

『欠陥品が今更口答えか……、いいだろう。聞いただけ聞いてやる』

『自分の選んだ道に後悔はないってことだよ』

連射する火球が尽く打ち砕かれる中ベムゼードは、オウガはベリアルへと語らう。

『君がその道を貫いたように、ボク達にも貫き通したいものがある……それだけだよ』

『くだらん……正義に目覚めたとでも言うつもりか』

『まっさかあ、そんな御大層なモンで動いてる奴はここにはいないよ』

屈託なく、かつ快々と答えるオウガ。

表情こそ何うことは出来ないけれど、自然とあの気持ちの悪い笑みを浮かべている様子が浮かぶ。

『今も昔も変わらない。ボクは自分の好きなことを……やりたいと思つたことやつてるだけだよ』

千歌達がそうだったように、陸がそうだったように。

オウガもまた自分の意思を貫いているだけ。自分本位なことも変わらない。

ただ一つ変わったことがあるとするならば、彼にも守りたいものが出来た……ということだろうか。

『そんなくだらないもののために自らに与えられた無二の存在価値を捨てるというのか愚か者が！』

『愚かで結構馬鹿で結構！ 生憎ボクはそんな馬鹿達が好きになっちゃつたみたいでね！』

目的こそ違えどかつてベリアルに与していた彼が己の意思で反旗を翻す姿は勇ましく、また雄々しい。

信念を貫き強大な相手に立ち向かう姿勢は、自然と陸の身体を奮い立たせた。

「…テメエにばっか、いいカッコさせっかよ……!」

元々この星なんて関係なかったはずのアイツがあそこまでしているんだ。

初めに啖呵を切ったはずの陸がたかだか一撃くらった程度で寝っ転がっている訳にはいかない。

『…陸、もう一回いくぞ』

「おうよ……何べんだってやったらあ!」

痛む身体を起き上げ、声を張り上げると共に突き進む。

《ネオ・フュージョンライズ!》

『俺達に限界はねえ!!』

《ウルトラマンゼロビヨンド!》

二度目となる強化変身の負荷にカラータイマーの点滅が始まってしまいが、もはや気にすらならなかった。

今奴と戦うための最善手がこれならば負荷なんて関係ない。妥協なく、ただ目の前の

ことに全力を注ぐだけだ。

「『おおおおッ!!』」

ベムゼードを薙ぎ払うベリアルへ向け振りかぶる二本の刃。

それらが到達する直前、またも掌から沸き起こった衝撃波に吹き飛ばされかけるが、意地で堪えたゼロはその両刃を奔らせた。

『ツインギガブレイクッ!!』

炸裂音が轟き、先の衝撃波を上回るほどのソニックブームが響き渡る。

間髪入れずに二撃目を叩き込もうと刃を握るその手に力を籠めるも、次に放たれたギイン、と甲高い音を立てて勢いを失うこととなる。

『…真面目にやれ、詰まらんぞ』

渾身の一撃を防ぐのに用いられたのはギガバトルナイザーただ一本。

たったそれだけで、またもこちらの攻撃はベリアルへ届くことはなかったのだ。

『……大真面目だよ』

ビョンドツインエッジを押し戻したベリアルの背後に一瞬のうちに現れるベムゼード。

薙ぎ払われた地点からテレポートによって肉薄して来たのか、完全に虚をつく形で両腕の炎が奴へと向けられる。

『甘い！』

『な——ぐあああッ……!?』

だがベリアアルはそれすらも粉碎する。

瞬時に背後にまで回されたギガバトルナイザーがベムゼードの腹へめり込み、そのまま描かれた弧が巨大な三日月型の光線となりその身体を切り裂く。

『目障りだ……消えろ！』

それどころか両腕にエネルギーを集束させると、十字に組んだ腕をそのまま至近距離で彼へ叩きつけようとし——、

『させ……るかああ！』

それは寸での瞬間にゼロの妨害が入ったことで発射には至らなかつたものの、代わりに残留したエネルギーはそのまま奴の拳に乗って陸達に叩き込まれる。

またも地面へ転倒する瞬間、難を逃れたベムゼードの身体が光り輝くのが見えた。

『サンキュー二人共、借りはすぐ返すさ!!』

《スカルゴモラ!》

細身だった影は太く大きなものへと変貌してゆき、紅い雷を纏った巨大な角がベリアアルへ迫る。

その突進は軽くないなされてしまうものの、ゼロの傍らへと転がってきたその巨体はベ

ムゼードとはまた別の頼もしさを抱かせる。

『お前、こんなことが……?』

『負担が大きいいからあんまりやりたかないんだけどね……この期に及んでそんなこと言つてられないだろ』

ゼロとスカルゴモラが共に並ぶ不可思議な光景。

希望の象徴であるウルトラマンと並ぶかつて日本中を襲った厄災の象徴に人々から不安の声は上がるものの、共闘している側からすると中々心強いものだ。

『どんだけ反動が来ようとそれで平和を掴めるなら安いもんだろ……行くよ!』

『ああ!』

地震のような揺れを起こしながら再び突撃を開始したスカルゴモラに続きゼロも駆ける。

融合獣の中でも随一であるその巨体と重量は進行を阻まんとする衝撃波をもものともせずに突き進み、直撃こそしないものの受け止めたベリアルに確かな隙が生まれる。

『ワイドビヨンドショット!』

スカルゴモラとの押し合いになっているベリアルへ伸びる光線。

それを弾こうと片腕が離れた瞬間、一気に込める力量を上げたスカルゴモラがベリアルを押し上げる。

《キングギヤラクトロン!》

即座に別の融合獣へと変わり、衝撃波すら貫く勢いのレーザー光線を放つオウガ。

それすらも即座に反応したベリアルはギガバトルナイザーから発生させた雷撃で相殺して見せるが、ならばと今度はゼロが切り込む。

攻撃し続ける。反撃の際を与えるな。

攻撃が通らないのなら、通るまで殴り続けるだけだ。

『アエエエイヤツ!!』

ツインエッジで押し寄せる衝撃波を切り裂いて進む。

一発処理するだけでも身体は悲鳴を上げるが、それでもいつかチャンスが来ると信じてひたすらに突進する。

『オウラツ!』

「がッ……!」

もう何度目かもわからない斬撃が軽々と受け止められ、重い重い蹴りが鳩尾に突き刺さる。

それによりまたも地面を転がることとなるも、何度だって起き上がって攻撃を続けた。

『…飽きたな』

幾度となくその攻防を繰り返しているうちにベリアルがふと零す。

そしてあからさまにゼロとオウガを自らの懐に潜り込ませてみせると、どす黒いオーラを纏った左右の鉤爪を両者へと突き刺した。

「『があああッ……!!?』」

『ぐっ……あ……!!?』

蹴り飛ばされたことで鉤爪からは解放されるも、何故だか刺された部分から痛みが広がり、また強くなっていく。

まるでその部位から徐々に壊れていつているような。次第に立つことすら苦しくなり膝をついてしまう。

『デスシウムデストラクトか……、くそ……!!』

敵を細胞から破壊するというアトロシアス形態での技。

最初こそ警戒していたが、更に強くなった奴を前に余力を削られこの可能性を失念していた。

『あーもう……、こんなになってまで何してんのかなボクは!!』

感覚共有によってより大きいダメージを追っている陸とゼロに対し、またも突撃を繰り返すのはオウガだった。

融合獣への連続変身や戦闘のダメージで負った負担は陸と同等以上のはずなのに、そ

れでもその身体を引き摺って奴へと突き進んでゆく。

『…解せんな、それも守るべきものとやらのためか』

『……どーだろうね。案外自分のためかもしれないけど』

口調こそ普段のそれだが、声音からはいつもの調子は感じられなかった。

けど、それでも秘めた信念だけは燃え尽きていない。

『誰のためだつていいよ。彼等や、彼女達の、あんなに面白そうな未来……泥臭くて、馬鹿みたいで、それでも眩しくて、ボクじゃ絶対に辿り着けないもの……それがなくなるのが嫌なだけだよ！』

非生物的な融合獣の中から溢れる渴望。

自分では掴めない光を他者に見出した彼の、皮肉に塗れた矜持。

『そうか……なら——』

しかしそれすらも打ち砕くように悪魔は静かに嘲笑し——、

『せめてその瞬間を目にする前に葬ってやる』

二度目となるデスシウムデストラクトが、深々とその肉体を貫く。

鉤爪を介して流し込まれる破壊の波動にキングギャラクトロンはやがて動きを止め、だらりとその両腕を垂れ下げてしまう。

「オウガアッ!!」

『たまたま生き永らえただけの失敗作が調子に乗るな。所詮貴様は何者にもなれん』
嘲るような高笑いが荒涼とした東京の街に響く。

その笑いを遮るものはなかった。太陽の光も、風の音も、ただその声を聞いていると言うかのように世界は静まり返っている。

『……と……』

『ああ……？』

『……やつと……見つけたんだ…、輝きつてやつを……！』

ただ一つ、縋るようなか細い声を除いては。

『ベリアル、闇の中で、後ろしか向いてなかったボクを照らしてくれた……光をくれた輝きが……！』

事切れていたように見えていた両腕が、少しずつ持ち上がってゆく。

その輝きが何なのか。確証はないが、一人、彼の想い浮かべている少女が見えるような気がした。

『……こんなことでそれが奪われるなんて死ぬほど嫌だからさ。なんか、頑張っちゃうんだよねえ……！』

また光が漏れ、新たな融合獣へと変化していく。

肉体もとうに限界を迎えている中彼が変身したのは金色の鎧を纏った白い龍のような

怪獣——サンダーキラー。

『君もそうだろ……陸君』

「っ……………」

がちちりと、サンダーキラーが自身の身体を貫く腕を掴む。

瞳こそ伺えないが、それでも確かに強い覚悟が見えた。

「オオオオ…………ツ！」

壊れ始めている身体を無理矢理起き上げた。

痛み方がおかしい。幾つかの部位が完全にイカれている。

でも、それでも、こんなところで果てる訳にはいかないんだ。

「ゼロ…、もうちよつとだけ、力を貸してくれ……………」

『当たり前だ…………』

残された力、ありつただけのエネルギーをその大剣に込め、叫びと共に突っ走る。

『小癩な真似を……………！』

引き剥がそうと何度も殴打で叩きつけても、サンダーキラーがベリアルを放そうとしなかった。

あれがオウガの意地なら、この一撃が陸とゼロの意地。

終わらせやしない…………絶対。

「『おおおおおおおおオオオオオツツツツツツツツ！！！！』」

迸った光の閃がベリアルと交錯した。

重く、そして確かな手応えが剣越しに伝わる。

ようやく届いたその一撃は、ベリアルの肉体に深々とその後を刻み込

『……もう一度言うぞ。遊びは終わりだ』

——むことはなかった。

脇腹に刻まれた小さな切り傷。それが今、全身全霊を込めた渾身の一撃が残した跡だった。

『こんだけやって……これ、だけかよ……！！』

余力の殆どを叩き込んだことでカラータイマーの点滅が加速したゼロが崩れるように膝を折る。

その背後でベリアルは大地を叩きつけ、その衝撃波だけでゼロとサンダーキラーを吹き飛ばす。

『所詮貴様等は欠陥品……誰と結託したところで、俺には勝てん』

絶望というものに形があるとすれば、このことを言うのだろうか。

何もかもを蹂躪し、決死の一撃すらも棒で突いた程度。

見つからない……この絶望を退ける方法が。

『ようやく理解しただろう。これが力の差だ』

己に歯向かう者達が崩壊する街に転がる様を、ベリアルは見下ろす。

力の差を思い知らせるように、思い上がった者に罰を与えるかの如く、強烈に、過激に。

立ち込めた絶望は、二度と晴れることはないかのように重く立ち込めていた。

『そうして転がりながら己の無力さを悔やみ……………更なる絶望を味わえ』

そう言ったベリアルの双眸が向けられたのは、激戦の中で必死に守っていたアキバドーム。

その中にいる大切な者達に狙いを定めたように、眼光が邪悪に灯る。

「この…………やめろッ…………！」

痛みも忘れて立ち上がるも、時すでに遅し。

十字に組まれた腕から放たれた光線は一切の慈悲もなく猛進し、希望もろともその建物物を——、

『う…………おおおおおおおおッッッ!!!』

衝突音が上がる。

けれどドームはそこに建っており、何の崩壊もない。

その理由は、代わりにその身体から煙を昇らせるサンダーキラの姿が物語ってい

た。

『オウガツ……!!』

『言ったよね……奪わせない、つて……!!』

既に半身が吹き飛んでいるサンダーキラーがゆっくりと倒れ込む。

次の瞬間に起こった大爆発は、付きかけていた心の火を爆発させるには十分だった。

「あああああああツツツ!!」

感情任せの突進はもはや意味を成さなかった。

攻撃はおろかその場から動かすことすら叶わず、オウガのように深々とその鉤爪が突き刺される。

『力が欲しいか? ならくれてやる』

「あツ……がツ……! ああああああ……ツツ!!」

『陸……? 陸ツ……!!?』

また身体が破壊されると同時に、大量のベリアル因子を注ぎ込まれる。

内部から突き刺し、裂かれるような痛みが全身を疾走した。

『ほお……?』

その様子を眺めていたベリアルは、面白そうに息をつく。

奴の眼前で起こっていること。それは肉体が崩壊してもなお、陸がベリアル因子を吸

収しようとしている様だった。

『……これだけ俺の力を注がれても耐えるか。最期に面白いものを見せてくれたな』

それでもまだ余裕然と言った様子のベリアルに、完全に主導権の移った身体を向ける。

拳を振り翳すゼロビヨンドの姿は、ゼロダークネスのそれに酷似していたという。

「ガアアアアツツツ！」

莫大な闇を解き放ちながら炸裂した拳がベリアルを数歩後退させる。

炸裂点から上がる焦げたような煙を見下ろしながら、またもベリアルは愉しそうに嗤った。

『クク……今のは少しだが利いたぞ。見事だ』

褒めるように嗤う一方で、ギガバトルナイザーに注ぎ込まれてゆく。

『だが届かん、それが貴様の限界だ』

直後に振るわれた巨大な闇の波動が、ゼロの肉体を飲み込んだ。

痛みと表現するのも生温いそれが全身を蝕む中、相棒の身体が消えていくのがわかった。

(クツ……ソ……！)

『……終わりだな』

変身も解け、生身のまま崩壊した街に投げ出された陸が地面を転がる。

ブレスは無事だがゼロの声は聞こえなかった。それほどエネルギーを消費したのか、はたまた陸の身体がおかしくなっているのか。

その答えがどうであるかは、次の瞬間に起こったことが理解を強要してくる。

「(ズ)ぶツ……!？」

何とか起き上がろうと腕を立てたその瞬間、溢れ出した赤が地面に広がってゆく。

それが自分の口から吐き出した血だと理解したその瞬間、またも冷たいアスファルトの上で倒れ伏していた。

「……あ………?」

『細胞を壊され、絶大な量の俺の因子を注がれたのだ……当然身体は崩壊する。持ってあと数分だろうな』

ベリアルの声が遠い。

それだけじゃない。腕も、足も、身体そのものがなくなってしまうたかのように力が

入らず、感覚もない。

「ま……………ただ……………」

意識の底から這い上がってくる闇が誘ってくる。

やがて視界すらも黒く覆ってゆくそれは抵抗しようとする陸の意思すらも飲み込み、深い、闇の底へと引き摺り込んでゆく。

「まだ…俺は……………」

言葉も、視界も、意識も、全てが黒に染まる。

事切れたことを認識する間もなく、動かなくなつたその身体だけがその場で果てていった。

百五十五話 最後の灯火

(……あれ……?)

ただ白い世界が延々と続いていった。

肉体の実感もなく、ただ彷徨うように、その空間で浮遊している。

(……俺、何してたんだっけ……)

感覚も記憶も覚束無い。

ここがどこであるのか、何故ここにいるのか、何もわからない。

ただ一つ確かなのは、ここにはいけないということだけ。

その理由もわからないけれど、心の底から、そう訴えかけてくる。

(……)

また意識が白くなってゆく。

逃れることも抵抗も叶わない。ただただ、その感覚に飲み込まれていった。

「あ……」

ゼロが謎の巨人と戦い始めたという知らせを受けてから十数分が経った。

ピタリと止んだ爆音や衝突音が戦いの終わりを、そして程無くして会場から上がる絶望と混乱の声がその結果を告げた。

「……うそ……、だよね……」

次第に大きく膨れ上がるその声に、曜は最悪の結末を想像してしまう。

出発の前夜に陸が口にしていたこと。彼に起こっていた異変と、それに屈しない覚悟。

もし彼をそうさせていた戦いがこれだったのなら、その結果がこの声の示す通りだとするのなら、今頃陸は……、

「ッ……!」

「千歌ちゃん!?!」

目眩すら覚えたその時、控室の戸を突き破らん勢いで千歌が飛び出してゆく。

残されたメンバーや Saint Snowの二人が遅れてその後を追うと、止められているのか、大声で警備員と思わしき男達と揉めている彼女の姿があった。

「通してください！ 行かないと……！」

「ダメだ！ 外がどんな状況かわかってないのか!？」

陸がウルトラマンゼロであるという事実は、この場ではAqoursとSaint Snowしか知り得ていない。

口にする訳にもいれないその事実を胸に何とか警備を突破しようとする千歌だったが、大柄な男達を前にそれは叶わずにいた。

「私達からお願います」

「聖良さん……」

止めるべきかで悩むAqoursメンバーよりも一步前に先んじ、静かに聖良が嘆願する。

陸との関りが最も薄い彼女ですらそう訴えるのを見てみると、そんなことを考えていたことが馬鹿らしく思えてくる。

「友達がいるかもしれないんです！」

「あーもう話がわからないわね！ 行かないやいけないって言うてるでしょ！」

「皆……！」

無茶を言っているのは承知だ。警備の人達が言っていることが正しいのもわかっている。

けど理屈じゃないんだ。感情が、心が、そこに行かないやと叫んでるから。皆、千歌ちゃんと気持ちは同じだよ」

「うん……！」

その時。

皆の声に呼応するように瞬いた白い輝きが千歌の制服から飛び出し、その光で辺りを白く染め上げた。

「これって……！」

覚えがあるような千歌の声に続き、またも視界が一変する。

収まった純白の世界が次に見せたのは荒廃した街。それが数時間前まで自分達がい
た東京の街だと理解するのにそう時間は掛からなかった。

「これは一体……?？」

突然荒廃した街中に放り出された十一人の中、ただ一人千歌だけが必死の形相で駆けてゆく。

何が起こったのかはわからないけれど、今は彼女についていくしかない。そう思い全員でその後を追う。

「陸ッ——！」

「せんばーい！ いるなら返事するぞらーッ！」

半壊した景色の中にただ一つベリアル影だけがあるのは、人々の声が物語っていたようにゼロが、陸が負けたという事実にはならない。

一縷の望みすらも見いだせない状況の中、それでも必死に彼の姿を探した。

「陸ちゃんツ！」

上がった千歌の声音が呼び声とは異色なことを感じ彼女の方を見やれば、その視線の先で彼の姿を発見する。

血潮と思われる赤にピクリとも動かずに倒れ伏すその様子は更なる不安感を呼び、自然とそこへ向かう足を逸らせた。

「り——」

起き上げようとその身体に触れた瞬間、指先に走った感覚に途方もないような絶望を覚える。

人の身体とはこんなに冷たいものだったか。乱れる心とは対照的に冷静な脳が、残酷にもすぐにその理由を弾き出してしまう。

「息……、してない……」

青ざめた顔で理亜がそう言った瞬間、伝染するように皆の顔から血の気が引いてゆくのかわかった。

信じない。そう訴えるように強く握った手からも生の温もりは感じられず、ただた

だ、目の前のことが現実なのだとか実に語る。

「ねえ陸……？ 陸つてばッ！」

何度声を掛けても、何度その身体を揺さぶっても、返事が返ってくることも無ければ微塵も動く気配はない。

「いなくならないって言ってたじゃん…、答え、出してくれるって約束したじゃん………起きてよ………」

「曜……」

皆の前なのにも関わらず、止めどなく涙は溢れた。

受け入れたくない。受け入れられるはずがない。

けど何度頭の中で否定したって、心はその事実を理解し始めてしまうんだ。

「…ラブライブ、優勝したよ。皆との約束、守れたんだよ……？ だから陸も約束守つてよ……勝手に破るなよ馬鹿あッ!!」

悲痛に上げた叫びが壊れゆく街に木霊する。

けれどもそれに返す声はない……ただ一つ、絶望の象徴を除いては。

『……愚かなものだ』

曜の涙を、陸の骸を嘲るように、ベリアルが自分達を見下ろしていた。

怒りも、また恐怖もなかった。ただ目の前にあるのは、払いきれない暗雲に飲み込ま

れるような絶望だけ。

『おとなしく己に与えられた使命を受け入れていればよかつたものを……欠陥品が大切なものなのなんだの抜かしたところで結果はこれだ。フハハ……!』

「笑うなツツツ!!」

皆が一様に下を向く中、ただ一人、その絶望に抗うかのように声を張り上げたのは千歌だった。

自らも大粒の涙を流しながらも、その瞳に宿した炎だけは決して消さないと言わんばかりに灯っている。

「陸ちゃんはずっと誰かのために戦ってて、最後の最後までそれを貫き通そうとしたんだ……それを笑うなあツツ!!」

「千歌ちゃん……」

喉が張り裂けんばかりのその叫びも何も生まない。ベリアルを退けることも無ければ、陸を動かすこともない。ただただ悲痛に、千歌の、皆の心を締め付ける。

『馬鹿め、それが一体何になる。そいつが命を掛けたところで何も結果は変わらなかった。全て無駄だったことがまだ理解できないか?』

「…無駄なんかじゃない」

負け犬の遠吠え。そう言いたいとばかりに言葉を連ねるベリアルに対し、千歌はその

胸に手を当て返す。

「陸ちゃんがいだから今の私達があるんだ！ その想いも、全部ここにある！ 陸ちゃんの想いは絶対無駄じゃない………無駄になんかしない！」

そんな千歌の叫びに応えるように。

この場所へ自分達を導いた光は更にその煌めきを増し、心に立ち込めた暗雲を切り裂くかのように白く輝く。

『ノアか……死にぞこないの光が今更何を』

「……ありがとう」

千歌が胸に抱く光の鞘。

彼女の想いを肯定するように、陸の覚悟を継ぐように瞬くそれは千歌のみならず、皆の心にも光を差してゆく。

『…抗うというのか。そのちっぽけな力で、ただ一人』

「一人じゃない」

その光に導かれるように。

また一人、千歌に並んでベリアルの前へと立つ。

「果南ちゃん……」

「……ありがとう千歌。また見失うところだった」

儂く表情を作った果南の瞳は前へ向いていた。

彼女も同じだから。陸のやってきたことを無駄にしたくないから、そこに立っているんだ。

「…そうだよね」

「あの人がいたから今のわたくし達がいる…：確かにその通りですわね。千歌さん」

千歌や果南だけじゃない。

伝播する想いに一人、また一人と俯いていた視線を上げ、目の前の絶望へ抗おうとする。

「…どんなに辛くたって、人には前を向く力があるすら」

「…先輩に教えてもらったことだもんね。」

「リトルデーモンの想い…：受け継がなかったらヨハネの名が廃るわ」

皆悲しみは胸にあるんだ。押し潰されそうなくらい、苦しいんだ。

でも、それでもこんなところで折れてしまう訳にはいかない。

「…曜ちゃん」

「…：…うん…：」

悲しむことはいつだってできる。

けど、ここで前に進めなかつたら、挫けてしまったら、何も残らないから。

陸と、皆と歩んでこれたから今の自分達がいる。

ここで目を背けてしまったら、それを否定することになるんだ。

「ッ……！」

そんな想いが届いたのか。

千歌の腕の中にあつた純白の鞆——エボルトラスターが光を伸ばし、それぞれの心に呼応するかの如く灯す色を変えてゆく。

「……いっとう！」

いつものように円陣を組んでは手を翳す。

その円の中心で、徐々にエボルトラスターから溢れる光はその強さを増してゆく。

「イチ！」

「ニ！」

「サン！」

「ヨン！」

「ゴ！」

「ロク！」

「ナナ！」

「ハチ！」

「キュウー！」

続く声はない。

その輝きは九人のものだから、自分は十人目じゃない。少し前にそう言ったのは陸自身だった。

けど、陸がそう思っている、彼だって今のAqoursを作った一人だから。

誰もそれを無駄にしたくないから、またこうして、皆で叫ぶんだ。

「Aqoursア!!」

ちらりと、彼の方を見る。

そしてまた一つ約束を交わすように、声を上げた。

—— 『『サンシャイン!!!!』』

「ツ……………」

A q o u r s の九人から沸き起こった爆発的な光と突風。

それに吹き飛ばされぬようにと陸を抑える聖良と理亞の眼前で、九色の光が立ち昇る。

『なに……………?』

ベリアルですらも眩しそうに視界を覆うそれは、やがて銀色の巨人と成つて君臨する。

全身から放たれる虹のような光は微かながらも暗雲に閉ざされた世界を、人々の心を照らす。

輝き。

それそのものが人の形を成したかのような巨人——ウルトラマンネクサスは、重なり合つた掛け声と共にベリアルへと駆けた。

「……………はは、眩しいなあ……」

「あなたは……」

ただそれを見上げることしか出来ない二人へ掛かつた声。

思わず身構えて振り向いた先では、男が一人、這つてくるかのように瓦礫の中から姿を見せた、

「どうもSaint Snowのお二人さん、出来ればサインを……つてお願いしたいところだけど、生憎そんな余裕はないみたい……」

口調に似合わず、その身体は直視するのも躊躇してしまふほどに痛ましかった。

素人目でもわかるような命に関り兼ねない傷が全身の至る箇所まで口を開き、もはや動かすことすら出来ないのか、その片足は血潮の跡を描きながら引き摺られている。

「ちよつとアンタ…、大丈夫なの……?」

「…心配してくれるなんて嬉しいねえ。おかげでもうちよつと頑張れそうかな…」

以前自分達の前で陸に隠された真実を語った、オウガとかいう宇宙人。

あの時はお調子者のような印象を抱いたが、今はもうそんな姿は影も形もなかった。

「……丁度良かったや、もうどの程度彼と話せるかわからないからさ……陸君が起きたら、伝えておいてくれない」

「起こすつて……陸さんはもう——」

「ボクは——、」

聖良の言葉を遮って、オウガは今にも果てそうな声で一方的に語らう。

もう自分が助からないとわかっているのか、遺言かのように、その思いの丈を綴った。

「何する気……?」

「……見てればわかるよ」

その言葉の通り。

彼の行動により答えが示されたのは、この直後だった。

「——りーく君」

軽薄な、どこことなくイラつくような声が聞こえた。

声の主が誰であるかを思い起こすと、そのイメージが具現化されたかのように何もなかった世界に一人の影が現れる。

「…よ、いつまで寝てんだよ」

「オウ、ガ……?」

初めて声が出た。

オウガという存在を機に自分自身が呼び戻されるように、声や身体、そして記憶までもが、この空間の中で再構築されてゆく。

「そうだベリアルは……、アイツ等は怎么样了!？」

「あーもういつぺんに聞くなよ。あんまもう時間ないんだからさ」

こんな緊急時にも関わらず、オウガの態度は普段と何ら変わりはない。

けれどもその裏には何か、計り知れないほどの何かが秘められているように思えた。

「……とりあえず結果から言っておくとベリアルには負けて、君は今生と死の狭間を彷徨つてる状態って訳。まあほっとけば数分もしないで完全に死ぬだろうね」

「ッ……！」

これでもかどくらいあつけらかんとオウガは告げた。

その言葉に、直前までの記憶が完全に蘇る。

完膚なきまでに叩き伏せられたその記憶は、改めて自分が死んだという事実を認識させてくる。

「まあそんな顔すんなって。だから助けに来たんだろ」

「……けど、お前だって……」

「……そうだね、このままじゃ確実に二人とも死ぬ。けど、どちらか片方だけなら助かる……って言ったらどうする？」

「は……？」

オウガの双眸に、いつの日か垣間見たような狂気が宿った。

けどそれは自分本位な過去のそれではない……けれど、どこか自己犠牲的な危うさを

抱かせるようなものだった。

「——ボクと君の命を一つにするんだ」

百五十六話 ゼロからイチへ

消えない。

目障りな光が、消えない。

『ジィイヤツ！』

何度叩き伏せても、何度絶望で覆うとも。

その度に瞬くあの光が、消えない。

『アアアアアツ!!』

沸き起こる胸騒ぎのままに腕に持つ得物を振るつた。

力の差は歴然。勝利が揺ぎ無いことになっているのも火を見るより明らかなはずだ。

それでも、その光を前に気は逸つた。

『誰であろうと関係ない……俺の邪魔をするなら潰す!』

怪獣墓場の時も、アナザースペースの時も、サイドアースでも、自身の野望を打ち破ってきたのはいつだってあの光だった。

仲間、信頼、絆……自分の捨てたものが紡ぐ圧倒的なまでの光、力。

そんな目障りな光がまた目の前で生まれようとしている。

『所詮貴様等は俺に利用されるために泳がされていたに過ぎない。調子に乗るなア!』
『フウウツ!』

九色の光を放つ銀の巨人を粉碎せん勢いで攻撃を繰り返す一方、ざわつく胸は更なる予感を悟る。

また別の場所で別な光が生まれようとしている。

そんな胸騒ぎがしてならなかった。

「……命を、一つにする……?」

「そ。一応ボクにも陸君にもベリアルの遺伝子……つまりはウルトラマンの遺伝子がある。理論上は前に君とゼロ君が一体化した時みたいに、命を一つにすることで傷を癒すことだって出来るはずだ」

ただ白が続く生と死の狭間で、淡々とオウガは話す。

状況を飲み込み切れしていない陸の反面、彼は全てを把握し、また迷いもないように見えた。

「このままじゃ二人とも死ぬだけだしね。どっちか片方だけでも助かるなら、それに越したことはないだろ」

丸め込まれかけ、そして止まる。

その言葉の中に無視できないものがあつたのを陸は聞き逃さなかつた。

「片方だけってどういうことだよ……？」

ウルトラマンの持つ一体化能力は、対象の傷を癒すだけでなくウルトラマン自身が負った傷やダメージも回復させることができる、ゼロ曰くwin winの関係。

つまり一体化すれば互いに傷を癒し命を留めることが出来るはずなのだ。

「言つた通りだよ。ボク等はウルトラマンの遺伝子を持つてはいるけど、ウルトラマンではない。つまり、一体化して傷を癒す力も彼等に比れば劣るって訳だよ。多分、完全に命を融合させてやつと片方の傷を癒せる程度だと思う」

けれど、オウガの言葉はそんな認識を打ち壊してくる。

そして次に彼の放つたそれは、理想すらも、瓦解させた。

「…そんな訳だからさ。ボクのこの命、君に預けるよ」

「は……？」

あつげらんかと、至極当たり前のようにオウガは言う。

けれどそれが指し示す意味はあまりにも残酷で、また受け入れ難いものだった。

「心配しなくてもいいよ。これでもボクは君よりずっと丈夫な身体してるし、その分ベリアル力も君より多くある」

「いや、お前……」

「ボクの計算ではまず間違いない君の傷は治せるし、ボクの抗体と融合することでもしかしたらベリアル力への耐性だって——」

「そうじゃないだろ！」

勝手に話を進めるオウガの声を遮る。

そんな陸を見て、彼はどこか儂く、また諦観したように笑った。

「それじゃどうなるんだよ……お前は……」

「……いいんだよ、もう」

片方しか助からないということとは、どちらかの存在は消失するということ。

しかも話を聞く限りではオウガは、自らの命を引き換えに陸を助けようとしている。

「言っただろ、君や千歌ちゃん達の描く輝きが好きで、その未来が奪われるのが嫌だつて。君が命を張ってる理由と変わらない」

「けど……！」

「これ以外方法がないならやるしかないだろ。このままじゃ君や皆のやってきたことが全部無駄になる」

無理矢理にでも陸を納得させるように、オウガは合理的な言葉を連ねる。

けれどそれだけで済むような単純な話ではなかった。

「……それに、君が人間じゃなくなる引き金を弾いたのはボクだ」

オウガが思い浮かべるのは彼が陸にベリアル力の力を受け渡したあの日なのか。

生まれ故に背負った闇を拒み、スライ達の計画に手を貸したその選択を悔いるように、自嘲して笑う。

「だからせめて——」

「そんな罪滅ぼしなんざ求めてねえんだよッ！　どんだけテメエに振り回されてきたと思ってるんだ……今更そんなことで許す訳ねえだろうが！」

仲間だなんて、まして友達だなんて思っちゃいけない。

散々迷惑だつて掛けられてきたし、対立だつてした。陸の身体だつて、オウガがいなければこんなことにはなつてなかったのかも知れない。

けど、それでもコイツだつてもう仙道陸を構成する者の一人なんだ。欠けちゃいけないんだ。

「テメエが本当にそれを罪だと思つてんなら贖罪なんて必要ねえだろ……生きてりやそ

れで十分なんだよッ！」

「はは……嬉しいなあ……、そんな風に思ってくれてて」

小さく、儂くも咲いた笑みは思い留まったかのような様子を見せる。

けれどもそんな期待は、一瞬の後に打ち砕かれた。

「……けど、ごめんよ。ボクは最後まで君のことを裏切り続けるみたいだ」

声に続き、思念体として浮かぶオウガの身体が綻び始める。

「実はもう、とつくに融合してるんだよね。こうして君の精神に干渉できたのもそのおかげ……でももう、時間切れみたいだ」

「は……？ 待てよ……俺は認めてなんか——」

「時間も無いし完全に消える前に伝えちゃうね」

顔突き合わせながらも決して視線は重ねず、オウガは一方的に続ける。

そんな彼から零れる光の粒子が、儂く舞っては散る。

「…ボクは、君達に出逢えて良かった」

「そんなん聞きたかねえんだよ！ お前言ってたよな、ベリアルの力だなんて関係ない、自分を自分自身だって認めさせるって！ なのにそれでいいのかよ！」

「…そんな願い、とつくに叶ってるよ」

輪郭すらも覚束無くなる中、オウガは満たされたように笑う。

出会った時からコイツの色んな顔を見てきた。

キモイ顔。ウザい顔。狂気を孕んだ笑み……けど、これほど穏やかなものは初めて見る。

「……少なくとも君は、千歌ちゃん達は、ボクをボクとして受け入れてくれた。それだけでも、十分すぎるくらいだよ」

心残りが無いという訳ではない。

けれども一番叶えなかった願いは、求めていたものは手に入った……そう、その表情が語る。

「この星に来て、君達に出逢えて、ボクは変わった。自分のことしか頭になかったボクが、ボクなりの大切なものを見つけて、それを守りたいと思ってる……こんな素晴らしきこと、他にないだろ」

心が認めなくとも、理性が理解してしまふ。

コイツはもう、満たされてしまっているんだ。

「嬉しかったよ。君がボクを引き留めようとしてくれて、失いたくないだなんて思ってくれて……」

望まぬ形で背負わされた闇に囚われ続けていた彼が、光となって消えてゆく。

「……最後にそんな、ボクには大きすぎる餞別まで貰えた………悔いはないさ」

「オイ待て……ふぎけんなツツ!!」

必死に伸ばした腕は、何も掴むことのないまま空を切る。

「……………ありがとう」

その声を、最後に。

彼だった光は空間全体に広がってゆき、あるべき場所へと導くように、陸を引き戻した。

「ツツ……………」

五感全てから伝わってくる情報が全身を駆け巡る。

即座に起き上がった直後に実感したのは、己の身体が存在しているということだった。

「本当に生き返った……………」

呆然とする声に導かれるように振り返った先にあつた姿は、聖良と理亞の二人。

影も、形もないけれど、それでもわかった。アイツも今の今までここにいたんだ。

「……アイツは……?」

一度死んだ実感も、再び生を得た実感もある。

けどそれがどうでもいいくらいに心は、あのバカの姿を求めている。

「それは……」

どうせまたタチの悪い冗談だ。どこかからこちらを見て笑っているに決まってる。

都合よく考えようとする頭も、二人の反応を見ては冷静になってしまう。

「……あんのバカが……!」

叩きつけた拳が、やり場のない感情を地面に沈めてゆく。

なんで助けたかなんて聞かない。そこまでする意味があったのかだなんて言わない。

わかってる、わかってるんだ。

アイツがこんなことをした理由がわかってしまっているから、余計に腹立たしいんだ。

「くそ……クソツ……!」

「陸さ……!」

「ちよつと、急に動いたら……!」

ああまでしたアイツの望みが何であるのかもわかってる。

だからこそ、今陸に出来るのは——、

「……あの人も、今の陸さんと似た顔をしていました」

完全には治りきっていない傷にふらついた陸を抱き支えては、聖良は言う。

その瞳には言葉の中にある彼の姿が、克明に浮かんでいた。

「……私に、あの人が何を思っただろうとしたのかはわかりません。だから、伝えてほしいと言われたことをありのまま伝えます」

オウガの姿を見たからか、それともまた別の要因か。わからないけれど。

聖良の瞳もまだ、希望を捨ててはいなかった。

「……自分は、いなくなつたことにはならない」

「ッ……」

聖良の声に重なって聞こえたもう一つの声。

彼と融合したからか、それともただの幻聴なのか、どうであれ、その声は確かにオウガのものだった。

——例え形が消えても、想いはずっと心に残る。君達に教えてもらったことさ。

——そんな君達だったからこそ、ボクは初めて守りたいものって言うのを見つけ

られた。

——その守りたかったものがこの先も続いていく。それもきつと、想いを繋げる形だとボクは思う。

その声は何であろうと関係ない。

この言葉は、アイツが辿り着いた答えで、最後の願いなんだ。

——この先の未来もずっと、君達が歩み続けてくれる。

——それだけで、ボクが生きた証になるから。

それをきちんと言葉として受け取ることが出来た。

だったらあとともう、進むだけだ。

「…わかっているよ。やつと、見つけたんだもんな」

すうと肺いっぱい空気を吸い込み、今ある生を改めて実感した。

許した訳じゃない。それは今だって変わりはない。

けど、アイツが灯した希望を、想いを無駄にすることは。もっと出来ないから。
「……描いてやるよ、お前に託された未来」

握った手のひらの中で、新たに光が生まれる。

同じ気持ちだ。消えかかっていた相棒の声が、光の中から聞こえた。

「まだ最後じゃねーぜゼロ……約束したろ」

『……ああ、終わらせねーよ。終わらせてたまるかよ、陸……！』

そうだ。終わらせない。

皆とここまで歩んで来て、これからも続く未来。終わらせてたまるか。

「……行くんですね」

「勝てるの……？」

「戻ってくるよ、ちゃんと。アイツ等も連れて」

二体の巨人を見上げる。

衝突し、九色の光が舞う度に、聞こえるんだ。皆の声が。

皆もそうだ。これまでの歩みを無駄にしないために、これからもまた歩んでいくために、前に進もうとしている。

だからこんなところで、立ち止まっていられるか。

『行くぜ陸……俺達も！』

「……進んでいくんだよな、皆で」

陸とゼロ、オウガだけじゃない。ここまで歩んできた中で抱き背負ってきた、皆の想い。

その全てが眩い光となり、ウルティメイトブレスを介し新たな形を成して陸の手に握られる。

「俺達に——」

『俺達の描く未来に——』

これまでの因果を終わらせて、皆の望んだこれからの未来を描く。
突き上げた腕に宿るブレスから広がった光に包まれ、全てを込めて、叫ぶ。

——限界はねえツツ!!!」

『ツツ……!?!』

立ち昇った光の柱の前に、ベリアルは己の胸騒ぎが最悪な形で現出したことを悟った。

苛立たいしい。虫唾が走る消し去りたい。奥底から沸き上がってくる全ての感情を吐き出すように、ベリアルは最大の憎悪を込めてその名を叫ぶ。

『ゼロオオオツツ!!』

眼前のネクサスを払いのけ、駆り立てられるように光を纏うゼロへ暗黒の稲妻を纏った光線を放つ。

だがそれはゼロからも伸びた光の線と衝突し、間もなく共に消滅する。

『互角だと……バカな……!?!』

『……互角? 馬鹿言ってるじゃねえ』

収束してゆく光の中で、ゼロは言い放つ。

『この光は俺達が歩んできた証だ、皆で紡いだ輝きだ……テメエの独りよがりな力と同じにするな』

『たかが一発防いだ程度で調子に乗るなアツ! 一度敗れた貴様等に今更何が出来る!』

「確かに俺達は負けたよ、完敗だった。けど、今は違う」

ゼロに続き、陸もまたベリアルへ声を向ける。

利用するために生み出した存在が自分の脅威となろうとしている……その姿は、かつて同じように自分へ立ち向かってきた息子と重なった。

「皆が俺を俺でいさせてくれた…、アイツが繋げてくれた……だから今ここに立つてるんだ」

これは終点などではない。

これからも続いてゆく。これは新しい始まりの一步だと言うように、ゼロは告げる。

『そうだ……これまでの全てが、また俺達をまた一步進ませてくれる！』

赤に青、そして銀の肉体の中に金色の煌めきが走る。

額や胸の輝きからは水色の光が漏れ、双刃や双翼の光輝をより神秘的なものとしていた。

「ゼロから——」

『——イチへ』

収まった光の中から現れたその姿は、さながらこれまでゼロが得たもの全てを体現しているようだった。

『俺の名はゼロ——ウルトラマンゼロアイン!!!』

百五十七話 みんなで叶えた物語

形となって荒れ狂う厄災。

希望も、未来も、何もかもを粉碎するように響き渡っていた悪魔の咆哮は、突如として鳴り止む。

その瞬間に顔を上げた人々が目にしたのは、眩いほどの光を放つ二人の巨人だった。

『また…、またその光か……！ 俺の前から消えろオッ！』

ベリアルベリアルの怒号に続き、隠す気のない嫌忌や憎悪の籠った闇の刃がギガバトルナイザーザーより放たれる。

ゼロもまた放った光の刃でそれを相殺して見せると、奴との距離を取りつつネクサスの隣へと並び立った。

「皆……」

互いに頷く。

何があったか、なんて話は全部後だ。

そんなことは全部目の前のことを終わらせてから、未来を勝ち取ってからだ。

『シユアッ!』

ネクサスの援護を受けつつ、ウルトラマンゼロアインが大地を蹴る。

その接近を拒むようにベリアルから轟雷の波が押し寄せるも、ネクサスから発せられる波状光線によって打ち消され、その合間を搔い潜ったゼロの一撃が悪魔を捉えた。

『グッ……アアア……ッ!?!』

拳から溢れ出す光がベリアルを抉り、一撃すら見舞うことも叶わなかった奴を大きく弾き飛ばす。

すかさず額から伸ばした柱のような光の束がその身体を飲み込み、遂にその背中を地につかせた。

『なんだ……この、光は……!?!』

『テメエが捨てた力だッッッ!!!』

同様する奴へ、再び肉薄。

横薙ぎに振るわれたギガバトルナイザーの一撃を腕を立てて防ぐと、懐に潜り込んで
はまたその拳と奴へと見舞う。

『グ……オオオオオオッ!!』

『『がああッ……!』』

が、意地で堪えたベリアルのカウンターに薙ぎ払われたゼロが辛うじて原型を留めて

いたビルを巻き込み転倒する。

瓦礫と粉塵が視界を舞う中、それらを突き抜けてきたギガバトルナイザーによる刺突が更に横腹を抉った。

『調子に乗るな……！　俺は、今度こそその光を打ち砕くッ！』

『なら何度でも言つてやる。テメエが俺達に勝とうなんざ……二万年早いぜ！』

この段階まで辿り着いて、ようやく互角に渡り合える相手。

けど、信じてる。自分達が積み上げてきたものは絶対にこの絶望を振り払えると。

『ジュアアッ！』

バックステップで攻撃をいなしたその瞬間、ゼロとスイッチしたネクサスの鋭い蹴りが叩き込まれる。

立て続けに繰り出された連撃もベリアルを捉えるも、その身を後退させるのにも至らず逆に一撃を貰い地面にたたきつけられてしまう。

『デエエエイヤッ！』

し字に組んだ両腕から光線を伸ばし奴の射程から逃れる時間を作るも、ネクサスは退くどころかベリアルへの攻撃を続けた。

その度に薙ぎ払われては立ち上がり、幾度となく、ベリアルへと立ち向かってゆく。

『俺の復活に利用されていただけの子どもが粹がるな！　貴様等の歩みにそれ以上の

価値などない!』

『それを決めるのはコイツ等だ。例えテメエに利用されていたとしても、コイツ等の歩みは他の誰でもない、コイツ等自身のものだ。その価値を……テメエが決めるんじゃないねえッ!』

ギガバトルナイザーを受け流しつつ、呼吸を合わせてその間合いに踏み込む。

そして同時にゼロとネクサス。両者の拳がベリアル腹を穿った。

『貴様もまだ仙道陸! 利用されるためだけに生まれ、今となってはその唯一の価値すら失った……そんな貴様が進んだ先に何がある! 何が得られる!』

「そんなん……知る訳ねえだろッ!」

ベリアルから投げかけられる声を払いのけるように上げた声が光の波となり、呪縛もろともそれらを弾く。

「意味とか価値とか、そんなモンハナから追い求めちゃいねえ!」

今だからこそ言える。何があるのか、何を得られるのか、踏み出す時は何もわかりやしない。

自分達の歩んで来た意味も価値も全て、ふと振り返った時にそこにあるもの。

「今の俺を作ってくれた奴等がいる、そいつ等に託されたモンがある………だつたらどんだけ苦しかろうが辛かろうが、それを背負って前に進むしかないんだよッ!」

だからここから先の未来で何を得られるのかなんてわからない。

わからないからこそ前に進むんだ。これまでもそうだったように、進まないことには何も見つからないから。

そうして歩んだ道のりの中で得たものがきつと、また無二のものとなるはずだから。

「だから止めさせてたまるかよ……俺達の、アイツに託された未来ッ！」

爆炎を纏った拳を振り上げ、立ち昇った業火の柱と共に奴を殴り飛ばす。

かつては大切なもののためならば死んでも構わない。そう思っていたけれど、今ならば言える。

心の底から、この先の未来をアイツ等と生きてゆきたい。

『夢見事を抜かすな！ そんな幻想は罷り通らない、貴様等も嫌というほど味わってきただろう！』

千歌の中にいたからこそ、ベリアルはこれまでの皆の歩みを知っている。

喜びや手にしたものの、そしてそれ以上の悲しみや失ったもの。それはこの先もずっと消えずに、重みを増しながら纏わりついてくる……自身の過去と重ねるように陳ずるベリアル。

『失い続けた貴様等の歩みに価値などない……貴様等自身が最も理解しているはずだ！』

「そんなわけないッ！」

けれどそれを否定したのは、奴に最も負の感情を見せたはずの千歌だった。

「価値だとかなんだとか難しいことはわかんないけど、私達にとつては泣いたことも笑ったことも全部、全部大切なもので、輝いてたんだ！」

そんな叫びに呼応するように、ネクサスはその光を変化させる。

劣弱の鎖を砕き、内なる己を信ずる煌めき。

自身の光を奔り抜き、未来へ羽ばたく群青の翼。

これまで歩んできた中で抱き育んだ光はその全てを肯定し、また新たな輝きを紡がんとする。

『例え貴様等がそう思っていてもそんなものはすぐに崩れ去る。時は永遠ではない。一時の友情や幸福などただのまやかしだ』

「……確かに、楽しかったり幸せな時間はいつもあつという間だよ」

太陽のような光に続くように灯る新たな光。

「皆、その時間がずっと続けばいいのについて思うこともある……でもそんなの私達じゃないから！」

果南の輝き。

深く穏やかに揺蕩う海のような翠玉の光を宿し、身体を翻したネクサスの回し蹴りが

迫る轟雷を粉碎する。

「そうだよ……どんなに楽しい時間でもやつぱり終わりは来る。ずっとそこにいたいけど、それでも進んできたのが私達だから！」

曜の輝き。

軽やかな側転で反撃をいなすネクサスがどこまでも透き通るような淡青の光が軌跡を描く。

「時が戻らないこと、もう一度同じ時間を繰り返せないことはとても寂しく思えませんが……」

「それ以上に、どうなるかわからない明日の方が楽しみだから！」

ダイヤとルビィの輝き。

交わった紅と桃色の光が弾け、その煌めきを誇示するようにベリアルへと突き刺さる。

「そうやって時が進んでいくことを実感しながら進んできたずら。それが最高に楽しかったから！」

花丸の輝き。

陽を受け咲き誇る花々のような黄の光が広がり、その加護を齎すかのように攻撃を弾く盾となる。

「二度と同じ時はないから、今こうしているのがたった一度きりだってわかっているから、全力になれる！」

善子の輝き。

穢れなき純白の光が羽を開き、迫る闇の波動を浄化する。

「いつか終わりが来ることを知ってるから……：終わりが来てもまた、明日が来ることを知ってるから！」

梨子の輝き。

旋律を奏でるように舞う桜色の光が、導くように尾を引いて進む。

「どんなに苦しくても……：未来に向かって、歩き出さなきゃいけないから！」

鞠莉の輝き。

再度懐に踏み入ったネクサスの拳が淡紫の光を宿し、その声に乗せ打ち込む。

「そうやって足掻いて、進んできたから今の私達が、この輝きがあるんだ！」

仲間を支え、守り抜く力。

友を想い、前に進む力。

仲間と手を取り合い、自分を貫く力。

万物を思いやり、全てを包む慈愛の力。

可能性を信じ、未来を切り開く力。
光を結び、絆で繋がる力。

想いを受け継ぎ、勝利へと導く力。
希望を捨てず、想いを繋ぐ力。

これまでの道のりで抱き、紡いできた想い。

その全てを包括するかのように、太陽が如し光がネクサスを包む。

「何もかも、一歩一歩……私達が過した時間の全てが、それが——」

——
輝きなんだ
!!!!!!

迷いなく、全員で叫び辿り着いたその答え。

その想いをネクサスが肯定するように、絶大な輝きを放つ光の柱が立ち昇った。

「ツ……………」

『あれは……………！』

それぞれの輝きが一つになり、新たな形となつて降臨する。

眩いまで白銀の肉体に、その光を象徴するような双翼。

神と見紛うようなその姿は、例えるならば輝きそのものが人の形を成したような錯覚を齎す。

絆の紡ぐ究極の輝き——ウルトラマンノア。

『馬鹿な…、あり得ん……………！』

A q o u r s が、皆の絆と想いが、ネクサスの究極最終形態にして本来の姿を呼び覚ました。

これまでの歩み全てが培い、生み出した輝きに、ベリアルは明らかな動揺を見せる。

『認めん……そんなもの、俺は認めんぞ!』

そしてその輝きを拒絶するように、闇が膨れ上がる。

全てを飲み込み粉碎せんばかりに迫るベリアルを前に、ノアはただ静かに立ちほだかり、微かに動く。

『ドウアアアツ!』

『又……アアアアアツ……!?!』

炎塵を纏った両の拳がベリアルの手つ原を射抜き、左右へ振り抜かれると共に発生した光の刃がその闇を裂く。

更に追撃の三日月蹴りが直撃し、奴の身体を大きく吹き飛ばす。

『グ……ウウウ……貴様等ア!』

『デエエエリヤツ!』

即座に反撃に移ろうとしたベリアルにゼロが空拳を殺到させるも、辛くも弾かれ逆にカウンターを貰ってしまう。

だがその一瞬の間を突くように、ノアは大地を蹴った。

『オオオオオ……!』

ノアの左腕に膨大な熱量が集約してゆく。

神風の如し速度の中でも衰えることのないその熱はやがて獄炎となり、突き出された

拳と共にベリアルへ叩き込まれる。

『シューウアツ!!』

噴出された炎の柱は大気を焦がしながら猛進し、その衝撃波で地面を抉りつつ奴を遙か奥へと運ぶ。

辛うじて受け切ったベリアルにより炎は消滅させられるも、その懐へ迫ったのはまたもゼロだった。

『ダアアアルアツ!!』

『グオオツ……!!』

全身全霊で振り抜いた鉄拳が今度こそ顔面へめり込む。

もんどり返って吹き飛び、何度も地面を転がったベリアルだったが、まだその双眸に宿した野望は衰えぬと言わんばかりに雄叫びを上げる。

『まだだ……まだ終わらんツツ!!』

暗雲、大地、そして奴自身。

それら全てから発生した赤黒い雷をその両腕へ集約させ、叩きつけるように十字に組んでは暗黒の光線を疾走させた。

『アアア……!!』

ベリアルがその全てを叩き込んだ一撃を放つても、ノアはなお静かに、対抗するよう

に胸に宿る深紅の輝きを増大させる。

そのエネルギーが極限まで高まった瞬間、立てた右腕に左拳を打ち付け、幾重にも重なった九色の光線を解き放った。

『シューアアアア!!』

ライトニング・ノア……超新星爆発をも超える威力を持つとされるノアの必殺技。

それはA q o u r s 九人の輝きと合わせり、悉くの闇を切り裂く勢いでベリアル光線と衝突する。

『グ……オオオオオオオオオオツツツ!!』

互いに譲ることなく、爆ぜては消える光と闇。

仲間との絆が紡ぐ究極の輝きを前にしても、空っぽなはずの孤独な闇はそれに拮抗する力を見せている。それほどベリアルにとってこの輝きは認められないものなのか。

『……』

『……!』

無言のままこちらに双眸を向けるノアに対し、静かに頷く。

輝きはこれだけではないはずだ。その瞳はそう語っていた。

『ぶつけるぞ陸……俺達の、全てを!』

歌が奏でられた。

旋律を刻むメロディと共に光はゼロを中心に広がり、やがてそれぞれの色を咲かせる。

「……眩しいな。それに、なんかあったかい」

『ああ……今この瞬間は、アイツ等が最高に輝いてるよ』

光の中で想起する。

決して平坦な道でも、順風満帆なものではなかった。けど、それでもその一瞬一瞬がかげがえのないものだと言えたからこそ、この輝きがあるんだ。

そんな日々を、これからも歩んでゆくために。

また新しい輝きへと走りだすために。

今はただがむしやらに、進むんだ。

『食らいやがれベリアル……これが俺達の——輝きだッ!!』

無数の色を持つ光がゼロの中へ溶け込み、その輝きを限りなく増大し解放される。

刹那にゼロの全身から巻き起こった輝きの嵐がノアの光線と融合し、暗黒の光線を掻き消してはベリアルを飲み込んだ。

『アアアア……アアアアアアアアアッ……!!』

その圧倒的な光の中で、ベリアルのも身体もまた光となり消滅してゆく。

轟く断末魔の猛々しさとは裏腹にその光は酷く穏やかに、また純粹にも思えた——

「……ベリアル。お前、もう止まれないんだよな」

いつか来たベリアルの精神世界。

その魂をも消滅する寸前、同じ力を持つ陸だからこそか、僅かな時間とは言え彼の精神と繋がった。

「信じてたもん、信じたかったモンがあつたのに、すれ違いから裂け目がどんどん大きくなって……もう戻れなくなつた、止まれなくなつた」

『……黙れ』

「今のお前がそれをどう思ってるかは知らないけど、お前がずっと抱いてきた苦しみは、それに起因してるんだろ？」

『……黙れ……！』

最初はただの嫉妬や劣等感からだつた。

けれどもそれすら否定され、憎しみと共に復讐を誓つた。

その復讐の中で憎しみが晴れることのないまま別の憎しみを抱く……それを繰り返してきたんだ。

「止まらないから何度倒されても蘇って、その度に憎しみを募らせて……でも、それじゃダメなんだよ」

己の過去を肯定できずに、やってきたことに価値があったと認められずにここまで来ている。

きつと千歌達の輝きに拒絶を示したのもそういうことだろうから。

『わかったようなことを言うな！ 貴様に俺の何がわかる！』

「わかんねえよ……お前がどれだけ苦しんできたかなんて。……でも、お前って存在が続いていく限り、お前の苦しみも増していくってことだけはわかる」

理解できたなんて言うつもりは毛頭ない。

でも、彼の中で、彼の苦しみの根源を見た者として、それ以上その苦しみが続くのを終わらせたかった。

「誰に言われても、今更、お前は止まれないだろうからさ……」

もし、それが出来る者がいるとするならば。

それはきつとベリアルから生み出された、自分のような存在だろうから。

「だから……俺達で、お前を終わらせてくれ」

ベリアルの子孫を保持して生まれたことに、意味を見出すとするならば。それはベリアルという苦しみの連鎖を断ち切るためだった……そう信じたい。

『俺は……俺はアアアアツツ………!!!』

その肉体が、魂が、光となって消えてゆく。

復讐に囚われ、苦しみ続けた彼が迎えたのは、二度に渡って自分が利用しようとした存在に受け止められる……そんな最期だった。

「……もう、ゆっくり眠れ」

そんな祈りに光を差し込むように、暗雲が晴れてゆく。

やがてその顔を覗かせた青空はどこまでも遠く、明るく、澄み切っていた。

百五十八話 幕が下りる

「…いつまで準備してんだお前。遅刻すんぞ」

「もうちよつと、もうちよつとだけ待って……!」

寄りかかった戸の向こうから聞こえる曜の声にドタバタと床を駆ける音。

普段ならば曜が陸を急かしているはずの構図も、今日ばかりは逆転していた。

「ほいお待たせ! いっそげー!」

数分待った後、勢いよく新品のそれと見紛うような制服姿の彼女が自室から顔を見せる。

そんな曜に続き、彼女の母親から送迎の声を受けつつまだ肌寒い三月の空下へ飛び出した。

「お前それ仕立てるのに時間掛かったのか……?」

「まあ……うん、今日が最後だと思ったら気合入っちゃって」

いつも呼び出されていた寝坊常習犯の陸が逆に呼び出しに行くほどなのだからよほ

ど熱中していたのかと思いつつ、自転車のサドルに跨る。

それに続き曜が荷台へ腰かけたのを確認すると、吹き付ける海風を切るようにペダルを踏んでは前へと漕ぎだした。

「…そういや、こうやってお前のこと送るのもこれで最後か」

ふと思いきこしそう呟く。

よくよく考えればよくもまあ二年もこんなタクシーまがいな行為を受容してたものだ。

「そうだね……なんか寂しいなあ」

「ようやく奴隷生活からおさらばできると思うと清々する」

「おーい?」

不満気に口を尖らせた曜に背中を突かれる。

まあ静真の方にも自転車通学する予定なので十中八九この扱いは継続だろうが。

「……ちよつと時間ヤバイな。飛ばすぞ」

「…前みたいなのはやめてね」

「わかってるよ」

以前ウィリー走行で泣かせてしまったことは陸としても反省しているので今回は少々抑え目に飛ばす。

とは言え原付バイクほどの速度で進んでいるため吹き付ける風も冷たさを増すが、これはこれで嫌いではない感覚だった。

「…俺さー」

目的地である建物の影が見え始めたその時、少しスピードを緩めると背を向けたまま零す。

「前にも言ったと思うけど、お前と一緒にいる時が一番落ち着くし……もう皆とは一緒にいられないって思った時、真つ先にお前の顔が浮かんだ」

全部終わったなら。そう言ったのは陸自身だし、まだ全てが終わった訳ではないけれど。

けど、何故だかこの気持ちは今、伝えなければいけない気がした。

「お前がああ言ってくれたことも嬉しかったし、俺の気持ちも多分、そういうことだと思う」

決して彼女の顔を見ずにそう伝える。

頬を走る風の冷たさが少し和らいだのは、きつと気のせいではないのだろう。

「……だから、お前が俺でいいって言ってくれるなら………よろしく頼む」

「……うん」

腰に回された腕に力が込められるのがわかった。

そんな彼女の手に片手を重ねる。

仄かに伝わってくる温もりは今日も、確かなものだった。

「二人共——！ おっはヨーソロー♪」

「ヨーソロー！」

校門前まで着くと、既に見慣れた顔触れが出揃っていた。

桜舞う中、生徒のみならず保護者やOGと思われる人達の声も加わりそれなりの喧騒が生まれている。

「わ！ 曜ちゃんの制服新品みたーい！」

「へへん！ 気合い入れてきたであります！」

「入れ過ぎて遅刻しかけたけどな」

かくいふ皆も、着込む制服は新品かのように整えられていた。

それほど皆、今日という日が大切だということだろう。

「……てか、ホントに俺がいていいんすか」

「何を言うんですの。貴方もこの学校を救おうとしてくれた一人です。十分、ここにい

る資格はありますよ」

「イエース！ りくつちなら皆歓迎だよ♪」

生徒会長と理事長。この学校のトップ二人に引き摺られるようにして校内に連れ込まれてゆく。

ふと見ると皆、明るい談笑を交わすその裏に、一抹の寂しさが垣間見えるようだった。

今日は、彼女達の愛した学校の閉校式。

浦の星女学院、最後の時が始まろうとしていた。

「今日この日、浦の星女学院はその長い歴史に幕を閉じることになりました」

三年生への卒業証書の授与を終え、残すところは全校生徒を代表して、ダイヤのスピーチのみ。

着々とその時は迫るものの、その瞬間を告げる役割を担った彼女の顔は晴れやかだった。

「でも、私達の心にこの学校の景色はずっと残っていきます。それを胸に新たな道を歩めることを、浦の星女学院の生徒であったことを誇りに思います」

これは別れの言葉ではなく、これから来る未来へ向かって歩き出してゆくという誓い。

それを胸に秘めているのはきつと、壇上の彼女だけではないのだろう。

「只今をもって浦の星女学院を——閉校とします」

「……………ここで最後か？」

「……………うん」

最後の時というのは、なるべく長く続いて欲しいという皆の想いを裏切るように早く進む。

夕焼けに染まった空の下。陸の眼前で、九人の少女が小さな部屋の中でこれまでを思い起す。

「結局、誰も帰ろうとしなかったね」

閉校式自体は午前中で終わったし、そこから順次解散になる予定だった。

けれど今ルビィが言ったように誰一人としてこの場所を去ろうとせず、気付けば夕刻を迎えていた次第だ。

「皆、少しでも長くいたいって思ってるからかしら」

「ほっといたら、明日でも明後日でも残ってそう」

「完全に籠城ずら」

「そしたら、また学校続けていいって言われるかも」

思い出巡りと称し校内を連れ回された陸だったが、まあ、これはこれで思い起すことが色々あった。

皆それぞれ一人一人に同じような思い出があつて、この学校につまっているのだろうと、改めて実感する。

「そうだったら、皆びつくりだね」

「でも、ちゃんと終わらせなきゃね。皆で、そう決めたんだから」

果南の言葉を皮切りに、一人ずつ、スクールアイドル部の部室を後にしてゆく。

ここがあつたから皆で頑張つてこられた、前を向けた。

毎日の練習も、楽しい衣装づくりも、腰が痛くても、難しいダンスも。

どんな嬉しさも楽しさも、不安も緊張も、全部受け止めてくれた。

それも全部、返ってこられる場所が、ここにあったから。

「…ありがとう」

スクールアイドル部。

千歌がその名が刻まれたプレートを外すと、皆で最後に一礼。

輝きを置き残してゆくように部室に別れを告げると、遂に、その時は訪れた。

『……終わるんだな』

A q o u r s 九人も、校門の外に集まっていた他生徒達も、保護者達も皆、その校舎を見上げていた。

その輪から少しだけ離れた場所へ移動すると、静かに、終わりの時を待つ。

「…千歌ちゃん」

「……千歌」

この学校を守ろうと奔走した九人が代表し、その門へ手を掛けた。

受け入れたはずなのに、それでも辛さや苦しさが勝る。そんな想いを表すように、門は少し動いてはまた止まる。

「……浦の星の思い出は、笑顔の思い出にするんだ……！　泣くもんか……泣いてたまるか……！」

己を鼓舞する言葉とは裏腹に、涙は止めどなく流れた。

いつしか門を押すその手も離れ、皆身を寄せ合つては、ただただ泣いた。

『…手伝うか?』

「…いや、出来ないよ」

『……だよな』

それでも、別れは笑顔でいる。交わしたその約束を守るように。

九人は再び顔を上げると、またその門を閉じんと手を掛けた。

『……俺達が閉めるには、あの門は重すぎらあ』

学校を救う。そう誓ったあの日に昇った太陽が、沈む。

舞い散る、桜吹雪の中。

沢山の愛と、沢山の感謝を受けながら。

浦の星女学院は、その歴史に幕を下ろした。

『大丈夫かね、アイツ等』

「…まあ、信じるしかねーだろ」

ラブライブも、ベリアルとの決着も、全て終わった。

激風のような日々は過ぎ去り、訪れた平穏な時間。そんな時を嘯み締めるように、陸は高台の上から街並みを見下ろした。

「……そういや、お前これからどうするんだ？」

ゼロがこの地球に滞在していたのは、ダークネスファイブやベリアルという脅威があったから。

それらを打ち払った今、ゼロが光の国に帰還する時ももうすぐそこまで迫っているはずだ。

『もうしばらくは残るつもりだ。まだ俺の身体も全快した訳じゃねーし、今回の騒ぎの後処理もあるしな』

そうは言うが、ベリアル軍の残党の処理は殆ど宇宙警備隊が終えているらしい。どうであれもう、コイツがここにいる時間ももう長くないのは確かだった。

『ああそーいや、お前の身体の方ももう心配はいらないってよ。ベリアルの力は残っちゃうが、普通に生活する分には問題ないらしい』

「それだけ聞けりゃ十分だよ」

戦いの直後、宇宙警備隊に連行されて光の国で治療と検査を受けたのは記憶に新しい。

正直あの星の光景と超技術に肝を抜かされてばかりでそちらの方はあまり印象に残っていないのだが。

『しっかし、大隊長と話してる時のお前の顔……傑作だったな』

「仕方ねーだろ！　なんかあの人だけ他と圧が全然違かったんだよ……！」

今回の騒動の渦中にいた者として、宇宙警備隊のお偉いさん方から事情聴取も受けた。

かつての戦友であるベリアルが絡んでいたからなのか、ウルトラの父が自ら話をしに来た時は陸やゼロはおろか周囲の宇宙警備隊員までもが驚きを見せていたが。

『まあ、あのウルトラの父に称賛されたんだ。誇っていいと思うぞ』

「そういうもんなのか……？」

ちなみに騒動自体のことは光の国全体に報道されるが、陸の出自に関してはウルトラ兄弟と一部の者にしか知らされないらしい。

混乱と、ないとは思いますが偏見の目を減らすためと、メビウスとヒカリが提案してくれたことだそうだ。

「……色々あつたよなあ……」

『ああ。俺にとつても、体験したことのないことばかりだった』
マネージャーとしても、ウルトラマンとしても。

どちらもなし崩し的に巻き込まれたことだけでも、気付けば夢中になっていて。がむしやらに走り続けていた。

『お前達には、色々貰ったよ』

「こつちのセリフだつつの」

その日々がいつしかかけがえのないものになっていて、今の自分を作ってくれた。

そうやって歩んでこれたのも全部コイツが、皆がいたから。

「……あと、テメーにもな」

その場に植えたのは一本の低木。

やがては大木に育つであろうそれに、彼の遺品である真っ黒な布切れを括りつけた。

「つたく、拜む墓増やしやがって」

アイツがこんなことを求めているかなんてわからないけど。

これもまた一つのケジメであり、陸なりの礼儀だ。別にアイツも悪い顔はしないだろう。

「……こつちからなら、よく見えるだろ」

見ててくれ。そう言うように。

ほんの少しだけ口角を釣り上げて見せると、それ以上は止まらずにその場を去ろうとする。

—— 楽しみにしてるよ。君達の、新しい輝き。

「……おう、目ん玉かつぽじってよく見とけ」

自分自身、どこへ向けたかも知らない返答が風に流れてゆく。

若葉を揺らすその木はどこか気持ち悪く、笑っているように見えた。

最終部 虹の先へ

百五十九話 新たな予感

『レッキングバーストオオオツツ!!』

『ザナデイウム光線ツ!!』

果てなく続く宇宙空間の中、薄暗い闇を切り裂くように雷を纏った光線が疾走する。

その向かう先には仮面や拘束器具のようなものを身に着けた闇の巨人が一人。そんな奴を取り囲うように舞うのは、正反対の性質を持つ光の巨人達。

『フフフ………ハアツ!』

『ギンガサンダーボルト!』

音の伝わらない空間の中で、代わりに光が散華する。

五対一という圧倒的に不利な状況にも関わらず、その巨人は不敵に、かつ愉快そうに笑い続けていた。

『ニュージエネレーションズ………だったかな? 如何に世界を救った勇者達といって

も、まだまだ青いな』

『その余裕、いつまで続くか見物だな』

また幾つもの光線が伸び、それらを掻い潜るように闇の巨人が舞う。

そんな応酬の繰り返しに終焉が訪れたのは、唐突だった。

『ビクトリウムスラッシュ！』

『ぐおお……ッ！』

金色の鍔が命中し、その身体がたまらず吹き飛んだその瞬間、

『オリジウム光線！』

これで終わりだと言わんばかりに伸びた光の筋。

だがそれは炸裂する寸前に発生した赤黒い魔方陣に吸い込まれてゆき、微塵の手応えも生むことのないまま消えることとなる。

『フフフ……お楽しみはこれからだよ』

パチンと、指を鳴らしたような、音ではない何かが鳴る。

瞬間にどこか遠くの時空が歪んだような振動がし、同時に蟠っていた闇も霧散してゆく。

『…?!? 奴はどこに…?』

『逃げられたか……』

魔方陣と共に消えた標的の姿に生まれる動揺。

一瞬のうちに静まり返った宇宙空間には、そんな波紋だけが残されていた。

涙の閉校式から数週間が経った。

悲しみは癒え切っていないものの、いつまでも下を向いてはいられない。

そうして新たに踏み出そうとしていた……そんな折だった。

「練習……どこでするの?」

新しい学校に行ってもスクールアイドルを、Aqoursを続けていく。

それが卒業した三人も含め、皆で出した結論。

「どこでって、いつもの……あっ」

そんな新生Aqoursのスタートは、また壁にぶち当たるところから始まるらしい。

これまでのように練習へ励もうとした六人は、ふと思い出したように互いの顔を見合
わせた。

「学校、ついこの前閉校したばっかだろ」

「駅前の練習スペースは？」

「あれは、ラブライブが終わるまでっていう約束で……」

これまでずっと練習場所として使ってきた浦の星の屋上も、渡辺家の伝手で借りていたスタジオももう使えない。

学校も練習場所も変わった、六人でのスタート。

改めて、これから新しい場所へと踏み出していくことを実感させられる。

「え、じゃあどうするずら？」

「鞠莉にでも聞いてみる？ どこか当てはないかって」

そう提案したのは善子だった。

今考えられる手段で最も現実的なのはそれだろう。下手に悩んで時間を浪費するよりは、彼女に頼ってしまった方が手っ取り早い。

けれど――、

「自分達で探そう」

納得しかけた空気の中、千歌が一人そう言う。

そんな彼女の瞳は、まだ陸達には見えていないような何かを見据えているようだった。

「なんかね、頼ってたらダメな気がする。この六人でスタートなんでもん。この六人で何とかしなきゃ」

これから新しい場所で活動するのはこの六人。

だからこそ初めから自分達の力で解決しなければならない。千歌はそう語る。

「あと、陸ちゃんもね」

まあ正確には六人十一人か。

今度の学校には陸もいる。力になれることは、これまでよりもずっと増えるだろう。

と、まあそんな訳で早速力になりたいところなのだが、言われてすぐに思い浮かぶほど優秀じゃないのが現実であり。

「閃いたー！」

結局、最初の貢献は幼馴染に譲ることとなる。

「新しい学校、行ってみるのはどうかな。私達が春から通う」

「…新しい、学校…」

曜の提案に怖気づいたような顔を見せたのは一人や二人ではなかった。

差異こそあるが、皆どこかしらに不安を抱いている……そんな顔。

「…通う前からそんなんでどうすんだよお前等」

そんな中、一人賛成の意を示すように陸は言葉を綴る。

「どのみち春には通い始めんだ。早いうちから行つておくのに越したことはねーだろ」
未来が楽しみだとは言つたけれど、いざそれを目前にするとやはり恐怖が生まれる。
けど踏み出す以上は逃げる訳にもいかない。そう決めたのも彼女達だ。

「…そうだね」

「フフ……このヨハネの新たな城、我が位に相応しいかこの目で確かめてやろうじゃない」

「さつきまでビクビクしてたのは誰ずらかー」

「うっさいわい！」

幼馴染漫才を皮切りにまた笑いが生まれ、少しだが不安や緊張の糸が解れていくような感覚がした。

——大体これが、一時間くらい前の話。

「……はあ。」

バスから降りた陸達の前に佇んでいた建物を見て腑抜けた声が出る。

呆気にとられているのは陸だけではなく、皆も一樣にぼかんとその場に立ち尽くしていた。

「おい……まさかこれが学校とか言わんよな」

あの後皆も賛同し、練習場所の搜索がてら新しい学校である静真高校を見に行くことになったのまでは良かった。

だがどういふことか、指定された場所では出会ったのはこのオンボロ校舎。

辛うじて学校だったのはわかるが、腐りかけ蔦に覆われている木版の壁やひび割れた窓ガラスを見るに使われなくなつてから相当時間が経っているのは火を見るよりも明らかである。

「……てか、静真の校舎ここじゃねーだろ」

「ちよつと曜！ 間違えたんじゃないの!？」

「えええ……でも、学校から送られてきたメールだよ？」

曜の言う通り、彼女のスマホにはその旨が記載されたメールと添付された地図が映し出されていた。

地図の指し示す場所は確かにここであり、現にこうして辿り着いた以上間違いはないと言える。

『……もつと立派な校舎だったよな、あそこ』

「…少なくともこんな廃屋寸前じゃなかったのは確かだ」

謎ばかりが深まる。

事実バスに乗っていた時点で何かおかしいとは思っていたのだ。こちらの方面に学校があつた記憶はないし、何度か行ったことのある静真の校舎からもかなり遠い。

「ああああ——ッ!!」

とにかく一度確認を取ろうとしたその時、何かを発見したようにルビイが声を上げる。

「見て!」

指さされた先にあつたのは一枚の古びた看板。

そこには確かに静真高等学校の文字が彫られていたが、その下に小さく付け加えられていた二文字に全員の視線とリアクションが集中する。

——分校おおおッ!!??

『——つて、むっちゃん達が言うにはそういうことらしくて……』

「…なるほど」

一旦千歌達と別れた後、浦の星の皆と合流したらしい彼女に電話越しで事情を聞く。なんでも静真の方で他の学校だった生徒が同じ校舎に通うことに対し否を唱える声があり、しばらく分校で様子を見ることになったそう。

「村八分かよ……今何時代だと思ってるんだ」

『まあ、流石に無茶苦茶だよな……』

あのオンボロ校舎は浦の星の生徒の一時的な受け皿として旧校舎を利用した結果らしい。

元々別の学校だった生徒等が合流することで生じる混乱を防ぎたいのはわかるが、だとしても少々横暴が過ぎる。

『で、お前んとこはどうなるって?』

「まだ知らん……だからとりあえず、講義がてら月に聞きに行くんだよ」

何度か顔を合わせている渡辺月は曜の従姉妹であると共に静真の生徒だ。

静真のことは静真の生徒に聞くのが一番。まして月は生徒会長、これほど適した相手は他にいないだろう。

『ま、統廃合になって廃校になった学校に移っちゃ意味ねーわな』

「さつき連絡したら月もちよつと思うところがあるつぼかったからな。とにかく詳しいことは直接会って聞く……って」

ふと違和感を覚え、月との待ち合わせの場所に向けていた足を止める。

『…どうした？』

「いや……ここ、こんな風だったかなと思つて……」

通りの喧騒や行きかう雑踏は普段と何ら変わりはない。

ただ何というのだろうか、この街並みに見覚えがないような、そんな感覚。

『おいおい、その年になって迷子か』

「そういう訳じゃないと思うんだが……」

首を捻りつつ歩みを再開すると、また慣れ親しんだ街並みへと戻る。

あの場所だけ工事でも行つたのだろうか、それでも拭いきれない違和感の正体を探っていた——その時だった。

『ツツツツ——』

『!!!!』

突如空に開いた暗黒の穴に、その内部に描かれる赤い魔方陣。

そこから海上に落ちた雷と共に現れた巨獣が、咆哮を散らした。

『コツヴだと…何故ここに…?!』

両腕の鎌や胸部の水晶体、そして鎧のように突出した全身の皮膚はまるで戦いそのもののために生まれた生物かのように。

コツヴと呼ばれた怪獣はその眼光を瞬かせると、人に引きつけられているのか街を指して上陸せんと侵攻を開始する。

『ベリアル軍の残党……つて訳じやなさそうだが、どうであれ地球には存在しない怪獣だ。恐らく呼び出した奴がいる』

「ベリアルの後釜でも狙ってんのか……?」

『さあな。とにかく、アイツの処理が最優先だ。学校のことも大事なのはわかるが今はこつちに集中してくれ』

「わかってるよ」

悲鳴を上げる人々の間を駆け抜け、建物の陰に隠れてはブレスから取り出したゼロアイを装着。

赤と蒼の閃光が舞い、巨人の姿となってコツヴの前へと立ちはだかる。

『さあて…、どいつの差し金か知らねーがこつちもこつちで立て込んでな。ぱっぱと片付けさせて——』

『ハッピーー!』

いざ戦闘へ移らんと身構えた直後、真横から聞こえた緊張感のない声に思わず面食らう。

『皆を苦しめる悪い怪獣さんは、この私が懲らしめちゃいますよー!』
隣にいたのは、淡い橙の体色を持つ巨人。

ゼロに比べると小柄であるが、胸に宿った輝きは確かにウルトラ戦士のものだ。

『お兄ちゃん達がいなくても、この街は私がまも…り…:…』

しかしこれまでに出会ったウルトラ戦士と比べるとどこか異質というか、言うなれば女の子っぽさを感じるその姿。

そちらも違和感に気付いたのか、ゆっくりとこつちを向いたその双眸と視線が合い—

「『…え?』」

緊迫していた空気の中に、腑抜けた声が重なった。

百六十話 六人

「曜ちゃんの?」

「従姉妹?」

「渡辺月です! よーろしくー!」

目を丸くする五人の前で敬礼して見せるのは渡辺月。

彼女と連絡を取った曜曰く、従姉妹なのだとか。言われてみれば似てない気もしなくもなかった。

「ごめんね月ちゃん。急に呼んじやって」

「ううん。ボクもりつくんと会うつもりだったし、多分曜ちゃんも聞きたいことは同じでしょ?」

「……てことは」

「あの学校の生徒ってこと?」

問いかける千歌に月が頷く。

暗めの服装に映えるその笑みは、ふとした瞬間に男の子と見紛うほどにボーイッシュ

に見えた。

「うん。実は入学前に曜ちゃんとりつくくんも誘ったんだけど、曜ちゃんは千歌ちゃんと一緒に学校がいいって」

「そ、そうだったかなあ……」

「そうだったよ？ りつくくんも、曜ちゃんがいないならって別な学校に行っちゃったし」
「へー」

「入学前からイチャついてたのねアンタ達」

「なんか皆最近冷たくない!？」

後輩から弄られる曜を見て微笑ましそうに笑う月。

流れるようにその様子を眺め、その内の一人で視線を縫い留める。

「あー！ 君が梨子ちゃんだね！ いつも曜ちゃんから聞いてるよ、尊敬してるって！」
「そ、そんな大袈裟な……」

といつつまんざらでもない様子の梨子からまた一人、一人と嬉々としてその目を向けてゆく。

状況から察するに曜から自分達の話は聞いていたようだし、実際に会ったことで少々舞い上がっているのだろうか。

「千歌ちゃん、ルビイちゃん、花丸ちゃん、善子ちゃん。曜ちゃん本当にA q o u r sの

ことが好きみたいで、会うたびに皆のこと話してるんだよ」

「……あの、月ちゃん」

「いつも思うんだー。もうAqoursは曜ちゃんの一部なんだなあって」

「…その、そろそろ本当に恥ずかしいというか……」

「とりあえず先輩がいつもストッパーしてるのはわかったぞら」

ちなみに、とある一件で月も陸がウルトラマンゼロと一体化していることは知っているそうなの。

いつの間にか知ったのかは定かではないが、変に気を張らなくてもいいのはこちらとしても気が楽だ。

「そういえば、りっくん遅いね」

「そう言えばそうだね……もう怪獣倒してから結構経ってるけど」

先程沼津港の沿岸に怪獣が出現したことはもうニュース等で全国に知れ渡っていることだろう。

怪獣自体は上陸する前にゼロともう一人の巨人によって倒されたため被害は出ておらず、そのおかげで千歌達も普通に街を出歩けている訳なのだが……もうそれは一時間ほど前の話。

元々陸は月と会う約束をしていたらしいし、そろそろ顔を見せてもいい頃だと思っ

だが……、

「……って、あれ！」

携帯も応答がないので探しに行こうと腰を上げたその瞬間、意外とあっさり彼は見つかった。

だが誰一人として声を掛けようとすらせず、ただただ啞然として陸と、その隣にいる少女に交互に視線を向ける。

「ちよっ……ちよ……何アレ、ていうかあの子誰!？」

「この辺じや見ない制服だけど……」

「何ずら? ひよっとして彼女とかさういうのずら!？」

「いやでも陸くんには曜ちゃんが……」

「って、わああ、曜ちゃんの目から光があ!？」

混乱と動揺が沸き起こった。

陸の方はいつも通りのつつけんどんな態度だが、少女の方がやたら親し気に接しているため余計に気になってしまう。

「いや、でもりつくんに限ってそんなこと……」

「あ、どこか行くみたい……」

「と、とりあえず追ええー！」

少女の隣にいる陸は仕方がないと言った様子の顔をしているものの、特別抵抗する素振りはない。

会話までは聞き取れないが、その様子から察するに何かを探しているように見えた。

「妹さんかなにかずら？」

「いや、陸ちゃん一人っ子だったはずだけど……」

「そもそも生まれるに兄妹は……」

「それは禁句よ善子ちゃん」

妄想と推察を独り歩きさせつつ、物陰に隠れながら陸を付ける。

だが流石に気配までは消せていないのか、時折こちらを振り向く彼の視線を掻い潜らんと咄嗟の対応を繰り返す。

「つて、わあああ!?!」

何度かそうしているうちに体勢や立ち位置はどんどん厳しくなつてゆき。

ふとバランスを崩したその瞬間、ドミノの如く全員仲良く前へと倒れ――、

「……何してんのお前等」

恐らく初めから付けられていたことに気付いていたであろう陸に半目を向けられる

始末となるのだった。

遡ること一時間前。

『ちよ、ちよ……誰ですかあなた!?!』

『それあこつちのセリフだ。お前、光の国のウルトラマンじゃないな。どこのモンだ』
「なんだその極道みたいなノリ……」

突如出現した宇宙戦闘獣コツヴを迎え撃つべく出撃した陸とゼロ。

そんな自分達と共に現れたのがこの女性型のウルトラ戦士……言うなればウルトラウーマンだろうか。

「えつと、どこのどなたかは存じませんが……どうしてここに?」

『どうもこうも、ここは私達の街ですよ?』

『はあ?』

これまで地球に飛来してきたウルトラ戦士達のようになにか事情があつてここにいるのかと思つたが、その返答はまさかのもの。

だがこんなウルトラ戦士は見たことがないし、何よりこの一年戦い続けているゼロを知らないのがおかしい。

「…もしかして」

そう言えばと、つい先程感じた不可解な出来事を思い出す。

あの街の一部だけ別の場所に変わったかのような感覚。もし、彼女がそれに関係あるとするなら……、

「すみません。この街の名前、言えますか？」

『え……？ 綾香市、ですよね？』

『……どこだそりゃ』

その返答にやはり、と確信する。

「ここは静岡県沼津市……俺達の街つすよ」

『ええ!! そんなはずは……』

そうやって街を見回す彼女だが、やがて陸の言葉が真実だと理解したのか、混乱した様子で肩を落とす。

どうやら何らかの要因でこっちの世界に来てしまったらしい。それも自覚なしに。

『とりあえずこの話は後だ。まずはアイツを片付ける……俺はウルトラマンゼロ。お前は？』

『…グリーンジョ……、ウルトラウーマン、グリーンジョです』

『そうか……行くぞグリーンジョ!』

少し話している間に上陸寸前まで迫っていたコツヴにゼロが飛び蹴りの姿勢で衝突。

反撃に両腕の巨大な鎌を振り下ろしてくるも、難なく躲しては再びその身体を蹴り上げる。

『なんだかわかりませんが私も……てやああつ!』

まだ少し混乱している様子のグリーンジョだったが、ゼロの姿を見てやるべきことを悟ったか、奮起するようにその瞳に火を宿す。

その闘志をぶつけるように両腕を十字に組むと、発生した光線を一直線に照射し——

『いっつ……でええええツツツ?!?!』

ゼロの背中を直撃する。

『何しやがんだテメエ! 敵はあつちだろ!』

『はわわ……ごめんなさい! い、今回復します!』

激昂するゼロに気圧されながらも光を一点に集中させ、エネルギーの凝縮した球を生成するグリーンジョ。

だが慌てていたからか軌道が逸れたその球は放物線を描くとそのままゼロを通り越

し——、

『ツツツ——!!!』

ゼロの攻撃によつてふらついていたコツヴに命中する。

ほんのりと光つたその巨体からは今しがた出来た傷も消え、猛々しく咆哮を上げる姿はむしろ前より活性化したようにも思えた。

『怪獣回復させてどうすんだッ!』

『ひえええ……ごめんなさい……!』

『もういい、俺一人で片づける!』

苛立ちつつもグリージョを庇うように前へ立つと、頭部のスラツガーを融合させ一本の大剣を生む。

そして風のような速度で大地を蹴ると、軌跡を描きながら光を纏つたゼロツインソードを振り抜く。

『プラズマスパークフラツシュッ!』

迸つた一閃が胴を両断する。

真つ二つに叩き切られたコツヴは擦れた咆哮を最後に真後ろへ倒れ込み、爆発と共に派手な水飛沫を上げた。

「——つー訳だよ」

猛烈な圧と共に取り囲ってくる少女達にこうなるまでに至った経緯を説明。

何をどう思っていたのかは知らないが、とにかく誤解が解けたのならそれでいい。

「じゃあ、今の人がさっきのウルトラマンってこと?」

『正確にはウルトラウーマン……だがな』

ゼロの声に合わせ視線を送ると、後方にあるアパレルショップの中から手を振ってくる少女に軽く会釈する。

陸の予想通り、やはり景観そのものが変わったこの町の一角。その中央に位置するあの店が彼女の実家らしい。

「…湊アサヒさん。多分ガイさん達みたいなの、別の時空のウルトラ戦士だ」

「それがどうしてここにいるのよ」

「さあな……それ含め今アサヒさんと調べてたとこだ」

なんとなく見えてはいるが、彼女達には敢えて濁す。

グループとして新たな問題に直面している今だ。余計な心配はさせたくない。

「…それより、お前等月と会ってたんだな。だったら手っ取り早い」

待ち合わせをすつぽかしたような形になってしまったのは申し訳なく思っていたが、その結果千歌達とも顔を合わせていたなら結果オーライだ。

どのみち彼女等にも伝えるつもりでいたことだ。直接月の口から語られるならそれに越したことはない。

「なあ月。今回の分校の件のこと、なんか知ってないか」

「あー……」

陸が問うと、月は気まずそうに首を垂れる。

静真の生徒がどの程度このことを知り得ているかはわからないが、思った通り生徒会長である彼女の耳には届いているらしい。

「そうそう、どうしてこんなことに」

「…そうだね。元々りつくくんには伝えるつもりだったし、皆にも知ってもらっていた方がいいよね」

そして月は語った。

静真高等学校は昔から部活動が盛んであり、いくつかの部活は全国大会に出場するほど。

そんな中に他校の生徒が入り、部にだらけた空気や対立を齎すことを一部の父兄が危

惧し、今回の形に至ったらしい。

要するに他校との統合が生む変化を警戒してのことだ。

「…なんでそういう話になるのよ」

「だよ。ボク達生徒も、先生達も心配ないって説得したんだけど……部活がダメになつたらどうなるんだとか、責任取れるのかとか、そういうのばかりで」

無力感や責任感故か、肩を落とす月。

月が統合する学校の生徒のために動いてくれたことは知っているし、それは近くでその働きを見ていた陸が保証する。

けれどそんな彼女、ましてや他の生徒や教職員の訴えですらも父兄を抑え込めなかつたらしい。

「そんなこと言い始めたら、何もできないと思うけど」

強豪校故の伝統や矜持……そういうものなのだろうか。

少なくとも今自分達が歓迎はおろか煙たがられていることはよくわかった。

「つまりなんだ。その父兄が気にしてんのは、俺等よそモンが部活なりなんなりでちゃんとやってけるかってことか？」

「うん……だから、実績もある部活もあるって証明できればいいんだよ」

実績や結果。

これまでも散々A q o u r sを苦しめてきたその壁は、またもその道に立ちほだかるらしい。

「証明するって言っても……」

「……そんな部活……」

ただでさえ生徒数が少なく、掛け持ちをする部員がいたことで何とか成り立っていたような浦の星の部活動がそんな実績を残すことは殆ど不可能だった。

勿論陸の学校にもそんなものはなかったし、状況は八方塞がりと言ってもよかった。ただ一つの突破口を除いては。

「あるでしょ、一つだけ」

「全国大会で優勝した部活が」

「……あ」

ふと気付くように顔を上げる。

全国大会への出場に、そこでの優勝。つい先日、彼女達はそんな快挙を成し遂げたはずだ。

「私達スクールアイドル部が新しい学校の他の部活にも負けなくらい真面目に本気で活動していて、人を感動させてるんだってわかってもらえればいいんじゃない？」

「それ……それいい！」

立ち上がった千歌に釣られるように、皆の瞳にも光が灯ってゆく。

そうだ。これまでとやることは変わらない。いつだってただがむしやりに前へ走り続けるだけだ。

「それで？ ライブでもやるつもり？」

「それもいいけど、実は来週、丁度いいイベントがあるんだ！」

『——続いて、弓道部の発表となります』

暗い講堂の中、視界の声に続き灯った明かりが壇上を照らす。

紹介通り実演を始めた静真高校弓道部の裏で、舞台袖の千歌達は不安げな顔で身を寄せ合っていた。

「緊張する……」

「こんな大きいところだったはずらね」

「な、なに言ってるのよ。ラブライブ決勝の会場の方が何百倍も大きかったで……ヒッ

!?

確かに大きい講堂だが善子の言う通り、会場の規模だけで言うならばアキバドームの足元にも及びやしない。

けど、何かが違う。

あの場所やこれまでライブを披露してきた場所にあつたものがここにはない。皆それを肌で感じ取っているのだ。

「それに、あの時は皆いたし……」

そして最も大きな違いとして目の前に現れているのは、その人数。

卒業してしまった姉を含む三人の姿を求めると、増大した不安は伝染してゆく。

「いるよ。今も」

そんな気持ちを鼓舞するように千歌は言う。

皆、それはわかっていることなのだ。離れていてもずっと、心は繋がっている。そう頭では言い聞かせても、心が追い付かない……そんな様子。

実際、当事者ではない陸ですら、六人とはこんなに少ないのかと思ってしまう。

「曜ちゃん達の番だよ。特別に少しだけ時間貰えたから、頑張つて」

裏口から顔を見せた月も応援の言葉をかける。

急だったのにも関わらずこんな機会を設けてくれた彼女に対し微笑みかけると、千歌は改めて今いる六人の顔を見て言った。

「ゼロからイチへ。イチからその先へ……A q o u r s——」

——サンシャイン……!

静寂の中、自らも胸の奥の不安を押し殺すように。

小さく円陣を組んだ彼女達は、消えない危うさを背負ったまま、そのステージへと立った。

百六十一話 踏み出すために

「全く、部活動でアイドルの真似事なんて……」

「それをこの場に招くなんて何考えてるのあなた、生徒会長でしょう？」

「……すみません」

父兄に対し頭を下げる月の傍らで、今すぐにでもぶん殴りに行きたい衝動を必死に堪える。

何もわかってない奴等がゴタゴタ抜かすな。そんな黒い感情ばかりが蟠る。

「……あはは、怒られちゃった」

「……悪いな。何から何まで」

「りつくくんが誤る必要なんてないよ。勿論、曜ちゃん達も」

「いや、これに関しちや完全にこっちが悪い」

結果から言うと、千歌達のパフォーマーは失敗に終わった。

輝きなんて程遠い、今までの彼女達ならあり得なかったような初歩的なミスまで犯す

始末……苛立ちはしたが、父兄がああ思うのも何となくわかる。

『まあ、アイツ等にとつても初めての体験だろうしな。普段通りにいかないつてのも無理はないと言えはそうなんだろうが……』

実際、その父兄達が失敗の一因でもあるのだろうが。

これまで A q o u r s がパフォーマンスを披露してきた会場にいたのは、いずれも彼女達やスクールアイドルに興味を持つ者達だった。

けどあの場には A q o u r s や浦の星の味方も、ましてスクールアイドルが好きな者すらいなかった。

如何にラブライブで優勝したグループといえども、スクールアイドルをよく知らない者からすればただの異質な集団。先の言葉のように、ただアイドルの真似事をしてふざけているようにしか見えていなかった可能性もある。

そんな考えはその視線を通し千歌達にも伝わり、更なる緊張や恐怖を生み出していたのかもしれない。

「……何もしてやれなかった」

ステージに立つ前の六人の姿が鮮明に浮かぶ。

不安、違和感、喪失感……あの時の彼女達はそんな感情に吞まれているように見えた。

何か、せめて何か一言掛けていられば何か変わっていた可能性があったのに、その感情を少しでも和らげることが出来たかもしれないのに。無力感と共に、そんな後悔が

胸を抉る。

「…大丈夫、だよね」

「……」

月の声に返すことは出来なかつた。

陸まで不安になんてなつちやいけないのに。せめて自分だけでも、前向きにその背中を押す……そうあの三人とも約束したのに。

けど、何度そう言い聞かせても現状への疑問が、先の見えない未来への不安ばかりが勝ってしまう。

「……とりあえず、今日はもう帰ろっか」

月に連れられる形で、敗走するかのよう廊下を進む。

疎らに残った父兄からの視線は冷たく、痛みすら感じるようだった。

「…なんだ？」

先に帰らせた六人に合流しようとして静真の校舎を出ようとしたその時、何やら校門の辺りに人が集まっていることに気が付く。

騒がしさもあるが、それは大勢の声が重なっているという訳ではなく、何やら言い合っているように見えた。

「ちよつとイサ兄！ 流星に学校の前でそれはマズいです！ 通報されちゃいますよ！」

「いいじゃんかよ別に迷惑かけてる訳じゃないんだし。それにここからすつげえ強いバ
イブス波が出てんだよ」

人波を掻き分けて騒ぎの中心まで迫り着くと、予想通り言い合っている男女が二人。
というよりはむしろ、少女が青年の方を止めようとしている構図だが。

「……何やってんすかアサヒさん」

「あー！ 陸君もイサ兄止めるの手伝ってくださいー！」

「おお!? なにこれスゲー、もつとバィブス波強くなつてんじゃんー！」

その片方に知れた顔を見つけた陸がギャラリーの意を代表して述べると、イサ兄と呼
ばれた青年……恐らくアサヒの兄であろう彼が謎の機械片手に陸に詰め寄ってくる。

そしてその機械の反応が陸に対するものだど理解すると、顔を覗き込んで来ては首を
傾げた。

「あつれー? おかしいな何で人間からこんな反応が……」

しばらく考えた後に何か心当たりでもあつたか次の瞬間――、

「もしかしてウルトラマ——」

「わああ——っ!?!」

大衆の面前でその名を口にしかけた青年の声を月と共に慌てて遮る。

危なかったと胸を撫で下ろす暇もない。何故この短時間で陸がウルトラマンと断定できたのか、何故それを平然と口に出来たのか。

アサヒの兄……という点から、自ずとその答えは導き出される。

「ちよつと、アサヒさんと一緒に来てください。月わりい、先帰つててくれ」

「ああ……うん……」

未だ人々の視線が集まる中、半ば引き摺るような形で湊兄妹を連れてその場を離れる陸。

寸刻前まで抱いていた不安や無力感はどこへやら。次々と目の前に現れてくる問題は悩む暇すら与えてくれないらしい。

「…アンタもウルトラマンなんですよね?」

人気がない路地裏で、弾き出した答えを単刀直入に口にする。

先日コツヴを倒した後、アサヒとの会話の中で彼女の兄二人もウルトラマンだという話を聞いた。

現にアサヒから兄と呼ばれていた以上、二人いる兄の双翼その人に間違いないのだから。

「へえ、結構鋭いじゃん。そうだよ、湊イサミ。よろしくウルトラマンゼロ」

「…仙道陸つす。んで、こつちがゼロ」

「知ってる奴と名前一緒にややこしいね」

「悪かったですね」

イサミが口にした☒リク☒と言う名前だという知り合い。

少なからず陸の知っている中で名前が同じ人といえば一人しか思い浮かばない。

『……思い出した。前にジードから聞いたことがあるな……0―50の兄妹ウルトラマン』

「お、知ってるなら話が早いじゃん。その中の☒ウルトラマンブル☒ってのが俺」

どうやら知り合いというのは陸の想像していた朝倉リクだったようで、何でも以前共に戦ったことがあるとか。

一先ず互いの情報を共有することが出来たのなら聞くことは一つだ。

「…それで、イサミさんはもう気付いてるんすか……この世界のこと」

「うんまあ……少なくとも俺達の世界じゃないっばいね」

先程用いていた謎の装置から何となく想像はついていたが、研究者気質であるイサミは既に自身が置かれていた状況に気が付いていたらしい。

「なんか朝起きたら大学消えてるし知り合いとも連絡つかねーし？ それで一旦日本に帰ってきたけど綾香市も地図から消えてるからマジでどうしようかと思つたよ、ホント」

『……どうやってここまで辿り着いたんだよお前』

「丁度怪獣とウルトラマンがここに出現したってニュースが目に入つてさ。アサヒなのは見てすぐわかったから飛んできたって訳」

実家ごとこつちに来ててよかつたよー、とお氣楽そうに笑うイサミ。

ちなみに全然笑い事じゃない今の状況を整理すると、何かしらの要因でイサミ達がこちら側に飛ばされてきた、ということになる。

「何とか戻る方法探してるんだけどさ、なかなかね」

『……ただ戻るだけならイージスで一つ飛びなんだがな。周辺の建物までこつちに来るとなるとそうもいかねーしな』

「そもそも、どうしてイサミさん達がこつちの世界に飛ばされてきたのか、だよな」

『それは私から説明しよう』

「え？」

思考に入り込んでくるエコー掛かった電子音。

その聞き覚えのある声が流れてくるイサミのポケットに自然と目がゆく。

『あ、ちよ、早く出してくれ何も見えない』

「あーはいはい」

取り出されたイサミのスマホに映し出される人型のシルエット。

見紛うはずもないその影は、かつて自分達と共に戦ったウルトラマンの姿で――、

「エックス!？」

『おま……どうしてここにいる?』

エックス。ウルトラマンエックス。

以前ダークネスファイブの一角を共に倒したサイバーウルトラマンであり、本来は別宇宙で活動しているはずの彼までもが何故……そんな視線をゼロと共に向ける。

『それも含めて説明しよう。とにかく、合流できたようですよ。よかった』

「なかなか役に立つでしょ、俺の作った装置」

『ああ、大地に話せばX i oの装備として採用されるかもしれないぞ』

「……話が見えねーんだけど」

ジード以外のウルトラマンとの面識はなかったとの話だったが、既にイサミとエックスは打ち解けているように見える。

そもそもエックスには大空大地と言うパートナーがいたはず。それがどうして既にウルトラマンであるイサミと共にいるだろうか。

『ああすまない。脱線してしまった』

咳払いという相変わらず人間臭い所作で話の腰を戻した後、エックスは自身の宿るスマホにとあるデータを表示する。

『実はここ最近、この地球で妙な時空を歪みを観測したんだ』

「時空の歪み?」

『ああ、恐らくイサミ君達がこの世界に飛ばされてきたのもその影響だと思われる。どうやら特定のエネルギー周波が高い者……つまりウルトラマンだけを呼び寄せている、と言うのが大地の見解だ』

現状それが確認されているのはこの地球とイサミ達の地球だけらしいが、この先さらに広がってゆく可能性も考えられるらしい。

そうなるかどうかの影響が出るかわからない。だからこそ今こうして調査している最中だそうだ。

『聞く限りじゃ大地も調査に加わってららしいが……どうして一緒にいねえんだ』

『元々私と大地は別なものを追っていてな。その過程で今回の異変に気付き、一度君達とコンタクトを取った方がいいと思っただ』

「で、エックスと合流した俺が君達をこれで探したって訳」

また例の装置が陸に向けられ反応音を鳴らす。

つまりイサミが校舎前で不審者同然の装備をしていたのはエックスの頼みを受けて陸とゼロを探していたから、ということらしい。

「それで、元の世界に戻るにはどうすればいいんでしょうか」

『それも含めて今大地達が調べている。なにせ今回の異変、引き起こしたのは私達が追っていた奴だからな』

「大地……達……？」

何気なくエックスが口にしたその言葉を陸は聞き逃さなかった。

その言葉が正しいのなら、今回の異変に動いているのは大地とエックスだけではない……ということになる。

『ああ、そう言えば言ってなかったな。この異変、関わっているのは私と大地だけではない———— ニュージエネレーションズ全員が、今この地球にいる』

明かりも点けぬままにベッドに沈み込む。

特別何かをした訳ではないというのに、倒れ込んだその瞬間にどっと疲れが湧き上がってくるような感覚がした。

「……」

ニュージエネレーションズと言うのは大きな功績を残した若い世代の戦士達を総称する言葉であり、現状ではギンガ、ピクトリー、エックス、オーブ、ジードがそれに該当する。

そんな戦士達全員が今この地球に降り立ち、ある一人の強大な敵を追っている……エックスはそう言った。

「……どうすべきなんだろうな」

あんなことを聞いてしまつて以上知らん顔をすることは出来ないが、Aqoursの方の問題にも向き合わなければいけない。

板挟みにされたのは、どちらもそんな、無視出来ない問題。

『…エックス達も強要はしねえつつてたしな。変に使命感に囚われるこたあねーだろ』
「別に使命感とかそういう訳じゃないんだがな……」

ただそれにより自分の大切なものが脅かされるのなら阻止したいだけ。その心持ちはずつと同じだ。

今回の異変は二ユーージェエネレーションズ全員が動いているという安心感もあるが、逆に言えばそうならざるを得ないほどの敵がいる、ということになる。そうなると猶更無視できない。

『ま、これに関しちや俺は口出ししねーよ。お前の選択を尊重する』

「それが一番困る気もするんだがな……」

あまり時間もないというのが余計に決断を焦らせる。そんな焦燥に駆られていると、ふと放り投げていた携帯が音を鳴らした。

「……千歌か？」

グループ通話のようで、数名の声が聞こえる。

その声音が暗い者なのは、やはり昼間のことを引き摺っているからなのだろうか。

『…皆、今日ステージに立った時、なんて思った？』

千歌の第一声はそれだった。

皆思うことはあつただろうけど、それでも誰も口にしようとしなかった。口にした

ら、何かが変わってしまふ気がして。

『……私は、急に不安になった。鞠莉ちゃん達に六人でも続けてって言われた時は、よーしって、気合入ってたのに……あのステージに立った瞬間、気付いちやったんだ』
それでも千歌は口にした。

その問題と向き合わない限り前には進めない。彼女にはそれが見えているから。

『……もう、鞠莉ちゃんも、果南ちゃんも、ダイヤちゃんもいないんだって』
けど、今出てくるのはそんな不安ばかり。

『新しいA q o u r s ってなんだろう……三人がいない、A q o u r s って』
向き合わなければいけない。だからこそ皆で話すべきだ。

そんなところまでは辿り着いたけど、そこからどうすればいいかはわからなかった。
そういう様子だ。

『……スクールアイドルって、他の部活に比べて誤解されやすいと思うの』
そんな千歌に返したのは梨子だった。

直接的に今の悩みに関係してる訳ではないけれど、それでも大事なことだからと。それは陸が先程考えていたことと重なった。

舞台上で楽しそうな笑顔を振りまくスクールアイドルは、それを知らない者からすればぶざけているようにも思えるのかもしれない。

でも実際は辛そうだったり不安なところを見せれば見てる人も楽しめなくなる。スクールアイドルは人を楽しませるものだから、絶対にそんなところは見せてはいけない。

そんなステージ上で彼女達が背負っているものも、今日の父兄達のような関心を持たない者には誤解を招くものとなるのだから皮肉なものだろう。

『だからこそ、諦めずに伝えていくしかないと思うの。私達だって、真面目に頑張ってきたんだって、新しい学校の部活に負けにくい努力してきたんだって……今ならまだ、間に合うと思う』

『ライブでの失敗は、ライブで取り戻せてること？』

『うん。今度こそちゃんと出来るってことを、反対してる人達にも見て貰おう』
迷いはなかった。

スクールアイドルに触れて変わった彼女だからこそ、自身をもってそう言えるのだろうか。

『私達の答えは、前に進みながらじゃないと見つからないと思う……不安でも、やろうよ、ラブライブ』

これまで通りやってきたことをやるだけ。梨子のその言葉に、どこか頓悟するような感覚がした。

そうだ。陸だって同じ。皆を支えるだとかウルトラマンだとかそれ以前に、ただ前に進んできただけのはずだ。

だつたらこれからも、やることは変わらないんじゃないだろうか。

「…どつちに集中するべきとかじゃねえ、どつちもだよな」

だつてこれまでもずっととそうしてきたから。少し異質な問題に気弱になっていたけれど、ただそれだけでよかつたはずだ。

「その敵とやらもぶっ飛ばして新しいA q o u r sの形も見つける……何も変わりやしねえじゃんか」

通話の向こうで練習の場所や時間などの段取りが決まっていくな。

密かに、静かに、陸もまた一人その覚悟を固めた。

百六十二話 今できること

「……ついてくるんだなお前」

「当たり前だよー。曜ちゃん達がどんな練習してるのか興味あるし」

今度こそ静真の父兄方にわかってもらうためもう一度ライブをやる。そう決めたはいいものの中々機会も見つからないというのが現実で。

今まで学校やラブライブという舞台があつたのは大きかったと改めて実感させられる。

「いつも砂浜でやってるの?」

「いんや、今のところ練習場所見つからんからしばらくはあそこでやることになつたらしい」

そんな訳で手伝つてくれる月も連れて一度彼女達の練習に顔を出しに行こうという次第だ。

そう言えば始めたばかりの頃も練習場所が見つからず砂浜で練習していたか。今思えば返すと懐かしい。

「そう言えば昨日のアレ何だったの？」

「……まあちよつとあつてな。そんな大したことじゃねーから心配すんな」

エックス達から伝えられた今起きている異変。

正直めちやくちや大したことあるのだが A q o u r s が新しい壁にぶち当たつてい
る今だ。余計な心配をかけないために今のところは話さない……という結論に至つた。

また一人で抱え込む形にはなつてしまふが、今回は頼れる先輩達がいる。一人だが独
りではない。

「……てか、俺としては俺の学校の連中の方が面倒だな」

「あはは……」

まあ現状陸にとつて一番の問題はこれなのだが。

現在陸の学校も浦の星と同様の状態にあるので当然同級生共が静真に抗議に来てい
たのだが……その際ずっと隠していた千歌達との関係が遂にバレてしまった。

今日の前にある問題を取り除いたら取り除いたで奴等に僻まれる日々が始まると思
うと今から憂鬱だった。

「まあ、それはその時になつたらでいいんじゃない？　ボク達も協力するから……」

「ありがたいがもつと拗れそうな気がしないでもな——」

「姉さま達はもう……いないのツツ!!」

堤防を越え、白い砂浜と共にその練習風景が見えようとしたその瞬間。

海岸中に響き渡るような悲痛な叫び声上がり、不穏な空気が蟠つていくのを肌で感じた。

『アイツあ……理亞か?』

「……ああ、そういや千歌の奴が呼んだとか言ってたな」

なんでも聖良の卒業旅行で東京まで来ていた Saint Snowの二人をここま
で呼び出したとかそんな。

よくまあ毎度毎度来てくれるものだと思いつつ、様子が様子なため急ぎ千歌達の下へ
駆ける。

「おい、何だ今の」

「陸さん……」

理亞の後を追い駆け出したルビイの背中を見やりつつ、残された五人と聖良に問う。

何があつたのか、何を話していたのはか知らないけれど、その空気が明らかに重いもの
となっているのはすぐにわかった。

「すみません……実は理亞も理亞で、あまり上手くいってないらしくて」

『話が見えねーな……』

つい昨日も似たようなことがあったようなデジャヴを覚えつつ首を傾げる。

確か聖良達に今の A q o u r s のパフォーマンスを見てもらうという話だった気がするが、それがどうして理亜がああなるような事態に発展するのだろうか。

「……ん？ 何アレ」

次から次へと今度はなんだ。何かを見つけたような善子の声に水平線の方を見やれば、風圧と共に音を立てながら一台のヘリが向かってくるのが見えた。

それもやたらと、ハイスピードで。

「……なんかまたデジャヴが……」

「言ってる場合じゃないよお!」

速度もそのままに頭上を通り過ぎようとするヘリに全員で身を伏せる。

それで終わりかと思いきや、なんと旋回したヘリは砂塵を巻き上げながら陸達の前でホバリングを始めたではないか。

「これってもしかして……」

「鞠莉ちゃん……?」

そう口々にいうものの彼女との出会いもこんな形だったかと感慨に耽る余裕は全くなく。

ただ吹き付けてくる強風に飛ばされぬよう堪えながら、ドアの開いたへりから顔を見せた女性を見やった。

「鞠莉ちゃん……じゃない？」

「My daughterがいつもお世話になってマース！」

結論から言うとその女性は鞠莉ではなかった。

だが風にたなびく眩しいまでの金髪や日本人離れた顔立ちは外国の血が流れている証拠であり、何よりその女性の雰囲気はどことなく彼女と重なる。

となれば導き出される答えは一つ――、

「小原鞠莉の母……Mari's motherデース!!」

息つく間もなく押し寄せる物事に、流石の陸も思考がフリーズした。

「……俺なんかしたっけ」

『無水の時のアレ、知られてんじゃねーの?』

鞠莉の母親を名乗る女性に皆が連れられて行ってしばらく経った。

何故か小原邸に入ることを許されなかった陸は外で待機。何の用があったかは彼女達が戻ってくるまでお預けだ。

「そういうえば、ダイヤさん達はどこに行っているのですか? 少なくとも今はいらっしやらないようですが」

「三人で卒業旅行中つすよ」

締め出された陸に気を遣ったのか一緒に残ってくれた聖良にそう答える。

今までに色々あった三人だ。これから離ればなれになる前の最後の時間くらい、あの三人で過ごしたいのかもしれない。

「ふふ……じゃあ私達と同じですね」

「いやほんと……千歌の奴が無茶言ってますみません……」

「いえいえ、理亞もとつても来たがってましたから」

曇りなく答えてくれるのが逆に心に来る。本来なら姉妹水入らずで楽しんでいたろうに。

『……それで、理亞の奴あどうしたんだよ』

「……」

ゼロが離れた場所で一人風にあたる理亞を片目に問うと、暗い面持ちで俯く聖良。先程見た彼女の雰囲気は、お世辞にも穏やかなものとは言い難かった。

「…上手くいつてないんすか？ 新しいグループ」

「……やはり、わかってしまいますか」

小さな背中から感じる、不安と焦り。

理亞もきつと、今の千歌達と同じようなことで悩んでいたのだろう。

「新しく一緒に始めようって、何人かは集まったみたいなのですが……」

残されたメンバーで。

新たな仲間を加えて。

新たに踏み出すために必要な一步を阻む壁は、どのグループにも立ちはだかるものらしい。

「…そちらも、壁にぶつかっているのは同じようですね」

「ドーにもね……やっぱ、果南姉ちゃん達がいなのが響いてるみたいで」

「それは私も先程パフォーマンスを拝見させてもらった時に思いました。これまで三年生の方々が担っていた歌唱力、ダンス、華やかさ、存在感……Aqoursの持つ明るさや元気さそのものがなくなって不安になっている……そんな気がしました」

父兄達の目にどう映ったかは知らないが、陸にすら何と云うか、ふわふわして定まっ
てないような印象を抱かせたのだ。

抜群のセンスを持つ聖良から見れば、もっと稚拙なものに映ったのかもしれない。

「…三年生の存在が大きかったのは、こつちもそつちも同じみたいすね」

「自分で言うのも少し恥ずかしい気もしますが…：…そうなのかもしれないね」

これまでグループを支え引つ張っていた三年生はもういない。

これからは自分達で歩み出さないといけない。そんなことはわかつているのに、雁字
搦めに纏わりついてくる喪失感や不安はそれを許そうとはしてくれなかった。

「——それでは、よいご返事を期待してマース」

またしばらく経つと、閉ざされていた戸が開きどこか深刻そうな面をした皆が顔を見
せる。

一先ず元居た海岸へ場所を移すと、伝えられた内容とその訳を問うた。

「いや…：…行方不明ってんなアホな…：…」

「私達も冗談かと思っただけで、鞠莉ちゃんのお母さん見てたらそんな風にも思えな
くて…：…」

鞠莉の母に連れられた先で、なんともまあぶつ飛んだ話を聞かされていたようで。

しかしそれが事実ともなると笑ってもしられなかった。

なんでも現在、卒業旅行に行った三人と連絡が取れない状況にあるらしい。

「てか、誰も連絡とってなかったのかよ」

「せっかくの卒業旅行だし、連絡しないようにしてたから……」

あの三人だけの時間を邪魔しないように気遣っていたのは皆同じのようだが、よもやそれが裏目に出るとは。

(……例の時空の歪みと関係あるのか?)

〈それ自体まだ不明な部分は大きいが……ないとは言いきれないな〉

イサミやアサヒがこちらの世界に飛ばされてきたように、あの三人が別の世界に飛ばされている可能性もある。

考えたくはないが既に目の前で起きている現象だ。万一の事態も考えておくべきだろう。

「それで、探ってきて欲しいって鞠莉ちゃんのお母さんに頼まれて……」

「探すつつても、確か姉ちゃん達が行ってるのって……」

「イタリア……だね」

そう、彼女達が旅行先として選んだのは外国であるイタリア。

日本からかなり離れている上に地理も言語も通用しない場所、連絡がつかない以上別次元に飛ばされていなくとも搜索は困難を極めるだろう。

「どうしよう…」

「渡航費用は出してくれるって言ってたけど、場所が場所だしね…」

「それにルビイ達、ライブの準備もしなきゃだし…」

「でも行方不明って話だし…」

何の因果か、問題の上に更に問題が押し掛かってくる。

どれも大事なことだし、見過ごすことなんて出来ない。つい先日陸に降りかかった板挟みの状況が、今度は彼女達に襲い掛かる。

「行ってきた方がいいと思います」

けどその状況を打破するのはいつだって誰かの言葉。

進むべき道を切り開くような聖良の言葉には、何か確信が含まれているようにも思えた。

「今日皆さんのパフォーマンスを見て思いました。理由はどうあれ、一度三年生の皆さんと話した方がいいと思います」

「でも…」

「自分達で新しい一步を踏み出すために、これまでのことを振り返るのは悪いことでは

ないと思いますよ」

千歌達だけでなく、理亜にも言い聞かせるようかのように。

妙な説得力を持つその言葉は、自然と皆の顔にも決意を生み出してゆく。

「聖良さんの言う通りだと思う」

「ライブの練習はどこでだってできるし、これまでもやってこれたじゃん」
だからできる。

いつだって背中を押ししてきたその言葉は、今回もリーダーに寄り添い——、
「わかった。行こっか！」

三年生がいなくなりどうしたらよいのかわからなくなっている今だからこそ、ちゃんと三年生と会って話をしたい。

心配だから。それもがあるが、同時にこれからのため——新生Aqoursのために。

その答えを探るための舞台は、イタリアへ移ろうとしていた。

同刻、イタリア——ミラノ。

「で、この後はどこに向かうのですか？」

「んー……一旦ベネチアを経由して、その後フィレンツェにある知り合いの別荘に向かいますよ。電車が出るまで時間あるから、それまで観光しましょー」

自分達が騒ぎの発端……まして行方不明扱いになっているとはつゆ知らず、揃って地団駄を踏む鞠莉、ダイヤ、果南の三人。

離ればなれになる前に残された時間を楽しみつつ、その一方で何かを警戒するようにイタリアの街を進んでいた。

「ベネチアって……ここから結構距離あるよね？」

「……まあね。でも、その方が欺きやすいつてモンでしょ」

「まさか最後の最後までこんなことになるとは思いませんでしたわ……」

「その方が私達らしいでしょ？ ……それに、最後になんかさせないから」

笑いかけた鞠莉に、二人も笑って返す。

これからもずっと一緒。そう誓ったから。

「……昔から思ってたけど、お嬢様っていうのも大へ——」

けれど、三人を囲う現実はいつも厳しかった。

笑顔が繋ぐそんな絆を断ち切らんと言わんばかりに起こった騒ぎが束の間だった興の時間を奪う。

「なにあれ……」

どよめく人々が見上げる空には、赤黒い円陣が一つ。

そして次第に立ち込めていく不安が災いを呼び寄せるように、落雷と共に円の中心から巨大な影が落下し――、

『ツツ――！！！！』

大地が揺れる。

首元に三日月のような模様を持つ二足歩行のそれは地震のような揺れを起こしながら進行を始め、ミラノの街に恐怖の暗雲を齎す。

「C o s a s t a s u c c e d e n d o ! ? 」

「N o n ・ s o l o i l G i a p p o n e a d a v e r e i m o s t r i ! ? 」

怪獣の出現例自体は数多くあったが、その大半は日本でのもの。

このような巨大生物による襲撃に直面したことのないイタリアの人々は一瞬にして混乱渦巻く宴に誘われる。

「……私達怪獣にも好かれてるみたいね」

「言ってる場合ではないでしょう!? 早く私達も避難を——」

『フレイムスファイアシュートツ!!』

我先にと逃げ惑う人々の波に飲まれ、引き離されかけたその瞬間。

熱波の尾を引きながら猛進してきた巨大な火球が怪獣を直撃し、その巨体を転倒させる。

「今のって……」

「……陸?」

馴染みのあるような技と一連の流れに一人の少年の姿が思い浮かぶ。

だが直後に三人の前に現れたソレは、想像していた姿とは少し違うもので——、
「陸さんじゃ……ありませんわね」

銀の身体を覆う炎を模したような意匠を持つ深紅の装甲に、特徴的な頭部の二本角。

そして胸に宿った蒼い輝きは、その巨人もまたゼロと同質の存在であることを物語っていた。

「…ウルトラマン……………?」

古風な街並みの中に立つ二つの巨大な影。

三人を含め人々が不安と恐怖の混じった視線を向ける中で、戦いのゴングは鳴り響こうとしていた。

百六十三話 陰謀の片鱗

『ほお……中々いいセンスしてんなここの店長』

「何見てそう言ってるんのお前」

珍妙な服が並ぶ店内で目眩を覚える。

こっちの世界に飛ばされてきたイサミ達の実家であるアパレルショップらしいが何なんだろうかこのラインナップは。そんなもってなんでコイツはちよつと気に入ってるのだろうか。

『そうか……理亞が……』

「なんか、色々空回りしてるって感じらしいぞ」

聖良達が卒業旅行に戻り、千歌達A q o u r sもイタリア行きの準備をすべく一度解散した後。

一応伝えておいた方がいいかと思ひ今はイサミ達と共にいるエックスに理亞のことを話しに来た次第だ。

『ちよつと会ってやったらどうだ？ お前ならなんかアドバイスできるかもだろ』

『そうしてやりたいのは山々だが……今は状況が状況だ。異変の理由を解明するのが優先になる』

一応イサミの装置でこの地球を覆うように次元の歪みが発生しているところまでは突き止めたらしいが、まだそれがどこから発生しているのかはわからないらしい。

それにこの事件の首謀者だという者の行方も未だ不明なまま。確かに油断は出来ない。

『だがまあ、全てが終わったら顔だけでも見に行くとするかな』

「そうしてやってくれ」

この異変を解決する理由がまた一つ増えた。

皆迷い足掻きながらも前に進もうとしているんだ。どこの誰とも知らない奴の陰謀に邪魔されてたまるか。

『それで、本当にそれだけを伝えに来たのか？』

「ああ、それがな——」

「大変です—— ツ!!」

千歌達の三年生捜索に付き合おうと思う……という声は更に大きな音量を伴って飛

び出してきたアサヒに掻き消されることとなる。

『なんだ!?! どうした!?!』

「これ見てくれよこれ!」

続けて姿を見せたイサミが持つタブレット端末に映し出されたニュース映像。

外国のものと思いきそれが報道するのは——イタリアに怪獣とウルトラマンが出現したというものだった。

『ッ——!』

長い歴史を持つイタリアの人々でも、こんな光景を目の当たりにするのは初めてだろう。

そんな地に初めて君臨した獣——月の輪怪獣クレツセントを迎え撃つ形で巨人までもが降臨し、今にも爆発しそうなほどの緊張感を漂わせている。

『シューワァッ!』

先に仕掛けたのは巨人——ウルトラマンロツソだった。

まだ戦火が降りかかるかもしれない場所から人々が避難し切っていないことを認識したか、自らが盾となる形でクレツセントに突撃してゆく。

「あれも、ウルトラマンなんだよね……？」

「少し今までの方々と違う感じはしますが、恐らくは……」

「じゃあ陸の知り合いなのかな……？」

突然の状況に困惑しながらも始まったロツソとクレツセントの戦いを見守る三人。

あのウルトラマンは何なのか。陸との繋がりはあるのか。そもそも何故ここにいるのか。避難中にも関わらずそんな疑問が脳裏を駆け巡る。

『ハアアッ！』

赤い熱線を跳躍で回避すると、そのまま飛び蹴りの形でクレツセントに衝突。黒い巨体が轟音を上げて地面へと倒れ込む。

「Queeilio・Ultraman?」

人々の視線が集まる中、起き上がり様にまた熱線が伸びる。

今度は回避動作を取らなかったロツソは手の中に火球が生成され、さながら野球のピッチャーの如きフォームで連投されたそれらが熱線を押し返し奴へと迫る。

『ッ——！！』

『……！』

火球を打ち返すように振るわれたクレツセントの尾が地面を叩き付け、その振動でミラノの街並みが一部崩れてゆく。

日本と違い伝統的なレンガ造りの建物が多いこの場所で強い揺れは厳禁だが、巨大な体躯を持つウルトラマンと怪獣が戦えばそれは避けられないもの。

それはロツソも悟ったのか、一度クレツセントと距離を取っては胸の輝きを中心に琥珀の光を全身に漲らせる。

『グランドコーティング！』

その体色を黄土に変えたロツソが連続して弾丸状にしたエネルギーを投擲。

それらは一発たりとも外れることはなくクレツセントに命中すると、奴の下半身を泥で覆い動きを封じる。

『グラビティホールド！』

早急に脅威を取り除くためか間髪なく次の一手が繰り出される。

手のひらが地面に打ち付けられた瞬間、重力が逆転したかのように拘束されたクレツセントの身体が宙に浮かび上がった。

『オオオ……！』

頭部の二本角に掲げられた手の中に長短の二刀流剣が握られる。

二振りの刀身に集約してゆく青白いエネルギーが臨界点まで到達すると、その力を開

放するように両の刃を振り抜いた。

『ゼロツインスライサーッ!!』

解き放たれた光の双刃が宙を疾走し、クレツセントの身体を両断。

直後に起きた爆発の巻き起こす突風が街を吹き付けるも、最低限の損傷を齎すのみで元あつた静けさを舞い戻らせた。

「Wow! Ultraman sconfigge facilmente i m
Ostrii!」

「Che potere incredibile!」

束の間の静けさは途端に上がった人々の歓声に掻き消されるが、ロツソはそれらに応えらるとはまた別の意図があるかのようにこちらを向く。

「……?」

ふと一瞬、視線が重なったような感覚がする。

その刹那の後にロツソの身体は光の粒子と化してゆき、沈静化してゆく人々の熱と共に消えていった。

「今、こつち見てたよね?」

「き、気のせいではないのですか……?」

一応鞠莉達はこの世界でウルトラマンと交流がある数少ない人間ではあるが、それと

何か関係があるのか。

ともかく状況が状況だ。あまりこちらから連絡をするようなことはしたくないのだが、陸達には早めにこのことを伝えておいた方が——、

「え……？」

迷っていたその時、ふと鞠莉のポケットの中で携帯電話が鳴る。

もしかやと思い一瞬冷や汗をかくも、メールの送り主を見て安堵——とはいかなかった。

「鞠莉……？」

「どうかしましたの……？」

後輩から送られてきた文面の中に含まれていた内容。

それは今この状況においては、新たな波乱を巻き起こす予感を孕んだものだった。

「……ちかつち達が、こつちに来るって……」

『デエエエヤッ!』

『よいしょッ——!』

大空に描かれる光の筋と一体の巨大な鳥。

宇宙大怪獣ベムスター……あらゆるものを丸呑みにし兼ねない厄介な怪獣を追い、二体のウルトラマンは空を駆けた。

『ねえちよつと? この地球はこんなに怪獣が頻出すんの?』

『怪獣自体は生息してるが……この頃出現してるのはどいつも地球にはいない種ばかりだ。恐らくコイツ等呼び出しての奴がいる』

「呑気に話してねーでさっさとぶっ飛ばすぞ!」

いざイタリアへ向かおうと千歌達の乗る便が離陸したそのタイミングを見計らったように出現したのがこのベムスター。

ゼロの言う通り何者かが召喚したものなのか、はたまた偶然地球に飛来し飛行機の積んでいる燃料を狙っているのかは定かではないが……どちらにせ彼女達や乗客の命が危ないのに変わりはない。

『しっかし速いねあの怪獣……撃ち落とす方がいや』

一本角に紺碧の海が如し蒼い装甲を持つウルトラマンブルは、先日イタリアに出現したというロツソとは対を成す存在のようにも思えた。

その様はまさしく兄弟ウルトラマンと言ったところだろうか。
『アクアストリウムッ!』

し字に組んだ両の腕から水流のような光線が伸びる。

だがゼロの牽制により飛行機から離れたその瞬間を狙った的確な一撃は、一片のエネルギーも余すことなく旋回したベムスターの腹に吸収されてしまう。

『ベムスターの腹の口は形を問わずあらゆるものを吸収する。迂闊な攻撃はかえって奴を強くするだけだ』

『そりゃわかってるけど……』

今のブルの攻撃は正しいと言えば正しいのだ。

捕食のためか飛行機ストレスレの位置を飛ぶベムスターに対し不用意に攻撃すれば機体もろとも撃ち落としかねない。

今のように飛行機から引き離れた一瞬の隙を狙って光線を打ち込むのがベストだが、奴の性質上その手も通用しないのだ。

『……そうだ。いつそアイツの興味を飛行機から別のものに移すのはどう?』

「そうか……飛行機の燃料以上のエネルギーを餌にしてやれば……!」

防御のためもあったのだろうが、現に奴はブルの光線に食いついた。

試してみる価値はあるだろう。

『そんなじゃ……やりますか！』

両腕を掲げたブルの頭上に高密度にエネルギーが込められた水の球が生成され、それは瞬く間に膨れ上がってゆく。

そこから更にゼロのウルティメイトブレスから射出された光と融合したそのエネルギー量は、ベムスターの御眼鏡に適うまでに至る。

『よっしや食いついた！』

一直線に飛来してくるベムスターに水球をスローイングし、食事のため腹の口を広げたその瞬間を狙う。

ゼロとブル。両者共に一振りの剣を手に取ると、猛烈な速度で肉薄しては奴を中心点に交錯する。

『ツツ』

『!!??』

『いよっしー！』

ゼロツインソードとループスラッガーによる一撃が奴の腹を切り裂き、一時的とはいえ光線諸々を含めた捕食行為を封じる。

それにより本能的に危機を察したのか、目の色を変えたベムスターは一目散に逃げようと踵を返した。

『ツ……！ 待て！』

『ていうかなんだアレはっやッ!』

飛行機を捕食しようとしていた時とは違う、全身に炎を纏ったベムスターの飛行速度はこれまでとは比べ物にならなかった。

あれが奴の最高時速なのか、みるみるうちにその姿が遠く小さくなってゆく。

『一応追うぞ。地上で暴れ始めたら厄介だ』

『あいよ!』

瞬間、両者の身体に別の色が走る。

蒼零の雷グランナイトゼロに、紫電の疾風ブルウインド。巻き起こった突風がベムスターと衝突し薙ぎ払う。

『プリンカーフラッシュユツ!』

煌めくループスラッガーの刀身。

地上へ退散しようとする奴の体躯に複数の風の刃が突き刺さり、その風圧で纏っていた炎が掻き消える。

『リキデイトシユート!』

『ストームシユーティングツ!』

その瞬間を逃さなかった二人の光線がベムスターを打ち抜く。

冷気と突風の奔流に奴の肉体は砕け、遅れて起こった爆発が遥か高い空の上で響い

た。

『中々やるじゃねーか』

『そっちもね』

突き出してきたブルの握り拳にこちらも応える。

上下に一回ずつ互いの拳を重ねた後、交わされたロータッチが小気味のよい音を鳴らした。

『にしても、随分と遠くまで来ちゃったね。もう多分ヨーロッパの辺りだよここ』

『…少し妙だな』

『…何が？』

『ベムスターのことだ。出現したこと自体そうだが、まるで俺達をここまで引き付けてるみてーだった』

言われてみればそうだ。

本来宇宙生物であるベムスターは逃げるなら真っ先に宇宙空間へ向かうはずだが、今回は不自然にも地上へ向かおうとした。

余程の飢餓状態だったことも考えられるが、ブルの光線を吸収していたことからそれも考えにくい。となれば――、

『やっぱり誰かが操ってた個体ってこと？』

『操られてたにしては本能に忠実だった。恐らくだがある目的地に辿り着くよう刷り込みを——ツ!?!』

☒物理的に☒空気が変わったのを察知し、途端に身構えるゼロとブル。

だがその瞬間には頭上に展開されていた魔方陣は起動しており、放出された青黒い雷撃が両者の身体を打った。

『……残念だが、パーティーの主賓は君達じゃないんだ』

魔方陣の奥に広がる空間から漏れ出る声。

落下してゆく二体の巨人を見下ろしながら、仮面の悪魔の嘲笑が闇に溶けていった。

百六十四話 集う勇者

「ヨハネ……かの地にい……墮天！」

「到着して早々騒がしいなお前は」

レンガ造りの古風な建物や歴史的建築物が立ち並ぶ、水の都ベネチア。

ベムスターの襲撃により予定から大幅に遅れてこの地に辿り着いた彼女達は、案の定はしゃいだ様子でその姿を見せた。

「大変だったのよ？ あの怪獣のせいで知らない国の空港に不時着したりで……」

「その怪獣倒しに行ったらどこの国かもわかんねえ森の中に叩き落とされた俺の話する？」

「あ、一人だけ鞠莉ちゃんのお母さんに見向きもされてなかったぞらね……」

「不法入国しちゃったわ。ドーしよ」

おまけに着の身着のままな上に無一文で既に不安しかない。本当にどうしたものか。

「……まあ、タダで旅行出来たと考えて強く生きる」

「遅し過ぎない？」

『開き直りつつーんだよこういうのは』

一度戻つてもよかつたのだが、自分達をここに叩き落としたということは何かしらの意図があるというゼロの睨みだった。

一旦はここで様子を見ると共に、別方向で動いているあの人が――、

「あれ？　だとしたらイサミさん一緒じゃないの？」

「こつちにお兄さんいるらしいから会いに行つてる」

元々その兄と連絡を取れないか画策していたようだし、先日的一件でこつちに飛ばされてきていることが確認できたので直接会いに行くそうなの。先日の一件でこつちに飛ばされてきていることが確認できたので直接会いに行くそうなの。先日の一件でこつちに飛ばされてきていることが確認できたので直接会いに行くそうなの。

一応合流でき次第エックス経由で伝えてくれるそうなのでそつちは連絡を待つしかない。

「まあ今は姉ちゃん達の方が重要だろ。なんか連絡あつたか？」

「今のところ何も……」

「最初にこつちに来るよーって送った時に届いたこれだけ」

そう言う千歌のスマホに映し出されていたのは町の一角を撮ったと思しき写真。

水路の雰囲気からしてベネチアの町であることに間違いはなさそうだが、イタリアの知識皆無の陸達には珍紛漢紛だ。

「ハハハ！　すぐ近くだよー！」

そんな無計画集団に差す一筋の希望の光。

今回助っ人として同行している月はイタリア在住経験がある。これほど心強い味方は他にいないだろう。

「ガイド役はボクに任せて、わからないことがあつたら何でも聞いてよ！ レッツヨーソロー！」

どつかで聞いたことのあるフレーズと共に月が進み始める。地図なども一切見ずに進むその様子は流石と言ったところか。

「すごい、どこへ行つても川があるー！」

「町中水路が張り巡らされてるからね。逆に、車は通れないんだ」

言われてみれば確かに道路などと言ったものは一切なかった。

様相こそまるで違うが、水路に行きかう船々はどことなく沼津の漁港を連想させた。

「…当たり前だけど日本人なんていないわね」

「うう……迷つちやいそう……」

知らない町に知らない人々。観光気分で楽しんでる反面、彼女達の顔には未知の場所での不安も垣間見えた。

どこであろうが経験のない場所というのは不安を呼び込むものらしい。

「(ト)(ト)……かな？」

しばらく歩いた後にその場所へと辿り着く。

石造りの建物や通路に真横を走る水路。時刻によるコントラストの差こそあるが、確かにここが鞠莉達から送られてきた写真の場所だ。

「ん……？」

千歌達はその場所へ辿り着くタイミングを見計らったように。

水路に隣接した広場にポツンと立つ公衆電話。そのベルが喧しく鳴り響き始めたのだ。

「月ちゃん？」

見るからに怪しいそれに千歌達はおろか周辺にいる町の人々すらも近寄ろうとしない。

そんな空気に終止符を打ったのはまたも月だった。

「ボヴォロ……」

「あん？」

数秒間耳に当てた後に受話器を元の位置に戻した月がポロリと零す。

それが次なる目的地を示していたことに気付くのは、もうしばらく後のことだった。

「コンタリーニ デル ボヴォロだって♪」

「つたく！ どう考えても怪しいじゃない！」

「いいから行くぞらー」

迷路のように入り組む道を進み、月の言う☒ボヴォロ☒とやらに向かう。

正直怪しさは全開だったがこれ以外に手掛かりがなかったのも事実。一先ず行ってみることにした……という次第だ。

「……か」

「わああ…… 何これえー！」

路地を抜け陽光が指したその時、その建物は姿を現した。

古びた白いレンガで組み上げられた様はまさしく歴史的建造物と言い現わしたところか。

仕切りのないアーチ状の窓枠やそれらが螺旋階段に沿って並ぶ塔。特徴的な外観は観光名所になるのも頷けた。

「中世にタイムスリップしたみたい……！」

「……ここにいるっていう話だったよな」

月が電話越しに聞いたという情報に従い一階、二階、三階……とやたら高い建物を見上げる。

そしてその最上階に視線を向けた時、三つの影が蠢くのが見えた。

「あつ、お姉ちゃん！」

こちらを見下ろす姉達の姿を見るや否や駆け出すルビィ。

それに続いてボヴォオロへと駆けこんでゆく彼女達の背を見て安堵すると、陸もまた螺旋階段を駆け上った。

「お姉ちゃん!!」

階段を上り終えた先で待っていた姉に寂しさを爆発させるようにルビィが抱き着く。

そんな妹を優しく抱き留めるダイヤ含め、さほど時間は経っていないはずなのにこの三人と顔を合わせるのが随分と懐かしく感じた。

「……よく来ましたわね。こんな遠いところまで」

「よかった、三人一緒だったんだね」

「Off course! ずっと一緒だよ!」

「……んで、なんでまた行方不明なんかに?」

再開の余韻も程々に陸が問う。

だが当の三人には心覚えがないようで、揃いも揃って首を傾げられてしまう。

一応ここへ来た経緯だけ説明すると、呆れたように鞠莉が深く息をついた。

「…ああ、そう。そういうことになってるのね」

「鞠莉のお母さんが千歌達にそう言ったんだよね？」

「うん……行方不明で心配だからって」

向こうとこちら側で状況の認識にかなりズレがあるらしい。

単純に鞠莉達がそんなことになっていると気付いていなかったただけという可能性もあるが、千歌達の連絡にも殆ど返答を寄越さなかったことからそれも考えにくい。

となると、疑わしくはこの情報を千歌達に流したあの人か。

「……もしかしてダシに使われたか？」

『…かもな』

あまり人の母親を疑うような真似はしたくないが、ある可能性が浮上してしまう。

「どういふこと？」

「…いや、なんとなく鞠莉さんのお袋さんが俺を敵視してるみたいだったからさ。なんか裏があるのかと思って」

『ハナから鞠莉の母親に利用されてたのかもってことだ』

とはいえあくまで推察に過ぎない。

確認の意を込めて鞠莉達へ目線を送ると、否定する気はないというように頷いた。

「ちかっち達が来るってわかれば、私達は必ずコンタクトをとる」

「それでおびき出して……」

「捕まえようって魂胆ですわ」

ぴらりと、ダイヤの手から差し出される一枚のチラシ。

まるで映画の広告ポスターのようなそれは、果南とダイヤが鞠莉に対し不埒なことをしようとしているかのような悪意に満ちたもの。話の流れからして制作者は鞠莉の母親なのだろう。

「町中にこれがばら撒かれてる辺りから手段は選ばなくなってきた気はしたけど、まさかちかっち達まで利用するなんて……!」

「じゃあ行方不明って嘘ってこと!？」

「てか指名手配じゃんそんなの!？」

鞠莉達自身気付いた時にはもうお尋ね者の身だったらしい。

これをどの程度町の人々が本気にしているかだが、こうして彼女達が身を隠すようなことをしている以上はきつと——、

「Non sono quelli su questo volante?」

そんな予感が当たるように後方の階段から声がする。

振り返れば観光客と思しき人々が数名。件のチラシを手にかけていることから恐らく鞠莉達についての会話らしい。

「ここにあまりLong stayは無理ですネ……!」

あのチラシが相当広まっていることを考えると、ここにいて騒ぎになるのも時間の問題。

それを悟ったか、鞠莉は何やら鞆の中を弄りだす。

「曜……!」

直後にふわりと宙に舞った一着の制服が窓枠を超え地上に落下していく。

そしてそれを追うように、二つの人影までもがその身を投げ出し――、

「制服ツ――!!!」

「だめええええええつ!!!」

放られた制服へ迷いなくダイブした曜と月を必死に抱き留める千歌と梨子。

陸や一年生組の助けもありなんとか事なきを得るも、その時には既に鞠莉達の姿はなかった。

「ああっ!」

「ごめんなさーい!」

「詳しい話はnothingアース!」

曜達を引つ張り上げて、いる間に逃走したのか、既にボヴォロから走り去ってゆく鞠莉達の声が聞こえる。

どんな事情があるかは知らないが、ここで逃がすわけにはいかない。そう判断すると手摺に足を掛け――、

「逃がすかアッ！」

「ちよ……、ここ最上階！」

直前に起きたハプニングなどなんのその。直接地上へと飛び降りた陸が三人を追う様を、残された七人は呆然と眺めるのだった。

「普通あそこからついてくる……？」

『コイツに普通を期待すんな。バカだぞ』

「んだとテメエ」

人目を避けつつ路地を駆ける。そこらかしこにポスターが張りつけられた様は先程千歌が言った通り指名手配犯のようだった。

「それで……説明してもらえませんか？　こうなつてゐる訳」

先頭を走り周囲を確認しつつ問う。

彼女の母が母なら彼女達も彼女達だ。どんな思惑があるのかは知らないがここまで来て何も教えないというのも妙だろう。

「…追われてるんすよね。お袋さんに」

「……やっぱり、隠せないか」

堪忍したように鞠莉が足を止める。

答えてくれる気にはなつてくれたようだが、それでもその表情には迷いと抵抗が伺えた。

「……のままだと、鞠莉が結婚させられちゃうの」

そんな鞠莉の気持ちを汲んだが故なのか、代わりにそう口にする果南。

彼女からも憤りに近い何かを感じ、少なくともその件を快く思っている様子は欠片もなかった。

「……つまり、縁談の話があるということですか」

「……またっすか」

以前鞠莉に持ち掛けられてきた縁談を回避するために恋人を演じた際のことを思い出し若干頭が痛くなる。

あの時のこともあるし無水のような奴が来ることはないだろうが、見知らぬ者であることに変わりはない。確かに気分の良いものではないだろう。

「しっかし、なんでまたそんな話が……」

「鞠莉の自由を奪いたいから」

果南の返答に少し戦慄する。

だが誰も否定しない辺り事実なのだと思え止めざるを得なかった。

「……鞠莉さんのお母様は、昔からわたくし達のことをあまりよく思っていないのですわ」

鞠莉達三人が今までヤンチャやってきたのはよく聞かされている。

それまでいい子だった鞠莉が果南にダイヤと出会ってからというもの、家から抜け出す危険な遊びはするわけでやりたい放題……終いにはこちらの高校を抜け出して勝手に浦の星に戻ってくる始末。

確かに親としてはあまりいい気分はしないだろう。

「……これまでも何度か手は打ってくることはあつても、お父様の制止もあつたのかあまり過激なものではなかったのですがね」

「この前の見合いが滅茶苦茶になったせいはいよいよ我慢できなくなつたらしくて……」

「え、じゃあ俺がなんか敵視されてるのは……」

「…多分、無水を殴り飛ばしたからだと思う……」

やってしまったと額に手を当てる。

どうやらこの事件、間接的にだが陸が原因になっていたらしい。

「…すみません……俺がやっちゃまったばかりに……」

「そのことで貴方を責める人はいませんよ」

「むしろアレが成立してた方がマズかったしね……」

「いやでも俺が招いたみたいなのモンだし……とにかく、俺に出来ることあったら何でも言つてください」

「だったら、りくつちが私と結婚してくれる？」

悪戯つぼく口元に指をあてる鞠莉。彼女に告白されたあの日の出来事がフラッシュバックして少し頬が火照った。

「あはは。イツツジョーク。心配しないで、自分達で何とかするためにこうやって動いてたんだから」

揶揄うように笑われる。もう何度もやられていることだが慣れる気配はなかった。

ともあれ鞠莉達がこちらまで来ていたのは卒業旅行以外にそういつた意味もあつたらしい。

「とりあえずりくつちにはりくつちのやること、あるんでしょ？」

また別質の真剣味を帯びた顔が向けられた。

さつきはドタバタしてて伝えられなかったけど。そういつて差し出されたのは何か
がメモされてある一枚の紙切れ。

「この前、こつちにもウルトラマンと怪獣が現れたのは知ってるよね？」

ミラノに現れたロツソとクレツセント。

もしやこの三人も巻き込まれたのではと肝を冷やしていたのは記憶に新しい。

「実はね、そのウルトラマンの人に頼まれたんだ。りくつちと合わせてもらえないかっ
て」

「ええ!？」

「丁度皆もこつちに来るって連絡がきたすぐ後だったから、一先ず事情だけ説明したら
このメモだけ渡されたんだけど……」

「しばらくはここに書いてある場所に留まるらしいですわ」

どういつた経緯で鞠莉達と接触したかは知らないが、どうやら向こうもこちらとの接
触を図っているというのと同じらしい。

恐らくその人物と思われる者には弟であるイサミが会いに行っているが、まだ音沙汰
がないということはそういうことなのだろう。

「ちかっち達が私達に追い付くにはもうちよつと時間掛かりそうだし、会ってきたら?」
「……また、何か起こっているのでしょうか?」

グループとして新たな壁にぶつかっている今、余計な心配は掛けたくないという判断で千歌達には知らせていなかったが……この人達にはお見通しらしい。

「まあ、現に心配されてここまで来られてる訳だから心配しないで……つて言うのもアレだけど」

「もう、私達のことなんてほつといて、新しいAqoursを始めなさいつて言ったのに」

けれどまあ、身近なものが見えていないのがこの人達らしいが。

「……それだけじゃないんすよ」

メモを受け取り、所在の場所を目指して駆ける。

最後に一つ、改めて三人に対し言い残して。

「ここに来たのはアイツ等にとつても大事なことだったんです……だから聞いてやってください。アイツ等の話」

「……」か」

夕日が映える中、陽光の当たらない路地の片隅に構えるバーと思しき店の前で立ち止まる。

辺りに全く人がいないことや如何にも地球の言語ではない文字で記された店名は如何にも怪しき全開と言った様子だが、メモの示す場所はここだ。

『コイツあ……☒シエルター☒か？』

「シエルター？」

『ああ……あまり他の惑星との交流が活発でない星ではよく見られるんだが………まあ、宇宙人が通う喫茶店とでも思ってくれればいい』

言われてみれば現状この地球で宇宙人が受け入れられていられるかと言えばそうではない。

恐らくやむを得ず地球に留まっている宇宙人が通う場所なのだろう………そう思いながら戸を開く。

「……よう、来たな」

暗い階段を下りた先に広がっていた店内スペース。

そこに集った顔触れの中、真つ先にカウンター席でラムネを煽るテンガロンハットの風来坊へと視線は向けられた。

「ガイさん……?」

クレナイガイ——ウルトラマンオーブ。

以前精神的に瓦解しかけていた陸を救ってくれた恩人であり、ウルトラの先輩。

「俺だけじゃない。ほら」

ガイの言葉の通り、見知った顔は彼だけではなかった。

礼堂ヒカル、シヨウ、大空大地、朝倉リク、湊イサミ……そしてその兄と思しき青年。

「ちゃんと辿り着けてよかったよ……あんまり地獄に自信なくてさ」

「カツ兄絵心ないもんな」

「ほっとけ」

「えっと……」

「ああごめん。イサミとアサヒから聞いてると思うけど、俺が湊カツミ。よろしく」

この人が湊カツミ——ウルトラマンロッソ。

先日この国でクレッセントと戦い、鞠莉達に伝言を残した張本人。

兄弟故なのか、若干おちやらけているイメージのあるイサミとは正反対という印象を覚える。

『これで全員揃ったな。助けられたよカツミ君』

『エックスお前……!?!』

「なんか俺達より先にカツミ君が皆と会ってたらしくて、それで全員を合流させるためにエックスが俺のここに来てたらしいよ」

『うむ。カツミ君の携帯から君の携帯のデータを取得してな。それを利用して私自身をイサミ君の携帯に転送したという訳だ』

「すみません……一回状況説明してもらっていいですか?」

一気に押し寄せる情報に脳の処理が追い付かない。

ニユージエネレーション全員がこの地球に飛来していたこと自体はエックスから知らされていたが、まさかこんなところで再開するとは想像もしていなかった。

「俺達とある敵を追ってこの地球まで来たことはエックスから聞いてるよね?」

そこで今この地球で起きている異変を悟った……と大地が説明と共に自らの持つデータベースにそのデータを映す。

正直空間振動だの空間エネルギーだのはさっぱりだが、何かしらの要因で生じた空間の歪みが地球を覆っているのはわかる。

「そいつが原因でカツミ君がこっちの地球に飛ばされちまったらしいよな」

「それが、丁度俺達の追っていた☒奴☒の仕業だったという訳だ」

『……そもそも誰なんだよ、その☒奴☒ってのは』

『む？ とつくに知っているものだと思うのだが……』

エクステバイザーの中でエククスが首を傾げているのがわかった。

どうやら今回の首謀者は既に一度陸達が接触したことのある者らしい。

「今宇宙警備隊がその、ベリアル軍の後始末でこつちに手が回せないらしくて、それで急遽僕達がアイツを追ってたんだ」

「ゼロさん達も一度接触しているのはメビウスさん達から聞いた……もうわかったと思うが、この異変を引き起こしたのは——」

薄暗い部屋の中、スマホの画面だけが灯る。

通知音と共に更新されたメッセージの内容を読み取ると、鹿角理亜は握っていたそれを床へと叩きつけた。

「理亜——？」

部屋の明かりが点けられると共に姉が戸を開いたのがわかった。

誰よりも尊敬する姉、大好きな姉……けれど今この瞬間に限っては、最も顔を合わせたくない相手だった。

「千歌さん達、無事にイタリアに到着したそうです。そこでダイヤさん達と——」

「姉さま」

擦れるような声を絞り出す。

少しでも声を出していると泣きそうになる。それを必死に堪え、ベッドの上で顔を埋めた理亜は姉に懇願した。

「お願いだから、灯りを消して……」

どうすればいい。どうしたらいい。

スクールアイドルを続けると誓ったのに。新しい雪の結晶を作ると約束したのに。

どうして自分は今、こんなところで足踏みしているんだ。

「姉さま……」

一緒に続けてくれると言ってくれた友達も、付いてこれずに皆離れて行ってしまった。姉や自分に合わせていたメニューはまだ彼女達には厳しいことはわかっていたのに。

そうなる理由を作ったのも、皆を引き留められなかったのも自分だ。全部非力な自分

が招いたことだ。

もういないとわかっているのに、心は今までずっと隣にいた姉の存在を求めてしま
う。

『——やり直したいかい？』

「え……？」

自分以外はいないはずの部屋に反響した声が苦悩に沈む自意識を引き摺り出す。

『失った夢や理想を追い求めているのに現実はそうさせてくれない……実に辛いことだ
ろう』

「だ、だれ……？」

『ああ、失礼。私としたことが自己紹介が遅れてしまったね』

気付けば放り出していたスマホの画面で蠢く闇の中で、赤い双眸が瞬く。

理亜の心の中を見透かしたようなその悪魔は、同情の言葉と共に救いを差し伸べるよ
うに黒い腕を伸ばすと——囁いた。

『——私はウルトラマントレギア。君の願いを叶えに来た』

百六十五話 求める答え

ある程度の情報を共有した後、一度先輩方と別れ鞠莉達に指定された場所へと向かう。

「トレギア……」

『…まさか、アイツの仕業だったとはな』

トレギア。ウルトラマントレギア。

自ら光の国を抜け出した元科学者であり、今は宇宙に混沌を齎す仮面の悪魔。以前鞠莉や花丸に手を出し、聞いた話では千歌にも囁き掛けていたという。

「何しに戻ってきたんだ……？」

『それ含めヒカル達も調べてたらしいがな……そもそも、トレギア自体わかってないことが多すぎる。正直、何を企てるかなんてわかりやしねえ』

「定期的に洒落にならねえ問題児排出するの何とかしろよ光の国……」

ベムスターを討伐した直後のゼロとブルをイタリアの地に叩き落したのもトレギアとみて間違いないだろう。それ以前にコツヴやクレッセント、ベムスターと言った最近出現する怪獣も恐らく奴の仕業だ。

複数の世界からウルトラマンを呼び寄せ、それらに怪獣を仕向ける……確かに何が目的なのかが見えてこない。

『だからこそ宇宙警備隊も追っちやいるんだがな。つたく、今回のベリアル絡みで光の国がゴタついてる隙に大それたことしやがって』

トレギアの目的がわからなくとも、奴もろともその目論見をぶつ潰すことに変わりはない。

それにアイツは陸の大切なものに手を出した……許しておく義理はなかった。

『トレギアは心に闇や迷いを抱く奴に選択を持ち掛けて破滅に導くような奴だ。またアイツ等に手を出してこないとも限らねえぞ』

「……させねえよ。絶対」

壁にぶつかり、新たに歩み出せずにいる現状。確かにトレギアにとっては格好の獲物かもしれない。

けれどまた同じことは繰り返させない。そう改めて心に決めたその瞬間に、ようやく本日の終着点となる建物が見えた。

『こりやまた豪勢な……』

「やっばすげえな金持ちって」

既にどつぷりと暗くなった夜空の下にぼんやりと浮かぶ白。

海外のドラマなどでよく目にする絵に描いたような洋風の別荘が目の前に現れた。

「…アイツ等も追い付いたつばいな」

ベランダと思しき場所でおかしなポーズをとっている中二病が見えた。

ここまで辿り着いた時は中にいる自分達に声を掛けてくれとの話だったし、別にその相手は善子だつていいだろう。

「おい、よし——」

「いッ!？」

その間下まで行き正面口の開錠を求めようとしたその瞬間。

手摺部分に立ち調子に乗っていた善子が足を滑らせて落下してくるのを視認し——

、

「善子ちゃん!？」

「あ、陸ちゃんいたんだ」

「…ちよつとは心配しやがれお前等……!」

文字通り墮天使となった善子の体重が背中に押し掛かる反面、久方ぶりにも思えるこのノリにどこか安堵していた。

次なる驚異の足音が、すぐそこにまで迫っていることも知らず。

「それで？　ちゃんと会えた？」

「一体何が起こってるんですの？」

「まあ、無視できない問題なのは確かですけど……それより今はそつちでしよ。千歌達にはもう？」

「話したよ。千歌達も巻き込んだから、ちゃんと考えないとね」

無事鞠莉の知り合いが保有しているという別荘に上がり肩の力を抜いた。なんやかんやずつと動いていてためやつと一息つける。

けれど神様はまだ陸に過剰労働を強いるようで――、
「やつと見つけマシタ」

一難も去っていないのにまた一難。

叩きつけるように開かれた戸の向こうから現れたのは、他の誰でもない、小原鞠莉の母その人だった。

「ま……マママ?!」

「こんなところに隠れているなんて……またハグウの入れ知恵デスか？」

鞠莉や千歌達の話では特定や尾行をされないように注意してきたという話だったが何故ここがわかったのか。

その答えを探る間もなく部屋の中へと踏み入ってきた鞠莉の母は、娘を連れ去らんと迫る。

「それともその婚約者サマと駆落ちか何かデス？ あの時縁談も滅茶苦茶にしておいて今度は何を……」

「違うわー！ 私が考えたの……ママが、しつこいから」

「しつこくしてこなかったから、こうなったのです！ 小学校の頃、家から飛び出した時も、学校を救うために浦の星へ戻った時も、パパに言われてぐっとこらえてきました……けど、その結果がこれデス！」

「これって……」

反論の余地も与えぬままにまくし立てる。

その様は果南やダイヤに、色々なものに出会って鞠莉が変わっていくのが好ましくなないように見えた。

「わからないのデスか？ 何一ついいことはなかったではありませんか。学校は廃校になり、鞠莉は海外での卒業資格を貰えなかったのデスよ」

「待って！ でもスクールアイドルは全うした！ 皆と一緒にラブライブは優勝したわ！」

「それが？」

自身のやってきたことの意味を主張する鞠莉に対する母の反応は冷徹なものだった。

「一体、スクールアイドルとやらをやって何の得があったのです？」

何も残せなかつたくせに。そう言わんばかりの鞠莉の母がどこか静真の父兄と重なる。

「……くだらない」

その一言が、全てを物語る。

この人も同じなんだ。

全国大会で優勝したとか、そんな実績を認めない……そもそも意味を持たない。

スクールアイドルというものの自体を、遊びとしか思っていないから。

「くだらない……？」

スクールアイドルを通して自分達の輝きを、これまでの歩み全てを肯定できた彼女達だからこそ、その言葉が聞き捨てならないのか。

そんな異議を唱えようと千歌が一步前へ乗り出すも、何か言葉を発する前にダイヤに留められる。

皆気持ちは同じ。彼女の目はそう訴えているように見えた。

「……こういう人なのデース」

そんなダイヤに賛同するように、わざとらしく肩を竦めてみせる鞠莉。

「…だから、私達が鞠莉を外の世界に連れだしたの」

「Shut up! とにかく、鞠莉の行動は私が——」

「——くだらなくなんかない!!」

束縛しようと手を引く母親に対し、親友二人に手を取られ彼女は叫ぶ。

「スクールアイドルは……くだらなくなんかない!!」

母が一言でスクールアイドルに対する印象を物語ったように、鞠莉もまたその一言で自身にとってのスクールアイドルが何たるかを訴えた。

誰よりもあの瞬間を楽しみ、大切に思っていた彼女のその声は、必然と重みを帯びる。

「…もし、スクールアイドルが素晴らしいものだって証明することができたら……ママの前で、スクールアイドルが人を感動させられるって証明することができたら、私の自

由にさせてくれる？」

自分自身がスクールアイドルに感銘を受け、実際にそれを通してかけがえのないものを得たからこそ、頭ごなしにそれを否定して欲しくない。

せめてそれがどういふものなのか知ってから答えを出してほしいと、鞠莉は言う。

奇しくもそれは、講堂でのライブで新生Aqoursが成しえなかったことだった。

「……いいでしょう」

少しでもその熱意を感じてくれたのか、はたまたどうせ上手くないと達観しているだけなのか。

それは定かではないが、それでも鞠莉の母がチャンスを与えてくれたのは事実だ。

「ただし、ダメだったら私の言うことを聞いてもらいまさー」

去り際に最後の勧告を残して。

不穏な空気はそのままに、嵐は一先ず過ぎ去っていった。

「……で、それが何で観光になる訳？」

「……まあ、せっかく来たんだしということ……」

「元々わたくし達がこちらに来たのも卒業旅行が目的でしたから……」

「それにライブする場所も見つけないとだしね」

あの後、鞠莉の母親にスクールアイドルについて理解してもらうにはライブをするのが一番だというのが満場一致での答えだった。

そのライブを披露するための場所を決める……とかいう話だったが、いつの間にか普通に観光している次第である。

「……どうだ？ いい場所あったか？」

「ううくん……」

「どこも素敵だけどいまいちピンとこないずら〜」

「ふふ……このヨハネの人格を布教するサバトに相応しい場所なぞ……」

「……カツ兄、あの子何言ってるの？」

「俺に聞くな。てか失礼だろ」

そしてそのライブの場所を自分達に決めさせて欲しいと訴えたのが一年生組三人。

今まで同級生に頼ってばかりだったからこのライブの場所は任せてほしい。踏み出

すために少しずつでも何をすべきか、彼女達なりに考えて出した答えらしい。

「……それで、なんか反応ありました?」

話を聞かれぬようAqours一行から離れ、遠巻きからこちらを覗いていた湊兄弟と小声を交わす。

トレギアの性格上、今の彼女達は標的となる可能性が高い……そう陸がこの二人が情報収集がてら護衛を名乗り出てくれたのだ。

「いんや。今のところ何も」

「……そもそも、トレギアの奴がイタリアにいるとは限らないじゃ」

「それは十分あり得るんだがな……でも考えてみてくれ」

未だトレギアの狙いは不明瞭。どこにいるのか、何を狙っているのかすらも明らかとなっていないものにも関わらず現状ウルトラマンは全員ここイタリアに集結している。

分担して搜索範囲を広げた方がいいのでは……そう憂う陸にカツミがある可能性を示唆する。

「今までの怪獣の出現の仕方、まるで俺達をイタリアに導いてるみたいじゃなかったか?」

『……お前も感じてたか』

それはベムスター討伐後にゼロも感じていたことだった。恐らくあの直後にゼロと

ブルと叩き落した攻撃もトレギアによるものだろう。

「…でも、ベムスターが出現する前からこつちにも怪獣現れてたじゃんかよ」

「それはまだよくわからないけど……多分、陸やあの子達がイタリアに来る動機を強めたかったからじゃないのか？ 現にあの子達がこつちに来るって決めた直後にあの怪獣が現れたんだろ？」

確かに行方不明という時点でかなり不安だったところに重ね掛けする形でクレツセントが出現し、更なる不安を煽った。

カツミの言う通り、あれにより更に陸や千歌達の動機が強まったのは事実だ。

「それで彼女達……A q u o r s だっけ？ がイタリアに来るのに合わせて陸とイサミもこつちに来るよう仕向けたんだろ。ベムスターを使ってな。多分彼女達がこつちに来ないなら俺達が日本まで誘導されていたと思う」

「じゃあ、俺達をイタリアに集合させるのがトレギアの目的ってこと？」

「でもトレギアの狙いがアイツ等だったら、俺等は邪魔にしかならないんじゃない？」

「いや、アイツの場合はそうでもないんだよ」

聞く話によると、湊兄妹のいた地球にもトレギアは現れたことがあるらしい。

その際は奴はカツミの友人の心に付け込み災厄を齎した……その経験からか、彼にはある程度その動機が見えているらしい。

「アイツは人の心を弄んで楽しむような奴だ………敢えてここに俺達を集めたのも、陸や俺達に彼女達が戸井のようになるのを見せつけるためだと思う」

つまりトレギアの目的はA q o u r sそのものではなく、守るべきものである彼女達が崩れ行く様を見せつけ陸達ウルトラマンに絶望を味合わせることに。

回りくどいようにも思えるが、以前奴が現れた際の所業を考えるとあり得なくはない話だった。

「カツ兄、なんだかんだでトレギアの一番の理解者なんじゃない?」

「冗談でもやめろ」

「それにしても、そんなことして何がしたいんだろうねアイツ」

「さあな………どうであろうと、今俺達に出来るのはそうなることを防ぐだけことだろ」

陸は一度トレギアに負けている。直接対決をした訳ではないが、千歌がベリアルに飲み込まれるトリガーを引いたのはトレギアであり、その存在に気が点けなかった陸の完敗だった。

だからこそもう二度と同じことは繰り返さない。そう固く誓う。

「……まあそもそも、彼女達の問題が解決すればそれで終わる話なんだけどな」

「なあ陸、今あの子等何のことで悩んでんの?」

あの時は状況が状況だったとはいえ一人で抱え込んでしまったのが全ての要因だつ

た。

少しでもこの人達を頼ることであの繰り返しを防げるなら……そう思った。

「…なるほど」

「確かに簡単な問題じゃないな」

とはいえダメ元。スクールアイドルというものを知らないこの人達がどの程度理解してくれるかは明瞭ではなかったが、通ずるものがあつたのか案外頷いてくれるもので。

「…俺達もあつたよな、お前達なんか認めない、なんて言われたこと」

「ああ、ウルトラマンオーブダークノワールブラックシュワルツ？」

「シュワルツじゃなくてシュバルツな」

結局全部黒じゃねーかとかいうツツコミはさておき、苦々しい思い出を語るような二人の瞳に千歌達と近い何かが映る。

「…あれとはまた違うんだろうけど……認めてもらうって、結構大変だよな」

「まあ、別に俺達は認めてほしくてウルトラマンやつてた訳じゃないし、アイツにも認めてもらう必要はなかったんだけどさ」

それは千歌達も同じだ。彼女達は認めてもらうためにスクールアイドルをやってきた訳じゃない。

でも、今回はそうもいかない。スクールアイドルを認めない人達に認めてもらわなければいけないんだ。

そのためにまたライブをすると決めたが、今のAqoursではそのために必要な何かが足りないのは明白。

以前のAqoursならいざ知らず、今は六人。これまで中心にいた三人がいなくなったAqoursの形とは何なのか……それをずっと模索している。

「……」この町の景色、昔からずっと変わってないんだよ。だから□永遠の都□だなんて呼ばれてる」

何か力になれば、そう吐露した陸に、ふと古風な街並みを眺めながらカツミが零す。

「でもそれはここににいる人達が永遠に生きてるってことじゃない。代を重ねる度に次の世代の人達に想いを託して、この町の景色と伝統を守ってきたんだ」

「お？ 何かツ兄イタリアかぶれ？」

「こつちでお世話になってる人から聞いたんだよ……とにかく、そんな風に終わりと始まりを繰り返したから、この町はずっと変わらないでいるんだってさ」

カツミのいうことは、直接的にはスクールアイドルに何の関係もないもののように思える。

でもそれはどこか、今のAqoursが求めているものと重なるような気がした。

「……まあ、要するにだ。例えば形が変わったりしても、それまでに培った想いはずっとそこに残ってるってことだよ」

スクールアイドルを認めない人達の前で、三人がいない喪失感の中挑んだライブで失敗し、これまで積み上げてきたものがまたゼロに戻ったような気がしていた。

けれど、仮にそうでないとするならば……、

「……なんか、トレギアが嫌いそうだねそれ」

「だからこそ、だろ」

「それを見せつけるためにわざわざ俺達呼び寄せたとか性格悪すぎない?」

「そう言う奴だつて言ってるだろ……なあ陸、前にトレギアが現れた時、アイツが何したかわかるか?」

「……あんま振り返りたくないっすけどね」

卑劣な手段で千歌を追い詰め、鞠莉の精神を壊しかけ、花丸にもその魔の手を伸ばした。

おまけにスライの計画に加担するような真似まで……、

「……!」

瞬間、電流が走る。

天啓のように舞い降りたそれは、揺ぎない確信を含んだものだった。

「……………時空の歪みの原因、わかったかもしれません」

百六十六話 旋律はまた歩み出す

イタリアで越す何度目かの夜。

先日まであまり景観を楽しむ余裕はなかったが、こう改めて見る夜景は中々に趣深い。

「楽しかったねー」

「…結局楽しんでただけじゃなかったかお前等」

「私達が楽しまないと楽しいライブも出来ないよ♪」

イタリアの観光名所は殆ど周ったんじゃないかというくらい周りに周った。

あまり余裕もない日数の中丸一日費やしたのだ。何か少しでも得るものがあつたならいいのだが。

「…なんか、ごめんね？」

こちらに滞在している間の宿とである別荘で一息ついていると、曜に千歌、果南と鞠莉の声が耳朶に触れる。

明かるげではないその話題に顔を出せば、果南は陸にも伝えるように続けた。

「ほんとは巻き込むつもりはなかったんだけどね……鞠莉があんなこと言うからだよ」

「つい…:Sell wordにBuy wordで」

「売り言葉に買い言葉？」

「どうやら急遽行うこととなったライブのことを言っているらしい。」

「そう言えば自分達のことはいいいから新しいAqoursを始めると言っていたか。今回のことで千歌達が新しいスタートを切るための時間を割いてしまっていることを申し訳なく思っているのか。」

「もし抵抗があるようだったら、私達だけで何とかするから……」

「ううん、いいの」

「そんな果南の言葉を遮る千歌。」

「勿論鞠莉達のためという理由もある……でもそれ以上にこれも、新しいAqoursを始めるために必要なことだから。」

「むしろ、私達も嬉しいというか」

「…言ったら、ただ鞠莉さんのお袋さんに言われたから来た訳じゃないって」

「皆、ちよつと悩んでたんだよね……新しいAqoursってなんだろうって」

「講堂でのライブ、そして聖良からの評価。今のAqoursに足りないものを指し示すものはごまんとある。」

「新しいAqoursかあ……」

「自分達で見つけないといけないのはわかってるんだけど……中々」

三年生のいないAqoursに不安を感じ、だからこそ三年生に会いに来た。

何か掴めるかもしれない。そう信じて。

「果南ちゃんは、どう思う？」

少し、考える仕草を見せた後、

「千歌の言う通りだと思う。千歌達で見つけるしかない」

「そうだね……私達の意見が入ったら意味ないもん」

キツパリ、二人とも口を揃えてそう答えた。

薄々こう返されることは見えていた。恐らくダイヤに言っても同じように答えられるだろう。

「だよね……」

三年生がいなくなったことで、今までやってきたことが全てゼロに戻ったような気がした。

だからこそこうして三年生と話せば何か掴めるのかもと期待していた……そんな様子で千歌が肩を落とす。

「……でも、気持ちはずっとここにありよ」

そんな千歌の胸に、果南の人差し指が触れる。

「鞠莉の気持ち、ダイヤの気持ち……私の気持ちも、変わらずずっと」

「ずっと……」

「そう、ずっと」

そう言う果南の瞳は、いつだかの彼女と重なった。

三年生に亀裂を生むきっかけとなり、彼女がずっと目を背けていたあの過去を肯定させてくれた幼馴染に、ありがどうと言ったあの時のように。

「……それを気付かせてくれたのは、千歌だよ」

決して喜べる記憶ではないけれど、無駄ではなかった、未来に繋がっていると気付かせてくれた。

そんな果南だからこそ、確信を持ってそう言えるのか。

「……さあ、明日も早いから、もう寝るよ」

「うん……じゃあおやすみ」

今、言葉で伝えられることはこれだけ。

だからあとと自分達で見つけて。そう言った二人の背中が奥へと消えてゆく。

「……さつき聞いたことなんだけどよ、この町、なんて呼ばれてるか知ってるか？」

「え……？」

カツミの言葉を反芻する。

あの人があの場でああ言ったのもきつとこういうことだろうから。

「……永遠の都、ずっと昔から変わってないんだとよこの町」

確かにこのことはスクールアイドルとは直接的に関係はない。

でも今千歌達が直面している問題に関して言えば、根底にあるものは同じなのではないだろうか。

「時代が変わってそこにいる人達が変わっても、次の世代にその想いを託し続けてきたんだって。だから中身が変わってもこの町までは変わっていかなかったんだって」

終わらずに続くということは、何も変化を拒み続けることじゃない。永遠の都だなんて呼ばれているこの町も耐えず変化を続けている。

それが出来たのは、大切なものを残したまま、変わりゆく時代についていったから。

「何か欠けたり形が変わろうとそれは終わることじゃねーんだよ。それを受け継いでくれる奴がいる限り託された想いも残っていく……俺はこの話を聞いてそう思った」

受け継がれてゆく想い……陸もこれまでウルトラの先輩と触れてくる中で感じたものだ。

「……姉ちゃんが言ってたのも、そういうことじゃねーの？」

少し陸の意見が入り過ぎただろうか。

でもこれからは陸も一員だと言ってくれたのは彼女達だ。免罪符……という訳ではないが、こんな形でしか陸は力になれないから。

「……いいこと言うね」

「……聞いてたのかよ」

何か掴んだ様子で談笑を始めた幼馴染二人に背を向けその場を去ると、真横から声を掛けてくるもう一人の二年生。

間が悪そうに反目を向けた陸に対し、桜内梨子は微笑みかけた。

「恥ずかしがることないと思うよ。私も、昔の経験があったから今の私があるのは本当だもの」

「他人の受け売りだからあんま胸張れるようなことでもねーんだよ……てかいいのか？

アイツ等行つちまうぞ」

「ああいやそうじゃなくて……ちよつと陸君に用が……」

あまり自分相手に時間を食う訳にもいかなかろうと道を開けるも、梨子はそれを否定しは陸を引き留める。

その際に陸の手を取った彼女は、頬に朱を差しつつ何か決意した様子で言った。

「明日の夜……付き合ってもらえないかな」

「演奏会ねえ……」

「うん。元々興味はあったんだけど場所が場所だったから、いい機会かなって」

梨子の手にある二枚のチケットを眺めつつ夜の街を並んで進む。

彼女の誘いはこちらでは有名なオーケストラの演奏会を聞きに行かないかというもの。スクールアイドルに触れるまで殆ど音楽に興味を示さなかった陸には新鮮に感じる。

「二人で行くのもなんか不安だったから……付き合ってもらってごめんね」

「それはいいんだけどよ……俺でよかったのかよ。胸張っていうことでもないけど俺の音楽の成績は壊滅的だぞ」

「いやまあ、だからこそと言うか二人になる理由が欲しかったと言うか……」

まあ梨子が陸のことをごく希望なら断る理由もないのだが。

それよりもさっきからゼロが一言も発さないのは何故なのだろうか。

「それにこれからのA q o u r sのこと考えたら、少しは勉強して力つけないと」

「コンクールで優勝した奴がよく言うぜ。今から見に行くのがどれくらいか知らねーけど、お前も負けてないと思うぞ」

「まだまだだよ、私なんて」

仄かに嬉しそうに答える反面、その表情は講堂での失敗を引き摺っているようにも思えた。

少しでいい、自分にできることをやりたい。そんな想いが垣間見える。

「皆も自分なりの形で頑張ってるしね。私も負けてられないよ」

「あー…、そういうや曜の奴が善子と一緒に新しいステップ作るとか言ってる息巻いてたな」

「うん…：…ルビイちゃんと花丸ちゃんも、衣装の参考にして生地屋さん覗いてたし」

ちらほら千歌がライブで歌う曲の歌詞に頭を悩ませているのも散見した。

頼っているだけではないけない…：…だから皆自分なりに出来ることをやっている。小

さくとも一歩一歩確実に、新しいA q o u r sへと進んでいる気がした。

「改めて思うけどすげえよなお前等…：…ほんとすげえよ」

「それはライブが終わった後、私だけじゃなくて皆に言ってるあげて」

そんなこんな会話を交わしているうちに目的地へと到着する。

一般的にコンサートと聞けば先日の静真のような講堂やホールを連想するが、国が変わればそれらも変わるのか。

これから音楽家達の演奏が響くであろうその会場は建物そのものが一種の作品であるような荘厳さを纏って見えた。

「……これ俺が入って大丈夫なやつか？ 近所のコンビニ行くみてーな格好なんだけど俺」

「別にドレスコードの指定なんてないから大丈夫よ……ほら、行こう？」

ここへきて怖気づいていると手を引く彼女にエスコートされる。完全に男女の立場が逆転している気がした。

どことなく、今日の梨子は積極的だ。

「……なんか、楽しそうだな」

「そうかな？ ……そうかも」

風に振り向いた彼女の髪が靡き、その瞳の情景と共に揺れた。

「私も前に進まないといけないから……だから、今だけはこの気持ちに素直になってもいいのかなって」

高鳴りを映す表情の中にほんの少し、諦めが滲む。

けれどそんな感情すら既に受け入れたように彼女は、儂く笑った。

「……今だけは、ね」

「……信じられない……普通寝る……？」

「いや……すまん。ホントにすまん……」

そんな表情も講演後には一変。

席に着きオーケストラの演奏が始まったまでは良かったのだ。ただここ最近の疲労が祟ったか、奏でられた緩やかな音程に誘われ見事爆睡。梨子の機嫌を損ねてしまうのも仕方のないことだった。

「もう、音楽ってそんなにつまらない？」

「歌とかならともかくな……ああいうのはどうにも」

直前までの梨子の顔が目には浮かぶ。余程このコンサートの日を楽しみにしていたのだと思うと申し訳なさで押し潰れそうだった。

「私の時はちゃんと聞いてるのになんでそうなるかなあ……」

「お前のは特別なんだよ。ちゃんと歌つてるところが想像できるといふか、ちゃんとその想いが見えるっつーか……とにかく、だから負けてねえつつたんだよ」

いつも近くで彼女達を見ているからかはわからないが、梨子作る曲はそこに皆の気持ちに乗っているのが見えるし、それが歌となるのも想像できる。

まあ、今このタイミングで言つても言い訳にしか聞こえないだろうが。

「……おだてても寝た事実は変わらないわよ?」

「はい。ごめんなさい……」

「……まあ、いいよ。許してあげる」

こちらに顔を向けずに短く答えた。まだご立腹かもしれない。

表情こそ伺えないが耳まで仄かに赤い。きつとまだご立腹なされている。

「……俺の気が済まんから埋め合わせは近い内にするよ」

「……なら、もうちよつと付き合ってもらつていいかな?」

「え? けどもう結構時間……」

「お願い。今日じゃないといけないの」

ようやく振り返つてくれた梨子に気圧される形で承諾。

先程も感じたが今日の彼女は何か一つ、自分の中で決意したことがあるように見え

た。

「……中世にタイムスリップしたみたいだね」

梨子のお願いは、ただ一緒にこの町を歩いて欲しいというものだった。

今日だけ、今日じゃないとダメ。時折見せる意味深な顔が引つかかる陸に対し、ただ楽しそうに梨子は笑う。

そして最後に町並みを一望する高台に立ち、ふと零した。

「改めてごめんね？ こんな時間まで付き合ってもらっちゃって」

「……謝んの俺じゃね？」

「ううん、誘ったのは私だから」

澄んだ夜空に星が瞬く。

肌に触れる空気は少し冷たくとも、梨子との間に漂う空気はどこか熱を持って思えた。

「……初めて会った時も、こんな風にちよつと肌寒かったよね」

「……忘れた」

「ええ酷い！ 私にとつては大切な日なのに！」

出会いの日がどんな気候だったなどは覚えちゃいないが、今日の前で膨れて見せている彼女があの時と比べて随分変わったのはわかる。

勿論悪い意味じゃない。それは梨子が前に進めているという揺ぎ無い表れだ。

「考えてみたらちゃんとお礼、言えてなかったな。あの時はありがとう」

「…あれやったの、俺じゃなくてゼロなんだがな」

「それでもいいよ。あの後も、私は陸君に何度も背中を押してもらった………なによ、あれが始まりだったな」

梨子との出会いは彼女がチンピラに絡まれているところを陸の身体を借りたゼロがぶちのめしたのがきっかけだったか。今となれば随分と懐かしい。

思えばあの時からか。今あるだけを抱えるので精いっぱいだった守りたいものが増えていったのは。

「私は、陸君にいっぱい勇気をもたらしたよ。だから今の私があるんだと思う」

「…んな大層なことした覚えはねーぞ」

「陸君に自覚はなくても、皆そう思ってるよ。……多分、これからも勇気をもたらすことはいっぱいあると思う」

一つ、また一つと言葉が紡がれる度に梨子の中の感情が昂っていくのが声を通じて伝

わってくる。

「……だからこそケジメをつけたいんだ、この気持ちに」

また、梨子の瞳にあの色が映る。

痛みや諦観を孕みつつも、それ以上の決意を声に乗せ——彼女の言葉で、奏でられた。

「私は……陸君が好きです」

旋律のような響きでその言葉が、彼女の想いを運ぶ。

それを受け止めた陸の眼前で揺れた梨子の瞳は潤みつつも、澄んでいた。

「……勇気をくれただけじゃない。陸君が皆と私を繋げてくれた……だから変わったの」

答えはいらない。そう言うように梨子は思いの丈を紡ぎ続ける。

それをただ、静かに、聞いていた。

「これからもきつと、変わり続けていくと思うから……一番近くにはもういられないけど、それでも最後まで見ていて欲しい」

陸と、皆が作ってくれた今の桜内梨子が向かう先を。

最後にそう言うのと、くるりと踵を返した彼女は何事もなかったかのように笑った。

「……戻ろっか。皆心配しちゃう」

また、並んで歩く。

横から見るその顔に後悔などはなく、むしろ吹っ切れているようにも思えた。

「……」

どういう気持ちがあつて、梨子がああの想いを伝えてきたのかはわからないけれど。

大きな転換点になるであろうライブを控えた今日この日にそれを口にしたのはきつ

と、梨子が定めた新たなスタートなのだろうから。

だつたら、今陸がすべきことは——、

「…別に、お前等がどう思つてようが構わないけどよ」

少しだけ速度を上げ、彼女の前を進む。

「……初めから俺は、最後までお前等に付き合うつもりでいるよ」

「…そっか……だよね」

くすりと、わかりきつていたような笑いが背後で生まれる。

三度並んだ彼女の背中、少しだけ大きく見えた。

百六十七話 かけがえのないもの

ガヤガヤと聞き慣れぬ言語が行きかう。流石首都のローマともなると人が多い。

その中心地にあるスペイン広場……噴水や花々に彩られた階段の踊り場に彼女達の姿はあった。

「……ビンゴだな」

今まさにライブが行われようという場の上空に空く黒い穴。

闇の中に描かれてゆく赤い円陣を確認すると、予めスタンバイしていた数人の戦士は光を握った。

「俺色に染め上げろ！ ルーブ!!」

赤と青の光が昇り、変身したロツソとブルが一直線に飛ぶ。

少し遅れ陸もゼロへと姿を変えると、一瞬、踊り場で控えている彼女達と視線を交わした。

『オオオオ……!』

空間の穴へと向かいつつ黄金の光を纏う。

彼女達にはある程度事情は伝えた。極力不安になるようなことは言いたくなかったのだがトレギアの狙いが彼女達である可能性がある以上は仕方のないことだった。

ライブの邪魔を目論む奴がいるからそれを取り除くまでライブをやるのは待っていて欲しい。そう伝えてある。

『シャイニングフィールド！』

シャイニングの力を用いたゼロの生み出す空間がロツソとブル、そして魔方陣もろとも包む。

文字通り瞬間に広がったそれは人々に勘付かれることなく閉塞し、煌めきの中へと誘った。

『やれやれ……また随分と強引な手で来たものだね』

『なあに、テメエの姑息な手に比べりやまだ気持ちいいモンだろ』

光に満ちた空間の中に一点、蠢く闇。

膨れ上がったそれが霧散すると共に姿を現した悪魔の名を口にする。

「……………トレギア」

『おや、覚えて頂けているとは光栄だね』

紳士的に頭を下げて見せた奴の本性が紳士とは程遠いものだ。陸は知っている。

何かを封じ込めているかのように全身を覆うプロテクターに、素顔を隠す黒い仮面。

かつて光の国から抜け出し、以降様々な厄災を齎しているピエロ——ウルトラマン
トレギア。

『お前、生きてたのか……』

『久しぶりだな湊カツミ。あの節はどうも』

『うーわ腹立つコイツ。さっさとやっちゃわない?』

湊兄弟……特にカツミとの間に並々ならぬ宿縁を感じた。

かくいう陸もそうだ。奴の所業を許すことは永遠にないだろう。

そんなウルトラマン達の敵意の視線をさらりと受け流したトレギアは、楽しむように
言った。

『舞台は整ったらしいが、これでは少々役者不足だね……では、こういうのは如何だろう
か』

ぱちん、と指を鳴らしたトレギアの真後ろに雷が落ちる。

それにより集積した闇は見る見るうちに膨張してゆき、やがて怪獣の形を成すと共に
咆哮を上げた。

『……スネークダークネス。君達のダンスパートナーには適任だと思わないかい？』
『トレギアツ……！』

ダークネスの名とは正反対の純白の体躯に、棍棒のように膨れ上がった腕と翼。挑発するように深紅の罅を鳴らすその怪獣に対し、ロツソは憎とも悲とも取れる視線を向けた。

『ゲストのボルテージも上がってきたところで……そろそろライブと行こうか』
『つくづく癪に障る言い回しする野郎だな……上等だ』

再度咆哮を上げたスネークダークネスにより切られた火蓋が今落ちる。

フィールドを維持したままシャイニングを解除したゼロが一気に距離を詰め、トレギアを交錯する。

『久しぶり……と言うほど時間は経っていないか。会いたかったよ仙道陸くん』

「奇遇だなトレギア、丁度俺もテメエの面ぶん殴りたかったとこだよ」

確かな殺意を込めて振り抜かれた拳が奴の仮面を掠める。

いつだかの因縁を晴らすように、ゼロと同調した陸は嵐のような空拳を殺到させた。

『テメエのことだ。何か姑息な真似してくるたあ思ってたが……まさか直接ライブを妨害しようなんてなあ』

『なに、祭りは派手な方が面白いさ』

前例からトレギアがA q o u r sメンバーの誰かに干渉するのを見越しエックスを介して全員に警戒網を敷いておいたのは正解だった。

今回のライブは千歌達の今後を左右するもの。個人に干渉するのを防がれた今トレギアは直接妨害に走ってくるだろう……そんな読みは当たったらしい。

『それに直接私が出向くように仕向けたのは君達だ。その期待に応えてこそその主催者というものだろう』

『あくまでも私の読み通りってか……ほぎきやがれ!』

目的まではまだ掴め切れないが、シャイニングフィールドに幽閉したことでライブの邪魔をするという狙いを潰したのは確かだ。

あとは全力を持って奴を打ち倒すのみ。

『アエエエイヤツ!』

最早身体に染み付いた宇宙拳法。

ゼロのそれともシンクロすることで更に鋭さを増した連撃をトレギアへ向けるも、まるで実体のないものを相手取っているかのように当たらない。

『相変わらず不気味な野郎だな……』

『伏せろッ!』

一度間合いから離れたその瞬間に上がった声に従い屈んだゼロの真上を炎水の槍が

駆け抜ける。

それがロツソとブルによる援護だということを理解するや否や、こちらも腕をL字に組んでは追撃へと移った。

『ワイドゼロショット！』

『ハアアッ！』

兄弟の合体光線は胸元で発生した青黒い雷が解き放たれたことで相殺される。

そして間髪なく迫ったゼロの光線が遂にその身体へ届かんとするが、今度は割って入った白の体躯によってそれは弾かれてしまう。

『ツツ——！！』

『ぐッ……！』

そしてその巨体に似合わぬ速度で飛翔してきたスネークダークネスの肥大化した右腕に叩きつけられる。

ガードすらも容易く貫通してくるその膂力に今のまま対抗するのが困難なのは明白だった。

なら、

『へっ……主人と違ってテメエは肉体派ってか。上等だ！』

ゼロの身体が紅に染まる。

勇気の爆炎クラッシュャーブレイブ。その闘気が伝染するかのよう周囲の温度は上昇してゆく。

『ダアアルアツ!!』

『ツツ———!!』

お返しだと言わんばかりのアツパーカットが轟音を立てて炸裂。同時に起こった爆炎が一撃の威力と相乗し、スネークダークネスを宙へと舞い上げる。

『やれやれ品のない。ダンスはもつとエレガントに踊って欲しいものだね』

『残念だけど、お前以外は皆こっちの方が性に合ってるみたいだぜトレギア』

その隙をつきゼロを打ち付けたとした雷撃を弾いたロツソとブルの体色が入れ替わる。

ロツソアクアにブルフレイム。互いの属性を入れ替えた両者は瞬時にその意図を共有し攻撃に移った。

『スプラッシュ・ボム!』

サブマリン投法から放られる水のエネルギー弾。

その水球は一発たりともトレギアを捉えることはないが、それで構わないと言うようにロツソは投擲を続ける。

『ちよつと協力してよお二人さん……カツ兄の投げた球を狙って!』

『…なるほどな。面白れえ』

ゼロもまたその狙いを悟り、右腕に熱を集中させる。

そしてロツソの水球の群れがトレギアを囲ったその瞬間、一気に開放する。

『フレイムバーン！』

『ガルネイトバスターツ！』

奴ではなく、水球の群れを狙いに爆炎を放射。

『ツ………！』

トレギアが回避を取ろうとした時にはもう遅い。

両者の炎が齎す圧倒的な熱量がトリガーとなり、連鎖的に周囲の水球全てが破裂。生

じた水蒸気爆発が奴を飲み込んだ。

『畳みかけるゼカツ兄！ クリスタルチェンジだ！』

『ああ！』

重ねがけるように体色と属性を変える兄弟ウルトラマン。

ロツソウインドは拳に風を、ブルグランドは短刀に大地の力を集約させ、同時に振り

抜く。

『ウインド！』

『グランド！』

『『ハイブリッドシユートツツ!!!』』

砂塵を纏う竜巻が霧のように揺蕩う水滴ごとトレギアを巻き込み爆ぜる。

さながら思考を共有しているかのようなコンビネーション。兄弟ならではの独特な連携は連続で奴を捉えた。

『やれやれ……流石に不利が過ぎたか』

三対二と言う状況に加え、シャイニングフィールドの齎す加護がゼロ達三人の力を増大させている。

トレギアにとってはこれ以上ないと言っていいほど不利な状況なのだろう。

『いつまでも無益な戦いに興じていられるほど暇ではないからね。私はここらでお暇させてもらおうかな』

『逃がす——』

展開された魔方陣の中に消えてゆく奴を追うより早く、赤黒い波動を浴びたスネークダークネスがそれを阻むような形で立ち塞がる。

トレギアによる更なる強化が加わったのか、数段狂暴性を増したように思える奴は怒り狂ったかの如く光線を放ち続けた。

『残業はしない主義なのでね。君達のお守りはソレに任せるとしよう』

玩具を足止めに闇の奥へと消えるトレギア。

飼い主がいなくなってもなお暴れ続けるスネークダークネスの光線は空間の壁と衝突し続け、やがて徐々に崩壊を招いていく。

『…これ今この空間が壊れるとどうなるの？』

『多分俺達が元居た場所にこの怪獣ごと戻る……このままじゃ沢山の人達を巻き込むことになるぞ』

シャイニングフィールドは空間の外とは流れる時間の速さが違う。多少こちらで過ごそうとも向こうではほんの一瞬しか経ってないことだろう。

つまりこの空間の外はまだゼロ達が戦闘へ移行するそのままの状態。ロツソの言う通りこのままシャイニングフィールドが崩壊すれば千歌達はおろかスペイン広場に集まっていた大勢の人達が犠牲となるだろう。

『それじゃあさつさとアイツを倒せばいい訳ね……わかりやすくていいじゃん』
『ああ。何としてでもここで倒すぞ』

『だってよ陸……俺達も飛ばして行くぜえ！』

ひび割れた空間の裂け目から漏れ出るエネルギーをかき集め、その上から更に重ねが

ける。

『纏うは極み！ 金色の宇宙!!』

『俺達に限界はねえ!!』

重ね合わせり、集約した光の力が増大し——弾ける。

《ウルトラマンループ!!》

《ウルトラマンゼロビヨンド!!》

金と銀の光が舞う。

幾重にも進った閃がスネークダークネスを刻み、遅れて起こった爆発が更にその体軀を抉る。

『ルービウム光線!!』

仰け反った奴の足元にスライディングの形で滑り込むロツソとブルの合体形態——

—ウルトラマンループ。

光線の軌道が重なったその瞬間に十字に組んだ腕から黄金の粒子が放出。至近距離

からの一撃が懐を打ち抜く。

『ツ———!!』

『シエエラッ!』

足元のループを押し潰さんとハンマーのように巨大な右腕が振り下ろされるが、間に入ったゼロによりいなされ体勢を崩すスネークダークネス。

『ハアアッ!!』

『アエエリヤッ!』

立ち上がり様にカラータイマーに手を翳したループの腕にループコウリン、四本のスラッガーを融合させたゼロの腕にビヨンドツインエッジがそれぞれ握られ、軌跡を描きながら幾度も振るわれる。

『ツツ———!!!!』

反撃にまた放たれた破壊光線をループコウリンの生み出すバリアがガード。

『ツインギガブレイクッ!!』

その瞬間に飛び出したゼロが二振りの大剣を薙ぎ、光線もろとも奴を切り刻む。

装甲の堅い奴にはこれだけ叩き込んでも致命傷には至らないが、それでもある一点に狙いを定めてループとスイッチ。

『ループコウリンショット!!』

虹色の光輪が弧を描きスネークダークネスに直撃。

その胸によりやく深々と刻まれた斬痕目掛け、最後の一撃を放つ。

『バルキーコーラスッ!!』

『ルーブボルテックバスターツ!!』

融合した光線の渦が斬痕から白い身体を貫く。

その余波でシャイニングフィールドを完全に崩壊させてしまうほどの衝撃波は、断末魔ごとスネークダークネスを粉碎した。

『……来たな』

時を同じくして地球上空の大気圏外。

五人の戦士に囲われる中、何かに呼応したように生じた空間の歪みから突起物の生えた隕石のような物体が出現する。

『ブルトン……陸の言った通りだったな』

『ああ、時空の歪みの原因はコイツか』

陸によると、以前トレギアがブルトンの能力を用いてこの地球に結界を張ったことがあったという。

後に結界自体は排されたがブルトン自体は倒されておらず、また今回の黒幕もトレギアだったことからまだこの怪獣が地球上空に居座っていたのでは……という読みだったがどうやら正解だったらしい。

『では、その時からずっとブルトンはここで力場を作っていたということか』

『通りで別次元と繋がるほど空間の歪みが大きくなる訳ですね……』

トレギアがブルトンを呼び出した真の狙いはゼロ達やベリアル軍の邪魔ではなく、今回の騒ぎを引き起こすためだったということだろうか。

真相がどうであれ今はブルトンの対処が先だ。これ以上時空の歪みが広がれば何が起こるかわかったものではない。

「あの怪獣の持つ特殊な体組織のせいで周囲の空間が屈折してる……普通に攻撃してもまず当たらない」

『ならその空間の屈折とやらを取り除けばいいだけの話だろう？』

七色の光が二閃、ブルトン周辺の空間を切り裂くように奔る。

エクストラッガーによる斬撃が一時的には言え屈折した空間を両断し、文字通りブル

トン丸裸にする。

『『『オオオオオオオオオツツ!!!』』』

直後に四方から迸った光線がブルトンを打ち抜き、爆散。

核が無くなったことにより空間の歪みが消失したことを確認すると、五人のウルトラマンは静かに地球へと舞い戻った。

—— Hop? Stop? Nonstop!

軽快なリズムに踊りを乗せ、九人のAquoursは歌う。

言葉を歌に乗せた時、その想いは伝わっていく。彼女達が進んできたスクールアイドルとはそういうものだ。

スクールアイドルがどういうものなのか、それはライブでしか伝わらない。皆の始まりがそうだったように、それがスクールアイドルのやり方なのだから。

それ見るのはこの国の人々——スクールアイドルを知らない人々。講堂での発表会と同じだ。

けど、今の皆に、あの□六人□に心細いなんてことはない。ただこれまでのように、楽しくライブをしている。それだけだ。

一人では無理だったけど、皆がいれば大丈夫。

楽しそうに歌う彼女達を眺めながら、そう思った。

「鞠莉」

歓声と西洋ツツジの花弁が舞う中、宣言していた通り今のライブを見届けた鞠莉の母が娘と向き合う。

一瞬間顔を険しくする鞠莉だったが、すぐにそれを解き、朗らかな表情を母へ向けた。

「私が……まで皆で歩んできたことは、全てもう私の一部なの。私自身なの」

数日前、両者の間にあった確執は既に無くなっているように思えた。

要因は敢えて言及しないが……母親の心境に何かしらの変化があったのは確かだ。

「ママやパパが私を育ててくれたように、A q o u r s の皆が私を育てたの……何一つ、手放すことなんて出来ない」

今のライブでスクールアイドルがどういうものであるのか、鞠莉が歩んできた道がど

のようなものだったのかは伝えられた。

だからあとは自分自身の言葉でこう言うだけだと、笑った。

「……それが、今の私なの」

少しだけ見上げられた鞠莉の母の視線が娘と、その背後で娘を支えるように並ぶ皆の視線が重なる。

その瞳に何かを感じ取ったのか、彼女は初めて邪気のない笑みを作ると、静かに、その場を去った。

「どうなったの?」

「さあ……?」

また一枚舞った花卉が鞠莉の手の中に落ちる。

「……でも、わかってくれたんだと思う」

認められたのか、それは定かではないけれど。

母とその娘が見せた笑みと、未だ彼女達へ向けられる歓声が、その答えを物語っているようだった。

「……素晴らしいものを見せてもらった」

今しがたライブの輝きがあつた広場に背を向けて歩く男の拍手が虚空に残響する。

「例え間違つたものでも、素晴らしいと肯定できるのならそれはきつと正しいのだろうね……私も何度も同じものを見てきた」

伸びる影に映る悪魔の姿。

歩を進める度に大きくなるそれは何かの前兆かのように、邪悪に揺れる。

「……けど、それは永遠じゃない。弱く、脆く、真理を直視できない者が継るただのまやかしだ」

この星で出会つた素晴らしき虚無に想いを馳せながら胸に手を当てる。

その奥底で蠢く強大な波動に愉悦を覚えながら……男は嗤つた。

「お前もそう思うだろう——×グリムド×」

百六十八話 取り零した夢

「なんだかんだ言つて地元が一番落ち着くよな……」

「ああ、旅行とかから帰つてくるといつも思うやつね」

溜まりに溜まった疲労や心労から解放されるように身体を伸ばす。

イタリアでのライブも無事成功に終わり日本に帰国。改めて慣れ親しんだ場所というものの心地よさを実感する。

「クク……休息の時間なんて存在しないわよ。我がリトルデーモン達がヨハネのライブを心待ちにしているのだから……!」

「…お前は謎にテンション高いよな」

「新しく友達ができて浮かれてるだけずらー」

『明日は吹雪か』

「槍でも降つてくるんじゃないの?」

「失礼ね! 私だって友達の人や二人……」

「二時間くらい嬉しそうに携帯の画面眺めてたの誰ずらかー」

「うっさいわい！」

沼津まで戻つてくると色々話が進んでいた。

なんでも浦の星の生徒と協力したいと申し出てくれた静真の生徒が、既にステージの日取りや場所などを抑えてくれたとか。

「……いいライブ、しないかね」

☒皆☒とは何もメンバーだけを指すものじゃない。彼女達と、彼女達を支え応援してくれる達……それがA q o u r s にとつての皆。

そんな皆がいれば大丈夫。イタリアで改めて認識したことを早くも実感させられる。

「……でも、向こうで歌った時と違って、鞠莉ちゃん達はいないから」

けれどまだ不安も拭い切れていないのも事実。

スクールアイドルを知らない人々の、よく思わない人の前でのライブは成功した。

でもそれはあの三人も一緒だったから。結局のところ☒六人☒でのA q o u r s の形がどうであるかはまだ掴めていない。

「できる……できるよー」

けれど何も掴めなかった訳じゃないと、親友の背を押すようにルビィと、それに続くように千歌が笑みを作る。

出発前の彼女達と比べ自信や成長を感じさせるその表情は、いつになく頼もしく思え

た。

「……………」

ワイワイとミーティングに入った彼女達を尻目に着信を意味する振動を起こした携帯を手取る陸。

その画面に映し出されたメールの差し出し主と件名に、訝し気に眉を寄せた。

「鞠莉さん達……………」

「それで掴めそうか？ トレギアの行方」

「……………、まだ……………」

「けどアイツのエネルギー反応はまだこの星にあるよ」

口火を切ったヒカルの言葉に返す形で大地とイサミがタブレット端末に検出したデータを表示する。

『どうにも弄ばれている気がしてならないな』

「時空の歪み自体は解消したが……事が解決した気がしない」

こちらも舞台を日本に移し、とある港町の一角にあるシエルター内。

一時的にトレギアの脅威を退けたとはいえ、まだ地球に残る奴の気配を警戒したニュージェネレーションズはしばらくの滞在を決めたのだった。

「つまりトレギアにはまだ狙いがあるってことか……あ、マスター、ラムネ一本頼む」

「あ、僕にもお願いします！」

「じゃあ私も飲みますー！」

「おいアサヒ遊びに来た訳じゃないんだぞ……」

シヨウの言葉の通りブルトンが消えたことにより違う次元同士を繋げていた歪みは消え、それぞれ元ある位置へと戻った。

だがあつさりと解決しすぎている。まるで奴の手のひらで踊らされているような一連の流れに胸騒ぎを禁じ得ない。

「カツ兄！ 私だつてウルトラマンですよ！ トレギアの野望を止めるために残ったんですー！」

「ならちよつとは真面目に考えてる素振りを見せてくれ……」

「まあまあカツ兄……アサヒはなんか意見ないの？」

「トレギアはサブライズを考えているんじゃないでしょうか！」

「話にならん……」

「いや……続けてくれ」

妹を諷めようとするカツミをガイが止める。

瓶のラムネを煽る彼の瞳は至って真剣であり、真面目にアサヒの意見を可能性の一つとして捉えようとする意が伺えた。

「はい！ 前私の友達にサプライズでお誕生日を祝ってもらった事があつたんですけれど、その時サプライズの事を知られないように別のことで私の気を引いてたんです」

「……つまり？」

「トレギアがやっているのもそれと同じで、そのサプライズを隠すためにあの事件を起こしたんじゃないでしょうか！」

つまり A q o u r s が狙い と言ふ動き自体が本来の目的を隠すためのカモフラージュだったという可能性。

彼女達を狙っていたわりにはあまりにも干渉してくる度合いが低かった……と言ふのは確かに感じていたことだ。

「アイツ等が狙いだと俺達に思い込ませている隙に本当の計画を進めていた……か。確かに考えられなくはないな……」

「だがだとしたら何が目的だ？ この地球で俺達が接触しているのは陸と彼女達だけだ

ろう？」

トレギアが過去に起こしてきた騒動の例を見るに、わざわざ呼び寄せたウルトラマン達と直接関係のない場所で何か目論んでいるとは考えにくい。

だからこそこの星で唯一と言つていい接触者であるA q o u r s が狙いだと踏んでいたのだが…、

「……どうであれまた警戒態勢を敷き直した方がよさそうですね。陸君の方には僕から伝えておきます」

「ああ……これ以上巻き込まないつもりでいたけど、この際仕方ないか……」
まだトレギアの野望が潰えていないことは陸には伝えていなかった。

千歌達A q o u r s のサポートに集中させてやりたい気持ちもそうだが、もうじぎゼ口もこの地球を離れ、陸はウルトラマンとしての使命から解放される。

普通の高校生に戻りつつある彼を不用意に巻き込むのは避けたい。それはここにいる全員の意思だった。

「結局、最後まで巻き込むことになっちまったな……」

「状況が状況だ、割り切るしかないだろう。そう言い続けた結果奴の目論見通りになつてしまつては本末転倒だ」

とは言えトレギアの魔の手がまだ退けられていない上にその目的すらも不明瞭な現

状ではそうは言っていられないのも事実。

この事態が収まらない限り、彼に普通は訪れることはないのだから。

『…一つ、いいだろうか』

いざ動かんと全員が上がったその腰をエックスの声が制止する。

『……この星でウルトラマンに接触したことのある者が千歌達だけとの話だったが、それだけではないぞ』

「あと二人いるんです。陸君がゼロと一体化してることを知る子達が」

重ねるように大地も付け加える。

確信を得たように語る二人からは焦燥と、確かな危機感が垣間見えた。

『しかも陸の話では、彼女達も千歌達と同じような壁にぶつかり悩んでいる……このことだった』

「じゃあ本当の狙いはその子達ってこと!?!」

となればウルトラマン達をイタリアへ集め、まるでA q o u r s が狙いであるように仕向けたのは大地とエックスの言う少女達への干渉を邪魔させないため……ということになる。

『だいが時間を稼がれてしまったからな……少々、マズいかもしれないぞ』

どこかでトレギアの嘲笑う声が聞こえるような錯覚がする。

何倍にも増した緊張感は、彼等を動かすには十分すぎるほどの重みを秘めていた。

「……私の、願ひ……」

灯りも点けていない部屋の中ぼつりと零す。

眼前の窓ガラスにぼんやりと映る自分の顔は、冗談でも笑顔とは言えなかった。

——失った夢や理想を追い求めているのに現実はそのさせてくれない

——……実に辛いことだろう

頭の中で反芻する声から逃げるように練習用のジャージへと着替える。

走ればこの声も離れてゆくだろう。そう思い自室から出ようとドアノブに掛けた手が、止まった。

走って何になる。

「練習の……ため」

練習して何になる。

「……ラブライブを目指すため」

ラブライブなんて目指せるのか、もう姉もいないのに、仲間も皆離れていつてしまったのに。

「……！」

自分に言い聞かせ鼓舞するための言葉も、自問の果てに途絶えた。

ただ一つ溢れようとしてくる涙を必死に堪えながらやつとの思いで開いた戸の向こうで、何か神妙な顔をした姉と視線が重なった。

「ねえ……さま……」

遅れて姉を認識し慌てて目尻に滲んできたものを拭う。

そんな妹の様子に、どこか迷っていたような聖良は意を決したように口を動かした。

「……理亞、あなたのこと話が——」

「ランニング行ってくるッ！」

その声を聴いた瞬間にまた零れそうになった涙を見せまいと部屋を、そして玄関を飛び出す。

触れた外気がいつもに増して冷たく、そして痛く感じるのはきつと気のせいではないのだろう。

——君の願いを叶えに来た。

走れば走るほど、胸の鼓動が大きくなればなるほどに、自分の中で悪魔の囁きも大きくなってゆく。

何もかも上手くいかない状況の中、その声に揺れる心は最早誤魔化しようのないものになっていった。

『——お呼びかな？ 迷える子羊さん♪』

幻聴ではない、はつきりと両の耳で捉えたその声に足を止める。

危機感と、同時に生まれた少しの期待感に突き動かされるように辺りを見回せば、不法投棄されたアナログテレビの液晶で渦巻いている闇に視線が止まった。

『そんなに警戒することはないさ。私はただ、君の願いをかなえてあげたいだけさ』
「あ、アンタの助けなんかいらない……」

絞り出すように返す。

甘言に惑わされるな。コイツはヤバイ。以前強大な悪意と対面した経験がそう叫んでいる。

『おやおやいいのかい？ 最早どうにもならない……そう考えていたのは君自身だったはずだが』

「それは……」

『私ならそれを叶えることができる……失った君の夢をもう一度、いや永遠のものとする』

ることだってできる。君が望んだもののはずだろう?』

心の中を見透かしてくるような言葉が自分の中に入り込んでくるのがわかる。

纏わりついて、離れない。聞き入れちゃだめだとわかっていても、心の奥底でそれを求めている自分がある。

『さあ私の手を取れ。辛い現実になんて囚われる必要はない。何度だって言うさ——』

私は、君の願いを叶えに来た』

「……うるさい! 私にはアンタなんか必要としてない……どっか行ってッ!!」

差し出された腕を払い、奴から、惑わされる自分から逃げるようにまた駆け出す。

『頑固すぎるのも関心はしないが……まあいいさ。悩み苦しむ時間も若人には必要だからね。……それでは、また』

最後に残された声が闇の中へ消えてゆく。

けれど理亜の心に残ったそれは消えることはなく、抱いてはいけない感情を増大させながらいつまでも残響した。

百六十九話 スノードームメモリー

「理亞ちゃんが、Aqoursに入る……？」

三年生からの招集がかかり松月に赴いた千歌達に告げられたその事実。

唐突過ぎるその内容に驚愕する一同は当然その訳を問うような視線を向けた。

「……この前聖良さんと会った時、鹿角の現状聞いたる？」

「うん……あんまり上手くいつてないって」

「それでいつそこつちに来て千歌達とスクールアイドルをした方がいいんじゃないかって、聖良が」

「今から手続きすれば新学期から通えることになるから、馴染みやすいだろうって」

この連絡を受けたのは陸に三年生組の四人。

昨日鞠莉に呼び出されてこのことを知らされた後、陸も聖良から直接この話を受けた。

千歌達に話すかも含めて三年生と話し合ったのだが、彼女達も関わる以上話さない訳にはいかないだろうと今日この場を設けたに至る。

「理亞ちゃんがそうしたいって言ってるの？」

「いいえ、まだ話してないみたい」

「ただ、聖良はそれが一番いいんじゃないかって」

聖良自身、理亞にその相談は試みているようなのだが、どうにも最近まともに話してくれないらしい。

それほど思い詰めているのか……と考えれば聖良が今回の判断に至ったのもわからなくはなかった。

「千歌さん達はどうすべきだと思いますか？」

「どうって、そりゃあA q o u r sは何人って決まってる訳じゃないし、理亞ちゃんとスクールアイドルするのもきつと楽しいけど……」

大事なのは自分達じゃなく理亞の気持ち。言葉として続くことはなかったがその意思は伝わった。

きつと理亞にだってこれまでS a i n t S n o wとして培ってきた誇りがあるから。

「ダメだよ」

それを最も理解しているのは、彼女と共に成長し、共にライブを作り上げたルビィだった。

「理亞ちゃん、そんなこと絶対望んでないと思う。A q o u r s に入っても、今の悩みは解決しないよ」

一週間ほど前、聖良と共に沼津を訪れていた時の理亞の様子を思い起こす。

遅れてあの場に着いた陸に何を話していたのかはわからないが、同じ妹として同じ悩みを抱いていたルビイには彼女の気持ちを感じ取れたらしい。

「だって理亞ちゃんは S a i n t S n o w を終わりにして新しいグループを始めるんだよ。お姉ちゃんが続けた S a i n t S n o w を大切にしたいから、新しいグループを始めるんだよ……それって、A q o u r s に入ることじゃないと思う」

クリスマスにライブを行ったあの日、理亞は聖良にそう誓った。

だがそれが故に今彼女は行き詰まっている。ルビイの目はそう語っていた。

「ルビイ、向こうでお姉ちゃんと一緒に歌って、わかつたんだ。お姉ちゃん達はいなくなっただんじやないって、同じステージに立っていなくても一緒にいるんだって」

大丈夫。

不安気だった親友にそう言ったルビイの顔が浮かぶ。

イタリアでのライブを通し、ルビイは掴んだんだ。まだ理亞が見つけれられていない答えを。

「理亞ちゃんは、そのことに気付いてないだけなんだと思う。いなくなってしまった聖

良さんの分を何とかしなきゃって。Saint Snowと同じものを作らないと、お姉ちゃんと一緒に果たせなかったラブライブ優勝を実現しなきゃ、聖良さんに申し訳ないって……！」

ルビイ達とのライブを通しスクールアイドルを続けると決めた。姉との輝きに負けない新しい雪の結晶を作ると誓った。

けれど彼女は今、叶えられなかったSaint Snowとしての夢をまだ追いかけていると、ルビイはそう語る。

理亞にとっては、姉との雪の結晶であるSaint Snowこそが最高の輝きだったから。

それをあんな形で終わらせたくなかったから。だから今もその輝きを追い求めてしまっているんだ。

「理亞さんの気持ちは、ルビイが一番わかっているとだと思いますわ」
震える手で理亞の気持ちを訴えた妹に手を重ねるダイヤ。

「……姉が卒業した、妹の立場として」
満たされたように呟いた彼女は、きつと妹の成長をこの上なく喜ばしく思っていることだろう。

きつと理亞だって、聖良にそんな安心と喜びを感じてほしいはずだ。

「……千歌」

「そうだね……教えてあげるのが一番だと思う！」

A q o u r s だって理亜と同じだった。

失ったものに悩んで、これまでに積み上げてきたものが、掴んだ輝きも全て手の中から離れていった気がして。

でも、違ったんだ。

「そう……一緒にいるって、ずっと傍にいるよって」

「理亜ちゃんが一番大きなD r e a mを一つ叶えて」

地区予選決勝でのライブ。

クリスマスのライブ。

イタリアでのライブ。

スクールアイドルである彼女達にとって、大切なものに気付いたのはいつだってライブを通してだった。

「理亜ちゃんが叶えたくて、どうしても叶えられなかった夢を！」

「そうですね。叶えてあげましょう……皆で！」

だからまたライブをするんだ。

理亜の叶えられなかった夢を叶えて、失っていたと思い込んでいたものを、取り戻す

ためのライブ。

彼女達だけの——ラブライブの決勝戦を。

それが大体、二日ほど前の話。

夜明け前の空の下、全ての準備を整えた千歌達を背に——その時を待つ。

「そっか……素敵な仲間だね」

聖良にも連絡を取り、この舞台の準備を進めていた陸にトレギアの脅威がまだ去っていないことを伝えたのが彼、朝倉リク。

かつての恩人であり、同じ宿命を背負ったその人と並び立つ背後で、千歌は言った。

「……私ね、スタートってゼロなんだろうって、ずっと思ってた。ゼロから何かを始めるから、始まりなんだって……でも違ったんだ」

決勝のステージで歌った際のものに似た青い衣装に身を包んだ九人。

あの瞬間からも紆余曲折あったが、この九人で歌うのはいよいよこれで最後だ。

「だってゼロって、今までやってきたことが無くなっちゃうってことでしょ……そんなことないもん」

今この時を噛み締めるように、抱く想いを千歌は言葉に変える。

「今までやってきたことは、全部残ってる……何一つ、消えたりしない」

三年生が卒業したって、これまで三年生と過ごしてきた時間は、思い出はずっと残っていく。それが今の彼女達を作っているから。

その想いは離ればなれになっただって決して消えはしない……ゼロになんてならないから。

「……そう思ったら、なんか行ける気がしたんだ」

もう迷いはない。そんな千歌達の表情に、三年生も笑う。

彼女達の伝えたかった想いは、残していったものは、イタリアでのライブを通して後輩達へと受け継がれた……あとはその始まりを見届けるだけだと言うように。

「……今なら言えるよ。君達の絆は、決してトレギアになんて負けないって」

陸もその始まりを見届けなくてはいけないから。これからも彼女達と共に歩み続けたいから。

だから今も、やるべきことをやるんだ。

「ああ、それとさ……」

真つ直ぐに自分を捉えてくるリクの双眸。

少しだけその瞳を揺らせた彼は、殊の外穏やかな声で言った。

「ありがとう……父さんのこと」

それ以上は何も続かなかった。

ベリアルの子を受け継いだ者として、共にあの人を終わらせてあげることを選んだ。

この人にそう言ってもらえると、少しだけ自分のした選択が肯定できるような気がした。

『しみつたれた話は後だ後……今はあのスカした仮面野郎に見せてやろうぜ、アイツ等の輝き』

ゼ口の発破に身が引き締まる。

恐らく向こうも動き出している頃だ。ファイナルといこうじゃないか。

「理亜ちゃんのためだけじゃない。私達がまた、これから歩み出すために……全力で歌おう！」

いつものように、いつも以上に重なった声上がる。

刹那に瞬いた変わらない輝きを胸に秘め、最後の——変身を遂げた。

今でも夢に見る。

ラブライブ……その地区予選で敗退した日。

自分の失敗で大好きな姉の、大切な夢が失われた瞬間のこと。

「ツ……、ツ……」

一向に目の前に現れない輝きを追い求めるように、夜明け前の町を一人駆ける。

どんなに走っても光が見えない。どれほど走っても背後に迫った影から逃れられない。
い。

心で叫んだ静かな悲鳴が、誰に届くこともなく闇の中を駆け抜けてゆく。

(姉さま……)

夢破れた舞台の直後、ただ静かに自分を抱きしめてくれた姉の温かさが蘇る。

その姉の頬を伝った一筋の雫を思い出す度に、胸が締め付けられるんだ。

(姉さま……！)

走る速度が上がる。

泣いていたんだ。あの姉が、あの強い鹿角聖良が。

それくらい本気だったんだ……大切な夢だったんだ。

なのにどうして、あの場に限って自分は……。

(私が……)

過ぎ去った時間は戻ることはない。どんなに悔やんだってあの瞬間をやり直すことは出来ない。二人でラブライブの決勝の舞台に立つことは出来ない。

姉の夢は、自分達の夢はもう……叶わないんだ。

「っ……」

零れた涙が舞った。

だからスクールアイドルを続けると決めたのに。

姉との雪の決勝に負けない輝きを見つけないきやいけないのに、Saint Snowと同じ輝きで、ラブライブで優勝しなくちゃいけないのに。

それなのにまだ立ち止まり続けている自分が、狂いそうなほどに嫌だった。

「う……あぁっ……っ……」

私が泣かせたんだ。

私が奪ったんだ。

私が——壊してしまつたんだ。

「うあああああああ……ん……!!!」

心の駆り立てるままに走つた、叫んだ、泣いた。

それすらも虚しさと苦しみしか生まない。虚無を悟り力尽きるように立ち止まつた理亜の手前で、不穏な気配が蟠つていた。

「改めて問おう……君の願いはなんだ」

白と黒に分かれた衣服を纏つたその男は薄ら寒い笑みを張り付けたまま、これは救いだとも言うように手を差し伸べてくる。

この男が何者であるかは考えるまでもなかつた。こびり付いて離れない声がより強く頭の中で反芻する。

「私、は……」

脳裏で大好きな姉の顔が瞬く。

笑った顔。喜ぶ顔……思い出の中での表情は数知れない。

けど最も強く焼き付いてしまったのは——あの日の涙なんだ。

「君は気付いていたはずだ。気の持ちようで悩みが解決した気になるなど一瞬の空夢、結局自分の周囲は何も変わっていないことを……何も残ってなどいないことを」

寄り添うような男の声が心の奥底にまでその手を伸ばしてくる。

もう拒絶する言葉は出てこなかった。拒絶した先に何が見えるのかわからないんだ。ずつと夜が明けないんだ。

「……その無言は、肯定ととっていいんだね」

黒い仮面がその顔を覆った途端、溢れ出した闇が男の姿を異形の者へと変える。

その胸、何かを封じ込めているような拘束具の奥で蠢く唸りに顔を上げれば——文字通りの絶望が、口を開けて迫ってきていた。

『変わる必要などないさ。今君の抱いている虚無こそが答えなのだから………だから、これが私からの救いだ』

「え……」

バクン。

羅列した巨大な牙を認識した瞬間、罅を閉じたそれに一瞬で暗闇の中に誘われる。

そしてその常闇の空間に浮かぶ無数の目が理亞を捉え——、

た想いはいつまでも心に残ると』

巨人の出現に応ずる形で仮面の男までもがその体軀を巨大化させたことなど些末なことだった。

☒彼☒が再び目の前にいる……その事実には、心が照らされる。

『私の心も、ルビィ達との歩みも、聖良との思い出も全て、全てが今の君を作っている。君の心と、ユナイトし続けている……それは絶対に消えないもののはずだ』

聖夜のライブ。あの舞台に至るまでに自分を支えてくれたのは彼女達だけではないか。

『改めて言おう……君は、独りではない』

闇夜に煌めく、胸の蒼い輝き。

その光を見上げ、変わらず暖かな目を向けてくれる遥かな友人の名を口にした。

「エックス……」

『……やれやれ、その娘を救おうとした私を意に反する敵と決めつけ、それを排除するためにその苦しみを捨て置くとはね……それが君達の言う光、正義なのかい？』

『救いだど……？ ただ己の為に理亞を利用しようとした貴様に彼女のことを口にする資格はない！』

恩人であり友——ウルトラマンエックスの肉体が浮かび上がり、トレギアと呼ば

れた巨人を遙か上空へと運ぶ。

『それに彼女達を、人の力を侮るなトレギア。貴様の想っている以上に彼女達は強い』
『何を……』

そんな光に導かれるようにまた一人、理亞の隣へ顔を見せる。

卒業したはずの高校の制服に身を包む姉は、普段と何ら変わらない笑顔で言った。

「……今から私達だけの、ラブライブの決勝を行います」

聖良の抱える二着の衣装は、あの舞台上で披露するはずだったもの。

袖を通すことすら叶わなかったそれを差し出し、もう一度共に歌おうと、姉は笑う。

「もし、A q o u r s と競うことになったら。決勝のステージに、立つことが出来たら、あなたに伝えようと思っていた——」

「姉さま……ッ！」

言い終わる前に姉の胸へと飛び込んだ。

何の感情に突き動かされたのかはわからない。嬉しくもあり、同時にまた辛くもある。

ただ一つ確かなのは、自分が心から——もう一度姉と歌いたいと、叫んでいること。
「泣いている場合じゃないですよ……」

そう言って優しく抱き留めてくれる姉の目にも、涙が滲んで見えた。

けど、今度は苦しさを生むそれじゃない。

『一緒に進もう、理亞ちゃん！』

姉の持つスマートフォンから聞こえてくる親友の声。

『甘えてちゃだめだよ。理亞ちゃんに花丸ちゃん、善子ちゃんと出会えたから、ルビイも頑張つてくれたんだよ』

支柱となつていたものを失い、共にこれからの形を模索し悩んでいた。

けれどももう、その声に迷いは感じられなかった。まだ自分の掴んでいない答えを、彼女は掴んだんだ。

『ラブライブは、遊びじゃない！』

いつか彼女達に言い放つた自分の言葉が返ってくる。

もうあの時に見た弱々しい彼女達はどこにもいないんだ。それこそが答えを見つけた彼女の姿。

「歌いましょう」

「……うん」

共に歌つた先に、その答えがあるのなら、今は歌おう。

二人でこのステージで、A q o u r s と全力で。

『全く……これだからお前達は……』

輝きが瞬かんとするその上空で、集結した光の巨人達がトレギアを囲う。

その状況下で逃亡の無理を悟ったか、奴は度々見せてきた魔方陣を発生させることなく呆れたように首を捻った。

『自分達のやること成すこと全てが正しいと考え、意にそぐわない者がいればよく考えもせず牙を剥く……それを疑いもせずにな』

苛立つように額を擦るトレギアの胸部、奴のカラータイマーを覆うプロテクターの奥から黒黒が漏れ出ていく。

闇と呼ぶのすらも憚られるほどにどす黒いそれは凄まじい速度で膨れ上がってゆき、やがて一体の怪物の形を成して現出する。

『考えたこともないのか？ お前達のような未熟者が偏った正義を語り、その強大な力を振るう危うさを……！』

黒の中で見開く巨大な一つ目。

虚無を映すその目は瘴気を吸収してゆき、やがて禍々しいその体軀を形成してゆく。
『だから私はお前達を否定する……光も闇も、正義も悪も関係ない。私自身の意志を
以って』

無数の棘、悪魔のような深紅の羽を揺らしながら、腹部に開く第二の口が声とも呼び
難い咆哮を上げる。

『さあ来い——グリムド』

百七十話 新しい羽ばたき

『ッ——!!!』

夜明け前の空に立ち込めた暗雲に無数の目玉が浮かび上がり、その一つ一つから発生する雷撃が九人のウルトラ戦士を襲う。

そんな様を眺め、まるでコメデイでも鑑賞しているかのようにトレギアは高笑いを響かせた。

『邪神魔獣グリムド……なるほどな。それがテメエの力の根源かトレギア』

『ああそうとも、生命の持つ無意識の海に潜む深淵……私が見つけた答えさ』

本来光の戦士であったトレギアに闇の力を与えたのがこの邪神魔獣グリムド。

奴を体内に宿すことでウルトラ戦士と相反する力を手に入れ、己の抱いた矛盾を体現するように厄災を振り撒き続けていた。ゼロを介してそんな事実が伝わってくる。

『……だが、如何に宇宙創成期の混沌から産まれた邪神と言えども悠久の時の中でその力は弱まりつつある……今のグリムドには☒☒が必要なのさ』

『……その餌とやらの理亜を選んだということか』

『…グリムドは言わば虚無と絶望の化身……失った夢に囚われる彼女は実にいいゴハンだろう?』

だから一時的にグリムドを撥ね退けたところで結末の先延ばしにしかならないと、嘲笑うような態度で表す。

『あんな上辺だけの慰めに意味などないさ……グリムドは今も鹿角理亜の心に干渉し続けている。いずれ自ら虚無に身を落とすだろうね』

既に幾つもの宇宙や星でグリムドの餌となり得る者に破滅を齎し、それを守ろうとした光の者に絶望を味合わせてきた。そんな事実を恍惚と語る。

だがその中で初めて、カツミ達湊兄妹にその魔の手を撥ね退けたと言う。

『俺達をこの世界に呼び寄せたのはそのリベンジって訳? ねちっこいね』

『なあに。私はただ君達にもこの素晴らしい絶望の味を知ってもらいたかっただけさ……まあ、少々お呼びでないゲストまで招待してしまったがね』

トレギアの言動からは、ウルトラマンが正義を語りその力を振るうことに対し並々ならぬ感情を抱いていることが伺える。

恐らくベリアルの一役を受け、光の国がごたついている現状を狙ったのもそのためだろう。

『だがまあ、一応礼を言っておくよニューージェネレーションズ。お前達と言う強大な光

の存在に呼応しグリムドは再び目覚めた……今一度それらを原初の虚無へと還すために』

ギンガ達ニユーージェエネレーションの介入という想定外の事態もあったが、奴はそれすらも己の野望へと組み込んだ。

全てはその庇護下にあるものの破滅と邪神の復活と言う事実を突きつけ、光の者に絶望と正義への疑念を抱かせるために。

『さあ、自らが呼び寄せた厄災にその身を滅ぼし………絶望を悟れ』

そんなトレギアの思念に共鳴するように、上がったグリムドの咆哮が大気を震わせる。

途端に発生した衝撃波が四方へと駆け抜け、全身に痺れるような痛みを走らせた。

『黙って聞いてりや達観した面でゴタゴタ抜かしやがって……目先の状況すら見抜けない奴がよく言つたもんだぜ』

『へえ……言うじゃないか』

グリムドに続き、トレギアの掌からも発生した雷が迫る。

その雷槍を片腕の一振りのもとに掻き消したゼロは、不敵に笑った。

『ならご教授願おうか。君に見えて、私に見えていないというものを』

「……聞こえねえのかよ。この声が」

インナースペースの中、確かに聞こえてくる声がある。

——これよりライブ決勝、延長戦を行います！

普通なら届きようもないはずの声。

それでも、聞こえるんだ。その想いに乗って。

——それでは、決勝に残った二組を紹介しましょう！　まずは浦の星から現れた

超新星……初の決勝進出ながら実力はトップクラス！　スクールアイドル A q o u r

s !!

浦の星女学院は無くなったけれど、そこで紡いだ絆は残っている。

S a i n t S n o w は終わったけれど、共に競い合い高め合ったルビィ達との絆は

続いている。

そんな☒これまでに積み上げて来たもの☒が作る延長戦。

——そしてもう一組は北の大地が生んだスーパースター！　S a i n t S n

O W !!

いつか交わした約束の続き。叶えられなかった夢を叶えて、次へ向かうためのライブ。

ラブライブの歴史に刻まれることはないけれど、それでも彼女達の心には永遠に残るだろうから。それがまた、未来へ繋がる想いになるから。

それが皆で見つけた答えだから。

『まあ無理に理解しろなんざ言わねえさ……だが、あれくらいならお前でも見えるだろう？』

真下を指さしたゼロの動きをなぞるようにトレギアが視線を落とすその先。

S a i n t S n o w …… 姉妹が紡いだ雪の結晶。その最後の輝きが——瞬いた。

決勝の舞台で披露するはずだった曲、衣装。

この道を進む中で培ったその想いを、辿り着いた答えを、その全てを光の中で歌う。旅立つ姉からこれからも進んでゆく妹へ、残し託された雪の結晶は、変わらないその輝きを見せていた。

「……今のこの瞬間は、絶対に消えません」

形こそ違うけれど、友がくれた夢を叶えるためのステージ。

あの輝かしい舞台とは程遠いはずなのに、それでも満たされている自分がいることに気が付く。

「Saint Snowは、私と理亜のこの想いは……ずっと理亜の心に残っている。どんなに変わっても、それは変わらず残っていく」

身体の奥底から沸き上がってくるこの感覚。そして火照る手から伝わってくる姉の暖かさ、その言葉に、ようやく理解する。

クリスマス夜の夜に、そしてこのステージで聖良と歌えたのも、これまで積み上げてきたものが今の自分を作っていたから。

形が変わっても、どれだけ時が経っても、それだけはずっと残っていくんだ。

「……だから、追いかける必要なんてない」

それが伝えたかったこと。

Saint Snowとして、スクールアイドルとして最後のパフォーマンスを終え、妹の手を取る姉の胸へとまた飛び込んだ。

「姉さま……！」

腕の中で見上げた聖良の頬に、また涙が伝う。

最後に、二人で作った雪の結晶。

その余韻を抱き留めるように身を寄せ合う姉妹の胸から、また新たな輝きが羽ばたこうとしていた。

『ツ………う？ ツツ——』

!!????
』

暗雲が綻ぶ。

空を覆いつくさんばかりに亜空間を広げ続けていたグリムドは、その遙か真下で瞬いた小さな輝きを前に瓦解してゆく。

『馬鹿な……何故……?』

『言つたはずだぞトレギア。あまり彼女達の力を侮るなど』

初めて狼狽える様子を見せたトレギアに、七色の光を纏ったエックスの斬撃が叩き込まれる。

その身に宿すグリムドの異変が奴にも影響しているのか、これまでの余裕や力は見るからに衰え始めていた。

『想いは決して消えない。例え形として存在し得なくなろうとも、どれだけ離れようとも、培った絆や思い出はいつまでも心とユナイトし続け、私達を支え続けてくれる!』

『そんなものは弱者の継る幻想に過ぎないとまだ気付かないのか!』

トレギアの叫びを具現化するように青黒い雷撃の群れが押し寄せる。

奴の根底にある譲れないもの、認めたくないものがそうさせるのか、弱まっているはずの力が繰り出すそれは格段に威力を増していた。

『……昔、ある奴が俺に言つた。この世で唯一永遠なものは何もない暗黒、誰の中にもある、埋まらない心の穴だと』

抵抗と言わんばかりにグリムドも同調し、より激しさを増してゆく稲妻。

網のように広がったそれらがゼロ達の身体を打ち付ける中、ただ一人その波を切り抜けたオーブの剣閃がトレギアのプロテクターを掠める。

『だが俺はそれを否定した……そしてこう言ったよ。愛こそが永遠だと』

『その妄言でどんなに己を誤魔化し続けようと、いずれその虚しさを悟りただ一つ永遠の真理に帰結する……全ての答えは虚無だツ!!』

『お前は悲しい奴だな……トレギア』

突き出された黒い腕を身を翻し回避すると、そのまま背後に回り込み振り上げたオーブカリバーが奴の背中を刻む。

直後に描いた光の輪。そのエネルギーを大剣に収束させ——解き放つ。

『オーブスプリームカリバーツ!!』

『グ、オオオオオツツ……!!』

迸った七色の光の束がトレギアを飲み込み、轟音と共に爆ぜた。

『確かに愛は時間が過ぎれば終わってしまうのかもしれないが、消えはしない。愛はその形が無くなっても人を支え続けるから、永遠なんだ』

『そしてその愛が、命が受け継がれてきた。だから今の俺達がある!』

長く旅を続け、その中で出会いと別れを繰り返したオーブの言葉。

それを継ぐようにギンガが飛び蹴りの形でトレギアに突貫。

『形を保つていつまでも残り続けるから永遠なんじゃない……世代を超えて、形を変えて、未来へと受け継がれていくから永遠なんだ』

『貴様が貴様なりの矜持を抱いているならそれでいいだろう。だがこれだけは心に留めておけ……：想いの力は、形が無くなった程度で失われるものではない!』

虚無と言う停滞した結論を掲げるトレギアに対し突きつける彼等の見つけた答え。

その想いが光となり、加勢したビクトリーと重なった。

『ギンガ——、

『ビクトリー——、

——アルティメイタムツツ!!』

光の槍と絆の剣。双方より伸びる蒼炎の渦が直撃したトレギアの身体が更に吹き飛ばぶ。

その中で更なる追撃の気配を悟ったか、辛うじて体勢を立て直した奴は雷撃を撒き散らしては反撃を試みんとする。

『愛だ絆だ光だ……：お前達の賛美するものには反吐が出る！ そんなものが正しいなどと誰が決めたアツ!』

『正しいかどうかなんて関係ありません！ 私達は、私達の大切なものを守るために戦ってるんです!』

だがグリーンジョの形成する橙の盾がそれらを弾き、刹那に兄二人の光と融合。

『俺達家族の絆がどんなに離れてたって繋がってるように』

『これまで俺達を支えてくれた人達、この力を遺していった先人達の想いも、今を生きる俺達に受け継がれてる』

『ツルちゃん達の想いは、今も私達の中に残り続けているんです！』

それを守るために戦うんだ、その誓いと共に灯ったそれぞれの光。

『フレイム——』

『アクア——』

『グリーンジョ——』

——ハイブリッドシュートツツツ!!!』

これまでの全てを叩き込むかのように、一つの奔流となった光線が駆け抜けた。

宿主であるトレギアのダメージと取り込もうと干渉を続けていた理亜の心から逆流してきた光にグリムドの肉体も崩壊を続け、暗雲に閉ざされていた空が顔を覗かせ始める。

『だからまやかしだと言っている！ 未来に受け継がれるなどと言ったところで、その

時を生きる者には何が残る……結局は失ったことを慰めるために出来た都合のいい言い訳に過ぎないと知れッ!』

トレギアの展開したバリアが湊兄妹の合体光線を受け止めるものの、両者の心にある埋まることのない差を表すようにひび割れ続ける。

奴にも奴なりの信念があり、そのために行動してきたのだったわかってはいるし、その全てが間違っているだなんて言うつもりはない。

『確かに手を離れて行ってしまうものだってあるし、それを取り戻せないのだったわかってる』

だが、トレギアの考えは何も生まないもの。

歩み続けるその足を止め、自らが変わることも、何かを未来に残すことも放棄した結論だ。

『けどその経験はふと思いついた瞬間に僕達の力になってくれる。前に進む力をくれるから……だから今の僕達があるんだ!』

そんな結論の先に存在する未来なんて、きつと何も無い。

愛した者、楽しかった思い出、眩しい輝き……その大切なものを未来へ繋げるためにこの戦いが、この力があるんだ。

『レッキングバーストオオオッ!!』

赤い雷を纏った光線が湊兄妹のものと交わり、完全にバリアを打ち砕いてはトレギアを穿つ。

徐々にこの厄災が終息に向かつていく中、また重なった少女達の声が聞こえた。

「そう言えば、お前は見るの初めてだよ……アイツ等のライブ」

S a i n t S n o w の最後を飾りつけるためだけのライブじゃない。A q o u r s が A q o u r s であり続けるためのライブでもあった。

その先に彼女達が見つけ出す答えは、きつとこの戦いの中でウルトラマン達が掲げてきた答えと、同じはずだから。

『しかとその目ん玉に焼き付けやがれ……テメエの見下した、人間の姿を。アイツ等の出した答えを』

— B r i g h t e s t M e l o d y

蒼い輝きが羽となって舞い、純白の翼へと還る。

皆で力を合わせ、何かを成し遂げようと走ってきた。

その何かは叶わなかったけれど、その過程で各々の胸に宿った輝きは、何よりも眩しい宝物となるはずだ。

誰が何と言おうと、彼女達にとってこの瞬間が最も輝いている音色。

彼女達には、A q u o r s にとってはこれこそがずっと心に残っていくもの——永遠に消えない、輝きなんだ。

『…眩しい……』

無意識のうちにそう口にしていた。

その姿が見えるはずもないのに、その声が届くはずもないのに。確かに見えたその輝きは脳裏から離れようとしなない。

『ははは……そうか……！』

胸の内で渦巻く混乱の中で、悟る。

光の者達の主張に屈しようとしているのに、これほど気分がいいのは初めてだった。

『見せてやるぜ！ 俺達の絆!!』

「『ベータスパークソードツツ!!』」

『三つの光の力……お借りしますッ!』

『繋ぐぜ……願いつ!』

『『纏うは真! 不滅の真理!!』』

グリムドを、そして自分を打ち滅ぼさんと目の前で眩い光が瞬く。

けどそんなもの気にもならなかった。今はただ、また一つ真理に近づいたこの高揚感を味わっていたい。

『これがお前が否定した力だ……輝きだ。トレギア』

「変化して、競い合つて、これからも続いていくんだ……そんなアイツ等の未来、絶対に止めさせやしねえ」

昇る朝日を背に、ゼロの姿がベリアルを打ち倒した際のもの——ゼロアインへと変わってゆく。

どこからか奏でられる歌と調和したその輝きは、やはり美しかった。

『ウルトラフュージョンシユートツツ!』』

『ベータスパークブラスターツツ!!』』

『トリニティウム光輪ツ!』

破滅の足音が聞こえる。

『クレセントファイナルジードツ!』

『『グルーピング光線ツツツ!!!』』』

忌み嫌った光が、絶大な輝きを伴って迫ってくる。

『ブライテスト……シンフォニアツツ!』

百七十一話 次の輝きへ

二つのグループだけのライブ決勝延長戦から数日。

改めて六人でのスタートを切るAqours。その始まりのライブを翌日に控え、古びた校舎に備わった申し訳程度の校庭に虹の掛かったステージが組み上げられてゆく。

「おっも……!」

「手伝うとは言ったけどどんな肉体労働させられるなんて聞いてねーぞ!」

「うっせ口動かしてる暇あったら一秒でも早く運べ!」

「てかなんでお前はそんな涼しい顔で運べるんだよ……!」

自身も土台となる部位を担ぎながらジャージ姿の同級生共に指示を飛ばす。名実共に人間離れしている陸よりは劣るもののやはり力仕事は野郎がいた方が捗るものだ。

「…陸ちゃんが同級生と話してるの初めて見たかも!」

「ていうか扱い雑過ぎない……?」

「向こうから手伝いたいって言ってきたんだからいいだろ別に!」

本来AqoursとSaint Snowしか知り得なかったライブだったが、「自分達しかこのライブを知らないのは勿体ない」と、中継役の月によってその動画がネッ

トに上げられ今に至る。

今木材を運びながらヒーヒー言っているこの同級生共はその動画を見て協力を申し出てきたのだ。

「ま、こっちの連中も統合の問題でちよつとドタバタしてたしな。何とかしたいのはお前等と同じなんだろ……つっても九割下心だろうが」

「それでも嬉しいよ」

不純な動機こそあれど、元々スクールアイドルというものをよく知らなかったコイツ等がああライブ映像に心打たれ協力してくれているのは確かだ。

想いはちゃんと届いている。それを改めて認識する機会を作ってくれた月には感謝せねばなるまい。

「いよいよだね!」

噂をすればなんとやら、大勢の静真高校の生徒を引き連れて顔を見せる月。

静真からも協力を申し出ている生徒がいるのは知っていたが、その時に名乗り出たのはせいぜい数人だったはず。だが今校門前には目視できる限りでもその数十倍。

「くっ……! やはり聖戦は避けられないのか……!?!」

「月ちゃん、どうしたの?」

「あのライブ動画を見て、集まってくれたんだよ! ボク達にも、何かできないかなっ

て」

若干名身構える者もいる中、輝かしい視線を背負いながら月が朗らかに言う。

皆父兄の反対を押し切ってここにいるだろうに、それでも不安などという感情は微塵も感じられなかった。

「気付いたんだ。ボク達は何のために部活をやっているのか」

「何のため？」

「楽しむこと……皆は、本気でスクールアイドルをやって心から楽しんでた！」

イタリアでのライブ、そして決勝延長戦。最も間近で彼女達に触れたスクールアイドルではない者として、月が感じ取ったもの。

部活に限ったことではない。どうしてそれをやっているのか。どうしてそれを始めたのか。

それはきつと楽しいから、やりたかったから。

いつも始まりはきつとその感情はずだ。

「だからボク達も本気にならなきゃダメなんだ。そのことを A q o u r s と S a i n t S n o w が気付かせてくれたんだよ……ありがとう」

千歌達も始まりはそうだった。

太陽のような輝きに魅せられた。自分もそうありたいと願った。

そしてその中で輝きたい、楽しみたいという想いが伝播し皆が集まった。その始まりの感情にスクールアイドルも、他の部活も変わりはないから。

「だから皆も手伝いたいって言ってるんだけど……どうかな？」

「じゃあ…、甘えちゃおっか」

Aqoursのライブが繋いだ手だ。彼女達がその力を借りる権利は大いにある。

人手も満足とは言えない状態であつたし、甘えさせてもらおうとしよう。

「…人手も集まつたし、お前等先帰つとけよ。あとは俺等でやるから」

「え、でも皆手伝ってくれてるのに私達だけっていうのは……」

「これで怪我とかされたら洒落にならねーんだよ。いいから明日のライブのことだけ考えて休め」

「そうそう。ここは私達に任せて」

「しつかり休んで、いいパフォーマンス見せてね」

皆Aqoursのライブのために手を貸してくれているのだ。その準備で彼女達に何かあればその気持ちを裏切ることになる。

そう考えているのは陸だけではない。もう明日のライブはAqoursだけのものではないのだ。

「…じゃあお前も一緒に帰れよ仙道」

「あ？ いや俺関係ないだろ明日のライブ」

「始まった頃からずっとその子等の近くにいたんだろ？ だったらお前も一緒にいないとダメだろ」

「お前等……」

少し感動している自分がいた。

ずっと女の尻しか追いかけていないと思っていたこの連中がこうまで言っている。千歌達と同じように、コイツ等だつて変わり成長して——、

「それに今までそんな可愛い子達との関係黙ってやがってこの野郎！」

「これ以上独り占めなんてさせねーからな！ 俺等のこれからのためにもお前は帰れ！」

「……期待した俺が馬鹿だったよ」

「そう言えば、ゼロさんはいつまでここにいられるずら？」

同級生共の抵抗に押し切られ、結局陸も一緒になったその帰り道。ふと思ひ出したようにそう口にした花丸に、なんとなく左腕のプレスに触れてしま

『…お前等のスタートを見届けたら光の国に戻る……ま、つまり明日までつてことだな』
急なカミングアウトに、陸以外の表情が一瞬固まるのが見えた。

ベリアルを倒し、トレギアも退けた今、もうゼロがこの地球に留まる理由はない。光の国からの気遣いなのか直接帰還命令は出ていないが、それにも限度がある。

千歌達が新しいスタートを切ったら自分も帰還する……少し前にゼロからそう伝えられた時のことを思い起こす。

「……陸は知ってたの？」

「まあ……な。悪い。お前等にも伝えるべきとは思ってたんだが……」

「そっか……明日までか」

ほんの少し寂しさを含んだ呟きが漏れる。

離れていても繋がっているし、紡いだ絆も消えやしない。そのことはわかっ

ても、簡単に拭えるものではなかった。

「……じゃあゼロも私達と同じだね」
静寂が舞い降りる中、ひよこりと曲がり角から顔を見せる果南、ダイヤ、鞠莉の三人。

そう言えばイタリアの一件もあり一度戻ってきていた彼女達がここを経つのももうすぐだったか。

「私達も千歌達のスタートを見届けたら、そのまま向かうよ」

「それぞれの場所へ」

「チャオ♪ってね……だから、その前に皆で行かない？」

蟠る寂寥感を振り払うように鞠莉が提案する。

新しいスタートや旅立ちを前にこの九人で最後に向かう場所は、容易に想像できた。

「そう言えば、バス停無くなっちゃうんだよね」

「学校が無くなったら、使う人いないものね」

撤去の張り紙が貼られたバス停の標識。何度も彼女達を迎えてくれたその場所を通り、向かう。

「なんか懐かしい気持ち」

「まだ卒業式から少ししか経ってないのに」

「毎日通ってた道ですから」

「少し来ないだけで懐かしくなっちゃうのかも」

何度も登った長い坂道。傾く夕陽も相まって感傷的な気分になる。

思えば夏休みや冬休みも足繁く通って練習したものだ。

「本当、色んなことがありましたわね」

「毎日賑やかだったなあ」

「賑やかと言うよりうるさい、かもだけど」

「お前を筆頭にな」

「人のこと言えないずら」

「何よ！　ずら丸だつて相当うるさかったじゃない！」

「でも…楽しかった」

語る思い出は尽きない。

開けた道から見下ろす景色の中には色々なものが詰まっている。そのどれもが、今の彼女達を形作ったもの。

そんな思い出を語らいながら、その場所へと辿り着く。

「で、なんで学校なんすか？」

「どうだろ…：呼ばれたのかな」

「でも、ちゃんとあつて安心したずら」

桜舞う中、何の変哲もない、思い出が詰まった校舎が顔を見せる。

浦の星女学院。かけがえのないものと出会わせてくれた、大切な場所。

「……あ、開いている」

その最後の日に泣きながら閉じた校門は、まるで千歌達を迎え入れるかのように僅かながら開いていた。

まだお別れなんて告げなくていい。まだあの日々浸っていていい。そう言うように。

「大丈夫……無くならないよ」

けれど、その中に入る者は誰一人としていなかった。

自分に、皆に、そして学校に語らうように、校門に手を掛けた千歌の優しい声音が触れる。

「浦の星も、この校舎も、グラウンドも、図書室も、屋上も……部室も」

いままで彼女達を育ててきた景色がある。

海、砂浜、バス停、太陽、船、空、山、町……その場所は数知れないけれど、その全てに育まれてイマがある。

「……A q o u r s e s も」

覚えている限り、歩み続ける限り、その景色は、想いは消えたりしないから。

だから今は振り返らない。そう言うように、笑顔で、その門を閉じる。
「…帰ろう」

これまで一緒に歩いて来て、これからも進んでゆく仲間に向けられた千歌の顔に迷いのない笑みが咲く。

これまでやってきたことは全部残ってる。何一つ消えたりしない。あの日気付けなかったものが、今は皆の胸の中にある。

浦の星の、その最後の思い出を笑顔で飾る。それは出来なかったけれど、改めて学校と向き合う皆の顔は晴れやかだった。

「全部ここにがある。ここに残ってる……ゼロには、絶対にならないんだよ！」
寂しい気持ちも、悔しい気持ちも消え去った訳じゃない。

けど、それ以上の輝きが、もう彼女達の胸には宿っているんだ。

「だから！」

差し出された千歌の手に皆の手も重なり、九人で、最後の円陣を組む。

「イチ！」

始まりはいつもゼロだった。

「二！」

始まって、一步一步前に進んで、積み上げて。

「サン！」

でも、気付くとゼロに戻っていて。

「ヨン！」

それでも、一つ一つ積み上げてきた。

「ゴ！」

何とかなる。きつと、何とかなるって信じて。

「ロク！」

それでも、現実は厳しくて。

「ナナ！」

一番叶えたい夢は叶えられず。

「ハチ！」

また、ゼロに戻ったような気もしたけれど。

「キュウ！」

彼女達の心の中には、色んな宝物が生まれていた。

「A q o u r s a !!」

『『サンシャイン!!!』』

それは、絶対に消えないものだから――、

Next SPARKLING!!

皆で作ったステージの上で、片翼の衣装を纏う新生Aqoursがその幕を開ける。

六人で披露する曲だけど、六人だけで辿り着けた曲ではない。

卒業した三年生、Saint Snowの二人、そして協力してくれた学校の生徒達。色んな人達との積み重ねがあつてこのステージがある。

皆で見つけた新しいAqoursの形。その答えそのものである曲。

もう九人ではないけれど、卒業していった三人の想いはずっと残つていくから。その想いを胸に秘めて、Aqoursは続いていくから。

だからこれは六人で披露する、九人分の想いを秘めた曲。

九人で紡いだ蒼い羽の輝きを抱き留め、六人のAqoursは、また新しい輝きへと

手を伸ばした。

『……見届けたぜ。お前等のスタート』

ステージを見つめ、少しだけ名残惜しそうにゼロが零す。

軽い脱力感が身体に走るのがわかった。その時が来たんだ。

「……行くんだな」

『ああ、俺も負けてられないからな』

一瞬、辺りを見回す。共にこのスタートを見届けていたはずの果南達の姿は既になかった。

千歌達だけじゃない。果南達も、ゼロも、これまで紡いできたものを胸に新たな道へ進んでいくんだ。

「……ありがとな。今まで」

『それあこつちの台詞だ。お前達のおかげでまた色々学ばせてもらった』

陸も、千歌達も、ゼロがいなければ成しえなかったことは多々あった。

感謝だなんて大層な言葉で言い表すものではないけれど、それと同じくらい大切なも

のだ。

『……楽しかったぜ。アイツ等にもよろしく言っておいてくれ』

「……おう」

それ以上の言葉は交わさなかった。もはや言葉すらも余計な気がしたから。

『……じゃあな、陸』

左腕のブレスが消え、完全に分離したゼロが空の蒼へと消えてゆく。

その存在に気付く者はいなかった。浦の星や静真の生徒、町の人、反対していた父兄すらも、ステージ上の彼女達に目を奪われているから。

「……じゃあな」

もう何も見えなくなった空を見上げ、最後に零す。

奇跡の出逢いから始まった、輝きに満ちた冒険は——今日この日、幕を閉じた。

エピローグ　輝けるものたち

最終話　そして、明日へ

彼女達がゼロから作り上げたものとは何だったのか。

形のないものを追いかけて、迷って、怖くて、泣いて、それでも走り続けた。

そうやって駆け抜け、ふと振り返った時に心に灯っていた光。

彼女達 A q o u r s が見つけた輝きとは、そういうものだった。

「スクールアイドル部ですー！」

「ライブやりまーす！」

桜舞う賑やかな校門前に響く一際賑やかな声。

静真高等学校。その制服に身を包んだ数名の女生徒が、入学式を終えたばかりの新入生を勧誘せんと笑顔を振りまいていた。

「ほら、陸も声出す！」

「なんで俺まで勧誘しないといけないんだよ……歌うのお前等だろ！」

「つべこべ言わず行つてこーい！」

突き飛ばされる形で人混みの中にダイブ。

入学式恒例の新入生勧誘。校門前に集結した各部活動の部員が声を張り上げて真新しい制服姿の一年生を引き込まんとするこの光景は春の恒例行事とも言えよう。

で、まあ。そんな訳で彼女達スクールアイドル部も御多分に漏れず先の部活動紹介で行うライブの宣伝をしている訳なのだが……、

「す、スクールアイドル部——」

「ひっ……!?!」

目に付いた新しい後輩に曜から手渡されたチラシを差し出すが、無理に作った笑みがあまりにもぎこちなかったかダツシユで逃走されてしまう。

その後何度か再トライするも悉く逃げられ二の舞どころか十回くらい舞うこととなる。とりあえずその様子を見て爆笑しやがってる方言娘と自称墮天使は後でシメよう。

「調子はごうー?」

少し時間も経ち校門前の新入生達も減ってきた頃、未だ勧誘を続ける生徒達の合間から月が顔を出す。

入学式にあたり生徒会長である彼女には差し当たって仕事があったはずだが、ここに顔を見せているということは一段落ついたということなのだろうか。

「お疲れ様月ちゃん。生徒会の仕事は終わったの？」

「今日中に済ませとかないといけないのは片付いたから、少し休憩してきていいって先生が。だから様子見に来たんだ」

「こつちの方は順調だよ。皆楽しみにしてるって」

「そりやそうだよー。この前のライブ凄かったもん」

元浦の星の皆や静真の生徒達の力を借りて作り上げた沼津駅前でのライブから数週間が経った。

ライブ自体は大好評に終わったがあれはあくまでも特殊な事例。真の意味で新しい A q o u r s が試されるのはこれからか。

「……てか月。部活動紹介のスケジュール確認したけどよ……ちよつとコイツ等に時間裂き過ぎじゃねーか？」

浦の星から引き継いできたものとはいえ、静真においてスクールアイドル部はまだできたばかりの新興部活。それなのにも関わらず平均の倍の時間が与えられているどこ

ろか演出も中々に豪華なものが予定されているのは少々不可解だ。

もし月の鼻屑によるものだったりしたら大問題なのだがその辺一体どうなっているのだろうか。

「それがね、この前のライブ、学校の皆の中で結構大きな話題になって、あの日にライブに来れなかった皆が今度こそA q o u r sのライブを見たいって言ってるんだ」

「…それで？」

「うん。そしたら、いつそ部活動紹介のライブも豪華にしちゃわない？って、他の部活動の部長達も含めてそう言う話になったんだよ」

大切なことに気付かせてくれたお礼も込めてね。そうはにかむ月。

中々にぶっ飛んだになったとは思うが、これも新しいA q o u r sの輝きが灯り始めた証……と考えていいのだろうか。

「という訳だから、部活動紹介でのライブ、頑張つてね！」

まだ他の場所にも顔を出さなければいけないと言って月が去って行った後、知らぬ間に押し寄せていたプレッシャーと期待感だけが残留する。

「あはは…、まさかこんなことになってるなんて……」

「びっくりだね…」

そうは言うものの、皆の顔に緊張は見られなかった。

イタリア、決勝延長戦、そして沼津駅前でのライブ。色々な経験を通し、彼女達もちよつぱり大きくなっているらしい。

新しいスタートを控えてこれほど頼もしい顔もないだろう。

「じゃあ皆に楽しんでもらえるように練習しないとね！ 陸ちゃんあとよろしくー！」

「はいチラシ、頑張つてねー！」

「はあっ!? おいちよつと待てテメー等ッ！」

結局微塵も減ることが無かったチラシの束にもう数十枚を追加してゆき、意地悪そうな顔をして六人までもが去つてゆく。

みるみるうちに遠ざかつてゆくその背中からこれまで以上の徒労感の気配がし、陸は深く深く溜息をついた。

あの沼津での始まり兼旅立ちのライブ以降、他校生徒の受け入れを反対していた父兄との摩擦は解消され、陸達も無事静真に編入することができた。

これからは千歌達とも同じ学校。したがって正式にスクールアイドル部のマネージャーとして活動できるようになったのだが、それに伴いふと思う。

ウルトラマンでなくなった今の自分が、彼女達に対してできることは一体何なのだろうか。

「……お前は どう思う」

御供物のように捌き切れなかったポスターを墓代わりの低木に供え、そこに眠る者へ問いかける。

これまで陸が彼女達を支えるためにできたこと。その形が□彼女達を守ること□だった。

ゼロと離れウルトラマンでもなくなり、特別な力も殆ど無くなった今、その関係を保ち続けるのは無理だろう。

A q o u r s は前に進み続けている。陸だって、進まなければいけない時が来ているのだ。

けどその形がわからない。そう語り掛けるも、当然、答えが返ってくるはずもなかった。

「……お前が聞いたら笑いそうだよな」

我ながら情けない話だとは思う。きっとコイツだけじゃなく、ゼロにだってこれを聞

かれたら笑って馬鹿にされるだろう。

けど、どうしてか。

それと同時に、なんてことないでも言うように笑う姿も、また浮かんでくるのだ。

「走りながらじゃないと見つからない……か」

少し前に梨子が口にしていた言葉を思い出す。

あの時の彼女達と同じようにこの悩みも新しい歩みを前にこれまでのことを見失っているだけで、案外答えは近くにあるのかもしれない。

「……ちよつと走ってみるか」

腰を上げ、まだ太陽が高く輝く空の下で地面を蹴る。

ウルトラマンでも、まして特別な力もない彼女達があの場所まで駆け抜け、これからも走り続けようとしているのだ。

陸だって、走り続ければ何か見えてくるかもしれない。

「……流石につ、あん時ほど速くは走れないよなっ……!」

少し軽くなった左腕を振り、逆に少し重く感じる身体を動かし風を切る。

速度も力強さもゼロがいた時よりずっと劣っている。無くなったものはハッキリと目に見えているけれど、この足で前には進めている、走っている。それもまた確かだった。

「くっそ……！ 疲れるまでも、早いなっ……！」

改めてあの時とは違うだと実感しつつ白く輝く砂浜の前で膝に手を付く。

始まったばかり、まだ三人だった頃の A q o u r s が練習をしていた砂浜。そんな彼女達が走り出した場所で息が上がっていると思うとまた情けない。

「あはは……！ きたあ〜！」

「……？」

下を向いたまま息を整えていると、ぱちやぱちやと水を弾く音と共に笑い声が聞こえる。

釣られるように顔を上げると、中学生くらいだろうか、二人の少女が波打ち際で戯れているのが見えた。

「はしゃいでるな。それで、どこなの？ ここ」

「ええ〜!! 知らないの？ 聖地だよ！ せ・い・ち！」

「聖地？」

何かの作品の舞台になった場所だったのか。県外から来たと思いきその少女は波に足を浸かせては楽しそうな笑いを絶やさずにいる。

余程それが好きなのか、魅力を語らんとする彼女の笑顔は輝いて思えた。

「この前の沼津のライブ、凄かったなあ……皆キラキラしてた！」

最も、その対象が身近にいる者達だとは思ってもみていなかったが。

「私、高校生になったら絶対スクールアイドル部に入るんだあ……！」

「あはは、また始まった……。それで、何て名前なの？」

「うん。えつとね……」

砂浜に文字が描かれてゆく。

何度もそこに刻まれ、その度に波に打ち消されていたその文字は、またその輝きに魅せられた誰かによつて砂浜に刻まれた。

「A q o u r s ……」

どこかへ去つて行つた少女達が書き残していった文字を唱える。

かつて大きな輝きに魅せられた千歌から始まったこの歩み。

眩しくて、キラキラしていて、自分もそうありたいと願ひ進んできた道。

そうやって駆け抜けてきた日々が紡いだ輝きは、それに触れた誰かへと受け継がれてゆく。

あの時千歌がそうしたように。

その千歌に触れた皆が、それぞれの願ひを抱いたように。

A q o u r sもまた誰かを惹きつけ、その心に新しい輝きを灯したのだ。

「陸——！」

また声がある。

振り返ればいつものように、眩しい笑みを浮かべた彼女達がそこにいた。

「…お前等、練習するんじゃないやなかつたのか？」

「いやー、なんかあそこまで期待されると校内でやりづらくてさ……」

「なんか通りかかる人皆遠目から見ってくるしね」

「それで、初心に戻るのも含めてここで練習しようって話になって……」

「クク……皆、このヨハネの宴を心待ちにしているようね……！」

「まあでも確かに、楽しみにしてくれてるのは嬉しいすら」

「だからいいライブを見てもらうためにも、練習頑張らなきゃって」

自分達が誰かの憧れる存在になっていくことなど彼女達は知る由もないのだろう。

それは千歌が憧れたような大きな輝きとは違う。ひっそりと灯るような小さなものだ。

「だから一緒にがんばろ。陸ちゃんも」

でも、それでも彼女達の輝きは確かに、誰かの心に光を差しているから。

「…なあ、お前等」

きつと、自分もその一人なんだ。

千歌も、皆も、あの少女も、その輝きや願いが灯った時にはどうしたらいいかなんて何もわからなかった。その時点で答えなんか存在しないから、走りながら見つけてきた。

今の陸の情動だつて同じはずだから。楽しみ、走り続けながら見つけていくしかないんだ。

だからとりあえずコイツ等の隣で、一緒に走っていこうと思う。

「よろしく頼むな……………これからも」

輝くつて、楽しむこと。

決して平坦な道でも、順風満帆な日々でもなかった。

そんな日々でも楽しむことをやめなかったから、今この瞬間にゼロから掴んだイチが

ある。

これからも続いてゆく未来。

そこに何が待っているか、何を掴むことができるか……イチからその先へ進めるかなんてなんてまだわかりやしない。

けど、駆け抜けてゆくその瞬間を命一杯、楽しみ続ける限り。

きつと明日も、輝いている。